秋田県文化財調査報告書第426集

釈 迦 内 中 台 Ⅰ 遺 跡

― 一般国道７号大館西道路建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅴ ―

２００８・３

秋田県教育委員会

シンボルマークは、北秋田市浦田白坂(しろざか)遺跡出土の「岩偶」です。
縄文時代晩期初頭、1992年８月発見、高さ７㎝、凝灰岩。

釈迦内中台Ⅰ遺跡

― 一般国道７号大館西道路建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅴ ―

２００８・３

秋田県教育委員会

序

本県には、これまでに発見された約4,900か所の遺跡をはじめとして、先人の遺産である埋蔵文化財が豊富に残されています。これらの埋蔵文化財は、地域の歴史や伝統を理解し、未来を展望した彩り豊かな文化を創造していくうえで、欠くことのできないものであります。

一方、日本海沿岸東北自動車道をはじめとする高速交通体系の整備は、地域が活発に交流・連携する秋田の創造をめざす開発事業の根幹をなすものであります。本教育委員会ではこれら地域開発との調和を図りながら、埋蔵文化財を保存し、活用することに鋭意取り組んでおります。

本報告書は、一般国道７号大館西道路建設事業に先立って、平成13・14・15・17年度の４か年にわたって大館市において実施した釈迦内中台Ⅰ遺跡の発掘調査成果をまとめたものであります。調査の結果、平安時代の大きな集落跡とこれに隣接する製鉄遺構群が発見されました。集落を構成する竪穴住居跡は重複が著しく、製鉄遺構群は急斜面を巧みに利用していました。

本書が、ふるさとの歴史資料として広く活用され、埋蔵文化財保護の一助となることを心から願うものであります。

最後になりましたが、発掘調査及び本報告書の刊行にあたり、協力をいただきました国土交通省東北地方整備局能代河川国道事務所、大館市教育委員会など関係各位に対し、厚くお礼申し上げます。

平成20年３月

秋田県教育委員会

教育長　根　岸　　均

例　言

1　本書は、平成13(2001)年度・14(2002)年度・15(2003)年度・17(2005)年度に発掘調査した、釈迦内中台Ⅰ遺跡の調査成果を収めたものであり、一般国道７号大館西道路建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書の５冊目である。

2　調査の内容については、すでにその一部を埋蔵文化財センター年報などによって公表してきたが、本報告書の記載内容を正式なものとする。

3　本書に使用した地図は、国土地理院発行の２万５千分の１『大館』及び、国土交通省能代工事事務所提供の１千分の１地形図である。

4　遺跡基本層位と基本土層中の土色の表記は、農林水産省水産技術会議事務局監修、財団法人日本色彩研究所色票監修『新版　標準土色帳』1994年版によった。

5　本書に使用した空中写真は、株式会社シン技術コンサルに撮影を委託したものである。

6　第６章の「自然科学的分析」に示した各種分析は、放射性炭素年代測定と樹種同定に関しては平成13年度・14年度は株式会社パレオ・ラボに、平成15年度は株式会社パリノ・サーヴェイに、平成17年度は株式会社加速器分析研究所に、また製鉄関連遺物の分析は株式会社パレオ・ラボに委託した成果報告である。

7　本報告書の付図は、株式会社五十嵐印刷に印刷業務を委託したものである。

8　本報告書の作成にあたり、以下の方々からご指導・ご助言を頂いた。記して感謝申し上げます。
（敬称略、五十音順）

板橋範芳　伊藤武士　柏木大延　小笠原　豊　工藤雅樹　今野公顕　澤谷　敬　柴田　徹
島田祐悦　島原弘政　鈴木琢也　鷹嘴勇二　張　俊民　塚本浩司　冨樫泰時　中澤寛将　春山秀幸
藤原弘明　三浦圭介　村松　稔　八木光則

9　本書の草稿執筆は、各章ごとに以下の通り分担した。編集は新海和広が行った。

第１～３章　新海和広・吉川耕太郎
第４章　　新海和広・宇田川浩一・伊藤和美・深沢恵里子
第６章　　新海和広

凡　例

1　遺構番号は、遺構の種類ごとに下記の略記号を冠して検出順に番号を付した。また、精査の結果、遺構ではないと判断したものは欠番とした。なお、遺構の調査年度を示すため、略記号の前に西暦年の下二桁を付記した。

ＳＩ･･･竪穴住居跡　ＳＢ･･･掘立柱建物跡　ＳＳ･･･製鉄遺構・製鉄炉　ＳＫ･･･土坑

ＳＮ･･･焼土遺構　ＳＲ･･･土器埋設遺構　ＳＫＴ･･･陥し穴状土坑　ＳＡ･･･柱穴列

ＳＤ･･･溝跡　ＳＱ･･･集石遺構　ＳＴ･･･捨て場　ＳＸ･･･性格不明遺構　ＳＫＰ･･･柱穴様ピット

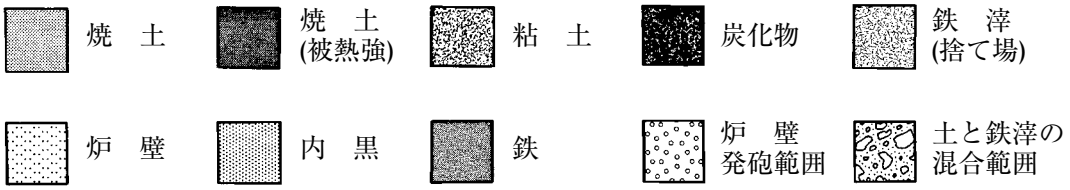
2　遺跡基本層位にはローマ数字を、遺構内層位には算用数字を使用した。

3　挿図中の遺物番号は、各挿図ごとに土器・石器・鉄製品を問わず通し番号を付し、図版には●図－●と示してある。なお、遺構図中に記したＰは竪穴住居跡に伴うピット、Ｓは礫を示す。

4　重複関係にある遺構の説明文は、遺構番号順を替えて連続させている。

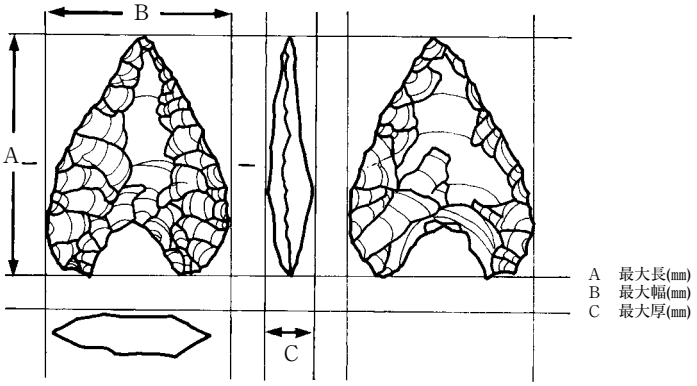
5　出土土器のうち、胎土に繊維を含むものの断面には▲をつけてある。

6　挿図に使用したスクリーントーンは、下記の通りである。



7　土師器の実測図に用いた調整の表現は下記の通りである。

8　石器の計測部位は下記の通りで、鉄製品・炉壁・羽口・鉄滓もほぼこれに準じる。計測値の単位は土器の長さ等がcm、石器・鉄製品の長さ等が㎜、重さがｇである。なお(　)書きは推定値である。



目　次

序
例言
凡例
目次
挿図・表・図版目次
第１章　はじめに……1
　第１節　調査に至る経過……1
　第２節　調査要項……1
第２章　遺跡の環境……3
　第１節　遺跡の位置と立地……3
　第２節　歴史的環境……5
第３章　発掘調査の概要……8
　第１節　遺跡の概観……8
　第２節　調査の方法……8
　第３節　調査の経過……9
　第４節　整理作業の方法と経過……15
　第５節　遺物の分類……16
第４章　調査の記録……19
　第１節　基本層序……19
　第２節　縄文時代・弥生時代の遺構と遺物……20
　　１　検出遺構と遺物……20
　　(１)陥し穴……20
　　(２)土坑……25
　　２　遺構外出土遺物……27
　第３節　平安時代の遺構と遺物……30
　　１　検出遺構と遺物……30
　　(１)竪穴住居跡……30
　　(２)掘立柱建物跡……385
　　(３)製鉄遺構・製鉄炉……389
　　(４)排滓場……425
　　(５)土坑……458
　　(６)焼土遺構……479
　　(７)土器埋設遺構……483
　　(８)溝跡・柵列・道跡……484
　　(９)集石遺構……506
　　(10)捨て場……506
　　(11)性格不明遺構……549
　　(12)柱穴様ピット集中地区……556
　　２　遺構外出土遺物……568
　第４節　中世以降の遺構と遺物……578
　　１　検出遺構……578
　　(１)水場遺構……578
　　２　遺構外出土遺物……580
第５章　自然科学的分析……581
　第１節　放射性炭素年代測定……581
　第２節　出土炭化材の樹種同定……589
　第３節　出土製鉄関連遺物分析……596
第６章　まとめ……601
　　Ⅰ　はじめに……601
　　Ⅱ　平安時代の遺構……601
　　Ⅲ　平安時代の遺物……611
　　Ⅳ　集落構成とその変遷……623
　　Ⅴ　おわりに……628

図版
報告書抄録・奥付

挿図目次

第１図　遺跡位置 …… 3
第２図　地形区分 …… 4
第３図　釈迦内中台Ⅰ遺跡と周辺遺跡・6
第４図　基本土層 ……21・22
第５図　01-ＳＫＴ148・358・363 ……24
第６図　01-ＳＫＴ406・02-ＳＫＴ01・03-ＳＫＴ198 ……25
第７図　03-ＳＫ320・出土遺物 ……26
第８図　遺構外出土縄文土器・弥生土器 ……27
第９図　遺構外出土石器１ ……28
第10図　遺構外出土石器２ ……29
第11図　01-ＳⅠ21 ……31
第12図　01-ＳⅠ463 ……32
第13図　01-ＳⅠ28 ……33
第14図　01-ＳⅠ28カマド ……34
第15図　01-ＳⅠ28遺物出土状況 ……35
第16図　01-ＳⅠ28出土遺物１ ……36
第17図　01-ＳⅠ28出土遺物２ ……37
第18図　01-ＳⅠ34Ａ ……38
第19図　01-ＳⅠ34Ａカマド ……39
第20図　01-ＳⅠ34Ａカマド遺物出土状況 ……40
第21図　01-ＳⅠ34Ａ出土遺物 ……41
第22図　01-ＳⅠ34Ｂ ……42
第23図　01-ＳⅠ35 ……44
第24図　01-ＳⅠ35カマド ……45
第25図　01-ＳⅠ35カマド遺物出土状況・出土遺物 ……46
第26図　01-ＳⅠ74 ……47
第27図　01-ＳⅠ74カマド ……48
第28図　01-ＳⅠ74遺物出土状況 ……49
第29図　01-ＳⅠ74出土遺物 ……50
第30図　01-ＳⅠ86 ……52
第31図　01-ＳⅠ86カマド・遺物出土状況 ……53
第32図　01-ＳⅠ86遺物出土状況 ……54
第33図　01-ＳⅠ86出土遺物 ……55
第34図　01-ＳⅠ87 ……57
第35図　01-ＳⅠ87カマド ……58
第36図　01-ＳⅠ87出土遺物 ……59
第37図　01-ＳⅠ88 ……61
第38図　01-ＳⅠ88カマド ……62
第39図　01-ＳⅠ88出土遺物 ……63
第40図　01-ＳⅠ190Ａ・Ｂ ……64
第41図　01-ＳⅠ190Ａカマド確認状況 ・65
第42図　01-ＳⅠ190Ａカマド ……66
第43図　01-ＳⅠ190Ａカマド遺物出土状況 ……67
第44図　01-ＳⅠ190Ａ出土遺物１ ……68
第45図　01-ＳⅠ190Ａ出土遺物２ ……70
第46図　01-ＳⅠ190Ｃ・Ｄ ……72
第47図　01-ＳⅠ190Ｃカマド ……73
第48図　01-ＳⅠ192 ……74
第49図　01-ＳⅠ192カマド・遺物出土状況 ……75
第50図　01-ＳⅠ192出土遺物 ……76
第51図　01-ＳⅠ193 ……78
第52図　01-ＳⅠ193カマド・遺物出土状況 ……79
第53図　01-ＳⅠ193出土遺物１ ……80
第54図　01-ＳⅠ193出土遺物２ ……81
第55図　01-ＳⅠ359 ……83
第56図　01-ＳⅠ112Ａ ……84
第57図　01-ＳⅠ112Ａ遺物出土状況 …85
第58図　01-ＳⅠ112Ａカマド遺物出土状況 ……86
第59図　01-ＳⅠ112Ａ出土遺物 ……87
第60図　01-ＳⅠ112Ｂ・Ｃ ……89
第61図　01-ＳⅠ112Ｂカマド・確認状況・遺物出土状況 ……90
第62図　01-ＳⅠ112Ｂ遺物出土状況 …91
第63図　01-ＳⅠ112Ｂ出土遺物 ……93
第64図　01-ＳⅠ119 ……94
第65図　01-ＳⅠ119カマド・遺物出土状況 ……95
第66図　01-ＳⅠ119出土遺物 ……97
第67図　01-ＳⅠ120・遺物出土状況 …98
第68図　01-ＳⅠ120カマド・遺物出土状況 ……99
第69図　01-ＳⅠ120出土遺物 ……100
第70図　01-ＳⅠ139 ……101
第71図　01-ＳⅠ139カマド・確認状況 ……102
第72図　01-ＳⅠ139遺物出土状況 ……103
第73図　01-ＳⅠ139出土遺物 ……104
第74図　01-ＳⅠ141Ａ・Ｂ・223・遺物出土状況 ……105
第75図　01-ＳⅠ141出土遺物 ……106
第76図　01-ＳⅠ149Ａ・Ｂ ……107
第77図　01-ＳⅠ149Ａカマド・遺物出土状況 ……108
第78図　01-ＳⅠ149Ａ出土遺物 ……109
第79図　01-ＳⅠ255・炭化材出土状況・出土遺物 ……111
第80図　01-ＳⅠ150 ……113
第81図　01-ＳⅠ150カマド・遺物出土状況 ……114
第82図　01-ＳⅠ150出土遺物 ……115
第83図　01-ＳⅠ155Ａ ……116
第84図　01-ＳⅠ155Ａカマド・遺物出土状況 ……117
第85図　01-ＳⅠ155Ａ出土遺物 ……119
第86図　01-ＳⅠ155Ｂ・Ｃ・ ……121
第87図　01-ＳⅠ155Ｂ・Ｃカマド・遺物出土状況・出土遺物 ……122
第88図　01-ＳⅠ156・カマド・確認状況 ……123
第89図　01-ＳⅠ156出土遺物 ……124
第90図　01-ＳⅠ157 ……125
第91図　01-ＳⅠ158 ……127
第92図　01-ＳⅠ158カマド・遺物出土状況 ……128
第93図　01-ＳⅠ158出土遺物１ ……129
第94図　01-ＳⅠ158出土遺物２ ……130
第95図　01-ＳⅠ159 ……131
第96図　01-ＳⅠ159カマド・遺物出土状況 ……132
第97図　01-ＳⅠ159出土遺物 ……133
第98図　01-ＳⅠ160 ……135
第99図　01-ＳⅠ160カマド・遺物出土状況・出土遺物 ……136
第100図　02-ＳⅠ01 ……138
第101図　02-ＳⅠ01・カマド・遺物出土状況・出土遺物 ……139
第102図　02-ＳⅠ02・03 ……142
第103図　02-ＳⅠ02・03カマド・遺物出土状況・出土遺物・ ……143
第104図　02-ＳⅠ10・カマド ……144
第105図　02-ＳⅠ04 ……146
第106図　02-ＳⅠ04カマド・遺物出土状況 ……147
第107図　02-ＳⅠ04出土遺物 ……149
第108図　02-ＳⅠ05・遺物出土状況 ‥150
第109図　02-ＳⅠ05カマド ……151
第110図　02-ＳⅠ05出土遺物 ……153
第111図　03-ＳⅠ06Ａ ……155
第112図　03-ＳⅠ06Ａカマド・遺物出土状況 ……156
第113図　03-ＳⅠ06Ａ遺物出土状況 ‥157
第114図　03-ＳⅠ06Ａ出土遺物１ ‥‥158
第115図　03-ＳⅠ06Ａ出土遺物２ ‥‥159
第116図　03-ＳⅠ06Ｂ・Ｃ ……161
第117図　03-ＳⅠ06Ｂ・Ｃカマド ‥‥162
第118図　03-ＳⅠ06Ｄ・Ｅ ……164
第119図　02-ＳⅠ07Ａ ……166
第120図　02-ＳⅠ07Ａ柱穴 ……167
第121図　02-ＳⅠ07Ｂ ……168
第122図　02-ＳⅠ07Ｂ柱穴 ……169
第123図　02-ＳⅠ08・09 ……170
第124図　02-ＳⅠ11・遺物出土状況 ‥172
第125図　02-ＳⅠ11カマド ……173
第126図　02-ＳⅠ11出土遺物１ ……174
第127図　02-ＳⅠ11出土遺物２ ……175
第128図　03-ＳⅠ12 ……178
第129図　03-ＳⅠ12・カマド・焼土 ‥179
第130図　03-ＳⅠ12出土遺物 ……180
第131図　03-ＳⅠ13 ……182
第132図　03-ＳⅠ13カマド・出土遺物・183
第133図　02-ＳⅠ14・遺物出土状況 ‥184
第134図　02-ＳⅠ14カマド・遺物出土状況 ……185
第135図　02-ＳⅠ14出土遺物 ……186
第136図　02-ＳⅠ18 ……187
第137図　02-ＳⅠ18柱穴 ……188
第138図　02-ＳⅠ18カマド ……189
第139図　02-ＳⅠ18遺物出土状況 ‥‥191
第140図　02-ＳⅠ18出土遺物１ ……192
第141図　02-ＳⅠ18出土遺物２ ……193
第142図　02-ＳⅠ20・カマド・遺物出土状況・出土遺物 ……195
第143図　02-ＳⅠ21Ａ・Ｂ ……197
第144図　02-ＳⅠ21Ａ出土遺物１ ‥‥198
第145図　02-ＳⅠ21Ａ出土遺物２ ……199
第146図　02-ＳⅠ52Ａ ……201
第147図　02-ＳⅠ52Ａ炭化材・遺物出土状況 ……202
第148図　02-ＳⅠ52Ａ出土遺物１ ‥‥204
第149図　02-ＳⅠ52Ａ出土遺物２ ‥‥205
第150図　02-ＳⅠ52Ｂ・Ｃ ……206
第151図　02-ＳⅠ52Ｃカマド ……207
第152図　02-ＳⅠ24Ａ ……209
第153図　02-ＳⅠ24Ａカマド ……210
第154図　02-ＳⅠ24Ａ出土遺物 ……211
第155図　02-ＳⅠ24Ｂ ……212
第156図　02-ＳⅠ24Ｂカマド ……213
第157図　02-ＳⅠ25・カマド ……214
第158図　02-ＳⅠ25Ａ出土遺物 ……215
第159図　03-ＳⅠ15Ａ ……217
第160図　03-ＳⅠ15Ａカマド・遺物出土状況 ……218
第161図　03-ＳⅠ15Ａ・Ｂ遺物出土状況 ……220
第162図　03-ＳⅠ15Ａ出土遺物１ ‥‥221
第163図　03-ＳⅠ15Ａ出土遺物２ ‥‥222
第164図　03-ＳⅠ15Ｂ ……224
第165図　03-ＳⅠ15Ｂカマド・出土遺物 ……225
第166図　03-ＳⅠ16 ……226
第167図　03-ＳⅠ16カマド ……227
第168図　03-ＳⅠ16遺物出土状況 ……229・230
第169図　03-ＳⅠ16出土遺物１ ……232
第170図　03-ＳⅠ16出土遺物２ ……233
第171図　03-ＳⅠ16出土遺物３ ……234
第172図　03-ＳⅠ17Ａ ……236

第173図　03-ＳＩ17Ａカマド ……237
第174図　03-ＳＩ17Ｂ ……238
第175図　03-ＳＩ100・カマド ……239
第176図　03-ＳＩ100出土遺物 ……241
第177図　03-ＳＩ22Ａ ……243
第178図　03-ＳＩ22Ａカマド ……244
第179図　03-ＳＩ22Ａ出土遺物１ ……246
第180図　03-ＳＩ22Ａ出土遺物２ ……247
第181図　03-ＳＩ22Ａ出土遺物３ ……248
第182図　03-ＳＩ22Ｂ ……249
第183図　03-ＳＩ23 ……250
第184図　03-ＳＩ23カマド ……251
第185図　03-ＳＩ23炭化材出土状況 ‥252
第186図　03-ＳＩ23出土遺物 ……253
第187図　03-ＳＩ26カマド・出土遺物 ……255
第188図　03-ＳＩ102 ……257
第189図　03-ＳＩ102カマド・焼土 …258
第190図　03-ＳＩ102遺物出土状況 …259
第191図　03-ＳＩ102出土遺物 ……260
第192図　03-ＳＩ103 ……262
第193図　03-ＳＩ103柱穴・土坑 ……263
第194図　03-ＳＩ103カマド・遺物出土状況 ……264
第195図　03-ＳＩ103遺物出土状況 …265
第196図　03-ＳＩ103出土遺物１ ……266
第197図　03-ＳＩ103出土遺物２ ……267
第198図　03-ＳＩ103出土遺物３ ……268
第199図　03-ＳＩ104Ａ ……269
第200図　03-ＳＩ104Ａカマド ……270
第201図　03-ＳＩ104Ａ出土遺物 ……271
第202図　03-ＳＩ104Ｂ ……272
第203図　03-ＳＩ105 ……273
第204図　03-ＳＩ105カマド ……274
第205図　03-ＳＩ105遺物出土状況 …275
第206図　03-ＳＩ105出土遺物１ ……276
第207図　03-ＳＩ105出土遺物２ ……277
第208図　03-ＳＩ106Ａ ……279
第209図　03-ＳＩ106Ａカマド ……280
第210図　03-ＳＩ106Ａ出土遺物 ……281
第211図　03-ＳＩ106Ｂ・カマド ……282
第212図　03-ＳＩ173・出土遺物 ……283
第213図　03-ＳＩ178 ……285
第214図　03-ＳＩ178カマドＡ・Ｂ …286
第215図　03-ＳＩ178出土遺物 ……287
第216図　03-ＳＩ203Ａ・Ｂ ……289
第217図　03-ＳＩ203Ａカマド ……290
第218図　03-ＳＩ203Ａ出土遺物 ……291
第219図　03-ＳＩ204・出土遺物 ……293
第220図　03-ＳＩ208・カマド・焼土 ·295
第221図　03-ＳＩ208出土遺物 ……296
第222図　03-ＳＩ207Ａ・Ｂ ……297
第223図　03-ＳＩ206Ａ・Ｂ・焼土 …298
第224図　03-ＳＩ224……300
第225図　03-ＳＩ224・カマド・遺物出土状況・出土遺物 ……301
第226図　03-ＳＩ316Ａ・カマド・焼土 ……303
第227図　03-ＳＩ316Ａ遺物出土状況 ……304
第228図　03-ＳＩ316Ａ出土遺物 ……305
第229図　03-ＳＩ316Ｂ ……306
第230図　03-ＳＩ316Ｃ ……308
第231図　03-ＳＩ316Ｃカマド・出土遺物 ……309
第232図　03-ＳＩ336 ……310
第233図　03-ＳＩ336カマド・出土遺物 ……311
第234図　03-ＳＩ343・出土遺物 ……313
第235図　03-ＳＩ576 ……314
第236図　03-ＳＩ576カマド・出土遺物 ……315
第237図　03-ＳＩ609Ａ ……317
第238図　03-ＳＩ609Ａカマド ……318
第239図　03-ＳＩ609Ａ遺物出土状況 ·319
第240図　03-ＳＩ609Ａ出土遺物１ …320
第241図　03-ＳＩ609Ａ出土遺物２ …321
第242図　03-ＳＩ609Ｂ ……322
第243図　03-ＳＩ610 ……323
第244図　03-ＳＩ610焼土１・２・出土遺物 ……324
第245図　03-ＳＩ853 ……326
第246図　03-ＳＩ853カマド・出土遺物 ……327
第247図　03-ＳＩ854・カマド ……328
第248図　03-ＳＩ854出土遺物 ……329
第249図　05-ＳＩ02・遺物出土状況 ‥331
第250図　05-ＳＩ02カマド ……332
第251図　05-ＳＩ02出土遺物 ……333
第252図　05-ＳＩ03 ……334
第253図　05-ＳＩ03柱穴 ……335
第254図　05-ＳＩ03カマド ……336
第255図　05-ＳＩ03遺物出土状況 ‥‥337
第256図　05-ＳＩ03出土遺物 ……338
第257図　05-ＳＩ05 ……340
第258図　05-ＳＩ05カマド ……341
第259図　05-ＳＩ05遺物出土状況 ‥‥342
第260図　05-ＳＩ05出土遺物 ……343
第261図　05-ＳＩ06・カマド ……344
第262図　05-ＳＩ06出土遺物 ……345
第263図　05-ＳＩ13・カマド ……347
第264図　05-ＳＩ13出土遺物 ……348
第265図　05-ＳＩ15・カマド ……350
第266図　05-ＳＩ15出土遺物 ……351
第267図　05-ＳＩ26カマド・出土遺物·352
第268図　05-ＳＩ27・遺物出土状況 ‥353
第269図　05-ＳＩ27カマド・遺物出土状況 ……354
第270図　05-ＳＩ27出土遺物 ……355
第271図　05-ＳＩ28Ａ ……357
第272図　05-ＳＩ28Ａ柱穴 ……358
第273図　05-ＳＩ28Ａカマド・遺物出土状況 ……359
第274図　05-ＳＩ28Ａ炭化材出土状況・遺物出土状況 ……360
第275図　05-ＳＩ28Ａ出土遺物１ ‥‥362
第276図　05-ＳＩ28Ａ出土遺物２ ‥‥363
第277図　05-ＳＩ28Ａ出土遺物３ ‥‥364
第278図　05-ＳＩ28Ｂ ……365
第279図　05-ＳＩ28Ｂ出土遺物 ……366
第280図　05-ＳＩ29・カマド・出土遺物 ……367
第281図　05-ＳＩ36・カマド・出土遺物 ……368
第282図　05-ＳＩ53・カマド・出土遺物 ……369
第283図　05-ＳＩ58・カマド・出土遺物 ……370
第284図　05-ＳＩ59 ……372
第285図　05-ＳＩ59カマド・出土遺物 ……373
第286図　05-ＳＩ66・炭化材出土状況・出土遺物 ……375
第287図　05-ＳＩ70・出土遺物 ……376
第288図　05-ＳＩ73・出土遺物 ……377
第289図　05-ＳＩ74 ……379
第290図　05-ＳＩ74カマド ……380
第291図　05-ＳＩ803 ……381
第292図　05-ＳＩ803カマド・焼土 …382
第293図　05-ＳＩ803遺物出土状況 …383
第294図　05-ＳＩ803出土遺物 ……384
第295図　01-ＳＢ146 ……386
第296図　01-ＳＢ328・02-ＳＢ01 ……387
第297図　05-ＳＢ79 ……388
第298図　05-ＳＳ10・11・14・77製鉄遺構 ……390
第299図　05-ＳＳ10・11・14・77製鉄遺構出土遺物 ……391
第300図　05-ＳＳ10・11・14製鉄炉 ‥393
第301図　05-ＳＳ77製鉄炉　05-ＳＳ10・14・77炉内出土遺物 ……394
第302図　05-ＳＳ11炉内出土遺物 ‥‥395
第303図　05-ＳＳ12製鉄遺構・製鉄炉 ……398
第304図　05-ＳＳ12炉内出土遺物 ‥‥399
第305図　05-ＳＳ80製鉄遺構・製鉄炉・炉内出土遺物 ……400
第306図　05-ＳＳ17製鉄遺構・製鉄炉 ……402
第307図　05-ＳＳ17製鉄遺構・炉内出土遺物 ……403
第308図　05-ＳＳ19・65製鉄遺構 ‥‥405
第309図　05-ＳＳ19・65製鉄遺構出土遺物 ……406
第310図　05-ＳＳ19・65製鉄炉 ……407
第311図　05-ＳＳ19・65炉内出土遺物 ……408
第312図　05-ＳＳ30製鉄遺構・製鉄炉 ……410
第313図　05-ＳＳ30製鉄遺構・炉内出土遺物 ……411
第314図　05-ＳＳ34製鉄遺構・製鉄炉 ……413
第315図　05-ＳＳ34製鉄遺構・炉内出土遺物 ……414
第316図　05-ＳＳ34炉内出土遺物 ‥‥415
第317図　05-ＳＳ1001・1002製鉄遺構 ……417
第318図　05-ＳＳ1001・1002製鉄遺構出土遺物１ ……418
第319図　05-ＳＳ1001・1002製鉄遺構出土遺物２ ……419
第320図　05-ＳＳ1001製鉄炉 ……420
第321図　05-ＳＳ1002製鉄炉 ……421
第322図　05-ＳＳ1001・1002炉内出土遺物 ……422
第323図　05-ＳＳ81製鉄遺構・出土遺物 ……424
第324図　03-ＳＴ185排滓場１ ……426
第325図　03-ＳＴ185排滓場２ ……427
第326図　05-ＳＳ10・11・12・14・77・80排滓場(炉壁Ａ出土状況１) ……428
第327図　05-ＳＳ10・11・12・14・77・80排滓場(炉壁Ａ出土状況２) ……429
第328図　05-ＳＳ10・11・12・14・77・80排滓場(炉壁Ｂ出土状況１) ……430
第329図　05-ＳＳ10・11・12・14・77・80排滓場(炉壁Ｂ出土状況２) ……431
第330図　05-ＳＳ10・11・12・14・77・80排滓場(炉底塊出土状況１) ……432
第331図　05-ＳＳ10・11・12・14・77・80排滓場(炉底塊出土状況２)

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・433
第332図　05-ＳＳ10・11・12・14・77・80 排滓場(炉内滓出土状況１)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・434
第333図　05-ＳＳ10・11・12・14・77・80 排滓場(炉内滓出土状況２)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・435
第334図　05-ＳＳ10・11・12・14・77・80 排滓場(鉄塊系遺物出土状況１)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・436
第335図　05-ＳＳ10・11・12・14・77・80 排滓場(鉄塊系遺物出土状況２)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・437
第336図　05-ＳＳ10・11・12・14・77・80 排滓場(流動滓出土状況１)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・438
第337図　05-ＳＳ10・11・12・14・77・80 排滓場(流動滓出土状況２)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・439
第338図　05-ＳＳ10・11・12・14・77・80 排滓場(単位流動滓出土状況１)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・440
第339図　05-ＳＳ10・11・12・14・77・80 排滓場(単位流動滓出土状況２)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・441
第340図　05-ＳＳ10・14排滓場出土遺物１・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・443
第341図　05-ＳＳ10・14排滓場出土遺物２・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・444
第342図　05-ＳＳ10・14排滓場出土遺物３・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・445
第343図　05-ＳＳ11・12・77・80排滓場出土遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・446
第344図　05-ＳＳ34排滓場(炉壁出土状況１)・・・・・・・・・・448
第345図　05-ＳＳ34排滓場(炉壁出土状況２)・・・・・・・・・・449
第346図　05-ＳＳ34排滓場(炉底塊出土状況)・・・・・・・・・・450
第347図　05-ＳＳ34排滓場(炉内滓出土状況)・・・・・・・・・・451
第348図　05-ＳＳ34排滓場(鉄塊系遺物出土状況)・・・・・・452
第349図　05-ＳＳ34排滓場(流動滓出土状況)・・・・・・・・・・453
第350図　05-ＳＳ34排滓場(単位流動滓出土状況)・・・・・・454
第351図　05-ＳＳ34排滓場出土遺物１・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・455
第352図　05-ＳＳ34排滓場出土遺物２・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・456
第353図　05-ＳＳ34排滓場出土遺物３・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・457
第354図　01-ＳＫ01・05・22・38・60・61～64・89・95・107・108・122・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・459
第355図　01-ＳＫ125～128・140・144・154・162・216・230・・・・・・・463
第356図　01-ＳＫ287・294・296・313・325・413・431・02-ＳＫ01・・・466
第357図　02-ＳＫ02・03-ＳＫ186・188・200・209・644・1008・1009・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・469
第358図　03-ＳＫ855・05-ＳＫ04・39・60・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・472
第359図　05-ＳＫ09・・・・・・・・・・・・・・・・・473
第360図　05-ＳＫ42・・・・・・・・・・・・・・・・・474
第361図　05-ＳＫ52・・・・・・・・・・・・・・・・・475
第362図　05-ＳＫ62・71・75・・・・・・・・・476
第363図　05-ＳＫ67・・・・・・・・・・・・・・・・・477
第364図　ＳＫ出土遺物・・・・・・・・・・・・・・・478
第365図　01-ＳＮ39・79・02-ＳＮ01・03-ＳＮ331・1007・・・・・・・・・・・・・480
第366図　03-ＳＮ342・05-ＳＮ20・21・37・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・482
第367図　03-ＳＲ801・出土遺物・・・・・483
第368図　01-ＳＡ40・・・・・・・・・・・・・・・・・485
第369図　05-ＳＡ46・50・84・・・・・・・・486
第370図　01-ＳＤ36・42・57・151・188・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・487
第371図　01-ＳＤ48・404・02-ＳＤ03・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・490
第372図　01-ＳＤ47・195・213・250・426・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・491
第373図　01-ＳＤ220・遺物出土状況・492
第374図　02-ＳＤ01・03-ＳＤ323・324・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・493
第375図　03-ＳＤ172・184・187・・・・・・495
第376図　03-ＳＤ179Ａ・Ｂ・05-ＳＤ45・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・496
第377図　03-ＳＤ1002・1003・1004・・498
第378図　05-ＳＤ01・18・・・・・・・・・・・・・500
第379図　05-ＳＤ16・23・24・25・・・・501
第380図　05-ＳＤ35・38・44・69・・・・503
第381図　05-ＳＤ63・・・・・・・・・・・・・・・・504
第382図　ＳＤ出土遺物・・・・・・・・・・・・・・505
第383図　01-ＳＱ138・出土遺物・・・・・506
第384図　03-ＳＴ185範囲・・・・・・・・・・・508
第385図　03-ＳＴ185出土遺物１・・・・・509
第386図　03-ＳＴ185出土遺物２・・・・・510
第387図　03-ＳＴ185出土遺物３・・・・・511
第388図　03-ＳＴ185出土遺物４・・・・・512
第389図　03-ＳＴ185出土遺物５・・・・・513
第390図　03-ＳＴ185出土遺物６・・・・・514
第391図　03-ＳＴ185出土遺物７・・・・・515
第392図　03-ＳＴ185出土遺物８・・・・・516
第393図　03-ＳＴ185出土遺物９・・・・・517
第394図　03-ＳＴ185出土遺物10・・・・・518
第395図　03-ＳＴ185出土遺物11・・・・・519
第396図　03-ＳＴ185出土遺物12・・・・・520
第397図　03-ＳＴ185出土遺物13・・・・・521
第398図　03-ＳＴ185出土遺物14・・・・・523
第399図　03-ＳＴ185出土遺物15・・・・・524
第400図　03-ＳＴ185出土遺物16・・・・・525
第401図　03-ＳＴ185出土遺物17・・・・・526
第402図　03-ＳＴ185出土遺物18・・・・・527
第403図　03-ＳＴ185出土遺物19・・・・・528
第404図　03-ＳＴ185出土遺物20・・・・・529
第405図　03-ＳＴ185出土遺物21・・・・・530
第406図　03-ＳＴ185出土遺物22・・・・・531
第407図　03-ＳＴ185出土遺物23・・・・・532
第408図　03-ＳＴ185出土遺物24・・・・・533
第409図　03-ＳＴ185出土遺物25・・・・・534
第410図　03-ＳＴ185出土遺物26・・・・・535
第411図　03-ＳＴ185出土遺物27・・・・・536
第412図　03-ＳＴ185出土遺物28・・・・・537
第413図　03-ＳＴ185出土遺物29・・・・・538
第414図　03-ＳＴ185出土遺物30・・・・・539
第415図　03-ＳＴ185出土遺物31・・・・・540
第416図　03-ＳＴ185出土遺物32・・・・・541
第417図　03-ＳＴ185出土遺物33・・・・・542
第418図　05-ＳＴ82出土遺物１・・・・・・544
第419図　05-ＳＴ82出土遺物２・・・・・・545
第420図　05-ＳＴ82出土遺物３・・・・・・546
第421図　05-ＳＴ83出土遺物・・・・・・・・548
第422図　03-ＳＸ345・606・608・・・・・550
第423図　05-ＳＸ41・47・・・・・・・・・・・・552
第424図　05-ＳＸ48・56・61・・・・・・・・554
第425図　05-ＳＸ64・72・・・・・・・・・・・・555
第426図　柱穴様ピット集中地区１・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・557･558
第427図　柱穴様ピット集中地区２・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・559･560
第428図　柱穴様ピット集中地区３・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・561･562
第429図　柱穴様ピット集中地区４・・・564
第430図　柱穴様ピット集中地区５・・・565
第431図　柱穴様ピット集中地区６・・・566
第432図　柱穴様ピット出土遺物・・・・・568
第433図　遺構外出土土師器甕１・・・・・569
第434図　遺構外出土土師器甕２・・・・・570
第435図　遺構外出土土師器坏１・・・・・571
第436図　遺構外出土土師器坏２・・・・・572
第437図　遺構外出土土師器坏３・・・・・573
第438図　遺構外出土墨書・・・・・・・・・・・574
第439図　遺構外出土土師器鍋・壺・・・575
第440図　遺構外出土須恵器・・・・・・・・・576
第441図　遺構外出土鉄製品･土製品・・577
第442図　03-ＳＥ1000・・・・・・・・・・・・・579
第443図　遺構外出土陶磁器・土製品・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・580
第444図　住居跡分類・・・・・・・・・・・・・・・602
第445図　住居跡分類別分布・・・・・・・・・603
第446図　拡張住居跡集成・・・・・・・・・・・606
第447図　焼失家屋及び住居内出土遺物分布・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・608
第448図　代表的住居内遺物出土状況・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・609
第449図　土師器甕分類・・・・・・・・・・・・・612
第450図　土師器坏分類・・・・・・・・・・・・・613
第451図　須恵器集成・・・・・・・・・・・・・・・616
第452図　鉄製品・墨書土器集成・・・・・617
第453図　各期の遺物組成１(１・２段階)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・620
第454図　各期の遺物組成２(３・４段階)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・621
第455図　各期の遺物組成３(５・６段階)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・622
第456図　集落構成・変遷１(Ⅰ・Ⅱ期)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・624
第457図　集落構成・変遷２(Ⅲ・Ⅳ期)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・625
第458図　集落構成・変遷３(Ⅴ期)・・・・626
付図　遺構配置図

表目次

第１表　釈迦内中台Ⅰ遺跡と周辺遺跡・・7
第２表　2001年度放射性炭素年代測定及び暦年代較正の結果・・・・・・・・・・587
第３表　2002年度放射性炭素年代測定及び暦年代較正の結果・・・・・・・・・・587
第４表　2003年度暦年代較正結果・・・・587
第５表　2005年度放射性炭素年代測定及び暦年代較正の結果・・・・・・・・・・588
第６表　2003年度樹種同定結果１・・・・592
第７表　2001年度出土炭化材樹種・・・・595
第８表　2002年度住居跡出土炭化材樹種同定結果・・・・・・・・・・・・・・・・・595
第９表　2002年度住居跡別の検出樹種・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・595
第10表　2003年度樹種同定結果・・・・・・595
第11表　2005年度樹種同定結果・・・・・・595
第12表　分析対象鉄滓一覧・・・・・・・・・・600
第13表　分析対象鉄製品一覧・・・・・・・・600
第14表　ＥＤＳ分析簡易定量値・・・・・・600
第15表　鉄滓の蛍光Ｘ線分析結果・・・・600
第16表　鉄製品の蛍光Ｘ線分析結果・・600

図版目次

図版１　遺跡全景１・２
図版２　遺跡全景３・４
図版３　丘陵部全景１・２
図版４　13(2001)年度調査区垂直全景・13(2001)年度調査区住居重複
図版５　14(2002)年度調査区垂直近景１・14(2002)年度調査区垂直近景２
図版６　17(2005)年度調査区台地上部平坦面垂直全景・17(2005)年度調査区丘陵部垂直全景
図版７　丘陵部中央部近景・丘陵部南西部近景
図版８　丘陵部北東部近景・丘陵部北端部近景
図版９　01-ＳＫＴ148・358・363・406
図版10　02-ＳＫＴ01・03-ＳＫＴ198・03-ＳＫ320
図版11　調査風景・01-ＳＩ21
図版12　01-ＳＩ28
図版13　01-ＳＩ34・35
図版14　01-ＳＩ74
図版15　01-ＳＩ86
図版16　01-ＳＩ87
図版17　01-ＳＩ88
図版18　01-ＳＩ190
図版19　01-ＳＩ192・193－１
図版20　01-ＳＩ192・193－２
図版21　01-ＳＩ112
図版22　01-ＳＩ119
図版23　01-ＳＩ120
図版24　01-ＳＩ139
図版25　01-ＳＩ141・149・223・255
図版26　01-ＳＩ149
図版27　01-ＳＩ150
図版28　01-ＳＩ155
図版29　01-ＳＩ156・157
図版30　01-ＳＩ158
図版31　01-ＳＩ159
図版32　01-ＳＩ160
図版33　02-ＳＩ01
図版34　02-ＳＩ02・03・10
図版35　02-ＳＩ04
図版36　02-ＳＩ05
図版37　02-ＳＩ07・08・09
図版38　02-ＳＩ11
図版39　02-ＳＩ14
図版40　02-ＳＩ18
図版41　02-ＳＩ20
図版42　02-ＳＩ21
図版43　02-ＳＩ52－１
図版44　02-ＳＩ52－２
図版45　02-ＳＩ24
図版46　03-ＳＩ06
図版47　03-ＳＩ12
図版48　03-ＳＩ13
図版49　03-ＳＩ15・16－１
図版50　03-ＳＩ15・16－２
図版51　03-ＳＩ17・100
図版52　03-ＳＩ22
図版53　03-ＳＩ23－１
図版54　03-ＳＩ23－２
図版55　03-ＳＩ26－１
図版56　03-ＳＩ26－２
図版57　03-ＳＩ102－１
図版58　03-ＳＩ102－２
図版59　03-ＳＩ103－１
図版60　03-ＳＩ103－２
図版61　03-ＳＩ104
図版62　03-ＳＩ105
図版63　03-ＳＩ106
図版64　03-ＳＩ173
図版65　03-ＳＩ178
図版66　03-ＳＩ203・204・206・207・208
図版67　03-ＳＩ203・206・208
図版68　03-ＳＩ224
図版69　03-ＳＩ316－１
図版70　03-ＳＩ316－２
図版71　03-ＳＩ336
図版72　03-ＳＩ343
図版73　03-ＳＩ576
図版74　03-ＳＩ609－１
図版75　03-ＳＩ609－２
図版76　03-ＳＩ610
図版77　03-ＳＩ853
図版78　03-ＳＩ854
図版79　05-ＳＩ02－１
図版80　05-ＳＩ02－２
図版81　05-ＳＩ03
図版82　05-ＳＩ05
図版83　05-ＳＩ06
図版84　05-ＳＩ13
図版85　05-ＳＩ15
図版86　05-ＳＩ26
図版87　05-ＳＩ27－１
図版88　05-ＳＩ27－２
図版89　05-ＳＩ28－１
図版90　05-ＳＩ28－２
図版91　05-ＳＩ29
図版92　05-ＳＩ36
図版93　05-ＳＩ53
図版94　05-ＳＩ58
図版95　05-ＳＩ59
図版96　05-ＳＩ66
図版97　05-ＳＩ70
図版98　05-ＳＩ73
図版99　05-ＳＩ74
図版100　05-ＳＩ803－１
図版101　05-ＳＩ803－２
図版102　01-ＳＢ146・328・02-ＳＢ01・05-ＳＢ79
図版103　05-ＳＳ10・11・12・14・77・80－１
図版104　05-ＳＳ10・11・12・14・77・80－２
図版105　05-ＳＳ10
図版106　05-ＳＳ11
図版107　05-ＳＳ12
図版108　05-ＳＳ14
図版109　05-ＳＳ17
図版110　05-ＳＳ19
図版111　05-ＳＳ30－１
図版112　05-ＳＳ30－２
図版113　05-ＳＳ34
図版114　05-ＳＳ65
図版115　05-ＳＳ77
図版116　05-ＳＳ80
図版117　05-ＳＳ1001・1002・81－１
図版118　05-ＳＳ1001・1002・81－２
図版119　05-ＳＳ1001
図版120　05-ＳＳ1002
図版121　05-ＳＳ10・11・12・14・77・80排滓場・05-ＳＳ34排滓場
図版122　01-ＳＫ01・05・22・38
図版123　01-ＳＫ61・62・63・64・95
図版124　01-ＳＫ89・107・108
図版125　01-ＳＫ122・140・154・216
図版126　01-ＳＫ230・287・294・296
図版127　01-ＳＫ313・325・413
図版128　01-ＳＫ60・126・127・128・02-ＳＫ01・03-ＳＫ200
図版129　03-ＳＫ186・209・644・05-ＳＫ04
図版130　05-ＳＫ09・39・42・52
図版131　05-ＳＫ60・62・67
図版132　05-ＳＫ71・75　01-ＳＮ39・79・03-ＳＮ342・05-ＳＮ20
図版133　05-ＳＮ21・37　03-ＳＲ801　01-ＳＡ40・46・50
図版134　01-ＳＤ36・42・57・151
図版135　01-ＳＤ188・220・02-ＳＤ01・02
図版136　03-ＳＤ323・324・10　02・1003・05-ＳＤ01
図版137　05-ＳＤ16・18・23・24
図版138　05-ＳＤ25・35・38
図版139　05-ＳＤ44・45・63・69
図版140　03-ＳＥ1000　01-ＳＱ138　03-ＳＴ185
図版141　05-ＳＸ47・48・56
図版142　05-ＳＸ61・72
図版143　土師器甕(大型)Ａ類－１
図版144　土師器甕(大型)Ａ類－２
図版145　土師器甕(大型)Ａ類－３
図版146　土師器甕(大型)Ａ類－４
図版147　土師器甕(大型)Ｂ類－１
図版148　土師器甕(大型)Ｃ類－１
図版149　土師器甕(大型)Ｃ類－２
図版150　土師器甕(大型)Ｃ類－３・Ｄ類－１
図版151　土師器甕(大型)Ｄ類－２
図版152　土師器甕(小型)Ａ類
図版153　土師器甕(小型)Ｂ類－１
図版154　土師器甕(小型)Ｂ類－２・Ｃ類－１
図版155　土師器甕(小型)Ｃ類－２
図版156　土師器甕(小型)Ｃ類－３
図版157　土師器甕(小型)Ｄ類・小型土器
図版158　土師器坏Ａ類－１
図版159　土師器坏Ａ類－２
図版160　土師器坏Ａ類－３・土師器坏Ｂ類－１
図版161　土師器坏Ｂ類－２
図版162　土師器坏Ｂ類－３・土師器坏Ｃ・Ｄ類
図版163　須恵器－１
図版164　須恵器－２
図版165　鉄製品
図版166　墨書土器
図版167　出土材樹種１
図版168　出土材樹種２
図版169　出土材樹種３
図版170　出土材樹種４
図版171　出土材樹種５
図版172　出土材樹種６
図版173　出土材樹種７
図版174　出土材樹種８
図版175　出土材樹種９
図版176　出土材樹種10
図版177　鉄滓No１・２分析結果　鉄滓No２・３分析結果
図版178　鉄滓No３・４分析結果　鉄滓No４・５分析結果
図版179　鉄滓No５分析結果・鉄製品No１・２分析結果　鉄製品No３・４分析結果
図版180　鉄製品No５分析結果

第１章　はじめに

第１節　調査に至る経過

大館西道路は、大館市街地における交通渋滞や騒音の緩和と県内の高速交通ネットワークの形成など、地域の文化と経済交流の活性化を目的として計画された路線で、大館市根下戸新町地内を起点とし、同市商人留地内を終点とする延長6.2㎞、幅員22mの自動車専用道路である。そのうち、根下戸新町地内から釈迦内地内の国道７号までの4.6㎞が部分供用されている。

計画路線内に埋蔵文化財が包蔵されている可能性があることから、道路工事に先立って建設省（現国土交通省）東北地方建設局能代工事事務所(現能代河川国道事務所)より、文化財保護法に基づき埋蔵文化財包蔵地の確認と今後の対応について、秋田県教育委員会に調査の依頼があった。これを受けて秋田県教育委員会は、計画路線内の分布調査及び確認調査を実施し、記録保存が必要な埋蔵文化財包蔵地については、発掘調査を実施することになった。

釈迦内中台Ⅰ遺跡の確認調査は平成12年度に行い、平安時代の遺構と遺物が確認されたことから、発掘調査を実施するに至った。事業計画の関連から、調査は平成13・14・15・17年度の４か年に渡って行った。

第２節　調査要項

遺　跡　名　　釈迦内中台Ⅰ遺跡(しゃかないなかだいいちいせき)　(遺跡番号　２ＳＫＮＮＤＩ)

遺跡所在地　　秋田県大館市釈迦内字中台103－２外

調査期間　　平成13年７月３日～10月31日

平成14年８月１日～10月９日

平成15年５月15日～10月９日

平成17年７月４日～11月18日

調査面積　　16,286㎡(平成13年度：3,000㎡、平成14年度：1,600㎡、平成15年度：3,760㎡、平成17年度：7,926㎡)

調査主体者　　秋田県教育委員会

調査担当者　　平成13年度

半田　あきほ(秋田県埋蔵文化財センター中央調査課　学芸主事)

吉川　耕太郎(秋田県埋蔵文化財センター中央調査課　文化財主事)

片岡　稔彦(秋田県埋蔵文化財センター中央調査課　非常勤職員)

高橋　浩樹(秋田県埋蔵文化財センター中央調査課　非常勤職員)

堀井　帝仁(秋田県埋蔵文化財センター中央調査課　非常勤職員)

眞井田　宏彰(秋田県埋蔵文化財センター中央調査課　非常勤職員)

平成14年度

栗澤　光男(秋田県埋蔵文化財センター南調査課　文化財主査)

新海　和広(秋田県埋蔵文化財センター南調査課　文化財主事)

伊藤　一彦(秋田県埋蔵文化財センター南調査課　非常勤職員)

眞井田　宏彰(秋田県埋蔵文化財センター南調査課　非常勤職員)

平成15年度

柴田　陽一郎(秋田県埋蔵文化財センター北調査課　副主幹兼班長)

宇田川　浩一(秋田県埋蔵文化財センター北調査課　文化財主事)

佐々木　彩子(秋田県埋蔵文化財センター北調査課　調査・研究員)

戸嶋　正明(秋田県埋蔵文化財センター北調査課　調査・研究員)

成田　雄毅(秋田県埋蔵文化財センター北調査課　調査・研究員)

平成17年度

丹　　和雄(秋田県埋蔵文化財センター南調査課　学芸主事)

伊藤　和美(秋田県埋蔵文化財センター南調査課　学芸主事)

新海　和広(秋田県埋蔵文化財センター南調査課　文化財主事)

深沢　恵里子(秋田県埋蔵文化財センター南調査課　調査・研究員)

今野　沙貴子(秋田県埋蔵文化財センター南調査課　調査・研究員)

総務担当者　　平成13年度

土橋　謙一(秋田県埋蔵文化財センター中央調査課　主事)

平成14年度

高橋　修(秋田県埋蔵文化財センター総務課　主任)

成田　誠(秋田県埋蔵文化財センター総務課　主事)

平成15年度

池端　徹(秋田県埋蔵文化財センター北調査課　副主幹)

平成17年度

柴田　卓也(秋田県埋蔵文化財センター総務課　主任)

田口　旭(秋田県埋蔵文化財センター総務課　主事)

平成19年度

佐藤　康(秋田県埋蔵文化財センター総務課　課長)

千田　喜博(秋田県埋蔵文化財センター総務課　主査)

佐々木　和幸(秋田県埋蔵文化財センター総務課　主事)

(担当者の職名は調査時のものである)

調査協力機関　　国土交通省東北地方整備局能代河川国道事務所　大館市教育委員会

第２章　遺跡の環境

第１節　遺跡の位置と立地

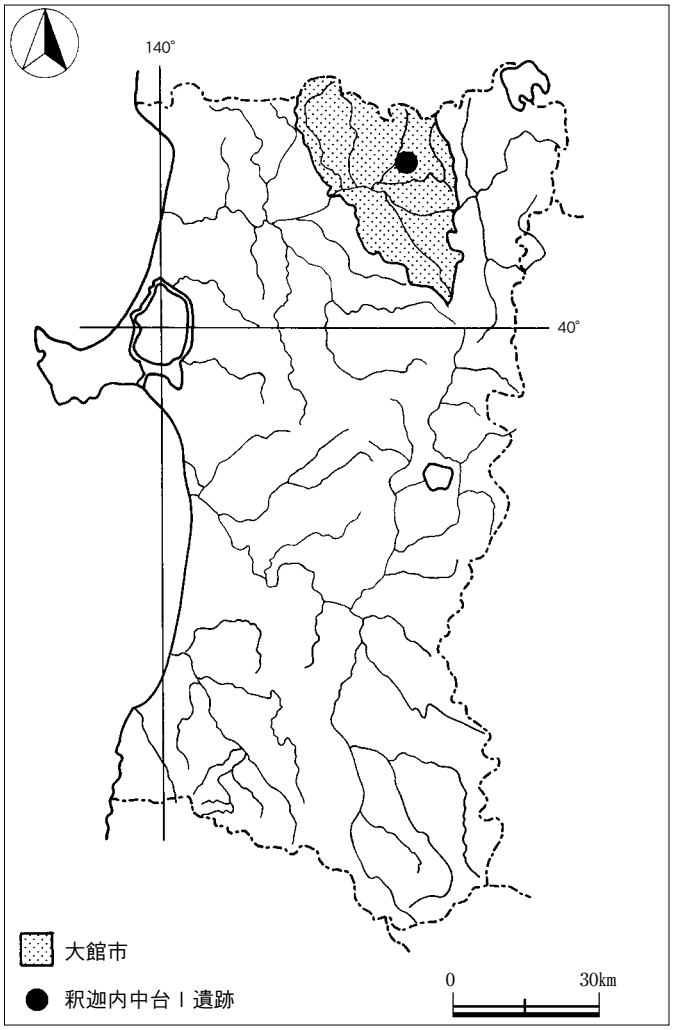
釈迦内中台Ⅰ遺跡が所在する大館市は、秋田県の北端に位置する(第１図)。市域は、北を青森県平川市、東を鹿角市・小坂町、南と西を北秋田市に接しており、その面積は913.30ｋ㎡で秋田県内では第４位の広さである。

大館市の地形は、大館盆地を囲む山地、盆地に分布する段丘や残丘、山麓沿いに分布する扇状地、盆地内を流れる川沿いの沖積低地からなっている(第２図)。大館盆地は断層により形成された陥没盆地で、盆地の東縁や南西縁ではこれを裏付ける断層崖が現在でも確認できる。盆地をとりまく山地は、北西側に白神山地、東側に高森山地、南西側には摩当山地がある。市街地に近い所では、盆地の東側に鳳凰山(520m)、秋葉山(329m)、獅子ヶ森(224m)があり、西側には大山(378m)を中心とする花岡地区の山地が南北にのびている。

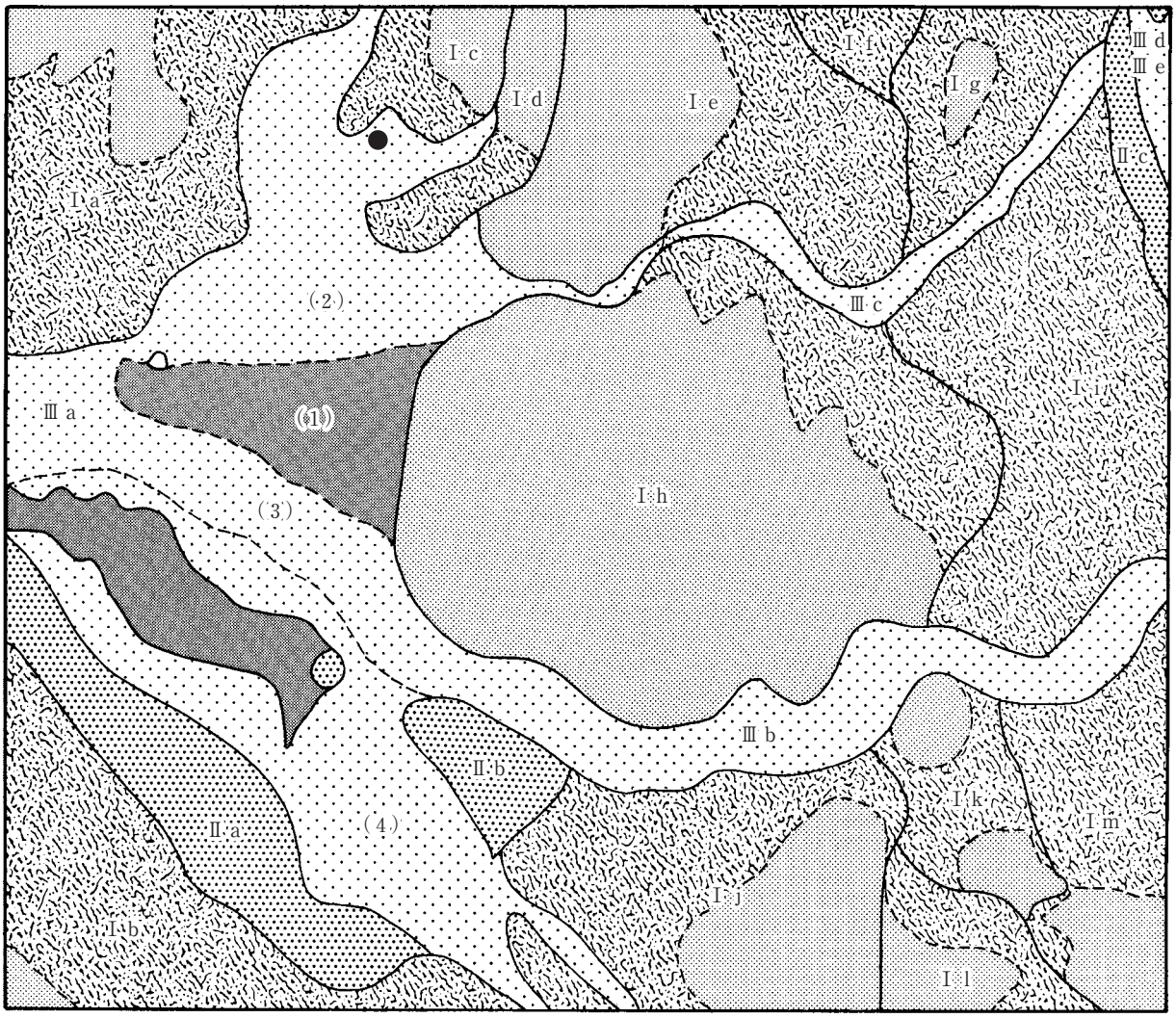
盆地内を流れる主要河川は、米代川、長木川、下内川である。米代川は県北第一の主要河川で、岩手県八幡平市(旧二戸郡安代町)の中岳の源流から鹿角市を経て大館市に入り、最終的には日本海に注ぐ。長木川、下内川はこの支流で、長木川は市内茂内屋敷北方の大川目沢に源を発し、盆地中央部を西流して、市内山田渡の西で米代川に合流する、下内川は矢立峠に近い市内陣馬北部の下内沢に源を発して、長走・白沢・釈迦内・沼館と南流して長木川に合流する。なお、下内川沿いの谷底平野は矢立峠付近まで続いており、古来より津軽との重要な交通路として利用されてきた。

釈迦内中台Ⅰ遺跡は大館市街地北部の釈迦内地区に所在し、ＪＲ奥羽本線の大館駅から北北東へ約３㎞に位置する(第３図)。

遺跡周辺の地形は火砕流台地と呼ばれる火山起源の地形である。この台地は城ヶ森の橋桁集落付近が最高地点で、そこから南西方向に向かって標高を減じて日景町の乱川対岸付近まで延びる。途中には芝谷地湿原や釈迦内鉱山のあった萩長森の残丘がみられる。また、西を流れる下内川と東を流れる乱川によって挟まれた位置にあり、台地下の水田面とは約10mの高低差がある。



第１図　遺跡位置



大山山地　（Ⅰａ）・比内山地　（Ⅰｂ）・城ヶ森山地（Ⅰｃ）・高森山地（Ⅰｄ）
高倉山山地（Ⅰｅ）・羽保屋山山地（Ⅰｆ）・高地山山地（Ⅰｇ）・中央山地（Ⅰｈ）
松森山地　（Ⅰｉ）・合窪山山地　（Ⅰｊ）・三哲山山地（Ⅰｋ）・会津山地（Ⅰｌ）
尾去沢山地（Ⅰｍ）　　— 山地

比内丘陵地（Ⅱａ）・味噌内丘陵地（Ⅱｂ）・小坂丘陵地（Ⅱｃ）　—— 丘陵地

大館盆地　（Ⅲａ）— 大館段丘地（１）・長木川，下内川低地（２）
　　米代川低地（３）・犀川，引欠川低地　（４）

十二所先行低地（Ⅲｂ）・長木川峡谷低地（Ⅲｃ）・元山段丘地（Ⅲｄ）・小坂川谷低地（Ⅲｅ）　— 台地 低地

● 釈迦内中台Ⅰ遺跡

第２図　地形区分

第２節　歴史的環境

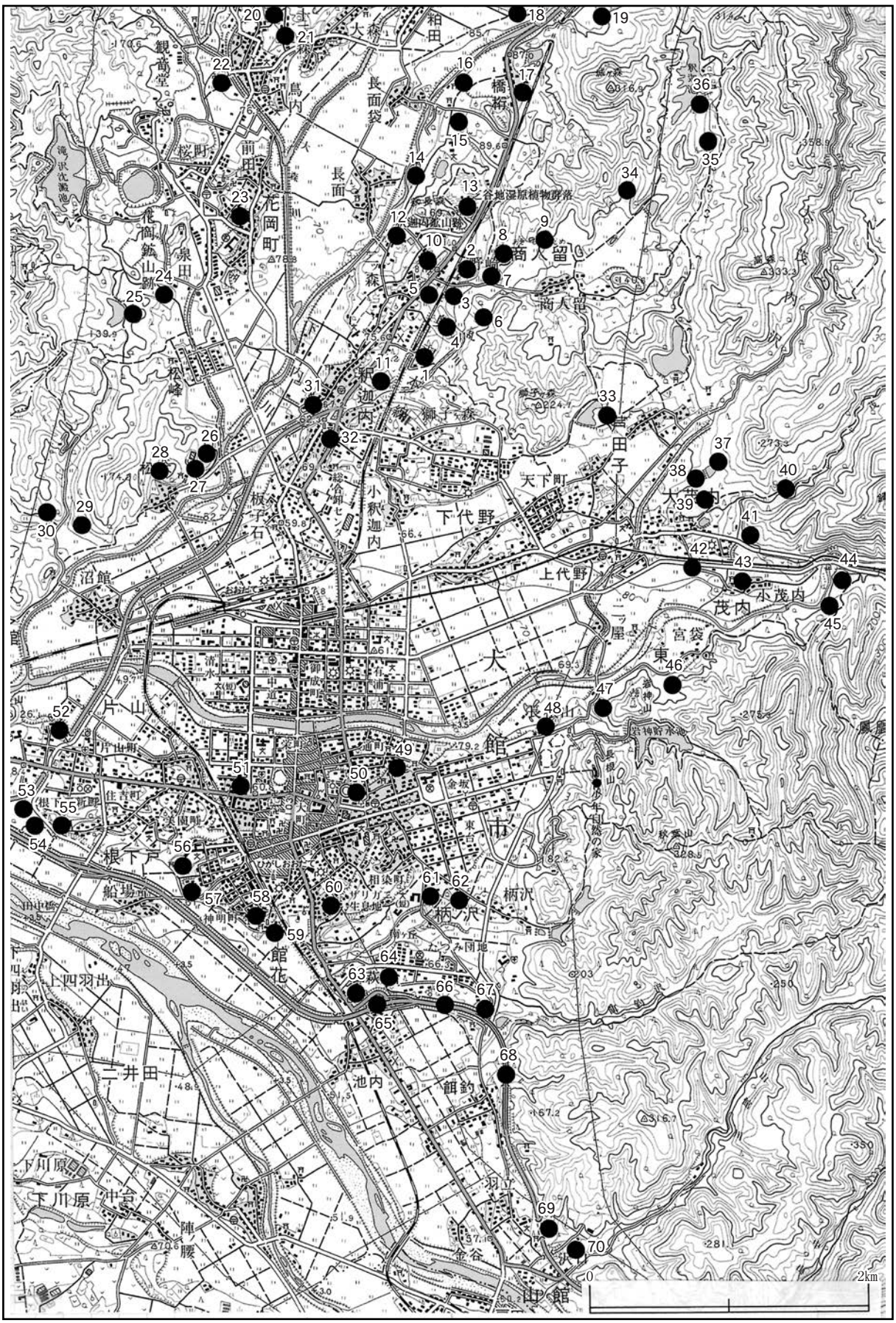
大館市ではこれまでに、旧石器時代から中・近世までの遺跡が157か所確認されている。第３図には、大館市街地北部に位置する東西約８km、南北約11.8kmの地域の遺跡分布を図示した。この範囲の遺跡の多くは、盆地内に分布する台地上部に位置しており、沖積地にはあまりみられない。

大館市内で確認されている最も古い遺跡は、旧石器時代に属する松木高館平遺跡(27)で、大型の石刃が出土している。縄文時代の遺跡は、早期中葉以降の遺跡が見つかっている。軽井沢の五輪台集落付近にある鳶ヶ長根Ⅳ遺跡からは、貝殻文の土器が比較的まとまって出土しており、根下戸道下遺跡では早期中葉の竪穴住居跡も確認されている。前期の遺跡では集落の調査例が多く、中でも上野にある池内遺跡は、前期中葉～末葉にかけての円筒下層式期の大集落で、大量の土器・石器の他に豊富な種類の動植物依存体が出土している。中期の遺跡は、多数見つかっているが集落の様相を把握できるような規模の大きい調査例は少ない。旧比内町の本道端遺跡では、縄文時代の中期の終わり頃の集落が見つかっており、複式炉を伴う住居が検出されている。中期の中頃から波及してくる南東北の大木式文化が、この地域にも影響を及ぼしていることが窺える。後期の遺跡では、中山の寒沢遺跡で７軒、軽井沢の萩峠遺跡で10軒の竪穴住居が見つかっており、集落が小規模化する傾向にあることが分かる。このほか茂内新町の塚ノ下遺跡(42)からは、目に天然アスファルトを埋め込んだ土偶が、萩ノ台Ⅱ遺跡(63)からは、十腰内Ⅰ・Ⅱ式に伴って翡翠の大珠が３点出土している。晩期になると、集落のみならず住居跡の検出数も少ない。旧田代町矢石館遺跡では、組石棺墓が５基調査されており、この時期の地域性を示す資料である。

弥生時代の遺跡では、諏訪台遺跡(39)で数軒の竪穴住居跡で構成される小集落が、また二ツ森Ⅱ遺跡(10)では土坑墓が見つかっている。しかし弥生時代の調査例は少なく、具体的な様相は不明である。

大館市が史上に初めて登場するのは、『日本三代実録』に記載されている元慶二年(878年)に勃発した「元慶の乱」についての記事中である。元慶の乱は、秋田城主介良岑近の悪政に反発した雄物川以北の住民が蜂起した事件で、当時の秋田郡内の各ムラが独立を要求するまでに発展したが、最終的には政治的懐柔策により鎮定された。この独立を要求したムラの中に、当時の大館を示す「火内」の文字が記されている。元慶の乱の記事には、当時の各ムラの様子そのものを示す記載は少ないが、律令国家の体制には服属しながらも在地社会のまとまりを残し、対外的な問題には指導者の統率のもと行動がとれる集団が存在していたことが窺える。11世紀代にはそういった流れの中から、安倍・清原・藤原氏が台頭してくる。大館地域もそういった有力者の支配に組み込まれていくと考えられる。

大館市では多くの平安時代の遺跡が確認されており、これまで調査が行われた遺跡によって当時の様相が解明されてきた。時期は９世紀後半から10世紀代が多く、大館野遺跡(18)や扇田道下遺跡(61)は、10世紀代の大きな集落跡であることが分かっている。大館野遺跡では、多くの竪穴住居跡や掘立柱建物跡の他に道路跡に伴うと思われる溝、井戸、製鉄炉が見つかっており、計画的に集落を形成していたことが分かる。また本遺跡の周辺には、同じく平安時代の遺跡である狼穴遺跡(２)、狼穴Ⅱ遺跡(３)、狼穴Ⅲ遺跡(４)、狼穴Ⅳ遺跡(５)、釈迦内中台Ⅱ遺跡(11)、坂下Ⅱ遺跡(７)、野崎遺跡(８)があり、いずれも乱川に面した台地の縁に位置している。



第 3 図　釈迦内中台Ⅰ遺跡と周辺遺跡

第１表　釈迦内中台Ⅰ遺跡と周辺遺跡

番号	遺跡名	時　　代	番号	遺跡名	時　　代
1	釈迦内中台Ⅰ	縄文・弥生・平安	36	釈迦池	縄文・弥生
2	狼穴	縄文・平安	37	大茂内	縄文
3	狼穴Ⅱ	縄文・平安	38	諏訪台Ｄ	縄文
4	狼穴Ⅲ	縄文・平安	39	諏訪台	縄文・弥生・平安
5	狼穴Ⅳ	縄文・平安	40	小茂内沢	縄文
6	坂下Ⅰ	不明	41	蛇沢口	縄文・古代
7	坂下Ⅱ	縄文・平安	42	塚ノ下	縄文・平安
8	野崎	縄文・平安	43	茂内	縄文
9	谷地中	縄文	44	鬼ヶ城	中世
10	二ツ森Ⅱ	縄文・弥生	45	玉林寺跡	縄文・中世
11	釈迦内中台Ⅱ	平安	46	宮袋	縄文
12	二ツ森	縄文・古代	47	岩神	縄文
13	芝谷地湿原	天然記念物	48	青嵐亭跡	庭園
14	福館Ⅱ	古代	49	金坂	古代・中世
15	福館橋桁野	縄文・古代	50	大館城	中世
16	福館	中世	51	土飛山館	平安・古代
17	橋桁	縄文	52	片山館コ	続縄文・中世
18	大館野	平安	53	根下戸Ⅲ	縄文
19	白沢古館	古代・中世	54	根下戸Ⅱ	縄文
20	根井下	縄文	55	根下戸Ⅰ	縄文
21	十三森	縄文・古代・中世	56	稲荷中岱	古代・中世
22	七ッ館	縄文・古代・中世	57	太平山	縄文
23	花岡城・神山	古代・中世	58	小館町	縄文
24	松峰	古代・中世	59	小館花館	古代・中世
25	大山板碑	中世	60	ザリガニ生息地	天然記念物
26	高館	中世	61	扇田道下	縄文・古代
27	松木高館平	旧石器	62	扇田道上	古代
28	松木	縄文	63	萩ノ台Ⅱ	縄文
29	鍛冶屋敷	縄文・古代	64	萩ノ台Ⅰ	縄文
30	下堤沢	古代	65	池内	縄文・平安
31	釈迦内古館	中世	66	上野	縄文・平安
32	釈迦内館	中世	67	餌釣館	縄文・平安
33	芦田子上岱	縄文・古代	68	餌釣	縄文・平安・中世
34	田ノ沢	縄文	69	山館	平安・中世
35	田ノ沢山	縄文	70	山館上ノ山	縄文・平安

《参考文献》

秋田県　『土地分類基本調査　大館』　1986(昭和61)年

秋田県教育委員会　『秋田県遺跡地図(県北版)』　1991(平成３)年

大館市教育委員会　『秋田県大館市遺跡詳細分布調査報告書』　1990(平成２)年

大館市編纂委員会　『大館市　第１巻』　1979(昭和54)年

大館市編纂委員会　『大館市の歴史』　1992(平成４)年

第３章　発掘調査の概要

第１節　遺跡の概観

釈迦内中台Ⅰ遺跡は、下内川と乱川に挟まれた釈迦内台地に所在する。釈迦内台地は北東から南西へ緩く傾斜し、小さな沢により複雑に開析されて幾つもの舌状台地が形成されている。本遺跡もそういった舌状台地の上に立地する。４年間の調査範囲はこの舌状台地の南東縁に沿っており、これは想定される釈迦内中台Ⅰ遺跡の範囲の南東部に当たる。調査範囲の地形は、火砕流台地に相当する平坦部と、残丘に相当する丘陵部に分けられ、前者には平安時代の竪穴住居跡群を初め、縄文時代の陥し穴や弥生時代の墓跡が展開している。なお平安時代の竪穴住居跡群は、北西側調査区外へ連続すると考えられる。後者には主に平安時代の製鉄関連遺構が分布している。本遺跡地内の利用が最も頻繁であった平安時代には、台地上部の平坦面を居住域、丘陵部の主に乱川に面した斜面を利用した製鉄関連の工房域として、大きく２分される地形を使い分けて集落を経営していたことが、今回の調査で明らかになった。

第２節　調査の方法

表土の除去はバックホーにより、残存状態が良好な所ではⅡ層上面まで、削平されている所ではⅤ・Ⅵ層までの深さでⅠ層を除去した。遺構精査、Ⅳ層の粗掘りは移植・スコップ等を使用して人力で作業を行った。排土運搬は人力またはベルトコンベヤーを用いて排土を投棄した。排土置き場は初年度には調査区南西側を、その後は調査終了範囲を利用した。

計画的な調査と遺構・遺物の検出地点を把握するため、グリッド法を採用した。設定方法は調査区に設置されていた一般国道７号大館西道路建設の道路中心杭(ＳＴＡ285＋00、Ｘ＝33884.4812、Ｙ＝－21794.8393)をグリッド原点ＭＡとして、この杭から国家座標第Ⅹ系座標北を求め、このラインを南北基線、これに直交するラインを東西基線とした。この東西南北に沿って４×４ｍのグリッドを設定し、グリッド原点ＭＡ50を起点に、東西方向には東から西へ４ｍごとに「ＬＦ・ＬＧ・・・ＬＴ・ＭＡ・ＭＢ・・・ＭＳ・ＭＴ」という２文字のアルファベットを、南北方向には南から北へ４ｍごとに「39・40・・・48・49・50・・・69・70」という２桁の数字を与え、このアルファベットと数字の組み合わせからなる記号を各グリッドの名称とした。なお、グリッド杭は４ｍ間隔の東西基線と南北基線の交点全てに打設し、前記のグリッド名称を南東隅の杭に記入した。

調査の記録は、平面図・断面図及び写真で記録化した。平面図・断面図の縮尺は１/20を原則としたが、遺構細部の図面を必要とする際には１/10で作図した。写真撮影は、35㎜のモノクロ、リバーサル、カラーフィルム及び、デジタルカメラを使用した。

遺物は、遺構内出土のものは出土遺構名・出土層位・遺物番号・出土年月日を記入し、遺構外出土のものは出土グリッド・出土層位・遺物番号・出土年月日を記入したラベルとともに取り上げた。遺構内出土のものは、適宜出土地点の位置を記録した。

第３節　調査の経過

平成13(2001)年度

【第１週】７月３日(火)～６日(金)

発掘調査開始。駐車場ヤードが確保できるまで狼穴Ⅱ遺跡付近の工事用造成地を代替ヤードとして利用し、調査機材の搬入、調査区内及びコンテナハウス・ヤードの草刈りや道路杭の保護、用水路の補修等の環境整備を進める。同時に2000年度に実施した確認調査時のトレンチ精査を行う。埋没谷となる北側のトレンチ壁面で十和田ａ火山灰層と推定される白色層の水平堆積を確認した。

【第２週】７月９日(月)～13日(金)

確認調査時の各トレンチの拡張、掘り下げ、精査を進めると共に調査区南端の表土除去(以下、「表土除去」とは第Ⅰ層のことを指す)を行う。また確認調査時のトレンチ壁面の写真撮影、土層実測を行う。遺構確認面を黒色土中(第Ⅳ層)と地山漸移層(第Ⅴ層)の２面とする。調査区北側の埋没谷で十和田ａ火山灰と推定される火山灰層を確認したが、調査区中央平坦部ではプライマリーな層が検出されない。古代の人為的な撹拌を受けた結果と判断。検出が予想される遺構群はこの火山灰より上位からの掘り込みが予測される。週の後半は確認調査時の確認遺構の精査やグリッド杭の打設を開始。

【第３週】７月16日(月)～19日(木)

前週に引き続き表土除去、トレンチ及び土坑の精査、基本層位の実測を進める。調査区西側において古代集落跡を区画する南北に延びる、幅の広い溝跡を確認。16日、所長が安全衛生指導のため来跡。17日、国土交通省側が排土置き場の土留め柵設置と駐車場造成に着手し、翌18日に完了。

【第４週】７月23日(月)～27日(金)

南西側へ表土除去を進める過程で、南西端より土坑、柱穴様ピット、溝跡等を検出し精査を始める。南西端にある確認調査時のトレンチ精査の結果、大規模な土取りにより遺跡西端は完全に失われていることが明らかとなった。ＮＡ31グリッド付近で検出した２基の土坑は形態的に類似し、何らかの関係性があることが予測されたため、周囲の精査を行う。ＭＯ43グリッド付近より竪穴住居跡を検出。遺構の多くが堆積土に地山土塊を多く混入するため、黒色土中でも比較的容易に検出できる。週後半は調査区東側へ表土除去を進める。東側では竪穴住居跡が複数切り合っている状況を確認した。

【第５週】７月30日(月)～８月３日(金)

竪穴住居跡、土坑、柱穴様ピット、溝跡の調査を進める。調査区東側で長く延びる溝跡を検出。複数確認された竪穴住居跡は風倒木痕と重複する傾向にあることが窺えた。確認調査の結果と若干異なり、調査区全面に竪穴住居跡が広く分布することが明らかとなった。調査区西端36グリッド分の調査を終了する。30日～１日、鷹巣農林高校の実習生５名が遺跡見学のため来跡。

【第６週】８月６日(月)～９日(木)

調査区西側の精査及び東側の表土除去や、調査区東端の住居群の把握に努める。調査区中央北端で昭和初期のゴミ穴と馬の墓を確認。ＳＩ52で鉄製品が複数出土。９日、十和田ａ火山灰と考えられる土壌サンプルを委託先の業者に郵送。また調査の傍ら、夏季休暇に備えた環境整備を行う。

【第７週】８月20日(月)～24日(金)

調査区中央部の表土除去に着手。ＭＳ41・42グリッド付近の竪穴住居跡群の大まかな切り合い関係

を把握。21日、台風対策のための環境整備。24日、小坂高校の教諭及び生徒が遺跡見学のため来跡。

【第８週】８月27日(月)～８月31日(金)

竪穴住居跡群の分布範囲の明確化にむけ、遺構分布の粗密の把握に努めた。竪穴住居跡の切り合いが少ない調査区中央～西側の精査を進め、東端の竪穴住居跡群は黒色土中で重複関係を把握するよう丁寧に精査した。この際、検出面での把握が困難な場合はサブトレンチを利用した。竪穴住居跡のうち、比較的切り合い関係の把握が容易なＳＩ86～88を先行して調査に着手。また、竪穴住居跡の貼床下部で掘形の工具痕を確認できる場合が多く、慎重に調査して記録化した。

【第９週】９月３日(月)～７日(金)

北東隅で複数の竪穴住居跡群を検出したため、東側へ調査範囲を拡張しながら精査を進めたが、今年度の調査期間内に、これら全ての遺構を精査終了させることは困難と判断した。竪穴住居跡(ＳＩ52)は焼失家屋であることを確認した。本遺構の床直上から鉄鋤が出土。調査区西側で掘立柱建物跡を構成すると予測される複数の柱穴様ピット群の精査を進める。

【第10週】９月10日(月)～14日(金)

雨天が続き、調査以外に出土遺物や図面の整理も進めた。先週に引き続き、竪穴住居跡や掘立柱建物跡の精査、調査区北東端の拡張を行う。調査区西側の竪穴住居跡群はほぼ精査を完了し、上位確認面である黒色土(第Ⅳ層)を地山層(第Ⅵ層)まで掘削し始める。

【第11週】９月18日(火)～21日(金)

先週に引き続き遺構の精査を進める。今年度調査区内では、遺構検出を概ね終えた。東側の竪穴住居跡群の切り合い関係を把握しながら調査を進める。18日、調査の進捗状況確認のため文化財保護室の泉田学芸主事が来跡。

【第12週】９月25日(火)～28日(金)

調査区北東隅を拡張しながら、切り合い関係をもつ竪穴住居跡群(ＳＩ34・35)の精査に着手する。

【第13週】10月１日(月)～５日(金)

雨天が続いたため、調査と併せて図面・写真・遺物の整理を進める。東側へ最終的な拡張を行い、便宜的にグリッド杭を結んで今年度の調査範囲の東端を決定した。空中写真撮影の準備に着手する。２日、所長が現場視察のため来跡。

【第14週】10月９日(火)～12日(金)

予定の空撮が、天候不順により翌週へ延期したので、竪穴住居跡を中心に精査を進め、表土が残る調査区西端の土取り部分を地山層まで掘削。また、精査終了範囲の地山直上面での最終精査を行う。

【第15週】10月15日(月)～19日(金)

15日空撮のための精査。16日空撮。空撮後、作業員に対して現在までの調査成果についての説明会を行う。18日以降、竪穴住居跡を中心として完掘状況の写真撮影を優先的に行う。また、竪穴住居跡周辺の確認面である黒色土(第Ⅳ層)を地山層(第Ⅵ層)まで掘削し始める。

【第16週】10月22日(月)～26日(金)

遺構の掘削はほぼ終了し、精査及び完掘図面の作成を進める。また、遺構配置図を作成して調査区全体の遺構群の最終的な点検と把握に努める。24日、大館市教育委員会教育長と大館郷土博物館長が遺跡見学のため来跡。25日、庄司社会保険事務所の説明会を作業員対象に行う。

【第17週】10月29日(月)～31日(水)

29日、釈迦内小学校６年生が遺跡見学のため来跡。今年度調査範囲の遺構精査を完了し、次年度への引き継ぎ範囲をシートで覆い環境整備を行う。31日、当センター所長来跡、2001年度分の調査を予定通り終了する。

平成14(2002)年度

【第１週】８月１日(木)～２日(金)

発掘機材を搬入し、調査区の環境整備(草刈り、危険箇所への保護柵や看板設置など)を行った。

【第２週】８月５日(月)～９日(金)

先週に引き続き環境整備を行いつつ、地山面の露出している箇所で検出作業を行った。

【第３週】８月19日(月)～23日(金)

週の前半で諸々の環境整備を終わらせて、本格的な遺構精査作業を開始した。掘立柱建物跡を１棟検出した。

【第４週】８月26日(月)～29日(木)

調査区中央部で、竪穴住居跡19軒を検出。うち４軒と掘立柱建物跡１棟の精査を開始した。

【第５週】９月２日(月)～６日(金)

週の前半からバックホー１台とクローラーダンプを投入して、表土及び盛土の除去作業を開始した。先週から引き続き、調査区中央部では遺構精査・図化作業を行う。

【第６週】９月９日(月)～13日(金)

重機による表土除去と、遺構検出作業、遺構精査及び図化作業を並行して行う。

【第７週】９月18日(水)～20日(金)

ようやく重機による表土除去が終了し、第Ⅳ層黒色土上面で43軒の住居跡を確認した。予定期間に対して明らかに遺構数が多いため、次年度繰越しの考えをかためる。調査区中央部では、引き続き遺構精査と図化作業を行った。

【第８週】９月24日(火)～27日(金)

継続的に竪穴住居跡の精査・図化作業を行うが、重複する住居跡が多く作業が難航する。なお比較的残存状態の良い竪穴住居跡からは、鉄製品が多く出土する傾向をつかむ。

【第９週】９月30日(水)～10月４日(金)

引き続き竪穴住居跡の精査・図化作業を主体に作業を進め、遺構精査の完了した地点から、平安時代の遺構検出面である第Ⅳ層を掘下げ、第Ⅳ層以下での遺構検出作業を開始する。なおＳＩ18で、スロープ状粘土下部から、３個の小型土器を検出した。10月５日には予定通り遺跡見学会を実施し、111名が来跡した。

【第10週】10月７日(月)～10月９日(水)

週の半ばの空撮に向けた清掃作業と、遺構精査・図化作業を並行して行う。10月８日に無事空撮を完了し、９日には本年度分の調査を終えた。また、次年度繰越調査範囲について、国土交通省担当者を交えて現地協議を行い、遺構養生のシートをはり、安全対策を講じると共に、周辺住民への周知を図った。

平成15(2003)年度

【第１週】５月15日(木)～16日(金)

調査機材搬入や環境整備を行う。2002年度調査から引き継いだ部分の精査を開始。確認調査時のトレンチに再堆積した土を除去して、基本層位観察用の壁面を精査、グリッド杭の打設を開始した。

【第２週】５月19日(月)～23日(金)

６月第１週から重機による表土除去を行うため、先行して基本層位の把握に努めながら、2002年度調査区西端から、焼失家屋などの竪穴住居跡の調査に着手する。表土除去が終了するまでグリッド杭の打設を中断する。

【第３週】５月26日(月)～30日(金)

2002年度からの引き継ぎ部分にある竪穴住居跡30軒のうち、６軒を完掘した。竪穴住居跡には鍛冶炉を持つものが３軒確認され、鉄製品もまとまった出土がみられる。調査区北側の基本層位の観察により、竪穴住居跡群は十和田ａ火山灰(第Ⅲ層)より上位から掘り込まれていることを確認した。

【第４週】６月２日(月)～６日(金)

調査区南東部斜面と谷から東側台地上に至る3,100㎡を対象に、重機による表土除去を行う。これと並行して前年度引き継ぎ部分の竪穴住居跡の精査及び基本層位の記録を継続して進める。

【第５週】６月９日(月)～13日(金)

前週に引き続いて、遺構の精査および重機による表土除去を行う。表土除去の過程で、調査区南側斜面から谷部にかけて炉壁・椀形滓・鉄滓が２×２ｍの範囲に集中して出土した。安全確保のため重機と作業員の動線を分離して作業を進める。

【第６週】６月16日(月)～19日(木)

16日に重機による表土除去を終了。グリッド杭の打設を再開する。竪穴住居跡内で鉄塊系遺物や鍛造剥片を検出したため、25cmメッシュを設定し、深さ５cmずつ掘って篩にかけながら調査を進める。台風の接近に伴い環境整備を万全にする。

【第７週】６月23日(月)～27日(金)

引き継ぎ部分の精査以外に、台地上部平坦面を対象に人力による粗掘りに着手する。調査区南側斜面部及び谷部の断面図を作成する。

【第８週】６月30日(月)～７月４日(金)

引き継ぎ部分以外の調査区内で粗掘りが終了したため、遺構確認作業へ移行する。調査区南側の斜面部・谷部の断面図を作成。竪穴住居跡内の鍛冶炉から検出された鍛造剥片の水洗選別作業。27日、グリッド杭打設終了。梅雨入りにより精査が困難になるが、安全管理に努めながら作業を進める。

【第９週】７月７日(月)～11日(金)

竪穴住居跡の精査を中心に進める。竪穴住居跡の掘形やカマドの構築方法について詳細に観察・記録し、その傾向把握に努める。土坑から弥生式土器が倒立した状態で出土し、土坑内堆積土を水篩にかけたが、人骨やその他副葬品等は確認できなかった。前週に引き続き雨天日が続く。

【第10週】７月14日(月)～18日(金)

2002年度調査から引き継いだ部分の南側での調査は目処が立ち、北側へ移行する。併せて本年度調査区東側の調査に着手、排滓場の精査を開始する。排滓場の調査に当たって、確認面で検出した炉底

面を中心に４グリッドを50cmメッシュで分割し、深さ10cmごとに掘り下げて遺物の取り上げを行う。

【第11週】７月22日(火)～25日(金)

調査の主力を昨年度引き継ぎ部分から本年度調査区の中心へ移行する。排滓場の調査を継続する。竪穴住居跡内にある鍛冶炉は、25cmメッシュで分割して土壌サンプルをとりながら精査を進める。竪穴住居跡の拡張・縮小過程や切り合い関係について把握に努める。

【第12週】７月27日(月)～８月１日(金)

前週までの竪穴住居跡10軒の精査に加え、新たに２軒の竪穴住居跡の調査に着手する。調査区南東側の谷に大量の鉄滓が投げ込まれている状況を確認する。また、ＬＬ49～50グリッド付近に製鉄炉が存在する可能性が窺える。

【第13週】８月４日(月)～８日(金)

前週に引き続き、竪穴住居跡群および排滓場の精査を進める。遺構が多い上、それぞれが重複関係をもっているため、調査が難航する。調査工程の見直しをしながら作業の効率化を図る。

【第14週】８月18日(月)～22日(金)

ＬＰ47グリッド付近で、甕を中心とする大量の土師器が出土した。この地点では製鉄関連遺物は今のところほとんど出土していない。焼失家屋を調査し、住居の構造や埋没過程について観察をする。

【第15週】８月25日(月)～28日(木)

調査区南東部斜面の排滓場をようやく完掘する。また、これまでの竪穴住居跡の精査に引き続き、さらに２軒の竪穴住居跡の調査に着手する。

【第16週】９月１日(月)～５日(金)

継続調査の竪穴住居跡に加えて、新たに６軒の竪穴住居跡の調査に着手する。また、台地斜面の落ち際に製鉄炉を２基確認した。斜面の下には排滓場が展開する。９月20日に遺跡見学会を行うため、その準備にも徐々に取りかかる。

【第17週】９月８日(月)～12日(金)

前週に引き続き竪穴住居跡等の遺構精査を進めながら、文化財保護室の指示により遺跡東側の丘陵部分の6550㎡について、確認調査を行う。2000年度確認調査時のトレンチ精査の結果、丘陵の中腹部に「帯郭」状の平坦部を２段確認するなど、人為的造成の痕跡や遺構を全体的に確認した。

【第18週】９月16日(火)～20日(土)

竪穴住居跡精査と東側丘陵部での環境整備を継続する一方で、20日の遺跡見学会の準備を進める。丘陵部では下草刈り払い終了後、トレンチを設定して調査に着手する。20日に遺跡見学会を開催した。

【第19週】９月22日(月)～26日(金)

東側丘陵部のトレンチ調査で、竪穴住居跡、土坑、埋没谷、鉄滓等を検出し、遺構の広がりを把握する。遺構の広がりをさらに把握するために、確認調査時のトレンチの他、新たに複数のトレンチを設定して調査する。また丘陵部北東端では、「古道」と考えられる南北に走る溝跡を確認した。

【第20週】９月29日(月)～10月３日(金)

竪穴住居跡群の精査を継続。丘陵部南側の平坦面全面に渡って遺構を検出した。遺構数を確定するために、さらに詳細にトレンチを設定して調査を進める。今週は１時間ごとに土砂降りと休止が繰り返される不安定な天候が続く。

【第21週】10月６日(月)～９日(木)

今年度分の竪穴住居跡を完掘し、調査区北東側丘陵部分のトレンチ内の遺構検出範囲をシートで覆い埋め戻した。９日、今年度調査を終了する。

平成17(2005)年度調査

【第１週】７月４日(月)～８日(金)

初日は作業員の事務手続きと環境整備を行い、翌日から作業を本格的に開始した。前１ヶ月、バックホー２台体制で丘陵部の表土除去作業を行ったので、遺構検出作業から作業をスタートする。丘陵部には急傾斜地があるので、安全帯とロープを使って作業する。

【第２週】７月11日(月)～15日(金)

丘陵頂部から始めた検出作業も中腹に差し掛かり、中腹緩斜面で住居跡を３軒検出した。また、丘陵部南西斜面でも検出作業を開始するが、こちらは表土下すぐに岩盤が露出するため、遺構は確認できない。併せて基本土層図も作成した。

【第３週】７月19日(火)～22日(金)

丘陵部南東斜面から、麓へ向けて検出作業を進める。丘陵部南西斜面の検出作業を終えて平坦面の精査に入り、ＳＴ83を確認する。基本土層図作成が一段落したので、主に丘陵部を対象とした地形測量を始める。

【第４週】７月25日(月)～29日(金)

引き続き丘陵部南東斜面では、山麓緩斜面の検出作業を行い、製鉄遺構を検出し、確認写真撮影を行う。またＳＴ83の掘下げや地形測量も行った。この他週の半ば、台風により外作業を中断し、遺物洗浄作業に切り替える。以後、雨天日は遺物洗浄や鉄滓水洗別作業を行う。

【第５週】８月１日(月)～５日(金)

丘陵部南東斜面で遺構精査を開始する。また丘陵部北部で検出作業を開始し、新たに竪穴住居跡を確認した。台地上部平坦面では、ＳＴ83の掘り下げと併せて広く検出作業に着手。なお、今週で地形測量を終えた。

【第６週】８月８日(月)～10日(水)

丘陵部南東斜面で遺構精査を本格化させ、竪穴住居等を調査する。丘陵部北部での検出作業も概ね終了したので、台地上部平坦面の作業を一端中断し、丘陵部での遺構精査を中心に作業を進める。

【第７週】８月22日(月)～26日(金)

丘陵部での遺構精査を行う。主に竪穴住居跡を中心に作業を進める。丘陵部下部斜面は地山崩落土で埋まる遺構があるため、並行して精密な遺構検出作業を行い、新たに製鉄遺構を確認した。

【第８週】８月29日(月)～９月２日(金)

丘陵部で精査が完了する遺構がでてきたので、台地上部平坦面での精査も開始する。思いのほか遺構精査に時間がかかるため、複数同時並行で遺構精査を行うようにペース配分を変更する。

【第９週】９月５日(月)～９月９日(金)

丘陵部中腹緩斜面の遺構群精査に目処をつけ、台地上部平坦面の遺構精査を本格化させる。ＳＩ28が焼失家屋であることが判明する。

【第10週】９月12日(月)～９月16日(金)

丘陵部では竪穴住居跡以外の遺構精査を開始し、製鉄遺構にも着手。また排滓場の土壌サンプルを１ｍグリッドで取り上げる。

【第10週】９月20日(火)～９月22日(木)

丘陵部で精査が進むにつれ、新たに遺構を検出する。製鉄遺構の精査を本格化させて、排滓場では土壌サンプルを継続的に採取する。

【第11週】９月26日(月)～９月30日(金)

丘陵部では製鉄遺構の精査を主体に作業を行う。台地上部平坦面では、重複関係の新段階にある竪穴住居跡の精査を終わらせ、続きの竪穴住居跡の精査に移行する。

【第12週】10月３日(月)～10月７日(金)

丘陵部では製鉄遺構や排滓場の精査を、台地上部平坦面では竪穴住居跡の精査を継続する。また排滓場サンプルの洗浄のため、新たに作業員を雇う。

【第13週】10月11日(火)～10月14日(金)

丘陵部では製鉄遺構の精査を行い、炉体断ち割りなどを行う。また斜面部に散在する不規則な形状のＳＸも精査を行う。ＳＩ28では良好な炭化材を検出する。

【第14週】10月17日(月)～10月21日(金)

丘陵部では製鉄炉の炉体断ち割りや、ＳＸの精査を行う。また、急傾斜地に隠れていた竪穴住居跡ＳＩ58やＳＩ66の精査も開始する。

【第15週】10月24日(月)～10月28日(金)

丘陵部では製鉄遺構の精査の他、粘土採掘坑の精査も並行して行う。製鉄炉では、羽口装着孔が残っていることを確認した。26日には遺跡の空撮を行った。

【第16週】10月31日(月)～11月３日(木)

丘陵部及び台地上部平坦面では遺構精査を継続。11月３日には遺跡見学会を行い、83名が来跡した。

【第17週】11月７日(月)～11月11日(金)

雨がちのため、雨の合間を縫って製鉄遺構の記録作業を行う。概ね補足的な調査を残すのみとなるが、製鉄炉断ち割りの結果、下部から古段階の製鉄炉の残穴が確認され、急遽精査を行う。

【第18週】11月14日(月)～11月18日(金)

降雪に見舞われる中、遺構記録作業を終えて、現場撤収作業を行い無事調査を終了した。

第４節　整理作業の方法と経過

４か年の調査では、各年度ごとに個別の遺構番号を付けており、番号の重複を避けるため、通常の遺構略号の前に、調査年度の西暦下二桁とハイフンをつけて標記している(例2001年度調査の場合：01-ＳＩ21)。遺構の記述順も、基本的には01→02→03→05の順に掲載するが、重複する遺構の場合、重複遺構の連続性を重視するため、若い数字の遺構の次に大きな番号の遺構を掲載した。中には年度を跨いで掲載している場合もある。遺構関連の整理作業では、遺構調査段階で作製した原図をもとに、平面図・断面図の組み合わせで製図、レイアウトした。原則、遺構図は１/40縮尺で、カマドや焼土

遺構は 1 /20縮尺だが、版面に収まらないものは別縮尺で図示した。また遺構内出土遺物は、出土遺構との関連性重視の観点から極力図示した。なお住居規模の分類では、八木光則氏の分類(八木2006)(超大形－60㎡以上・ 4 本柱、特大形－40～60㎡・ 4 本柱、大形－25～40㎡・柱なし在り、中形－15～25㎡・柱ほとんどなし、小形－15㎡以下・柱なし)に則った。

遺物分類に当たっては、各遺物全点観察を行い、種別に漏れが生じないように注意した。このため今回の報告では、本遺跡の遺物相が最低限確保されていると思われる。また2000年度に行った遺跡の確認調査で出土している遺物も、一部本調査で出土した遺物との接合なども存在するため、基本的には遺構外遺物として掲載している。

土器については、可能な限り推定口径を復元して実測を行った。その結果、本来の形態とは異質な表現で報告する危険性が高いのは否めないが、形態復元を優先させている。このため、実物は復元されていないものがあり、写真と挿図では状態が一致しないものがある。また土器破片の分類では、胎土・焼成・原体・調整の種類等からできるだけ同一個体を抜き出し、別個体と思われる資料を報告書掲載資料として抽出した。これを原則とするが、特異な資料については複数図示したものもある。

鉄製品については極力錆を落とし、本来の形状を可能な限り把握して、復元的に実測している。

鉄関連遺物は、現場でその出土が確認できる地点の把握後、範囲内の土壌を個別に細別グリッドを設けて取り上げ、目の細かいザルを用いて水洗別を行った。また鍛造剥片などの微細遺物を見逃さないために乾燥後に磁着チェックも行った。

鉄関連遺物は数量が多いため、実測図は遺構ごとに代表的なものをピックアップして掲載した。なお、各遺物の図示形態は、炉壁が排出孔正面を軸にして、左壁と見た場合は内面の図を右側に、右壁と見た場合にはその逆に展開させて図示した。鉄滓は基本的に流出方向を下にして上面から見た位置を正面に据え、片側側面を併せて図示している。ただ小割りが顕著な炉底塊などは 2 側面掲載している。なお、炉内滓など表面の残りが少ない鉄滓の場合にはこの限りではない。

縄文土器、弥生土器、石器は出土点数が少なく、出土したもののほとんどを掲載している。

第 5 章の自然科学的分析の編集に当たっては、執筆者の主意や表現に関わる点での校正は行わず、誤字・脱字や挿図・表・図版番号等の統一にとどめた。ただし、報告書紙数の制限のため、挿図・表・図版については、一部サイズを縮小したものがある。

第 5 節　遺物の分類

1　土器・陶磁器類

Ⅰ群　縄文時代・弥生時代

縄文時代早期～後期、弥生時代の遺物の出土は極めて少なく、時期や型式名は個別に掲載した。

Ⅱ群　平安時代

焼成種別では土師器と須恵器が出土している。基本的に器種分類にとどめているが、出土量の多い土師器の甕・坏については細分類している。なお径が10cmを下回る酸化焔焼成の容器は、小型土器として土製品と同列で扱った。

土師器

甕：整形技法と頸部形状で以下の４類に大別できる。なお口径が16cm未満のものを比較的小型、16cm以上のものを比較的中・大型として区分している。

Ａ類　ロクロナデまたはロクロナデ様のほぼ平行な横ナデをとどめるもの

Ｂ類　非ロクロ整形で頸部に有段のくびれをもつもの

Ｃ類　非ロクロ整形で頸部のくびれが段にならないもの

Ｄ類　非ロクロ整形で頸部にくびれを有さないもの

坏：整形技法と内面黒色処理で以下の４類に大別できる。

Ａ類　内面にミガキと黒色処理を施さないもの(いわゆる赤焼)

Ｂ類　内面にミガキと黒色処理を施すもの

Ｃ類　内面にミガキを施すが黒色処理は認められないもの

Ｄ類　非ロクロ整形のもの

椀：確実なもので１点のみ確認している。

鍋：ロクロナデ様のナデをとどめるものと、非ロクロ整形のものがある。

甑：ほとんどが破片で出土しているため、甑として抜き出せなかったものが多いと考えられる。

壺：明確に全体像を窺えるものは皆無で、極めて径の小さい口縁部破片のみ分類している。

把手付土器：出土点数が極めて少ないため分類は行っていない。明らかなものでは中実のものと、橋状把手のものが認められる。

須恵器

壺：本遺跡出土の須恵器の中では最も出土量が多い器種である。

坏：破片が数点出土している。

甕：大型と小型に分けられる。小型のものは鉢と呼ばれることもあるが、本報告では小型甕として統一した。なお大型のものでは、全体像を窺える資料はほとんどない。

Ⅲ群　中世以降

基本的に中世の陶磁器類は出土していない。近世以降の陶磁器片が散見される程度である。

２　土製品・石器・石製品

いずれも出土量が少ないので器種分類にとどめている。土製品で確認できるのは、平安時代の小型土器、土錘、土玉、近世の用途不明のものである。石器は基本的に縄文時代に属するもので、石鏃、石匙、石槍、石篦、スクレーパーなどの器種が認められる。石製品で確認できるのは、平安時代の砥石と石帯である。

３　鉄製品

基本的に器種分類のみである。確認できた器種は、刀・鞘金具・馬具(轡)・刀子・鏃・鈁・穂摘具・紡錘車・鉄鍋等である。出土品の多くは破片で、明確に器種分類ができない棒状のものが多い。

４　製鉄関連遺物

炉壁・羽口・鉄滓の３種に大別できる。炉壁については、使用粘土に含まれるスサなどの混入物により細別は可能だが、大きくは製鉄炉ごとの差異に帰属することや、分類基準が曖昧になるため、全体に関わる細分は行わなかった。羽口も形状差は認められるが、全体像を窺える資料に乏しく分類は行っていない。鉄滓については今回の調査で確認できたものを、既刊の製鉄関連遺跡報告書を参考にして、主に形状によって以下のように分類した。

炉内滓：本来炉内で形成された鉄滓全般を指す用語だが、今回は流動形状をとどめないものに限定して使用した。このため、炉壁内面に付着した鉄滓の破片や、炉底塊の外皮に近い錆を含む破片を多く分類してある。なお、炉壁等に付着する黒いガラス質を含むものは流動形状のものも含めている。

炉底塊：各種炉の底部に形成された鉄滓で、大型で横位断面形状が半円形になるものを基本とした。上部表面に滞留形状を残すものや、小割り状の割れ口を多く持つものを含めている。

流出孔滓：製鉄炉等の炉壁に穿った排出孔の内部でとどまった鉄滓で、断面円形や多角形の想定される排出孔の形状を残し、側面に炉壁粒や砂粒が付着するものを基本とした。顕著にこの特徴をもつものは極めて少ない。なお、上流部に狭い断面形状をもつものも、流出孔に近いものとして扱っている。

流出溝滓：製鉄炉の炉外に配置する排出溝でとどまった鉄滓で、断面Ｕ字形で側面に砂粒や小礫が付着するのものを基本とした。この特徴を有する鉄滓も極めて少ない。

流動滓：当初は炉外滓を指す分類項目として設けたが、炉内の流動形状を残すものを含む可能性が高いことから、総じて流動滓とした。ただしその多くは、排出孔下部の排滓場から地表面を伝って、炉外に排出した時の流れ筋をとどめるものである。なお、再結合滓を含んだ分類になっている。

単位流動滓：上記流動滓の末端部で放射状に枝分かれした鉄滓で、細く１・２条の流れ筋のものを基本としている。

鉄塊系遺物：原料から木炭などの還元剤によって分離した、鉄滓混じりの第一工程で生成されたもののうち、滓分の少ないもので、今回の分類では基準磁石に完全に磁着するものを基本とした。なお、磁着力による細分は行っていない。

羽口：フイゴからの送風管で、土製筒形のものである。

砂鉄：天然の砂粒状酸化鉄で、遺跡地内斜面部に一部鉄錆層も認められるが、基本的には純粋層は存在しないため、遺跡外部から持ち込んだと考えられる。

鍛冶滓：鍛冶作業で発生する鉄滓の総称だが、ここでは主に鍛冶炉底面に形成される椀形滓を指す。基本的に上面円形で、断面半円形のものを分類した。

鍛造剥片：鍛冶作業において発生する剥片状のもので、大きくても１cmを下回る長さだが、今回の調査での出土は少ない。

粒状滓：鍛冶作業の際に飛び散る滓分が、空気中で球状に固化したもので、出土量は極めて少ない。

《参考文献》

秋田県教育員会　『小林遺跡Ⅱ　平安時代・中世編』秋田県文化財調査報告書第376集　2004(平成16)年

八木光則　「北上盆地からみた東北北部の古代社会」『北の防御性集落と激動の時代』　2006(平成18)年

第４章　調査の記録

第１節　基本層序

ＮＦ31～ＭＪ41グリッドのＡ－Ａ´、ＬＣ72～ＫＬ67グリッドのＢ－Ｂ´、ＬＩ65～ＬＭ63グリッドのＣ－Ｃ´ラインの３か所(付図)の基本土層を４図に掲載した。各年度調査範囲ごとにわずかな堆積土層の違いはあるが、調査区南西端から調査区北東端まで統一した注記にしてある。

集落の展開する台地上部平坦面では基本的にⅥ層が地山で、丘陵部斜面においてⅦ層以下が露頭する。台地上部平坦面では、平成14年度調査範囲より南西側では後世の土採りが深く、多くの部分でⅡ～Ⅳ層が失われている。丘陵部の堆積土は不均一で、上部斜面では基盤岩から砂礫層が主体で、中腹緩斜面からⅥ層以下が堆積する。これは火砕流台地の形成面が、中腹緩斜面に相当することによるとみられる。Ⅷ層以下は白色系粘土、赤色系粘土、砂の順で互層になる。なおⅩⅣ層以下砂礫層までは、本来はより多くの堆積土層が存在すると考えられる。今回の調査区斜面で確認できたのがⅩⅣ層までで、砂礫層と連続して水平堆積するものではない。

第Ⅰ層　表土：現表土であり、台地上部平坦面では耕作や土採りによる撹乱層で、丘陵部では薄く腐葉土層で構成される。

第Ⅱ層　黒色土(10YR2/1)：十和田ａ上部の腐植土層。場所により層厚に差が有り、細分できる。

第Ⅲ層　黄褐色砂(2.5Y5/4)：十和田ａ火山灰に相当する火山灰層。調査区内で純粋層は少ない。

第Ⅳ層　黒色土(10YR2/1)：十和田ａ直下の腐植土層。実質的な遺構確認面になる。丘陵部ではやや明るみが増して、黒褐色土になる。

第Ⅴ層　褐灰色土(10YR4/1)：腐植土層と地山層の漸位層。場所により黒色が強い。

第Ⅵ層　明黄褐色砂(10YR6/8)：地山層の最上面で、場所により土や粘土を含む。最終的な遺構検出面で、以下は基本的に無遺物層である。

第Ⅶａ層　黄褐色土(2.5Y5/3)：丘陵部のみに分布する崩落層で、本来はⅥ層上部堆積物である。

第Ⅶｂ層　明黄褐色土(10YR6/6)：性質はⅦａ層と同じで、色調の違いで分けた。

第Ⅷ層　浅黄橙色粘土(10YR8/4)：粘土層。見た目白色系の色調でカマドや製鉄炉の部材に用いられる。

第Ⅸ層　明褐色粘土(7.5YR5/6)：赤色系の粘土層。Ⅷ層に比べ砂の含有量が多い。

第Ⅹ層　明黄褐色砂(10YR6/6)：砂層。

第ⅩⅠ層　にぶい黄橙色粘土(10YR7/4)：白色系の粘土層。

第ⅩⅡ層　明黄褐色粘土(10YR6/8)：赤色系の粘土層。

第ⅩⅢ層　明黄褐色砂(10YR6/6)：砂層。

第ⅩⅣ層　浅黄色粘土(2.5Y7/3)：白色系粘土層。

砂礫層　黄褐色砂(2.5Y5/4)：基盤岩直上の礫を多量に含む砂層。風化した基盤岩崩落礫を含む。

基盤岩　灰白色(2.5Y7/1)：残丘である丘陵部頂上付近で露頭する。

第 2 節　縄文・弥生時代の遺構と遺物

1　検出遺構と遺物

明確に縄文時代または弥生時代として抜き出せた遺構は少なく、縄文時代では陥し穴を 6 基、弥生時代では土坑 1 基を確認したのみである。陥し穴は、本遺跡の立地する北東から南西方向へと延びる舌状台地の傾斜の変わり目を取り囲むように配置する傾向にあり、軸方位が一致するものもあることなどから、比較的近い時期に構築したものと考えられる。その時期は、出土遺物がないため判然としないが、縄文時代の中でも遺物の出土量が多い、前期～後期にかけてと考えられる。弥生時代の遺構はより少なく、土坑を 1 基のみ確認できた。

(1)陥し穴

01-ＳＫＴ148(第 5 図、図版 9)

遺　構　ＭＰ31・32、ＭＱ31・32グリッドの第Ⅴ層中位～第Ⅵ層上面で確認した。本遺構の立地点は、台地上部平坦面の南東縁に近く、周辺地形はやや南東へ傾斜する。01-ＳＫＰ177が本遺構を掘り込む以外に重複する遺構はない。縄文時代の遺構で最も近いのは、東へ約14ｍの地点にある01-ＳＫＴ406である。

堆積土は 7 層に分けた。底面付近に堆積する壁面崩落土とみられる 5 ・ 6 層の状況から、比較的早い段階で壁の肩部が崩れ、その後上部に黒色土が自然に堆積したと考えられる。平面形は長径が極端に長い楕円形で、開口部長径約3.2ｍ、開口部短径約0.9ｍ、底面長径約2.5ｍ、底面短径約0.45ｍ、検出面からの深さ約1.2ｍである。壁上部は全周崩落しているとみられ、開口部径のほうが底面径よりも長い残存状態である。両壁はほぼ垂直に立ち上がり、底面はほぼ平坦である。

本遺構は、長径が極端に長い楕円形の陥し穴である。

遺　物(第 5 図)　堆積土上部から土師器坏が 1 点出土しているが、本遺構上部に及んだ平安時代の造成土に含まれるものと考えられる。

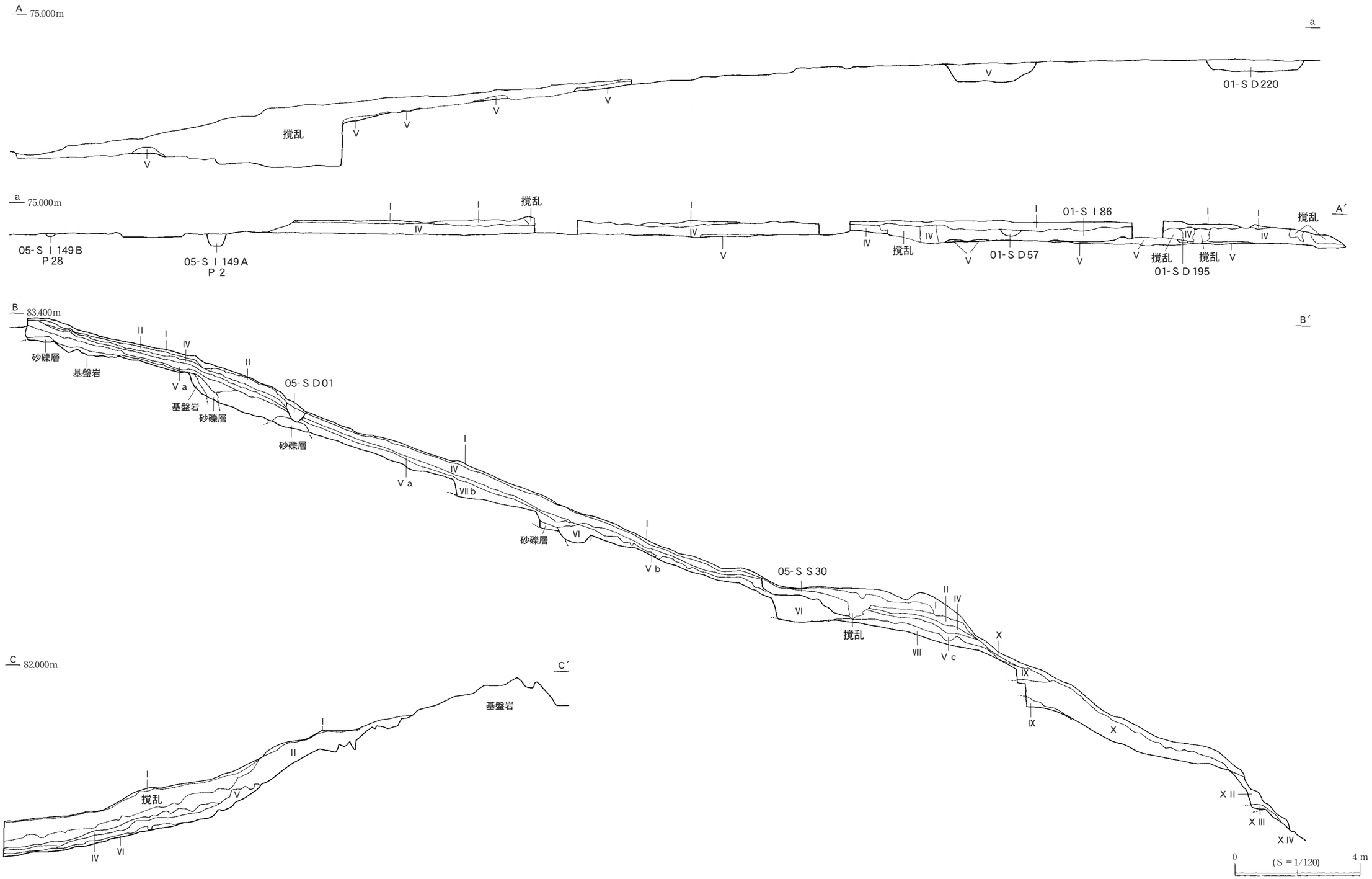
01-ＳＫＴ358(第 5 図、図版 9)

遺　構　ＭＱ40・41グリッドの第Ⅴ層中位～第Ⅵ層上面で確認した。本遺構の立地点は、台地上部平坦面の中央部で、周辺地形はほとんど傾斜がない。重複する遺構はなく、縄文時代の遺構で最も近いのは、北東へ約14ｍの地点にある02-ＳＫＴ01である。

堆積土は 2 層に分けた。いずれも黒色の自然堆積土である。平面形は長径が極端に長い楕円形で、開口部長径約3.5ｍ、開口部短径約0.4ｍ、底面長径約3.7ｍ、底面短径0.15ｍ、検出面からの深さ約1.0ｍである。堆積土の状態から壁の残りは比較的良い。長径は、開口部より底面の方が長く、短径では開口部の幅が広くなっている。南西端はオーバーハングするが、北東端、両壁ともにほぼ垂直に立ち上がる。底面はほぼ平坦である。

本遺構は、長径が極端に長い楕円形の陥し穴である。

遺　物　本遺構からは遺物が出土しなかった。


A 75.000m
a
01-ＳＤ220
撹乱
a 75.000m
A′
05-ＳＩ149Ｂ
Ｐ28
05-ＳＩ149Ａ
Ｐ２
01-ＳＩ86
01-ＳＤ57
01-ＳＤ195
B 83.400m
B′
砂礫層
基盤岩
05-ＳＤ01
05-ＳＳ30
C 82.000m
C′
0
(Ｓ＝1/120)
4 m

第４図　基本土層

01-ＳＫＴ363(第５図、図版９)

遺　構　ＭＴ34・35グリッドの01-ＳＩ149床面及び、01-ＳＤ220斜面で確認した。本遺構の立地点は、台地上部平坦面の南西端に近く、周辺地形は緩やかに南西へ傾斜する。01-ＳＩ149や01-ＳＤ220により上部を削平されていると考えられる。縄文時代の遺構で最も近いのは、南東へ約17ｍの地点にある01-ＳＫＴ148である。

堆積土は１層のみで、黒色の自然堆積土である。平面形は長径が極端に長い楕円形で、開口部長径約3.8ｍ、開口部短径約0.3ｍ、底面長径約4.0ｍ、底面短径約0.1ｍ、検出面からの深さは最深部で約0.5ｍである。長径は、開口部より底面の方が長く、短径では開口部の幅が広くなっている。北端と南端は共にオーバーハングして、両壁はほぼ垂直に立ち上がり、底面はほぼ平坦である。

本遺構は、長径が極端に長い楕円形状の陥し穴である。

遺　物　本遺構からは遺物が出土しなかった。

01-ＳＫＴ406(第６図、図版９)

遺　構　ＭＭ33、ＭＮ33グリッドの第Ⅵ層上面及び、01-ＳＫ431、01-ＳＤ404底面で確認した。本遺構の立地点は、台地上部平坦面の南東縁に近く、周辺地形は緩やかに南東へ傾斜する。半分以上を平安時代の遺構で破壊されている。縄文時代の遺構で最も近いのは、西へ約14ｍの地点にある01-ＳＫＴ148である。

残存していた堆積土は１層のみで、黒色の自然堆積土である。大部分が破壊されているため、平面形や規模は不明だが、おそらく長径が極端に長い楕円形だったと想定される、検出面からの深さは最深部で約0.7ｍである。両壁はほぼ垂直に立ち上がり、底面はほぼ平坦である。

本遺構は、長径が極端に長い楕円形状の陥し穴と想定される。

遺　物　本遺構からは遺物が出土しなかった。

02-ＳＫＴ01(第６図、図版10)

遺　構　ＭＬ46グリッドの第Ⅴ層中位で確認した。本遺構の立地点は、台地上部平坦面の中央部で、周辺地形はほとんど傾斜がない。重複する遺構はなく、縄文時代の遺構で最も近いのは、南西へ約14ｍの地点にある01-ＳＫＴ358である。

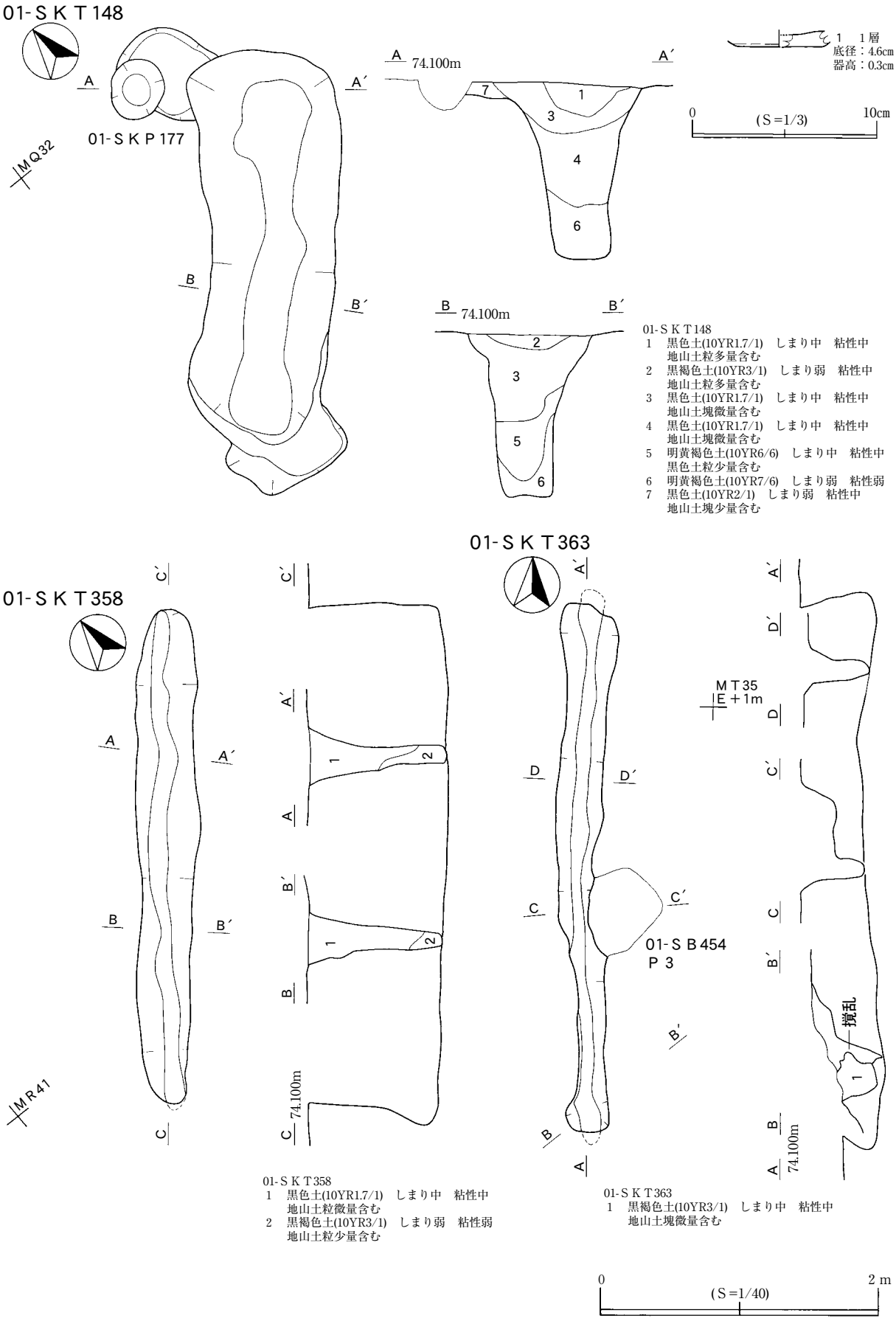
堆積土は５層に分けたが、いずれも黒色の自然堆積土である。平面形は長径が極端に長い楕円形で、開口部長径約3.2ｍ、開口部短径約0.4ｍ、底面長径約3.1ｍ、底面短径0.15ｍ、検出面からの深さ約1.1ｍである。堆積土の状態から壁の残りは比較的良いとみられる。長径は、底面より開口部の方が長く、短径も開口部の幅が広くなっている。両壁はほぼ垂直に立ち上がり、底面はほぼ平坦である。

本遺構は、長径が極端に長い楕円形状の陥し穴である。

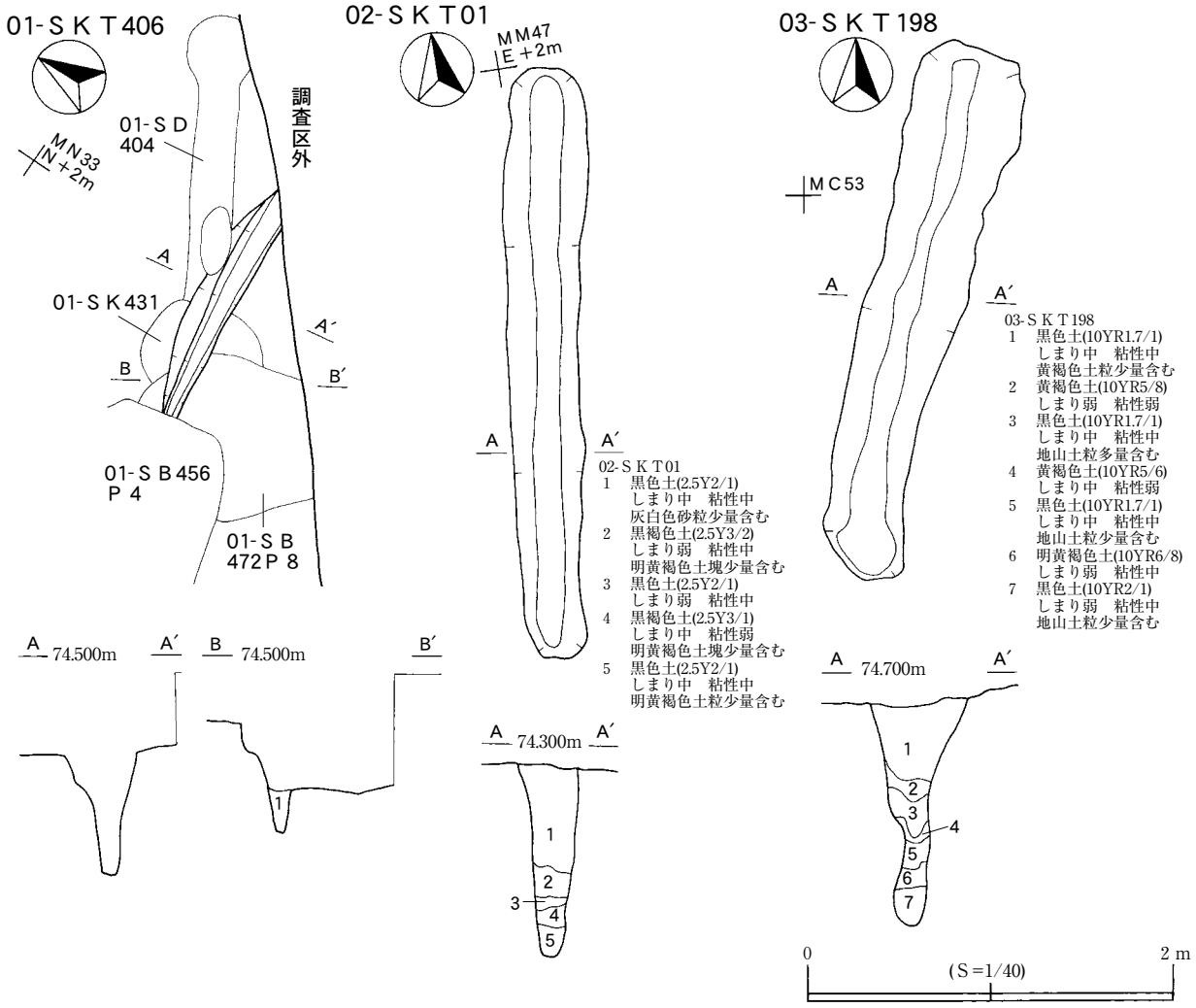
遺　物　本遺構からは遺物が出土しなかった。

03-ＳＫＴ198(第６図、図版10)

遺　構　ＭＢ52・53グリッドの第Ⅴ層中位及び03-ＳＩ178床面で確認した。本遺構の立地点は、台地上部平坦面の中央部で、周辺地形はほとんど傾斜がない。03-ＳＩ178に南東部の壁上部を破壊されて



第５図　01-ＳＫＴ148・358・363



第６図　01-ＳＫＴ406・02-ＳＫＴ01・03-ＳＫＴ198

いる。縄文時代の遺構では、最も近い02-ＳＫＴ01までででも約24m離れている。

堆積土は７層に分けた。黄褐色系の壁面崩落土と黒色系基調の外部からの流入土の互層になっている。平面形は長径が極端に長い楕円形で、開口部長径約2.9m、開口部短径約0.5m、底面長径約2.8m、底面短径約0.15m、検出面からの深さ約1.2mである。部分的には壁面の崩落も認められるが、壁の残りは比較的良いとみられる。長径は、底面より開口部の方が長く、短径も開口部が広くなっている。両壁は直立気味に立ち上がり、底面はほぼ平坦である。

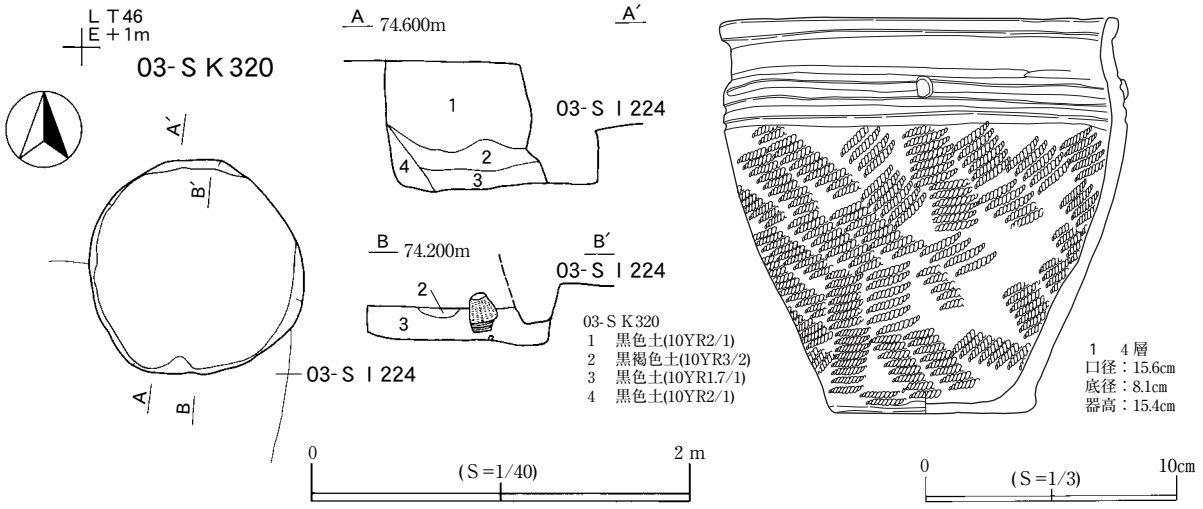
本遺構は、長径が極端に長い楕円形状の陥し穴である。

遺　物　本遺構からは遺物が出土しなかった。

(２)土坑

03-ＳＫ320(第７図、図版10)

遺　構　ＬＳ45グリッドの、第Ⅳ層上面及び03-ＳＩ224床面で確認した。当初は03-ＳＩ224に伴う土坑と考えて調査したが、土坑底面付近から完形の砂沢式土器が倒立して出土したため、弥生時代の遺構であると判明した。本遺構の立地点は、台地上部平坦面の南東縁に近い位置で、周辺地形は緩やかに東へ傾斜する。南側約半分の壁上部は03-ＳＩ224に破壊されている。



第７図　03-ＳＫ320・出土遺物

堆積土は４層に分けた。１層は上部約2/3を埋め尽くす土で、その底面レベルが03-ＳＩ224の床面レベルに近いことから、03-ＳＩ224構築時に壁面補強のために土坑内上部堆積土を一旦除去し、補強土として詰めたものと考えられる。細かく充填してある２層も同様に03-ＳＩ224に伴う補強土の可能性がある。３層は土器を逆位に設置する土を固定する堆積土であり、弥生時代に人為的に盛ったと考えられる。土坑掘削後に、時間をおかずに３層を盛ると考えれば、４層も同様に人為堆積土と考えられる。

土坑の平面形はほぼ円形で、直径約1.1m、掘り込み面とみられるⅣ層中位検出面からの深さは約0.65mで、底面はほぼ水平である。３層上部は平安時代に改変されている可能性があるが、本来の掘り込み面からの深さとの関係では、３層中の逆位に設置する土器は、完全に土坑内に埋没していたと考えられる。

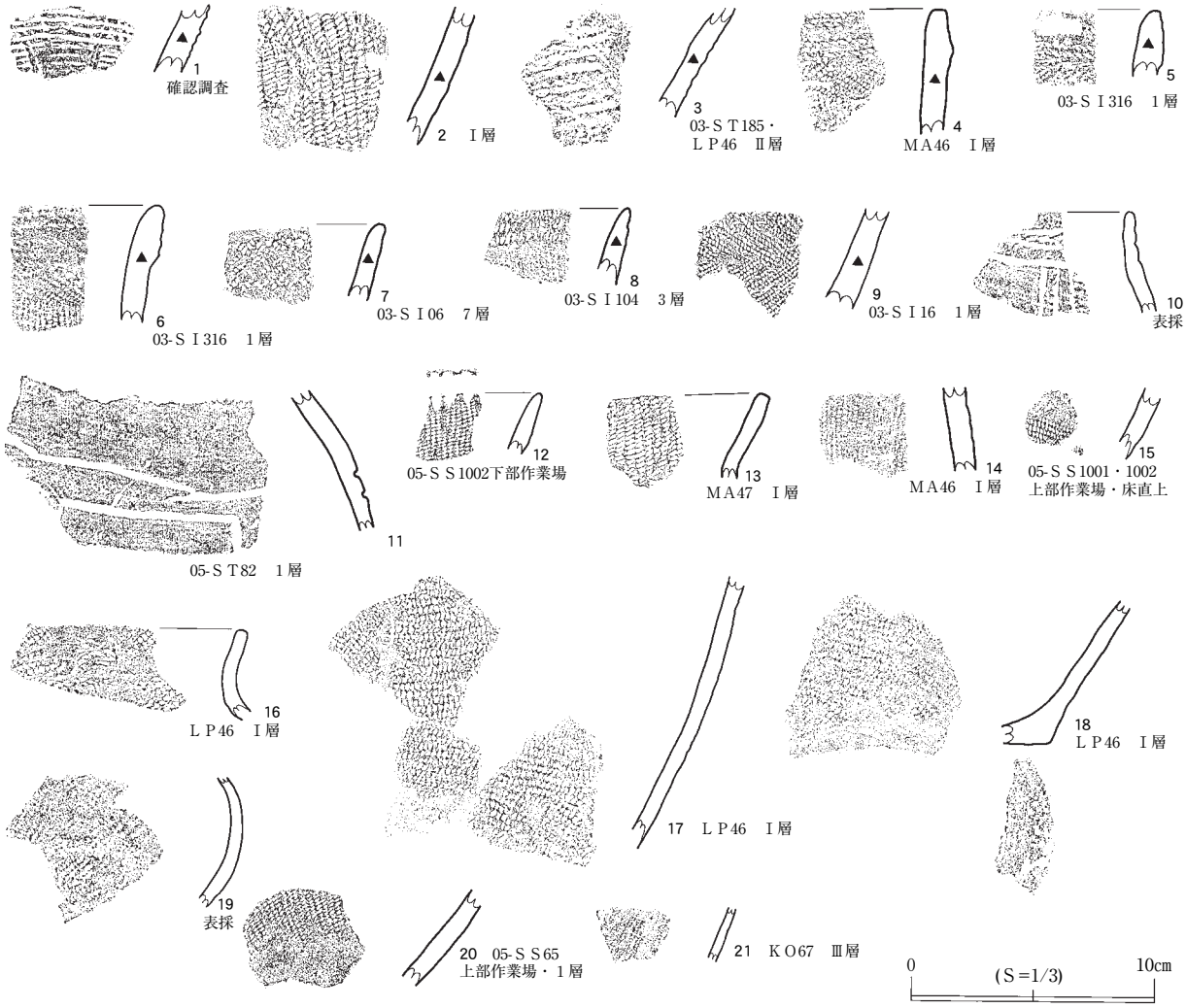
土器内部土壌から検出した炭化物１点と土坑埋土から出土した炭化物１点に対して、ＡＭＳ法による14Ｃ年代測定を行った。その結果、土器内部検出炭化物では2430±40年Ｂ．Ｐ．の、土坑埋土出土炭化物では2320±40年Ｂ．Ｐ．の値を得た(第５章参照)。両測定値のズレは110年と大きくないが、いずれも砂沢式の年代よりもかなり古い値である。

本遺構は直径約1.1mの円形の土坑で、弥生時代に意図的に設置したとみられる完形土器１個体と、それを固定する人為的な埋土を伴うことから考えて、墓坑であった可能性が高い。出土土器から、所属時期は弥生時代前期の砂沢式期と考えられる。

遺　物(第７図)　ほぼ完形の弥生土器が１個体出土している。口縁部に横走沈線を巡らす文様帯をもつ鉢形土器で、横走沈線帯の２段目の沈線は、おそらく５単位になるつまみ出し状の突起で区画する。横走沈線帯上部は無文である。胴部は地文のみを施す。なお胴下部には煤が付着している。底部穿孔などは認められないが、口縁部の一端は意図的に打ち欠いている可能性がある。

(３)遺構外出土遺物

釈迦内中台Ⅰ遺跡では、縄文時代早期～弥生時代までの土器片が数十点出土している。そのほとんどは、各時代の遺構に伴うものではなく、遺構外または平安時代の遺構からの出土である。ここでは

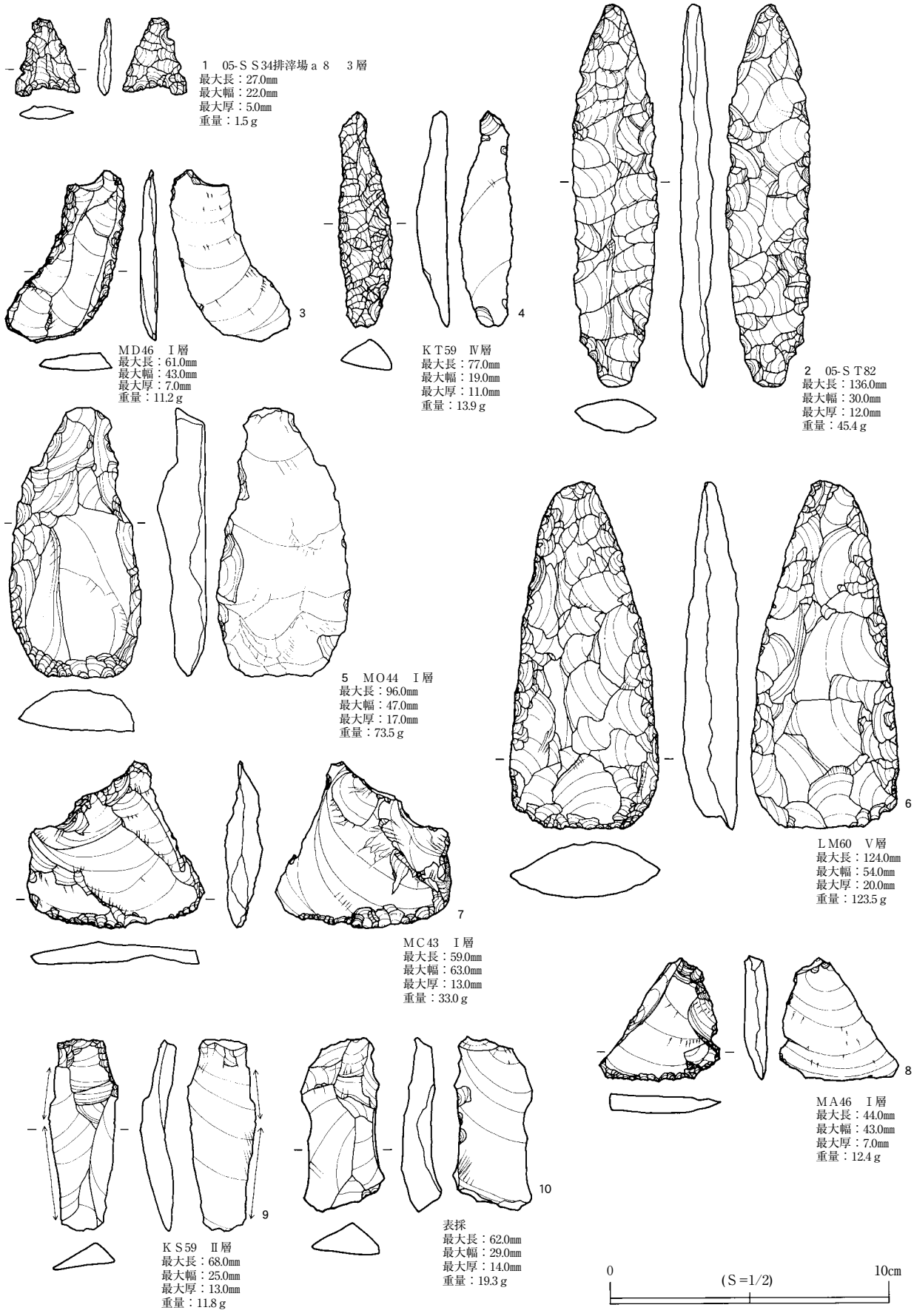


第８図　遺構外出土縄文土器・弥生土器

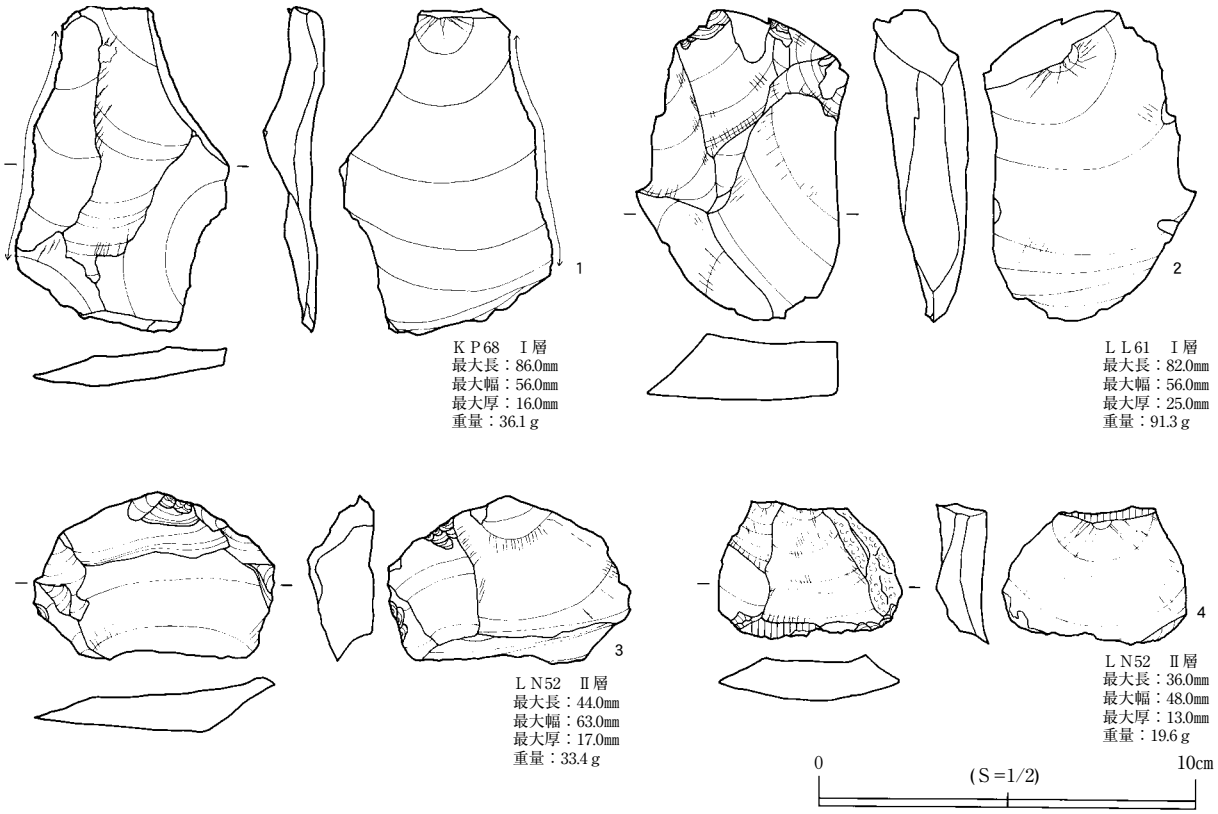
平安時代の遺構から出土しているものも、基本的には縄文時代の廃棄地点からは動いているという観点から、全て遺構外出土として扱いまとめた。

８図には、縄文時代～弥生時代に属するとみられる土器を掲載した。１はＶ字状とその間に横位に充填する陰刻線の組み合わせによる文様を施す胴部資料で、日計式または大新町式に比定できる。文様を構成する陰刻線の凹みは、押型原体による回転施文後に上部からの押圧を受けており、Ｖ字状とその間の横位陰刻線の回転施文にも時間差が存在する可能性がある。２は縦走縄文、３は横走撚糸文を施す胴部破片である。前期初頭～前葉期にかけての土器と考えられる。４～６は肥厚する口縁部に１段撚り原体で横走する側面圧痕文を施すもので、同一個体と考えられる。４・５は胴部に斜縄文を、６では斜縄文の下部に縦走撚糸文が認められる。７は口縁部に間隔をあけて２段の結節回転文を施し、８は口端に横位３段の側面圧痕文を施す。９は節の細かい羽状縄文を施す胴部破片である。４～９は胎土に繊維を含み、側面圧痕文や、結束原体または絡条体による地文施文を特徴としており、前期後葉～末葉期にかけての土器と考えられる。

10・11は沈線文を施す土器で、10は口縁部に並走する３本の横位沈線から垂下する３本の沈線で文様を施しており、その内部に縄文を充填する。11は強く内湾する土器の肩部に当たる破片で、途切れがちの横位沈線の下に、横位Ｌ字状の沈線を配して、内部にはわずかに縄文を施文する。この２点は



第９図　遺構外出土石器１



第10図　遺構外出土石器２

十腰内Ⅰ式に相当すると考えられる。

12～21までは地文のみの資料で、明確な所属時期は不明である。12は口端外角に指頭押圧による連続スリットを施し、口縁部直下は縦走縄文を施す。13も口縁部資料で、頸部で屈曲して外反し、口端が内湾する器形である。これも縦走縄文を施している。16も口縁部破片で、17・18と同一個体と考えられる。全面ＬＲ原体の横走縄文を施す。14・15・19・20・21は全て胴部の小破片である。14・15・20は比較的節の細かい原体を用いており、21は節がさらに細かく、条間が開くことから絡条体と考えられる。これに比べ、19は比較的節が大きめである。

９・10図には石器を図示した。９図１は石鏃で、やや基部が抉れる凹基状になる。表裏面共に３側縁から調整を施している。９図２は石槍で、基部と先端が細くなる形状で、柳葉型に近い。両面共に比較的広めの剥離により調整する。９図３・４は石匙と考えられる。３はつまみが欠損するが、Ｊ字状にカーブする縦長剥片の両側縁に、主要剥離面からのみ調整を施す。４はあまり明確でないが上部をつまみ状にくびれさせ、側縁に主要剥離面から調整を施す。調整剥離は背面中央部に及ぶ。９図５・６は石篦と考えられる。５は、主要剥離面には基本的に調整を施さず、背面縁辺部にのみ調整を施す。なお基部側には比較的大きい剥離を施すが、剥片の厚みを減らすための処置と考えられる。６は両面調整で、全面に調整が及ぶ。先端となる下部には細かな剥離が集中する。９図７・８はスクレイパーで、主要剥離面末端部の薄い部分に調整を施して、刃部を作出している。９図９・10、10図１は側縁に微細剥離が認められる。９図９・10は縦長で幅の狭い剥片、10図１はやや幅広の剥片である。10図２は縦長、10図３・４は横長の剥片である。調整剥離は認められない。

第３節　平安時代の遺構と遺物

１　検出遺構と遺物

(１)竪穴住居跡

01-ＳＩ21(第11図、図版11)

遺　構　ＭＴ31、ＮＡ・ＮＢ30～32グリッドの第Ⅴ層中位で、柱穴及び壁溝の配置で確認した。本住居跡の立地点は台地上部平坦面の西端で、緩やかに西へ傾斜する。01-ＳＩ463と重複するが新旧関係は不明である。周辺には01-ＳＩ28、01-ＳＤ220がある。

本住居跡は、壁及び住居内堆積土が後世の削平により完全に失われており、本来の形態は不明であるが、四隅の柱穴と壁溝残存部形状から、平面形はほぼ正方形と考えられる。カマドの付く壁に直交する主軸方位はＮ－35°－Ｗである。予測される主軸とそれに直交するラインで測る住居面積は約31㎡で、大形の住居である。

床面もほとんどが削平されている。壁溝は北東壁沿いと南東壁沿いで検出した。確認できた範囲の壁溝底面レベルに比べ、北西・南西壁に相当する地点の検出レベルはさらに低く、本来は壁溝が存在したと考えられる。残りの良い北東壁沿いでは、上場幅0.2～0.4m、下場幅0.1～0.3m、検出面からの深さ0.1～0.15mの断面台形状である。

床面や壁溝内で12個のピットを確認した。Ｐ１・５・７・12は四隅に配置する主柱穴で、Ｐ２・４・６・８は各壁中央部に配置する壁板保持の壁柱穴である。また、Ｐ１・４・８にみられる上場形状の拡大や、Ｐ３とＰ12が隣接する状況から、建て替えを行ったことが想定される。四隅の柱穴間の距離は柱穴中心間で5.0～5.2mである。

カマドは南東壁の中央からやや北東寄りの位置で、焼土の広がりで確認した。削平により堆積土が完全に失われており、上部構造及び埋没過程は不明である。火床面は楕円形状の被熱範囲で、長径0.5m、短径0.4mである。火床面主軸方位は、住居主軸方位に直交する。

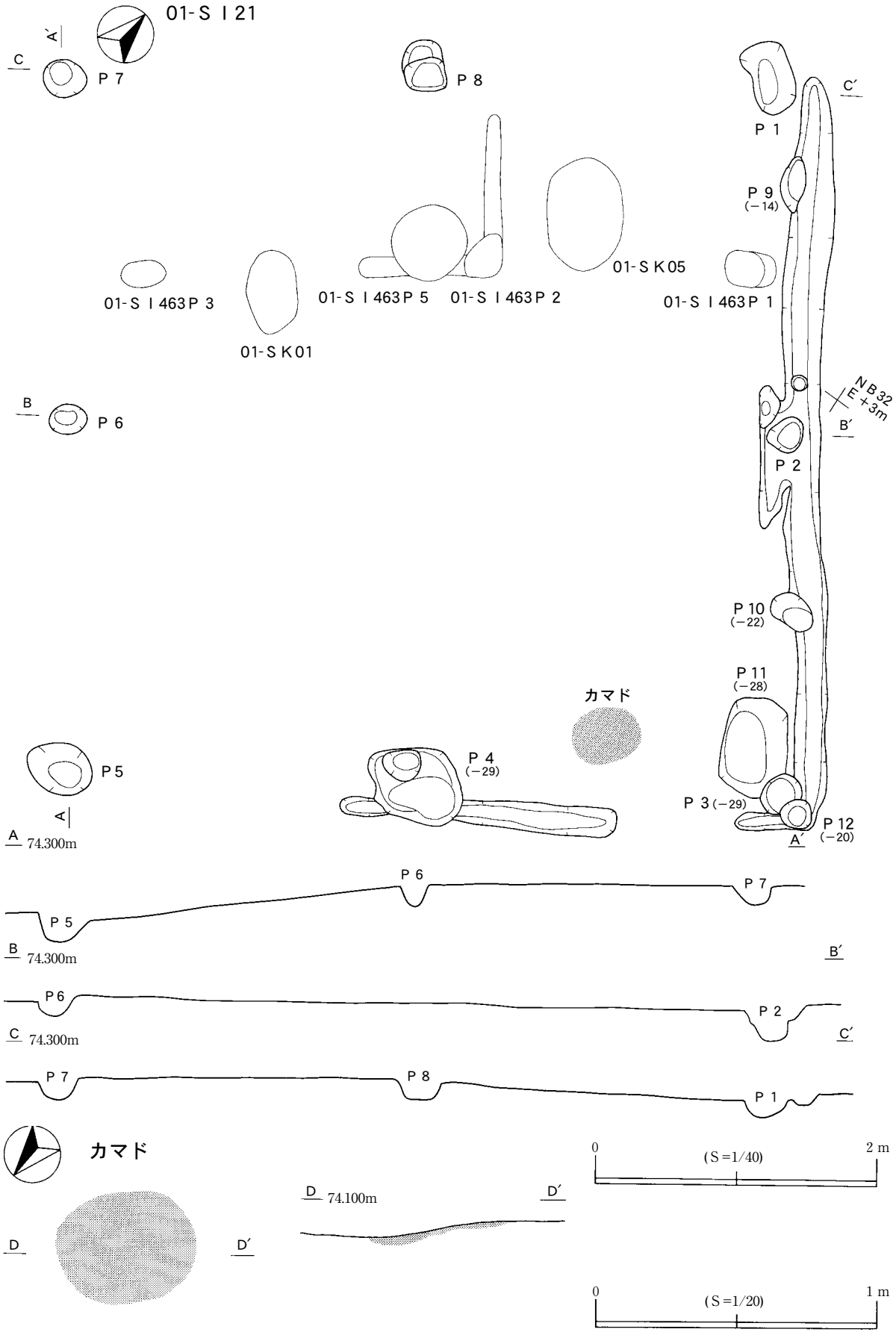
本住居跡は四隅に主柱をもち、南東壁にカマドを設置する住居である。上部が削平されているため住居の埋没過程は不明だが、01-ＳＤ220の南西側に位置しており、その性格から考えて01-ＳＤ220の掘削以前に存在していた可能性が高い。

遺　物　本住居跡に伴う遺物は検出できなかった。

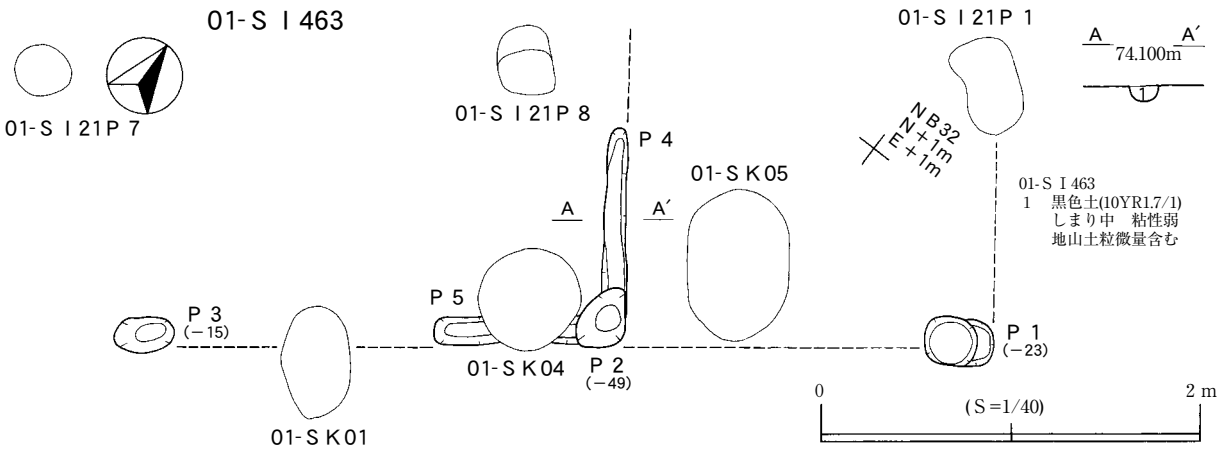
01-ＳＩ463(第12図)

遺　構　ＮＡ・ＮＢ31・32グリッドの第Ⅴ層中位で、柱穴及び壁溝の配置で確認した。本住居跡の立地点は台地上部平坦面の西端で、緩やかに西へ傾斜する。01-ＳＩ21と重複するが新旧関係は不明である。周辺には01-ＳＩ28、01-ＳＤ220がある。

本住居跡は、削平のため壁及び住居内堆積土が失われている。確認できたのは壁溝の一部と３個の柱穴のみで、住居平面形状及び規模は不明である。壁溝と柱穴の関係から、建て替えが想定される。想定される２軒は相似形状とみられ、住居の拡張と考えた場合、Ｐ２・Ｐ３と壁溝により構成されるのが古段階で、一辺2.7m前後の小形の住居、Ｐ１・Ｐ２・Ｐ３で構成されるのが新段階で、一辺4.6m前後の中形の住居と考えられる。古段階では壁溝により壁板を保持する住居構造、新段階ではＰ２


01-S I 21
A´
C
P 7
P 8
C´
P 1
P 9
(−14)
01-S K05
01-S I 463P 3
01-S K01
01-S I 463P 5
01-S I 463P 2
01-S I 463P 1
B
P 6
N B32
E +3m
B´
P 2
P 10
(−22)
P 11
(−28)
カマド
P 5
A
A 74.300m
P 4
(−29)
P 3 (−29)
P 12
(−20)
A´
P 6
P 7
P 5
B 74.300m
B´
P 6
P 2
C 74.300m
C´
P 7
P 8
P 1
カマド
D
D´
D 74.100m
D´
0
(S =1/40)
2 m
0
(S =1/20)
1 m

第11図　01-S I 21



第12図　01-S I 463

を壁柱穴として利用した住居を構築していたと想定される。Ｐ２のみ極端に深く再利用の痕跡と考えられる。

壁溝は、古段階の北東壁沿いと南東壁沿いで検出した。確認できた範囲の壁溝底面レベルに比べ、北西・南西壁に相当する地点の検出レベルはさらに低く、本来は全周していたとみられる。壁溝は上場幅が0.1ｍ前後、検出面からの深さは最深部で0.1ｍの断面台形状である。本住居跡ではカマドが確認できないが、柱穴や壁溝の検出状況からみて、火床面まで削平されたと考えられる。

本住居跡は隅に主柱をもつ住居である。上部が削平されているため住居の構造や埋没過程は不明な点が多い。01-ＳＤ220の南西側に位置し、その性格から考えて01-ＳＤ220の掘削以前に存在していた可能性が高い。また新旧関係は不明だが、01-ＳＩ21と重複しており、主軸方位がほぼ同じとみられることから、両者は連続した建て替え関係にあると考えられる。

遺　物　本住居跡に伴う遺物は検出できなかった。

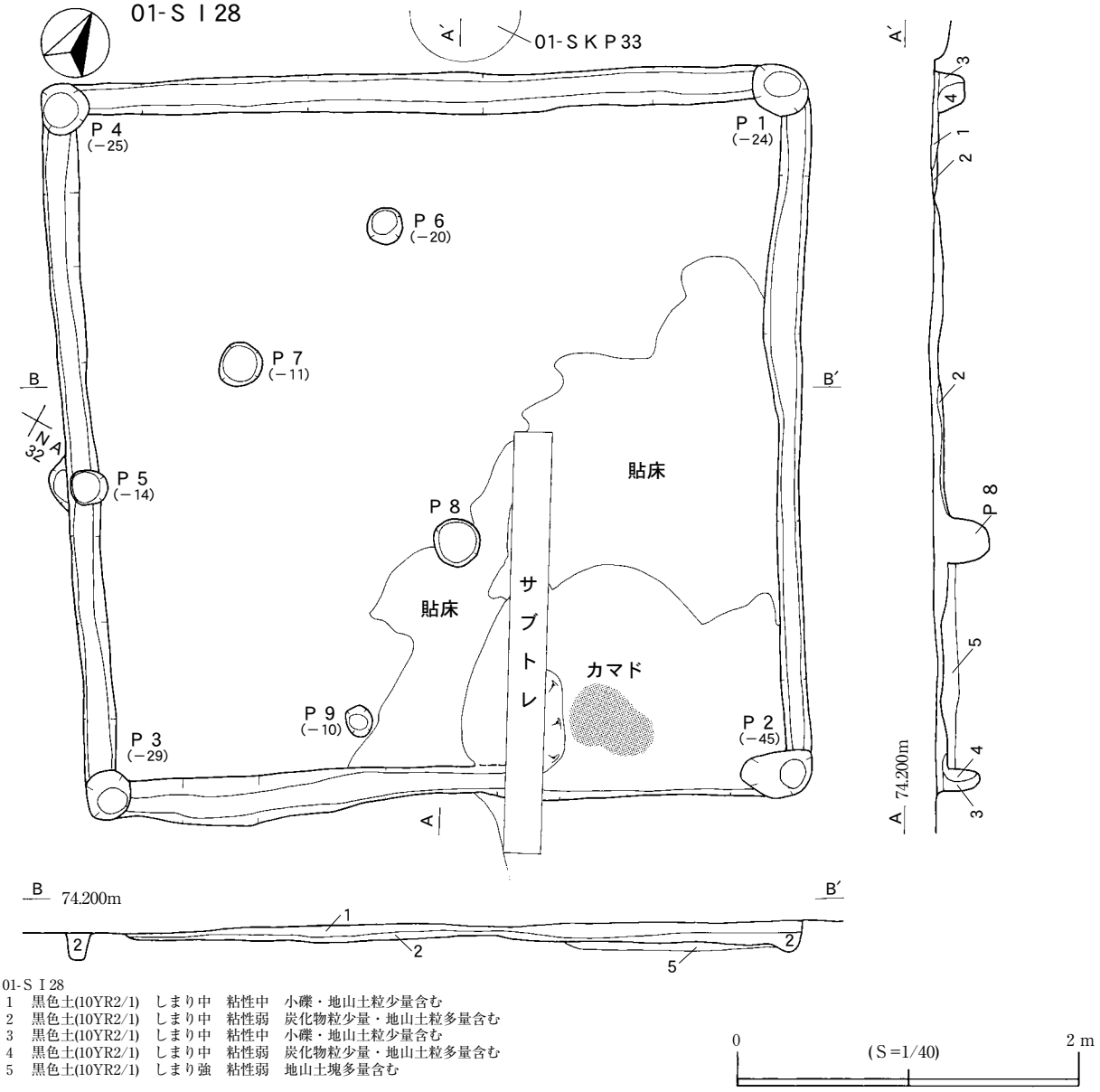
01-S I 28(第13図～17図、図版12・154)

遺　構　ＭＴ31・32、ＮＡ32グリッドの第Ⅴ層中位で、黒色土の広がりで確認した。本住居跡の立地点は台地上部平坦面の西端で、緩やかに西へ傾斜している。重複する遺構はなく、周辺に01-ＳＩ21、01-ＳＤ220がある。

堆積土は５層に分けた。１～４層は、いずれも地山土粒を多量に含む点で共通する。３・４層は壁溝内に認められる土で、４層は壁溝の裏込め、３層は壁板の腐植土と考えられる。１層は造成土とみられ、本住居跡は人為的に埋め戻したと考えられる。２層は黒色基調で住居床面に密着していることから、埋め立て時に床面に残された有機物の腐植土と考えられる。５層は貼床で、住居南東部隅のカマド周辺部に特徴的に認められることから、カマド前庭部の補強土と考えられる。

平面形はほぼ正方形で、カマドの付く壁に直交する主軸方位はＮ－31°－Ｗである。予測される主軸とそれに直交するラインで測る住居面積は約18㎡で、中形の住居である。各壁の長さは北東壁約4.2ｍ、南東壁約4.2m、南西壁約4.3m、北西壁約4.4ｍである。各壁の検出面からの深さは削平のため残りが悪く、最大でも約0.1ｍである。立ち上がり角度も明確でない。

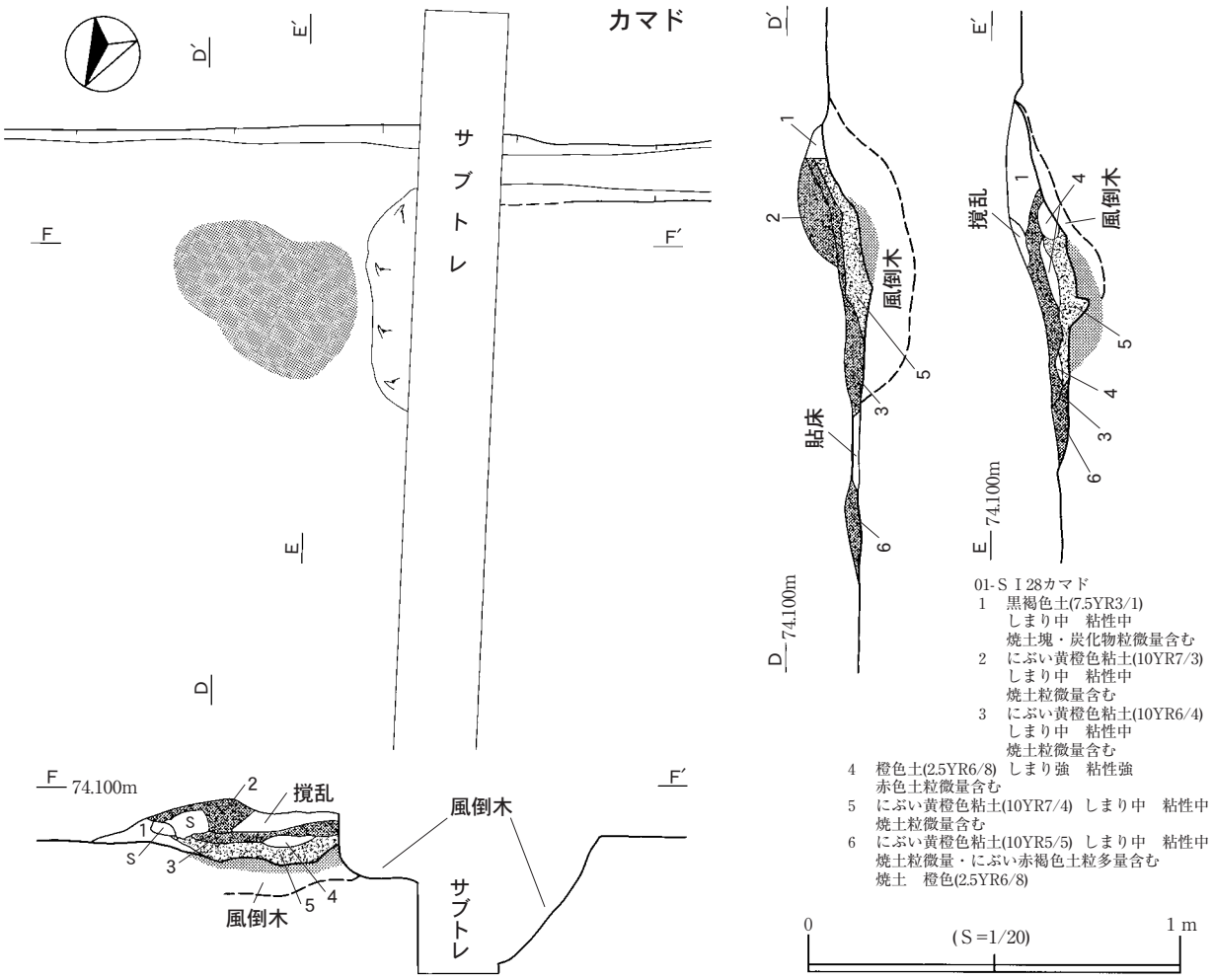
床面は掘形底面の地山上面を利用しており、カマド周辺部のみ貼床を施す。壁溝はカマド以外の全



第13図　01-S I 28

周で確認した。上場幅0.15～0.25m、下場幅0.1～0.15m、床面からの深さは0.1～0.2mの、断面台形状である。床面及び壁溝内で９個のピットを確認した。Ｐ１～４は住居四隅の主柱穴である。柱穴間の距離は各壁長に準じており、柱穴中心間距離は約4.0mである。Ｐ５は南西壁の中央部に位置するが、Ｐ６～９は床面中央部からやや壁際に不規則に分布しており、性格や実際本住居跡に伴うかは不明である。

カマドは南東壁の中央からやや北東寄りの位置で、黒褐色土やにぶい黄橙色土の広がりで確認した。堆積土は６層に分層した。煙道が確認できないことから、上部堆積土は削平により欠失していると判断される。１～３層は流入土と崩落土である。５層はカマドの造り替えに伴う粘土で、４層はその被熱範囲である。６層は地山面(風倒木上面)を火床面とした最初のカマドに伴う粘土である。火床面の存在から、カマドは２時期存在することが明らかだが、新段階である上部の火床面及び上部構造は、多くの部分が破壊されており形状や規模は不明である。旧段階である下部火床面は、不整な楕円形状



第14図　01-ＳＩ28カマド

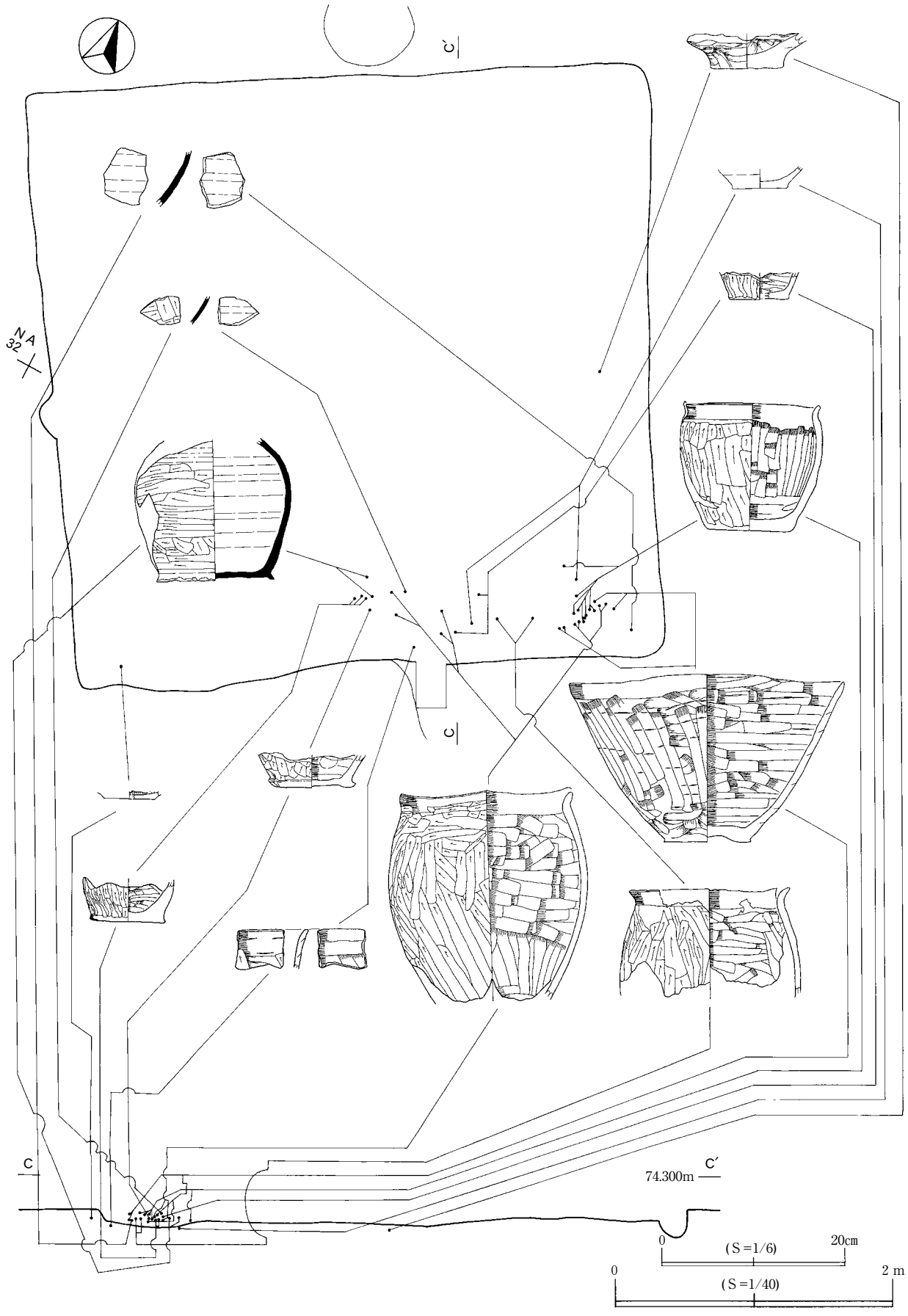
の被熱範囲で、長径0.52m、短径0.38mである。主軸方位は住居主軸方位に平行する。

本住居跡は四隅に主柱をもち、南東壁にカマドを設置する住居である。上部が削平されているため住居の埋没過程を探る手がかりに乏しいが、壁際に崩落土などが確認できないことから、人為的に埋め戻したと考えられる。

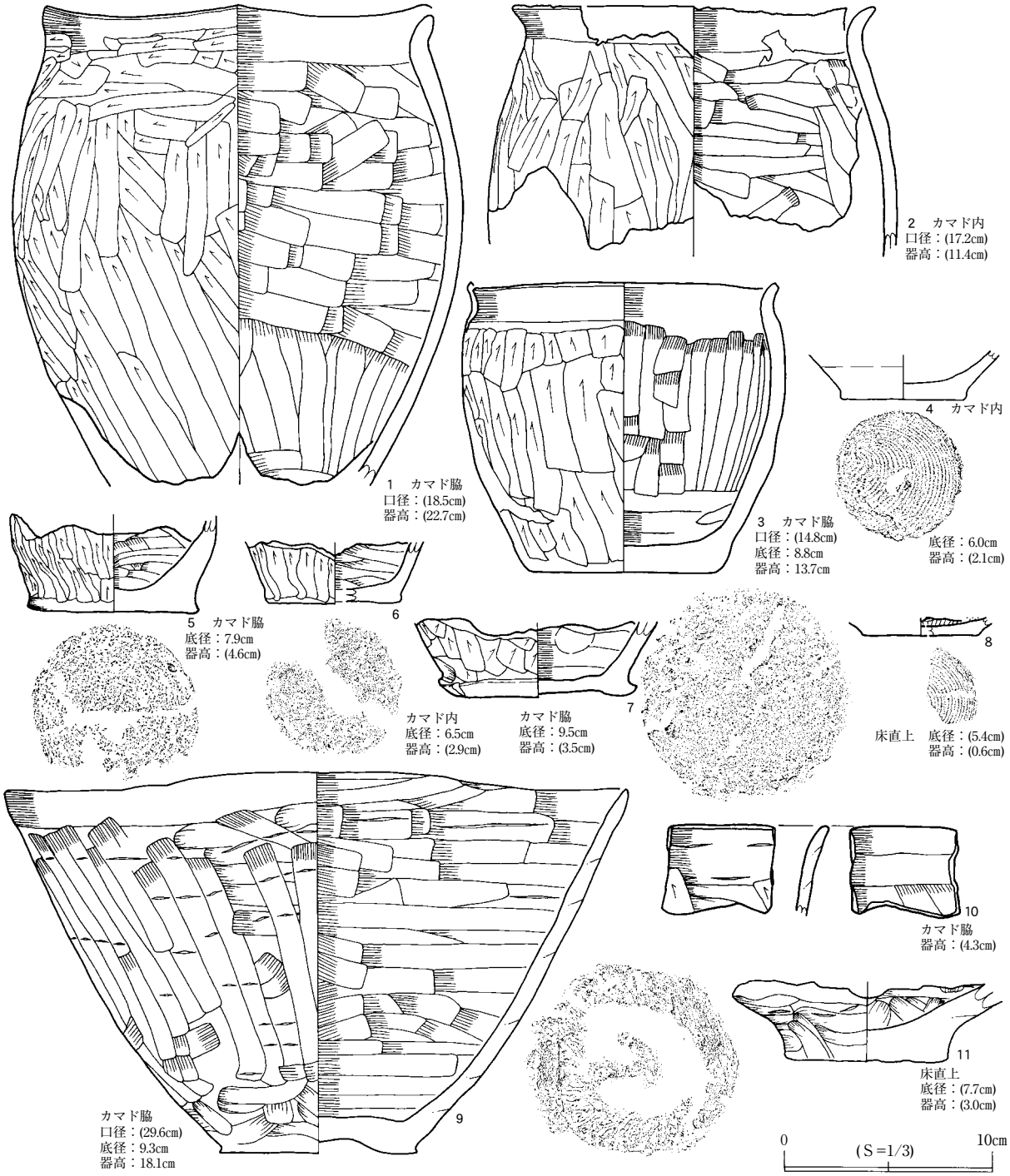
遺　物(第16図・17図)　住居跡内から土師器甕・坏・鍋、須恵器壺、鉄製品が出土した。土師器甕は、口縁部が８点、底部が９点出土している。図示しなかったものを含めた甕の口縁部分類別数量はＡ類(０点)、Ｂ類(１点)、Ｃ類(７点)、Ｄ類(０点)、底部分類別数量は砂底(４点)、ナデ(２点)、ケズリ(２点)、回転糸切(１点)の内訳になり、Ｃ類と砂底が多い傾向にある。

遺物の出土状況をみると、ほとんどがカマド周辺からの出土である(第15図)。カマド中央部から北東壁寄りに甕や鍋が、南西側には須恵器壺が分布する傾向にある。特に16図１～３・９、17図１は残存部も多いことから、これらは使用時の配置に近い状況で廃棄した可能性が高い。これは垂直分布でみても、カマド部材の倒壊土層中に位置しており明らかである。また、カマド近辺出土遺物の傾向からみる甕の分類別構成は、大型の甕がＣ類、小型の甕がＢ類という組み合わせになる。

16図１・２は形状が近似し、内面上半部が横位ヘラナデ、外面最終調整が下から上へのケズリという点で共通しており、当初は同一個体の可能性も考えたが、１は口端が肥厚し、口縁部屈曲部に横位のケズリを施すことから別個体として捉えた。３は比較的小型の土師器甕で、外面は縦位ケズリ、内



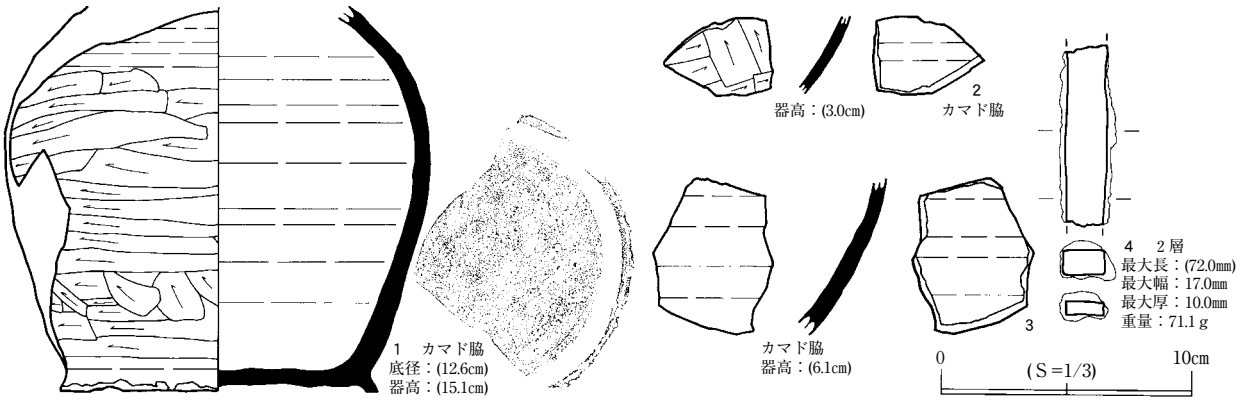
第15図　01-ＳＩ28遺物出土状況



第16図　01-ＳＩ28出土遺物１

面は縦位ヘラナデ調整である。底部はケズリ再調整を施している。16図４～７は土師器甕の底部で、４は回転糸切無調整、５～７は砂底である。５～７は外面のケズリ調整の結果、底部外縁が張り出す形状になっている。

16図８は土師器坏Ｂ類の底部である。16図９～11は土師器鍋で、９は約半分が残存している。胴部は粗雑なユビナデの後、縦位のヘラナデで仕上げるが、調整が雑で輪積痕が残っている。内面は比較的丁寧に横位のヘラナデ調整を施すが、口縁部付近には輪積痕が残り、全体として粗雑な作りになっている。10は口縁部破片、11は底部破片である。11は高台状の形状になる。



第17図　01-ＳＩ28出土遺物２

17図１～３は須恵器壺である。１は頸部以上が欠失しているが、丸みをもった肩部から比較的径の大きい底部までが残っている。外面調整は肩の最大径部を境にして、胴部には横位のケズリで再調整を施している。また高台状の底部外縁には意図的な打ち欠きが認められ、廃棄時に何らかの廃棄儀礼を行ったことを窺わせる。２・３は胴部の破片である。４は角棒状の鉄製品で、断面が長方形で上下両端は欠損している。全体形状が不明のため、機能・用途についても不明である。

01-ＳＩ34Ａ(第18図～21図、図版13・165)

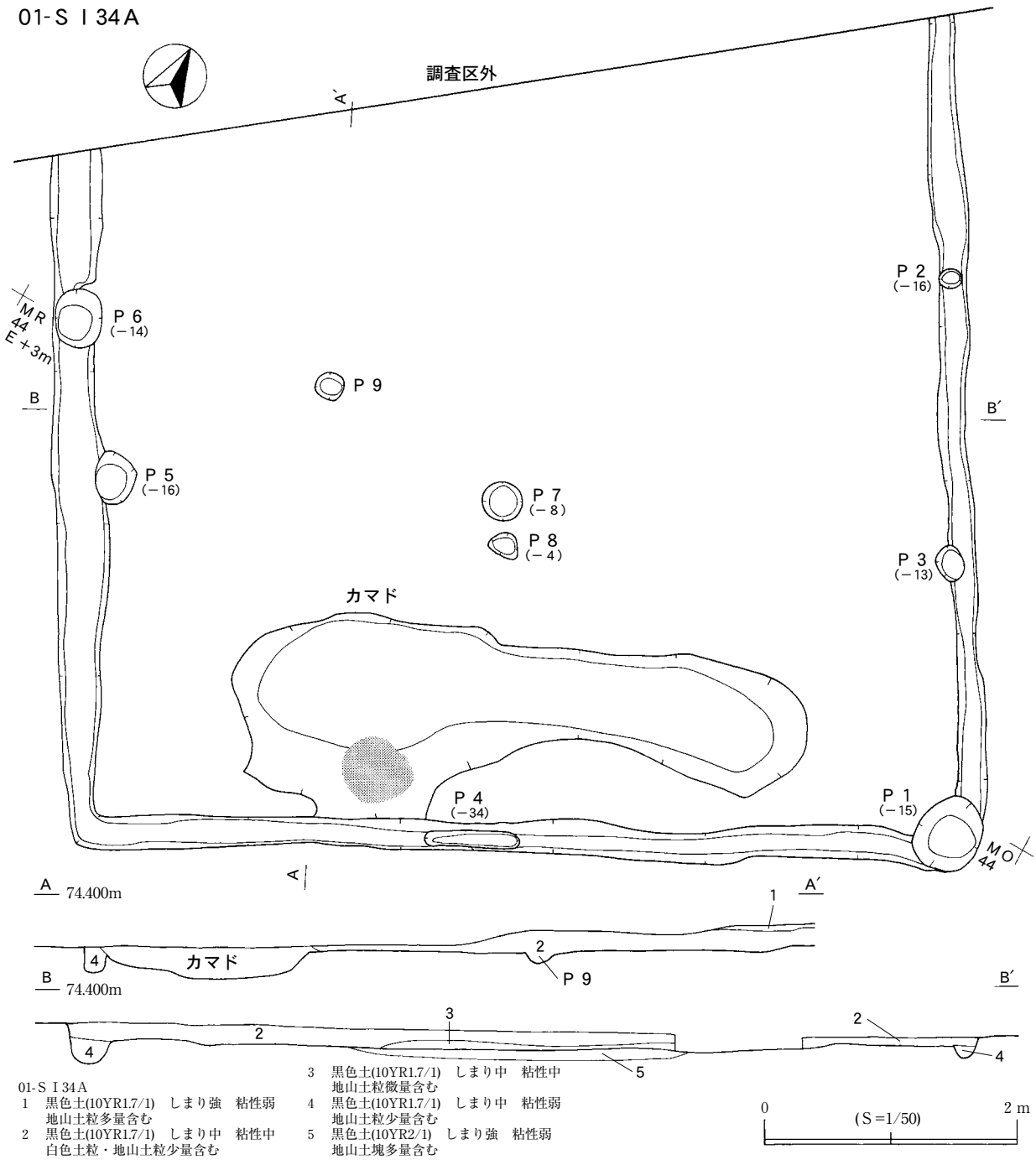
遺　構　ＭＯ43～45、ＭＰ・ＭＱ43・44グリッドの第Ⅴ層中位で、黒色土の広がりで確認した。本住居跡の立地点は台地上部平坦面で、北西側へわずかに傾斜する。01-ＳＩ34Ｂ・35、03-ＳＩ26と重複し、いずれよりも本住居跡が新しい。周辺には01-ＳＩ150・158、03-ＳＩ22、01-ＳＫ289がある。

堆積土は５層に分けた。１～３層が堆積土の主体で、調査区境断面の観察では壁際からのレンズ状堆積が確認できるが、極めて多くの地山土塊を含む堆積土であること、強固に踏み締められていることから、人為的に埋め戻したと考えられる。４層は壁溝内堆積土で、裏込めと壁板の腐植土が明確に区分できず、住居廃絶時に壁板を抜取ったと考えられる。５層は貼床である。

平面形は、住居北西部が調査区外のため正確には分からないが、ほぼ正方形と推測される。カマドの付く壁に直交する主軸方位はＮ－30°－Ｗである。予測される主軸とそれに直交するラインで測る住居面積は約52㎡で、特大形の住居である。各壁の長さは、完掘している南東壁で約7.2m、北東壁6.8m以上、南西壁5.5m以上である。各壁の検出面からの深さは、削平のため残りが悪く0.1～0.15mである。立ち上がり角度も確認できないが、垂直に立ち上がると考えられる。

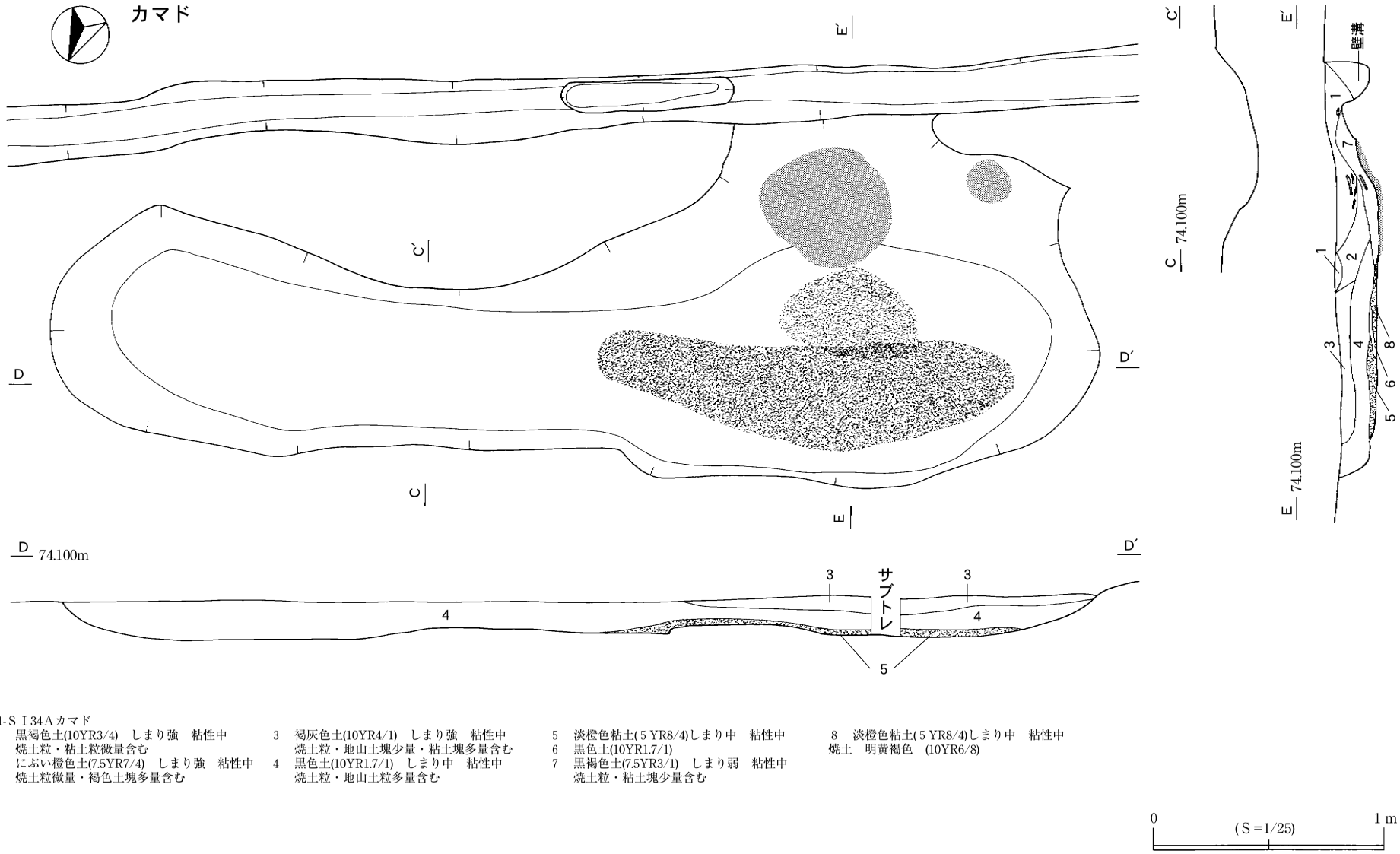
床面は、01-ＳＩ34Ｂと共有するとみられ、掘形底面の地山上面を基底面とし、住居中央部から北隅にかけては貼床を施す。北側の貼床範囲が01-ＳＩ34Ｂの壁溝に規制される状況から、これは01-ＳＩ34Ｂ造成時のものと判断される。壁溝は、調査した範囲の全周で確認した。上場幅0.16～0.46m、下場幅0.08～0.3m、床面からの深さ0.1～0.2mの断面台形状である。

床面及び壁溝内で９個のピットを確認した。Ｐ１～６は壁溝内のピットで、最大のＰ１が開口部径約0.5m、最小のＰ２が開口部径約0.15mである。配置や規模からみて、Ｐ１は上屋の保持に関わる構造材を、Ｐ２～６が壁板保持に関わる支柱を据えた穴と考えられる。Ｐ１に対応して、住居南角にも同様な掘り込みを配置すると想定されるが、ピットとして明確には確認できなかった。Ｐ７～９は0.1m未満と浅く配置も不規則なため、機能または本住居跡に伴うかについても不明な点が多い。



第18図　01-ＳＩ34Ａ

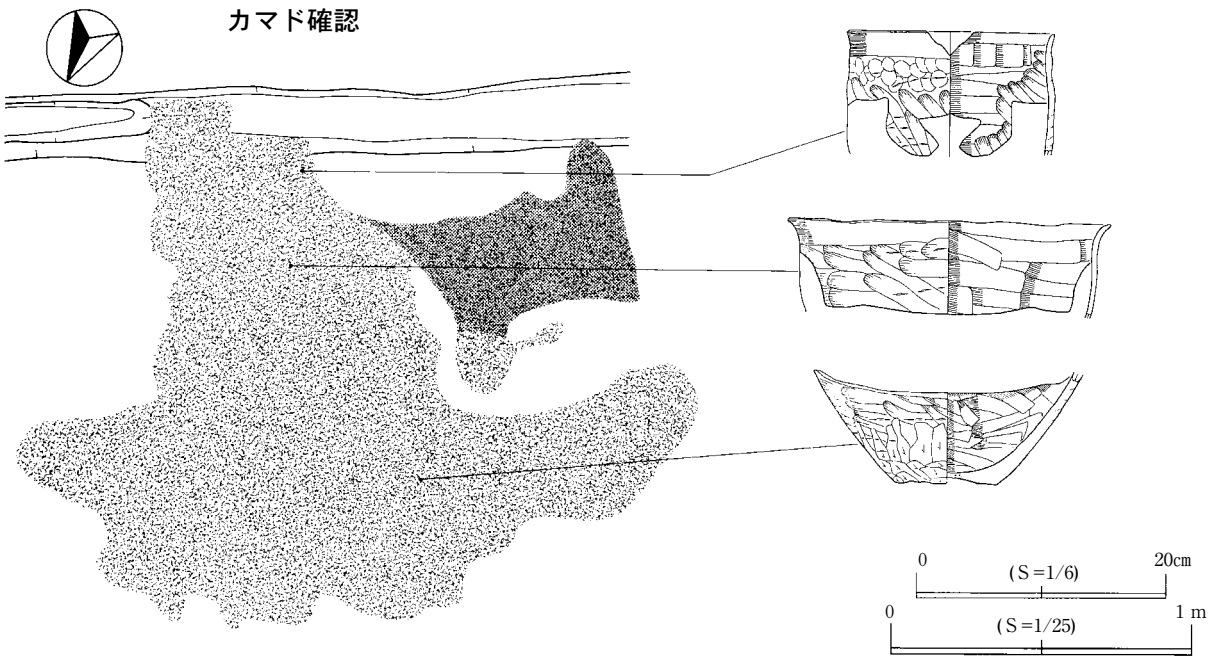
カマドは南東壁の中央から南西寄りの位置で、褐灰色土やにぶい黄橙色粘土の広がりで確認した。堆積土は８層に分層した。煙道が全く確認できないことから、住居内堆積土同様に上部堆積土は削平されている。２層はにぶい橙色の粘土で、上部構造の崩落層と考えられる。３層も住居内堆積土には認められず、カマド周辺部の構築材に由来すると思われる。これと互層をなす黒色基調の１・４・７層は、構築材崩落物の間隙に流入した土である。５・８層は前庭部底面に貼った粘土で、間に６層を挟んでおり前庭部粘土の貼り替えとみられる。８層前庭部粘土層下部にはわずかに黒色土があり、あるいは01-ＳＩ34Ｂ段階のカマド使用面に当たるかもしれない。火床面は不規則な楕円形状の被熱範囲で、長径0.66m、短径0.52mで、主軸方位は住居主軸方位に直交する。



01-ＳＩ34Ａカマド
1　黒褐色土(10YR3/4)　しまり強　粘性中
　焼土粒・粘土粒微量含む
2　にぶい橙色土(7.5YR7/4)　しまり強　粘性中
　焼土粒微量・褐色土塊多量含む
3　褐灰色土(10YR4/1)　しまり強　粘性中
　焼土粒・地山土塊少量・粘土塊多量含む
4　黒色土(10YR1.7/1)　しまり中　粘性中
　焼土粒・地山土粒多量含む
5　淡橙色粘土(５YR8/4)しまり中　粘性中
6　黒色土(10YR1.7/1)
7　黒褐色土(7.5YR3/1)　しまり弱　粘性中
　焼土粒・粘土塊少量含む
8　淡橙色粘土(５YR8/4)しまり中　粘性中
　焼土　明黄褐色　(10YR6/8)

0　(S=1/25)　1m

第19図　01-ＳＩ34Ａカマド



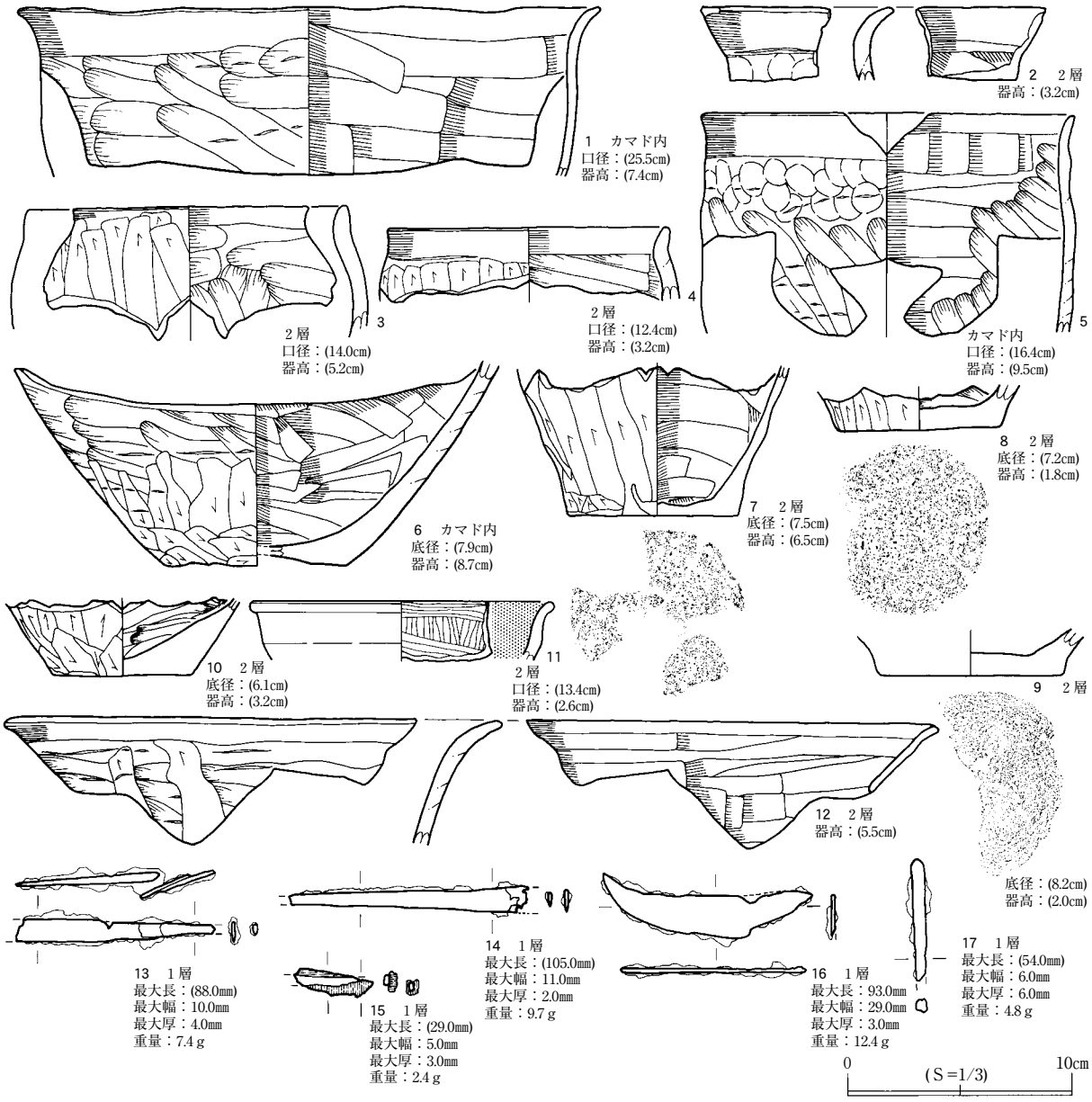
第20図　01-ＳＩ34Ａカマド遺物出土状況

本住居跡は四隅に主柱をもち、南東壁にカマドを設置する住居である。01-ＳＩ34Ｂから拡張した段階が本住居である。２層が水平堆積していることから、人為的に埋め戻している可能性が高く、近接する03-ＳＩ22との新旧関係を考えるのに重要な要素である。

遺　物(第21図)　住居跡内から土師器甕・坏・鍋、鉄製品が出土した。土師器甕は、口縁部が23点、底部が15点出土しており、そのうち比較的大型の口縁部資料５点、底部資料５点を図示した。図示しなかったものを含めた甕の口縁部分類別数量は、わずかに段が認められるＢ類が２点の他は、Ｃ類(13点)、Ｄ類(５点)、分類不能(３点)で、比較的口縁部の屈曲が少ない甕が目立つ傾向にある。底部分類別数量は、砂底(13点)、ナデ(２点)、ケズリ(２点)で、圧倒的に砂底が多い。

カマド周辺では、21図１・５・６が構築粘土の崩落土層中から出土している(第20図)。６は輪切り状の底部資料で、支脚として利用したものである可能性が高い。１・５については、口縁部破片であり、カマド廃棄時に一括廃棄したものと考えられるが、煮沸利用していたものか、カマド構築材として転用したものかは不明である。これら以外の出土土器も基本的には、住居埋没時の堆積土中に含まれるものであり、全体として本住居跡居住時におけるセット関係を示すかは不明である。

21図１・２は比較的大型の土師器甕の口縁部破片で、１は外面が粗雑なユビナデ、内面が横位のヘラナデ調整である。２は小破片で口縁部が強く外反する形状である。こういった口縁部断面形状のものは少なく、基本的に外反が弱いのが、本住居跡出土甕の特徴である。３～５は比較的中・小型の土師器甕の口縁部資料で、３・４は外面が縦位ケズリ、内面が横位ユビナデ調整である。５は外面が粗雑なユビナデ調整のみのため、輪積痕が残る。内面は横位ヘラナデの後に、胴部下半にユビナデによる再調整を施して、比較的丁寧に仕上げている。21図６～10は土師器甕の底部破片で、６～９が砂底、10はケズリによる再調整を施している。21図11は土師器坏Ｂ類で、口縁部が外側に屈曲する器形である。内面は縦位から横位の順番でミガキを施している。12は鍋の口縁部破片である。外面には、ユビナデの後にケズリを施しているが、疎らなため所々に輪積痕が残る。内面は密に横位のヘラナデを施

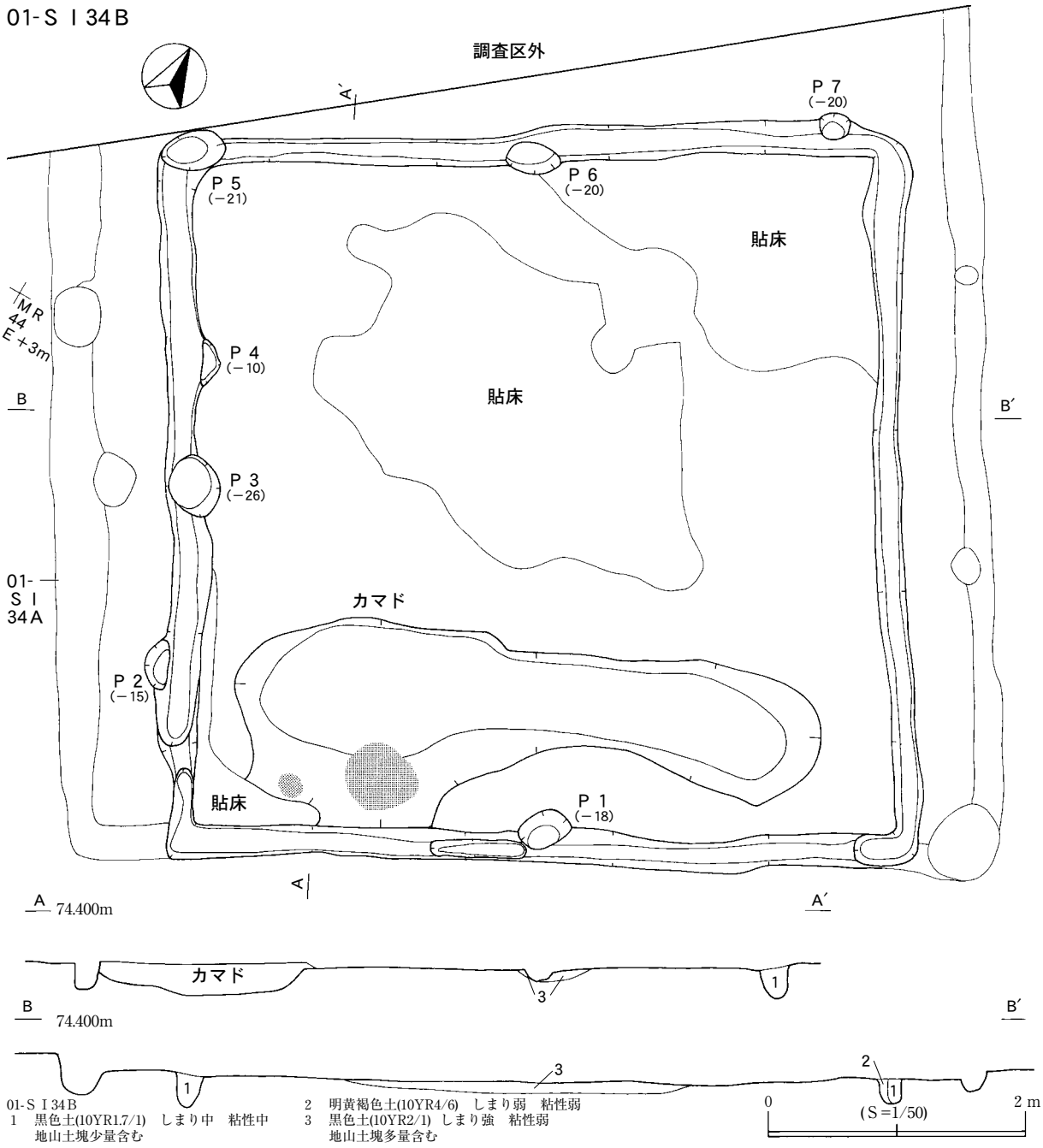


第21図　01-ＳＩ34Ａ出土遺物

して調整している。21図13～17は鉄製品である。13～15は刀子とみられる。13は刀身の半ばから茎の付け根にかけて残存している。錆による剥落で、３分割の状態になっている。14は刀身半ばから切先にかけての部位、15は周囲に木質が残っており茎にあたる部位とみられる。16は半月形の穂摘具で、一部欠損しているがほぼ完形の資料である。両端が反って柄に取り付くタイプで、外縁の弧に刃がついている。17は両端を欠損する棒状のもので、用途は不明である。

01-ＳＩ34Ｂ(第22図、図版13)

遺　構　ＭＯ43～45、ＭＰ・ＭＱ43・44グリッドの01-ＳＩ34Ａ床面で、柱穴と壁溝の配置で確認した。堆積土は３層確認した。１・２層は壁溝内堆積土で、北東壁沿いで２層が確認できる。１層は黒色基調の壁板抜取り口への流入土、２層が壁板裏込めの崩壊土である。３層は貼床で、地山土塊を多量に含む黒色土を用いている。



第22図　01-ＳＩ34Ｂ

平面形はほぼ正方形で、カマドの付く壁に直交する主軸方位はＮ－30°－Ｗである。予測される主軸とそれに直交するラインで測る住居面積は約33㎡で、大形の住居である。各壁の長さは、北東壁約5.8m、南東壁約6.0m、南西壁約5.6m、北西壁約5.8mである。壁の検出面からの深さは、01-ＳＩ34Ａと共有する南東壁で0.1m前後の立ち上がりを確認できるが、基本的に01-ＳＩ34Ａ構築時に破壊している。

床面は、01-ＳＩ34Ａと共有するとみられ、掘形底面の地山上面を基底面として、住居中央部から北隅にかけては貼床を施す。北側の貼床は本住居跡造成時のものである。壁溝は、調査した範囲では全周で確認した。上場幅0.18～0.3m、下場幅0.1～0.2m、床面からの深さ0.2～0.25mの断面台形状である。

床面及び壁溝内で７個のピットを確認した。Ｐ５・７は住居隅に位置する柱穴で、東・南隅にはこ

れに対応する柱穴がないが、01-ＳＩ34Ａの壁溝により消滅している可能性が高い。Ｐ１・３・６はいずれも壁中央部に位置する壁柱穴で、南西壁際にはＰ２・４が存在することから、壁溝を用いずに壁柱で壁板を保持する段階があったことを想起させる。本住居跡に伴うカマドは明確でないが、住居プランがほぼ同じ01-ＳＩ34Ａと同じ地点を利用していたと考えられる。01-ＳＩ34Ａカマド火床面の南側には、別に径0.2m前後の焼土があり、本住居跡に伴うカマドの火床面の可能性がある。

本住居跡は隅に主柱をもつ住居で、壁板保持では壁溝による時期と壁柱穴による時期の、２時期存在する可能性がある。

遺　物　本住居跡に伴う遺物は検出できなかった。

01-ＳＩ35(第23図～25図、図版13)

遺　構　ＭＯ・ＭＰ42・43グリッドの第Ⅴ層中位での黒色土の広がり及び、01-ＳＩ34Ａ床面のピット分布で確認した。本住居跡の立地点は台地上部平坦面だが、北西側調査区外の沢へわずかに傾斜する。01-ＳＩ34Ａ・Ｂと重複し、いずれよりも本住居跡の方が古い。周辺には01-ＳＩ150・158・、03-ＳＩ22・26がある。

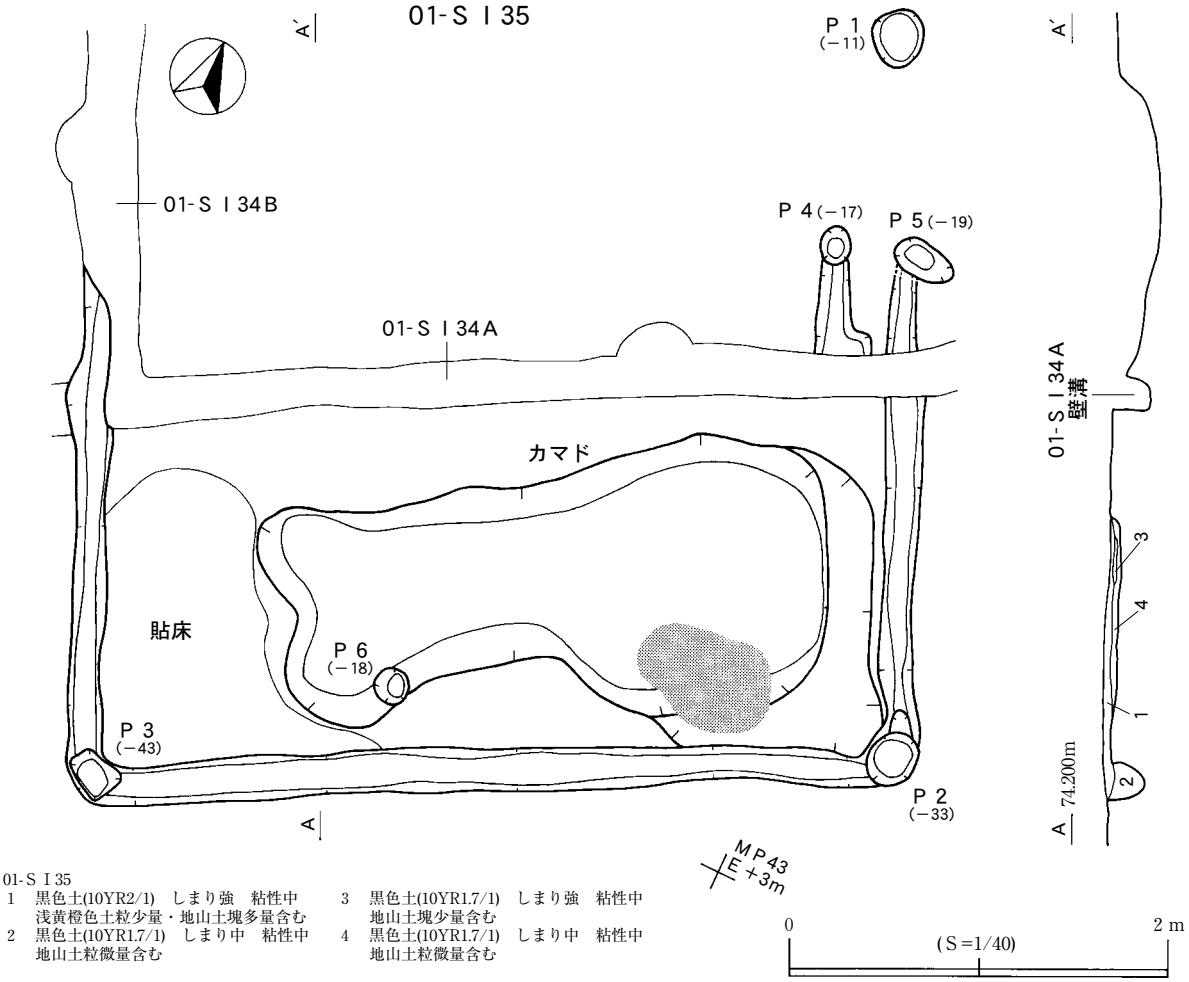
検出面がⅤ層中位のため、住居壁面はほぼ失われており、住居全体形は壁溝の形状で把握した。このため住居内堆積土もほとんど残っていないが、カマド前庭部にわずかに堆積土を確認でき、これを４層に分けた。１層はカマド前庭部を埋め立てる土で、しまりが強く地山土塊を多量に含んでおり、01-ＳＩ34Ｂ造成時の盛土とみられる。２層は壁溝内の壁板裏込め土である。３・４層はカマド前庭部底面の土で、比較的しまりが強く貼床に相当すると考えられる。

平面形は、住居北部が01-ＳＩ34Ａ・Ｂに切られて壁溝が欠失しているため、正確には分からないが、Ｐ１の配置からほぼ長方形と推測される。予測される主軸とそれに直交するラインで測る住居面積は約19㎡で、中形の住居である。カマドの付く壁に直交する主軸方位はＮ－24°－Ｗである。各壁の長さは、壁溝の残存する南東壁で約4.5m、Ｐ１までの距離で測った北東壁は約4.1mである。各壁の検出面からの深さ及び立ち上がり角度は不明である。

床面は部分的に失われているが、カマド前庭部の窪みが確認できることから、残存範囲の多くは床面に近く、01-ＳＩ34Ａ・Ｂとほぼ同レベルとみられる。掘形底面の地山上面を基底面とし、住居南東隅には貼床を施す。壁溝は重複してない範囲では全周認められ、01-ＳＩ34Ａ・Ｂの範囲内でも一部が確認できることから、本来は全壁際に存在したものと想定される。上場幅0.18～0.25m、下場幅0.05～0.16m、床面からの深さは0.2m前後の断面台形状である。Ｐ４に取り付く位置に短い壁溝があり、部分的に二重になっている。小規模な拡張があった可能性がある。

床面及び壁溝内で６個のピットを確認した。Ｐ１～３は住居隅に配置する主柱穴で、住居西隅に位置する部分は、01-ＳＩ34Ａ壁溝の造成時に破壊したものとみられる。Ｐ４・５は壁溝内に、Ｐ６はカマド前庭部に位置するが、用途は不明である。

カマドは南東壁の中央から北東寄りの位置で、橙色土やにぶい褐色土の広がりで確認した。堆積土は７層に分層した。煙道が全く確認できないことから、住居内堆積土同様に上部堆積土は削平されている。１層は灰白色粘土で前庭部の造成土である。２～６層までは上部構造の崩落層と考えられる。７層もカマド構築材に由来するものと思われる。火床面は不規則な楕円形状の被熱範囲で、長径0.7m、



第23図　01-S I 35

短径0.52mである。火床面主軸方位は、住居主軸方位に直交する。

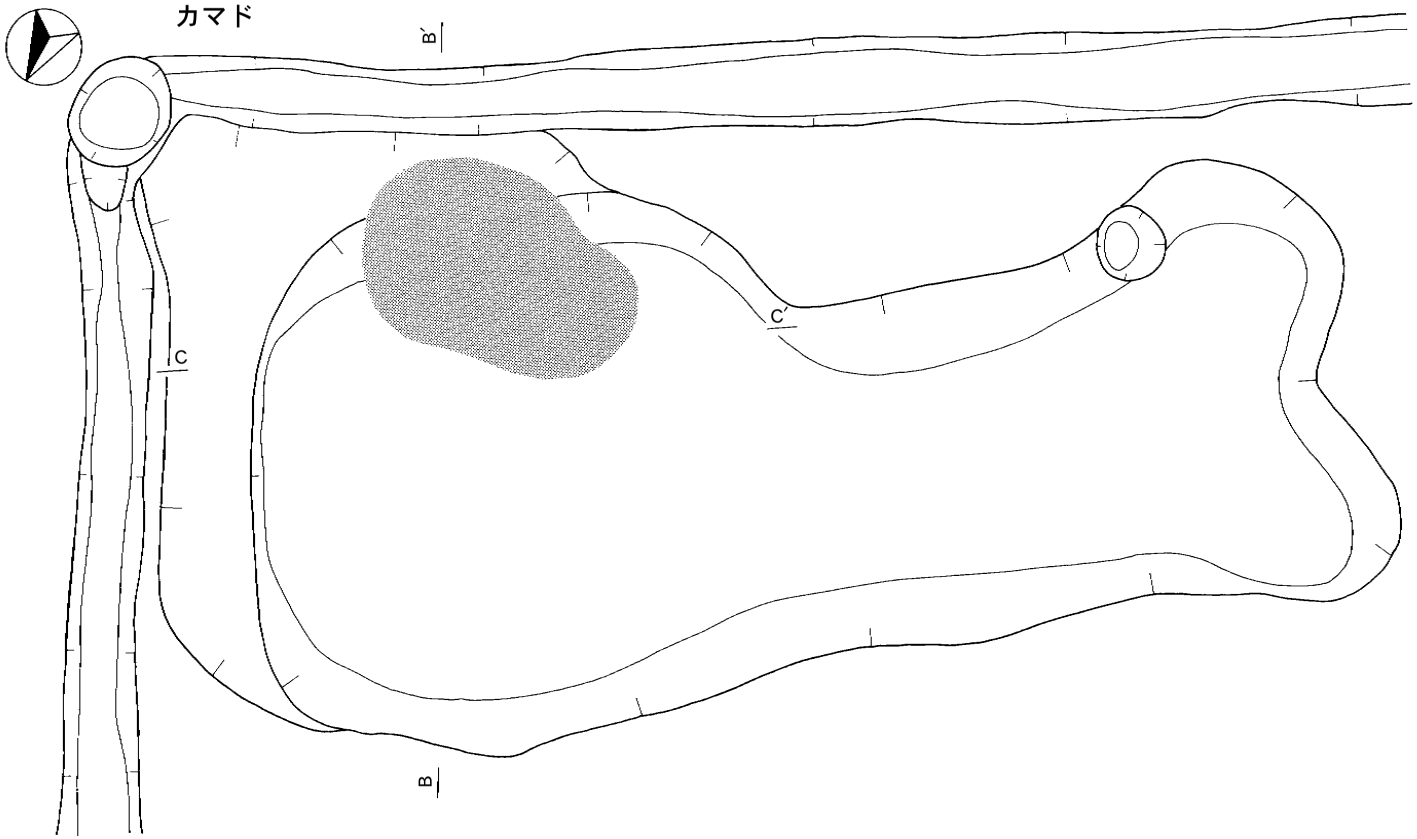
本住居跡は四隅に主柱をもち、南東壁にカマドを設置する住居と想定される。床面レベルや建物の軸方位、また、カマド前庭部形状の類似性からみて、01-S I 34A・Bとは連続する住居と考えられ、重複の多いこの地点の中でも古段階に位置付けられる。

遺　物(第25図)　住居跡内から土師器甕、鉄製品が出土した。土師器甕は、口縁部が２点、底部破片が１点出土しており、そのうち比較的大型の口縁部資料１点、底部資料１点を図示した。基本的に遺物の出土量は少ない。遺物はカマド周辺から出土しており、25図１はカマドの構築材、25図２は支脚の一部とみられ、住居廃棄時のカマド破棄行為時に、倒壊露出したものと考えられる(第25図)。

25図１は土師器甕の口縁部破片で、口縁部が緩く外反し胴上部に最大径をもつとみられる。外面は口端まで延びる縦位のケズリで、内面は斜位のヘラナデにより調整している。２は土師器甕の底部破片で外面縦位のケズリ、内面斜位のヘラナデ調整であり、１とほぼ同様な調整内容であることから、両者は同一個体の可能性が高い。３は板状の鉄片で、鉄鍋等の大型鉄製品の一部と考えられる。

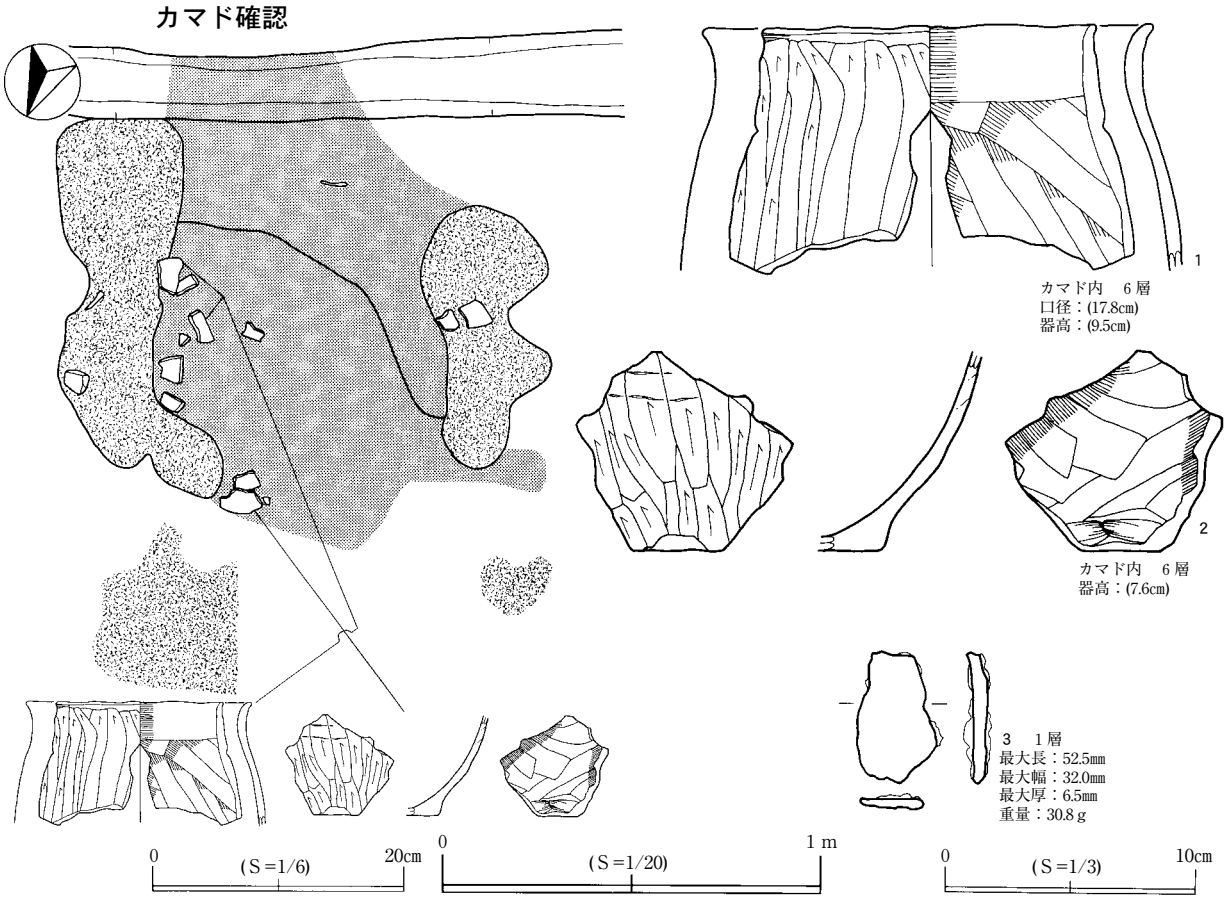
01-S I 74(第26図～29図、図版14)

遺　構　ＭＯ・ＭＰ37～39、ＭＱ38・39グリッドの第Ⅳ層中位で、白色粘土塊や地山土塊を含む黒色土の広がりで確認した。本住居跡の立地点は台地上部平坦面だが、緩やかに西へ傾斜している。重複



01-ＳＩ35カマド
1　灰白色土(10YR8/2)　しまり中　粘性中
　白色土粒微量含む
2　にぶい褐色土(7.5YR5/3)　しまり中　粘性中
　焼土粒微量含む
3　橙色土(５YR7/6)　しまり強　粘性中
4　浅黄橙色粘土(7.5YR8/4)　しまり中　粘性中
　黒色土粒・白色粘土粒微量含む
5　黄灰色土(10YR5/1)　しまり中　粘性中
　浅黄橙色粘土粒・黒色土粒微量含む
6　にぶい褐色土(7.5YR5/4)　しまり中　粘性中
　焼土粒微量含む
7　褐灰色土(10YR4/1)　しまり強　粘性中
　粘土粒微量含む
焼土　橙色(2.5YR6/6)

第24図　01-ＳＩ35カマド



第25図　01-ＳＩ35カマド遺物出土状況・出土遺物

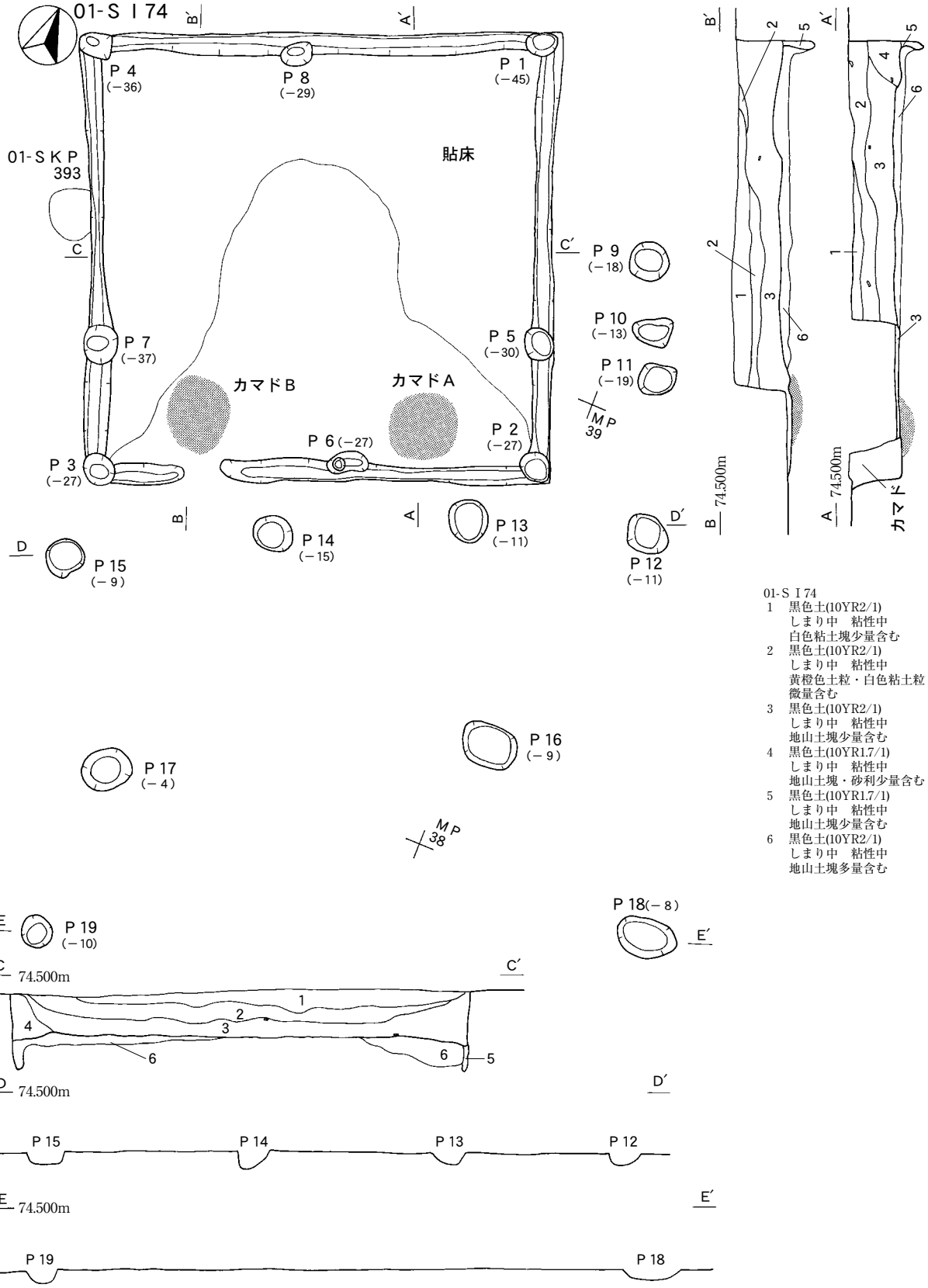
する遺構はなく、周辺には01-ＳＩ88・155がある。

堆積土は６層に分けた。１～４層はいずれも地山土粒を少量含む黒色基調の土で、レンズ状堆積を示すことから、周堤崩落土や周囲からの自然流入土による堆積土と考えられる。５層は壁板の腐植土である。６層は貼床で壁際に施す傾向がある。場所によっては壁溝内の裏込め土に直結する部分があり、住居の構築手順を窺うことができる。

平面形はほぼ正方形で、カマドの付く壁に直交する主軸方位はＮ－22°－Ｗである。予測される主軸とそれに直交するラインで測る住居面積は約15㎡で、中形の住居である。各壁の長さは、北東壁約3.8m、南東壁約4.0m、南西壁約3.9m、北西壁約4.1mである。各壁の検出面からの深さは0.4～0.45mで、ほぼ垂直に立ち上がる。

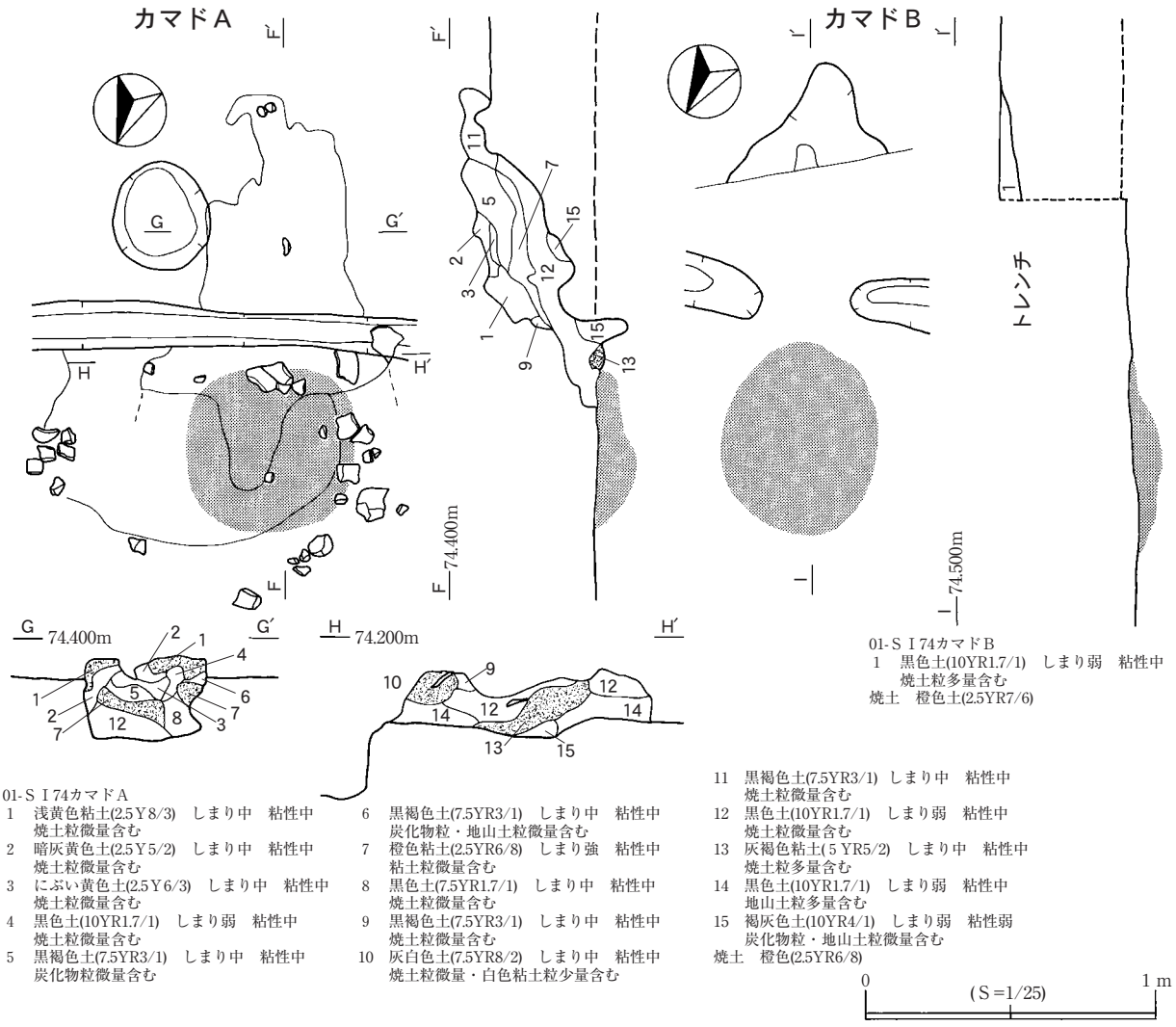
床面は、掘形底面を利用する場所と貼床を施す場所に分かれる。貼床は平均0.05～0.1mの厚さで土を締めているが、住居北東壁際は厚いところで0.2mほど土を造成している。貼床下部の掘形底面には、鋤先の当たった痕跡が明瞭に残っており(第28図)、住居構築時における地山掘削の段階で、貼床による床面調整を意図していたことが想定される。壁溝はカマドＢ脇以外の全周で確認した。上場幅0.1～0.2m、下場幅0.06～0.1m、床面からの深さは0.2～0.3mの断面台形状である。

床面及び竪穴掘り込み外部で19個のピットを確認した。Ｐ１～４は住居四隅の主柱穴である。柱穴間の距離は、柱穴中心間でＰ１－２間、Ｐ３－４間で約3.6m、Ｐ１－４間、Ｐ２－３間約3.7mである。四隅の柱穴間には各壁１基ずつ柱穴が伴い、Ｐ６・８は壁中央部に、Ｐ５・７は壁中央部よりや



01-S I 74
1　黒色土(10YR2/1)
　しまり中　粘性中
　白色粘土塊少量含む
2　黒色土(10YR2/1)
　しまり中　粘性中
　黄橙色土粒・白色粘土粒
　微量含む
3　黒色土(10YR2/1)
　しまり中　粘性中
　地山土塊少量含む
4　黒色土(10YR1.7/1)
　しまり中　粘性中
　地山土塊・砂利少量含む
5　黒色土(10YR1.7/1)
　しまり中　粘性中
　地山土塊少量含む
6　黒色土(10YR2/1)
　しまり中　粘性中
　地山土塊多量含む

第26図　01-S I 74



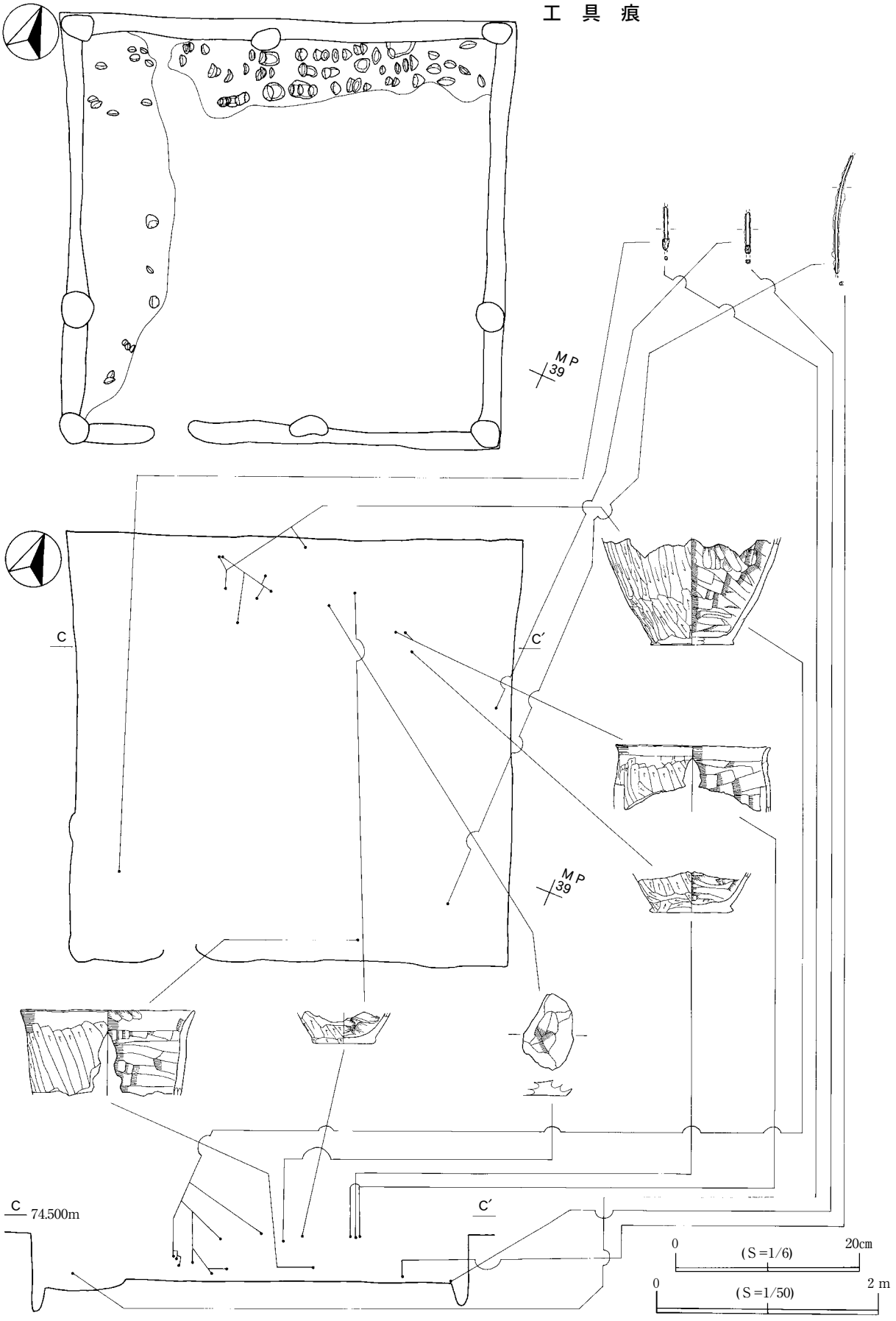
第27図　01-SＩ74カマド

や南側の位置でそろえてある。貼床を厚く施している住居北側の柱穴が深くなる傾向がみられる。

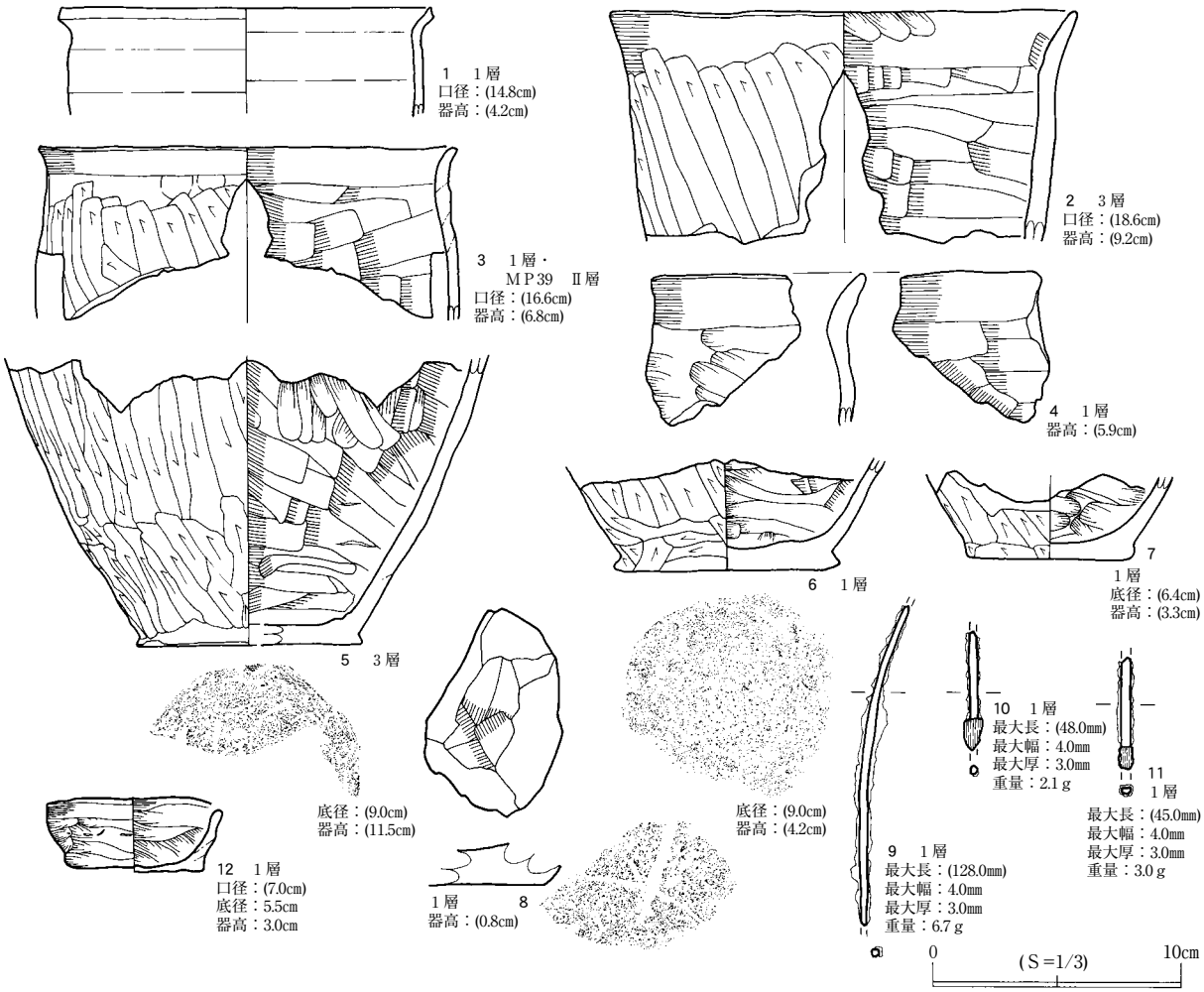
以上は住居内に配置する構造材に関わる柱穴だが、本住居跡の場合住居周辺部の削平が少なく、より当時の生活面に近い層位で遺構を検出しているため、住居周辺部に規則的に配置してある柱穴を確認できた。まずＰ12～15・18・19は「コ」字状に柱を配置する掘立柱建物跡になる可能性が高い。これは竪穴住居跡の軸方位とそろい、両者がセットで建物を構成していたと考えられる。この掘立柱建物跡のＰ12・18ラインの延長上に位置するのがＰ９～11で、付属施設と考えられる。またＰ16・17は、Ｐ13・15と組み合わせた場合に４本柱の掘立柱建物跡になる。カマドが２時期あることから、掘立柱建物跡も２時期存在していた可能性が高い。また、Ｐ12～19までがかなり浅くなるが、これは当時の生活面より低い位置での検出状態にあることを示している。

カマドは２か所あり、南東壁の中央からやや北東寄りの位置でカマドＡを、同じく南東壁の中央からやや南西寄りの位置でカマドＢを確認した。カマドＢは火床面のみの検出で、カマドＡに構築土の残存が認められることから、カマドＡが新しいと判断される。

カマドＡの堆積土は15層に分層できるが、１～14層まではカマド構築土の崩落層である。15層は壁溝内にも認められ、カマド構築土の基底部の残存と考えられる。この状況からカマドの上部構造は、



第28図　01-ＳＩ74遺物出土状況



第29図　01-ＳＩ74出土遺物

基本的に破壊されていることが分かる。カマドの下部構造では、煙道と火床面を確認した。煙道は幅0.5ｍほどのスロープ状で、住居外に約0.7ｍ延びる。火床面は円形状の被熱範囲で径約0.6ｍである。火床面主軸方位は、住居主軸方位に直交する。

カマドＢは、火床面とわずかに煙道の一部を確認できた。煙道はスロープ状で約幅0.5ｍ、長さ約0.35ｍである。火床面は楕円形状の被熱範囲で長径0.68ｍ、短径0.55ｍである。火床面主軸方位は、住居主軸方位に平行する。

本住居跡は四隅に主柱をもち、南東壁にカマドを設置する住居である。住居外部には掘立柱建物を伴い、これが一体となって建物を構成していたと考えられる。自然堆積により埋没するが、周辺部は住居分布が比較的希薄な地区で、埋め立て造成が行われずに放置された結果と考えられる。

遺　物(第29図)　住居跡内から土師器甕・坏、鉄製品、土製品が出土した。土師器甕は、口縁部が17点、底部が15点出土しており、そのうち大型の口縁部資料４点、底部資料４点を図示した。図示しなかったものを含めた口縁部分類別数量はＡ類(３点)、Ｂ類(０点)、Ｃ類(６点)、Ｄ類(２点)、分類不能(６点)で、底部分類別数量は砂底(10点)、ナデ(２点)、ケズリ(３点)の内訳になる。Ｃ類と砂底が主体で、Ａ類を伴う。

遺物の出土状況は、平面分布では住居南隅を除き満遍なく出土している。中でも北西壁際とカマド周辺部に比較的密集する傾向にあり、垂直分布では鉄製品とカマド周辺部から出土した29図２以外、

多くが住居内１～３層の流入土中に含まれる(第28図)。これは、住居破棄後の埋没過程における周囲からの遺物廃棄状況を表しており、出土遺物の多くは、本住居跡廃絶以後の流れ込みとみられる。

29図１は内外面共にロクロナデを残す小型の土師器甕で、口唇をつまみ出し状に鋭く作りだしている。29図２は口縁部が弱く外反する器形の土師器甕で、比較的厚手である。外面は縦位ケズリ、内面は横位ヘラナデ調整である。３・４は口縁部が外反し、胴上部に最大径をもつ土師器甕で、３は外面に縦位ケズリ、内面に横位ヘラナデが、４は外面にユビナデ、内面に横位ヘラナデが認められる。５～８は土師器甕の底部で、５・６・８が砂底、７がケズリによる再調整を施している。５～７は外面に縦位のケズリを施した結果、底部外縁が張り出している。

29図９～11はいずれも断面四角形で両端を欠損する棒状の鉄製品である。９は比較的長く残っており、紡錘車の軸になる可能性がある。10・11は柄の残存部とみられる木質が残っている。21図12は小型土器である。皿状の器形で、輪積痕が残る。

01-ＳＩ86(第30図～33図、図版15・157)

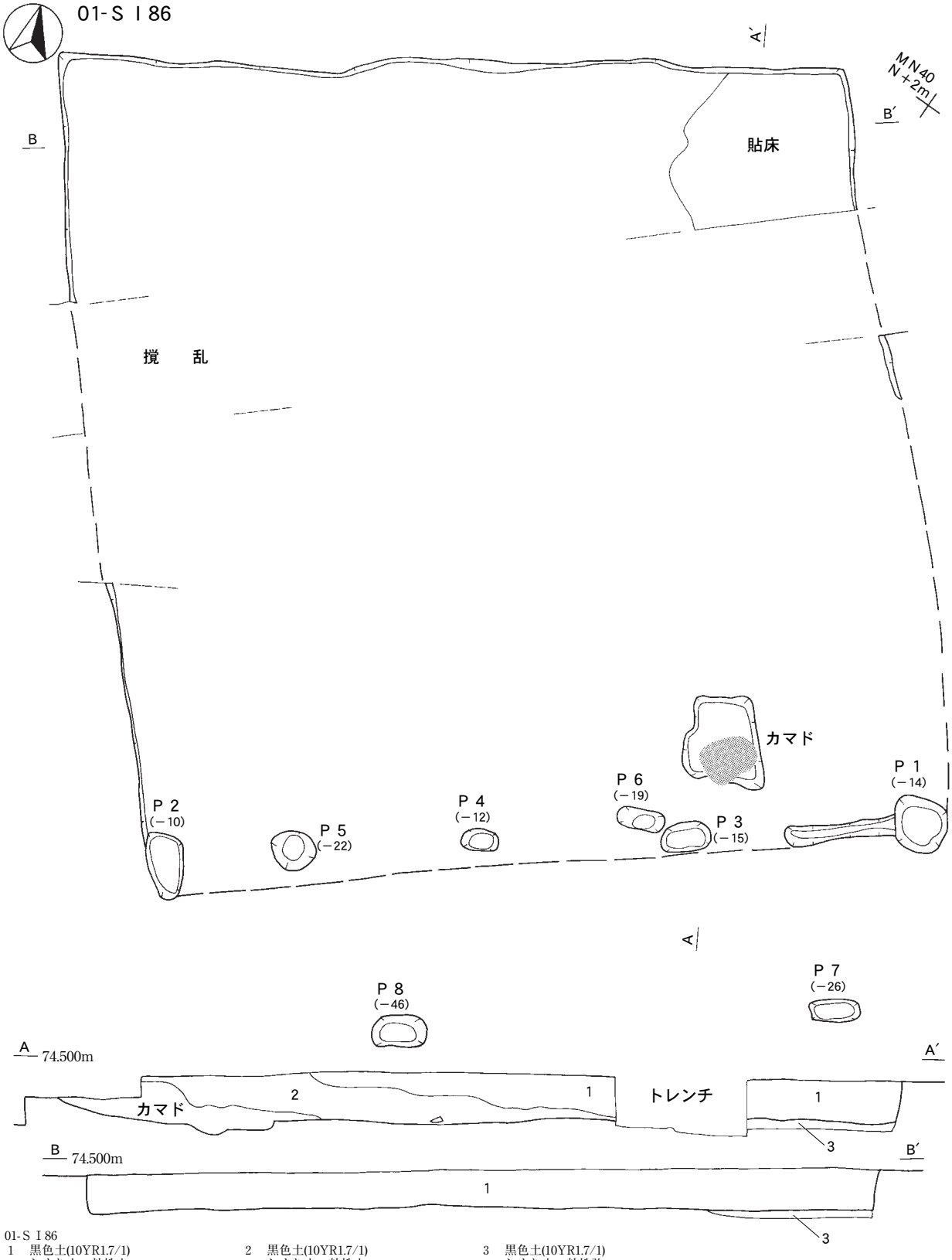
遺　構　ＭＬ38・39、ＭＭ38～40、ＭＮ38・39の01-ＳＩ87・88・190上部及び床面で、プランの違う竪穴掘り込みや、カマドと柱穴の分布で確認した。本住居跡の立地点は台地上部平坦面である。01-ＳＩ87・88・190や01-ＳＤ57と重複し、01-ＳＩ87・88・190よりも本住居跡が新しく、01-ＳＤ57より本住居跡が古い。周辺には01-ＳＩ192・193・359、01-ＳＢ328、01-ＳＤ195がある。

堆積土は３層に分けた。１・２層は住居内を埋め尽くす堆積土で、２層がカマド付近に分布する以外は、ほとんどが１層であることから、本住居跡は人為的に埋め立てたと考えられる。これは、本住居跡上部の01-ＳＤ57構築に関わる造成土と考えられる。なおカマド側に２層が多いのは、本住居跡南半に大きく重なる01-ＳＩ190の埋土の掘り返しに由来すると考えられる。３層は貼床の土で、本住居跡より床面レベルの低い01-ＳＩ87上部に集中的に施す。

平面形は平行四辺形状で、特に北東壁のラインは中央部でカーブするとみられる。この歪な形状は、近接する01-ＳＤ195のラインに平行するもので、両者の同時併存を窺わせる要素である。カマドの付く壁に直交する主軸方位はＮ－42°－Ｗである。予測される主軸とそれに直交するラインで測る住居面積は約49㎡で、特大形の住居である。各壁の長さは、ピットの配置による推測を含めて、北東壁約6.8m、南東壁約6.9m、南西壁約7.2m、北西壁約6.7mである。各壁の検出面からの深さは0.3～0.38mで、ほぼ垂直に立ち上がる。

床面は、重複する01-ＳＩ88・190とほぼ同レベルで、貼床で埋め立てる01-ＳＩ87とのレベル差も最大で0.1mであり、いずれも基本層位のⅥ層上面、もしくはわずかに掘り込んだレベルを床面としている。本住居跡の床面も、大部分は掘形底面の地山上面を利用しており、01-ＳＩ87上部のみ貼床を施す。壁溝は基本的には確認できないが、南東壁のＰ１脇に短く溝が認められる。軟質な壁を部分的に補強した痕跡と考えられる。

床面及び竪穴掘り込み外部で、本住居跡に伴うとみられる８個のピットを確認した。Ｐ１・２は南東壁の両隅に位置しており、本遺跡の竪穴住居跡に一般的にみられる隅柱の配置と共通するが、対応する北西壁両隅には、明らかに柱穴が存在しない。単純に上屋の構造材に関わる柱穴とは考えにくく、南東壁が01-ＳＩ190の造成土を壁面としていることから、壁の補強に関わる構造材に関わる柱穴の可



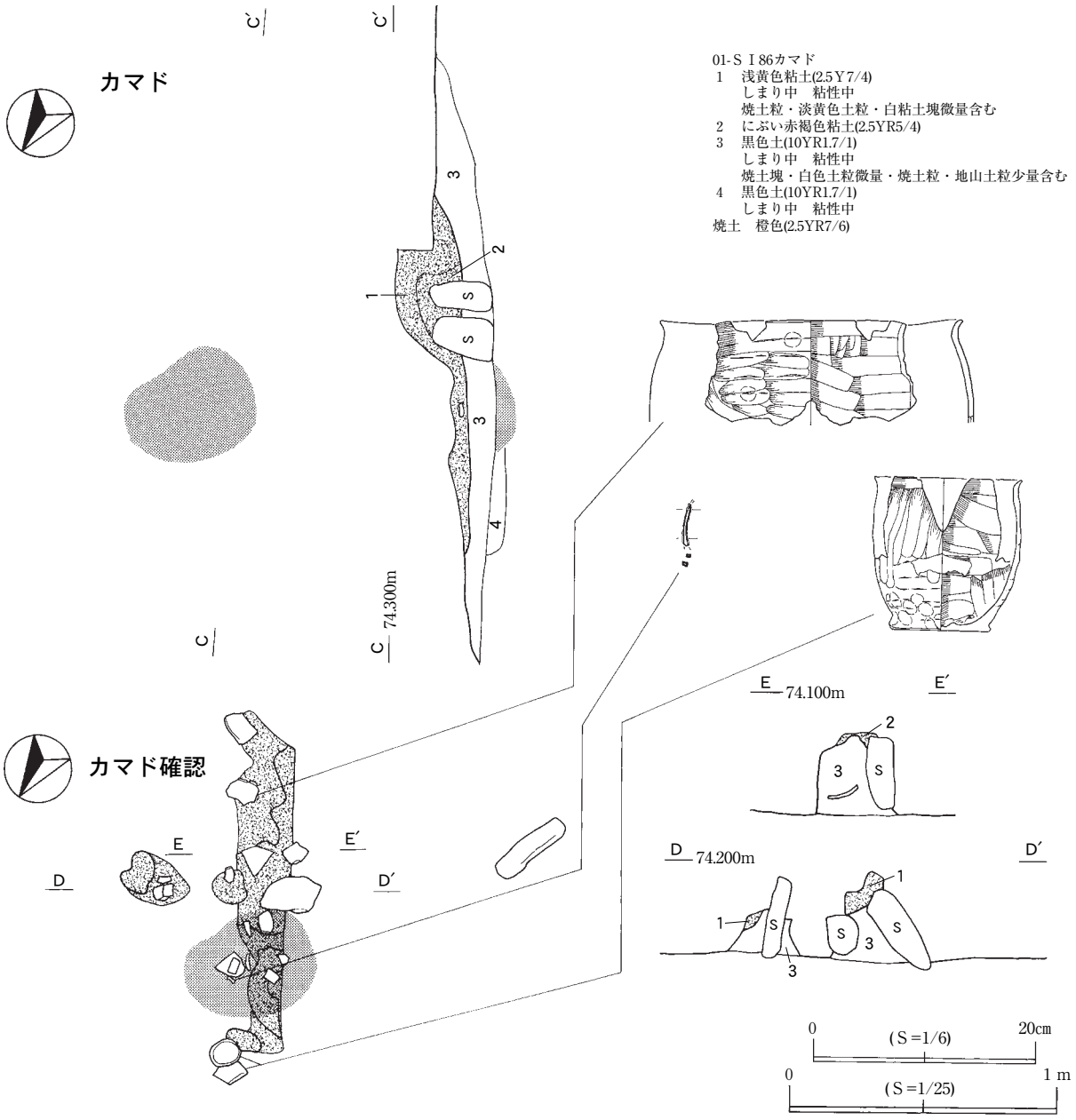
01-S I 86

1　黒色土(10YR1.7/1)
　しまり中　粘性中
　白色土粒少量・地山土塊多量含む

2　黒色土(10YR1.7/1)
　しまり中　粘性中
　白色土粒微量・地山土塊多量含む

3　黒色土(10YR1.7/1)
　しまり中　粘性強
　地山土塊多量含む

第30図　01-S I 86

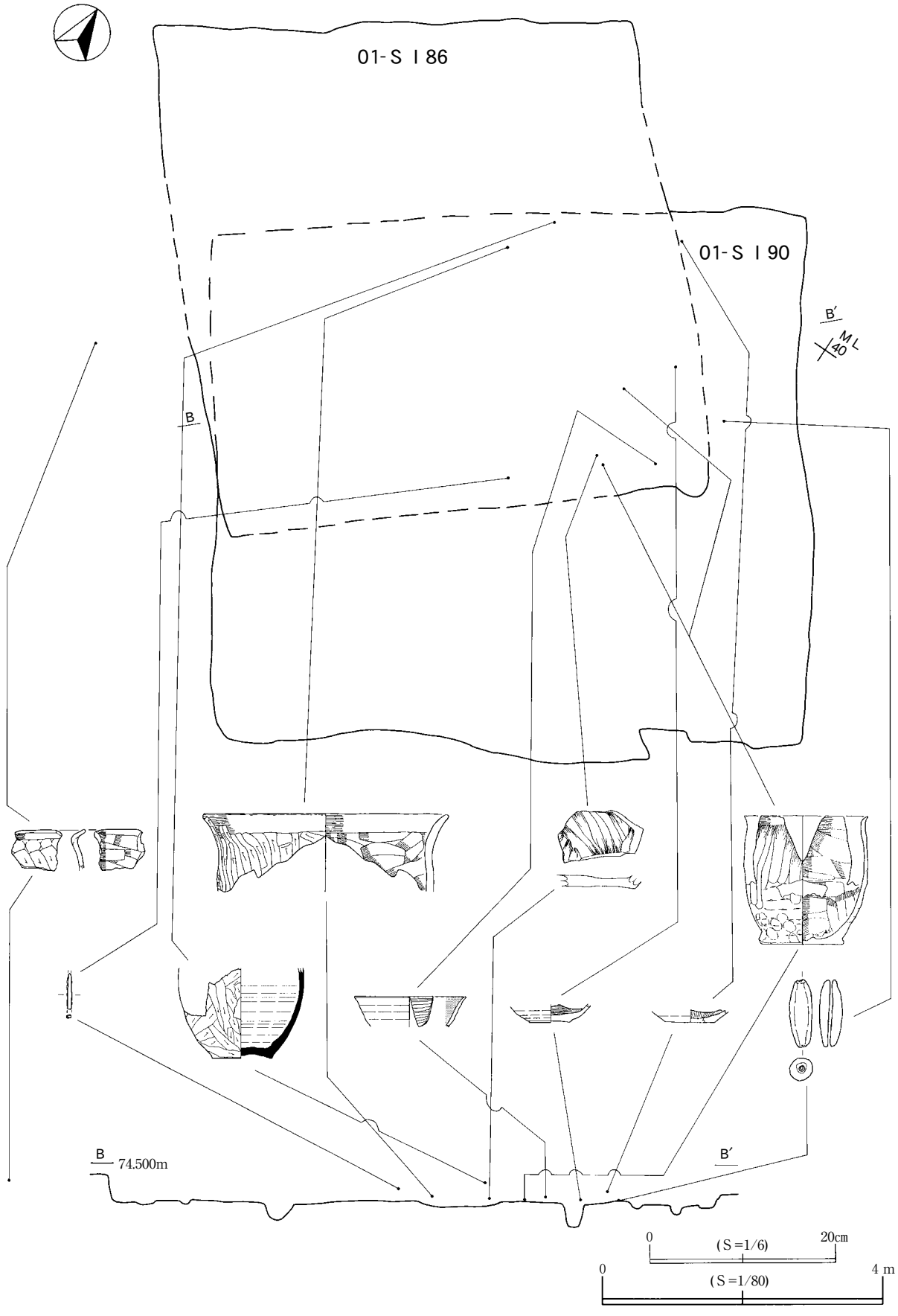


第31図　01-ＳＩ86カマド・遺物出土状況

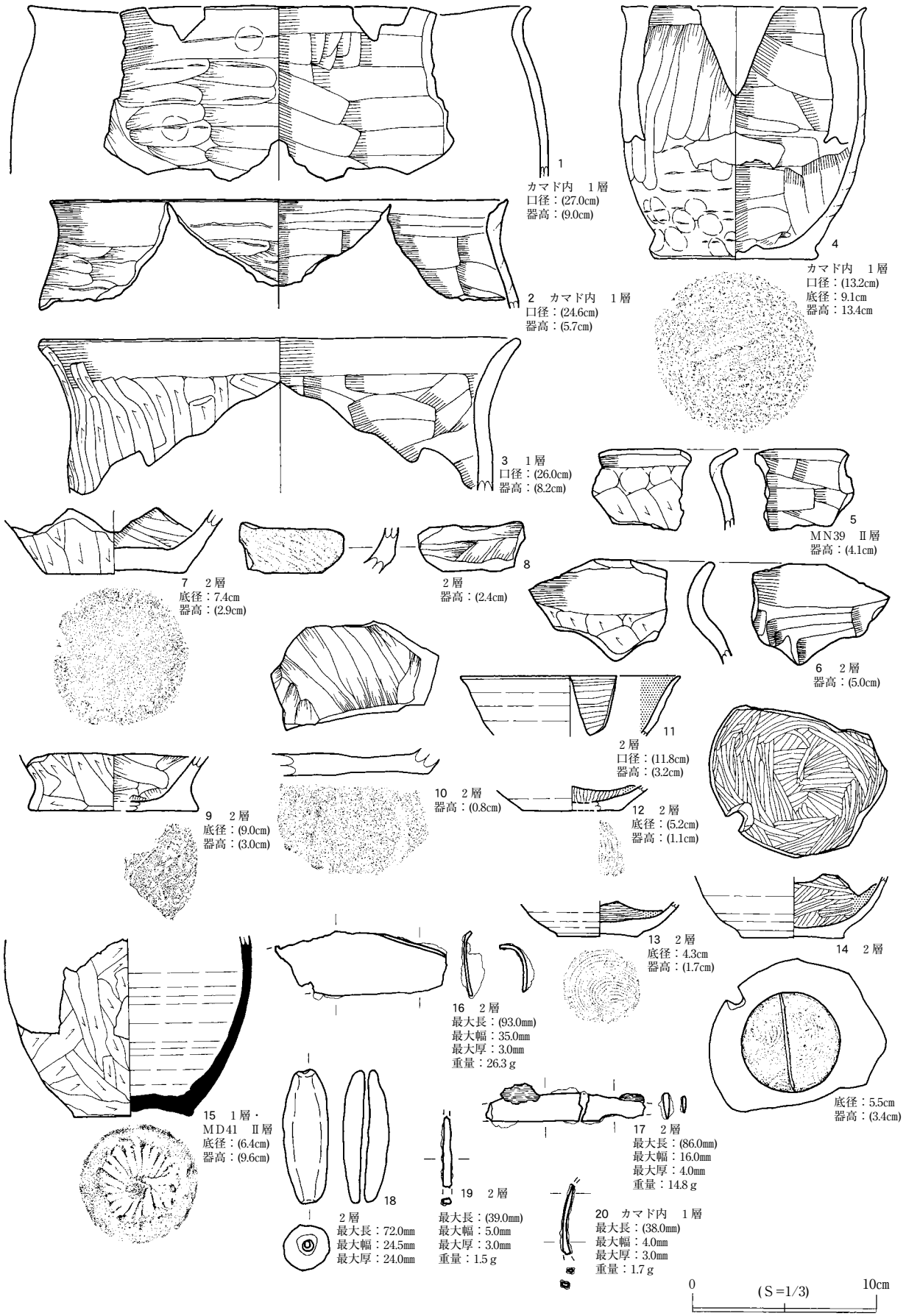
能性が高い。Ｐ３～６も南東壁際に並び、壁板の補強材を据えた跡と考えられる。Ｐ７・８は竪穴掘り込み外部だが、２個のピットをつなぐラインが本住居跡に平行することや、この他多数存在する住居の構造材配置に当てはまらないことから、本住居跡に伴うと判断した。配置からみて、張り出し状の施設が付属していたと想像される。

カマドは南東壁の中央からやや北東寄りの位置で、浅黄色土やにぶい赤褐色土の広がりで確認した。堆積土は４層に分層した。１・２層はいずれもカマド構築土の崩落層である。４層は前庭部への貼床で、火床面はその貼床の一部にかかっている。カマド下部構造では、煙道の一部と火床面が残っている。煙道底面は緩やかなスロープ状に立ち上がる。火床面は不規則な楕円形状の被熱範囲で長径0.43m、短径0.38mである。火床面主軸方位は、住居主軸方位に直交する。

本住居跡は、床面に柱穴や壁溝を伴わない上部構造の住居で、南東壁外部に張り出し状施設が付属



第32図　01-S I 86遺物出土状況



第33図　01-ＳＩ86出土遺物

すると考えられる。この地点に占地する住居の中では最も新しい段階のものだが、最終的には上部に溝を掘る際に人為的に埋め立てている。

遺　物(第33図)　住居跡内から土師器甕・坏、須恵器壺、鉄製品、土製品が出土した。土師器甕は、口縁部が25点、底部が18点出土しており、そのうち比較的大型の口縁部資料６点、底部資料５点を図示した。図示しなかったものを含めた甕の口縁部分類別数量はＡ類(１点)、Ｂ類(１点)、Ｃ類(14点)、Ｄ類(４点)、分類不能(５点)で、底部分類別数量は砂底(12点)、木葉痕(１点)、ナデ(２点)、ケズリ(３点)の内訳になる。Ｃ類と砂底の数量が突出している。

遺物の出土傾向では、住居南半からの出土が多く認められる(第32図)。この範囲は、01-ＳＩ190の埋土に由来するとみられる２層の分布範囲にも重なっており、中には01-ＳＩ190廃絶時に伴う遺物を含むと考えられる。カマド周辺から出土した遺物では、33図４が火床面よりもカマド焚口部に近い位置にあり、支脚として利用した可能性が高い(第31図)。

33図１～３は比較的大型の土師器甕の口縁部破片で、３は口縁部に、１・２は胴上部に最大径をもつ器形である。３は外面を縦位のケズリで、内面を横位のヘラナデで調整している。１・２は外面が横位の粗雑なユビナデによる調整のため、輪積痕が残る。内面は比較的丁寧な横位ヘラナデで調整している。４は比較的小型の土師器甕で、口縁部が緩く外反し、底部は砂底である。内面調整は密にヘラナデを施すが、外面下半部は疎らな指の押さえのみで、極めて粗雑な作りである。出土位置を踏まえれば、当初から支脚専用に作った可能性がある。５・６は土師器甕の口縁部破片で、５は外折し、６は頸部に弱い段を有する器形である。

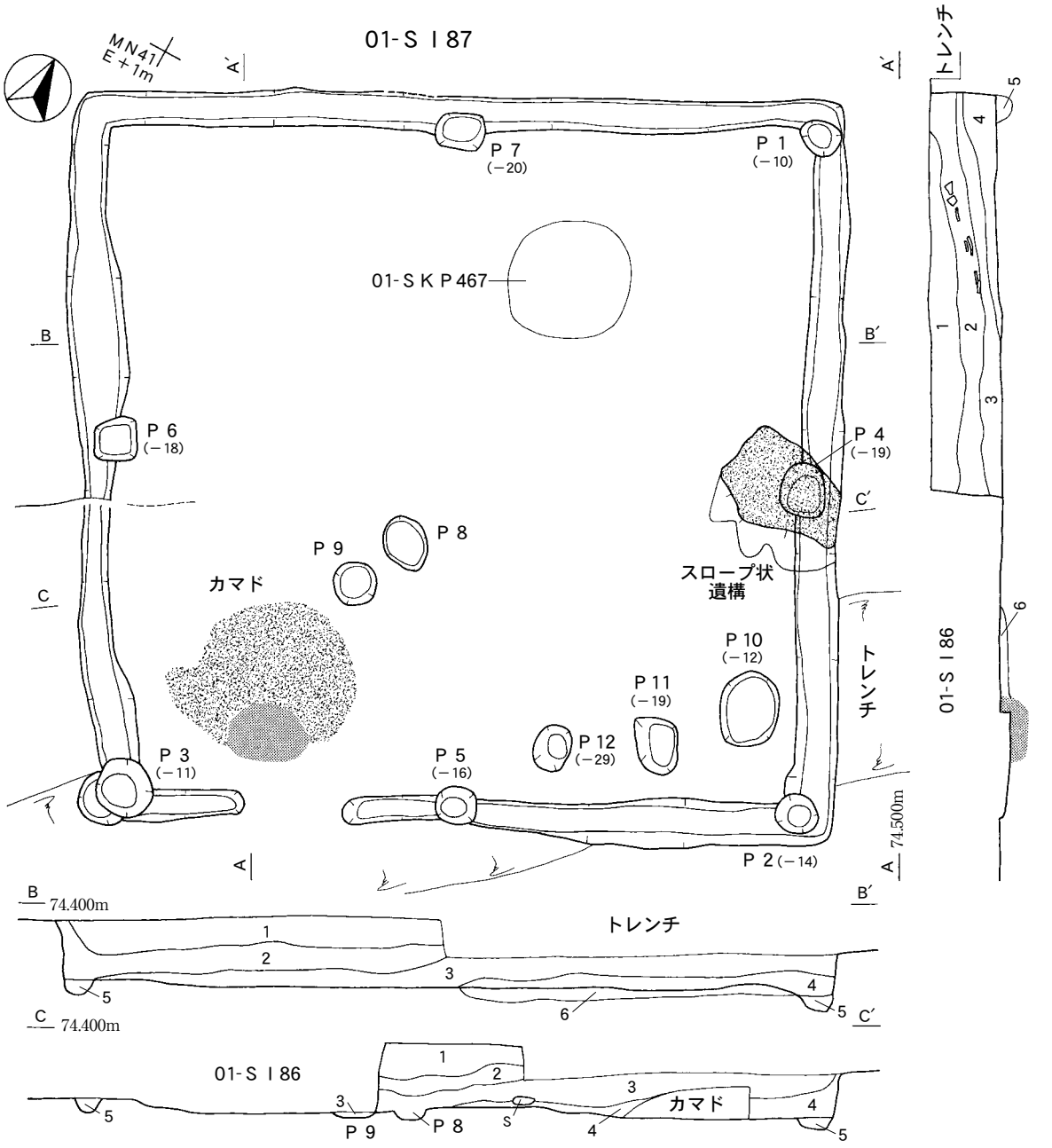
33図７～10は土師器甕の底部または底部付近の破片である。７・10は砂底、９は木葉痕を残す。８は外面にタタキ目を残す破片である。７・８・10は底部から直線的に外傾し、９は底部外縁が張り出す形状である。33図11～14は土師器坏Ｂ類である。11は口縁部がわずかに外反して先細りになる器形である。13・14は底部が突出する形状である。14は底部中央部に回転糸切後に、ヘラ描きの線を１本施している。内面には底部付近に放射状の、その上部には横位のミガキを施している。胴上半部を打ち欠いており、廃棄時における何らかの儀礼行為の存在を窺わせる。33図15は須恵器小型甕の肩部以下の資料とみられる。底部が上底状の高台になり、菊花文状のケズリを施す。

33図16・17・19・20は鉄製品である。16は鉄板の側縁を折り曲げたもので、05-ＳＩ02出土の刀に類似する。17は刀子で刀身半ばから茎の付け根にかけて残存している。部分的に木質が残り、柄と鞘がついた状態で廃棄した可能性がある。19・20は両端を欠失している棒状の鉄製品で、詳細な機能は不明であるが、20は断面形がやや扁平で、外形ラインがわずかにカーブしていることから、鉄鍋の蔓になる可能性が高い。18は土錘である。

01-ＳＩ87(第34図～36図、図版16)

遺　構　ＭＬ40・41、ＭＭ39～41グリッドの第Ⅳ層中位で、地山土粒を含む黒色土の広がりで確認した。本住居跡の立地点は台地上部平坦面である。01-ＳＩ86、01-ＳＤ195と重複し、いずれよりも本住居跡が古い。周辺には01-ＳＩ88・190・192・193・359、01-ＳＢ328、01-ＳＤ57がある。

堆積土は６層に分けた。１～４層が住居内を埋め尽くす主な堆積土である。Ａ－Ａ´断面の堆積状況ではレンズ状堆積を示しており、自然堆積による埋没過程と想定されるが、２層中には遺物・礫・

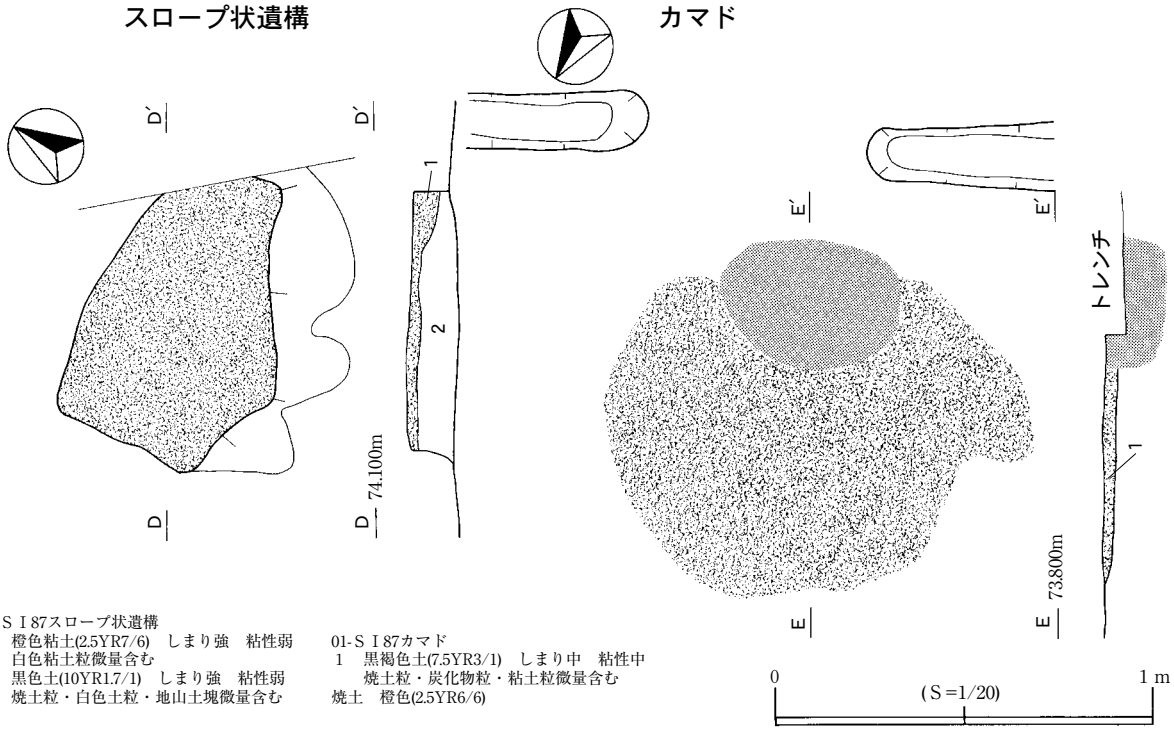


第34図　01-S I 87

焼土・粘土塊の投棄が認められる。住居廃絶後一定期間放置され、廃棄場として利用された後、１層の土で完全に造成したと考えられる。５層は壁溝内堆積土だが、壁板と裏込めの境界が明確でなく、廃絶時には壁板を撤去していたと考えられる。６は貼床の土である。

平面形はほぼ正方形で、カマドの付く壁に直交する主軸方位はＮ－28°－Ｗである。予測される主軸とそれに直交するラインで測る住居面積は約20㎡で、中形の住居である。各壁の長さは、北東壁約4.4m、南東壁約4.5m、南西壁約4.4m、北西壁約4.5mである。各壁の検出面からの深さは、南西壁の残りの良い部分で0.35mで、全周ほぼ垂直に立ち上がる。

床面は基本的に掘形底面を利用するが、北部隅から中央部にかけて貼床を施す。貼床は0.05～0.1m



01-ＳＩ87スロープ状遺構
1　橙色粘土(2.5YR7/6)　しまり強　粘性弱
　白色粘土粒微量含む
2　黒色土(10YR1.7/1)　しまり強　粘性弱
　焼土粒・白色土粒・地山土塊微量含む

01-ＳＩ87カマド
1　黒褐色土(7.5YR3/1)　しまり中　粘性中
　焼土粒・炭化物粒・粘土粒微量含む
焼土　橙色(2.5YR6/6)

第35図　01-ＳＩ87カマド

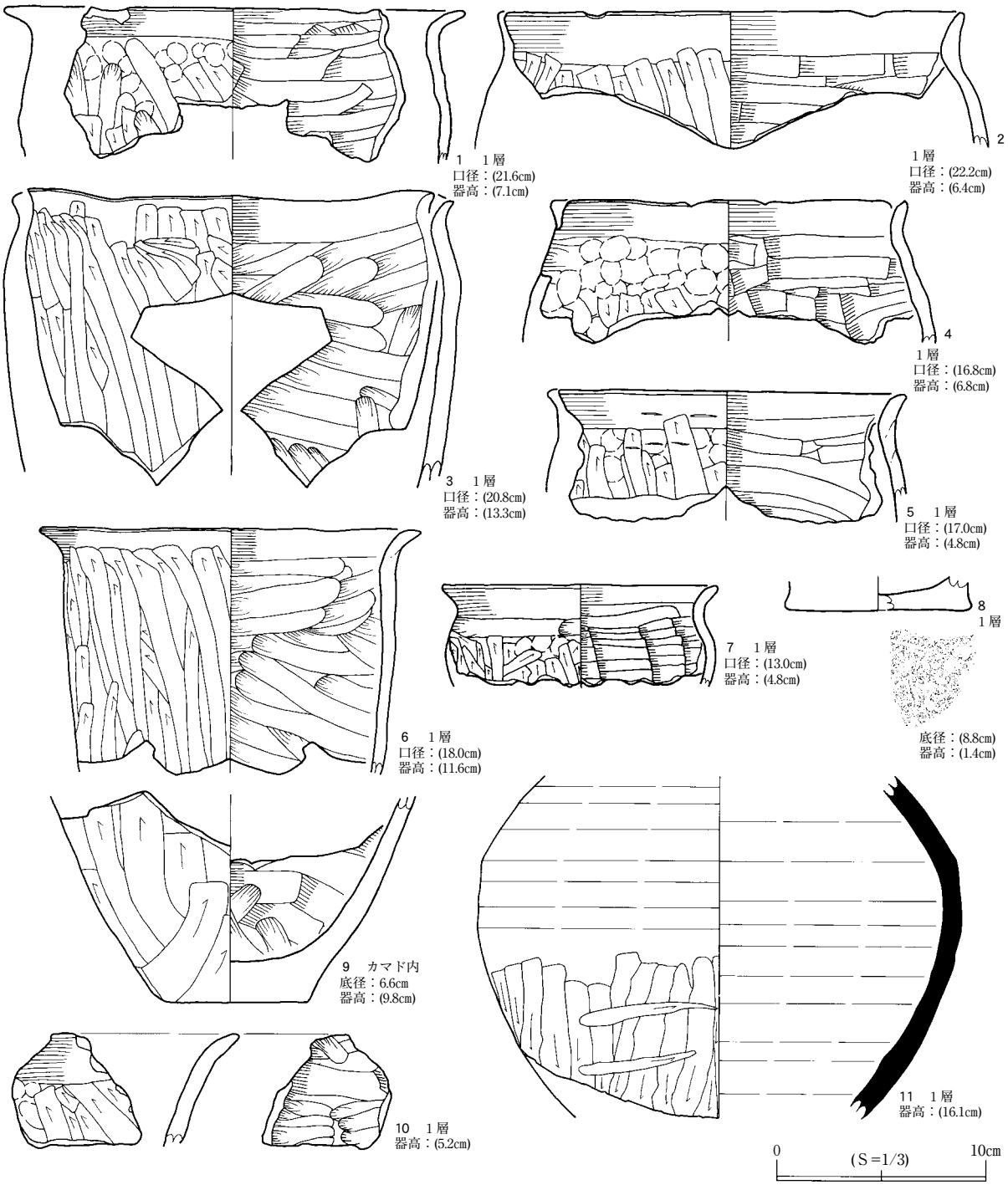
の厚さで土を締めている。壁溝はカマド以外の全周で確認した。上場幅0.15～0.34m、下場幅0.1～0.25m、床面からの深さ0.1～0.15mの断面台形状である。

床面や壁溝内部で12個のピットを確認した。Ｐ１～３は住居隅の主柱穴である。西隅では確認できないが、壁溝掘形を利用したと考えられる。柱穴間の距離は、柱穴中心間で測ってＰ１－２間約4.0m、Ｐ２－３間約4.0mである。各壁の中央部には１個ずつ柱穴があり、壁板保持の壁柱穴とみられる。Ｐ11・12は南東壁中央部からやや北東寄りに、２個並べて配置する。壁に近く、カマドとは中軸線を挟んで線対称の位置であることから、出入口施設に関わる下部構造と考えられる。これらに対しＰ８～10は比較的浅く、配置に規則性が認められない。北東壁沿いのＰ10北脇には、スロープ状に橙色粘土を貼っている部分があり、位置や傾斜からみて出入り口施設と考えられる。

カマドは、南東壁の中央からやや南西寄りの位置で、火床面の広がりで確認した。本住居跡を切る01-ＳＩ86の造成時に完全に上部構造が破壊されており、堆積土もほとんど残っていない。確認できた１層は、カマド前庭部の貼床に伴う土とみられる。火床面は楕円形状の被熱範囲で、長径0.48m、短径0.35mである。火床面主軸方位は、住居主軸方位に直交する。

本住居跡は四隅に主柱をもち、南東壁にカマドを設置する住居である。埋没過程は一定期間の自然堆積の後、人為的に埋め立てている。01-ＳＩ190と隣接しており、これが拡張するのに伴い廃絶した可能性が高い。

遺　物(第36図)　住居跡内から土師器甕・鍋、須恵器壺が出土した。土師器甕は口縁部が26点、底部が９点出土している。そのうち比較的大型の口縁部資料７点、底部資料２点を図示した。図示しなかったものを含めた口縁部分類別数量はＡ類(３点)、Ｂ類(３点)、Ｃ類(11点)、Ｄ類(２点)、分類不能(７点)で、底部分類別数量は砂底(１点)、木葉痕(５点)、ナデ(２点)、ケズリ(１点)の内訳になる。他の住居に比べ木葉痕を残すものの割合が多い。しかし、遺物の多くは住居内１～３層の廃棄層中に多く含ま



第36図　01-ＳＩ87出土遺物

れることから、本住居の遺物相を表すかは定かでない。

36図１～６は中・大型の土師器甕である。１は口縁部が強く外反して、胴上部が張る。外面口縁部付近には指の押さえが認められるが、それ以下には縦位のケズリを施す。内面は横位ヘラナデで調整している。３は口縁部が弱く外反し胴上半部に最大径をもつ器形で、６は口縁部が外反して胴部は底部にむけて直線的にすぼまる器形である。いずれも外面は縦位のケズリ、内面は横位・斜位のユビナデで調整している。２・４・５は、胴上半部の最大径部から口縁部にかけてすぼまり、口縁部が弱く外反または直立気味に立ち上がる器形である。いずれも外面は縦位ケズリ、内面は横位ヘラナデ調整である。

36図７は小型の土師器甕で、頸部に弱い段をもち、口縁部が強く外反する器形である。外面は縦位のケズリ、内面は横位等間隔のヘラナデで調整している。36図８・９は土師器甕の底部資料で、８は木葉痕が、９はナデによる調整が認められる。８は底部外縁がわずかに張り出し、９は底部器壁が厚く、やや突出する形状である。10は土師器鍋の口縁部破片で、外面は縦位ケズリ、内面は横位ユビナデが認められる。36図11は、須恵器壺の肩部から底部付近までの資料である。外面胴下半部は、縦位のケズリで再調整を施している。

01-ＳＩ88(第37図～39図、図版17・148・159・160)

遺　構　ＭＭ～ＭＯ39・40グリッドの第Ⅳ層中位で、地山土粒を含む黒色土の広がりで確認した。本住居跡の立地点は台地上部平坦面で、ほとんど傾斜がない。01-ＳＩ86と重複し、本住居跡が古い。周辺には01-ＳＩ74・87・190・192・193・359、01-ＳＢ328、01-ＳＤ57がある。

堆積土は２層に分けた。１層が住居内を埋め尽くす堆積土で、全体に均質であり人為的な埋め戻しと考えられる。壁溝内堆積土は明確に区分できず、壁板及び構造材は廃絶時に撤去していたと想定される。２層は貼床の土で、北東・南西壁際に多く施している。特に南西壁際では、壁溝底面まで及び、壁溝内の裏込めまで一括して造ったと考えられる。

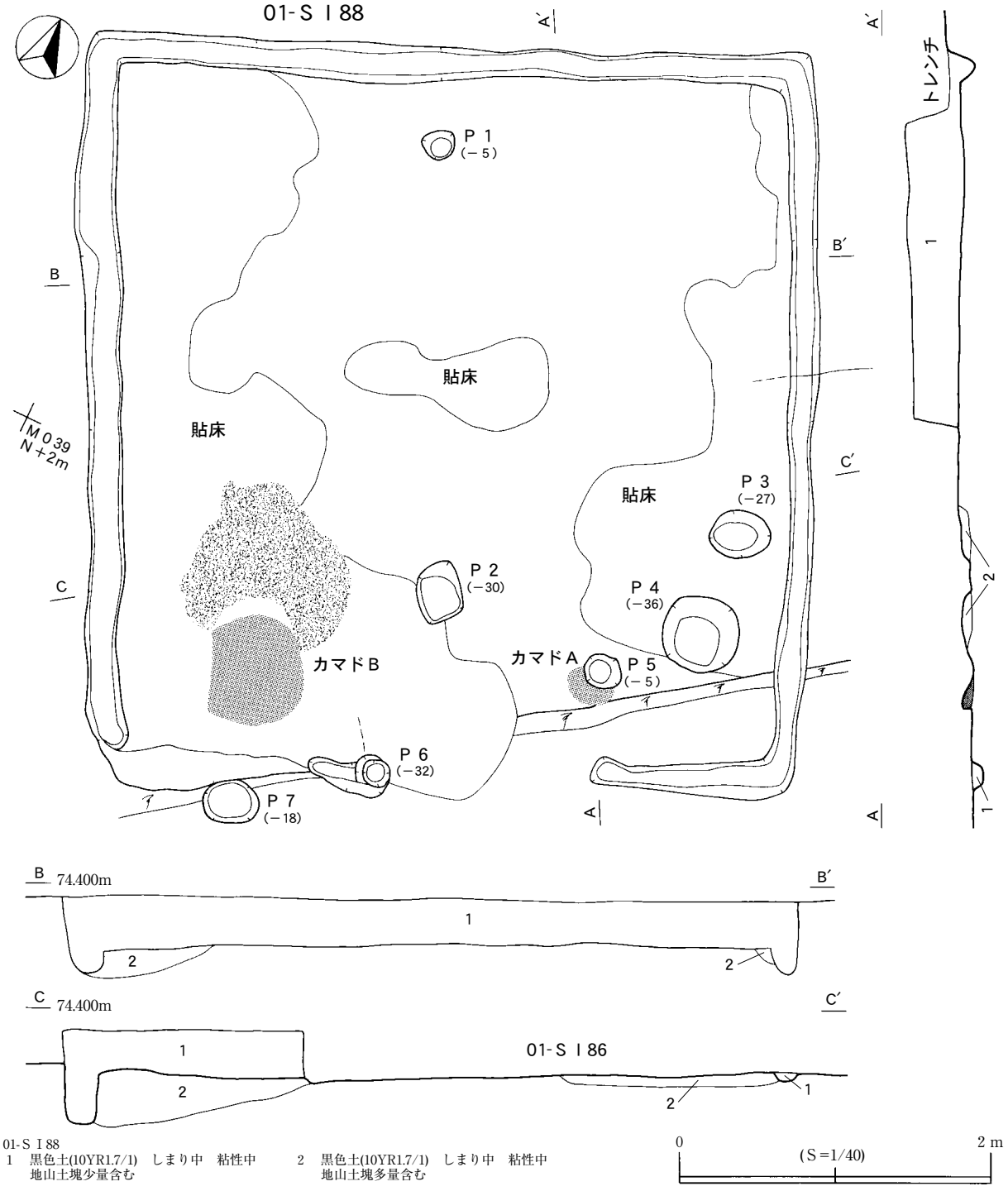
平面形はほぼ正方形で、カマドの付く壁に直交する主軸方位はＮ－25°－Ｗである。予測される主軸とそれに直交するラインで測る住居面積は約22㎡で、中形の住居である。各壁の長さは、北東壁約4.7m、南東壁約4.5m、南西壁約4.8m、北西壁約4.6mである。検出面からの深さは、南西壁の残りの良い部分で約0.3mで、全周ほぼ垂直に立ち上がる。

床面は住居中央部が掘形底面を利用し、北東・南西壁沿いは貼床を施す。貼床は北東壁際では0.05～0.1m、南西壁では約0.4mの厚さで土を造成する。壁溝はカマド以外の全周で確認した。上場幅0.14～0.26m、下場幅0.07～0.2m、床面からの深さは0.1～0.35mの断面台形状である。床面や住居隣接地で７個のピットを確認した。ピット配置に規則性がなく、本住居跡の構造材に関わる柱穴ではないと考える。

カマドは２か所あり、南東壁の中央から北東寄りの位置でカマドＡを、同じく南東壁の中央から南西寄りの位置でカマドＢを確認した。カマドＢは火床面のみの検出で、本住居跡を切る01-ＳＩ86の造成時に、完全に上部構造が破壊されていることから想像して、カマドＡが新しい可能性が高い。カマドＡは火床面のみの確認で、火床面は径約0.3mの不整な円形状の被熱範囲である。火床面主軸方位は住居主軸方位に直交する。また、焼土の北側半分はＰ５に切られている。カマドＢは火床面と前庭部が確認できた。火床面は楕円形状の被熱範囲で、長径0.75m、短径0.6mである。主軸方位は、住居主軸方位に平行する。

本住居跡は、南東壁にカマドを設置し、壁溝以外に住居上屋に関連する下部構造をもたない住居である。廃絶後は一気に埋め立てている。01-ＳＩ190と隣接しており、これが拡張するのに伴い廃絶した可能性が高い。

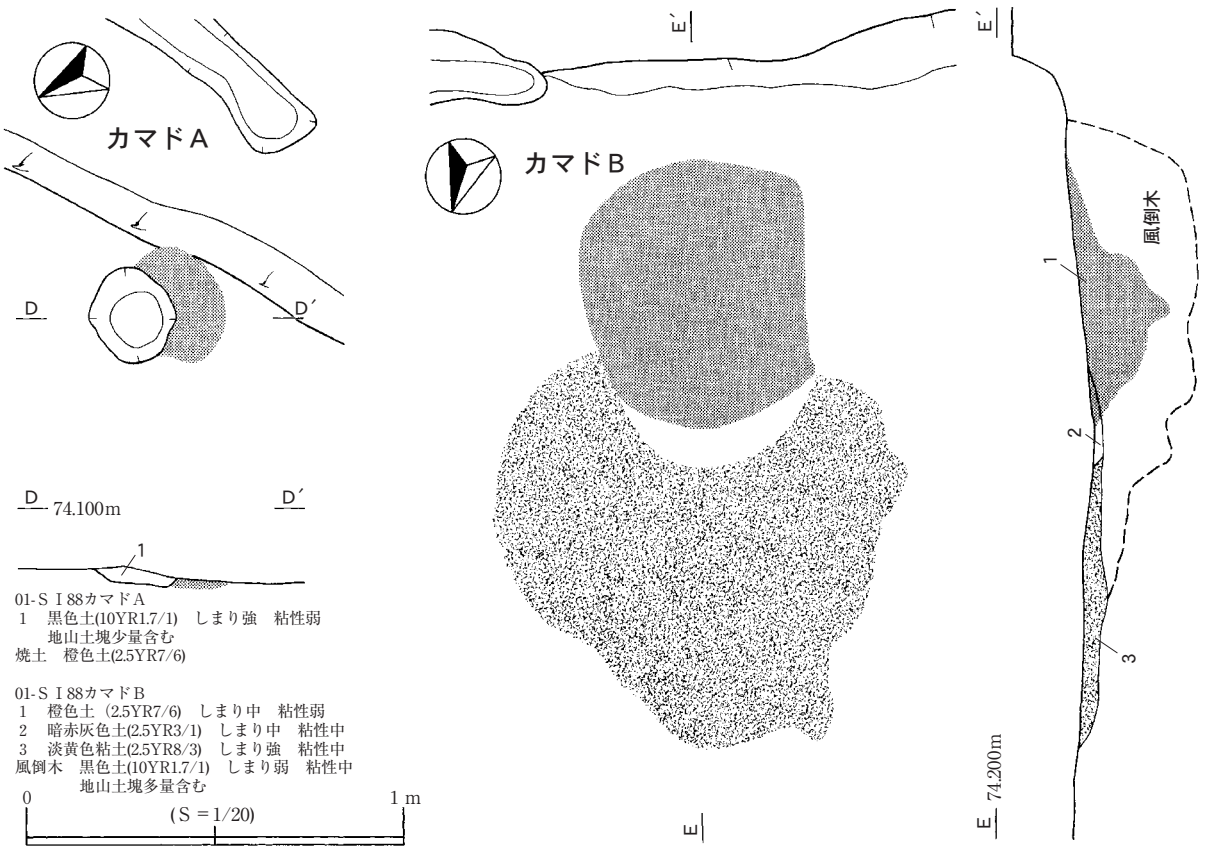
遺　物(第39図)　住居跡内から土師器甕・坏・鍋、土製品が出土した。土師器甕は、口縁部が２点、底部が６点出土している。そのうち比較的大型の口縁部資料１点、底部資料２点を図示した。数量が少ないのは、新段階のカマドＡが01-ＳＩ86の構築時に破壊され、遺物を巻き上げられたためで、これ



第37図　01-ＳＩ88

は39図１の破片が01-ＳＩ86からも出土していることから明らかである。このため、本住居跡における本来の遺物相は不明である。ただし、残存資料の大きさからみて、カマド周辺に存在していたとみられるのは、Ｃ類の39図１と、胴下半部を残すＡ類の39図２である。なお39図４は、01-ＳＩ74の１層中出土破片と遺構間接合した資料である。

39図１は大型の土師器甕である。口縁部は弱く外反して、胴上部に最大径を有する器形である。外面は縦位のケズリで仕上げるが、この調整はかなり乾燥が進んだ後に施しており、器外面全体に輪積痕が残っている。２はロクロナデを残す小型の土師器甕の胴下半部である。３は砂底の底部資料で、



第38図　01-ＳＩ88カマド

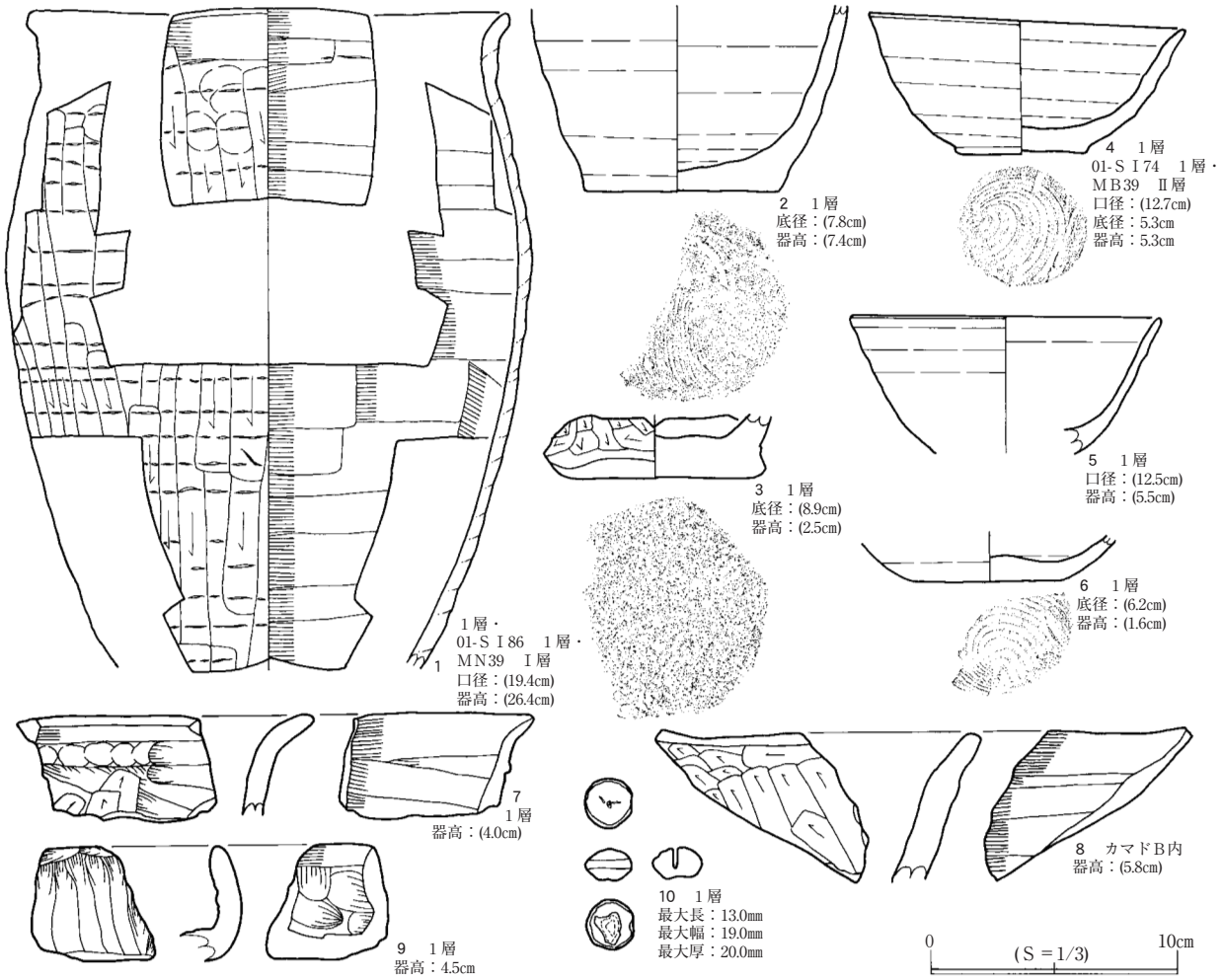
外面調整の不規則なケズリのため、底部外縁形が一定しない。

39図４～６は土師器坏Ａ類である。４は全体形の約2/3が残存する資料で、やや歪な器形である。外面のロクロ目は凹凸が曲線的で間隔が開く。底部付近には工具を当てたような筋も確認できるが、器面を削るほどではない。内面のロクロ目は、底部中心から螺旋状に続く。口端内外面の所々には煤が付着している。底部の回転糸切痕は筋幅が広く、粗雑な作りである。５は直線的に立ち上がる口縁部形状で、６はやや大きめの底径である。５はわずかに底部が残存しており、底部付近で緩やかに屈曲し中位が丸みを帯びながら立ち上がり、口縁部でわずかに外反する器形である。外面のロクロ目は凹凸が少なく、工具による調整痕のシャープな筋が認められる。底部付近には部分的にケズリが認められる。６の底部回転糸切痕も、４と同様にやや筋幅が広い。

39図７・８は土師器鍋の破片である。いずれも内面はヘラナデによる丁寧な調整を施すが、７は口縁部外面の調整でケズリが疎らなのに対し、８は口端まで一様にケズリ調整を施している。９は手づくねの小型土器である。10は土玉で、断面ソロバン玉形の形状で、中央部には一方向からの孔が認められる。その対面には、乾燥後に穿った跡が認められる。

01-ＳＩ190

本住居跡は、ＭＫ38・39、ＭＬ38～40、ＭＭ38・39グリッドの、01-ＳＩ86下部及び第Ⅳ層中位で、地山土粒を含む黒色土の分布範囲で確認した。本住居跡の立地点は台地上部平坦面である。01-ＳＩ86・193・359、01-ＳＤ57・195と重複し、01-ＳＩ193・359より本住居跡が新しく、01-ＳＩ86、01-ＳＤ57・195より本住居跡が古い。周辺には、01-ＳＩ87・88・192、01-ＳＢ328がある。



第39図　01-ＳＩ88出土遺物

床面精査で確認した壁溝やピットの配置から３回の建て替えが認められ、計４軒の住居跡が重なることが判明した。住居は新しい順に、Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄのアルファベットを付けて表記した。

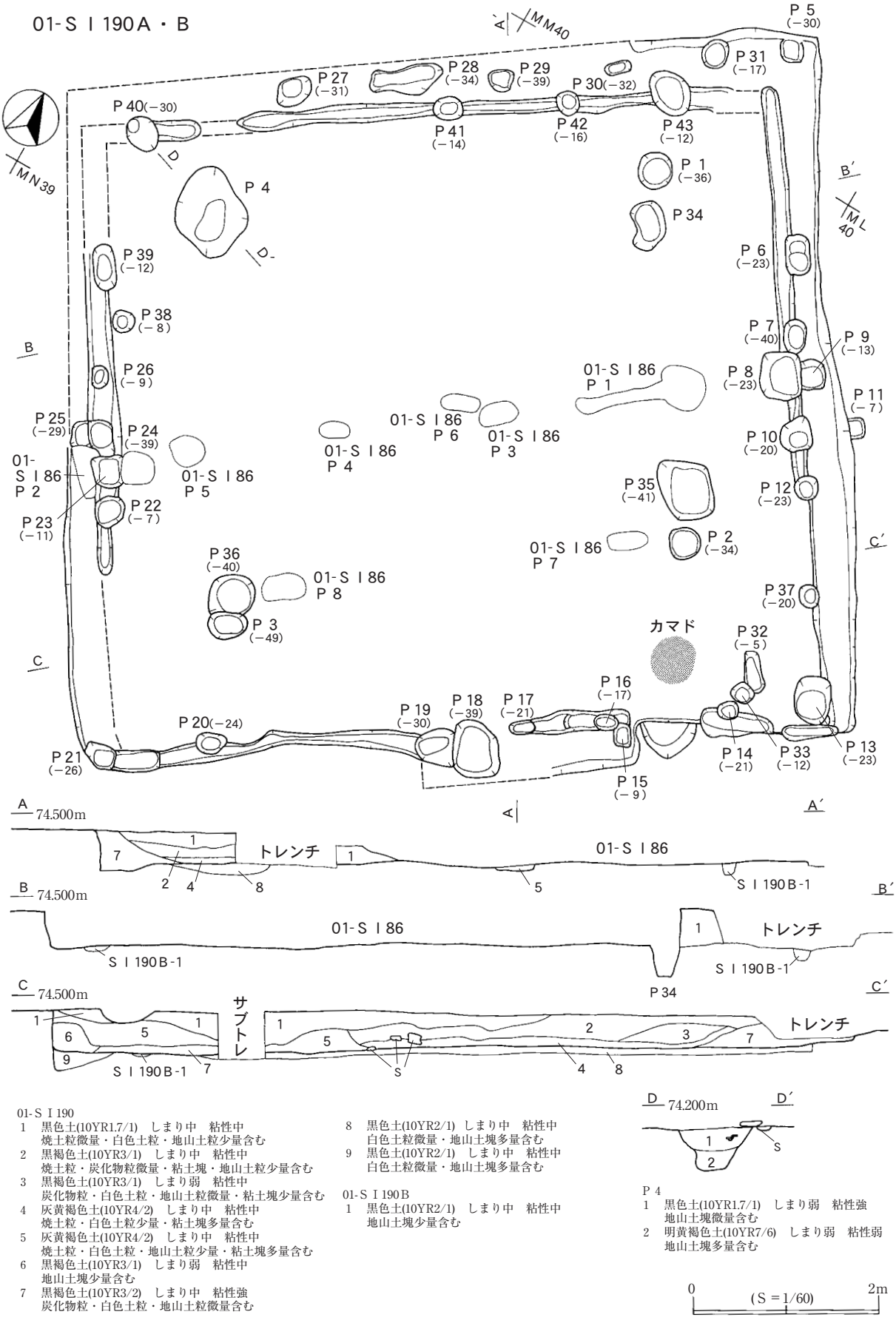
01-ＳＩ190Ａ(第40図～45図、図版18・154・159・160・164)

遺　構　３回目の建て替えにより、最大規模に達した住居である。

堆積土は９層に分けた。１～７層はレンズ状堆積を示し、基本的には自然堆積による埋没過程が想定できる。しかし、１～５層には焼土粒や炭化物を含み、Ｃ－Ｃ´断面でみる２・４層の下部では、拳大の礫を含むことからみて、埋没過程において廃棄場として利用した可能性が高い。また本住居跡の廃絶後に01-ＳＩ86が造られることから、１・２層の比較的水平に堆積する土は造成土とも考えられる。８・９層は貼床の土で、01-ＳＩ190Ｂ・193の床面よりもかさ上げするために施している。

平面形は北東－南西方向に長い長方形で、カマドの付く壁に直交する主軸方位はＮ－30°－Ｗである。主軸とそれに直交するラインで測る住居面積は約64㎡で、超大形の住居である。各壁の長さは、住居西隅が01-ＳＩ86の掘削により失われているが、北西壁と南西壁の延長で想定して、北東壁約7.5ｍ、南東壁約8.3ｍ、南西壁約7.3ｍ、北西壁約8.1ｍである。壁の検出面からの深さは、南西壁の残りの良いところで0.4～0.5ｍで、ほぼ垂直に立ち上がる。

床面は掘形底面の地山上面を基底面とし、01-ＳＩ193上部にあたる範囲には貼床を施す。３回の建

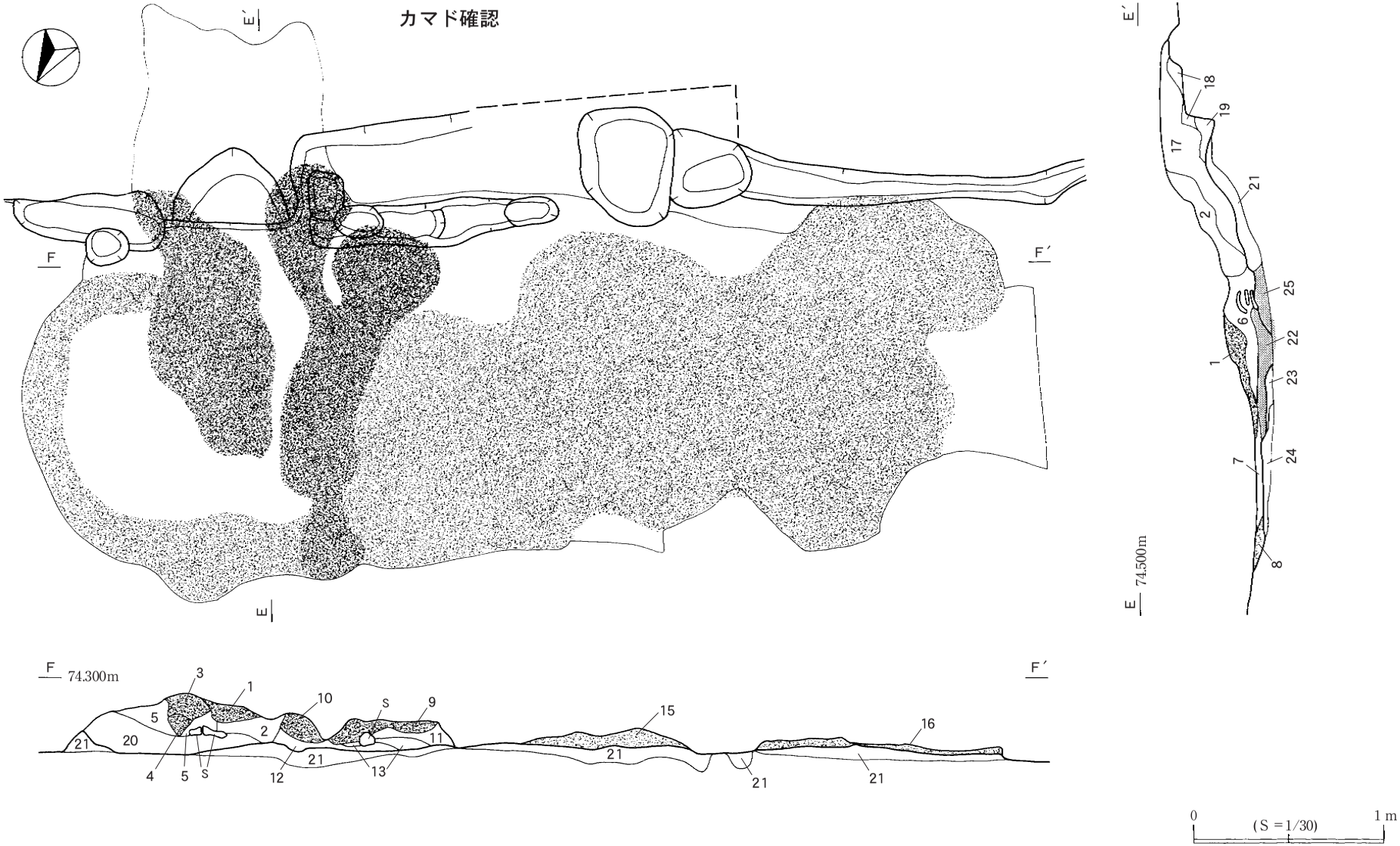


01-ＳＩ190
1　黒色土(10YR1.7/1)　しまり中　粘性中
　焼土粒微量・白色土粒・地山土粒少量含む
2　黒褐色土(10YR3/1)　しまり中　粘性中
　焼土粒・炭化物粒微量・粘土塊・地山土粒少量含む
3　黒褐色土(10YR3/1)　しまり弱　粘性中
　炭化物粒・白色土粒・地山土粒微量・粘土塊少量含む
4　灰黄褐色土(10YR4/2)　しまり中　粘性中
　焼土粒・白色土粒少量・粘土塊多量含む
5　灰黄褐色土(10YR4/2)　しまり中　粘性中
　焼土粒・白色土粒・地山土粒少量・粘土塊多量含む
6　黒褐色土(10YR3/1)　しまり弱　粘性中
　地山土塊少量含む
7　黒褐色土(10YR3/2)　しまり中　粘性強
　炭化物粒・白色土粒・地山土粒微量含む
8　黒色土(10YR2/1)　しまり中　粘性中
　白色土粒微量・地山土塊多量含む
9　黒色土(10YR2/1)　しまり中　粘性中
　白色土粒微量・地山土塊多量含む

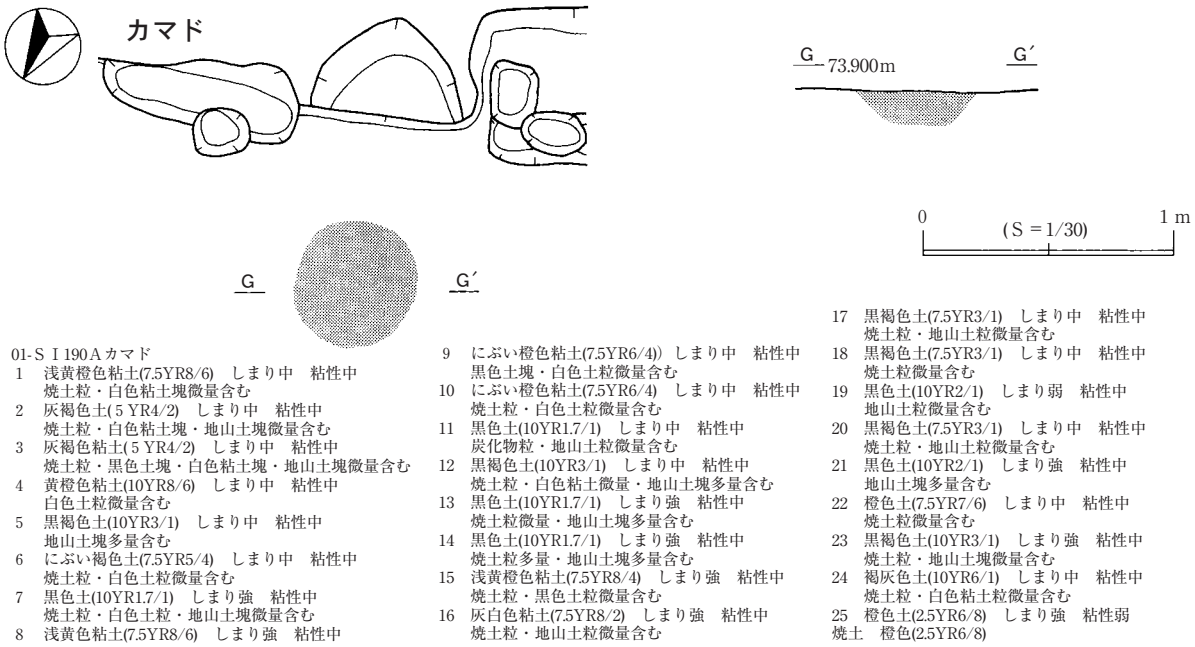
01-ＳＩ190Ｂ
1　黒色土(10YR2/1)　しまり中　粘性中
　地山土塊少量含む

Ｐ４
1　黒色土(10YR1.7/1)　しまり弱　粘性強
　地山土塊微量含む
2　明黄褐色土(10YR7/6)　しまり弱　粘性弱
　地山土塊多量含む

第40図　01-ＳＩ190Ａ・Ｂ



第41図　01-ＳＩ190Ａカマド確認状況



01-ＳＩ190Ａカマド
1　浅黄橙色粘土(7.5YR8/6)　しまり中　粘性中
　焼土粒・白色粘土塊微量含む
2　灰褐色土(５YR4/2)　しまり中　粘性中
　焼土粒・白色粘土塊・地山土塊微量含む
3　灰褐色粘土(５YR4/2)　しまり中　粘性中
　焼土粒・黒色土塊・白色粘土塊・地山土塊微量含む
4　黄橙色粘土(10YR8/6)　しまり中　粘性中
　白色土粒微量含む
5　黒褐色土(10YR3/1)　しまり中　粘性中
　地山土塊多量含む
6　にぶい褐色土(7.5YR5/4)　しまり中　粘性中
　焼土粒・白色土粒微量含む
7　黒色土(10YR1.7/1)　しまり強　粘性中
　焼土粒・白色土粒・地山土塊微量含む
8　浅黄色粘土(7.5YR8/6)　しまり強　粘性中
9　にぶい橙色粘土(7.5YR6/4))　しまり中　粘性中
　黒色土塊・白色土粒微量含む
10　にぶい橙色粘土(7.5YR6/4)　しまり中　粘性中
　焼土粒・白色土粒微量含む
11　黒色土(10YR1.7/1)　しまり中　粘性中
　炭化物粒・地山土粒微量含む
12　黒褐色土(10YR3/1)　しまり中　粘性中
　焼土粒・白色粘土微量・地山土塊多量含む
13　黒色土(10YR1.7/1)　しまり強　粘性中
　焼土粒微量・地山土塊多量含む
14　黒色土(10YR1.7/1)　しまり強　粘性中
　焼土粒多量・地山土塊多量含む
15　浅黄橙色粘土(7.5YR8/4)　しまり強　粘性中
　焼土粒・黒色土粒微量含む
16　灰白色粘土(7.5YR8/2)　しまり強　粘性中
　焼土粒・地山土粒微量含む
17　黒褐色土(7.5YR3/1)　しまり中　粘性中
　焼土粒・地山土粒微量含む
18　黒褐色土(7.5YR3/1)　しまり中　粘性中
　焼土粒微量含む
19　黒色土(10YR2/1)　しまり弱　粘性中
　地山土粒微量含む
20　黒褐色土(7.5YR3/1)　しまり中　粘性中
　焼土粒・地山土粒微量含む
21　黒色土(10YR2/1)　しまり強　粘性中
　地山土塊多量含む
22　橙色土(7.5YR7/6)　しまり中　粘性中
　焼土粒微量含む
23　黒褐色土(10YR3/1)　しまり強　粘性中
　焼土粒・地山土塊微量含む
24　褐灰色土(10YR6/1)　しまり中　粘性中
　焼土粒・白色粘土粒微量含む
25　橙色土(2.5YR6/8)　しまり強　粘性弱
焼土　橙色(2.5YR6/8)

第42図　01-ＳＩ190Ａカマド

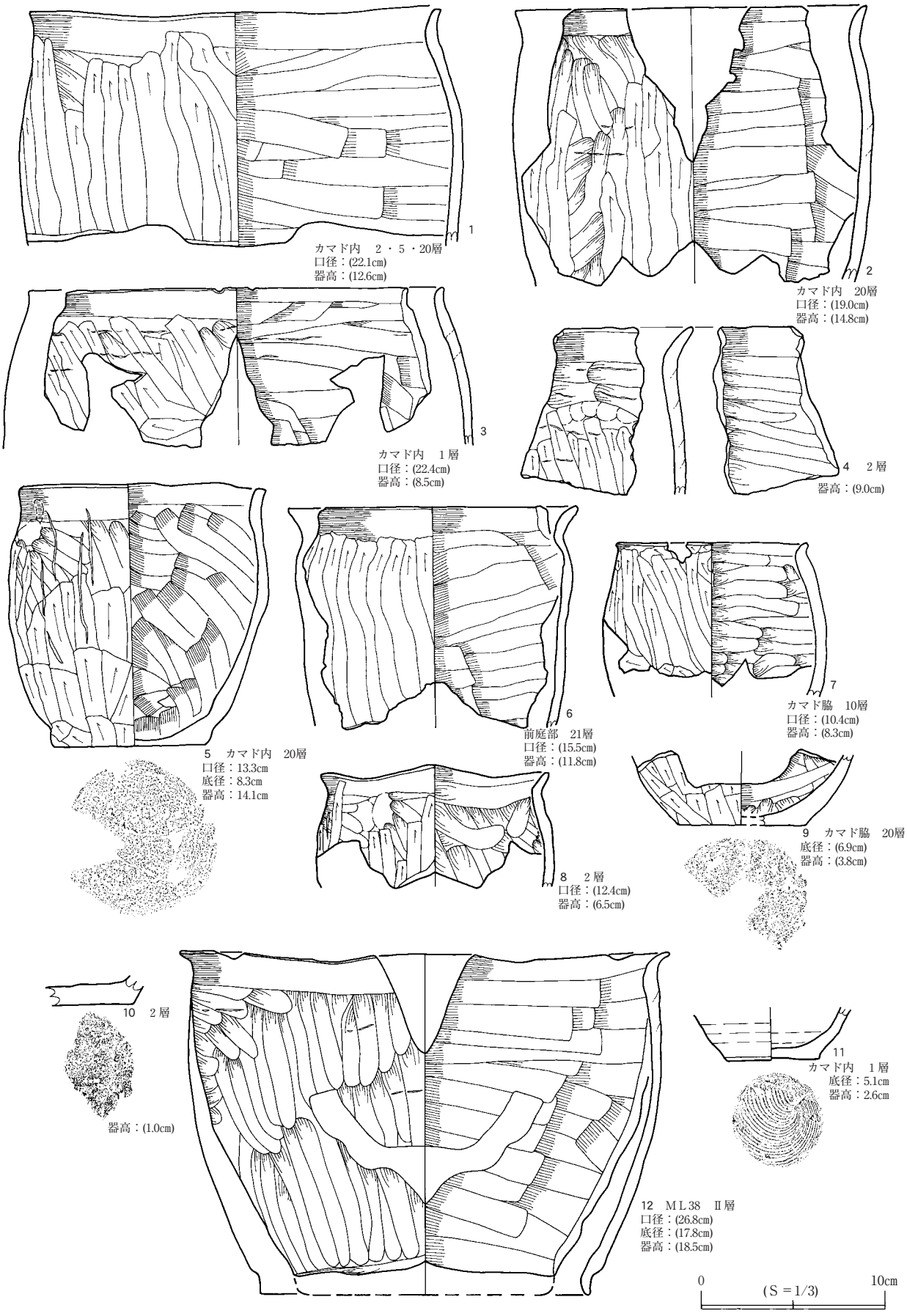
て替えでも南東壁の位置は変更がないことから、最古段階の01-ＳＩ190Ｄの構築時に施した貼床である可能性が高い。なお、本住居段階に伴う壁溝は確認できなかった。

床面や壁溝内部で本住居跡に伴う33個のピットを確認した。Ｐ１～４は、住居隅よりやや内側に位置する主柱穴である。Ｐ１・３・４はほぼ直角三角形の配置になるが、Ｐ２はカマド前庭部にかかるため北西寄りに位置し、全体で台形状の配置になる。Ｐ５～31までは壁沿いに位置する柱穴で、主に壁板保持に関連するとみられる。配置では、住居隅と壁の中央部に柱穴が伴う傾向がみられる。隅柱は、01-ＳＩ86のかかる西隅では確認できないが、他の三隅には配置してある。壁中央部では柱穴が密集する傾向にあり、壁柱の差し替えなども想定される。この他、カマド付近にＰ32・33があるが、袖付近に位置することから、カマド上部構造を支える芯材を据えた穴の可能性がある。Ｐ３・４が極端に深く、Ｐ３は隣接する01-ＳＩ190Ｂ主柱のＰ36の軟質な埋め戻し土よりも、深い掘形を必要としたとみられる。Ｐ４の場合は平面形の崩れからみて、01-ＳＩ190Ｂの主柱を取り込んだと考えられる。

カマドは南東壁の中央から北東寄りの位置で、にぶい橙色粘土や浅黄橙色粘土の広がりで確認した。確認した施設は、カマド本体とカマド前庭部に伴う粘土の貼床範囲である。両方を併せた範囲の堆積土を25層に分層した。１・３・４・９・10層は、にぶい黄橙色系統の粘土で、カマド上部の崩落粘土と考えられる。これらの下部にある、５・11～14層は黒色基調の土で、カマド上部構造の基礎を構成するとみられる。住居貼床に相当する21層も同様な土を用いている。８・15層は、カマド前庭部及び周辺部にみられる白色系粘土の貼り付け範囲で、炊事場に相当する範囲と考えられる。カマド本体の下部構造で判明しているのは、煙道の一部と火床面である。煙道部に伴う掘り込みは、住居上場から南東へ延びる長さ約0.4ｍのスロープで、最大幅は0.58ｍである。火床面は径約0.5ｍの円形状で、地山に約0.12ｍの深さまで被熱が及んでいる。

本住居跡は壁から離れた位置に主柱をもち、南東壁にカマドを設置する住居である。４軒重複する01-ＳＩ190の中では最新段階に当たり、規模も最大となる。01-ＳＩ86が本住居跡を掘り込んでいるこ

第43図　01-ＳＩ190Ａカマド遺物出土状況



第44図　01-ＳＩ190Ａ出土遺物１

とから、最終的には人為的に埋め立て造成したと考えられる。

遺　物(第44図・45図)　住居跡内から土師器甕・坏・甑、須恵器壺・甕、鉄製品、土製品が出土した。土師器甕は口縁部が43点、底部が39点出土しており、そのうち比較的大型の口縁部資料８点、底部資料４点を図示した。図示しなかったものを含めた甕の口縁部分類別数量はＡ類(２点)、Ｂ類(１点)、Ｃ類(28点)、Ｄ類(９点)、分類不能(３点)で、底部分類別数量は砂底(24点)、ナデ(１点)、ケズリ(３点)、回転糸切(２点)、分類不能(９点)の内訳になる。口縁部ではＣ類が圧倒的に多く、Ｄ類が一定量出土している。わずかに出土したＡ・Ｂ類は小破片であり、周囲からの流れ込み、もしくは01-ＳＩ193からの巻き上げとみられる。底部では圧倒的に砂底が多く、木葉痕は全く出土していない。

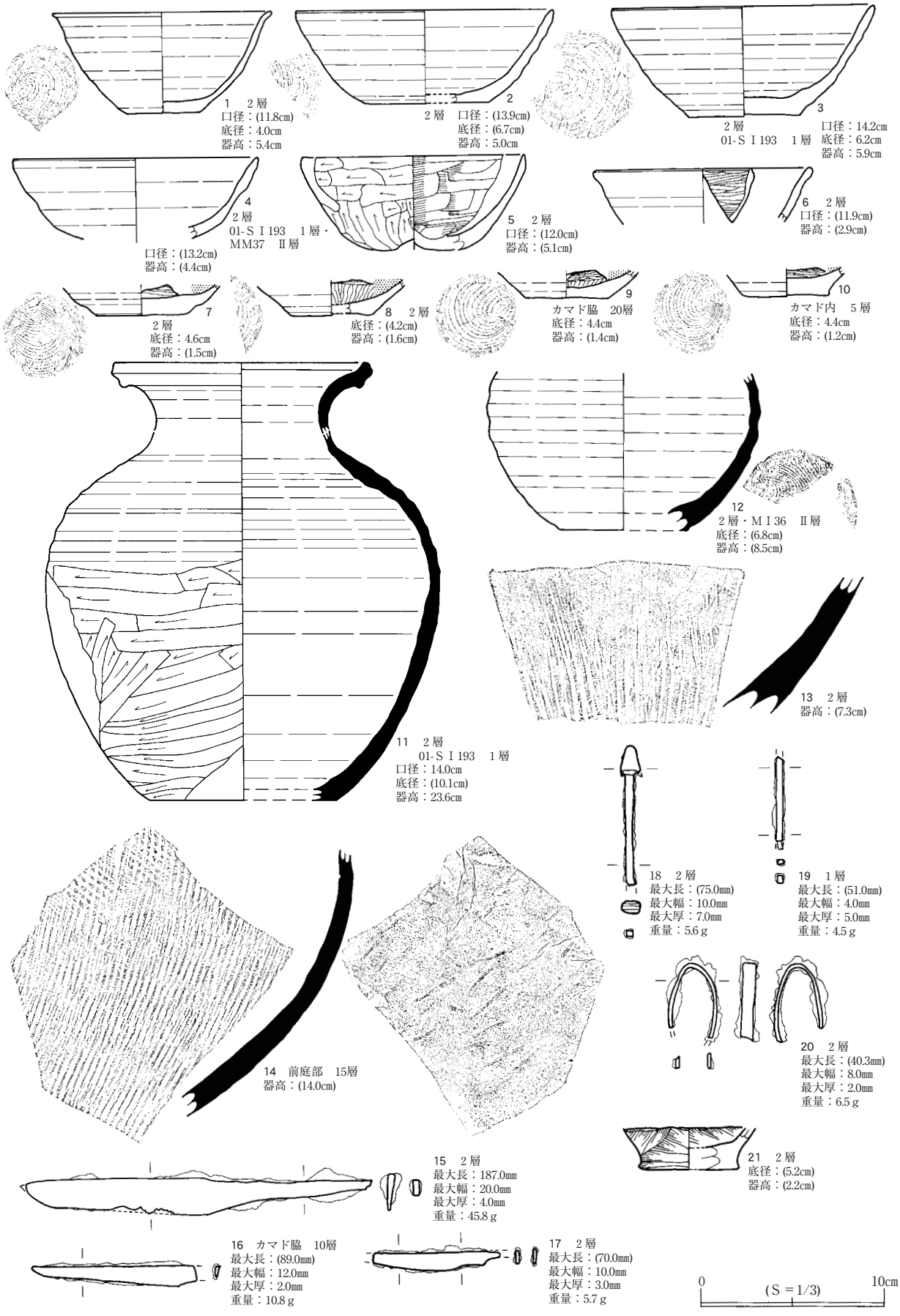
遺物の多くは、住居南東半分から出土しているが、これは北西半分が01-ＳＩ86により掘削されているためで、このことからも本住居跡の遺物の一部が、周堤を通して最終的に01-ＳＩ86内部に埋蔵されていることが想定される。遺物の集中がみられるのはカマド周辺である(第43図)。44図１・２・５・８・９はカマド火床面周囲からの出土で、一次的な使用品の投棄または、カマド構築材への転用としての二次的な使用の結果、住居内に埋没したと考えられる。特に44図５は、支脚に用いていた可能性が高い。44図６は、01-ＳＩ190Ｃに伴うカマド付近からの出土であり、他の遺物より古手の可能性がある。

44図１～３は中・大型の土師器甕である。２は口縁部が外反し、口縁部径と胴上半部径がほぼ同じになる器形である。外面はユビナデの後、縦位のケズリで、内面は横位のヘラナデで調整している。１・３はいずれも胴上半部に最大径をもち、１は口縁部が弱く外反し、３は口縁部をつまみ出す程度にわずかに外反させた器形である。どちらも外面は縦位のケズリ、内面は横位のヘラナデ調整である。44図４は土師器甕の口縁部破片で、口縁部の外反が顕著である。

44図５～８は小型の土師器甕である。６は外反する口縁部に最大径をもつ器形で、外面縦位ケズリ、内面横位ヘラナデ調整である。５は頸部にわずかに段を有し、口縁部が直立気味に立ち上がる器形で、口唇は平滑に面取りしてある。外面胴下半部には縦位ケズリを施すが、上半部にはユビナデを残す。内面は斜位のヘラナデで調整する。底部中央部の器厚が薄いのが特徴で、底面は砂底である。７・８はいずれも胴上半部に最大径をもち、８は強く、７はわずかに口縁部が外反する。どちらも外面縦位ケズリ、内面ユビナデ調整である。44図９～11は土師器甕の底部で、11は回転糸切痕を残しており、９・10は砂底である。

44図12は土師器甑で、外反する口縁部と胴上部がほぼ同じ径で、底部にかけてすぼまり、底部末端付近に段を有する器形である。外面は縦位のユビナデ、内面は横位のヘラナデで調整している。

45図１～10は土師器坏で、１～４がＡ類、７～10がＢ類、６がＣ類、５がＤ類である。１～３はほぼ全形を確認できる資料である。１は口径に対し底径が比較的小さく、口縁が外反する器形で、口唇が丸みを帯びる。外面のロクロ目の凹凸が低く、底部の回転糸切痕も緻密で、器壁が薄く比較的硬質な焼き上がりである。これに比べて２・３は、口径に対し底径が比較的大きく、口縁部が直線的に外傾し、口唇が先細り状の形状である。外面のロクロ目は間隔があり、底部の回転糸切痕は大き目の筋で確認でき、また３は、糸切後に簾状の敷物に置いた痕跡が認められる。比較的器壁が厚く軟質な焼き上がりである。以上から１が比較的精緻な、２・３が比較的粗雑な作りであると言える。４も２・３に近い口縁部形状である。５は口縁部が内湾し口唇が先細りになる器形で、外面は縦横のケズリ、



第45図　01-ＳⅠ190Ａ出土遺物２

内面は横位のヘラナデで調整している。６は内面にミガキを施すが、明確な黒色処理が認められない。小破片であり内黒の一部分になる可能性もある。45図７～10は底部資料で、７・10がやや底部が突出する器形である。いずれも回転糸切無調整である。

45図11～14は須恵器である。11は壺で、口縁部に段をもち、肩部にかけてやや直線的に傾斜し、胴下部にかけて丸みをもつ器形である。外面胴下部には横位のケズリで再調整を施している。12は胴下半部の資料で、壺もしくは小型の甕とみられる。底部には回転糸切痕をとどめる。13・14は甕の破片で、タタキ目が確認できる。45図15～20は鉄製品である。15～17は刀子で、15はほぼ全体が、16は刀身が、17は刀身半ばから茎の付け根にかけてが残る。20は鞘金具で、環状部品の一部と考えられる。18・19は同一個体と考えられる。18には刃先とみられる幅広の部分が確認でき、鏃と考えられる。45図21は小型土器の底部である。

01-ＳＩ190Ｂ(第40図、図版18)

遺　構　２回目の建て替えにより、01-ＳＩ190Ｃよりも規模を拡大した住居である。最大規模の01-ＳＩ190Ａのプラン内に収まるため、埋没過程を示す堆積土は存在しない。

平面形は北東－南西方向に長い長方形で、カマドの付く壁に直交する主軸方位はＮ－30°－Ｗである。主軸とそれに直交するラインで測る住居面積は約54㎡で、特大形の住居である。各壁の長さは、北東壁約6.9m、南東壁約7.7m、南西壁約6.9m、北西壁約7.5mである。各壁の検出面からの深さ及び立ち上がりは、01-ＳＩ190Ａに切られるため確認できない。

床面は、01-ＳＩ190Ａの８層貼床下部に当たり、掘形底面の地山上面を基底面として、住居南隅の一部に貼床を施す。壁溝は北東壁・南西壁の一部以外ほぼ全周で確認した。南東壁沿いは01-ＳＩ190Ａの壁と重なる。上場幅0.14～0.3m、下場幅0.08～0.2m、床面からの深さ0.05m前後の断面台形状である。

床面で本住居跡に伴うとみられる10個のピットを確認した。Ｐ34・35・36は、住居隅よりやや内側に位置する主柱穴である。これに対応する西隅付近には柱穴がみられないが、01-ＳＩ190ＡＰ４の平面形からみて、この柱穴と重複すると考えられる。Ｐ37～43はいずれも壁際に位置し、壁板を保持する壁柱を据えたとみられるが、配置が不規則であり、壁溝の配置や深さからみて、壁板保持構造の補助的な役割をもつと考えられる。本住居跡に伴うカマドは明確ではないが、住居プランがほぼ同じことから、01-ＳＩ190Ａの位置と同じ地点を利用したと考えられる。

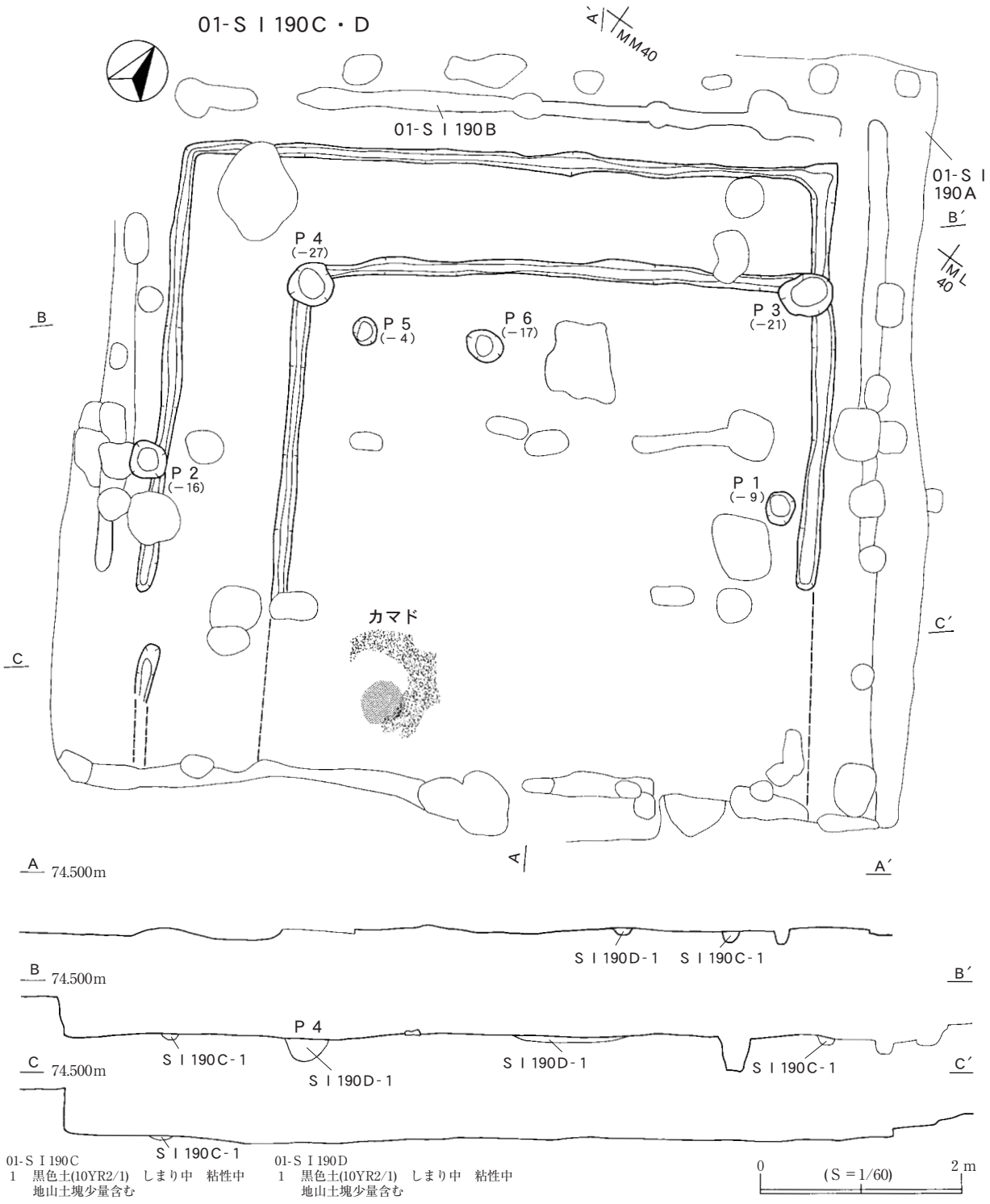
本住居跡は壁から離れた位置に主柱をもち、南東壁にカマドを設置する住居である。４軒重複する01-ＳＩ190の中では３段階目で、01-ＳＩ190Ａへ拡張するために解体したと考えられる。

遺　物　本住居跡に伴う遺物は検出できなかった。

01-ＳＩ190Ｃ(第46・47図)

遺　構　１回目の建て替えにより、01-ＳＩ190Ｄよりも規模を拡大した住居である。最大規模の01-ＳＩ190Ａのプラン内に収まるため、埋没過程を示す堆積土は存在しない。

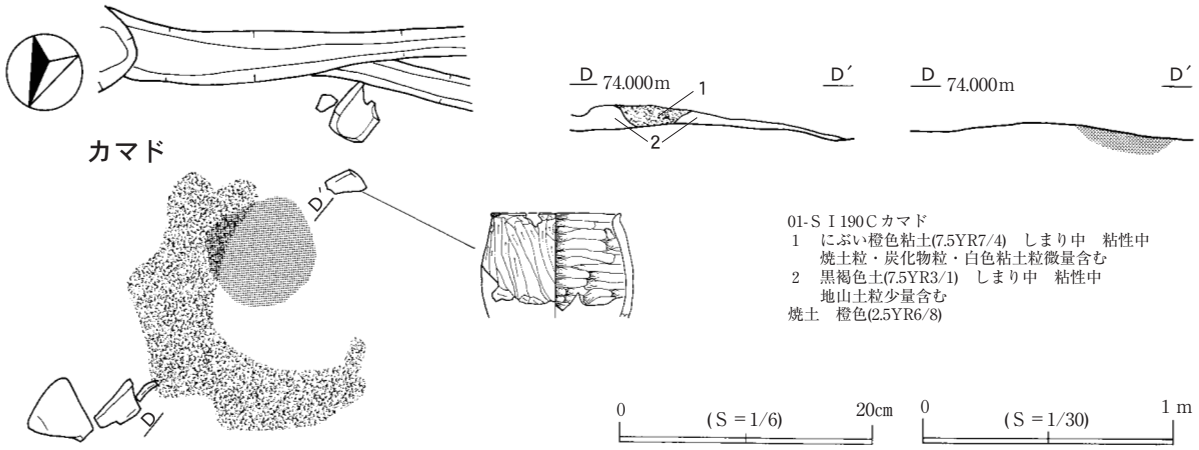
平面形はほぼ正方形で、カマドの付く壁に直交する主軸方位はＮ－30°－Ｗである。主軸とそれに直交するラインで測る住居面積は約42㎡で、特大形の住居である。南東壁を01-ＳＩ190Ａ・Ｂと共有



第46図　01-ＳＩ190Ｃ・Ｄ

すると想定した場合の各壁の長さは、北東壁約6.4m、南東壁約6.6m、南西壁約6.4m、北西壁約6.5mである。各壁の検出面からの深さや立ち上がりは、01-ＳＩ190Ａに切られるため確認できない。

床面は01-ＳＩ190Ｂと共有し、掘形底面の地山上面を基底面として、住居南隅の一部に貼床がある。壁溝は、北東壁・南西壁の一部以外ほぼ全周で確認した。南東壁沿いは01-ＳＩ190Ｂ壁溝と重なる。上場幅0.14～0.23m、下場幅0.05～0.12m、床面からの深さ0.05～0.1mの断面台形状である。床面で本住居跡に伴うとみられる２個のピットを確認した。Ｐ１・２はそれぞれ北東壁・南西壁中央部に位置



第47図　01-ＳＩ190Ｃカマド

する。他にピットが認められず、壁板保持の補助壁柱穴と考えられる。

カマドは南東壁の中央からやや南西寄りの位置で確認した。01-ＳＩ190Ｂ構築段階で上部を削平整理しており、火床面のみ確認した。火床面は不整な円形で、径約0.45ｍの被熱範囲である。約0.04ｍの深さまで被熱が及んでいる。

本住居跡は、壁溝と壁板保持の補助柱で囲われた範囲で確認できる住居である。度重なる建て替えにより残存部が少なく、住居構造には不明な点が多い。４軒重複する01-ＳＩ190の中では２段階目で、01-ＳＩ190Ｂへ拡張するために解体したと考えられる。

遺　物　本住居跡に伴う遺物は検出できなかったが、本住居カマド上部から出土した44図７は、本住居のカマド構築段階に伴う可能性がある。

01-ＳＩ190Ｄ(第46図、図版18)

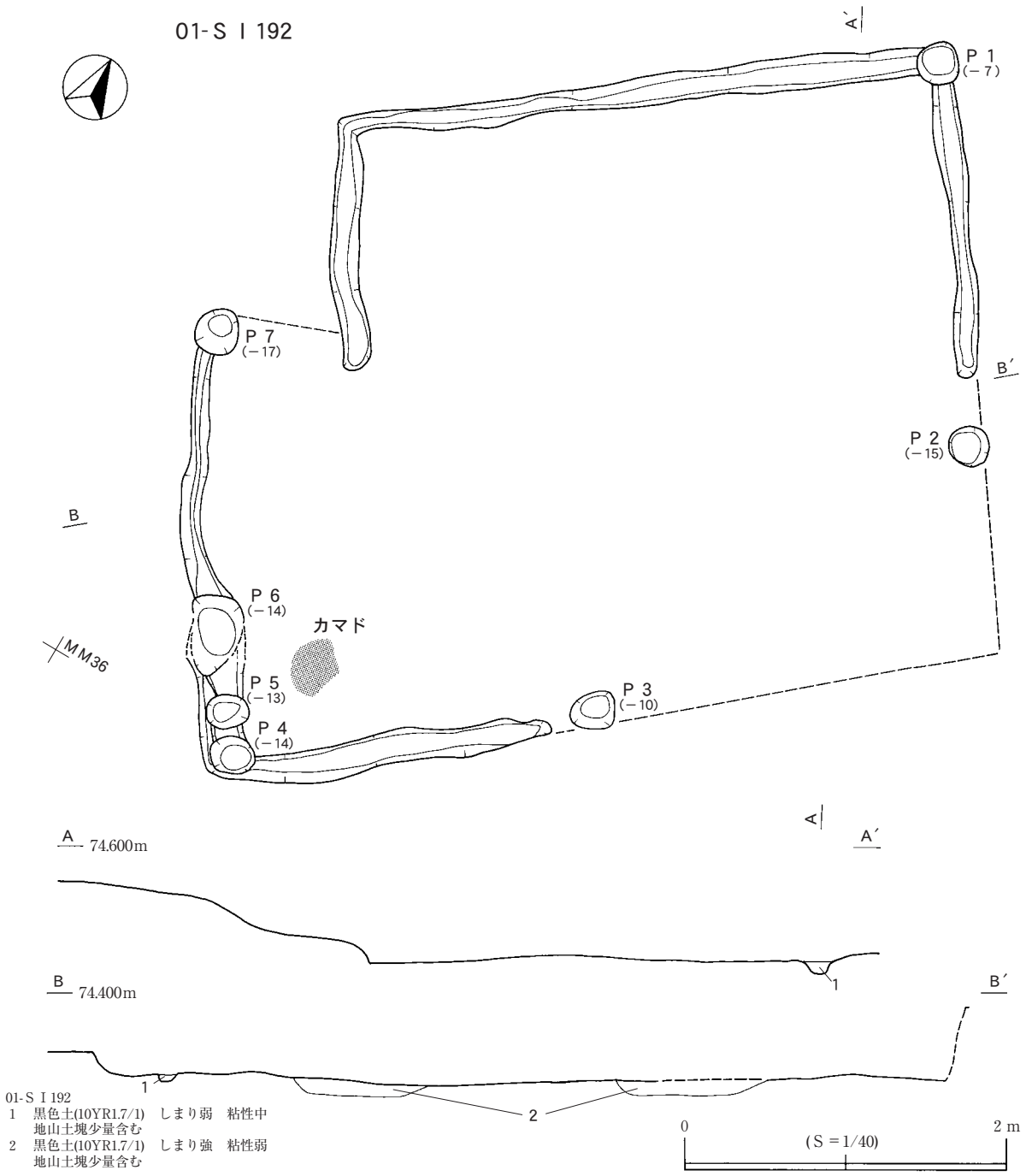
遺　構　４軒重複する01-ＳＩ190の中で、最初に構築した住居である。最大規模の01-ＳＩ190Ａのプラン内に収まるため、埋没過程を示す堆積土は存在しない。

平面形はほぼ正方形で、カマドの付く壁に直交する主軸方位はＮ－30°－Ｗである。主軸とそれに直交するラインで測る住居面積は約28㎡で、大形の住居である。南東壁を01-ＳＩ190Ａ・Ｂと、北東壁を01-ＳＩ190Ｃと共有すると想定した場合の各壁の長さは、北東壁約5.3m、南東壁約5.4m、南西壁約5.1m、北西壁約5.2mである。各壁の検出面からの深さ及び立ち上がりは不明である。

床面は01-ＳＩ190Ｂ・Ｃと共有し、掘形底面の地山上面を基底面とする。壁溝は北西壁と南西壁の一部で確認した。北東壁沿いは01-ＳＩ190Ｃの、南東壁沿いは01-ＳＩ190Ｂの壁溝と重なる。上場幅0.14～0.22m、下場幅0.05～0.1m、床面からの深さ0.05m前後の断面台形状である。床面で本住居跡に伴うとみられる４個のピットを確認した。Ｐ３・４は住居隅の主柱穴である。Ｐ５・６は住居西隅に並ぶ。本住居跡に伴うカマドは明確ではないが、住居プランがほぼ同じことから、01-ＳＩ190Ｃの位置と同じ地点を利用していたと考えられる。

本住居跡は四隅に主柱をもち、南東壁にカマドを設置する住居と想定される。度重なる建て替えにより残存部が少なく、住居構造には不明な点が多い。４軒重複する01-ＳＩ190の中では最古段階で、01-ＳＩ190Ｃへ拡張するため解体したと考えられる。

遺　物　本住居跡に伴う遺物は検出できなかった。

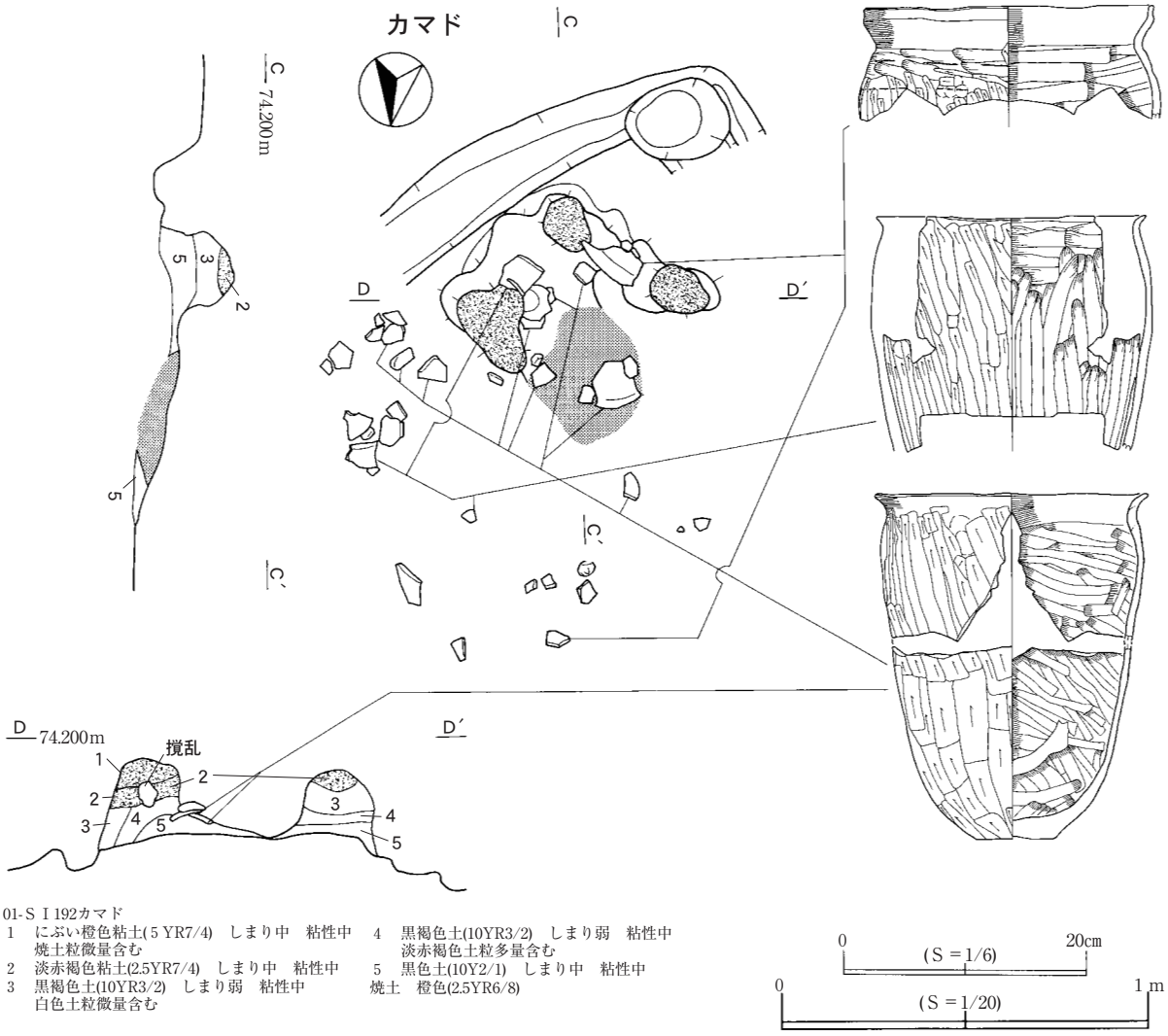


第48図　01-S I 192

01-S I 192(第48図～50図、図版19・20)

遺　構　MK36、ML35～37、MM36グリッドの、第Ⅳ層中位～第Ⅵ層上面及び01-S I 193床面で、壁溝やカマドの配置で確認した。本住居跡の立地点は台地上部平坦面であるため、ほとんど傾斜がない。01-S I 193と重複し、これよりも本住居跡が新しい。周辺には01-S I 112・190、02-S I 52、01-S D57がある。

堆積土は、01-S I 193の精査段階で一括して撤去したため、ほとんど残存していない。本来であれば、重複関係で新しい本住居跡から調査するところだが、平面形のずれが少なく、確認面の堆積土上面での区分が明瞭でなかったため、最終的に床面施設の配置で本住居跡のプランを確認した。１層は



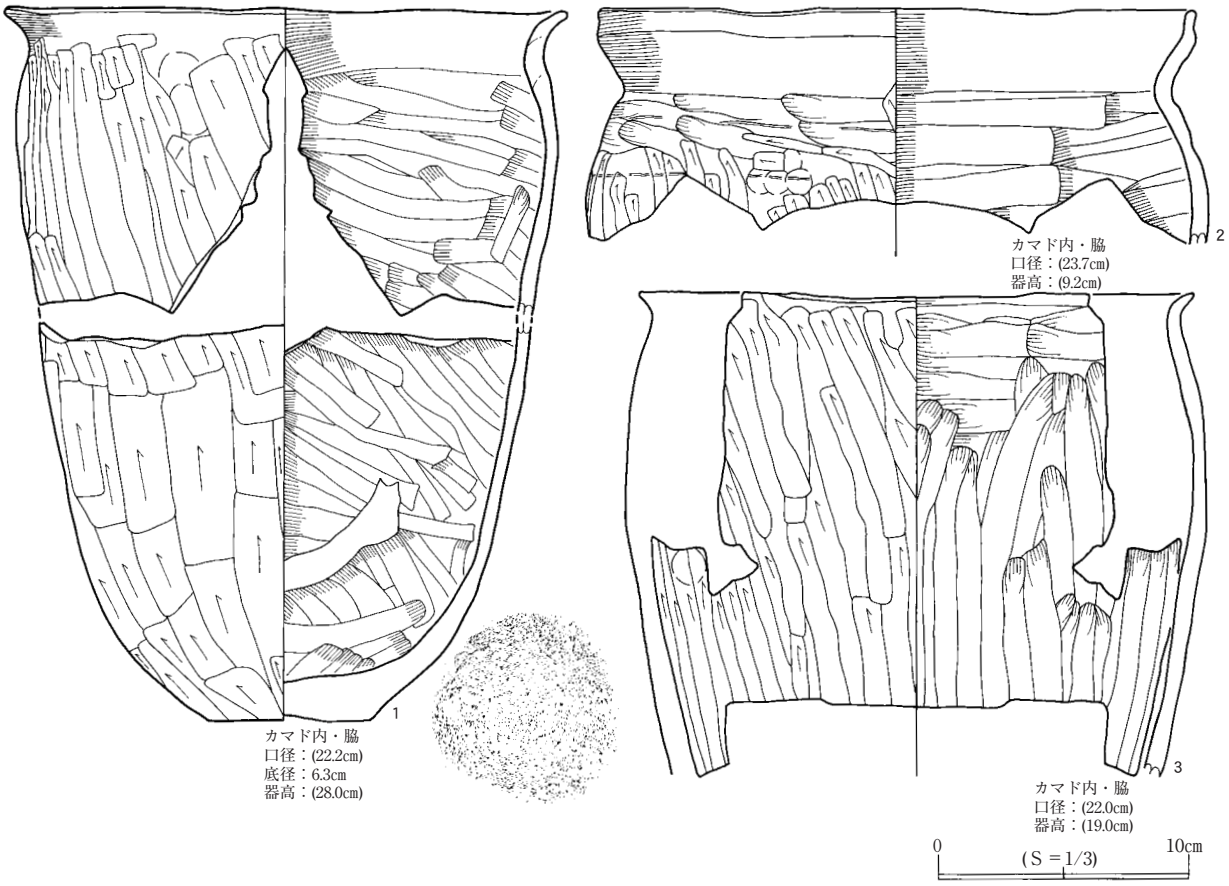
01-ＳＩ192カマド
1　にぶい橙色粘土(5 YR7/4)　しまり中　粘性中　焼土粒微量含む
2　淡赤褐色粘土(2.5YR7/4)　しまり中　粘性中
3　黒褐色土(10YR3/2)　しまり弱　粘性中　白色土粒微量含む
4　黒褐色土(10YR3/2)　しまり弱　粘性中　淡赤褐色土粒多量含む
5　黒色土(10Y2/1)　しまり中　粘性中　焼土　橙色(2.5YR6/8)

第49図　01-ＳＩ192カマド・遺物出土状況

壁溝内堆積土で、地山土塊を含むことから壁板裏込め土と考えられる。２層は貼床とみられるが、施す範囲は一定でない。

平面形は基本的には北東－南西方向に長い長方形だが、南西壁が張り出してＬ字形になる。カマドの付く壁に直交する主軸方位はＮ－39°－Ｗである。住居面積は約19㎡で、中形の住居である。各壁の長さは、北東壁約3.8m、南東壁約5.0m、北西壁約3.9mで、張り出しのある南西壁は張り出し部が2.9m、西隅から張り出しの付け根までが1.5mである。壁の検出面からの深さは、比較的残りのよい南隅付近で0.14mほどで、ほぼ垂直に立ち上がる。なお、母屋と張り出し部分の床面レベルはほぼ同じで、その境目にカマドが位置する。

床面はほぼ01-ＳＩ193と同レベルで、掘形底面の地山上面を基底面としており、01-ＳＩ193のカマド周辺部や壁溝・柱穴の上部には貼床を施している。壁溝は、北東壁南半と南東壁西半以外でほぼ全周で確認した。上場幅0.1～0.22m、下場幅0.04～0.14m、床面からの深さ0.05～0.08mの断面台形状である。床面及び壁溝内で７個のピットを確認した。Ｐ１・４・７は住居隅の壁溝内に配置する主柱穴である。東隅・西隅では確認できなかった。Ｐ２・３は壁溝の途切れる壁際に位置しており、壁板保持に関わる補助柱穴と考えられる。



第50図　01-ＳＩ192出土遺物

カマドは南隅付近の南東壁で、にぶい橙色粘土の広がりで確認した。堆積土は５層に分けた。煙道が全く確認できないことからも、上部堆積土の多くは削平により欠失しているとみられる。１～５層までカマド構築土で、基底部に黒色・黒褐色土を、その上に橙色系の粘土を貼っている。火床面は不整な楕円形状で長径0.37ｍ、短径0.3ｍである。主軸方位は住居主軸方位に平行する。

本住居跡は隅に主柱をもち、南東壁にカマドを設置する住居である。南西壁には張り出しをもつ。直接切り合い関係のある01-ＳＩ193よりは新しい。

遺　物(第50図)　住居跡内から土師器甕が出土した。カマド周辺部から出土した３個体のみだが、これは01-ＳＩ193掘り下げ段階で、本来は本住居跡堆積土中に含まれる遺物を、一括して回収したことによる。出土甕は比較的大型の破片のものが多く、出土位置からみてカマド構築材に転用したものが、カマド破棄時に散乱したと考えられる。実測図では復元しているが、基本的には口縁部径で1/4程度の残存である。

50図１は口縁部が外反して頸部がくびれ、胴上半部から下半部にかけては直線的にすぼまり、丸みを帯びながら底部に至る器形である。外面は縦位のケズリ、内面は横位・斜位のヘラナデで調整している。底部は砂底である。50図２は最大径を有する胴部上半部から、頸部が屈曲して外反し、口縁部が直立気味に立ち上がる器形である。外面は頸部屈曲部の上下に横位のナデを残し、以下にケズリを施している。内面は横位のヘラナデで調整している。50図３は口縁部が短く外折し、胴部上半部に最大径をもつ器形である。外面は口端付近まで縦位のケズリを、内面は横位のユビナデ後に縦位のユビナデで再調整している。

01-ＳＩ193(第51図～54図、図版19・20・158)

遺　構　ＭＫ・ＭＬ36～38、ＭＭ36・37グリッドの第Ⅳ層中位で、地山土塊を含む黒色土の広がりで確認した。本住居跡の立地点は台地上部平坦面で、ほとんど傾斜がない。01-ＳＩ190・192・359と重複し、01-ＳＩ190・192より本住居跡が古く、01-ＳＩ359より本住居跡が新しい。周辺には01-ＳＩ86・112、02-ＳＩ52、01-ＳＤ195がある。

堆積土は８層に分けた。１～６層は住居内を埋め尽くす堆積土で、レンズ状堆積であるが、いずれも黒色基調で地山土粒を含む土であることや、01-ＳＩ190の重複からみて、人為的な埋め立てに伴う堆積土とみられる。７層が北東壁沿いでは塊で堆積しており、住居廃絶時に壁板を抜いて埋め立てを行ったことが想定される。８層は地山土粒を含む壁溝内堆積土で、壁板の裏込めと考えられる。

平面形は南東壁がやや短い台形状である。カマドの付く壁に直交する主軸方位はＮ－20°－Ｗである。主軸とそれに直交するラインで測る住居面積は約50㎡で、特大形の住居である。各壁の長さは北東壁約7.1m、南東壁約6.5m、南西壁約7.3m、北西壁約7.2mである。壁の検出面からの深さは、南東壁で約0.5m、北東壁で約0.4mで、ほぼ垂直に立ち上がる。

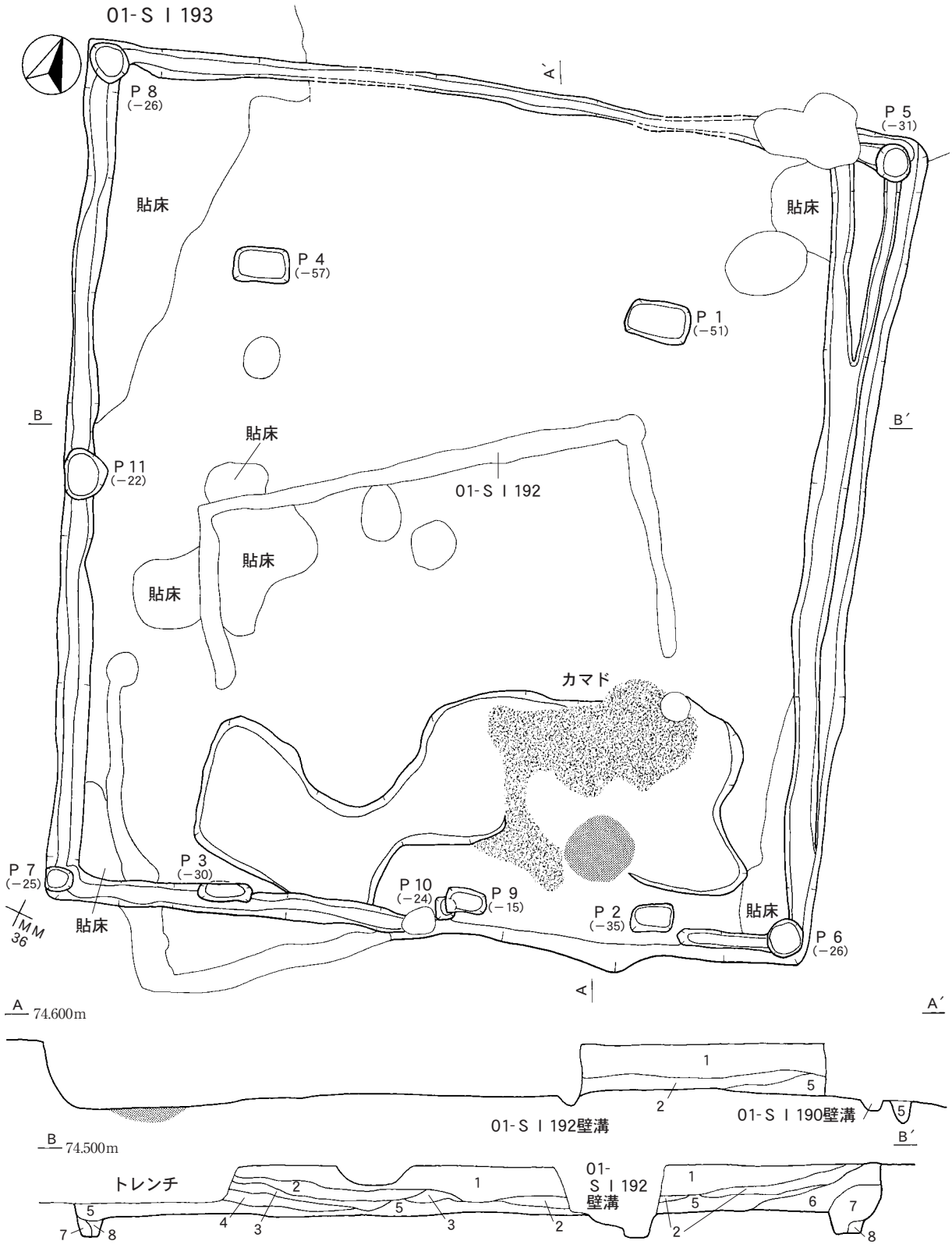
床面は01-ＳＩ192とほぼ同レベルで、掘形底面の地山上面を基底面としており、北西壁中央部付近と北東壁南隅付近等の住居隅に部分的に貼床を施す。壁溝はカマド以外の全周で確認した。住居北隅では２条に分かれており、部分的な造り替えが想定される。上場幅0.12～0.3m、下場幅0.06～0.18m、床面からの深さ0.2m前後の断面台形状である。

床面で本住居跡に伴うとみられる11個のピットを確認した。Ｐ１～４は主柱穴で、Ｐ１・４が住居壁から離れた位置に、Ｐ２・３が南東壁に接した位置にあり、４本で方形状の配置になる。柱穴中心で測る柱穴間の距離は、Ｐ１－２間約5.1m、Ｐ３－４間約5.3m、Ｐ１－４間約3.4m、Ｐ２－３間約3.6mである。いずれも長方形状の平面形で、各柱穴の長軸ラインは平行に配置してある。Ｐ５～８は住居四隅に配置する柱穴で、Ｐ１～４の補助的なものか、あるいは壁溝にみられる部分的な造り替えの際に併せて、上屋構造材の建て替えを行った主柱穴の２通りの考え方がある。Ｐ９～11は壁沿い中央部に配置する壁板保持の補助柱穴と考えられる。

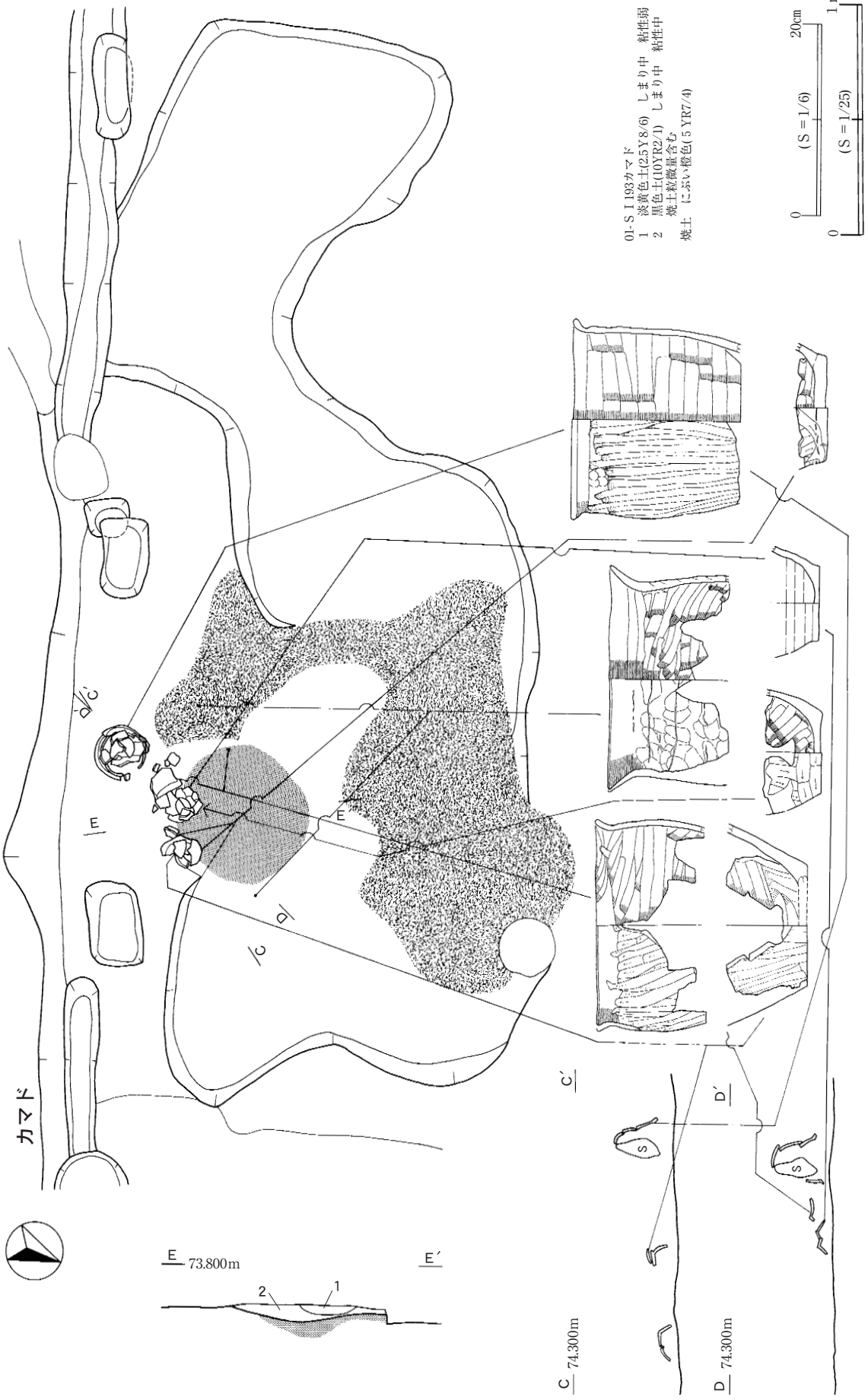
カマドは南東壁の中央からやや北東寄りの位置で、焼土の広がりで確認した。堆積土は２層に分かれ、１・２層はカマド構築材の崩落土の一部とみられるが、本住居跡が01-ＳＩ192により切られるため、上部構造の崩落土の残存は少ない。01-ＳＩ192の外側に当たる部分では、支脚や一部カマド部材に転用した甕が出土している。火床面は不整な円形状の被熱範囲で、径約0.75mである。

本住居跡は４本の主柱を配し、南東壁にカマドを設置する住居である。廃絶時には人為的に埋め立てており、重複する01-ＳＩ190の構築段階に造成したと想定される。

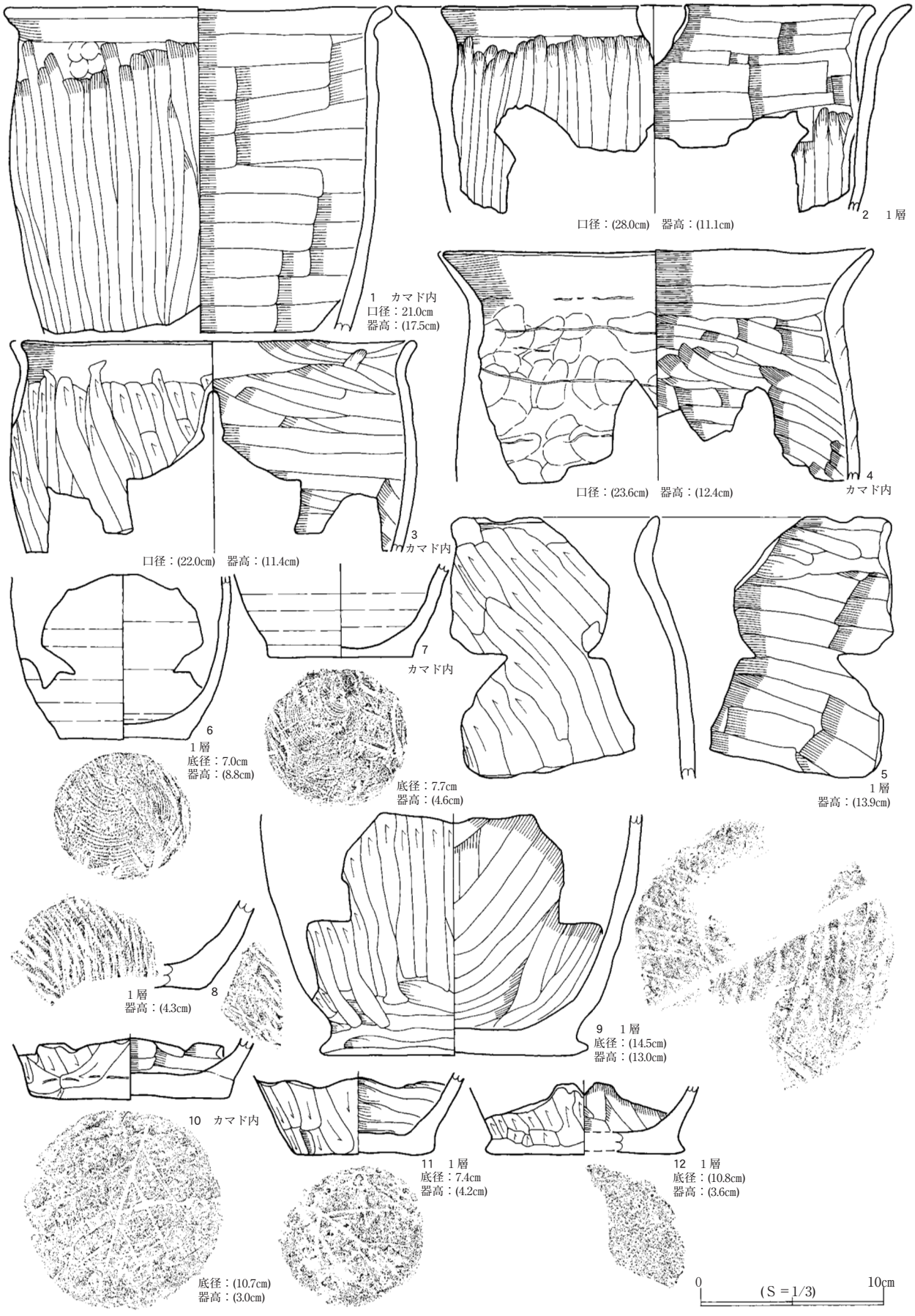
遺　物(第53図・54図)　住居跡内から土師器甕・坏・鍋、須恵器坏、鉄製品、土製品が出土した。土師器甕は、口縁部が25点、底部が26点出土しており、そのうち比較的大型の口縁部資料５点、底部資料９点を図示したが、本住居跡は01-ＳＩ190・192に切られていることから、本来は本住居跡内堆積土に含まれていた遺物が巻き上げられ、前２者の住居内に埋没している可能性がある。図示しなかったものを含めた甕の口縁部分類別数量はＡ類(５点)、Ｂ類(５点)、Ｃ類(13点)、Ｄ類(０点)、分類不能(２点)で、Ａ・Ｂ類が全体の約３割を占める。底部分類別数量は砂底(10点)、木葉痕(３点)、ナデ(２点)、ケズリ(５点)、タタキ(１点)、回転糸切無調整(２点)、分類不能(２点)で、砂底が多いが、大型の資料で



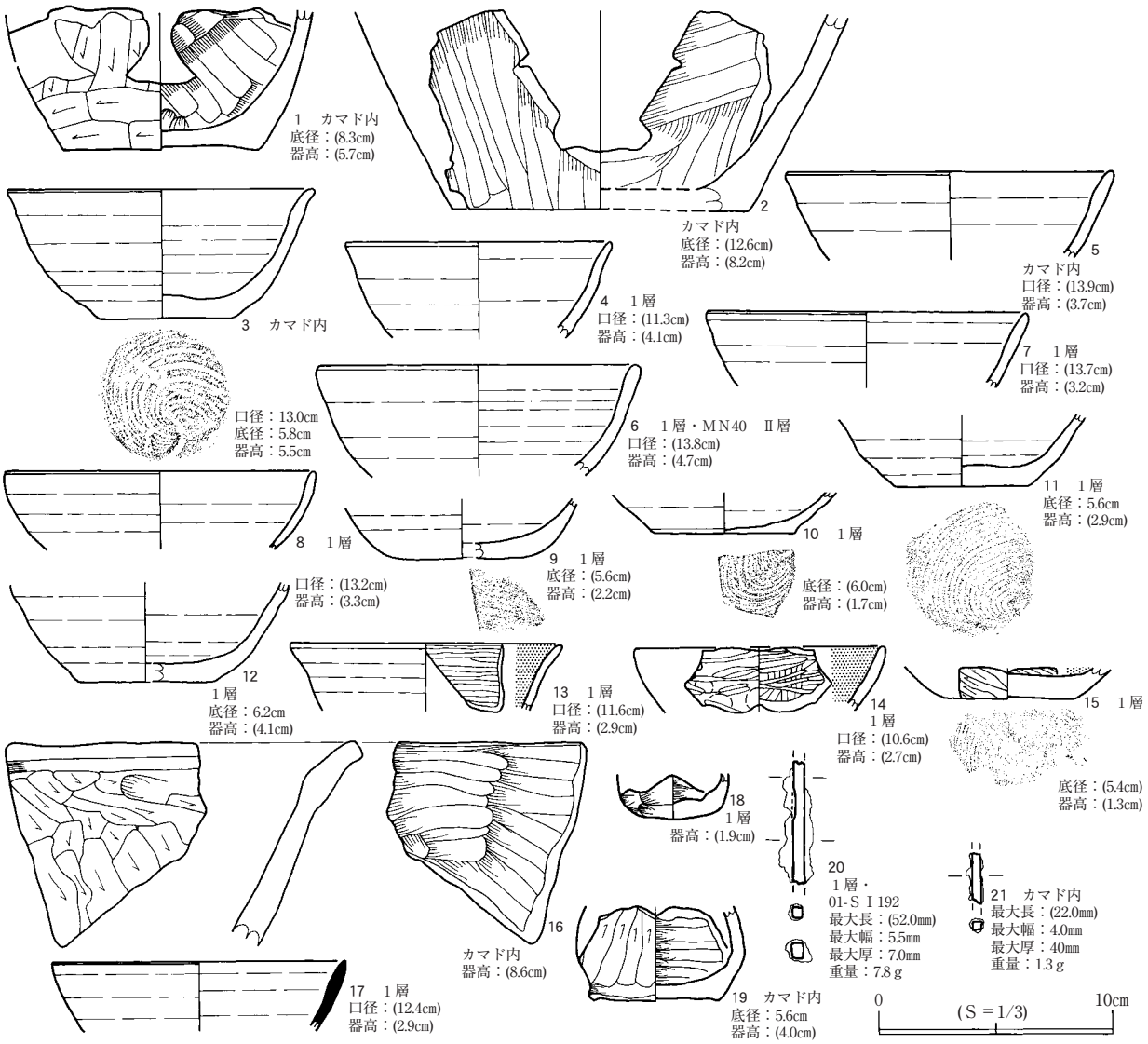
第51図　01-S I 193



第52図　01-ＳＩ193カマド・遺物出土状況



第53図　01-ＳＩ193出土遺物１



第54図　01-ＳⅠ193出土遺物２

は木葉痕のものが目立つ。

遺物の多くはカマド周辺から出土している(第52図)。53図７、54図２は火床面上部の奥壁寄りに２つ並んで位置しており、支脚として利用したものと考えられる。53図１は、火床面南東側に逆位に設置しており、位置からみてカマド袖の芯材に用いていたと考えられる。53図３・４も比較的大型の破片で、火床面上部に倒れこむ状況から、カマド部材だったと考えられる。53図10、54図１は、53図７、54図２の２個の支脚に近い位置にあり、支脚に入れ子状に設置していたとみられる。以上の出土傾向から、これらはカマド破棄時に崩落した構築材の残存状況と捉えられる。

53図１～５は大型の土師器甕である。１は頸部に部分的に緩い段が認められ、２・４は口縁部が長く外反する。１は胴下半部から直線的に立ち上がり、頸部で強くくびれて口縁部が短く外反する器形である。外面は縦位ヘラナデ調整だが、弱いケズリにもみてとれる。内面は横位の丁寧なヘラナデ調整である。２は胴部から緩やかに外傾して、口縁部が長く外反する。外面は縦位ユビナデ、内面は横位ヘラナデ調整後に、胴下半部に縦位のユビナデで再調整を施している。４は胴部中位がやや膨らみ、頸部で弱くくびれて口縁部が長く外反する器形である。外面調整は粗雑で、指の押さえもしくは非常

に短いユビナデのみの調整であるため、輪積痕が明瞭に残る。内面は横位・斜位のヘラナデ調整である。３は胴上半部に最大径を有し、頸部が弱くくびれて口縁部が短く外反する器形である。外面は縦位ケズリ、内面は横位ヘラナデ調整である。５も胴部中位に最大径を有し、口縁部が直立気味に立ち上がる器形で、口縁部がやや肥厚する。これは外面調整の縦位ケズリが深く、胴部上位の器壁が薄くなったため、相対的に口縁部が厚く見える。内面は横位等間隔のヘラナデ調整である。53図６～12、54図１・２は土師器甕の底部資料である。53図６・７はロクロ整形の小型甕である。53図８はタタキ目を、53図９～11は木葉痕を残す。53図12は砂底で、54図１・２はケズリによる再調整を施す。ケズリ再調整を施すものは、直線的に外傾する傾向にある。

54図３～15は土師器坏で、３～12がＡ類、13～15がＢ類である。３は完形資料で、中央部に最大厚をもつ比較的厚みのある底部から内湾気味に立ち上がり、口縁部が弱く外反する。焼き上がりは比較的硬質な感じがするが、全体に器壁が厚く底部の回転糸切痕も筋が広くて凹凸があり、またロクロ調整後につかんだ際、指で押さえて全体形を歪める部分もあるため、概して粗雑な作りの印象を受ける。４も同様な口縁部形状を有する。これに対し、５～８は口縁部が直線的に外傾もしくは内湾する器形で、５・７・８が先細りの、６が丸みを帯びた口唇形状である。底部は回転糸切無調整が多いが、12はケズリ再調整を施す。９は底部外縁の角のない丸い形状で、10～12は底部付近で弱く屈曲する。10は底部中央部器壁が極めて薄い。13は口縁部が外反し、14は口縁部が内湾する器形である。14は非ロクロ整形で、外面は指の押さえまたはユビナデの後、ミガキをかけている。15は底面や外面底部付近にケズリによる再調整を施している。以上の坏は、３・11・12を除いて破片資料であり、基本的に堆積土中からの出土であることから、本住居跡廃絶時に一括廃棄したものと考えられる。すなわち本住居機能時に確実に伴う資料とは断言できないものだが、廃絶後の埋め立て時に比較的多量の坏を投棄していることが重要である。これは本住居跡以降の住居内出土坏の量に比べて確実に多い傾向にあり、時期ごとに廃絶時の土師器坏投棄量が変わると考えられる。

54図16は土師器鍋の口縁部破片で、口縁部が外折する器形である。口唇は面取りにより平滑に仕上げている。外面はケズリで、内面はユビナデで調整している。54図17は須恵器坏で、口縁部が内湾して口唇が先細りになる形状である。54図20・21は鉄製品で、いずれも両端を欠損しており、棒状の部分のみが残存している。54図18・19は手づくねの小型土器である。

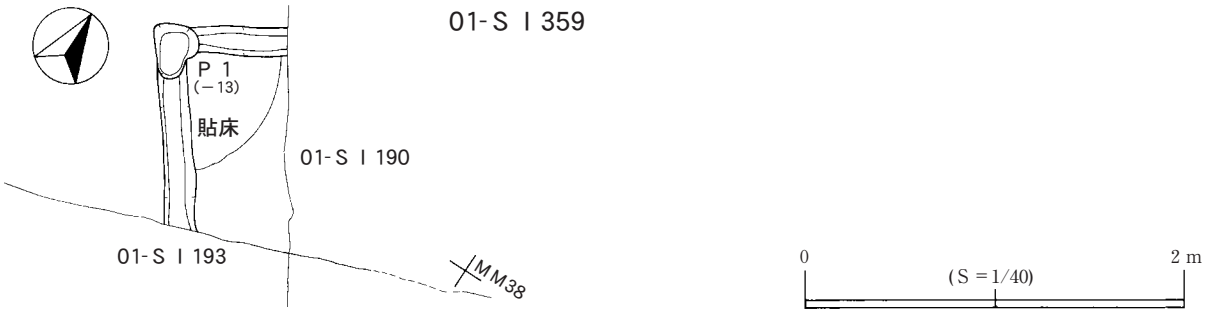
01-ＳＩ359(第55図)

遺　構　ＭＭ37・38グリッドの第Ⅳ層中位で、01-ＳＩ190・193とは違うプランの広がりで確認した。本住居跡の立地点は台地上部平坦面で、ほぼ平坦な地形である。01-ＳＩ190・193と重複し、いずれよりも本住居跡が古い。周辺には01-ＳＩ87・88・112・192、01-ＳＤ195がある。

確認できたのが想定されるプランの北西隅だけであり、全体形に関わる情報は失われている。確認できる範囲では壁溝がまわり、隅には柱穴を配置し、部分的に貼床を施す。

本住居跡は、ほとんどを01-ＳＩ190・193により破壊されており構造が不明である。このことは本遺構が住居跡かどうかの判断にも及ぶ問題で、可能性としては01-ＳＩ190Ａ段階の張り出し部とも考えられるが、01-ＳＩ193との重複関係からみて別個の住居跡と判断した。

遺　物　本住居跡に伴う遺物は検出できなかった。



第55図　01-S I 359

01-S I 112

本住居跡は、MM35・36、MN34～36、MO35・36グリッドの第Ⅳ層中位で、地山土粒を含む黒色土の広がりで確認した。本住居跡の立地点は台地上部平坦面で、ほとんど傾斜がない。01-S B452・468と重複し、いずれよりも本住居跡が古い。周辺には01-S I 119・193がある。

精査の結果、床面レベルの相違や壁溝・ピットの配置から、２回の建て替えが認められ、計３軒の住居跡が重なることが判明した。住居は新しい順に、A・B・Cのアルファベットを付けて表記した。

01-S I 112A(第56図～59図、図版21)

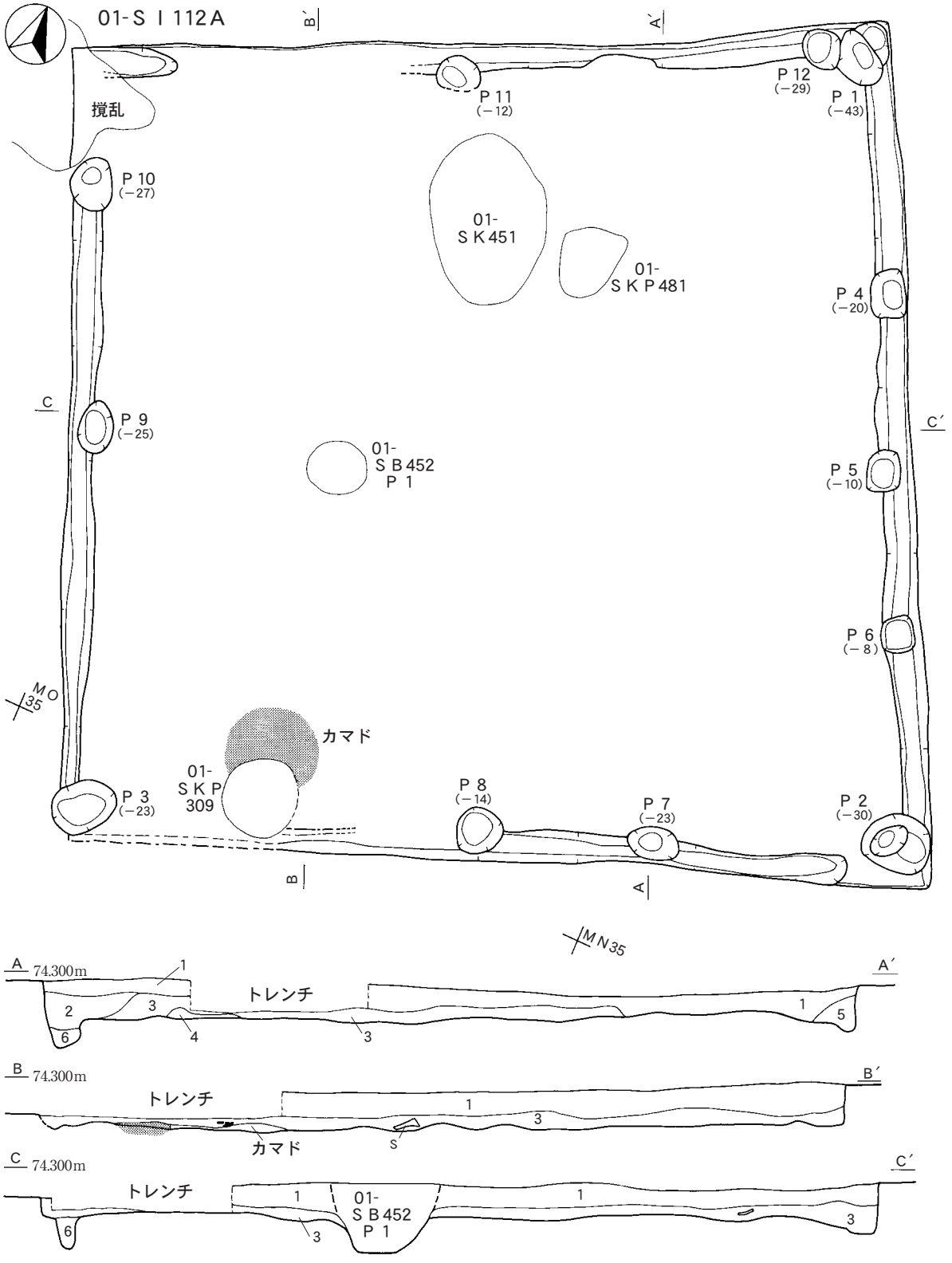
遺　構　２回目の建て替えにより、最大規模に達した段階の住居である。堆積土は６層に分けた。１～３層は住居の大部分を埋め尽くす堆積土で、特に量の多い１・３層は基本的に水平に堆積している。４層を除く堆積土は、黒色基調で地山土粒を含むほぼ同質の土であり、本住居跡は人為的に埋め戻したと考えられる。６層は壁溝内堆積土で、地山土粒を多量に含む裏込めの土である。明確に壁板の腐植土を観察できないことから、廃絶時に壁板は抜取ったと考えられる。

平面形はほぼ正方形で、カマドの付く壁に直交する主軸方位はN－25°－Wである。主軸とそれに直交するラインで測る住居面積は約31㎡で、大形の住居である。各壁の長さは北東壁約5.7m、南東壁約5.8m、南西壁約5.7m、北西壁約5.9mである。各壁の検出面からの深さは、北東壁0.2m、南東壁0.25m、南西壁が残りが悪く0.1m前後、北西壁が約0.15mで、基本的に垂直に立ち上がるようである。

床面は01-S I 112B上部には貼床を施し、それ以外は掘形底面の地山上面を利用している。掘形底面を利用している範囲は、ほぼⅥ層上面に相当する。壁溝はカマドと北西壁西半分を除いて全周で確認した。上場幅0.12～0.22m、下場幅0.04～0.14m、床面からの深さは基本的に0.2m前後の断面台形状である。

床面及び壁溝内で12個のピットを確認した。P１～３は住居隅の主柱穴である。西隅は撹乱のため確認できなかった。柱穴中心で測る主柱穴間距離は、P１－２間約5.2m、P２－３間約5.3mである。P４～12は壁柱穴で壁際に規則的に配置している。北東壁沿い３個、南東壁沿い２個、南西壁沿い２個、北西壁沿い２個である。北東壁沿いのように、中央部のP５とさらに両側の中間地点にP４・６を配置するのが基本的なあり方で、南東壁のカマドを配置する部分では欠落する。

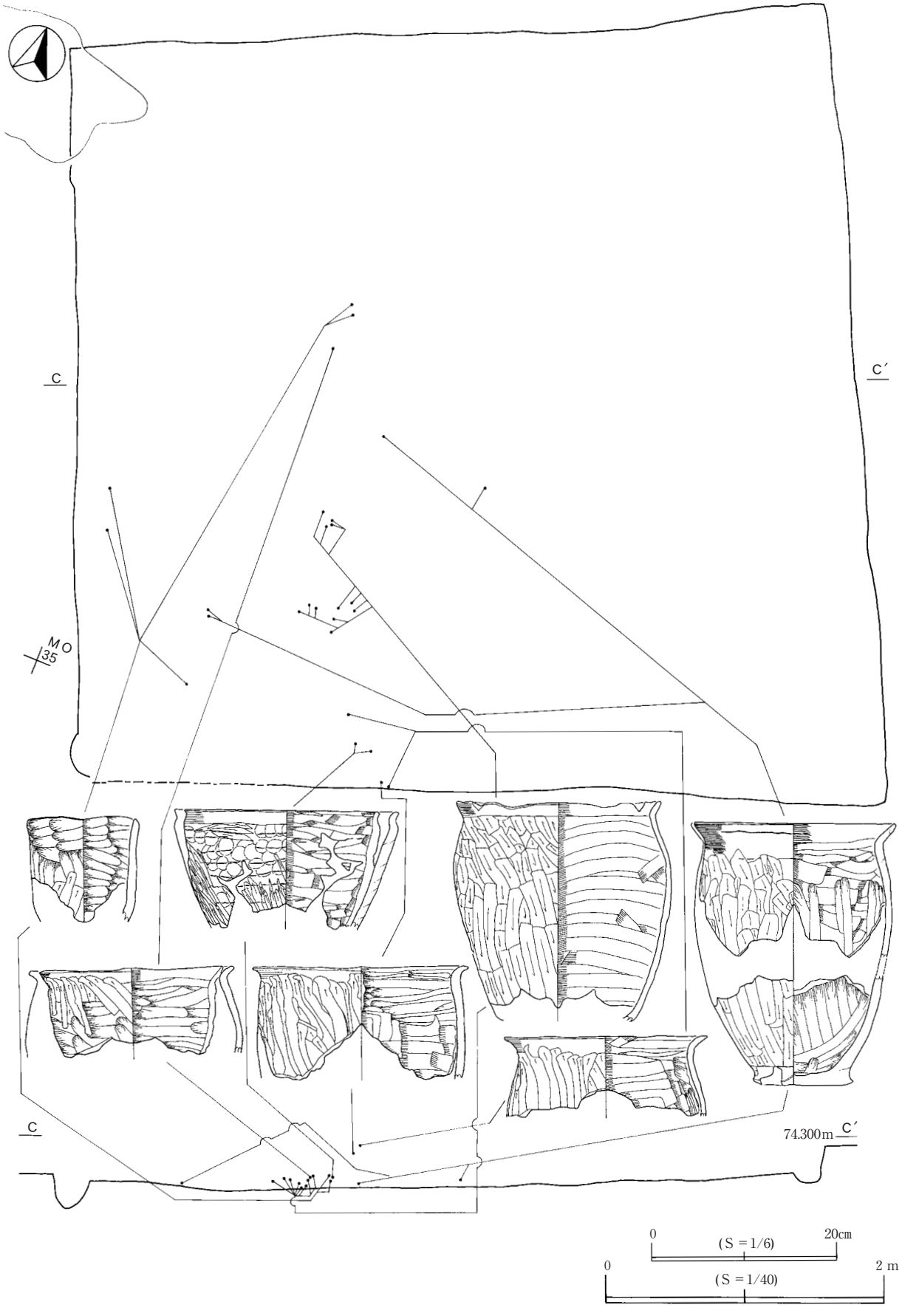
カマドは南東壁の中央からやや南西寄りの位置で、焼土の広がりで確認した。上部が削平されており、堆積土は残っていなかった。火床面は径0.64mの不規則な円形状の被熱範囲で、一部を01-S K P 309に切られる。掘形底面から、01-S I 112B上部の貼床層まで被熱範囲が及ぶ。なお、カマド前庭部



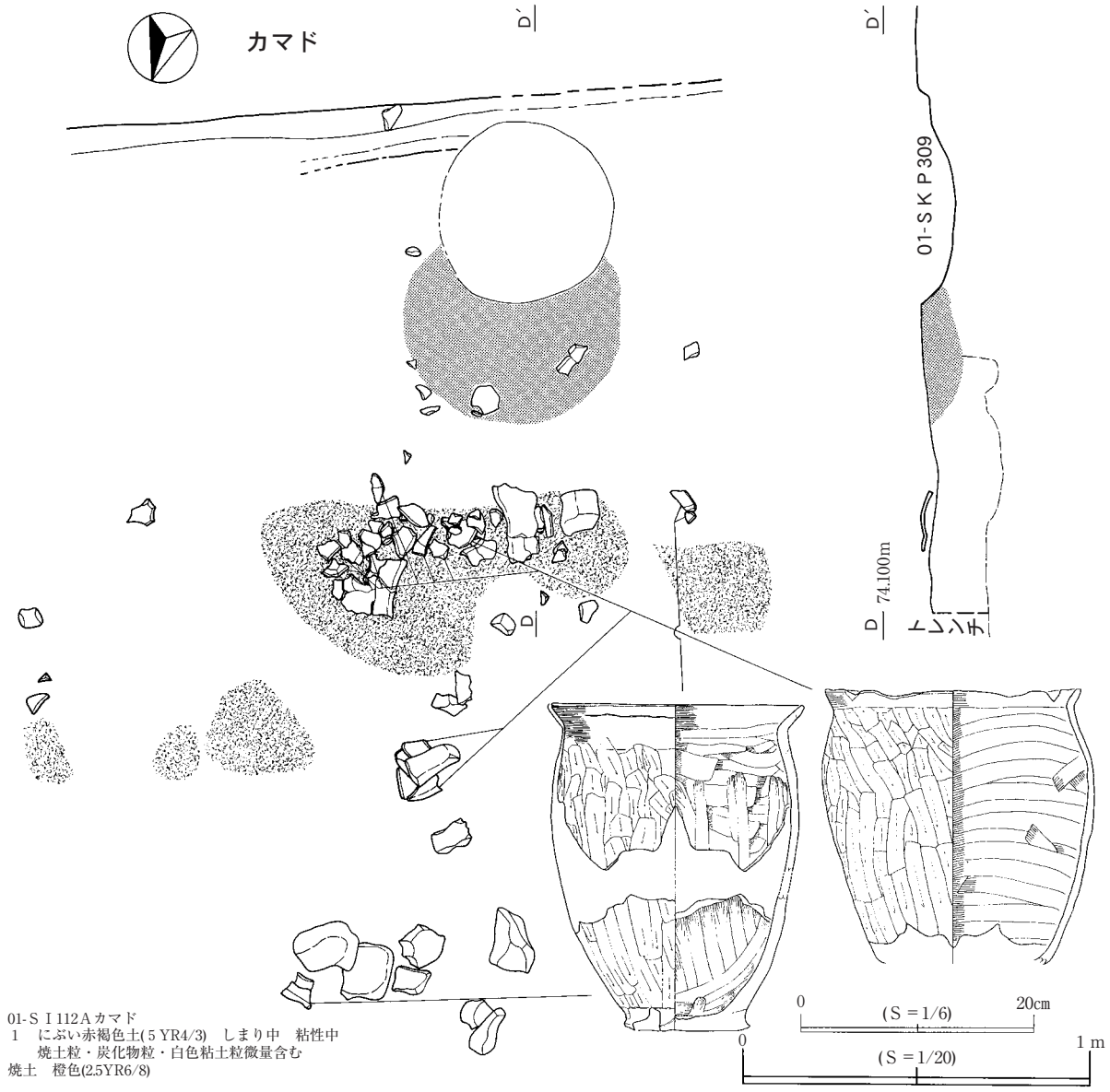
01-ＳＩ112Ａ
1　黒色土(10YR1.7/1)　しまり中　粘性中
　白色土粒少量・地山土粒微量含む
2　黒色土(10YR1.7/1)　しまり弱　粘性中
　白色土粒・にぶい黄橙色土粒微量・地山土粒少量含む
3　黒色土(10YR1.7/1)　しまり中　粘性中
　地山土塊微量含む
4　にぶい黄褐色土(10YR6/3)　しまり中　粘性中
　白色土粒微量含む
5　黒色土(10YR1.7/1)　しまり中　粘性中
　白色土粒微量・地山土塊少量含む
6　黒色土(10YR1.7/1)　しまり中　粘性中
　地山土粒多量含む

0　2 m
(Ｓ＝1/40)

第56図　01-ＳＩ112Ａ



第57図　01-ＳＩ112Ａ遺物出土状況



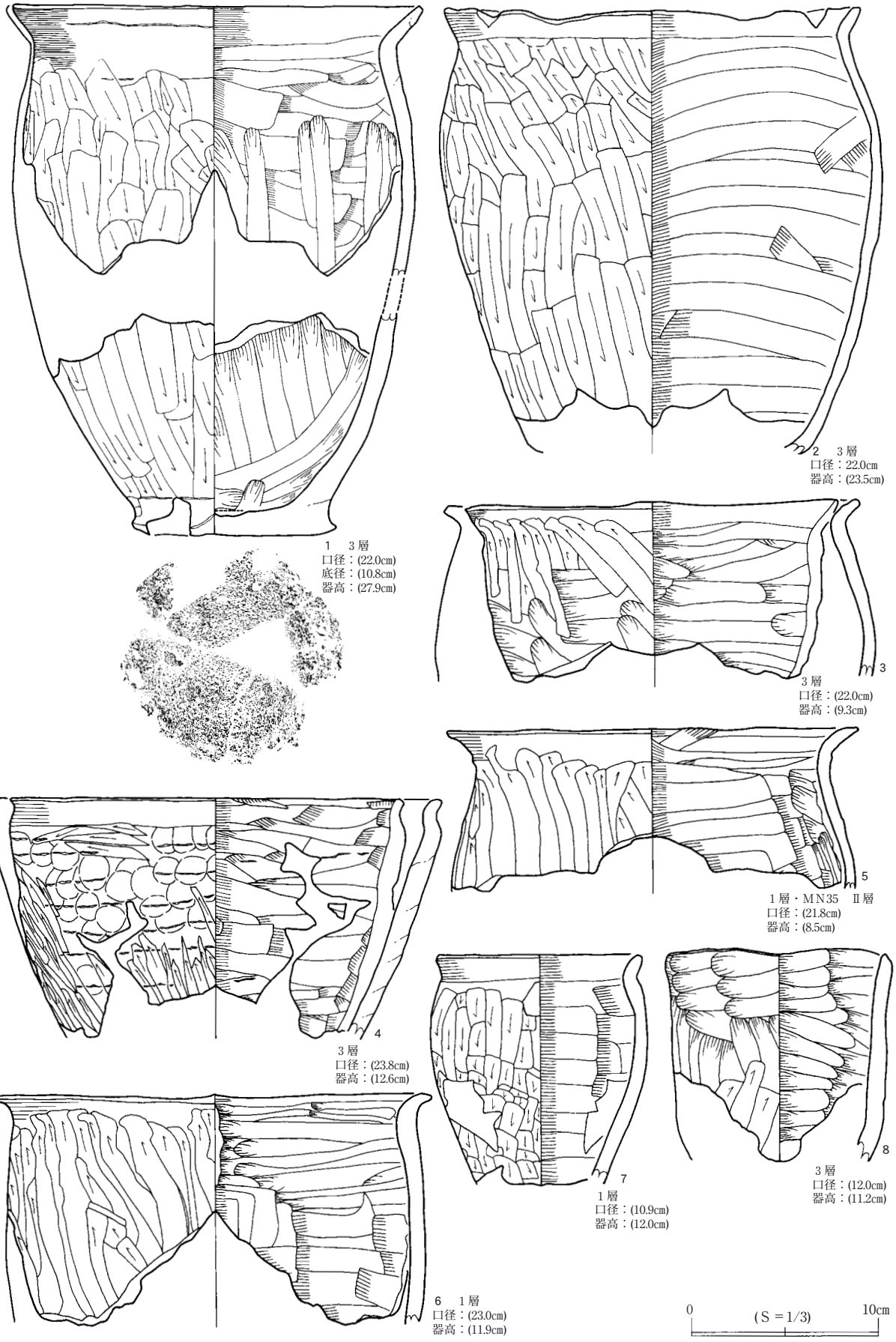
第58図　01-ＳＩ112Ａカマド遺物出土状況

からは多数の土器片や礫が出土している。

本住居跡は四隅に主柱をもち、南東壁にカマドを設置する住居で、01-ＳＩ112Ｂを埋め立てて構築している。床面構築では地山掘削を避け、01-ＳＩ112Ｂを埋め立てることで、拡張工事を行っている。本住居跡も最終的には人為的に埋め立てるが、これは本住居跡を掘り込む01-ＳＢ452・468構築段階の造成と考えられる。このことから本住居跡立地点は、集落内において居住区域から別な性格をもった区域へと変化したことが窺える。

遺　物(第59図)　住居跡内から土師器甕が出土した。土師器甕は、口縁部が13点、底部が５点出土しており、そのうち比較的大型の口縁部資料と底部資料を併せて８点図示した。図示しなかったものを含めた甕の口縁部分類別数量はＡ類(０点)、Ｂ類(４点)、Ｃ類(10点)、Ｄ類(１点)、その他(１点)、分類不能(１点)で、底部分類別数量は砂底(４点)、ケズリ(１点)の内訳になる。比較的Ｂ類が多い傾向にある。

本住居跡の下部には01-ＳＩ112Ｂがあり、出土遺物を明確に上下２層に分割できる(第57図)。出土位



第59図　01-ＳＩ112Ａ出土遺物

置では、カマド周辺部と住居中央部から南隅の範囲の２か所に集中が認められる。59図１・２はカマド付近から出土しており、層位的には床面から若干浮いていることから、カマド構築材が崩落土層に混在する状態とみられる。この他の土器も概ねカマド上部か周辺部からの出土であり、カマド構築材または使用土器の遺棄状況と考えられる。これに対し、59図３は住居中央部の堆積土中からの出土であり、住居埋め立て造成土に含まれていたか、一緒に投棄したものと考えられる。

59図１～６は大型の土師器甕である。１は口縁部破片と底部破片に接点はないが、胎土と調整から同一個体と判断し推定復元した資料である。底部は砂底で、内側がやや上底状になるため、外縁部にドーナツ状に砂の付着が認められる。底部外縁が張り出して、胴上半部まで膨らみながら立ち上がり、頸部で屈曲して口縁部が直線的に外傾し、口唇がわずかに内湾する器形である。外面は縦位ケズリ、内面は横位のヘラナデ後に縦位のユビナデで再調整している。２は胴上半部に最大径を有し、口縁部が短く外反する。外面は胴上半部を境に、縦位ケズリの方向が変わる。内面は等間隔の横位ヘラナデ調整である。３は胴上半部に最大径を有するとみられ、口縁部が外折する。内外面共に横位ユビナデ調整だが、外面の口縁部付近は頸部の屈曲を強調するために、縦位のケズリで最終調整している。４は胴下半部から直線的に外傾して立ち上がり、頸部が段状に屈曲して口縁部が短く外反する。外面調整は胴下半部に縦位ケズリを施すが、上半部はユビナデのみで明瞭に輪積痕を残す。内面は横位ヘラナデにより丁寧に仕上げている。５は胴上半部が膨らみ、頸部の屈曲部から比較的長めに口縁部が外反する。外面は縦位ケズリ、内面は横位ヘラナデ調整である。６は胴部中位から直立気味に立ち上がり、頸部で緩く屈曲して、口縁部が短く外反する器形である。外面は縦位ケズリで、内面は横位ユビナデ後に胴部中位以下を横位のヘラナデにより再調整している。

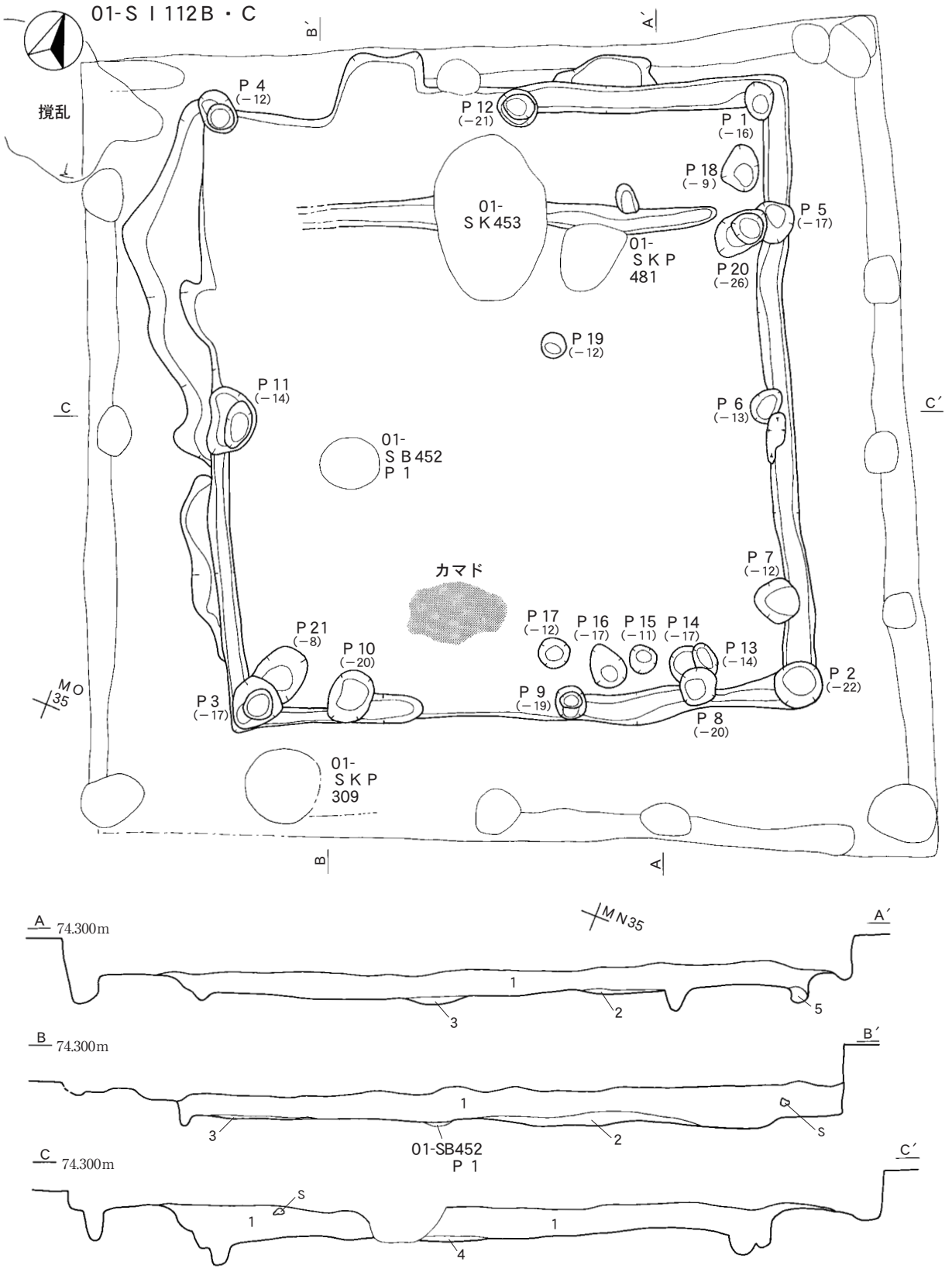
59図７・８は小型の土師器甕である。７は胴上半部が膨らみ、頸部にわずかに段を有し、口縁部が短く外反する。外面縦位ケズリ、内面横位ヘラナデ調整である。８は胴下半部から口縁部まで直立気味に立ち上がる器形で、外面は縦横のユビナデ後に胴下半部に縦位ケズリで、内面は横位のユビナデにより調整している。

01-ＳＩ112Ｂ(第60図～63図、図版21)

遺　構　１回目の建て替えにより、01-ＳＩ112Ｃよりも規模を拡大した住居である。最大規模の01-ＳＩ112Ａのプラン内に収まるが、本住居跡の方が床面レベルが深いため、壁の立ち上がりと住居内堆積土の一部が残存している。

堆積土は５層に分けた。竪穴掘り込み内部を埋め尽くす１層は、01-ＳＩ112Ａ構築時に造成した盛土である。２・３層はしまりの弱い黒色土で、本住居跡廃絶時に床面に遺棄した有機物の腐植土層と考えられる。４層は住居中央部に部分的に認められる土で、貼床の可能性がある。５層は壁溝内堆積土で、壁板裏込めの残存と考えられる。

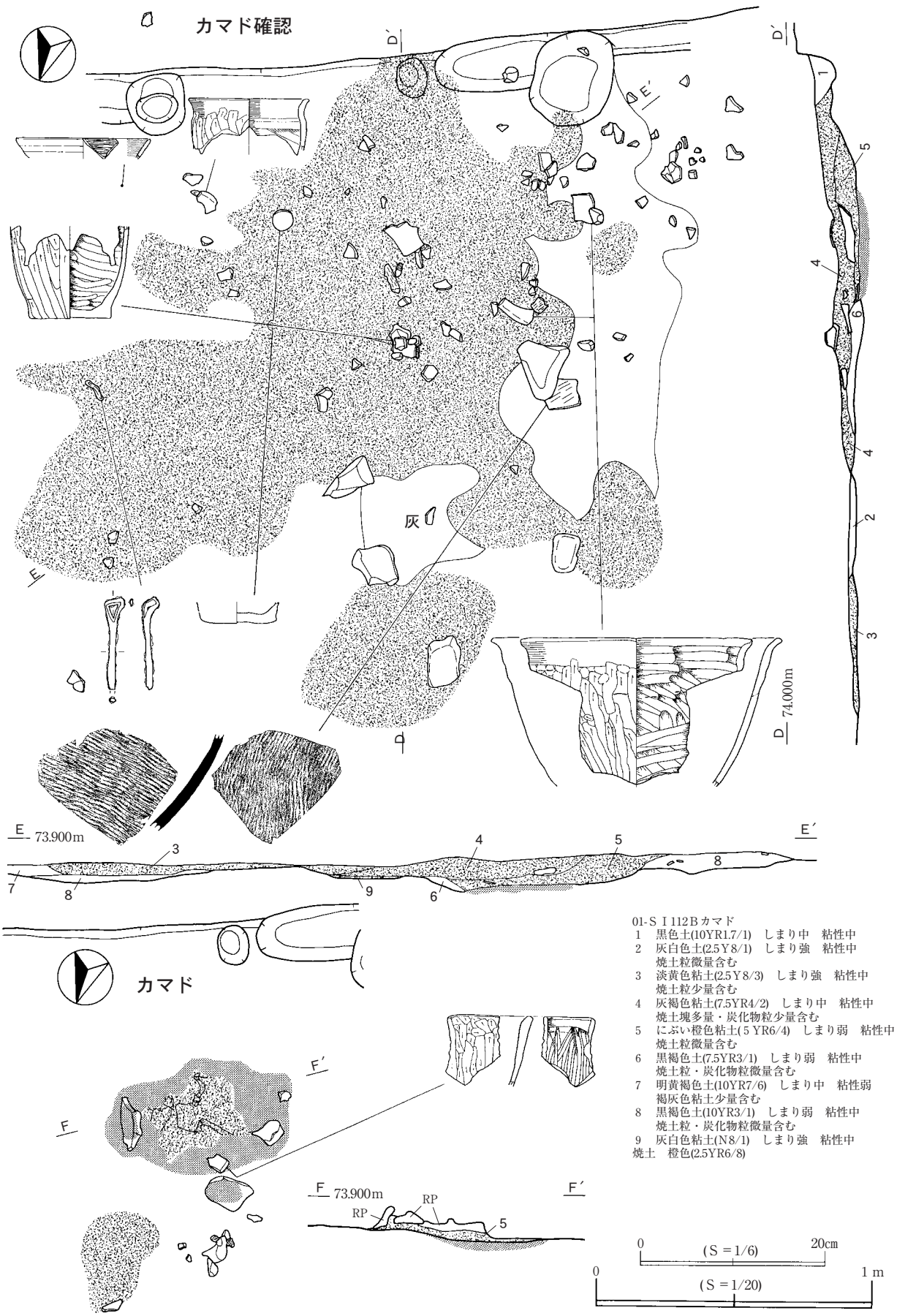
平面形は、北西－南東方向に長い長方形で、カマドの付く壁に直交する主軸方位はＮ－25°－Ｗである。主軸とそれに直交するラインで測る住居面積は約17㎡で、中形の住居である。各壁の長さは、北東壁約4.3m、南東壁約4.0m、南西壁約4.2m、北西壁約4.0mである。各壁の深さは、壁上部を01-ＳＩ112Ａが削平しているため、01-ＳＩ112Ａ検出面から測って北東壁・南東壁約0.4m、南西壁約0.35m、北西壁は0.4～0.5mである。基本的にほぼ垂直に立ち上がると考えられる。北西・南西壁では壁の平



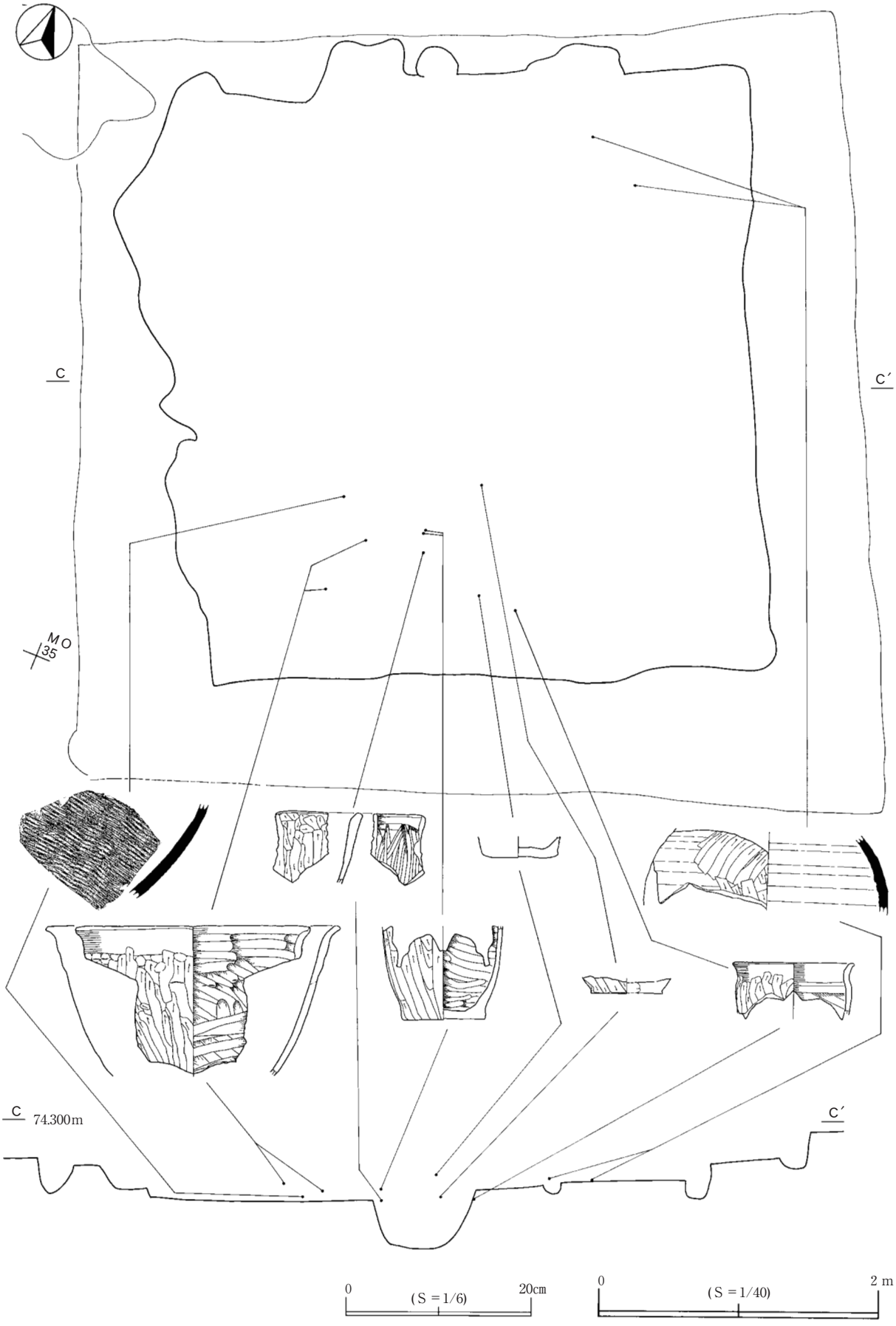
01-ＳＩ112Ｂ
1　黒色土(10YR1.7/1)　しまり強　粘性中
　白色土粒・小礫微量・地山土塊多量含む
2　黒色土(10YR1.7/1)　しまり弱　粘性中
　地山土粒多量含む
3　黒色土(10YR1.7/1)　しまり弱　粘性中
4　明黄褐色土(10YR7/6)　しまり中　粘性弱
　褐灰色粘土粒少量含む
5　淡黄色土(2.5Y8/3)　しまり強　粘性中
　焼土粒少量含む

0　2 m
(Ｓ＝1/40)

第60図　01-ＳＩ112Ｂ・Ｃ



第61図　01-ＳＩ112Ｂカマド・確認状況・遺物出土状況



第62図　01-ＳＩ112Ｂ遺物出土状況

面ラインが乱れるが、このような住居形態は他に認められないため、おそらく01-ＳＩ112Ａ構築時に、本住居跡床面レベルでの拡張を意図して掘り進めた部分と考えられる。

床面は01-ＳＩ112Ａより0.1～0.25m深く、全体にⅥ層地山を0.1m以上掘り込んでいる。基本的には掘形底面の地山面を基底面としている。壁溝は、カマドと北西壁・南西壁の一部以外はほぼ全周で確認した。上場幅0.1～0.22m、下場幅0.05～0.18m、床面からの深さ0.05～0.12mの断面台形状である。

床面及び壁溝内で19個のピットを確認した。Ｐ１～４は、四隅に規則的に配置する主柱穴である。Ｐ６・11・12は壁中央部に位置し、カマドが位置する南東壁には認められないが、Ｐ９が相当するかもしれない。Ｐ５・７～10は壁沿いにほぼ等間隔で配置しており、壁板保持の補助壁柱穴と考えられる。Ｐ13～17は、南東壁北東半分の壁から約0.5mまでの範囲に集中して分布するピットである。本住居跡は地山を比較的深く掘り込んでおり、当時の生活面と住居内床面の高低差も大きいことから、これらは出入り口施設に関わる下部構造の可能性が高い。ピットの数が多く、床面を共有する01-ＳＩ112Ｃのピットを含んでいると考えられる。

カマドは南東壁の中央から南西寄りの位置で確認した。堆積土は９層に分かれ、１・２・４～６層は構築材崩落層と流入土の互層である。３・７～９層は、カマド基底面及びカマド前庭部に貼った粘土質の土である。火床面は地山上面を利用している。焼土範囲は不整な楕円形で、長径約0.7m、最大幅約0.4mの範囲で、上面にはカマド構築材の崩落であるスサ入りの焼成粘土塊がのっていた。また、カマド部材に転用したとみられる土器片も散在していた。

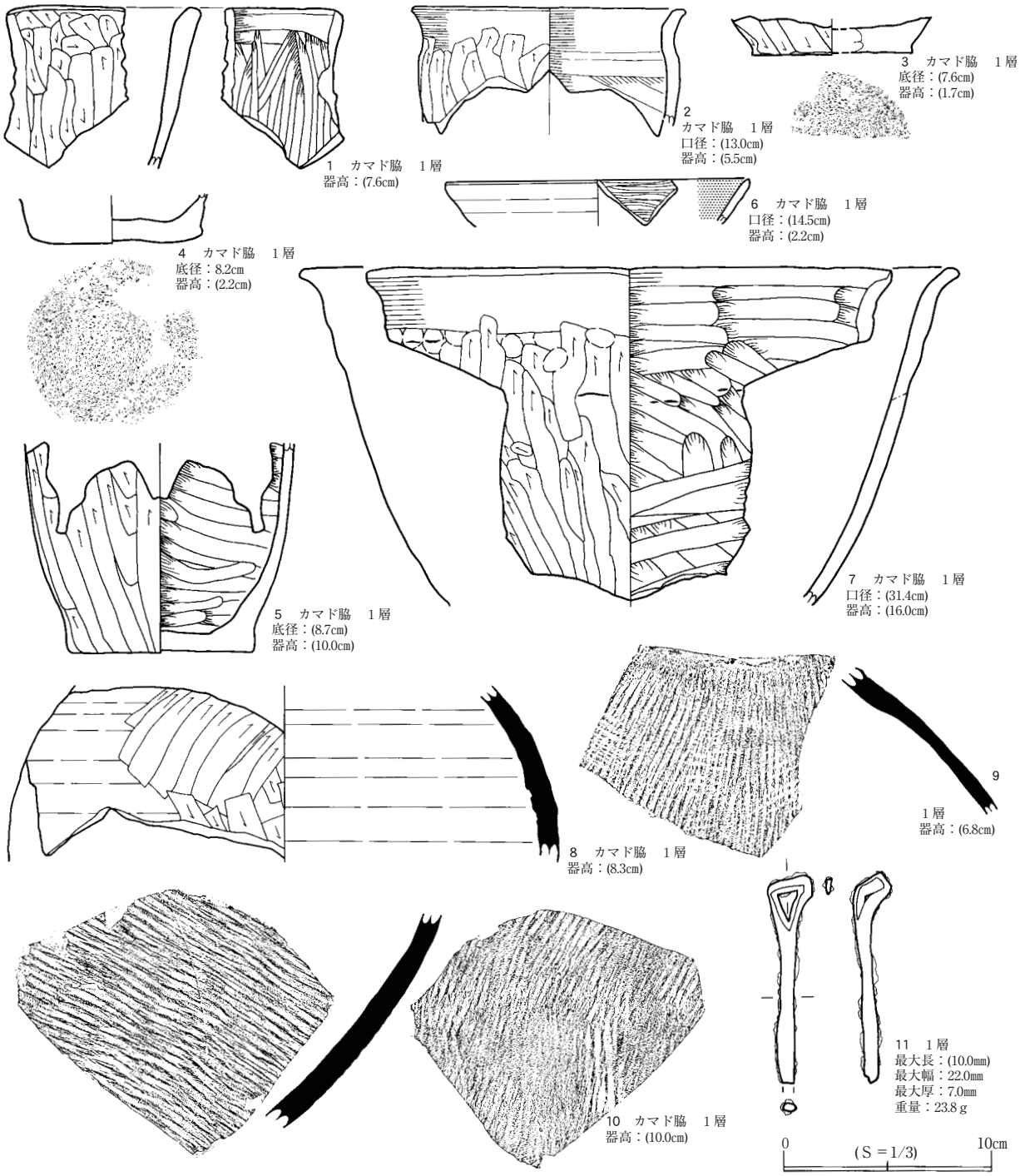
本住居跡は四隅に主柱をもち、南東壁にカマドを設置する住居である。01-ＳＩ112Ｃとはプランが相似形であり、連続的拡張過程が窺える。３軒重複する01-ＳＩ112の中では２段階目で、01-ＳＩ112Ａへと拡張するために廃絶したと考えられる。

遺　物(第63図)　住居跡内から土師器甕・坏・鍋、須恵器壺・甕、鉄製品が出土した。土師器甕は口縁部が２点、底部が３点出土しておりすべてを図示した。甕の口縁部分類ではＢ類を、底部分類では、砂底(２点)、ケズリ(１点)を確認している。

遺物は、上部の01-ＳＩ112Ａ構築段階で造成した盛土中からも多く出土しているが、図示したものは、カマドまたは床面付近から出土したものである。63図１～５・７・10はカマド付近の出土で、破片のものが多く、カマド構築材に転用した土器片と考えられる(第61図)。63図５は小型甕の胴下半部で、支脚に利用した可能性がある。63図８だけはカマドから離れた位置から出土している(第62図)。

63図２は小型の土師器甕の口縁部破片で、頸部に段を有し、口縁部が外反して口唇を平滑に仕上げる。外面は縦位ケズリ、内面は横位・斜位のヘラナデ調整である。63図１は、直線的に外傾する器形の甕もしくは鍋の破片である。口縁部にかけて器壁が厚くなる。外面は胴部が縦位、口縁部が横位のケズリ、内面は縦位ヘラナデ調整である。63図３～５は底部で、３・４は砂底、５は再調整のケズリが認められる。いずれも底部がやや突出する形状で、法量からみて小型の土師器甕の底部になると考えられる。63図７は土師器鍋で、胴下半部がやや丸みを帯び、上半部へ直線的に立ち上がり、口縁部が短く外反する。外面は縦位ケズリ、内面は横位・斜位のユビナデ調整である。

63図８～10は須恵器で、８は壺、９・10は甕である。８は肩部の破片で、外面にケズリ再調整を施している。９は頸部付近の、10は底部付近の破片で、９は外面に、10は内外面にタタキ目を確認できる。63図11は鉄製品で、馬具の轡の一部である。一端を欠損しているが、端部を環状に作っている。

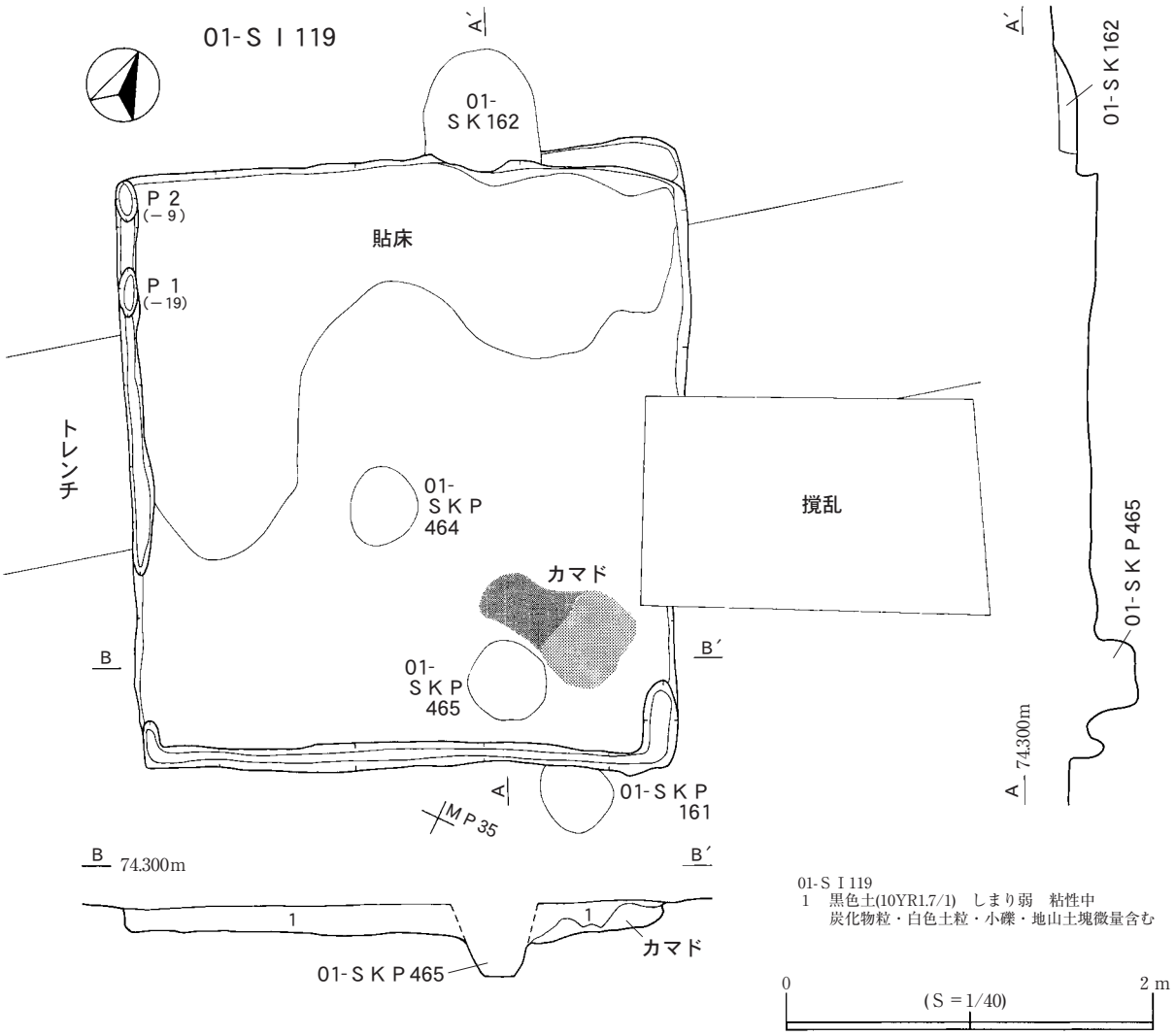


第63図　01-ＳＩ112Ｂ出土遺物

01-ＳＩ112Ｃ(第60図、図版21)

遺　構　３軒重複する01-ＳＩ112の中で、最初に構築した住居である。最大規模の01-ＳＩ112Ｂのプラン内に収まるため、埋没過程を示す堆積土は存在しない。また、本住居の存在を示す床面施設も限られており、Ｐ20・21と北西壁沿いに残る壁溝のみである。このことから、多くの床面施設を01-ＳＩ112Ｂと共有すると考えられる。

Ｐ20・21を住居対角線とみた場合、平面形はほぼ正方形で、カマドの付く壁に直交する主軸方位はＮ－25°－Ｗである。主軸とそれに直交するラインで測る住居面積は約11㎡で、小形の住居である。想定される平面形で見た場合、北東壁約3.4ｍ、南東壁2.9ｍ、南西壁3.2ｍ、北西壁3.1ｍである。各壁



第64図　01-ＳＩ119

の検出面からの深さ及び立ち上がりは、01-ＳＩ112Ｂに切られるため確認できなかった。

床面は01-ＳＩ112Ｂと共有しており、基本的には掘形底面の地山上面を基底面とする。壁溝は北西壁のみで確認した。南東壁沿いは01-ＳＩ112Ｂの壁溝と重なるとみられる。上場幅0.12～0.2m、下場幅0.06～0.12m、床面からの深さ0.1～0.15mの断面台形状である。

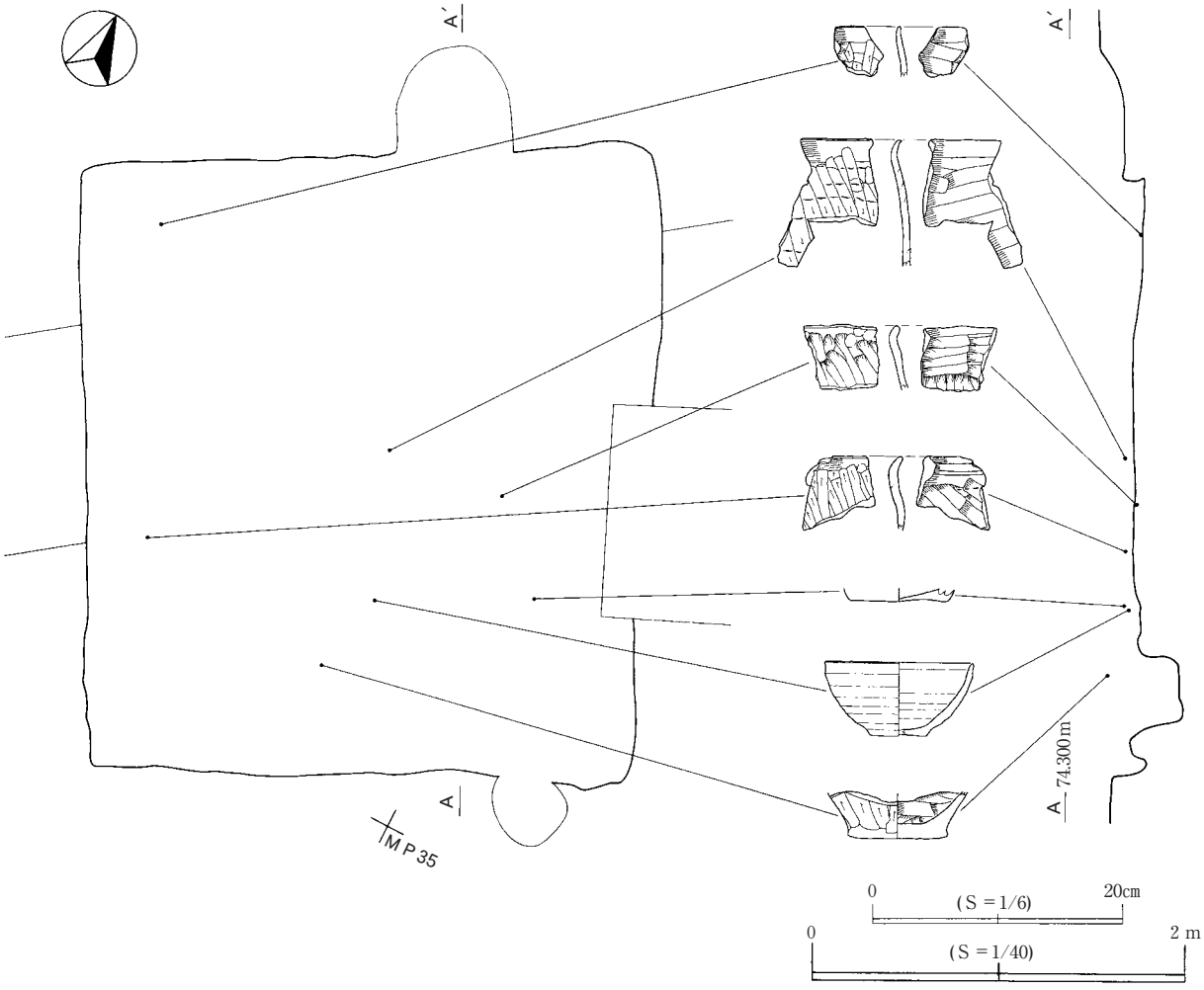
本住居跡に伴うとみられるピットは２個で、北隅・南隅に位置する主柱穴と考えられる。Ｐ21は浅く、01-ＳＩ112ＢＰ３と重なる。本住居跡に伴うカマドは明確でないが、住居プランがほぼ同じことから、01-ＳＩ112Ｂの位置と同じ地点を利用していたと考えられる。

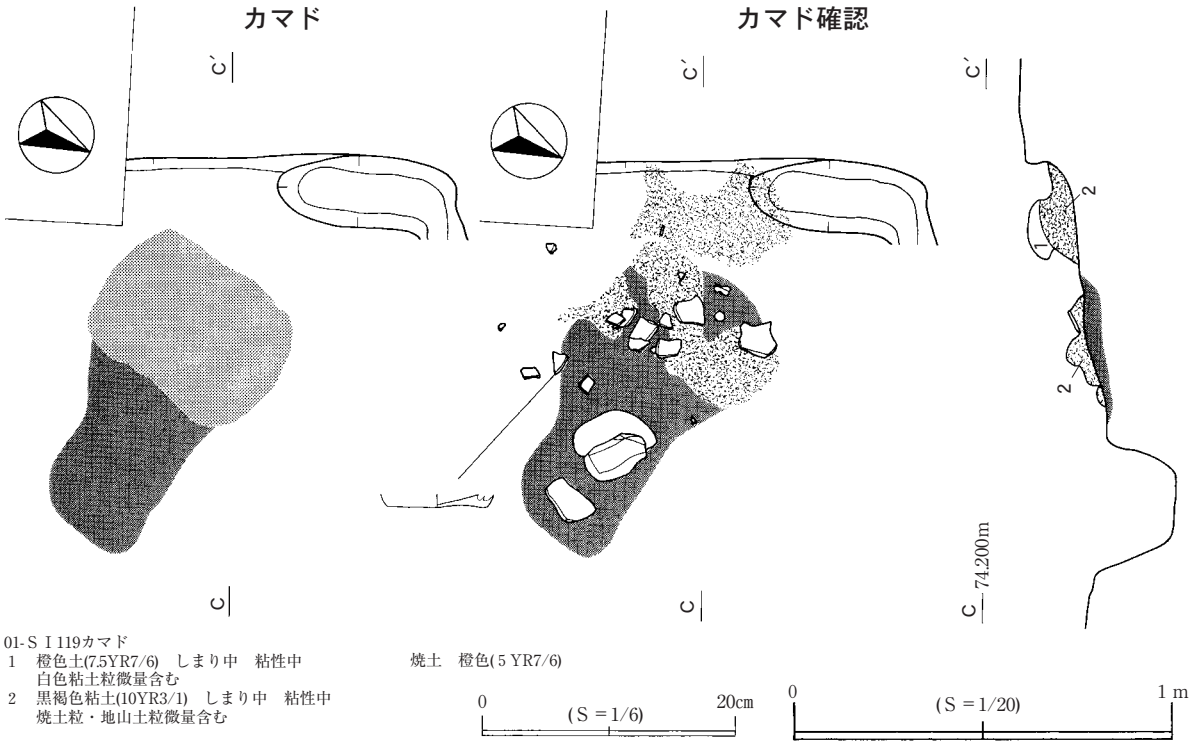
本住居跡は四隅に主柱を、南東壁にカマドを設置する住居と想定される。度重なる建て替えにより残存する部分が少なく、住居構造には不明な点が多い。３軒重複する01-ＳＩ112の中では最古段階で、01-ＳＩ112Ｂへと拡張するために解体したと考えられる。

遺　物　本住居跡に伴う遺物は検出できなかった。

01-ＳＩ119(第64図～66図、図版22・159)

遺　構　ＭＯ35、ＭＰ34・35グリッドの第Ⅳ層中位～第Ⅵ層上面で、地山土塊を含む黒色土の広がり





01-ＳＩ119カマド
1　橙色土(7.5YR7/6)　しまり中　粘性中
　　白色粘土粒微量含む
2　黒褐色粘土(10YR3/1)　しまり中　粘性中
　　焼土粒・地山土粒微量含む

焼土　橙色(５YR7/6)

第65図　01-ＳＩ119カマド・遺物出土状況

で確認した。本住居跡の立地点は台地上部平坦面である。01-ＳＫ162とＳＫＰ３基と、重複するが新旧関係は不明である。しかし、周囲の状況からみて、掘立柱建物を構成するＳＫＰが新しい可能性が高い。周辺には01-ＳＩ112・120・149、01-ＳＢ452・468がある。

堆積土は１層のみで、地山土塊や炭化物を含み水平に堆積することから、人為的な造成土と考えられる。平面形は北西－南東方向に長い長方形で、カマドの付く壁に直交する主軸方位はＮ－63°－Ｅである。主軸とそれに直交するラインで測る住居面積は約10㎡で、小形の住居である。各壁の長さは、北東壁約3.4m、南東壁約2.9m、南西壁約3.2m、北西壁約3.1mである。検出面からの深さは、南西壁の残りの良い部分で約0.2mで、全周ほぼ垂直に立ち上がる。

床面は、住居北東半分に浅く貼床を施すが、基本的には掘形底面を床面として利用しており、工具痕の凹凸をならす程度に貼床を施す。壁溝は南東壁・南西壁沿いで確認した。上場幅0.08～0.2m、下場幅0.04～0.1m、床面からの深さ0.1m前後の断面台形状である。壁溝内で２個のピットを確認した。ピットの配置には規則性がなく、本住居跡の構造材に関わる柱穴とは考え難いが、Ｐ１・２は北西壁西隅に２個並ぶことから、出入り口の痕跡である可能性が高い。

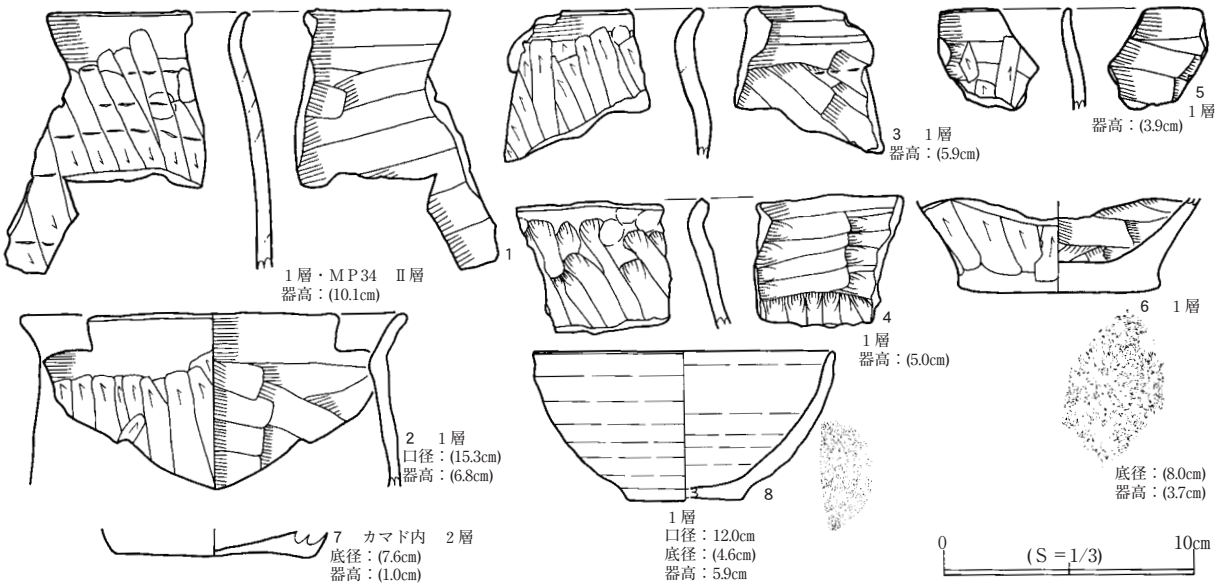
カマドは、北東壁の中央から南東寄りの位置で確認した。上部構造に関わる部分は撤去してあり、火床面上部にわずかな構築粘土を確認できた。堆積土は２層に分けた。いずれも構築粘土崩落層の残存土と考えられる。火床面はヒョウタン形の被熱範囲で、最長約0.8m、最大幅約0.52mである。火床面主軸方位は、住居主軸方位に平行する。

本住居跡は北東壁にカマドを設置し、壁溝以外に上屋に関連する下部構造をもたない住居である。廃絶後は一気に埋め立てている。住居内や隣接地には、掘立柱建物跡に関わる柱穴が多く存在することから、それらの構築時に埋め立てたと考えられる。このことは、本住居跡立地点が、集落内において居住域でない土地利用に変更したことを示している。

遺　物(第66図)　住居跡内から土師器甕・坏が出土した。土師器甕は口縁部が８点、底部が５点出土している。そのうち口縁部資料を５点、底部資料を２点図示した。ほとんどが小破片であり、カマド構築材に転用した可能性のある66図７以外は、ほとんど埋め立て時に投棄したものと考えられる(第65図)。ただ、66図８の坏はほぼ完形で、床面付近から出土しており、住居廃絶時に意図的に置いた可能性がある。

66図１～５は土師器甕の口縁部破片で、１・３～５は胴上半部に、２は口縁部に最大径をもつ器形である。２の口縁部は外折し比較的長い。４も口縁部の反りは短いが、頸部で外折する。１・３は口縁部が弱く外反して、５はほぼ直立または内湾する形状である。１・５が口唇にむけて先細りになるのに対し、２～４は口唇まで一定の器厚で作っている。外面調整は、４が縦位のユビナデである以外は、いずれも縦位ケズリである。内面調整は、１～３・５が横位・斜位のヘラナデ、４は縦・横位のユビナデである。66図６・７は土師器甕の底部で、６は砂底、７はナデにより調整している。６は器壁が厚く、やや突出する形状である。

66図８は土師器坏Ａ類で、底部付近で屈曲して内湾しながら立ち上がり、口縁部で弱く外反する器形である。外面のロクロ目は凹凸があり、底部外縁部でははみ出した粘土を調整していない部分も認められるが、全体的に硬質な焼き上がりで、底部の回転糸切痕も緻密な糸により仕上げており、内面のロクロ目は凹凸をほとんどもたないなど、基本的に丁寧な作りのものである。



第66図　01-ＳＩ119出土遺物

01-ＳＩ120(第67図～69図、図版23)

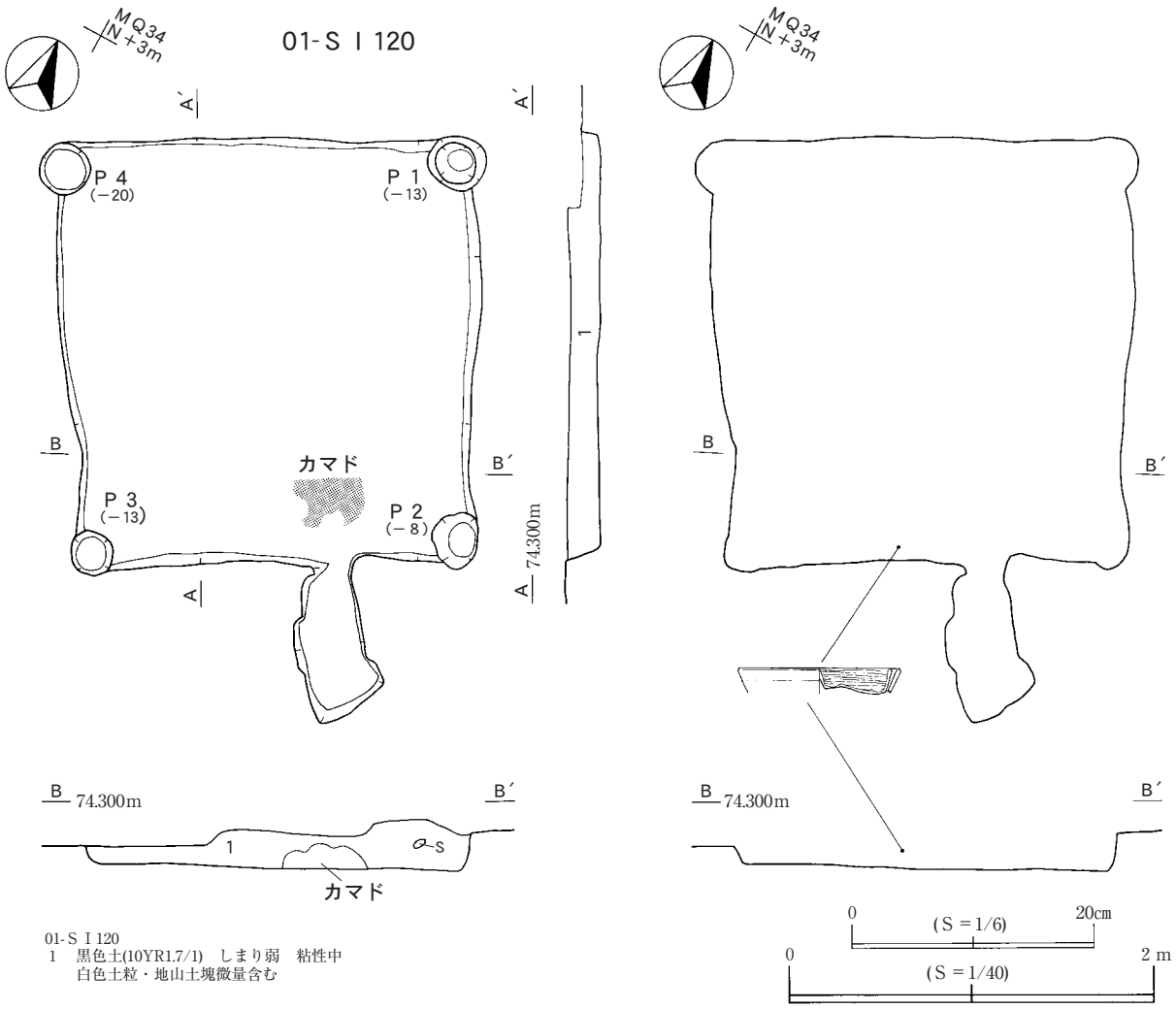
遺　構　ＭＰ34グリッドの第Ⅳ層中位～第Ⅵ層上面で、地山土塊を含む黒色土の広がりで確認した。本住居跡の立地点は台地上部平坦面で、ほとんど傾斜がない。重複する遺構はなく、周辺には01-ＳＩ112・119・149、01-ＳＢ452・468がある。

堆積土は１層のみで、地山土塊や炭化物を含み水平に堆積することから、人為的造成土と考えられる。平面形はほぼ正方形で、カマドの付く壁に直交する主軸方位はＮ－30°－Ｗである。主軸とそれに直交するラインで測る住居面積は約５㎡で、極めて小形の住居である。各壁の長さは、北東壁約2.3ｍ、南東壁約2.2ｍ、南西壁約2.4ｍ、北西壁約2.4ｍである。検出面からの深さは、南西壁の残りの良い部分で約0.2ｍで、全周ほぼ垂直に立ち上がる。床面は掘形底面を利用しており、ほぼⅥ層上面に相当する。壁溝はなく、床面で検出できたのは四隅の主柱穴だけである。

カマドは、北東壁の中央からやや北東寄りの位置で確認した。袖の一部と煙道の下部構造を確認した。上部構造の多くは撤去してあり、火床面上部にわずかな構築粘土を確認できた。堆積土は14層に分けた。カマドは住居掘形底面に12・14層の土を盛り、その上に灰白色系の粘土を貼って構築している。天井部は崩落しているが、側面部は残存している。煙道部は長さ約0.9ｍ、最大幅約0.4ｍの不整な長方形状の浅い掘り込みをもつ半地下式である。火床面は不規則な形の被熱範囲で、前庭部側を一部欠損しているが、最大幅は約0.5ｍである。

本住居跡は四隅に主柱をもち、南東壁にカマドを設置する住居である。本遺跡の中でも最も小さいサイズであり、煙道形態も特殊でやや異質な感じを受ける。廃絶後は人為的に埋め立てており、住居内や隣接地には、掘立柱建物跡に関わる柱穴が多く存在することから、それらの構築時に埋め立てたと考えられる。

遺　物(第69図)　住居跡内から土師器甕・坏が出土した。基本的に遺物の出土は少なく、図示したもので全てである。69図１・２はカマド上部に散乱しており、一部はカマド袖内面部に立てかけたような状態で出土していることから、構築材として転用したものと考えられる(第68図)。69図３はカマド脇から出土した(第67図)。



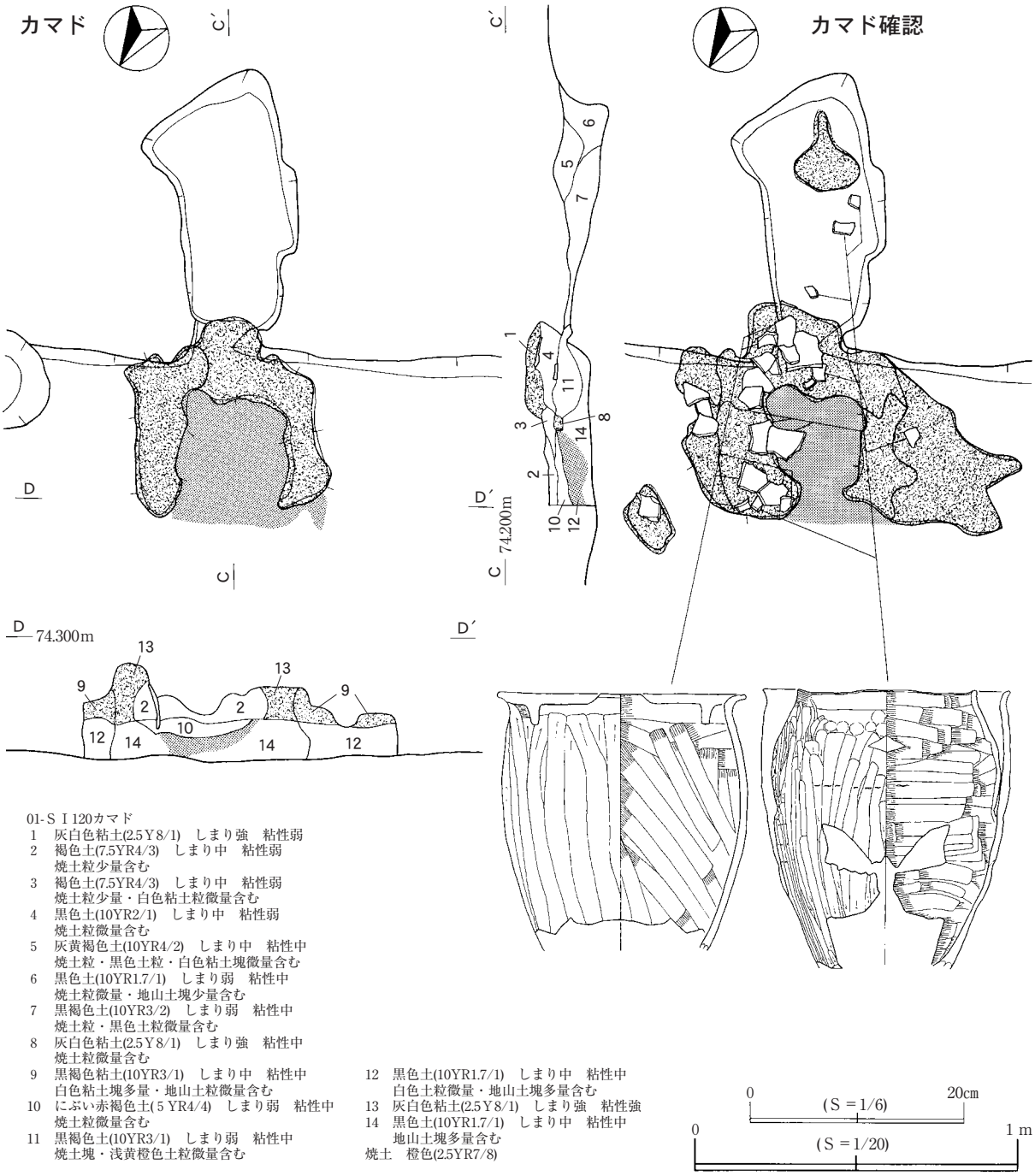
第67図　01-S I 120・遺物出土状況

69図１・２は大型の土師器甕である。１は胴部中位が膨らみ、頸部で屈曲し、口縁部が強く外反してほぼ真横に延びる形状になる。外面は縦位ケズリ、内面は斜位のヘラナデ調整である。２は底部付近から内湾気味に立ち上がり、頸部でわずかに屈曲して口縁部が弱く外反する。外面は縦位ケズリ、内面は横位ヘラナデ調整である。69図３は土師器坏Ｃ類の口縁部破片で、直線的に外傾する器形で、内面には横位ミガキが認められる。

01-S I 139(第70図～73図、図版24・160・166)

遺　構　ＭＴ38、ＮＡ38・39グリッドの第Ⅳ層中位～第Ⅵ層上面で、地山土塊を含む黒色土の広がりで確認した。本住居跡の立地点は台地上部平坦面だが、北西側調査区外の沢にむかってわずかに傾斜する。ＳＫが住居内に１基認められる以外重複する遺構はなく、周辺には01-ＳＩ141・149・160、01-ＳＢ146、01-ＳＡ461、01-ＳＤ220がある。

堆積土は１層のみで、地山土粒や焼土粒を含み水平に堆積することから、人為的な造成土と考えられる。平面形は住居南辺が長い台形で、カマドの付く壁に直交する主軸方位はＮ－08°－Ｅである。主軸とそれに直交するラインで測る住居面積は約12㎡で、小形の住居である。壁のラインを延長して推定した場合の各壁の長さは、東壁約3.1m、南壁約3.8m、西壁約3.1m、北壁約3.2mである。検出面

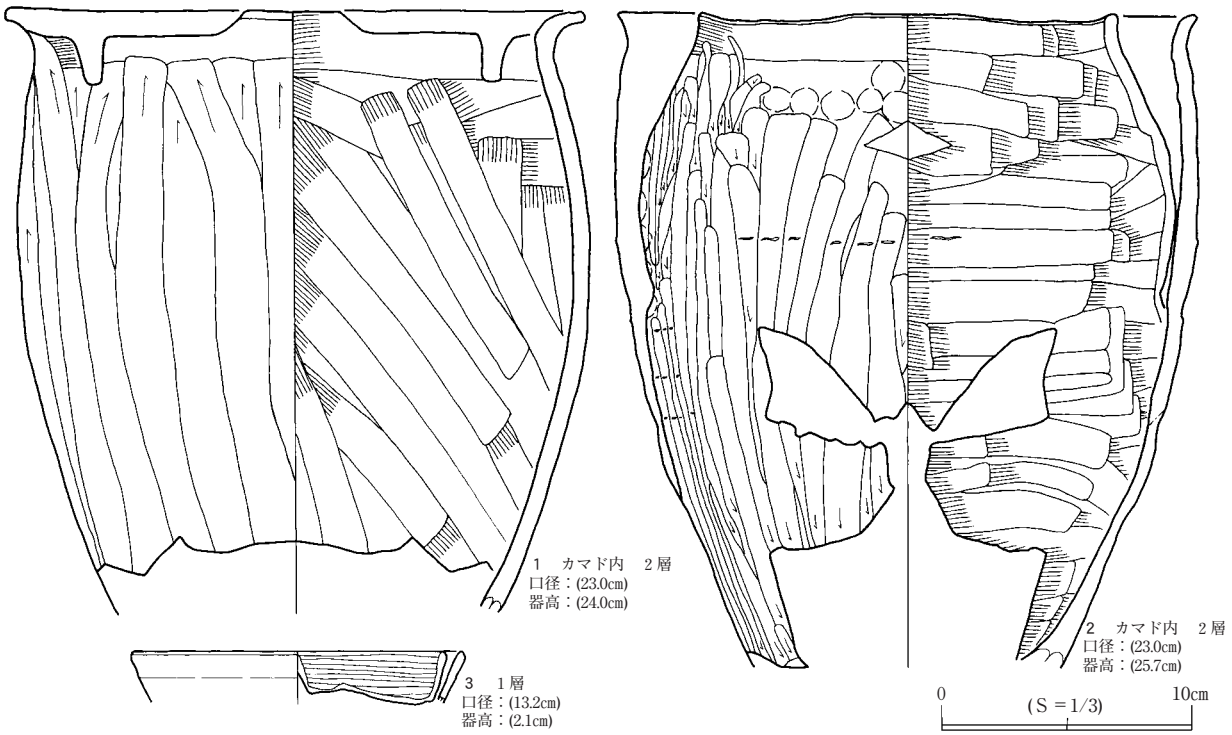


第68図　01-ＳＩ120カマド・遺物出土状況

からの深さは、北・東壁の残りの良い部分で0.2～0.25ｍで、全周ほぼ垂直に立ち上がる。

床面は基本的に掘形底面を利用しており、ほぼⅥ層上面に相当する。壁溝は、東・南壁の一部で確認した。壁溝の南東角は住居南隅よりも北側の位置で曲がっており、住居プランと一致しない。床面で８個のピットを検出した。住居北東・北西隅に集中する傾向がある。

カマドは、南壁の中央からやや東寄りの位置で確認した。上部構造は完全に崩落しており、火床面上部に倒壊した状態で確認した。堆積土では１～４層までが崩落層と考えられる。５・６層は面的に安定していることから、カマド基底面の貼り土と考えられる。火床面は不整な楕円形の被熱範囲で、長径0.65ｍ、短径0.55ｍである。



第69図　01-ＳＩ120出土遺物

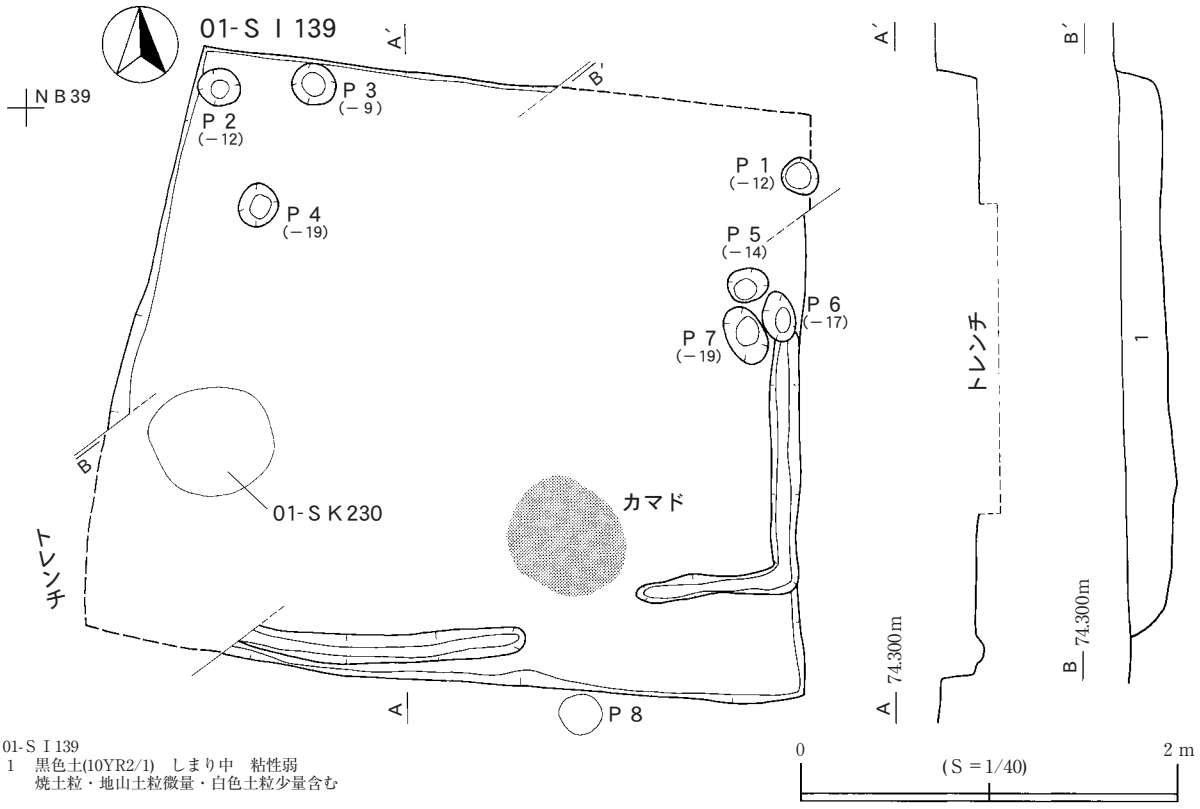
本住居跡は、壁溝や柱穴の配置に規則性を見い出し難く、また住居平面形も明確に台形状であり、他の住居に比べ雑な造りの印象を受ける。隣接地に掘立柱建物跡や柵跡に関わる柱穴が多く存在しており、それらの構築までに埋め立てたと考えられる。

遺　物(第73図)　住居跡内から土師器甕・坏・鍋、墨書土器が出土した。土師器甕は口縁部が４点、底部が４点出土しており、そのうち底部破片１点を除いて全て図示した。図示しなかったものを含めて、甕の口縁部分類ではＢ・Ｃ類が、底部分類では砂底・木葉痕が出土している。

遺物の出土位置はカマド周辺が多いが、比較的形になる73図１・２以外は、床面より高い位置から出土しており、廃絶時に投棄したものである可能性が高い(第72図)。

73図１・２は中・大型の土師器甕である。１は底部に木葉痕をとどめ、張り出す底部外縁から直線的に外傾して胴上部で内湾し、頸部で弱く段状にくびれて、口縁部が外反・外折する。外面は縦位ケズリ、内面は横位ヘラナデ調整である。２は胴上部に最大径を有し、わずかにくびれる頸部から弱く口縁部が外反する。外面は縦位ケズリ、内面は横位ヘラナデ調整である。73図３・４は土師器甕の口縁部破片で、３は直線的に外傾する、４は頸部のくびれから口縁部が外折する。いずれも外面は縦位ケズリだが、内面は、３が縦・斜位のユビナデ、４が横位ヘラナデ調整である。１・４は比較的器壁が厚く、口唇を面取りするのに対し、２は比較的器壁が薄く、口唇にかけて先細りの形状になる。73図５・６は土師器甕の底部資料で、５が木葉痕、６が砂底である。

73図７～９は土師器坏で、７・８がＡ類、９がＢ類である。７は口縁部から底部まで残存しており、底部付近がわずかに屈曲し、口縁部まで直線的に外傾する。器壁が一定せず全体に厚めである。外面底部付近には部分的にケズリを施すが、内外面共にロクロ目の凹凸が認められ、底部の回転糸切痕は筋幅が広い。焼成もやや軟質で、胎土に砂が目立ち、中には長さ１cmの小礫も含むことから、粗悪な作りといえる。８は胴下部が丸みを帯び、口縁部にかけて直線的に立ち上がり、口端がわずかに内湾



第70図　01-ＳＩ139

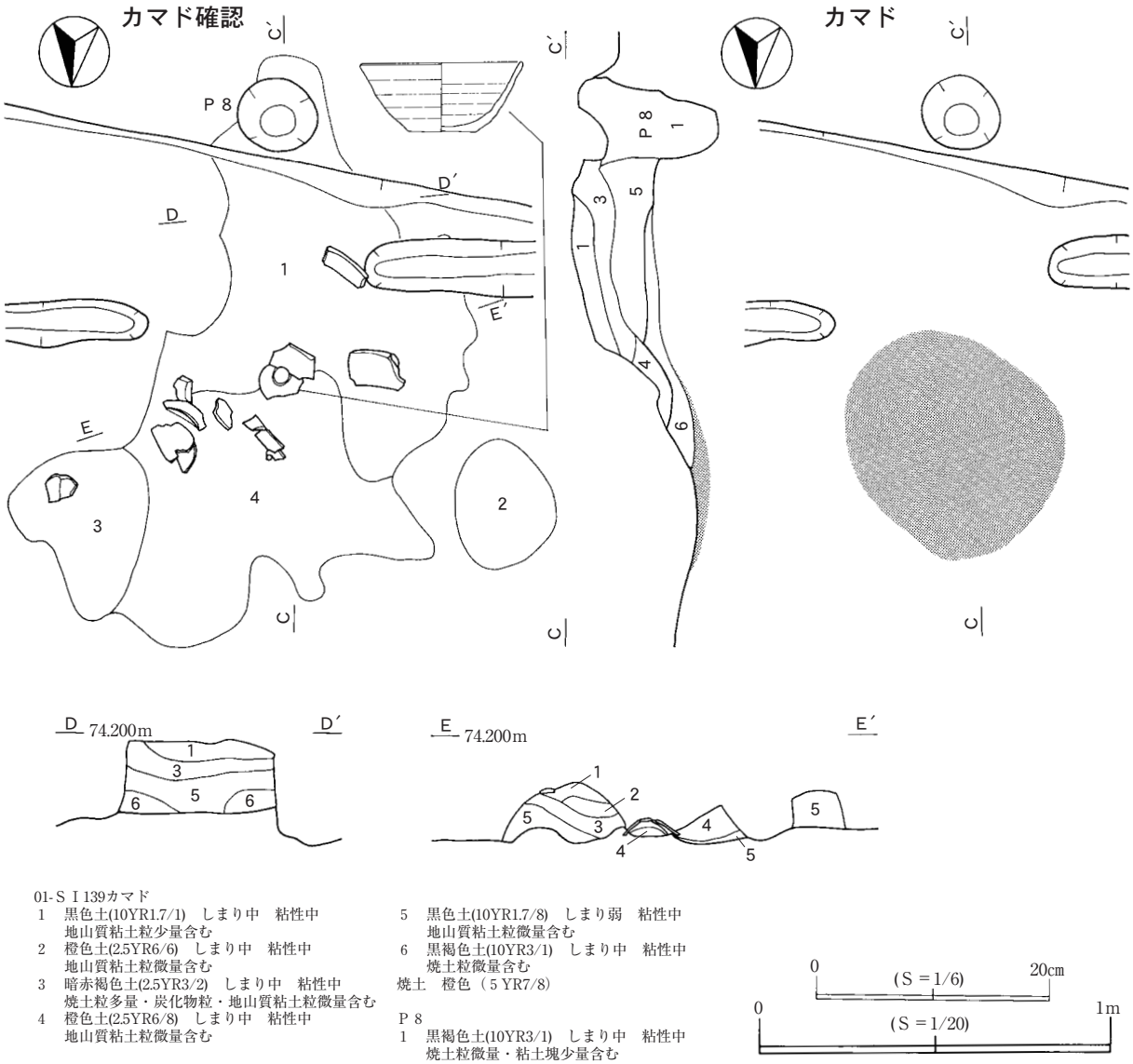
する器形である。口唇は、７が丸く、８が先細りになる。９は外面に墨書を施している。器面に対して垂直に３本並列する線を確認できるが、文字または記号を表すものかは不明である。器形は底部から丸みを帯びて立ち上がり、口縁部がわずかにくびれて、口端にかけて弱く外反する。内面には、底部付近で放射状の、胴部中位では袈裟懸け状にミガキを施している。73図10は土師器鍋の口縁部破片で、胴部は直線的に立ち上がり、口縁部付近がわずかに段状になり外反する器形である。外面縦位ケズリ、内面縦・斜位のユビナデ調整である。

01-ＳＩ141(第74図・75図、図版25・165)

遺　構　ＭＲ36、ＭＳ35～37、ＭＴ36・37グリッドの第Ⅵ層上面または01-ＳＩ149床面で、柱穴及び壁溝の配置で確認した。本住居跡の立地点は台地上部平坦面の西端に近く、緩やかに西へ傾斜する。01-ＳＩ149・223と重複するが、基本的には新旧関係は不明である。ただし、本住居跡の堆積土が残存する状況からして、01-ＳＩ149→01-ＳＩ223→01-ＳＩ141の順に新しくなると考えられる。周辺には01-ＳＩ139・255、01-ＳＢ146、01-ＳＡ461、01-ＳＤ220がある。

本住居跡は、後世の削平により壁及び住居内堆積土のほとんどが失われている。本住居跡の存在を示す施設は、東・西隅の壁溝と柱穴の配置である。この範囲で予測される平面形は、北東－南西方向に長い長方形である。なお、壁溝配置から２時期存在する可能性がある。

床面も検出状態から判断して、住居南半部は削平されていると考えられる。かろうじて確認できるのは、01-ＳＩ223を埋め立てて本住居跡の床面を造っていることである。壁溝は住居東・西隅で検出した。上場幅0.16～0.28m、下場幅0.12～0.20m、検出面からの深さ0.03～0.06mの断面台形状である。



01-ＳＩ139カマド
1　黒色土(10YR1.7/1)　しまり中　粘性中
　地山質粘土粒少量含む
2　橙色土(2.5YR6/6)　しまり中　粘性中
　地山質粘土粒微量含む
3　暗赤褐色土(2.5YR3/2)　しまり中　粘性中
　焼土粒多量・炭化物粒・地山質粘土粒微量含む
4　橙色土(2.5YR6/8)　しまり中　粘性中
　地山質粘土粒微量含む
5　黒色土(10YR1.7/8)　しまり弱　粘性中
　地山質粘土粒微量含む
6　黒褐色土(10YR3/1)　しまり中　粘性中
　焼土粒微量含む
焼土　橙色（５YR7/8）

Ｐ８
1　黒褐色土(10YR3/1)　しまり中　粘性中
　焼土粒微量・粘土塊少量含む

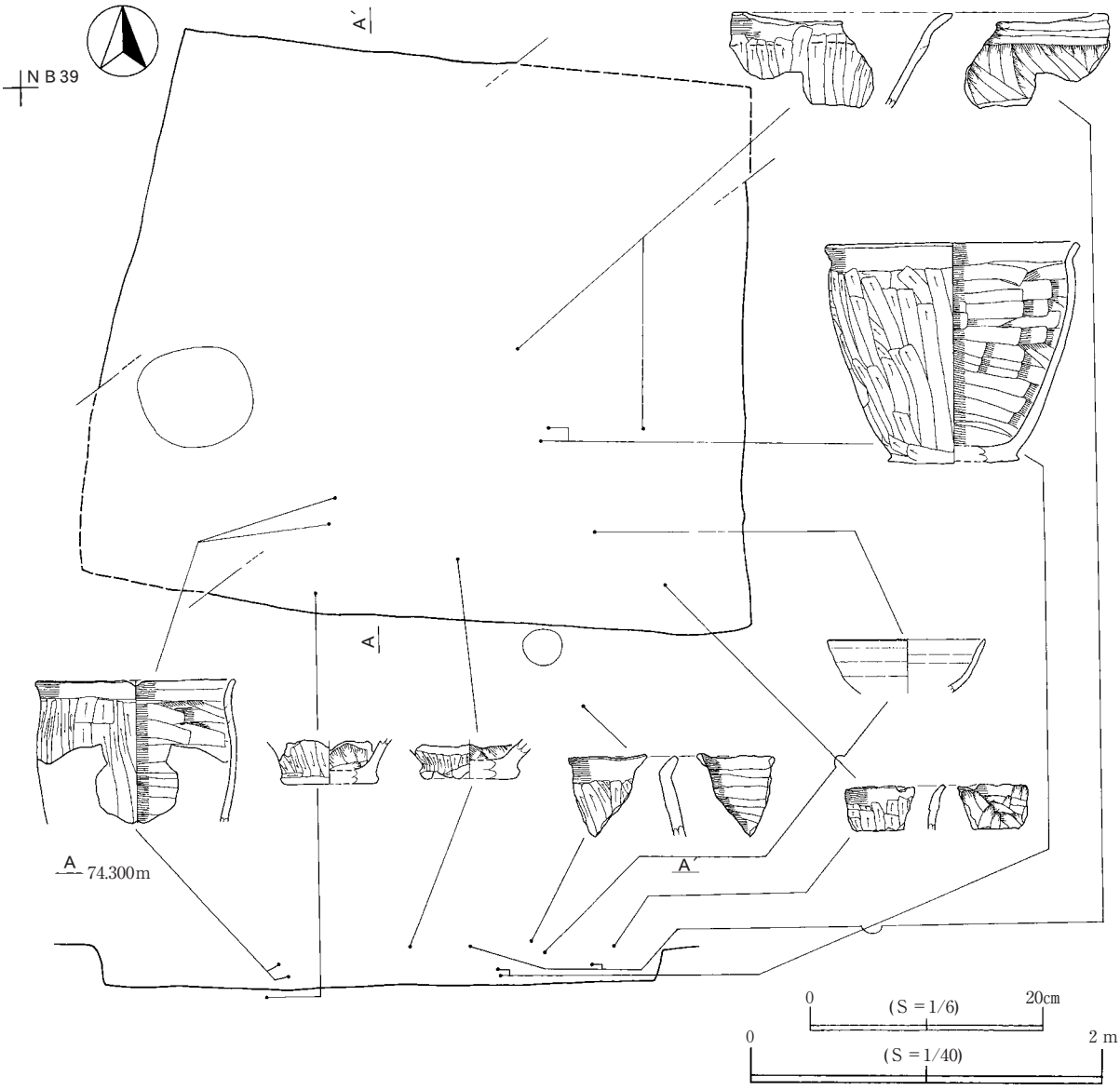
第71図　01-ＳＩ139カマド・確認状況

極めて浅く、床面が削平されていることを表している。配置からみて本住居跡に伴うと思われるピットは４個ある。比較的壁際に多い傾向にあり、上部構造を支持するための規則的な配置はみられない。なお、本住居跡に伴うカマドは確認できなかった。

本住居跡は上部の削平が著しく、その構造の多くを失っている。予測されるプランの主軸方位は01-ＳＩ149とほぼ同じであり、01-ＳＩ223を介して連続した前後関係にある可能性が高い。

遺　物(第75図)　住居跡内から土師器甕、鉄製品が出土した。75図１は小型の土師器甕の底部で、底部外縁がやや張り出す形状である。底面は砂底である。

75図２～６は鉄製品である。２・３・６は01-ＳＩ149Ａの主柱穴・隅柱穴内出土であるため、本来は01-ＳＩ149Ａ廃絶に伴う遺物の可能性もある。２は刀の鞘金具で、鞘に巻きつく２本の環状部と紐掛け状突起で構成される。環状部の片側は欠損している。３は柄尻の金具とみられる。４は下部と先端を欠損するが、返しがつくことから銛と考えられる。５は刀子の刀身部分である。６は鉄鍋の口縁部破片で、口縁部が肥厚する作りである。

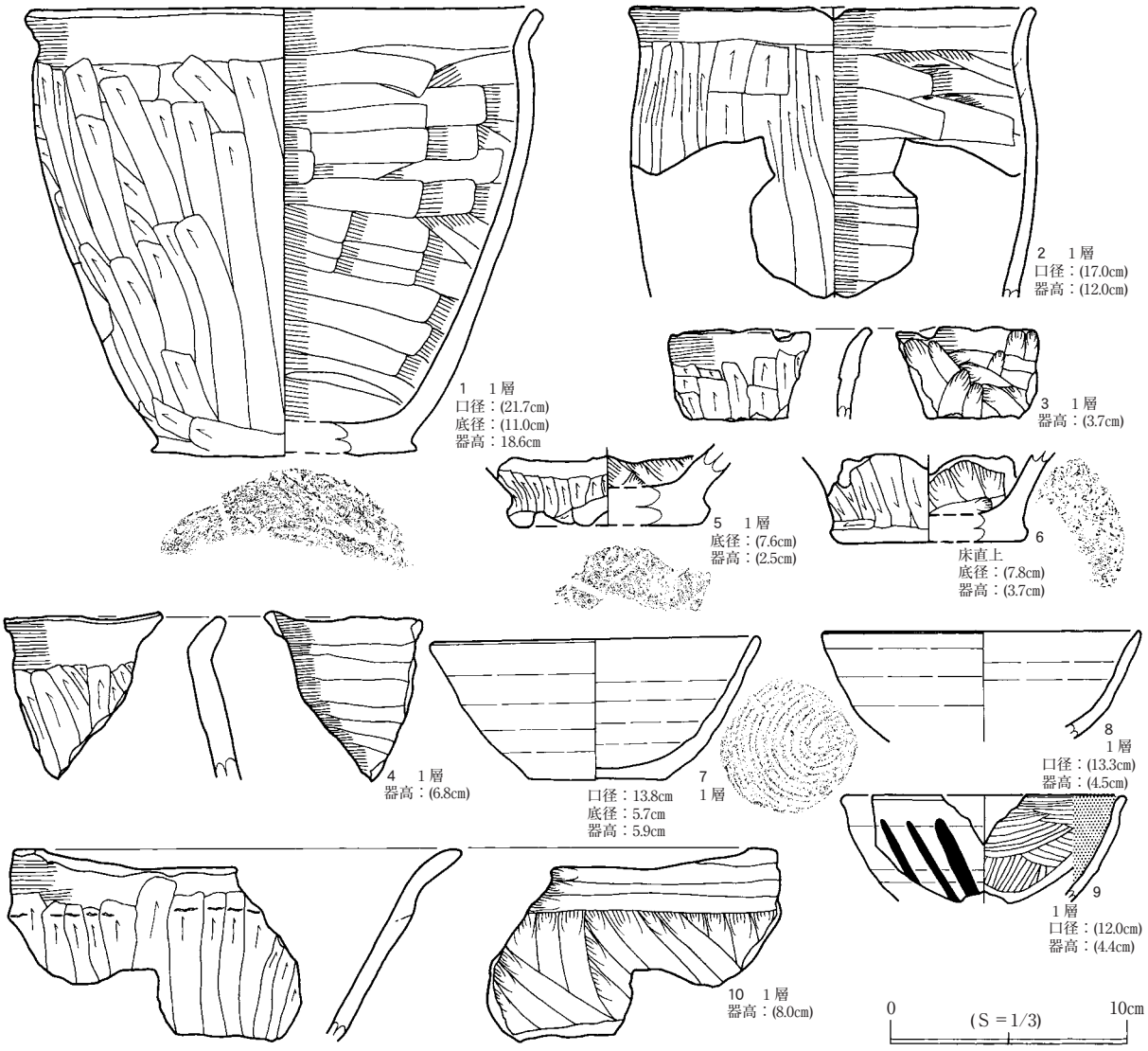


第72図　01-ＳＩ139遺物出土状況

01-ＳＩ223(第74図)

遺　構　ＭＲ・ＭＳ35・36、ＭＴ36・37グリッドの第Ⅵ層上面、01-ＳＩ114貼床下、01-ＳＩ149床面で、柱穴及び壁溝の配置で確認した。本住居跡の立地点は台地上部平坦面の西端に近く、緩やかに西へ傾斜する。01-ＳＩ141・149と重複し、01-ＳＩ141よりも本住居跡が古く、01-ＳＩ149より本住居跡が新しいと想定される。周辺には01-ＳＩ139・255、01-ＳＢ146、01-ＳＡ461、01-ＳＤ220がある。

本住居跡は、削平のため壁及び住居内堆積土が失われている。壁溝とピットの配置から予測される住居平面形は、北東－南西方向に長い長方形である。住居の北・東・西隅には広くて浅い柱穴が確認できるが、南隅では明確な柱穴は検出できなかった。しかし、南西壁南半部に沿うとみられる壁溝の南端部が、他の壁溝底面より約0.2mほど深くなっており、隅柱の痕跡である可能性が高い。Ｐ５・９・15を住居隅とした場合の各壁の長さは、北東壁約4.4m、南東壁約5.3m、南西壁約4.3m、北西壁約5.2mである。この範囲内の床面で検出した遺構が、壁溝と11個のピットである。壁溝は、北西壁の西半分と南西壁の南半分で確認できた。上場幅0.06～0.5m、下場幅0.02～0.2m、検出面からの深さ0.2



第73図　01-ＳＩ139出土遺物

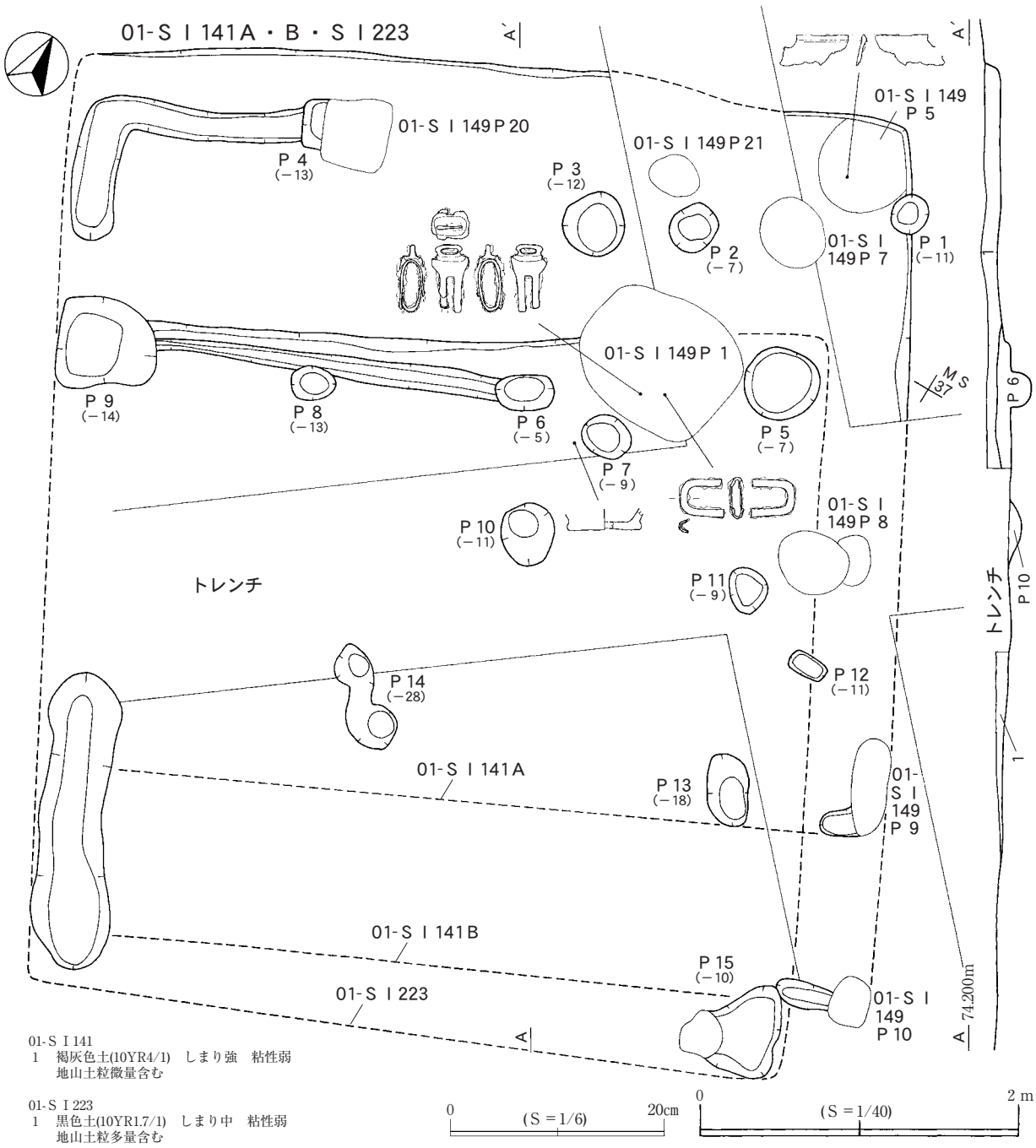
m前後の断面台形状である。本住居跡ではカマドが確認できなかった。

本住居跡は隅に主柱をもつ住居である。上部は削平されている部分が多いが、01-ＳＩ141による埋め立て造成が認められ、この段階での廃絶が明らかである。

遺　物　本住居跡に伴う遺物は検出できなかった。

01-ＳＩ149Ａ(第76図～78図、図版26)

遺　構　ＭＲ34～36、ＭＳ・ＭＴ34～37、ＮＡ35・36グリッドの第Ⅵ層上面で、部分的な黒色土の堆積や柱穴の配置で確認した。本住居跡の立地点は台地上部平坦面の西端に近く、緩やかに西へ傾斜する。01-ＳＩ141・149Ｂ・223・255、01-ＳＢ454、01-ＳＤ220と重複し、01-ＳＩ141・223、01-ＳＢ454より本住居跡が古く、01-ＳＩ149Ｂ・255よりも本住居跡が新しいとみられる。01-ＳＩ149Ｂとは建て替え拡張の関係にある。01-ＳＤ220との重複関係は堆積土欠失のため確認できなかったが、仮に本住居跡が01-ＳＤ220より新しいとしても、床の一部を溝を埋め立てた軟質土上面とするのは住居構造上不利で、設置段階でより北東側に占地することが予測されるため、本住居跡の方が古いと想定される。

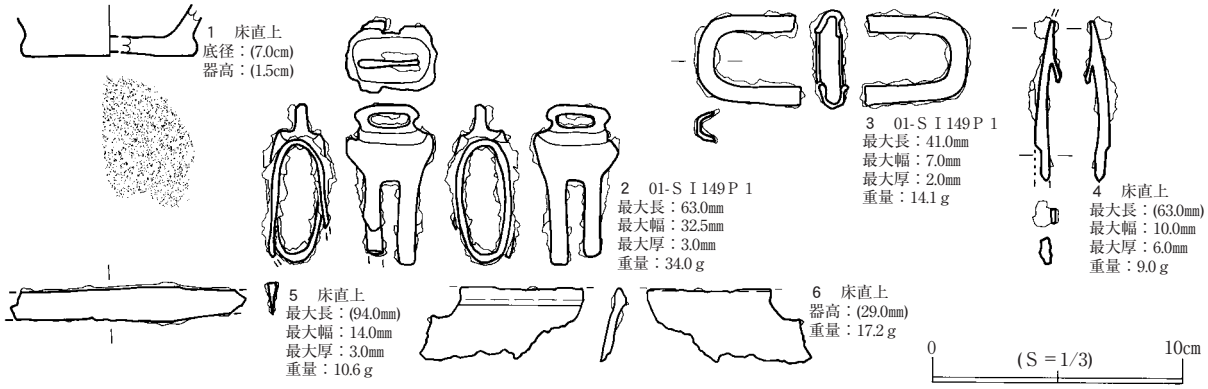


第74図　01-S I 141A・B・233・遺物出土状況

周辺には01-S I 28・119・120・139、01-S B146、01-S A40がある。

堆積土は住居東隅でわずかに確認できた。堆積土は５層に分けた。１～５層は焼土粒や炭化物を含む黒色基調の土で、カマド周辺部の堆積土である。

平面形は、住居壁の大部分が欠失し、南西壁が完全に01-S D220の中に入るため詳細は不明だが、主柱穴や隅柱の配置で確認できる北東壁の長さを利用して仮に正方形とみた場合、カマドの付く壁に直交する主軸方位はN－29°－Wとなり、主軸とそれに直交するラインで測る住居面積は約112㎡(約69畳)で、超大形の住居であり、今回調査した住居の中では最大規模になる。推定可能な北東壁の長さは10.3mである。壁の検出面からの深さは、残りの良い住居東隅付近でも0.1m程度で、立ち上がりは



第75図　01-ＳＩ141出土遺物

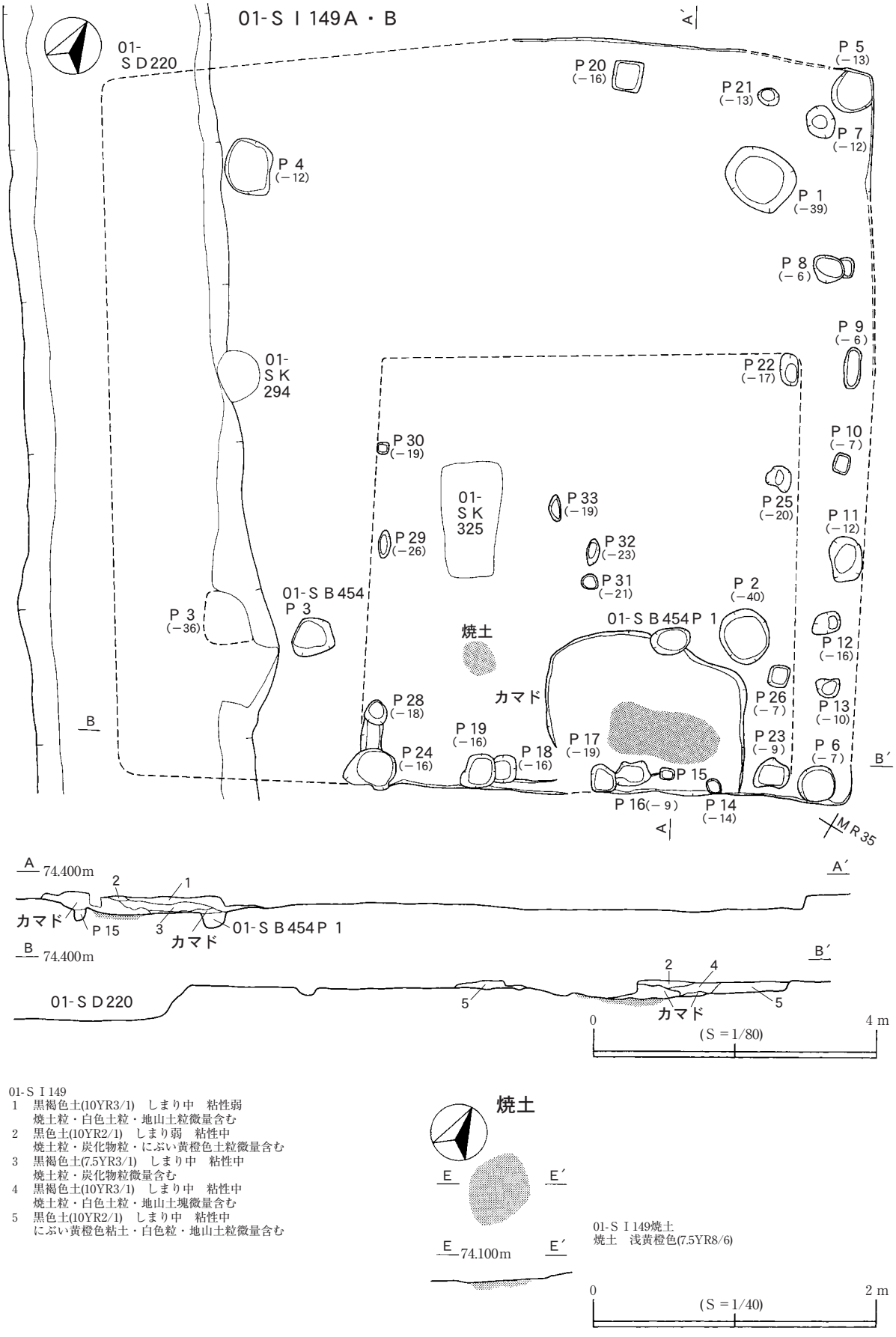
不明である。床面もほとんど失われているが、基本的には01-ＳＩ149Ｂ段階で造成した床面を利用すると考えられる。なお本住居段階に伴う壁溝は確認できなかった。

床面で21個のピットを確認した。Ｐ１～４は住居隅よりやや内側に位置する主柱穴である。Ｐ３は01-ＳＤ220に切られて穴の全体形は失われている。配置はほぼ長方形になり、柱穴中心で測る柱穴間距離は、Ｐ１－２間約6.5m、Ｐ３－４間約6.5m、Ｐ１－４間約7.2m、Ｐ２－３間約7.2mで間隔をそろえる。Ｐ５・６は住居隅に位置する柱穴で、おそらく欠失している南・西隅にも存在したと考えられる。Ｐ８～21までは壁沿いに位置する柱穴で、主に壁板を保持する材を据えたと考えられ、基本的に等間隔に配置する。

カマドは南東壁の中央からやや北東寄りの位置で、灰白色粘土や褐灰色土の広がりで確認した。確認した施設は、前庭部と本体基部である。両方を併せた範囲の堆積土を13層に分けた。１～８、11・12層は、カマド上部の崩落粘土と考えられる。９・10層はカマド前庭部にみられる黄色系の土や粘土で、貼床と考えられる。火床面は不整な楕円形状の被熱範囲で、長径約1.55m、短径0.74mで、地山に約0.1mの深さまで被熱が及んでいる。カマド西側の、Ｐ19がとりつく南東壁から中央部へ約1.5mの位置で焼土を１か所確認した。焼土の形状は菱形に近く、最大長0.54m、最大幅0.44mである。周囲は床面を削平されていることから、本来の使用面よりも下がった位置での検出と考えられる。鍛冶炉の可能性も考慮したが、カマド脇での作業は想定しにくく、旧カマドの痕跡と考えられる。

本住居跡は壁から離れた位置に４本の主柱をもち、壁溝ではなく壁柱で壁板を保持する壁面構造で、南東壁にカマドを設置する住居である。01-ＳＩ149Ｂから拡張したとみられ、両者には連続的な前後関係を想定できる。重複状況から考えて、01-ＳＤ220より本住居跡が古いと考えられ、01-ＳＤ220構築時には埋め立てていたと考えられる。他の施設と組み合わせた場合、本住居跡と01-ＳＡ40は軸方位がほぼ一致することから、同時存在の可能性が高い。これらが廃絶した後01-ＳＤ220と、これと軸方位や配置関係からみて同時と思われる掘立柱建物群が展開すると考えられる。このことは、本住居跡周辺部の土地利用が変化したことを表す。

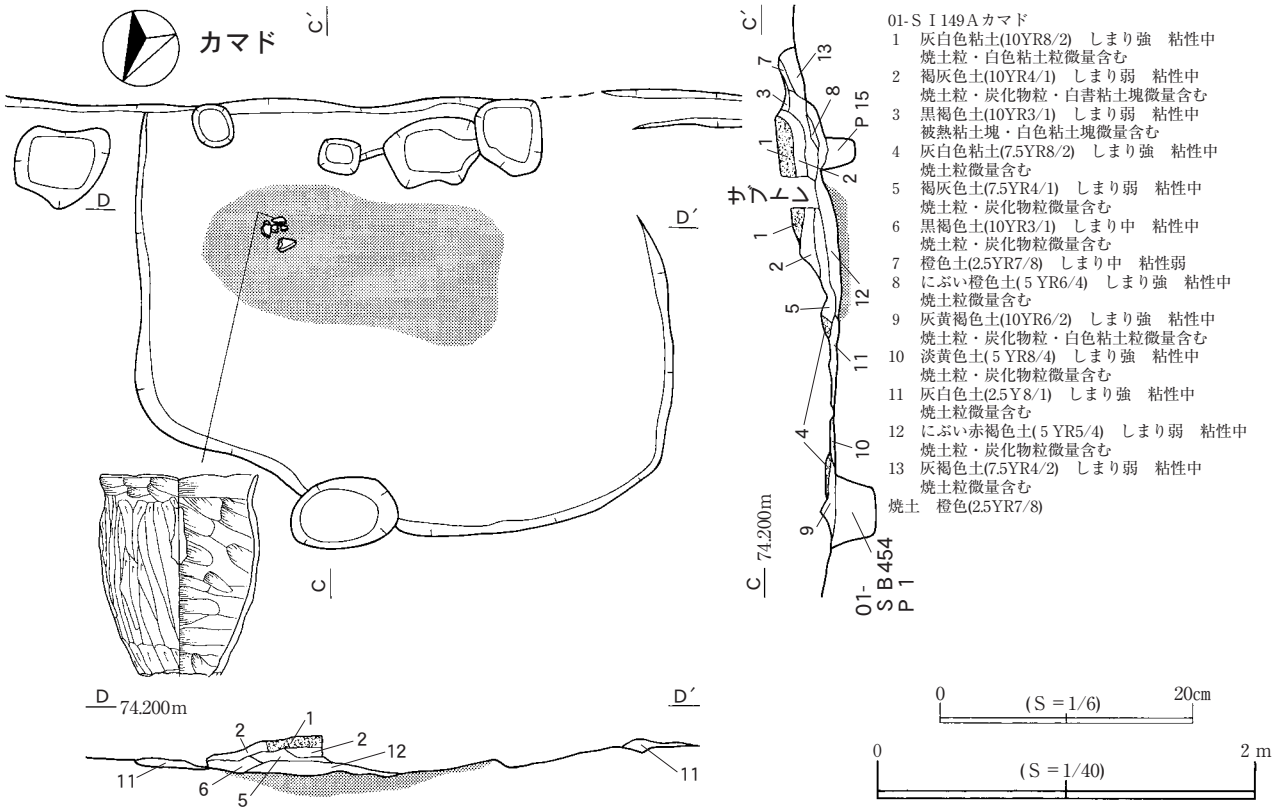
遺　物(第78図)　住居跡内から土師器甕・坏・鍋、鉄製品が出土した。土師器甕は口縁部が15点、底部が７点出土しており、そのうち比較的大型の口縁部資料４点、底部資料４点を図示した。図示しなかったものを含めた甕の口縁部分類別数量はＡ類(０点)、Ｂ類(０点)、Ｃ類(７点)、Ｄ類(７点)、その他(１点)で、底部分類別数量は砂底(６点)、ケズリ(１点)の内訳になる。口縁部では、Ｃ・Ｄ類と砂底の量が多いが、本住居跡は堆積土の大半を失っており、本来の遺物相であるかは不明である。



01-ＳＩ149
1　黒褐色土(10YR3/1)　しまり中　粘性弱
　焼土粒・白色土粒・地山土粒微量含む
2　黒色土(10YR2/1)　しまり弱　粘性中
　焼土粒・炭化物粒・にぶい黄橙色土粒微量含む
3　黒褐色土(7.5YR3/1)　しまり中　粘性中
　焼土粒・炭化物粒微量含む
4　黒褐色土(10YR3/1)　しまり中　粘性中
　焼土粒・白色土粒・地山土塊微量含む
5　黒色土(10YR2/1)　しまり中　粘性中
　にぶい黄橙色粘土・白色粒・地山土粒微量含む

01-ＳＩ149焼土
焼土　浅黄橙色(7.5YR8/6)

第76図　01-ＳＩ149Ａ・Ｂ

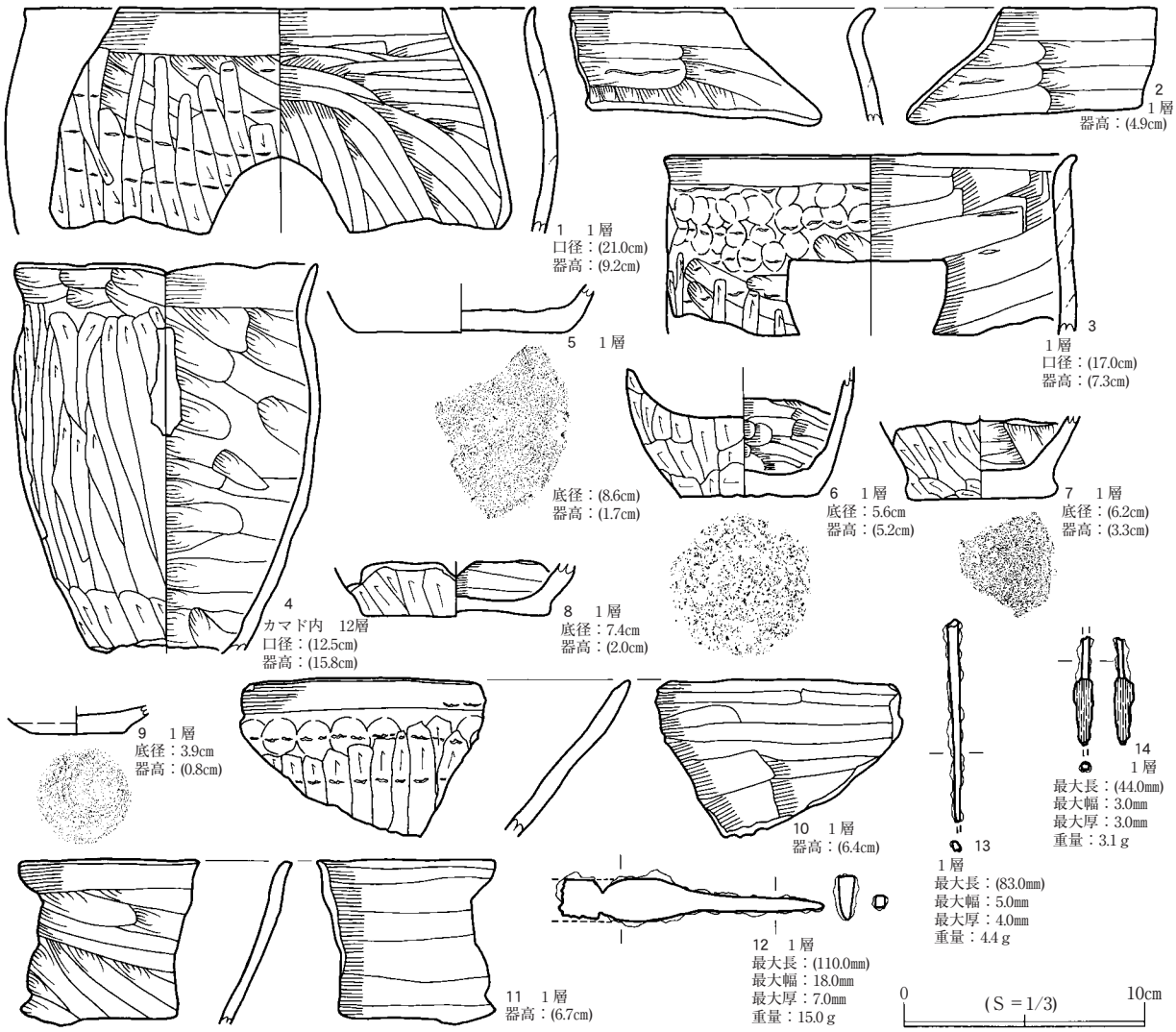


第77図　01-ＳＩ149Ａカマド・遺物出土状況

出土遺物の多くは、堆積土の残るカマド付近から出土したもので、おそらくカマドで使用した土器と考えられる(第77図)。78図４は残存状態からみて、カマド支脚に転用したものと考えられる。

78図１～３は比較的中・大型の土師器甕の口縁部破片である。１・２は胴上半部に最大径を有する器形で、１は頸部がわずかにくびれて、口縁部が直立気味に立ち上がり、２は頸部のくびれから口縁部が外反する。１は外面がユビナデ後に縦位ケズリ、内面が縦・横・斜位のヘラナデ調整である。２は外面ユビナデ、内面は横位ユビナデ調整である。３は胴部から直立気味に立ち上がり、口縁部がわずかに外反する。外面は下半部にケズリやユビナデを施すが、口縁部付近は指の押さえのままで輪積痕を残す。内面は丁寧なヘラナデ調整である。78図４は小型の土師器甕で、胴部中位が張り、頸部で弱く段状にくびれて、口縁部が直線的に外傾する。器形はＢ類の特徴をもつ。口縁部外面は短くユビナデを施し、頸部以下に縦位ケズリで、内面は横・斜位のユビナデで調整している。78図５～８は土師器甕の底部資料で、５～７が砂底、８がケズリの再調整を施している。

78図９は土師器坏Ａ類の底部で、回転糸切痕を確認できる。78図10・11は土師器鍋の口縁部破片である。10は胴部から直線的に外傾して、口縁部がわずかに外反し、口唇が先細りになる。外面は縦位ケズリ、内面は横位ヘラナデ調整である。11は胴部から直線的に外傾して、頸部でわずかに屈曲し、口縁部が弱く外反して、口唇は外側へつまみ出し状に反る形状で、丸みを帯びている。外面は乱雑なユビナデ、内面は横位平行のヘラナデ調整である。78図12～14は鉄製品である。12は刀子の刀身半ばから茎にかけてが残存しており、やや錆膨れで厚みが増しているものの、刀身の三角形状、茎の方形状断面を観察できる。13・14は両端を欠損する棒状の鉄製品で、上が太く下が細い断面形態を示すが、機能・用途は不明である。14は一部木質を残している。



第78図　01-ＳＩ149Ａ出土遺物

01-ＳＩ149Ｂ(第76図、図版26)

遺　構　ＭＲ・ＭＳ34～36、ＭＴ35グリッドの第Ⅵ層上面及び01-ＳＩ149Ａ床面で、柱穴及び壁溝の配置で確認した。本住居跡の立地点は台地上部平坦面の西端に近く、緩やかに西へ傾斜する。01-ＳＩ141・149Ａ・223と重複し、いずれよりも本住居跡が古いと考えられる。01-ＳＩ149Ａとは建て替え拡張の関係にあると想定される。周辺には01-ＳＩ28・119・120・139・255、01-ＳＢ146、01-ＳＡ40がある。01-ＳＩ149Ａのプラン内に収まるため、埋没過程を示す堆積土は存在しない。

柱穴や壁溝の配置から予測される平面形はほぼ正方形と考えられる。カマドの位置を01-ＳＩ149Ａと同位置と推定した場合の主軸の方位はＮ－29°－Ｗである。主軸とそれに直交するラインで測る住居面積は約37㎡で、大形の住居である。各壁の長さは、柱穴配置の判明している北東壁で約6.1m、南東壁も約6.1mである。各壁の検出面からの深さ及び立ち上がりは01-ＳＩ149Ａに切られるため確認できなかった。

床面は、基本的に掘形底面の地山上面を利用したと考えられる。壁溝は南東壁の01-ＳＩ149Ａカマド脇と南西壁の南隅付近でのみ確認した。上場幅0.08～0.3m、下場幅0.05～0.15m、床面からの深さ0.05m前後の断面台形状である。床面で本住居跡に伴うとみられる８個のピットを確認した。Ｐ22・

23・24は住居四隅に配置するとみられる柱穴で、西隅では確認できなかった。Ｐ25・26・28～30は北東壁と南西壁沿いに比較的等間隔に配置する壁柱穴で、北西壁では明確でないが、南東壁では01-ＳＩ149ＡＰ16・Ｐ18がこれに相当する可能性がある。本住居跡に伴うカマドも明確ではないが、住居プランが相似形で南東壁を共有することから、01-ＳＩ149Ａの位置と同じ地点を利用していたと考えられる。

本住居跡は建て替えや削平により残存部が少なく、本来の住居構造には不明な点が多いが、四隅に主柱をもち、南東壁にカマドを設置する住居と想定され、01-ＳＩ149Ａへと拡張するために解体したと考えられる。重複する01-ＳＩ141との新旧関係を判断する材料に乏しいが、01-ＳＩ149Ａとの連続性から判断して、本住居跡→01-ＳＩ149Ａ→01-ＳＩ141の変遷順を想定した。なお焼失材の残存状況と住居配置、また主軸方向からみて、この地点における住居変遷は01-ＳＩ255→01-ＳＩ149Ｂ→01-ＳＩ149Ａ→01-ＳＩ223→01-ＳＩ141の順序と考えられる。

遺　物　本住居跡に伴う遺物は検出できなかった。

01-ＳＩ255(第79図)

遺　構　ＭＴ・ＮＡ35・36グリッドの第Ⅵ層上面で、炭化物を含む黒色土の範囲で確認した。本住居跡の立地点は台地上部平坦面の西端に近く、緩やかに西へ傾斜する。01-ＳＩ149Ａ、01-ＳＤ220と重複するが、本住居跡の炭化材を01-ＳＩ149Ａの北西壁が切ることから、いずれよりも本住居跡が古いと判断した。周辺には01-ＳＩ141・139・223、01-ＳＢ146、01-ＳＡ40がある。

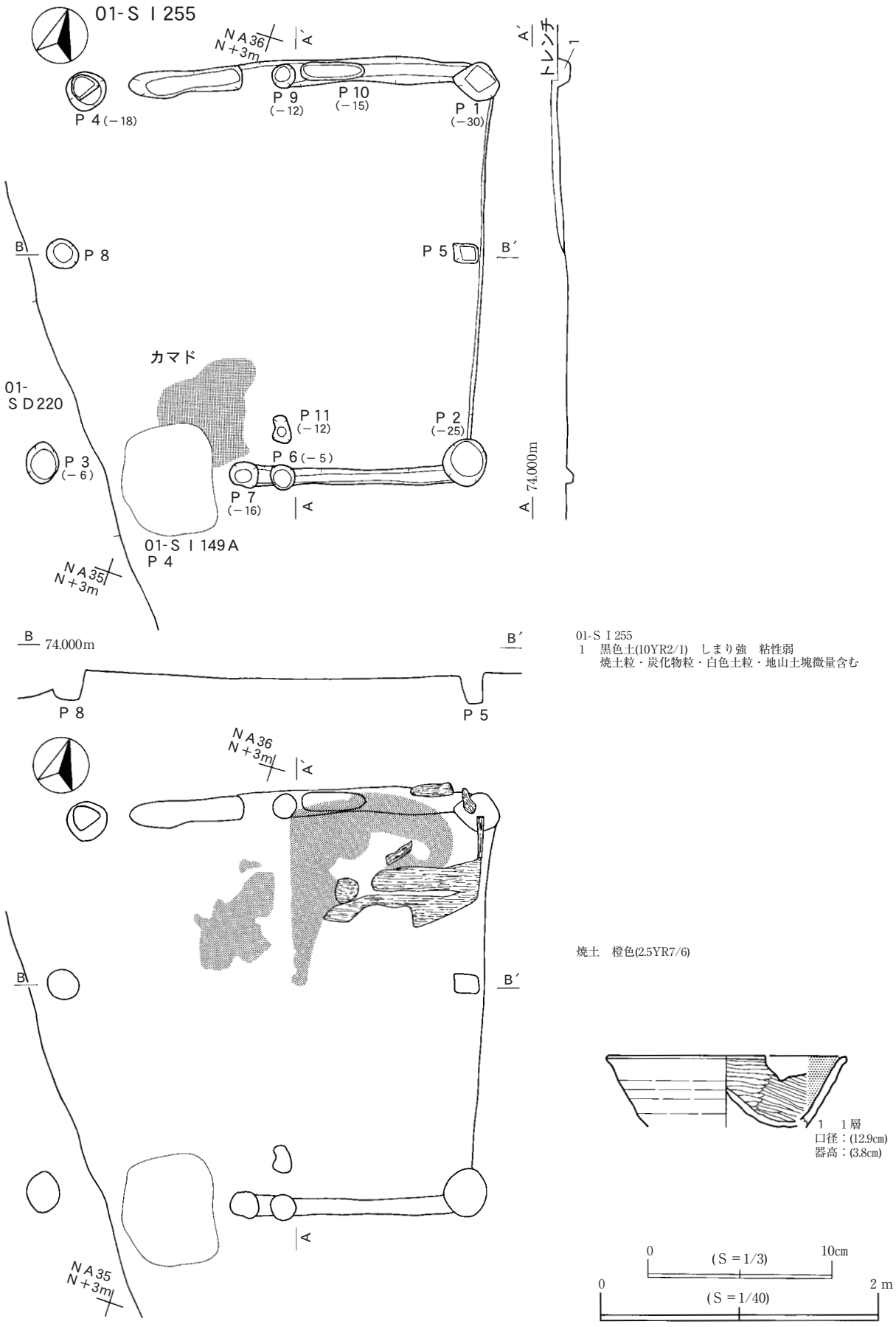
本住居跡南西壁と南隅は、01-ＳＤ220に切られて残存しないが、柱穴配置から予測される平面形は平行四辺形に近く、カマドの付く壁に直交するラインを主軸とした場合に、主軸方位はＮ－15°－Ｗになる。主軸線と直交するラインで測った住居面積は約10㎡で、小形の住居跡である。

床面は基本的に掘形底面である地山上面を利用したと考えられる。本住居跡は焼失家屋で、床面上で炭化材と焼土層を確認した。炭化材は住居北隅付近の北東壁から住居中央部にかけての範囲で確認した。形状や木目からみて、壁板が倒れた状態と考えられる。焼土層は北西壁から中央部に向けて確認でき、壁溝上部に重なることから壁面の崩落層と考えられる。なお、住居南東部は、01-ＳＩ149や01-ＳＤ220が重複するため、炭化材や焼土が失われている。壁溝は北西壁と南東壁沿いで確認した。上場幅0.1～0.2m、下場幅0.06～0.12m、検出面からの深さ0.05～0.08mの断面台形状である。

床面と思われる範囲で、本住居跡に伴うと思われるピット11個を確認した。Ｐ１～４は住居四隅に配置する主柱穴、Ｐ５・７～９も住居中央部に規則的に配置する壁柱穴である。Ｐ３は検出面が01-ＳＤ220の斜面部のため浅い数値を示すが、他の隅柱と底面標高値はほぼ同じである。カマドの火床面と思われる焼土を、南東壁沿いのやや西よりの位置で確認した。01-ＳＩ149ＡＰ４が一部破壊しているが、平面形は不規則な形で、最大長約0.78m、最大幅約0.64mである。

本住居跡は、四隅と壁中央部に規則的に柱を配置する住居である。出土炭化材の状況から判断して、板材を縦に並べて配置していたと考えられる。

遺　物(第79図)　住居跡内から土師器坏が出土した。79図１は土師器坏Ｂ類で、胴下部から直線的に外傾し、口縁部がわずかに外反する器形である。



第79図　01-ＳＩ255・炭化材出土状況・出土遺物

01-ＳＩ150(第80図～82図、図版27・151・156)

遺　構　ＭＭ43、ＭＮ42・43グリッドの第Ⅳ層下部～第Ⅵ層上面で、地山土粒を含む黒色土の広がりで確認した。本住居跡の立地点は台地上部平坦面で、ほとんど傾斜がない。重複する遺構はなく、周辺には01-ＳＩ34・35・87、02-ＳＩ18、03-ＳＩ23、01-ＳＢ328、01-ＳＫ287、01-ＳＤ47がある。

堆積土は３層に分けた。１層が住居内を埋め尽くす主な堆積土で、床面から検出面までを埋め尽くすことから人為的な造成土と考えられる。２層は壁溝内堆積土だが、壁板と裏込めの境界が明確でなく、廃絶時には壁板は撤去していたと考えられる。３層は貼床の土である。

平面形は北東－南西方向に長い長方形で、カマドの付く壁に直交する主軸方位はＮ－65°－Ｅである。予測される主軸とそれに直交するラインで測る住居面積は約11㎡で、小形の住居である。各壁の長さは北東壁約3.2m、南東壁約3.3m、南西壁約3.2m、北西壁約3.6mである。各壁の検出面からの深さは、残りの良い北東・北西壁で0.2m前後、南東壁では0.1m前後で、全周ほぼ垂直に立ち上がる。

床面は部分的に0.05m前後の貼床を施すが、基本的に掘形底面を利用している。壁溝はカマド以外の全周で確認した。特徴的なのは北東壁と壁溝が離れていることで、間隔が最大になる北隅付近では0.48m離れる。隅柱の配置からみても壁溝ラインが住居使用時の壁面ラインとみられ、北東壁では壁板と掘形壁面との間に裏込めを施していた可能性が高い。基本形状は上場幅0.18～0.4m、下場幅0.1～0.16m、床面からの深さは0.1～0.2mの断面台形状である。

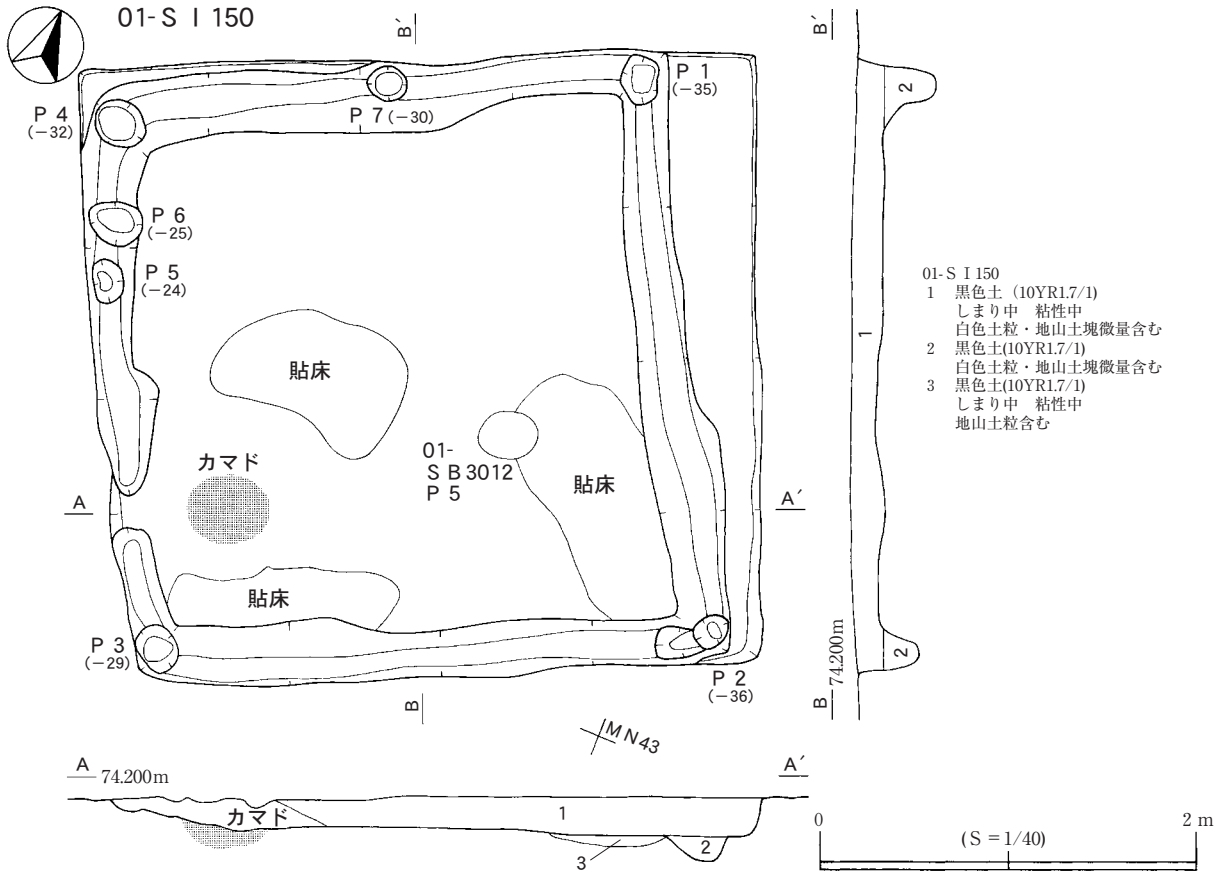
床面や壁溝内部で７個のピットを確認した。Ｐ１～４は住居隅の主柱穴である。柱穴中心で測る柱穴間の距離は、Ｐ１－２間約2.9m、Ｐ３－４間約2.8m、Ｐ１－４間約2.8m、Ｐ２－３間約2.9mである。Ｐ７は北西壁中央部に位置し、壁板保持の補助材に関わる柱穴とみられる。Ｐ５・６は南西壁中央部からやや北西寄りに２個並ぶ。壁に近く、カマドとは中軸線を挟んで線対称の位置にあり、出入口施設に関わる下部構造と考えられる。

カマドは、南西壁の中央からやや南東寄りの位置で、淡黄色や橙色粘土の広がりで確認した。堆積土は６層に分けた。１～４層は上部構造の崩落土と考えられる。Ｄ－Ｄ´断面の確認から、カマド左袖に対応する部分では、１層淡黄色粘土がカマド内部に向かって倒れ込む様子が分かる。この下部に位置する６層はカマドの基底面を構成するとみられ、５層はカマド右袖の基部が残存していると考えられる。火床面は楕円形状の被熱範囲で、長径0.44m、短径0.37mである。火床面主軸方位は、住居主軸方位に平行する。

本住居跡は四隅に主柱をもち、南西壁にカマドを設置する住居である。廃絶後は一気に埋め立てている。重複する遺構はなく、どの段階で埋め立て造成を行ったかは定かでないが、集落を区画する01-ＳＤ47が機能する段階には埋め立てていたと考えられる。

遺　物(第82図)　住居跡内から土師器甕・坏が出土した。土師器甕は口縁部が10点、底部が９点出土している。そのうち大型の口縁部資料７点、底部資料３点を図示した。図示しなかったものを含めた口縁部分類別数量はＡ類(０点)、Ｂ類(２点)、Ｃ類(７点)、Ｄ類(１点)で、底部分類別数量は砂底(８点)、ケズリ(１点)の内訳になる。Ｃ類と砂底が多い傾向にある。

残存率の高い土器はカマド周辺から出土している。82図１・２・４はカマド上部からまとまって出土しており、カマド廃棄時に一括投棄したものと考えられる(第81図)。これに対し、82図５～７の甕の口縁部小破片や、82図９～11の坏の破片は、住居の埋め立て造成土に含まれる遺物であり、これら

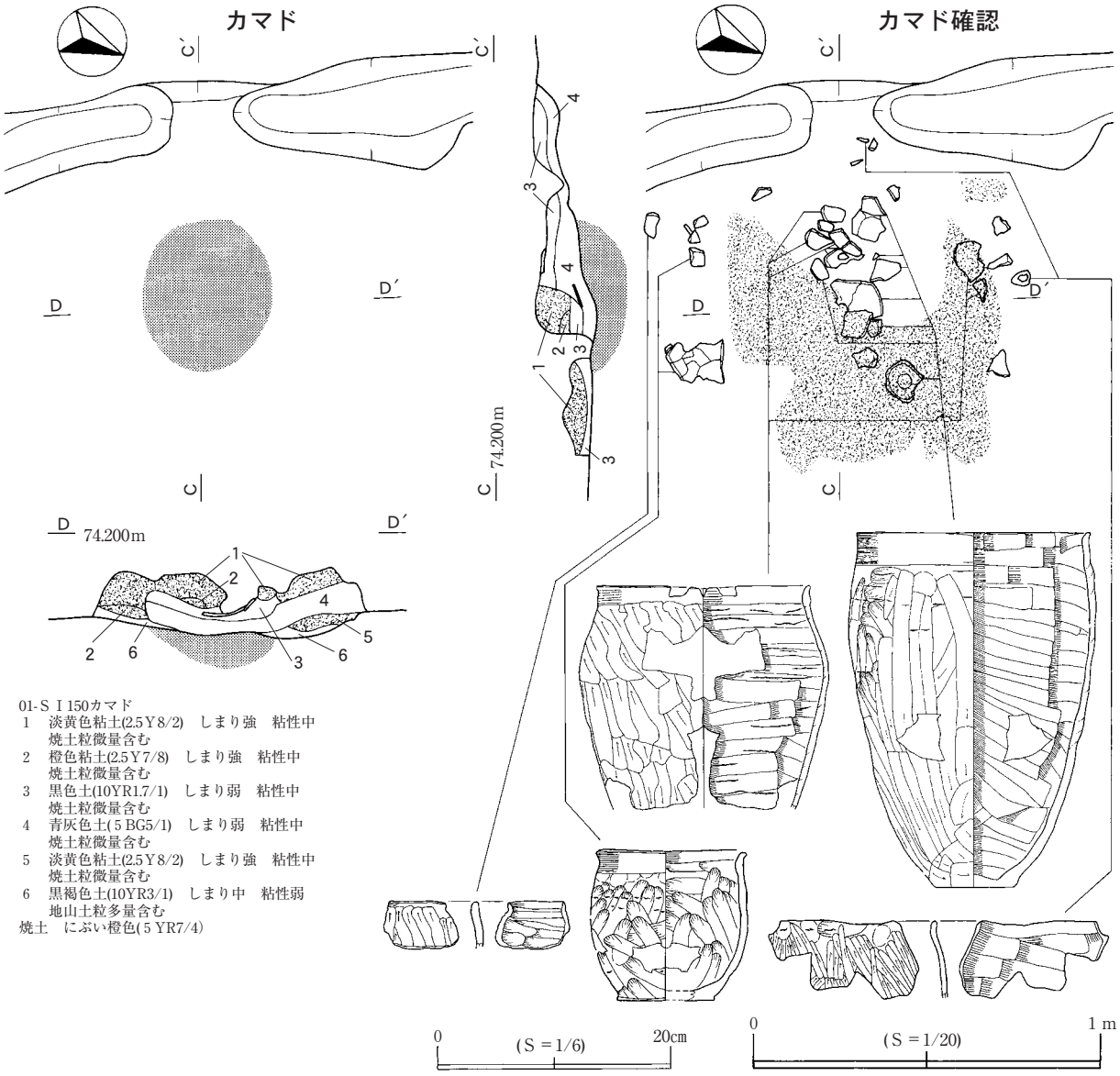


第80図　01-ＳＩ150

は住居廃絶時の遺物相を反映しないと考えられる。

82図１・２は大型の土師器甕である。１は底部が砂底で、底部付近で弱く屈曲し、最大径をもつ胴上半部にむけて緩やかに内湾して、口縁部が直立気味に立ち上がる。口唇は面取りして平滑になっており、わずかに外へ開く。外面は縦位ケズリ、内面は横位等間隔のヘラナデ調整である。２は胴下半から直線的に外傾して、胴上半部が張り出して口縁部まで内傾して立ち上がり、口端がわずかに外反する。外面のケズリ調整の結果、頸部付近の器壁が薄くなり、口縁部が相対的に肥厚する断面形を有する。内面は横位ヘラナデ調整であるが、輪積痕を残す。82図３・５～７は土師器甕の口縁部破片で、５は頸部で屈曲し口縁部が外折して、口唇を面取りする。６は口端まで内湾する形状を、７は口縁部まで内湾して口端がわずかに外反する形状を確認できる。３は口縁部が直立気味に立ち上がる器形で、外面を粗雑な縦位のケズリで、内面を横位のヘラナデで調整している。６は外面縦位ケズリ、内面横位ユビナデ、７は内外面共にユビナデ調整である。82図４は小型の土師器甕で、胴部中位に最大径をもち、口縁部に向けて直立気味に立ち上がって、口端が弱く外反する器形である。底部は砂底で、外縁が張り出す形状である。内外面共に縦・斜位のユビナデ調整であるが、外面には輪積痕を残し雑な仕上がりである。82図８は砂底をとどめる土師器甕の底部資料である。

82図９～11は土師器坏Ｂ類である。９は口縁部破片で、下半部から直線的に外傾し口縁部で弱く外反する器形である。内面には横方向のミガキを施す。10・11は底部資料で、どちらもやや底部が突出し、回転糸切痕を残している。



第81図　01-ＳＩ150カマド・遺物出土状況

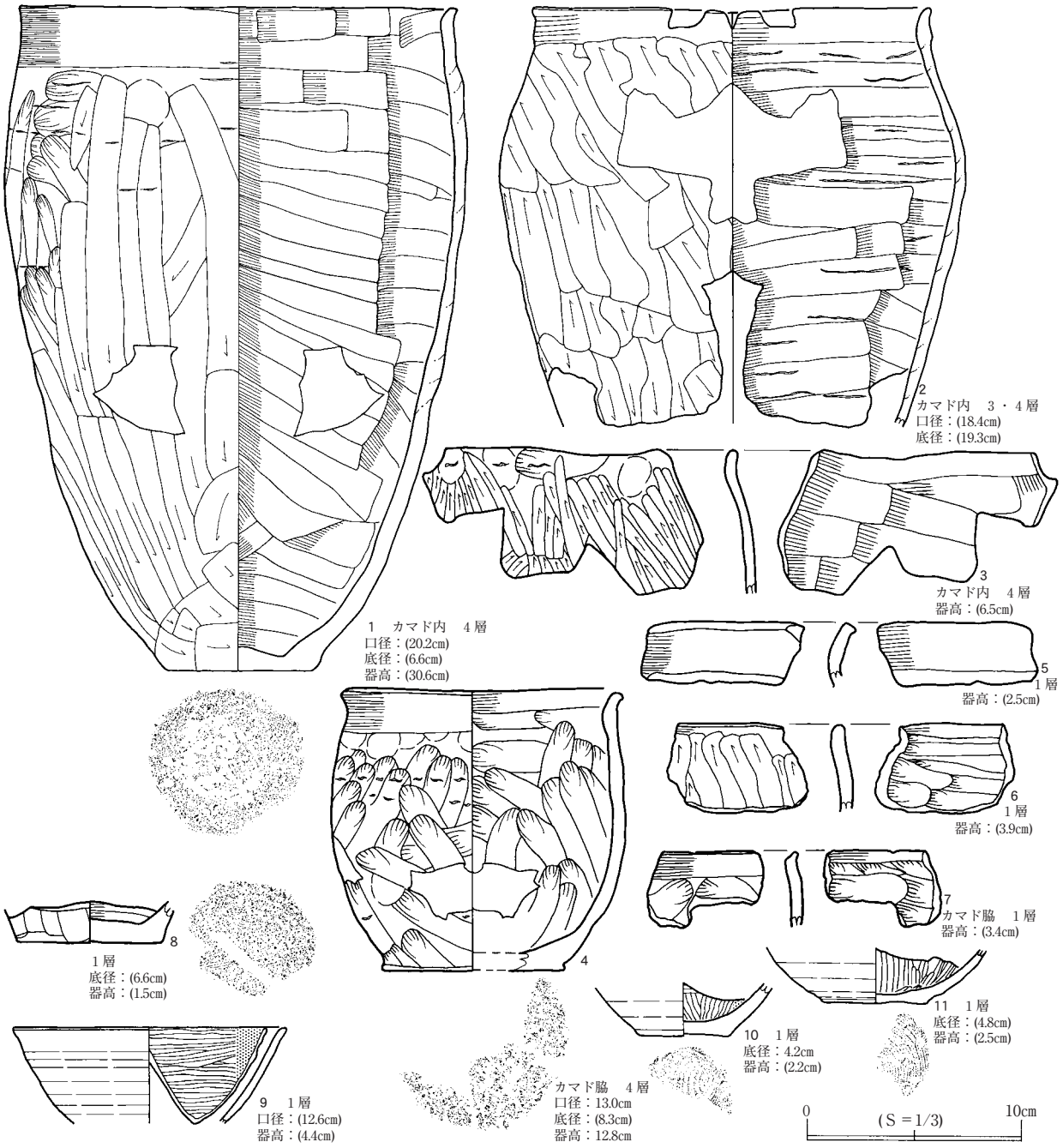
01-ＳＩ155

本住居跡は、ＭＱ38～40、ＭＲ38～41、ＭＳ39・40グリッドの第Ⅳ層中位で、地山土粒を含む黒色土の分布範囲で確認した。本住居跡の立地点は台地上部平坦面で、ほとんど傾斜がない。01-ＳＩ156、01-ＳＤ426と重複し、01-ＳＩ156より本住居跡が新しい。01-ＳＤ426との関係は、01-ＳＩ155Ｂ段階の北西壁が、その延伸方向に沿っており、01-ＳＤ220との関係でみれば01-ＳＤ426が本住居跡より新しいと考えられる。周辺には01-ＳＩ74・139・149・157・158・159・160、01-ＳＢ146がある。

床面精査で確認した壁溝やピットの配置から２回の建て替えが認められ、計３軒の住居跡が重なることが判明した。住居は新しい順に、Ａ・Ｂ・Ｃのアルファベットを付けて表記した。

01-ＳＩ155Ａ(第83図～85図、図版28・153・162・163)

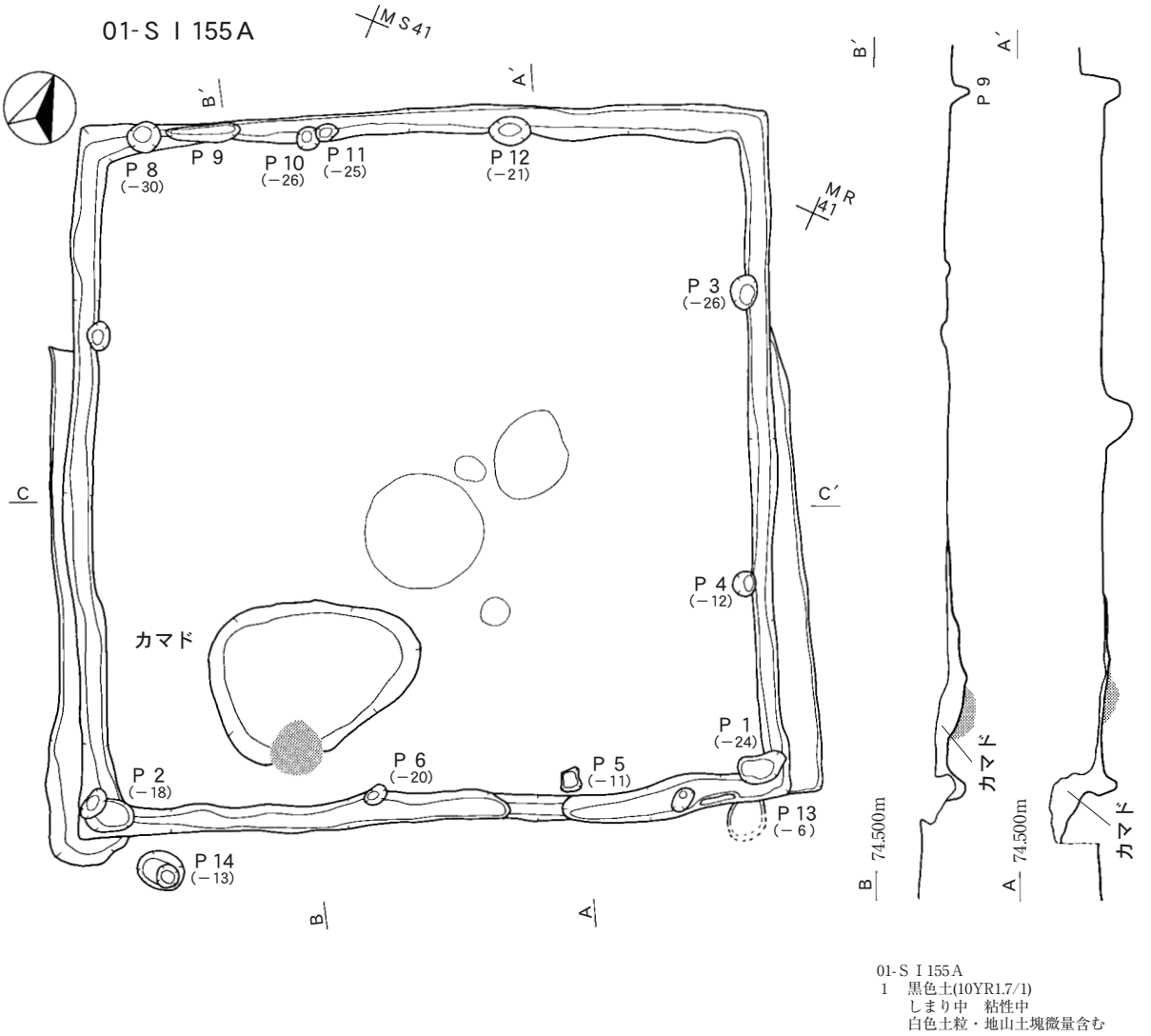
遺　構　２回目の建て替えで最大規模に達した住居である。堆積土は１層のみで、人為的に埋め立てて造成したと考えられる。



第82図　01-ＳＩ150出土遺物

平面形は北東－南西方向に長い長方形で、カマドの付く壁に直交する主軸方位はＮ－25°－Ｗである。主軸とそれに直交するラインで測る住居面積は約35㎡で、大形の住居である。各壁の長さは、北東壁約5.7m、南東壁約6.4m、南西壁約5.9m、北西壁約5.8mである。壁の検出面からの深さは、南西壁の残りの良いところ0.4m前後で、ほぼ垂直に立ち上がると考えられる。なおＡ－Ａ´断面にかかる01-ＳＩ155Ｂカマドは、煙道側にカマド構築土を残しており、本住居跡壁面が01-ＳＩ155Ｂカマド上部構造の一部を利用していることが分かる。

床面は掘形底面の地山上面を基底面とし、住居四隅や01-ＳＩ155Ｂ・Ｃの壁溝またはカマド上部には、貼床を施す。壁溝は全周で確認した。01-ＳＩ155Ｂ・Ｃと共有する南東壁沿いは壁に密接して、北東・南西壁側では、壁面掘形よりもやや内側のラインに配置する。上場幅0.15～0.3m、下場幅0.08

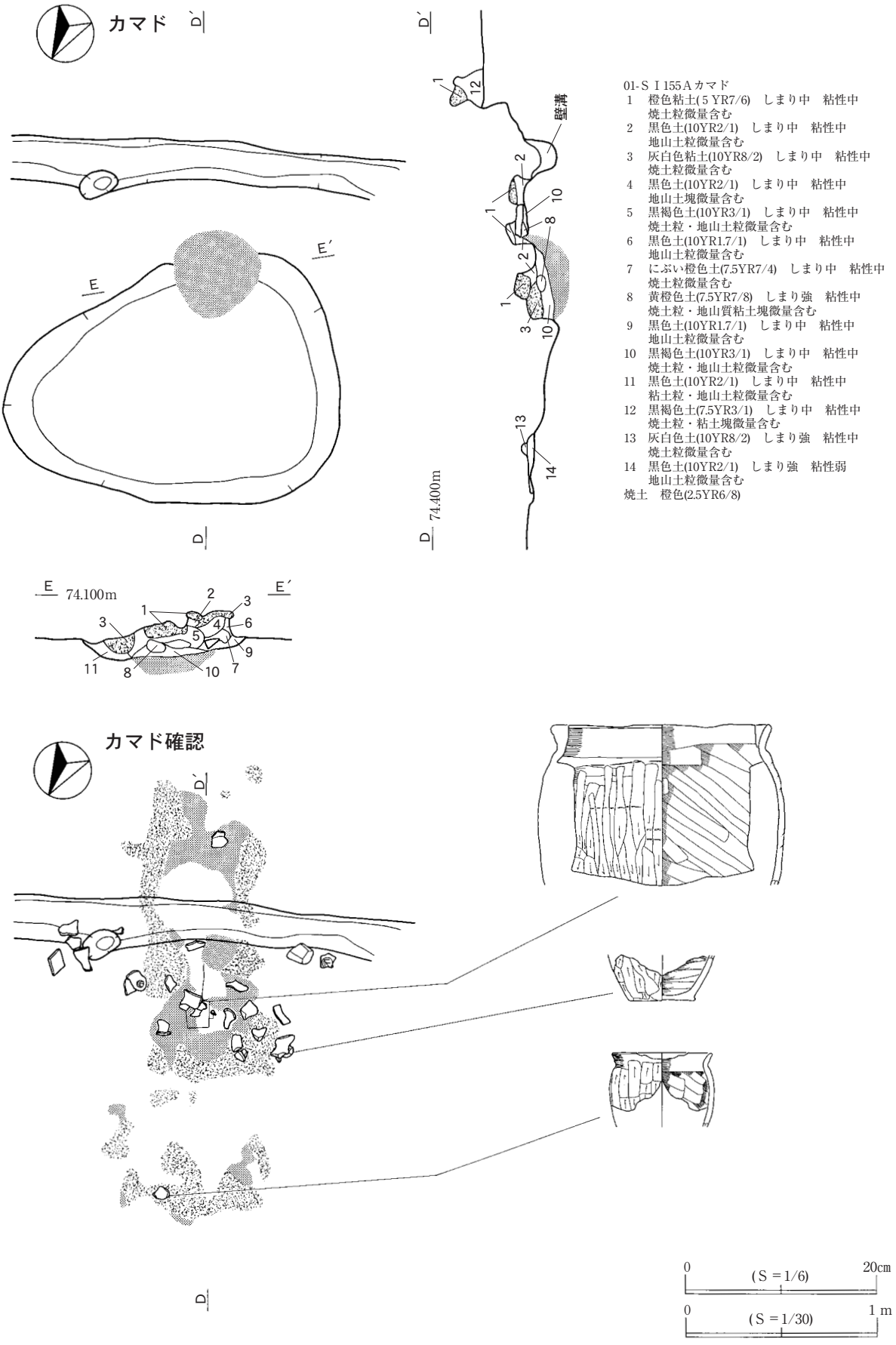


01-ＳＩ155Ａ
1　黒色土(10YR1.7/1)
　しまり中　粘性中
　白色土粒・地山土塊微量含む

第83図　01-ＳＩ155Ａ

～0.15m、床面からの深さ0.08～0.2mの断面台形状である。

床面及び竪穴掘り込み外部で16個のピットを確認した。Ｐ１・２は住居隅の主柱穴である。北・西隅で確認できないが、この部分に当たる壁溝底面が0.1～0.15m深くなっており、壁溝掘形底面を利用したと考えられる。Ｐ３～６・８～12は、各壁際に比較的等間隔に並ぶ壁柱穴で、壁溝の住居中央側上場に重なる配置になる。Ｐ13～16は竪穴掘り込み南東壁外部に位置する。方形状の配置で主軸線が



01-ＳＩ155Ａカマド
1　橙色粘土(５YR7/6)　しまり中　粘性中
　焼土粒微量含む
2　黒色土(10YR2/1)　しまり中　粘性中
　地山土粒微量含む
3　灰白色粘土(10YR8/2)　しまり中　粘性中
　焼土粒微量含む
4　黒色土(10YR2/1)　しまり中　粘性中
　地山土塊微量含む
5　黒褐色土(10YR3/1)　しまり中　粘性中
　焼土粒・地山土粒微量含む
6　黒色土(10YR1.7/1)　しまり中　粘性中
　地山土粒微量含む
7　にぶい橙色土(7.5YR7/4)　しまり中　粘性中
　焼土粒微量含む
8　黄橙色土(7.5YR7/8)　しまり強　粘性中
　焼土粒・地山質粘土塊微量含む
9　黒色土(10YR1.7/1)　しまり中　粘性中
　地山土粒微量含む
10　黒褐色土(10YR3/1)　しまり中　粘性中
　焼土粒・地山土粒微量含む
11　黒色土(10YR2/1)　しまり中　粘性中
　粘土粒・地山土粒微量含む
12　黒褐色土(7.5YR3/1)　しまり中　粘性中
　焼土粒・粘土塊微量含む
13　灰白色土(10YR8/2)　しまり強　粘性中
　焼土粒微量含む
14　黒色土(10YR2/1)　しまり強　粘性弱
　地山土粒微量含む
焼土　橙色(2.5YR6/8)

第84図　01-ＳＩ155Ａカマド・遺物出土状況

本住居跡に一致することから、付属施設になると判断した。

カマドは南東壁の中央からやや南西寄りの位置で、橙色粘土の広がりで確認した。検出時に一部掘りすぎた部分があるが、基本的には焚口部付近から煙道の一部まで連続して粘土を確認できる。堆積土は14層に分けた。１～10層はカマド上部構造の崩落土とみられる。確認時の粘土分布範囲は、概ね使用時の上部構造の配置に近い状態をとどめると思われるが、断面観察では倒壊していることが分かる。11層はカマド基底部の貼り土である。火床面は、カマド前庭部の台形状の浅い掘り込みの末端に位置し、平面形は径約0.5ｍの不整な円形で、地山に約0.2ｍの深さまで被熱が及ぶ。

本住居跡は住居隅に主柱をもち、南東壁にカマドを設置する住居である。３軒重複する01-ＳＩ155の中では最新段階で、規模も最大となる。最終的には人為的に埋め立て造成したと考えられる。本住居を掘り込む遺構に、数基のＳＫＰがあり、復元は出来ないがこれらで構成する施設の建設に伴い、廃絶したと考えられる。

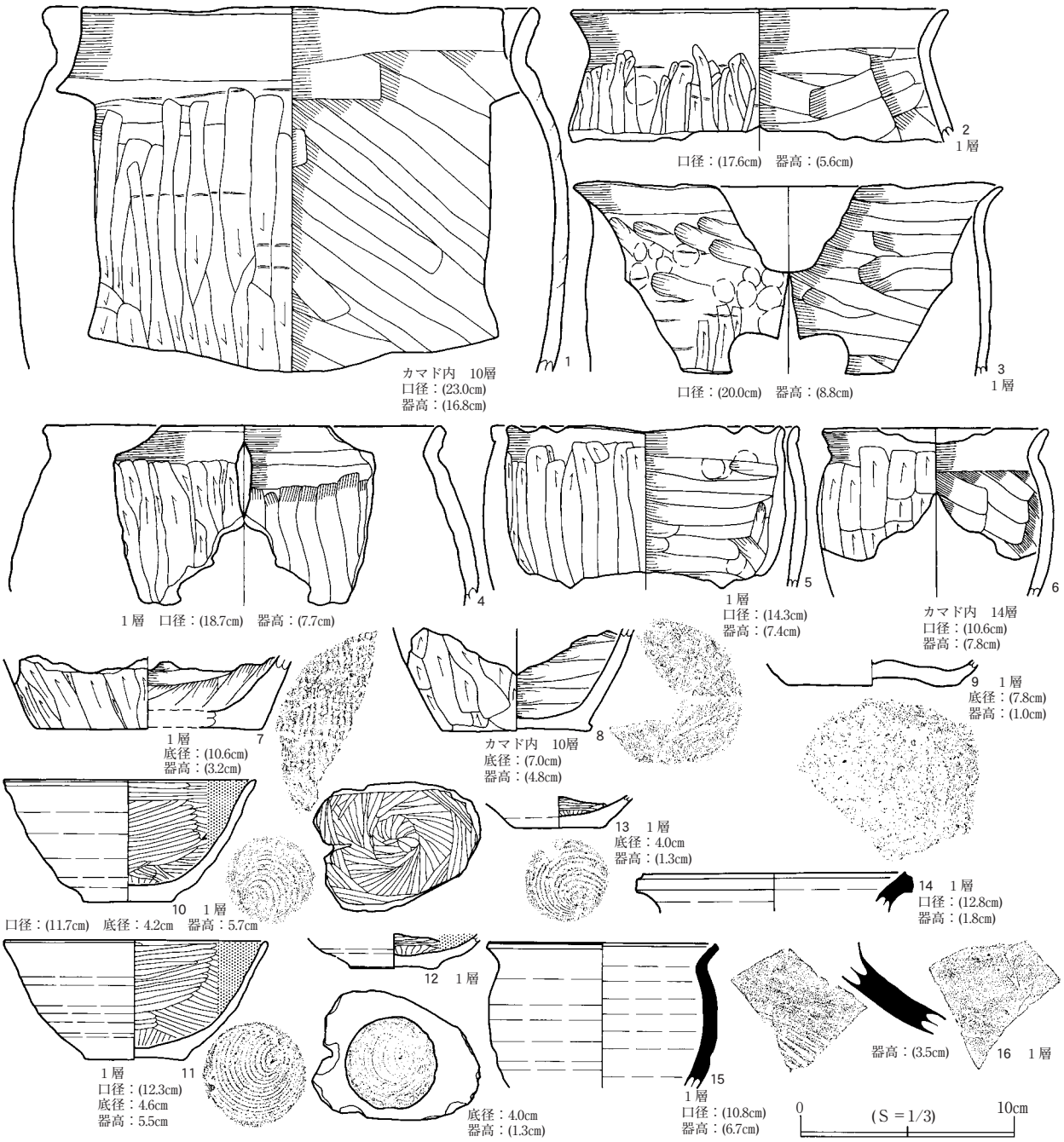
遺　物(第85図)　住居跡内から土師器甕・坏、須恵器甕が出土した。土師器甕は口縁部が50点、底部が16点出土しており、そのうち比較的大型の口縁部資料６点、底部資料３点を図示した。図示しなかったものを含めた甕の口縁部分類別数量はＡ類(２点)、Ｂ類(８点)、Ｃ類(21点)、Ｄ類(11点)、分類不能(８点)で、底部分類別数量は砂底(12点)、木葉痕(３点)、薦網圧痕(１点)の内訳になる。口縁部ではＣ類が多く、ついでＢ・Ｄ類が一定量出土しているが、実測し得たものではＢ・Ｃ類が主体をなす。底部では砂底が多いが、木葉痕と薦網圧痕も出土している。口縁部Ａ・Ｄ類も小破片であり、本住居跡造成時の埋土混入物と考えられる。

実測遺物のうち、比較的形になるものはカマド付近から出土している(第84図)。85図１・６・８は、カマド上部構造の崩落土中に含まれており、カマド廃棄時に遺棄したとみられる。８は出土位置からみて、支脚だった可能性が高い。１・６はいずれもＢ類に相当し、８は木葉痕である。他の住居に比べれば、やや特殊な組み合わせである。

85図１～５は中・大型の土師器甕である。１は胴部中位に最大径を有し、胴上部にかけて内湾して立ち上がり、頸部が段状にくびれて口縁部が短く外傾する。４もほぼ同様な器形である。両者は内外面ともほぼ同じ調整で、外面が縦位ケズリ、内面が縦・斜位のヘラナデ調整である。２は胴上半部に最大径を有し、頸部がくびれて口縁部が比較的長く外反する。外面は縦位ケズリ、内面は横位ヘラナデ調整である。３は胴部が直立気味に立ち上がり、頸部でわずかにくびれて、口縁部が外反する。外面調整は粗雑で、ケズリやユビナデが部分的には認められるが、大部分は指の押さえでとどめており、輪積痕が明瞭である。内面は比較的丁寧に横位ヘラナデにより調整している。５は最大径を有する胴上半部から内湾して、頸部のくびれから口縁部が直立気味に立ち上がる。外面縦位ケズリ、内面横位ユビナデ調整である。１・４が器壁が厚めなのに対し、２・３は比較的器壁が薄い。

85図６は小型の土師器甕である。胴部が丸みを帯び、頸部に段を有して口縁部が外傾する器形である。外面縦位ケズリ、内面斜位ヘラナデ調整である。85図７～９は土師器甕の底部で、７は薦網圧痕、８は木葉痕を残しており、９は砂底である。７・９は直線的に外傾して立ち上がり、８はわずかに底部外縁が張り出す形状である。

85図10～13は土師器坏Ｂ類である。10・11はほぼ全形を確認できる資料である。10は底部がやや突出して底部付近でわずかに屈曲し、口縁部に向けて外傾して立ち上がり、口端がわずかに外反する。



第85図　01-ＳＩ155Ａ出土遺物

外面のロクロ目は高低差があり、カーブが滑らかである。これに対し、11の外面は工具を押し当てたような鋭く間隔の狭いロクロ目である。そのため、やや直線的に外傾する形状になる。内面調整は両者とも胴下部から口縁部までは袈裟懸け状に横位の、底部は放射状のミガキを施す。底部外面は12・13を含めて、全て回転糸切痕をそのままとどめている。細部の違いはあるが、10・11は器形・法量共に極めて近似した土器であり、同一の作り手による可能性が高いと考えられる。なお、12は残存する胴部破断面に、意図的な敲打の痕跡が認められる。

85図14～16は須恵器で、14は壺の口唇破片である。15は小型の甕で、丸みを帯びた胴部から内湾気味に立ち上がり、頸部でくびれて口縁部が外反する。口縁部と胴部最大径がほぼ同じで、口唇は面取りして平滑に作っている。16は大型の甕の頸部付近の破片である。

01-ＳＩ155Ｂ(第86図・87図、図版28)

遺　構　１回目の建て替えで、01-ＳＩ155Ｃよりも規模を拡大した住居である。最大規模の01-ＳＩ155Ａのプラン内に収まるため、埋没過程を示す堆積土は存在しない。

平面形は北東－南西方向に長い長方形で、カマドの付く壁に直交する主軸方位はＮ－25°－Ｗである。主軸とそれに直交するラインで測る住居面積は約18㎡で、中形の住居である。各壁の長さは北東壁約4.2m、南東壁約4.4m、南西壁約4.1m、北西壁約4.4mである。各壁の検出面からの深さ及び立ち上がりは、01-ＳＩ155Ａが切るため確認できなかった。

床面は01-ＳＩ155Ａと共有するとみられ、掘形底面の地山上面を基底面としている。壁溝はほぼ全周で確認した。南東壁沿いは01-ＳＩ155Ａの壁のラインと重なると考えられる。上場幅0.13～0.28m、下場幅0.06～0.13m、床面からの深さ0.05m前後の断面台形状である。

床面で７個のピットを確認した。Ｐ１～４は、住居四隅に配置する主柱穴である。Ｐ５・12・13はいずれも壁際に位置しており、壁板を保持する壁柱を据えたとみられる。なお、北東壁の中央部には細長いピットがあり、壁柱穴に相当すると考えられる。

カマドは、南東壁の住居東隅付近で確認した。基本的に01-ＳＩ155Ａの構築時に上部構造に関わる堆積土を撤去しているが、前庭部の埋め立てや壁外部の煙道などにその残存土が認められる。堆積土は13層に分けた。１～５層までは01-ＳＩ155Ａ壁外部にあたり、カマド構築土を煙道の凹みを埋め立てるために充填した部分とみられる。６～13層は、火床面上部及び前庭部の凹みを埋め立てた貼床に相当する。下部構造として残存しているのは、前庭部・火床面・煙道の一部である。煙道は南東壁をスロープ状に掘り込んで、おそらく上部に粘土による覆いをかけた半地下式の形態と考えられる。前庭部は、南東半分の立ち上がりが不明だが、火床面よりも一回り大きい楕円形状と考えられる。最大長約1.2mであり、火床面との配置を考えると、作業場としての掘りこみではなく、カマド基礎部に関わる掘形とみられる。火床面は地山上面を利用した径約0.55mの不規則な円形状で、深さ約0.1mまで被熱が及ぶ。

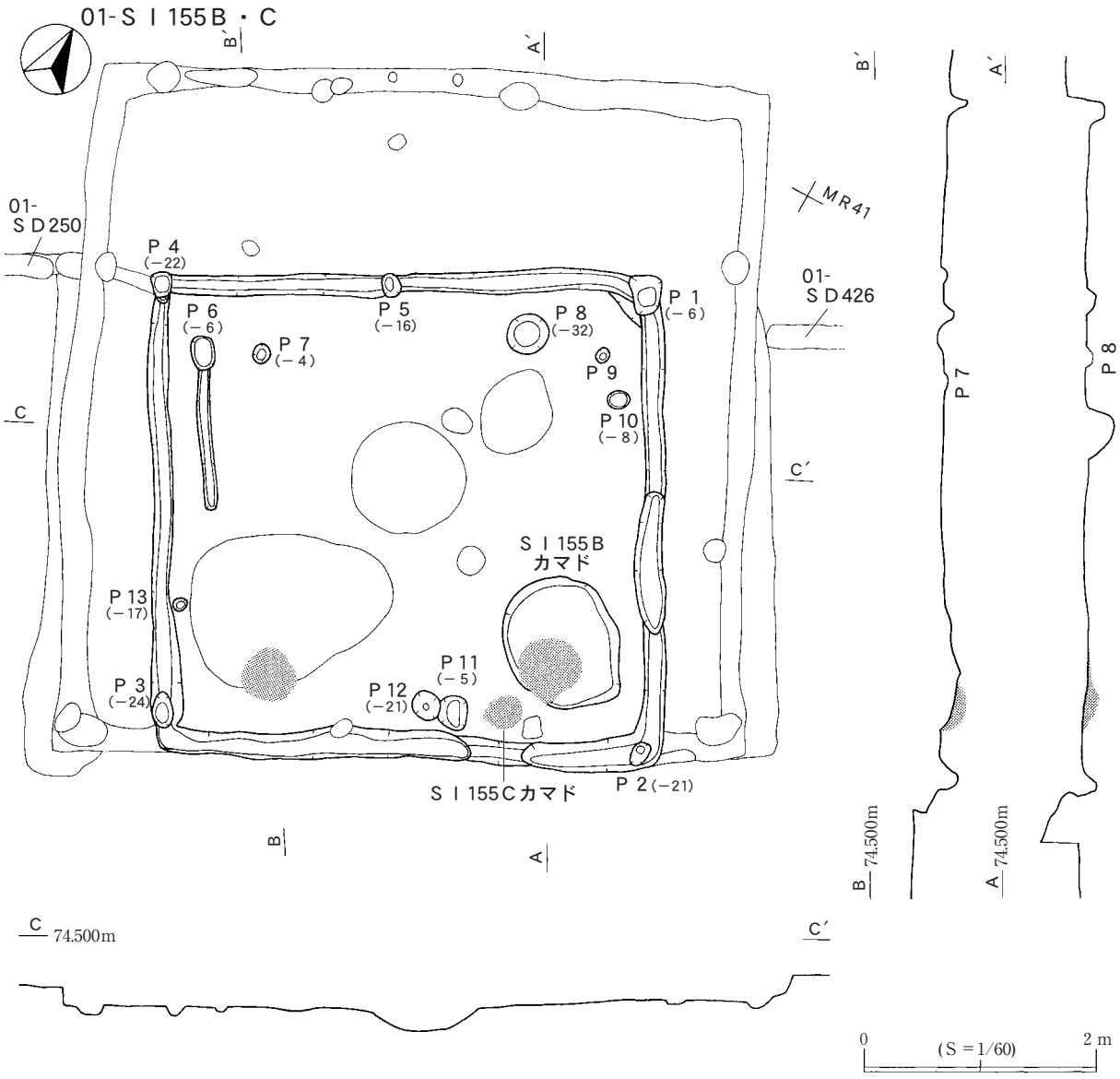
本住居跡は四隅に主柱をもち、南東壁にカマドを設置する住居である。３軒重複する01-ＳＩ155の中では２段階目で、01-ＳＩ155Ａへと拡張するために解体したと考えられる。

遺　物(第87図)　カマド付近から、土師器甕の破片が出土した。おそらくカマド構築材に転用した破片を、01-ＳＩ155Ａ構築時に一緒に埋め立てたと考えられる。

87図１・２は大型の土師器甕である。１は胴下部から中位まで外傾して立ち上がり、胴部中位で弱くくびれて直立気味に立ち上がり、口縁部が外反する器形である。器壁が薄く、口唇は先細り状になる。外面はほぼ指の押さえのみで、明瞭に輪積痕を残す。内面は比較的丁寧な横位ユビナデ調整である。２は胴上半部が張り出し、頸部で屈曲して口縁部が短く外反する器形である。外面縦位ケズリ、内面縦位ユビナデ調整である。

01-ＳＩ155Ｃ(第86図・87図、図版28)

遺　構　01-ＳＩ155の中では最古段階の住居である。最大規模の01-ＳＩ155Ａのプラン内に収まるため、埋没過程を示す堆積土は存在しない。また、本住居跡に伴うとみられる床面施設は、いずれも浅く、プランや規模が近似する01-ＳＩ155Ｂ構築時の床面の掘下げによる削平を受けたとみられる。



第86図　01-ＳＩ155Ｂ・Ｃ

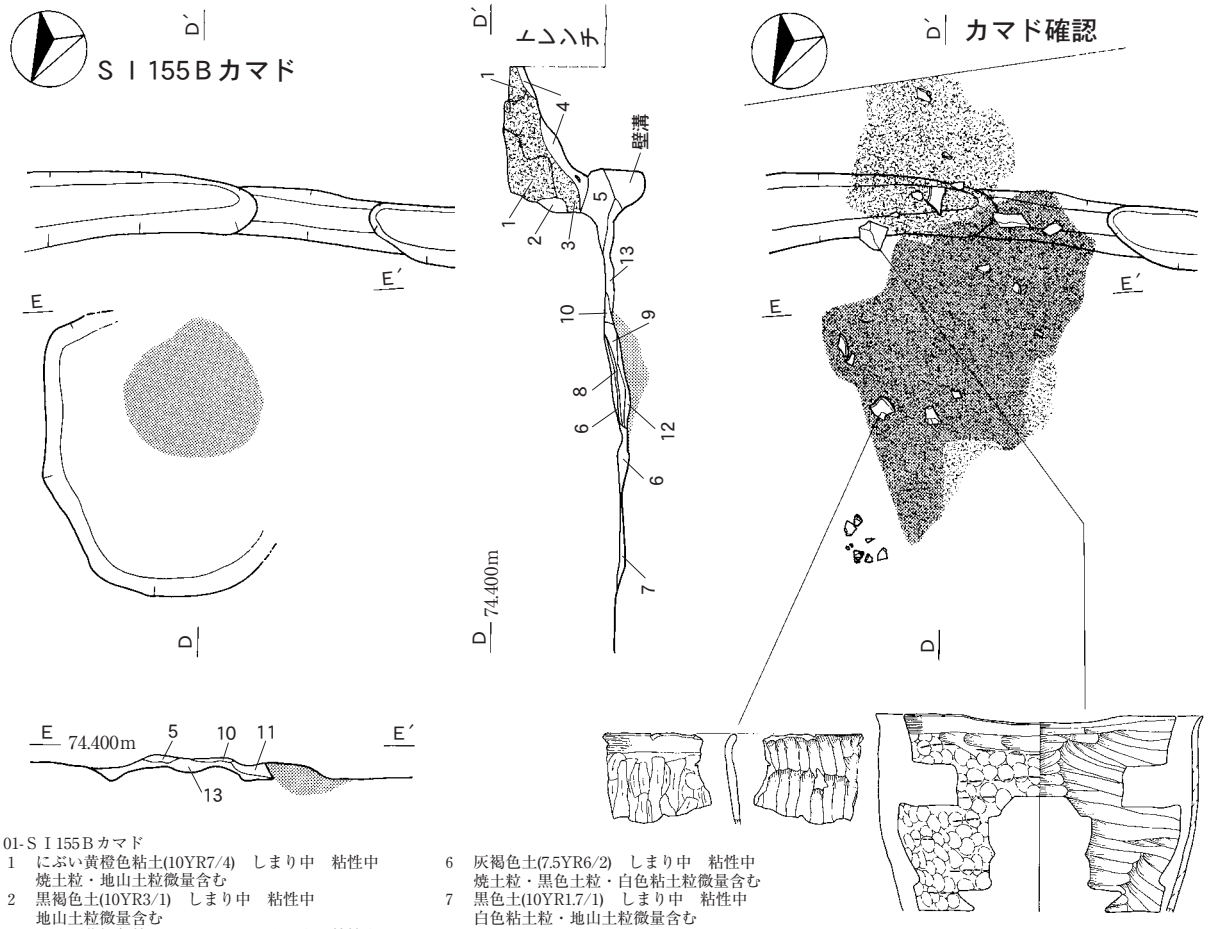
Ｐ６・９を北・西隅柱とみた場合、平面形はほぼ正方形で、カマドの付く壁に直交する主軸方位はＮ－25°－Ｗである。主軸とそれに直交するラインで測る住居面積は約13㎡で、小形の住居である。各壁の長さはいずれも3.6m前後と推定する。各壁の検出面からの深さ及び立ち上がりは、01-ＳＩ155Ａが切るため確認できなかった。

床面は、01-ＳＩ155Ｂ構築時に消失したとみられる。壁溝は南西壁の一部で確認したが、上場の幅が0.1m前後、下場幅が0.06m前後、検出面からの深さは0.03m前後で、わずかに残存する状態である。

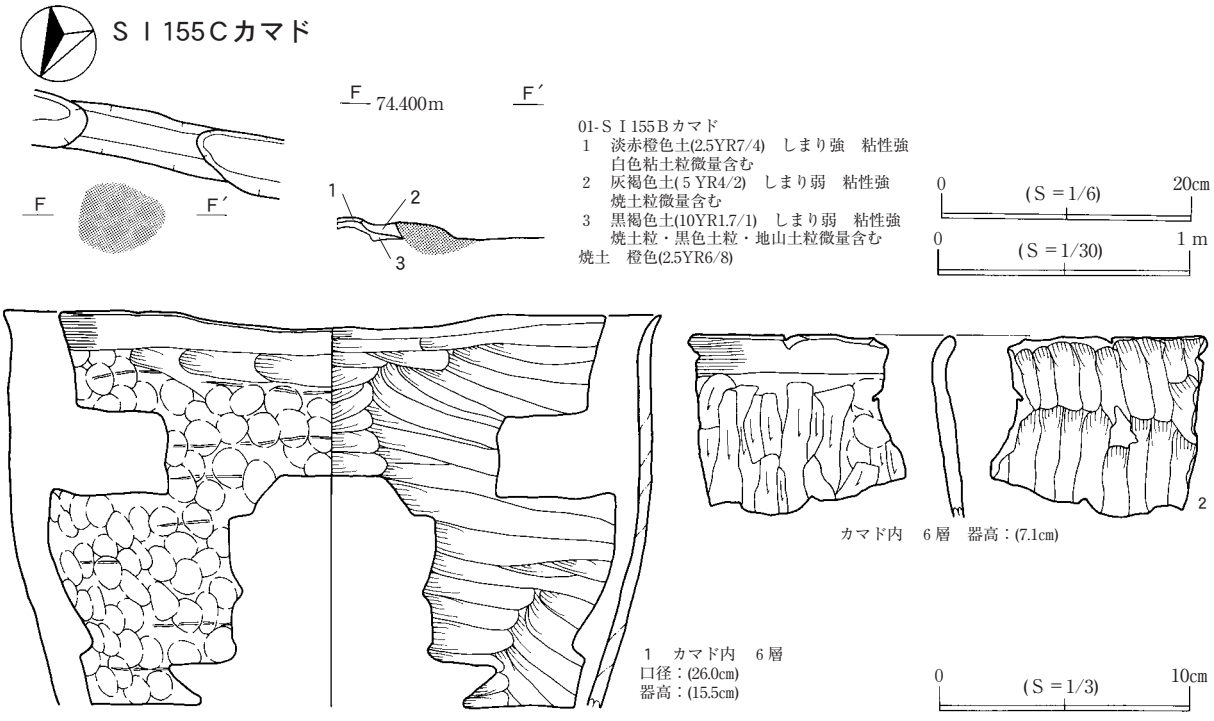
床面と思われる範囲で本住居跡に伴うとみられる６個のピットを確認した。Ｐ６・９は、住居四隅に配置する主柱穴と考えられる。東・南隅に相当する部分は、01-ＳＩ155Ｂの壁溝が切るため消滅している。Ｐ７・８・10・11はいずれも壁際に位置する。

カマドは、南東壁の住居東隅付近で確認した。基本的に01-ＳＩ155Ｂ構築時に上部構造を完全に撤去しており、火床面のみを確認した。火床面は地山上面を利用した不整楕円形状の被熱範囲で、長径約0.35m、短径約0.3m、深さ約0.12mまで焼土化している。

本住居跡は下部構造のほとんどが失われており、住居構造は不明な点が多い。３軒重複する01-ＳＩ



01-ＳＩ155Ｂカマド
1　にぶい黄橙色粘土(10YR7/4)　しまり中　粘性中
　焼土粒・地山土粒微量含む
2　黒褐色土(10YR3/1)　しまり中　粘性中
　地山土粒微量含む
3　にぶい黄橙色粘土(10YR6/3)　しまり中　粘性中
　焼土粒・黒色土塊微量含む
4　黒褐色土(7.5YR3/1)　しまり中　粘性中
　焼土粒・粘土粒微量含む
5　黒褐色土(10YR3/1)　しまり中　粘性中
　焼土粒・炭化物粒・白色粘土粒・地山土粒微量含む
6　灰褐色土(7.5YR6/2)　しまり中　粘性中
　焼土粒・黒色土粒・白色粘土粒微量含む
7　黒色土(10YR1.7/1)　しまり中　粘性中
　白色粘土粒・地山土粒微量含む
8　明緑灰色土(10Ｇ7/1)　しまり強　粘性弱
9　橙色土（2.5YR7/8)　しまり強　粘性弱
10　淡赤橙色土(2.5YR7/4)　しまり中　粘性中
　白色粘土粒微量含む
11　灰褐色土(５YR4/2)　しまり弱　粘性中
　焼土粒微量含む
12　灰黄色土(2.5Ｙ7/2)　しまり中　粘性中
　焼土粒少量含む
13　黒色土(10YR1.7/1)　しまり弱　粘性中
　焼土粒・黒銀色土粒・地山土粒微量含む
焼土　橙色(2.5YR6/8)

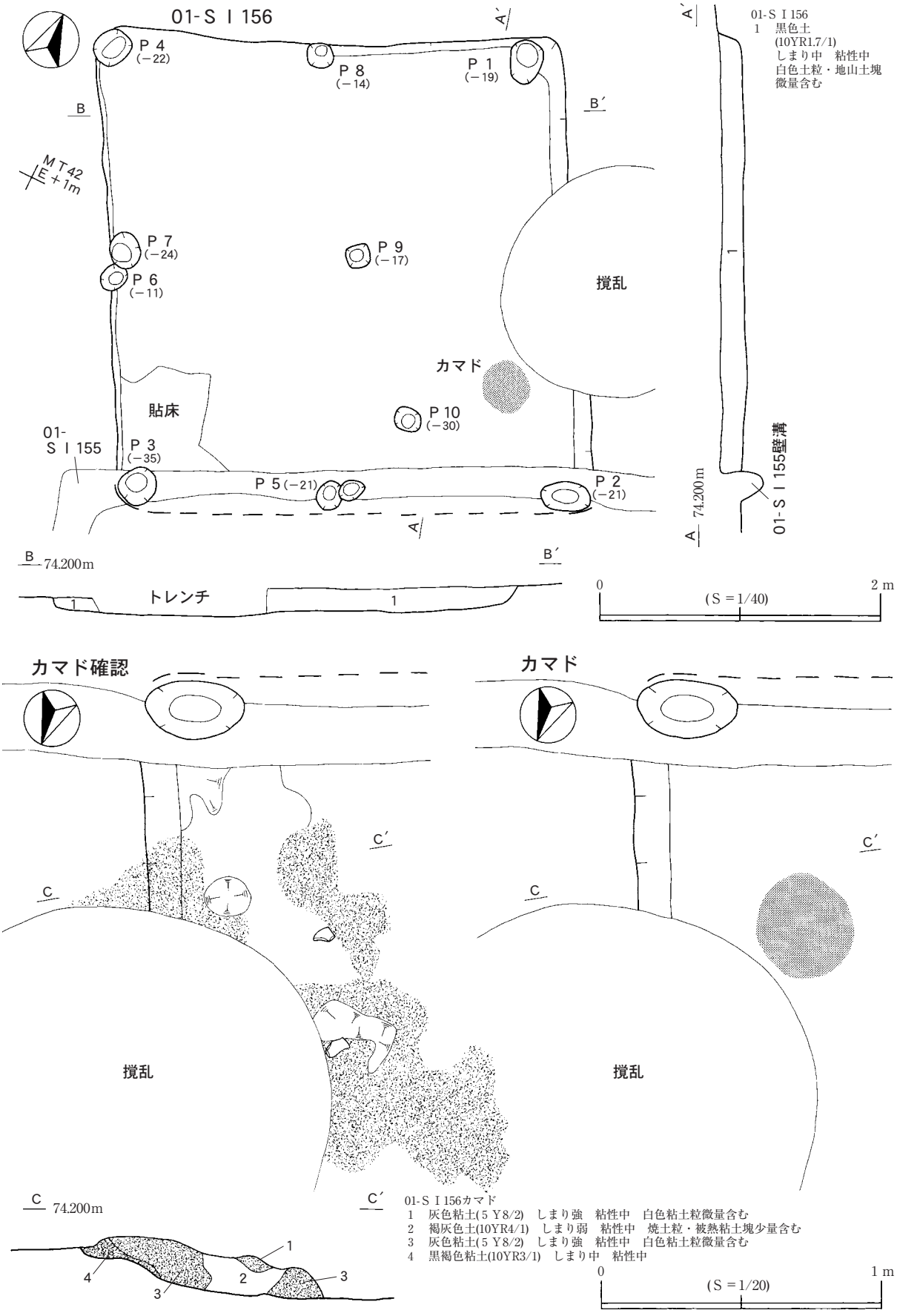


01-ＳＩ155Ｂカマド
1　淡赤橙色土(2.5YR7/4)　しまり強　粘性強
　白色粘土粒微量含む
2　灰褐色土(５YR4/2)　しまり弱　粘性強
　焼土粒微量含む
3　黒褐色土(10YR1.7/1)　しまり弱　粘性強
　焼土粒・黒色土粒・地山土粒微量含む
焼土　橙色(2.5YR6/8)

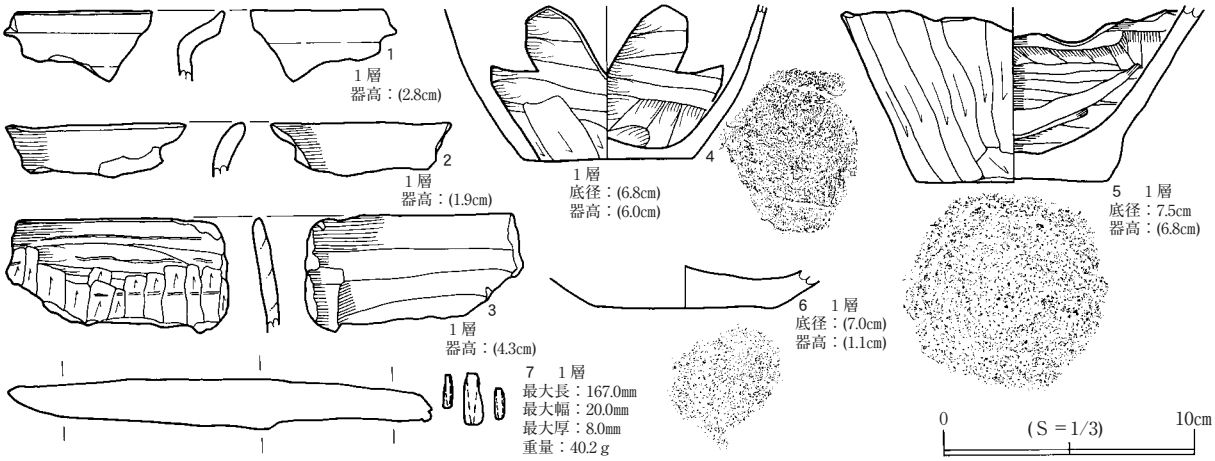
カマド内　6層　器高：(7.1cm)

1　カマド内　6層
口径：(26.0cm)
器高：(15.5cm)

第87図　01-ＳＩ155Ｂ・Ｃカマド・遺物出土状況・出土遺物



第88図　01-S I 156・カマド・確認状況



第89図　01-ＳＩ156出土遺物

155の中では最古段階で、01-ＳＩ155Ｂへと拡張するために解体したと考えられる。

遺　物　本住居跡に伴う遺物は検出できなかった。

01-ＳＩ156(第88図・89図、図版29・165)

遺　構　ＭＲ・ＭＳ41・42グリッドの第Ⅳ層中位～第Ⅴ層上面で、地山土塊を含む黒色土の広がりで確認した。本住居跡の立地点は台地上部平坦面だが、北西側調査区外の沢へわずかに傾斜する。01-ＳＩ155・157と重複し、01-ＳＩ157より本住居跡が新しく、01-ＳＩ155より本住居跡が古い。周辺には01-ＳＩ74・139・158・159・160、01-ＳＢ146がある。

堆積土は１層のみで、地山土塊を含み水平に堆積することから、人為的な造成土とみられる。平面形はほぼ正方形で、カマドの付く壁に直交する主軸方位はＮ－64°－Ｅである。主軸とそれに直交するラインで測る住居面積は約11㎡で、小形の住居である。各壁の長さは、北東壁約3.4m、南東壁約3.4m、南西壁約3.4m、北西壁約3.3mである。検出面からの深さは、南西壁の残りの良い部分で約0.15mで、全周ほぼ垂直に立ち上がる。

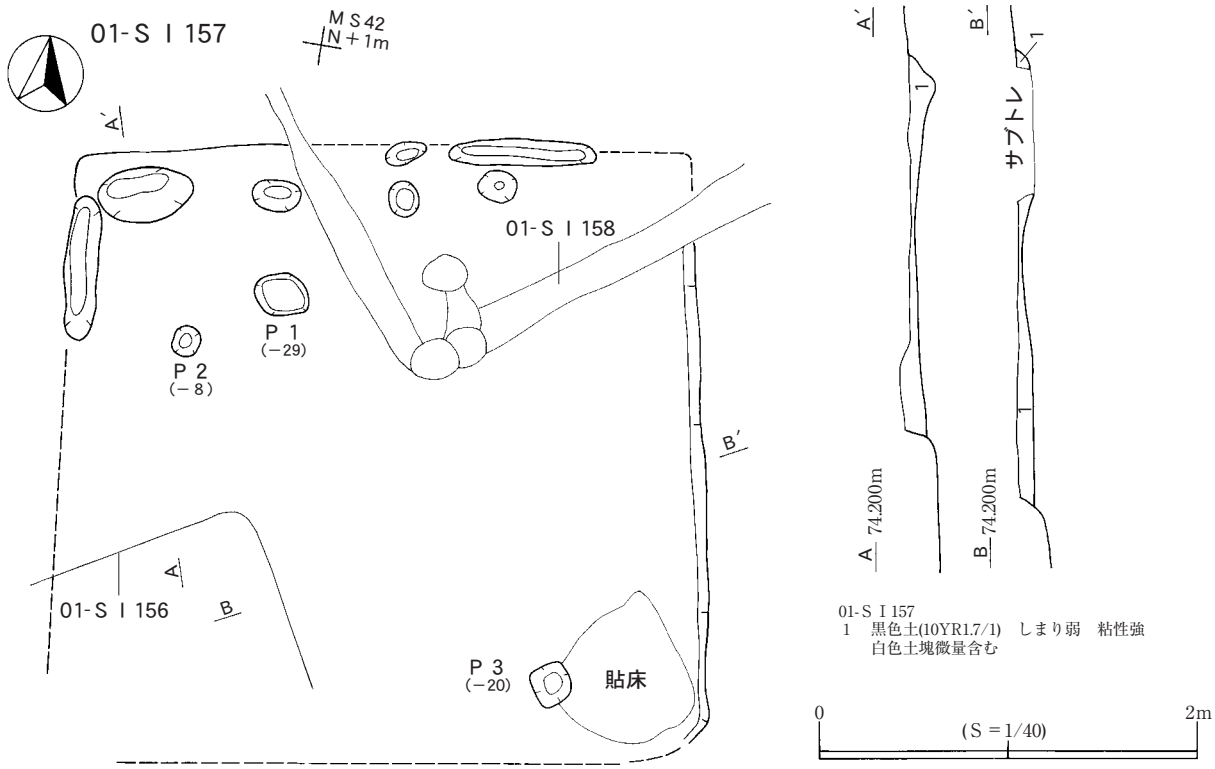
床面は掘形底面を利用しており、ほぼⅥ層上面に相当する。壁溝はなく、床面で検出できたのは柱穴だけである。Ｐ１～４が四隅に、Ｐ５・７・８が壁中央部に規則的に配置する柱穴で、前者が主柱、後者が壁板保持に関わる柱穴とみられる。北東壁中央部は、現代の撹乱により欠失しているが、配置からみて北東壁中央部にも壁柱穴があったと考えられる。

カマドは、北東壁の中央からやや南東寄りの位置で確認した。現代の撹乱が、煙道部を破壊しているが、上部構造の崩落層と火床面を確認した。堆積土は４層に分けた。いずれも袖や天井部の崩落土と考えられる。火床面は径約0.37mの不整な円形の被熱範囲で、地山上面を利用している。

本住居跡は四隅に主柱をもち、北東壁にカマドを設置する住居である。廃絶後は一気に埋め立てており、01-ＳＩ155の構築時の造成と考えられる。

遺　物(第89図)　住居跡内から土師器甕・鍋が出土した。土師器甕は口縁部破片が６点、底部破片が２点出土しているが、いずれも小破片であり、本住居跡造成土に含まれる遺物と考えられる。

89図１～３は土師器甕の口縁部破片である。１はロクロ整形で、口縁部で屈曲外反し、口端がわずかに内湾する。２は外反する口縁部の、３は張り出す胴部中位から内湾して立ち上がる口縁部の破片



第90図　01-S I 157

である。89図４・５は土師器甕の底部で、いずれも砂底である。５は外面縦位ケズリ、内面横位ヘラナデ調整、４は内外面共にユビナデ調整である。89図６は土師器鍋の底部で、緩やかな立ち上がりが確認できる。７は鉄製品の刀子で、茎の末端部以外は全体が残っている。

01-S I 157(第90図、図版29)

遺　構　ＭＲ・ＭＳ41・42グリッドの第Ⅳ層中位～第Ⅴ層上面で、地山土塊を含む黒色土の広がりで確認した。本住居跡の立地点は台地上部平坦面だが、北西側調査区外の沢へわずかに傾斜する。01-ＳＩ156・158と重複し、いずれよりも本住居跡が古い。周辺には01-ＳＩ74・139・159・160、01-ＳＢ46がある。

予測される住居範囲の多くを、01-ＳＩ156・158が壊しており、堆積土も部分的に確認できた１層のみである。白色土塊や炭化物を含み水平に堆積することから、人為的造成土と考えられる。Ｐ３脇の貼床を住居東隅として南東壁を予測した場合、平面形は住居南辺が長い台形で、南東壁に直交する主軸方位はＮ－08°－Ｅである。主軸とそれに直交するラインで測る住居面積は約11㎡で、小形の住居である。壁のラインを延長推定した場合の各壁の長さは、東壁約3.2m、南壁約3.5m、西壁約3.2m、北壁約3.2mである。検出面からの深さは、東壁の残りの良い部分で0.1m前後で、立ち上がり角度は不明である。

床面は掘形底面を利用しており、ほぼⅥ層上面に相当する。南東隅には部分的に貼床も認められる。壁溝は北・西壁の一部で確認したが、01-ＳＩ158や後世の削平により、かろうじて残存している程度である。床面で３個のピットを検出した。住居南東・北西隅に集中する傾向がある。カマドは確認で

きないが、撹乱や01-ＳＩ156の配置から、南東壁に設置していたことが想定される。

本住居跡は、壁溝や柱穴の配置に規則性を見出し難く、また住居平面形も明確な台形状であることなど、他の住居に比べ、雑な造りの印象を受ける。廃絶後は一気に埋め立てており、01-ＳＩ156・158構築時に造成したと考えられる。

遺　物　本住居跡に伴う遺物は検出できなかった。

01-ＳＩ158(第91図～94図、図版30・151・152・163・165)

遺　構　ＭＱ42、ＭＲ41～43、ＭＳ42・43グリッドの第Ⅳ層中位～第Ⅵ層上面で、地山土塊を含む黒色土の広がりで確認した。本住居跡の立地点は台地上部平坦面だが、北西側調査区外の沢へわずかに傾斜する。01-ＳＩ157と重複し、本住居跡が新しい。周辺には01-ＳＩ34・35・155・156・159がある。

堆積土は２層に分けた。住居内を埋め尽くす状態からみて、１層は人為的な造成土と考えられる。２層は壁溝内堆積土で壁板裏込めの残存土とみられる。

平面形はほぼ正方形で、カマドの付く壁に直交する主軸方位はＮ－37°－Ｗである。主軸とそれに直交するラインで測る住居面積は約23㎡で、中形の住居である。各壁の長さは、北東壁約4.9m、南東壁約4.7m、南西壁約4.8m、北西壁約4.8mである。壁の検出面からの深さは、南西壁の残りの良いところで0.1～0.15mで、ほぼ垂直に立ち上がる。

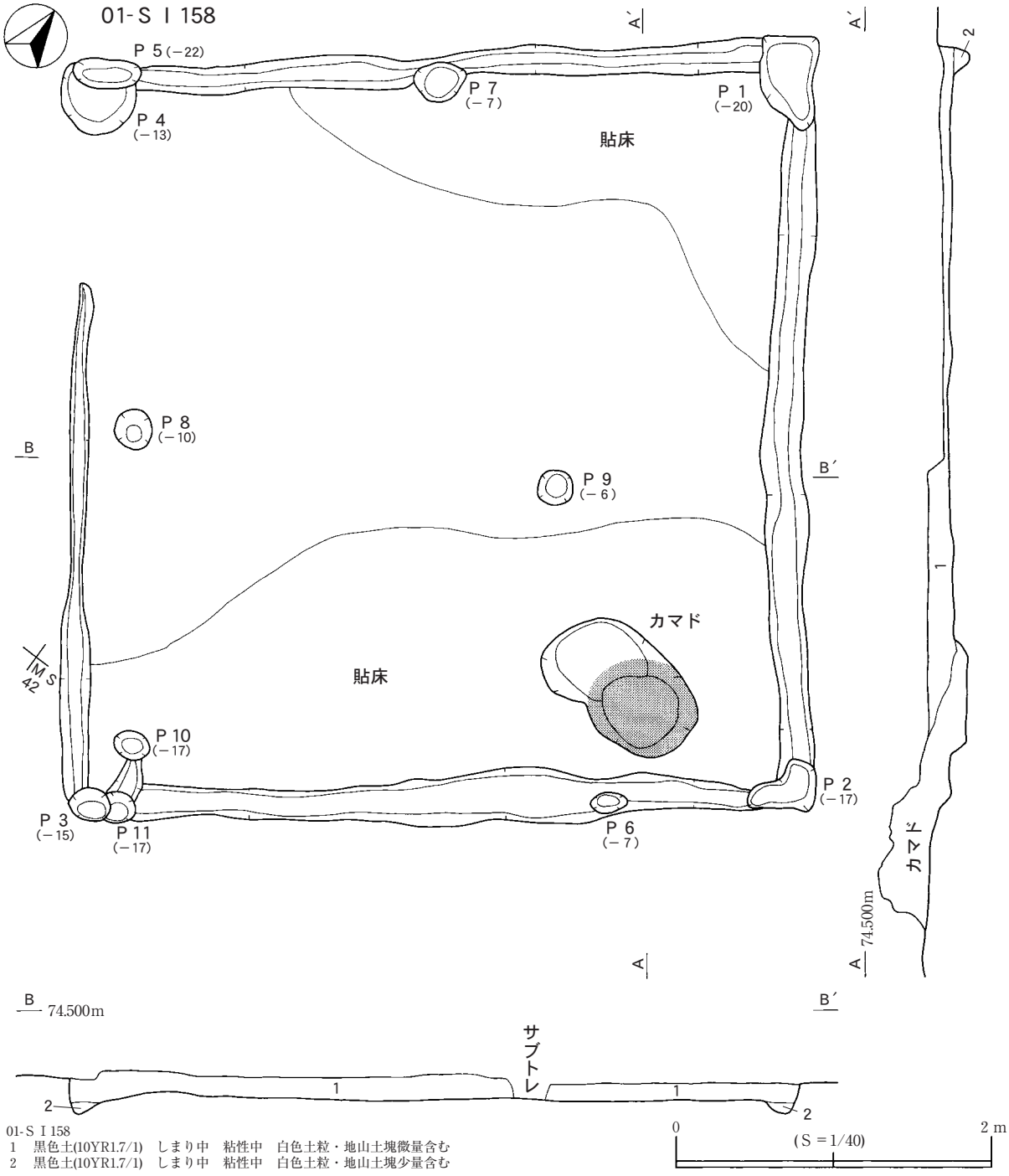
床面は、北隅付近と住居南東部約1/3の範囲に貼床を施し、住居中央部は掘形底面の地山上面を利用している。壁溝は、北西壁西隅部分以外の全周で確認した。上場幅0.08～0.36m、下場幅0.03～0.26m、床面からの深さ0.1m前後の断面台形状である。床面や壁溝内部で11個のピットを確認した。Ｐ１～４は住居隅の主柱穴である。Ｐ６・７は壁溝内に配置する、壁板保持の補助柱穴である。

カマドは南東壁の東隅付近の位置で、灰白色やにぶい橙色粘土の広がりで確認した。カマド袖の下部が残存しており、その内部から煙道部にかけての堆積土を17層に分層した。５～７層がカマド構築粘土の崩落層と考えられる。８層は崩落土の間隙に流入した土で、住居内造成土に由来すると考えられ、９層以下もカマド上部構造の崩落層と考えられる。15層はカマド袖芯材である礫の基部をおさえる土であり、カマド基底部の構築土である。16・17層も煙道へ続く斜面底部の整地層と考えられる。火床面は長径約0.7m、短径約0.6mの不整な楕円形状の被熱範囲で、主軸方位は住居主軸方位に直交する。

本住居跡は住居隅に主柱をもち、南東壁にカマドを設置する住居である。廃絶後は人為的に埋め立てたと考えられる。01-ＳＤ220の北西端開口部から、北東方向へ延びる01-ＳＤ426を側溝とする集落内通路の範囲に当たることから、通路構築までに埋め立て造成したと考えられる。

遺　物(第93図・94図)　住居跡内から土師器甕・坏、須恵器甕、鉄製品が出土した。土師器甕は口縁部が29点、底部が15点出土しており、そのうち比較的大型の口縁部資料７点、底部資料６点を図示した。図示しなかったものを含めた甕の口縁部分類別数量はＡ類(５点)、Ｂ類(３点)、Ｃ類(７点)、Ｄ類(７点)、分類不能(７点)で、底部分類別数量は砂底(９点)、薦編圧痕(１点)、ケズリ(４点)の内訳になる。口縁部ではＡ類が一定量存在し、大型の資料ではＣ類でもやや直線的な形状の93図１が特徴的である。底部では砂底が多いが、薦編圧痕の存在が目立つ。

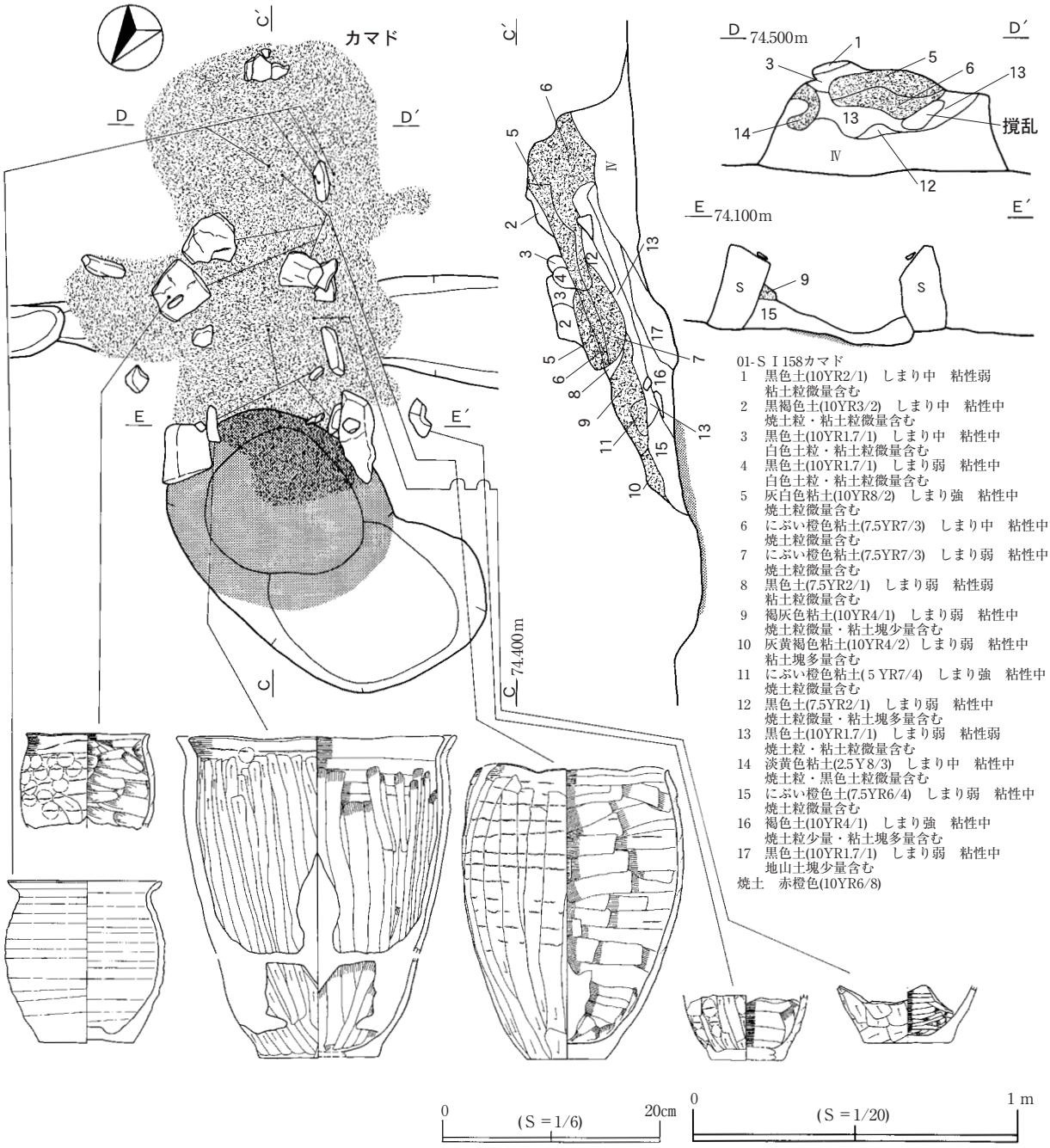
大型の資料の多くはカマド周辺から出土している(第92図)。中でも全体形を窺える93図１・２・４



第91図　01-S I 158

はカマド上部から出土しており、カマド廃棄時に一緒に遺棄したものとみられる。口縁部分類ではＡ・Ｃ・Ｄ類の、底部分類では砂底２点とケズリ１点の組み合わせになる。93図11はカマド袖の内部にあり、火床面よりもやや奥壁寄りに位置することから、支脚の可能性がある。

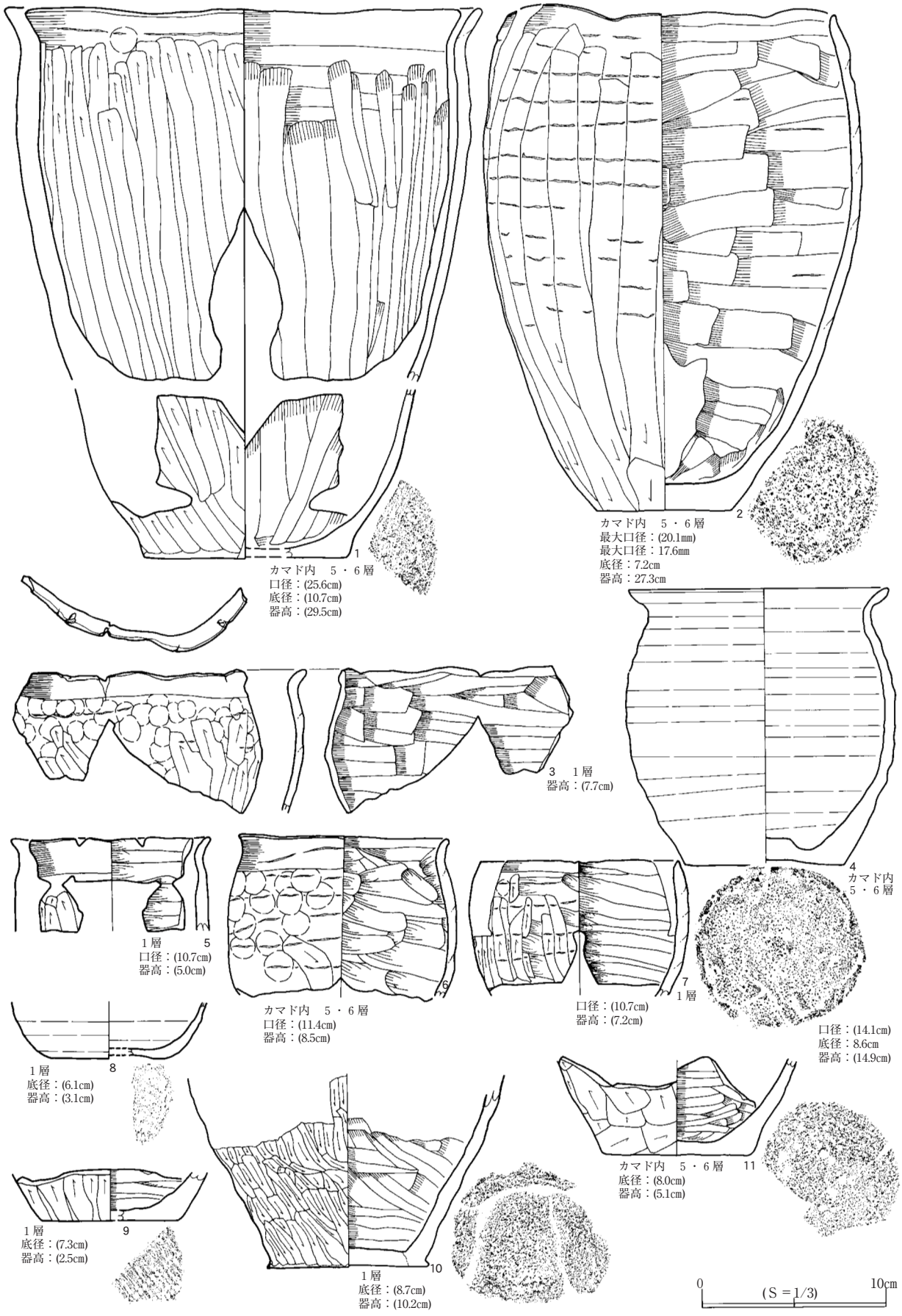
93図１～３は大型の土師器甕である。１は底部にケズリ再調整を施しており、底部付近でわずかに膨らみ、胴上部まで直線的に外傾して頸部で弱く屈曲し、口縁部が外傾する。外面は縦位ケズリ、内面は縦位ヘラナデ調整である。２は底部が砂底で、胴下部から最大径を有する胴部中位を経て、口縁部まで内湾する。口縁部付近の凹み状の段は、ケズリの末端部にみられるもので、意図的な整形では



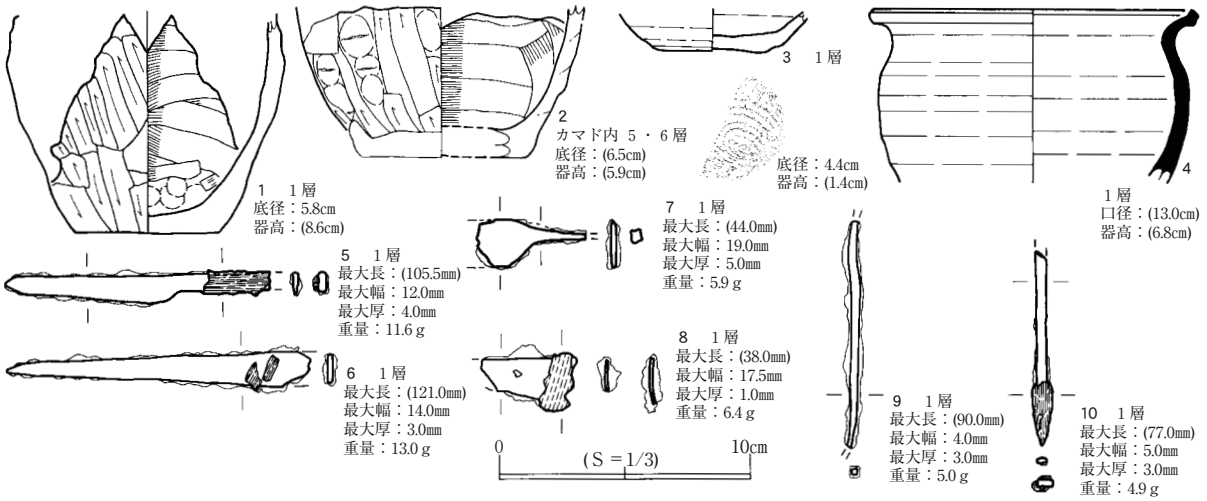
第92図　01-ＳＩ158カマド・遺物出土状況

ない。外面は縦位ケズリ、内面は横位平行のヘラナデ調整である。３は胴上部が膨らみ、頸部でくびれて口縁部が外反する。土器を上部からみた器形は、円形ではなく隅丸方形に近い形状になる。外面は胴上部まで縦位ケズリが及ぶが、口縁部付近は指の押さえにとどめており、輪積痕が明瞭に残る。内面は横位のヘラナデ調整である。93図４～７は比較的小型の土師器甕である。４は内外面ともロクロナデ様の調整を施すが、底部は砂底である。５・６は口縁部が外反し、７は口縁部が内湾する器形である。いずれも外面調整のケズリが疎らで、調整が雑である。93図８～11、94図１・２は土師器甕の底部である。93図８は底部に回転糸切痕を、93図９は薦網圧痕を残し、93図10・11は砂底である。94図１・２はケズリ再調整を施している。

94図３は土師器坏Ａ類の底部で、内外面ともロクロ目を、底部は回転糸切痕をとどめる。94図４は



第93図　01-ＳＩ158出土遺物１



第94図　01-ＳＩ158出土遺物２

小型の須恵器甕で、丸みを帯びた胴部から内湾気味に立ち上がり、頸部でくびれて口端にむけて外反し、口唇が段を有して内湾する。口縁部と胴部最大径がほぼ同じである。

94図５～10は鉄製品で、５～７は刀子、８は穂摘具、９・10は棒状のものである。５は切先から茎の途中までが残存する資料で、茎部分には木質が残っている。６は切先から茎の付け根付近まで、７は刀身と茎の付け根部分が残る。８は破片で、木質が付着する。９は両端を欠損しており、わずかにＳ字状にカーブしている。10は一端を欠損する資料で、断面長方形状の基部に木質が残る。

01-ＳＩ159(第95図～97図、図版31・154)

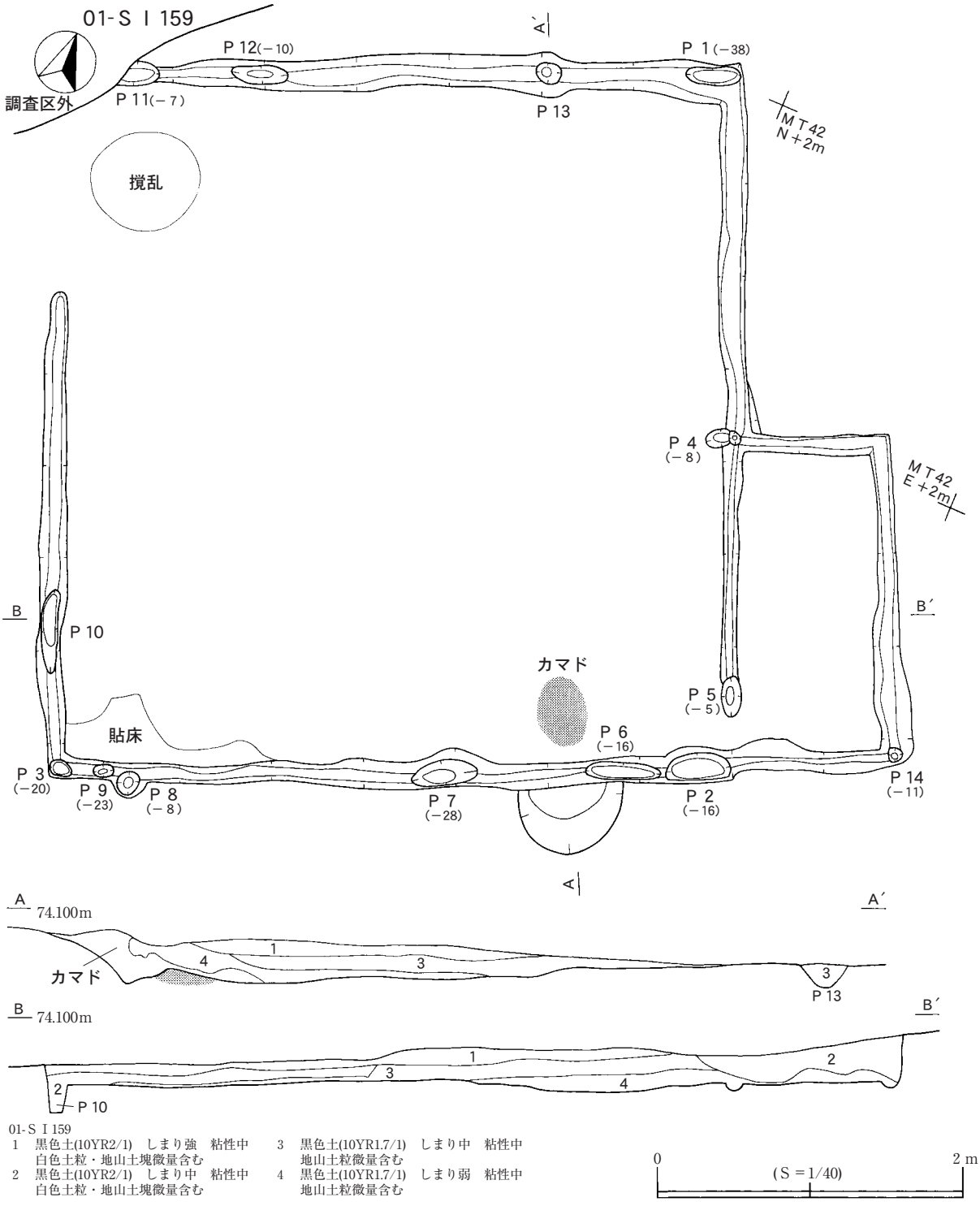
遺　構　ＭＳ・ＭＴ41・42、ＮＡ42グリッドの第Ⅳ層中位～第Ⅵ層上面で、地山土粒を含む黒色土の広がりで確認した。本住居跡の立地点は台地上部平坦面だが、北西側調査区外の沢へわずかに傾斜する。重複する遺構はなく、周辺には01-ＳＩ155・156・157・158・160がある。

堆積土は４層に分けたが、全て地山土粒を少量含む黒色基調の土で、ほぼ水平堆積であることから人為的な造成土と考えられる。なお、壁溝内は２層や３層と明確に分離できず、元々土質が近いため、廃絶時に壁板を抜取った穴に流入した造成土と、裏込め土の境界が不明瞭になるとみられる。

住居西隅が調査区外に延びるが、壁の延長線で予測される平面形は、北西－南東方向にわずかに長い長方形で、カマドの付く壁に直交する主軸方位はＮ－21°－Ｗである。主軸とそれに直交するラインで測る住居面積は約21㎡で、中形の住居である。各壁の長さは、北東壁約4.7m、南東壁約4.5m、南西壁約4.7m、北西壁約4.5mである。壁の検出面からの深さは、北東壁の残りの良いところ0.3mで、ほぼ垂直に立ち上がる。なお、北東壁の約南東半分に、壁と直交する方向で約1.0m、壁と平行する方向で約2.2mの規模の張り出しがある。床面レベルは住居床面と同じで、壁の立ち上がりはほぼ垂直である。カマド脇にあたることから、出入り口施設になると考えられる。

床面は南隅付近の一部に貼床を施す以外は、掘形底面の地山上面を利用している。壁溝は、住居西隅と東隅で一部途切れるが、基本的には全周する。上場幅0.09～0.2m、下場幅0.03～0.12m、床面からの深さ0.05～0.2mの断面台形状で、張り出しの付く場所では狭く浅くなる。

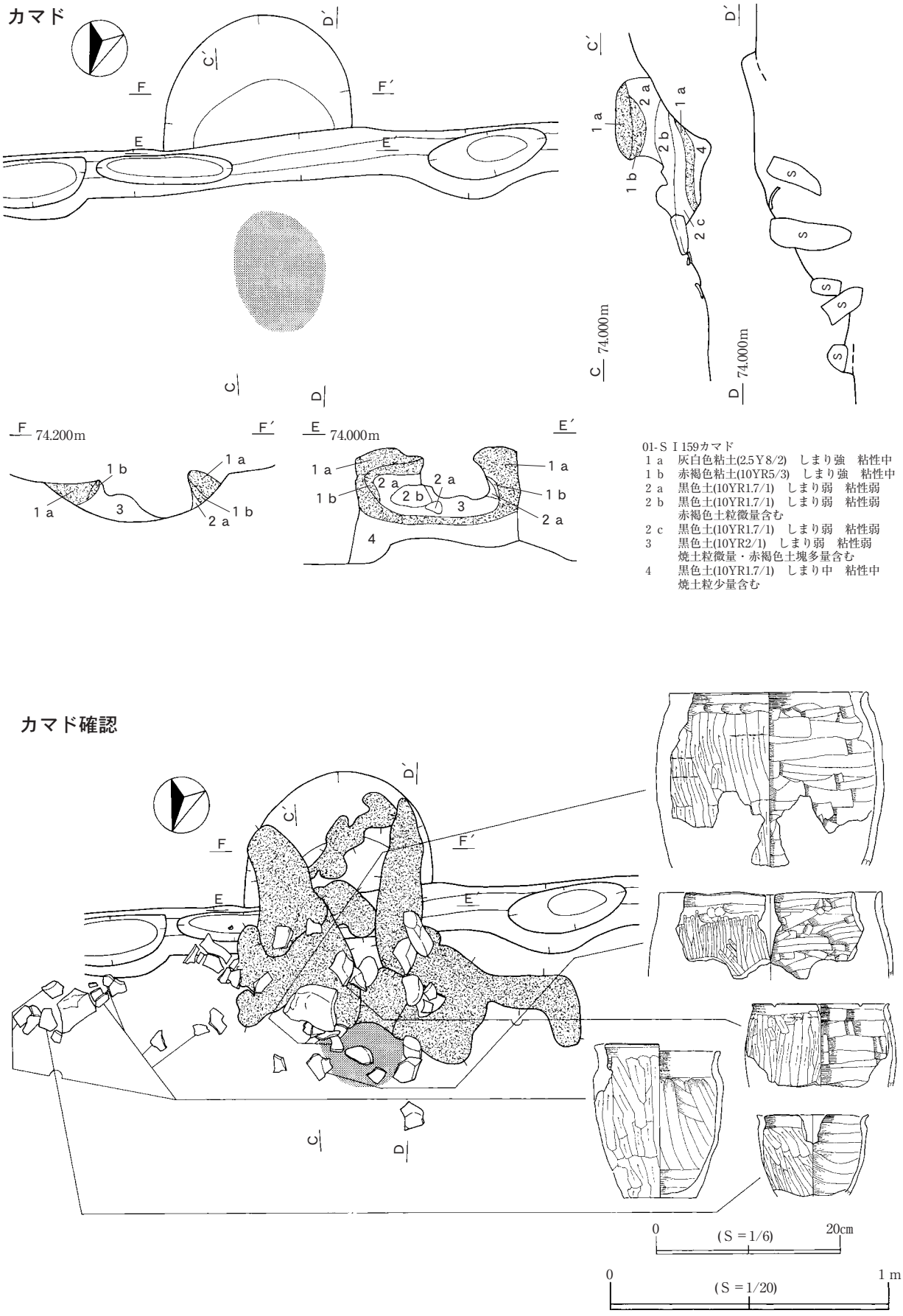
床面や壁溝内部で14個のピットを確認した。Ｐ１～３は住居隅の主柱穴である。西隅は調査区外に



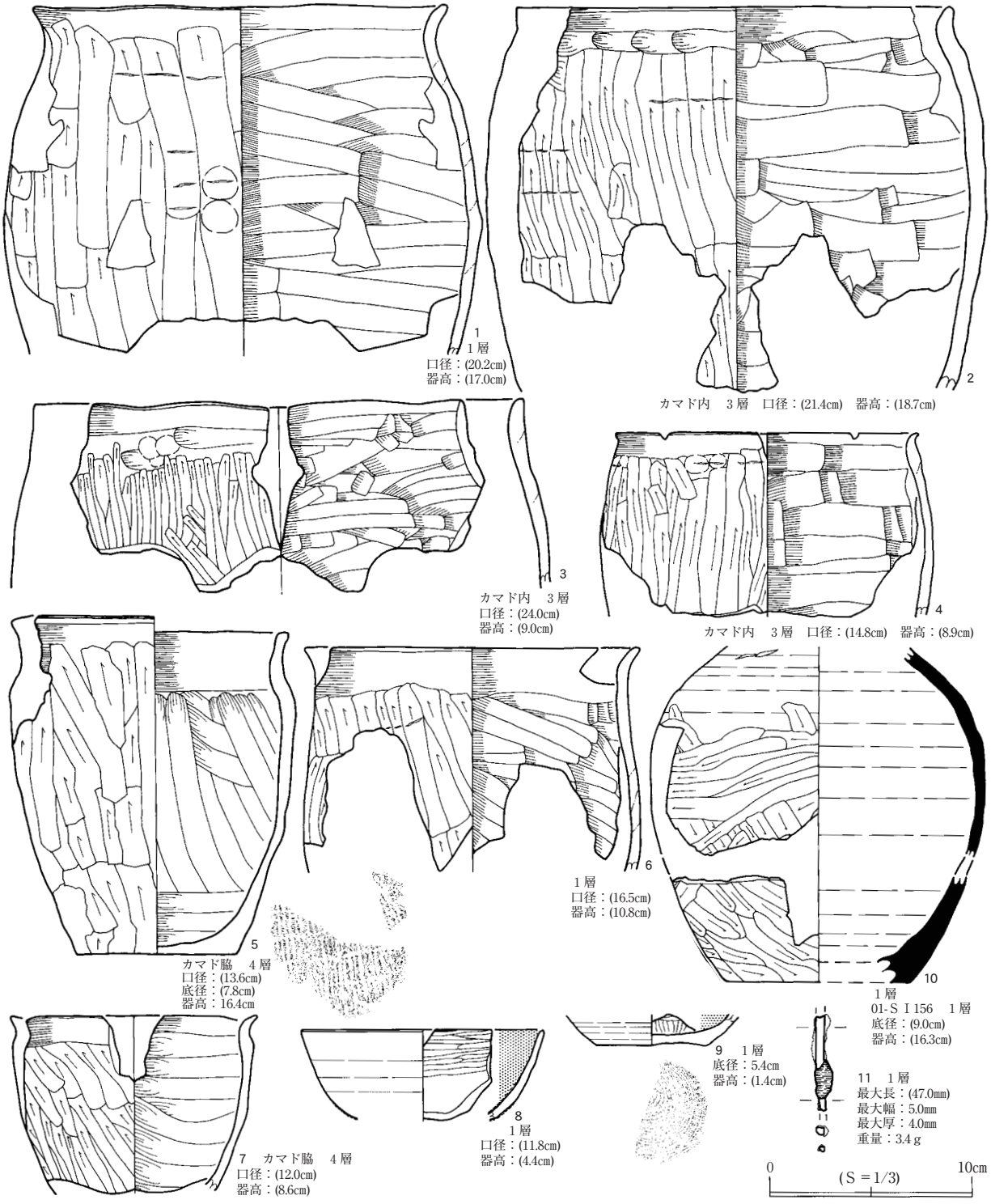
第95図　01-S I 159

位置するが、おそらく同様な柱穴があると想定される。P 6 ～13は壁溝内に配置する、壁板保持の補助柱穴である。P 4 ・ 5 は張り出し起点部に位置し、壁板の角にあたる壁柱穴と考えられる。

カマドは南東壁の中央から北東寄りの位置で、灰白色粘土の広がりで確認した。カマド上部構造の一部が残存しており、その内部から煙道部にかけての堆積土を 7 層に分層した。１ａ層の灰白色粘土はカマド上部構造の構築粘土で、１ｂ層はその被熱赤変範囲である。２ａ～３層までは、カマド内部への充填土で、住居廃絶時に埋め立て土とみられる。４層は１ａ層粘土基底面を平坦に造成する土で



第96図　01-S Ⅰ159カマド・遺物出土状況



第97図　01-ＳＩ159出土遺物

ある。Ｆ－Ｆ´断面の確認から、煙道部付近では底面から天井部まで、粘土を環状に回して上部構造を造ることが分かる。また、袖に当たる部分では扁平な礫を芯材に用いた痕跡も認められる。火床面上部から焚口にかけては天井部が倒壊していたが、おそらくＦ－Ｆ´断面のかかる部分と同じ造りと考えられる。煙道部は、住居南東壁から約0.4m住居外へ延びる、最大幅約0.7mの半円形状の掘り込みを底面としている。煙道部掘り込みは、住居内から緩やかな傾斜で末端まで立ち上がる。火床面は長径0.43m、短径0.32mの不整な楕円形状の被熱範囲で、主軸方位は住居主軸方位に平行する。

本住居跡は住居隅に主柱をもち、南東壁にカマドを設置する住居で、北東壁には張り出しが付属する。廃絶後は人為的な造成により埋め立てたと考えられる。01-ＳＤ220の北西端開口部から、北東方向へ延びる01-ＳＤ426を側溝とする集落内通路の範囲に当たることから、通路構築時に埋め立て造成したと考えられる。

遺　物(第97図)　住居跡内から土師器甕・坏、鉄製品が出土した。土師器甕は口縁部が11点、底部が４点出土しており、そのうち比較的大型の口縁部資料７点、底部資料１点を図示した。図示しなかったものを含めた甕の口縁部分類別数量はＡ類(０点)、Ｂ類(２点)、Ｃ類(７点)、Ｄ類(２点)で、底部分類別数量は砂底(２点)、薦編圧痕(１点)、ケズリ(１点)の内訳になる。図示したものでは、大型の甕ではＣ類が多く、Ｂ類２点はいずれも小型甕である。薦編圧痕がつくのは、Ｂ類の小型甕である。

大型の資料の多くはカマド周辺から出土している(第96図)。97図２～４は火床面上部から出土しており、礫の散乱状況や破片形態からみて、カマド構築材に利用したものと考えられる。97図５・７は、カマド左袖の脇にまとまってあり、カマド廃棄時に一緒に遺棄したものと考えられる。５は、支脚に用いた可能性もあるが、出土位置が伴わない。

97図１～３は大型の土師器甕である。１は胴上半部に最大径をもち、頸部でくびれて口縁部が外反する。外面は縦位ケズリ、内面は横位ヘラナデ調整である。やや器壁は薄めである。３も胴部器壁が薄めだが、口縁部に向けて緩やかに厚さを増す。最大径を有する胴部から内湾して立ち上がり、口縁部がわずかに直立気味に反る器形である。外面は縦位の細かいケズリ、内面は横・斜位のヘラナデ調整である。２は器壁が厚めで、胴上半部に最大径を有し、頸部でくびれて口縁部が直立気味に外反する。外面縦位ケズリ、内面横位ヘラナデ調整である。

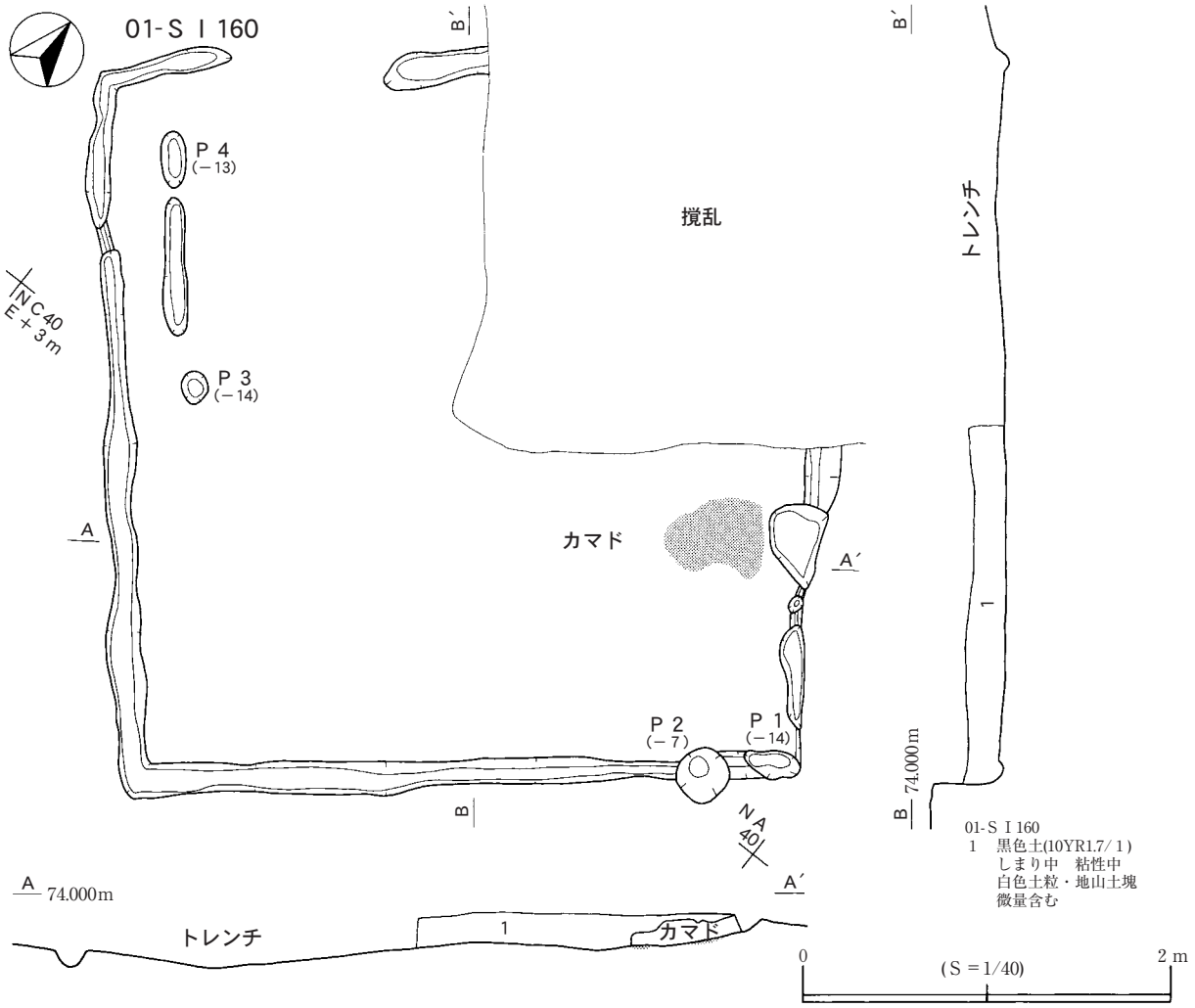
97図４～７は中・小型の土師器甕である。５は全体形が分かる資料である。底部は薦編圧痕で、胴上半部まで直立気味に立ち上がり、頸部で段状にくびれて口縁部が直立気味に外傾する。口唇は面取りして平滑に仕上げている。外面縦位ケズリ、内面底部付近は横位のそれ以上は縦位のユビナデ調整である。７も頸部に段を有する器形で、外面縦位ケズリ、内面横位ユビナデ調整である。６は口縁部が弱く外反する器形で、外面縦位ケズリ、内面横・斜位ヘラナデ調整である。４は胴上半部に最大径を有し、口縁部まで内湾して立ち上がり、口端がわずかに外反する器形で、外面縦位ケズリ、内面横位ヘラナデ調整である。

97図８・９は土師器坏Ｂ類である。８の外面ロクロ目は凹凸が少なく、内面は横位ミガキが観察できるが、全体に風化を受けており、詳細は不明である。９は底部で、回転糸切痕を残す。97図10は須恵器壺で、頸部以下が残存する資料である。外面胴上部は横位に、胴下部は斜位にケズリによる再調整を施す。97図11は棒状の鉄製品で、両端を欠損している。一部に木質が付着しており、柄をつける道具の可能性がある。

01-ＳＩ160(第98図・99図、図版32)

遺　構　ＮＡ39・40、ＮＢ40グリッドの第Ⅳ層中位～第Ⅵ層上面で、地山土塊を含む黒色土の広がりで確認した。本住居跡の立地点は台地上部平坦面だが、北西側調査区外の沢へ向けて傾斜する。重複する遺構はなく、周辺には01-ＳＩ139・155・156・157、01-ＳＢ46、01-ＳＤ220・426がある。

堆積土は１層で、地山土塊を含む黒色基調の人為的な造成土である。なお、壁溝内も明確に分離で



第98図　01-S I 160

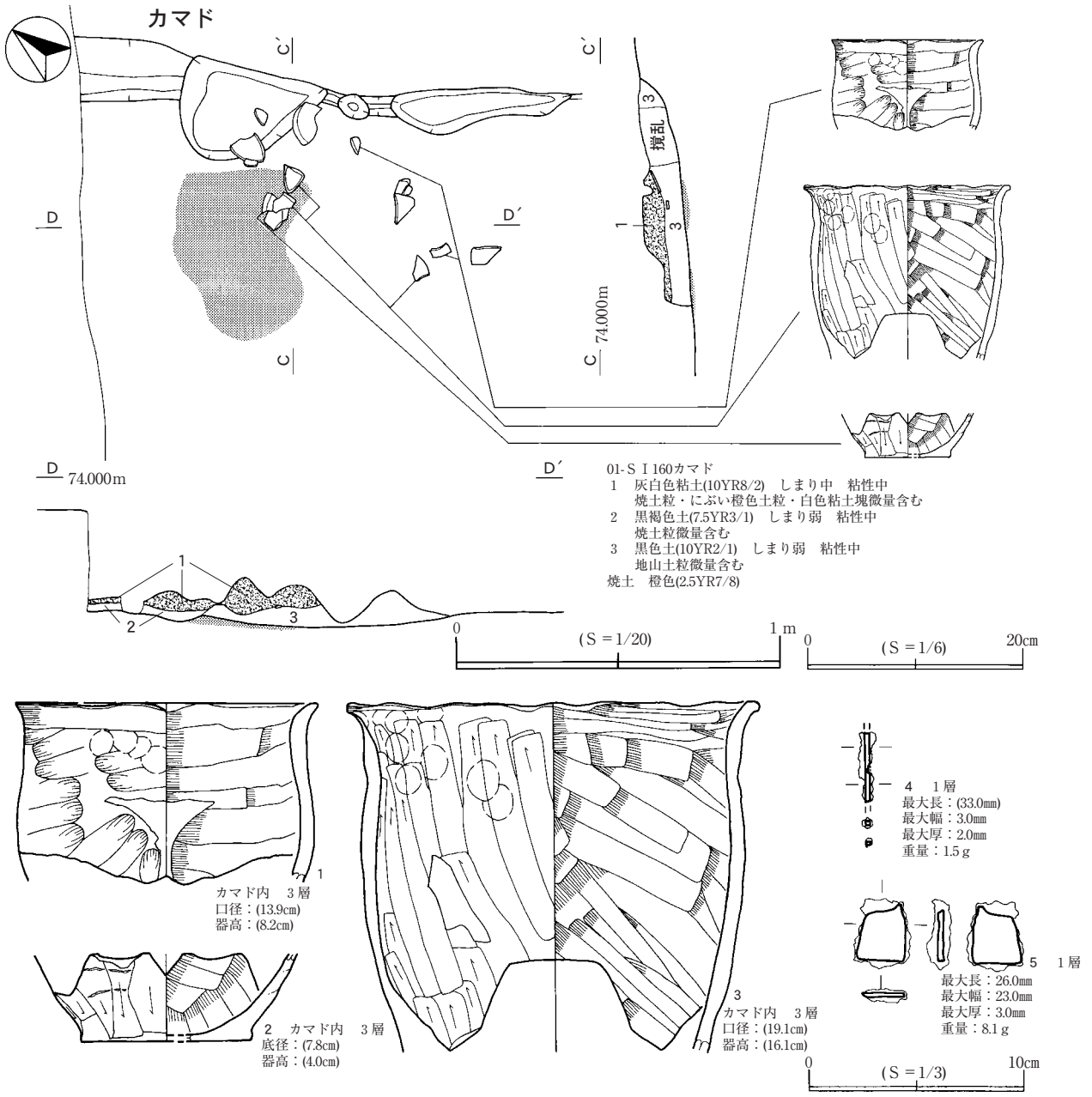
きず、元々土質が近いことにより、廃絶時に壁板を抜取った穴に流入した造成土と裏込め土の境界が不明瞭になっていると考えられる。

住居北隅が、電柱基礎部に当たり調査できなかったが、予測される平面形は北西－南東方向に長い長方形で、カマドの付く壁に直交する主軸方位はＮ－44°－Ｅである。主軸とそれに直交するラインで測る住居面積は約15㎡で、中形の住居である。各壁の長さは南東壁約3.6m、南西壁約3.8mである。壁の検出面からの深さは、南東壁の残りの良いところで0.35m前後で、ほぼ垂直に立ち上がる。

床面は掘形底面の地山上面を利用している。壁溝は、北西壁の一部を除いて全周で確認した。上場幅0.1～0.2m、下場幅0.02～0.12m、床面からの深さ0.05～0.1mの断面台形状である。なお、南西壁西隅部分では一部浅くなり、その北西側には壁に平行する浅い溝状の掘り込みがある。

床面や壁溝内部で４個のピットを確認した。Ｐ１は住居隅に位置する主柱穴と考えられる。Ｐ３・４は、住居西隅付近の浅い溝状掘り込みを挟むように配置してある。壁溝が２時期ある可能性も考えられるが、配置からみて出入り口施設の痕跡である可能性が高い。

カマドは北東壁の中央から南東寄りの位置で、灰白色粘土の広がりで確認した。カマド上部構造はほぼ倒壊しており、その崩落土を３層に分層した。１層の灰白色粘土はカマド上部構造の構築粘土の倒壊土で、２・３層はその隙間への堆積土と考えられる。火床面は不規則な形状の被熱範囲で、最長



第99図　01-ＳＩ160カマド・遺物出土状況・出土遺物

0.54m、最大幅0.41mであり、主軸方位は住居主軸方位に平行する。

本住居跡は住居隅に主柱をもち、北東壁にカマドを設置する住居で、南西壁西隅付近に出入り口が付くと想定される。廃絶後は人為的に埋め立て造成したとみられ、01-ＳＤ220の北西端開口部から、北東方向へ延びる01-ＳＤ426を側溝とする集落内通路の範囲に当たることから、通路構築までに埋め立てたと考えられる。

遺　物(第99図)　住居跡内から土師器甕、鉄製品が出土した。土師器甕は口縁部が３点、底部が１点出土しており、そのほとんどを図示した。いずれもカマド周辺部から出土していることから、カマド芯材もしくは支脚に用いた土器の残存状況を示すと考えられる(第99図)。

99図１・３は小・中型の土師器甕である。１は胴部中位と口縁部の径がほぼ同じで、胴部が丸みを帯び、頸部で緩く屈曲し、口縁部が外反する器形である。口縁部付近がやや肥厚する傾向にある。外

面はユビナデ、内面は横・斜位ヘラナデ調整である。３は口縁部に最大径を有し、胴下半部から直立気味に立ち上がって、頸部でわずかに外折して、口縁部が外反する器形である。口縁部は場所によって平滑になるが、これは製作時に口縁部を接地したためである。頸部の外折もこの際の痕跡かもしれない。外面縦位ケズリ、内面斜位ヘラナデ調整である。99図２は土師器甕の底部で、底部はケズリにより再調整している。

99図４・５は鉄製品である。４は両端を欠損する棒状のものである。５は板状のものだが用途は不明である。

02-ＳＩ01・02・03・10

本住居跡は、ＭＨ～ＭＪ39～41グリッドの、第Ⅵ層上面から中位で、地山土粒を含む土の分布範囲や、壁溝と柱穴の配置で確認した。本住居跡の立地点は台地上部平坦面で、ほとんど傾斜がない。周辺部は後世の撹乱が深く、Ⅵ層地山面にバックホーの爪跡が残るような状態であったため、４軒とも住居壁及び内部堆積土は残存しておらず、床も部分的に失われている。拡張を含めて４軒の住居が重なる以外に重複はなく、周辺には01-ＳＩ87・190、01-ＳＢ328、01-ＳＤ195、02-ＳＩ04、02-ＳＢ01、03-ＳＩ208がある。

床面精査の結果、２回の建て替え拡張と主軸方位の違う住居１軒が重なることが判明した。新旧関係は、壁溝の切り合いからみて01→02→03→10の順に古くなる。

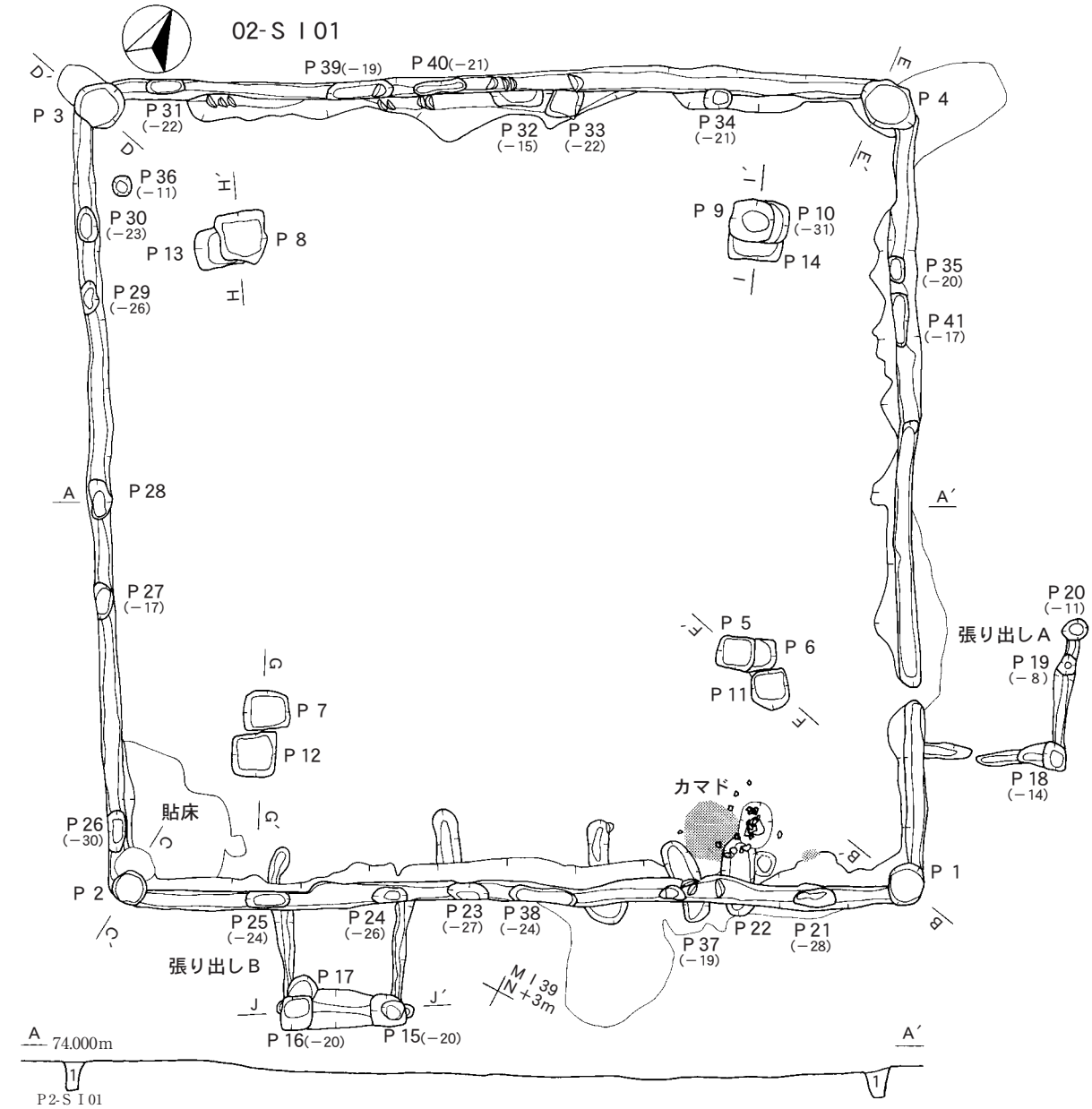
02-ＳＩ01(第100図・101図、図版33)

遺　構　２回目の建て替えにより、最大規模に達した住居である。平面形はほぼ正方形で、カマドの付く壁に直交する主軸方位はＮ－29°－Ｗである。主軸とそれに直交するラインで測る住居面積は約53㎡で、特大形の住居である。

壁溝で測る各壁の長さは、北東壁約7.2m、南東壁約7.2m、南西壁約7.2m、北西壁約7.4mで、深さ及び立ち上がりは不明である。北東壁と南東壁には張り出しがつく。北東壁側の張り出しＡは、３個のピットと溝で構成され、Ｐ20を北隅とした場合の溝で囲む範囲は、住居壁直交方向で約1.4m、住居壁平行方向で約1.2mである。南東壁側の張り出しＢは、３個のピットと溝で構成され、溝で囲む範囲は、住居壁直交方向で約1.1m、住居壁平行方向で約1.1mである。いずれも出入り口施設の痕跡とみられ、壁溝の途切れる状況から、張り出しＡが古く、張り出しＢが新しいと考えられる。

床面は所々で貼床を確認したが、撹乱のため全容は不明である。壁溝は基本的に全周で確認した。上場幅0.12～0.24m、下場幅0.07～0.14mの断面台形状である。壁溝も撹乱により欠失している部分が多いが、残りの良い箇所では工具痕跡が残っている。

床面と思われる範囲や壁溝内で、41個のピットを確認した。Ｐ６～14は、住居隅よりやや内側に配置する主柱穴である。Ｐ９・10・14とＰ５・６・11は、ほぼ同じ地点で３個の柱穴が重なっており、これに相対するＰ８・13とＰ７・12は２個ずつの配置になる。配置と切り合いからみて、Ｐ14・11・12・13の段階からＰ９・５・７・８の組み合わせへと、柱を建て替えたとみられる。Ｐ１～４は住居四隅にあり、上屋の補助的な構造材を据えた柱穴と考えられる。Ｐ21～41は壁溝内に一定の間隔をあけて配置する壁柱穴である。



P 1
1　黒色土(10YR2/1)　しまり中　粘性中
焼土粒・浮石・地山土粒微量含む
2　黒色土(10YR1.7/1)　しまり弱　粘性強

P 2
1　黒色土(10YR2/1)　しまり弱　粘性強
2　黒色土(10YR1.7/1)　しまり弱　粘性強

P 3
1　黒色土(10YR1.7/1)　しまり弱　粘性強
地山土塊微量含む
2　黒色土(10YR1.7/1)　しまり弱　粘性強
地山土塊多量含む

P 4
1　黒色土(10YR2/1)　しまり弱　粘性強
2　黒色土(10YR1.7/1)　しまり弱　粘性強

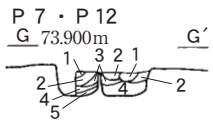
P 5
1　明黄褐色土(10YR6/6)　しまり弱　粘性弱
地山土粒多量含む
2　黒色土(10YR1.7/1)　しまり弱　粘性中
地山土塊多量含む
3　灰黄褐色土(10YR4/2)　しまり弱　粘性中
黒褐色土粒多量含む
4　黒色土(10YR1.7/1)　しまり弱　粘性強
地山土塊少量含む
5　明黄褐色土(10YR7/6)　しまり弱　粘性中
黒褐色土粒多量含む
6　黒褐色土(10YR3/1)　しまり弱　粘性中
地山土粒多量含む
7　黒色土(10YR1.7/1)　しまり弱　粘性強
地山土粒微量含む

P 6
1　黒褐色土(10YR3/1)　しまり弱　粘性中

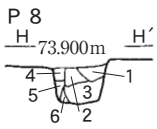
P11
1　にぶい褐色土(7.5YR5/4)　しまり強　粘性中
焼土粒微量・黒褐色土塊多量含む
2　黒褐色土(10YR3/2)　しまり弱　粘性弱
3　黒色土(10YR1.7/1)　しまり弱　粘性強
地山土粒微量含む
4　明黄褐色土(10YR6/6)　しまり強　粘性弱
黒褐色土粒少量含む
5　黒褐色土(10YR3/1)　しまり弱　粘性中
地山土粒多量含む
6　明黄褐色土(10YR6/6)　しまり弱　粘性弱
黒褐色土粒多量含む
7　黒褐色土(10YR3/1)　しまり弱　粘性中
地山土粒多量含む

0　(S＝1/60)　2 m

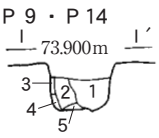
第100図　02-S I 01



P 7
1　黒色土(10YR1.7/1)　しまり弱　粘性中
　焼土粒少量含む
2　にぶい黄褐色土(10YR5/4)　しまり弱　粘性弱
　地山土塊多量含む
3　黒褐色土(10YR3/1)　しまり弱　粘性強
　灰白色土塊微量含む
4　褐色土(10YR4/4)　しまり中　粘性中
　黒色土粒多量含む
5　明黄褐色土(10YR6/8)　しまり強　粘性強

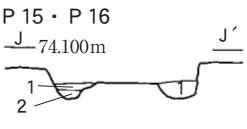


P 8
1　黒褐色土(10YR3/1)　しまり弱　粘性弱
　地山土塊多量含む
2　黒色土(10YR2/1)　しまり弱　粘性弱
3　黒褐色土(10YR2/2)　しまり弱　粘性中
4　黒褐色土(10YR3/2)　しまり中　粘性中
　地山土塊多量含む
5　黒褐色土(10YR3/2)　しまり弱　粘性中
　地山土塊多量含む
6　黒色土(10YR2/1)　しまり弱　粘性中



P 9
1　黒色土(10YR2/1)　しまり弱　粘性強
　地山土塊多量含む

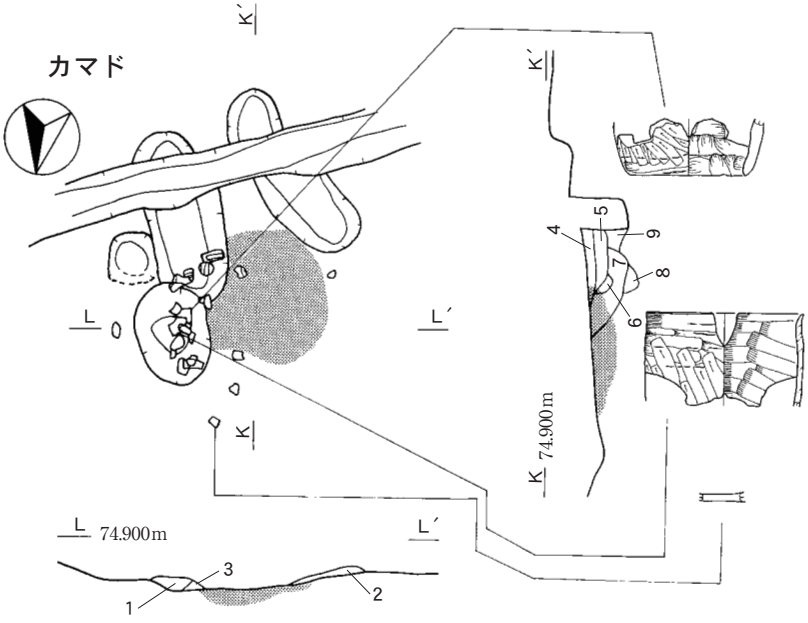
P 12
1　黒褐色土(10YR3/1)　しまり弱　粘性強
　浅黄色土塊・地山土粒微量含む
2　にぶい黄褐色土(10YR4/3)　しまり弱　粘性弱
　橙色土塊微量含む
3　黒色土(10YR2/1)　しまり弱　粘性中
　地山土塊多量含む
4　黒褐色土(10YR2/2)　しまり弱　粘性中
　地山土粒多量含む



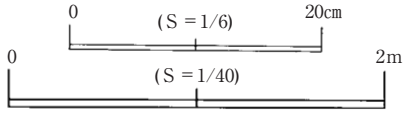
P 14
1　黒褐色土(10YR2/2)　しまり弱　粘性強
　地山土塊多量含む
2　黒褐色土(10YR2/2)　しまり弱　粘性強
　地山土塊微量含む
3　黄橙色土(10YR7/8)　しまり弱　粘性強
　黒色土粒微量含む
4　黒色土(10YR2/1)　しまり弱　粘性強
　地山土粒少量含む

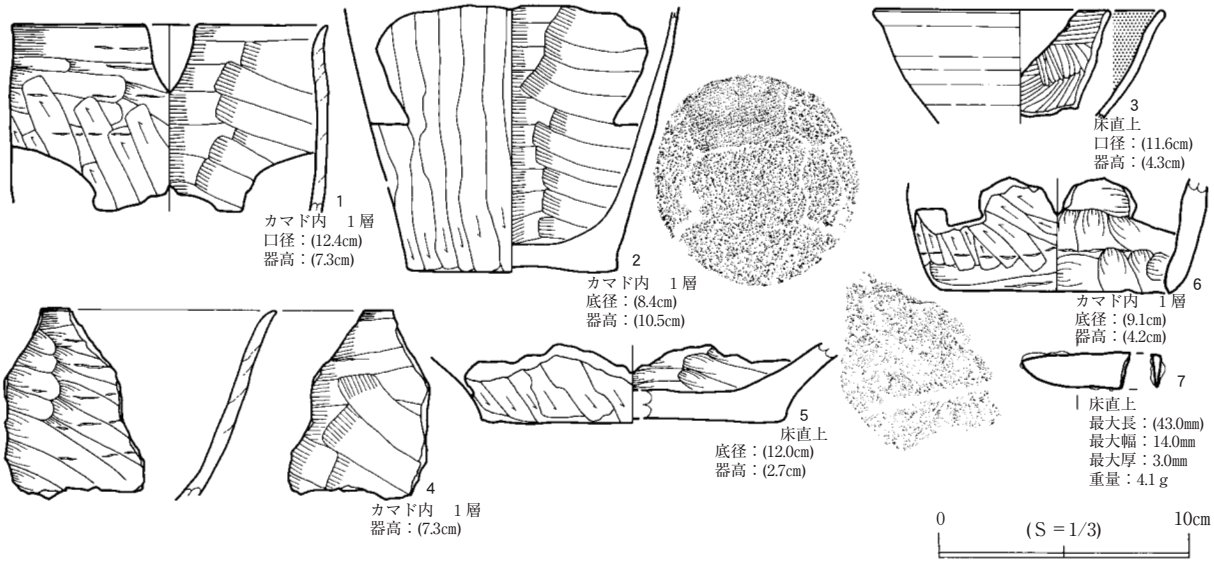
P 15
1　黒褐色土(10YR2/2)　しまり弱　粘性弱
　浮石・地山土粒少量含む
2　黒褐色土(10YR2/2)　しまり弱　粘性強
　地山土塊少量含む

P 16
1　黒褐色土(10YR2/2)　しまり弱　粘性中
　地山土粒少量含む



02-ＳＩ01カマド
1　褐色土(7.5YR4/4)　しまり中　粘性やや強
　焼土粒・炭化物粒微量含む
2　にぶい橙色土(7.5YR7/4)　しまり強　粘性弱
　焼土粒・炭化物粒微量含む
3　明赤褐色土(５YR5/8)　しまり弱　粘性弱
　炭化物粒微量含む
4　黒色土(10YR2/1)　しまり強　粘性弱
　地山土塊多量含む
5　暗褐色土(10YR3/4)　しまり弱　粘性強
　粘土塊・地山土粒少量含む
6　明褐色土(7.5YR5/6)　しまり弱　粘性弱
　焼土塊多量含む
7　黒色土(2.5Y2/1)　しまり弱　粘性中
　焼土塊微量含む
8　黒色土(2.5Y2/1)　しまり強　粘性中
　地山土粒多量含む
9　黒色土(2.5Y2/1)　しまり弱　粘性中
　焼土粒少量含む
焼土　褐色(7.5YR4/4)





第101図　02-ＳＩ01・カマド・遺物出土状況・出土遺物

カマドは、南東壁の中央から北東寄りの位置で確認した。検出面が低く、上部構造は確認できなかった。堆積土は９層に分けられ、02-ＳＩ02段階の壁溝埋め立て土などの、構築土基部の残存である。下部構造で残っているのは火床面である。径約0.55ｍの不整な円形の被熱範囲で、地山に約0.1ｍの深さまで被熱が及んでいる。

本住居跡は壁から離れた位置に４本の主柱をもち、南東壁にカマドを設置する住居である。２回建て替えを行う02-ＳＩ01・02・03の中では最新段階で、規模も最大となる。

遺　物(第101図)　住居跡内から土師器甕・坏・鍋・甑、鉄製品が出土した。土師器甕は口縁部が９点、底部が６点出土しているが、ほとんどが小破片であることや、削平が床面にまで及ぶ状況からみて、本住居出土土器は、カマド構築土に含まれていたものがわずかに残存したものであり、本来の遺物相のごく一部を表すと考えられる。

101図１は比較的小型の土師器甕である。胴部から直立気味に立ち上がり、頸部でわずかにくびれて、口縁部が直立気味に外反する。全体的に器形の変化に乏しいが、口唇は先細りになる。外面は斜位に浅めのケズリを施すが、部分的に輪積痕を残す。内面は横位ヘラナデ調整である。101図２は土師器甕の底部で砂底である。底部から直線的に外傾して、胴部中位にかけて直立気味に立ち上がる。外面縦位ケズリ、内面横位ヘラナデ調整である。

101図３は土師器坏Ｂ類の口縁部破片で、胴下部から内湾気味に立ち上がり、口縁部が外反する器形である。ロクロ目は比較的凹凸が少なく、口唇は丸みを帯びている。内面のミガキは胴上部までが縦位に、口縁部付近のみ横位に施している。101図４・５は土師器鍋の破片である。４は口縁部資料で、口縁部まで緩やかに外反して、口唇が先細りになる。外面は斜位にユビナデを施すが、輪積痕が明瞭に残る。内面はヘラナデにより比較的丁寧に調整している。５は底部資料で、底面に木葉痕をとどめる。101図６は、土師器甑の底部付近の破片である。外面は浅いケズリ、内面は縦横のユビナデ調整を施すが、内外面共に輪積痕をとどめる粗雑な作りである。101図７は鉄製品で、刀子の切先部分である。

02-ＳＩ02(第102図・103図、図版34)

遺　構　１回目の建て替えにより、02-ＳＩ03よりも規模を拡大した住居である。Ｐ１・２・４・５を住居隅とした場合の平面形はほぼ正方形で、カマドの付く壁に直交する主軸方位はＮ－30°－Ｗである。主軸とそれに直交するラインで測る住居面積は約32㎡で、大形の住居である。各壁の長さは北東壁約5.9m、南東壁約5.8m、南西壁約5.6m、北西壁約5.8mである。深さ及び立ち上がりは不明である。

床面はほとんどが削平を受けており、その認定すら難しい。壁溝は、北東壁・南西壁・北西壁沿いで確認した。南東壁沿いは02-ＳＩ01と重複するか、またはやや内側にラインがあったが削平により消滅したかの２通りの可能性がある。上場幅0.14～0.3m、下場幅0.06～0.16m、床面からの深さ0.1ｍ未満の断面台形状である。

床面と思われる範囲や壁溝内部で12個のピットを確認した。Ｐ１・２・４・５は四隅の主柱穴である。Ｐ９・10は住居隅よりやや内側に位置する主柱穴とも考えられるが、対応する南東壁沿いの柱穴が不明確である。Ｐ３・６・７・８・11・12は壁溝内部に規則的に配置しており、壁板保持の補助柱穴と考えられる。カマドの北東脇には浅い掘り込みが並列する。02-ＳＩ03に伴うものと判断したが、

本住居跡に伴う出入口の痕跡を含む可能性もある。

カマドは南東壁中央から南西寄りの位置で、粘土分布範囲で確認した。基本的に02-ＳＩ01構築段階で埋め立てており上部構造は残存しない。堆積土は８層に分けられ、ほとんどはカマド基部掘り込み内部に充填した構築土の詰め込みで、一部に南東壁から「ハ」字状に延びる袖の基部が残る。下部構造で確認できたのが、前庭部と火床面である。南東壁から火床面末端までの長さは約0.75m、直交する最大幅は約1.4mである。火床面は前庭部掘り込みの南東壁寄りの位置にあり、長さ約0.5mの不規則な形状の被熱範囲である。

本住居跡は南東壁にカマドを設置する住居で、壁から離れた位置に主柱をもつと考えられる。２回建て替えを行う02-ＳＩ01・02・03の中では中段階で、規模は02-ＳＩ03とほぼ同じである。02-ＳＩ01構築に合わせて廃絶したと考えられる。

遺　物(第103図)　カマド周辺からわずかに遺物が出土した。103図１は大型の土師器甕の口縁部破片で、胴部が張り出して頸部でくびれ、口縁部が直立気味に外反する。口唇は断面三角形状に先細りになる。外面は縦・斜位のケズリ、内面は横位ヘラナデ調整である。103図２は比較的小型の土師器甕で、胴上部が直立気味に立ち上がり、頸部が緩く屈曲して口縁部が外反する器形で、口縁部に最大径を有する。小型にしてはやや器壁が厚い印象を受ける。外面は縦位ケズリ、内面は縦位ヘラナデの後、口縁部付近に横位ヘラナデ調整を施している。103図３は土師器坏Ａ類の底部破片で、回転糸切痕をとどめる。

02-ＳＩ03(第102・103図、図版34・162)

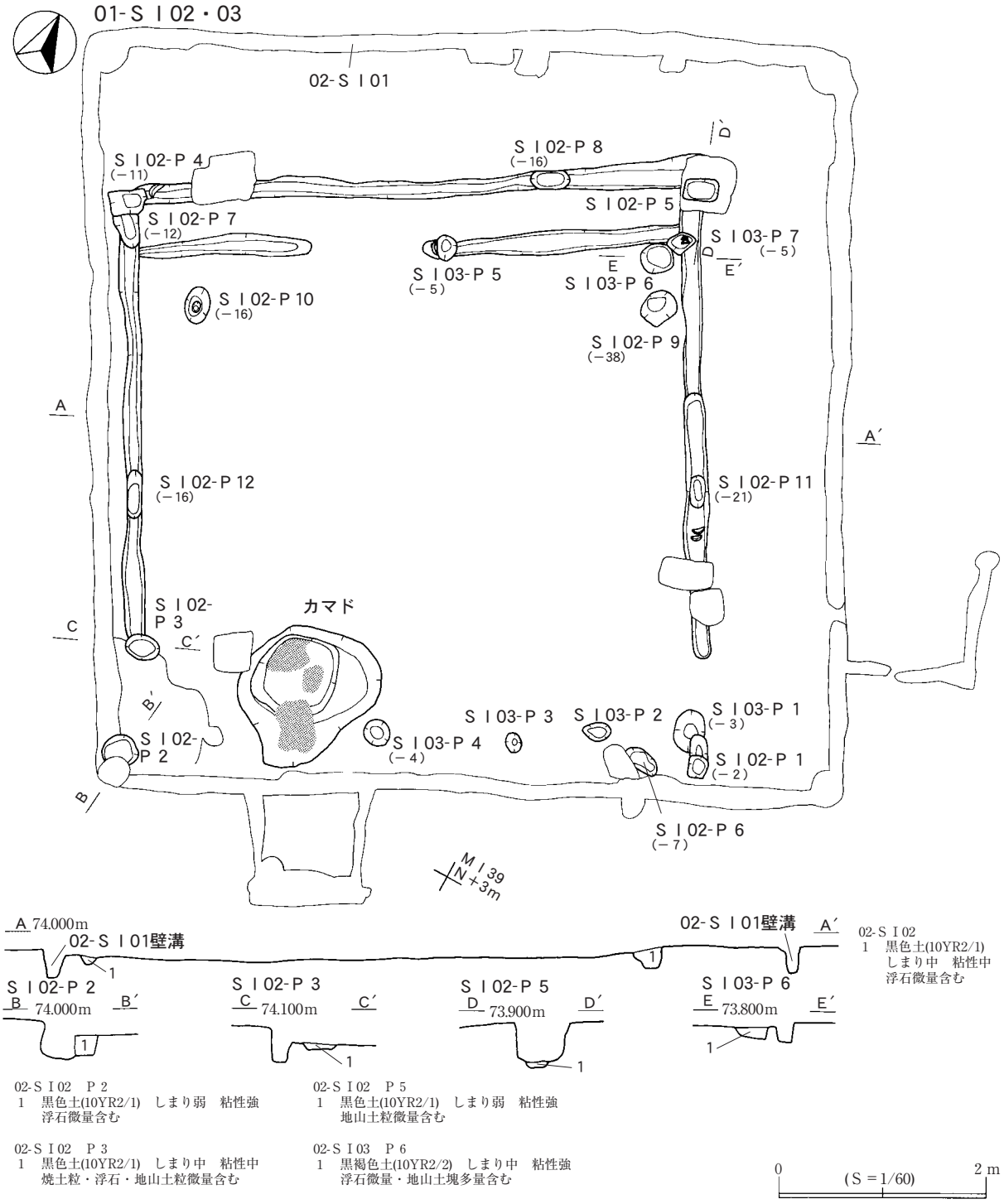
遺　構　02-ＳＩ01・02・03の中では最古段階の住居である。度重なる拡張により、本住居の痕跡を示す施設は少なく、北西壁沿いに位置したとみられる壁溝がほぼ唯一の遺構である。北東・南東・南西壁を02-ＳＩ02と共有するとみた場合、平面形は北東－南西方向に長い長方形で、主軸方位も02-ＳＩ02と同様のＮ－30°－Ｗになる。主軸とそれに直交するラインで測る住居面積は約27㎡で、大形の住居である。各壁の長さは北東壁約5.0m、南東壁約5.5m、南西壁約5.0m、北西壁約5.5mである。各壁の深さ及び立ち上がりは不明である。

床面は認定すら難しい状況で、北西壁沿いと予測される位置の壁溝は、上場幅0.14～0.22m、下場幅0.03～0.15m、床面からの深さ0.05m前後の断面台形状である。床面と思われる範囲や壁溝内部で、７個のピットを確認した。Ｐ１～４は予測される南東壁沿いに並ぶが、いずれも極めて浅く、柱穴というよりは壁溝の残存部とみられる。Ｐ７は住居北隅にあり、主柱穴の可能性もあるが他の部分で確認できないため断言できない。

カマドは、02-ＳＩ02カマド下部の被熱面が本住居跡段階に伴うものと判断した。カマド基底部の掘り込み形状は、02-ＳＩ02カマドとほぼ同じとみられ、火床面がより低い位置にある。被熱範囲は３か所に分かれるが、残りが悪く02-ＳＩ02カマド構築時に一部破壊しているとみられる。

本住居跡は02-ＳＩ01・02が大部分を壊しており、構造のほとんどが不明だが、南東壁にカマドを設置する住居である。02-ＳＩ01・02・03の中では最古段階に当たり、02-ＳＩ02構築時に廃絶したと考えられる。

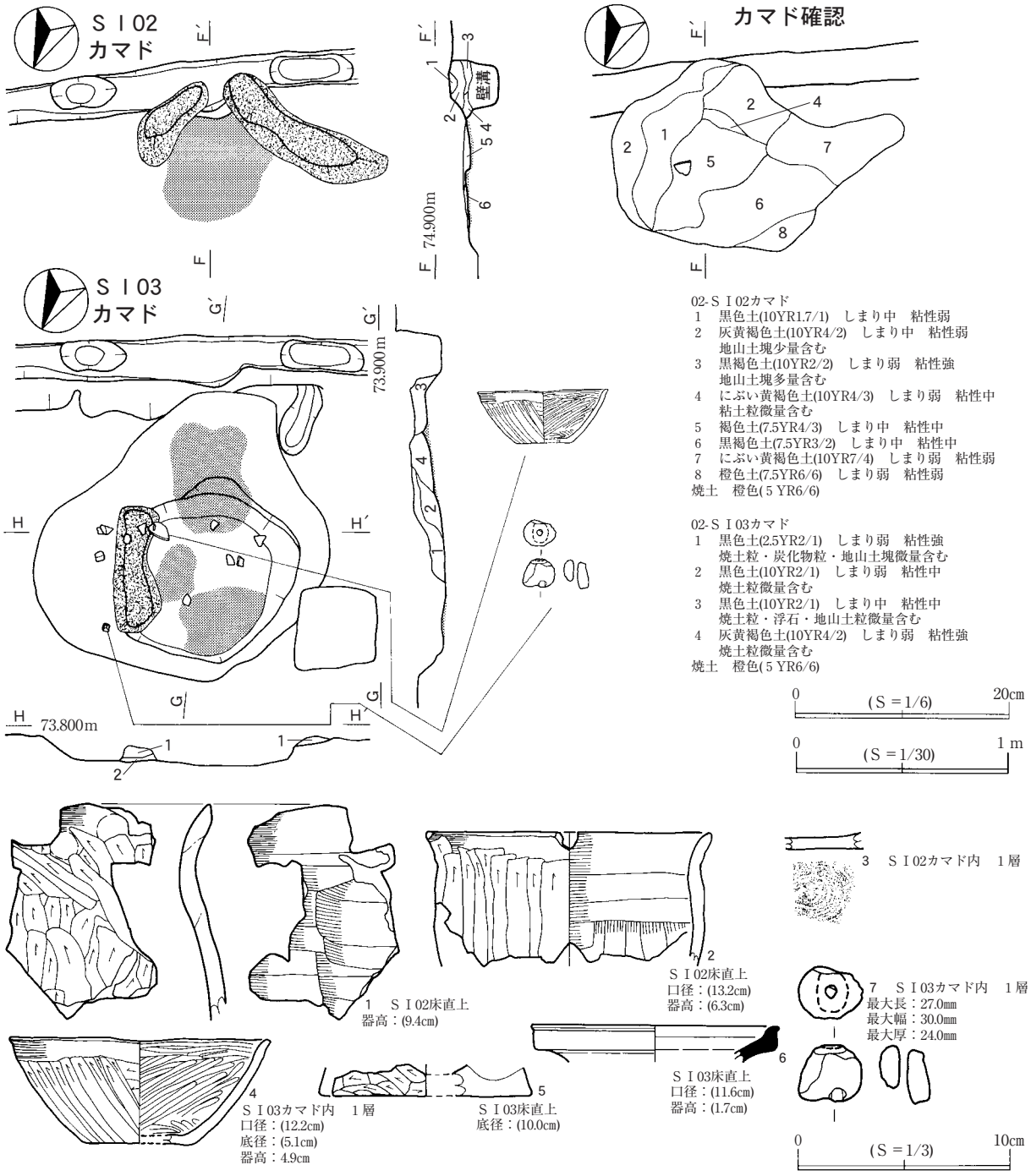
遺　物(第103図)　カマド上部や貼床の残存部とみられる土から、土師器片と須恵器片が出土した。基



第102図　02-ＳＩ02・03

本的には01-ＳＩ02カマド構築段階で埋め立てたものとみられる。

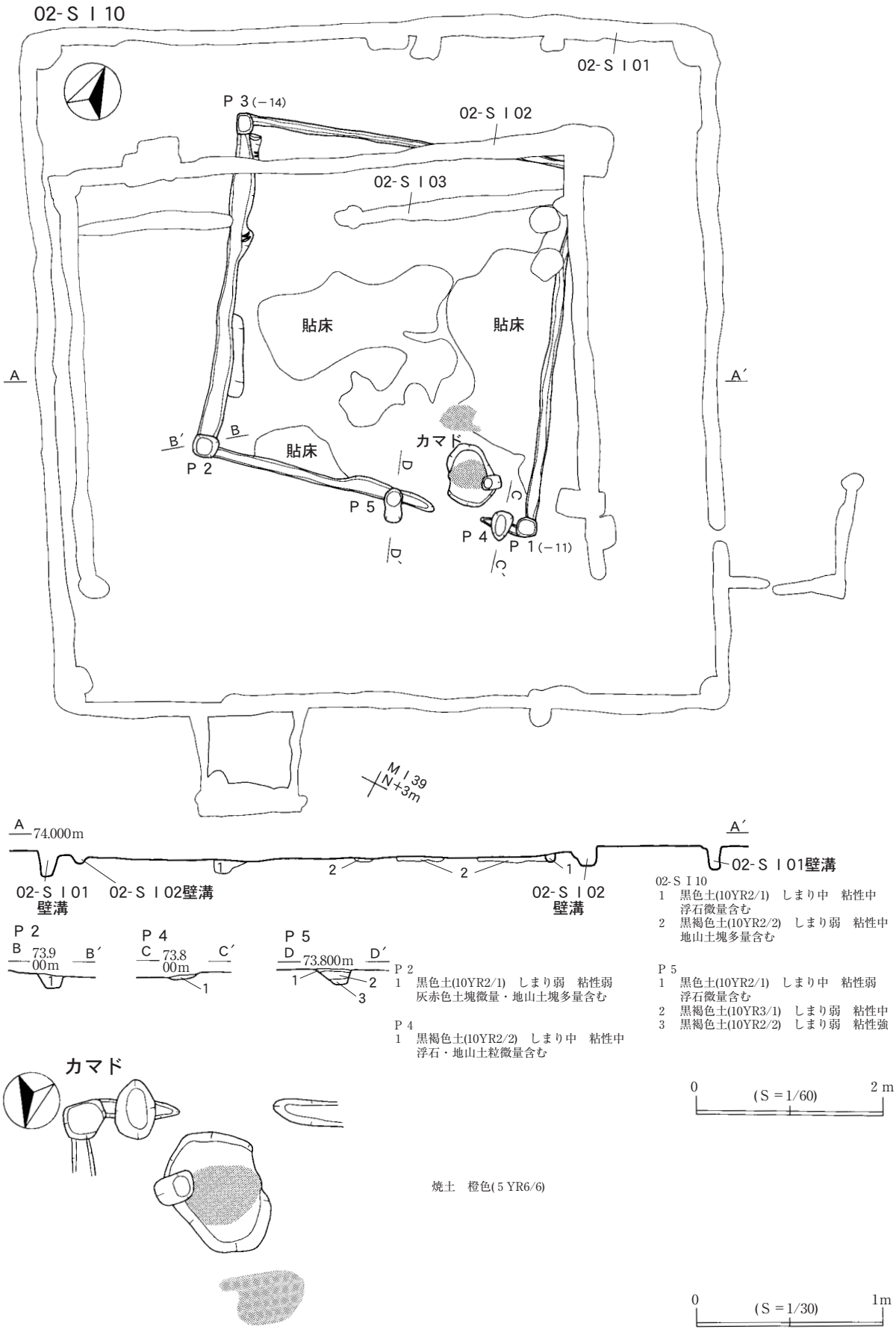
103図５は土師器甕の底部で、底面にケズリ再調整を施す。103図４は土師器坏Ｄ類で、ほぼ全体形を窺える資料である。底部から直線的に外傾し、口縁部で段状にくびれて口端が外反する器形で、これは坏Ｂ類を模したものとみられる。それは内面にミガキを施していることからも窺える。外面は縦位ケズリで粗く調整しており、上部からみた全体形状が円形にならない作りである。103図６は須恵器壺で、口縁部の受け口状に屈曲する部分だけが残っている。103図７は土錘の破片で、貫通孔が認められる。



第103図　02-ＳＩ02・03カマド・遺物出土状況・出土遺物

02-ＳＩ10(第104図)

遺　構　02-ＳＩ03よりも古段階の住居だが、02-ＳＩ01・02・03の３軒とは軸方位が異なり、連続した前後関係にあるかは不明である。02-ＳＩ01Ｐ９・10・14が住居北隅を破壊しているが、壁溝の残存範囲で捉えられる平面形は、北西－南東方向に長い平行四辺形に近い長方形で、カマドの付く壁に直交する主軸方位はＮ－20°－Ｗである。主軸とそれに直交するラインで測る住居面積は約14㎡で、小形の住居である。各壁の長さは北東壁約4.0m、南東壁約3.8m、南西壁約3.7m、北西壁約3.7mで、各壁の深さ及び立ち上がりは不明である。床面は削平を受けているが、大部分で貼床を確認した。貼床は住居南東半分のカマドを囲む範囲に認められる。厚さは0.05～0.1mで地山土塊を含む黒色土を用い



第104図　02-ＳＩ10・カマド

る。壁溝はカマドを除く全周で確認した。上場幅0.08～0.2m、下場幅0.02～0.16m、床面からの深さ0.1m前後の断面台形状である。

床面や壁溝内部で５個のピットを確認した。Ｐ１～３は四隅の主柱穴で、北隅部分は02-ＳＩ01の主柱に切られて残存していない。Ｐ４・５はカマドの付く壁に２個並び、壁溝が途切れる箇所の壁板保持に関わる補助柱穴と考えられる。カマドは、南東壁の東隅付近の位置で、焼土と浅い掘り込みの配置で確認した。確認段階で、火床面が露出する残存状態で、浅い掘り込みの範囲で捉えると、南東壁直交方向で長さ約0.8m、最大幅約0.56mの規模である。火床面は浅い掘り込みのほぼ中央部に位置し、長径約0.41m、短径約0.31mの不整な楕円形状の被熱範囲で、その主軸方位は住居主軸方位に直交する。

本住居跡は四隅に主柱をもち、南東壁にカマドを設置する住居である。02-ＳＩ01・02・03の前段階に存在しており、この地点の最古段階の住居跡であることは確かである。ただ、02-ＳＩ03と連続的な前後関係にあったかは不明である。

遺　物　本住居跡に伴う遺物は検出できなかった。

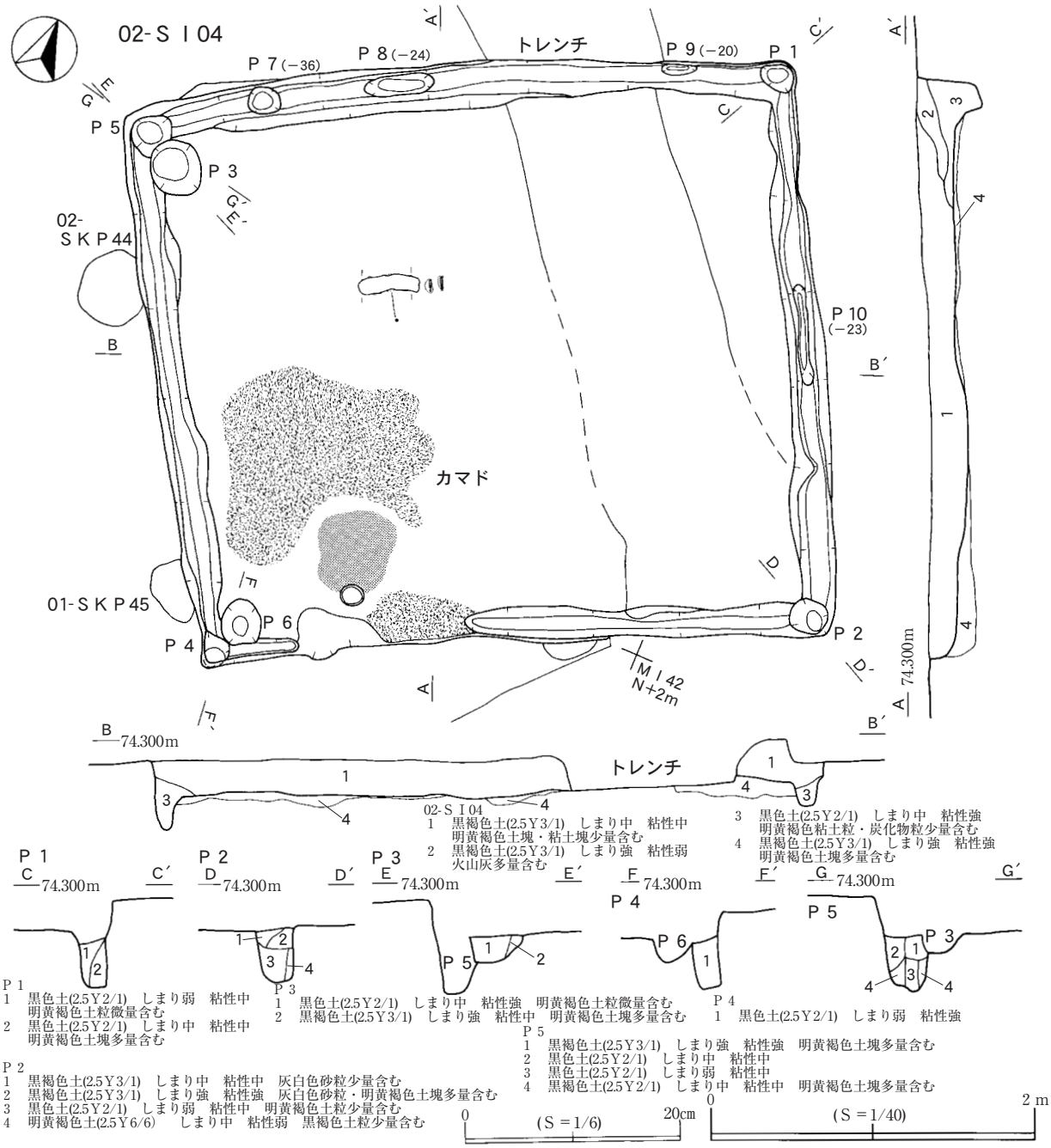
02-ＳＩ04(第105図～107図、図版35・162)

遺　構　ＭＨ～ＭＪ42・43グリッドの第Ⅳ層中位で、地山土塊を含む黒色土の広がりで確認した。本住居跡の立地点は台地上部平坦面で、ほとんど傾斜がない。大きな遺構との重複はないが、ＳＫＰとの重複関係や、本住居跡の堆積土が人為堆積であることから、本住居立地点は何らかの建物を構築するために、平地に埋め立て造成したと考えられる。周辺には02-ＳＩ01・18・20、03-ＳＩ13、02-ＳＢ01がある。

堆積土は４層に分けた。竪穴掘り込みのほとんどを埋め尽くす１層は、地山土塊や粘土塊を含む土で、本住居跡廃絶後に埋め立て造成した土である。２層は火山灰をやや多めに含むが、北東壁際に顕著であることから、想定される周堤下部と旧表土の間にパックされていた火山灰を、壁際には多めに埋め立てたものと考える。３層は壁溝内堆積土で、壁溝上部にややオーバーフローしていることから、住居廃絶時に壁板を抜き、それに伴い裏込めの土が溢れたとみられる。４層は貼床の土で、極めて締まりが強い。

平面形は北東－南西方向に長い長方形で、北西壁の中央部がやや北へ膨らむ曲線になる点が特徴である。これに相対する南東壁の中央部も、やや北側へ張り出している。カマドの付く壁に直交する主軸方位は、Ｎ－30°－Ｗである。主軸とそれに直交するラインで測る住居面積は約15㎡で、中形の住居である。各壁の長さは北東壁約3.5m、南東壁約3.9m、南西壁約3.5m、北西壁約4.1mである。各壁の検出面からの深さは、北東壁がやや残りが悪く約0.14m、南東壁約0.16m、南西壁約0.22m、北西壁約0.24mで、立ち上がりはほぼ垂直である。

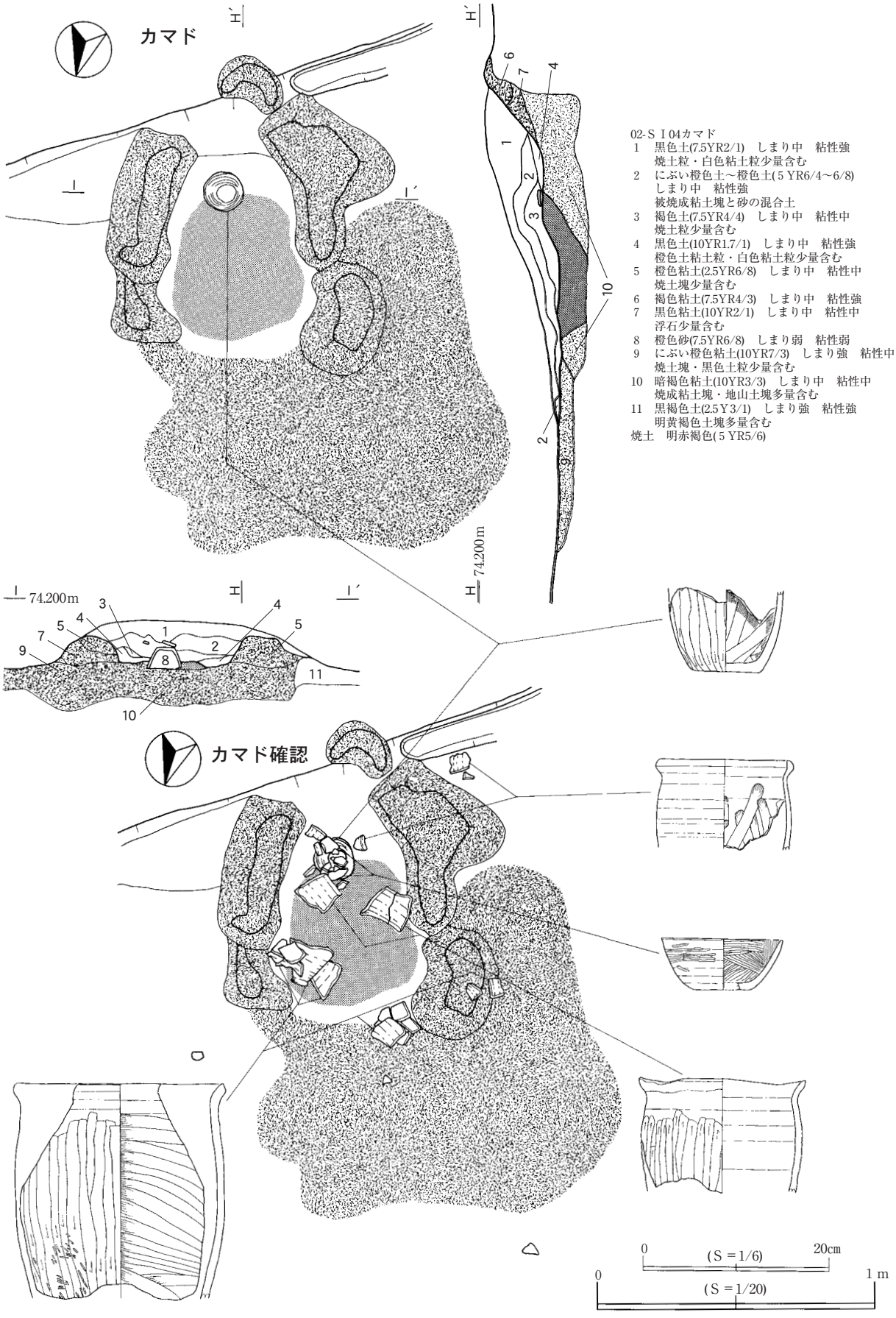
床面はほぼ全面に貼床を施しているが、特にⅥ層地山面の傾斜下位に当たる住居南東側に厚く施している。全体的に平坦で凹凸も少ないが、わずかに南東側が窪んでいる。壁溝はカマド以外の全周で確認した。上場幅0.08～0.22m、下場幅0.04～0.12m、床面からの深さ0.1～0.2mの断面台形状である。所々に短いスロープが付属するが、おそらく壁溝掘削段階の崩落箇所と考えられる。壁板の裏込めで一括して埋め立てている。床面及び壁溝内で10個のピットを確認した。Ｐ１・２・４・５は住居四隅



第105図　02-ＳＩ04

の主柱穴である。柱穴間の距離は各壁長に準じており、柱穴中心で測る柱穴間距離はＰ１－２、Ｐ４－５間で約3.3m、Ｐ１－５間で約3.9m、Ｐ２－４間で約3.7mである。Ｐ７・８・９・10は壁溝内にあり、細長い形状が目立つことから、壁板の当たりと考えられる。Ｐ３・６は住居西隅と南隅にあるが、それぞれ隅の主柱を切っており、本住居跡を掘り込む遺構の可能性もある。

カマドは南東壁の中央から南西寄りの位置で、焼土粒を含む黒褐色土の広がりで確認した。確認できた施設は、煙道の基部、袖、支脚、火床面、前庭部の粘土範囲である。11層に分けた堆積土のうち、１～４層は天井部の崩壊土と住居埋め立て時の造成土の互層である。５・７層がカマド袖である。６層が煙道底面に貼った粘土で住居上場にのる。８層は支脚内部に充填した砂である。９層がカマド前庭部範囲に貼った粘土で、10・11層は、住居貼床に関わる一次整地層であり、10層に及ぶ被熱範囲が



第106図　02-ＳＩ04カマド・遺物出土状況

火床面である。南東壁と前庭部までの規模は約1.6ｍで、これに直交する最大幅は約1.3ｍである。前庭部は、焚き口に当たる袖開放部から南西側に延びる粘土範囲に相当すると考えられ、住居南隅側を調理スペースに利用したと想像される。支脚には、底径約７cmの小型甕の胴下半部を逆位に伏せてある。土器の中心部から住居南東壁上場までは約0.3ｍほどである。火床面は不規則な楕円形状の被熱範囲で、長径約0.54ｍ、短径約0.47ｍで、最大で深さ0.1ｍまで被熱が及ぶ。主軸方位は住居主軸方位に平行する。

本住居跡は四隅に主柱をもち、南東壁にカマドを設置する住居である。廃絶後は人為的に埋め戻しているが、これは周辺部の柱穴分布から判断して、この地点が集落内において住居以外の施設を設置する場所として利用変更されたと考えられる。

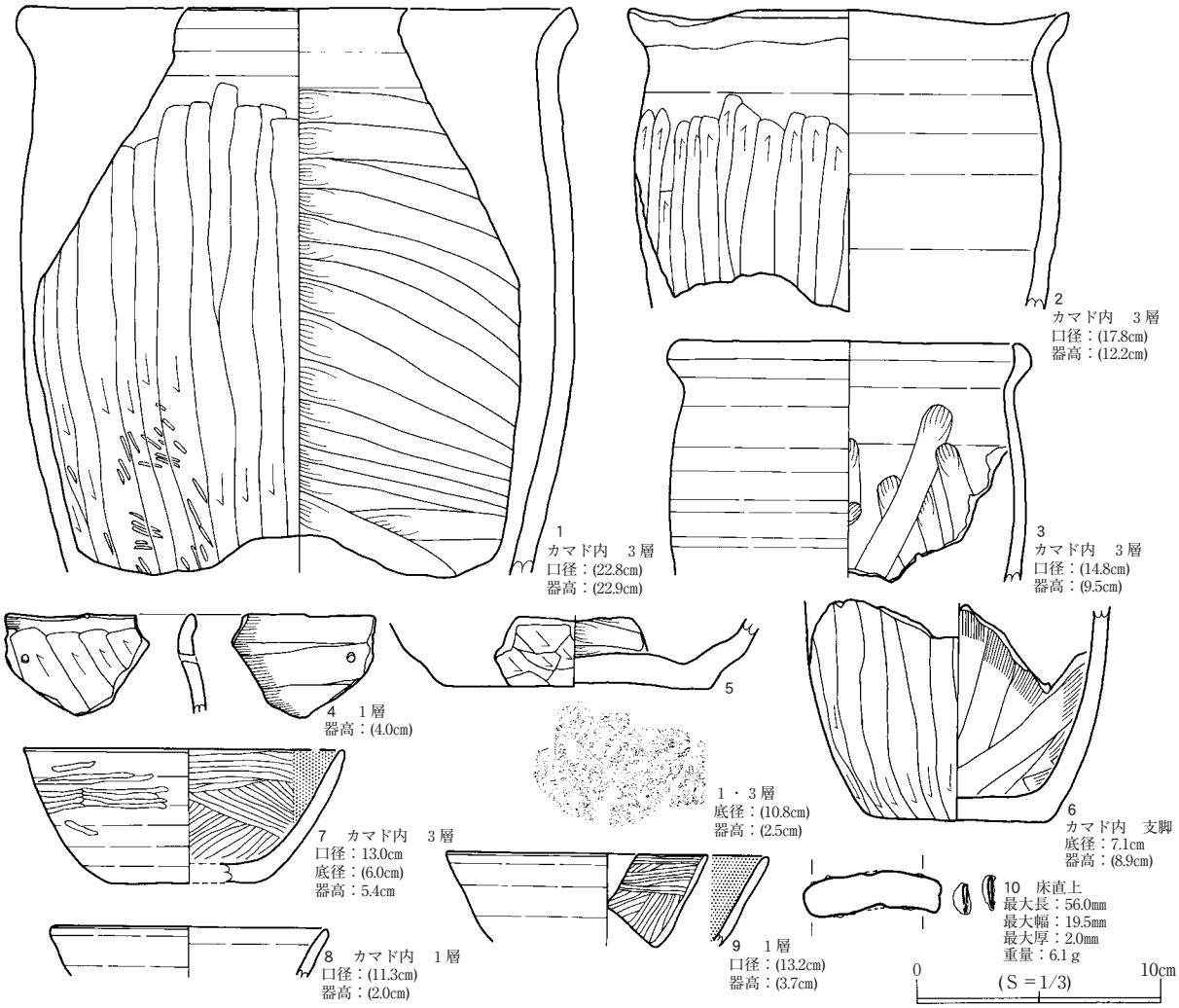
遺　物(第107図)　住居跡内から土師器甕・坏、鉄製品が出土した。土師器甕は口縁部が５点、底部が５点出土しており、そのうち比較的大型の口縁部資料４点、底部資料２点を図示した。図示しなかったものを含めた甕の口縁部分類別数量はＡ類(３点)、Ｂ類(０点)、Ｃ類(２点)、Ｄ類(０点)で、底部分類別数量は木葉痕(２点)、ケズリ(２点)、分類不能(１点)の内訳になる。基本的にＡ類が多いが、底部分類では回転糸切痕を残すものがなく、木葉痕を残すものが目立つ。

遺物の出土状況をみると、ほとんどがカマド周辺からの出土である(第106図)。特に火床面上部や、支脚の107図６上部からの出土が多い。中には106図７の坏も含まれることから、これらはカマド廃絶時に一括廃棄したものと考えられる。

107図１は大型の土師器甕で、胴部中位がやや張り出し、頸部でわずかにくびれて口縁部が外反する器形で、口縁部がやや肥厚して口唇は面取りしてある。内外面共にロクロ目様の平行横ナデで一次調整した後、底部付近にタタキを施したとみられる。この痕跡も、外面の縦位ケズリや内面の横位ユビナデによる再調整でほとんど消してある。107図２・３は中・小型の土師器甕である。２は胴部中位が膨らみ、頸部のくびれから口縁部が外反する器形で、１同様に口唇は面取りして、平滑に仕上げてある。しかし口縁部形状は歪んでおり、仕上げが粗雑な印象を受ける。外面にはケズリで再調整を施す。３は胴部中位が膨らみ、頸部がくびれて口縁部が短く外反してから強く内湾する器形で、口縁部が肥厚する。１・２に比べ外面のロクロ目は精緻で、器壁も薄い。内面には縦位ユビナデの再調整を施す。107図４は土師器甕の口縁部破片で、外面縦位ケズリ、内面横位ヘラナデ調整である。１か所、補修孔とみられる貫通孔がある。107図５・６は土師器甕の底部である。５は木葉痕を残し、６はケズリの再調整を施す。

107図７～９は土師器坏で、８がＡ類、７・９がＢ類である。７は全体の約2/3が残存する資料である。底部から内湾気味に立ち上がり、口縁部付近で弱く屈曲してやや角度を直立気味に変えるが、口端まで直線的に外傾する器形である。比較的器壁が厚く、口縁部で徐々に先細りになる。底部の回転糸切痕は確認できる範囲が狭く全体像は分からないが、やや筋幅が広い。ただし外面調整ではロクロナデ後にミガキを施しており、内面はミガキの間隙に沈線状の凹みを残している。８は口縁部付近が外反する。９は胴下部で膨らみ、胴部中位で弱くくびれて、口縁部がわずかに内湾気味になる。

107図10は鉄製品で、穂摘具とみられる。右端は欠損しているが、両端が丸く中央部がややカーブする形状で、弧の内縁を刃先としている。



第107図　02-ＳＩ04出土遺物

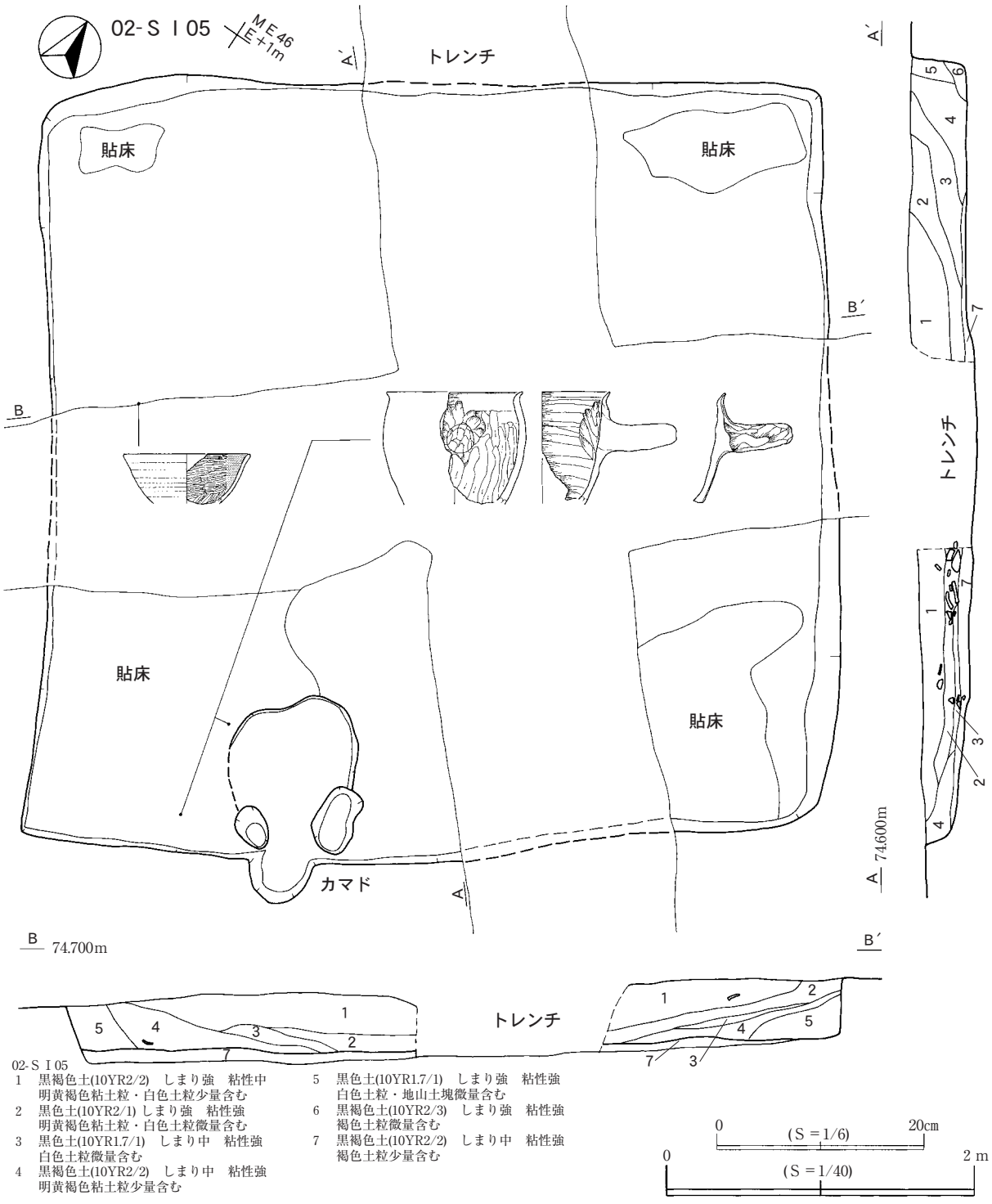
02-ＳＩ05(第108図～110図、図版36)

遺　構　ＭＣ・ＭＤ44～46グリッドの第Ⅳ層中位で、地山土塊を含む黒色土の広がりで確認した。本住居跡の立地点は台地上部平坦面で、ほとんど傾斜がない。03-ＳＩ06と重複し、本住居跡の方が新しい。周辺には03-ＳＩ12・13・102・103・104・106・203・204・208・316、02-ＳＤ01がある。

堆積土は７層に分けた。１～６層はレンズ状堆積を示す自然流入土で、７層は貼床である。遺物の多くが、カマド周辺部の７層上面からの出土で、上部流入土中に遺物が少ないのも人為堆積物を含まない特徴の一つと考えられる。

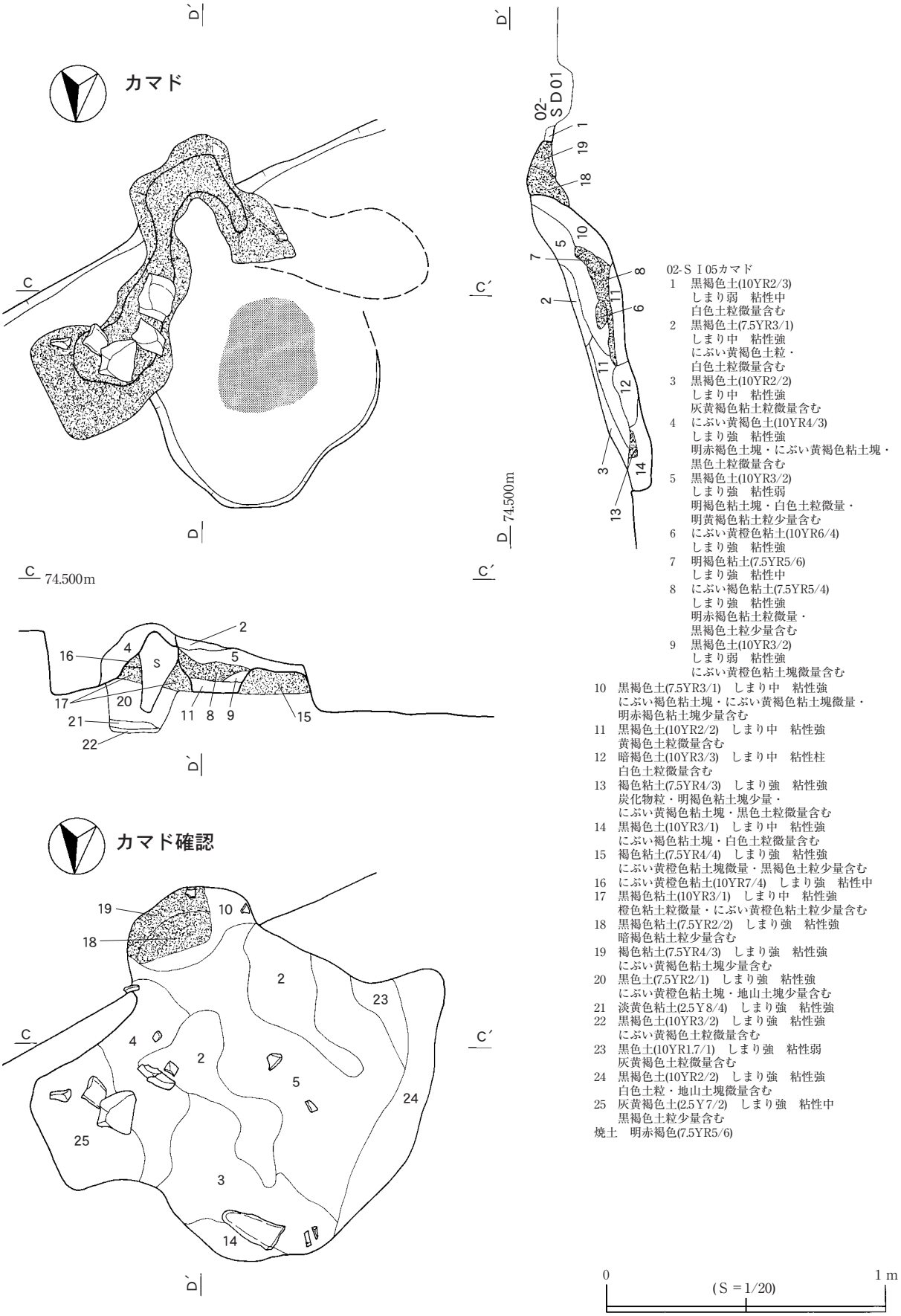
平面形は北東－南西方向に長い長方形で、カマドの付く壁に直交する主軸方位はＮ－33°－Ｗである。主軸とそれに直交するラインで測る住居面積は約26㎡で、大形の住居である。各壁の長さは、北東壁約4.6m、南東壁約5.2m、南西壁約4.7m、北西壁約5.0mである。各壁の検出面からの深さは、北東壁約0.4m、南東壁約0.16m、南西壁約0.28m、北西壁約0.36mで、立ち上がりは基本的に垂直である。床面は、住居南東半分と住居北隅・西隅の一部に貼床を施す。これは、下部に位置する03-ＳＩ06内堆積土を掘り抜いた範囲に対する、湿気抜きの処置と考えられる。なお本住居跡に伴う壁溝及びピットは確認できなかった。

カマドは南東壁の中央からやや南西寄りの位置で、白色粘土や焼土粒を含む黒褐色土の広がりで確



第108図　02-ＳＩ05・遺物出土状況

認した。確認できた施設は、煙道の基部、袖、火床面、カマド基底面の掘り込みである。25層に分けた堆積土のうち、２・３・５～14層までは天井部の崩壊土と自然流入土の互層である。４・16・17・20・21・22層はカマド袖の構築土で、20層以下は床面を掘り込む掘形内に平坦に貼り、それを基礎に芯材となる礫をはめ、その周りに17層黒褐色土を基礎にして黄褐色系粘土を貼る。１・18・19層は煙道の底面を構成する土や粘土である。カマド基底面の掘り込みは、予測されるカマド袖の延長ラインに一致する掘り込みである。長さ約0.8m、床面からの深さが最大で約0.08mで、底面は煙道に向かっ



02-ＳＩ05カマド
1　黒褐色土(10YR2/3)
　しまり弱　粘性中
　白色土粒微量含む
2　黒褐色土(7.5YR3/1)
　しまり中　粘性強
　にぶい黄褐色土粒・
　白色土粒微量含む
3　黒褐色土(10YR2/2)
　しまり中　粘性強
　灰黄褐色粘土粒微量含む
4　にぶい黄褐色土(10YR4/3)
　しまり強　粘性強
　明赤褐色土塊・にぶい黄褐色粘土塊・
　黒色土粒微量含む
5　黒褐色土(10YR3/2)
　しまり強　粘性弱
　明褐色粘土塊・白色土粒微量・
　明黄褐色粘土粒少量含む
6　にぶい黄橙色粘土(10YR6/4)
　しまり強　粘性強
7　明褐色粘土(7.5YR5/6)
　しまり強　粘性中
8　にぶい褐色粘土(7.5YR5/4)
　しまり強　粘性強
　明赤褐色粘土粒微量・
　黒褐色土粒少量含む
9　黒褐色土(10YR3/2)
　しまり弱　粘性強
　にぶい黄橙色粘土塊微量含む
10　黒褐色土(7.5YR3/1)　しまり中　粘性強
　にぶい褐色粘土塊・にぶい黄褐色粘土塊微量・
　明赤褐色粘土塊少量含む
11　黒褐色土(10YR2/2)　しまり中　粘性強
　黄褐色土粒微量含む
12　暗褐色土(10YR3/3)　しまり中　粘性柱
　白色土粒微量含む
13　褐色粘土(7.5YR4/3)　しまり強　粘性強
　炭化物粒・明褐色粘土塊少量・
　にぶい黄褐色粘土塊・黒色土粒微量含む
14　黒褐色土(10YR3/1)　しまり中　粘性強
　にぶい褐色粘土塊・白色土粒微量含む
15　褐色粘土(7.5YR4/4)　しまり強　粘性強
　にぶい黄橙色粘土塊微量・黒褐色土粒少量含む
16　にぶい黄橙色粘土(10YR7/4)　しまり強　粘性中
17　黒褐色粘土(10YR3/1)　しまり中　粘性強
　橙色粘土粒微量・にぶい黄橙色粘土粒少量含む
18　黒褐色粘土(7.5YR2/2)　しまり強　粘性強
　暗褐色粘土粒少量含む
19　褐色粘土(7.5YR4/3)　しまり強　粘性強
　にぶい黄褐色粘土塊少量含む
20　黒色土(7.5YR2/1)　しまり強　粘性強
　にぶい黄橙色粘土塊・地山土塊少量含む
21　淡黄色粘土(2.5Y8/4)　しまり強　粘性強
22　黒褐色土(10YR3/2)　しまり強　粘性強
　にぶい黄褐色土粒微量含む
23　黒色土(10YR1.7/1)　しまり強　粘性弱
　灰黄褐色土粒微量含む
24　黒褐色土(10YR2/2)　しまり強　粘性強
　白色土粒・地山土塊微量含む
25　灰黄褐色土(2.5Y7/2)　しまり強　粘性中
　黒褐色土粒少量含む
焼土　明赤褐色(7.5YR5/6)

0　1m
(S=1/20)

第109図　02-ＳＩ05カマド

て上るスロープである。この掘形の中央部に火床面が位置する。長径約0.4m、短径約0.35mの楕円形の被熱範囲である。

本住居跡は南東壁にカマドを設置するが、主柱穴や壁溝などの住居下部構造が認められない。廃絶後は自然堆積により埋没しており、住居の切り合い関係からみても、釈迦内中台Ⅰの集落において最も新しい段階の住居と考えられる。なお、住居廃絶時に把手付土器を遺棄したとみられ、廃絶時期を探る上で重要な資料である。

遺　物(第110図)　住居跡内から土師器甕・坏・鍋・把手付土器、須恵器壺・甕が出土した。土師器甕は口縁部が14点、底部が６点出土しており、そのうち比較的大型の口縁部資料２点、底部資料２点を図示した。図示しなかったものを含めた甕の口縁部分類別数量はＡ類(０点)、Ｂ類(０点)、Ｃ類(３点)、Ｄ類(１点)、分類不能(10点)で、底部分類別数量は砂底(５点)、ケズリ(１点)、の内訳になる。図示したものもほとんどが破片であり、本住居跡の本来の土器構成を表すかは不明だが、把手付土器の住居内出土は、今回の調査ではこの１点のみである。

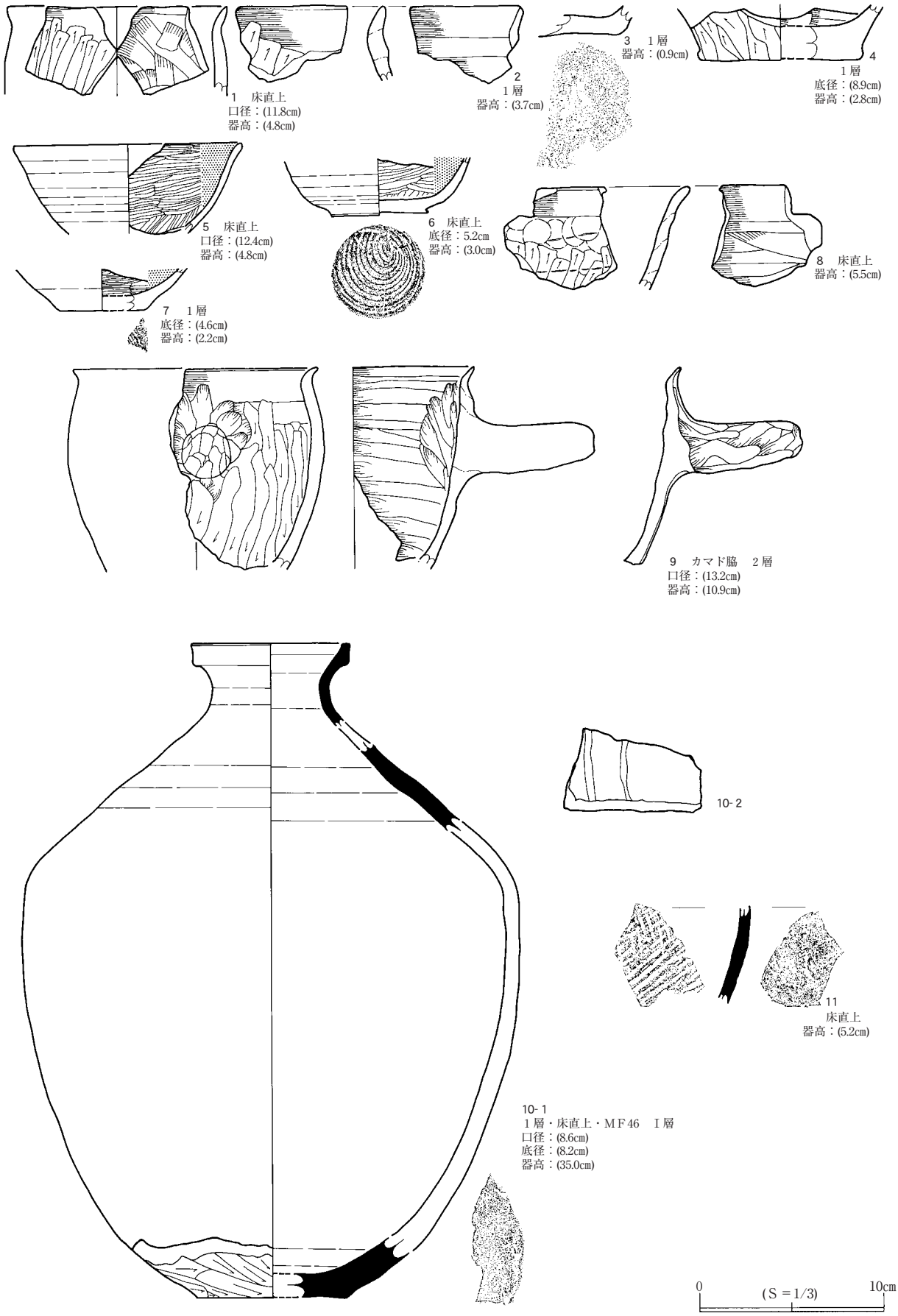
遺物の多くは住居南西壁沿いから出土している。基本的に床面付近からの出土だが、出土範囲の多くは、03-ＳＩ06を掘り込む範囲にあり、特に110図１・５・６・８の土師器甕・坏・鍋は、本住居跡構築時に03-ＳＩ06内堆積土中の遺物を巻き上げ、周堤として盛っていた土がいち早く床面に自然堆積した土に含まれたものである可能性が高い。これに対し、110図９の把手付土器は、カマド崩落層上部からの出土であり、住居廃絶時に意図的に投棄した可能性がある。

110図１・２は土師器甕の口縁部破片で、１は小型、２は中・大型のもので、いずれも口縁部の反りが短い。１は頸部でくびれて口縁部が外反する器形で、口唇が先細りになる。外面縦位ケズリ、内面斜位ヘラナデ調整である。大きさの割には器壁が厚い印象を受ける。２は直立気味に立ち上がる口縁部形状で、外面縦位ケズリ、内面横位ヘラナデ調整である。ケズリが比較的深く、頸部に段状の粘土のめくれが残る。110図３・４は土師器甕の底部で、３が砂底、４がケズリにより再調整している。４は底部外縁がやや張り出している。

110図５～７は土師器坏Ｂ類である。５は胴下半部から丸みを帯びて立ち上がり、口縁部が外反する器形で、外面ロクロ目は比較的平滑に仕上げており、内面のミガキは底部放射状、胴部以上が横位方向に施している。口縁部がやや肥厚しており、口唇は丸みを帯びる。６・７は回転糸切痕を残す底部で、６は胴下部が張り出し、７は直線的に外傾する。底径では６が比較的大きく、７が小さいが、底部器厚では、６が比較的薄く、７が厚い。

110図８は土師器鍋の口縁部破片で、外面縦位ケズリ、内面横位ヘラナデ調整である。110図９は土師器の把手付土器で、把手は中実である。まず小型の甕を作り、その一部に穴を空けて棒状の粘土をはめ込み、内面の接合部を放射状のユビナデで調整する。なお、胴部全体の内面調整である横位ユビナデを、放射状ユビナデが切っている。外面も把手から接合部にかけてユビナデにより一次調整を施し、その後ケズリの最終調整を施している。

110図10は須恵器壺で、口縁部、肩部、底部の小破片から復元実測したものである。胎土や色調からみて同一個体と捉えた。肩部付近まではロクロ目を残し、底部付近には外面にケズリによる再調整が認められる。肩部から頸部にかけてやや急に立ち上がり、頸部から口縁部への外反も弱いとみられる。なお、肩部には二条の線刻が認められる。110図11は須恵器甕の小破片である。



第110図　02-SI05出土遺物

03-ＳＩ06

本住居跡は、ＭＢ44、ＭＣ・ＭＤ43～46、ＭＥ44・45グリッドの、02-ＳＩ05下部及び第Ⅳ層中位において、地山土粒を含む土の分布範囲で確認した。本住居跡の立地点は台地上部平坦面で、ほとんど傾斜がない。02-ＳＩ05、02-ＳＤ02と重複し、いずれよりも本住居跡が古く、住居北部は02-ＳＩ05が切るため、壁は失われている。また周囲には複数のＳＫＰが分布しており、周辺には03-ＳＩ12・13・102～106、203～208がある。

床面精査で確認した壁溝やピットの配置から４回の建て替えが認められ、合計５軒の住居跡が重なることが判明した。住居は新しい順に、Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ・Ｅのアルファベットを付けて表記した。

03-ＳＩ06Ａ(第111図～115図、図版46・150・166)

遺　構　最大規模に達した、壁柱で壁板を保持する構造の住居である。

堆積土は６層に分けた。３・４層は壁際にわずかに堆積しており、大部分を１・２層が占める状況から、人為的な埋め戻しによる埋没と考えられる。５・６層は貼床である。

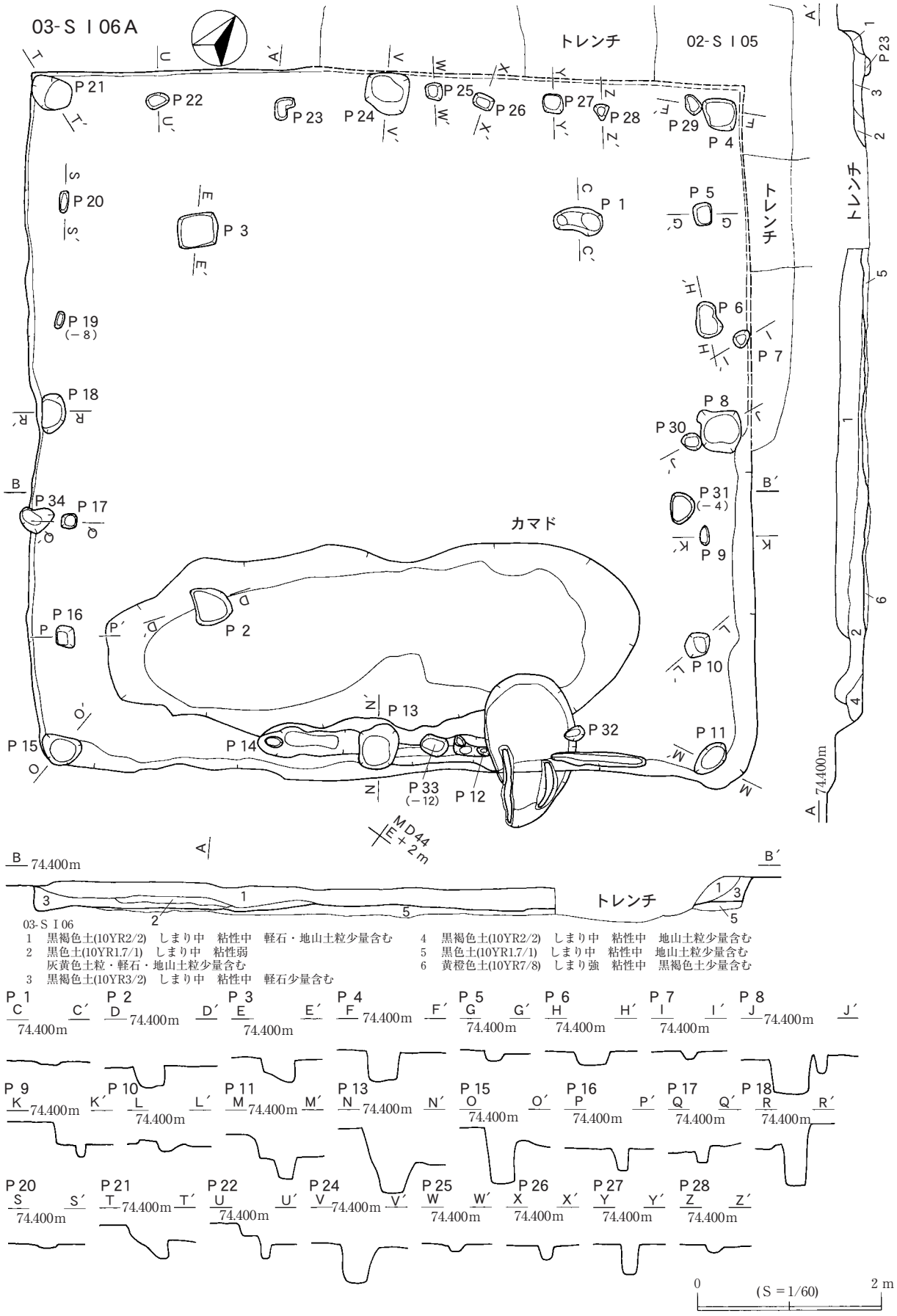
平面形はわずかに北東－南西方向に長い長方形で、カマドの付く壁に直交する主軸方位はＮ－37°－Ｗである。主軸とそれに直交するラインで測る住居面積は約59㎡で、特大形の住居である。柱穴配置から推測される各壁の長さは、北東壁約7.5m、南東壁約7.6m、南西壁約7.4m、北西壁約7.7mである。壁の検出面からの深さは0.2～0.3mで、ほぼ垂直に立ち上がる。

床面は、03-ＳＩ06Ｂ上面には基本的に貼床を施し、その外側は掘形底面の地山上面を利用している。壁溝は伴わない。床面で34個のピットを確認した。Ｐ１～３は住居隅からやや内側に配置する主柱穴である。Ｐ１は２個連結しており、建て替えの可能性がある。Ｐ３の対角線に位置する場所では柱穴が明確でないが、カマドに規制される位置であり、特別な処置を施したことも想定される。Ｐ１－３間約4.2m、Ｐ２－３間約4.0mである。Ｐ５～34は壁板保持に関わる壁柱穴で、四隅のＰ５・11・15・21と壁中央部のＰ８・13・18・24が比較的深く、これらの間に２個を基本として、やや浅めの方形状壁柱穴を配置する。

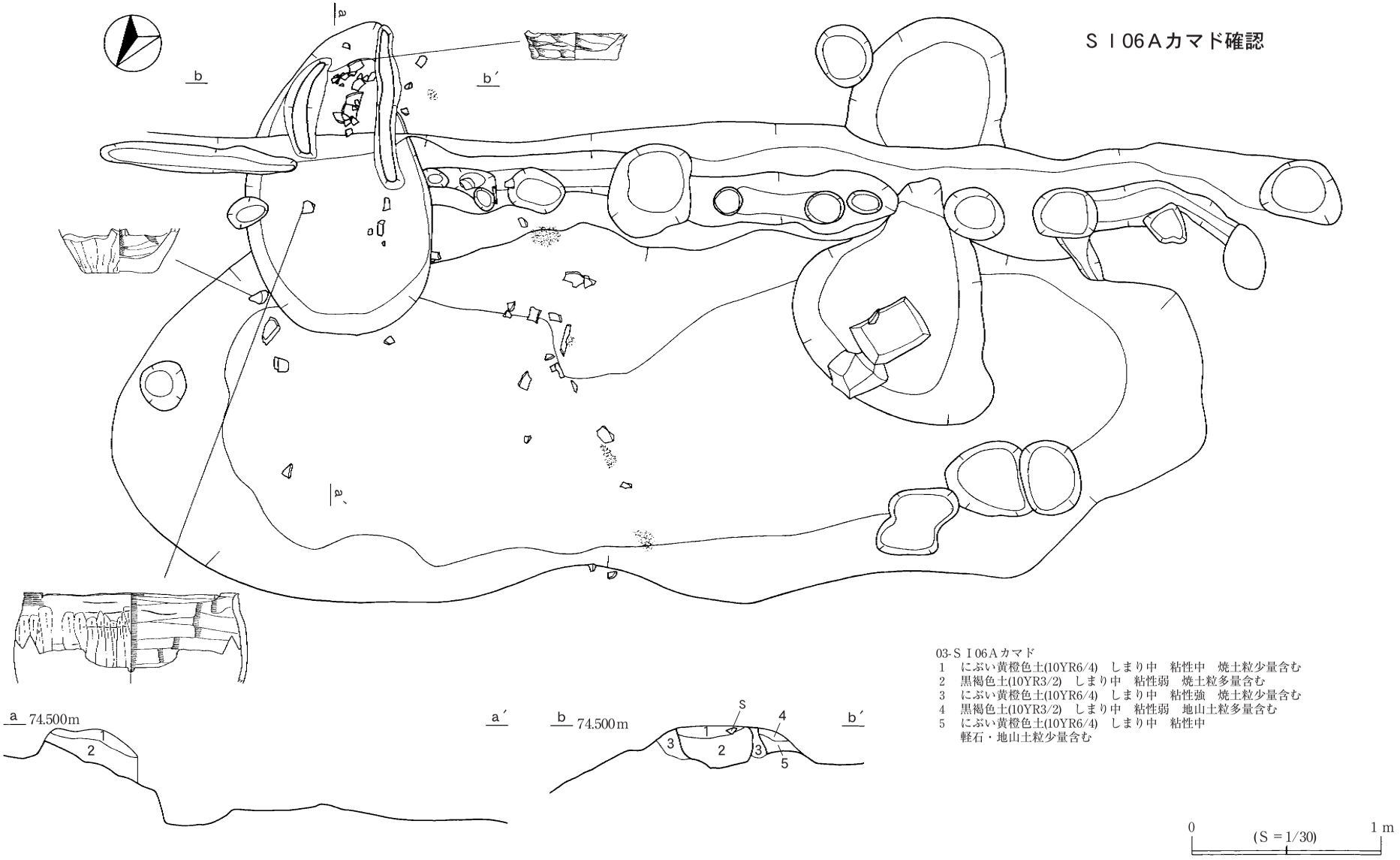
カマドは南東壁中央部から北東寄りの位置で、袖を構成する粘土の分布で確認した。上部構造の大部分は、住居跡廃絶時に壊しており、その残土が前庭部に堆積していた。堆積土は５層に分けられる。１・２・４・５層はカマド上面に堆積した人為的な埋め戻しの土である。３層は構築粘土だが、煙道に相当する範囲にのみ残存する。規模は煙道から前庭部末端まで約3.0m、袖基底部幅約0.6mである。前庭部は壁に平行する方向で約5.7m、これに直交する方向で約2.0m幅の浅い掘り込みである。カマドを共有することから、03-ＳＩ06Ｂ・Ｃ段階に構築したものである可能性が高い。カマド上面には廃絶後、拳大より大き目のデイサイトの角礫を大量に投棄している。カマド袖部分の構築礫が板状の凝灰岩であるのとは対照的である。

本住居跡は４本の主柱をもち、南東壁にカマドを設置する住居である。５軒重複する03-ＳＩ06の中では最新段階の住居で、02-ＳＩ05構築時までには廃絶したと考えられる。

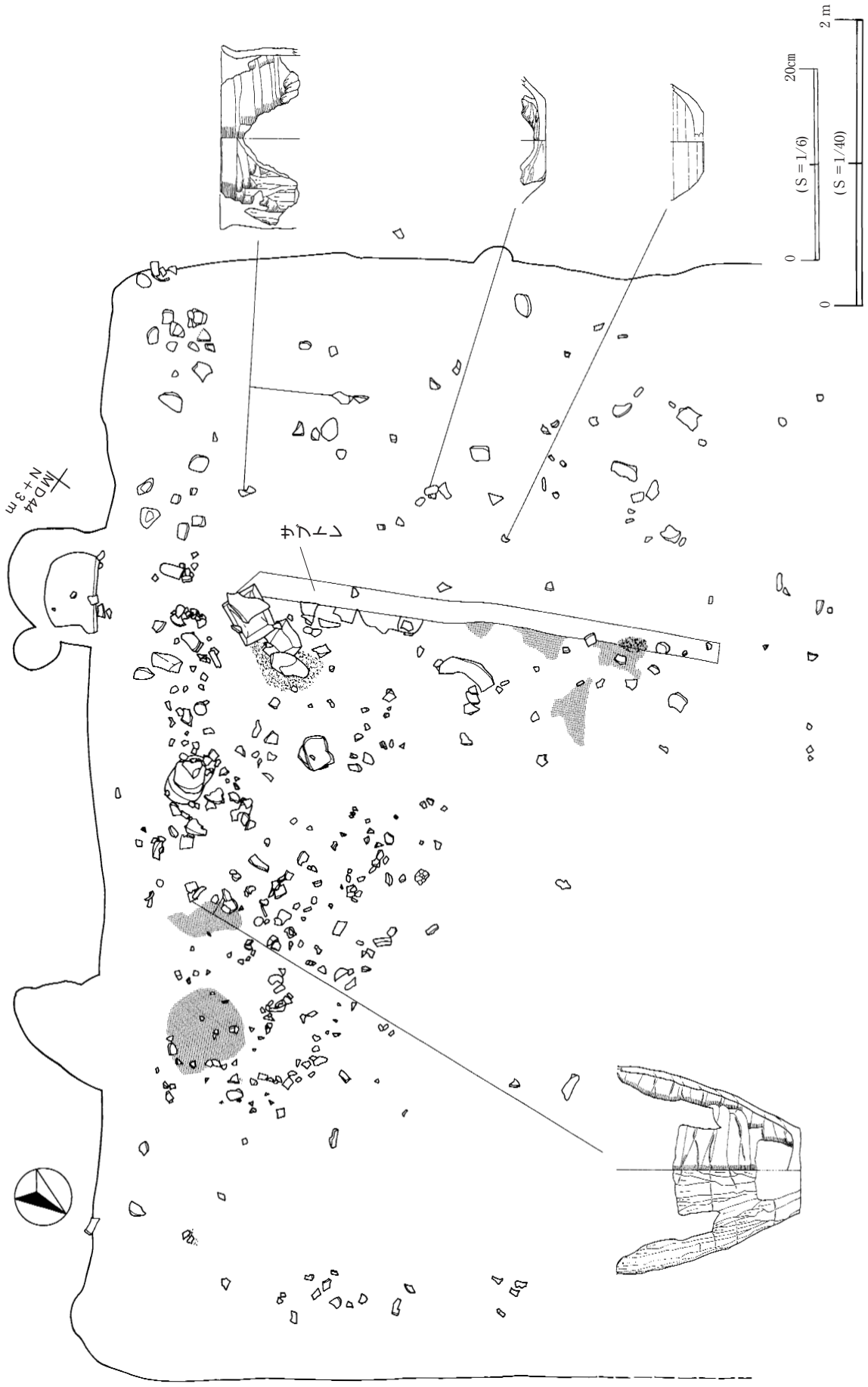
遺　物(第114図・115図)　住居跡内から土師器甕・坏・鍋、墨書土器が出土した。土師器甕は口縁部が44点、底部が32点出土しており、そのうち比較的大型の口縁部資料11点、底部資料９点を図示した。図示しなかったものを含めた甕の口縁部分類別数量はＡ類(５点)、Ｂ類(６点)、Ｃ類(27点)、Ｄ類(６点)



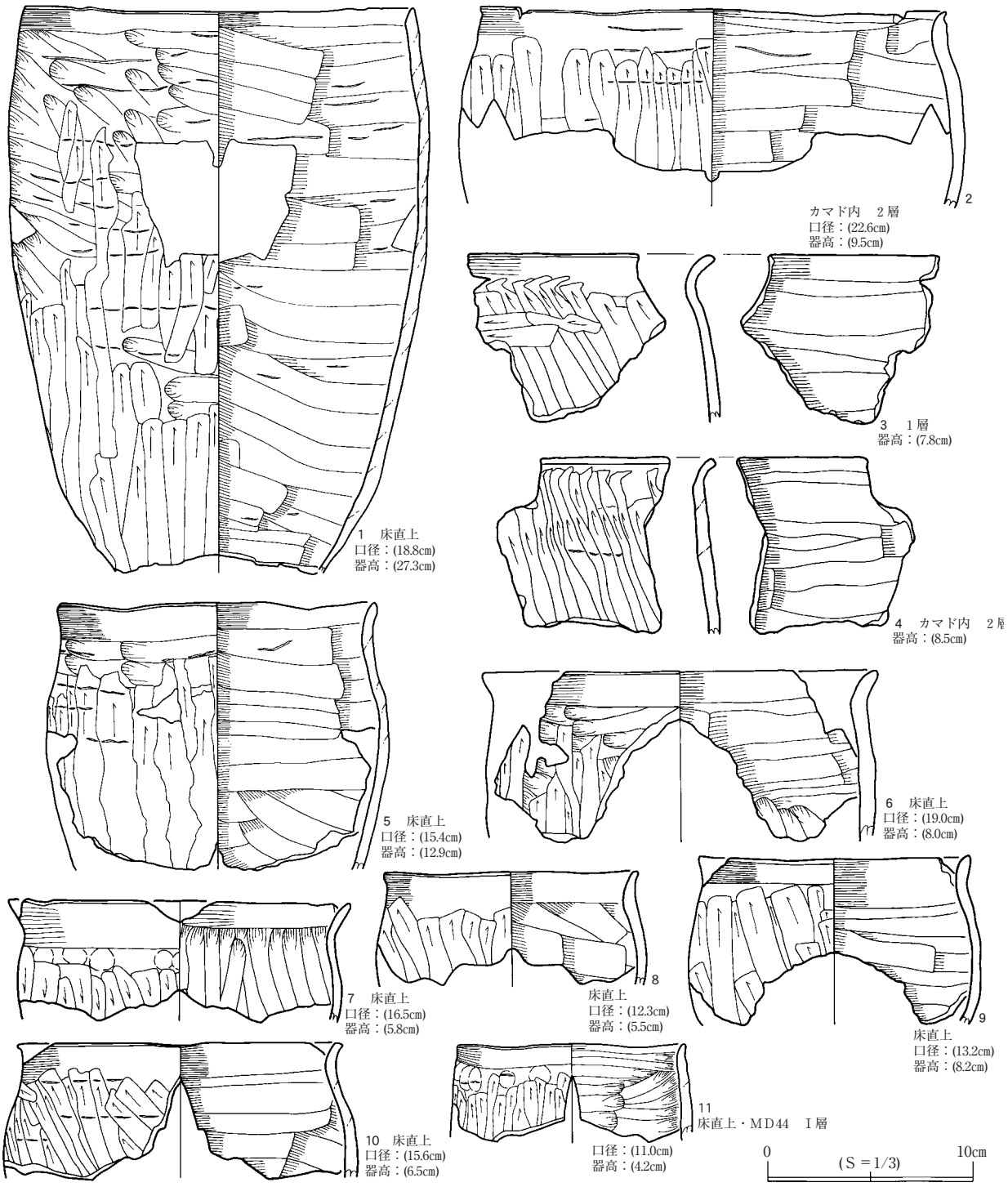
第111図　03-ＳＩ06Ａ



第112図　03-ＳＩ06Ａカマド・遺物出土状況



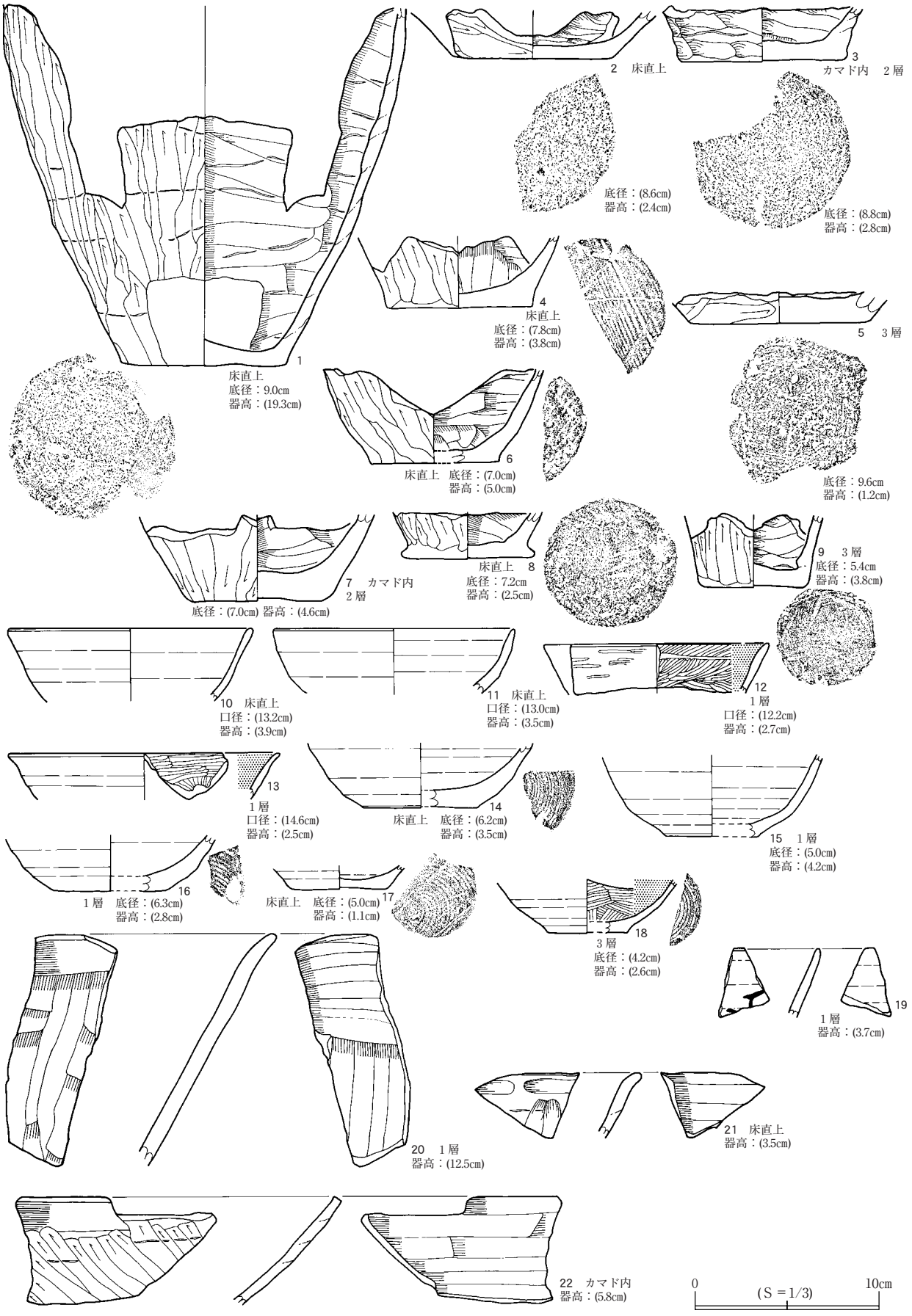
第113図　03-ＳＩ06Ａ遺物出土状況



第114図　03-ＳＩ06Ａ出土遺物１

で、底部分類別数量は砂底(18点)、木葉痕(３点)、薦編圧痕(２点)、ナデ(１点)、ケズリ(７点)、回転糸切(１点)の内訳になる。基本的にＣ類と砂底が多く、Ａ・Ｂ類や木葉痕・薦編圧痕が混ざる。遺物の出土はカマド周辺の特に前庭部に集中することから、廃絶時の遺棄と考えられる(第113図)。

114図１～４・６は比較的中・大型の土師器甕である。１は底部から直立気味に立ち上がり、胴部中位で膨らみ、口縁部に向けて内湾する器形で、口縁部は内削ぎ状につまみ出して先細りの形状になる。２も同様な口縁部形状で、口端がわずかに外反する。どちらも外面は縦位ケズリ、内面は横位ヘラナデ調整で、１は胴上部にユビナデをとどめる。３・４は胴上部から内傾して口縁部が外反する器



第115図　03-ＳＩ06Ａ出土遺物２

形で、外面が縦位ケズリ、内面が横位ヘラナデ調整である。３は頸部が屈曲して口縁部が強く外反するが、これに比べて４の外反は弱い。６は胴部が直立し、口縁部が弱く外反する器形で、やや器壁が厚めである。外面縦位ケズリ、内面横位ヘラナデ調整である。114図５・７～11は比較的小型の土師器甕である。口縁部は７・10が外反し、５・８・９が直立気味で、11は内湾気味に立ち上がる。口唇は、10が角頭状になる以外は、先細りである。外面調整は全て縦位ケズリで、５は胴上部にユビナデを残す。内面調整は７が縦位ユビナデである以外は、横位のユビナデまたはヘラナデである。８・11がやや器壁が厚めで、それ以外は比較的薄い。

115図１～９は土師器甕の底部である。１～３が砂底で、４・６が薦編圧痕をとどめ、５・７～９はケズリ再調整を施す。底部の立ち上がり形状では、１・２・５・７・９が直線的に外傾し、３・４・６がやや直立気味になり、８は底部外縁が張り出す。

115図10～19は土師器坏で、10・11・14～17がＡ類、12・13・18がＢ類、19はＡ類の墨書である。10・11は口縁部破片で、口縁部は、10が外反してわずかに肥厚し、11は内湾気味に直立して胴下部がやや厚みを増す。12・13も口縁部破片で、12は直線的に外傾し、13は口端が外反する器形である。12は内面に、胴下部では横位の、胴部中位から口縁部にかけては斜位のミガキを施すが、最後に口縁部から約１cm下に、横位のミガキを１本施している。14～18は底部で、いずれも回転糸切痕をとどめる。14～16は底部が比較的厚く、底部から直線的に外傾して立ち上がる。これに対し、17・18は比較的薄く、18は底部が突出する。19は破片のため、文字の全体像は不明である。

115図20～22は土師器鍋である。20は直線的に外傾して口縁部が弱く外反する器形で、やや厚手である。これに比べ21・22は比較的薄い作りで、21は口縁部が外反し、22はわずかに内湾して立ち上がる。口唇形状は、20・21が丸く収め、22が角頭状になる。外面調整は、20が縦位ヘラナデ、21がユビナデ、22が斜位ケズリである。内面調整は、20が胴下部に縦位、胴上部に横位のヘラナデ、21・22は横位ヘラナデ調整のみ確認できる。

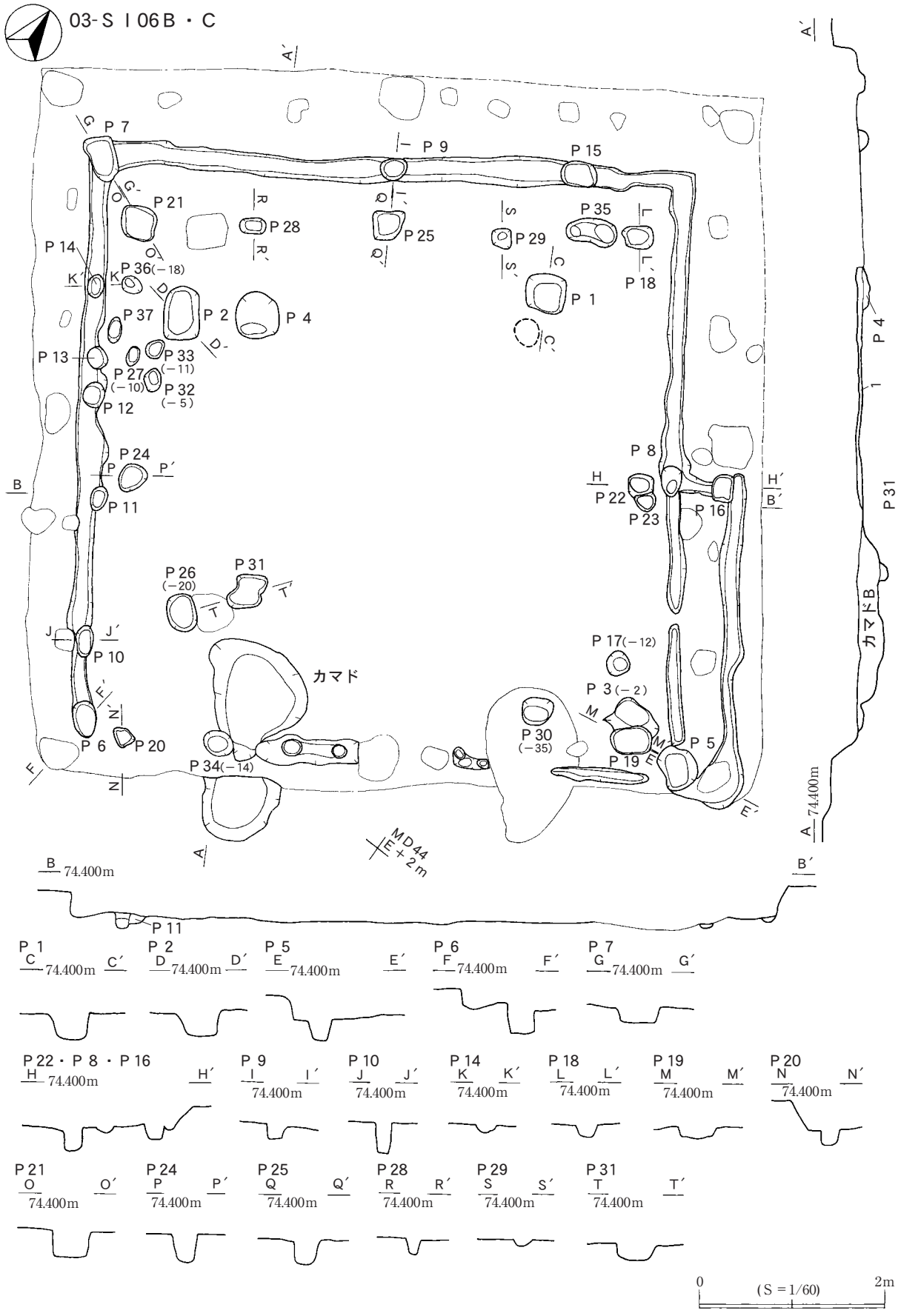
03-ＳＩ06Ｂ(第116図・117図、図版46)

遺　構　３回目の建て替えにより、03-ＳＩ06Ｃよりも規模を拡大した住居である。最大規模の03-ＳＩ06Ａのプラン内に収まるため、埋没過程を示す堆積土は存在しない。

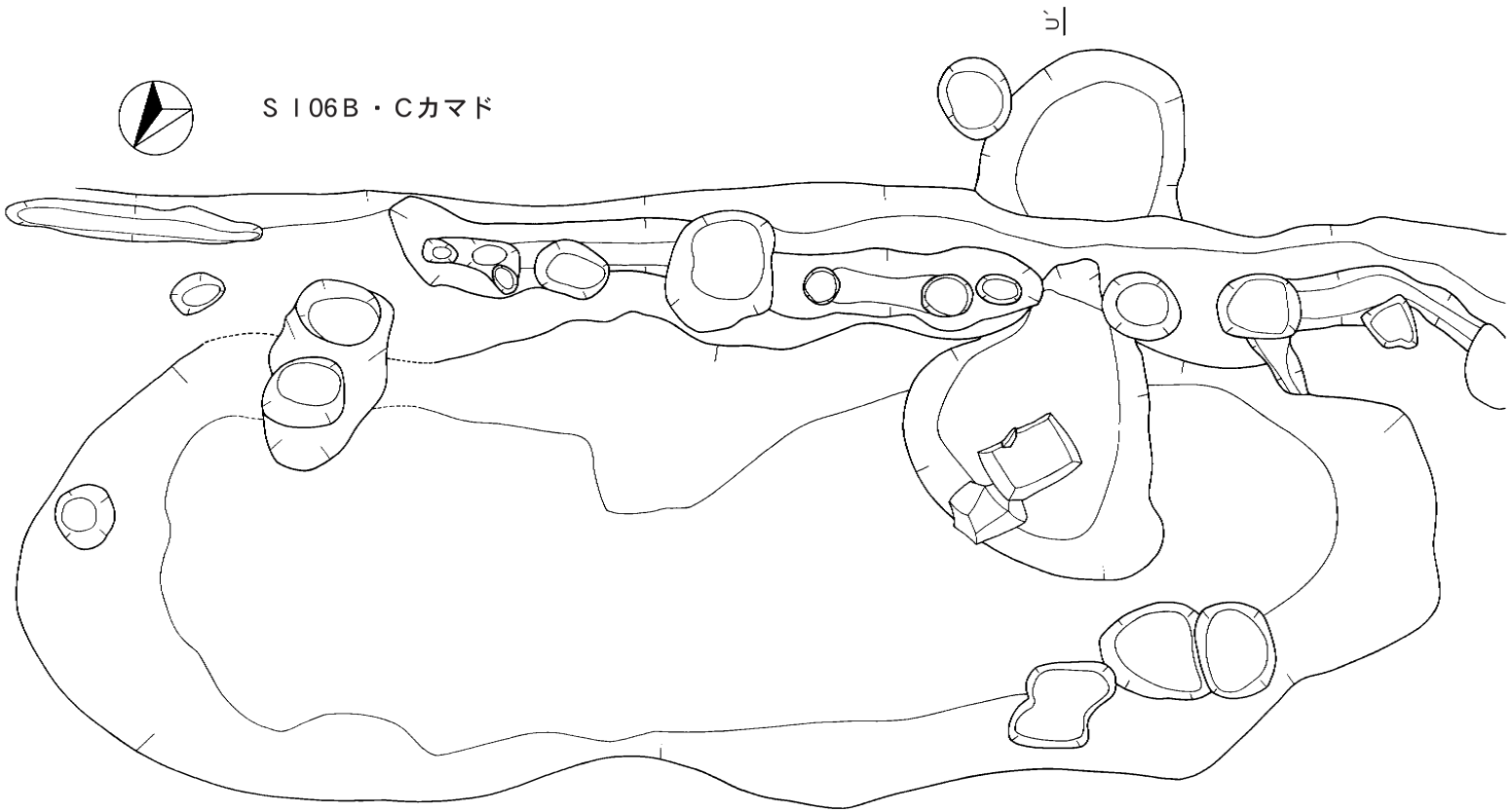
平面形はほぼ正方形で、カマドの付く壁に直交する主軸方位はＮ－37°－Ｗである。主軸とそれに直交するラインで測る住居面積は約42㎡で、特大形の住居である。各壁の長さは、北東壁約6.6m、南東壁約6.5m、南西壁約6.6m、北西壁約6.5mである。壁の検出面からの深さ及び立ち上がりは、03-ＳＩ06Ａが切るため確認できない。壁溝配置から、北東壁の南東半分には張り出しが付くとみられる。隅の柱穴と溝で構成され、規模は住居壁直交方向で約0.7m、住居壁平行方向で約3.5mである。

床面は、03-ＳＩ06Ａの貼床下部で、掘形底面の地山面を利用している。壁溝は、南東壁の一部を除くほぼ全周で確認した。上場幅0.18～0.3m、下場幅0.05～0.22m、床面からの深さ0.1m前後の断面台形状である。床面及び壁溝内で本住居跡に伴う16個のピットを確認した。Ｐ１・２・26・30は住居隅より内側に配置する主柱穴である。Ｐ５～７は隅柱、Ｐ８・９・12は壁中央部の壁柱穴である。Ｐ13～15は補助的な壁柱穴である。

カマドは南東壁中央から南西寄りの位置で、基底部の掘り込み範囲で確認した。03-ＳＩ06Ａの構築



第116図　03-ＳＩ06Ｂ・Ｃ



03-ＳＩ06Ｂ・Ｃカマド
1　黒褐色土(10YR2/2)　しまり中　粘性中
　焼土粒多量・炭化物粒・黒色土粒・
　軽石・地山土粒少量含む
2　橙色土(2.5YR6/8))　しまり強　粘性中
3　黒色土(10YR2/1)　しまり中　粘性中
　焼土粒少量・炭化物粒・地山土粒多量含む
4　にぶい橙色土(2.5YR6/3)　しまり強　粘性中
　地山土粒多量含む
5　灰黄褐色土(10YR5/2)　しまり中　粘性中
6　明赤褐色土(５YR5/8)　しまり中　粘性中
7　黒色土(10YR2/1)　しまり中　粘性中
　焼土粒少量・地山土粒多量含む
8　赤褐色土(2.5YR4/6)　しまり強　粘性中
　焼土粒少量含む
9　黒色土(10YR2/1)　しまり中　粘性中
　焼土粒少量・地山土塊多量含む
10　黒色土(10YR2/1)　しまり中　粘性中
　炭化物粒多量・地山土粒少量含む
11　黒色土(10YR2/1)　しまり中　粘性中
　焼土粒少量・地山土粒多量含む
12　黒褐色土(10YR2/2)　しまり強　粘性中
　軽石少量・地山土塊多量含む
13　黒色土(10YR1.7/1)　しまり中　粘性中
　炭化物粒・地山土粒少量含む
14　黒色土(10YR2/1)　しまり中　粘性中
　焼土粒多量含む

第117図　03-ＳＩ06Ｂ・Ｃカマド

時に上部構造を破壊しており、火床面も明確には確認できなかった。煙道残存部から前庭部末端まで約3.0m、これに直交する基底部掘り込みの最大幅で約1.0mである。煙道はスロープ状の掘り込みが確認できた。

本住居跡は壁から離れた位置に４本の主柱をもち、南東壁にカマドを設置する住居である。５軒重複する03-ＳＩ06の中では３段階目で、03-ＳＩ06Ａへと拡張するため解体したとみられる。

遺　物　本住居跡に伴う遺物は検出できなかった。

03-ＳＩ06Ｃ(第116図・117図)

遺　構　２回目の建て替えにより、03-ＳＩ06Ｄよりも規模を拡大した住居である。最大規模の03-ＳＩ06Ａのプラン内に収まるため、埋没過程を示す堆積土は存在しない。

隅柱であるＰ18～22の配置でみた平面形はほぼ正方形で、カマドの付く壁に直交する主軸方位はＮ－37°－Ｗである。主軸とそれに直交するラインで測る住居面積は約31㎡で、大形の住居である。柱穴配置で測る各壁の長さは、北東壁約5.6m、南東壁約5.6m、南西壁約5.7m、北西壁約5.6mである。各壁の検出面からの深さ及び立ち上がりは、03-ＳＩ06Ｂが切るため不明である。

床面は、03-ＳＩ06Ｂと共有するとみられ、基本的には掘形底面の地山面を基底面とする。壁溝は確認できなかった。床面で本住居跡に伴うとみられる21個のピットを確認した。Ｐ４・31は住居隅より内側に位置する主柱穴とみられ、これに対応する２本は、03-ＳＩ06ＢＰ１・30と重複すると予測される。Ｐ18～21は隅柱で、Ｐ22～25は壁中央部に配置する壁柱穴である。この他Ｐ17・27～29・32・33・35～37が、本住居跡に伴うピットと考えられる。南西壁中央部から西隅寄りの位置に集中しており、あるいは出入り口に関わる下部構造になるかもしれない。

カマドはほぼ同プランの03-ＳＩ06Ｂと同じ地点を利用したと考えられる。

本住居跡は、壁柱で壁板を保持した住居である。度重なる建て替えにより、残存する住居構造は少なく不明な点が多い。５軒重複する03-ＳＩ06の中では３段階目にあたり、03-ＳＩ06Ｂへと拡張するために解体したと考えられる。

遺　物　本住居跡に伴う遺物は検出できなかった。

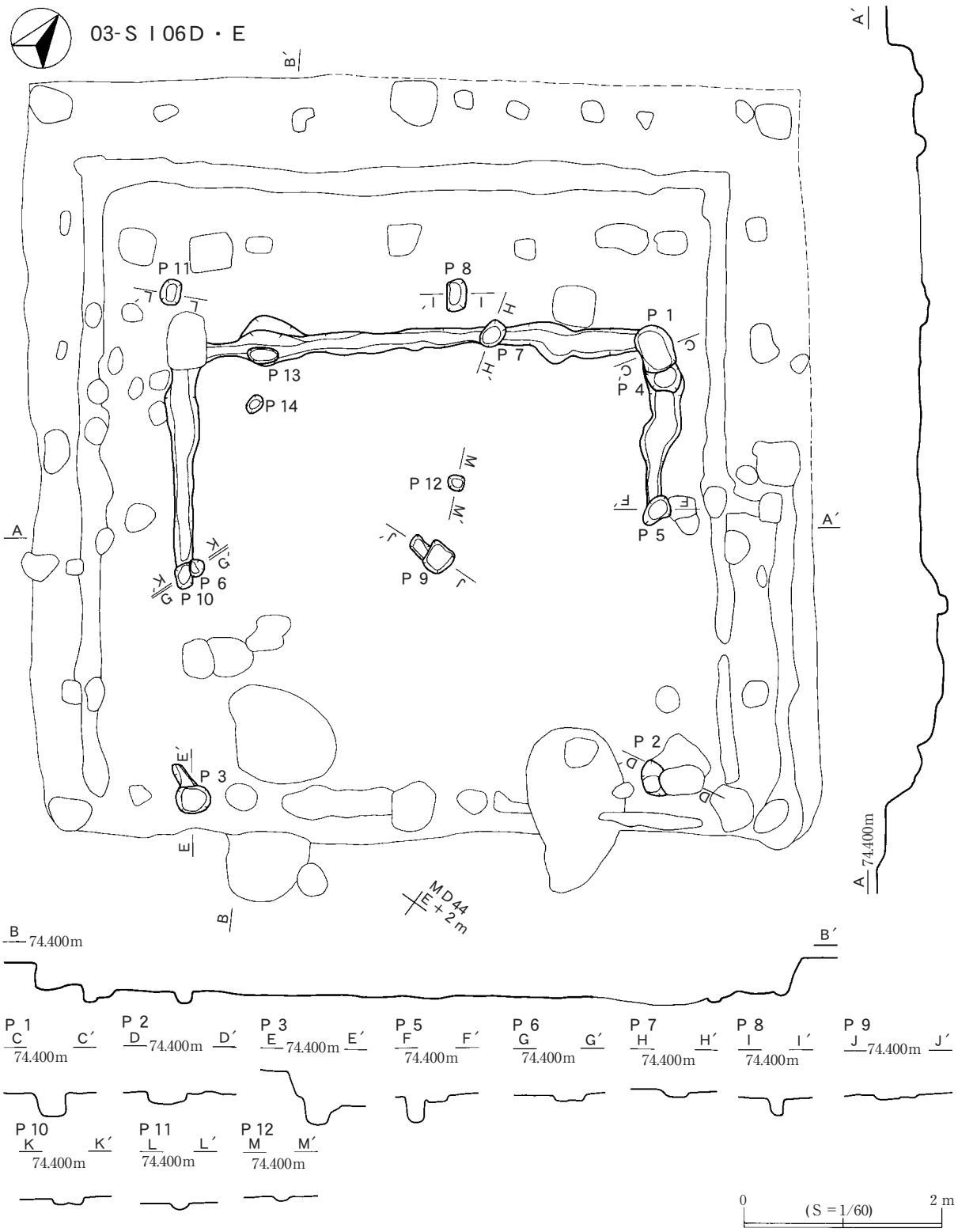
03-ＳＩ06Ｄ(第118図、図版46)

遺　構　１回目の建て替えにより、03-ＳＩ06Ｅより規模を拡大した住居である。最大規模の03-ＳＩ06Ａのプラン内に収まるため、埋没過程を示す堆積土は存在しない。

壁溝と柱穴配置でみる平面形は、わずかに北東－南西方向に長い長方形で、南東壁に直交する主軸方位はＮ－37°－Ｗである。主軸とそれに直交するラインで測る住居面積は約26㎡で、大形の住居である。壁溝で測る各壁の長さは、北東壁約4.8m、南東壁約5.0m、南西壁約5.0m、北西壁約5.1mである。各壁の検出面からの深さ及び立ち上がりは、03-ＳＩ06Ｃが切るため不明である。

床面は、03-ＳＩ06Ｂ・Ｃと共有するとみられ、基本的には掘形底面の地山面を基底面とする。壁溝は03-ＳＩ06Ａ・Ｂカマド前庭部が切る範囲外で確認した。上場幅0.14～0.4m、下場幅0.1～0.26m、床面からの深さ0.1m前後の断面台形状である。

壁溝内で本住居跡に伴うとみられる８個のピットを確認した。Ｐ１～３は住居隅に配置する主柱穴



第118図　03-ＳＩ06Ｄ・Ｅ

である。Ｐ５～７・13は壁溝内に比較的等間隔に配置する、壁板保持の補助柱とみられる。本住居跡に伴うカマドは明確ではないが、住居プランが同じで南東壁を共有することから、03-ＳＩ06Ｃの位置と同じ地点を利用していたと想定される。

本住居跡は四隅に主柱をもち、南東壁にカマドを設置する住居と考えられる。度重なる建て替えにより残存部が少なく、住居構造には不明な点が多い。５軒重複する03-ＳＩ06の中では２段階目に当た

り、03-ＳＩ06Ｃへと拡張するために解体したと考えられる。

遺　物　本住居跡に伴う遺物は検出できなかった。

03-ＳＩ06Ｅ(第118図、図版46)

遺　構　５軒重複する03-ＳＩ06の中で、最初に構築した住居である。最大規模の03-ＳＩ06Ａのプラン内に収まるため、埋没過程を示す堆積土は存在しない。

隅柱であるＰ８～11の配置でみた平面形はほぼ正方形で、Ｐ８・11ラインに直交する主軸方位はＮ－37°－Ｗである。主軸とそれに直交するラインで測る住居面積は約９㎡で、小形の住居である。柱穴配置でみる各壁の長さは、北東壁約3.0m、南東壁約2.8m、南西壁約3.1m、北西壁約3.0mである。各壁の検出面からの深さ及び立ち上がりは、03-ＳＩ06Ｄが切るため確認できない。

床面は03-ＳＩ06Ｂ・Ｃ・Ｄと共有するとみられるが、定かではない。また壁溝も確認できなかった。床面で本住居跡に伴うとみられる４個のピットを確認した。Ｐ８・９・11は住居隅の主柱穴と考えられる。Ｐ12は壁柱穴である。

本住居跡に伴うカマドは確認できなかった。焼土もはっきりしないことから、建て替えにより完全に消滅したと思われる。

本住居跡は、四隅に主柱を配置する住居と想定される。度重なる建て替えにより、住居構造の多くは消滅している。５軒重複する03-ＳＩ06の中では最古段階にあたり、03-ＳＩ06Ｄへと拡張するために解体したと考えられる。

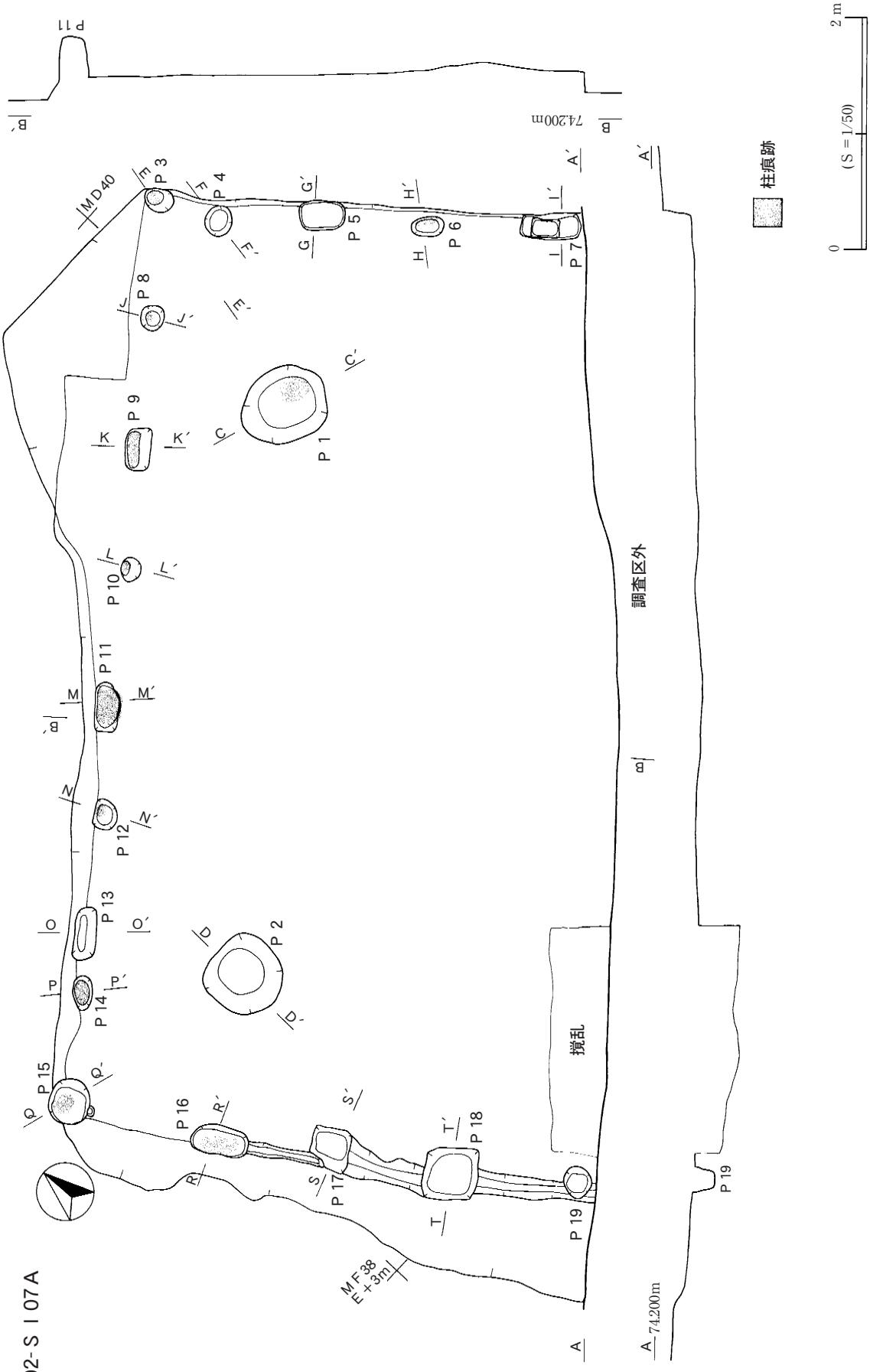
遺　物　本住居跡に伴う遺物は検出できなかった。

02-ＳＩ07・08・09

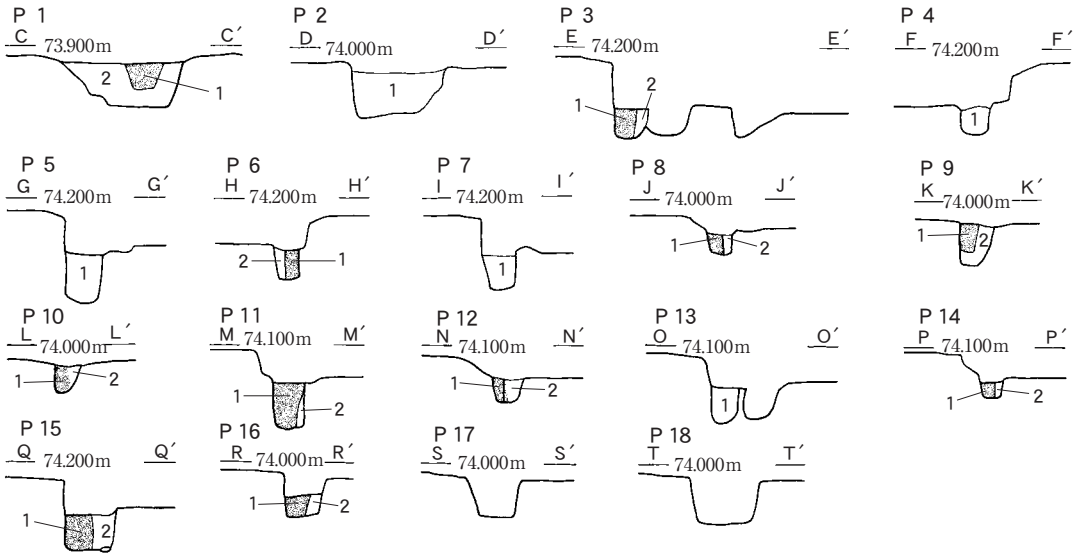
本住居跡は、ＭＣ38・39、ＭＤ・ＭＥ37～39グリッドの、第Ⅵ層上面から中位において、地山土粒を含む土の分布範囲や、壁溝と柱穴の配置で確認した。本住居跡の立地点は台地上部平坦面の東端に近く、緩やかに東側へ傾斜する。周辺部では後世の土採りが深く、Ⅵ層地山面にバックホーの爪跡が残る状態で、これが本住居跡内にまで及んでおり、４軒とも住居内部堆積土は残存していない。３回の建て替えで４軒の住居が重なる以外に重複する遺構は確認できず、周辺には03-ＳＩ102・103・204・208がある。

02-ＳＩ07Ａ(第119図・120図、図版37)

遺　構　３回目の建て替えにより、最大規模に達した住居である。平面形を正方形と想定した場合、北西壁に直交する主軸方位はＮ－35°－Ｗになり、想定される住居面積が約66㎡で、超大形の住居である。完掘している北西壁の長さは約8.1mで、壁の検出面からの深さは、北東壁の残りの良いところで約0.25mで、垂直に立ち上がる。床面は掘形底面の地山面を利用していたとみられる。本住居跡に伴う壁溝は確認できなかった。床面上で19個のピットを確認した。Ｐ１・２は住居隅よりやや内側に位置する主柱穴で、02-ＳＩ07Ｂと共有するため掘形が広い。Ｐ３～19は壁際に規則的に配置する壁板保持に関わる壁柱穴である。なお、各柱穴で柱痕跡を確認した。カマドは確認できなかったが、おそらく調査区外の南東壁部に設置するものと考えられる。



第119図　02-S I 07A



02-ＳＩ07Ａ

P 1
1　黒色土(2.5Y2/1)　しまり弱　粘性強
2　黄褐色土(2.5Y5/6)　しまり強　粘性弱

P 2
1　黒色土(2.5Y2/1)　しまり弱　粘性強

P 3
1　黒色土(2.5Y2/1)　しまり弱　粘性強
2　黄褐色土(2.5Y5/6)　しまり強　粘性弱

P 4
1　黒色土(2.5Y2/1)　しまり弱　粘性強

P 5
1　黒色土(2.5Y2/1)　しまり弱　粘性強

P 6
1　黒色土(2.5Y2/1)　しまり弱　粘性強
2　黄褐色土(2.5Y5/6)　しまり強　粘性弱

P 7
1　黒色土(2.5Y2/1)　しまり弱　粘性強

P 8
1　黒色土(2.5Y2/1)　しまり弱　粘性強
2　黄褐色土(2.5Y5/6)　しまり強　粘性弱

P 9
1　黒色土(2.5Y2/1)　しまり弱　粘性強
2　黄褐色土(2.5Y5/6)　しまり強　粘性弱

P10
1　黒色土(2.5Y2/1)　しまり弱　粘性強
2　黄褐色土(2.5Y5/6)　しまり強　粘性弱

P11
1　黒色土(2.5Y2/1)　しまり弱　粘性強
2　黄褐色土(2.5Y5/6)　しまり強　粘性弱

P12
1　黒色土(2.5Y2/1)　しまり弱　粘性強
2　黄褐色土(2.5Y5/6)　しまり強　粘性弱

P13
1　黒色土(2.5Y2/1)　しまり弱　粘性強

P14
1　黒色土(2.5Y2/1)　しまり弱　粘性強
2　黄褐色土(2.5Y5/6)　しまり強　粘性弱

P15
1　黒色土(2.5Y2/1)　しまり弱　粘性強
2　黄褐色土(2.5Y5/6)　しまり強　粘性弱

P16
1　黒色土(2.5Y2/1)　しまり弱　粘性強
2　黄褐色土(2.5Y5/6)　しまり強　粘性弱

0　2 m
(S＝1/50)

第120図　02-ＳＩ07Ａ柱穴

本住居跡は壁から離れた位置に主柱をもち、壁柱で壁板を保持する構造の住居である。３回建て替えを行う02-ＳＩ07Ａ・07Ｂ・08・09の中では最新段階に当たり、規模も最大となる。

遺　物　本住居跡に伴う遺物は検出できなかった。

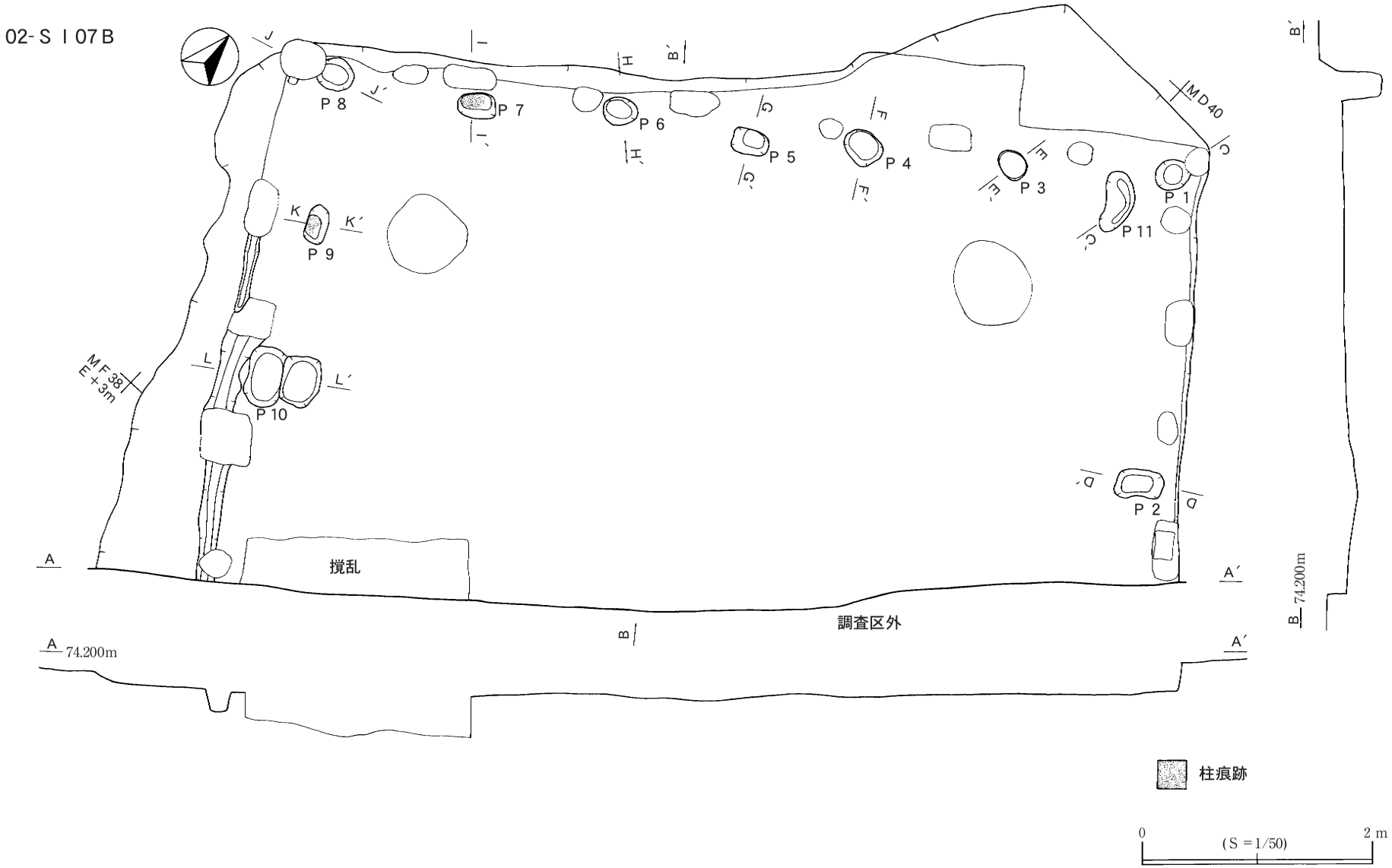
02-ＳＩ07Ｂ(第121図・122図、図版37)

遺　構　２回目の建て替えにより、02-ＳＩ08より規模を拡大した住居である。02-ＳＩ07Ａとはプラン及び規模がほぼ同じだが、壁際に配置する壁柱穴が若干内寄りに位置する。平面形を正方形と想定した場合、北西壁に直交する主軸方位はＮ－35°－Ｗになり、予測される住居面積が約59㎡で、特大形の住居である。Ｐ１を北隅、Ｐ８を西隅とした場合の北西壁の長さは約7.6ｍである。壁の検出面からの深さや立ち上がりは、02-ＳＩ07Ａのプラン内に収まるため不明である。

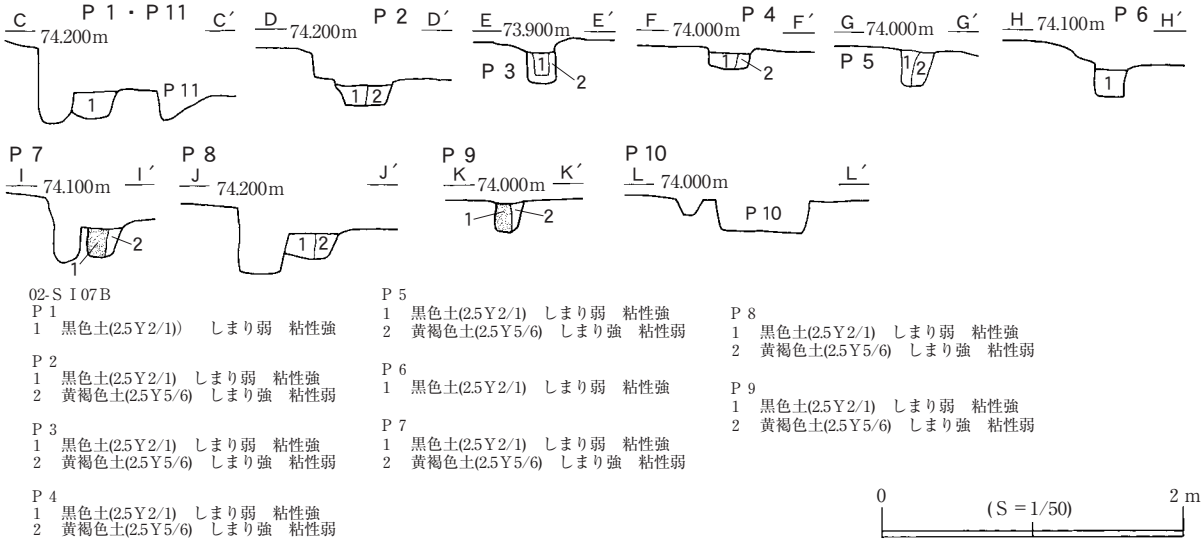
床面は、02-ＳＩ07Ａと同様に掘形底面の地山面を利用したとみられる。壁溝は確認できなかった。床面上で10個のピットを確認した。いずれも壁際に規則的に配置する壁柱穴で、これらにより壁板を保持していたと考えられる。なお、住居のプランや規模、柱穴の規模から考えて、02-ＳＩ07ＡＰ１・２と同じ位置に主柱穴を配置していた可能性が高い。

カマドは確認できなかったが、おそらく調査区外の南東壁部に設置するものと考えられる。

本住居跡は壁から離れた位置に主柱をもち、壁柱で壁板を保持する構造の住居である。３回建て替



第121図　02-ＳＩ07Ｂ



第122図　02-ＳＩ07Ｂ柱穴

えを行う02-ＳＩ07Ａ・07Ｂ・08・09の中では３段階目で、02-ＳＩ07Ａ構築時に解体したと考えられる。

遺　物　本住居跡に伴う遺物は検出できなかった。

02-ＳＩ08(第123図)

遺　構　１回目の建て替えにより、02-ＳＩ09より規模を拡大した住居である。平面形を正方形と想定した場合、北西壁に直交する主軸方位はＮ－35°－Ｗになり、予測される住居面積が約22㎡で、中形の住居とみられる。住居北隅と西隅を壁溝配置でみた場合、北西壁の長さは約4.6ｍである。壁の検出面からの深さや立ち上がりは、02-ＳＩ07Ａのプラン内に収まるため不明である。

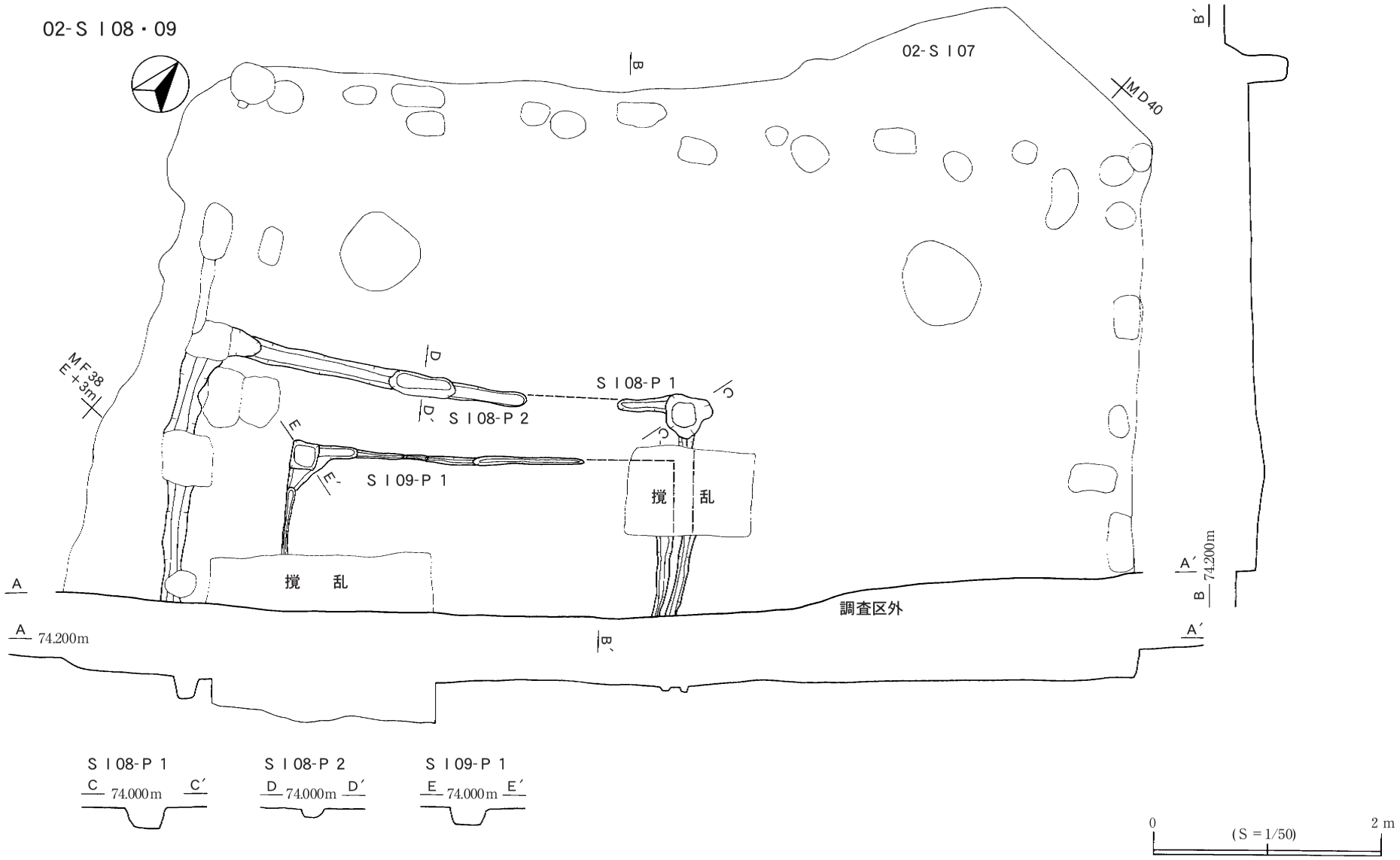
床面は、02-ＳＩ07Ａ・Ｂと同様に掘形底面の地山面を利用したと考えられる。壁溝は、北西壁の一部を除いて、調査した範囲では全周確認した。上場幅0.09～0.32ｍ、下場幅0.04～0.1ｍ、検出面からの深さ0.05ｍ前後の断面台形状である。壁溝内部で２個のピットを確認した。Ｐ１は住居北隅にある主柱穴である。西隅は02-ＳＩ07ＡＰ17がかかるため、本住居の柱穴は不明である。Ｐ２は北西壁中央部に配置する壁柱穴である。なおカマドは確認できなかったが、おそらく調査区外の南東壁部に設置するものと考えられる。

本住居跡は住居隅に主柱をもち、壁溝に壁板を配置する構造の住居である。３回建て替えを行う02-ＳＩ07Ａ・07Ｂ・08・09の中では２段階目で、02-ＳＩ07Ｂ構築時に解体したと考えられる。

遺　物　本住居跡に伴う遺物は検出できなかった。

02-ＳＩ09(第123図、図版37)

遺　構　02-ＳＩ08とは北東壁が最も近接している。平面形を正方形と想定した場合、北西壁に直交する主軸方位はＮ－35°－Ｗになり、予測される住居面積は約12㎡で、小形の住居になる。壁溝配置から予測される北西壁の長さは、約3.4ｍである。壁の検出面からの深さや立ち上がりは、02-ＳＩ07Ａのプラン内に収まるため不明である。床面は、02-ＳＩ07Ａ・Ｂと同様に掘形底面の地山面を利用したと考えられる。壁溝は、北西壁の一部を除いて、調査した範囲では全周確認した。上場幅0.05～0.14



第123図　02-ＳＩ08・09

ｍ、下場幅0.02～0.06ｍ、検出面からの深さは0.03ｍ前後である。

壁溝内部で１個のピットを確認した。住居西隅にある主柱穴である。北隅は撹乱により破壊されており不明である。なお、カマドは確認できないが、調査区外の南東壁部に設置したと考えられる。

本住居跡は住居隅に主柱をもち、壁溝に壁板を配置する構造の住居である。３回建て替えを行う02-ＳＩ07Ａ・07Ｂ・08・09の中では最古段階で、02-ＳＩ08構築時に解体したと考えられる。

遺　物　本住居跡に伴う遺物は検出できなかった。

02-ＳＩ11(第124図～127図、図版38・151)

遺　構　ＭＧ・ＭＨ46～48グリッドの第Ⅳ層中位で、灰白色砂や明黄褐色粘土を含む黒色土の広がりで確認した。本住居跡の立地点は台地上部平坦面で、ほとんど傾斜がない。02-ＳＩ12と重複するが、本住居跡の方が新しい。周辺には02-ＳＩ14・18・20、03-ＳＩ13・16がある。

堆積土は６層に分けたが、１・２層は黒色・黒褐色基調の明黄褐色粘土を含む土で、広範囲に渡って堆積しており、人為的な埋め戻しと考えられる。３・４層は出入り口施設に関わる堆積土で、３層がスロープ表面を整える粘土、４層がその斜面の基本形状を造る土である。５層は壁板裏込めの残存土、６層は貼床の土である。

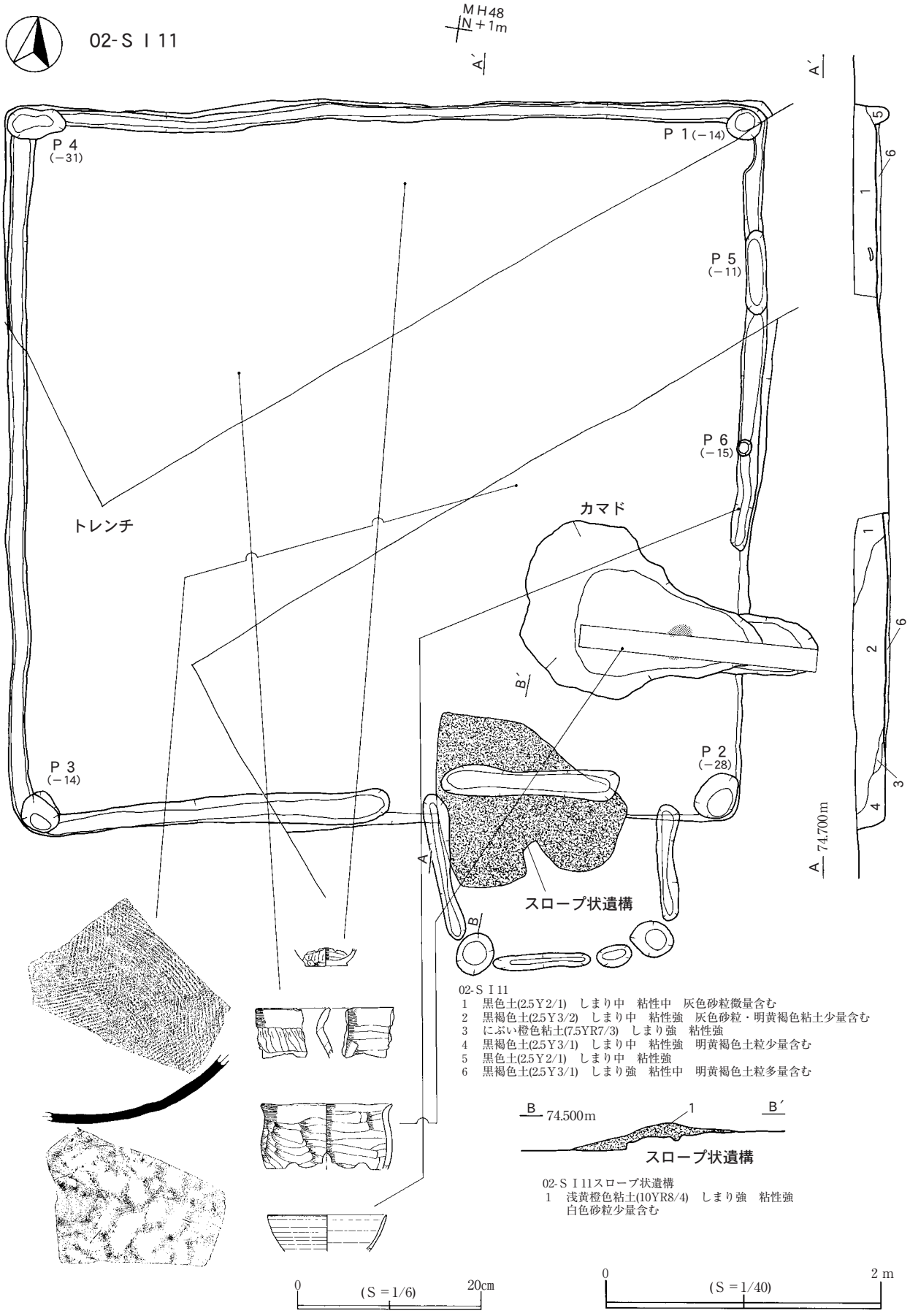
平面形はほぼ正方形で、カマドの付く壁に直交する主軸方位はＮ－82°－Ｅである。主軸とそれに直交するラインで測る住居面積は約29㎡で、大形の住居である。各壁の長さは、東壁約5.2ｍ、南壁約5.2ｍ、西壁約5.3ｍ、北西壁約5.5ｍである。壁の検出面からの深さは、北壁の残りの良いところで約0.18ｍで、立ち上がりはほぼ垂直である。

床面はほぼ全面に貼床を施す。壁溝はカマドとスロープ状遺構以外の全周で確認した。上場幅0.09～0.23ｍ、下場幅0.04～0.15ｍ、床面からの深さ0.1ｍ前後の断面台形状である。南壁沿いの南東隅付近には、スロープ状に橙色粘土を貼っている部分がある。位置や傾斜からみて出入り口施設と考えられる。なお、このスロープ状遺構の上場は、03-ＳＩ12堆積土の上部にのっている。スロープ状遺構の下部には、２個のピットと溝で構成される張り出しがある。住居壁直交方向で約1.2ｍ、住居壁平行方向で約1.7ｍの規模である。出入り口の痕跡とみられる２つの施設が上下に重なっており、造り替えがあったと考えられる。

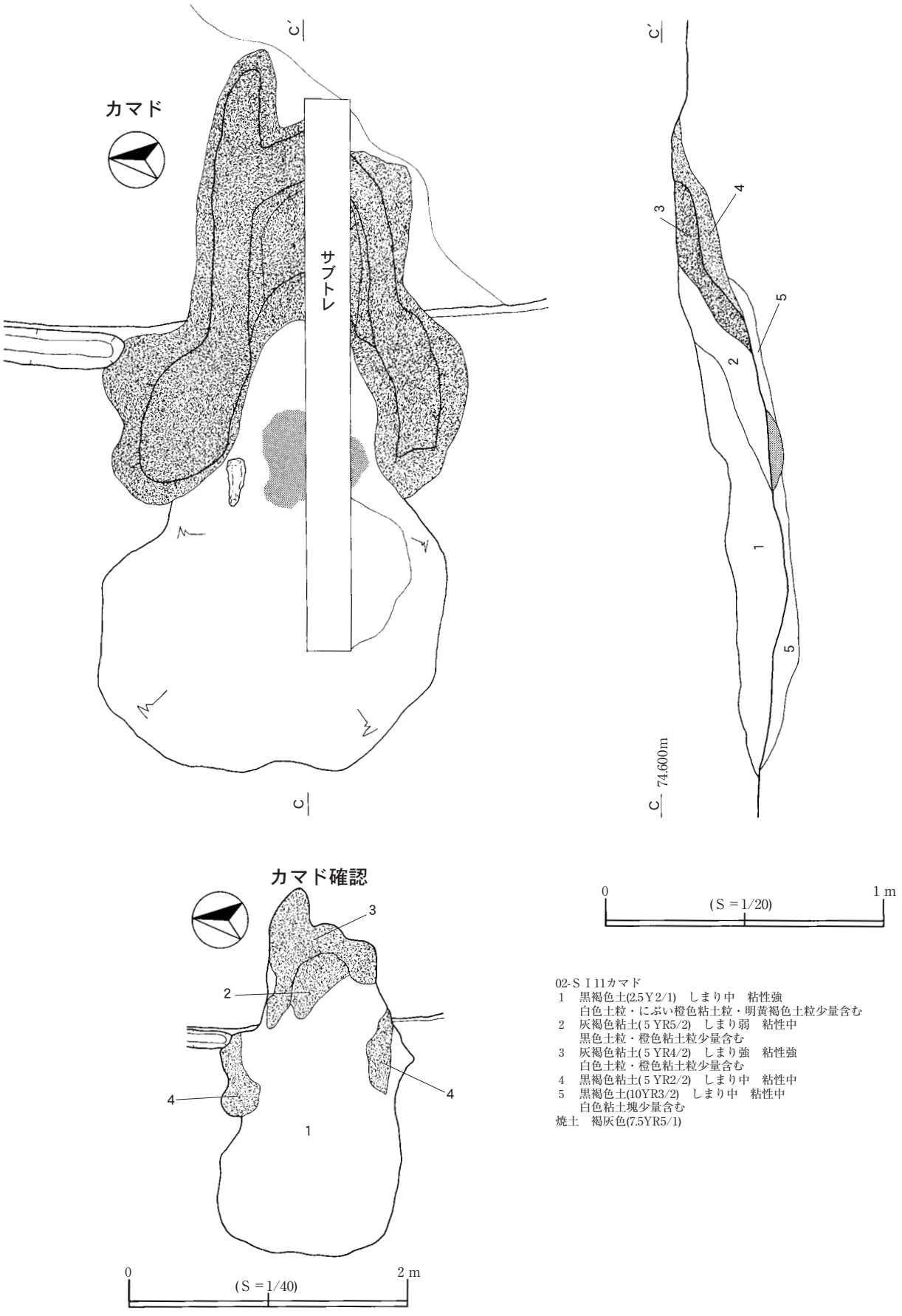
床面及び壁溝内で６個のピットを確認した。Ｐ１～４は住居四隅の主柱穴である。柱穴間の距離は各壁長に準じており、柱穴中心で測る柱穴間距離はＰ１－２間約4.9ｍ、Ｐ３－４間約5.0ｍ、Ｐ１－４間約5.2ｍ、Ｐ２－３間約5.0ｍである。Ｐ５・６は壁溝内にあり、壁板保持の補助柱と考えられる。

カマドは東壁の中央から南寄りの位置で、赤みを帯びた黒褐色土の広がりで確認した。確認できたのは、煙道の基部、袖、火床面、前庭部の粘土範囲である。５層に分けた堆積土のうち、１～３層は天井部の崩壊土と住居埋め立て時の造成土の互層である。５層はカマド前庭部から煙道までの基底面の、４層は袖などのカマド上部構造の構築粘土で、火床面はその５層上部における被熱範囲である。煙道末端から前庭部までの距離は約2.6ｍで、これに直交する袖の最大幅は約1.3ｍである。前庭部は、焚き口に当たる袖開放部前面の粘土範囲に相当するとみられる。火床面は不規則な形状の被熱範囲で、最大長0.38ｍ、被熱の深さは約0.06ｍである。

本住居跡は四隅に主柱をもち、東壁にカマドを設置する住居である。廃絶後は人為的に埋め戻して

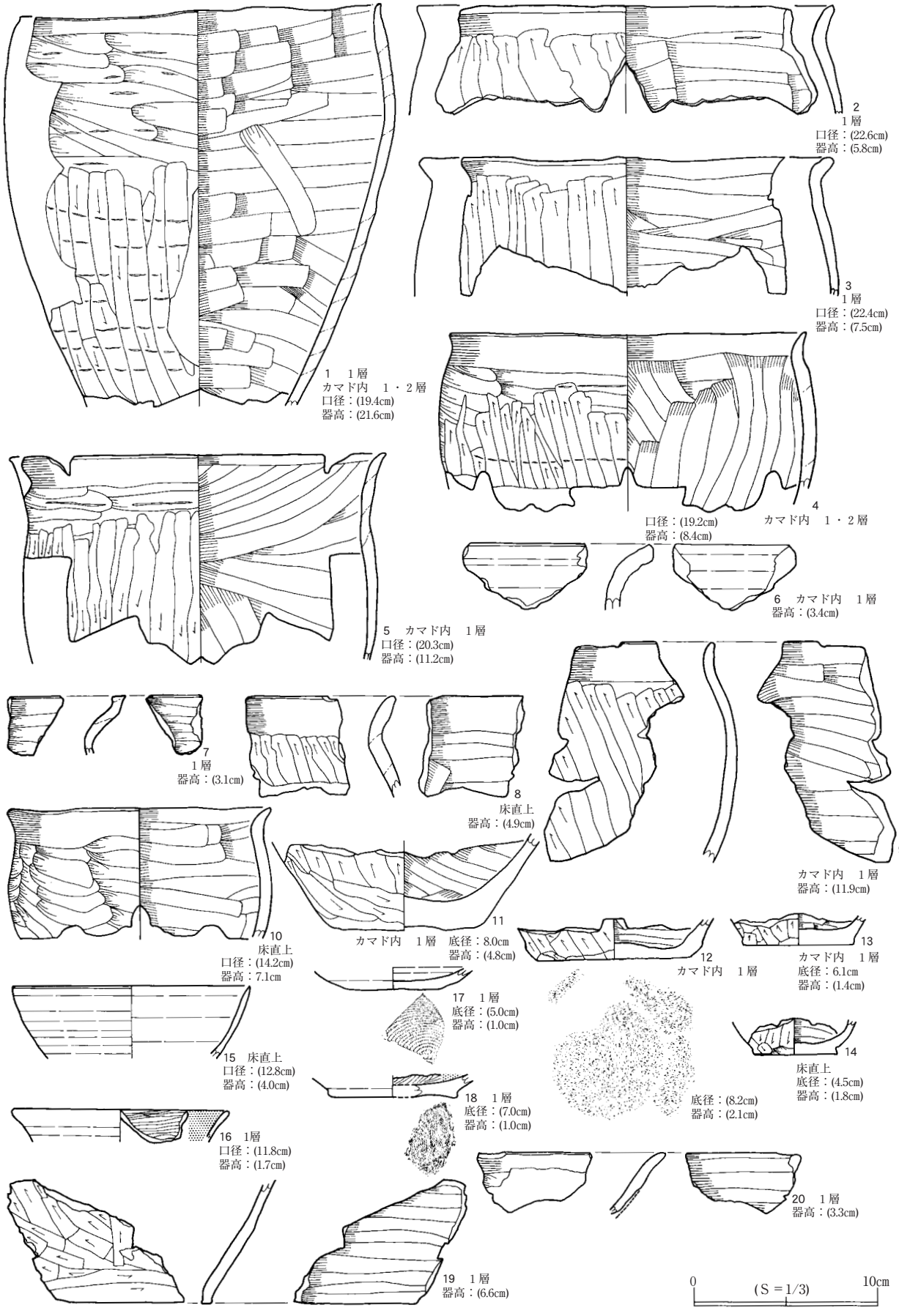


第124図　02-ＳＩ11・遺物出土状況

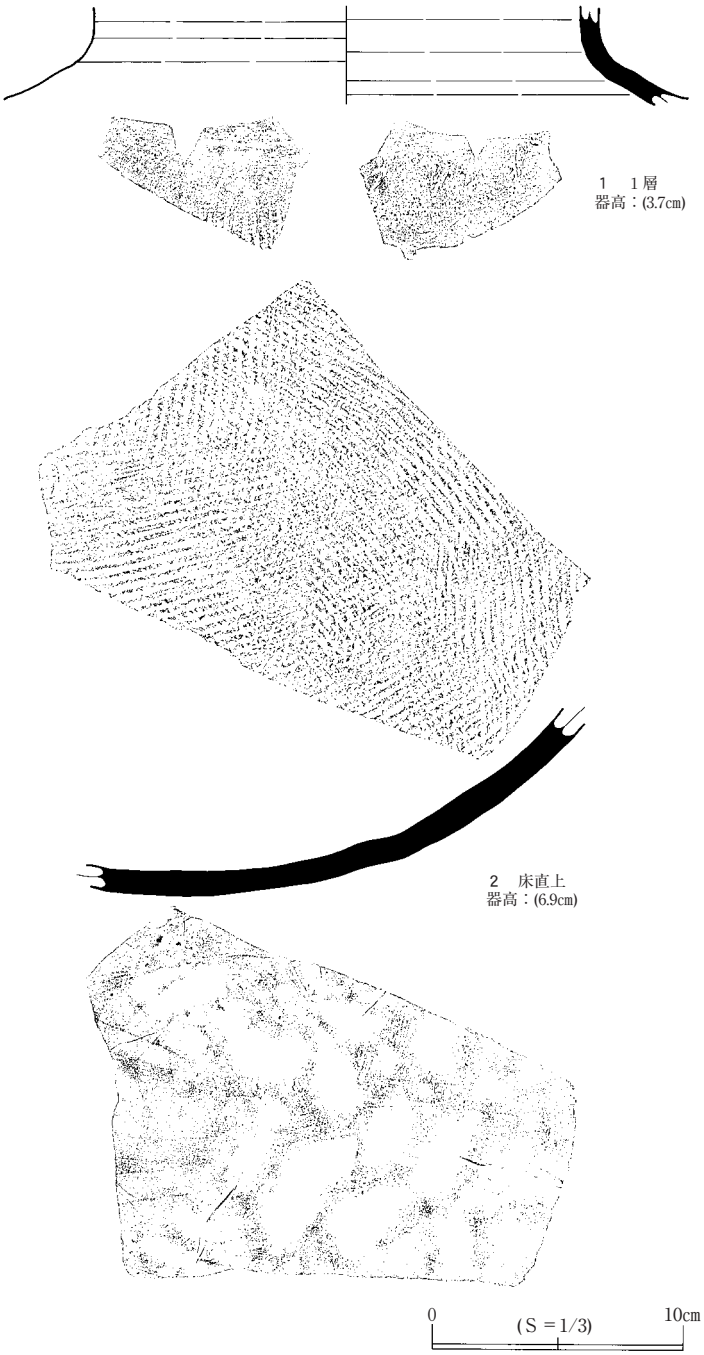


02-ＳＩ11カマド
1　黒褐色土(2.5Y2/1)　しまり中　粘性強
　白色土粒・にぶい橙色粘土粒・明黄褐色土粒少量含む
2　灰褐色粘土(5YR5/2)　しまり弱　粘性中
　黒色土粒・橙色粘土粒少量含む
3　灰褐色粘土(5YR4/2)　しまり強　粘性強
　白色土粒・橙色粘土粒少量含む
4　黒褐色粘土(5YR2/2)　しまり中　粘性中
5　黒褐色土(10YR3/2)　しまり中　粘性中
　白色粘土塊少量含む
焼土　褐灰色(7.5YR5/1)

第125図　02-ＳＩ11カマド



第126図　02-ＳＩ11出土遺物１



第127図　02-ＳＩ11出土遺物２

いる。

遺　物(第126図・127図)　住居跡内から土師器甕・坏・鍋・甑、須恵器甕が出土した。土師器甕は口縁部が28点、底部が10点出土しており、そのうち比較的大型の口縁部資料10点、底部資料４点を図示した。図示しなかったものを含めた甕の口縁部分類別数量はＡ類(２点)、Ｂ類(２点)、Ｃ類(16点)、Ｄ類(２点)、分類不能(６点)で、底部分類別数量は砂底(６点)、ケズリ(４点)の内訳になる。口縁部Ａ類とＢ類はいずれも小破片であり、基本的なセットはＣ・Ｄ類になる。底部も砂底か、またはケズリ再調整のものに集約される。

遺物の出土状況ではカマド周辺からの出土が多いが、住居北壁から中央部にかけても散発的に出土する(第124図)。出土地点を明示できなかったが、前者には126図１のように完形に近いものや大型の破片があり、これらはカマド廃絶時に一括して遺棄したものと考えられる。後者の出土遺物は、126図９・14などの小破片が多く、本住居を埋め立て造成する土の中に含まれるもの、または埋め立てに伴い投棄したものと考えられる。

126図１～９は中・大型の土師器甕である。２・３・５は口縁部が外反または外折する器形で、５は口縁部に、２・３は胴上部に最大径を有する。５は頸部のくびれが弱く、外面は頸部以下にケズリを、内面も横位・斜位ヘラナデを施しており、全体に粗雑な作りである。２・３はいずれも外面縦位ケズリ、内面横位ヘラナデ調整である。126図１は底部以外の全体形を窺える資料で、胴下部から直線的に外傾して最大径をもつ胴上部に至り、胴上部から内湾して口縁部がわずかに直立気味に反る器形である。126図４もほぼ同様な器形だが、やや口縁部の反りが強く、頸部のくびれが明確である。１は外面の胴下部に浅いケズリを施すが、胴上部はユビナデにとどめており、全体に輪積痕が目立つ。内面は工具の当たりの段差をとどめるほどの強さで、横位ヘラナデ調整を施す。４も外面の縦位ケズリとユビナデが輪積痕を消しきれていないが、内面は縦位ヘラナデで丁寧に調整する。126図６はロクロ整形の資料で、

口縁部が外反し、口唇は面取りして角頭状になる。126図８・９は口縁部が直立気味またはわずかに外反する器形で、いずれも外面縦位ケズリ、内面は横位ヘラナデ調整である。126図７は小破片だが、珍しい器形なので図示した。口縁部が頸部から外反して屈曲し、直立気味に内湾する器形で、口唇は平滑に面取りしてある。

126図10は小型の土師器甕で胴部中位に最大径をもち、頸部が弱くくびれて、口縁部が短く外反する。内外面共に横位のユビナデ調整である。126図11～14は土師器甕の底部である。12が砂底、11・13・14はケズリ再調整である。12は底部から直線的に外傾して立ち上がり、13はやや直立してから外傾し、14は底部外縁が張り出して胴下部が丸みを帯びる形状である。13・14は底径が小さく、小型土器になるかもしれない。

126図15～18は土師器坏で、15・16がＡ類、17・18がＢ類である。15は口縁部まで弱く内湾する器形で、器壁が比較的薄い。外面のロクロ目は緻密で平滑に仕上げている。17は外反する口縁部の破片である。16・18は回転糸切痕を残す底部で、18は底部外縁が張り出す。126図20は土師器鍋の破片で、外面のほとんどは剥落しており、内面の横位ユビナデ調整のみ確認できる。126図19は土師器甑とみられる破片で、底部はケズリにより平坦に仕上げており、胴部にむけて直線的に外傾する。外面は底部付近が横位の、それ以上には斜位のケズリを、内面は横位ヘラナデ調整である。

127図１・２は須恵器甕である。１は頸部付近の資料で、ロクロ目状の整形痕が認められる。２は底部付近の破片で、内外面にタタキの痕跡が認められる。

03-ＳＩ12(第128図～130図、図版47)

遺　構　ＭＦ46・47、ＭＧ45～47、ＭＨ46・47グリッドの第Ⅳ層中位で、地山土粒を含む黒色土の広がりで確認した。本住居跡の立地点は台地上部平坦面の中央部で、ほとんど傾斜がない。02-ＳＩ11、03-ＳＩ13と重複し、いずれよりも本住居跡の方が古い。周辺には02-ＳＩ04・05・14・18・20・24・25、03-ＳＩ06・104・106・208がある。

堆積土は３層に分けたが、１層は黒色基調の地山土塊を含む土で、広範囲に渡って堆積することから、人為的な埋め戻しの土と考えられる。２層は壁板裏込めの残存土、３層は貼床の土である。

平面形はほぼ正方形で、南壁に直交する主軸方位はＮ－17°－Ｗである。主軸とそれに直交するラインで測る住居面積は約34㎡で、大形の住居である。各壁の長さは、東壁約5.8m、南壁約5.8m、西壁約5.6m、北西壁約6.0mである。壁の検出面からの深さは、東壁の残りの良い部分で0.2～0.3mで、立ち上がりはほぼ垂直である。

床面は南壁沿いに貼床を施すが、基本的には掘形底面の地山上面を利用しており、全体的にほぼ平坦である。貼床は、地山直上に黒色土を敷き、上部に地山土塊混合の黒色土が覆う傾向にある。壁溝は住居北東隅を除いて全周で確認した。上場幅0.2～0.4m、下場幅0.08～0.2m、床面からの深さ0.1～0.2mの断面台形状である。

床面及び壁溝内で16個のピットを確認した。Ｐ１～３は住居隅の壁溝内に規則的に配置する主柱穴である。住居南西隅は03-ＳＩ13が切るが、おそらく同様に柱穴が存在したと考えられる。その想定の上で、柱穴中心で測る柱穴間距離はＰ１－２間約5.5m、Ｐ３－南西隅間約5.5m、Ｐ１－３間約5.7m、Ｐ２－南西隅間約5.5mである。Ｐ４～16は、壁際または壁溝内に規則的に配置する壁板保持の壁柱穴

である。各壁柱穴の間隔は0.9～1.4ｍで、平均では約1.2ｍとなる。隅柱と壁中央部の柱穴掘形中心を結ぶ線よりも内側に掘形中央が位置し、壁溝幅中央よりも屋内寄りに掘り込んでいる。

カマドは南壁の中央から西寄りの位置で、火床面と考えられる焼土面と構築礫の分布で確認した。煙道側を03-ＳＩ13が破壊しており、本来の形態や規模は不明である。火床面は長径約0.6ｍ、短径約0.48ｍの不整な楕円形状の被熱範囲で、主軸方位は住居主軸方位に直交する。

カマドの他に、住居北東隅で焼土塊の集中する部分を確認した。堆積土は４層に分けたが、１層のにぶい褐色土や３層のにぶい黄橙色土が層状に堆積しており、人為的な構築物とみられる。隣接する02-ＳＩ11のカマド煙道先端部に位置することから、一連の構造物である可能性が高い。

本住居跡は四隅に主柱をもち、南壁にカマドを設置する住居である。廃絶後は人為的に埋め戻しており、02-ＳＩ11や03-ＳＩ13構築段階に埋め立て造成を行ったと考えられる。

遺　物(第130図)　住居跡内から土師器甕・坏・鍋、須恵器が出土した。須恵器は胴部小片のため図示しなかった。土師器甕は口縁部が19点、底部７点出土しており、そのうち比較的大型の口縁部資料５点、底部資料２点を図示した。図示しなかったものを含めた甕の口縁部分類別数量はＡ類(２点)、Ｂ類(２点)、Ｃ類(７点)、Ｄ類(８点)で、底部分類別数量は砂底(７点)の内訳になる。口縁部Ａ類とＢ類はいずれも小破片であり、基本的なセットはＣ・Ｄ類で、Ｃ類でも口縁部の反りが短いものが主流になる。底部は砂底のみである。

130図１～３は中・大型の土師器甕である。３は頸部でくびれて口縁部が短く外反する器形で、全体に厚手であり、口縁部にかけて肥厚する。外面縦位ケズリ、内面横位ヘラナデ調整である。これに比べて１・２は薄手の作りで、口縁部が直立気味になる器形である。１は寸胴型で、外面縦位ケズリ、内面横位ヘラナデ調整である。２は１に比べて胴部への張り出しが強く、相対的に口縁部が内傾して見える。外面はユビナデと指の押さえが認められ、内面は横位ヘラナデ調整である。

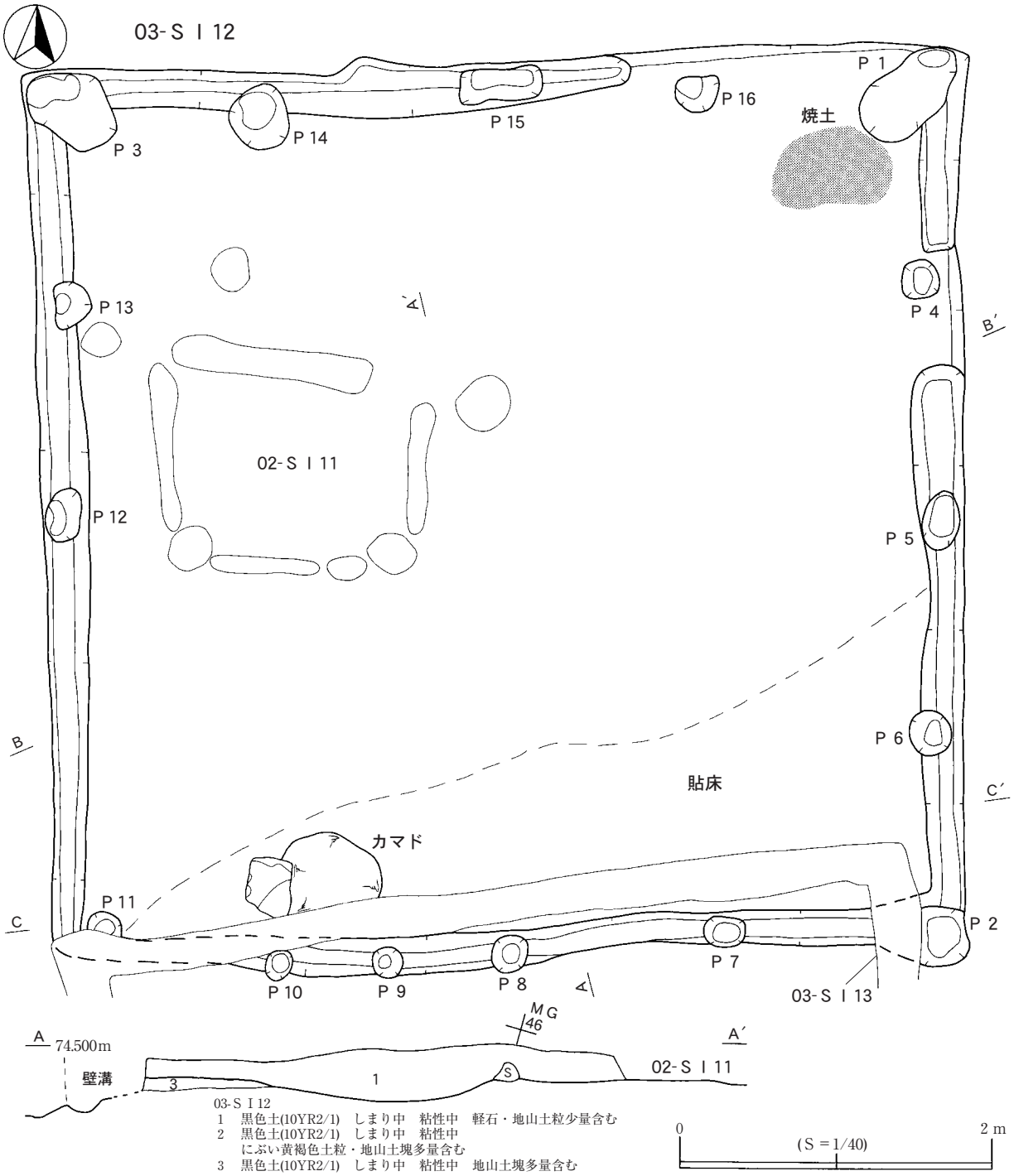
130図４は比較的小型の土師器甕で、頸部が屈曲して口縁部が外反する器形である。口唇にかけてやや薄くなる。外面縦位ケズリ、内面横位ヘラナデ調整だが、内外面共に輪積痕をとどめる。130図５は口縁部が内湾する器形の破片資料である。口端がわずかに外反する。130図６・７は底部資料で、いずれも砂底で底部外縁が張り出す形状になり、外面横位ユビナデ、内面横位ヘラナデ調整である。６は底部中央部が山形に厚くなる。

130図８・９は土師器坏Ｂ類である。どちらも口縁部が弱く外反する器形で、外面のロクロナデは平滑に仕上げてある。内面のミガキは、８が胴下部まで横位に、９が胴下部で放射状に上部で横位に施している。130図10は土師器鍋で、口縁部まで直線的に外傾する器形で、口唇が溝状に窪む形状である。

03-ＳＩ13(第131図・132図、図版48)

遺　構　ＭＥ45、ＭＦ・ＭＧ44～46グリッドの第Ⅳ層中位～第Ⅵ層上面で、地山土塊を含む黒色土の広がりで確認した。住居南側は地山直上まで削平を受けていた。本住居跡の立地点は台地上部平坦面の中央部で、ほとんど傾斜がない。02-ＳＩ12と重複し、本住居跡の方が新しい。周辺には02-ＳＩ04・05・11・14・18・20・24・25、03-ＳＩ06・104・106・208がある。

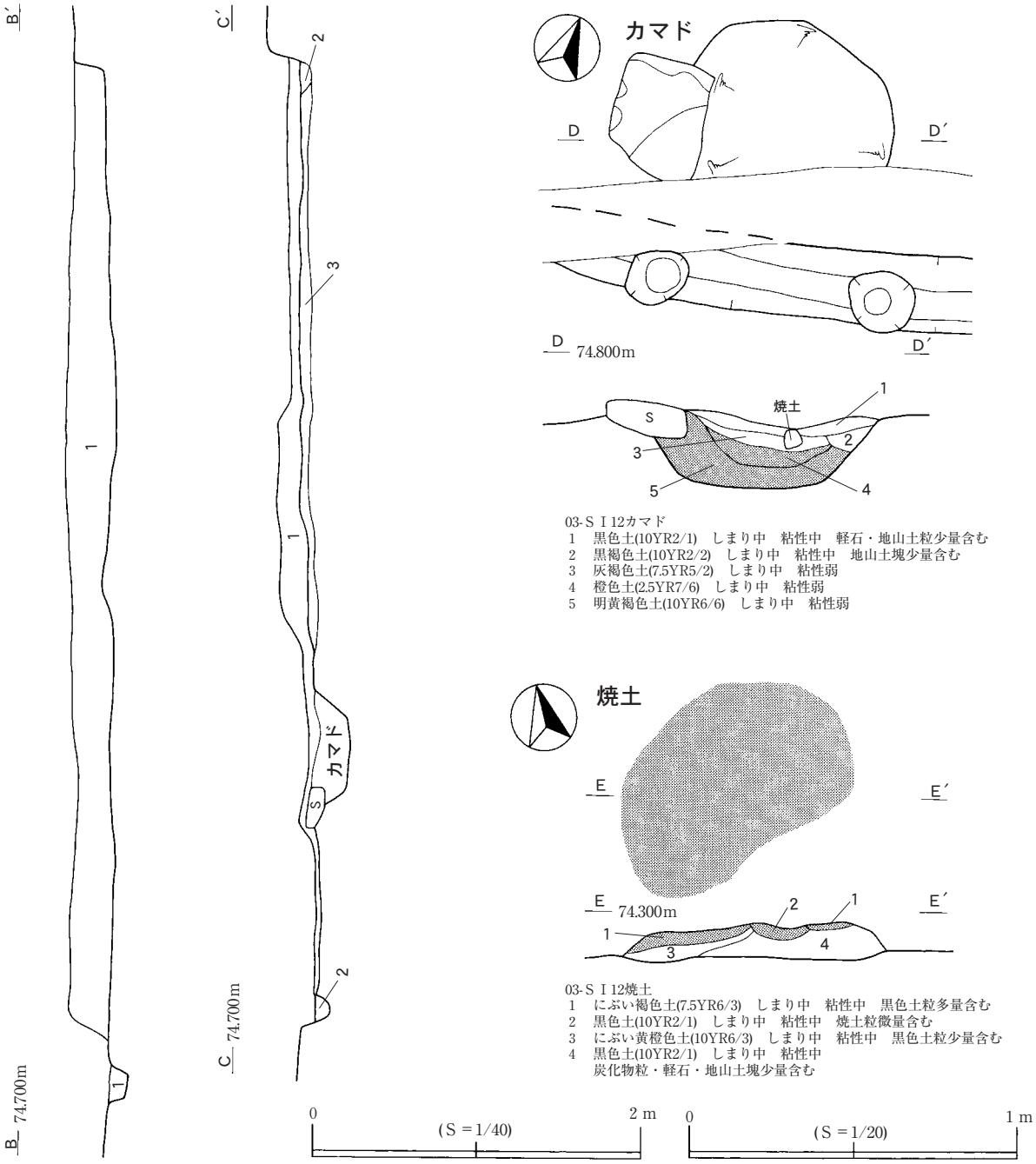
堆積土は８層に分けた。１層は住居母屋部分の広範囲に堆積することから、人為的な埋め戻しの土



第128図　03-ＳＩ12

と考えられる。２～５層は張り出しＢ内部に特徴的に認められ、３・４層上面が平坦になっている。２層は地山土粒を多量に含むことから、段階的に埋め立てたと考えられる。６・７層は壁溝内堆積土で、７層が裏込めで６層が壁板の腐植土と考えられる。８層は貼床の土である。

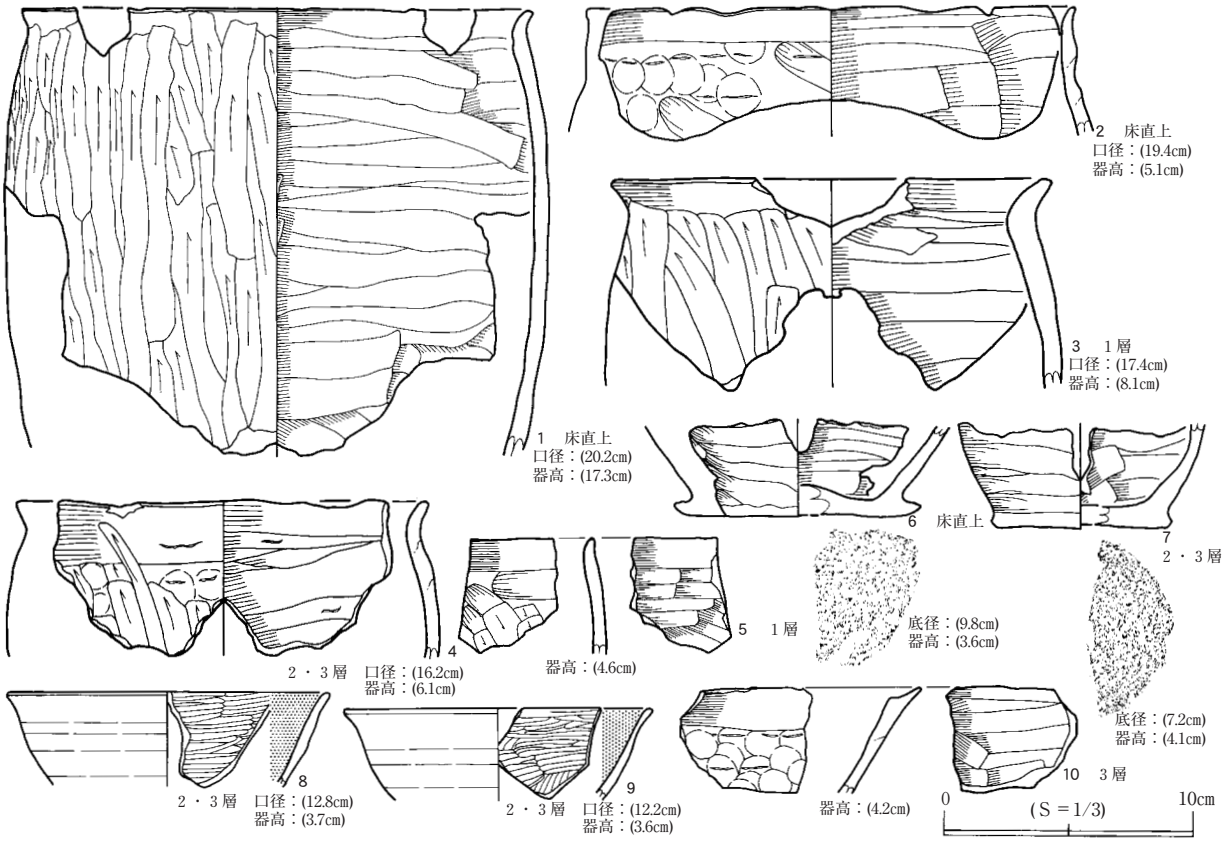
平面形は北東－南西方向にわずかに長い長方形で、カマドの付く壁に直交する主軸方位はＮ－23°－Ｗである。主軸とそれに直交するラインで測る住居面積は約27㎡で、大形の住居である。各壁の長さは北東壁約5.1m、南東壁約5.2m、南西壁約5.2m、北西壁約5.5mである。壁の検出面からの深さは、残りの良い北東壁では0.2m前後で、立ち上がりはほぼ垂直である。なお北東壁と南西壁には、



第129図　03-ＳＩ12・カマド・焼土

本住居跡に伴うとみられる張り出しがある。北東壁側の張り出しＡは、当初別遺構と捉えていたが、配置からみて本住居に伴うと判断した。四方を巡る溝と中央部のピットで構成され、溝で囲まれる範囲は、住居壁直交方向で約1.2m、住居壁平行方向で約1.8mである。南東壁側の張り出しＢは、２個のピットと溝で構成される。溝で囲まれる範囲は、住居壁直交方向で約2.0m、住居壁平行方向で約2.2mである。堆積土から判断して、張り出しＡが新しく、張り出しＢが古いことが分かり、仮に張り出しが出入り口の痕跡とすれば、出入り口が南西壁から北東壁へと移ったと考えられる。

床面は北西壁沿いと東隅付近に貼床を施すが、基本的には掘形底面の地山上面を利用しており、全体的にほぼ平坦である。北壁沿いは03-ＳＩ12の埋め立て範囲を含んでいる。壁溝は全周で確認した。上場幅0.2～0.32m、下場幅0.06～0.14m、床面からの深さ0.2～0.25mの断面台形状である。床面、壁溝



第130図　03-ＳＩ12出土遺物

内部、張り出し部で合計18個のピットを確認した。Ｐ１～３は住居隅の壁溝内に規則的に配置する主柱穴である。住居東隅は明確でないが、壁溝底面を利用したと考えられる。その想定を基に柱穴中心で測る柱穴間距離は、Ｐ１－東隅間約4.8m、Ｐ２－３間約4.9m、Ｐ１－３間約5.1m、東隅－Ｐ２間約5.0mである。Ｐ４～13には、壁際または壁溝内に規則的に配置する壁板支持の補助柱を据えたとみられる。

カマドは南東壁の中央から南西寄りの位置で、火床面とみられる被熱範囲で確認した。上部構造は全て削平されており、全く残存していなかった。火床面は長径約1.0m、短径約0.75mの不整な楕円形状の被熱範囲で、地山上面を利用したと考えられる。

住居中央部からやや北東寄りの位置に、鍛冶炉とみられる焼土範囲を確認した。確認面が本来の使用面以下とみられ、その根拠を示す情報に乏しいが、１層が砂鉄を多く含むことから可能性が高いと考えられる。

本住居跡は四隅に主柱をもち、南壁にカマドを設置する住居である。出入り口とみられる張り出しは、造り替えが想定される。廃絶後は人為的に埋め戻しているが、これは周辺部の状況から判断して、この地点が集落内において住居以外の施設を設置する場所として、利用変更がなされたためと考えられる。

遺　物(第132図)　住居跡内から土師器甕・鍋・甑が出土した。土師器坏や須恵器も出土しているが、小破片のため図示しなかった。土師器甕も口縁部が11点、底部が３点出土しているが、ほとんどが小破片であり、図示できたのは口縁部破片１点のみである。なお図示しなかったものを含めた甕の口縁部分類別数量はＡ類(１点)、Ｂ類(０点)、Ｃ類(３点)、Ｄ類(２点)、分類不能(５点)で、底部分類別数量

は砂底(１点)、ナデ(１点)、分類不能(１点)の内訳になる。

132図１は土師器甕の口縁部破片で、胴上部が張り出し、頸部が直立気味に立ち上がり、口縁部が外反する器形である。外面は斜位のユビナデ、内面は横位のヘラナデ調整である。132図２は土師器鍋で、直線的に外傾して口縁部が外反する器形である。外面はユビナデ後に縦位ケズリ、内面は横位ヘラナデ調整である。132図３は土師器甑とみられる破片で、開口する底部が内削ぎ状に平滑に面取りしてある。外面横位のケズリ、内面横位ヘラナデ調整である。

02-ＳＩ14(第133図～135図、図版39・149)

遺　構　ＭＩ48・49、ＭＪ49グリッドの第Ⅳ層中位で、地山土塊を含む黒色土の広がりで確認した。本住居跡の立地点は台地上部平坦面である。02-ＳＩ25に付属する建物が近接しており、おそらく前後関係があると考えられるが、切り合い関係などは確認できなかった。しかし、02-ＳＤ02を02-ＳＩ25の付属施設とみた場合は本住居跡が古くなる。周辺には02-ＳＩ11、03-ＳＩ15・16がある。

堆積土は３層に分けた。竪穴掘り込みを埋め尽くす１層は、本住居跡廃絶後に埋め立て造成した土である。この土の中には、多量の礫が一緒に投棄してあった(第133図)。２層は壁溝内堆積土で、裏込め土が壁溝上部にややオーバーフローしており、住居廃絶時に壁板を抜き、それに伴い裏込めの土が溢れたとみられる。３層は壁溝掘形の角を強化するための部分的な貼床である。

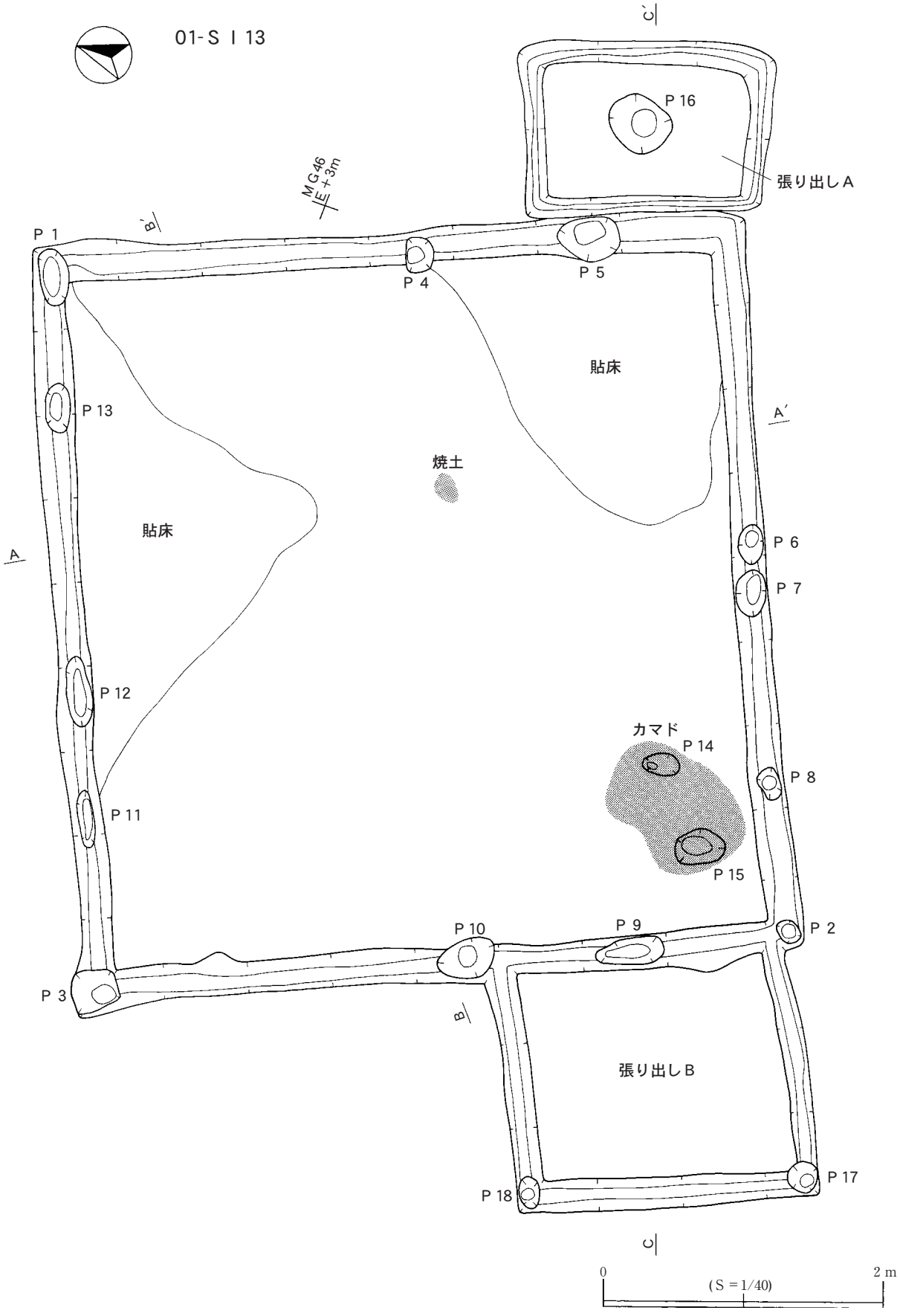
平面形は北西－南東方向に長い長方形で、南西壁の中心部がやや西へ膨らむ点が特徴的である。カマドの付く壁に直交する主軸方位はＮ－75°－Ｅである。主軸とそれに直交するラインで測る住居面積は約11㎡で、小形の住居である。各壁の長さは、北東壁約3.4m、南東壁約3.4m、南西壁約3.4m、北西壁約3.0mである。壁の検出面からの深さは概ね0.1～0.15mで、立ち上がりはほぼ垂直である。

床面は掘形底面の地山面を基底面にしており、貼床は壁溝沿いにのみ確認できる。壁溝は全周で確認した。上場幅0.08～0.12m、下場幅0.03～0.08m、床面からの深さ0.06～0.1mの断面台形状である。床面及び壁溝内で８個のピットを確認した。Ｐ１・３～５は住居四隅の主柱穴である。柱穴間の距離は各壁長に準じており、柱穴中心で測る柱穴間距離はＰ１－３間約3.1m、Ｐ４－５間約3.1m、Ｐ１－５間約2.9m、Ｐ２－４間約3.2mである。Ｐ２は壁溝内にあり、壁板保持の補助柱を据えたと考えられる。

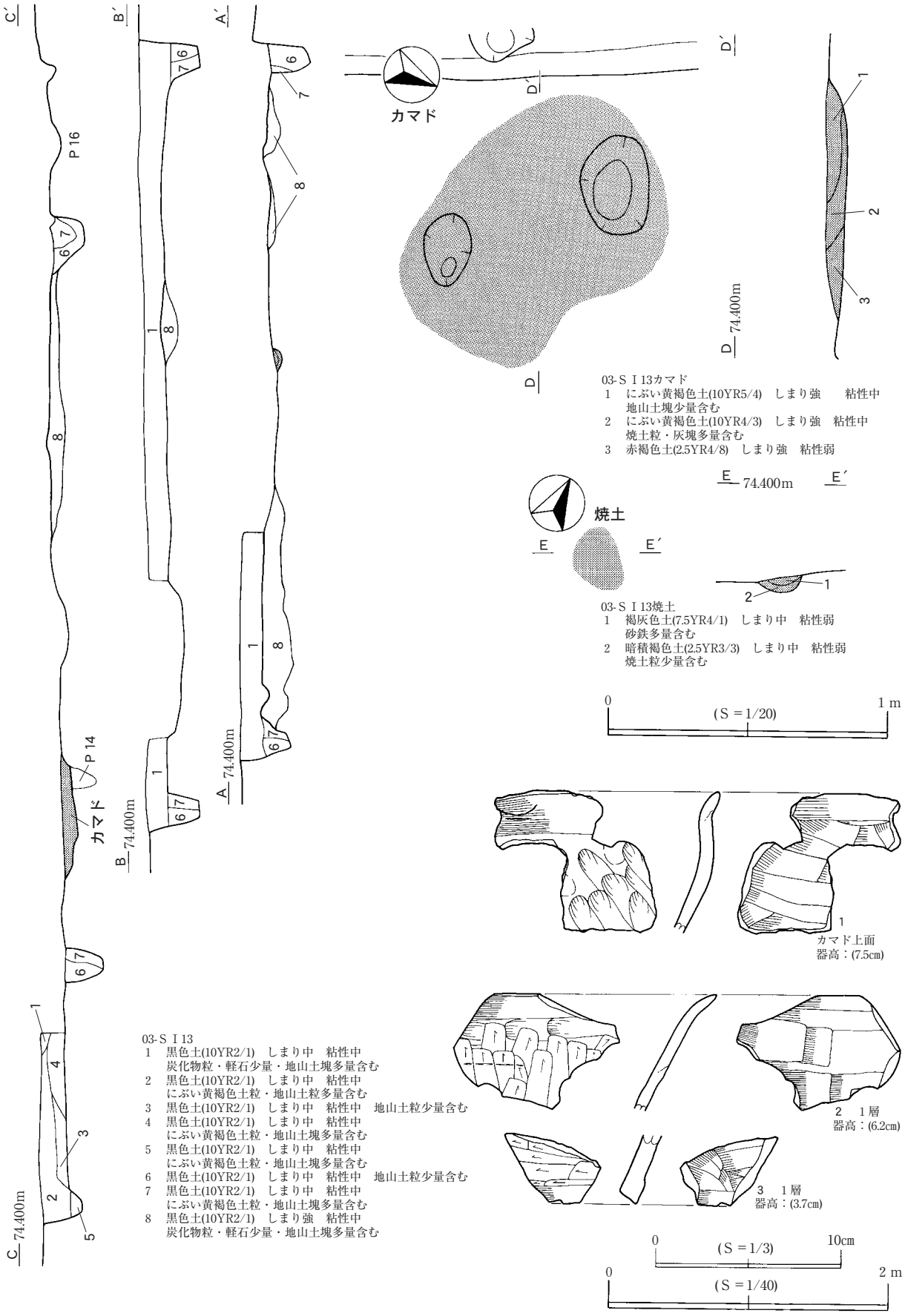
カマドは北東壁の中央から北西寄りの位置で、黄褐色系粘土の広がりで確認した。確認できた施設は袖と火床面である。10層に分けた堆積土のうち、１～９層は天井部の崩壊土と住居埋め立て時の造成土の互層である。10層はカマド基底部構築土である。カマド袖の状況から、１・７層はカマド天井材の崩落土とみられる。北東壁と袖末端までは約0.55mで、これに直交する最大幅は約0.95mである。火床面は不整な円形状の被熱範囲で、径0.35m前後である。

本住居跡は四隅に主柱をもち、北東壁にカマドを設置する住居である。廃絶後は人為的に埋め戻すが、上部に02-ＳＤ02がかかっており、これが02-ＳＩ25に関わる施設とした場合、本住居が古いという前後関係になる。

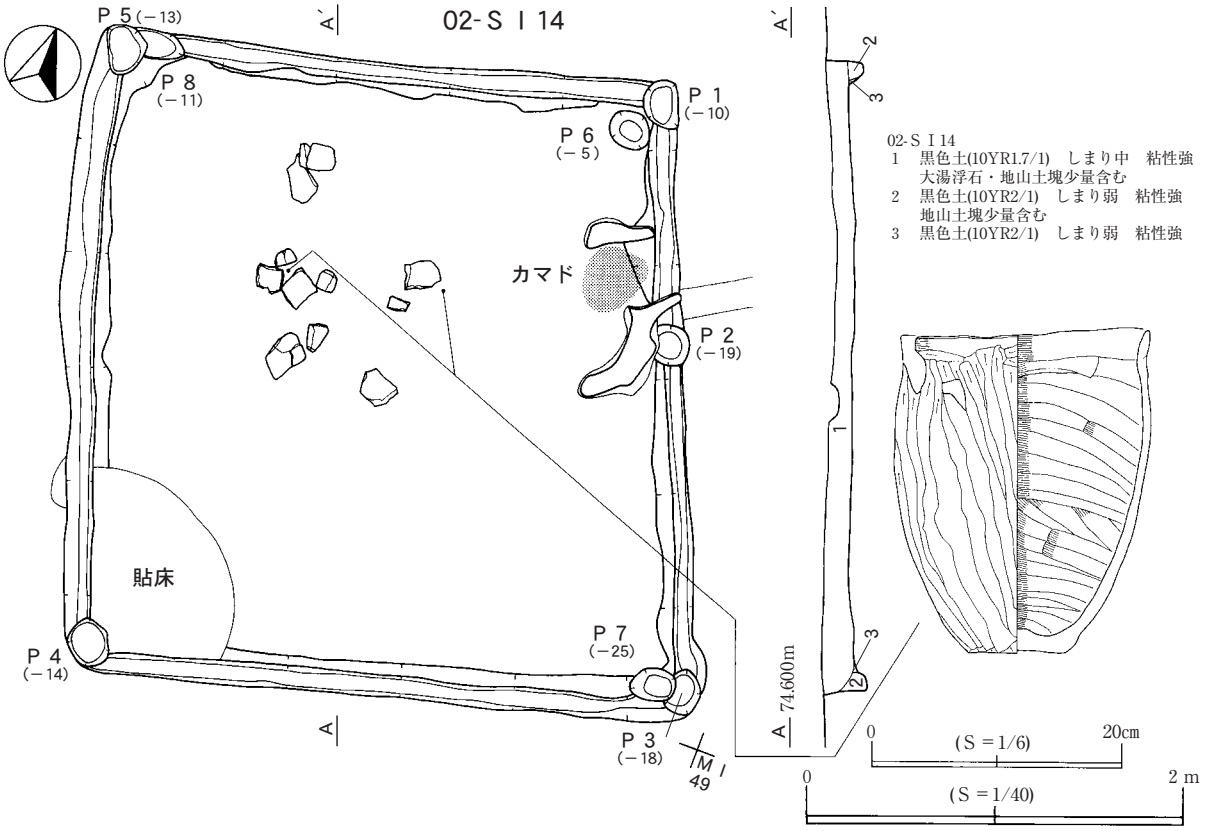
遺　物(第135図)　住居跡内から土師器甕・坏、須恵器壺が出土した。土師器甕は口縁部が18点、底部が７点出土しており、そのうち比較的大型の口縁部資料６点、底部資料３点を図示した。図示しなかったものを含めた甕の口縁部分類別数量はＡ類(１点)、Ｂ類(１点)、Ｃ類(10点)、Ｄ類(１点)、分類不能



第131図　03-S I 13



第132図　03-ＳＩ13・カマド・出土遺物

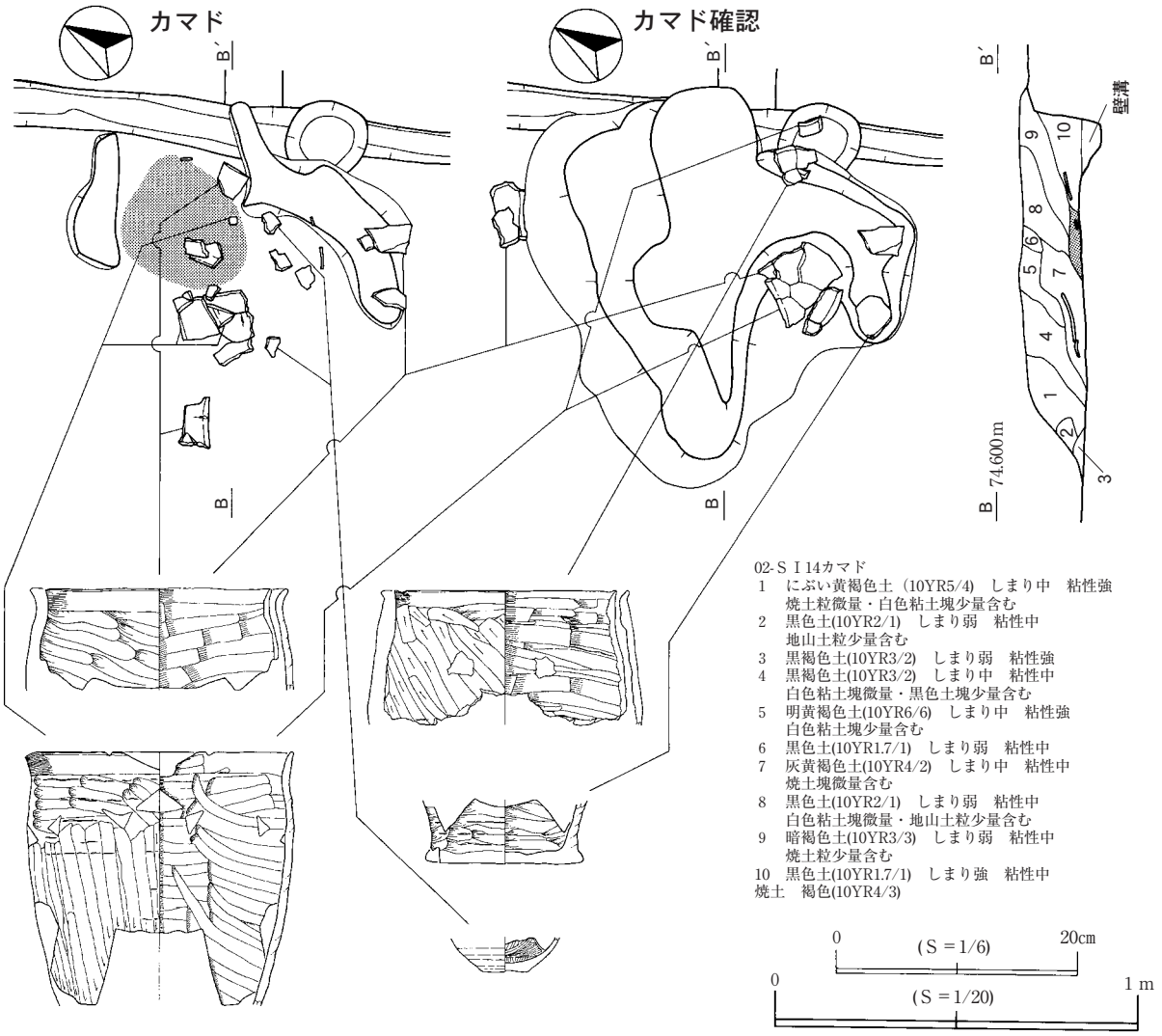


第133図　02-ＳＩ14・遺物出土状況

(５点)で、底部分類別数量は砂底(４点)、ケズリ(２点)、分類不能(１点)の内訳になる。Ａ類の135図５と、Ｂ類の135図６は小破片であることから、口縁部がわずかに外反するＣ類が主体であり、底部では砂底とケズリ再調整が多い。

遺物の出土状況では、住居中央部の礫集中部とカマド周辺の２か所に集中がみられる。前者に属するのは、135図１の１個体で、住居埋め立て時に一括投棄したものである。この他はカマド周辺部から出土しており、比較的大型の破片がカマド崩落土層中に混在することから、カマド廃絶時に一緒に遺棄したものと考えられる(第134図)。

135図１～４は大型の土師器甕である。１は全体形状が窺える資料で、底部はケズリにより再調整しており、胴下部から口縁部まで緩く内湾して立ち上がり、頸部でわずかに屈曲して口縁部が直立気味になる。口唇は丸みを帯びる。外面縦位ケズリ、内面横位ヘラナデ調整である。器壁はやや厚めである。３も１とほぼ同じ器形だが、やや器壁が薄く口唇を平滑に仕上げる。外面の縦位ケズリは浅く、胴上部の横位ユビナデ部分同様に輪積痕をとどめる。内面は横位ヘラナデ調整である。２は胴上部に最大径を有し、頸部がくびれて口縁部が外反する。外面は横位ユビナデ、内面は横位ヘラナデ調整である。４は胴部中位に最大径を有し、口縁部に向けて直線的に内傾し、口端がわずかに外反する器形である。外面は斜位ケズリ、内面は横位ヘラナデ調整である。135図５・６は土師器甕口縁部の小破片である。５はロクロ目を残し、頸部から外反して口端が直立内湾する。６は胴部から内湾し、頸部で段状に屈曲して、口縁部がわずかに外反する器形で、外面縦位ケズリ、内面横位ヘラナデ調整である。135図７・８は土師器甕の底部で、７はケズリ再調整、８は砂底で底部外縁が張り出す。７は底部から直線的に外傾して立ち上がる形状で、器壁が厚く特に底部中央部がさらに器壁を増す傾向にあ



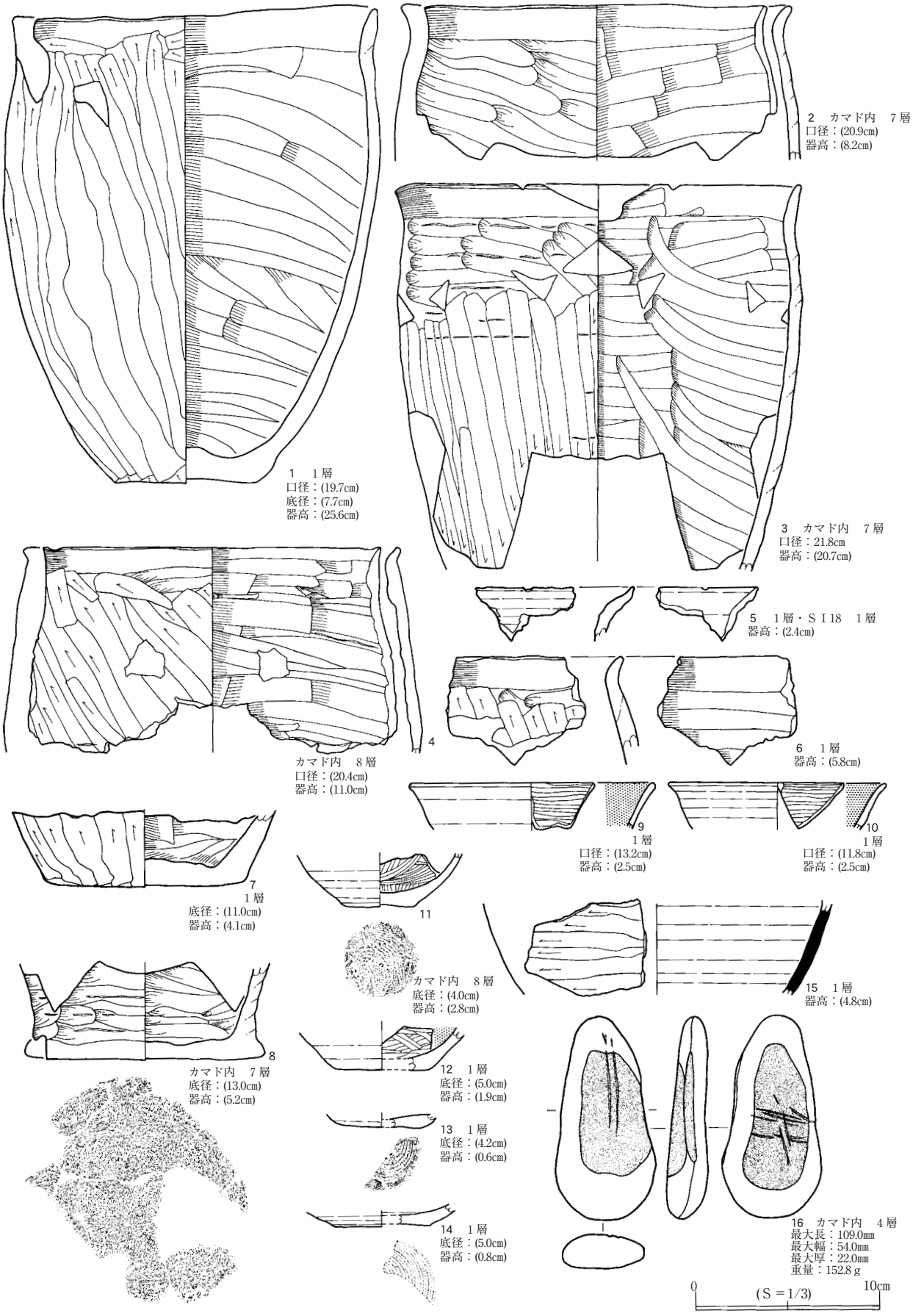
第134図　02-ＳＩ14カマド・遺物出土状況

る。外面はユビナデ調整のため、輪積痕が明瞭である。

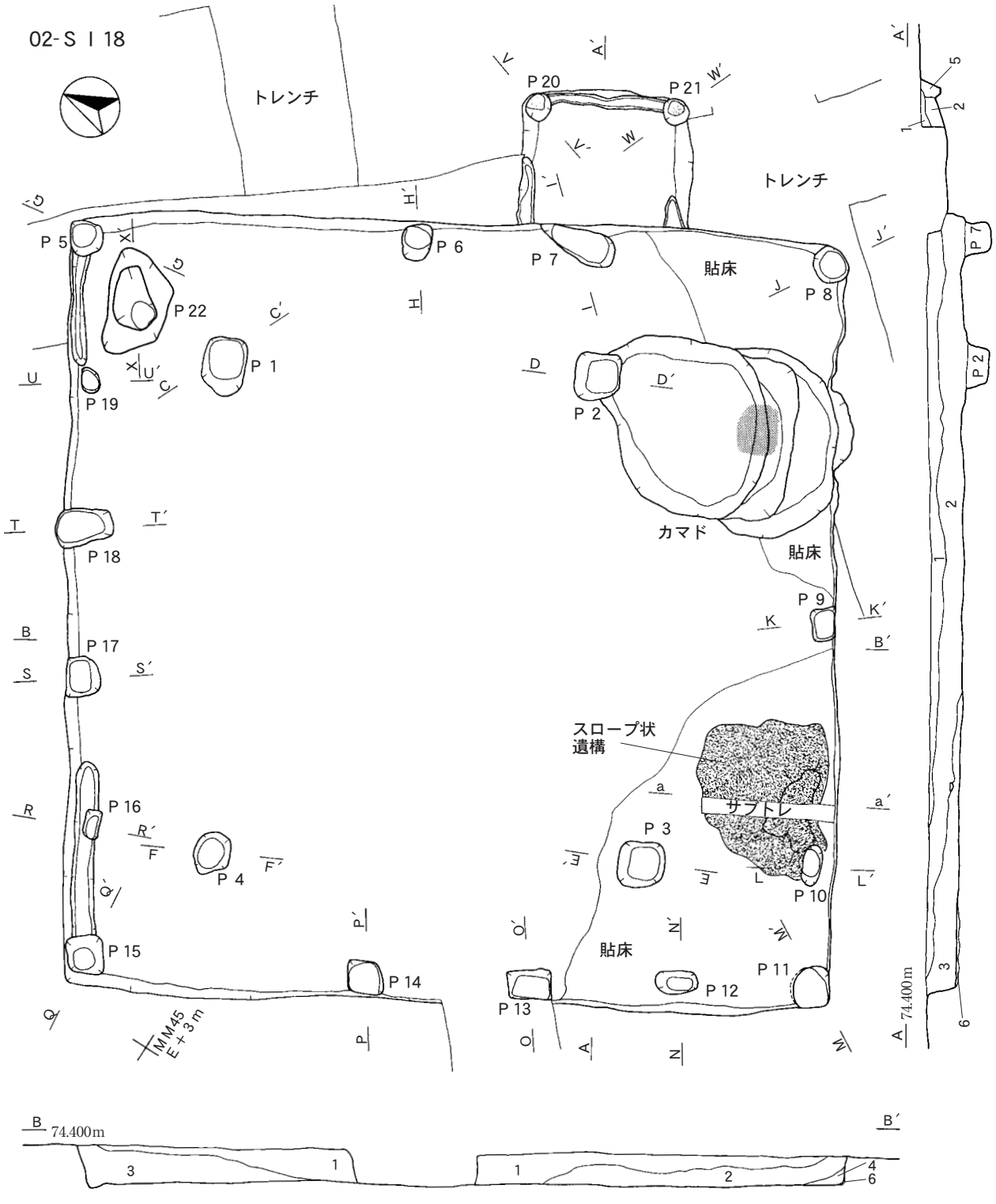
135図９～14は土師器坏で、９～12がＢ類、13・14がＡ類である。９・10は口縁部破片で、９が直線的に外反して口縁部がわずかに肥厚する器形で、10が頸部でわずかに屈曲して口縁部が外反する器形である。11～14は底部資料で、11・13・14は回転糸切痕を残す。12は底面残存部が狭く不明である。135図15は須恵器壺胴下部の破片で、外面には横位のケズリ再調整を施し、内面はロクロ目を残す。135図16は砥石で、扁平な礫を用いている。両側の平坦面と一側縁を利用しており、平坦面には擦痕が認められる。

02-ＳＩ18(第136図～141図、図版40・162)

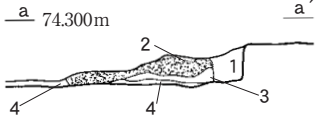
遺　構　ＭＩ44・45、ＭＪ43～46、ＭＫ43～45、ＭＬ44・45グリッドの第Ⅳ層中位で、地山土粒を含む黒色土の広がりで確認した。本住居跡の立地点は台地上部平坦面で、ほとんど傾斜がない。02-ＳＩ20と重複し、本住居跡の方が新しい。また、本住居跡周辺部にはＳＫＰが分布しており、本住居跡上部にも関連するピットが分布すると想定されるが、明確に検出できなかった。周辺には01-ＳＩ150、02-ＳＩ04・11、03-ＳＩ12・13・15・16・22・23、02-ＳＢ01がある。



第135図　02-ＳＩ14出土遺物



02-ＳＩ18
1　黒色土(2.5Y2/1)　しまり中　粘性中
　灰白色砂・明黄褐色土粒少量含む
2　黒褐色土(2.5Y3/1)　しまり強　粘性中
　明黄褐色土粒少量・にぶい橙色粘土塊多量含む
3　黒褐色土(2.5Y3/1)　しまり中　粘性強
　明黄褐色土塊・土粒多量含む
4　黒色土(2.5Y2/1)　しまり中　粘性中　明黄褐色土粒少量含む
5　黒色土(10YR2/1)　しまり弱　粘性中　地山土粒微量含む
6　黒色土(10YR2/1)　しまり強　粘性弱　地山土塊多量含む

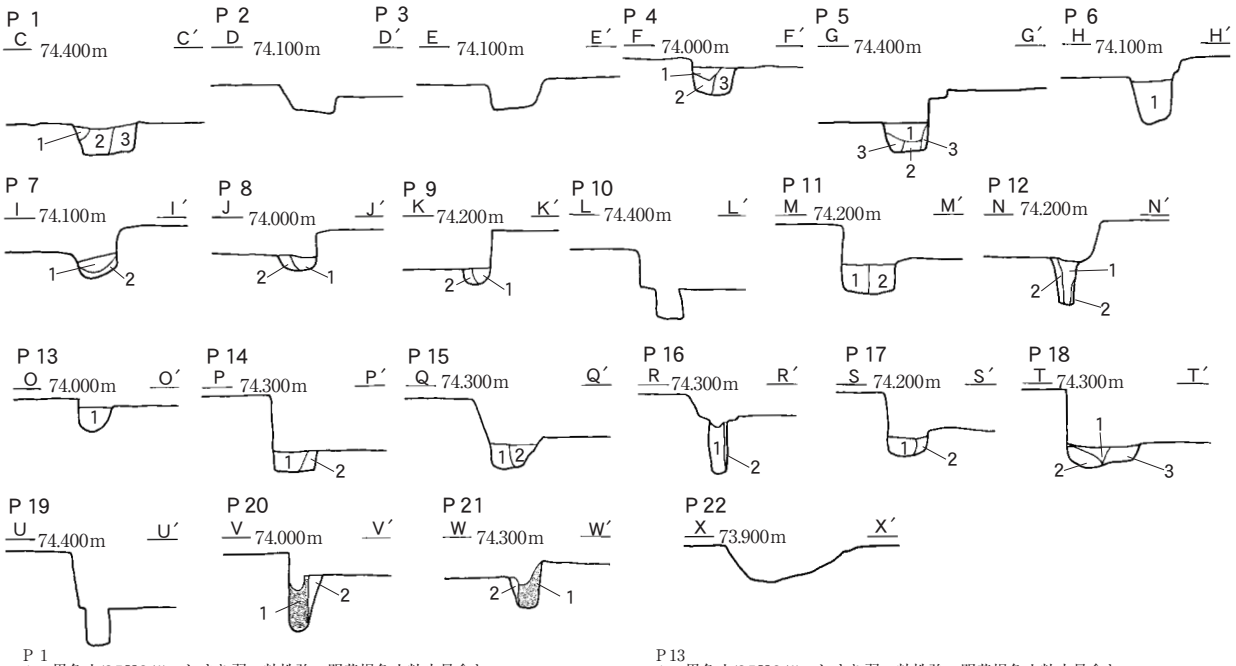


柱痕

02-ＳＩ18スロープ状遺構
1　黒色土(10YR2/1)　しまり中　粘性強
　灰白色砂粒含む
2　にぶい褐色粘土(7.5YR6/1)　しまり強　粘性強
　黒色土塊含む
3　黒褐色土(2.5Y3/1)　しまり中　粘性強
　明黄褐色土粒含む
4　黒色土(2.5Y2/1)　しまり強　粘性強
　明黄褐色土粒多量含む

0　(S＝1/60)　2 m

第136図　02-ＳＩ18



P 1
1　黒色土(2.5Y2/1)　しまり弱　粘性強　明黄褐色土粒少量含む
2　黒色土(2.5Y2/1)　しまり弱　粘性強
3　黄褐色土(2.5Y5/6)　しまり強　粘性弱　明黄褐色土粒少量含む

P 4
1　黒色土(2.5Y2/1)　しまり中　粘性強　明黄褐色土塊少量含む
2　黒色土(2.5Y2/1)　しまり弱　粘性中　明黄褐色土塊・土粒多量含む
3　黄褐色土(2.5Y5/6)　しまり強　粘性弱　明黄褐色土粒少量含む

P 5
1　黒色土(2.5Y2/1)　しまり弱　粘性強　明黄褐色土粒少量含む
2　黒色土(2.5Y2/1))　しまり弱　粘性中　明黄褐色土塊・土粒多量含む
3　黄褐色土(2.5Y5/6))　しまり強　粘性弱　明黄褐色土粒少量含む

P 6
1　黒色土(2.5Y2/1)　しまり弱　粘性強　明黄褐色土粒少量含む

P 7
1　黒色土(2.5Y2/1)　しまり弱　粘性中　白色粘土塊・明黄褐色土塊少量含む
2　黄褐色土(2.5Y5/6)　しまり中　粘性弱　明黄褐色土粒少量含む

P 8
1　黒色土(2.5Y2/1)　しまり弱　粘性中　白色粘土塊・明黄褐色土塊少量含む
2　黄褐色土(2.5Y5/6)　しまり中　粘性弱　明黄褐色土粒少量含む

P 9
1　黒色土(2.5Y2/1)　しまり弱　粘性強
2　黒褐色土(2.5Y3/1)　しまり強　粘性中　明黄褐色土塊多量含む

P11
1　黒色土(2.5Y2/1)　しまり弱　粘性中　明黄褐色土粒少量含む
2　黄褐色土(2.5Y5/6)　しまり強　粘性弱　黒褐色土粒少量含む

P12
1　黒色土(2.5Y2/1)　しまり弱　粘性強
2　黄褐色土(2.5Y5/6)　しまり強　粘性弱　黒褐色土粒少量含む

P13
1　黒色土(2.5Y2/1)　しまり弱　粘性強　明黄褐色土粒少量含む

P14
1　黒色土(2.5Y2/1)　しまり弱　粘性強　明黄褐色土粒少量含む
2　黄褐色土(2.5Y5/6)　しまり強　粘性弱　黒褐色土粒少量含む

P15
1　黒色土(2.5Y2/1)　しまり弱　粘性中　明黄褐色土粒少量含む
2　黒褐色土(2.5Y3/1)　しまり強　粘性中　明黄褐色土塊多量含む

P16
1　黒色土(2.5Y2/1)　しまり弱　粘性強
2　黄褐色土(2.5Y5/6)　しまり強　粘性弱　黒褐色土粒少量含む

P17
1　黒色土(2.5Y2/1)　しまり弱　粘性強
2　黄褐色土(2.5Y5/6)　しまり強　粘性弱　黒褐色土粒少量含む

P18
1　黒色土(2.5Y2/1)　しまり弱　粘性強
2　黒色土(2.5Y2/1)　しまり弱　粘性強
　明黄褐色土粒多量含む
3　黄褐色土(2.5Y5/6)　しまり強　粘性弱
　明黄褐色土粒少量含む

P20
1　黒色土(2.5Y2/1)　しまり弱　粘性強
2　黄褐色土(2.5Y5/6)　しまり強　粘性弱　黒褐色土粒少量含む

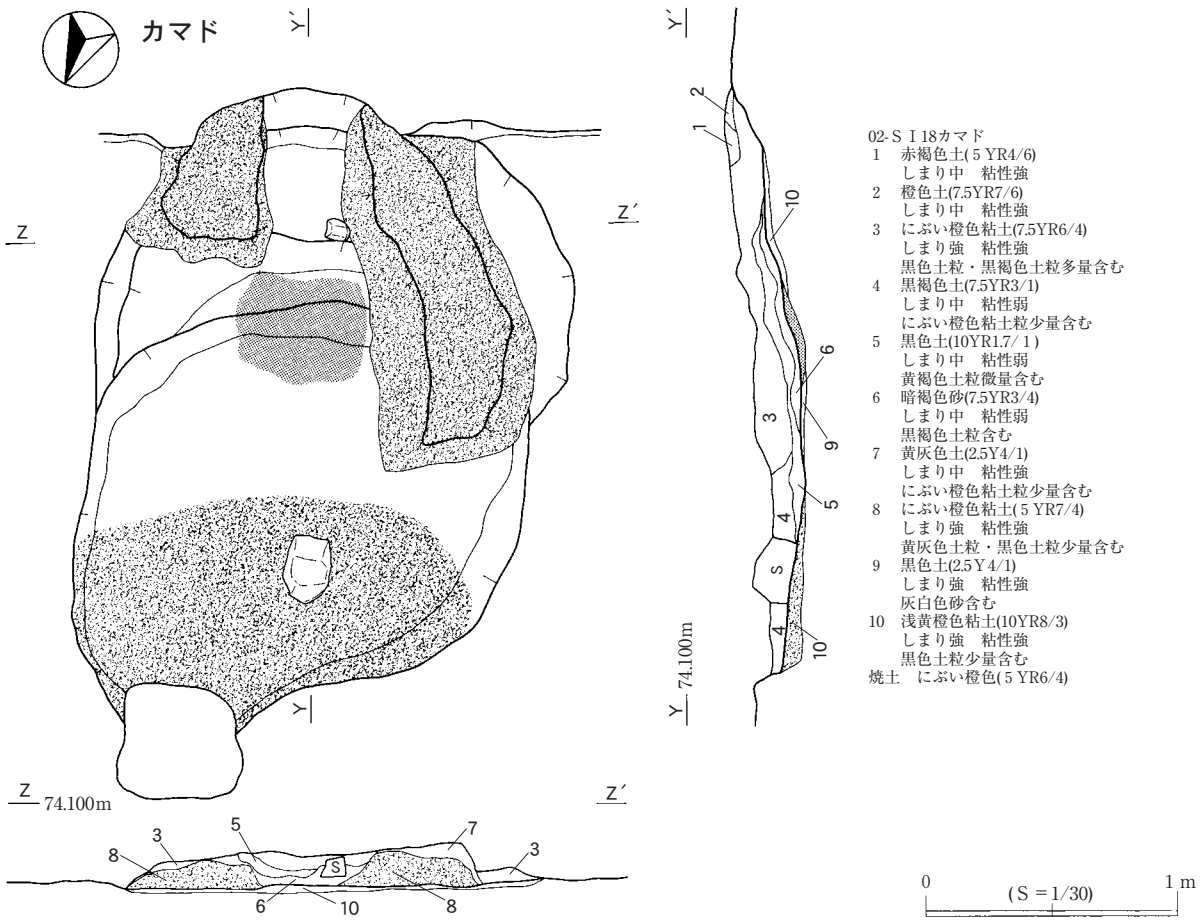
P21
1　黒色土(2.5Y2/1)　しまり弱　粘性強
2　黄褐色土(2.5Y5/6)　しまり強　粘性弱　黒褐色土粒少量含む

0　(S＝1/60)　2 m

第137図　02-ＳＩ18柱穴

堆積土は６層に分けた。竪穴掘り込みのほとんどを埋め尽くす１～３層は、一見レンズ状堆積であるが地山土塊を多量に含む土で、人為的な埋め立て造成土と考えられる。２・３層は想定される周堤土に由来すると考えられる。４層は埋め戻し段階の壁面崩落土と考えられる。５層は張り出し部の壁溝内部のみに認められ、残存施設の腐植土層の可能性がある。６層は貼床で、地山土塊を多量に含む黒色土を、薄く貼っている。

平面形はほぼ正方形で、カマドの付く壁に直交する主軸方位はＮ－25°－Ｗである。主軸とそれに直交するラインで測る住居面積は約60㎡で、特大形の住居である。各壁の長さは北東壁約7.8m、南東壁約7.5m、南西壁約7.5m、北西壁約7.7mである。壁の検出面からの深さは、北東壁・北西壁では約0.35m、南東壁と南西壁では約0.3mで、ほぼ垂直に立ち上がる。なお、北東壁の張り出しが付く部分では、約0.2mの段差になる。張り出しは２個のピットと溝で構成され、規模は住居壁直交方向で約1.3m、住居壁平行方向で約1.7mである。



第138図　02-ＳＩ18カマド

床面は掘形底面の地山上面を利用するが、住居東隅と南隅付近では貼床を施している。この範囲はⅥ層上面地形の傾斜下部に当たり、逆にこのことから床面構築時にはⅥ層上面以下まで掘下げる意図が窺える。壁溝は北西壁沿いの一部で確認できたが極めて浅く、壁溝掘削を途中で放棄した痕跡ともみられる。南東壁沿いの南隅付近には、スロープ状に粘土を貼った部分がある。位置や傾斜からみて出入り口と考えられる。関連する土は４層に分けられ、１層は壁板の裏込め、４層は住居内貼床と同じ土で、３層が基底部の造成、２層粘土が使用面の整形土である。ａ－ａ´では断面形が階段状になる。なお、基底面には141図16～18の小型土器が三角形状に設置してあった。意図的に配置したもので、何らかの祭祀的な意味付けがあったと考えられる。

床面、壁溝内、張り出し内部で22個のピットを確認した。Ｐ１～４は住居隅よりやや内側に配置する主柱穴である。Ｐ１・３・４はほぼ直角三角形の配置になるが、Ｐ２はカマド前庭部にかかるため北西よりに位置し、全体で台形状の配置になる。柱穴中心で測る柱穴間距離は、Ｐ１－２間約3.8m、Ｐ３－４間約4.3m、Ｐ１－４間約4.9m、Ｐ２－３間約4.9mである。Ｐ５～19は壁際に規則的に配置する壁柱穴で、四隅に１個ずつ、北東壁と南東壁に２個ずつ、南西壁沿いに３個、北東壁沿いに４個配置している。南東壁はカマドやスロープを配置するため、壁柱穴配置の規則性が弱まる。Ｐ20・21は張り出し部の北隅と南隅にあり、柱の当たりが明確である。壁溝にみられる腐植土層と併せて、上部構造の一部が残存したまま廃棄したものと考えられる。

カマドは南東壁の中央からやや北東寄りの位置で、にぶい橙色粘土の広がりで確認した。確認でき

た部位は、袖、火床面、カマド基底部の掘り込みである。10層に分けた堆積土のうち、１～７層は天井部の崩壊土と住居埋め立て時の造成土の互層である。８層はカマド袖の構築土である。９・10層はカマド基底面の貼り土で、火床面は９・10層の被熱範囲になる。南東壁とカマド基底部の末端までは約2.6ｍで、これに直交する最大幅は約1.7ｍである。カマド基底部の掘り込みと火床面の位置から、カマド右袖の末端部が焚口のラインになると考えられる。火床面は不整な方形状の被熱範囲で、長軸約0.5m、短軸約0.4m、被熱の深さは約0.08ｍである。

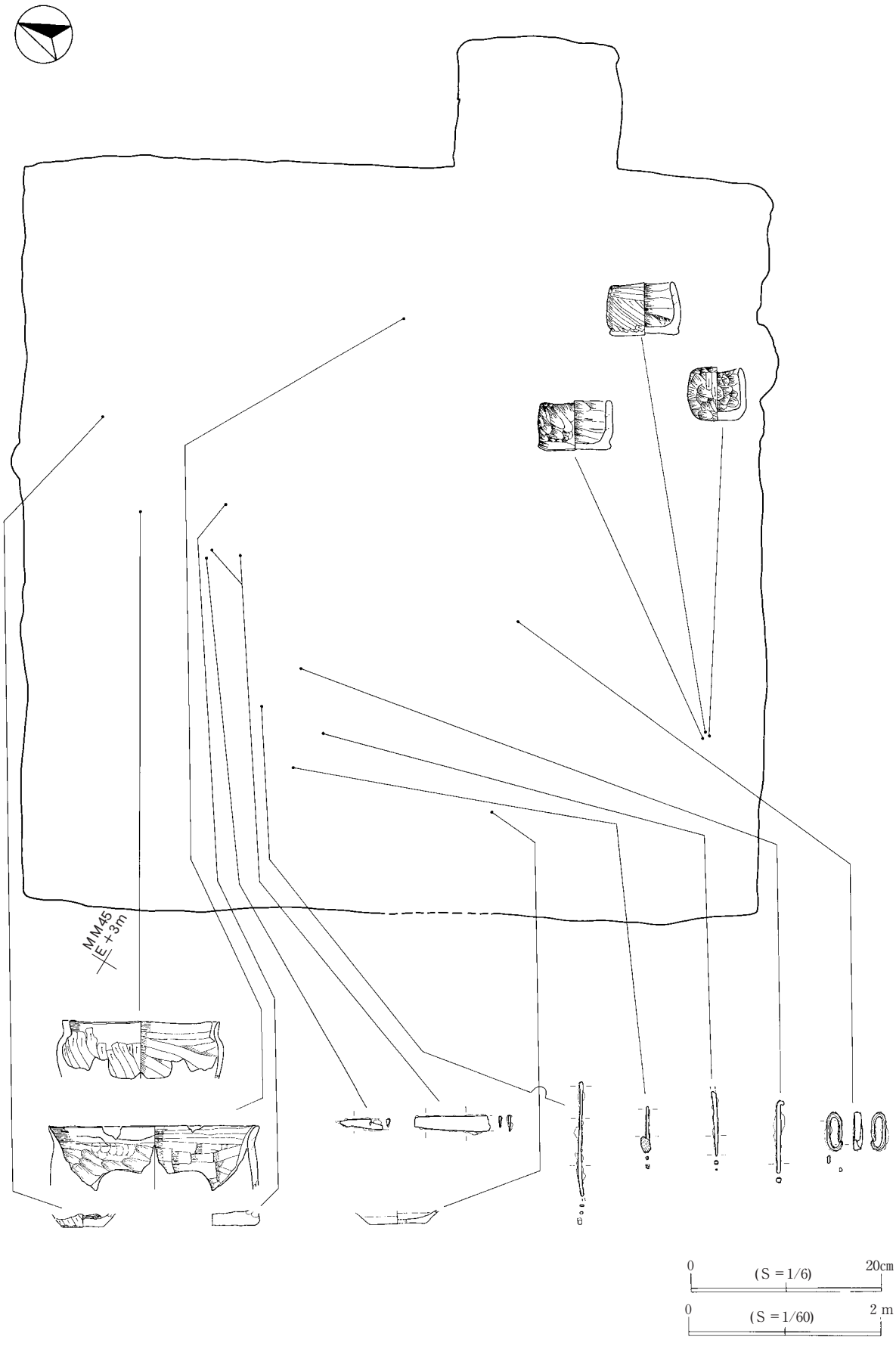
本住居跡は壁から離れた位置に４本の主柱をもち、南東壁にカマドを設置する住居である。廃絶後は人為的に埋め立てているが、本住居跡上部を利用する明確な施設は確認できなかった。周辺部の柱穴配置からみて、居住地ではない土地利用に変化したと考えられる。なお、廃絶時に投棄したとみられる遺物には、墨書土器や須恵器坏の破片と多量の鉄製品があり、埋め立て時に何らかの祭祀行為が存在した可能性は否定できない。

遺　物(第140図・141図)　住居跡内から土師器甕・坏・鍋・甑、墨書土器、須恵器坏・壺、鉄製品、土製品が出土した。土師器甕は口縁部が107点、底部が41点出土しており、そのうち比較的大型の口縁部資料８点、底部資料６点を図示した。図示しなかったものを含めた甕の口縁部分類別数量はＡ類(４点)、Ｂ類(８点)、Ｃ類(43点)、Ｄ類(16点)、分類不能(36点)で、底部分類別数量は砂底(26点)、木葉痕(２点)、ナデ(１点)、ケズリ(７点)、分類不能(５点)の内訳になる。口縁部ではＣ類が圧倒的に多く、次いでＤ類の順になる。Ａ類は02-ＳⅠ20からまとまって出土しており、これを巻き込んでいる可能性がある。底部では圧倒的に砂底が多い。

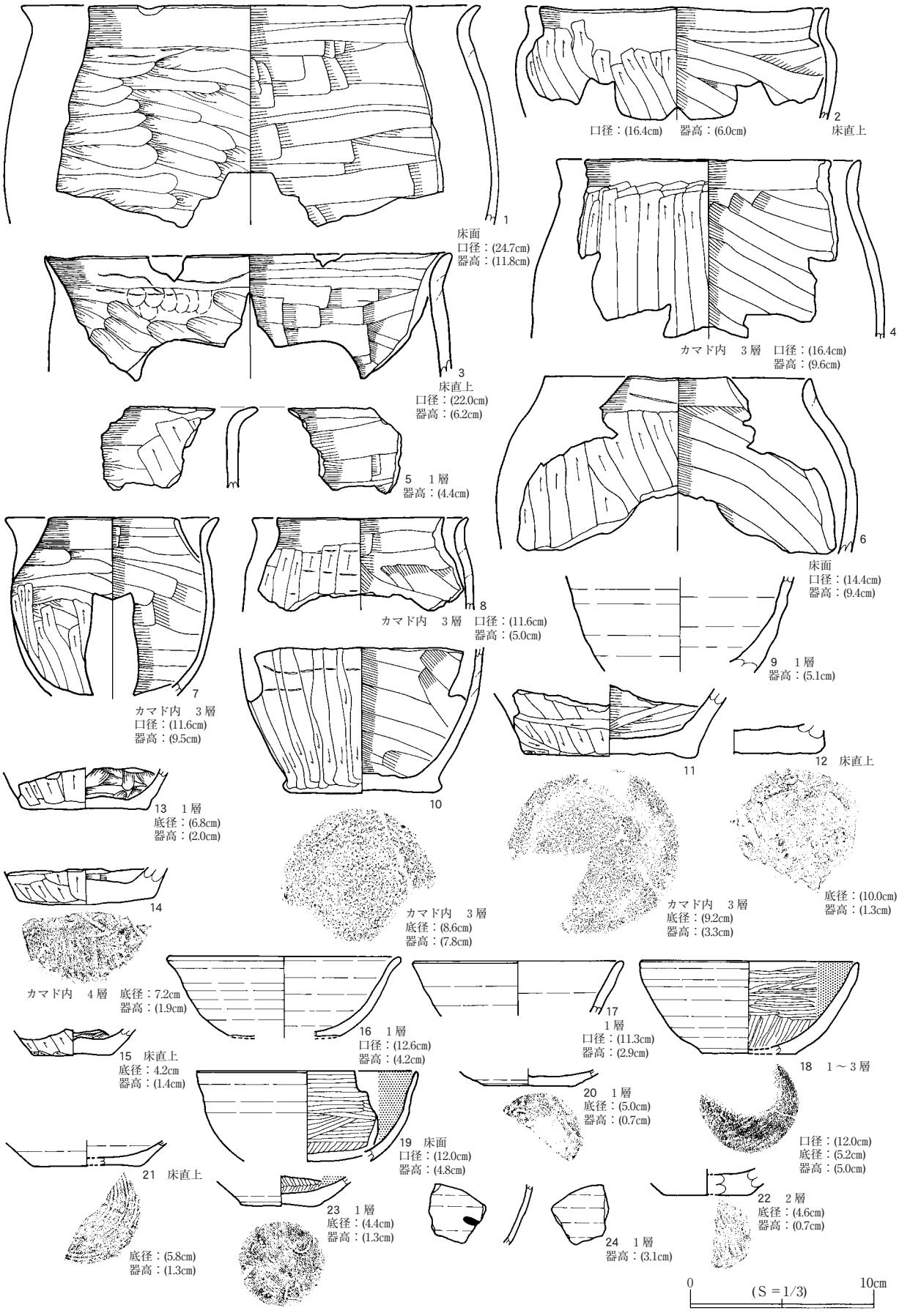
遺物の出土地点は大きく２か所に分かれる。１つはカマド内部堆積土で、２つめは住居西半分である。139図はこの住居西半分の床面付近から出土した遺物の出土位置図で、土器は大半が小破片である。ただし、住居中央部付近に鉄製品がまとまる傾向があり、埋め立て時の単なる廃棄物投棄とまとめるのには検討の余地がある。

140図１～４・６は、中・大型の土師器甕である。２は肩が張り、頸部が段状にくびれて口縁部が弱く外反する器形で、外面縦位ケズリ、内面横位ヘラナデ調整である。１・３は口縁部が外反する器形で、どちらも外面横位ユビナデ、内面横位ヘラナデ調整である。４・６は胴部に最大径を有し、口縁部が直立気味に立ち上がる器形で、いずれも外面縦位ケズリ、内面斜位ヘラナデ調整である。６は小型土師器甕の口径だが、口縁部が極端に狭い器形のため中型以上とした。３・４・６は比較的器壁が厚く器厚も概ね一定であるのに対し、１は口縁部は比較的厚みがあるものの、頸部から胴部にかけては薄くなる。140図５は口縁部が外折する土師器甕の破片である。140図７・８は小型の土師器甕である。７は胴部が直立気味に立ち上がり、頸部で弱く屈曲して口縁部が外反する器形で、外面は横位ユビナデの後縦位ケズリで、内面は横位ヘラナデ調整である。８は頸部の屈曲から口縁部が直立気味に立ち上がる。外面は縦位ケズリ、内面は横・斜位ヘラナデ調整である。140図９はロクロ目を残す小型の土師器甕である。140図10～15は土師器甕の底部で、10・11が砂底、14が木葉痕を残し、12・15はナデ、13はケズリによる調整を施す。

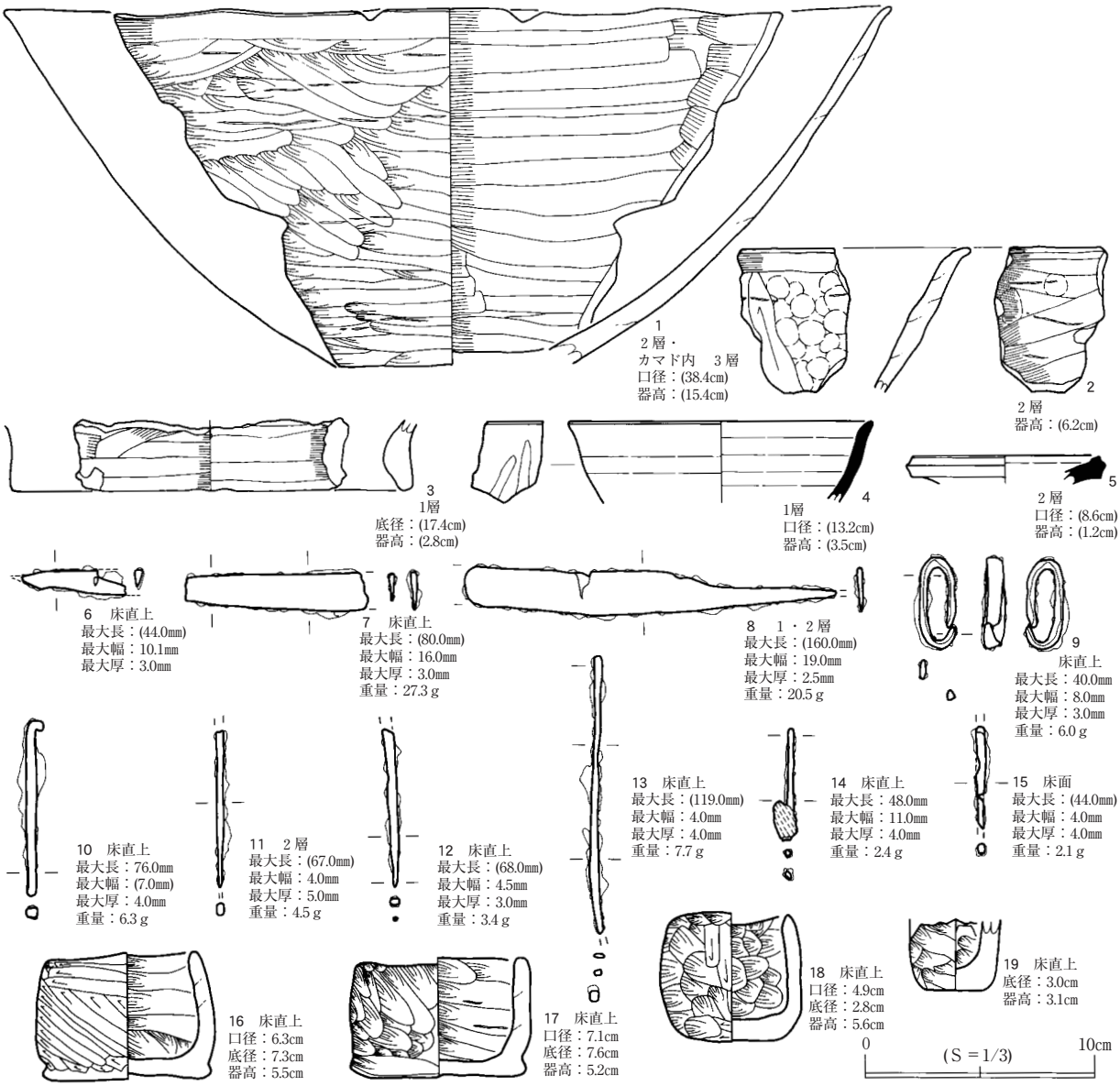
140図16～24は土師器坏で、16・17・21・22がＡ類、18・19・23がＢ類で、24はＡ類の胴部破片で墨書を施している。16は胴下部が張り出し、頸部でくびれて口縁部が外反する器形である。外面のロクロ目が緻密で全体に平滑に仕上げてある。17は直線的に外傾する器形で、外面のロクロ目は比較的



第139図　02-ＳＩ18遺物出土状況



第140図　02-ＳＩ18出土遺物１



第141図　02-ＳＩ18出土遺物２

凹凸が深い。18はほぼ完形の資料である。底部付近で弱く屈曲し、胴下部から直線的に外傾して立ち上がり、口縁部に向けては直立気味に傾きを変える器形である。底部の回転糸切痕はやや筋幅が広いが、外面のロクロ目は凹凸が少なく、内面のミガキは底部付近が放射状で、口縁部に向けては横位に丁寧に施す。内面には、全周はしないが１～２本の沈線状の凹みを確認できる。全体としては丁寧な作りで、沈線状の凹みが特徴的である。外面色調が本遺跡出土遺物では少ない白色系であることも特徴的である。なお、おそらく廃棄時につけたと思われる敲打痕が胴部中位に１か所認められ、意図的な穿孔または打ち欠きを行ってから遺棄したものと考えられる。19は胴下部が張り出し、頸部で直立気味に変化して口縁部が外反する器形である。20～23の底部はすべて回転糸切痕を残している。22は器壁が厚めである。24は外面に墨書を施すが、一部が確認されるのみで、文字か記号かの判別は不可能である。

141図１・２は土師器鍋である。１は全体形が窺える資料で、胴下部から内湾気味に立ち上がり、口端がわずかに外反する器形である。器壁が底部から口縁部にかけて徐々に薄くなる。外面はユビナ

デのみのため輪積痕をとどめるのに対し、内面は丁寧な横位ヘラナデ調整である。２は外面に指の押さえを切るケズリが、内面にはヘラナデが認められる。141図３は土師器甑の底部付近の破片である。141図４は須恵器坏で、口縁部がわずかに外反する器形である。火襷痕が認められる。141図５は須恵器壺の口唇破片である。

141図６～15は鉄製品である。６～８は刀子で、６が切先部、７が刀身、８が刀身から茎までが残る。９は鞘金具である。10は一端を欠損するがＳ字状フックのような形状になる。11～15は一端または両端を欠損する棒状のものである。141図16～18はスロープ状遺構の下部から出土した小型土器である。16と17は円盤状粘土片を底部に輪積み成形しており、18は手づくねである。141図19も小型土器で上部は欠損するが、16～18よりも小型である。

02-ＳＩ20(第142図、図版41・146)

遺　構　ＭＩ45、ＭＪ45・46グリッドの第Ⅳ層中位で、灰白色砂を含む黒色土の広がりで確認した。本住居跡の立地点は台地上部平坦面である。02-ＳＩ18と重複し、本住居跡の方が古い。周辺には01-ＳＩ150、02-ＳＩ04・11、03-ＳＩ12・13・15・16・22・23、02-ＳＢ01がある。

堆積土は１層のみで、本住居跡廃絶後の人為的造成土である。住居南西半分は02-ＳＩ18が切るため全く存在しないが、平面形が正方形と仮定した場合、カマドの付く壁に直交する主軸方位はＮ－66°－Ｅである。主軸とそれに直交するラインで測る住居面積は約８㎡で、小形の住居である。壁の長さは残存する北東壁で約2.8m、検出面からの深さは0.1m前後で、立ち上がりはほぼ垂直である。

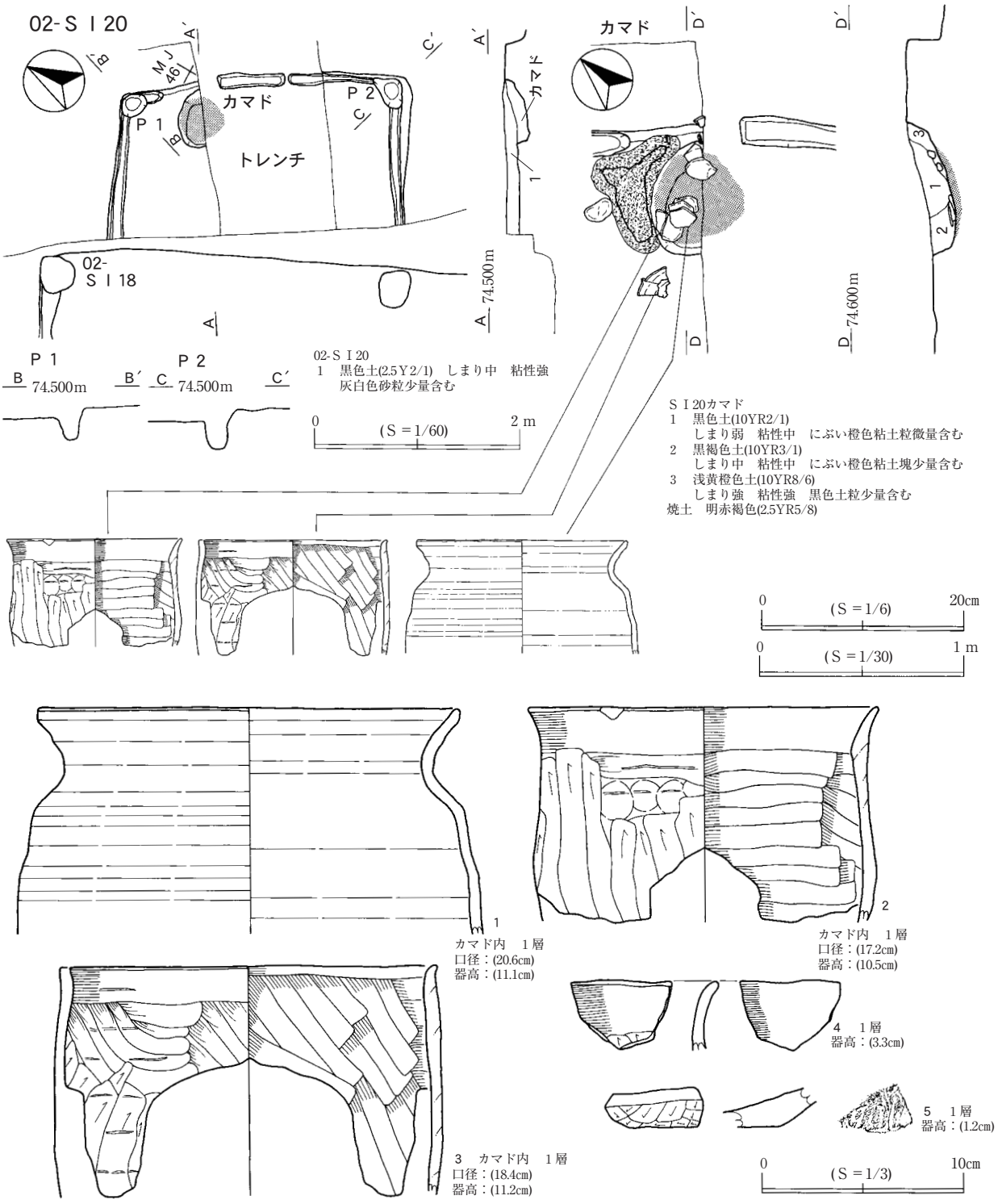
床面は、基本的に掘形底面の地山上面を利用している。壁溝は残存部では全周で確認した。上場幅0.06～0.1m、下場幅0.02～0.08m、床面からの深さ0.1m前後の断面台形状である。壁溝内で２個のピットを確認した。Ｐ１・２は住居隅に配置する主柱穴である。

カマドは北東壁の中央から北西寄りの位置で、黄橙色系粘土の広がりで確認した。確認できた施設は袖と火床面である。３層に分けた堆積土のうち、１・２層は住居埋め立て時の流入土、３層は構築粘土である。北東壁と袖末端までは約0.65mで、これに直交する最大幅は約0.75mである。火床面は径0.45m前後の不整な円形状の被熱範囲で、被熱の深さは0.05mまで及ぶ。

本住居跡は隅に主柱をもち、北東壁にカマドを設置する住居である。廃絶後は人為的に埋め戻しており、02-ＳＩ18構築時には埋没していたと考えられる。

遺　物(第142図)　住居跡内から土師器甕が出土した。基本的に遺物の出土量は少なく、図示したものでほとんどである。特徴的なのは、Ａ類の大型破片を含むことや、Ｃ類の142図２、Ｄ類の142図３とも胴部の張り出しが少ないことである。遺物の出土地点もカマド付近に限られており、廃絶時に一括で遺棄したものと考えられる。

142図１～３は大型の土師器甕である。１は胴部が張り出し、頸部が強く屈曲して口縁部が外反し、口端がわずかに内湾する器形である。内外面共にロクロ目を残す。２は胴部が直立気味に立ち上がり、口縁部が外反する器形で、口縁部は肥厚する。外面縦位ケズリ、内面横位ヘラナデ調整である。３は胴部から口縁部まで直立気味に立ち上がり、口端がわずかに外反する器形である。外面はユビナデ後縦位ケズリ、内面は斜位ヘラナデ調整である。142図４は口縁部が外反する土師器甕の口縁部破片である。142図５は木葉痕を残す底部資料である。



第142図　02-ＳＩ20・カマド・遺物出土状況・出土遺物

02-ＳＩ21A(第143図～145図、図版42・158・165)

遺　構　ＭＩ・ＭＪ33～35、ＭＫ34グリッドの第Ⅳ層中位～第Ⅵ層上面で、地山土塊を含む黒褐色土の範囲で確認した。本住居跡の立地点は台地上部平坦面の南東端に近く、緩やかに東側へ傾斜する。本住居跡の南東部は調査区外に当たり、北西壁の大半を現代の撹乱が破壊している。02-ＳＩ52と重複し、本住居跡の方が新しい。周辺には01-ＳＩ112・192・193があるが、北東側は広く無遺構地帯になり、南西側は柱穴群が分布する。本住居跡とは間に撹乱を挟むため直接の関係が不明だが、台地縁を

区画する、板塀跡とみられる01-ＳＤ48・404群の延長ラインは、確実に本住居跡中央部に交錯する位置に当たる。なお本住居跡は壁溝配置から、１回の拡張を行っていることが判明しており、拡張後をＡ、拡張前をＢとして２段階変遷で捉えている。

堆積土は６層に分けた。竪穴掘り込みのほとんどを埋め尽くす１～３層は、壁際からレンズ状に堆積しており、含有地山土粒も上位層になるほど量を減じる点などから、自然堆積層と考えられる。４・５層は壁溝内堆積土で、５層は壁板裏込め、４層は壁板抜取り後の流入土と考えられる。６層は貼床で、02-ＳＩ52床面との段差を埋め立てている。

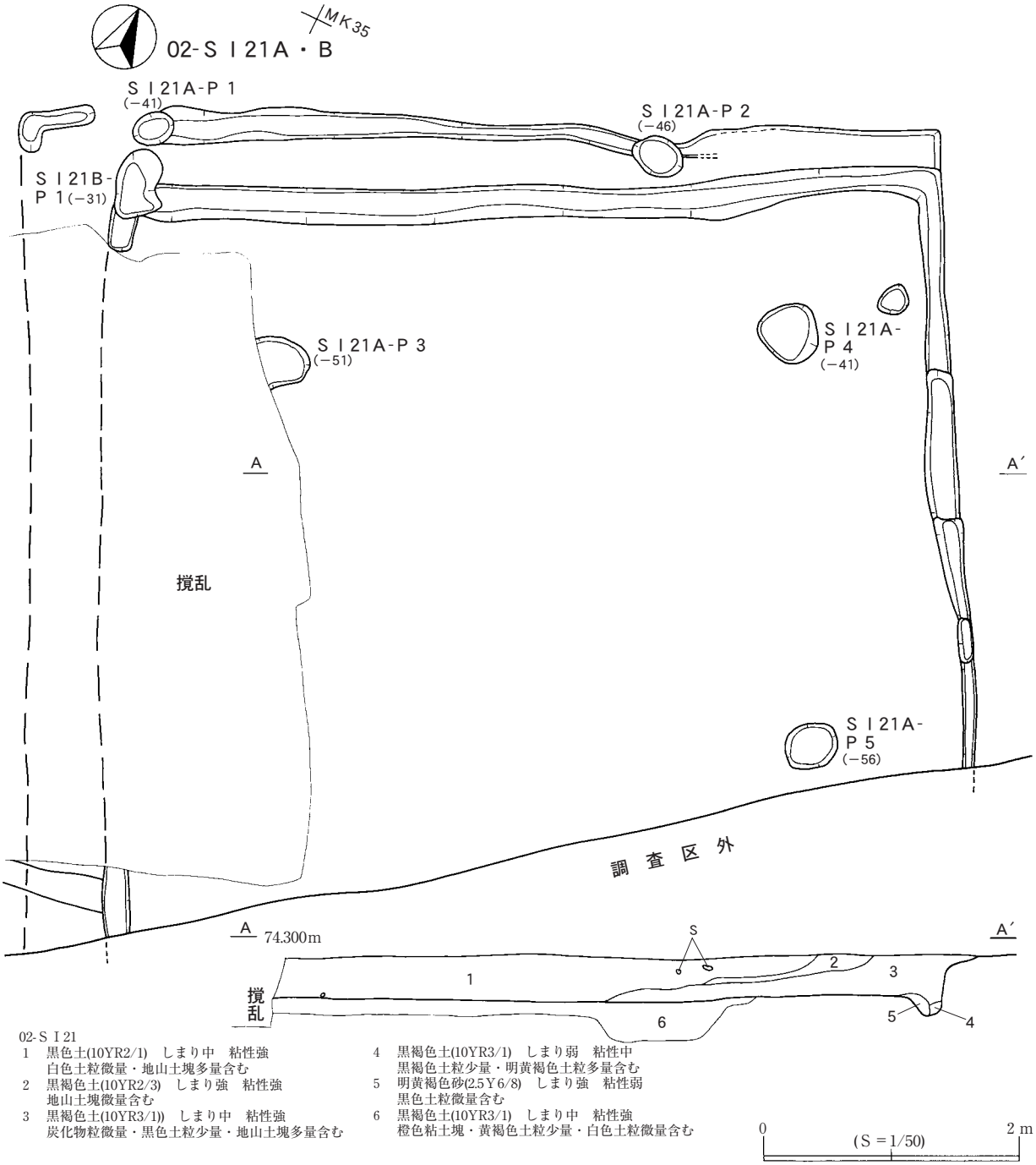
全体形は不明だが、平面形を正方形と仮定した場合、北西壁に直交する主軸方位はＮ－27°－Ｗで、主軸とそれに直交するラインで測る住居面積は約52㎡で、特大形の住居とみられる。確認できる北西壁の長さは約7.2ｍで、検出面からの深さが、残りの良い北東壁で約0.3ｍである。床面は、02-ＳＩ52上部では全面貼床を施すが、それ以外の範囲では掘形底面の地山上面を利用している。壁溝は北西壁沿いで確認した。上場幅0.1～0.17ｍ、下場幅0.04～0.14ｍで、床面からの深さは0.15ｍ前後である。北東壁沿いも本段階に伴う可能性を考えたが、明確な壁溝がＰ１・２間にとどまることから、北東壁沿いは02-ＳＩ21Ｂ段階の壁溝と考えた。

床面や壁溝内で本住居跡に伴うとみられる５個のピットを確認した。Ｐ３～５は住居隅よりやや内側に位置する主柱穴である。Ｐ４の対角線上に位置する柱穴は、撹乱で失われたとみられる。Ｐ１・２は北西壁沿いに、壁溝を挟むように配置する、壁板保持に関わる柱穴である。北東壁沿いでは明確でないが、Ｐ４東側の細長い深みがこれに対応する可能性がある。カマドは確認できなかったが、予測される住居南東壁と東隅の関係から想定してＰ５の位置が北西寄りにあり、このＰ５脇から被熱を受けた礫が出土していることから、南東壁でも北東寄りの位置にカマドを配置したとみられる。

本住居跡は４本の主柱をもつ住居で、南東壁にカマドを設置すると想定される。廃絶後は自然堆積により埋没するが、上屋は解体している可能性が高い。また、堆積土中からは遺物が多く出土することなどから、埋まるまでの期間に廃棄場として利用した可能性もある。

遺　物(第144図・145図)　住居跡内から土師器甕・坏・鍋、鉄製品、土製品、石製品が出土した。土師器甕は口縁部が68点、底部が25点出土しており、そのうち口縁部資料15点、底部資料４点を図示した。図示しなかったものを含めた甕の口縁部分類別数量はＡ類(５点)、Ｂ類(８点)、Ｃ類(41点)、Ｄ類(６点)、その他(１点)、分類不能(７点)で、底部分類別数量は砂底(13点)、ケズリ(５点)、タタキ(１点)、分類不能(６点)の内訳になる。ただしいずれも破片であり、堆積土中出土のものが多く、本住居跡の遺物相を表すかは疑わしい部分がある。

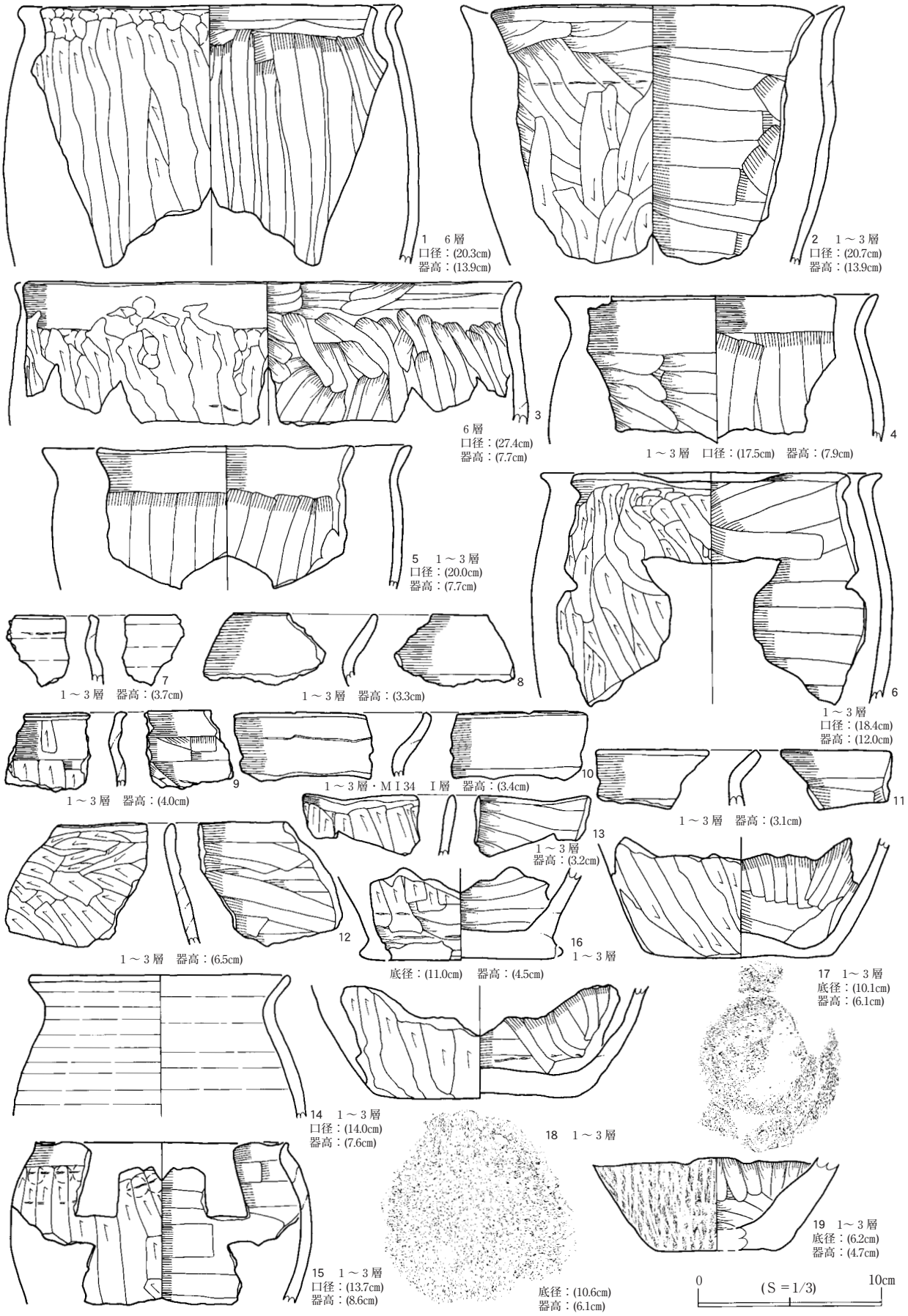
144図１～15は土師器甕の口縁部資料で、復元実測したうち１～６が中・大型、14・15が小型になる。２・５は口縁部に最大径をもち、口縁部が外反する器形で、５のほうが頸部の屈曲が明確である。５は内外面共に縦位ヘラナデ、２は外面ユビナデ後に浅いケズリ、内面横位ヘラナデ調整である。４は胴部が張り、頸部で屈曲して口縁部が比較的長く外反する器形である。外面横位ユビナデ、内面縦位ヘラナデ調整である。１・３・６は胴部に最大径を有し、口縁部がわずかに外反・外折する器形である。いずれも外面は縦位ケズリだが、内面は６が横位ヘラナデ、１が縦位ヘラナデ、３が縦位ユビナデ調整である。14は胴部が張り、頸部で強く屈曲して口縁部が外反する器形である。内外面共にロクロ目を残す。15は最大径をもつ胴部から口縁部まで内湾し、口端が短く直立気味に外反する器形で、



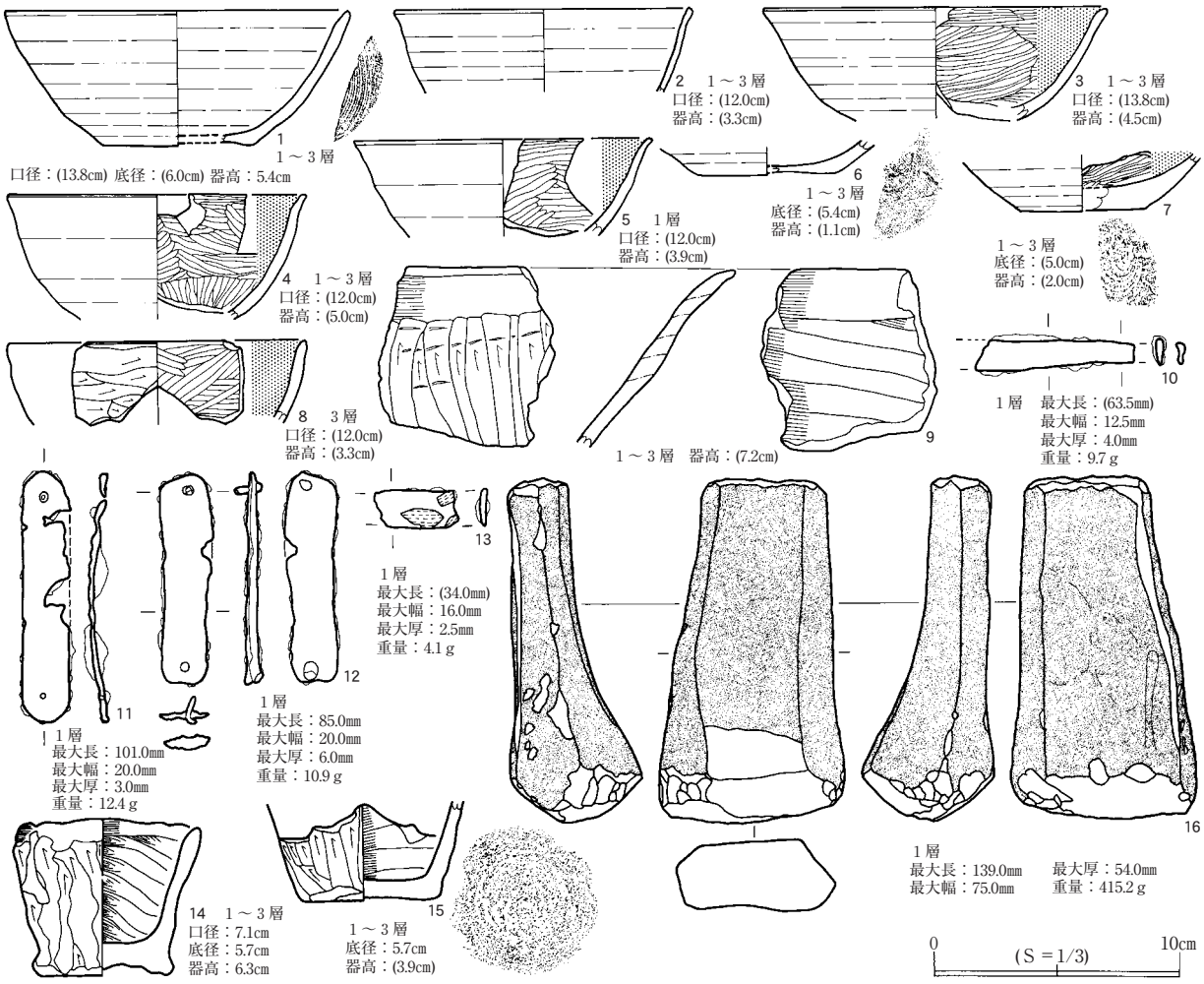
第143図　02-ＳＩ21A・B

外面縦位ケズリ、内面横位ヘラナデ調整である。７～13は小破片だが、復元実測できた口縁部形態とは違うものを掲載した。７・10の口端で内湾するものが特徴的である。144図16～19は土師器甕の底部で、17・18が砂底、19はタタキ目を残し、16はケズリ再調整を施す。

145図１～８は土師器坏で、１・２・６がＡ類、３～５・７・８がＢ類である。１は約1/3が残存する資料である。底部からやや内湾しながら立ち上がり、口縁部が外傾する。胴下部のわずかな屈曲部を境に、その上部は工具を当てたナデ調整で凹凸を消し、下部にはその凹凸を残す。内面も凹凸は少なく、全体として作りが丁寧である。なお本遺跡で出土しているＡ類のなかでは、底部厚が薄いほうである。２は口縁部でくびれて短く外反する器形である。１に比べ器壁が薄い。３は胴下部で膨らみ、



第144図　02-ＳＩ21Ａ出土遺物１



第145図　02-ＳＩ21Ａ出土遺物２

胴上部にかけて直線的に外傾し、口縁部がわずかに外反する器形で、口唇内面がやや平滑になる。口唇は丸みを帯びる。４は胴下部から内湾気味に立ち上がり、口縁部でくびれて外反する器形である。５は外反気味に立ち上がり、口縁部で反りが強くなる器形である。４・５は口唇が先細りになる。外面のロクロナデは、３が精緻で平滑な仕上げなのに対し、４・５はロクロ目の間隔が開き、比較的凹凸が目立つ。内面のミガキでは、５がほぼ全面横位に施すのに対し、３・４は胴部斜位、口縁部横位に施す。８は口縁部が内湾気味に立ち上がる器形で、外面全面にケズリを施す。６・７は底部資料で、底面に回転糸切痕をとどめる。底部は６が薄く、７が厚い。

145図９は土師器鍋の口縁部破片で、口縁部に段状の弱いくびれがあるが、基本的に外傾する器形である。外面は縦位ケズリ、内面は横位ヘラナデ調整である。145図10～13は鉄製品である。10は刀子で、刀身から茎の部分である。11・12は穂摘具で、11は長楕円形状、12は台形状の形態である。12は長辺側を刃先としている。目釘が残っており、左面が柄に密着する面と考えられる。11は刃先側が割れているが、ほぼ全体形を窺える。２か所の目釘穴が確認できる。13は刀子の欠片とみられるが詳細は不明である。145図14・15は小型土器で、14は底部が上底状になり、口縁部まで直線的に外傾する器形で、外面縦位ケズリ、内面斜位ユビナデ調整である。15は砂底で、外面縦位ケズリ、内面横位ヘラナデ調整である。145図16は砥石で、台形状の亜角礫を用いている。両端を除く四面を利用しており、使用の結果側面形も台形状になっている。

02-ＳＩ21Ｂ(第143図、図版42)

遺　構　02-ＳＩ21Ａの床面で、一回り小さい壁溝プランで確認した。02-ＳＩ21Ａとほぼ同プランで、一回り規模が小さい本住居跡に伴う堆積土は残っていないが、02-ＳＩ52の床面との段差を埋める貼床の大部分は、本来本住居構築段階に整地したと考えられる。

本住居跡も南東壁部は調査区外に当たり、南西壁部を現代の撹乱が破壊しているため全体形は不明だが、平面形を正方形と想定した場合、北西壁に直交する主軸方位はＮ－27°－Ｗ、主軸とそれに直交するラインで測る住居面積は約42㎡で、特大形の住居と考えられる。確認できる北西壁の長さは約6.5ｍで、検出面からの深さは、02-ＳＩ21Ａと共有するとみられる北東壁で約0.3ｍである。

床面も、02-ＳＩ21Ａと共有するとみられる。壁溝は調査した範囲で全周確認した。上場幅0.09～0.3ｍ、下場幅0.05～0.18ｍ、床面からの深さは0.2ｍ前後である。住居西隅の壁溝内で、１個のピットを確認した。隅柱と考えられるが、対応する北隅では掘り込みが明確ではない。ただし北隅壁溝底面は、両脇と0.05ｍほどの高低差があり、隅柱の痕跡とも考えられる。なお、住居規模の比較からみて、02-ＳＩ21ＡのＰ３～５までの主柱も共有する可能性が高い。カマドは確認できなかったが、02-ＳＩ21Ａと同じ地点を利用していたと考えられる。

本住居跡は壁から離れた位置に４本の主柱をもつ住居で、南東壁にカマドを設置すると想定される。02-ＳＩ21Ａへと拡張する段階で廃絶したと考えられる。

遺　物　本住居跡に伴う遺物は検出できなかった。

02-ＳＩ52

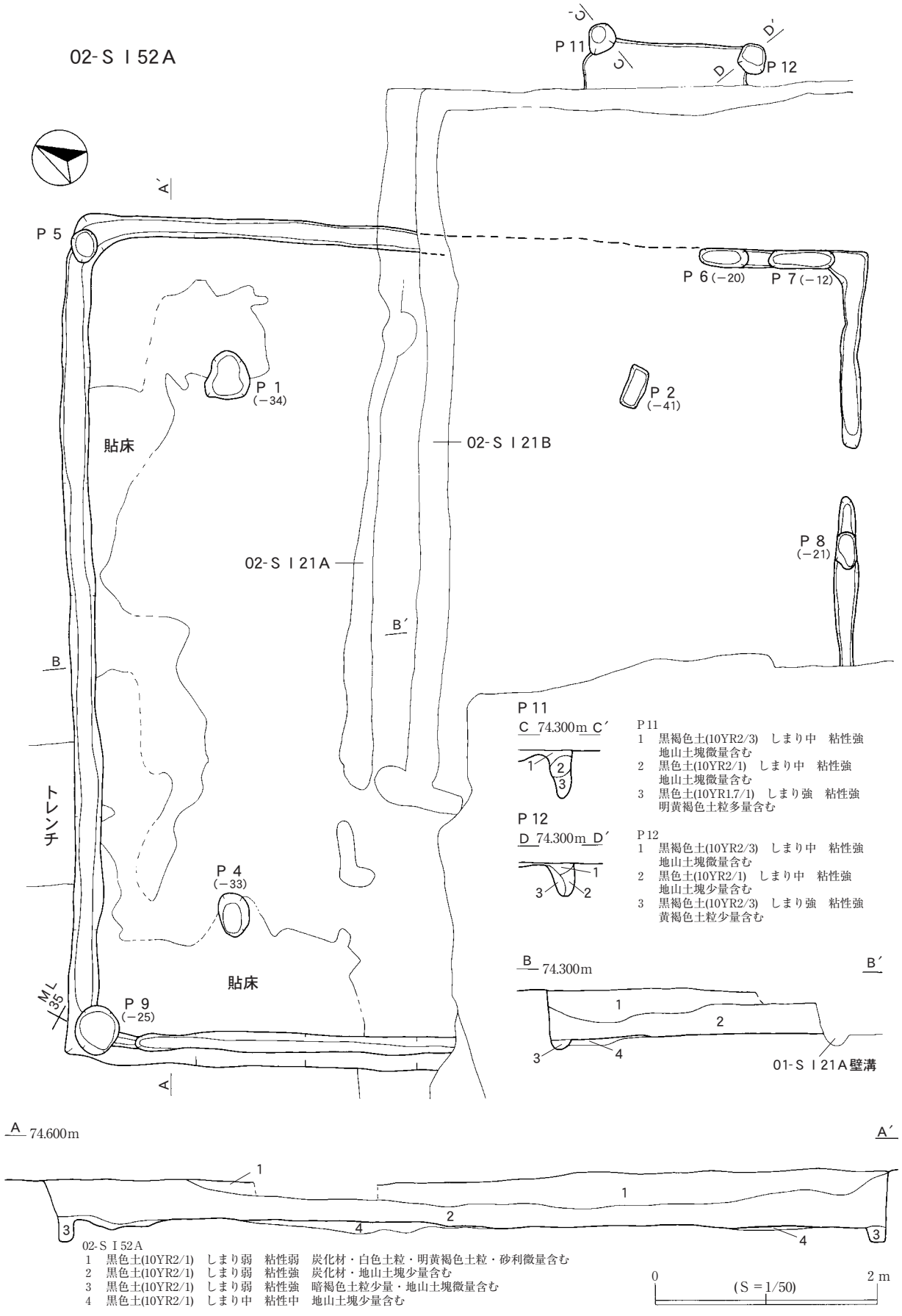
本住居跡は、ＭＩ34、ＭＪ33～35、ＭＫ34・35グリッドの、02-ＳＩ21下部及び第Ⅳ層中位で、地山土粒を含む土の分布範囲で確認した。本住居跡の立地点は台地上部平坦面の南東端に近く、緩やかに南東側へ傾斜する。南西約1/4を現代の撹乱が破壊している。02-ＳＩ21と重複し、本住居跡の方が古い。周辺には01-ＳＩ112・192・193があるが、北東側は広く無遺構地帯になり、南西側は柱穴群が分布する。本住居とは間に撹乱を挟むため直接の関係が不明だが、台地縁を区画する板塀跡とみられる01-ＳＤ48・404群の延長ラインは、確実に本住居跡南東部に交錯する位置にある。

床面精査で確認した壁溝やピットの配置から２回の建て替えが認められ、合計３軒の住居跡が重なることが判明している。住居は新しい順に、Ａ・Ｂ・Ｃのアルファベットを付けて表記した。

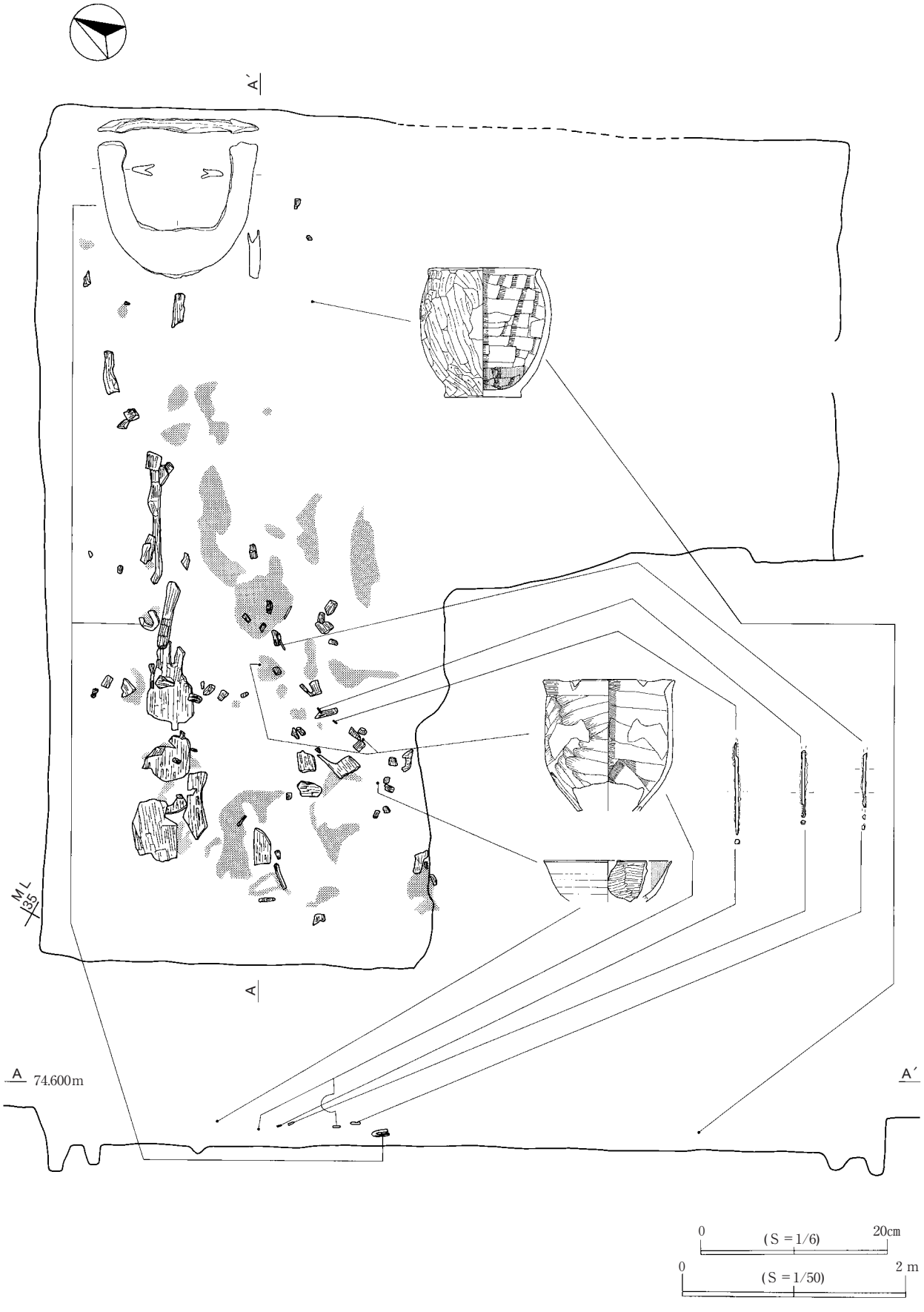
02-ＳＩ52Ａ(第146図～149図、図版43・44・155・157・163・165)

遺　構　２回目の建て替えにより、最大規模に達した住居である。堆積土は４層に分けた。大部分を埋め尽くす１・２層は、地山土粒や炭化物粒を含む土で、概ね水平堆積であり人為的な造成土とみられる。３層は壁溝内堆積土、４層は貼床の土である。

平面形は、北東－南西方向に長い長方形で、北西壁に直交する主軸方位はＮ－26°－Ｗである。主軸とそれに直交するラインで測る住居面積は約55㎡で、特大形の住居である。壁の長さは北東壁約7.2ｍ、北西壁約7.6ｍである。壁の検出面からの深さは、北東壁約0.5ｍ、南西壁約0.35ｍ、北西壁約0.45ｍで、ほぼ垂直に立ち上がる。02-ＳＩ21の掘形で大部分を失っているが、北東壁南東寄りの位置に張り出しが付属する。残存している範囲では、２個のピットと浅い掘り込みを確認できる。残存部で測



第146図　02-ＳＩ52Ａ



第147図　02-ＳＩ52Ａ炭化材・遺物出土状況

ると、住居壁直交方向で約1.8m、住居壁平行方向で約1.5mで、床面との高低差は約0.35mである。

床面は、基本的には掘形底面の地山上面を利用するが、02-ＳＩ52Ｂ壁溝上部に集中して貼床を施す。壁溝は北東壁と南東壁の一部を除いて、調査した範囲で全周確認した。上場幅0.12～0.25m、下場幅0.04～0.18m、床面からの深さ0.15～0.25mである。床面や張り出し部で10個のピットを確認した。Ｐ２・４は住居隅よりやや内側に配置する主柱穴である。南西部に位置する主柱は撹乱が破壊している。Ｐ５・９は隅柱、Ｐ６～８は壁柱穴である。いずれも壁板保持に関わる壁柱穴と考えられる。Ｐ11・12は張り出し部の北隅と東隅に配置する。Ｐ６はＰ12と対を成す位置にあり、張り出し部に関連する柱穴とみられる。本住居跡に伴うカマド跡は検出できなかった。おそらく南西部の撹乱が破壊した部分にあったとみられる。

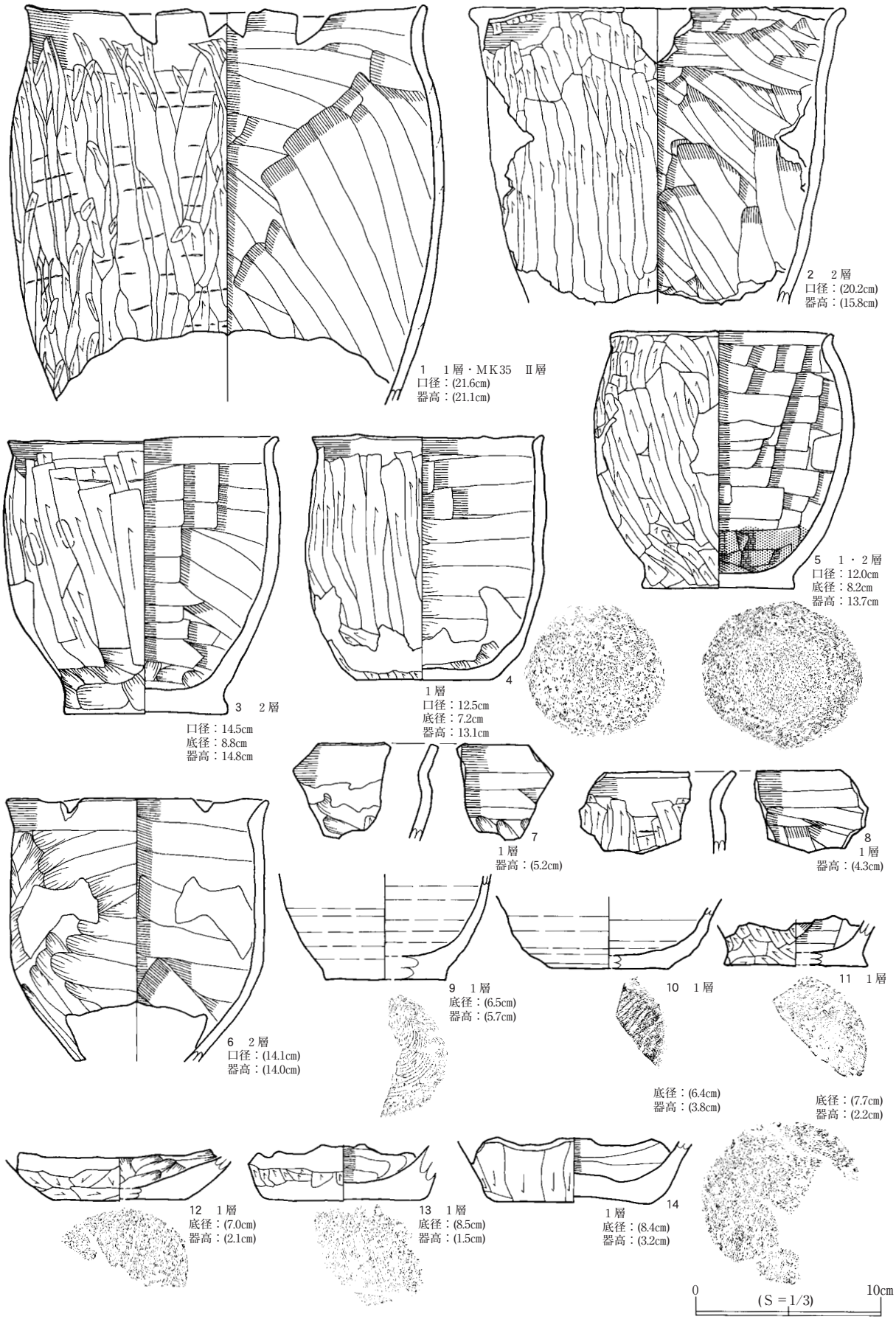
本住居跡は焼失家屋で、床面上で多数の炭化材や焼土を検出した。02-ＳＩ21が掘り込む南東部は撤去してある。炭化材の大きなものは、北西壁に平行して分布する板状の材で、木目の向きは北東－南西方向である。これらの一群より住居中央部側には、小破片の炭化材が散在する。この一群の木目もほとんどが北東－南西方向を向く。この中で２点のサンプルを樹種分析した結果、いずれもスギであった。以上から、炭化材の本来の姿として最も有力なのが壁板か床板である。焼土分布は極めて不規則で住居中央部まで及び、家屋焼失時に鎮火の目的で投棄した土の一部が焼土化した可能性もある。なお、焼土や炭化物の上部から、完形の鉄製鋤先が出土している。明らかに鎮火後に投棄したものであり、何らかの意図が窺える。

本住居跡は壁から離れた位置に４本の主柱をもつ住居で、南東壁にカマドを設置すると想定される。３軒重複する02-ＳＩ52の中では新段階で、規模も最大になる。廃絶時には焼失しているが、屋根や柱など構造材の炭化材が明確でなく、鎮火後には鉄製品を投棄するなど、単なる火事ではない様相を示す。02-ＳＩ21が本住居跡を掘り込んでおり、最終的には人為的に埋め立てている。

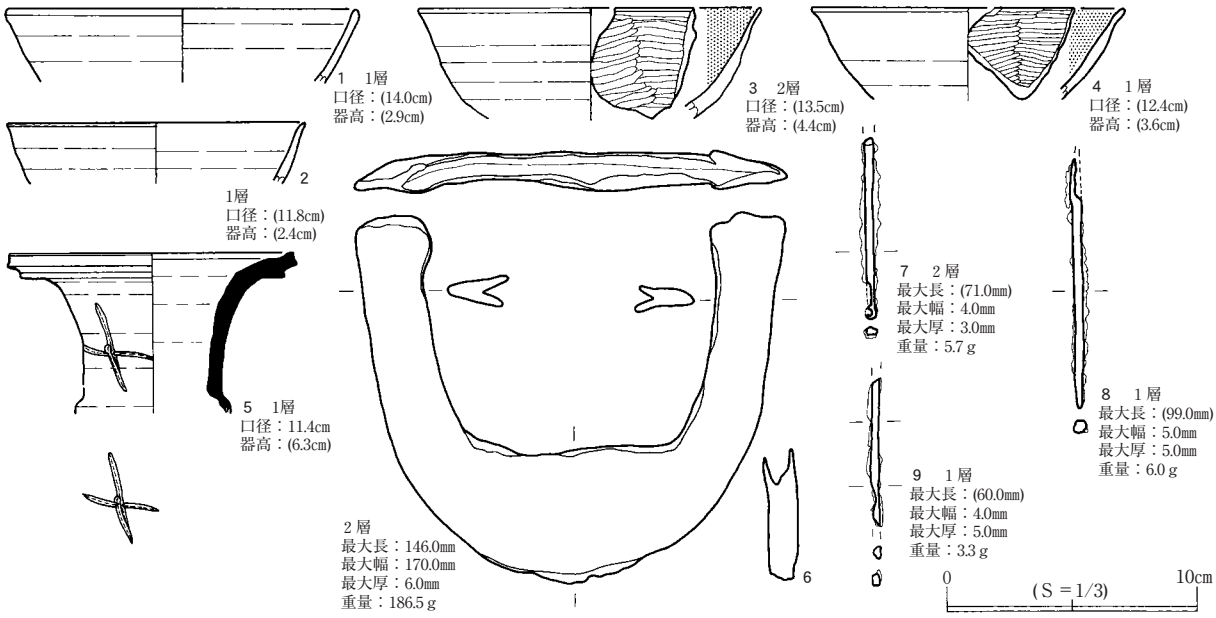
遺　物(第148図・149図)　住居跡内から土師器甕・坏、須恵器壺、鉄製品が出土した。土師器甕は口縁部が51点、底部が31点出土しており、そのうち比較的大型の口縁部資料８点、底部資料９点を図示した。図示しなかったものを含めた甕の口縁部分類別数量はＡ類(１点)、Ｂ類(５点)、Ｃ類(31点)、Ｄ類(５点)、分類不能(９点)で、底部分類別数量は砂底(20点)、木葉痕(２点)、ナデ(２点)、ケズリ(５点)、回転糸切(１点)、分類不能(１点)の内訳になる。口縁部ではＣ類が、底部では砂底が圧倒的に多い。比較的大型の破片では、小型の土師器甕でも口縁部の外反が短いものが目立つ。

住居の約南東半分は02-ＳＩ21に掘削されているため、遺物の全体的な出土傾向は不明だが、完形の鋤先以外でも、ほぼ同レベルで鉄製品がまとまって出土している。

148図１・２は比較的中・大型の土師器甕である。１は胴部に最大径を有し、頸部でくびれて口縁部が直立気味に外反する。外面の縦位ケズリは浅く、輪積痕が残る。内面は横・斜位ヘラナデ調整である。２は胴下部から直線的に外傾し、口縁部がわずかに外反する器形である。外面縦位ケズリ、内面横・斜位ヘラナデ調整である。２は胴部から口縁部まで器厚がほぼ一定し、器壁が比較的厚いのに対し、１は口縁部がやや厚いが、頸部から胴部にかけては比較的器壁が薄い作りである。148図３～６は小型の土師器甕である。３・６は胴下部を境に、下部は底部から外傾して、上部は直立気味に立ち上がり、口縁部がわずかに外反する器形である。６のほうが口縁部の肥厚が目立ち、口唇内面の平滑な仕上げが顕著である。３は外面縦位ケズリ、内面横位ヘラナデ調整で、６は外面横位ユビナデ、



第148図　02-ＳＩ52Ａ出土遺物１



第149図　02-ＳＩ52Ａ出土遺物２

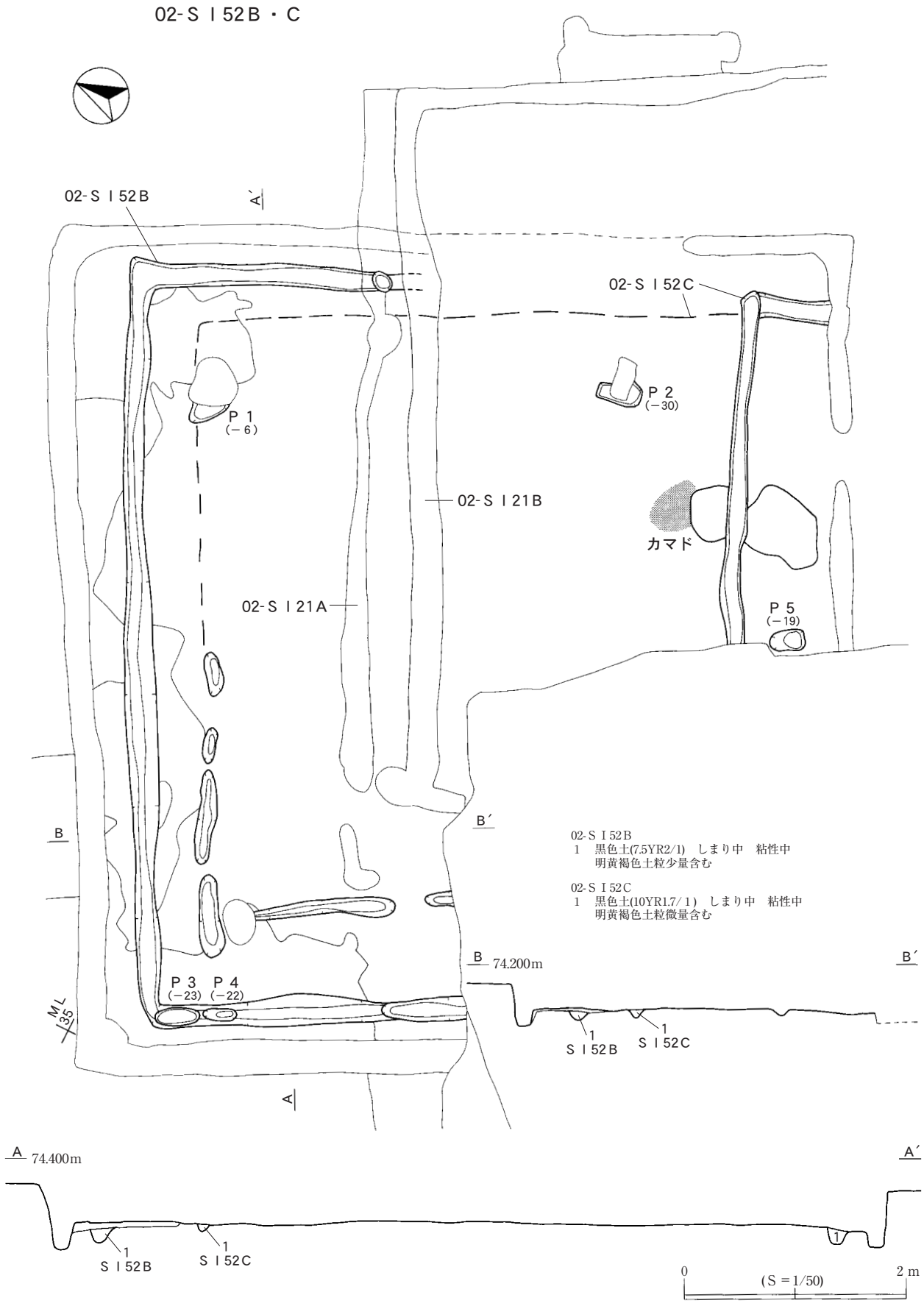
内面横位ヘラナデ調整である。４は３・６に比べてより下部の位置を境に、下部が外傾、上部が直立気味に立ち上がり、口縁部がわずかに外反する器形である。口唇内面の面取りも、前２者と共通する。外面縦位ケズリ、内面下部は横位ユビナデ、上部は横位ヘラナデ調整である。５は底部から内湾気味に立ち上がって、口縁部がわずかに直立気味に反る器形である。外面ケズリは胴部が球面のため何回にも分けて施している。内面の横位ヘラナデも短い間隔で施している。３の底部はケズリにより再調整を施し、４・５の底部は砂底である。４の砂底は全面一様な砂の付着だが、５はドーナツ状に外縁部に多く砂の付着が認められる。

148図７・８は土師器甕の口縁部破片で、いずれも頸部に段を有し、口唇を平滑に面取りしている。148図９～14は土師器甕の底部で、９は回転糸切痕を、12・13は木葉痕を残し、10は簾状敷物の痕跡を部分的にとどめ、11は全面をケズリで再調整している。14は砂底である。底部形状は９が突出し、11が張り出す以外は、直線的に外傾する。

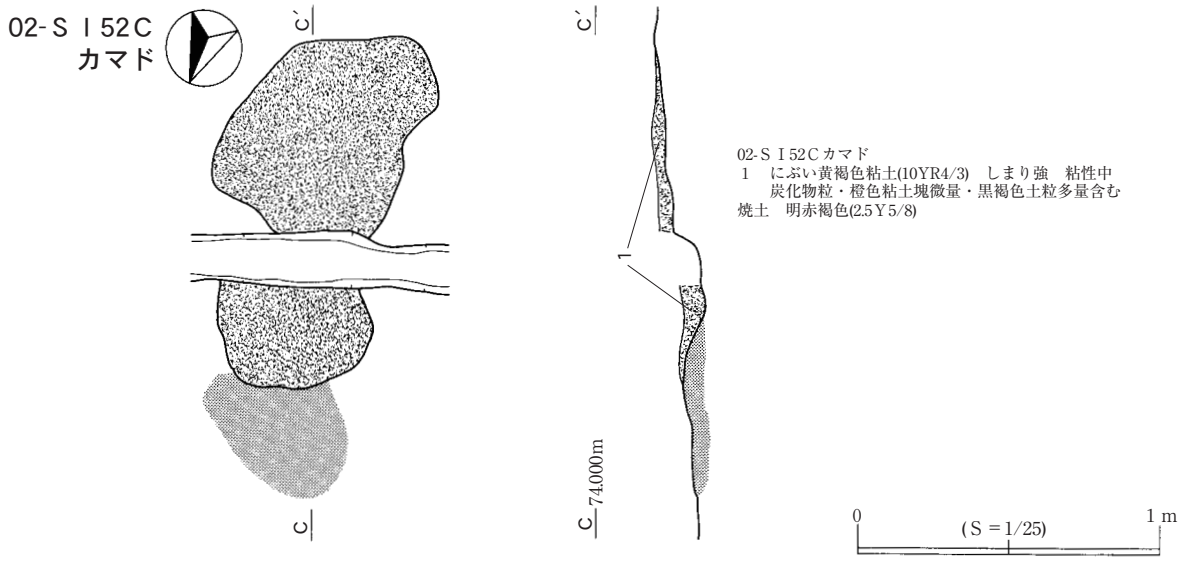
149図１～４は土師器坏で、１・２がＡ類、３・４がＢ類である。いずれも口縁部破片で、１がわずかに内湾気味に立ち上がるのに対して、２～４は口縁部が外反して、先細りの断面形状になる。149図５は須恵器壺の頸部以上の資料で、口縁部が強く外反して外面に２段の面を構成する。内面は受け口状に１段のへこみをもつ。なお頸部側面には、ヘラ描きにより「十」字状の記号を施す。149図６～９は鉄製品である。６は完形の鋤先で、錆膨れにより刃先が膨らんでいるが、柄に装着する側は、断面「Ｖ」字形状を残す。７～９は棒状の鉄製品で、７は下端に環状の丸みをもつ。８は上部を欠損しており、下端は先鋭な形状になる。９は両端を欠損する。

02-ＳＩ52Ｂ(第150図、図版43・44)

遺　構　１回目の建て替えにより、02-ＳＩ52Ｃより規模を拡大した住居である。最大規模の02-ＳＩ52Ａのプラン内に収まるため、本住居跡に伴う堆積土はない。平面形は、北東－南西方向に長い長方形で、北西壁に直交する主軸方位はＮ－26°－Ｗである。主軸とそれに直交するラインで測る住居面



第150図　02-ＳＩ52Ｂ・Ｃ



第151図　02-ＳＩ52Cカマド

積は約44㎡で、特大形の住居である。壁の長さは北東壁約6.5m、北西壁約6.7mである。壁の深さや立ち上がりも、02-ＳＩ52Aに拡張した段階で失われている。

床面は掘形底面の地山上面を利用している。壁溝は北東壁の一部を除いて、調査した範囲で全周確認した。上場幅0.18～0.29m、下場幅0.04～0.14m、床面からの深さ0.1～0.2mである。

床面及び壁溝内部で５個のピットを確認した。Ｐ１・２は住居隅からやや内側に位置する主柱穴である。02-ＳＩ52AのＰ１・２と重複していることから、02-ＳＩ52ＡＰ４が本住居でも機能した可能性が高い。これはＰ１の平面形のズレやＰ２・３が重なる点からも確率が高いと思われる。Ｐ３・４は西隅にあり、壁溝保持に関わる補助柱穴と考えられる。本住居跡に伴うカマド跡は検出できなかったが、プランや規模が近似することから、02-ＳＩ52Aと同地点を利用していたと推測する。

本住居跡は壁から離れた位置に主柱をもち、南東壁にカマドを設置すると想定される住居である。３軒重複する02-ＳＩ52の中では中段階にあたる。02-ＳＩ52Aへと拡張するのに合わせて廃絶したと考えられる。

遺　物　本住居跡に伴う遺物は検出できなかった。

02-ＳＩ52C(第150図・151図)

遺　構　02-ＳＩ52の地点に最初に築いた住居である。最大規模の02-ＳＩ52Aのプラン内に収まるため、本住居跡に伴う堆積土はない。平面形は、北東－南西方向に長い長方形で、北西壁に直交する主軸方位はＮ－26°－Ｗである。主軸とそれに直交するラインで測る住居面積は約29㎡で、大形の住居である。残存する壁溝配置から想定される壁の長さは、北東壁約5.0m、北西壁約5.7mである。壁の深さや立ち上がりも、02-ＳＩ52Bに拡張した段階で失われている。

壁溝の残存状況からみて、床面は02-ＳＩ52Ａ・Ｂの構築により欠失しているとみられる。壁溝は南東壁沿いと、北西壁・南西壁の一部で確認した。上場幅0.09～0.18m、下場幅0.02～0.12m、検出面からの深さ0.1m未満である。本住居跡に伴うピットは確認できなかった。

カマドは、南東壁の中央からやや北東寄りの位置で、焼土と粘土分布で確認した。02-ＳＩ52Ｂ構築

段階に上部構造は撤去しているため、確認できたのは火床面のみである。関連する堆積土は１層のみで構築粘土の崩落層である。火床面は長径約0.5m、短径約0.25mの不整な楕円形の被熱範囲で、地山に約0.1mまで被熱が及ぶ。

本住居跡の痕跡を示す下部構造の多くは、02-ＳＩ52Ａ・Ｂ構築段階に失われており、住居構造には不明な点が多い。３軒重複する02-ＳＩ52の中では古段階にあたり、02-ＳＩ52Ｂへと拡張する段階に廃絶したと考えられる。

遺　物　本住居跡に伴う遺物は検出できなかった。

02-ＳＩ24

本住居跡は、ＭＣ～ＭＥ50～52グリッドの、第Ⅴ層中位～第Ⅵ層上面において、黒色土の分布範囲で確認した。検出面が深いため壁の立ち上がりや埋没過程を示す堆積土はほとんど失われている。本住居跡の立地点は台地上部平坦面だが、わずかに南へ傾斜する。02-ＳＫ02が本住居跡にかかっており、03-ＳＩ173や05-ＳＩ28とも近接しているため、新旧関係があると考えられる。主軸方位から考えると本住居跡の方が新しいと想定される。周辺には、02-ＳＩ25、03-ＳＩ106・178、05-ＳＩ27がある。

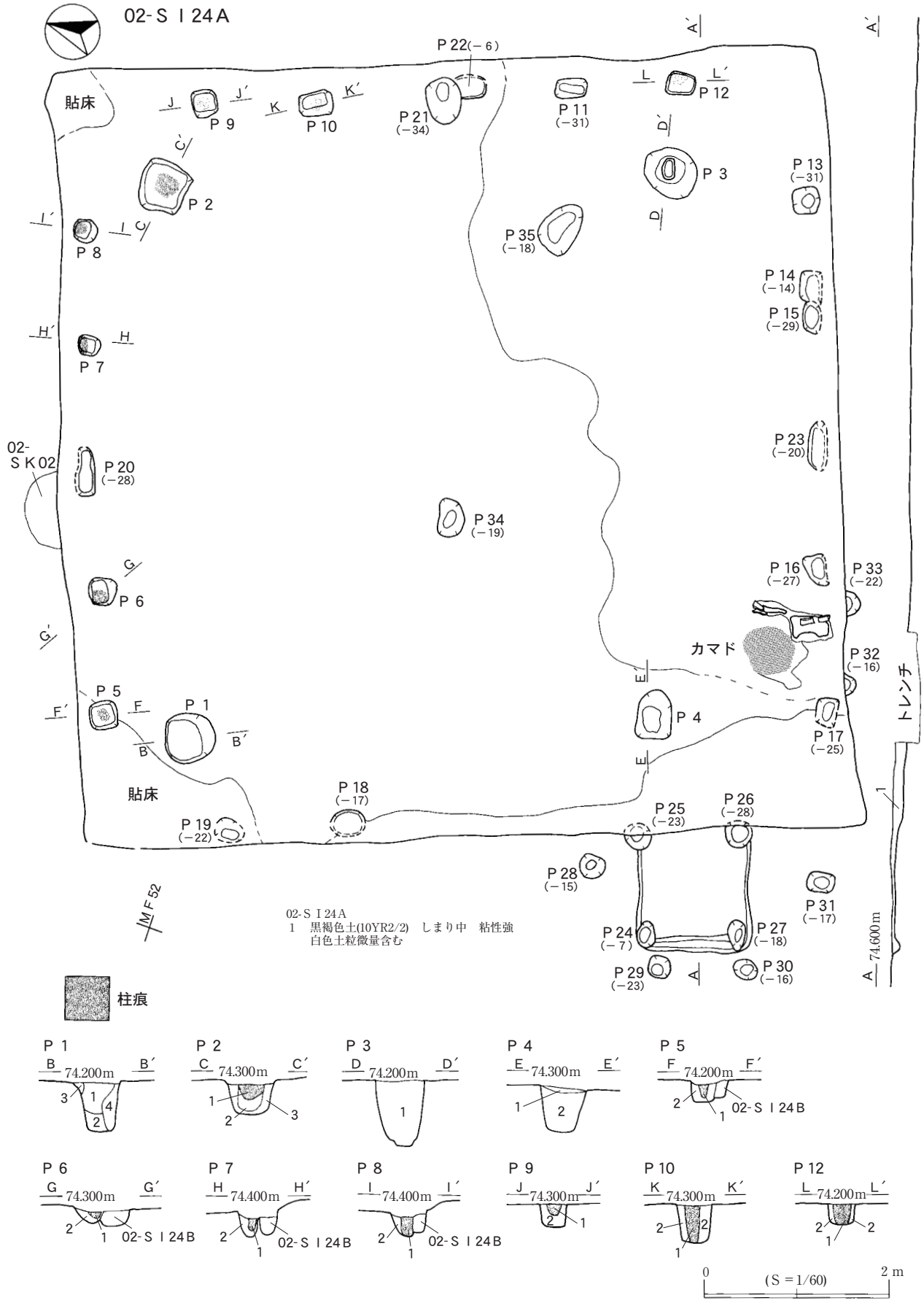
本住居跡の建て替えの場合、住居プランは全く変更がないが、壁溝と壁柱穴の切り合いやカマドの造り替えから２時期あると判断した。新しい順に、Ａ・Ｂのアルファベットを付けて表記した。

02-ＳＩ24Ａ(第152図～154図、図版45、147)

遺　構　02-ＳＩ24Ｂの壁溝を埋め立てて、壁柱による壁板保持に造りを替えた住居である。堆積土は１層のみで、住居内部から張り出しにかけて堆積する土である。土質や堆積過程に特徴が少なく、本住居跡の埋没過程を特定するのは困難である。

平面形はほぼ正方形で、カマドの付く壁に直交する主軸方位はＮ－21°－Ｗである。主軸とそれに直交するラインで測る住居面積は約71㎡で、超大形の住居である。各壁の長さは、北東壁約8.2m、南東壁約8.3m、南西壁約8.4m、北西壁約8.2mである。壁の検出面からの深さや立ち上がりは不明である。南西壁には張り出しがある。４個のピットと溝で構成される方形状で、四隅にピットを配し、Ｐ24・27を深さ0.05mの溝で結ぶ。規模は住居壁直交方向で約1.3m、住居壁平行方向で約1.2mである。出入り口の痕跡と考えられる。なお、張り出しの周囲には４個のピットが規則的に配置してあり、張り出しを造り替えた可能性もある。

床面は、住居約南東半分と北隅・西隅の一部に貼床を施し、それ以外は掘形底面の地山上面を利用している。建て替えを考慮すれば、古段階である02-ＳＩ24Ｂ段階の造成と考えられる。なお、本住居段階に伴う壁溝は存在しない。床面や住居周辺部で本住居跡に伴うとみられる35個のピットを確認した。Ｐ１～４は住居隅よりやや内側に配置する主柱穴である。Ｐ１～３はほぼ直角三角形の配置になるが、Ｐ４はカマド前庭部にかかるため北西よりに位置し、全体で台形状の配置になる。柱穴中心で測る柱穴間距離はＰ１－２間約6.0m、Ｐ３－４間約6.0m、Ｐ１－４間約5.0m、Ｐ２－３間約5.5mである。Ｐ５～23は壁沿いに位置する柱穴で、主に壁板を保持する材を据えたとみられる。配置の規則性は、各壁沿い５個ずつを基本の配置とし、張り出しの付く南西壁だけ配置を変えている。壁柱穴の多くは柱痕を残しており、本住居跡廃絶時に材を部分的に放置したとみられる。この他、カマド付近



第152図　02-ＳＩ24Ａ

P１
1　黒色土(10YR2/1)　しまり強　粘性弱
　地山土塊微量含む
2　黒色土(10YR2/1)　しまり弱　粘性強
　明黄褐色土粒多量・地山土塊少量含む
3　褐色土(7.5YR4/6)　しまり強　粘性弱
　黒褐色土粒少量含む
4　黒色土(10YR2/1)　しまり中　粘性強
　地山土塊多量含む

P２
1　黒色土(10YR2/1)　しまり中　粘性強
　地山土塊微量含む
2　黒褐色土(10YR2/2)　しまり弱　粘性強
　黒褐色土粒多量含む
3　黒褐色土(10YR3/1)　しまり強　粘性中
　明黄褐色土粒多量・地山土塊微量含む

P３
1　黒褐色土(10YR2/2)　しまり中　粘性強
　炭化物粒・にぶい黄褐色粘土粒・黄褐色土粒微量含む

P４
1　黒褐色土(10YR3/1)　しまり強　粘性中
　黒褐色土粒・明黄褐色土粒・地山土塊微量含む
2　黒色土(10YR2/1)　しまり弱　粘性強
　暗褐色土粒微量・地山土塊少量含む

P５
1　黒色土(10YR2/1)　しまり中　粘性強
　地山土塊微量含む
2　黒褐色土(10YR2/2)　しまり強　粘性強
　にぶい黄褐色土粒多量・地山土塊微量含む

P６
1　黒色土(10YR2/1)　しまり中　粘性強
　地山土塊微量含む
2　黒褐色土(10YR2/2)　しまり強　粘性強
　にぶい黄褐色土粒多量・地山土塊微量含む

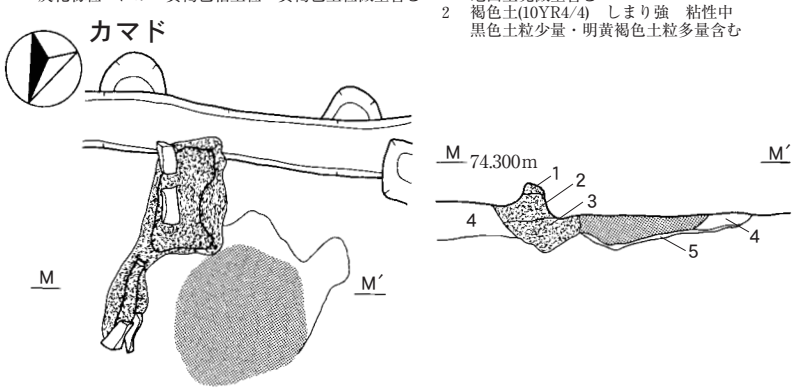
P７
1　黒色土(10YR2/1　しまり中　粘性強
　地山土塊微量含む
2　褐色土(10YR4/4)　しまり強　粘性中
　黒色土粒少量・明黄褐色土粒多量含む

P８
1　黒色土(10YR2/1)　しまり中　粘性強
　地山土塊微量含む
2　褐色土(10YR4/4)　しまり強　粘性中
　黒色土粒少量・明黄褐色土粒多量含む

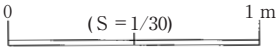
P９
1　黒色土(10YR2/1)　しまり中　粘性強
2　黒褐色土(10YR3/1)　しまり強　粘性中
　炭化物粒微量・暗褐色土粒・地山土塊少量含む

P10
1　黒色土(10YR2/1)　しまり中　粘性強
　地山土塊微量含む
2　黒褐色土(10YR2/2)　しまり強　粘性強
　にぶい黄褐色土粒多量・地山土塊微量含む

P12
1　黒色土(10YR2/1)　しまり中　粘性強
　地山土塊微量含む
2　黒褐色土(10YR2/2)　しまり強　粘性強
　にぶい黄褐色土粒多量・地山土塊微量含む



02-ＳＩ24Ａカマド
1　褐色粘土(7.5YR4/6)　しまり強　粘性強
　黒褐色土粒微量含む
2　黒色粘土(10YR2/1)　しまり中　粘性中
　にぶい黄褐色粘土塊・黒褐色土粒少量含む
3　にぶい褐色粘土(7.5YR5/4)　しまり弱　粘性中
4　黒色土(10YR2/1)　しまり強　粘性強
　白色土粒・緑灰色粘土塊・黒褐色土粒微量・
　にぶい黄橙色粘土・地山土塊少量含む
5　明黄褐色砂(2.5Y7/6)　しまり強　粘性弱
焼土　明赤褐色(５YR5/6)



第153図　02-ＳＩ24Ａカマド

にＰ32・33が２個並んでいる。配置からみてカマドの下部構造に関わる痕跡とみられる。

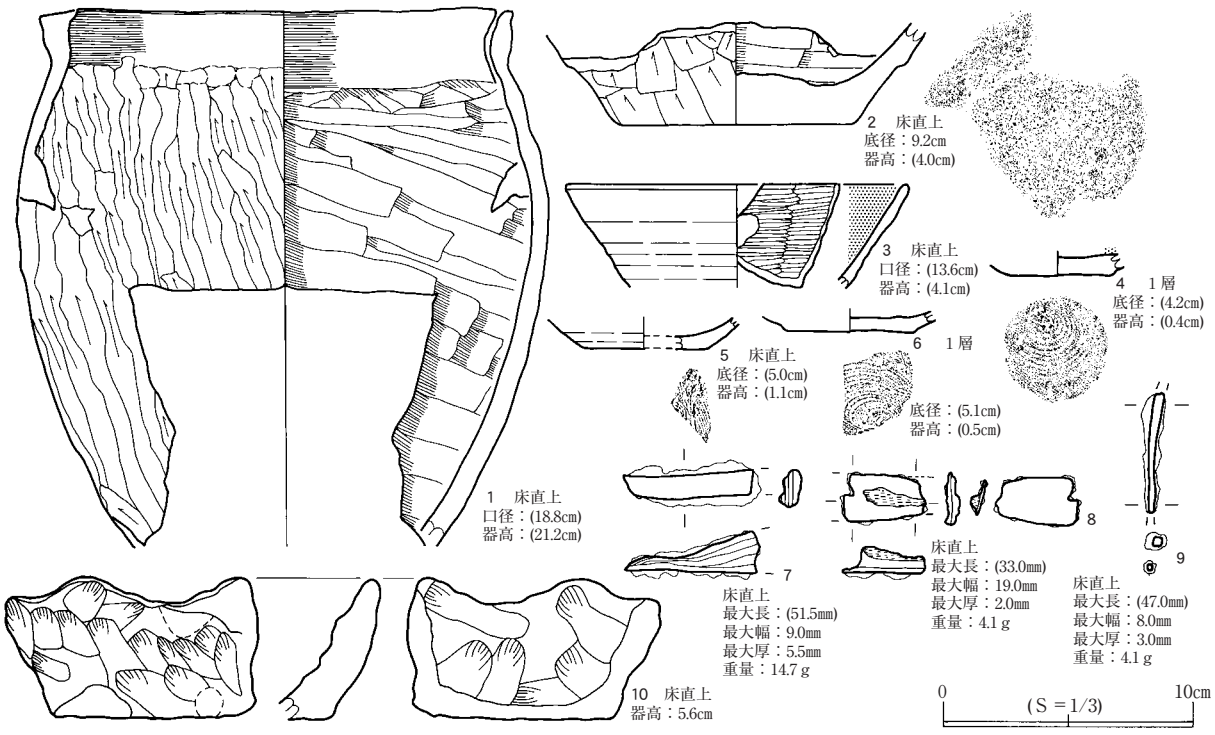
カマドは南東壁の中央から南西寄りの位置で、褐色粘土の広がりで確認した。住居全体を床面で検出しているため、カマドの残存状況も悪く、袖の一部と火床面のみ確認した。堆積土は５層に分かれる。全て構築土の残存土で、02-ＳＩ24Ｂカマド火床面上部に５層の砂を敷き、02-ＳＩ24Ｂカマド前庭部を４層で埋め立て、３・２・１層の順で上部構造を積み上げている。火床面は、４層の被熱範囲である。袖には芯材として礫を用いている。住居南東壁から袖末端までは約1.0m、粘土分布範囲で推定するカマド袖の最大幅は約1.2mである。火床面は径約0.55mの円形状の被熱範囲で、最大0.12mの深さまで被熱が及んでいる。

本住居跡は壁から離れた位置に４本の主柱をもち、南東壁にカマドを設置する住居である。02-ＳＩ24Ｂとは、規模や基本的なプランはほぼ同じである。

遺　物(第154図)　住居跡内から土師器甕・坏、鉄製品、土製品が出土した。土師器甕は口縁部が７点、底部が４点出土しており、そのうち比較的大型の口縁部資料１点、底部資料１点を図示した。検出がほぼ床面だったため、堆積土中及び床面直上の遺物も大半が失われている。

154図１は大型の土師器甕で、胴部中位が丸みを帯びて張り出し、頸部でくびれて口縁部が直立気味に外反する器形である。また、調整のため頸部の器壁が薄く、相対的に口縁部が肥厚する。外面は縦位ケズリ、内面は横位ヘラナデ調整である。154図２は土師器甕の底部で、１と同一個体の可能性が高いもので、砂底である。

154図３～６は土師器坏で、５がＡ類、３・４・６がＢ類である。３は口縁部破片で直線的に外傾し、口縁部がやや肥厚する。４～６は底部資料でいずれも回転糸切痕を残す。４は底部厚がやや厚めである。154図７～９は鉄製品である。７は刀子と考えられるが、錆が進行して原形部が少なく判断



第154図　02-ＳＩ24Ａ出土遺物

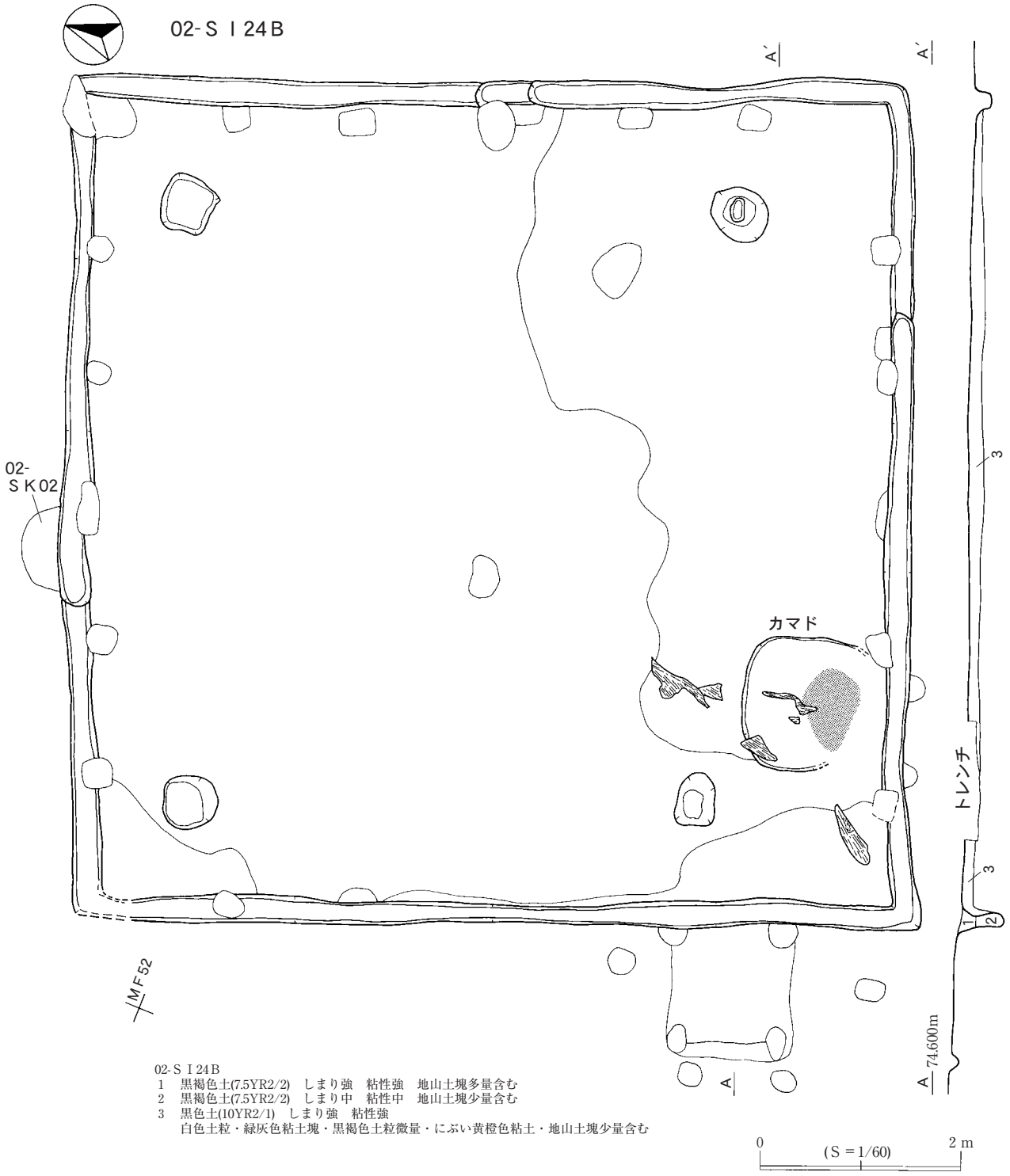
が難しい。８は穂摘具の破片とみられる。９は両端を欠損する棒状のもので、上部がやや太さを増す形状である。154図10は手づくねの土器で、内外面とも粗雑なユビナデにより整形している。器表面は凹凸が多く、極めて雑な仕上がりである。

02-ＳＩ24Ｂ(第155図・156図、図版45)

遺　構　02-ＳＩ24の地点に最初に構築した住居で、壁溝による壁板保持構造である。平面形、カマドの付く壁に直交する主軸方位、主軸とそれに直交するラインで測る住居面積、各壁の長さは、02-ＳＩ24Ａに順ずる。南西壁の張り出しも本段階から存在していた可能性が高い。

床面は02-ＳＩ24Ａとほぼ共有するとみられ、貼床の一部が壁溝内の裏込めにも及ぶことから、住居約南東半分と北隅・西隅の一部の貼床も本段階に造成したと考えられる。貼床には地山土塊を多量に含む土を用いており、ほぼ平坦に敷き詰めている。壁溝は全周で確認した。上場幅0.18～0.3m、下場幅0.1～0.22m、床面からの深さ0.1～0.3mである。１・２層は壁溝内堆積土で、２層は裏込めの残存土と考えられる。本住居跡に伴うとみられるピットは厳密には抜き出せなかったが、02-ＳＩ24ＡＰ１～４の主柱穴は本段階から利用を開始した可能性が高い。

カマドは南東壁の中央から南西寄りの位置で、02-ＳＩ24Ａカマド下部の掘り込みと、焼土範囲で確認した。02-ＳＩ24Ａカマド構築段階で、上部構造は完全に撤去しており、カマド基底の掘り込みと火床面のみを確認した。カマド基底の掘り込みは、火床面との配置関係からみて、カマド袖と焚き口に相当する範囲と考えられる。床面からの深さは約0.1mで、南東壁から住居中央部にかけては約1.6m、最大幅は約1.4mである。南東壁側の掘り込みラインが不明瞭なため、正確な平面形は不明である。火床面は長径約0.8m、最大幅約0.6mの不整な楕円形状で、最大0.16mの深さまで被熱が及んでいる。主軸方向は住居主軸に直交する。なおカマド周辺からは、炭化材が４点出土しているが、出土層位が貼

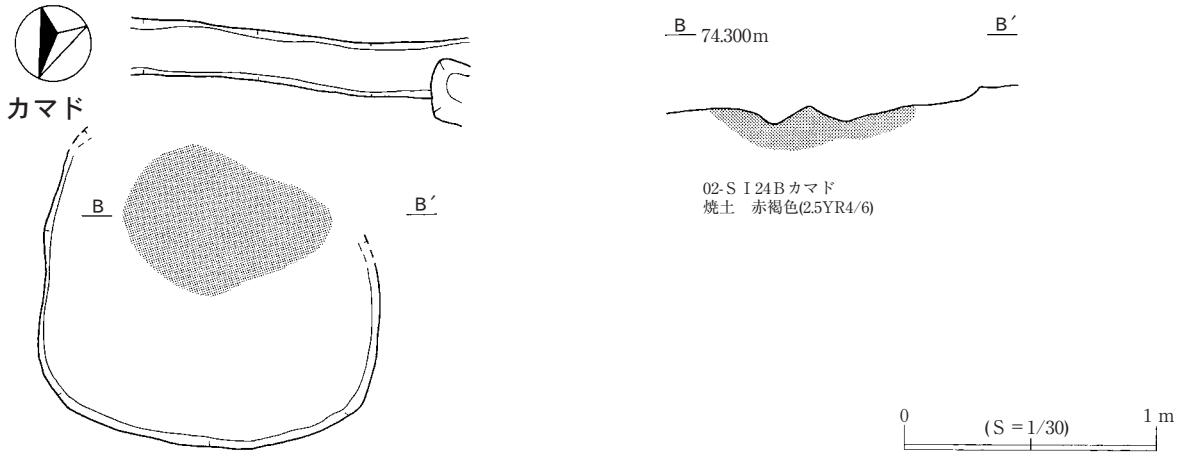


第155図　02-ＳＩ24Ｂ

床内部であることから、02-ＳＩ24Ａ造成時にカマド周辺を整地した際に一緒に埋めたものと判断した。比較的長さがあり、カマド燃料の残存かどうかは判断に迷う。

本住居跡は壁から離れた位置に4本の主柱をもち、南東壁にカマドを設置する住居と考えられる。02-ＳＩ24Ａとは壁板やカマドの造り替えをするだけの建て替え関係であり、他の住居の建て替えに比べると住居構造の変更が少ない。

遺　物　本住居跡に伴う遺物は検出できなかった。



第156図　02-ＳＩ24Ｂカマド

02-ＳＩ25(第157図・158図、図版160)

遺　構　本住居跡は、ＭＦ49、ＭＧ48～52、ＭＨ・ＭＩ49～51グリッドの、第Ⅴ層中位～第Ⅵ層上面で、地山土塊を多量に含む黒色土の分布範囲で確認した。本住居跡の立地点は台地上部平坦面で、ほとんど傾斜がない。重複する遺構はないが、02-ＳＤ02を本遺構の付属施設とみた場合、02-ＳＩ14よりも新しくなる。周辺には、02-ＳＩ11・24、03-ＳＩ15・16、05-ＳＩ27がある。

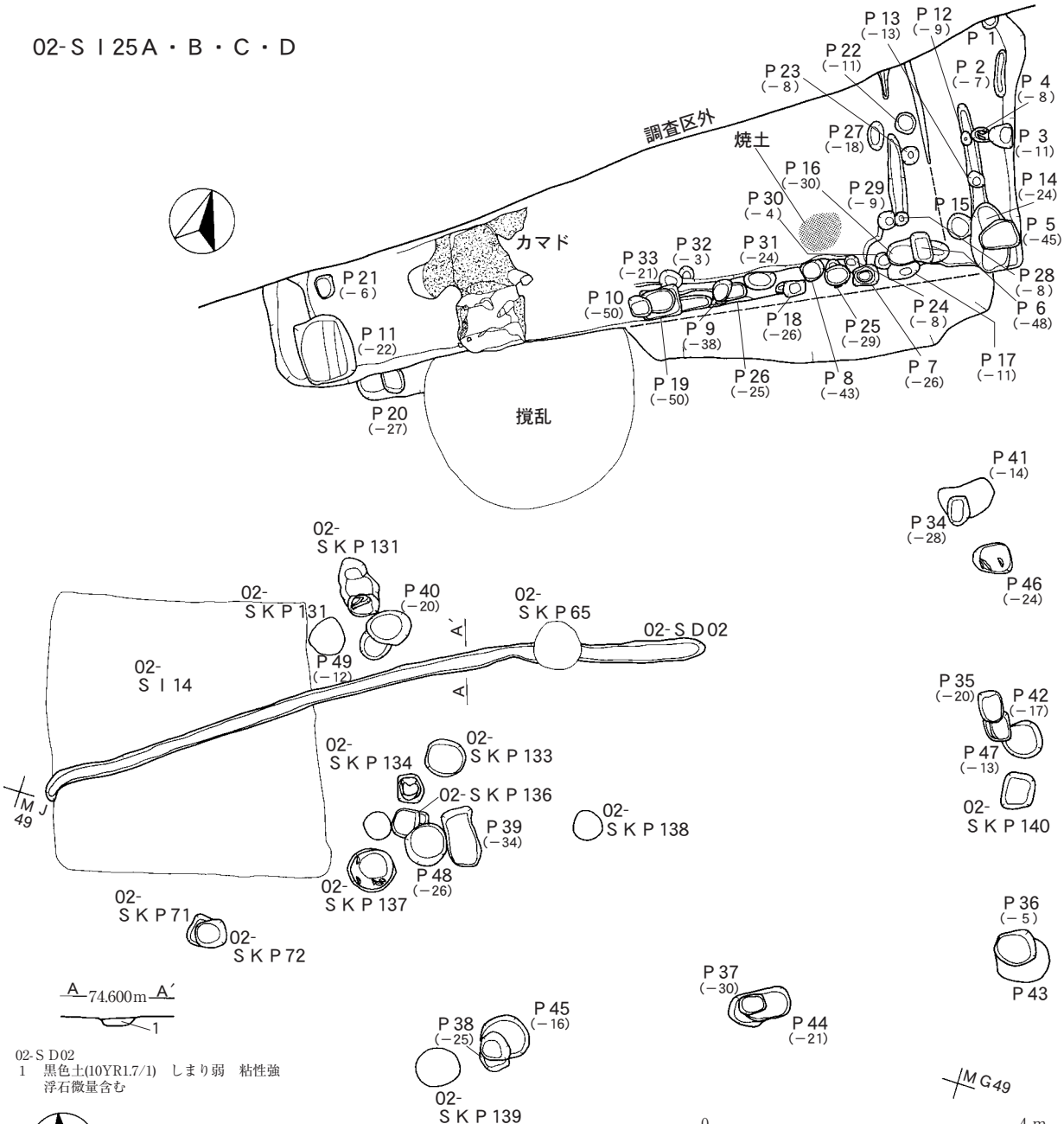
床面精査の結果、ピットと壁溝の配置から複数回の建て替えが想定されたが、遺構の断面情報採取にミスがあり、図上復元の形で検討を進める。壁溝と壁柱穴の切り合いから最低４時期あると判断した。新しい順に、Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄのアルファベットを付けて以下表記する。

最大規模に達したのはＡ段階で、Ｐ１～11と残存するカマドで構成される。それより一段階古いのが、Ｂ段階で、P12～21とこれが連結する壁溝で構成される。さらに一段階古いＣ段階は、Ｐ22～26と、Ｐ22・23脇の段差を壁とする範囲と推定される。最古段階は最小規模のＤ段階で、Ｐ27～33とこれに連結する壁溝で構成するとみられる。Ａ段階に伴うとみられるカマド周辺部は明らかに柱穴の分布が少なく、少なくともＤ段階は、カマド手前までで壁が折り返す形状だったと考えられる。それ以外の段階の規模を考える上で重要なのが、住居外南東部に隣接するとみられる掘立柱建物跡である。柱穴の配置から３段階変遷が想定され、Ａ段階に伴うのがＰ34～40の７個、Ｂ段階に伴うのがＰ41～45と、Ａ段階と重複するＰ39・40の７個、Ｃ段階に伴うのがＰ46～49の４個である。Ａ・Ｂ段階には住居南東壁から桁行３間、梁間２間の配置で、Ｃ段階では４個の柱穴で１間×２間と考えられる。なお、02-ＳＤ02が伴うとすれば、この掘立柱建物跡の排水溝になる可能性もある。

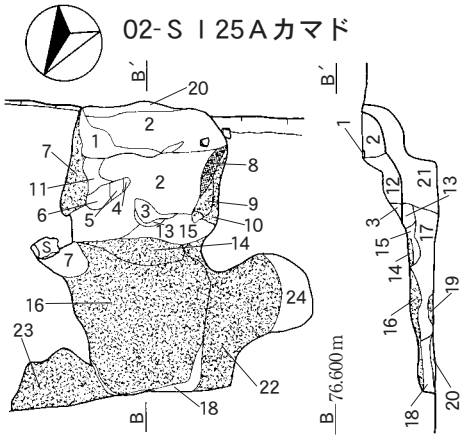
住居床面は古段階には地山上面を利用し、新しくなるにつれ貼床を施して、床面をかさ上げするとみられる。Ａ段階に伴うカマドは、袖と前庭部を確認できた。袖は南東壁から直角方向に、礫を芯材とした粘土範囲で確認できる。前庭部も底面に粘土を貼っている。

本住居跡は３回以上の建て替えを行い、４軒以上の住居が重なる。南東側には掘立柱建物を伴い、最大期には本集落内でも有数の規模を誇る住居になったと考えられる。

遺　物(第158図)　住居跡内から土師器甕・坏・鍋、鉄製品、土製品、砥石が出土した。土師器甕は口縁部が24点、底部が４点出土しており、そのうち比較的大型の口縁部資料８点、底部資料３点を図示した。図示しなかったものを含めた甕の口縁部分類別数量はＡ類(２点)、Ｂ類(１点)、Ｃ類(16点)、Ｄ



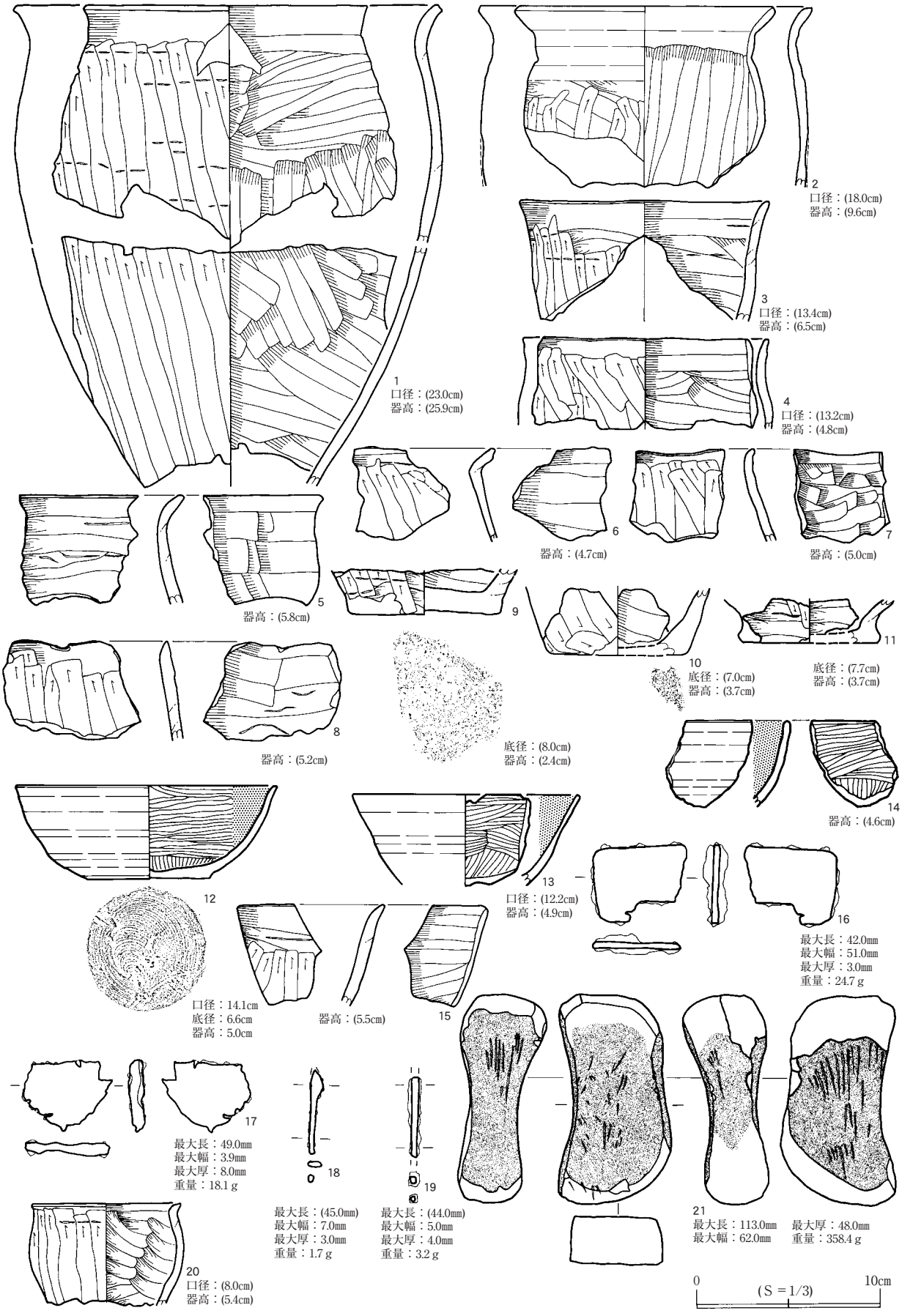
02-ＳＤ02
1　黒色土(10YR1.7/1)　しまり弱　粘性強
　浮石微量含む



02-ＳＩ25Ａカマド
1　褐色土(7.5YR4/3)　しまり弱　粘性強
2　黒褐色土(10YR3/1)　しまり弱　粘性強
　焼土粒・浮石微量含む
3　褐色土(7.5YR4/3)　しまり弱　粘性強
4　赤褐色土(2.5YR4/6)　しまり弱　粘性強
5　暗褐色土(５YR3/3)　しまり弱　粘性強
6　褐色土(7.5YR4/3)　しまり弱　粘性強
7　にぶい黄橙色粘土(10YR7/4)
　しまり弱　粘性強
8　赤褐色粘土(５YR4/6)　しまり弱　粘性強
9　黄褐色粘土(10YR5/6)　しまり弱　粘性強
10　にぶい橙色粘土(7.5YR7/4)
　しまり弱　粘性強
11　明褐色土(7.5YR5/6)　しまり弱　粘性強
12　黒色土(10YR2/2)　しまり中　粘性強
　焼土粒・浮石微量含む
13　黒褐色土(10YR2/3)　しまり中　粘性強
　焼土粒微量含む
14　にぶい黄褐色粘土(10YR5/4)
　しまり強　粘性強
15　黒褐色土(10YR3/1)　しまり弱　粘性弱
16　にぶい黄褐色粘土(10YR5/4)
　しまり強　粘性強
17　黒色土(10YR2/1)　しまり中　粘性中
　白色粘土塊・地山土塊少量含む
18　黒色土(10YR2/1)　しまり中　粘性中
　焼土粒微量含む
19　にぶい黄褐色粘土(7.5YR5/4)
　しまり弱　粘性中
　白色土塊微量含む
20　黒褐色土(10YR3/1)　しまり弱　粘性強
　焼土粒微量含む
21　黒色土(10YR1.7/1)　しまり弱　粘性強
22　にぶい黄褐色粘土(10YR4/3)
　しまり弱　粘性強
23　にぶい黄橙色粘土(7.5YR7/4)
　しまり弱　粘性強
24　明赤褐色土(5YR5/8)
　しまり弱　粘性強
焼土　明赤褐色(５YR5/8)

0　2 m
(Ｓ＝1/40)

第157図　02-ＳＩ25・カマド



第158図　02-ＳＩ25Ａ出土遺物

類(２点)、その他(３点)で、底部分類別数量は砂底(３点)、ケズリ(１点)の内訳になる。

158図１は比較的大型の土師器甕である。胴上部と下部に接点は無いが、調整や焼成具合で同一個体と判断し復元実測した。胴下部から内湾気味に立ち上がって胴上部が張り出し、頸部でくびれて口縁部が外反する器形で、口唇は角頭状になる。外面は縦位ケズリ、内面は胴下部が縦・斜位の、胴上部が横位のヘラナデ調整である。158図２は中型の土師器甕で、胴上部が直立気味に立ち上がり、頸部でくびれて口縁部が外反する器形である。頸部付近までは内外面共にロクロ目様の均一な横ナデを施す。胴部は外面縦位ケズリ、内面縦位ヘラナデ調整である。158図３・４は比較的小型の土師器甕である。３は口縁部まで外反し、４は胴上部でくびれて口縁部が直立する器形で、どちらも外面縦位ケズリ、内面横位ヘラナデ調整である。158図５～８は土師器甕の口縁部破片である。全て胴上部は内傾して立ち上がり、口縁部は、５が外反、６が外折、７が直立気味に短く外反、８は直線的に内傾する。８は、口唇内部を内削ぎ状に面取りしている。外面調整は５が横位ユビナデなのを除いて縦位ケズリ、内面調整は全て横位ヘラナデである。

158図９～11は土師器甕の底部である。９・10が砂底で、11がケズリ再調整を施す。底部の立ち上がり形状は、９がやや直立し、10が直線的に外傾し、11は底部外縁が張り出す形状である。

158図12～14は土師器坏Ｂ類である。12はほぼ完形の資料で、やや広めの底部から胴部にかけて張り出して内湾気味に立ち上がり、口縁部がわずかに外反する。底部の回転糸切痕は筋幅が狭く、外面のロクロ目も工具を当てて凹凸を減らし、内面のミガキも整然とした放射状と横位平行のミガキを施しており、全体に非常に丁寧な作りである。なお、外面には対になるような、筋状の煤跡が認められる。14も口縁部が内湾気味に立ち上がる器形で、13は口縁部が直線的に外傾する器形である。158図15は土師器鍋の口縁部破片で、口縁部が外反し、口唇は先細りになる。

158図16～19は鉄製品である。16・17は板状のもので、錆によるヒビ割れが著しく、本来の機能等については不明である。18は上端が幅広になる形状から、鏃になる可能性が高いとみられる。19は棒状のもので、18の茎になる可能性もある。

158図20は小型土器で、口縁部の外反が少ない器形の甕と相似形の形状である。158図21は砥石で、直方体に近い礫の４側面を利用している。溝状の擦痕が明瞭に残る。

03-ＳＩ15

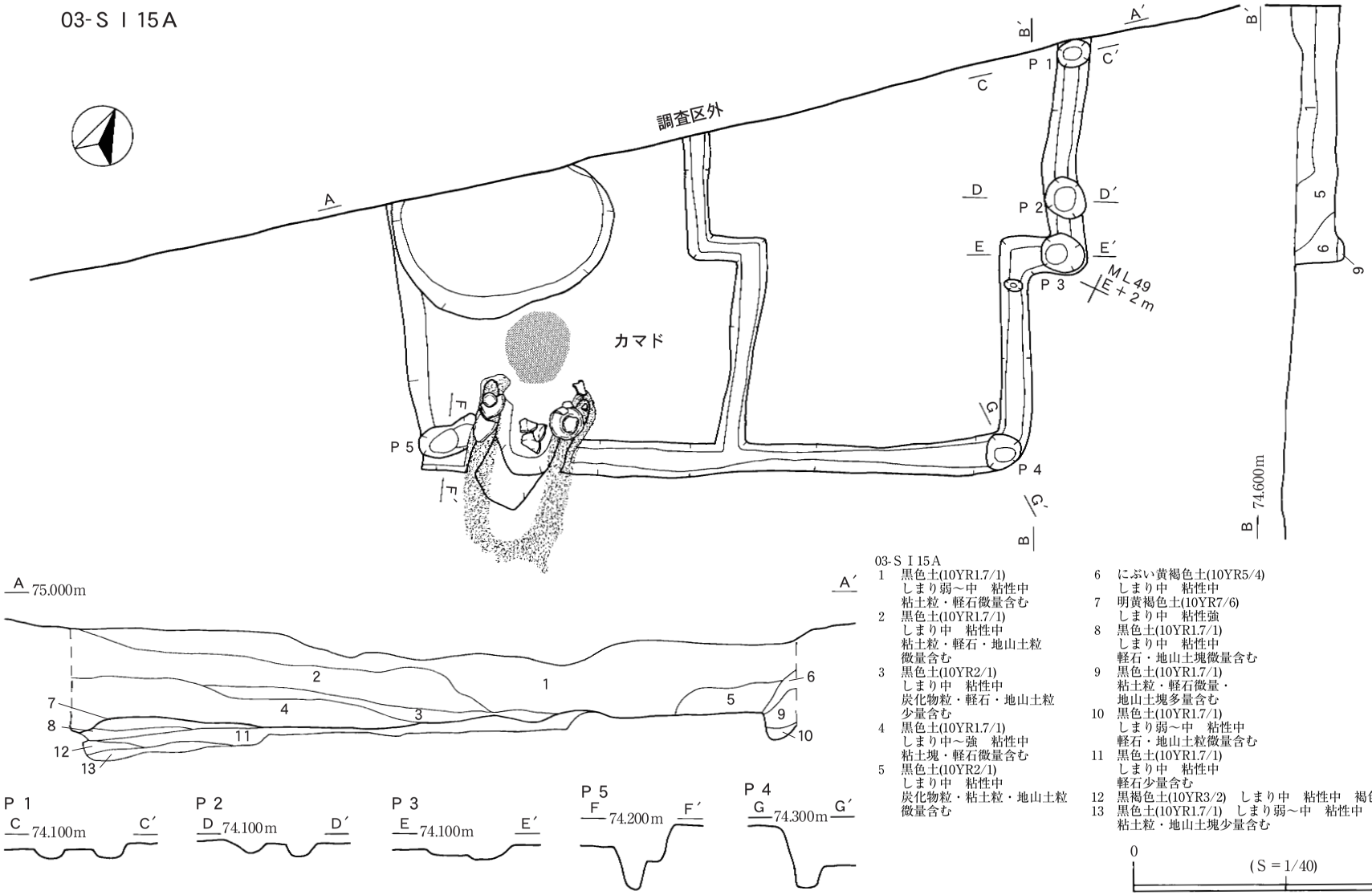
ＭＫ・ＭＬ48・49グリッドの第Ⅳ層中位で、黒色土の広がりで確認した。本住居跡の立地点は台地上部平坦面だが、北西側調査区外の沢に向かってわずかに傾斜する。03-ＳＩ16と重複し、本住居跡の方が新しい。周辺には、02-ＳＩ14・18・20・25、03-ＳＩ17がある。

床面精査で確認した壁溝やピット及びカマド配置から、最低１回の建て替えが認められ、合計２軒の住居跡が重なることが判明した。住居は新しい順に、Ａ・Ｂのアルファベットを付けて表記した。

03-ＳＩ15Ａ(第159図～163図、図版49・50・150)

遺　構　建て替えにより、03-ＳＩ15Ｂよりも規模を縮小した住居である。

堆積土は13層に分けた。１～６層は壁際からのレンズ状堆積の過程を示しており、基本的に自然堆積による埋没であることが分かる。９・10層は壁溝内堆積土で、上下２層に分かれることから、廃絶



03-ＳＩ15A

1　黒色土(10YR1.7/1)
しまり弱～中　粘性中
粘土粒・軽石微量含む

2　黒色土(10YR1.7/1)
しまり中　粘性中
粘土粒・軽石・地山土粒
微量含む

3　黒色土(10YR2/1)
しまり中　粘性中
炭化物粒・軽石・地山土粒
少量含む

4　黒色土(10YR1.7/1)
しまり中～強　粘性中
粘土塊・軽石微量含む

5　黒色土(10YR2/1)
しまり中　粘性中
炭化物粒・粘土粒・地山土粒
微量含む

6　にぶい黄褐色土(10YR5/4)
しまり中　粘性中

7　明黄褐色土(10YR7/6)
しまり中　粘性強

8　黒色土(10YR1.7/1)
しまり中　粘性中
軽石・地山土塊微量含む

9　黒色土(10YR1.7/1)
粘土粒・軽石微量・
地山土塊多量含む

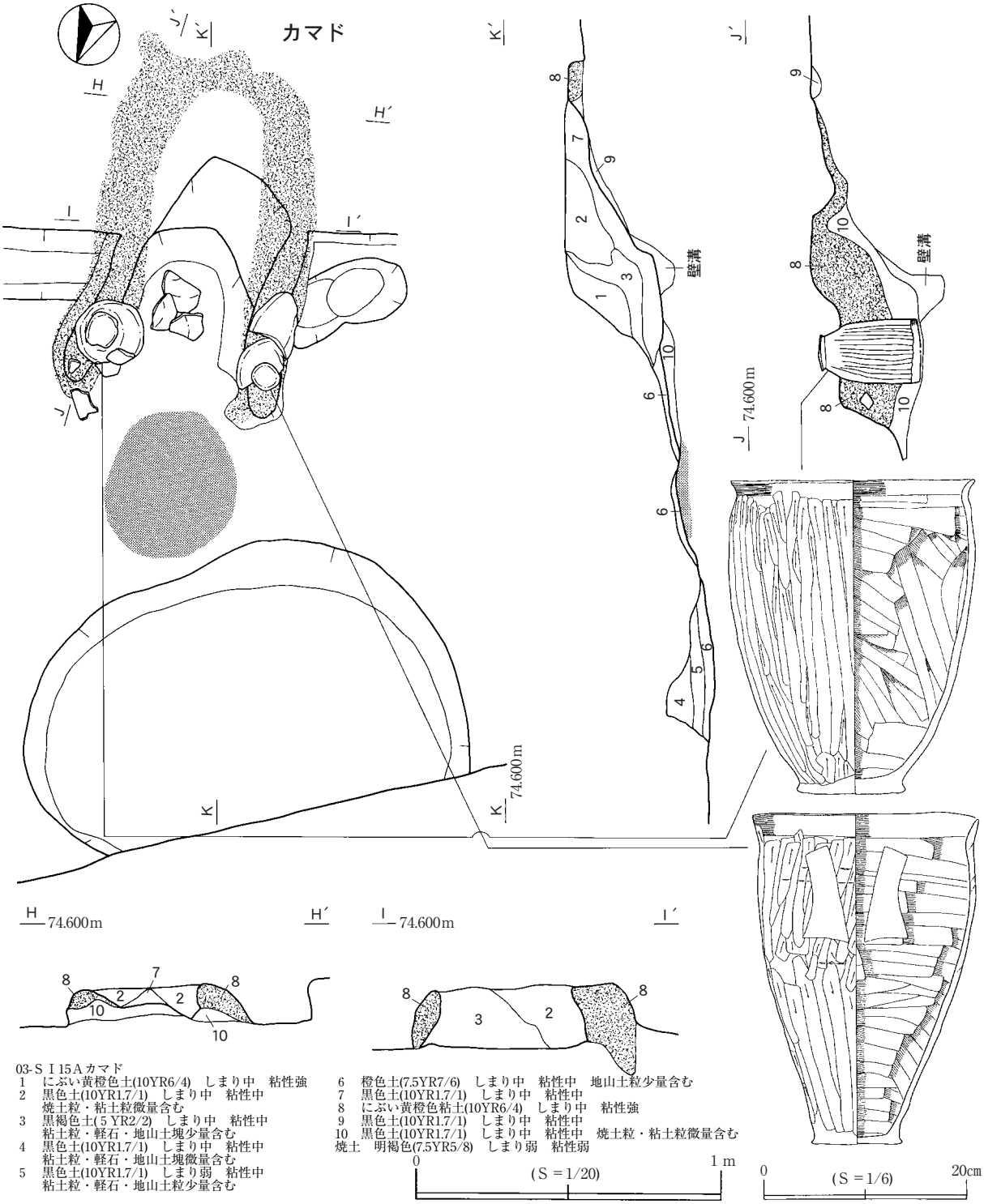
10　黒色土(10YR1.7/1)
しまり弱～中　粘性中
軽石・地山土粒微量含む

11　黒色土(10YR1.7/1)
しまり中　粘性中
軽石少量含む

12　黒褐色土(10YR3/2)　しまり中　粘性中　褐色土粒少量含む

13　黒色土(10YR1.7/1)　しまり弱～中　粘性中
粘土粒・地山土塊少量含む

第159図　03-ＳＩ15A



第160図　03-ＳＩ15Ａカマド・遺物出土状況

時には壁板を抜いていたと考えられる。７・８・11～13層は貼床に関わる土である。

平面形は、住居北西部が調査区外に当たるため正確には分からないが、ほぼ正方形とみられる。カマドの付く壁に直交する主軸方位はＮ－24°－Ｗである。南東壁を正方形の一辺として測る住居面積は約16㎡で、中形の住居と想定される。各壁の長さは、完掘している南東壁で約4.0m、北東壁2.9m以上、南西壁1.7m以上である。壁の検出面からの深さは、南西壁の調査区際で約0.7mで、全周ほぼ垂直に立ち上がる。北東壁の中央部付近とみられる位置には、短い張り出しがある。ピット３個と壁

溝で構成され、住居壁直交方向で約0.4m、住居壁平行方向で1.6m以上の規模である。

床面はほぼ全面に貼床を施している。基本的に03-ＳＩ15Ｂ床面よりかさ増ししており、初期の造成では12・13層を貼るが、軟質土の深い住居南西部では、さらに７・８層の土を施して床面を水平に近づける。壁溝は、北東壁・南東壁沿いの調査した範囲で全周確認した。上場幅0.16～0.3m、下場幅0.04～0.14m、床面からの深さ0.05～0.16mである。なお、住居中央部にはクランク状の溝があり、別遺構が存在していた可能性がある。床面及び張り出し部で５個のピットを確認した。Ｐ４・５は住居隅の主柱穴とみられる。Ｐ１～３は張り出し部に巡る壁溝内にあり、出入り口に関わる施設の下部構造と考えられる。

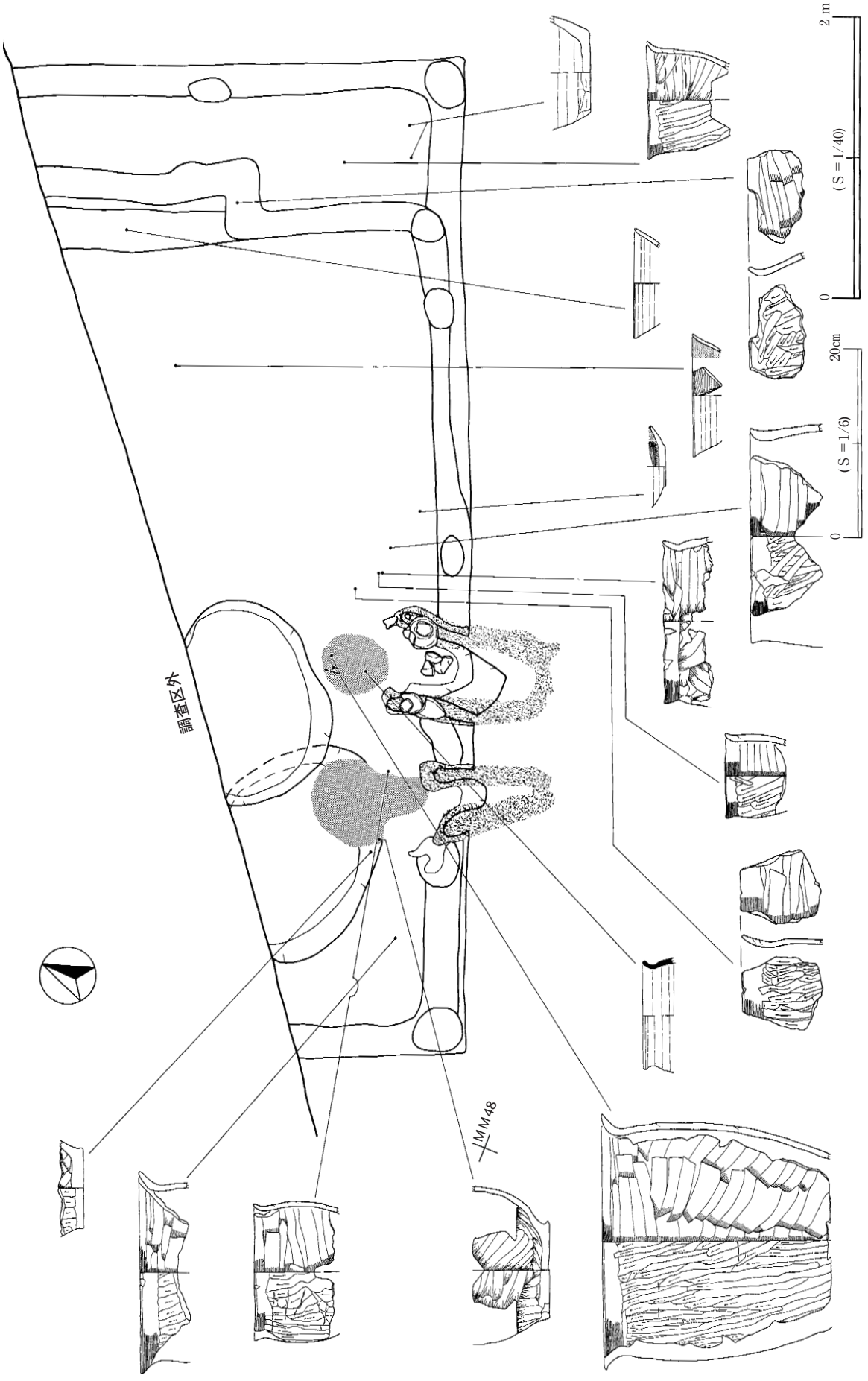
カマドは南東壁の中央から南西寄りの位置で、上部構造材の粘土分布範囲で確認した。確認できたのは煙道、袖、火床面、前庭部である。堆積土は10層に分層した。１～７層は煙道部から前庭部にかけて堆積する上部構造由来の粘土と、周囲からの流入土の互層である。８層は上部構造粘土の残存部、10層は基底部の造成土で、壁溝の埋め立ても同様な土を用いている。袖から煙道にかけてにぶい黄橙色粘土で構築してあり、煙道の残存部から前庭部の確認できる範囲の末端まで約2.5m、袖の最大幅で約0.8mである。煙道はスロープ状の掘り込みである。両袖は、完形の土師器甕を逆位に設置して芯材としている。火床面は不規則な楕円形状の被熱範囲で、長径0.59m、短径0.42mである。火床面主軸方位は住居主軸方位に平行する。

本住居跡は隅に主柱をもち、南東壁にカマドを設置する住居である。03-ＳＩ15Ｂより規模を縮小しており、床面もかさ上げして構築している。堆積土中から石帯が出土しているが、自然堆積により埋没する本住居跡に伴うものかどうかは不明である。

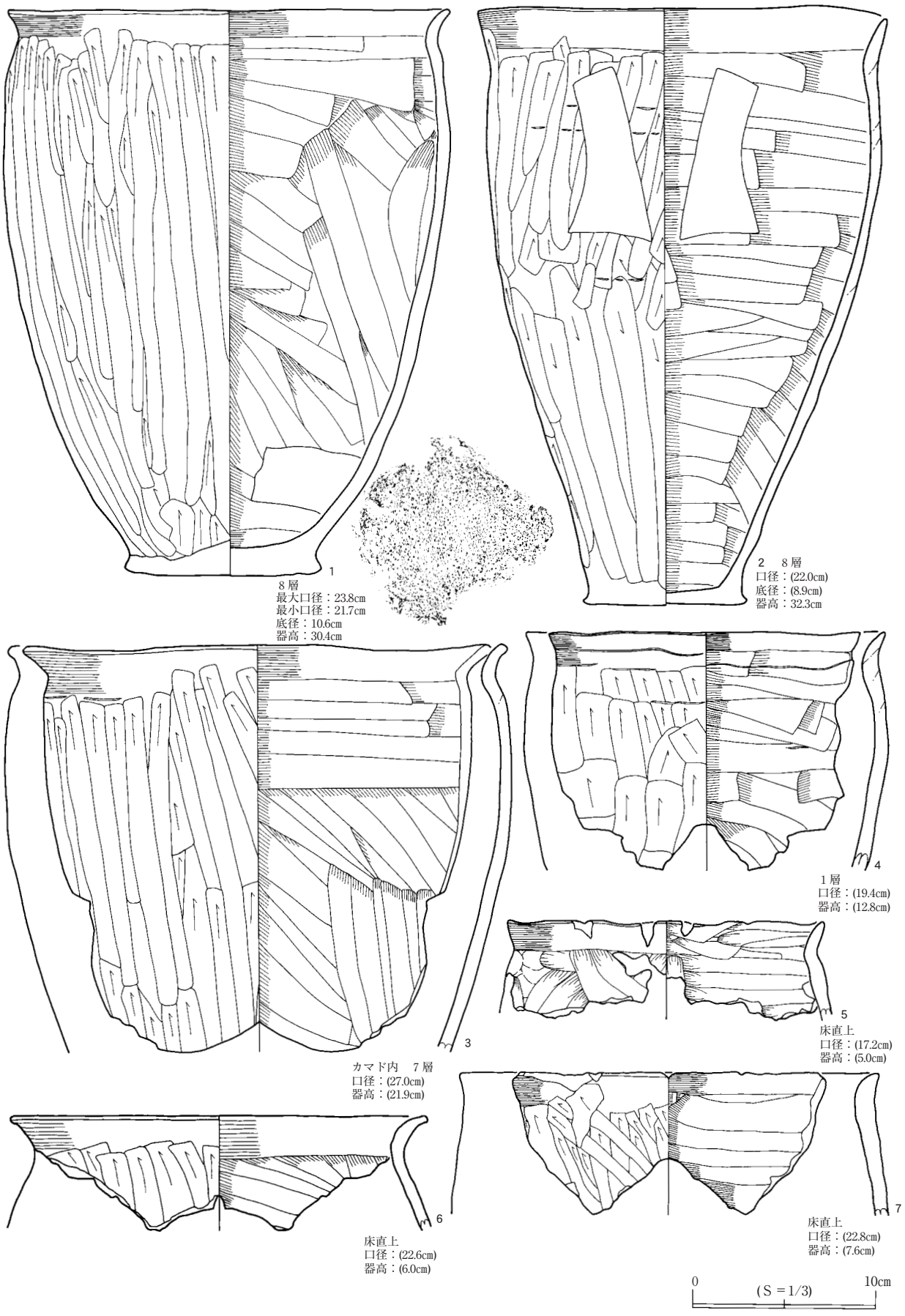
遺　物(第162図・163図)　住居跡内から土師器甕・坏、須恵器坏・甕、土製品、石製品が出土した。土師器甕は口縁部が29点、底部が15点出土しており、そのうち比較的大型の口縁部資料11点、底部資料４点を図示した。図示しなかったものを含めた甕の口縁部分類別数量はＡ類(２点)、Ｂ類(３点)、Ｃ類(22点)、Ｄ類(０点)、分類不能(３点)で、底部分類別数量は砂底(８点)、木葉痕(１点)、ナデ(１点)、ケズリ(３点)、分類不能(２点)の内訳になる。基本的にはＣ類と砂底の組み合わせが卓越するが、Ｃ類でも口縁部が長く外反するものが目立つ。また、カマド袖の芯材として使った162図１・２が本住居跡の開始年代を示す可能性があるが、拡張前の03-ＳＩ15Ｂ内からの出土遺物が少なく、転用材として受け継いだと考えられる。

遺物の出土はカマド前面と、住居北東部に集中する(第161図)。本住居のカマドは芯材に土器を利用しており、前者の出土はカマド破棄時の構造材散乱に由来するとみられる。これに対し後者は、埋没過程で窪地に投げ込まれた遺物の可能性が高い。

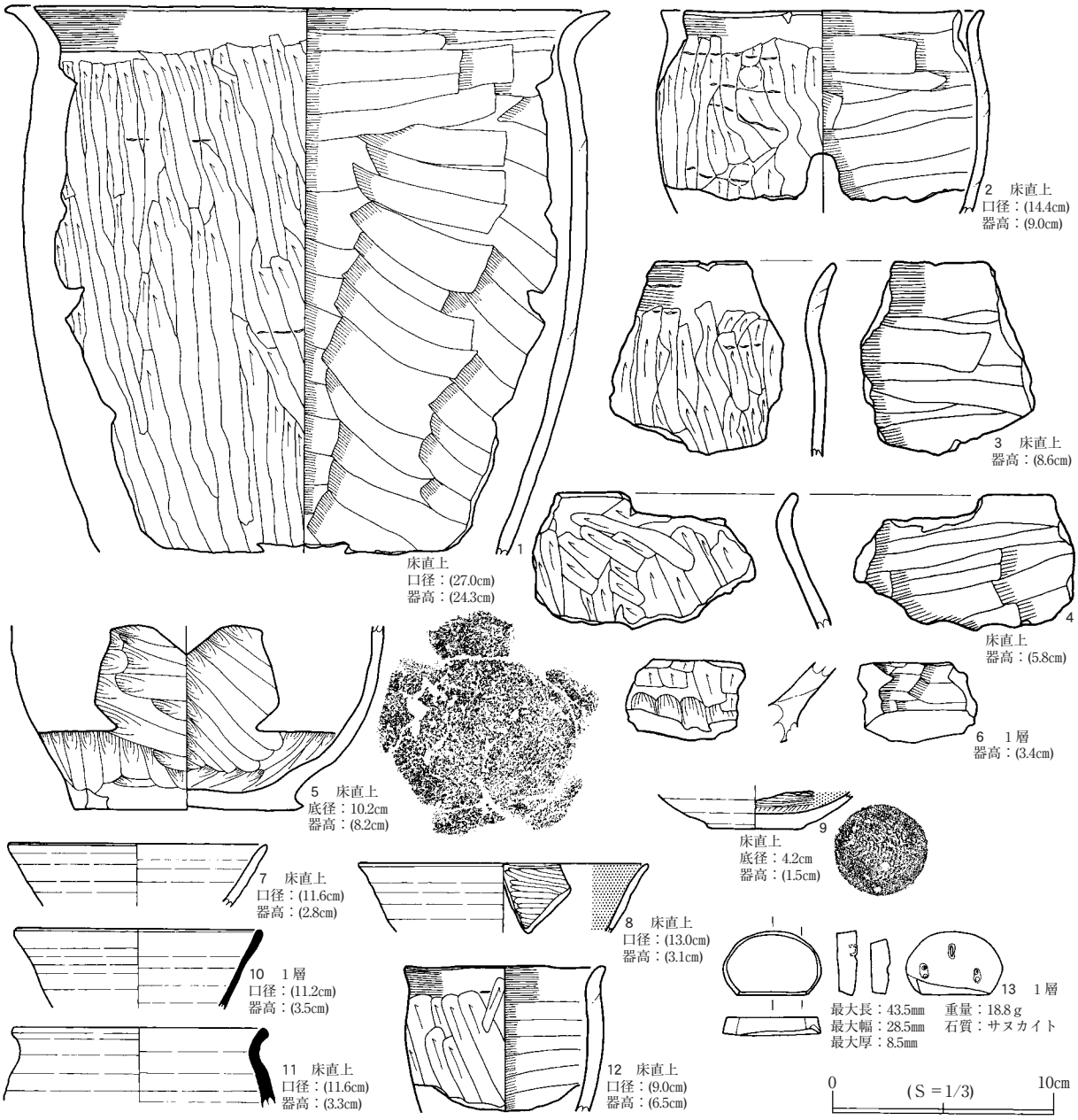
162図１～７、163図１は比較的中・大型の土師器甕である。162図３は胴上部が張り出し、頸部で段状にくびれて口縁部が外反する。口縁部形状では162図１・６がこれに近い。162図１は全体形が窺える資料で、底面は砂底で底部外縁が張り出し、胴下部から内湾気味に立ち上がって、胴上部が張り出す。162図１・３・６はいずれも、外面縦位ケズリ、内面横・斜位ヘラナデ調整である。163図１は口縁部が長く外反する点では162図１・３・６に近いが、口縁部は外折気味になり、胴部中位が張り出す。外面縦位ケズリ、内面横位ヘラナデ調整である。これらに対し162図２は頸部のくびれが弱い。底面はナデのみで仕上げ、底部外縁が張り出し、底部付近から胴上部まで直線的に外傾して胴上部が



第161図　03-SI15A・B遺物出土状況



第162図　03-ＳＩ15Ａ出土遺物１



第163図　03-ＳＩ15Ａ出土遺物２

やや張り出し、頸部でわずかにくびれて口縁部が直立気味に立ち上がる。162図４も口縁部形状はこれに近い。どちらも外面縦位ケズリ、内面横位ヘラナデ調整である。162図５は胴上部から内傾して口縁部が直立気味に立ち上がる。162図７はこれよりも頸部のくびれが弱い器形である。５は内外面共にユビナデ調整、７は外面縦位ケズリ、内面横位ヘラナデ調整である。

163図２は比較的小型の土師器甕で、胴上部に最大径を有し、頸部で弱くくびれて口縁部が直立気味に立ち上がる。外面縦位ケズリ、内面横位ヘラナデ調整である。163図３・４は土師器甕の口縁部破片で、３は口縁部が長く外反、４は胴上部が内傾して口縁部が直立気味に反る。４の外面は口端までケズリを施す。163図５・６は土師器甕の底部である。５は砂底で底部外縁が不規則に張り出し、胴下部が膨れる器形である。内外面共にユビナデ調整である。

163図７～９は土師器坏で、７がＡ類、８・９がＢ類である。７・８は口縁部破片で、７は直線的に外傾し、８は胴上部でわずかにくびれて口縁部が外反する。９は底部資料で回転糸切痕を残す。

163図10・11は須恵器で、10が坏、11が小型の甕である。10は直線的に外傾して口縁部がやや肥厚する形状で、口端がわずかに内湾する。11は胴上部に最大径を有し、頸部が直立して口縁部が短く外反する。163図12は小型土器で、胴部が直立気味に立ち上がり、口縁部がわずかに外反する。外面縦位ケズリ、内面横位ヘラナデ調整である。163図13は石帯である。かまぼこ型の形状で、裏面には３か所留め金具をはめ込んだ跡があり、そのうち上部の１か所にはコ字形の金具が残存している。

03-ＳＩ15Ｂ(第164図・165図、図版49・50)

遺　構　03-ＳＩ15Ａよりも規模が大きい古段階の住居である。

03-ＳＩ15Ａ外部の堆積土は13層確認した。１～７層は壁際から斜堆積しており、８・９層は壁溝内部までを含む堆積状況をみせる。廃絶時に壁板を抜いて、炭化物や地山土粒を含む土を、順に斜位に投入した堆積過程を示している。11～12層はカマド前庭部に貼った粘土質土で、貼り増ししていることから、カマドの造り替えも想定される。13層は貼床である。

平面形は、住居北西部が調査区外に当たるため正確には分からないが、正方形と推測される。カマドの付く壁に直交する主軸方位はＮ－24°－Ｗである。南東壁を正方形の一辺として測る住居面積は約49㎡で、特大形の住居と想定される。各壁の長さは、完掘している南東壁で約7.0m、北東壁3.2m以上、南西壁1.2m以上である。壁の検出面からの深さは、南西壁の調査区際で約0.6m、北東壁調査区際で約0.8mで、全周ほぼ垂直に立ち上がるが、上半部には崩落箇所も見受けられる。

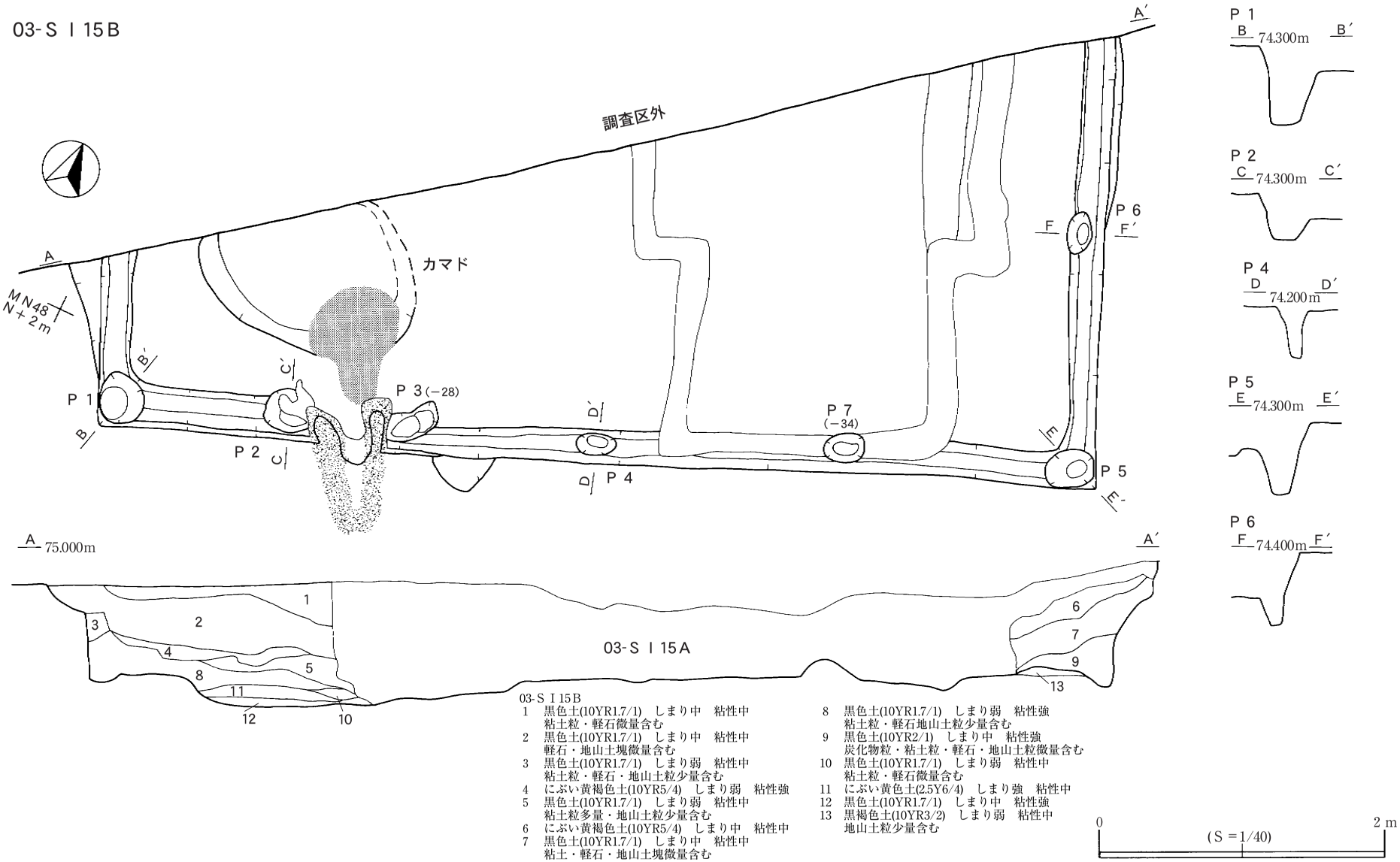
床面は、基本的に掘形底面の地山面を利用したと考えられる。壁溝はカマド部分を除く全周で確認した。上場幅0.2m前後、下場幅0.1～0.15m、床面からの深さ0.05～0.1mである。壁溝内部で７個のピットを確認した。Ｐ１・５は住居隅の主柱穴である。Ｐ４は壁中央部に、Ｐ７はＰ４・５の柱間に位置する壁柱穴で、Ｐ６も同様に北東壁中央から南東寄りに配置する壁柱穴とみられる。カマド設置部では、カマド両脇にＰ２・３の２個の壁柱穴を配置する。

カマドは南東壁の中央から南西寄りの位置で、上部構築材の粘土分布範囲で確認した。確認できたのは煙道、火床面、前庭部である。堆積土は３層に分けた。１・２層は煙道部側壁を構築する粘土の残存範囲である。３層は煙道部に流入した土である。煙道の残存部から前庭部の確認できる範囲の末端まで約2.3m、前庭部の最大幅で約1.6mである。煙道は、住居壁を一部スロープ状に掘り込んでその周囲に粘土を盛り付けている。前庭部は一部03-ＳＩ15Ａのカマド前庭部が切っており、また一部が調査区外に位置するが、ほぼ楕円形とみられる浅い掘り込みである。火床面は住居奥壁側がやや延びる円形を基調とした形状の被熱範囲で、長軸0.81m、最大幅0.63mである。

本住居跡は隅に主柱をもち、南東壁にカマドを設置する住居である。03-ＳＩ15Ａ構築に際して、廃絶し埋め立てたと考えられる。

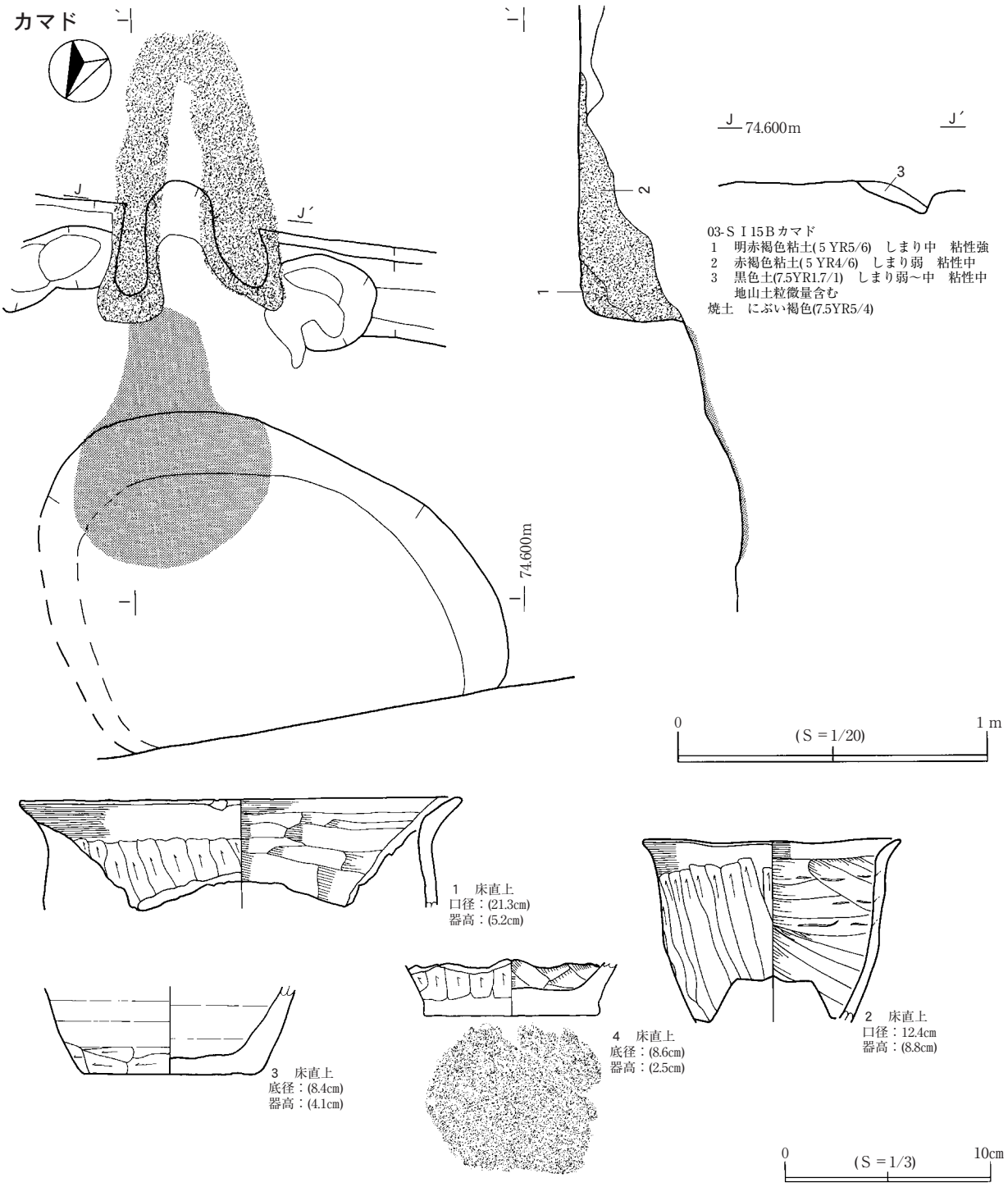
遺　物(第165図)　03-ＳＩ15Ａ範囲外の残存部堆積土中から、土師器甕が出土した。基本的に小破片であり、埋め立て時に一緒に投棄したか、元々造成土中に含まれていた遺物と考えられる。住居自体に伴う遺物は、カマドが完全に破壊されていることに加え、カマド上部からの遺物の出土がほとんど無いことから、完全に整理し、一部は03-ＳＩ15Ａで再利用したものと考えられる。

165図１は比較的大型の土師器甕で、口縁部が長く外反する。165図２は比較的小型の土師器甕で、胴上部まで直立気味に立ち上がり口縁部が外反する。どちらも外面縦位ケズリ、内面は１がヘラナデ、



03-ＳＩ15Ｂ
1　黒色土(10YR1.7/1)　しまり中　粘性中
　粘土粒・軽石微量含む
2　黒色土(10YR1.7/1)　しまり中　粘性中
　軽石・地山土塊微量含む
3　黒色土(10YR1.7/1)　しまり弱　粘性中
　粘土粒・軽石・地山土粒少量含む
4　にぶい黄褐色土(10YR5/4)　しまり弱　粘性強
5　黒色土(10YR1.7/1)　しまり弱　粘性中
　粘土粒多量・地山土粒少量含む
6　にぶい黄褐色土(10YR5/4)　しまり中　粘性中
7　黒色土(10YR1.7/1)　しまり中　粘性中
　粘土・軽石・地山土塊微量含む
8　黒色土(10YR1.7/1)　しまり弱　粘性強
　粘土粒・軽石地山土粒少量含む
9　黒色土(10YR2/1)　しまり中　粘性強
　炭化物粒・粘土粒・軽石・地山土粒微量含む
10　黒色土(10YR1.7/1)　しまり弱　粘性中
　粘土粒・軽石微量含む
11　にぶい黄色土(2.5Y6/4)　しまり強　粘性中
12　黒色土(10YR1.7/1)　しまり中　粘性強
13　黒褐色土(10YR3/2)　しまり弱　粘性中
　地山土粒少量含む

第164図　03-ＳＩ15Ｂ



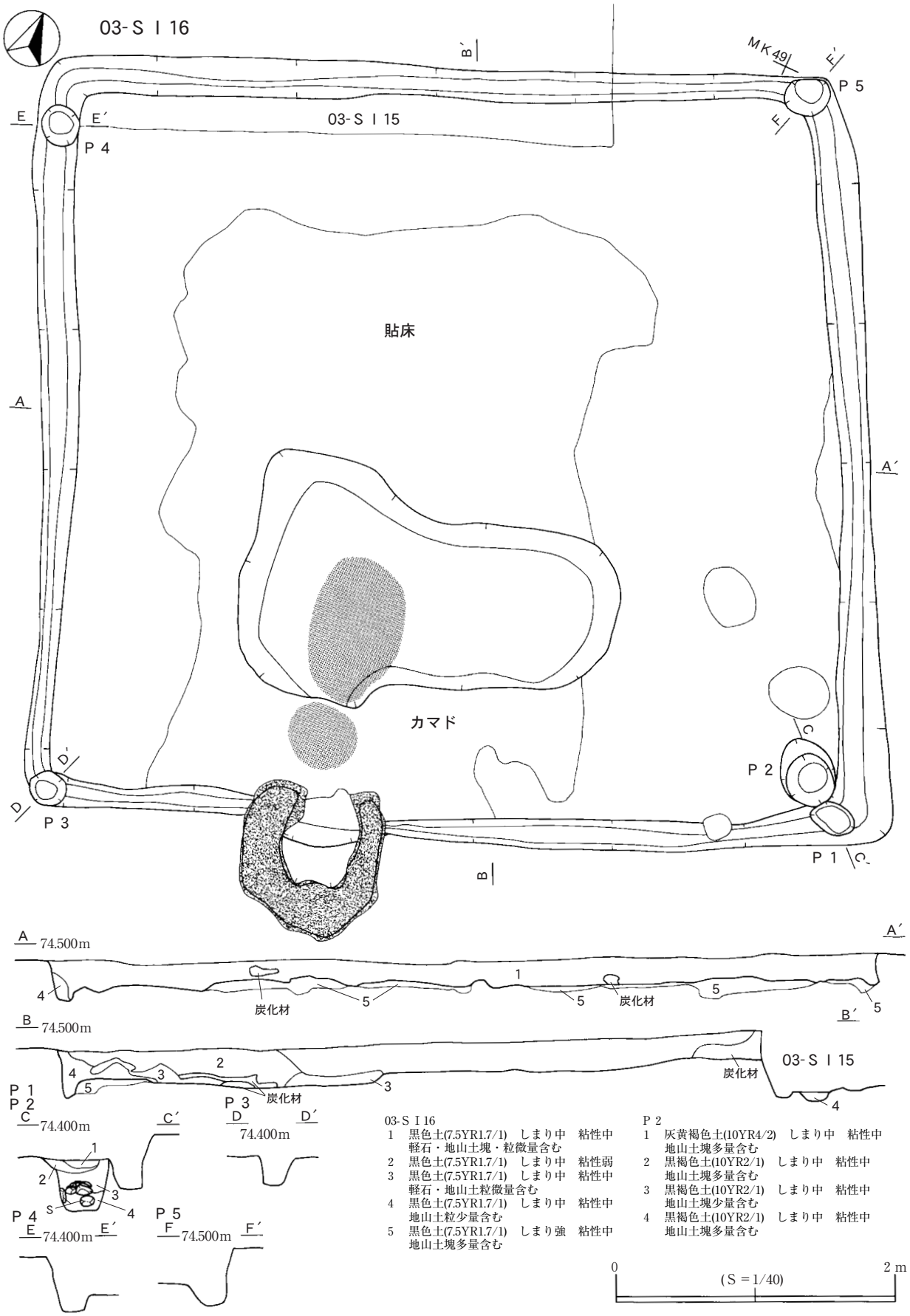
第165図　03-ＳＩ15Ｂカマド・出土遺物

２がユビナデ調整である。165図３・４は土師器甕の底部で、３はロクロ整形で底面はケズリによる再調整を施し、４は砂底である。

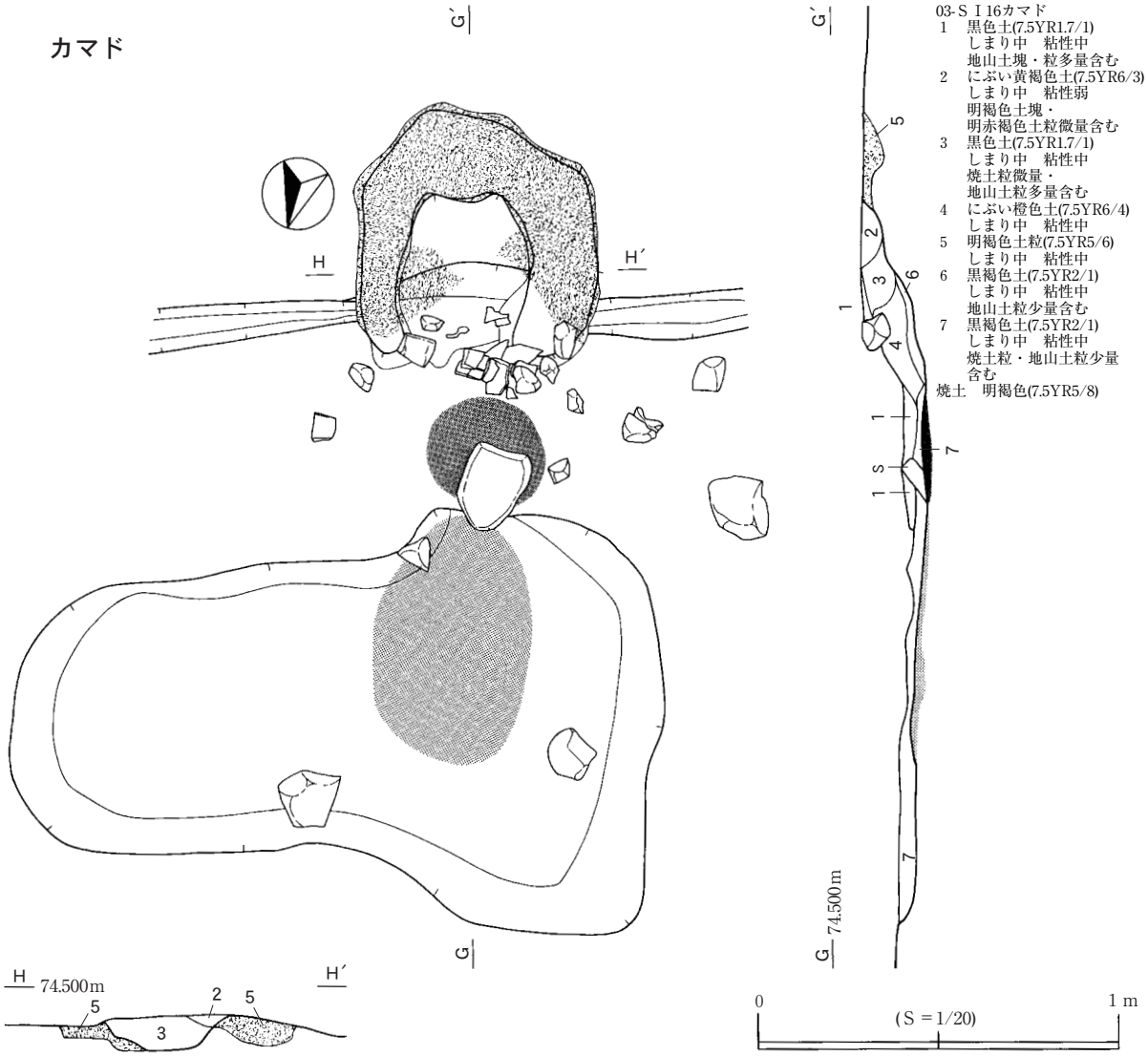
03-ＳＩ16(第166図～171図、図版49・50・147・148・153・157・158・160・162・164・165)

遺　構　ＭＪ～ＭＬ47・48グリッドの第Ⅳ層中位で、地山土塊や炭化物を含む黒色土の広がりで確認した。本住居跡の立地点は台地上部平坦面だが、北西側調査区外の沢へわずかに傾斜する。

03-ＳＩ15と重複し、本住居跡の方が古い。周辺には02-ＳＩ11・14・18・20・25、03-ＳＩ17がある。



第166図　03-ＳＩ16



第167図　03-ＳＩ16カマド

堆積土は５層に分けた。１・２層は人為的な埋め戻しの土、３・４層は炭化材や焼土が混在する土、５層は貼床である。

平面形は北東－南西方向に長い台形で、カマドの付く壁に直交する主軸方位はＮ－24°－Ｗである。主軸とそれに直交するラインで測る住居面積は約33㎡で、大形の住居である。各壁の長さは北東壁約5.5m、南東壁約6.1m、南西壁約5.3m、北西壁約5.6mである。壁の検出面からの深さは各壁0.2m前後で、ほぼ垂直に立ち上がる。

床面は住居南東半分に貼床を施し、北西半分は掘形底面の地山上面を利用している。壁溝は全周で確認した。上場幅0.14～0.4m、下場幅0.04～0.14m、床面からの深さ0.1～0.3mの断面台形状である。壁溝内で５個のピットを確認した。Ｐ１・３・５は住居隅の壁溝内に規則的に配置する主柱穴である。Ｐ４は住居西隅からややはずれるが、同様に主柱穴になる可能性がある。柱穴中心で測る柱穴間距離はＰ１－３間約5.7m、Ｐ１－５間約5.2mである。

カマドは南東壁の中央から南西寄りの位置で、構造材の粘土と火床となる焼土面や遺物の分布で確認した。確認できたのは、煙道、火床面、前庭部である。堆積土は７層に分かれる。１～４層は上部

構造材と流入土の互層で、５～７層が構造材粘土の残存部になる。煙道先端部から前庭部末端まで約3.5m、粘土分布範囲の最大幅は約0.5mである。煙道は地山をスロープ状に掘り込み、側壁部から天井部にかけて粘土を盛り付けたとみられる。袖は残存しないが、火床面上部には多量の角礫が散在しており、芯材として用いたものの残骸と考えられる。前庭部はカマド主軸延長方向で約1.8m、これに直交する最大幅が約2.7mで、火床面前面より住居北東側に延びる。火床面は２か所有り、壁寄りの径0.45m前後の円形の被熱範囲が古く、住居中央寄りの長径約1.0m、短径約0.65mの楕円形の被熱範囲が新しい火床面である。

本住居跡は焼失家屋で、床面上で多数の炭化材や焼土を検出した。03-ＳＩ15が掘り込む北西部では一部撤去してある。炭化材の分布は住居北西半分の壁中央部寄りの範囲、住居南西壁際、カマド前面、住居南東壁際の４か所に集中範囲を区分できる。住居南西壁際と住居南東壁際の炭化材の木目方向は、壁に直交する方向のものが多く、壁板の倒れた状態を示すと考えられる。住居北西半分の壁中央部寄りの範囲も、基本的に木目が壁に直交する方向を向いており、同様に壁板に関連する材を多く含むとみられるが、その範囲が住居中央部付近まで及ぶことから、床板を含む可能性もある。カマド前面の材は、細いものや細分化された板などが主体で、配置に統一性がみられず性格等は不明である。なお、１点樹種分析を行った結果、ヒノキ科の結果がでた。壁板に針葉樹を用いるのは、他の住居と同じ傾向である。

本住居跡は四隅に主柱をもち、南東壁にカマドを設置する住居である。廃絶時には火災により焼失しているが、出土炭化材に屋根材や構造材が含まれないことなどから、上屋の解体後に意図的に火を放った可能性が高い。その後人為的に埋め戻しており、03-ＳＩ15構築段階までに埋め立て造成を完了したと考えられる。

遺　物(第169図～171図)　住居跡内から土師器甕・坏・鍋、須恵器壺、鉄製品、土製品が出土した。土師器甕は口縁部が41点、底部が20点出土しており、そのうち比較的大型の口縁部資料19点、底部資料12点を図示した。図示しなかったものを含めた甕の口縁部分類別数量はＡ類(４点)、Ｂ類(12点)、Ｃ類(12点)、Ｄ類(３点)、その他(３点)、分類不能(７点)で、底部分類別数量は砂底(７点)、ナデ(１点)、ケズリ(12点)の内訳になる。口縁部分類ではＢ類が他の住居跡に比べ格段に多く、底部では、ケズリ再調整を施すものが目立つ。なお遺物の出土位置は、炭化材上部を埋める堆積土中のものと、カマド上面にまとまりをもつものに分かれる(第168図)。

169図１～10は中・大型の土師器甕である。１は底面が砂底で、胴下部から胴上部にかけて内湾気味に立ち上がり、頸部でくびれて口縁部が直線的に外折する器形である。口端がわずかに内湾しており、口唇が角頭状に面取りしてある。外面は縦位ケズリ調整で、底部付近は厚めに粘土を削ぎ取る。内面は横位ヘラナデ調整である。２・７も頸部以下は１とほぼ同じ器形だが、２は頸部で曲線的にくびれて口縁部が外反する。内外面調整は１とほぼ同じである。なお、３～10も調整については同じで、７は外面胴上部がユビナデ、９・10が内面ユビナデ調整である。６は口縁部のくびれが比較的弱い器形である。８・９も頸部が緩くくびれて、口縁部が外反する器形では同じだが、口唇が先細りになる。４は頸部に明確な段を有し、口縁部が直立気味に立ち上がり、口端がわずかに外反する器形で、１と同様に口唇は面取りしてある。３・５はいったん外反する口縁部が、口端でわずかに内湾気味になる。10は胴部中位から内傾して立ち上がり、口端が直角に短く外折する形状である。１・２・７のように、

第168図　03-ＳＩ16遺物出土状況

口唇を面取りするものは器壁が比較的薄く、９・10のように先を丸めるものは比較的厚くなる傾向がある。

170図１～７・９は比較的小型の土師器甕である。１・３・６は、頸部に段を有し口縁部が直線的に外傾する器形で、口唇を面取りしている。基本的に外面は縦位ケズリ、内面は横位のナデ調整である。４・５は頸部のくびれが弱く、口縁部が外反する器形である。７は胴下部から口縁部まで直線的に外傾する器形で、外面は縦位ケズリ、内面は胴下部が縦位、上部が横位のヘラナデ調整である。２・９は胴部中位から口縁部にかけて内湾して立ち上がり、口端がわずかに直立気味になる器形である。２は口縁部が上部からの押圧により肥厚する形状で、外面縦位ケズリ、内面横位ヘラナデ調整である。９は口唇が先細りの形状で、内面調整は横位のユビナデである。

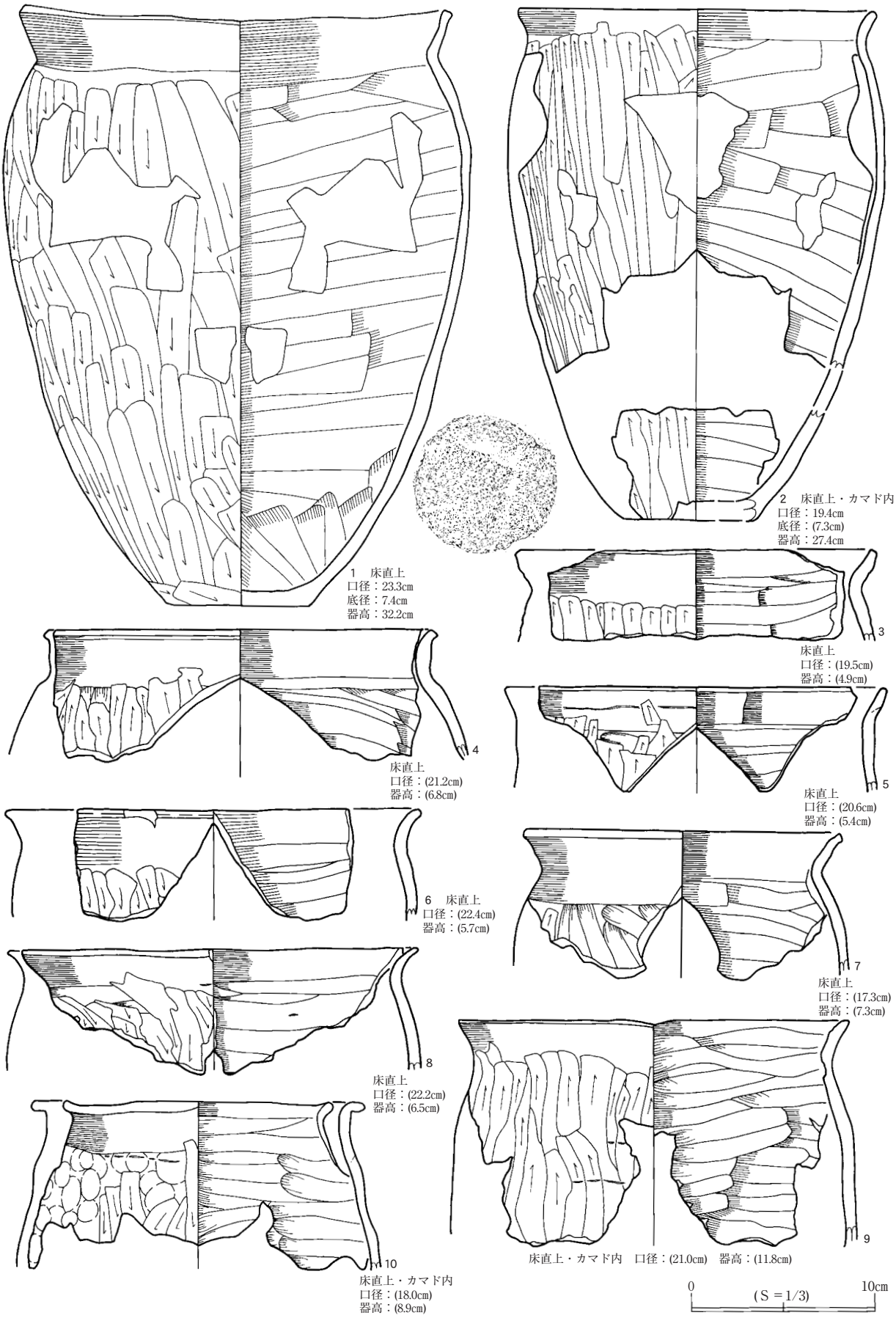
170図８は土師器甕の口縁部破片で、頸部まで内傾して口縁部が弱く外反する。外面縦位ケズリ、内面横位ヘラナデ調整である。170図10～17は土師器甕の底部である。10～13は底面をケズリにより再調整するもので、10は底部外縁がやや張り出す器形で、11～14は底部からの立ち上がりにほとんど屈曲が無い。14～17は砂底で、15は底部外縁がやや張り出し、16・17には屈曲が認められる。14は底部から直線的に外傾している。

171図１～９は土師器坏で、１～４・８がＡ類、５・６・９がＢ類、７がＣ類である。１は約1/2が残存する資料である。底部付近で膨らみ、胴部は直線的に外傾して立ち上がり、口縁部付近で角度をかえて口端が直立気味に弱く外反する器形である。口唇は丸みを帯びる。底部の回転糸切痕は筋幅がやや広めだが凹凸は少なく、器壁外面の底部付近には部分的にケズリ再調整を施す。胴下半部以上には、工具による平滑なロクロ仕上げが認められ、口縁部付近の屈曲部では、沈線状の凹みになる。内面もほとんど凹凸なくロクロナデで仕上げている。全体に器壁が薄く、内外面共に極めて丁寧な調整で仕上げており、他のＡ類資料に比べると異質な雰囲気である。どちらかというとＢ類に近い仕上がりであり、器外面の色調でも共通傾向にあると感じられる。１に比べ２・３は器壁がやや厚めである。２は口縁部が外反して口唇が先細りになり、３は内湾気味に立ち上がり口唇が丸みを帯びる。４は直線的に外傾する器形で、口唇がやや角頭状になる。外面に縦位のケズリ再調整を施す。

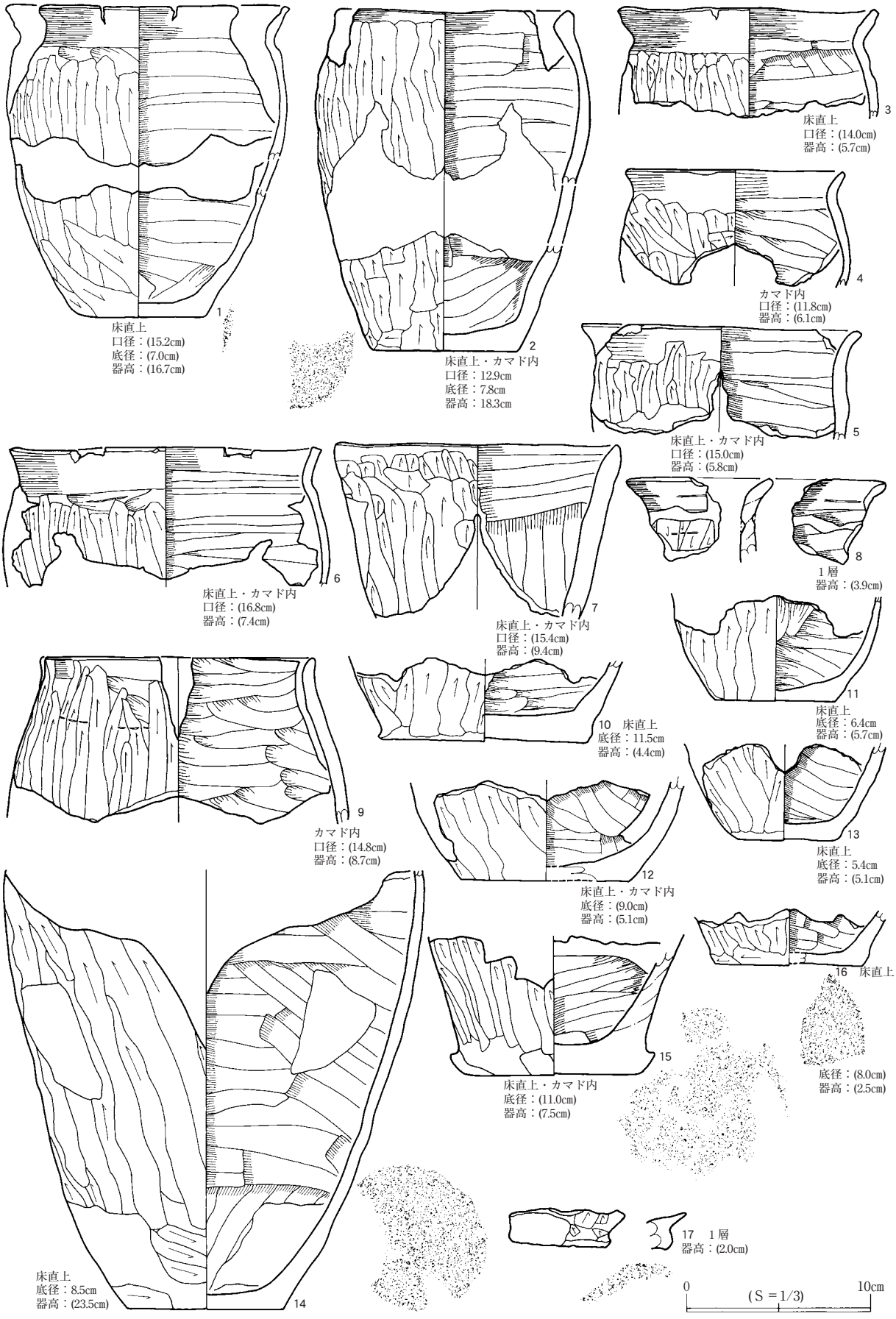
５は約1/2が残存する資料で、底部外縁がやや張り出して底部付近から膨らみ、胴部中位は直線的に外傾して口縁部付近で角度を変え、口端にむけて弱く外反する器形である。口唇は面取り状にやや平滑に仕上げている。底部の回転糸切痕は、残存範囲ではやや幅広の筋をとどめる。器壁外面は工具により凹凸を消し、間隔の狭いロクロ目を残す。内面のミガキは胴下半部まで放射状に、上半部は横位に施している。全体に器壁が薄く、内外面に分離して剥離するほどに硬質に仕上げている。６は口縁部が外反する器形である。

７は内面全体にミガキを施すが黒色処理を行わない。底部がわずかに突出して胴下部で膨らみ、口縁部に向けて直線的に外傾する器形で、口端がわずかに内湾して、口唇は先細り状になる。底部の回転糸切痕は緻密で、器壁外面の調整も工具による調整で間隔の狭いロクロ目になる。内面のミガキは全面横位に施している。

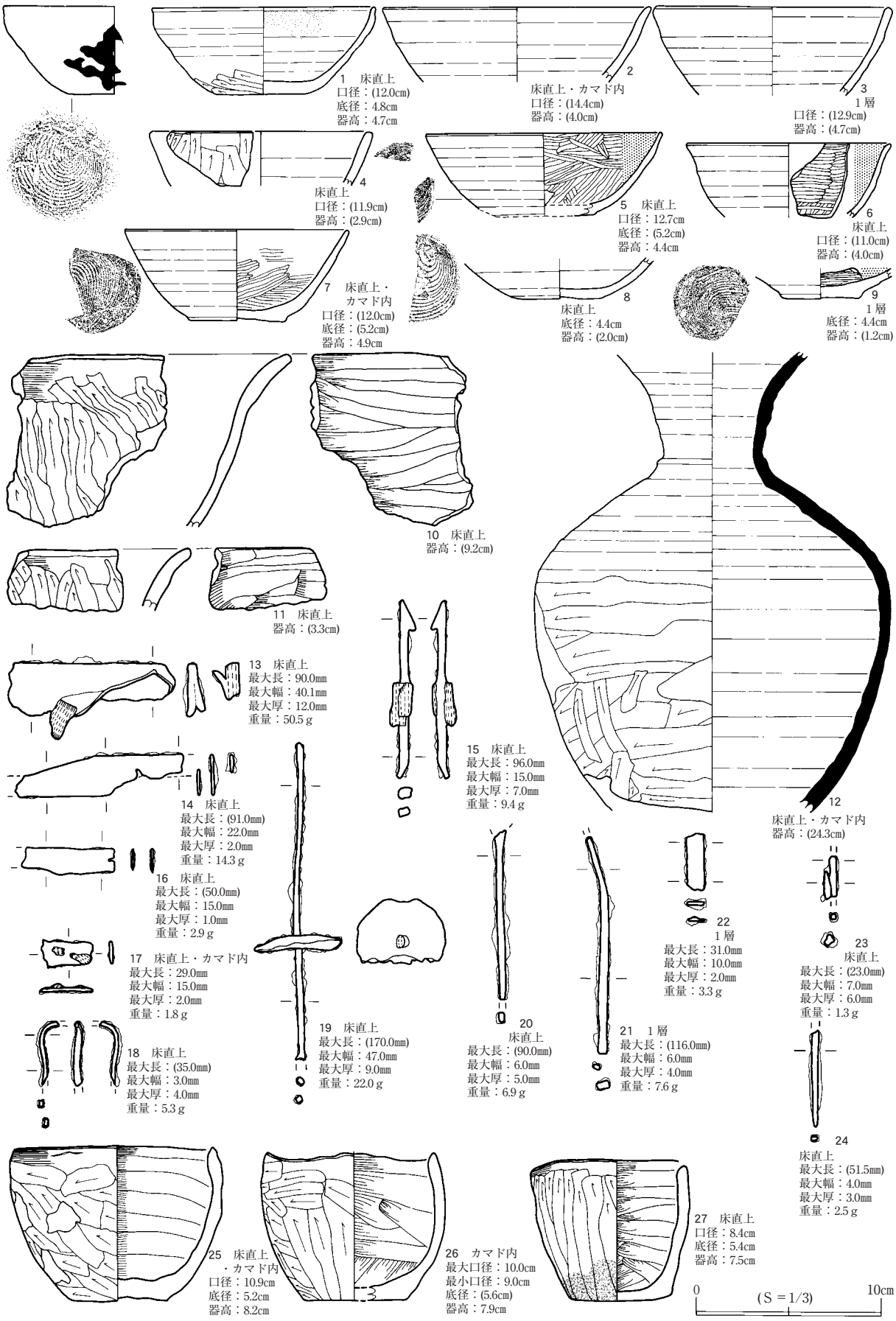
171図10・11は土師器鍋である。10は胴下部から湾曲して立ち上がり、口縁部が外反する。やや口縁部付近は厚みがあり、口唇は角頭状になる。外面縦位ケズリ、内面横位ユビナデ調整である。11もほぼ同じ作りである。171図12は須恵器の壺で、口縁部と底部を欠損する資料である。頸部の付け根



第169図　03-ＳＩ16出土遺物１



第170図　03-ＳＩ16出土遺物２



第171図　03-ＳＩ16出土遺物３

には突帯状の高まりがある。外面の肩部以下は横位のケズリによる再調整が認められる。これ以外は基本的にロクロ目を残している。

171図13～24は鉄製品である。13は刀の破片と考えられる。05-ＳＩ02出土刀の基部形状に極めて近似している。14は刀子と考えられるが、両端を欠損しており、また刃部とみられる側縁に明確な刃を認めがたい。16・17は穂摘具で、16には目釘穴の一端が残っている。17には木質が一部残っている。15は返しがつくため銛と考えられる。茎側には断面円形状の木質の柄が一部残存している。19は鉄製の軸が残る紡錘車である。滑車は半部ほど欠損している。18は環状の鉄製品で、鞘金具の一部になる可能性が高い。22は板状の、20・21・23・24は棒状のもので、いずれも欠損品のため明確な器種は特定できない。ただし、20は残存部上端が幅広になっているので、鏃になる可能性がある。

171図25～27は小型土器である。いずれも内湾する器形で、底面はケズリによる調整を施す。25は比較的口径が広く、外面は斜位ケズリ、内面は横位ヘラナデ調整である。26は比較的口径が狭く、外面胴下部は縦位、上部は横位のケズリ、内面は横位ユビナデ調整である。27は口縁部が直立気味に立ち上がる器形で、相対的に最も口径が狭い。外面縦位ケズリ、内面横位ユビナデ調整である。なお、16の外面底部付近には鉄錆が付着している。

03-ＳＩ17

本住居跡は、ＭＬ～ＭＮ46・47グリッドの、03-ＳＩ22・100下部及び第Ⅳ層中位において、地山土粒を含む土の分布範囲で確認した住居跡である。本住居跡の立地点は、北西側調査区外の沢へ向かって緩やかに傾斜する。03-ＳＩ22と重複しており本住居跡の方が古い。周辺には02-ＳＩ18・20、03-ＳＩ15・16・23がある。

床面精査で確認した壁溝やピットの配置から、１回の建て替えが認められ合計２軒の住居跡が重なることが判明した。住居は新しい順にＡ・Ｂと表記した。

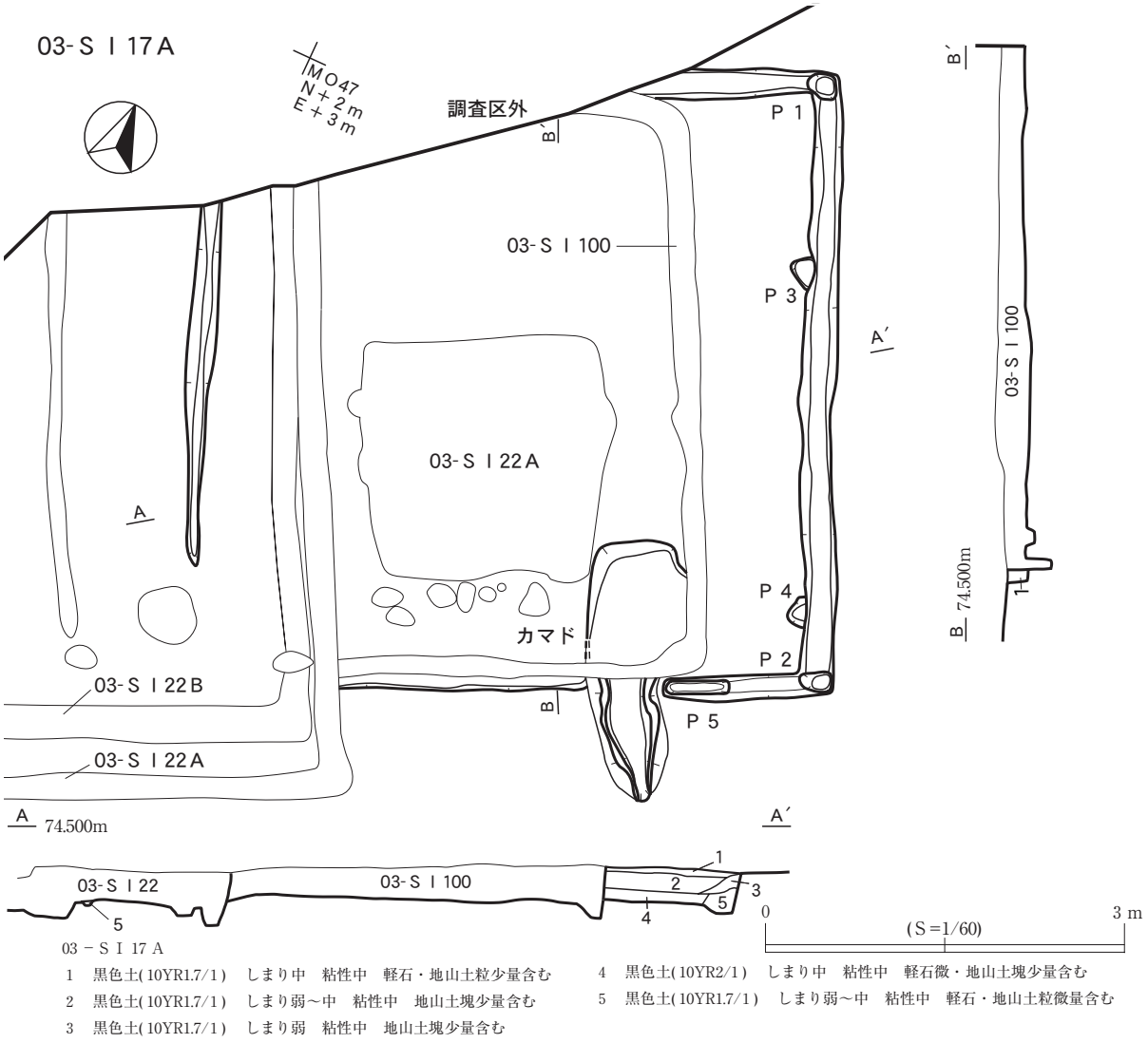
03-ＳＩ17Ａ(第172図・173図、図版51)

遺　構　建て替えにより、03-ＳＩ17Ｂより規模を拡大した住居である。堆積土は５層に分かれるが、基本的には03-ＳＩ100造成時の人為堆積土である。

住居西隅部分が一部調査区外に位置するが、確認できた範囲から想定される平面形は、わずかに北東－南西方向に長い長方形で、カマドの付く壁に直交する主軸方位はＮ－25°－Ｗである。予測される主軸とそれに直交するラインで測る住居面積は約29㎡で、大形の住居である。壁溝の延長線で推測する各壁の長さは、北東壁約5.2m、南東壁約5.7mである。壁の検出面からの深さは北東壁で約0.3mで、ほぼ垂直に立ち上がる。

床面は、03-ＳＩ100が大部分を切っており明確でないが、03-ＳＩ100段階で全面貼床を施す状況からみて、本住居段階ではその下部の掘形底面にあたる地山面を利用していたと考えられる。壁溝は、03-ＳＩ22・100の重複範囲では一部欠失しているが、基本的には全周巡っていたと考えられる。上場幅0.2～0.3m、下場幅0.04～0.15m、床面からの深さ0.05m前後の断面台形状である。

床面及び壁溝内で本住居跡に伴うとみられる５個のピットを確認した。Ｐ１・２は住居隅に位置する柱穴で、これに対応する、東・南隅には柱穴がみられないが、03-ＳＩ22Ａの床面が本住居跡床面よ



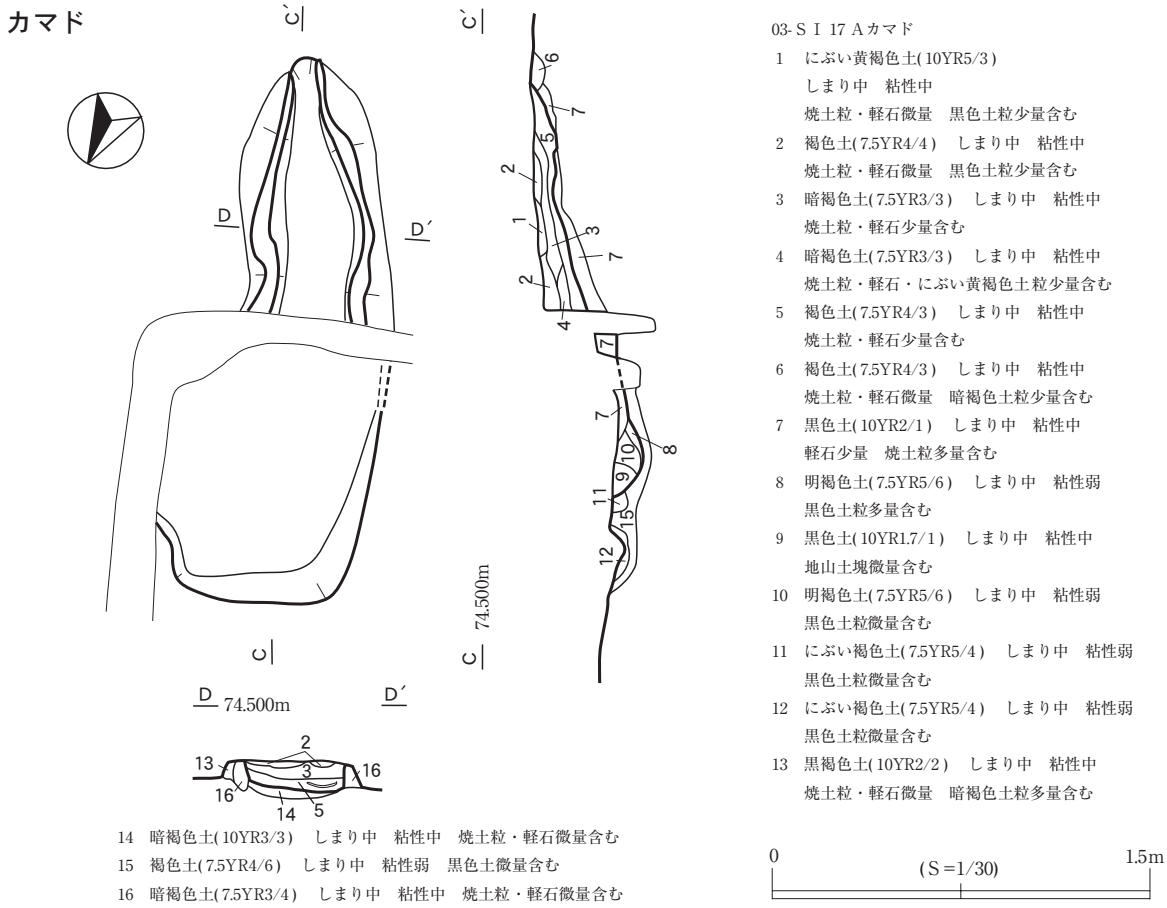
第172図　03-ＳＩ17Ａ

り低いため、失われている可能性が高い。Ｐ３・４は北東壁壁溝肩部にあることから、壁板保持の補助柱と考えられる。

カマドは南東壁の中央から東寄りの位置で、03-ＳＩ100床面下にパックされたにぶい褐色や黄褐色粘土を含む土の分布範囲で確認した。基本的に03-ＳＩ100の範囲に当たるため、上部構造は完全に失われている。確認できたのは煙道とカマド基底部の掘り込みである。堆積土は16層に分かれるが、ほとんどは03-ＳＩ100構築時に本カマドを埋め立てた土で、煙道部では構築土の残存である13～16層が認められる。煙道から掘り込み末端まで約2.4m、掘り込み最大幅で約1.0mである。煙道部のみ、袖からつながると考えられる粘土の高まりが残る。

本住居跡は隅に主柱をもち、南東壁にカマドを設置する住居である。本住居とはほぼ同規模で軸方位も同じ03-ＳＩ100へ造り替えるのに合わせて廃絶し、埋め立てたと考えられる。

遺　物　03-ＳＩ100の遺物と一括して取り上げているため、本住居跡に伴う遺物は明確に分離できなかったが、本住居跡の堆積土はわずかであり、カマドも主要部分をほとんど削平されていることから、本来の遺物相は失われていると考えられる。



03-ＳＩ17Ａカマド
1　にぶい黄褐色土(10YR5/3)
　しまり中　粘性中
　焼土粒・軽石微量　黒色土粒少量含む
2　褐色土(7.5YR4/4)　しまり中　粘性中
　焼土粒・軽石微量　黒色土粒少量含む
3　暗褐色土(7.5YR3/3)　しまり中　粘性中
　焼土粒・軽石少量含む
4　暗褐色土(7.5YR3/3)　しまり中　粘性中
　焼土粒・軽石・にぶい黄褐色土粒少量含む
5　褐色土(7.5YR4/3)　しまり中　粘性中
　焼土粒・軽石少量含む
6　褐色土(7.5YR4/3)　しまり中　粘性中
　焼土粒・軽石微量　暗褐色土粒少量含む
7　黒色土(10YR2/1)　しまり中　粘性中
　軽石少量　焼土粒多量含む
8　明褐色土(7.5YR5/6)　しまり中　粘性弱
　黒色土粒多量含む
9　黒色土(10YR1.7/1)　しまり中　粘性中
　地山土塊微量含む
10　明褐色土(7.5YR5/6)　しまり中　粘性弱
　黒色土粒微量含む
11　にぶい褐色土(7.5YR5/4)　しまり中　粘性弱
　黒色土粒微量含む
12　にぶい褐色土(7.5YR5/4)　しまり中　粘性弱
　黒色土粒微量含む
13　黒褐色土(10YR2/2)　しまり中　粘性中
　焼土粒・軽石微量　暗褐色土粒多量含む
14　暗褐色土(10YR3/3)　しまり中　粘性中　焼土粒・軽石微量含む
15　褐色土(7.5YR4/6)　しまり中　粘性弱　黒色土微量含む
16　暗褐色土(7.5YR3/4)　しまり中　粘性中　焼土粒・軽石微量含む

0　(S=1/30)　1.5m

第173図　03-ＳＩ17Ａカマド

03-ＳＩ17Ｂ(第174図、図版51)

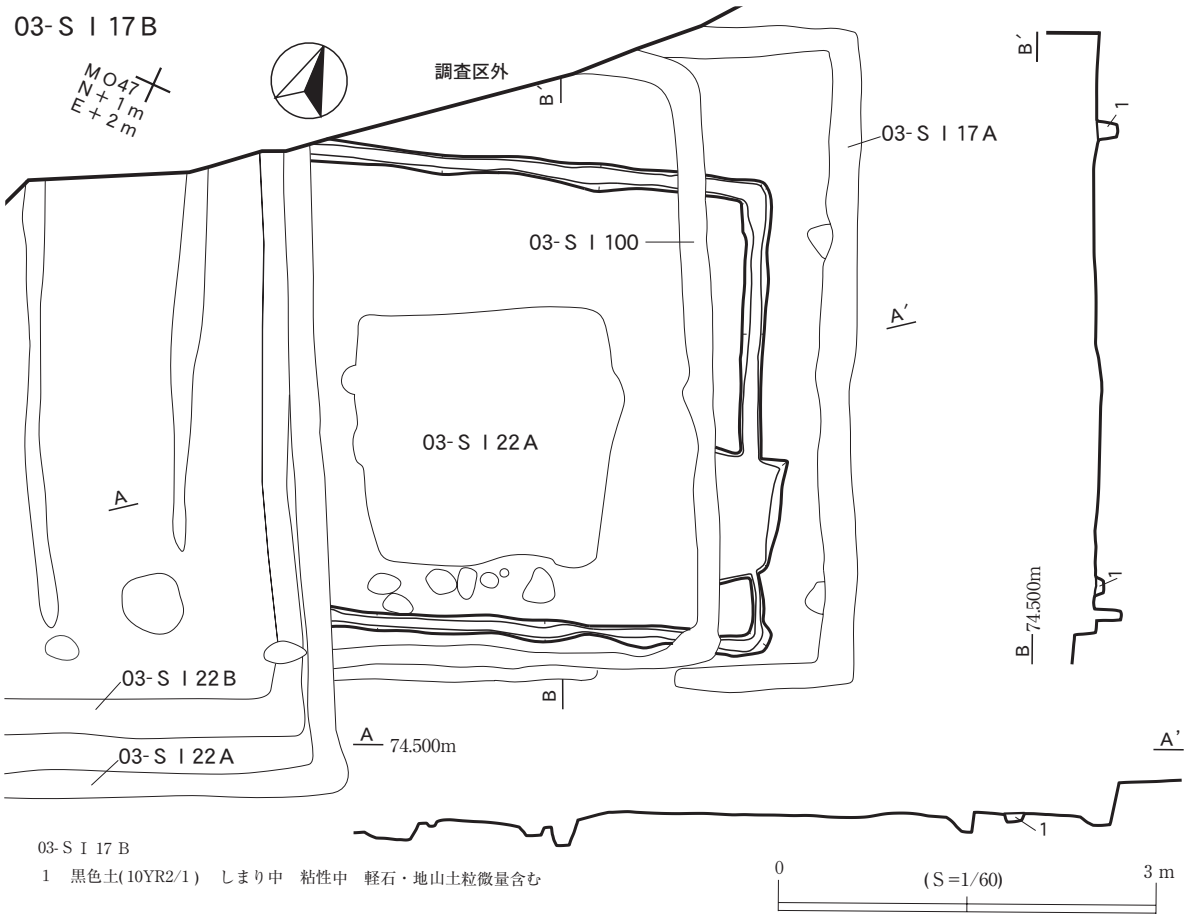
遺　構　03-ＳＩ17Ａよりも規模が一回り小さい古段階の住居である。最大規模の03-ＳＩ17Ａのプラン内に収まるため、埋没過程を示す堆積土や壁の立ち上がりは存在せず、壁溝配置で平面形と規模を推定できる。

平面形は、北西壁沿いの壁溝を03-ＳＩ22の壁溝が完全に破壊しているため推定になるが、ほぼ正方形になる。主軸方位は03-ＳＩ17Ａと同じくＮ－25°－Ｗである。北東壁を正方形の一辺とした場合住居面積は約14㎡で、小形の住居と想定される。壁溝で測る各壁の長さは、北東壁約3.8m、南東壁3.4m以上、北西壁3.6m以上である。

床面は、03-ＳＩ17Ａと共有するとみられ、基本的に掘形底面の地山面を利用したと考えられる。壁溝は、03-ＳＩ22・100の重複範囲では一部欠失しているが、基本的には全周巡っていたと考えられる。上場幅0.15～0.22m、下場幅0.04～0.13m、床面からの深さ0.1m前後の断面台形状である。なお、本住居跡に伴うピットは確認できなかった。カマドも本住居跡独自の痕跡は認められず、プランが相似形の03-ＳＩ17Ａと同地点を利用した可能性が高い。

本住居跡は全周壁溝を巡らし、南東壁にカマドを設置する住居と想定される。度重なる建て替えにより、本来の住居構造には不明な点が多い。複数の住居が交錯する本地点において、おそらく最古段階の住居で、03-ＳＩ17Ａへと拡張するために解体したと考えられる。

遺　物　本住居跡に伴う遺物は検出できなかった。



第174図　03-ＳＩ17Ｂ

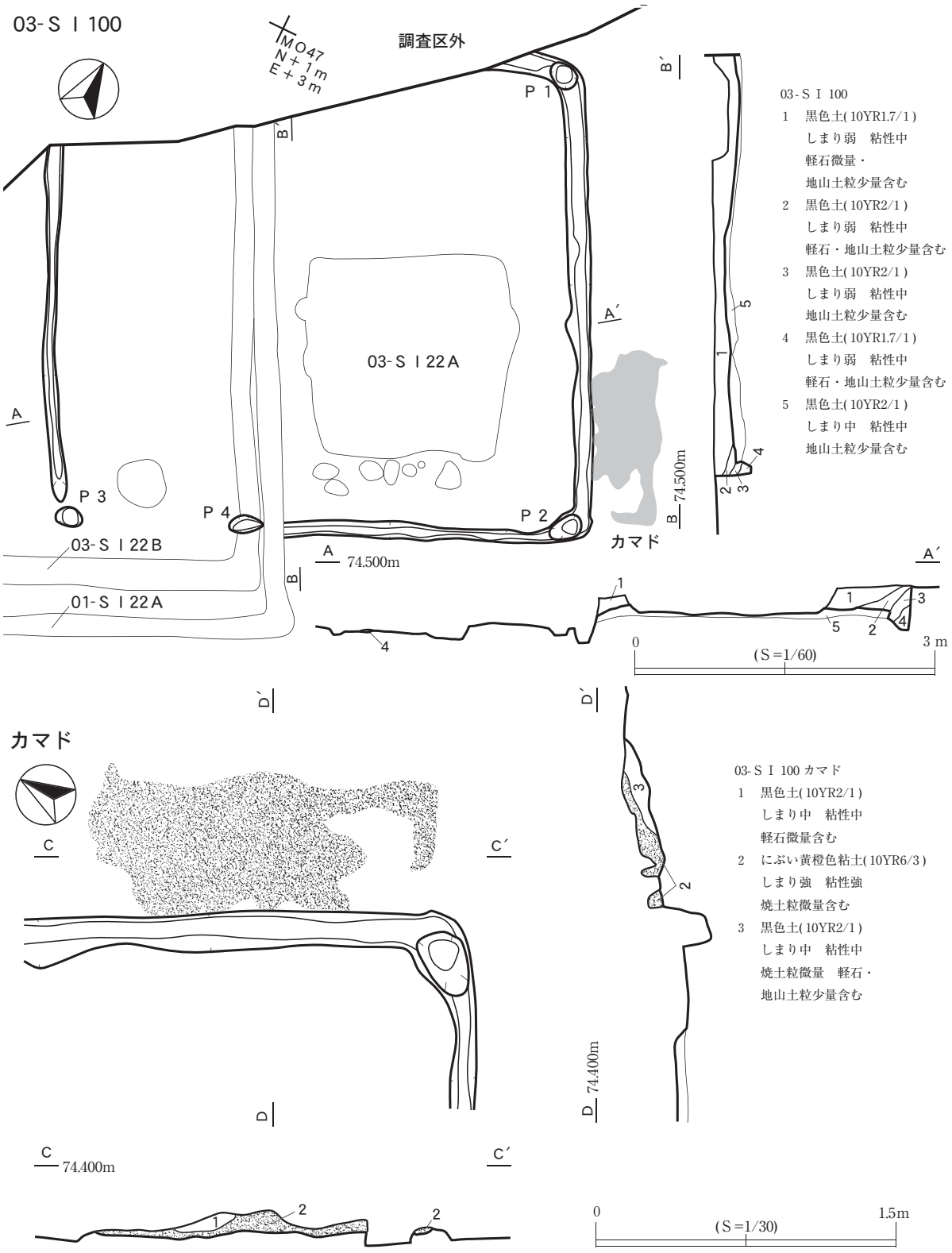
03-ＳＩ100(第175図・176図、図版51)

遺　構　本住居跡はMM46・47、ＭＮ45～47グリッドの、03-ＳＩ22下部及び第Ⅳ層中位において、地山土粒を含む土の分布範囲で確認した。本住居跡の立地点は、北西側調査区外の沢へ向かって緩やかに傾斜する。03-ＳＩ22・17と重複しており、03-ＳＩ17より本住居跡が新しく、03-ＳＩ22より本住居跡が古い。周辺には02-ＳＩ18・20、03-ＳＩ15・16・23がある。

堆積土は５層に分けた。住居内を埋め尽くす１層は、03-ＳＩ22構築時の整地に関わる造成土とみられる。２層は壁際にのみ堆積しており、３・４層が壁板の抜き取りによる堆積土とみられることから、上場に堆積していた周堤に由来すると想定される。５層は03-ＳＩ17床面よりもかさ上げするための貼床である。

平面形は、住居北西部が調査区外に延びており、住居南隅付近が03-ＳＩ22に関わる掘削によって消失しているため正確な形状は不明だが、残存範囲の壁溝配置からみて北東－南西方向に長い長方形と考えられる。カマドの付く壁に直交する主軸方位はＮ－27°－Ｅである。予測される主軸とそれに直交するラインで測る住居面積は約27㎡で、大形の住居である。各壁の長さは、北東壁約4.8m、南東壁約5.4m、南西壁4.0m以上である。各壁の検出面からの深さは、南東壁で約0.2m、北東壁でも約0.2mでほぼ垂直に立ち上がる。

床面はほぼ全面に貼床を施している。これは本住居跡よりも床面レベルの低い、03-ＳＩ17床面上部の整地に関連する造成土である。壁溝は、03-ＳＩ22の重複範囲では一部欠失しているが、基本的には全



第175図　03-ＳＩ100・カマド

周巡っていたと考えられる。上場幅0.14～0.21m、下場幅0.05～0.13m、床面からの深さ0.15～0.2mの断面台形状である。

壁溝内部で４個のピットを確認した。Ｐ１～３は住居隅に配置する主柱穴である。柱穴中心間で測る距離はＰ１－２間約4.5m、Ｐ２－３間約5.0mである。

カマドの可能性がある白色粘土範囲を北東壁の東隅付近で確認した。煙道基部の粘土範囲と考えられるが、住居内部で焼土や袖に関わる倒壊土の分布が確認できず、詳細は不明である。他の住居との比較から、出入口の痕跡である可能性もある。

本住居跡は隅に主柱をもち、北東壁にカマドを設置した可能性のある住居である。平面形が明らかに長方形で、03-ＳＩ17Ａとはほぼ同プランだがわずかに占地点をずらし、予測を含むが北東壁にカマドを設置することなど、計10軒が重複する本地点の住居中ではやや異質な様相を示す。廃絶後は人為的に埋め戻しており、03-ＳＩ22構築までに埋め立てたと考えられる。

遺　物(第176図)　住居跡内から土師器甕・坏、鉄製品が出土した。土師器甕は口縁部が23点、底部が16点出土しており、そのうち比較的大型の口縁部資料７点、底部資料３点を図示した。図示しなかったものを含めた甕の口縁部分類別数量はＡ類(６点)、Ｂ類(６点)、Ｃ類(７点)、Ｄ類(２点)、分類不能(２点)で、底部分類別数量は砂底(10点)、薦編圧痕(１点)、ナデ(２点)、ケズリ(２点)、回転糸切(１点)の内訳になる。口縁部でＡ・Ｂ類が多く出土しているが、これは本住居下部の03-ＳＩ17の遺物を一括掲載していることによるもので、本住居遺物で掲載している土器のうち古相を示すものがあれば、それは03-ＳＩ17に由来する遺物の可能性が高い。

176図１～３は比較的中・大型の土師器甕である。１・２は胴上部が張り出し、頸部が段状にくびれて口縁部が外反、口端が内湾する器形で、どちらも外面縦位ケズリ、内面横位ヘラナデ調整である。同一個体の可能性が高い。３は胴部中位が緩やかに張り出し、頸部でくびれて口縁部が外反する。外面縦位ケズリ、内面横位ユビナデ調整である。176図６・７は比較的小型の土師器甕である。６は内外面にロクロ目を残すもので、胴部から口縁部まで緩やかに外反し、口端が直立してからわずかに内湾する。７は胴部が直立気味に立ち上がり、口縁部が外反する。外面縦位ケズリ、内面斜位ユビナデ調整である。

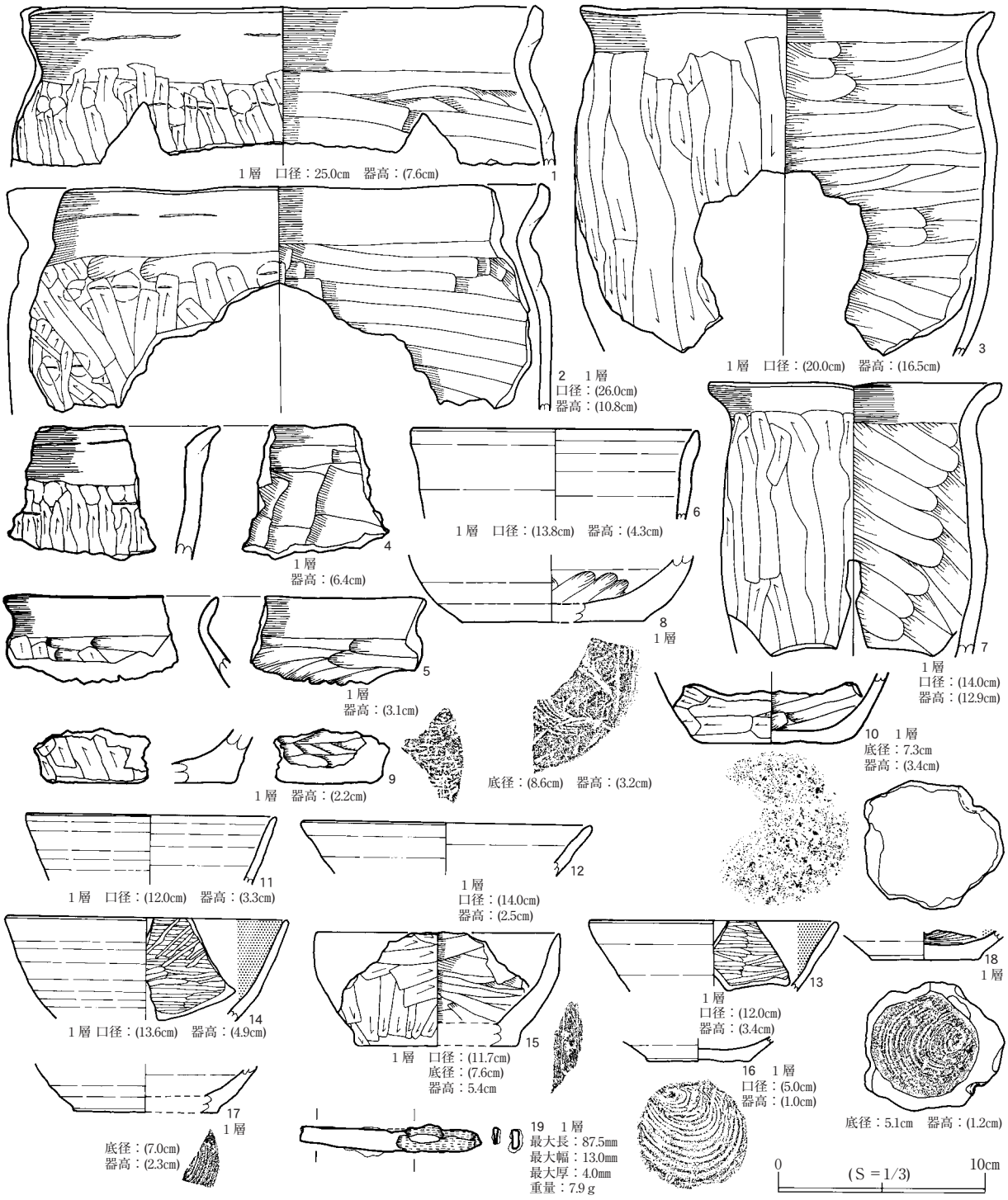
176図４・５は土師器甕の口縁部破片で、４は口縁部まで直線的に外傾して口端が短く外折する。５は胴上部から頸部まで内傾して口縁部が外反する。176図８～10は底部で、８が回転糸切痕、９が木葉痕を残し、10が砂底である。

176図11～18は土師器坏で、11・12・16・17がＡ類、13・14・18がＢ類、15がＤ類である。口縁部破片の11～14はいずれも直線的に外傾する器形である。15は胴部中位でくびれて、口縁部まで直立気味に立ち上がる。底部資料の16～18はいずれも底面に回転糸切痕を残す。なお、18は破片外縁を意図的に打ち欠いており、廃棄時の儀礼的行為の存在を窺わせる。176図19は鉄製品で、刀子である。刀身から茎にかけての破片だが、柄とみられる木質が残っている。

03-ＳＩ22

ＭＭ45・46、ＭＮ45～47、ＭＯ45・46グリッドの第Ⅳ層中位で、地山土粒を含む黒色土の広がりで確認した。本住居跡の立地点は台地上部平坦面だが、北西側調査区外の沢に向かってわずかに傾斜している。03-ＳＩ17・23・26・100と重複しており、いずれよりも本住居跡が新しい。周辺には、01-ＳＩ34・35・150、02-ＳＩ18・20、03-ＳＩ15・16がある。

床面精査で確認した壁溝やピットの配置から、１回の建て替えが認められ、２軒の住居跡が重なることが判明した。住居は新しい順に、Ａ・Ｂのアルファベットを付けて表記した。



第176図　03-ＳＩ100出土遺物

03-ＳＩ22Ａ(第177図～181図、図版52・147・153・160・165)

遺　構　03-ＳＩ22Ｂよりわずかに規模を拡大した住居である。堆積土は６層に分けられるが、壁際からの斜堆積が主体であり、自然堆積による埋没過程を示している。６層は壁溝内堆積土である。

平面形は、住居北西部が調査区外に当たるため正確には分からないが、ほぼ正方形と推測する。カマドの付く壁に直交する主軸方位はＮ－25°－Ｗである。南東壁を正方形の一辺として測る住居面積は約56㎡で、特大形の住居である。各壁の長さは、完掘している南東壁で約7.5m、北東壁5.1m以上、南西壁2.4m以上である。壁の検出面からの深さは北東壁で約0.3mで、ほぼ垂直に立ち上がる。北東

壁の南東半分の位置に付くとみられる、張り出し状の掘り込みが存在する。当初は別遺構として調査したが、規模が小さく本住居跡に軸方位が一致することから、一連の遺構として捉えた。約1.8m四方の掘り込みで、底面レベルは住居床面より約0.1mほど高い。

床面は基本的に掘形底面の地山上面を利用している。壁溝は、調査した範囲のカマドを除く全周で確認した。上場幅0.15～0.25m、下場幅0.04～0.16m、床面からの深さは0.05～0.15mの断面台形状である。床面及び張り出し周辺部で11個のピットを確認した。Ｐ１・３は住居隅から内寄り中央部に配置する主柱穴である。Ｐ３はカマド前庭部の規制を受けて、中央寄りに配置すると考えられる。柱穴中心間の距離は約4.8mである。Ｐ４・５・11は張り出し部とほぼ同規模の配置をみせ、若干南寄りに位置がずれる。出入り口施設の造り替えも想定される。Ｐ６～10は、これに伴う下部構造とみられる。

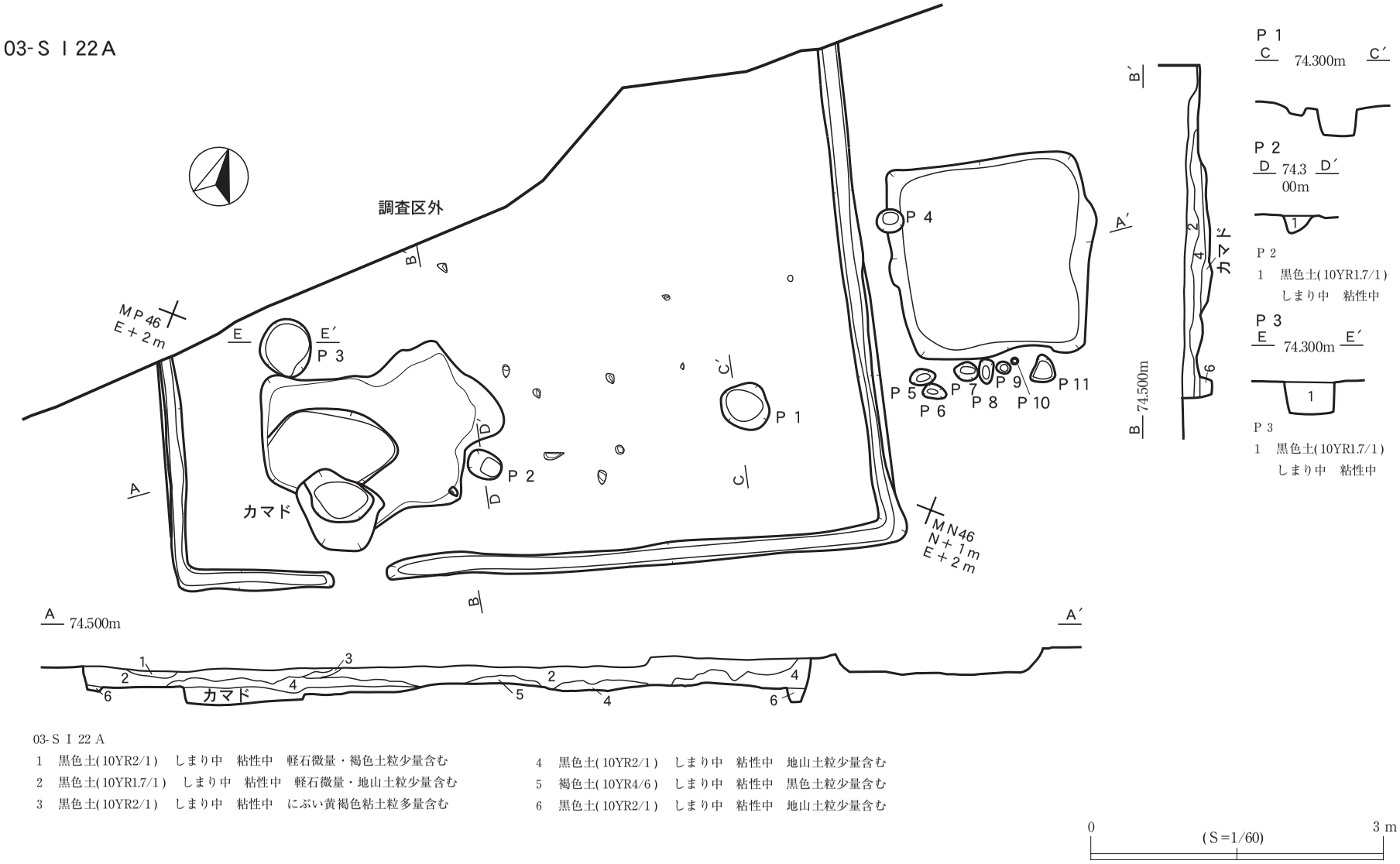
カマドは南東壁の中央から南西寄りの位置で、にぶい黄橙色粘土を含む土の広がりで確認した。廃棄時に上部構造をほとんど破壊しており、火床面も削られた状態であったため、確認できたのは煙道からカマド本体基部の掘形と前庭部のみである。堆積土は11層に分けられるが、１～９層は周囲からの流入土が主体で倒壊した上部構造材を含んでおり、10・11層はカマド基底部の貼り土である。壁溝開口部から前庭部末端まで約2.0m、前庭部最大幅は約2.1mである。

本住居跡は南東壁にカマドを配置し、４本の主柱をもつ住居と想定される。廃絶後は自然堆積で埋没するとみられ、周囲の遺構群では最も新しい住居であり、本集落跡の中でも最新段階の住居と考えられる。

遺　物(第179図～181図)　住居跡内から土師器甕・坏・高台付坏、須恵器壺・甕、鉄製品が出土した。土師器甕は口縁部が51点、底部が52点出土しており、そのうち比較的大型の破片を口縁部資料12点、底部資料８点図示した。図示しなかったものを含めた甕の口縁部分類別数量はＡ類(３点)、Ｂ類(７点)、Ｃ類(29点)、Ｄ類(５点)、分類不能(９点)で、底部分類別数量は砂底(33点)、木葉痕(５点)、薦編圧痕(３点)、ケズリ(10点)、回転糸切(１点)の内訳になる。全てが満遍なく出土しているが、これは本住居跡が、03-ＳＩ23・26・100を掘り込んでおり、その際に巻き上げた遺物を含むことによるとみられる。そのため、本遺構の古相の遺物は、重複する古段階の住居跡に伴うものの可能性が高く、本住居跡本来の遺物層を捉え難くしている。

179図は１～７比較的中・大型の土師器甕である。１は胴部中位を欠損するが、ほぼ全体形を窺える資料である。底部がやや張り出して胴部中位まで外傾して立ち上がり、頸部に向けて内湾して口縁部が外折する。頸部には段がある。底面は薦編圧痕をとどめ、外面は縦位ケズリ、内面は縦・横位のヘラナデ調整である。口縁部形態では２が１に近いが、外反具合は弱い。外面調整が口縁部付近で横位のケズリになり、内面は横位ユビナデ調整である。３・４・６は胴上部から内傾して口縁部がわずかに外反する器形である。３は口縁部側面に面を形成し、４・６は口端がつまみ出し状に外反する。外面調整はいずれも縦位ケズリで、６は胴上部にユビナデをとどめる。内面は３が縦位ヘラナデ、４が横位ユビナデ、６が横位ヘラナデ調整である。５・７は口縁部まで内湾する器形である。５は外面に工具の当たりの狭い縦位ケズリを、内面に横位ヘラナデを施す。７は外面調整が不明瞭で、内面は横位ヘラナデ調整である。

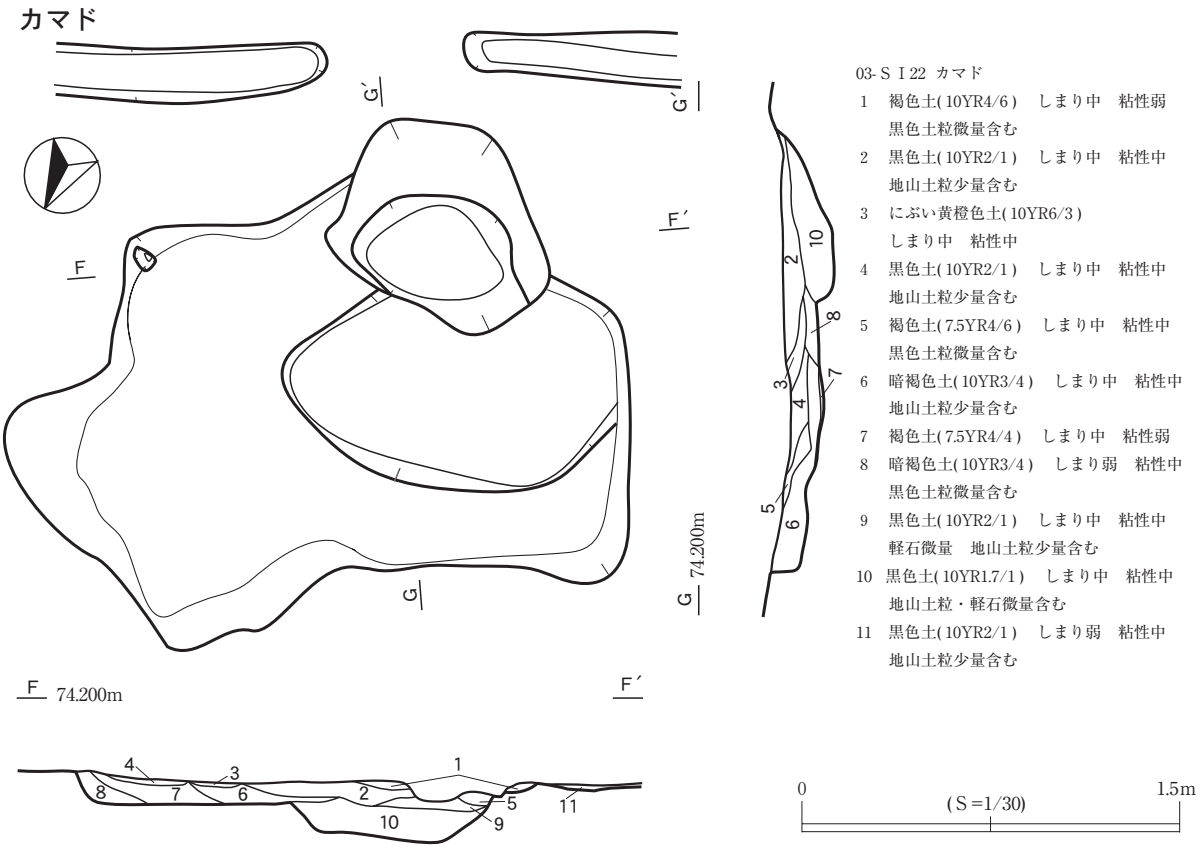
179図８～12は比較的小型の土師器甕である。８はほぼ完形の資料で、底部が張り出して胴上部にむけて外傾し、頸部が段状にくびれて口縁部が外反する器形である。底面には木葉痕をとどめ、外面



03-ＳＩ22Ａ

1　黒色土(10YR2/1)　しまり中　粘性中　軽石微量・褐色土粒少量含む
2　黒色土(10YR1.7/1)　しまり中　粘性中　軽石微量・地山土粒少量含む
3　黒色土(10YR2/1)　しまり中　粘性中　にぶい黄褐色粘土粒多量含む
4　黒色土(10YR2/1)　しまり中　粘性中　地山土粒少量含む
5　褐色土(10YR4/6)　しまり中　粘性中　黒色土粒少量含む
6　黒色土(10YR2/1)　しまり中　粘性中　地山土粒少量含む

第177図　03-ＳＩ22Ａ



第178図　03-ＳＩ22Ａカマド

は縦位ケズリ、内面は底部付近が縦位それ以上が横位のヘラナデ調整である。９も頸部に段状のくびれを有し、口縁部が直立してから内湾する。11・12は胴上部が内傾して口縁部が弱く外反する器形で、11は口縁部がやや肥厚する。どちらも外面縦位ケズリ、内面横位ヘラナデ調整である。10は口縁部まで内湾する器形で、口唇はつまみ出し状の先細り形状で、わずかに直立気味になる。外面縦・横位ケズリ、内面横位ヘラナデ調整である。

180図１～６は土師器甕の底部である。１が薦編圧痕をとどめ、２～４・６が砂底で、５がケズリ再調整を施す。底部の立ち上がり形状では、１～４は直線的に外傾し、５・６は外縁が張り出す。179図１も底部外縁がやや張り出す。

180図７～12は土師器坏で、11がＡ類、７～10がＢ類、12はＢ類で高台が付く。８は約1/2が残存する資料である。底部が突出し、底部付近でややくびれて胴部は内湾気味に立ち上がり、口縁部が弱く外反する。口唇はわずかに肥厚して丸みを帯びた形状になる。底部の回転糸切痕は筋幅は広いが凹凸が少なく、底部外縁が不規則に張り出す部分に再調整がなかったことを示す。胴部のロクロ目は間隔が広くやや深めの曲線的な凹凸を残す。内面のミガキは底部が交差状に、胴部から口縁部は横位に隙間無く施す。９・10は口縁部が直線的に外傾する器形で、内面のミガキは９が胴部中位まで、10は胴上部まで放射状に施す。これらに比べて７は比較的大型の資料である。外面ロクロ目はやや起伏が大きく、内面には横方向のミガキを施している。11は底部で、回転糸切痕をとどめる底部から直線的に外傾する器形である。12は高台と上部の底部付近が残存する資料である。高台部は小皿状の円盤を貼り付けて、内外面共に横位のナデで密着させている。上部はほとんど残っていないが、残存部からするとやや大きめの碗形になると考えられる。内面には放射状のミガキが認められる。

180図13～15は須恵器である。13・14が壺で、13が口縁部、14が頸部資料である。13は頸部から緩やかに外反して口縁部で屈曲して直立する。口縁部側面に斜位の面を形成する。15は甕の口縁部から胴上部にかけての資料で、胴上部が内傾し、肩部で屈曲してより傾斜をつけて内傾し、頸部で直立気味に立ち上がり、口縁部にかけて外反する器形である。口縁部側面にはほぼ垂直の面を形成する。

180図16～22は鉄製品である。16～19は刀子で、17は切先と茎の末端を、18も切先と茎を欠損する。19は切先部分のみ、16は刀身から茎の一部が残存しており、柄とみられる木質を残す。21は鎌と考えられるもので、刃先と基部を欠損する。22は返し状に先端が膨らむことから銛と考えられる。先端と末端の一部を欠損する。20は両端を欠損する棒状のもので、詳細は不明である。

181図には張り出し部から出土した遺物を図示した。１～３は土師器甕の口縁部破片である。２はロクロ目を残すもので、頸部にかけて内傾し、口縁部がわずかに外反する。口唇は角頭状になる。１は頸部で屈曲し口縁部が外折する。外面縦・横位ケズリ、内面横位ヘラナデ調整である。３は口縁部が外反する器形で、外面縦位ケズリ、内面横位ヘラナデ調整である。

181図４・５は土師器坏Ｂ類である。４は口縁部破片で、口縁部がわずかに外反する。内面のミガキは下部にわずかに縦方向が認められる以外は、横位に施している。５は底部が突出する形状で、底面には回転糸切痕を残す。

03-ＳＩ22Ｂ(第182図、図版52)

遺　構　03-ＳＩ22Ａより一回り規模が小さい古段階の住居である。規模の大きい03-ＳＩ22Ａのプラン内に収まるため、本住居跡固有の堆積土や壁は残存せず、形状も壁溝配置でのみ確認できた。平面形は、住居北西部が調査区外に当たるため正確には分からないが、ほぼ正方形と推測する。カマドの付く壁に直交する主軸方位はＮ－25°－Ｗである。南東壁を正方形の一辺として測る住居面積は約36㎡で、大形の住居である。各壁の長さは、完掘している南東壁で約6.0m、北東壁4.6m以上、南西壁2.5m以上である。

床面は03-ＳＩ22Ａとほぼ同レベルの地山上面を利用したと考えられるが、壁溝の残存高から幾分削平されている可能性もある。壁溝は、カマド部分を除く調査範囲で全周確認した。上場幅0.15～0.3m、下場幅0.08～0.24m、床面からの深さは0.05m前後である。床面で１個のピットを確認した。Ｐ１は住居隅から内より中央部に配置する主柱穴とみられるが、相対する位置の柱穴が不明確である。

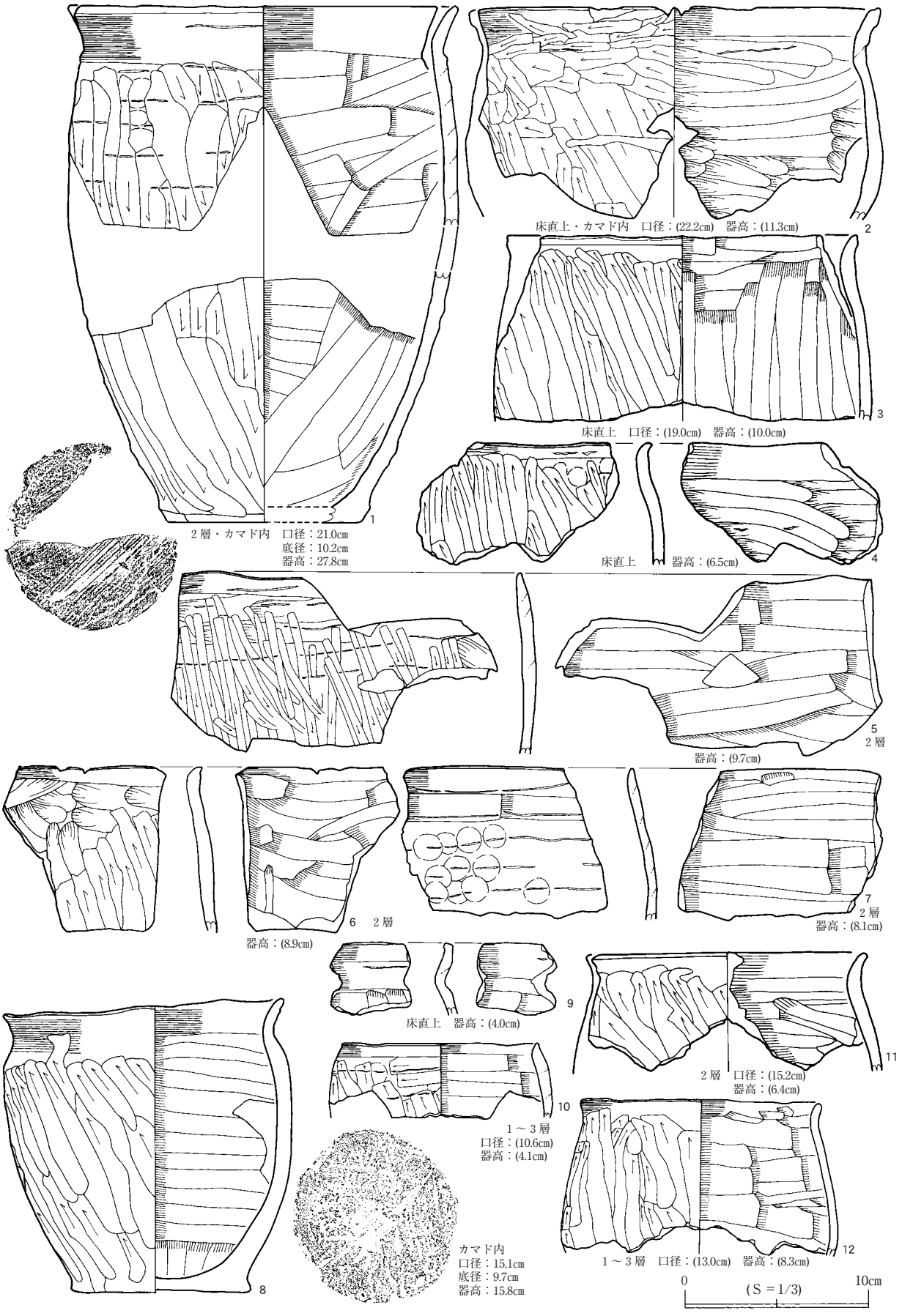
本住居跡は南東壁にカマドをもち、４本の主柱をもつ住居と想定される。03-ＳＩ22Ａへと拡張するのに合わせて廃絶したと考えられる。

遺　物　本住居跡に伴う遺物は検出できなかった。

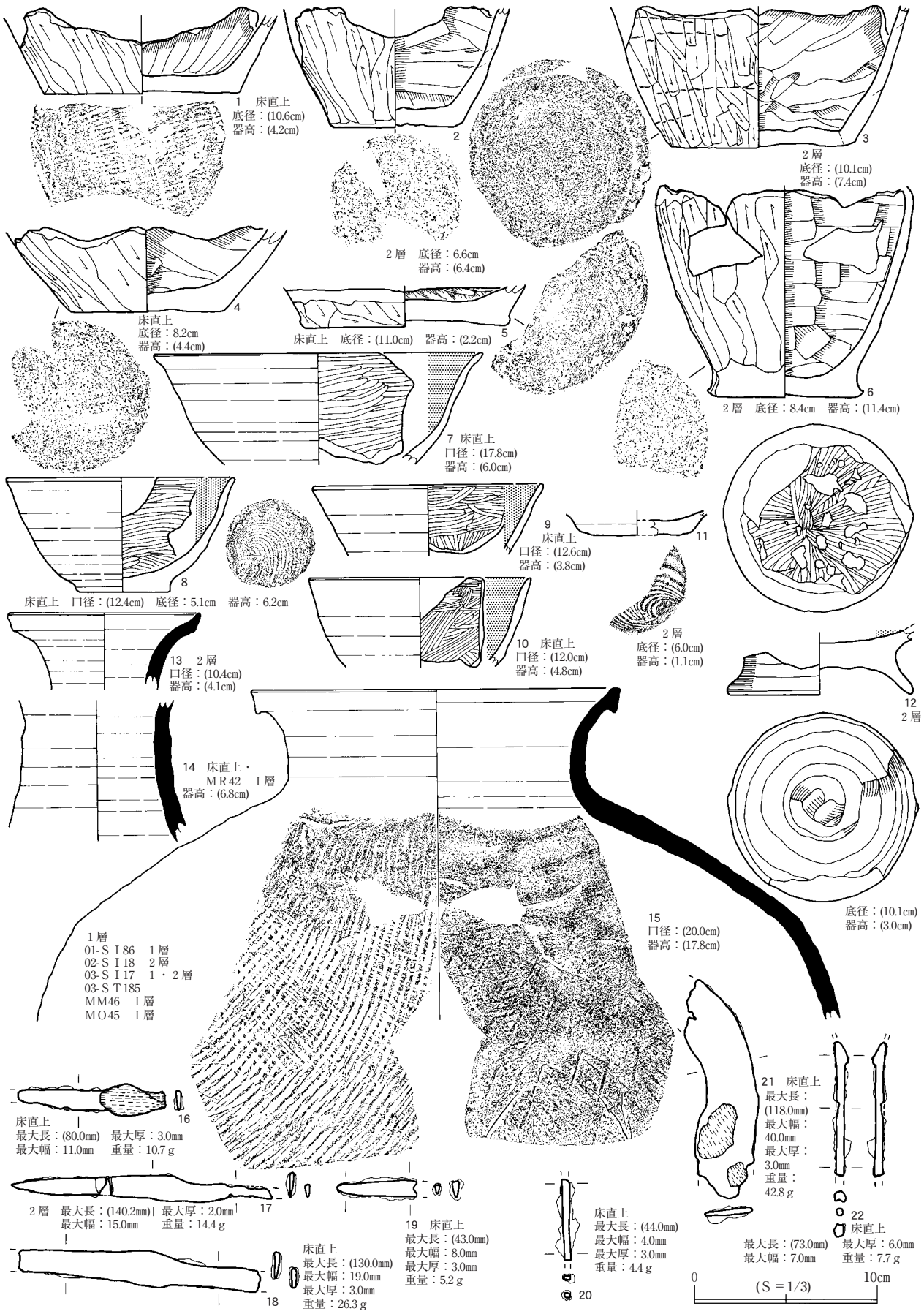
03-ＳＩ23(第183図～186図)

遺　構　ＭＭ45、ＭＮ・ＭＯ44～46グリッドの03-ＳＩ22床面及び第Ⅳ層中位で、地山土粒を含む黒色土の広がりで確認した。本住居跡の立地点は台地上部平坦面だが、北西側調査区外の沢に向ってわずかに傾斜している。03-ＳＩ22・26、03-ＳＲ801と重複し、いずれよりも本住居跡の方が古い。周辺には01-ＳＩ34・35・150、02-ＳＩ18、03-ＳＩ17・100がある。

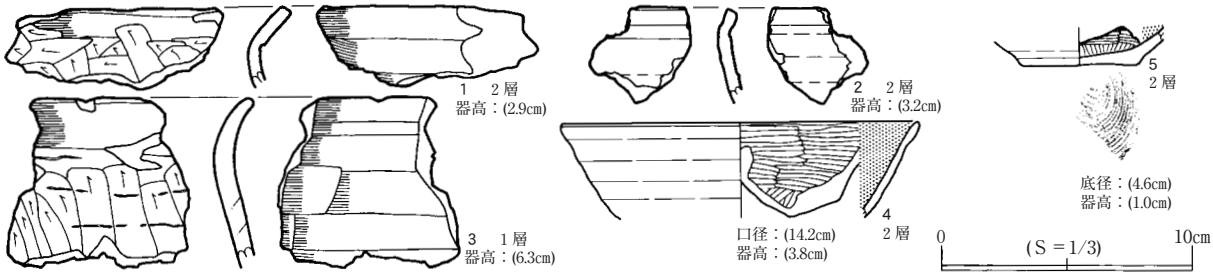
堆積土は７層に分けた。大部分を03-ＳＩ22・26が掘削しているため堆積過程は不明だが、本住居跡



第179図　03-ＳＩ22Ａ出土遺物１



第180図　03-ＳＩ22Ａ出土遺物２



第181図　03-ＳＩ22Ａ出土遺物３

以降にも連続して住居を構築する地点であり、壁溝内堆積土の６・７層を除いて、人為的に投棄した造成土と考えられる。

北西部が一部調査区外に当たるが、壁溝配置から予測される平面形は、北西－南東方向にわずかに長い長方形で、カマドの付く壁に直交する主軸方位はＮ－32°－Ｗである。北東壁と南東壁で測る住居面積は約37㎡で、大形の住居である。各壁の長さは、北東壁約6.0m、南東壁約6.2m、南西壁5.0m以上である。壁の検出面からの深さは南東壁で0.15m前後で、ほぼ垂直に立ち上がる。

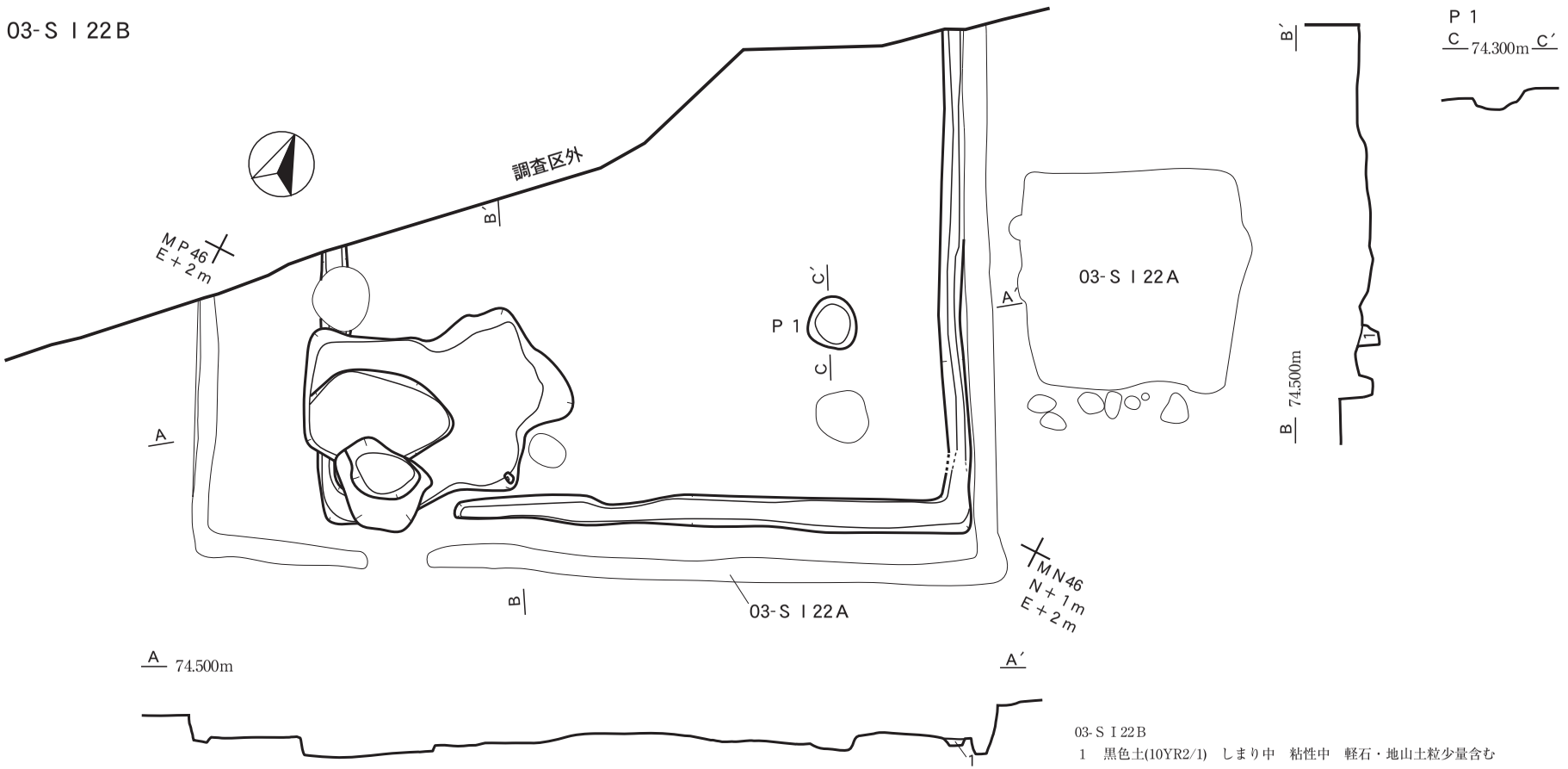
残存範囲の床面は、基本的に掘形底面の地山上面を利用している。壁溝はカマド部分を除いて調査した範囲の全周で確認した。上場幅0.15～0.3m、下場幅0.06～0.15m、床面からの深さは0.2m前後である。床面、壁溝内、張り出しとみられる範囲で11個のピットを確認した。Ｐ１・２・４は住居隅の壁溝内に規則的に配置する主柱穴である。柱穴中心で測る柱穴間距離はＰ１－２間約5.7m、Ｐ２－４間約5.9mである。Ｐ６・７・10・11は南西壁北西部に位置し、間に短い溝を挟むことから、張り出しに伴うピットの可能性がある。これに対応するように、Ｐ８・９が南西壁中央部に壁に平行して２個並ぶ。出入り口の下部構造である可能性が高く、この場所に時期差のある張り出しが存在する可能性を高める遺構である。

カマドは南東壁の中央から東寄りの位置で、カマド基底部に伴う掘り込みと、遺物分布で確認した。上部構造は完全に失われており、火床面も明確でなく、破棄時に完全に破壊したものと考えられる。堆積土は18層に分かれるが、１～13層までは基本的に上部構造撤去後にカマド上面に堆積した土で、14層以下はカマド基底部の造成土である。煙道の掘り込みから前庭部末端まで約2.5m、前庭部最大幅は約1.9mである。煙道の掘形はスロープ状で、カマド基底部の掘形につながる。カマド本体上部と考えられる範囲には、礫と土器片が散在していた。

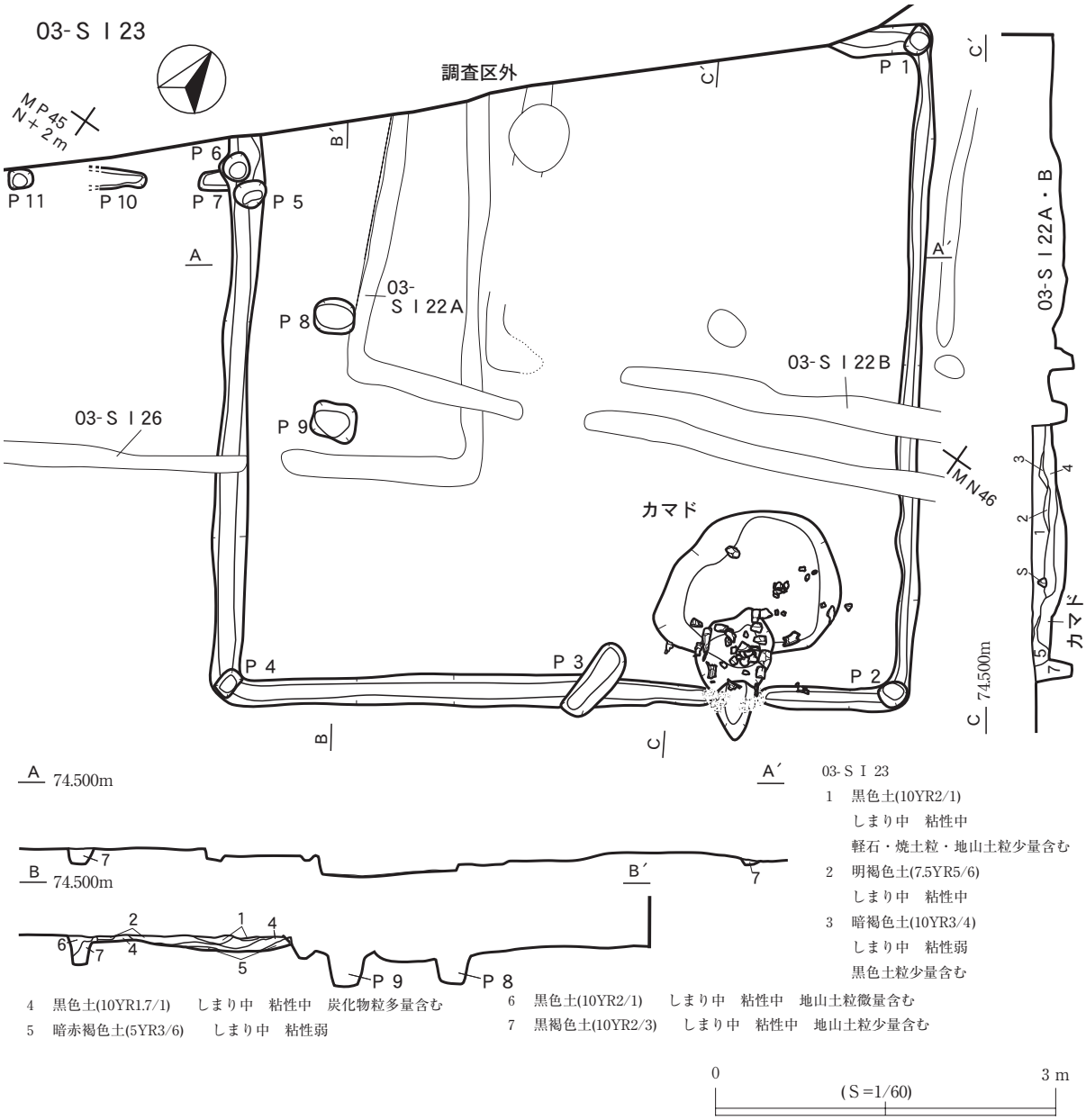
本住居跡は焼失家屋で、床面上では多数の炭化材や焼土を検出した(第185図)。03-ＳＩ22・26が掘り込む北部では撤去している。炭化材の分布は壁際に集中する。板状で壁に直交する木目のものが多く、壁板の残存状況と考えられる。なお、一部壁と平行方向の木目のものもみられ、腰板となる可能性がある。なお、１点を樹種分析を行った結果、ヒノキ科の結果がでた。壁板に針葉樹を用いるのは、他の住居と同じ傾向である。

本住居跡は隅に主柱をもち、南東壁にカマドを設置する住居である。03-ＳＩ26造成時までに廃絶し、埋め立てたと考えられる。

遺　物(第186図)　住居跡内から土師器甕が出土した。須恵器の破片も出土しているが、小破片のため図示しなかった。土師器甕は口縁部が21点、底部が６点出土しており、そのうち比較的大型の破片を口縁部資料13点、底部資料３点図示した。なお図示しなかったものを含めた甕の口縁部分類別数量は



第182図　03-ＳＩ22Ｂ

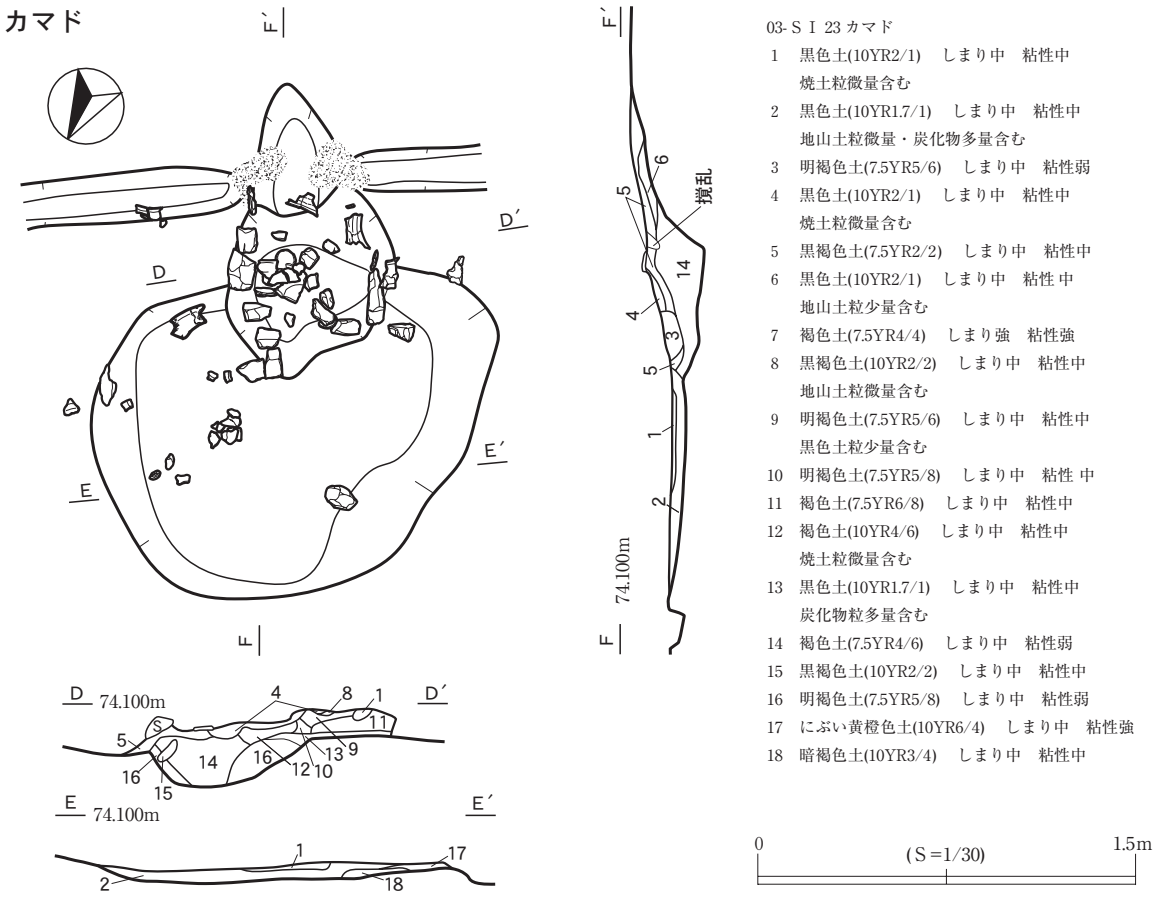


第183図　03-ＳＩ23

A類(２点)、B類(８点)、C類(11点)、D類(０点)で、底部分類別数量は砂底(４点)、ケズリ(２点)の内訳になる。C類と砂底が多いがB類も比較的多く、本住居跡の遺物相をよく表す。

本住居跡は焼失家屋で、廃絶時の祭祀行為として遺物を投棄した可能性が高く、基本的に廃絶時までの遺物層をパックしているとみられる。ただし、北西半分は03-ＳＩ22が破壊しており、全体像は不明だが、03-ＳＩ22出土のB類は本住居跡の廃絶行為に由来するものであると考えられる。

186図１～11は比較的中・大型の土師器甕である。２はロクロ目を残す口縁部破片である。１は胴上部が張り出し、頸部にかけて内傾して口縁部が外折する器形である。３～６もほぼ１と同様な器形である。４は胴部中位が直立気味に立ち上がる器形である。口唇形状では、１が先細り、３・４が丸く収め、５・６が面取りにより角頭状になる。外面調整は、１がユビナデや指の押さえを広くとどめるが、基本的にすべて縦位ケズリである。内面調整も１・３では胴下部に斜位ヘラナデが認められるが、基本的に横位ヘラナデである。７・８は胴上部が内傾して口縁部が直立気味に外反する器形で、



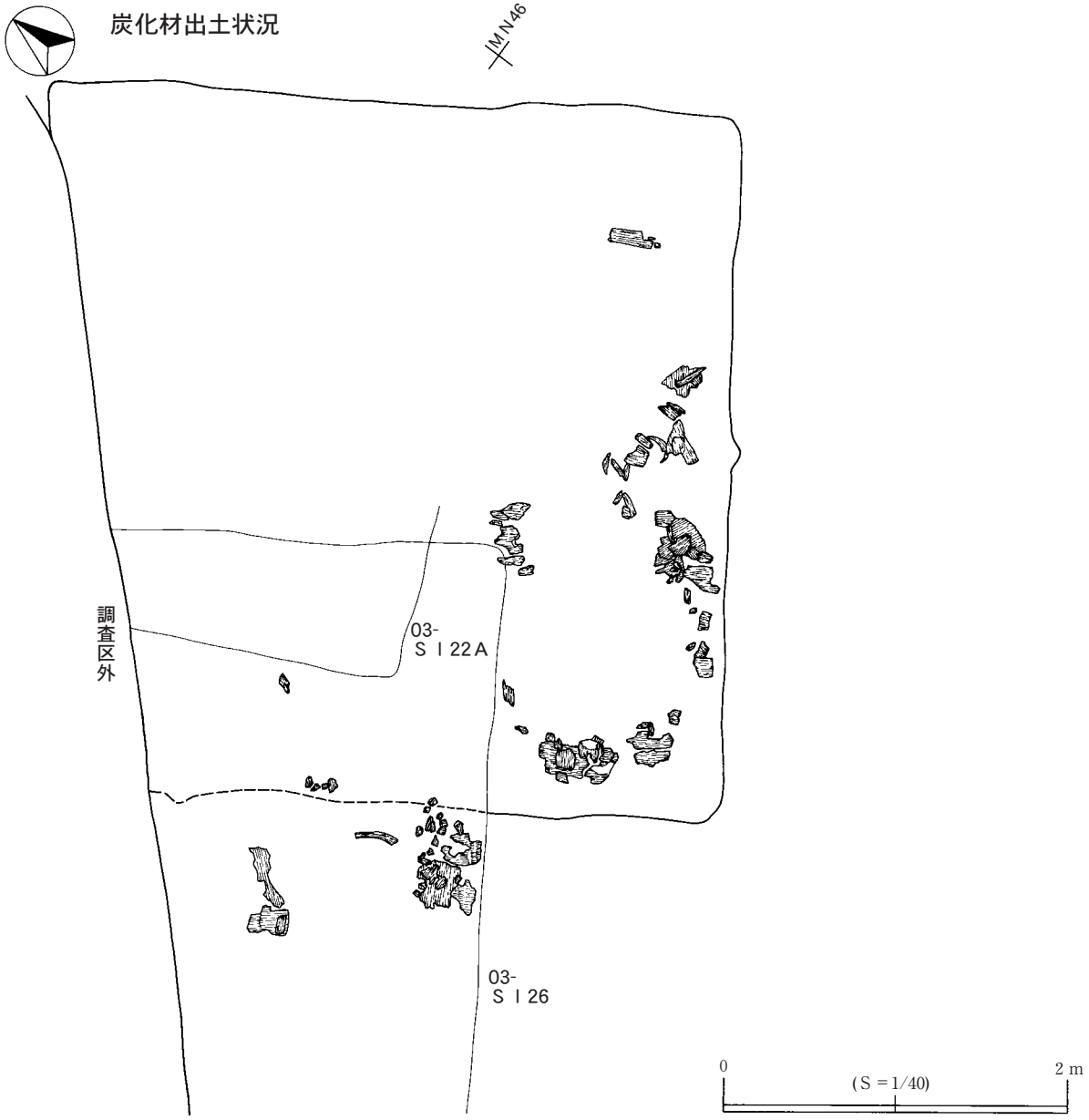
第184図　03-ＳＩ23カマド

口縁部がやや肥厚する。８は口唇が角頭状になる。どちらも外面縦位ケズリ、内面横位ヘラナデ調整である。９は頸部のくびれが明確なもので、口縁部は外折する。外面縦位ケズリ、内面横位ヘラナデ調整で、口唇は丸みを帯びる。10は口縁部が外反するが、頸部のくびれが弱い器形で、口唇は先細りになる。外面縦位ケズリ、内面横位ヘラナデ調整である。11は胴上部から直立気味に立ち上がり、口端がわずかに外反する器形で、これも外面縦位ケズリ、内面横位ヘラナデ調整である。１～11では、口唇を平滑に面取りする５は器壁が薄く、口縁部が直立する11が器壁が厚い以外は、器壁は概ね一定している。

186図12・13は比較的小型の土師器甕である。12は９の器形に、13は10の器形に近く、どちらも外面縦位ケズリ、内面横位ヘラナデ調整である。186図14～16は土師器甕の底部である。14・15は砂底で、16はケズリ再調整を施す。14・15は底部から直線的に外傾して立ち上がる。16は立ち上がりに輪積痕の段を残しており、外縁が張り出す形状である。

03-ＳＩ26(第187図、図版86)

遺　構　ＭＮ45、ＭＯ・ＭＰ44・45グリッドの第Ⅳ層中位から03-ＳＩ22床面で、地山土塊を含む黒色土の広がりで確認した。本住居跡の立地点は台地上部平坦面だが、北西側調査区外の沢に向かってわずかに傾斜している。01-ＳＩ34、03-ＳＩ22・23と重複し、01-ＳＩ34、03-ＳＩ23より本住居跡の方が新く、03-ＳＩ22より本住居跡の方が古い。周辺には01-ＳＩ35・150、03-ＳＩ17・100がある。

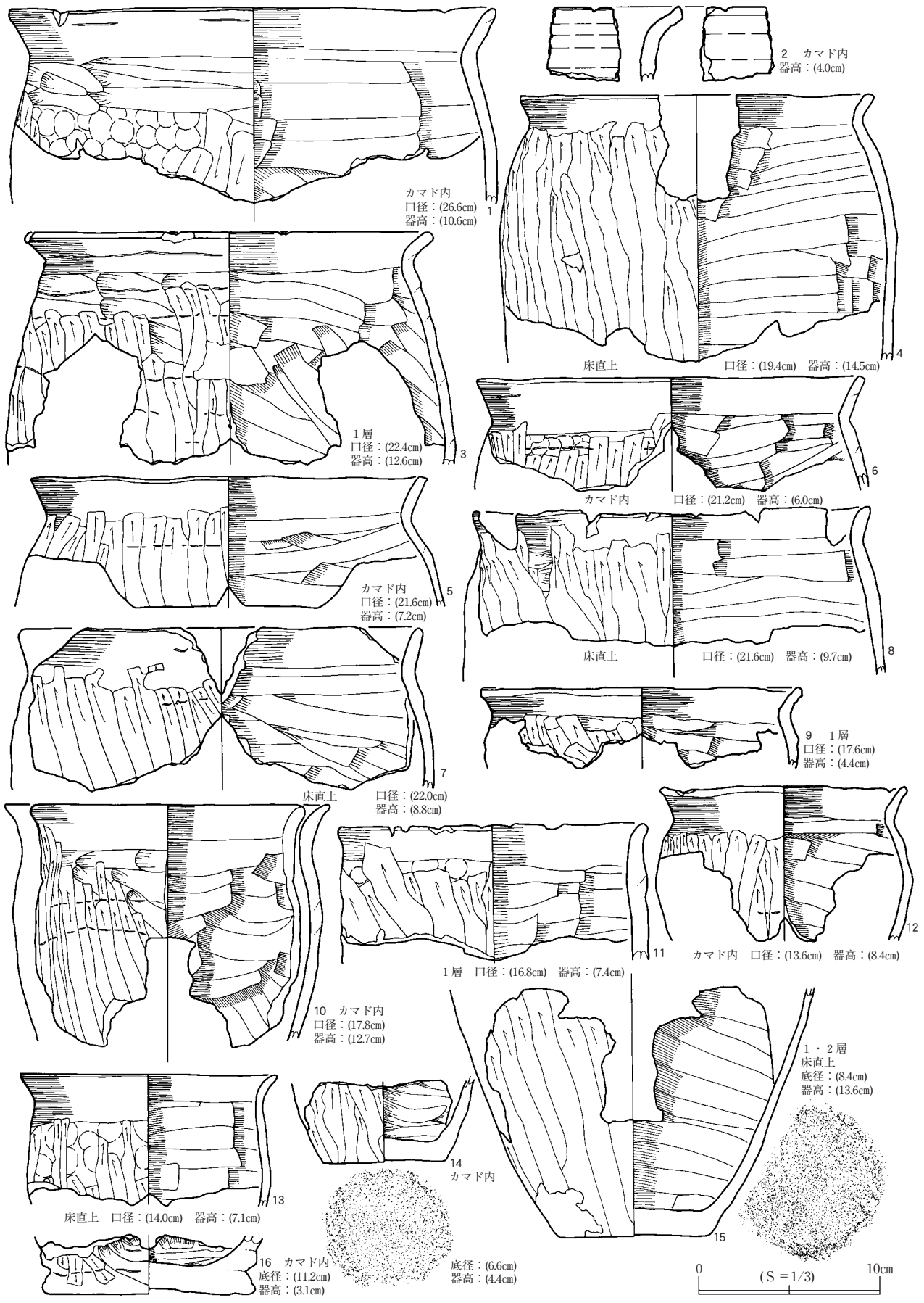


第185図　03-ＳＩ23炭化材出土状況

堆積土は３層に分けたが、１・２層は黒色基調の地山土粒を含む土で、人為的な埋め戻しの土と考えられる。３層は壁板裏込めの残存土である。

平面形は、住居北西部が調査区外に当たるため正確には分からないが、ほぼ正方形と推測される。カマドの付く壁に直交する主軸方位はＮ－32°－Ｗである。南東壁を正方形の一辺として測る住居面積は約42㎡で、特大形の住居である。各壁の長さは、完掘している南東壁で約6.5m、北東壁は3.4m以上、南西壁2.2m以上である。壁の検出面からの深さは、かろうじて残る南東壁で0.1m前後で、ほぼ垂直に立ち上がる。

床面は01-ＳＩ34と03-ＳＩ22の掘り込みで大半が失われているが、基本的には掘形底面の地山上面を利用する。壁溝はカマド部分を除いて全周で確認した。上場幅0.12～0.25m、下場幅0.03～0.13m、床面からの深さ0.05m前後の断面台形状である。床面及び壁溝内でピットは確認できなかった。南東壁中央部付近に炭化材の散布が認められるが、これは03-ＳＩ23の炭化材を含んだ土を住居埋め戻しに



第186図　03-ＳＩ23出土遺物

利用したことによる混入物と考えられ、本住居跡が焼失家屋であることを示すものではない。

カマドは南壁の中央から東寄りの位置で、火床面と考えられる焼土面の範囲で確認した。上部構造は完全に破壊してあり、倒壊土も残存しない。確認できたのは火床面と前庭部である。堆積土は６層に分かれる。１層はカマドの窪みを埋め立てる造成土で、２層以下がカマド基底部の残存、４層は被熱範囲である。住居壁から前庭部末端まで約1.8m、前庭部最大幅が約1.4mである。火床面は径約0.8mの不整な円形状である。

本住居跡は明確な主柱をもたず、南東壁にカマドを設置する住居である。01-ＳＩ34や03-ＳＩ22構築前までに廃絶し、埋め立てたと考えられる。

遺　物(第187図)　住居跡内から土師器甕、土製品が出土した。出土遺物はほとんど小破片で出土量も少なく、主体的なものはほとんど図示した。これは01-ＳＩ34と03-ＳＩ22が本住居跡を掘り込み、本住居の堆積土が奪われたことによると考えられる。

187図１は比較的大型の土師器甕で、頸部でわずかにくびれるが、口縁部まで直立気味に立ち上がる。外面縦位ケズリ、内面横位ヘラナデ調整である。２は比較的小型の土師器甕で胴部が直線的に外傾して胴上部が張り出し、頸部が段状にくびれて口縁部が弱く外反する。外面縦位ケズリ、内面横位ユビナデ調整である。187図３・４は土師器甕の口縁部破片で、どちらも胴上部が内傾する器形で、口縁部は３が外反、４が外折する。どちらも外面縦・斜位ケズリ、内面横位ヘラナデ調整である。

187図５は上面から見た形状がほぼ六角形になる土製容器で、底部から直立して立ち上がる。内外面共に粗雑なユビナデ調整である。

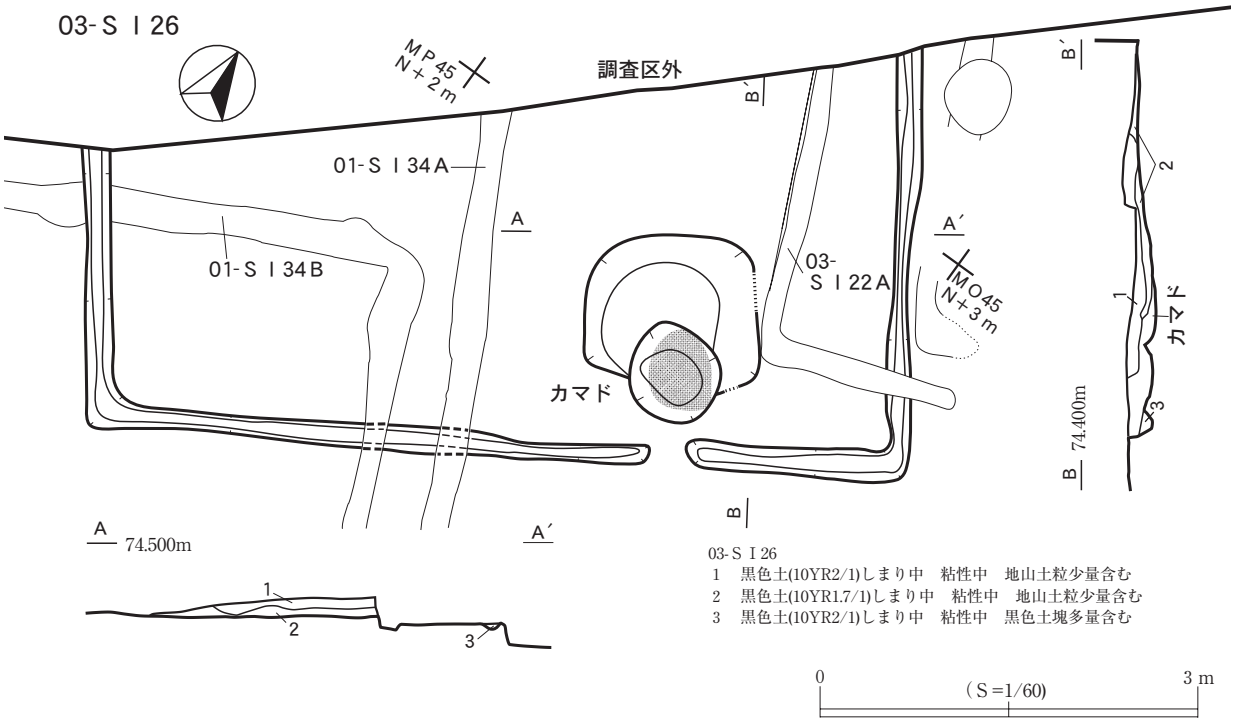
03-ＳＩ102(第188図～191図、図版57・58・155・158・160)

遺　構　ＬＴ41～43、ＭＡ41～44、ＭＢ41～43グリッドの第Ⅳ層中位～第Ⅵ層上面で、黒色土の広がりで確認した。本住居跡の立地点は台地上部平坦面の南東縁に近く、緩やかに東側へ傾斜する。03-ＳＩ103と重複し、本住居跡の方が新しい。周辺には、02-ＳＩ05・07～09、03-ＳＩ06・104～106・203～208がある。

堆積土は４層に分けた。４層は貼床、２・３層が壁溝内堆積土で２層が壁板腐植土層、３層が裏込めとみられる。これ以外の住居内全体を１層が覆っており、地山土塊を含むことから、人為的な埋め戻しにより埋没したと考えられる。

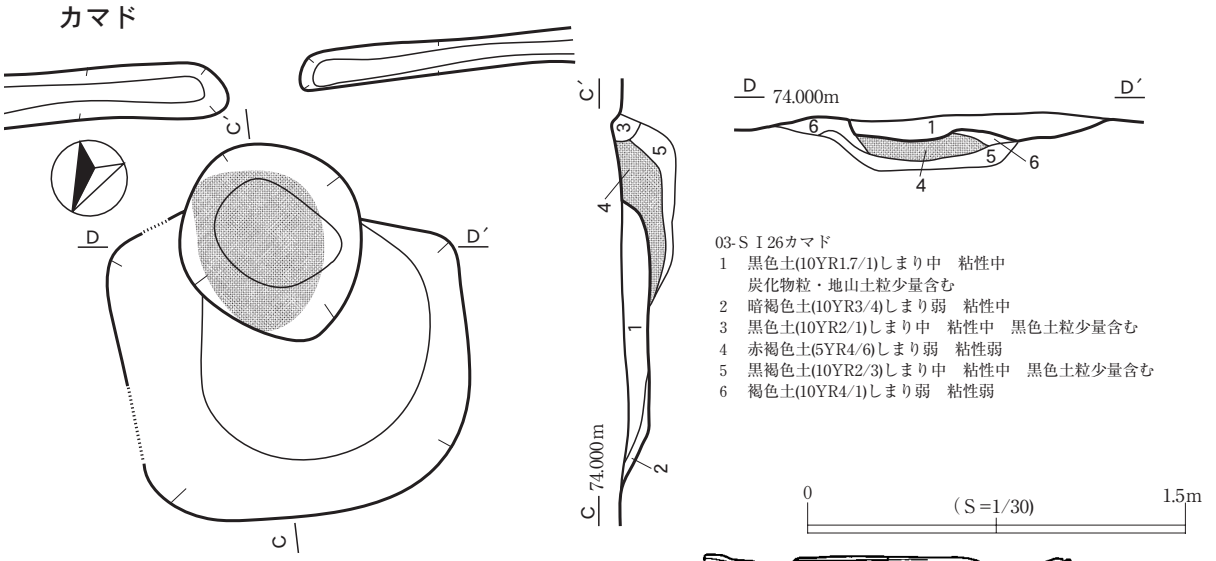
平面形はわずかに北東－南西方向に長い長方形で、カマドの付く壁に直交する主軸方位はＮ－29°－Ｗである。主軸とそれに直交するラインで測る住居面積は約76㎡で、超大形の住居である。各壁の長さは北東壁約8.8m、南東壁約8.8m、南西壁約8.7m、北西壁約8.7mである。壁の検出面からの深さは、上面がやや削平されていることもあり概ね0.15m前後で、ほぼ垂直に立ち上がる。南西壁の南隅付近には張り出しが付く。２本の溝と中央部の１個のピットで構成され、住居壁直交方向で約1.4m、住居壁平行方向で約2.0mである。出入り口施設の痕跡とみられる。

床面は基本的に貼床を施すが範囲は疎らで、ほとんど掘形底面の地山上面レベルと同じところが多い。壁溝はカマド以外の全周で確認した。上場幅0.2～0.3m、下場幅0.05～0.15m、床面からの深さ0.2～0.4mの断面台形状である。床面で４個のピットを確認した。Ｐ１～４は住居隅より内側に配置する主柱穴である。柱穴中心で測る柱穴間の距離は、Ｐ１－２間約5.2m、Ｐ３－４間約5.1m、Ｐ１－３



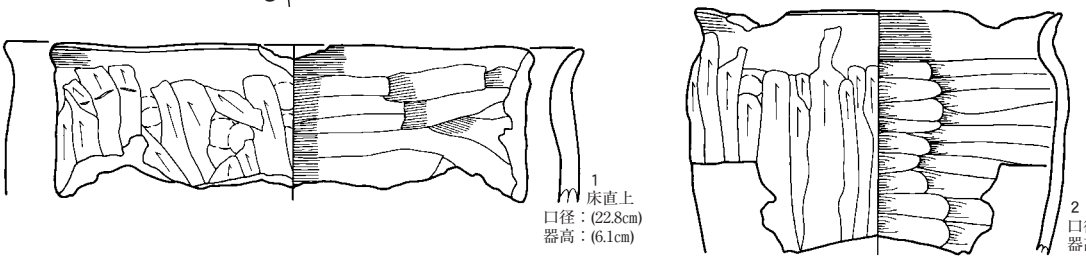
03-ＳＩ26
1　黒色土(10YR2/1)しまり中　粘性中　地山土粒少量含む
2　黒色土(10YR1.7/1)しまり中　粘性中　地山土粒少量含む
3　黒色土(10YR2/1)しまり中　粘性中　黒色土塊多量含む

0　(S=1/60)　3m



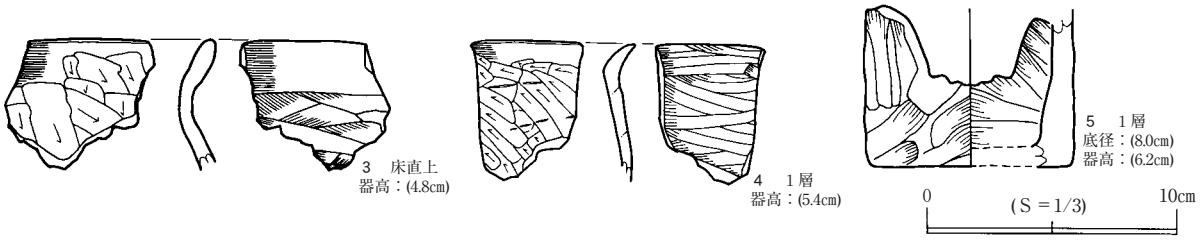
03-ＳＩ26カマド
1　黒色土(10YR1.7/1)しまり中　粘性中
　炭化物粒・地山土粒少量含む
2　暗褐色土(10YR3/4)しまり弱　粘性中
3　黒色土(10YR2/1)しまり中　粘性中　黒色土粒少量含む
4　赤褐色土(5YR4/6)しまり弱　粘性弱
5　黒褐色土(10YR2/3)しまり中　粘性中　黒色土粒少量含む
6　褐色土(10YR4/1)しまり弱　粘性弱

0　(S=1/30)　1.5m



1　床直上
口径：(22.8cm)
器高：(6.1cm)

2　1層
口径：(14.6cm)
器高：(9.5cm)



3　床直上
器高：(4.8cm)

4　1層
器高：(5.4cm)

5　1層
底径：(8.0cm)
器高：(6.2cm)

0　(S=1/3)　10cm

第187図　03-ＳＩ26カマド・出土遺物

間約5.2m、Ｐ２－４間約4.6mである。Ｐ４の位置がカマド前庭部に規制されるため、やや住居中央寄りに配置してある。

カマドは南東壁中央から北東寄りの位置で、白色粘土の広がりで確認した。上部の削平により煙道部は失われている。堆積土は６層に分かれるが、基本的に崩落した構築土と周囲からの流入土の互層である。確認できた施設は、煙道の一部、火床面、カマド基底部から前庭部にかけての浅い掘り込みである。粘土分布範囲から前庭部末端まで約2.1m、粘土分布範囲の最大幅が約1.1mである。煙道部は遺存状態が悪いが、白色粘土の構築材が壁溝外へほぼ平坦に約0.3m延びる。前庭部は、深さ約0.05m前後の不整な台形状の掘り込みで、その奥壁寄りの位置に火床面が位置する。火床面は不整な楕円形状の被熱範囲で、長径約0.6m、短径約0.45mである。

住居南隅にカマドとは別な焼土がある。外径約0.6m、内径約0.3mの円形状に砂を多く含む粘土をドーナツ状に巡らして構築する炉跡で、構築土は熱を受け赤変していた。周辺を含めて埋土が削られて床面が直接露出していたため、鍛造剥片や砂鉄を検出することが出来なかったが、炉跡の構築・成形が丁寧であることから、鍛冶炉として機能した可能性が高い。

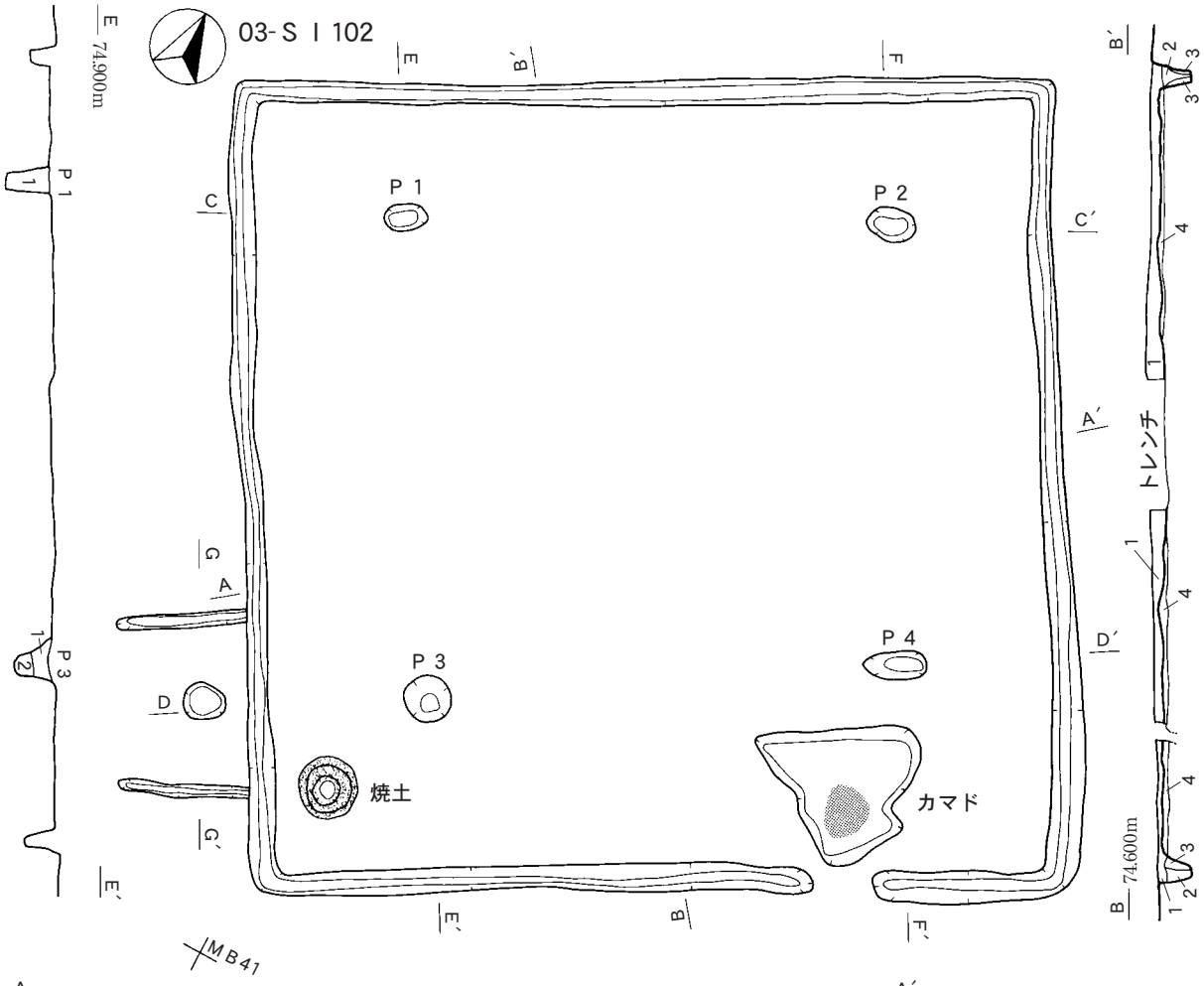
本住居跡は４本の主柱をもち、南東壁にカマドを設置する住居で、住居内に鍛冶炉を伴うと想定される。廃絶後は人為的に埋め戻したと考えられる。

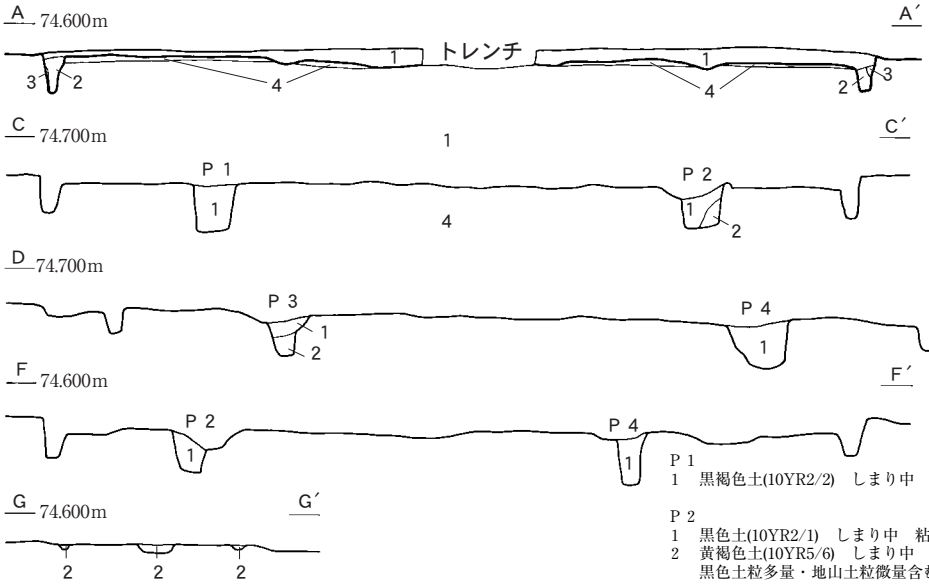
遺　物(第191図)　住居跡内から土師器甕・坏、鉄製品が出土した。土師器甕は口縁部が20点、底部が10点出土しており、そのうち比較的大型の破片を口縁部資料６点、底部資料５点図示した。なお図示しなかったものを含めた甕の口縁部分類別数量はＡ類(２点)、Ｂ類(１点)、Ｃ類(14点)、Ｄ類(２点)、分類不能(１点)で、底部分類別数量は砂底(６点)、木葉痕(１点)、ケズリ(１点)、回転糸切(２点)の内訳になる。遺物は住居内から満遍なく出土している(第190図)。

191図１・２は比較的中・大型の土師器甕である。１は胴部が直立気味に立ち上がり、口縁部が外反する。２は口縁部まで直線的に外傾する。１は外面横位ユビナデ、内面横位ヘラナデ調整、２は外面縦位ケズリ、内面横位ヘラナデ調整である。191図３～５は比較的小型の土師器甕である。いずれも頸部にかけて内傾して立ち上がり、口縁部が短く外反する器形である。３は全体形が分かるもので、底面は砂底で、胴下部に最大径を有する。外面調整はいずれも胴上半部にユビナデをとどめ、胴下部にケズリを施す。内面も全て横位ヘラナデ調整である。191図６は土師器甕の口縁部破片で、強く外反する器形である。

191図７～10は土師器甕の底部である。７はロクロ目を残すもので、底面は回転糸切痕をとどめるが、部分的にケズリ再調整を施す。８・９は砂底で、10はケズリ再調整を施す。底部からの立ち上がり形状は、７がやや突出する以外はいずれも直線的に外傾する。

191図11～14は土師器坏で、11がＡ類、12～14がＢ類である。11は約1/3が残存する資料で、底部から口縁部まで内湾気味に立ち上がる器形である。口唇は先細り状になる。他のＡ類資料に比べ比較的底径が広く、器高が低い。底部の回転糸切痕は筋幅がかなり広いが、凹凸はあまり目立たたず、内外面共にロクロ目の凹凸を工具によるナデで消している。器壁は比較的厚手だが、丁寧に仕上げており、外面の色調でもＢ類に比較的近い仕上げになっている。12は約1/2が残存する資料で、底部がやや突出して胴下部が膨んで外傾して立ち上がり、口縁部が弱く外反する器形である。口唇は先細り状になる。底部の回転糸切痕は筋幅がかなり広いが、凹凸はあまり目立たない。外面のロクロ目は間隔が狭





03-ＳＩ102
1　黒色土(10YR2/1)　しまり中　粘性中
　軽石・地山土粒少量含む
2　黒色土(10YR2/1)　しまり中　粘性中　軽石・地山土粒微量含む
3　黄褐色土(10YR5/6)　しまり中　粘性中　黒色土少量含む
4　黒色土(10YR2/1)　しまり中　粘性中　黄褐色土少量含む

P 1
1　黒褐色土(10YR2/2)　しまり中　粘性中　軽石・地山土粒微量含む

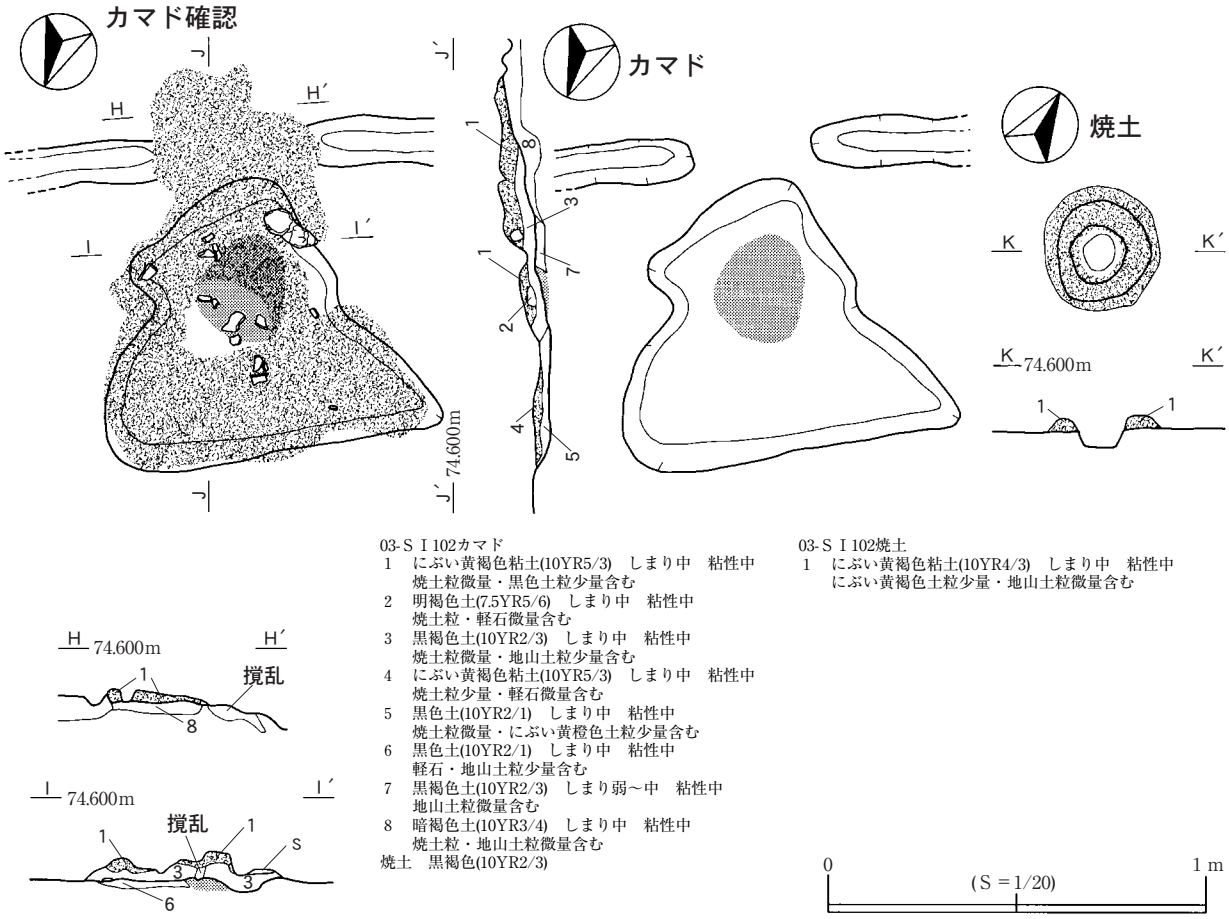
P 2
1　黒色土(10YR2/1)　しまり中　粘性中　軽石少量含む
2　黄褐色土(10YR5/6)　しまり中　粘性中
　黒色土粒多量・地山土粒微量含む

P 3
1　黒色土(0YR2/1)　しまり中　粘性中　軽石・地山土粒微量含む
2　黒褐色土(10YR2/2)　しまり弱～中　粘性中
　地山土塊多量含む

P 4
1　黒色土(10YR2/1)　しまり中　粘性中　軽石・地山土粒微量含む

0　(S＝1/80)　4m

第188図　03-ＳＩ102



第189図　03-ＳＩ102カマド・焼土

くて凹凸が少ない。内面のミガキは、底部が交差状に、胴部から口縁部は横位に施している。13の口縁部形状も12に類似するが、内面のミガキでは、胴上部まで放射状ミガキをとどめる。14は底部で、回転糸切痕を残しやや突出する形状である。

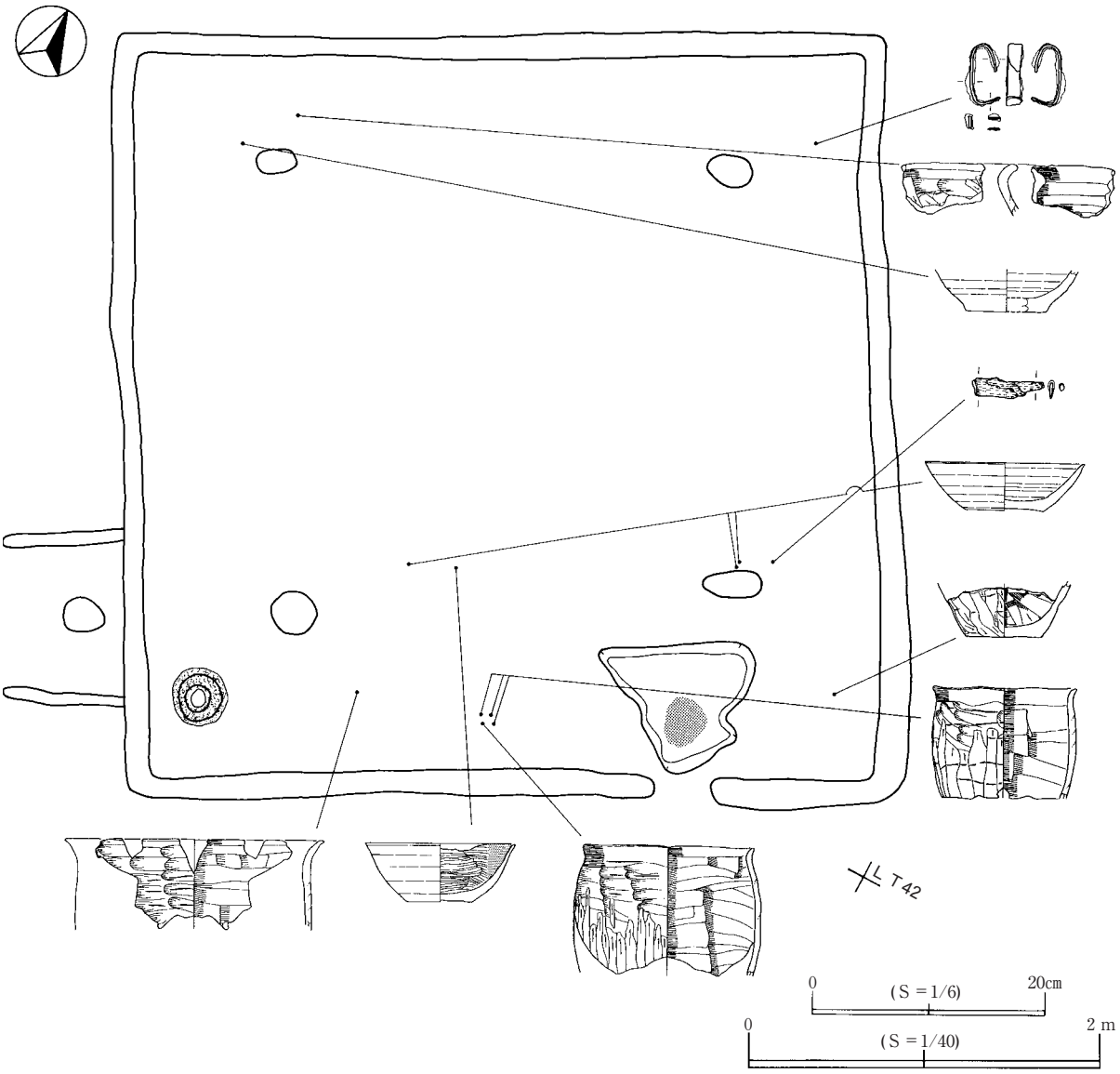
191図15・16は鉄製品である。15は鞘金具と考えられ、環状の一部が欠損している。16は刀子の刀身と茎の付け根が残る資料で、鞘と柄とみられる木質が残存する。

03-ＳＩ103(第192図～198図、図版59・60・148・152・154・156・158・160・162)

遺　構　ＭＢ41・42、ＭＣ41～43、ＭＤ41・42グリッドの第Ⅳ層中位～第Ⅵ層上面で、地山土粒を含む黒色土の広がりで確認した。本住居跡の立地点は台地上部平坦面だが、台地南東縁に近く緩やかに南東側へ傾斜する。03-ＳＩ102と重複し、本住居跡の方が古い。周辺には02-ＳＩ05・07～09、03-ＳＩ06・204～208がある。

堆積土は５層に分けた。１～３層はレンズ状堆積であるが、いずれも地山土粒を含む黒色基調の土であることや、03-ＳＩ102の重複からみて、人為的な埋め立てに伴う堆積土と推定される。４・５層は壁溝内堆積土である。

平面形は北西－南東方向にやや長い長方形状で、カマドの付く壁に直交する主軸方位はＮ－38°－Ｗである。主軸とそれに直交するラインで測る住居面積は約31㎡で、大形の住居である。壁の延長線による推測を交えて測る各壁の長さは、北東壁約5.5m、南東壁約5.5m、南西壁約5.7m、北西壁約5.6

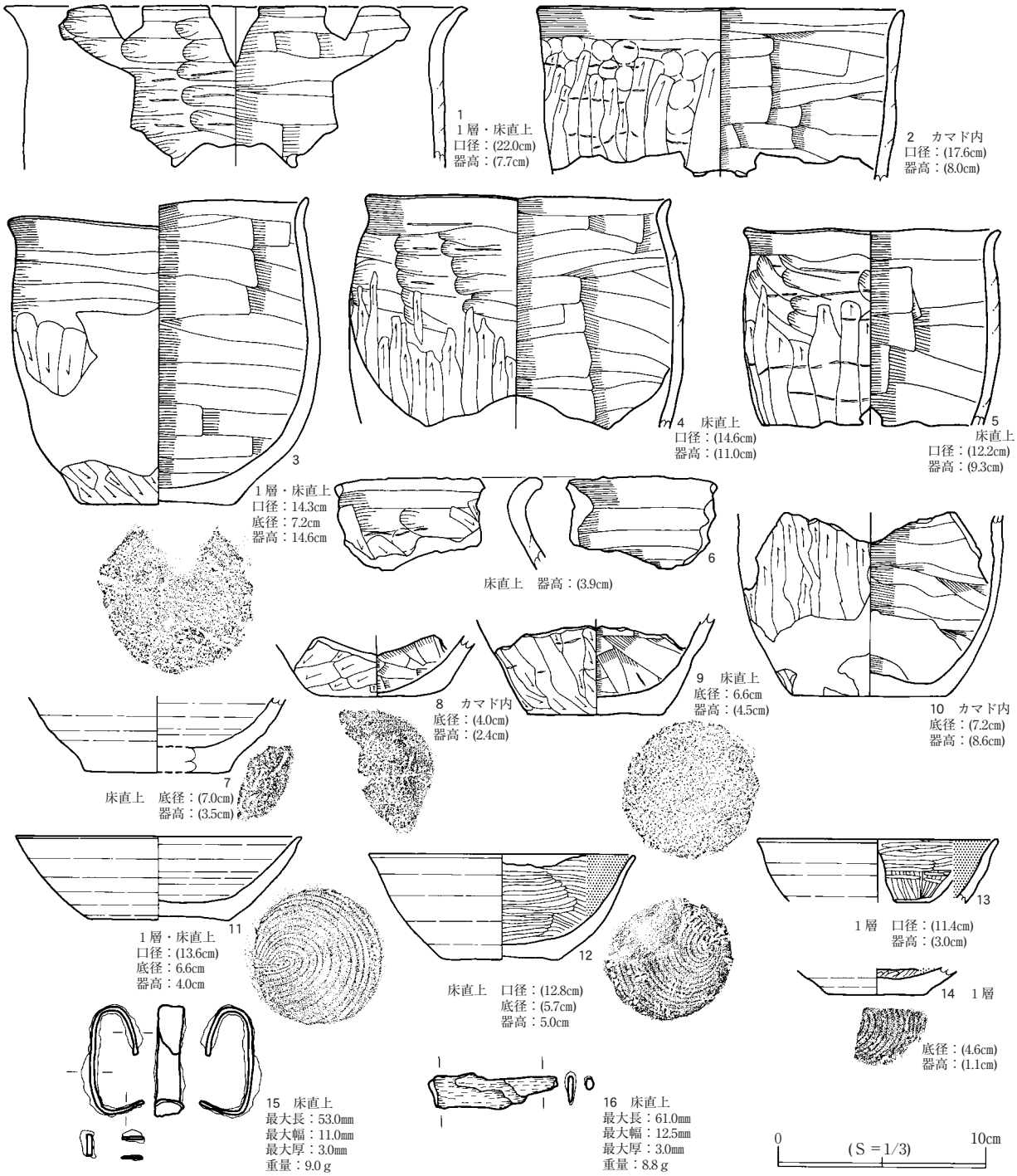


第190図　03-ＳＩ102遺物出土状況

ｍである。壁の検出面からの深さは、斜面上位の北西壁で約0.2ｍ、斜面下位の南東壁で約0.1ｍで、ほぼ垂直に立ち上がる。

床面は全面掘形底面の地山上面を基底面としている。壁溝はカマド以外の全周で確認した。上場幅0.15～0.4m、下場幅0.04～0.24m、床面からの深さ0.1～0.15m前後の断面台形状である。床面で本住居跡に伴うとみられる７個のピットを確認した。Ｐ１～４は主柱穴で、Ｐ１・２が住居壁から離れた位置に、Ｐ３・４が南東壁に接した位置にあり、４本で方形状の配置になる。柱穴中心で測る柱穴間の距離は、Ｐ１－２間約2.9m、Ｐ３－４間約3.1m、Ｐ１－４間約4.1m、Ｐ２－３間約4.0mである。Ｐ５は北西壁中央部付近にあり、内部に土器片を置いてその上に角礫を立てている。住居廃絶時の儀礼的行為の痕跡とみられる。Ｐ７はカマド脇の住居東隅にあり、カマドに付属する貯蔵穴の可能性もあるが、他の住居にはみられないため断言はできない。なお、住居北・南・西隅には壁溝へ向けて降るスロープ状の掘り込みがある。隅柱に関わる痕跡と考えられる。

カマドは南東壁の中央から北東寄りの位置で、粘土混ざりの堆積土の広がりで確認した。堆積土は



第191図　03-ＳＩ102出土遺物

21層に分かれるが、ほとんどが構築土と周囲からの流入土の混合層である。上部構造の残存はなく、カマド基底部の掘り込みと前庭部のみ確認した。住居壁から前庭部末端までの距離約2.0m、前庭部の最大幅約2.7mである。前庭部は、想定されるカマド本体前面よりも南西方向に広がる。

本住居跡は４本の主柱をもち、南東壁にカマドを設置する住居である。廃絶時にはカマドの上部構造を完全に破壊し、また北西壁中央部に穴を掘って、意図的に土器片の埋設と立石を施している。最終的には03-ＳＩ102の構築に合わせ、埋め戻したとみられる。

遺　物(第196図～198図)　住居跡内から土師器甕・坏・碗、須恵器甕が出土した。土師器甕は口縁部が20点、底部が16点出土しており、そのうち比較的大型の破片を口縁部資料10点、底部資料10点図示し

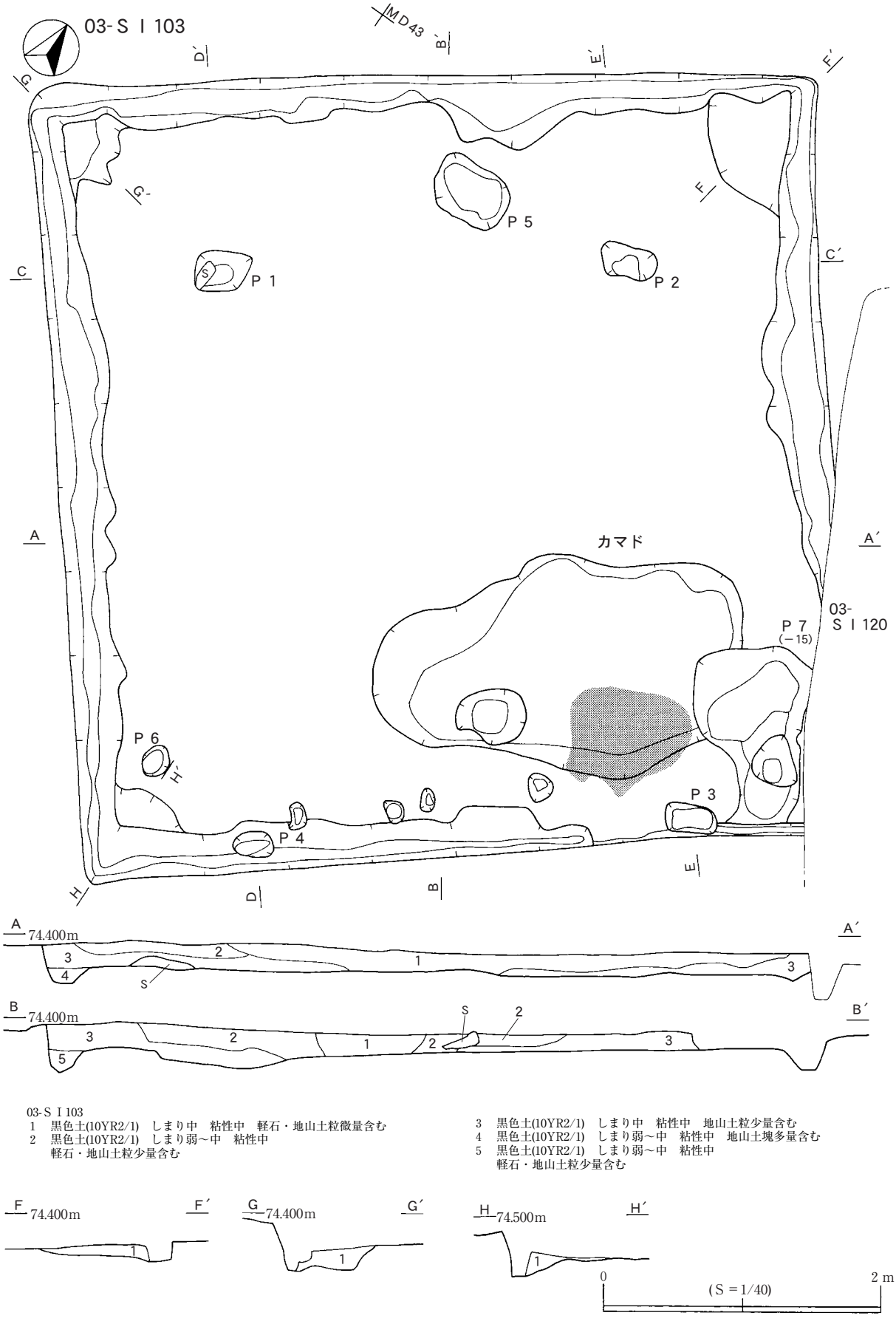
た。なお図示しなかったものを含めた甕の口縁部分類別数量はＡ類(４点)、Ｂ類(２点)、Ｃ類(９点)、Ｄ類(１点)、その他(１点)、分類不能(１点)で、底部分類別数量は砂底(３点)、木葉痕(５点)、ケズリ(７点)、静止糸切(１点)の内訳になる。Ａ・Ｂ類の占める比率が高いのに伴い、木葉痕やケズリの比率も高くなる。遺物はカマド付近に集中し(第194図)、柱穴内からの出土も認められる(第195図)。

196図１～６は比較的中・大型の土師器甕である。２・３・６はロクロ目をとどめる資料である。２は全体形を窺える資料で、底部から外傾して立ち上がり、胴部中位から頸部にかけては直立し、口縁部が外反して、口唇をつまみ出して直立させる。口縁部側面は曲面的に仕上げる。外面の胴下端部や底面にはケズリ再調整を、内面には縦・横位のユビナデによる再調整を施す。３・６は胴上部が内傾し、頸部でくびれて口縁部が外反する器形で、口縁部側面の仕上げは、３が曲面的で、６は斜位の面を形成する。３は外面に縦位ケズリ、内面に縦位ユビナデによる再調整を施す。１・４は胴上部が内傾して口縁部が長く外反する器形で、どちらも器壁が薄い作りである。１は全体形状が窺え、口径との差が少ない底部から外傾して胴部中位が張り出し、頸部にかけて内傾する。外面は縦位ケズリと、底部付近に横位に再度ケズリを施し、内面は縦位ユビナデ調整である。４は外面縦位ユビナデ後縦位ケズリ、内面は縦位ヘラナデ調整である。５は胴上部に最大径をもち、頸部で弱くくびれて口縁部が直立気味に外反する器形である。口縁部内面は長く内削ぎ状になる。外面の胴上半部は広く指の押さえにとどめ、下部に縦位ケズリ、内面は横・斜位のヘラナデ調整である。５は１・４と同様に比較的器壁が薄いが、３は厚手の作りである。

197図１～４は比較的小型の土師器甕である。１はロクロ目を残す資料で、５の底部と同一個体になる可能性がある。胴部から頸部にかけて直立気味に立ち上がり、口縁部が外反する。内面には横・斜位のユビナデを施す。２は全体形が窺える資料で、広めの底部から胴部が張り出すように内湾して立ち上がり、頸部でくびれて口縁部が弱く外反する器形である。外面縦位ケズリ、内面縦位ユビナデ調整である。なお、底面にもケズリを施す。口縁部形態は４も同じだが、４は内外面とも横位ユビナデ調整である。３は底部から直立気味に外傾して、口縁部がわずかに外反する器形で、比較的厚手である。外面縦位ケズリ、内面縦位ユビナデ調整である。

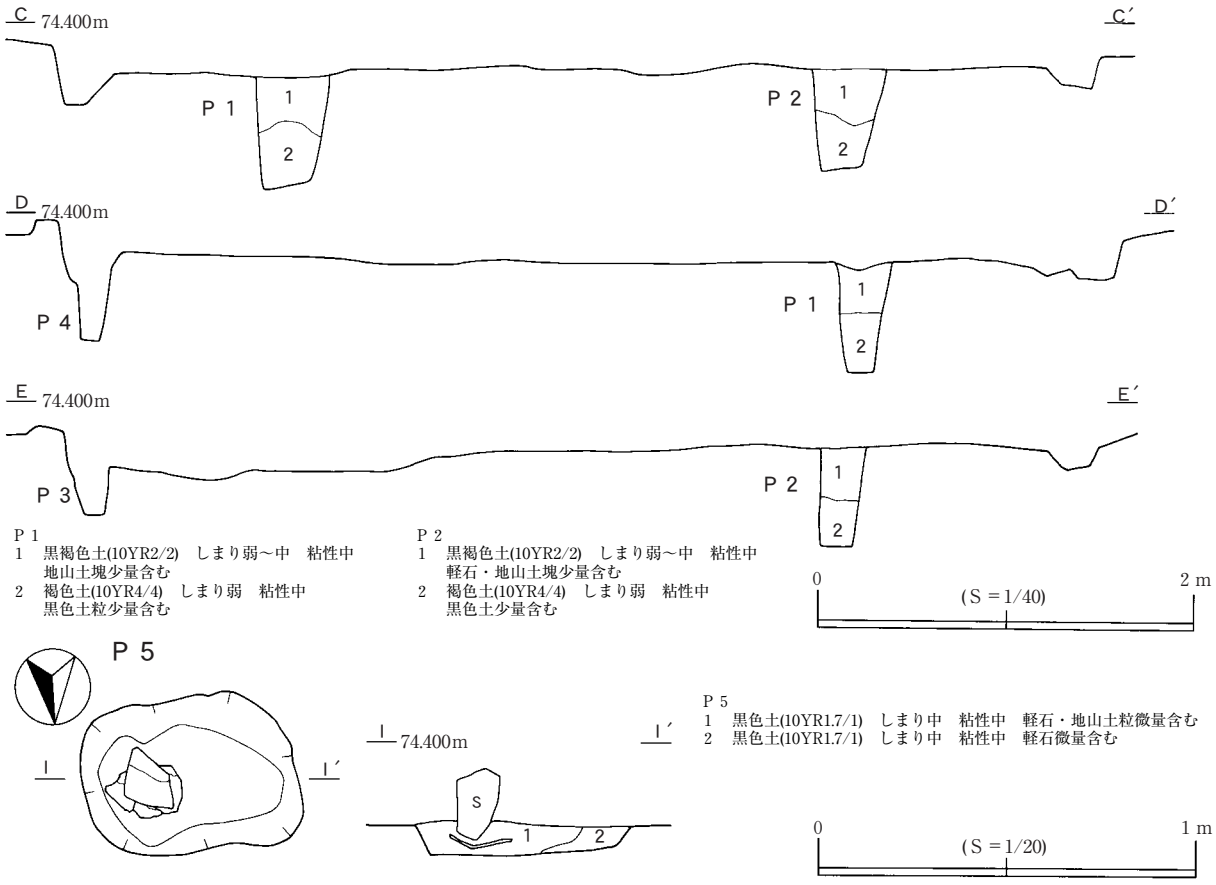
197図５～10は土師器甕の底部である。５は内外面にロクロ目を、底面には静止糸切痕を残す。６は木葉痕をとどめ、７～９はケズリによる再調整を施し、10は砂底である。底部の立ち上がり形状は６がわずかに直立し、８・10が直線的に外傾し、７・９が張り出す。外面調整では８・10が底部付近で斜位のケズリになるのに対し、７・９はケズリの下端まで縦位である。

197図11～19は土師器坏で、11～13・17～19がＡ類、14がＢ類、15・16がＤ類である。11はほぼ完形の資料で、底部がやや突出し、胴下部でわずかにくびれて、口縁部まで内湾気味に立ち上がる器形である。口唇は先細り状だが、わずかに上面を面取りしている。底部は回転糸切後に簾状の敷物に置いた痕跡が認められる。外面のロクロ目は間隔が開きやや凹凸が目立つが、内面は平滑に調整している。器壁は胴下部では厚いが、口縁部にかけて薄く作っている。また焼き締めが良く、弾くと金属音がする。Ａ類の中でも比較的作りの良いものである。13も口縁部が内湾気味の器形で、11に比べるとやや薄手の作りである。12は口縁部が外反する器形で、外面ロクロ目の間隔が狭く、緻密に器面調整を行っている。14は約1/2が残存する資料で、底部が突出し、胴下部でくびれて内湾気味に立ち上がり、口縁部が外反する器形である。底部はケズリによる再調整を施すが、仕上げが悪く凹凸をもつ。



03-ＳＩ103
1　黒色土(10YR2/1)　しまり中　粘性中　軽石・地山土粒微量含む
2　黒色土(10YR2/1)　しまり弱～中　粘性中
　軽石・地山土粒少量含む
3　黒色土(10YR2/1)　しまり中　粘性中　地山土粒少量含む
4　黒色土(10YR2/1)　しまり弱～中　粘性中　地山土塊多量含む
5　黒色土(10YR2/1)　しまり弱～中　粘性中
　軽石・地山土粒少量含む

第192図　03-ＳＩ103



第193図　03-ＳＩ103柱穴・土坑

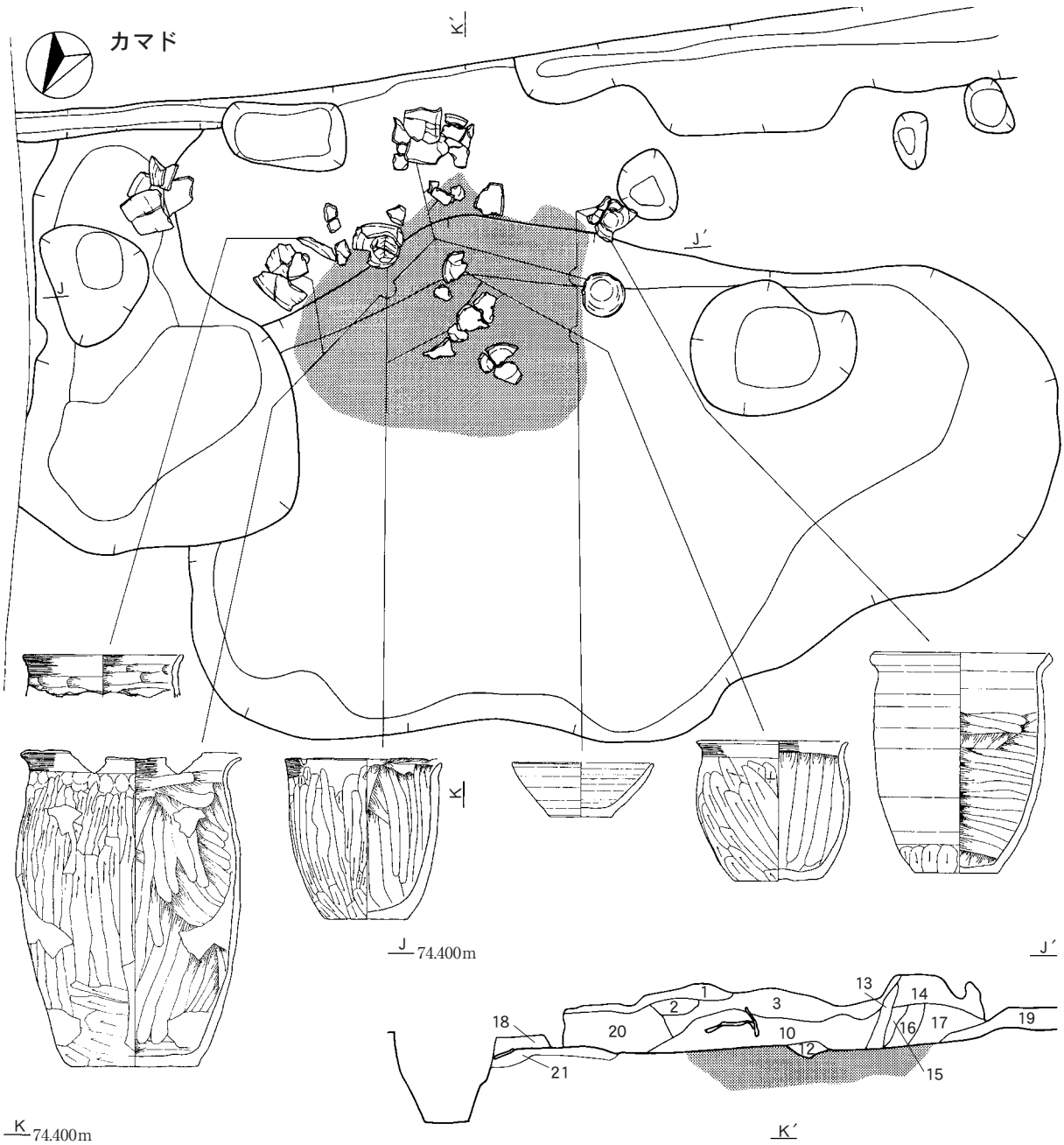
外面のロクロ目も間隔が開き、やや凹凸が深い。内面のミガキは、底部から胴上半部まで放射状に、口縁部付近が横位に施している。器外面の調整に対し、内面は極めて丁寧な作りである。15は約1/3が残存する資料で、底部から口縁部まで内湾気味に立ち上がる。底部は砂底で縁辺部にケズリを施している。外面は全面横・斜位のケズリ、内面は斜位のユビナデ調整で、いずれも雑な仕上げである。胎土や焼成具合も土師器甕に近く、Ａ類の模倣品と考えられる。なお、器形では11に類似する部分があり、これをモデルに作成した可能性もある。16はこれとほぼ同様な作りで、口唇はやや丸く作っている。17～19は底部で、17・18は底部が突出し、19は直線的に外傾して立ち上がる。

197図20は浅めの土師器碗で、非ロクロ整形である。外面は底部付近に斜位ケズリを施した後、胴部に横位ケズリを施す。内面は横位ヘラナデ調整である。198図１は須恵器甕の胴部破片で、外面にはタタキ目が認められる。

03-ＳＩ104

本住居跡は、ＭＢ・ＭＣ46・47グリッドの第Ⅳ層中位で、地山土塊を含む黒色土の分布範囲で確認した住居跡である。本住居跡の立地点は台地上部平坦面だが、台地南東縁に近く緩やかに東へ傾斜する。03-ＳＩ105・106と重複し、いずれよりも本住居跡が新しい。周辺には、02-ＳＩ05・24、03-ＳＩ12・13・102・103・224・316がある。

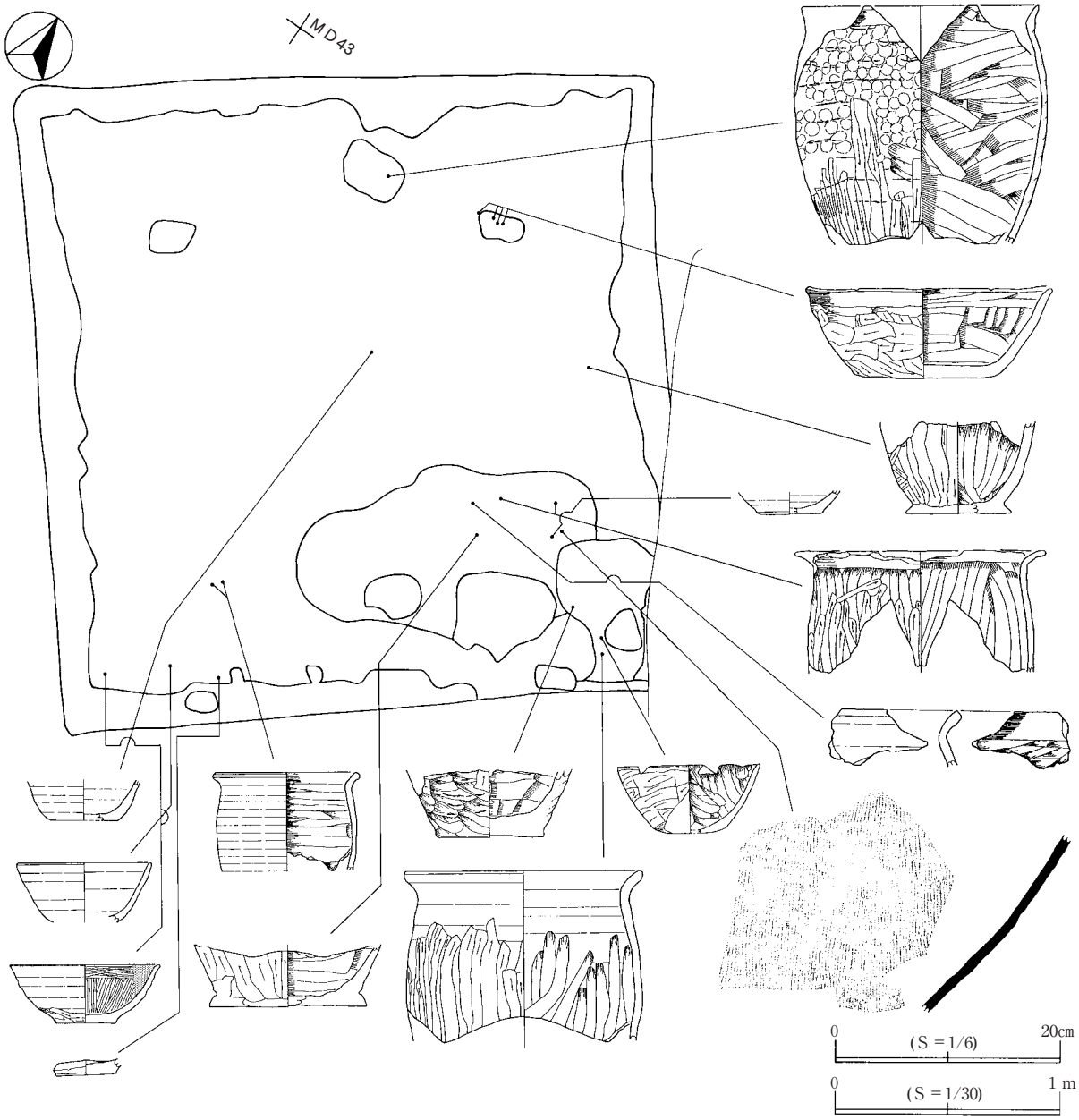
断面確認や床面精査から２軒の住居が重なることが判明したので、新しい順にＡ・Ｂのアルファベットを付けて表記した。



03-ＳＩ103カマド
1　黒色土(10YR2/1)
　しまり中　粘性中
　焼土粒・軽石微量・褐色土粒少量含む
2　褐色土(7.5YR4/4)
　しまり弱～中　粘性中
　黒色土粒少量含む
3　黒色土(10YR2/1)
　しまり中　粘性中
　焼土粒・軽石微量・にぶい黄褐色土粒少量含む
4　褐色土(7.5YR4/4)
　しまり中　粘性中
　焼土粒少量・黒褐色土粒少量含む
5　明褐色土(7.5YR5/6)　しまり中　粘性中
6　暗褐色土(7.5YR3/3)　しまり中　粘性中
7　黒色土(10YR2/1)　しまり中　粘性中
　軽石微量・地山土粒少量含む
8　黒色土(10YR2/1)　しまり中　粘性中
　焼土粒・地山土粒微量・暗褐色土粒少量含む
9　黒色土(10YR2/1)　しまり中　粘性中
　軽石微量・地山土粒少量含む
10　褐色土(7.5YR4/3)　しまり中　粘性中
　焼土粒微量・黒色土粒少量含む
11　黒褐色土(7.5YR3/2)　しまり中　粘性中
　焼土粒微量・褐色土粒少量含む
12　にぶい黄橙色土(10YR7/2)　しまり弱　粘性弱
13　明褐色土(7.5YR5/6)　しまり中　粘性中
14　黒色土(10YR2/1)　しまり中　粘性中
　軽石微量・褐色土粒少量含む
15　褐色土(7.5YR4/3)　しまり中　粘性中
　黒色土微量含む
16　にぶい黄褐色土(10YR5/4)　しまり中　粘性中
　焼土粒微量・褐色土粒少量含む
17　黒褐色土(10YR2/2)　しまり中　粘性中
　地山土粒少量含む
18　にぶい黄褐色土(10YR5/4)
　しまり中　粘性中
　焼土粒微量・褐色土粒少量含む
19　黒色土(10YR2/1)　しまり弱～中　粘性中
　地山土塊多量含む
20　にぶい黄橙色土(10YR5/4)　しまり中　粘性中
　焼土粒微量・褐色土粒少量含む
21　黒色土(10YR2/1)　しまり弱～中　粘性中
　地山土塊多量含む
焼土　明赤褐色(5 YR5/6)

0　20cm
(Ｓ＝1/6)
0　1 m
(Ｓ＝1/20)

第194図　03-ＳＩ103カマド・遺物出土状況



第195図　03-ＳＩ103遺物出土状況

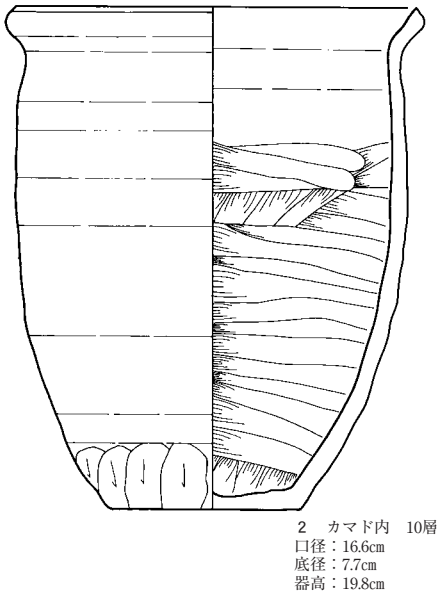
03-ＳＩ104Ａ(第199図～201図、図版61)

遺　構　03-ＳＩ104Ｂよりも規模を縮小した新段階の住居である。堆積土は５層に分けたが、１層が広範囲に渡って堆積することから、人為的な埋め戻しと考えられる。３～５層は壁溝内堆積土である。

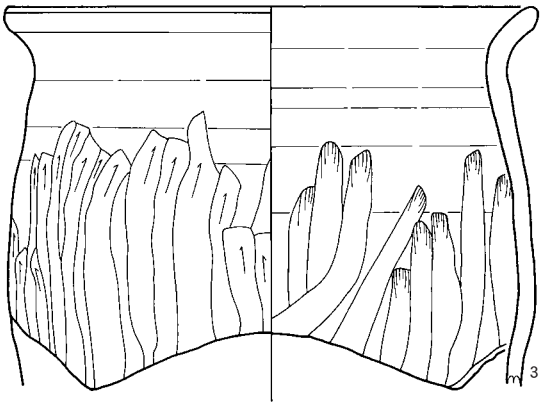
平面形は北東壁がわずかに長い台形で、カマドの付く壁に直交する主軸方位はＮ－17°－Ｗである。主軸とそれに直交するラインで測る住居面積は約25㎡で、大形の住居である。各壁の長さは、北東壁約5.1m、南東壁約4.8m、南西壁約4.9m、北西壁約4.8mである。各壁の検出面からの深さは0.2m前後で、立ち上がりはほぼ垂直である。

床面は基本的に掘形底面の地山面を利用している。壁溝は北隅と西隅で一部途切れるが、これ以外は全周で確認した。上場幅0.1～0.3m、下場幅0.02～0.15m、床面からの深さ0.15～0.3mである。床面及び壁溝内で３個のピットを確認した。Ｐ１～３は住居隅に配置する主柱穴とみられるが、これに対

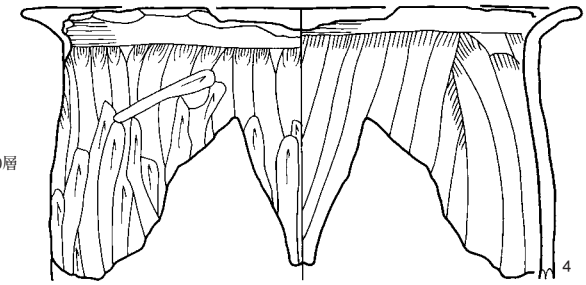
1　カマド内　10層
口径：20.0cm
底径：11.5cm
器高：28.3cm



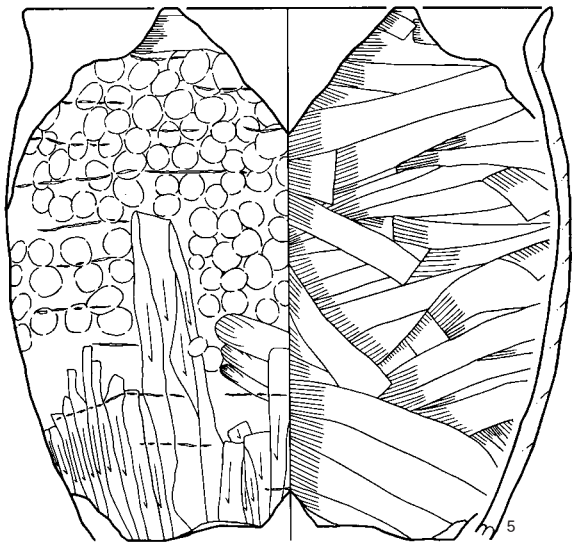
2　カマド内　10層
口径：16.6cm
底径：7.7cm
器高：19.8cm



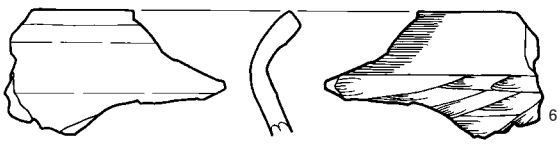
床直上　口径：(21.2cm)
器高：(15.0cm)



床直上　口径：(22.2cm)
器高：(10.7cm)



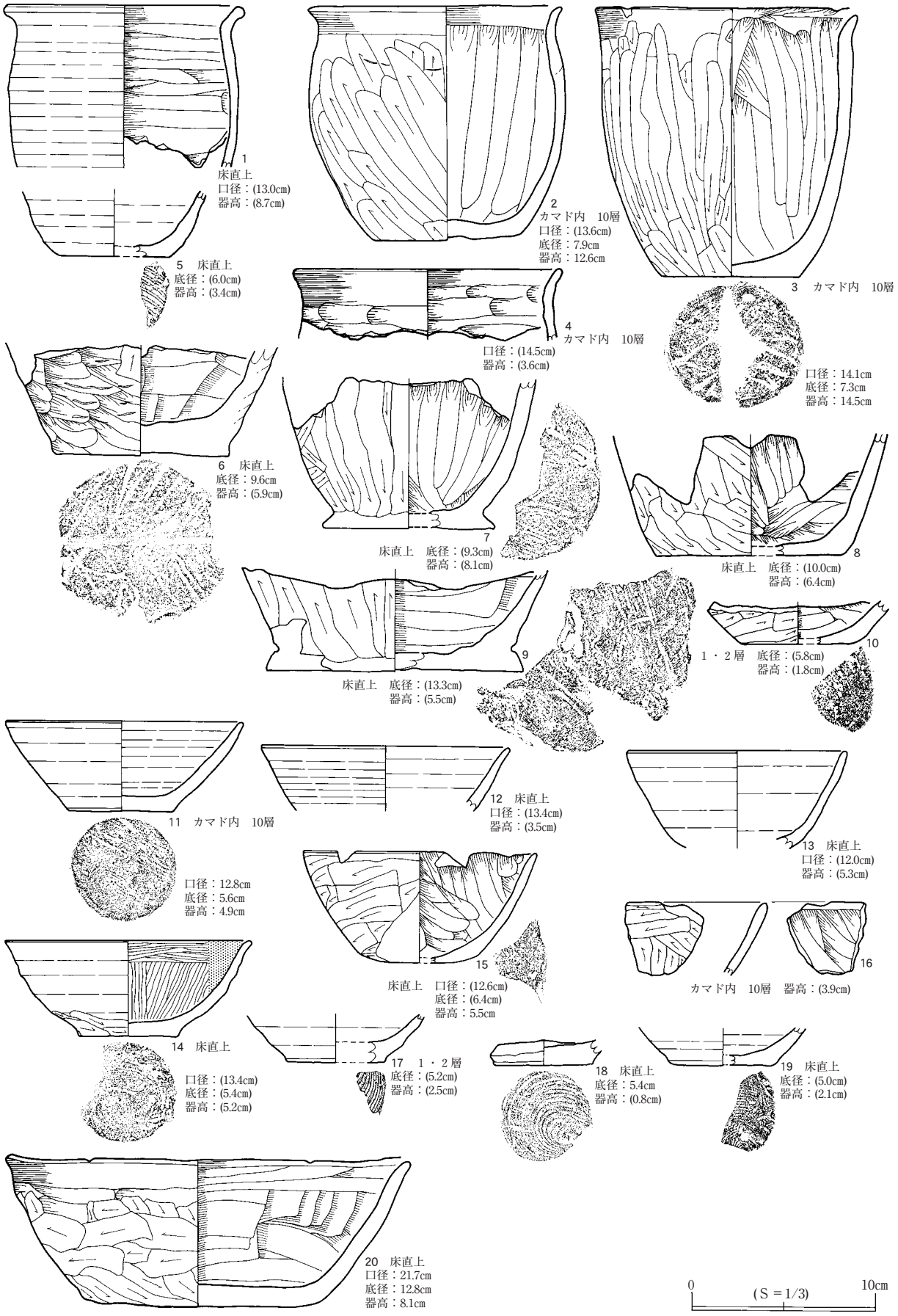
床直上　口径：(21.0cm)
器高：(21.0cm)



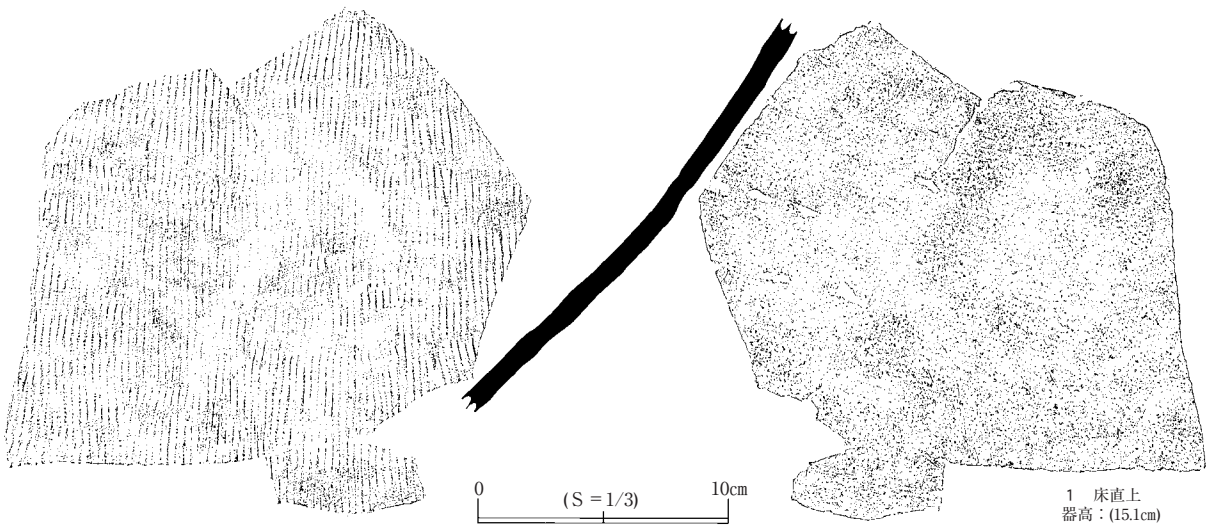
床直上　器高：(4.9cm)

0　(S＝1/3)　10cm

第196図　03-ＳＩ103出土遺物１



第197図　03-ＳＩ103出土遺物２



第198図　03-ＳＩ103出土遺物３

応する東隅と西隅が明確でない。

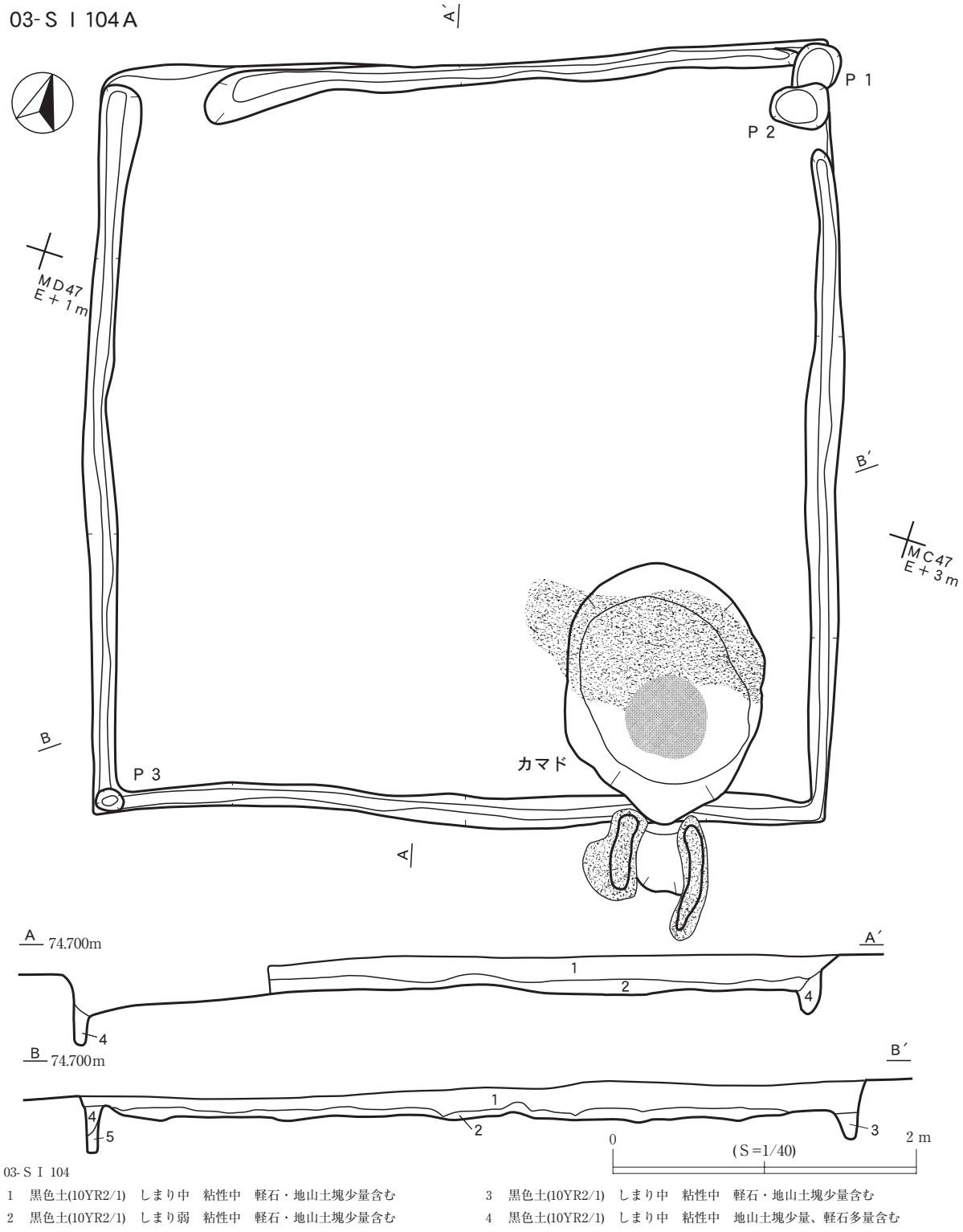
カマドは南東壁の中央から北東寄りの位置で、上部構造の崩落とみられる粘土を含む堆積土の分布で確認した。上部構造の大部分は破壊してあり、確認できたのは煙道、火床面、前庭部である。堆積土は８層に分けられ、１～３層は上部構造材の倒壊土を含む堆積土で、４層が上部構造の残存、５・６・７層はカマド基底部の造成土で、８層は６・７層被熱範囲である。煙道部先端から前庭部末端まで約2.2ｍ、前庭部最大幅約1.0ｍである。煙道はスロープ状掘り込みの両脇に、袖から連なる粘土の高まりを平行して配置する。前庭部はカマド基底部の掘形と一体となる楕円形の掘り込みで、その奥壁寄りに火床面が位置する。火床面は、径約0.45ｍの不規則な円形状の被熱範囲である。

本住居跡は四隅に主柱をもち、南東壁にカマドを設置する住居である。廃絶後は人為的に埋め立てており、周囲が居住地から別な機能をもつ地区に変化した可能性がある。

遺　物(第201図)　住居跡内から土師器甕・坏、鉄製品が出土した。土師器甕は口縁部が25点、底部が13点出土しており、そのうち比較的大型の破片を口縁部資料６点、底部資料１点図示した。なお図示しなかったものを含めた甕の口縁部分類別数量はＡ類(０点)、Ｂ類(１点)、Ｃ類(７点)、Ｄ類(11点)、その他(１点)、分類不能(５点)で、底部分類別数量は砂底(９点)、木葉痕(１点)、ケズリ(２点)、回転糸切(１点)の内訳になる。明らかにＤ類の比率が高く、底部でも砂底が多い。なお、本住居跡は03-ＳＩ105・106を掘り込んでおり、比較的古相を示すものは、それらに含まれるものを巻き上げている可能性がある。

201図１・２・５は比較的中・大型の土師器甕である。１は胴上部で緩やかにくびれるが、ほぼ直線的に外傾する器形で、胴部に対し口径が開く。２・３も口径が開く点では同じであるが、３は鍋になる可能性が高い。４は口縁部がわずかに内湾する。１は外面が疎らな縦位ケズリ、内面が横位ヘラナデ調整、２は外面斜位ケズリ、内面斜位ユビナデである。５は胴上部から頸部が弱くくびれて、口縁部が直立気味に外反する器形である。外面斜位ケズリ、内面斜位ユビナデ調整である。４は土師器甕の口縁部破片で、胴上部から直立する器形である。外面縦位ケズリ、内面横位ヘラナデ調整である。

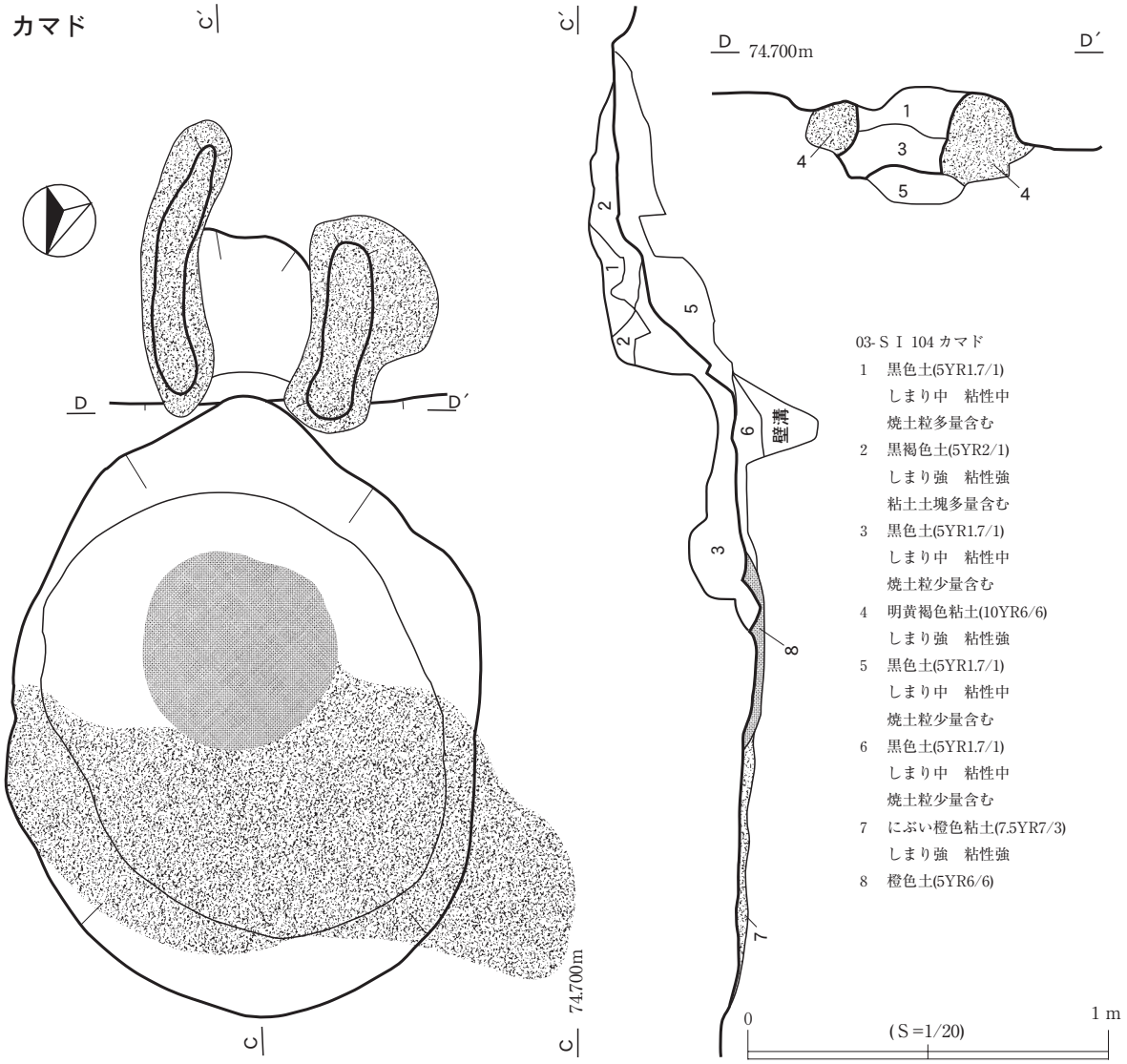
201図６は比較的小型の土師器甕である。口縁部が内湾する器形で、外面縦位ケズリ、内面横位ヘラナデ調整である。201図７は土師器甕の底部で、底面は砂底、外面縦・横位ケズリ、内面横位ヘラ



第199図　03-ＳＩ104Ａ

ナデ調整である。201図８は土師器坏Ｂ類である。底部が突出する器形で、底面には回転糸切痕をとどめ、内面には放射状のミガキが認められる。

201図９～11は鉄製品である。９は鞘金具の一部で、環状の作りになっている。錆が進行しており、ささくれ状に膨らんでいる。10は刀子の刀身から茎にかけての破片である。11は両端を欠損する棒状のものである。



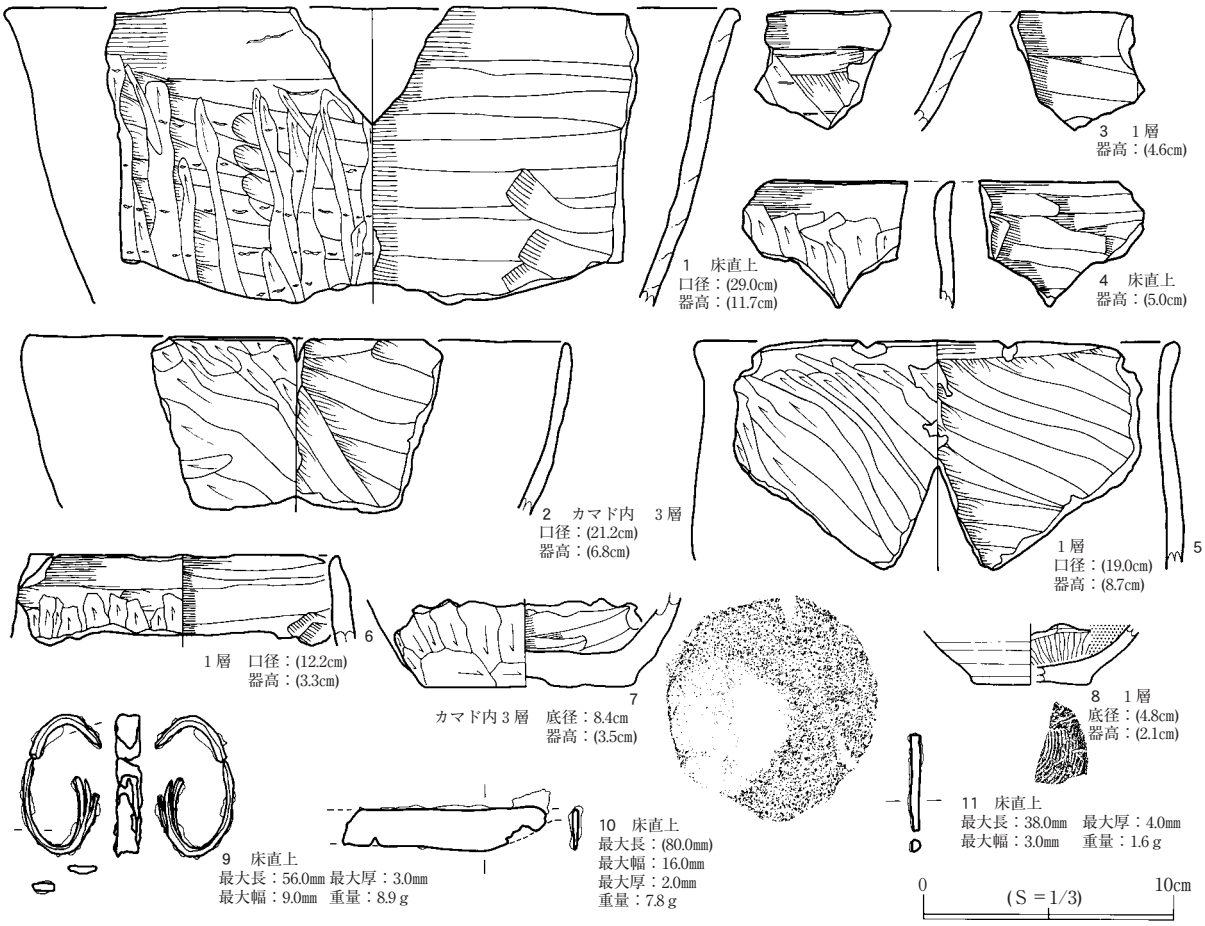
第200図　03-ＳＩ104Ａカマド

03-ＳＩ104Ｂ(第202図、図版61)

遺　構　03-ＳＩ104Ａより一回り大きい古段階の住居である。南東、南西壁の大部分は03-ＳＩ104Ａと共有するとみられ、この範囲外である北西・北東壁沿いにわずかに堆積土が残るが、１・２層は基本的に03-ＳＩ104Ａ構築に関わる造成土で、３層は壁溝内堆積土、４層は貼床である。

平面形は、北東壁が膨み北東－南西方向に長い台形状になる。主軸方位は03-ＳＩ104Ａとほぼ同じＮ－25°－Ｗである。主軸とそれに直交するラインで測る住居面積は約30㎡で、大形の住居である。各壁の長さは、北東壁約5.6m、南東壁約5.6m、南西壁約5.1m、北西壁約5.0mである。各壁の検出面からの深さは0.2～0.25mで、立ち上がりはほぼ垂直である。

床面は03-ＳＩ104Ａと共有するとみられ、掘形底面の地山面を利用しているが、03-ＳＩ105にかかる範囲には貼床を施す。壁溝も南東・南西壁沿いは03-ＳＩ104Ａと同様で、北東・北西壁沿いでは部分的に途切れながら巡る。上場幅0.1～0.2m、下場幅0.02～0.18m、床面からの深さ0.1m前後である。なお、本住居跡に伴うピットや独自のカマド跡は検出できなかった。カマドはほぼ同プランの03-ＳＩ104Ａと同地点を利用したと考えられる。



第201図　03-ＳＩ104Ａ出土遺物

本住居跡は明確な主柱をもたない住居で、南東壁にカマドを設置すると想定される。03-ＳＩ104とはほぼ同プランで、北東壁側に03-ＳＩ105が、北西壁側に03-ＳＩ106があることから、壁面が軟質なため平面形が歪になったと考えられる。そのため比較的早い段階で03-ＳＩ104Ａを構築して、本住居は廃絶したとみられる。そのため利用期間は短かったと考えられる。なお住居構築に際して、このような不利な条件のある本地点を敢えて利用することに、集落計画の強い規制が窺える。

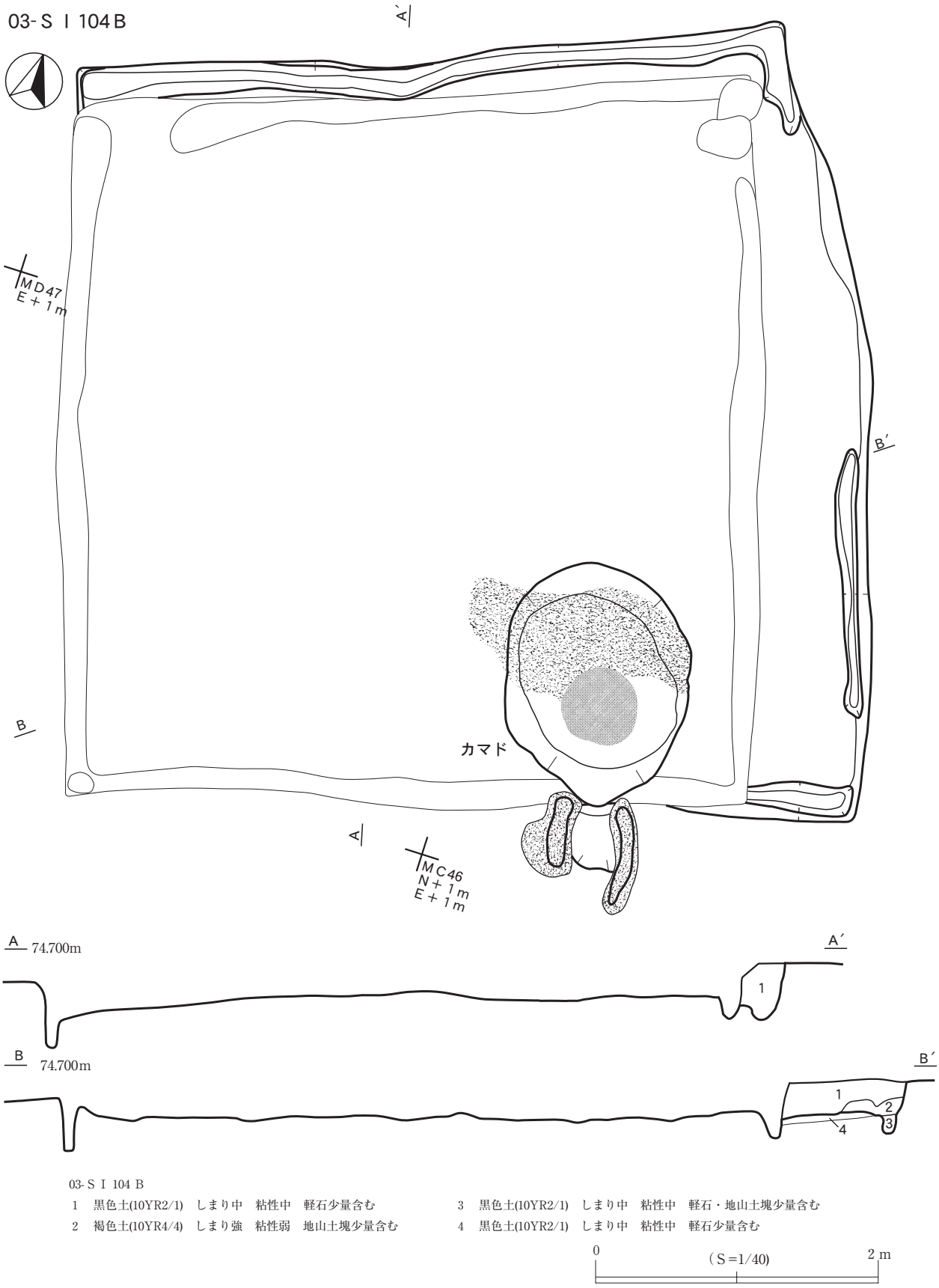
遺　物　本住居跡に伴う遺物は検出できなかった。

03-ＳＩ105(第203図～207図、図版62・150・151)

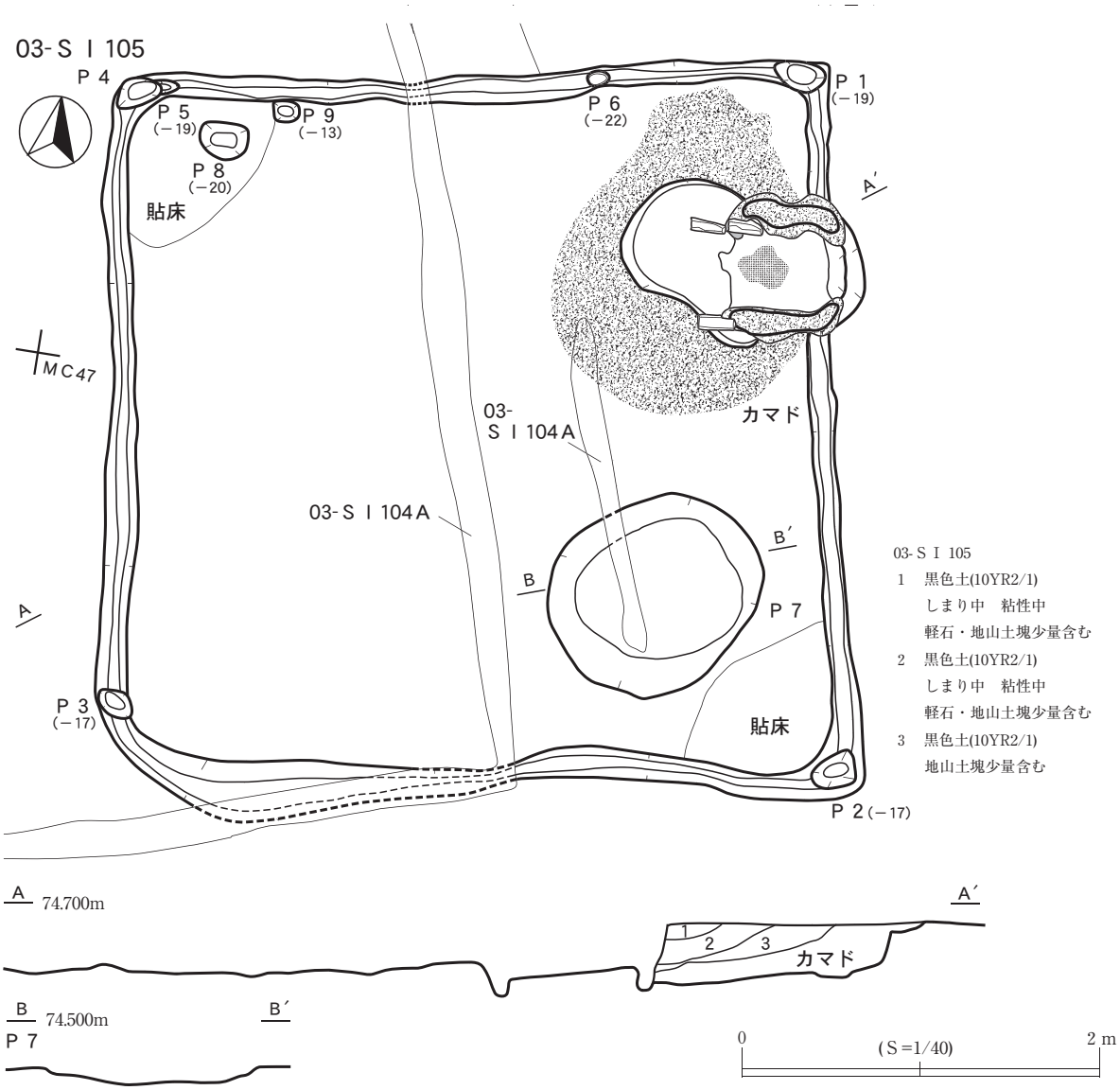
遺　構　ＭＡ・ＭＢ46・47グリッドの第Ⅳ層中位で、地山土塊を含む黒色土の広がりで確認した。本住居跡の立地点は台地上部平坦面の南東縁に近く、南東側へ緩やかに傾斜する。03-ＳＩ104・106と重複し、いずれよりも本住居跡が古い。周辺には02-ＳＩ05・24、03-ＳＩ06・12・13・102・103・173・178・224・316がある。

南西側の大部分を03-ＳＩ104が掘り込むが、範囲外の残存部に残る堆積土を３層に分けた。基本的には、本住居跡に後続する03-ＳＩ106構築時の、人為的な造成土である。

03-ＳＩ104が南西側を掘り込むが、本住居跡の床面の方が深いため壁溝が残存しており、規模や形状を概ね把握できる。平面形はほぼ正方形で、カマドの付く壁に直交する主軸方位はＮ－79°－Ｅである。主軸とそれに直交するラインで測る住居面積は17㎡で、中形の住居である。各壁の長さは、北



第202図　03-ＳＩ104Ｂ

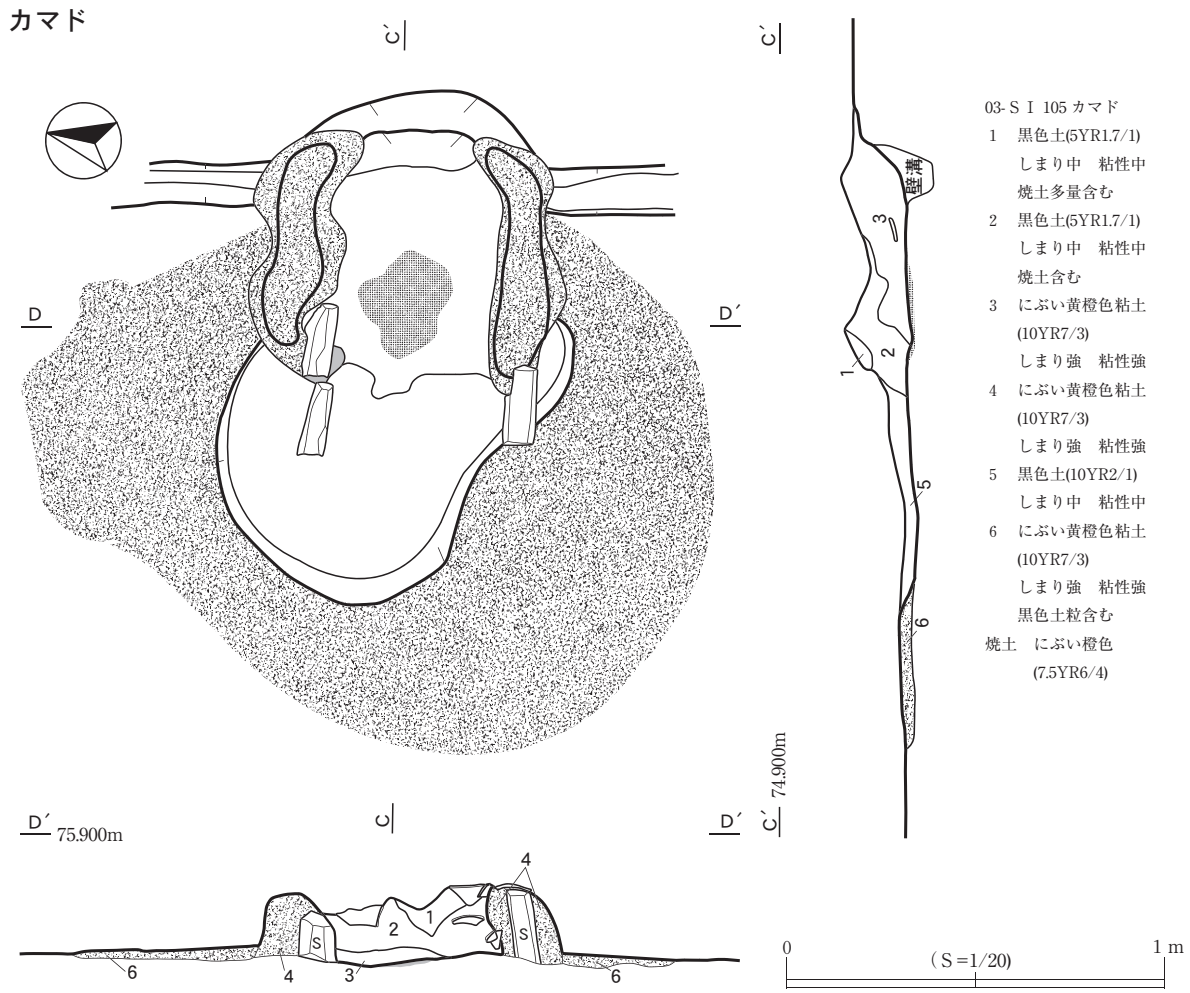


第203図　03-ＳＩ105

東壁約4.1m、南東壁約4.2m、南西壁約3.9m、北西壁約4.0mである。壁の検出面からの深さは、北東壁で約0.25mで、立ち上がりはほぼ垂直である。

床面は基本的に掘形底面の地山面を利用しており、部分的に貼床を施す。壁溝は全周で確認した。上場幅0.1～0.2m、下場幅0.05～0.08m、床面からの深さ0.05m前後の断面台形状である。床面及び壁溝内で９個のピットを確認した。Ｐ１～３・５は、住居四隅の壁溝内に規則的に配置する主柱穴である。柱穴間の距離は各壁長に準じており、柱穴中心で測る柱穴間距離はＰ１－２間約3.9m、Ｐ３－５間約3.4m、Ｐ１－５間約3.7m、Ｐ２－３間約4.1mである。

カマドは北東壁の中央から北西寄りの位置で、焼土粒を含む黒褐色土の広がりで確認した。比較的残りがよく、袖が残存していた。堆積土は大きく６層に分けられ、１～３層は天井材の倒壊土と流入土の互層、４層は袖の構築材で、６層は前庭部造成の粘土である。煙道先端から前庭部末端まで約1.8m、袖最大幅約0.75m、前庭部最大幅約1.8mである。煙道は短くスロープが残るのみである。袖は扁平な礫を芯材として、黒色土混じりの粘土を下から積み上げて構築する。前庭部は、袖末端部の礫を囲むように粘土を貼っており、カマド前面は黒色土を使用している。火床面は袖中央部付近に位置す



第204図　03-ＳＩ105カマド

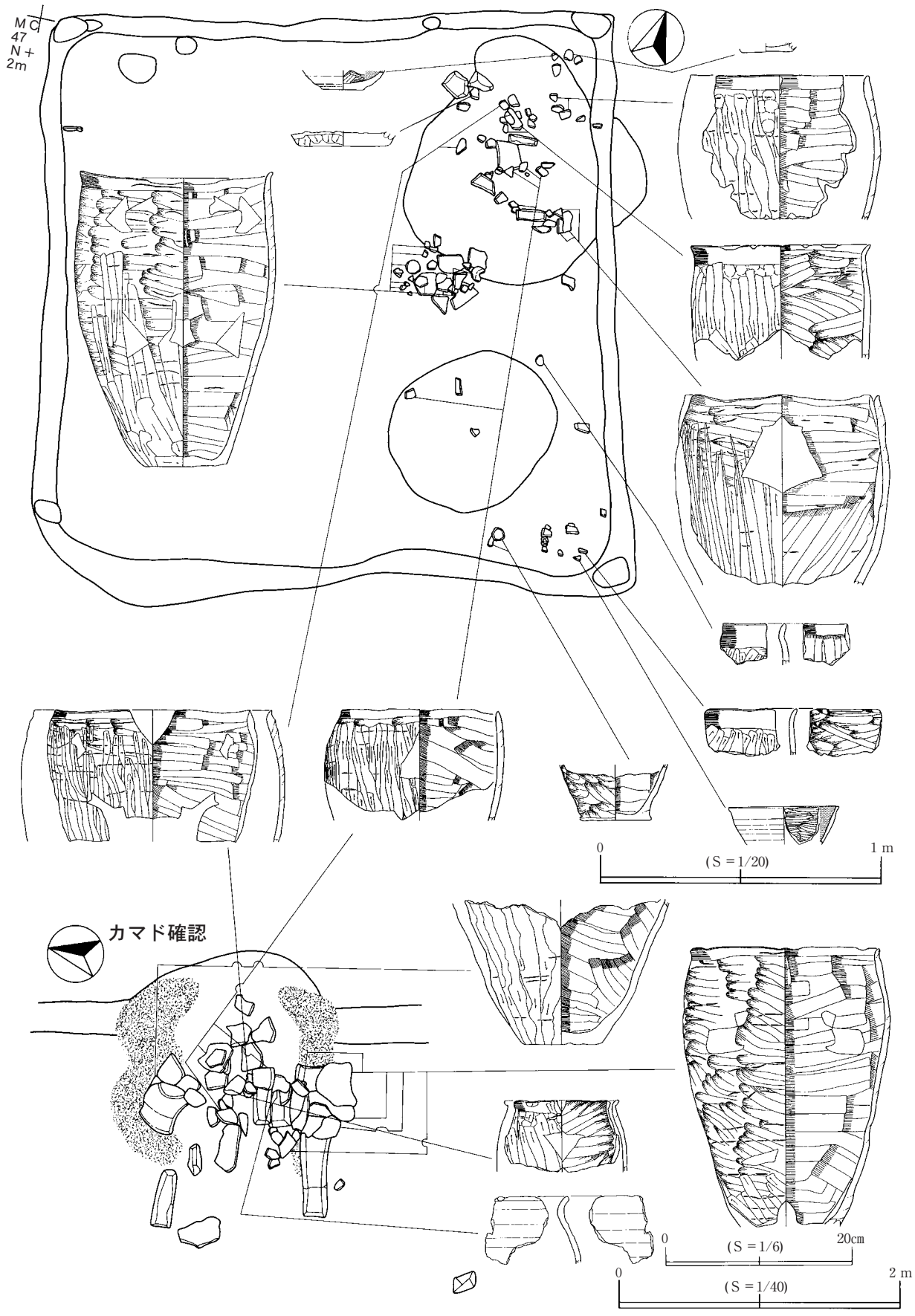
る、不規則な形状の被熱範囲で、長さ約0.3m、最大幅約0.25mである。

本住居跡は四隅に主柱をもち、北東壁にカマドを設置する住居である。廃絶後は人為的に埋め立てるが、後続する03-ＳＩ106構築時の造成と考えられる。

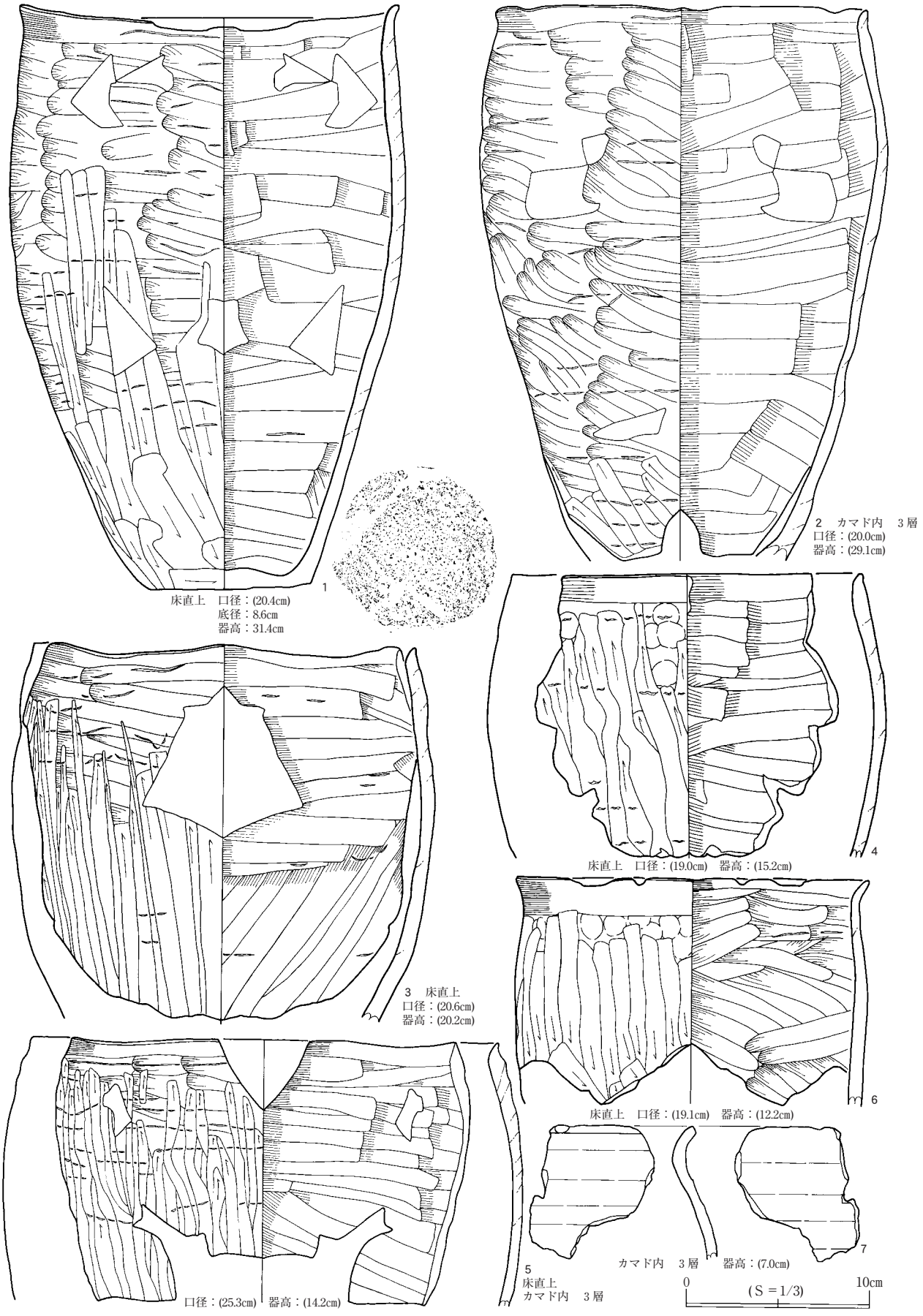
遺　物(第206図・207図)　住居跡内から土師器甕・坏が出土した。土師器甕は口縁部が18点、底部が９点出土しており、そのうち比較的大型の破片を口縁部資料11点、底部資料４点図示した。なお図示しなかったものを含めた甕の口縁部分類別数量はＡ類(１点)、Ｂ類(０点)、Ｃ類(６点)、Ｄ類(11点)で、底部分類別数量は砂底(６点)、分類不能(３点)の内訳になる。

出土位置は、カマド内部と周辺部に集中がみられるが、この範囲外の大部分は03-ＳＩ104Ｂ構築段階で、堆積土を大幅に除去してある。出土遺物の多くは床面に張り付くか、カマド内で倒壊土と重なるように出土しており(第205図)、住居廃絶時の意図的な遺棄による可能性が高い。

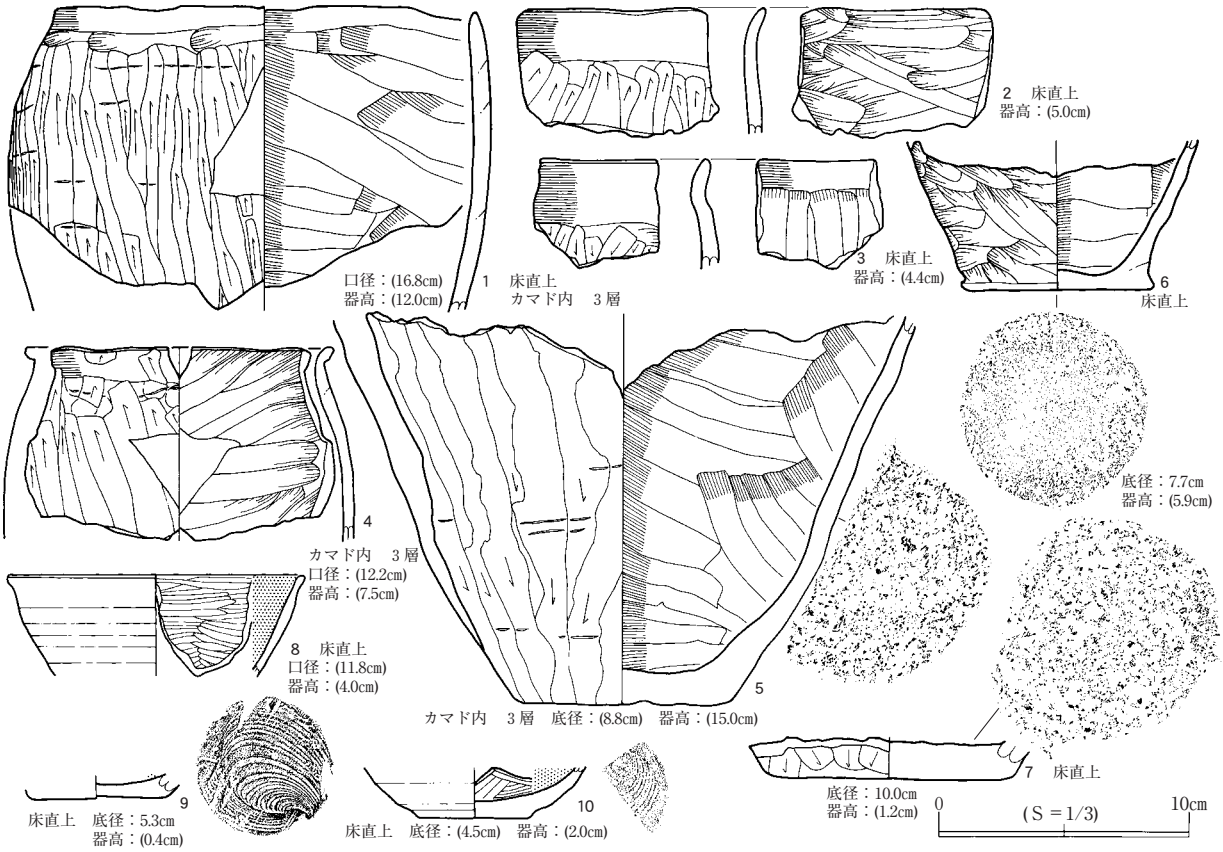
206図１～６、207図１は比較的中・大型の土師器甕である。206図１は全体形を窺える資料で、底部から直線的に外傾して、胴部からは直立気味に立ち上がり、口縁部がわずかに外反する。206図２もほぼ同じ器形とみられる。胴上部がやや内傾するが、１でも部位によっては内傾することから、器形の統一性が低い土器であることが分かる。外面調整は１・２共に胴下半部にのみ縦位ケズリを施して、胴上半部には広く横位ユビナデを残す。内面は横位ヘラナデ調整である。１の底面は砂底である。



第205図　03-ＳＩ105遺物出土状況



第206図　03-ＳＩ105出土遺物１



第207図　03-ＳＩ105出土遺物２

206図３～５、207図１は胴上部が張り出して口縁部が内湾する器形である。206図３は外面胴上部まで縦位ケズリを施して、上部にはユビナデを残し、内面は胴部中位まで縦位、胴上半部が横位のヘラナデ調整である。206図４・５、207図１は外面縦位ケズリ、内面横位ヘラナデ調整である。206図６は胴部が直立して立ち上がり、口縁部が短く外反する器形である。外面は縦位ケズリ、内面横位ユビナデ調整である。

207図４は比較的小型の土師器甕で、口縁部で短く外折する器形である。外面縦位ケズリ、内面横・斜位ユビナデ調整である。206図７、207図２・３は土師器甕の口縁部破片である。206図７はロクロ目を残すもので、頸部まで内湾して口縁部が短く外反する。口唇は面取りして角頭状になる。207図３は頸部に段状のくびれを有し、口縁部が直立気味に立ち上がる。外面縦位ケズリ、内面縦位ヘラナデ調整である。207図２は口縁部まで直立して立ち上がり、口端がわずかに外反する。外面縦位ケズリ、内面横・斜位ユビナデ調整である。

207図５～７は土師器甕の底部で、すべて砂底である。底部の立ち上がり形状は、５・７が直線的に外傾し、６が張り出す。６の外面調整はユビナデである。

207図８～10は土師器坏で、全てＢ類である。８は口縁部破片で、口縁部が段状にくびれて弱く外反する器形である。内面には横位のミガキを確認できる。９・10は底部で、10は突出し、９は直線的に外傾する形状である。どちらも回転糸切痕をとどめる。

03-ＳＩ106

本住居跡は、ＭＢ・ＭＣ47・48グリッドの第Ⅳ層中位で、地山土粒を含む黒色土の広がりで確認し

た住居跡である。本住居跡の立地点は台地上部平坦面の南東縁に近く、緩やかに南東側へ傾斜する。03-ＳＩ104・105と重複し、03-ＳＩ105より本住居跡が新しく、03-ＳＩ104より本住居跡が古い。周辺には02-ＳＩ05・24、03-ＳＩ06・12・13・102・103・173・178・224・316がある。

精査の結果、壁溝やピットの配置から１回の建て替えが認められ、合計２軒の住居跡が重なることが判明した。住居は新しい順に、Ａ・Ｂのアルファベットを付けて表記した。

03-ＳＩ106Ａ(第208図～210図、図版63・166)

遺　構　建て替えにより、規模を拡大した新段階の住居である。

堆積土は３層に分けた。１・２層は住居の大部分を埋め尽くす堆積土で、含有物や色調もほぼ同じ造成土である。３層は壁溝内堆積土で単層であり、廃絶時には壁板を抜取っている可能性がある。

平面形はほぼ正方形で、カマドの付く壁に直交する主軸方位はＮ－25°－Ｗである。主軸とそれに直交するラインで測る住居面積は約23㎡で、中形の住居である。各壁の長さは北東壁約4.8m、南東壁約4.8m、南西壁約4.9m、北西壁約5.0mである。各壁の検出面からの深さは、北西壁約0.2m、南西壁約0.3mで、基本的に垂直に立ち上がる。

床面は、掘形底面の地山面を利用している。壁溝は全周で確認した。上場幅0.1～0.3m、下場幅0.04～0.11m、床面からの深さ0.1m前後の断面台形状である。床面及び壁溝内で10個のピットを確認した。Ｐ１～４は住居隅に配置する主柱穴である。柱穴中心で測る主柱間距離は、Ｐ１－２間約4.5m、Ｐ３－４間約4.6m、Ｐ１－４間約4.6m、Ｐ２－３間約4.5mである。Ｐ５・７・８は壁中央部に配置する壁柱穴で、Ｐ６・９も比較的壁に近い位置にあることから壁板保持の補助柱穴とみられる。Ｐ10は他のピット配置との規則性が認められず、本住居跡に伴うか疑問である。

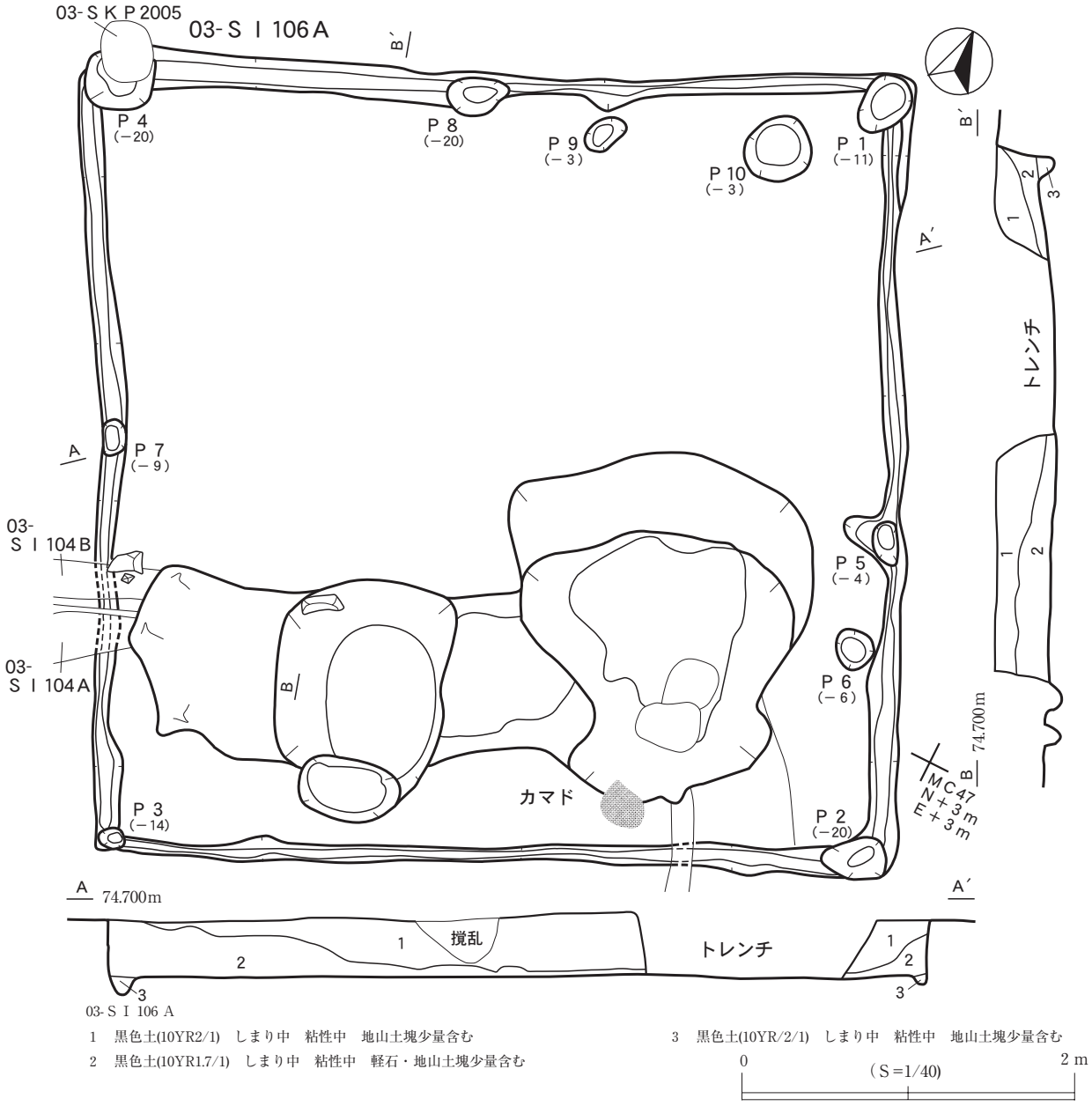
カマドは南東壁の中央から北東寄りの位置で、浅い掘り込みで確認した。カマド上部は03-ＳＩ104の床面範囲に当たるため、上部構造は完全に撤去してあり、確認できたのは基底部の掘り込みだけである。壁から前庭部末端まで約2.5m、最大幅約1.8mで、03-ＳＩ106Ｂカマド前庭部と幅約0.9mの浅い掘り込みで連結して、一連の前庭部となる。

本住居跡は四隅に主柱をもち、南東壁にカマドを設置する住居である。03-ＳＩ104構築時に埋め立てたと考えられるが、連続する住居でカマドを破壊する建て替えは珍しく、本住居跡廃絶と同時に03-ＳＩ104を構築するかはやや疑問である。

遺　物(第210図)　住居跡内から土師器甕・坏、墨書土器が出土した。03-ＳＩ104がカマド側の南東半分を切るため、堆積土が少ないのに比例して出土遺物も少ない。

210図１は比較的大型の土師器甕である。胴部が直立して立ち上がり、頸部でくびれて口縁部が直立気味に外反する。外面縦位ケズリ、内面横位ヘラナデ調整である。210図２は土師器甕の口縁部破片で、頸部まで内湾して口縁部が直立気味に外反する。外面縦位ケズリ、内面横位ヘラナデ調整である。210図３・４は土師器甕の底部で、どちらも砂底で、底部外縁が張り出す形状である。

210図５～７は土師器坏で、５がＡ類、６がＢ類、７はＢ類に墨書を施した破片である。５は直線的に外傾する器形で、口唇は先細りになる。６は内湾気味に立ち上がり、口縁部がわずかに外反する。内面のミガキは胴下部が放射状、上部が横位に施す。７は外面に墨書を施しているが、破片のため文字は判読不能である。



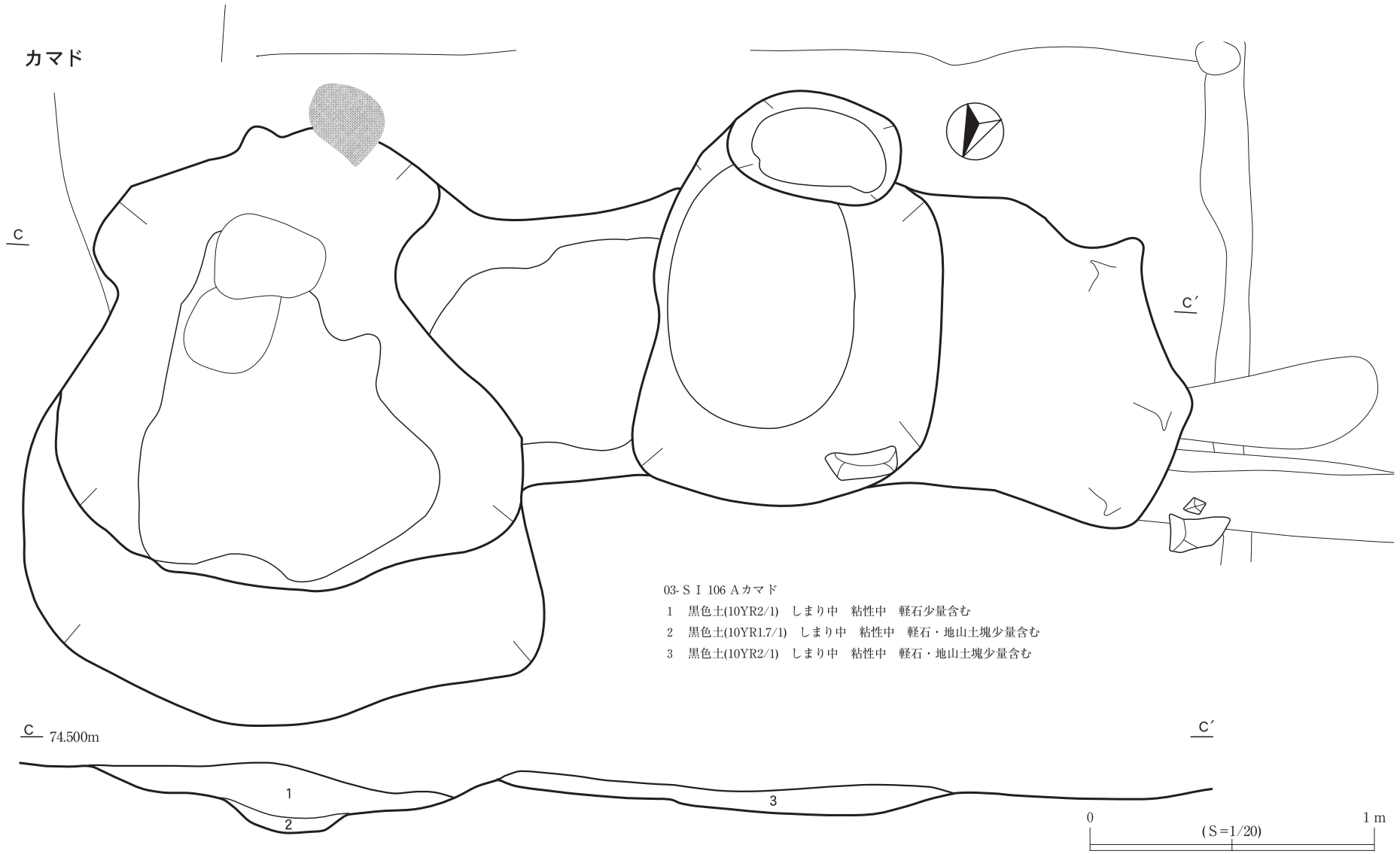
第208図　03-ＳＩ106Ａ

03-ＳＩ106Ｂ(第211図、図版63)

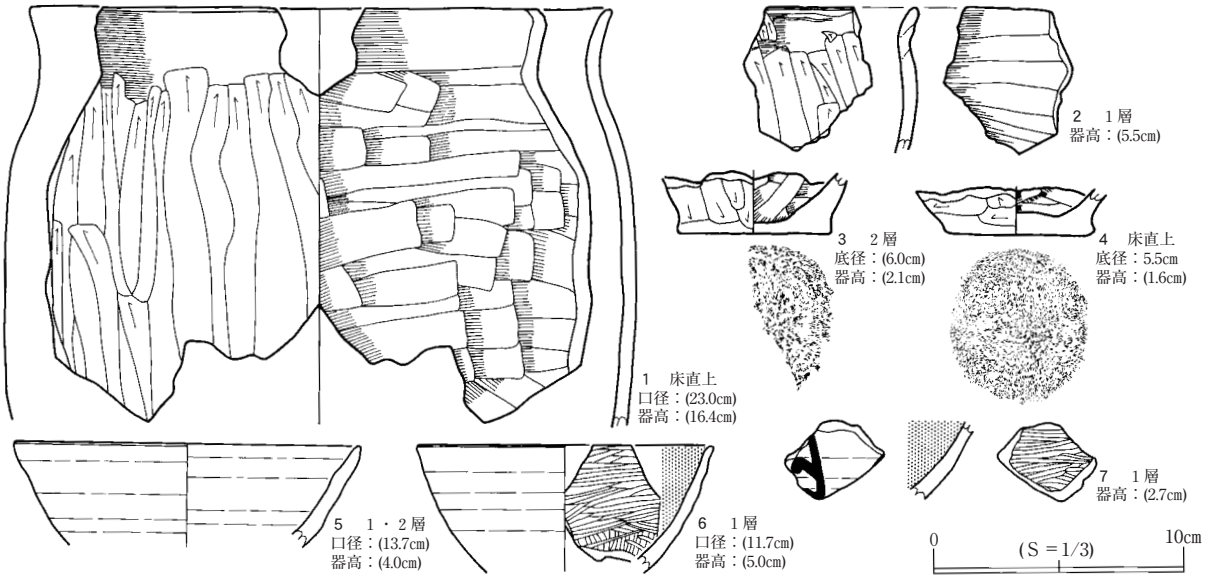
遺　構　03-ＳＩ106Ａよりも一回り小さい古段階の住居である。最大規模の03-ＳＩ106Ａのプラン内に収まるため、埋没過程を示す堆積土は存在せず、また壁の立ち上がり等も不明である。

壁溝配置とＰ２・３の配置でみる平面形は、わずかに北西－南東方向に長い長方形で、カマドの付く壁に直交する主軸方位はＮ－25°－Ｗである。主軸とそれに直交するラインで測る住居面積は約11㎡で、小形の住居である。想定される平面形で見た場合、北東壁約3.6m、南東壁約3.3m、南西壁約3.6m、北西壁約3.3mである。

床面は、03-ＳＩ106Ａと共有するとみられ、基本的には掘形底面の地山面を利用している。壁溝は南東壁沿い以外のほぼ全周で確認した。上場幅0.05～0.15m、下場幅0.01～0.1m、床面からの深さ0.05～0.1mである。床面で本住居跡に伴うとみられるピット７個を確認した。Ｐ１～４は住居隅に配置する主柱穴である。Ｐ５～７は相対する壁溝内に位置しており、壁板保持の補助柱穴とみられる。



第209図　03-ＳＩ106Ａカマド



第210図　03-ＳＩ106Ａ出土遺物

カマドは、南東壁中央から南西寄りの位置で、浅い掘り込みの範囲で確認した。03-ＳＩ106Ａカマドとは別地点であることから、本住居跡に伴うものと認定したが、掘り込み以外にカマドの存在を確認できる要素に乏しい。03-ＳＩ106Ａ構築時に、上部構造を削平し、また前庭部の一部に組み込んだことで、ほとんどを破壊したとみられる。

本住居跡は四隅に主柱をもち、南東壁にカマドを設置する住居である。03-ＳＩ106Ａへと拡張するために解体したと考えられる。

遺　物　本住居跡に伴う遺物は検出できなかった。

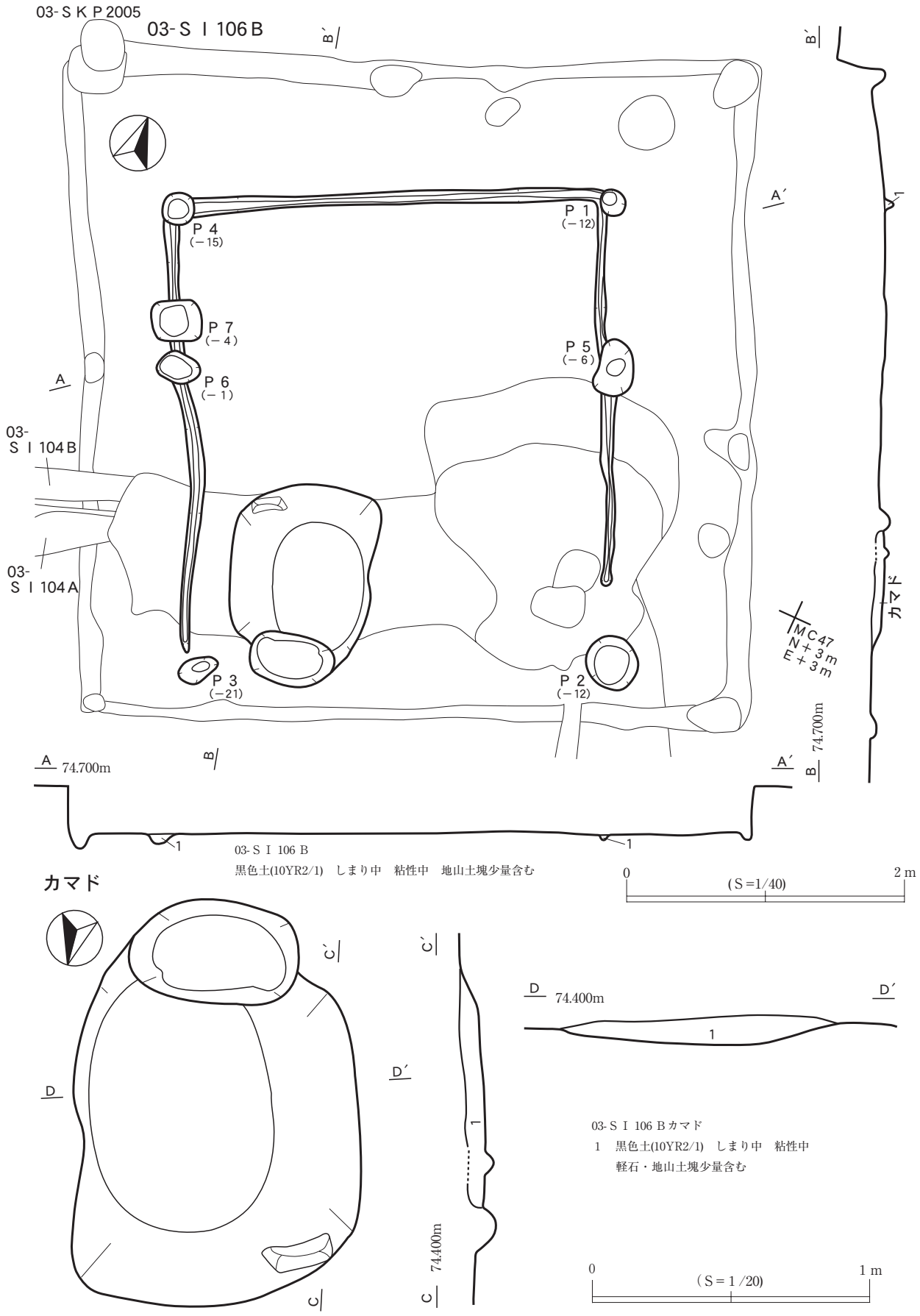
03-ＳＩ173(第212図、図版64)

遺　構　ＭＢ52、ＭＣ51・52グリッドの第Ⅳ層中位～第Ⅵ層上面で、地山土粒を含む黒色土の広がりで確認した。本住居跡の立地点は台地上部平坦面で、ほとんど傾斜がない。05-ＳＢ79と重複し、本住居跡の方が古い。周辺には02-ＳＩ24、03-ＳＩ178、05-ＳＩ27・28がある。

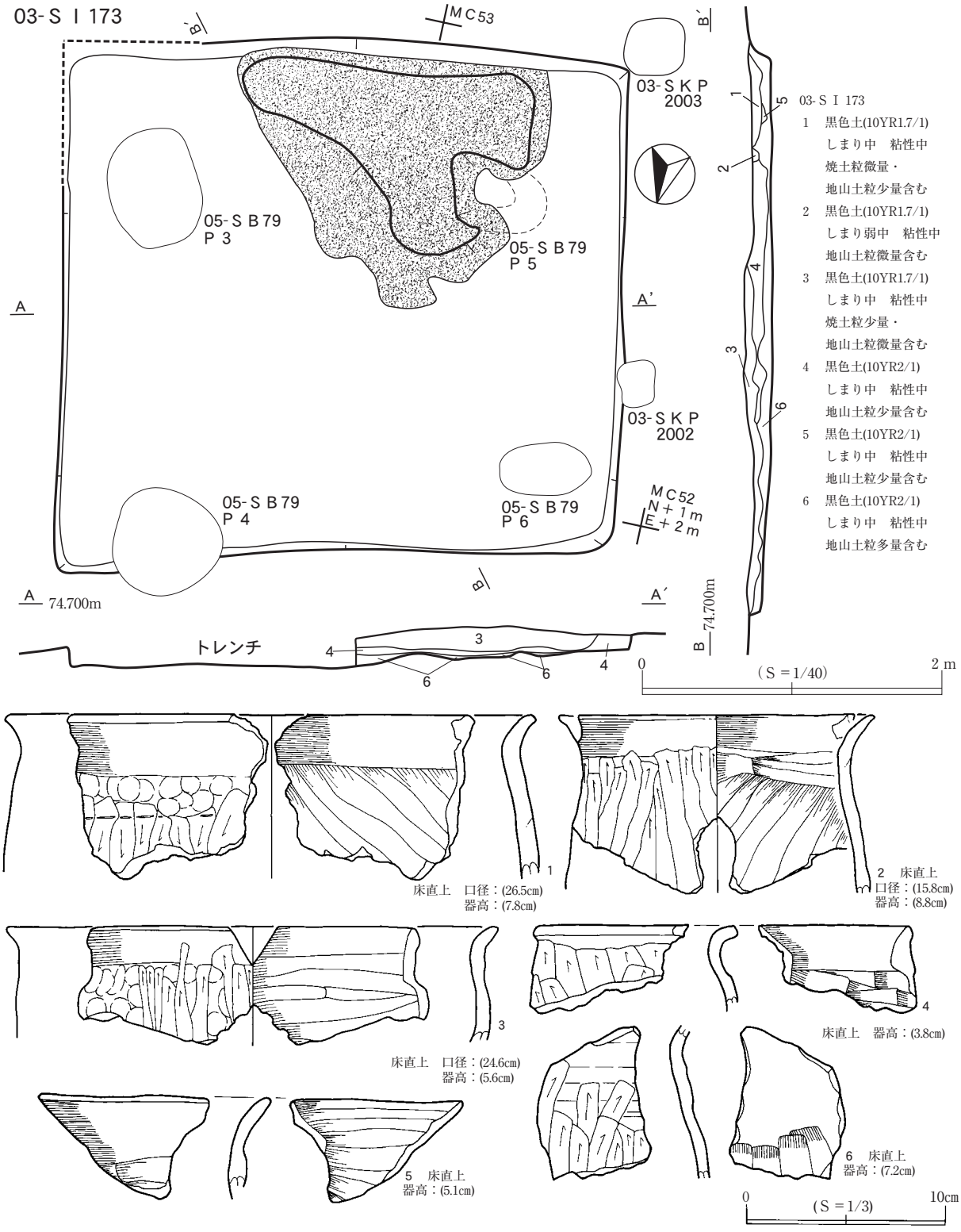
堆積土は６層に分けられるが、すべて地山土粒を含む黒色土で、周囲の状況からみて人為的に埋め戻した可能性が高い。平面形は東西に長い長方形で、南東壁に直交する主軸方位はＮ－11°－Ｗである。主軸とそれに直交するラインで測る住居面積は約13㎡で、小形の住居である。各壁の長さは、北壁約3.8m、東壁約3.3m、南壁約3.8m、西壁約3.5mである。検出面からの深さは残りの良い部分で0.1～0.15mで、全周ほぼ垂直に立ち上がる。

床面は、基本的に掘形底面の地山面を利用している。壁溝や本住居跡に伴うピットは確認できなかった。北壁中央から東側にかけての範囲で、住居壁直交方向で約1.7m、これに直交する最大幅が約2.1mの、粘土で構築したスロープ状遺構を検出した。下部に明確な被熱痕跡が認められないことから、出入り口に関わる痕跡と考えられる。なお、本住居跡に伴うカマドは確認できなかった。

本住居跡は、主柱・壁溝・カマドなど、住居としての機能を示す施設の痕跡が認められない。隣接する05-ＳＩ28と軸方位がほぼ同じで、中軸線が一致することからみて、これに付属する施設と考えられる。この場合の機能として、他の住居で散見される、付属施設としての掘立柱建物跡の代わりに竪穴



第211図　03-ＳＩ106Ｂ・カマド



第212図　03-ＳＩ173・出土遺物

状遺構を付属させたパターンと考えられる。

遺　物(第212図)　住居跡内から土師器甕が出土した。遺物の出土量は少なく、主体となるものはほとんど図示した。

212図１・３は比較的中・大型の土師器甕である。１は頸部までやや内傾し、口縁部が外反する。外面縦位ケズリ、内面斜位ユビナデである。３は頸部まで直立気味に立ち上がり、口縁部が短く外反

する器形である。外面縦位ケズリ、内面横位ヘラナデ調整である。212図２は比較的小型の土師器甕で、頸部まで内傾して口縁部が長めに外反する。外面縦位ケズリ、内面は縦位ユビナデ後、頸部以上に横位ヘラナデを施す。212図４・５は土師器甕の口縁部破片で、どちらも頸部に段状のくびれを有し、口縁部が外反する。外面調整は、４が頸部まで縦位ケズリを施し、５がユビナデのみ確認できる。内面調整は、４がヘラナデ、５ユビナデを横位に施す。212図６は頸部付近の破片で、頸部付近までロクロ目を残している。外面には縦位ケズリで、内面には縦位ヘラナデによる再調整を施す。

03-ＳＩ178(第213図～215図、図版65・147)

遺　構　ＭＡ・ＭＢ51・52グリッドの第Ⅳ層中位～第Ⅵ層上面で、地山土塊を含む黒色土の広がりで確認した。本住居跡の立地点は台地上部平坦面で、ほとんど傾斜がない。縄文時代の03-ＳＫＴ198と重複し、本住居跡がこれを掘り込んでいる。周辺には02-ＳＩ24、03-ＳＩ173・610、05-ＳＩ27・28、03-ＳＤ172・184がある。

堆積土は８層に分かれるが、１層が住居内を広く埋め尽くす堆積土で、全体に均質であることから人為的な埋め戻しによるものと考えられる。壁溝内堆積土が明確に区分できないことから、壁板及び構造材は撤去していたとみられる。

平面形は東壁がやや長い台形で、カマドの付く壁に直交する主軸方位はＮ－12°－Ｗである。予測される主軸とそれに直交するラインで測る住居面積は約17㎡で、中形の住居である。各壁の長さは、北壁約4.0m、東壁約4.4m、南壁約3.9m、西壁約3.8mである。検出面からの深さは0.1～0.2mで、全周ほぼ垂直に立ち上がる。

床面は基本的に掘形底面の地山面を利用しており、やや凹凸が認められる。壁溝はカマドＢ以外の全周で確認した。上場幅0.12～0.22m、下場幅0.02～0.1m、床面からの深さ0.05～0.1mの断面台形状である。床面及び壁溝内で７個のピットを確認した。Ｐ１～４は住居四隅の主柱穴である。柱穴中心間で測る距離はＰ１－２間約3.9m、Ｐ３－４間約3.4m、Ｐ１－４間約3.7m、Ｐ２－３間約3.6mである。

カマドは２か所あり、南東壁の中央からやや北東寄りの位置でカマドＡを、同じく南東壁の中央からやや南東寄りの位置でカマドＢを確認した。カマドＢ部分で壁溝が途切れており、住居の初期設定時に伴うカマド配置という見方から、カマドＢが古く、カマドＡが新しいと判断した。

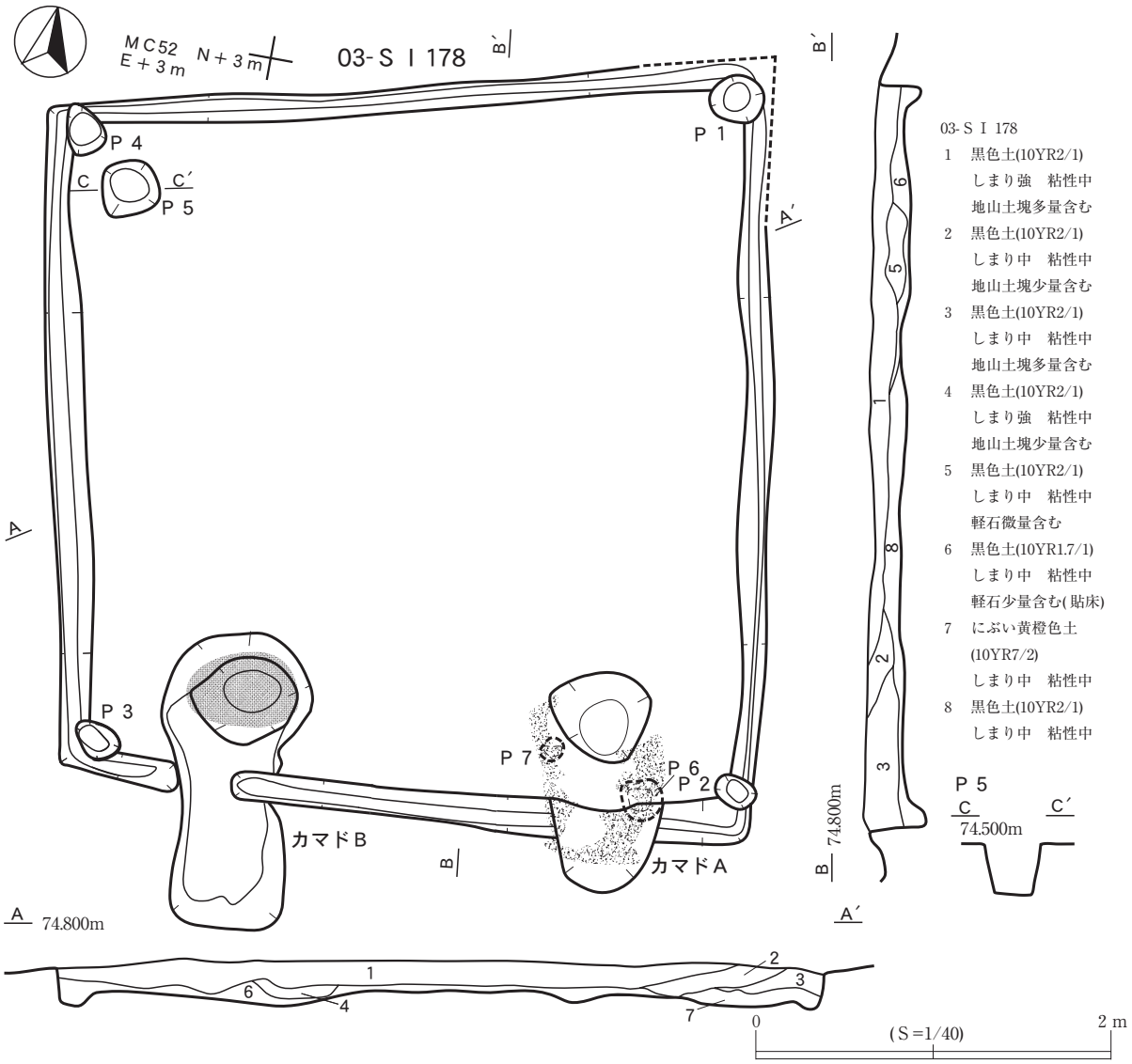
カマドＡは壁溝を埋めて構築している。堆積土は13層に分かれ、１～10層は上部構造の倒壊土と周囲からの流入土の互層、11層は袖残存部、12～14層は基底部の造成である。煙道から前庭部末端まで約1.2m、前庭部最大幅で約0.7mである。煙道は短いスロープ状である。カマド天井が潰れて落ち込み、両袖部が部分的に残っていた。カマドは礫を用いず、白色粘土のみで造っている。

カマドＢは完全に整地してあり、基底部の掘り込みと火床面のみ確認した。煙道から前庭部末端まで約1.7m、前庭部最大幅が約0.8mである。火床面は長径0.47mの楕円形状の被熱範囲である。

本住居跡は四隅に主柱もち、南東壁にカマドを設置する住居である。カマドは造り替えがあり、比較的長い期間の居住が想定される。軸方位からみると、03-ＳＩ853や05-ＳＩ27と同時期の可能性が高く、近接する02-ＳＩ24構築時には廃絶していたと考えられる。

遺　物(第215図)　住居跡内から土師器甕・坏・鍋が出土した。

土師器甕は口縁部が７点、底部が５点出土しており、そのうち比較的大型の破片を口縁部資料５点、

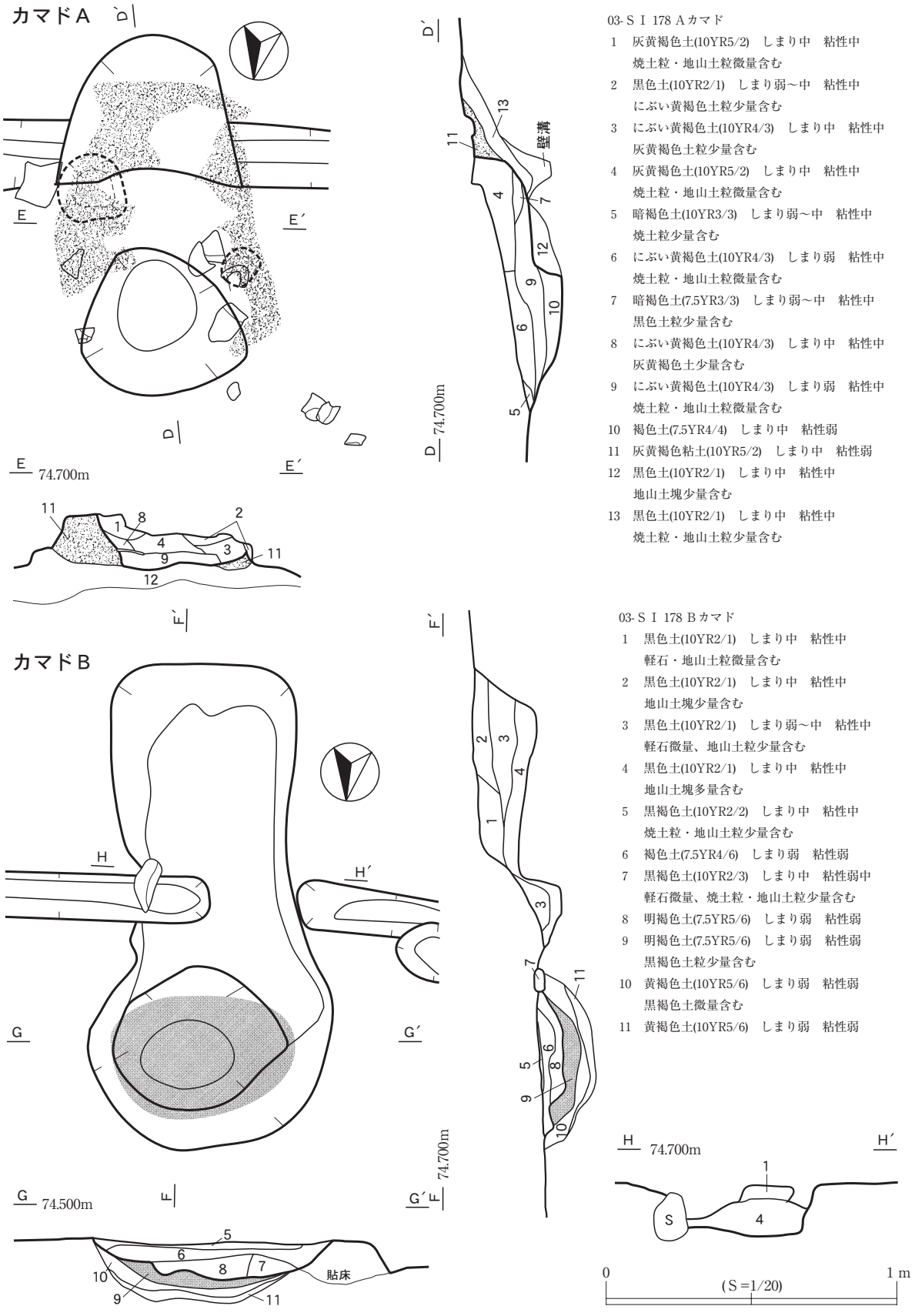


第213図　03-ＳＩ178

底部資料２点図示した。なお図示しなかったものを含めた甕の口縁部分類別数量はＡ類(０点)、Ｂ類(３点)、Ｃ類(２点)、Ｄ類(１点)、その他(１点)で、底部分類別数量は砂底(２点)、木葉痕(１点)、ケズリ(１点)、分類不能(１点)の内訳になる。

215図１は比較的大型の土師器甕である。胴下部から内湾気味に立ち上がり、胴上部が張り出して頸部が段状にくびれ、口縁部が外折気味に直立する。口唇は面取りして角頭状になる。外面縦位ケズリ、内面は胴上部までが斜位、口縁部にかけては横位のヘラナデ調整である。215図２は比較的小型の土師器甕で、胴上部が張り出し、頸部でくびれて口縁部が外折する。１と同様に外面縦位ケズリ、内面横位ヘラナデ調整である。215図３～５は土師器甕の口縁部破片で、３は頸部に段状のくびれを有し、口縁部が外折する器形で、口唇は角頭状になる。比較的薄手の作りである。４は口縁部まで内湾する器形である。３・４とも外面縦位ケズリ、内面横位ヘラナデ調整である。５は破片の下部が内曲がりになり、器壁が厚いことなどから、小型土器になる可能性がある。口縁部は短く外反し、口唇は角頭状になる。外面には疎らに縦位ケズリが認められるが、内外面共にユビナデ調整である。

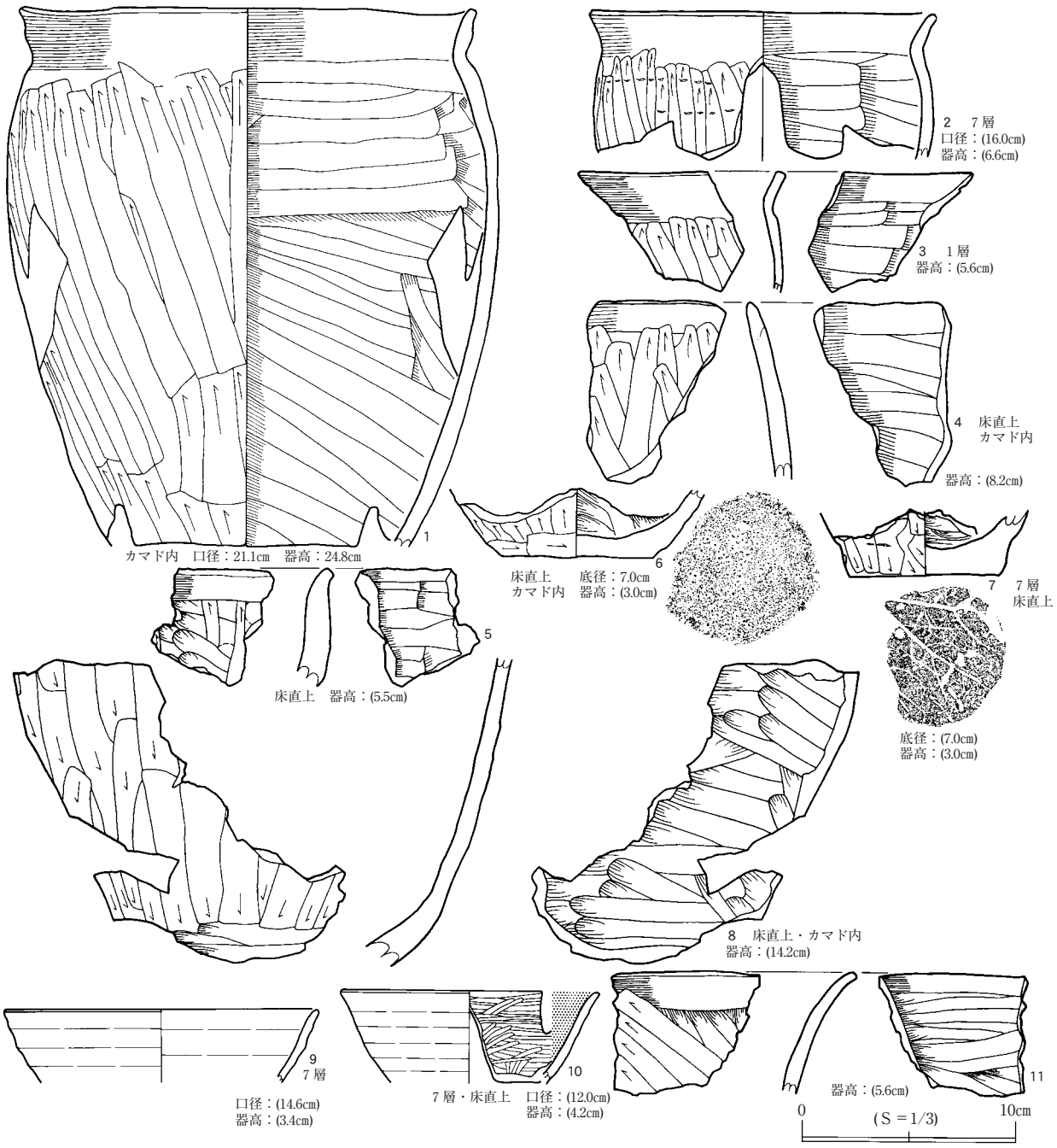
215図６・７は土師器甕の底部で、６は砂底で、７は木葉痕をとどめる。底部の立ち上がり形状は



03-ＳＩ178 Ａカマド
1　灰黄褐色土(10YR5/2)　しまり中　粘性中
　焼土粒・地山土粒微量含む
2　黒色土(10YR2/1)　しまり弱～中　粘性中
　にぶい黄褐色土粒少量含む
3　にぶい黄褐色土(10YR4/3)　しまり中　粘性中
　灰黄褐色土粒少量含む
4　灰黄褐色土(10YR5/2)　しまり中　粘性中
　焼土粒・地山土粒微量含む
5　暗褐色土(10YR3/3)　しまり弱～中　粘性中
　焼土粒少量含む
6　にぶい黄褐色土(10YR4/3)　しまり弱　粘性中
　焼土粒・地山土粒微量含む
7　暗褐色土(7.5YR3/3)　しまり弱～中　粘性中
　黒色土粒少量含む
8　にぶい黄褐色土(10YR4/3)　しまり中　粘性中
　灰黄褐色土少量含む
9　にぶい黄褐色土(10YR4/3)　しまり弱　粘性中
　焼土粒・地山土粒微量含む
10　褐色土(7.5YR4/4)　しまり中　粘性弱
11　灰黄褐色粘土(10YR5/2)　しまり中　粘性弱
12　黒色土(10YR2/1)　しまり中　粘性中
　地山土塊少量含む
13　黒色土(10YR2/1)　しまり中　粘性中
　焼土粒・地山土粒少量含む

03-ＳＩ178 Ｂカマド
1　黒色土(10YR2/1)　しまり中　粘性中
　軽石・地山土粒微量含む
2　黒色土(10YR2/1)　しまり中　粘性中
　地山土塊少量含む
3　黒色土(10YR2/1)　しまり弱～中　粘性中
　軽石微量、地山土粒少量含む
4　黒色土(10YR2/1)　しまり中　粘性中
　地山土塊多量含む
5　黒褐色土(10YR2/2)　しまり中　粘性中
　焼土粒・地山土粒少量含む
6　褐色土(7.5YR4/6)　しまり弱　粘性弱
7　黒褐色土(10YR2/3)　しまり中　粘性弱中
　軽石微量、焼土粒・地山土粒少量含む
8　明褐色土(7.5YR5/6)　しまり弱　粘性弱
9　明褐色土(7.5YR5/6)　しまり弱　粘性弱
　黒褐色土粒少量含む
10　黄褐色土(10YR5/6)　しまり弱　粘性弱
　黒褐色土微量含む
11　黄褐色土(10YR5/6)　しまり弱　粘性弱

第214図　03-ＳＩ178カマドＡ・Ｂ



第215図　03-ＳＩ178出土遺物

６が直線的に外傾し、７はやや直立してから外傾する。215図８は土師器甕の底部付近の資料であるが、外面調整では縦位ケズリの下端部に横位ユビナデを残しており、甑の可能性も否定できない。内面は横位ユビナデ調整である。

215図９・10は土師器坏で、９がＡ類、10がＢ類である。どちらも口縁部が外反する器形である。10の内面のミガキは横・斜位に施している。215図11は土師器鍋と思われる口縁部破片である。外面斜位ケズリ、内面横位ユビナデ調整である。

03-ＳＩ203・204

ＭＣ40・41、ＭＤ40～42、ＭＥ40・41グリッドの第Ⅳ層中位～第Ⅵ層上面で、地山土塊を含む黒色

土の広がりで確認した。本住居跡の立地点は台地上部平坦面で、ほとんど傾斜がない。03-ＳＩ208・207・206と重複するが、新旧関係を示す堆積土は削平により存在しない。ただし、周囲の遺構配置からみて、本住居跡群の方が新しいと考えられる。周辺には、02-ＳＩ01・02・03・05・07・08・09・10・14、03-ＳＩ06・13・102・103がある。

精査の結果、壁溝やピット配置、またわずかな平面形のずれから、２回の建て替えが認められ合計３軒の住居跡が重なることが判明した。新旧関係は03-ＳＩ203が新しく、03-ＳＩ204が古い。また03-ＳＩ203は新しい順に、Ａ・Ｂのアルファベットを付けて表記した。

03-ＳＩ203Ａ(第216図～218図、図版66・67)

遺　構　建て替えにより、03-ＳＩ203Ｂより規模を拡大した住居である。南東壁・南西壁側は削平により堆積土が大部分失われているが、残存部の堆積土を４層に分けた。１・２層が住居廃絶後の堆積土で、３層が張り出し内部の貼床、４層が壁溝内堆積土である。１・２層の堆積状況はレンズ状堆積にもみえるが、残存範囲が狭く正確な堆積過程は不明である。

壁溝や柱穴配置から想定される平面形は、北西－南東方向に長い長方形で、カマドの付く壁に直交する主軸方位はＮ－57°－Ｅである。主軸とそれに直交するラインで測る住居面積は約27㎡で、大形の住居である。各壁の長さは北東壁約5.5m、南東壁約4.9m、南西壁約5.4m、北西壁約5.1mである。各壁の検出面からの深さは、北西壁で0.2m前後、北東壁で0.3m前後で、ほぼ垂直に立ち上がる。北東壁の約南東半分には張り出しが付く。三方を壁溝で区画し、隅にピットを配置しており、規模は住居壁直交方向で約1.5m、住居壁平行方向で約2.6mである。出入り口とみられる。

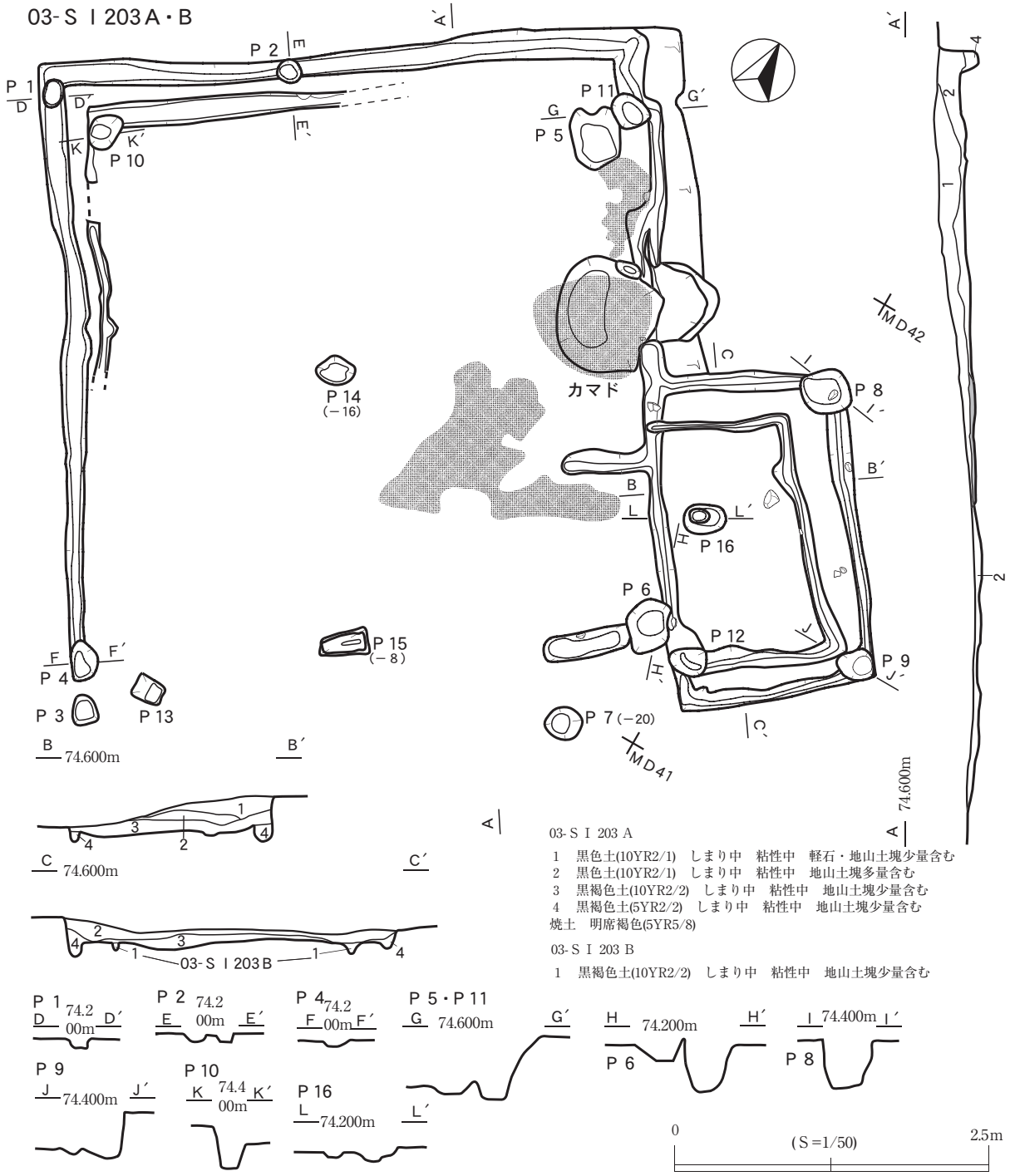
床面は基本的に掘形底面の地山面を利用している。壁溝は、削平の著しい南東壁沿いでは失われているが、その他は全周で確認した。上場幅0.05～0.24m、下場幅0.02～0.07m、床面からの深さ0.1m前後の断面台形状である。床面及び壁溝内で、本住居跡に伴うとみられる９個のピットを確認した。Ｐ１・３は住居隅に配置する主柱穴で、東・北隅では確認できなかった。柱穴中心で測る主柱間距離は、Ｐ１－３間約4.9mである。Ｐ２・４・７は壁溝内に配置する、壁板保持の補助柱穴とみられる。Ｐ８・９は、張り出し奥壁の構造に関わる柱穴と考えられる。

カマドは北東壁の中央から北西寄りの位置で、煙道と焼土範囲で確認した。上部構造は完全に失われており、本来の形状は不明である。堆積土は５層に分かれ、１・２層は流入土、３～５層がカマド基底部の造成土で、３・５層上面に焼土がある。煙道から前庭部末端まで約1.2m、カマド基底部掘り込みの最大幅で約0.8mである。火床面は、最大長約0.95mの不整な形状の被熱範囲である。なお、カマド南東側の床面に認められる焼土範囲が、火災に伴うものかどうかは不明である。

本住居跡は四隅に主柱をもち、北東壁にカマドを設置する住居である。03-ＳＩ208・207・206から数えて、計８軒住居が重なる本地点で最新の住居であり、集落の中でも最終段階に存在したものと考えられる。

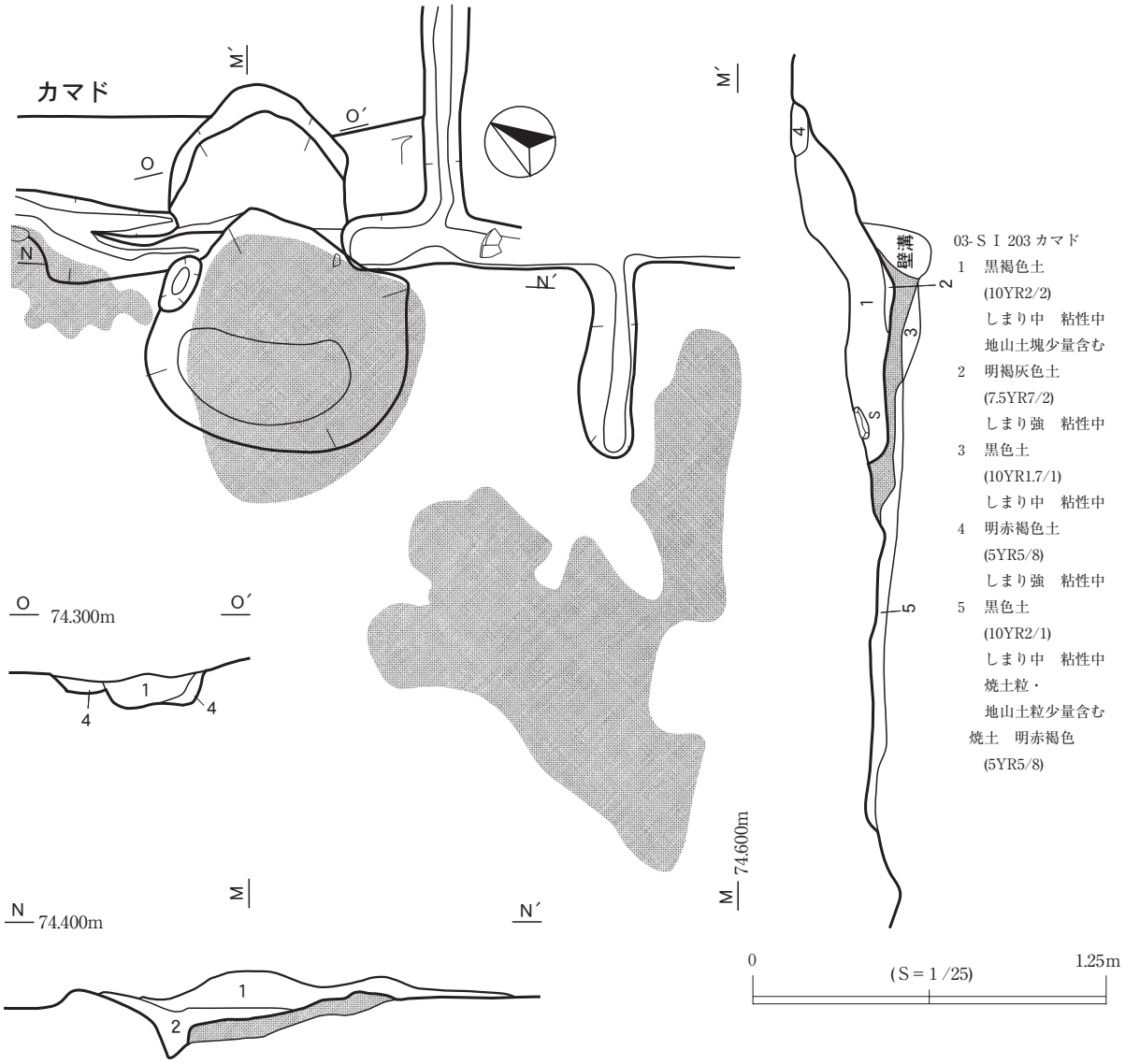
遺　物(第218図)　住居跡内から土師器甕が出土した。土師器坏も出土しているが、小破片のため図示しなかった。また、土師器甕も主体的なものはほとんど図示した。堆積土の約半分が削平で欠如するため、本来の遺物層は失われている可能性が高い。

218図１は比較的中・大型の土師器甕で、胴上部から直立気味に立ち上がる。外面横位ユビナデ、



第216図　03-ＳＩ203Ａ・Ｂ

内面横位ヘラナデ調整である。218図２～６は土師器甕の口縁部破片である。２はロクロ目を残すもので器壁が薄く、比較的小型の甕と思われる。胴上部が張り出して頸部でくびれ、口縁部が外反直立して、口縁部側面には垂直の面を形成する。３は口縁部が外反する。外面の縦位ケズリは口端付近まで及ぶ。内面は口端付近にユビナデを残すが、基本的には横位ヘラナデ調整とみられる。口縁部が極端に肥厚する形状である。４は頸部で内傾して口縁部が外反する器形で、口縁部が肥厚する。外面縦位ケズリ、内面縦・横位のユビナデ調整である。５は口縁部まで内傾して、口端がわずかに直立する器形である。外面には疎らに縦位ケズリも認められるが、指の押さえをとどめる。内面は横位ヘラナ



第217図　03-ＳＩ203Ａカマド

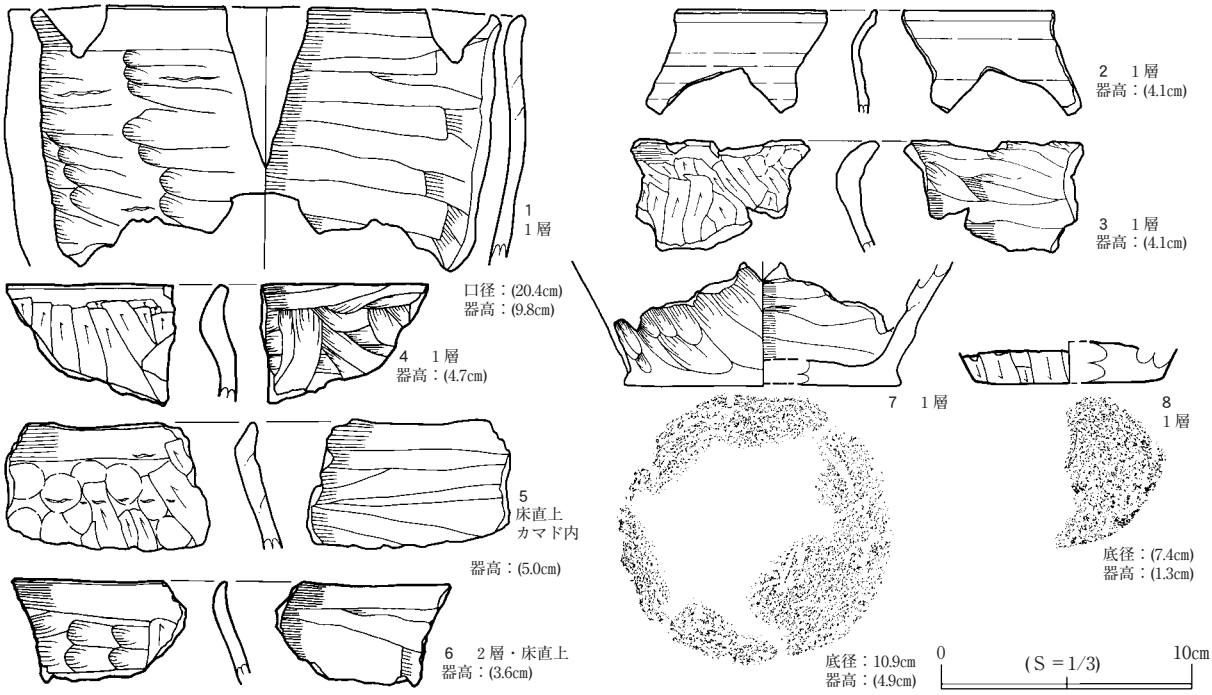
デ調整である。６は口縁部まで内湾して、口端がわずかに外反する。外面横位ユビナデ、内面横位ヘラナデ調整である。

218図７・８は土師器甕の底部で、どちらも砂底である。７は底部外縁が張り出す形状で、外面横位ユビナデ、内面横位ヘラナデ調整である。

03-ＳＩ203Ｂ(第216図、図版66・67)

遺　構　１回目の建て替えにより、03-ＳＩ204からわずかに立地点をずらして、やや規模を縮小した住居である。最大規模の03-ＳＩ203Ａのプラン内に収まるため、埋没過程を示す堆積土は残存しない。また、本住居の存在を示す床面施設も限られており、四隅の柱穴とわずかに残る壁溝や張り出しにより、本住居跡の存在が窺える。

四隅の柱穴配置でみた場合、平面形は北西－南東方向に長い長方形で、北東壁に直交する主軸方位はＮ－57°－Ｅである。主軸とそれに直交するラインで測る住居面積は約22㎡で、中形の住居である。想定される平面形で見た場合、北東壁約4.7m、南東壁約4.6m、南西壁約4.8m、北西壁約4.5mである。



第218図　03-ＳＩ203Ａ出土遺物

各壁の検出面からの深さ及び立ち上がりは不明である。北東壁の約南東半分には張り出しが付く。三方を壁溝で区画しており、規模は住居壁直交方向で約1.0m、住居壁平行方向で約2.0mである。範囲のほぼ中央にはピットを１個伴うが、これは引き続き03-ＳＩ203Ａでも存在した可能性が高い。なお、張り出しは出入り口として機能したと考えられる。

床面は03-ＳＩ203Ａと共有するとみられ、地山上面を利用する。壁溝は、大半が削平により消失しているが、西隅付近で確認できた。北東壁沿いは03-ＳＩ203Ａの壁溝ラインと重なるとみられる。上場幅0.05～0.2m、下場幅0.02～0.13m、床面からの深さ0.05m前後の断面台形状である。

床面で本住居跡に伴うとみられるピット７個を確認した。Ｐ10～13は住居四隅の主柱穴である。Ｐ14・15は主軸直交ラインに並んでおり、本住居跡に伴うかは不明である。

本住居跡に伴うカマドは明確ではないが、住居プランがほぼ同じことから、03-ＳＩ203Ａの位置と同じ地点を利用していたものと考える。

本住居跡は四隅に主柱を配置する住居で、北東壁にカマドを設置すると想定される。03-ＳＩ203Ａへと拡張するために解体したと考えられる。

遺　物　本住居跡に伴う遺物は検出できなかった。

03-ＳＩ204(第219図、図版66)

遺　構　03-ＳＩ203Ａ・Ｂよりも南東側に広い、古段階の住居である。周辺部は削平が著しく、埋没過程を示す堆積土や、壁は消失している。また、03-ＳＩ203Ａ・Ｂ構築時の掘削により、本住居の存在を示す床面施設も失われており、Ｐ１～３と壁沿いに断続的に残る壁溝のみ確認した。

Ｐ１・２を住居対角線とみた場合、平面形は北西－南東方向に長い長方形で、北東壁に直交する主軸方位はＮ－57°－Ｅである。主軸とそれに直交するラインで測る住居面積は約35㎡で、大形の住居である。想定される平面形でみた場合の各壁の長さは、北東壁約6.3m、南東壁約5.6m、南西壁約6.2

m、北西壁約5.5mである。各壁の検出面からの深さ及び立ち上がりは不明である。

床面は、大部分が削平と03-ＳＩ203Ａ・Ｂの構築により失われていると考えられるが、残存高度からみて、03-ＳＩ203Ａ・Ｂの床面とほぼ同レベルを利用していたと予測される。なお、地山面の掘り込み深度からみて、貼床の存在は疑わしい。壁溝は各壁沿いで断続的に確認したが、本来は全周していたと考えられ、南東壁沿いは03-ＳＩ203Ａ・Ｂの壁溝ラインと重なるとみられる。上場幅0.15～0.2m、下場幅0.05～0.1m、床面からの深さ0.05～0.2mの断面台形状である。壁溝内で本住居跡に伴うとみられるピットを６個確認した。Ｐ１～３は住居隅に配置する主柱穴と考えられる。

本住居跡に伴うカマドは明確ではないが、北東壁を共有することからみて、03-ＳＩ203Ａ・Ｂと同地点を利用した可能性が高い。なお、住居中央部から南東寄りの位置で、直径約1.4m前後の円形の被熱範囲を確認した。壁から離れた位置にあるため、カマドとは考えにくく、鍛冶炉など別な作業場の痕跡と考えられるが、上部堆積土が消失しているため詳細は不明である。

本住居跡は四隅に主柱を配置する住居で、北東壁にカマドを設置したと想定される。度重なる建て替えにより残存部が少なく、住居構造には不明な点が多いが、03-ＳＩ203Ｂ構築に向けて解体したと考えられる。

遺　物(第219図)　上部堆積土の削平が著しく、出土遺物は少ない。219図１は比較的大型の土師器甕で、口縁部まで直線的に外傾する。外面は横位ユビナデ、内面は横位ヘラナデ調整である。

03-ＳＩ206・207・208

本住居跡は、ＭＤ39～41、ＭＥ・ＭＦ39～42、ＭＧ41・42グリッドの、第Ⅵ層上面から中位において、地山土粒を含む土のわずかな分布や、壁溝と柱穴の配置で確認した住居跡である。本住居跡の立地点は台地上部平坦面の中央部で、ほとんど傾斜がない。周辺部では後世の土採りが深く、Ⅵ層地山面にバックホーの爪跡が残る状態のため、壁及び内部堆積土はほとんど残存していない。拡張により５軒の住居が重複し、本住居跡群を03-ＳＩ203・204が掘り込んでいる。周辺には02-ＳＩ01・02・03・07・08・09・10、03-ＳＩ06・102・103がある。

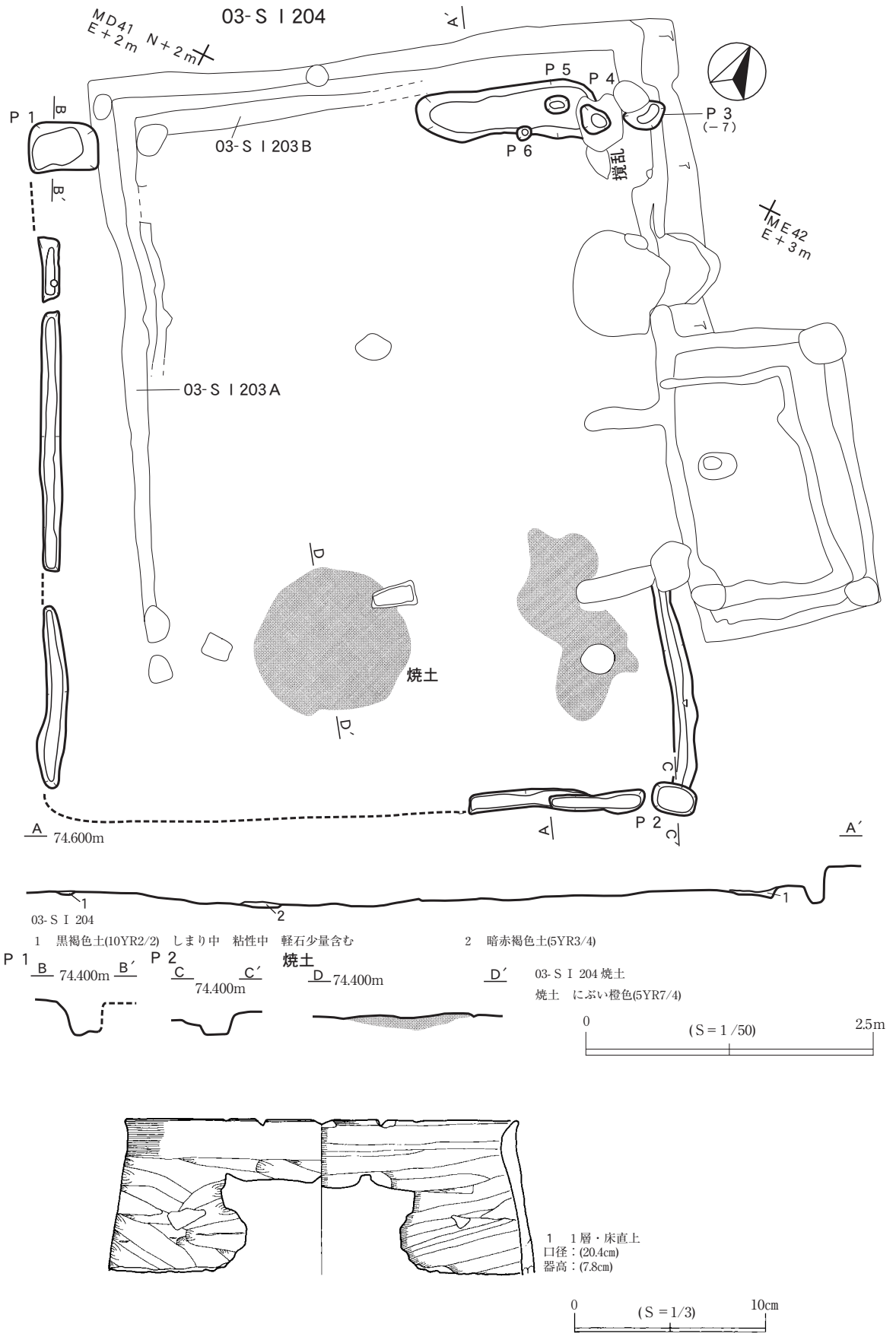
床面精査で確認した壁溝やピットの配置から、206と207は各１回の建て替えを行ったことが判明しており、新しい順に各Ａ・Ｂのアルファベットをつけて標記している。実際には堆積土がほとんど残存していないため明確な新旧関係は不明だが、周囲の状況では同地点で相似形の重複関係にある住居は拡大傾向にあることから、206Ｂ→206Ａ→207Ｂ→207Ａ→208の順で新しくなると考えられる。

03-ＳＩ208(第220図・221図、図版66・67)

遺　構　４回目の建て替えにより、最大規模に達した住居である。平面形は北東－南西方向にわずかに長い長方形で、カマドの付く壁に直交する主軸方位はＮ－40°－Ｗである。主軸とそれに直交するラインで測る住居面積は約103㎡で、超大形の住居である。

隅柱配置で測る各壁の長さは、北東壁約10.1m、南東壁約10.2m、南西壁約10.0m、北西壁約10.3mである。床面は土採りによる撹乱が著しく、緩やかな傾斜がつく状況からみて、残存していないと考えられる。壁溝は伴わず、代わりに壁柱穴が規則的に配置してある。

床面と思われる範囲で、36個のピットを確認した。Ｐ１～４は主柱穴と考えられるが、Ｐ２・３の



第219図　03-ＳＩ204・出土遺物

配置にはズレがある。Ｐ２が南東壁沿いの柱穴で、極端に深いことから主柱穴とみたが、本来はより内側に主柱を設けていた可能性も否定できない。柱穴中心で測る主柱間距離は、Ｐ１－４間約6.2m、Ｐ３－４間約5.0mである。Ｐ５～30・32は壁柱穴で、Ｐ５・16・20・26の隅柱はやや規模が大きい。各壁沿い、５個の壁柱穴を等間隔に配置する傾向にある。Ｐ33～35は北西壁に配置してある壁柱穴と対称の位置に３個並ぶ柱穴で、住居内部区画の痕跡である可能性がある。

カマドに関しては、南東壁の中央から南西寄りの位置で、径約1.4mの不整円形の焼土を確認した。火床面に相当する被熱範囲の下部のみが残存すると考えられる。なお、カマド北部にある焼土は、周辺部に堆積土が残存していないため機能等は明らかでない。

本住居跡は主柱をもち、南東壁にカマドを設置する住居と想定される。削平のため、住居構造には不明な部分が多いが、規模は今回の調査区内でも有数の大きさを誇る。５軒重複する中では最新段階に当たるが、03-ＳＩ204構築段階までには廃絶していたと考えられる。

遺　物(第221図)　上部堆積土の削平が著しく、出土した遺物は少ない。

221図１は比較的小型の土師器甕で、ロクロ目をとどめる。胴部から内傾して頸部で屈曲し、口縁部が短く外反して口端が直立する。口縁部側面には、垂直の面を形成する。221図２は土師器甕の口縁部破片で、頸部が段状にくびれて口縁部が外反し、口唇は角頭状になる。外面縦位ケズリ、内面横位ヘラナデ調整である。

221図３は土師器甕の底部で、砂底である。底部外縁が少し張り出す形状で、外面縦位ケズリ、内面横位ヘラナデ調整である。221図４は土師器鍋と思われる口縁部破片で、直線的に外傾して口端がわずかに外折する器形で、器壁が厚めである。内外面共に横位ヘラナデ調整である。５は底部からの立ち上がりがやや開く形状で、土師器鍋の底部付近の破片とみられる。底面は砂底である。

03-ＳＩ207Ａ(第222図、図版66)

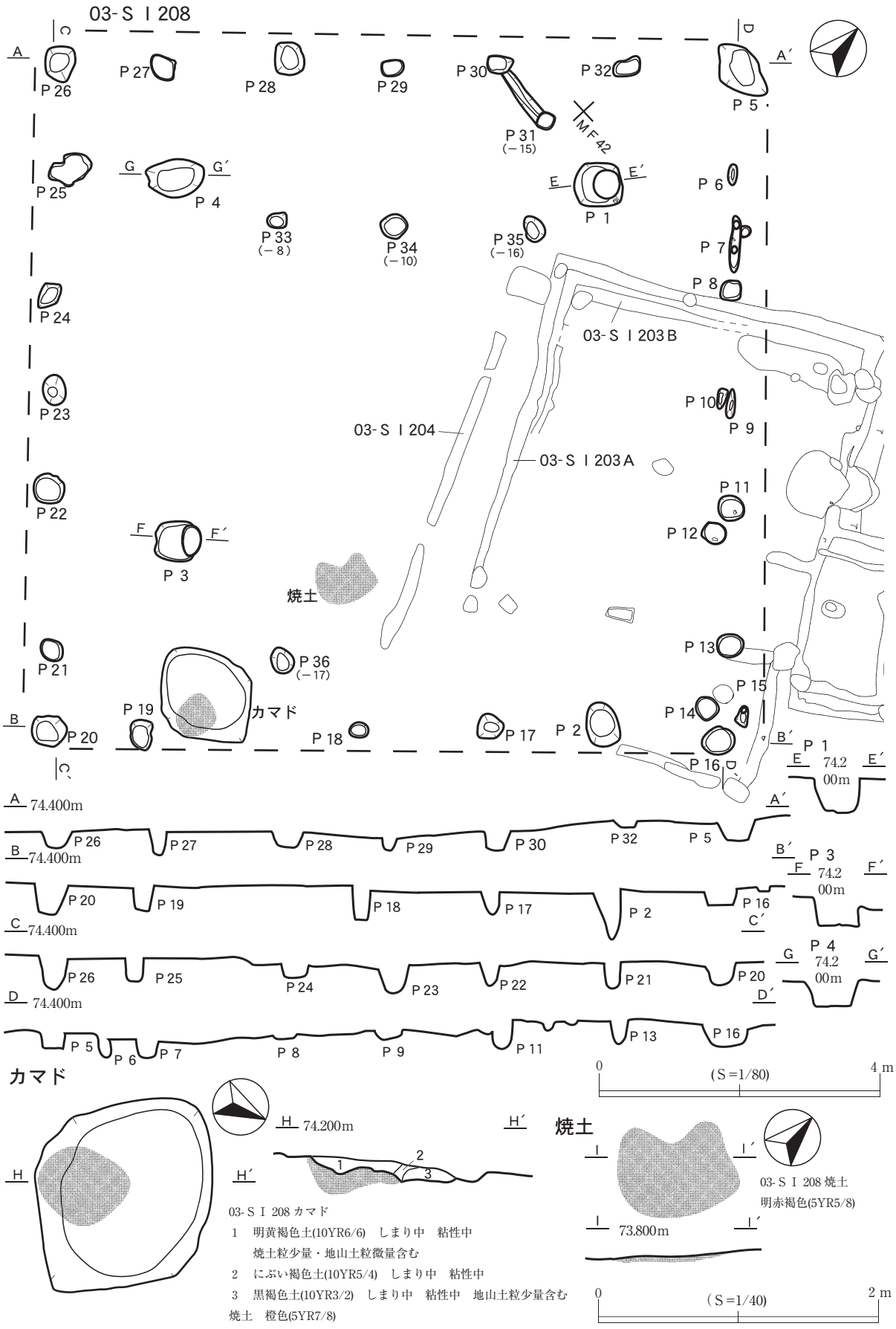
遺　構　３回目の建て替えにより、03-ＳＩ207Ｂよりも規模を拡大した住居である。平面形はほぼ正方形で、南東壁ラインに直交する主軸方位はＮ－40°－Ｗである。主軸とそれに直交するラインで測る住居面積は約68㎡で、超大形の住居である。

隅柱配置で測る各壁の長さは、北東壁約8.2m、南東壁約8.0m、南西壁約8.2m、北西壁約8.4mである。床面は03-ＳＩ208同様に、ほとんど残存しないものと考えられる。壁溝は伴わず、その代わりに壁柱穴を規則的に配置してある。

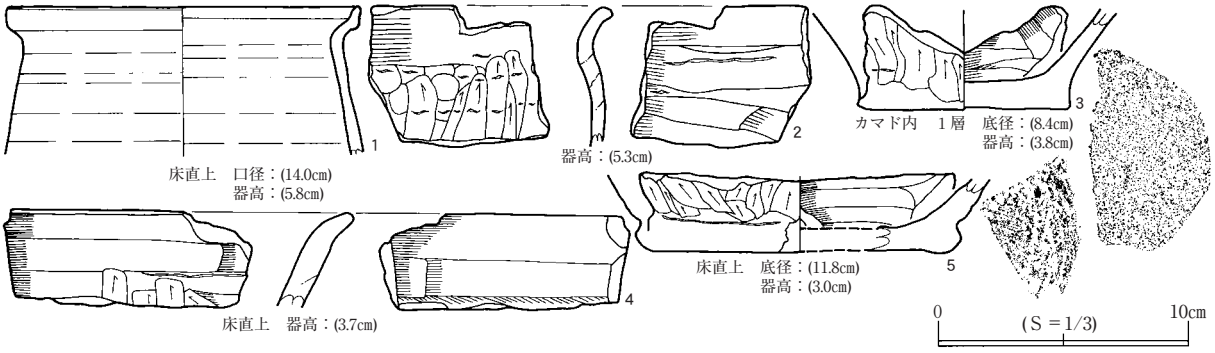
床面と思われる範囲で、13個のピットを確認した。Ｐ１・４・22は主柱穴と考えられるが、Ｐ１の対角線状には柱穴がない。柱穴中心で測る主柱間の距離は、Ｐ１－22間約4.4m、Ｐ１－４間約5.8mである。Ｐ２・３・５～９・11・13・14は壁柱穴で、Ｐ２・８・13の隅柱はやや規模が大きい。各壁沿い、各壁中央部には比較的大きい柱穴を配置している。

本住居跡に伴うカマドは明確でないが、南東壁を共有する03-ＳＩ208と同じ地点を利用した可能性が高い。

本住居跡は主柱をもち、南東壁にカマドを設置する住居と想定される。削平が著しいため住居の情報は不明な部分が多いが、５軒重複する中では４段階目にあたり、03-ＳＩ208へと拡張するために解体したと考えられる。



第220図　03-ＳＩ208・カマド・焼土



第221図　03-ＳＩ208出土遺物

遺　物　本住居跡に伴う遺物は検出できなかった。

03-ＳＩ207Ｂ(第222図、図版66)

遺　構　２回目の建て替えにより、03-ＳＩ206Ａよりも規模を拡大した住居である。平面形は北西－南東方向にわずかに長い長方形で、南東壁ラインに直交する主軸方位はＮ－40°－Ｗである。主軸とそれに直交するラインで測る住居面積は約62㎡で、超大形の住居である。

隅柱配置で測る各壁の長さは、各壁約7.8ｍである。床面は03-ＳＩ207Ａ同様に、ほとんど残存しないものと考えられる。壁溝は伴わず、その代わりに壁柱穴が規則的に配置してある。

床面と思われる範囲で、９個のピットを確認した。Ｐ17・18は隅柱で、Ｐ15・16・20は壁中央部に配置する壁柱穴である。北・東隅に位置する隅柱は、01-ＳＩ207Ａ・208に伴う柱穴により失われていると考えられる。壁柱穴の配置は、北西壁のＰ19～20の３個構成が基本とみられる。なお、住居隅よりも内側に配置する主柱穴として、01-ＳＩ207Ａに伴うＰ１・４・22は、本住居でも機能していた可能性が高い。

本住居跡に伴うカマドは明確でないが、南東壁をほぼ共有する03-ＳＩ208と同じ地点を利用した可能性が高い。

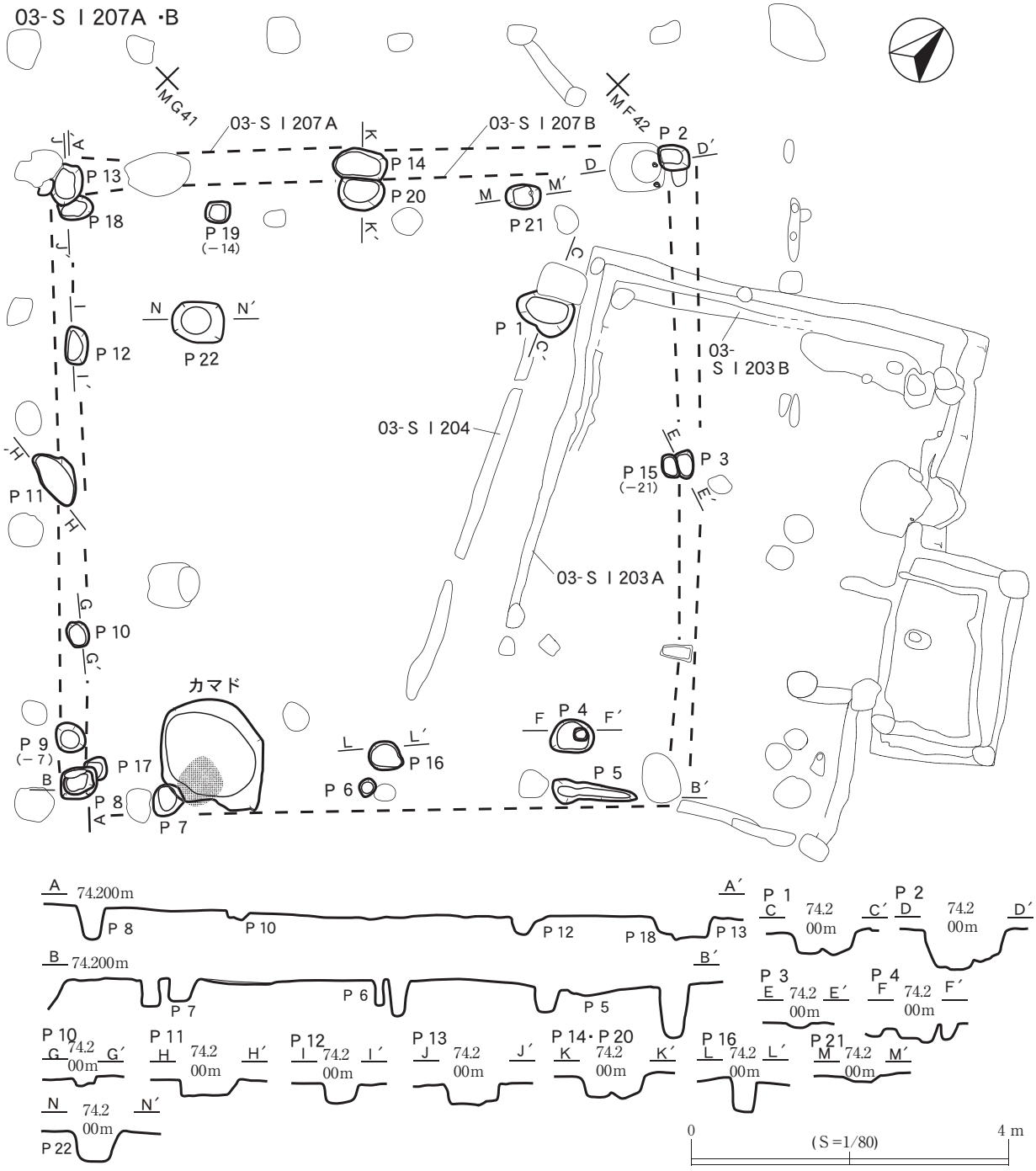
本住居跡は、主柱を配置する可能性が高い住居である。度重なる建て替えによって本来の住居構造は失われており不明な点が多い。５軒重複する中では３段階目にあたり、03-ＳＩ207Ａへと拡張するために解体したと考えられる。

遺　物　本住居跡に伴う遺物は検出できなかった。

03-ＳＩ206Ａ(第223図、図版66・67)

遺　構　１回目の建て替えにより、03-ＳＩ206Ｂよりも規模を拡大した住居である。

床面施設の多くは03-ＳＩ208・207の構築により失われており、わずかに壁溝とピット配置でその存在を確認できるのみである。壁溝とピット配置で想定される平面形はやや平行四辺形で、カマドの付く壁に直交する主軸方位はＮ－40°－Ｗである。主軸とそれに直交するラインで測る住居面積は約27㎡の大形の住居で、予測される各壁の長さは各壁約5.2ｍである。床面は、ほとんどが削平を受けて残存していない。壁溝は北西壁沿いと、南西壁の北東半分で確認した。床面の削平により本来形状は失われているが、上場幅0.2～0.25ｍ、下場幅が0.02～0.2ｍである。

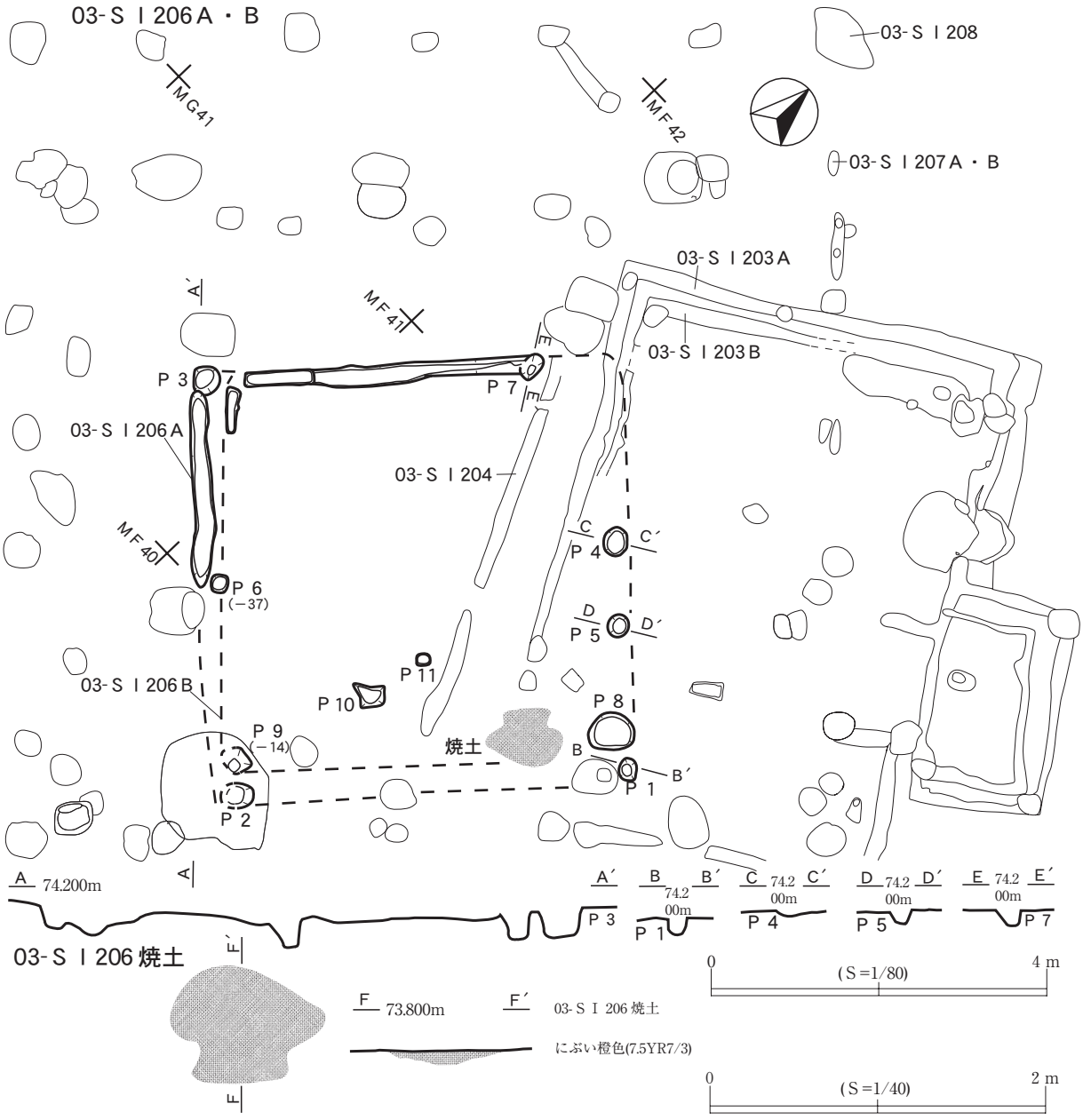


第222図　03-ＳＩ207Ａ・Ｂ

床面と思われる範囲や壁溝内部で、11個のピットを確認した。Ｐ１・２・３は隅に配置する主柱穴、Ｐ５・７は壁中央部の壁柱穴である。Ｐ４・６は壁際中央部に位置することから、壁板保持の補助柱穴と考えられる。

予測される南東壁ラインの中央から北東寄りの位置で、カマド火床面の痕跡とみられる焼土を確認した。上面は削平されて、本来の使用面は失われている。被熱範囲は最長約1.0ｍ、最大幅約0.7ｍの不整な形状である。

本住居跡は四隅に主柱を配置し、南東壁にカマドを設置する住居と想定される。度重なる建て替えにより、住居構造が失われているため不明な点が多い。５軒重複する中では２段階目に当たり、03-Ｓ



第223図　03-ＳＩ206Ａ・Ｂ・焼土

Ｉ207Ｂへと拡張するために解体したと考えられる。

遺　物　本住居跡に伴う遺物は検出できなかった。

03-ＳＩ206Ｂ(第223図、図版66・67)

遺　構　５軒重複する中で最古段階の住居である。本住居跡に関わる下部施設は、03-ＳＩ206ＡＰ１の東側に位置する短い溝跡のみで、壁溝の残穴とみられる。この他03-ＳＩ206ＡのＰ８・９が本遺構に関連するピットになる可能性もあるが、詳細は不明である。

その他床面、柱配置、カマドなどは基本的に不明だが、最もプランの近い03-ＳＩ206Ｂに準じる形状または配置だったと考えられる。

本住居跡はほとんどの住居構造が失われており、存在すら予測の範囲である。５軒重複する中では

最古段階の住居で、03-ＳＩ206Ａへ拡張するのに合わせて廃絶したと考えられる。

遺　物　本住居跡に伴う遺物は検出できなかった。

03-ＳＩ224(第224図～225図、図版68・158・162)

遺　構　ＬＳ・ＬＴ44・45グリッドの第Ⅳ層中位～第Ⅵ層上面で、地山土粒を含む黒色土の広がりで確認した。本住居跡の立地点は台地上部平坦面の南東縁で、東側は急傾斜地になる。弥生時代の土坑である03-ＳＫ320を本住居が掘り込む以外に重複する遺構は少ないが、近接する03-ＳＩ316とは新旧関係があるとみられる。周辺には02-ＳＩ05、03-ＳＩ06・102～106、03-ＳＴ185がある。

堆積土は８層に分けた。１層は住居外部から連続する土で、後世の撹乱の可能性がある。２層が竪穴掘り込みのほとんどを埋め尽くし、壁際に３～７層が堆積する。３～７層は自然堆積の可能性もあるが、２層は地山土粒を多量に含む人為的造成土であり、基本的には埋め立てに伴うものと考えられる。８層は壁溝内堆積土である。

平面形は南北に長い長方形で、カマドの付く壁に直交する主軸方位はＮ－７°－Ｅである。主軸とそれに直交するラインで測る住居面積は約17㎡で、中形の住居である。各壁の長さは、北壁約3.8m、東壁約4.3m、南壁約3.8m、西壁約4.1mである。各壁の検出面からの深さは0.25～0.35mで、立ち上がりはほぼ垂直である。

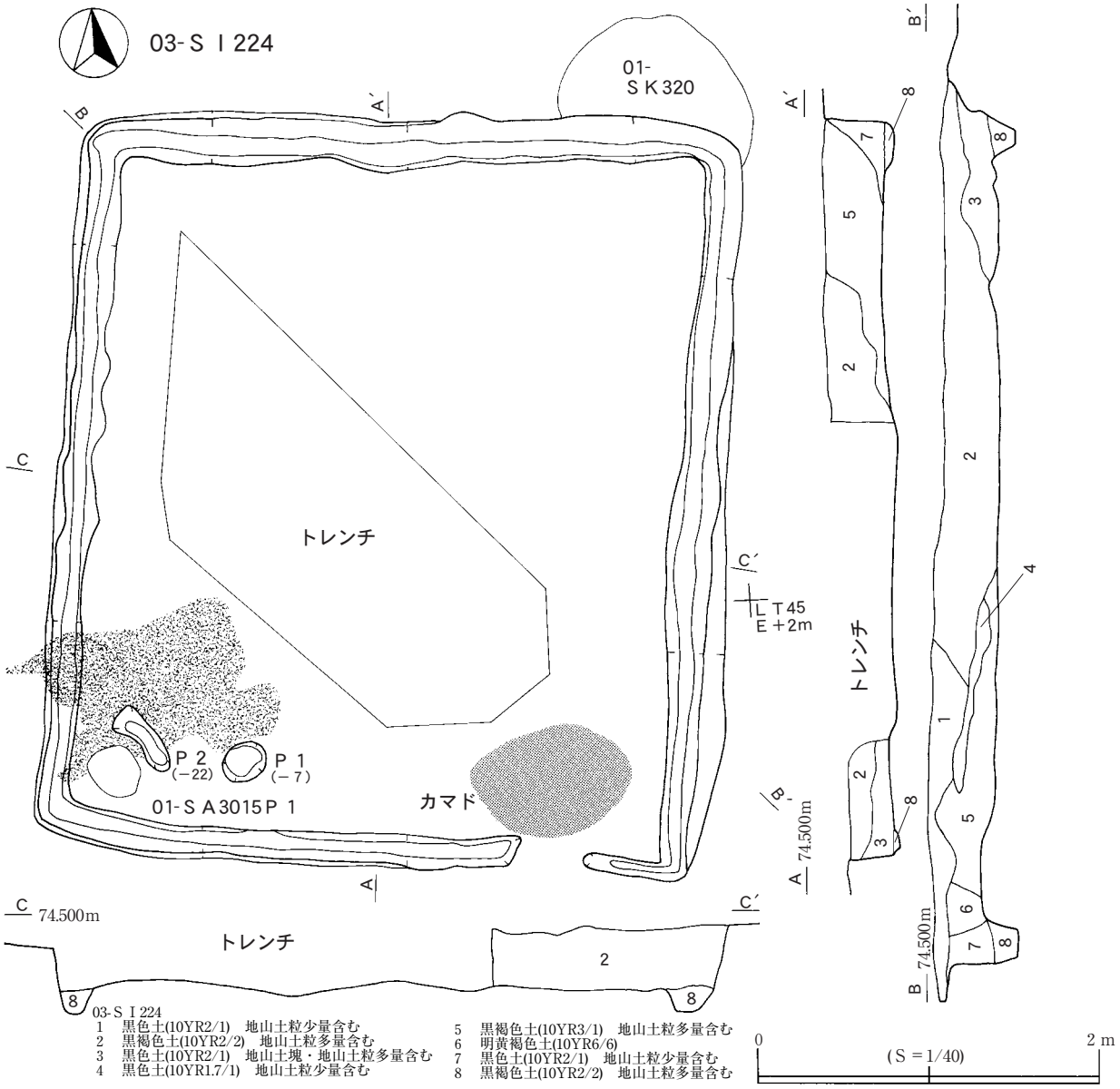
床面は基本的に掘形底面の地山上面を利用しており、一部凹凸が認められる。壁溝はカマド以外の全周で確認した。上場幅0.12～0.26m、下場幅0.03～0.14m、床面からの深さ0.05～0.2mの断面台形状である。床面で２個のピットを確認した。Ｐ１・２は南壁南西隅付近に２個並んで配置してあり、カマドと相対的な位置であることから、出入り口の痕跡である可能性が高い。なお、２個のピット上部には、住居上場から連なる粘土分布が認められる。他の住居のあり方からして、スロープ状の出入り口施設になるとみられ、Ｐ１・２で構成される出入り口からの造り替えが想定される。

カマドは南壁の中央から東寄りの位置で、焼土粒を含む黄色系の堆積土の分布範囲で確認した。上部構造の多くは住居跡廃絶時に壊しており、規模や形状ははっきりしない。確認できた施設は火床面のみである。上部に堆積する土は９層に分けられるが、構築粘土の崩落土と流入土の互層である。火床面は不整な楕円形状の被熱範囲で、長径約0.95m、短径約0.65mで、最大で深さ0.15mまで被熱が及ぶ。主軸方位は住居主軸方位に平行する。

本住居跡は明確な主柱穴をもたず、南壁にカマドを設置する住居である。南壁のカマドと相対する位置には出入り口が付属するとみられる。廃絶後は人為的に埋め戻しており、周辺の状況からみて、03-ＳＩ316構築時の造成である可能性が高い。

遺　物(第225図)　住居跡内から土師器甕・坏が出土した。遺物出土量は少ないが、土師器坏は良好な資料が出土している。出土が多いのはカマド周辺で、崩落土上部から土師器坏が出土することから、カマド廃絶時の意図的な遺棄行為とみられる(第225図)。

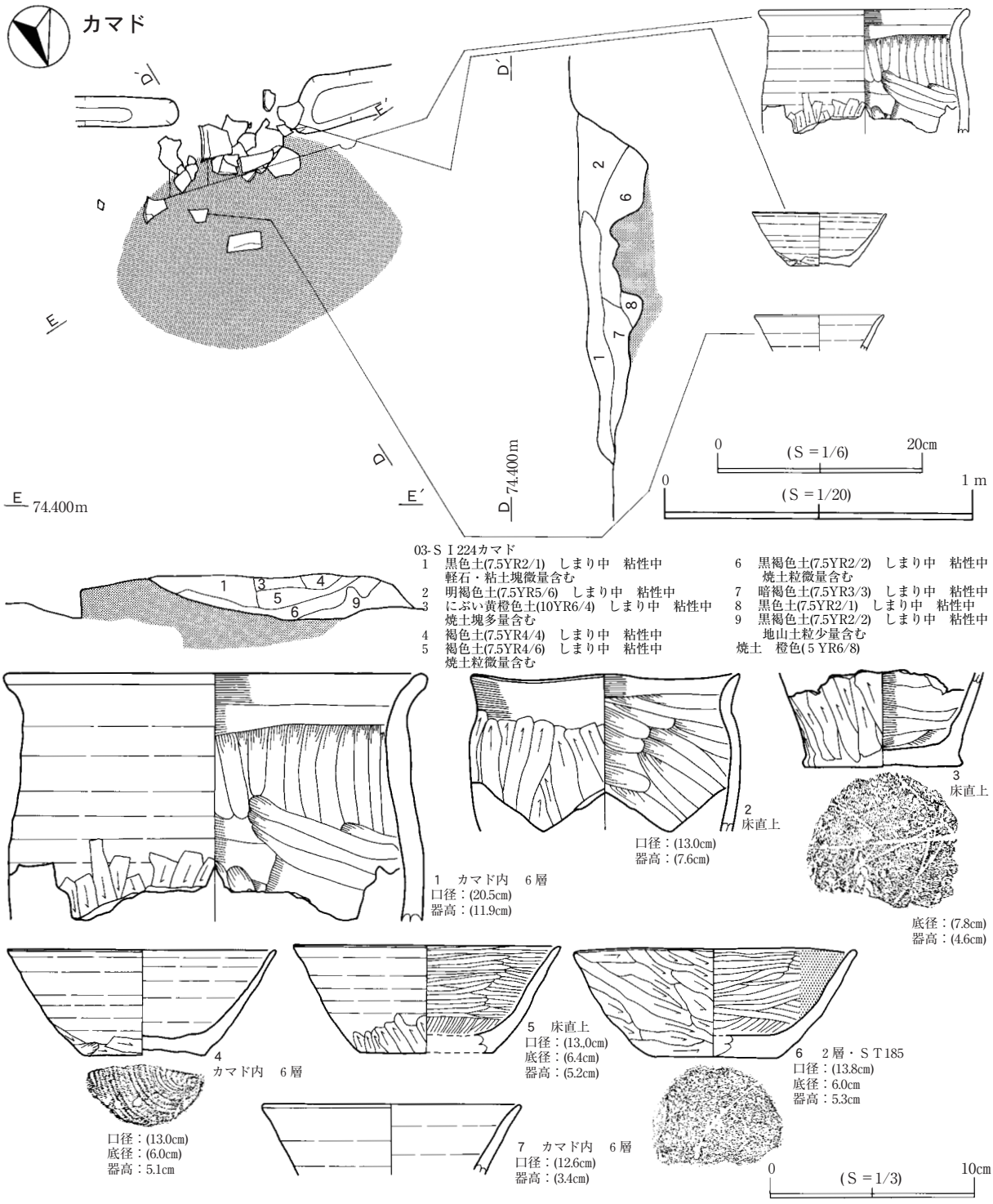
225図１は比較的中・大型の土師器甕である。ロクロ目を残すもので、胴部中位が張り出し、頸部にかけて内傾し、口縁部が外反する。外面胴部中位以下は縦位ケズリ、内面胴部中位は横・斜位のヘラナデ・ユビナデ、胴上部は縦位ユビナデにより再調整を施す。225図２は比較的小型の土師器甕で、胴上部が張り出し、頸部が段状にくびれて口縁部が外反する。外面縦位ケズリ、内面斜位ユビナデ調



第224図　03-ＳＩ224

整である。225図３は土師器甕の底部で、木葉痕を残す。底部外縁が張り出す形状で、外面縦位ケズリ、内面横位ヘラナデ調整である。

225図４～７は土師器坏である。４・７がＡ類、５がＣ類、６はＤ類で内面に黒色処理を施す。４は約1/3が残存する資料で、底部から口縁部まで直線的に外傾し、口縁部でわずかに内湾する器形で、口端内面には稜を形成する。口唇は丸みを帯びた形状である。底部の回転糸切痕は筋幅が広くて粗い。内外面のロクロ目も間隔が広く、曲線的な凹凸をとどめる。外面底部付近に疎らにケズリ再調整を施す。５は比較的厚みのある底部から直線的に外傾し、口縁部がわずかに外反する。外面底部付近にはケズリで再調整を施す。内面は胴下部まで放射状の、それ以上は横位のミガキを施す。底面は回転糸切痕を残す。６は約1/3が残存する資料で、底部から内湾して立ち上がり、口縁部がほんのわずかに外反する器形である。底部は砂底で、外面は斜位のケズリで調整し、内面は底部が交差状の、胴から口縁部が横位のミガキを施す。全体に器壁が厚いが、丁寧な作りである。７は口縁部の破片で、直線的に外傾して、口縁部がわずかに外反する器形である。



第225図　03-ＳＩ224・カマド・遺物出土状況・出土遺物

03-ＳＩ316

本住居跡はＬＳ・ＬＴ・ＭＡ45～47グリッドの第Ⅳ層中位～第Ⅵ層上面で、地山土塊を含む黒色土の広がりで確認した住居跡である。本住居跡の立地点は台地南東縁に近く、東側は急な崖になっている。重複する遺構はないが、03-ＳＩ105・224は近接した位置にあり、新旧関係があると考えられる。周辺には、03-ＳＩ102・104・106、03-ＳＴ185がある。

精査の結果、堆積土また壁溝やピットの配置から、２回の建て替えが認められ合計３軒の住居跡が

重なることが判明している。新しい順にＡ・Ｂ・Ｃのアルファベットを付けて表記した。なお、本住居跡は相似形プランで、軸方位も同じ住居が縮小する関係にある。こういった例は少なく、特殊な事例である。

03-ＳＩ316Ａ(第226図～228図、図版69・70・149)

遺　構　２回目の建て替えにより、北壁に張り出しを配置替えした新段階の住居で、最大規模の01-ＳＩ316Ｃの北東隅に位置する。

堆積土は９層に分けた。１～７層は全て黒色基調でレンズ状堆積を示すが、地山土塊を含む土であり、人為的に埋め戻したと考えられる。８・９層は壁溝内堆積土だが、平行に堆積しており、廃絶時に壁板を抜取った穴に流入したとみられる。

基本的な平面形は、東西方向に長い長方形で、カマドの付く壁に直交する主軸方位はＮ－６°－Ｗである。主軸とそれに直交するラインで測る住居面積は約28㎡で、大形の住居である。張り出しを抜かした各壁の長さは、北壁約5.6m、東壁約4.9m、南壁約5.3m、西壁約4.6mである。壁の検出面からの深さは0.3m前後で、ほぼ垂直に立ち上がる。カマドと対角線の北壁の東半分の位置には、住居壁直交方向で約0.7m、住居壁平行方向で約2.4mの張り出しがある。床面レベルが住居内と全く同じで、壁の立ち上がりはほぼ垂直である。他の住居の張り出しに比べて、やや住居壁直交方向が短いが、出入り口になると考えられる。

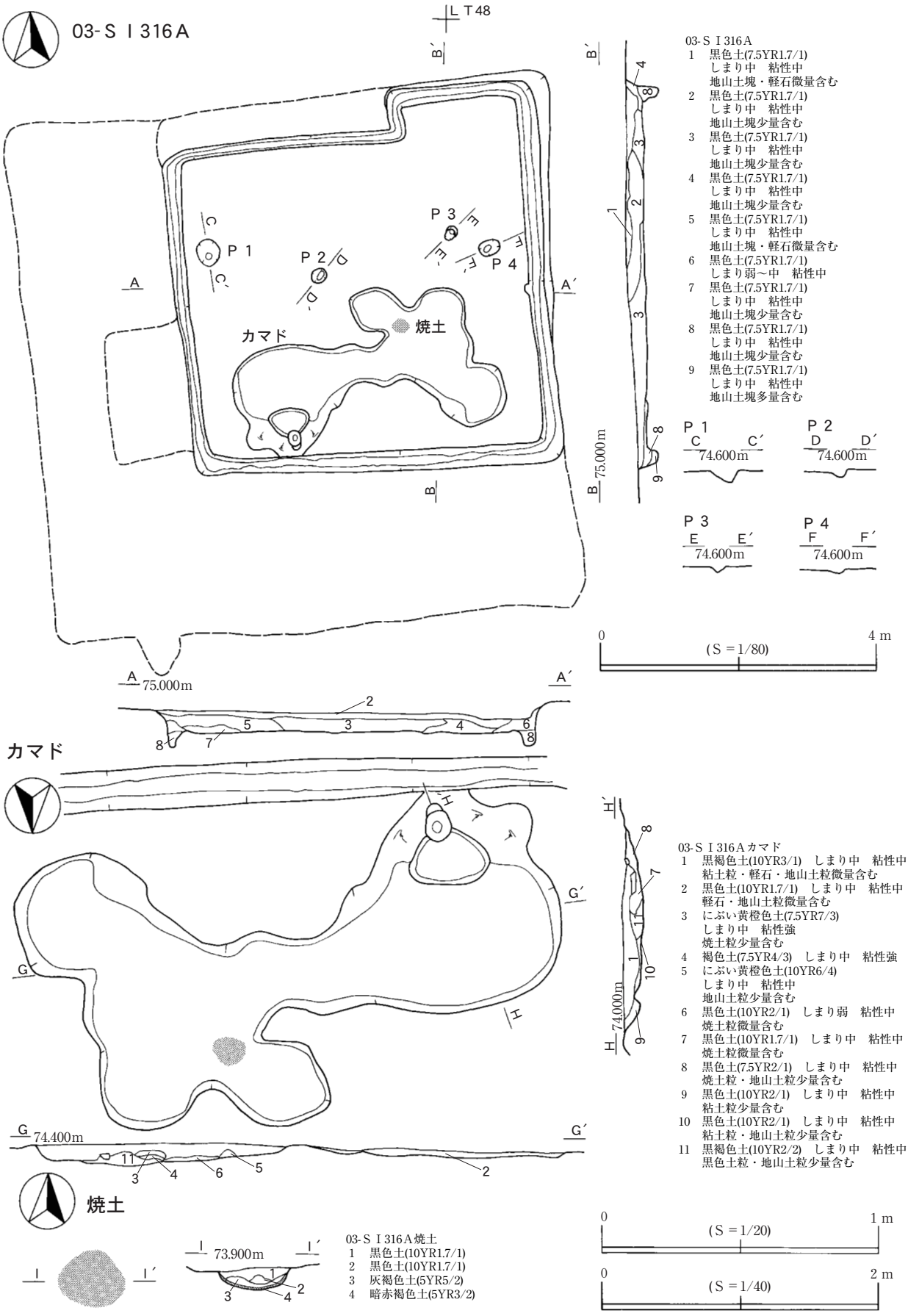
床面は、03-ＳＩ316Ｂ段階の貼床面を踏襲している。壁溝は全周で確認した。上場幅0.15～0.3m、下場幅0.05～0.13m、床面からの深さ0.2～0.25mの断面台形状である。張り出し部も、一連の壁溝が巡っており、逆に張り出し部を区画するような施設は見当たらない。床面で４個のピットを確認したが、配置が不規則であり、本住居跡に伴うかは疑問である。

カマドは南壁の中央から西寄りの位置で、基底部の掘り込み範囲で確認した。カマド上部構造は完全に失われており、基底部の掘形と前庭部のみ確認した。堆積土は11層に分かれるが、カマド構築土に関する土は少なく、開口部に流入した土がほとんどである。住居壁から前庭部末端まで約1.8m、前庭部最大幅が約3.9mである。前庭部は南壁に沿った不規則な形状であり、想定されるカマド本体前面よりも東側へ延びる。カマド基底部の掘り込みは、前庭部南壁寄りの位置にあり、２段の窪みとして残存する。

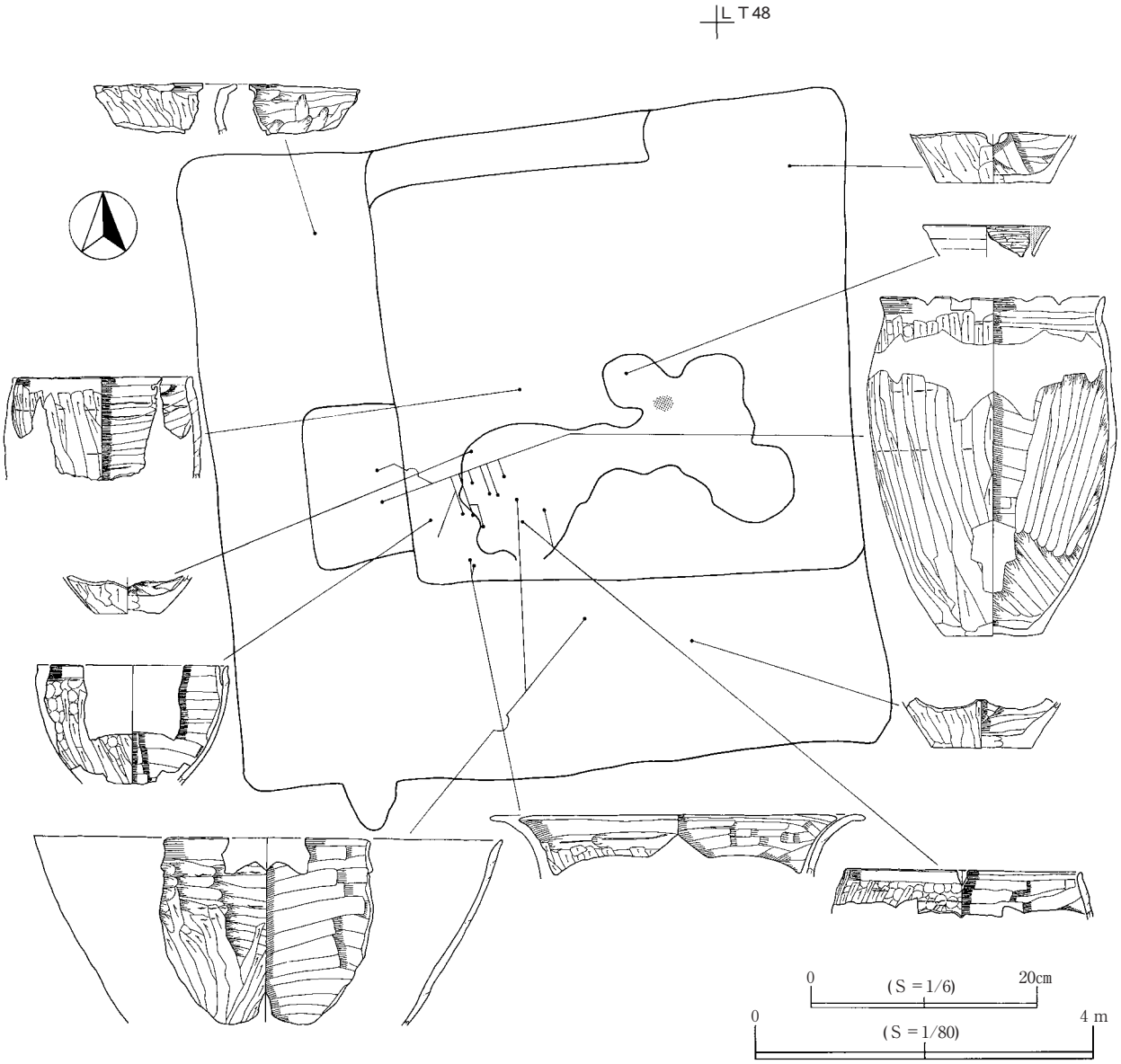
カマド前庭部に連なる掘り込み内部の、住居中央部からやや南東寄りの位置で焼土を確認した。長径約0.25m、短径約0.2mの不整な楕円形状の被熱範囲で、床面からの深さ約0.08mの鍋底状掘り込みの底面が被熱しており、鍛冶炉跡の可能性を疑い、25cmメッシュでの土壌取り上げを行ったが、砂鉄は含まれるが鍛造剥片は見つからなかった。

本住居跡は主柱を配置せず、南壁にカマドを設置する住居である。住居中央部には何らかの作業場とみられる焼土がある。廃絶後は人為的に埋め戻している。周辺部の状況からみて、03-ＳＩ104構築段階には廃絶していたと考えられる。

遺　物(第228図)　住居跡内から土師器甕・坏、鉄製品、土製品が出土した。土師器甕は口縁部が29点、底部が19点出土しており、そのうち比較的大型の口縁部資料５点、底部資料５点を図示した。なお図示しなかったものを含めた甕の口縁部分類別数量はＡ類(０点)、Ｂ類(１点)、Ｃ類(15点)、Ｄ類(８点)、



第226図　03-ＳＩ316Ａ・カマド・焼土



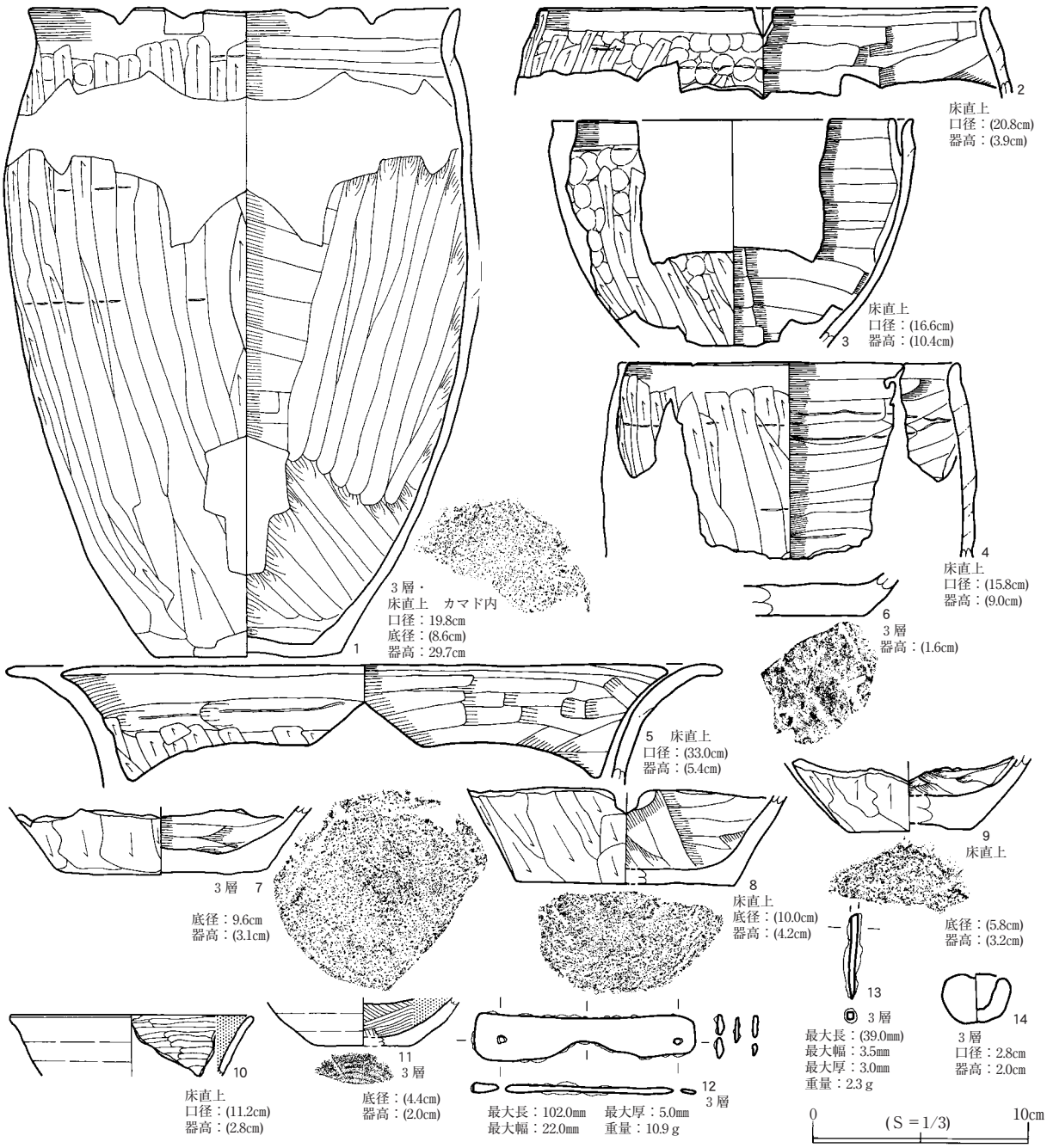
第227図　03-ＳＩ316Ａ遺物出土状況

その他(１点)、分類不能(４点)で、底部分類別数量は砂底(15点)、木葉痕(１点)、ケズリ(３点)の内訳になる。圧倒的にＣ類と砂底が多い。

遺物の出土はカマド周辺部に集中する(第227図)。228図１の土器は、03-ＳＩ316Ｂの張り出し内部からも破片が出土していることから、本住居跡ではカマド部材として再利用したものとみられる。

228図１・２・５は比較的中・大型の土師器甕である。１は全体形状が窺える資料で、底部から内湾気味に立ち上がって胴部中位が張り出し、頸部に向けて内傾して口縁部が直立気味に外反する器形である。外面縦位ケズリ、内面は横位ヘラナデの後に縦・斜位のユビナデで再調整する。底面は砂底である。５は口縁部が長く外反する器形で、ほぼ真横に延びる。外面縦位ケズリ、内面横位ヘラナデ調整である。２は口縁部まで内湾する器形で、口端がわずかに直立気味に反る。外面縦位ケズリ、内面横位ヘラナデ調整である。

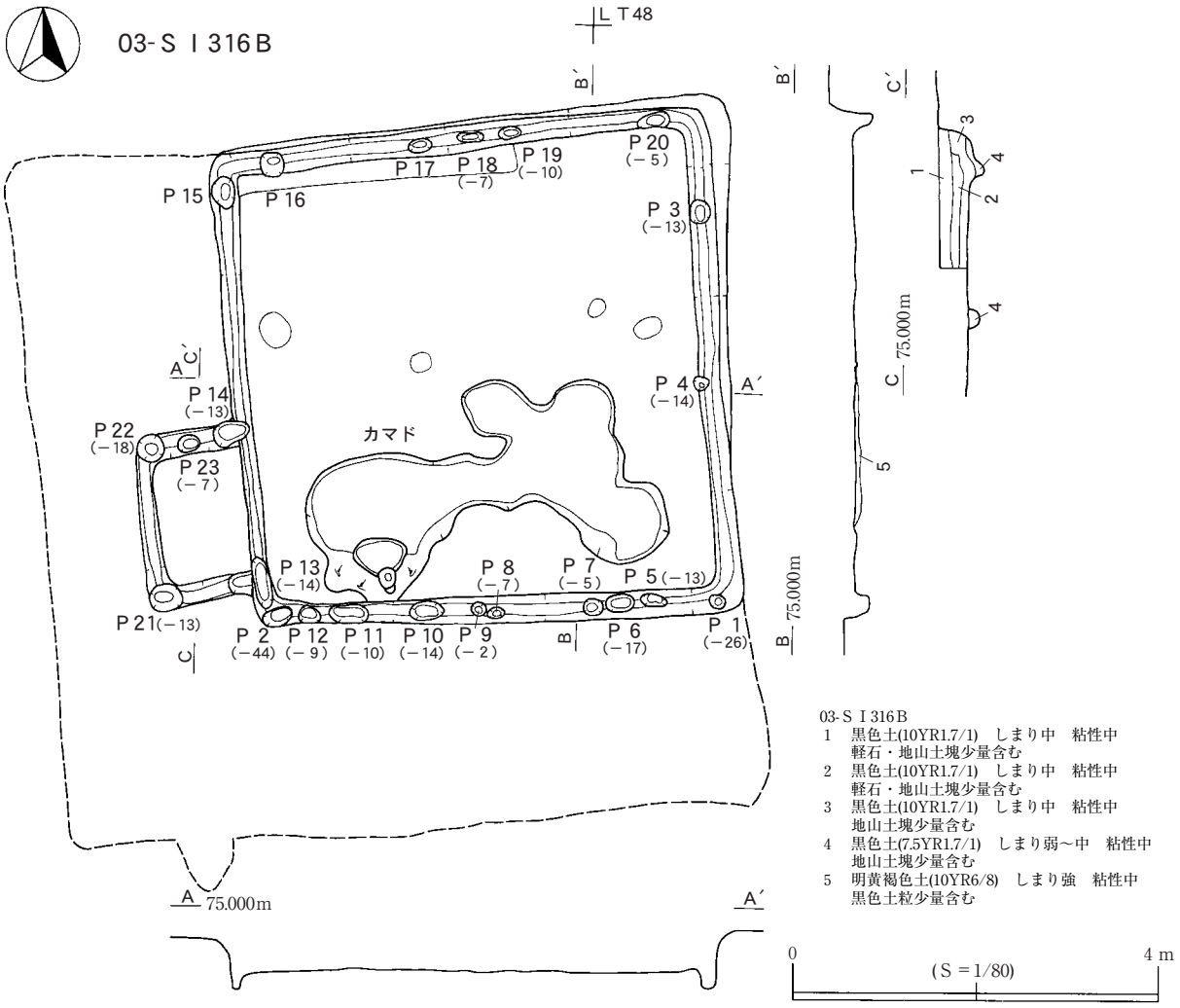
228図３・４は比較的小型の土師器甕である。３は底部に対し口径が開く器形である。口縁部まで内湾して、口端がつまみ出し状にわずかに直立する。外面は疎らな縦位ケズリの隙間に、指の押さえ



第228図　03-ＳＩ316Ａ出土遺物

をとどめる。内面は横位ヘラナデ調整である。４は胴部中位が張り出して口縁部まで内湾する。外面縦位ケズリ、内面横位ヘラナデ調整である。228図６～９は土師器甕の底部である。６は木葉痕をとどめ、７～９は砂底である。底部の立ち上がり形状は、全て直線的に外傾する。

228図10・11は土師器坏で、いずれもＢ類である。10は口縁部破片で、口縁部にかけて外反する。内面には横方向のミガキを施している。11は底部で、底面に回転糸切痕を残し、底部から外傾して立ち上がる形状である。228図12・13は鉄製品である。12は穂摘具で、ほぼ全体が残存している。両端に目釘穴が認められ、刃部は凹刃状に窪んでいる。13は上部を欠損する棒状のものである。228図14は小型土器で、猪口のような形状だが、作りは粘土を半球状に丸めただけのものであり、容器としての機能は疑わしい。



第229図　03-ＳＩ316Ｂ

03-ＳＩ316Ｂ(第229図、図版69・70)

遺　構　１回目の建て替えにより、03-ＳＩ316Ｃよりも規模を縮小した住居で、西壁に張り出しが付く。03-ＳＩ316Ａとプランがほぼ同じで、堆積土は張り出し内部と、住居北西隅にのみ残る。１～４層は張り出し内部の堆積土で、水平堆積することから人為的な造成土の可能性がある。５層は貼床で、03-ＳＩ316Ｃ床面よりもかさ上げするために施す。

基本的な平面形は、東西方向にわずかに長い台形で、カマドの付く壁に直交する主軸方位はＮ－６°－Ｗである。主軸とそれに直交するラインで測る住居面積は約29㎡で、大形の住居である。各壁の長さは、北壁約5.6m、東壁約5.6m、南壁約5.3m、西壁約5.2mである。壁の検出面からの深さは0.3～0.4mで、ほぼ垂直に立ち上がる。西壁の約南半分には、住居壁直交方向で約1.3m、住居壁平行方向で約1.9mの張り出しがある。コ字形に壁溝が巡り、四隅にはピットを伴う。床面レベルが住居内とほぼ同じだが、造成土を伴う可能性があり、使用時の様相は不明である。基本的にはカマド脇の出入り口と考えられる。

床面は部分的に貼床を施す。壁溝は全周で確認でき、上場幅0.15～0.3m、下場幅0.05～0.13m、床面からの深さ0.2～0.25mの断面台形状である。壁溝内部や張り出し内部で、23個のピットを確認した。Ｐ１・２は住居隅に位置する主柱穴と考えられる。北東・北西隅は明確でないが、壁溝底面を利用し

たものと思われる。Ｐ３～20は壁柱穴で、Ｐ４・８・９・18が壁中央部に位置し、これと住居隅の間に補助的に幾つかの柱穴を配置している。

本住居跡に伴う独自のカマドは確認できなかったが、規模やプランがほぼ同じ03-ＳＩ316Ａと同地点を利用したと考えられる。

本住居跡は四隅に主柱をもち、南壁にカマドを設置する住居である。カマド脇には張り出しを配置する。03-ＳＩ316Ａ構築時に一部埋め立て造成を行うが、壁溝などはそのまま利用したものと考えられる。

遺　物　堆積土中から土師器甕の破片が出土しているが、小片のため図示しなかった。

03-ＳＩ316Ｃ(第230図・231図、図版69・70)

遺　構　３軒の中で最古段階の住居で、最も規模が大きい。残存部の堆積土は10層に分かれるが、10層が壁溝内堆積土で、壁板裏込めの残存である他は、03-ＳＩ316Ｂ構築時の造成土である。

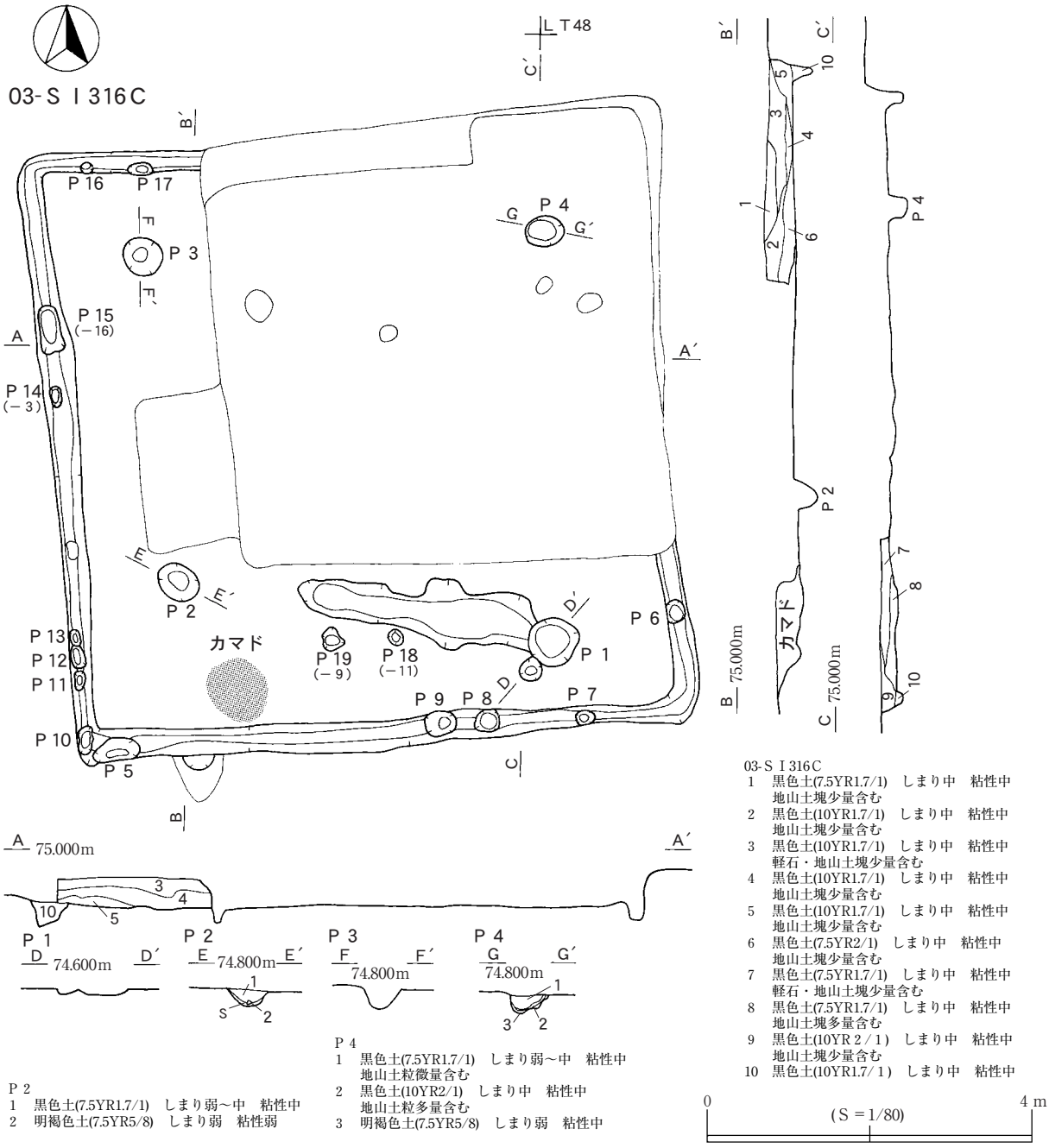
平面形はほぼ正方形で、カマドの付く壁に直交する主軸方位はＮ－６°－Ｗである。主軸とそれに直交するラインで測る住居面積は約56㎡で、特大形の住居である。各壁の長さは、北壁約7.8m、東壁約7.7m、南壁約7.6m、西壁約7.5mである。壁の検出面からの深さは、傾斜上位の北壁で約0.3m、傾斜下位の南壁で約0.2mで、ほぼ垂直に立ち上がる。

床面は基本的に掘形底面の地山面を利用している。壁溝は全周で確認でき、上場幅0.2～0.45m、下場幅0.08～0.25m、床面からの深さ0.2～0.3mである。床面及び壁溝内部で、19個のピットを確認した。Ｐ１～４は、住居隅より内側に配置する主柱穴である。柱穴中心間で測る柱穴間距離はＰ１－２間約4.7m、Ｐ３－４間約5.0m、Ｐ１－４間約5.0m、Ｐ２－３間約4.0mで、カマドに規制されるＰ２の位置だけ、やや北寄りになる。Ｐ６～17は壁溝内に配置する壁柱穴である。Ｐ18・19は、カマド脇に壁と平行して２個並ぶことから出入り口に関わる下部構造の可能性がある。なお、Ｐ19からＰ１にかけて延びる溝状の浅い掘り込みを伴うが、Ｐ18・19との関連が深いと考えられる。

カマドは南壁の中央から西寄りの位置で、上部構造材の崩落粘土の広がりで確認した。基本的に上部構造は破壊しており、確認できたのは煙道の掘り込みと火床面である。堆積土は６層に分けた。１～５層までは、上部構造の倒壊土と周囲からの流入土の互層である。６層はカマド奥壁部を造成した土とみられる。煙道部は、末端にＵ字状の高まりを残したスロープである。火床面は長径0.84m、短径約0.68mの不整な楕円形状の被熱範囲である。

本住居跡は４本の主柱をもち、南壁にカマドを設置する住居である。３軒重複する03-ＳＩ316の中では最古段階に当たる。03-ＳＩ316Ｂ構築に向けて解体したと考えられる。

遺　物(第231図)　堆積土中から土師器甕・鍋が出土した。廃絶後の埋め戻しの造成土に含まれる遺物であり、破片が多い。231図２は土師器甕の口縁部破片で、頸部で直立して、口縁部が短く外折する器形である。外面の縦位ケズリは口端まで及び、内面は乱雑にユビナデを施す。231図３は土師器甕の底部で、砂底である。外面底部付近から始まる縦位ケズリにより、器表面を平滑に仕上げている。231図１は土師器鍋で、胴部には不規則な屈曲も認められるが、ほぼ直線的に外傾して立ち上がり、口端がわずかに外反する。外面は胴下部まで縦位ケズリを施すが、上部は横位ユビナデを残す。内面は横位ヘラナデ調整である。



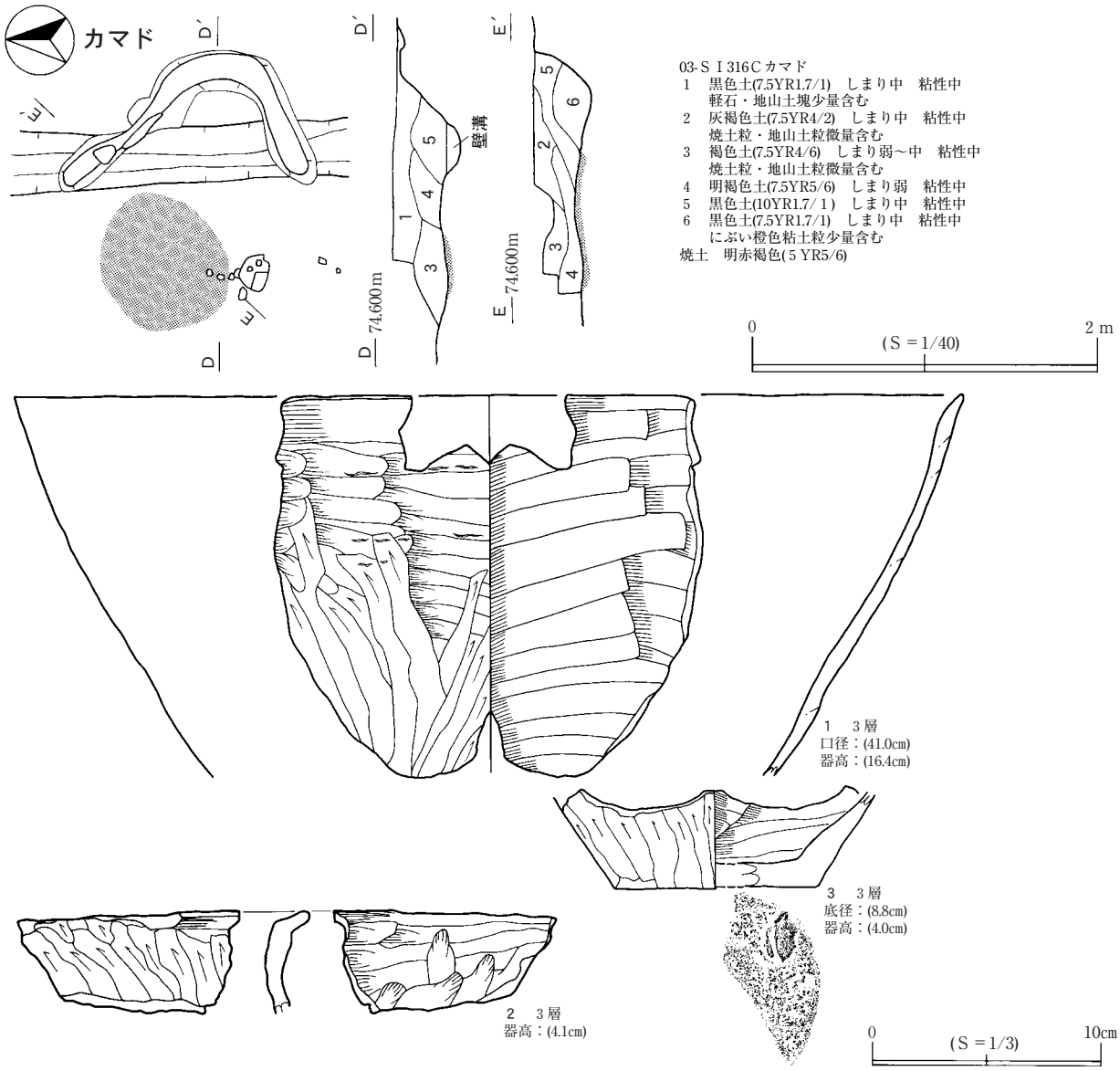
第230図　03-ＳＩ316C

03-ＳＩ336(第232図・233図、図版71)

遺　構　ＬＰ・ＬＱ52・53グリッドの第Ⅳ層中位～第Ⅵ層上面で、地山土塊を含む黒色土の広がりで確認した。本住居跡の立地点は台地上部平坦面の南東縁に近く、南東側へ傾斜する。03-ＳＫ186と重複し、本住居跡の方が古い。周辺には03-ＳＩ576・609・854、05-ＳＳ1001・1002、03-ＳＤ323・1002～1003、03-ＳＸ606・608がある。

堆積土は３層に分けた。住居内のほとんどを埋め尽くすのは２層であり、この状態から人為的に埋め立てたと考えられる。３層は貼床である。

住居西半分は撹乱により失われているが、ピット配置から推測される平面形は台形で、住居軸方位はほぼ東西南北に合わせてある。住居面積は約22㎡で、中形の住居である。各壁の長さは、北壁約4.7



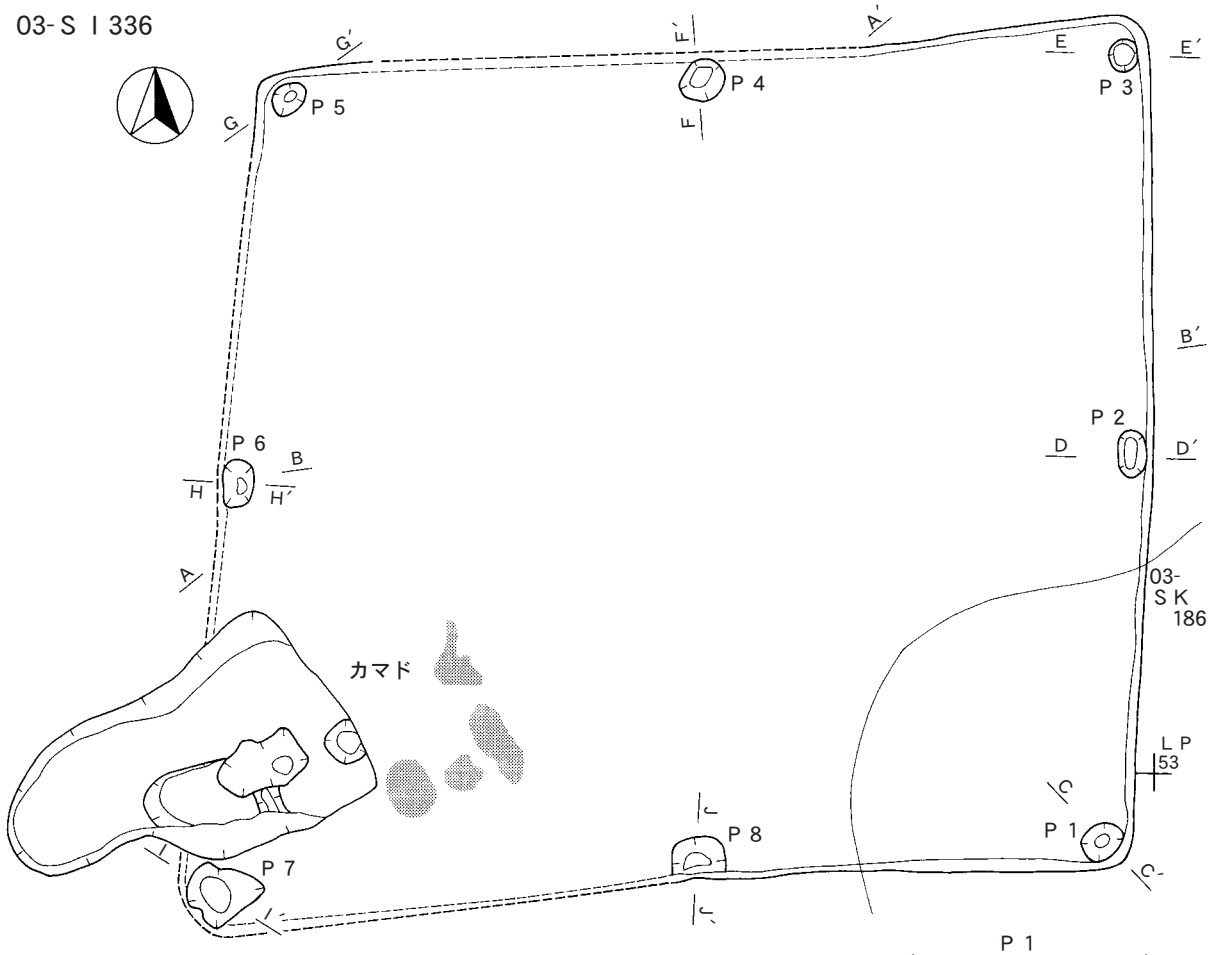
第231図　03-ＳＩ316Ｃカマド・出土遺物

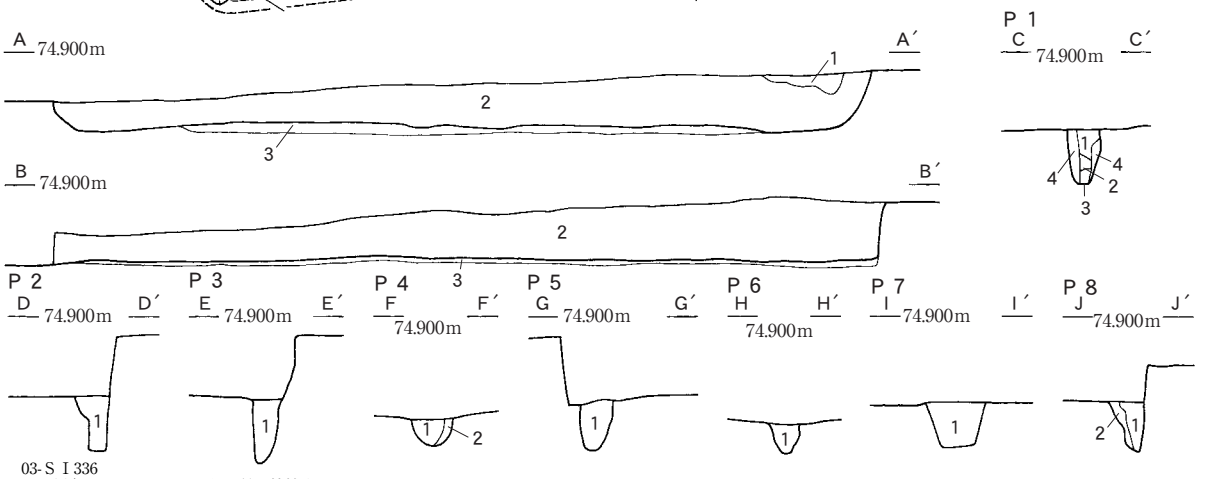
m、東壁約4.5m、南壁約5.0m、西壁約4.5mである。北壁の検出面からの深さは約0.3mで、立ち上がりはほぼ垂直である。

床面は大部分に貼床を施すが、斜面上位となる北壁沿いでは、一部掘形底面の地山面を利用している。壁溝は確認できず、壁際には柱穴のみが分布する。床面で確認したピットは８個で、Ｐ１・３・５・７は住居隅の主柱穴、Ｐ２・４・６・８が壁中央部の壁柱穴である。主柱穴の中心で測る距離はＰ１－３間約4.2m、Ｐ５－７間約4.2m、Ｐ１－７間約4.7m、Ｐ３－５間約4.4mである。

カマドとみられる掘り込みを西壁南西隅付近で確認した。周囲はトレンチによりⅥ層上面以下まで削平されており、本来の構造を示す上部堆積土は完全に失われ、周辺部にわずかに散在する焼土分布の存在からカマドの可能性があると判断した。掘り込みは住居壁外部から続くスロープ状の断面形で、住居内側に２個ピットが付属する。焼土はそれよりも住居中央寄りに４か所認められる。

本住居跡は四隅に主柱をもち、西壁にカマドを設置する住居と想定される。周辺の遺構配置からみて、05-ＳＳ1001・1002に関連する工人の住まいだった可能性がある。廃絶後は人為的に埋め立て造成





03-ＳＩ336
1　黒色土(10YR2/1)　しまり弱　粘性中
　軽石少量含む
2　黒褐色土(10YR2/2)　しまり中　粘性中
　黒色土粒少量含む
3　黒色土(7.5YR1.7/1)　しまり中　粘性中
　軽石・地山土塊微量含む

P 1
1　黒色土(7.5YR2/1)　しまり中　粘性中
2　黒色土(7.5YR2/1)　しまり中　粘性中
　黒褐色土粒微量含む
3　黒色土(7.5YR1.7/1)　しまり弱～中　粘性中
4　黒色土(7.5YR2/1)　しまり中　粘性中
　地山土塊多量含む

P 2
1　黒色土(7.5YR2/1)　しまり中　粘性中

P 3
1　黒色土(7.5YR2/1)　しまり中　粘性中

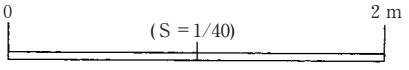
P 4
1　黒色土(7.5YR1.7/1)　しまり弱　粘性中
2　黒色土(7.5YR2/1)　しまり中　粘性中
　地山土塊少量含む

P 5
1　黒色土(7.5YR1.7/1)　しまり弱　粘性中

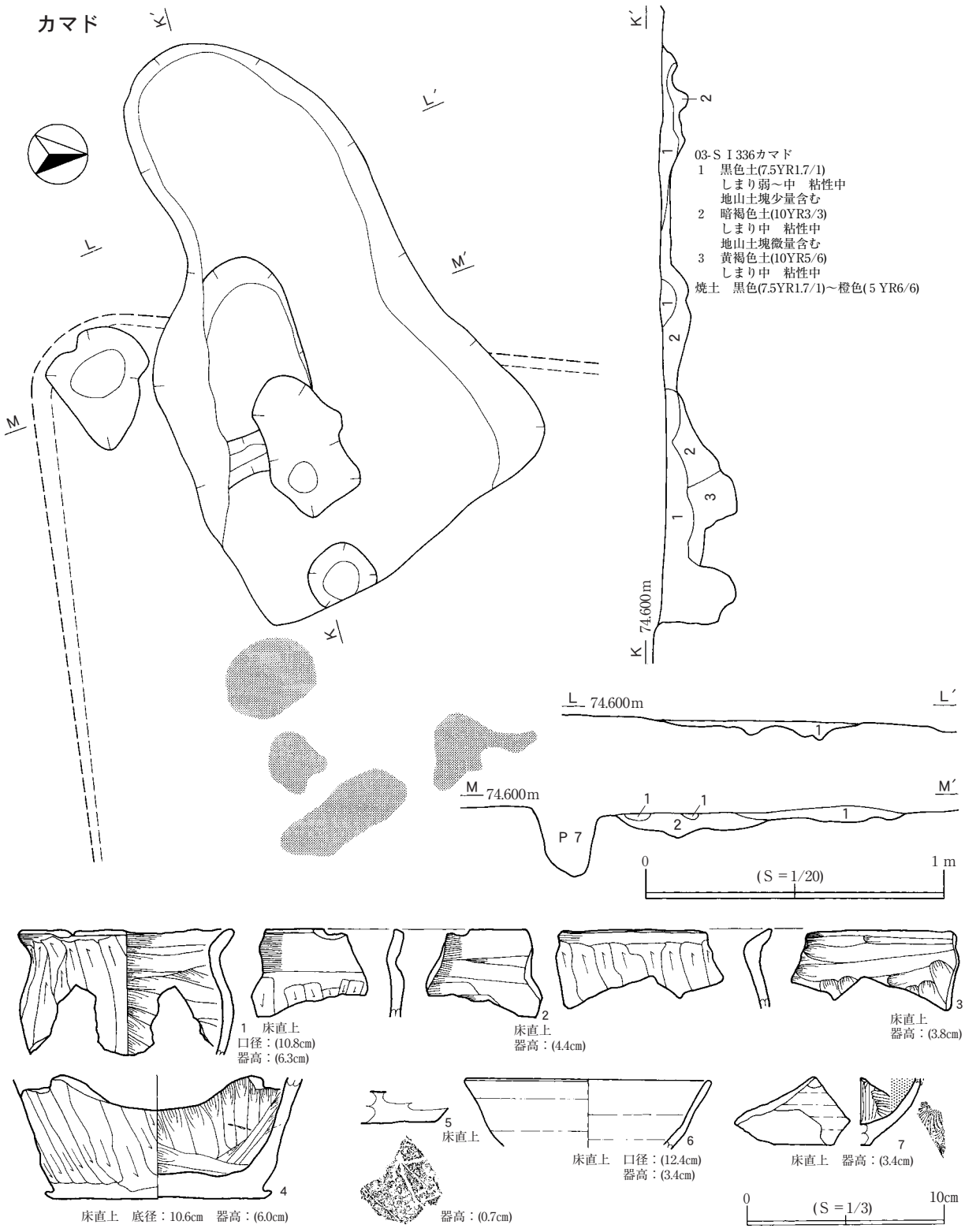
P 6
1　黒色土(7.5YR2/1)　しまり中　粘性中
　地山土塊少量含む

P 7
1　黒褐色土(10YR3/2)　しまり弱　粘性中
　軽石少量・地山土塊多量含む

P 8
1　黒色土(7.5YR2/1)　しまり中　粘性中
2　黒色土(7.5YR2/1)　しまり中　粘性中
　地山土塊多量含む



第232図　03-ＳＩ336



第233図　03-ＳＩ336カマド・出土遺物

している。

遺　物(第233図)　住居跡内から土師器甕・坏が出土した。遺物の出土量は少なく、主体的なものは全て図示した。全て破片資料であり、本遺構に伴うものかは明確でない。

233図１は小型の土師器甕である。胴部中位が張り出して頸部でくびれ、口縁部が外折する。外面縦位ケズリ、内面横位ユビナデ調整である。233図２・３は土師器甕の口縁部破片である。２は胴上

部が張り出し、頸部で段状にくびれて口縁部が外折し、口端がわずかに内湾する。外面縦位ケズリ、内面横位ヘラナデ調整である。３は頸部まで内傾し、口縁部が外折する。外面縦位ケズリ、内面縦・横位のユビナデ調整である。

233図４・５は土師器甕の底部で、５は木葉痕をとどめ、４はケズリ再調整を施す。４は底部外縁が張り出す形状である。

233図６・７は土師器坏で、６がＡ類、７がＢ類である。６は口縁部破片で、胴部でくびれ、口縁部まで外傾する。７は底部で、底面に回転糸切痕を残す。底部が突出する形状である。

03-ＳＩ343(第234図、図版72)

遺　構　ＬＮ・ＬＯ59グリッドの第Ⅳ層上面でカマドのみを確認した。床面及び周壁の立ち上がりなどを複数回精査して確認に努めたが、周辺部は撹乱の多い地区のため、住居全体プランは明確に把握できなかった。本住居跡の立地点は台地上部平坦面でも、丘陵部西麓の緩斜面である。重複する遺構はなく、周辺には05-ＳＩ13・803がある。

確認できたのは、上部構造の倒壊土範囲と遺物の分布で、遺構としてはカマド構築粘土がかろうじて残る程度である。そのため規模や上部構造はほとんど不明である。

本住居跡は、カマドの存在以外のほとんどの情報が失われている。

遺　物(第234図)　カマド周辺から土師器甕・坏が出土した。234図１は比較的中・大型の土師器甕である。234図５とは調整や色調からみて同一個体になる可能性がある。胴部は直立して立ち上がり、口縁部が外反して口端が直立する。口縁部側面には垂直の面を形成する。外面には縦位ケズリ、内面には縦位ヘラナデで再調整を施す。234図２～４は土師器甕の口縁部破片である。２・３は胴上部が内傾して口縁部が外反する。どちらも口唇は角頭状になる。調整も、外面縦位ケズリ、内面横位ヘラナデで共通するが、２は縦位ケズリが口端まで及ぶ。４は胴上部が張り出し、頸部でくびれて口縁部が外反し、口唇は先細りになる。外面縦位ケズリ、内面横位ヘラナデ調整である。

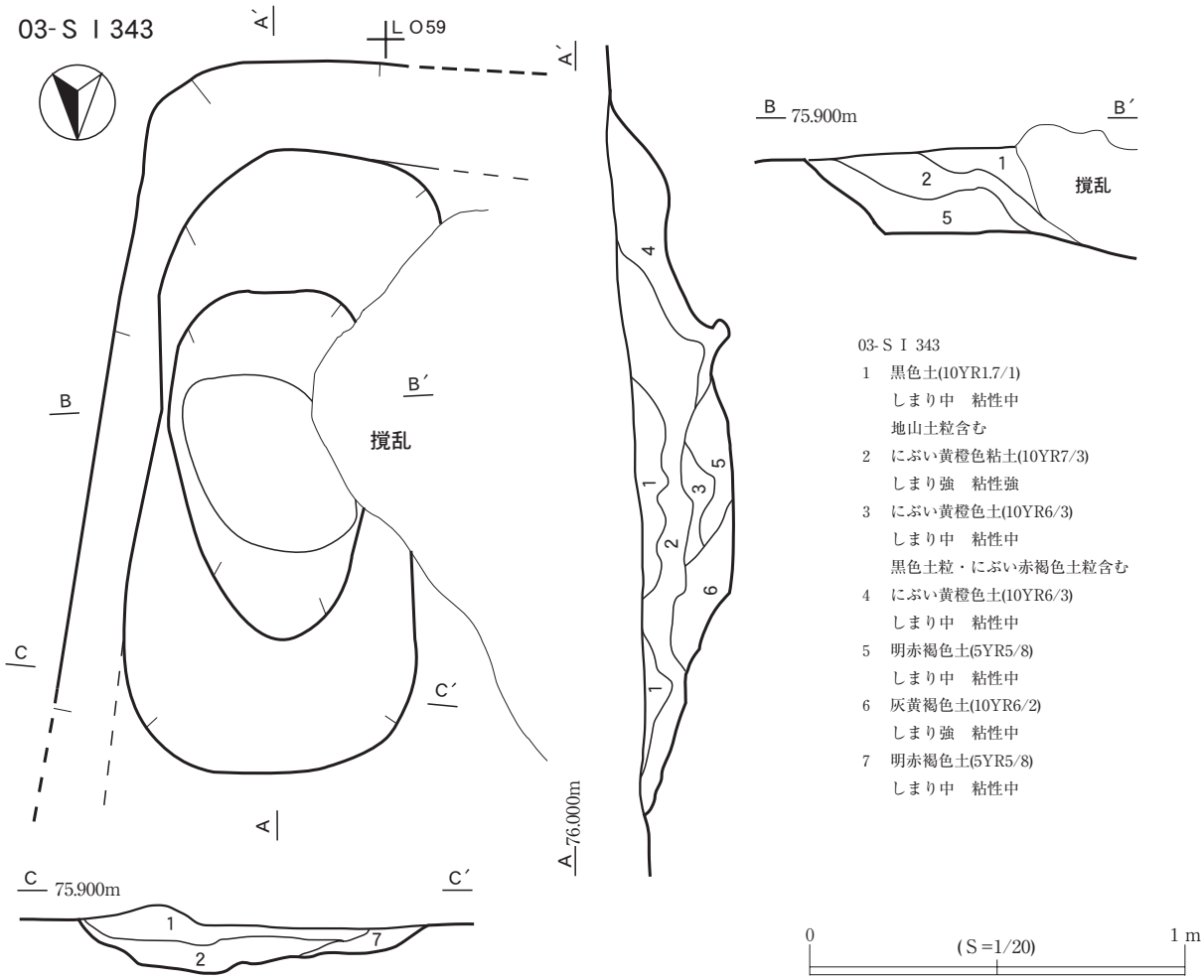
234図５・６は土師器甕の底部である。６は回転糸切痕を、５は薦編圧痕を残す。どちらも底部から直線的に外傾する形状である。234図７は土師器坏Ａ類で、内湾する口縁部の破片である。

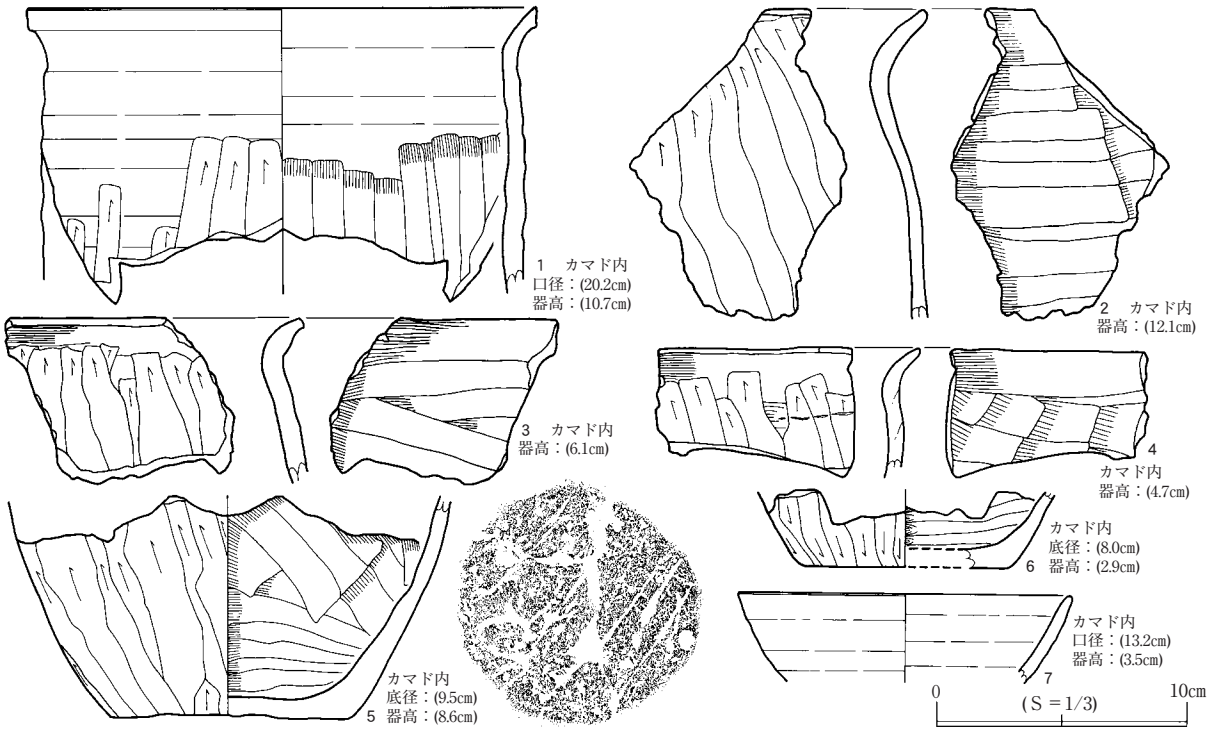
03-ＳＩ576(第235図・236図、図版73)

遺　構　ＬＰ・ＬＱ51・52グリッドの第Ⅳ層中位で、地山土粒を含む黒色土の広がりで確認した。本住居跡の立地点は台地南東縁に近く、南東側へ傾斜する。重複する遺構はなく、周辺には、03-ＳＩ336・609、05-ＳＳ1001・1002、03-ＳＤ323・1002～1004、03-ＳＸ606・608がある。

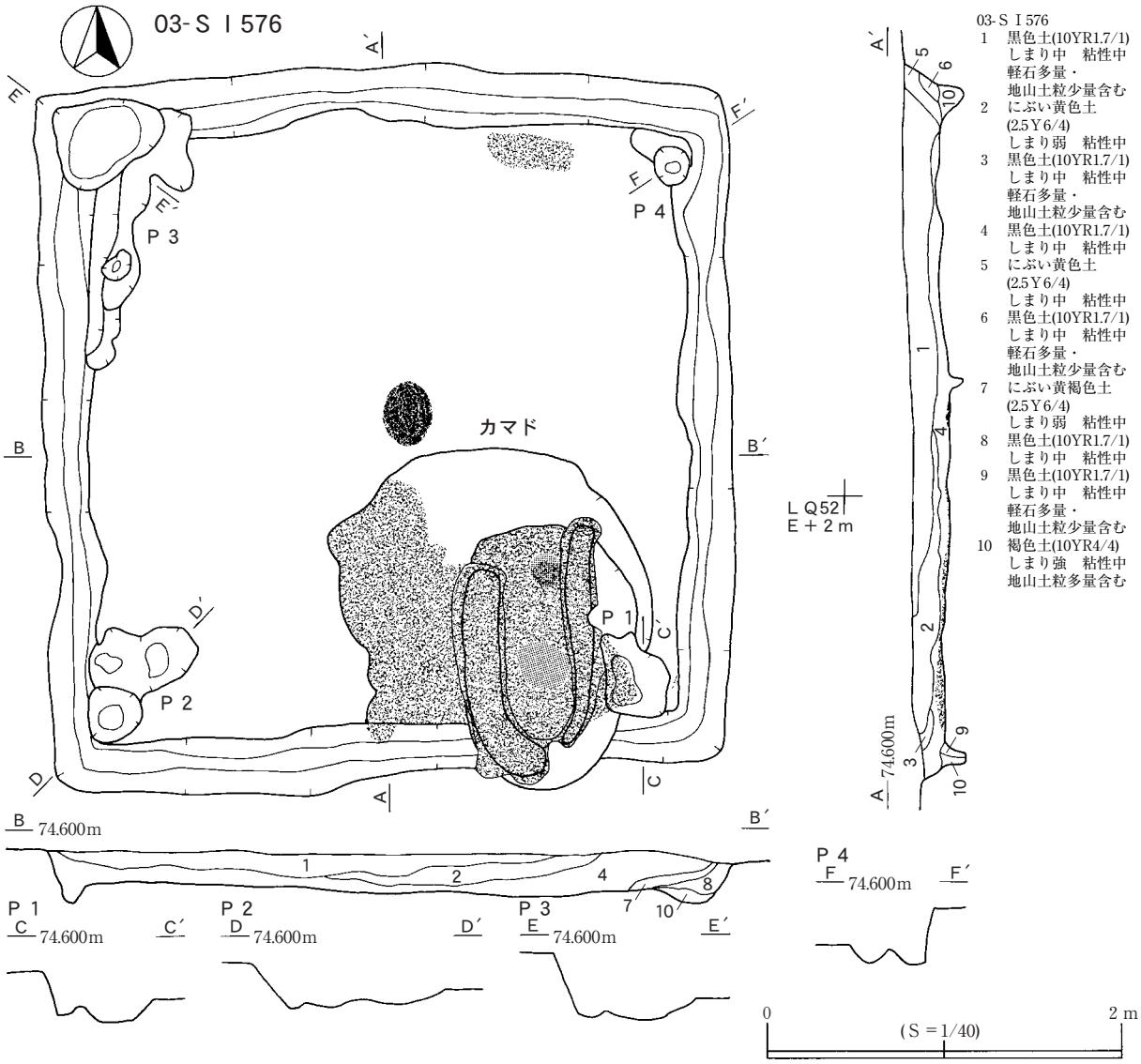
堆積土は10層に分けた。１～８層はレンズ状堆積を示しており、自然堆積による埋没過程が想定される。９・10層は壁溝内堆積土で、土質からみて９層が壁板腐植土、10層が裏込めとみられ、廃絶時に壁板基部が残存していたことが分かる。

平面形はほぼ正方形で、カマドの付く壁に直交する主軸方位はほぼ真北を向く。主軸とそれに直交するラインで測る住居面積は約16㎡で、中形の住居である。各壁の長さは、北壁約3.9m、東壁約3.8m、南壁約3.8m、西壁約3.9mである。壁の検出面からの深さは20cm前後で、比較的緩やかに立ち上がる。床面は、掘形底面の地山面を利用する。壁溝はカマド以外の全周で確認した。上場幅0.22～0.4





第234図　03-ＳＩ343・出土遺物



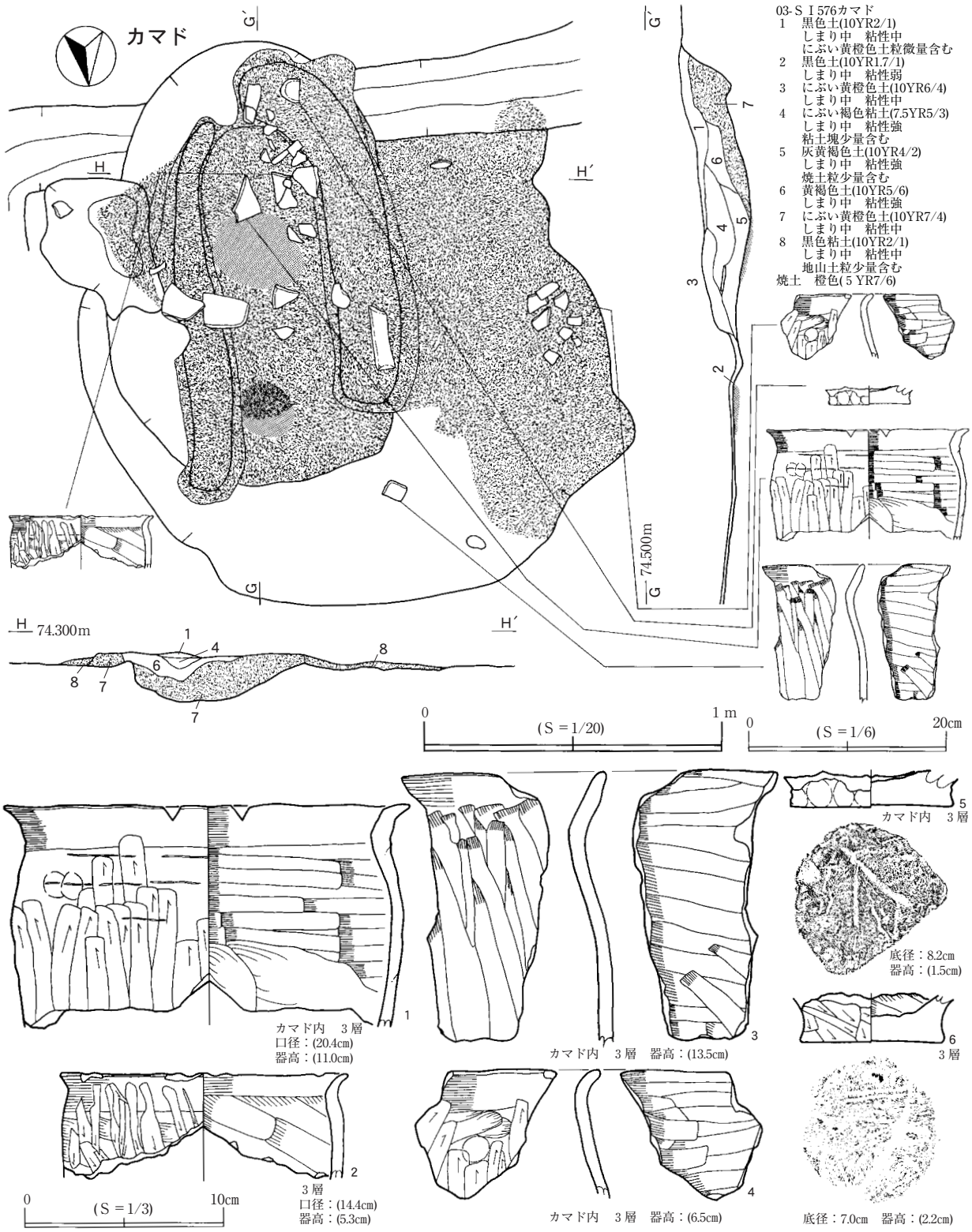
第235図　03-ＳＩ576

m、下場幅0.04～0.18m、床面からの深さ0.12m前後である。床面及び壁溝内で４個のピットを確認した。Ｐ１～４は住居四隅の主柱穴である。柱穴中心で測る柱穴間距離はＰ１－２間約2.9m、Ｐ３－４間約3.2m、Ｐ１－４間約2.9m、Ｐ２－３間約3.2mである。

カマドは南壁の南東隅に近い位置で、袖を構成する黄褐色系粘土の分布で確認した。確認できた施設は、前庭部、袖、火床面である。堆積土は８層に分けた。１～６層は上部構造の倒壊土と周囲からの流入土の互層である。７層は袖から基底部にかけての造成粘土である。煙道から袖末端まで約1.5m、袖の最大幅が約0.85mである。煙道はスロープ状で、住居壁から0.2m以上外に延びる。袖は基部が残っており、煙道から直線的に平行に延びている。火床面は２か所あり、奥壁寄りの径約0.3mの被熱範囲が古く、手前の径約0.2mの被熱範囲が新しいとみられる。

本住居跡は四隅に主柱をもち、南壁にカマドを設置する住居である。周辺の遺構配置からみて、05-ＳＳ1001・1002に関連する工人の住まいだった可能性がある。廃絶後は自然堆積により埋没しており、周辺の土地利用が低調になったことが窺える。

遺　物(第236図)　住居跡内から土師器甕が出土した。出土遺物は少なく、主体となるものは全て図示



第236図　03-ＳＩ576カマド・出土遺物

した。236図１は比較的大型の土師器甕である。胴上部が張り出して頸部でくびれ、口縁部が２段階に外折する。口縁部はやや肥厚し、口唇は平滑である。外面縦位ケズリ、内面横位ヘラナデ後に胴部中位にユビナデを施す。236図２は比較的小型の土師器甕で、胴上部が直立して頸部でくびれ、口縁部が短く外反する。これも１と同様に口縁部に２段階の屈曲をもつ。外面は疎らな縦位ケズリ、内面は斜位ヘラナデである。

236図３・４は土師器甕の口縁部破片である。どちらも胴上部が内傾し、３は口縁部が外反して口端がわずかに内湾し、４は口縁部が外反する。３は外面縦位ヘラナデ、内面横位ヘラナデ調整で、４は外面縦位ケズリ、内面横位ヘラナデ調整である。236図５・６は土師器甕の底部で、５が木葉痕を、６が薦編圧痕をとどめる。どちらも底部外縁が張り出す形状である。

03-ＳＩ609

本住居跡は、ＬＱ～ＬＴ・54～56グリッドの、第Ⅳ層中位～第Ⅵ層上面において、地山土粒を含む黒色土の範囲で確認した住居跡である。本住居跡の立地点は台地上部平坦面だが、丘陵部西麓から延びる緩斜面に当たり、南西側へ傾斜する。03-ＳＩ610と重複し、本住居跡の方が新しい。周辺には、03-ＳＩ173・178・336・576・853・854、05-ＳＩ28・803、03-ＳＸ345・606・608がある。

壁溝と壁柱穴の配置や、カマドの造り替えから２時期あることが判明した。新しい順に、Ａ・Ｂのアルファベットを付けて表記した。

03-ＳＩ609Ａ(第237図～241図、図版74・75・155)

遺　構　03-ＳＩ609Ｂより一回りプランの大きい新段階の住居である。

堆積土は９層に分けた。８層は壁溝内堆積土で、９層は貼床である。その他は、住居南東隅から流入する土が下層に入り、その上部に住居北側から複数の層が入る堆積状況を示す。自然堆積であれば、斜面上位である北部からの斜堆積が認められるはずだが、堆積順位では住居中央部に山盛り状の堆積層が認められることから、基本的には人為堆積による埋没と考えられる。幾枚にも区分できる層は、大規模な竪穴掘り込みを埋め立てるのに複数箇所の土を利用したことによると推測する。

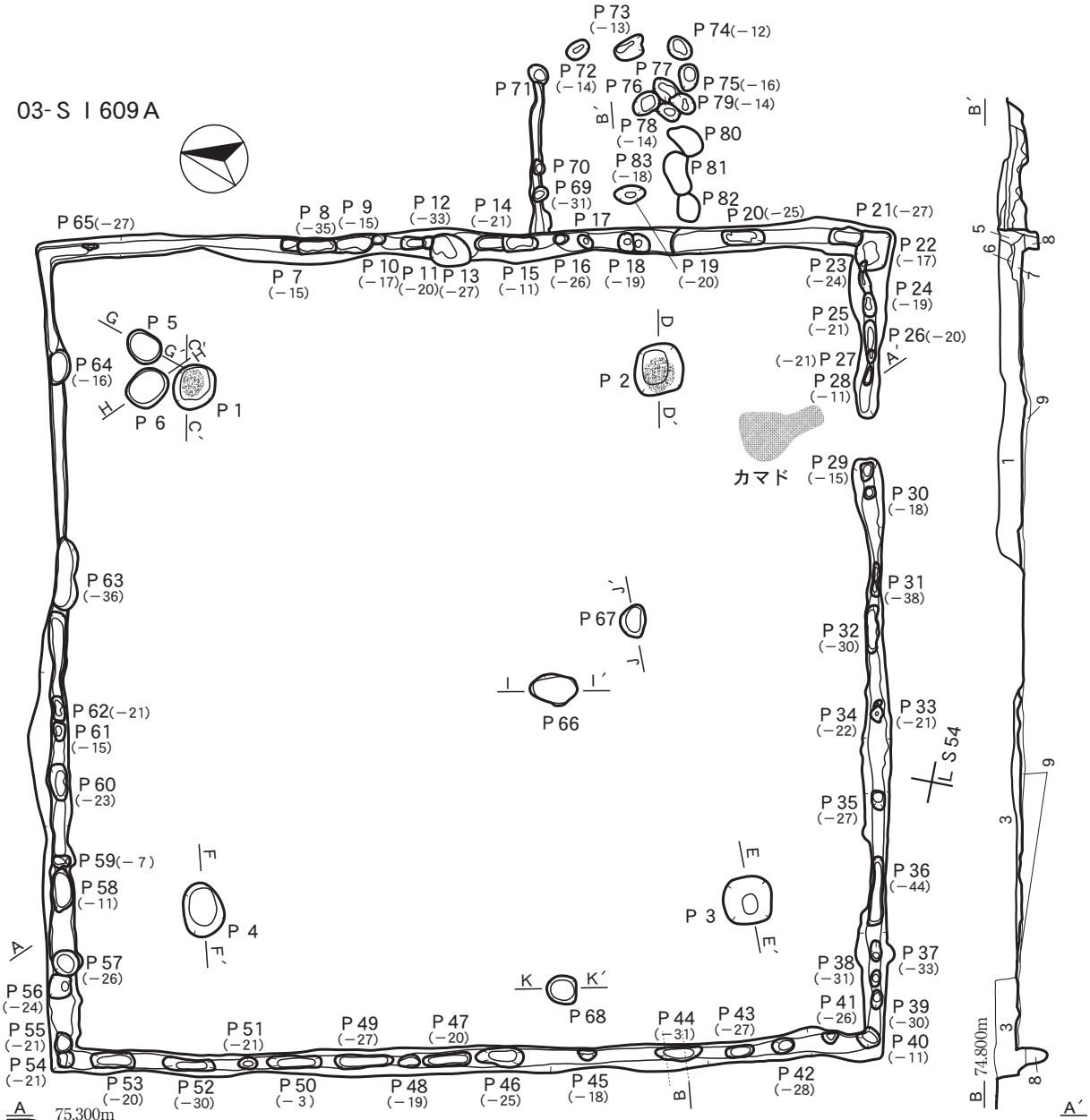
平面形はほぼ正方形で、カマドの付く壁に直交する主軸方位はＮ－12°－Ｗである。主軸とそれに直交するラインで測る住居面積は約100㎡で、超大形の住居である。各壁の長さは北壁約9.8m、東壁約10.2m、南壁約9.9m、西壁約9.9mである。斜面上位である北壁の検出面からの深さは約0.4mで、立ち上がりはほぼ垂直である。東壁には張り出しが付く。複数のピットとコ字状の溝で構成され、規模は住居壁直交方向で約2.2m、住居壁平行方向で約2.0mである。出入り口施設の痕跡と考えられ、堆積土が数枚水平に堆積することから、整地していると考えられる。

床面は部分的に貼床を施すが、ほとんどの範囲では地山面を利用している。壁溝はカマドの付く部分以外全周で確認した。上場幅0.08～0.3m、下場幅0.04～0.2m、床面からの深さ0.2～0.3mである。

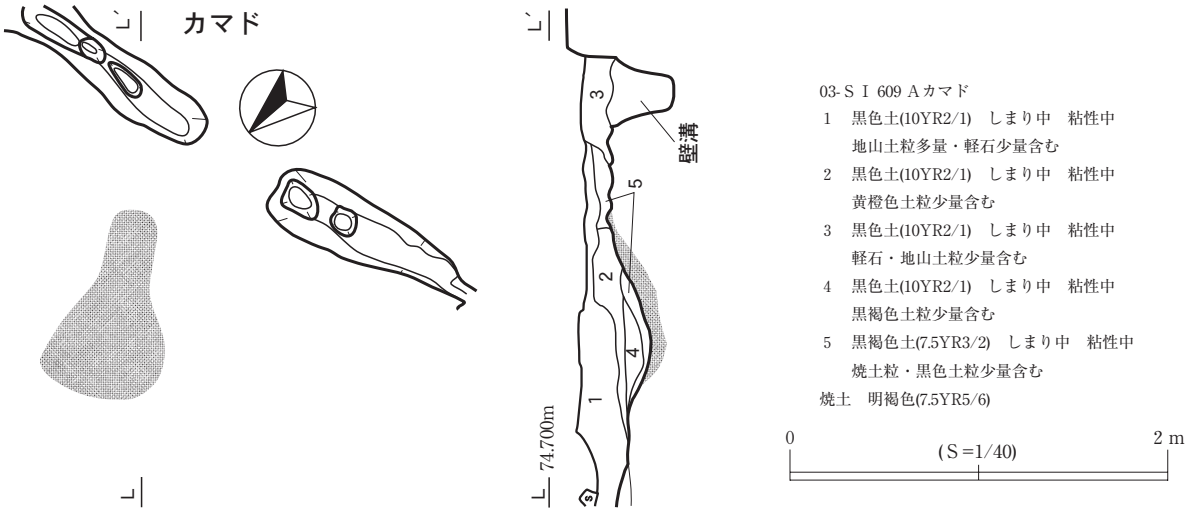
床面、壁溝内、張り出し部で83個のピットを確認した。中でも壁柱穴が多く、造り替えがあった可能性が高い。Ｐ１～４は住居隅より内側に配置する主柱穴で、柱穴中心で測る柱穴間距離はＰ１－２間約5.5m、Ｐ３－４間約6.5m、Ｐ１－４間約6.2m、Ｐ２－３間約6.3mである。Ｐ２がカマド前庭部に規制されて、やや住居内側に配置してある。

カマドは住居南壁の中央部から東寄りの位置で、焼土の広がりで確認した。確認できたのは火床面のみで、上部構造は完全に破壊されていた。そのため５層に分けられる堆積土も、ほとんどが上部構造の倒壊土とその隙間に流入した土である。火床面は不整な形状の被熱範囲で、最長約1.0m、最大幅約0.6mである。

本住居跡は４本の主柱をもち、南壁にカマドを設置する住居である。規模は今回の調査区内では最



第237図　03-ＳＩ609Ａ



第238図　03-ＳＩ609Ａカマド

大級である。廃絶後は人為的に埋め戻すと考えられるが、軸方位や周辺状況からみて、05-ＳＩ803構築時に埋め立てた可能性が高い。

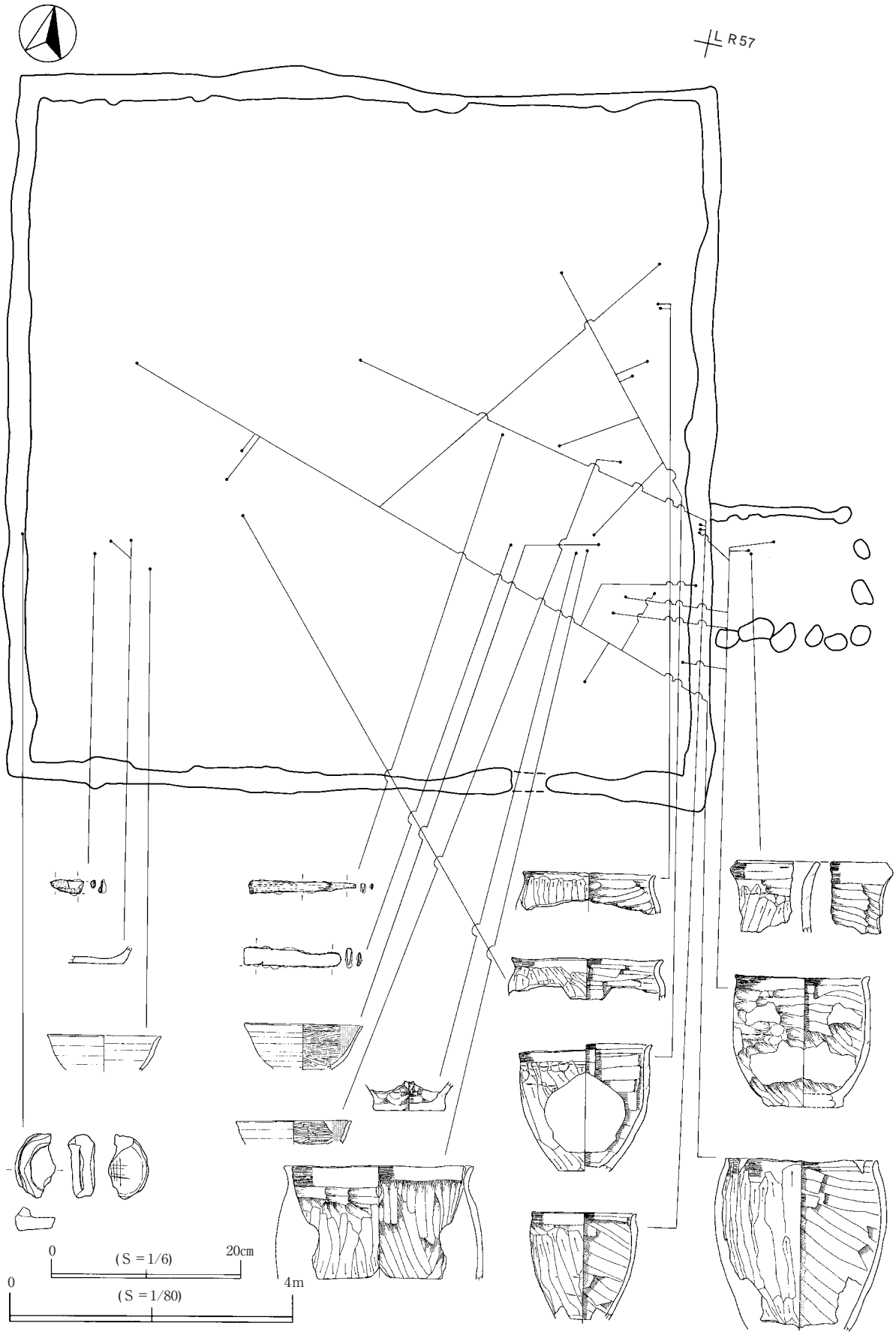
遺　物(第240図・241図)　住居跡内から土師器甕・坏、鉄製品、土製品が出土した。土師器甕は口縁部が31点、底部が20点出土しており、そのうち比較的大型の口縁部資料12点、底部資料４点を図示した。なお図示しなかったものを含めた甕の口縁部分類別数量はＡ類(３点)、Ｂ類(２点)、Ｃ類(17点)、Ｄ類(５点)、その他(３点)、分類不能(１点)で、底部分類別数量は砂底(13点)、薦編圧痕(１点)、ケズリ(５点)、回転糸切(１点)の内訳になる。Ｃ類と砂底が多いが、Ａ・Ｂ類が一定量出土している。

240図１・２は比較的中・大型の土師器甕である。１は胴部中位が張り出し、頸部がくびれて口縁部が弱く外反する。外面はユビナデ後に縦位ケズリを、内面は縦位ユビナデを施す。２は口縁部まで内湾する器形で、口端がわずかに直立する。外面縦位ケズリ、内面横・斜位ヘラナデ調整である。

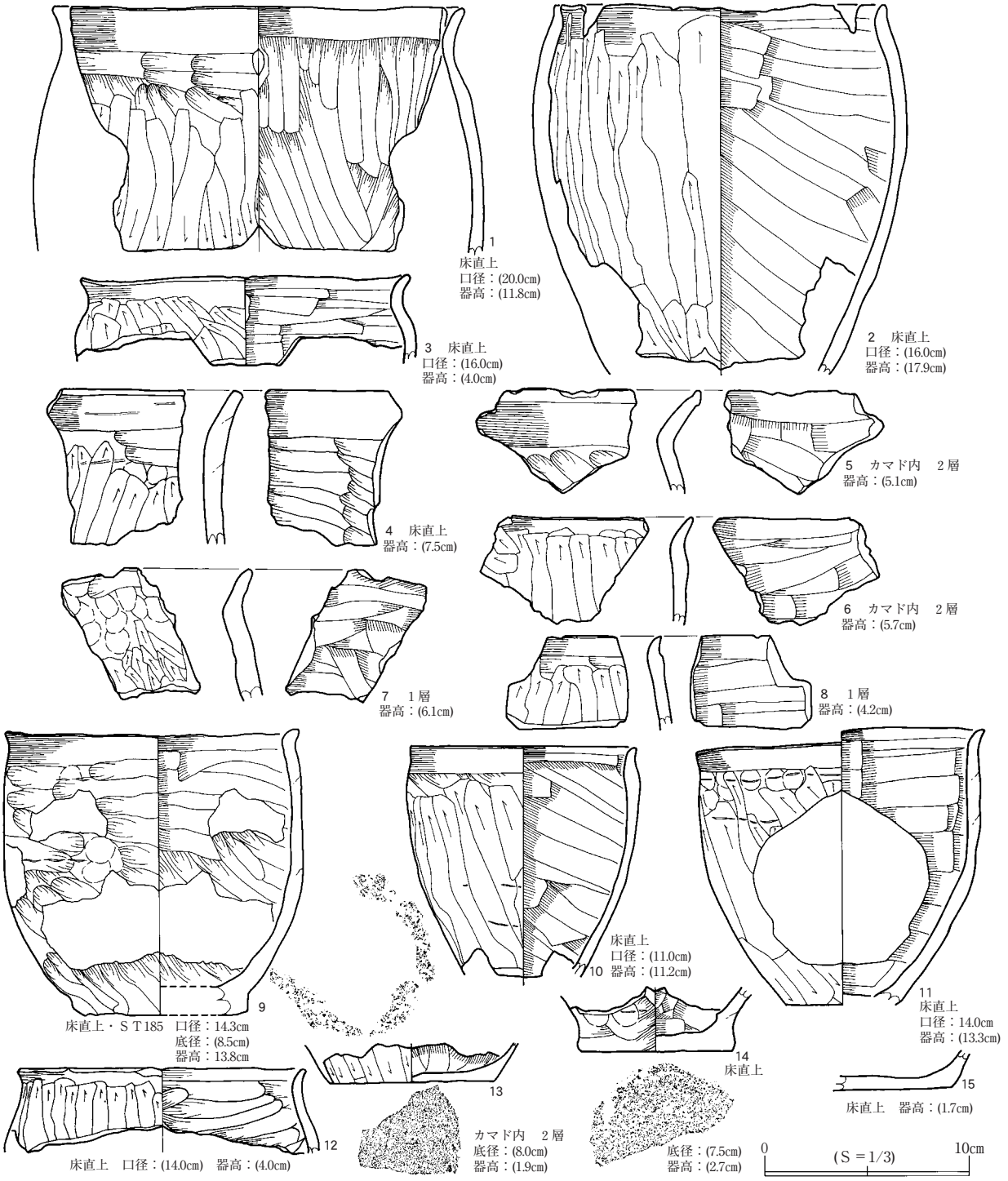
240図３・９～12は比較的小型の土師器甕である。３は頸部が段状にくびれる器形で、外面斜位ケズリ、内面横位ヘラナデ調整である。９は底部から外傾して胴下部が張り出し、内湾気味に立ち上がって口端がわずかに外反する。外面は横・斜位ユビナデ、内面は胴下部を斜位ユビナデ、上部を横位にヘラナデ調整している。10・11は胴部中位まで外傾して胴上部が直立し、口縁部がわずかに外反する。外面はどちらも縦位ケズリ調整である。内面は10が斜位、11が横位ヘラナデ調整である。12は口縁部にかけて内傾し、口端がわずかに外反する。外面縦位ケズリ、内面横位ユビナデ調整である。

240図４～８は土師器甕の口縁部破片である。４は口縁部まで緩やかに外反し、５は頸部のくびれからほぼ直角に外折し、７は内傾して頸部から直立気味に外折し、６・８は頸部まで内傾して口縁部が短く外反する。外面調整は、４・５は頸部付近にユビナデを残すが、基本的には縦・斜位のケズリを施すとみられる。内面調整は４が斜位ユビナデ、５・７が縦・横位にヘラナデを、６・８が横位にヘラナデを施す。240図13～15は土師器甕の底部で、13・14が砂底、15はケズリ再調整である。13・15は直線的に外傾して立ち上がるが、14は外縁がやや張り出す。

241図１～７は土師器坏で、１はＡ類、２～７はＢ類である。１は口縁部破片で、口端が緩く外反する。２～４も口縁部が緩く外反する。内面調整では３の胴下部に放射状のミガキが認められる以外、ほとんどが横位のミガキである。５～７は底部で、５・６は突出し、７は直線的に外傾して立ち上が



第239図　03-ＳＩ609Ａ遺物出土状況

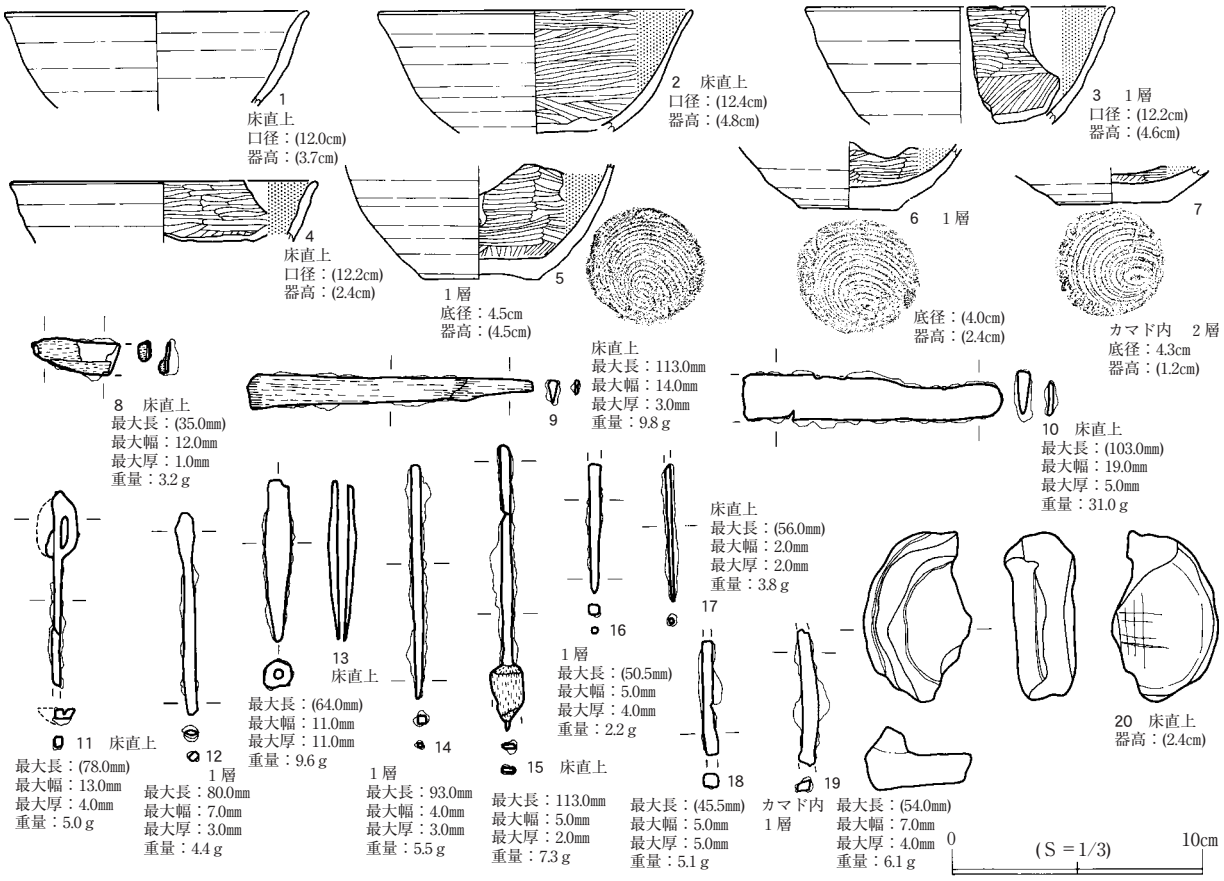


第240図　03-ＳＩ609Ａ出土遺物１

る。５はやや上底状になる。全て回転糸切痕をとどめている。

241図８～19は鉄製品である。８～10は刀子で、８が切先、９が刀身から茎、10は茎側が残存する資料である。８・９には鞘とみられる木質が付着しており、同一個体の可能性がある。10は茎がやや扁平である。11は上端が膨らむものである。12は上端部がやや幅広になることから、鏃の可能性がある。13は中空の資料である。14～19までは一端、または両端を欠損する棒状のもので、本来の形状等は基本的に不明だが、15は茎に断面円形の柄が取り付く。

241図20は皿状の土製品で、約半分が残存する。底面には格子目状の線刻を施す。



第241図　03-ＳＩ609Ａ出土遺物２

03-ＳＩ609Ｂ(第242図、図版74・75)

遺　構　03-ＳＩ609Ａより一回りプランの小さい古段階の住居である。部分的に残る堆積土は、１層が壁溝内堆積土の残存土、２層が貼床の土である。

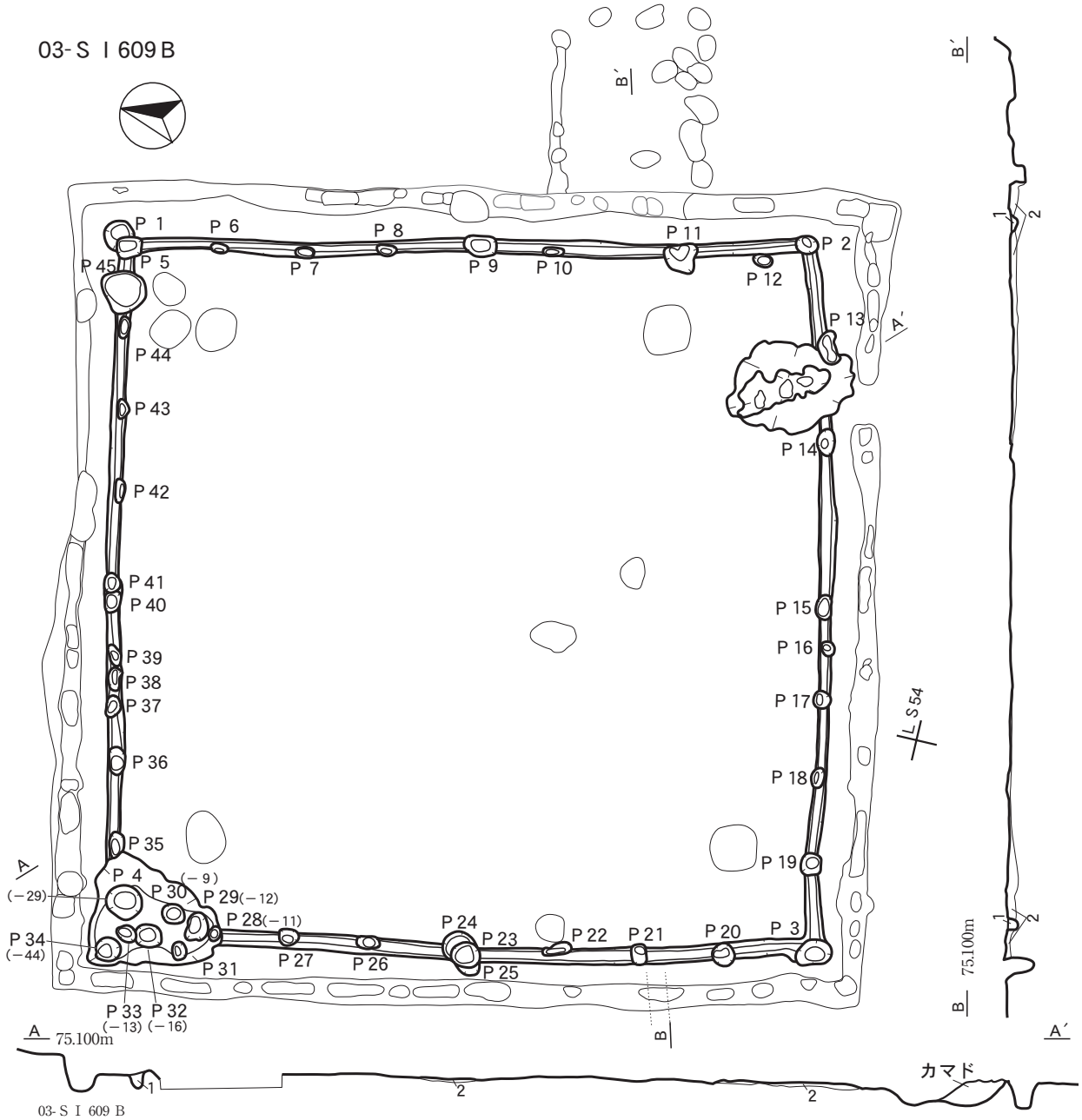
平面形はほぼ正方形で、カマドの付く壁に直交する主軸方位はＮ－12°－Ｗである。主軸とそれに直交するラインで測る住居面積は約78㎡で、超大形の住居である。各壁の長さは北壁約8.9m、東壁約8.6m、南壁約8.9m、西壁約9.0mである。壁の検出面からの深さ及び立ち上がり角度は不明である。なお、03-ＳＩ609Ａに付属する東壁の張り出しはピットが複数あり、造り替えが想定されることから本段階から存在する可能性がある。

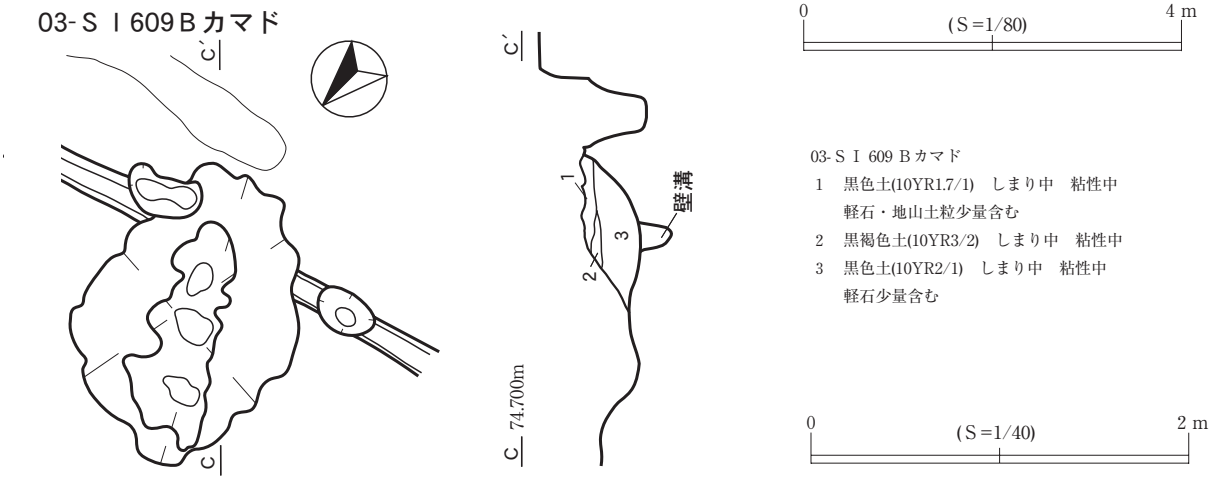
床面は部分的に貼床を施すが、ほとんどの範囲は地山面を利用している。壁溝は全周で確認した。上場幅0.12～0.22m、下場幅0.06～0.12m、床面からの深さ0.05～0.1mの断面台形状である。床面及び壁溝内で45個のピットを確認した。ほとんどが壁溝内の壁柱穴で、規則的に約1.0m間隔で配置する。なお、住居規模からみて、03-ＳＩ609ＡのＰ１～４は、本段階でも主柱穴として利用していたと考えられる。

カマドは基本的に03-ＳＩ609Ａと同じ地点を利用していたとみられるが、03-ＳＩ609Ａカマド下部で、本段階のものと考えられるより深い掘形が確認できた。

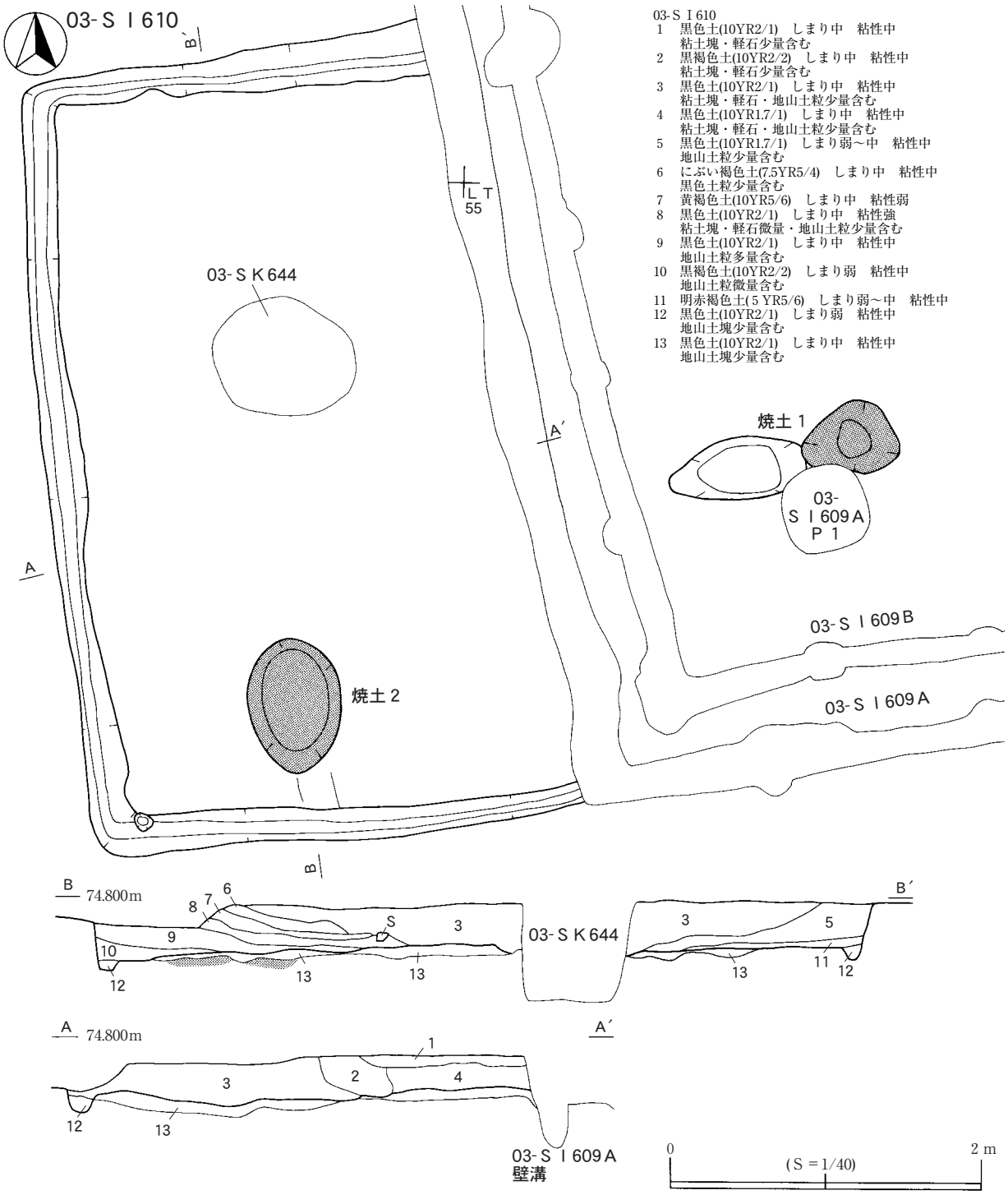
本住居跡は、03-ＳＩ609Ａと同様に４本の主柱を配置し、南壁にカマドを設置する住居と想定される。03-ＳＩ609Ａへと拡張するために解体したと考えられる。

遺　物　本住居跡に伴う遺物は検出できなかった。





第242図　03-ＳＩ609Ｂ

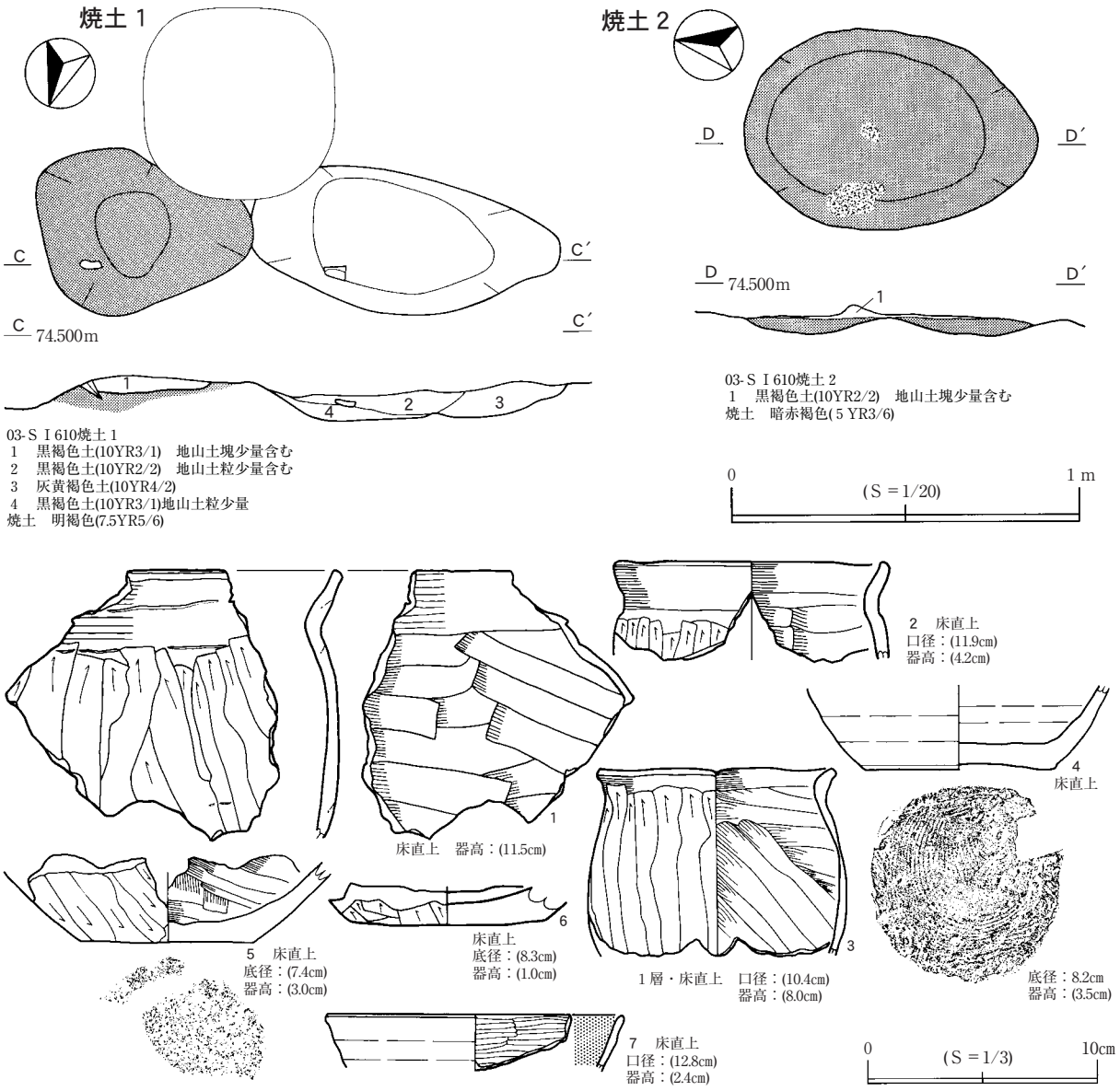


第243図　03-ＳＩ610

03-ＳＩ610(第243図・244図、図版76)

遺　構　ＬＳ53・54、ＬＴ53～55グリッドの第Ⅳ層中位～第Ⅵ層上面で、地山土粒を含む黒色土の広がりで確認した。本住居跡の立地点は台地上部平坦面である。03-ＳＩ609と重複しており、本住居跡の方が古い。周辺には、03-ＳＩ178・576・853、05-ＳＩ28、03-ＳＸ606・608がある。

堆積土は13層に分けた。２～11層はレンズ状堆積であり、自然堆積による埋没と考えられるが、その上部を広く覆う３層は人為的に埋め立てた造成土の可能性が高い。重複する05-ＳＩ609構築段階の造成土と考えられる。12層は壁溝内堆積土、13層は貼床の土である。



第244図　03-ＳＩ610焼土１・２・出土遺物

平面形は、住居東部を03-ＳＩ609が切るため正確には分からないが、焼土１の配置からみて東西に長い長方形と推測される。西壁ラインで測る主軸方位はＮ－５°－Ｗで、西壁と焼土１までの長さで測る住居面積は約27㎡で、大形の住居である。各壁の残存長は、北壁約2.6m、南壁約3.1m、西壁約5.0mである。

床面は確認した範囲ではほぼ全面に貼床を施す。壁溝も確認した範囲では全周認められ、上場幅0.15～0.34m、下場幅0.05～0.1m、床面からの深さは0.05～0.1mの断面台形状である。床面でピットやカマドは確認できなかったが、焼土遺構を２か所で検出した。

焼土１は05-ＳＩ609内部にあるが、主柱に隣接する位置にあることから、本住居跡に伴うものと考えた。２つの不規則な楕円形が連結する形状で、最大長約1.5m、最大幅約0.5mで、内部に鉄製品が埋まっていた。焼土２は住居南西隅にあり、不規則な楕円形状で、長径0.8m、短径約0.6mの浅い掘り込み内部に粘土が散在する。以上の２か所の焼土遺構は、鍛冶炉の可能性があるが、鍛造剥片等の出土は明確でなかった。

本住居跡は明確な主柱穴を伴わない構造の住居である。燃焼作業の痕跡である２か所の焼土が認められ、カマドが明確でないことから、何らかの作業小屋の可能性もある。

遺　物(第244図)　住居跡内から土師器甕・坏が出土した。遺物の出土量は少なく、口縁部はほとんど掲載した。口縁部では比較的Ｂ類が、底部では砂底が多い傾向にある。

244図１は比較的大型の土師器甕の口縁部破片で、胴上部が張り出し、頸部で段状に屈曲して口縁部が外折し、口端がわずかに内湾する。外面縦位ケズリ、内面横位ヘラナデ調整である。244図２・３は比較的小型の土師器甕で、２は１と同様の器形で、３は胴部中位が張り出して口縁部が短く外反し、口縁部が肥厚する。どちらも外面は縦位ケズリ調整であるが、内面は２が横位ヘラナデ、３が横・斜位ユビナデである。244図４～６は土師器甕の底部である。４は底面に回転糸切痕をとどめる。５は砂底、６は底面ケズリ再調整である。３点とも底部から直線的に立ち上がる。

03-ＳＩ853(第245図・246図、図版77)

遺　構　ＭＡ・ＭＢ55・56グリッドの第Ⅳ層中位～第Ⅵ層上面で、地山土塊を含む黒色土の広がりで確認した。本住居跡の立地点は台地上部平坦面で、ほとんど傾斜がない。重複する遺構はなく、周辺には03-ＳＩ609・610、05-ＳＩ28がある。

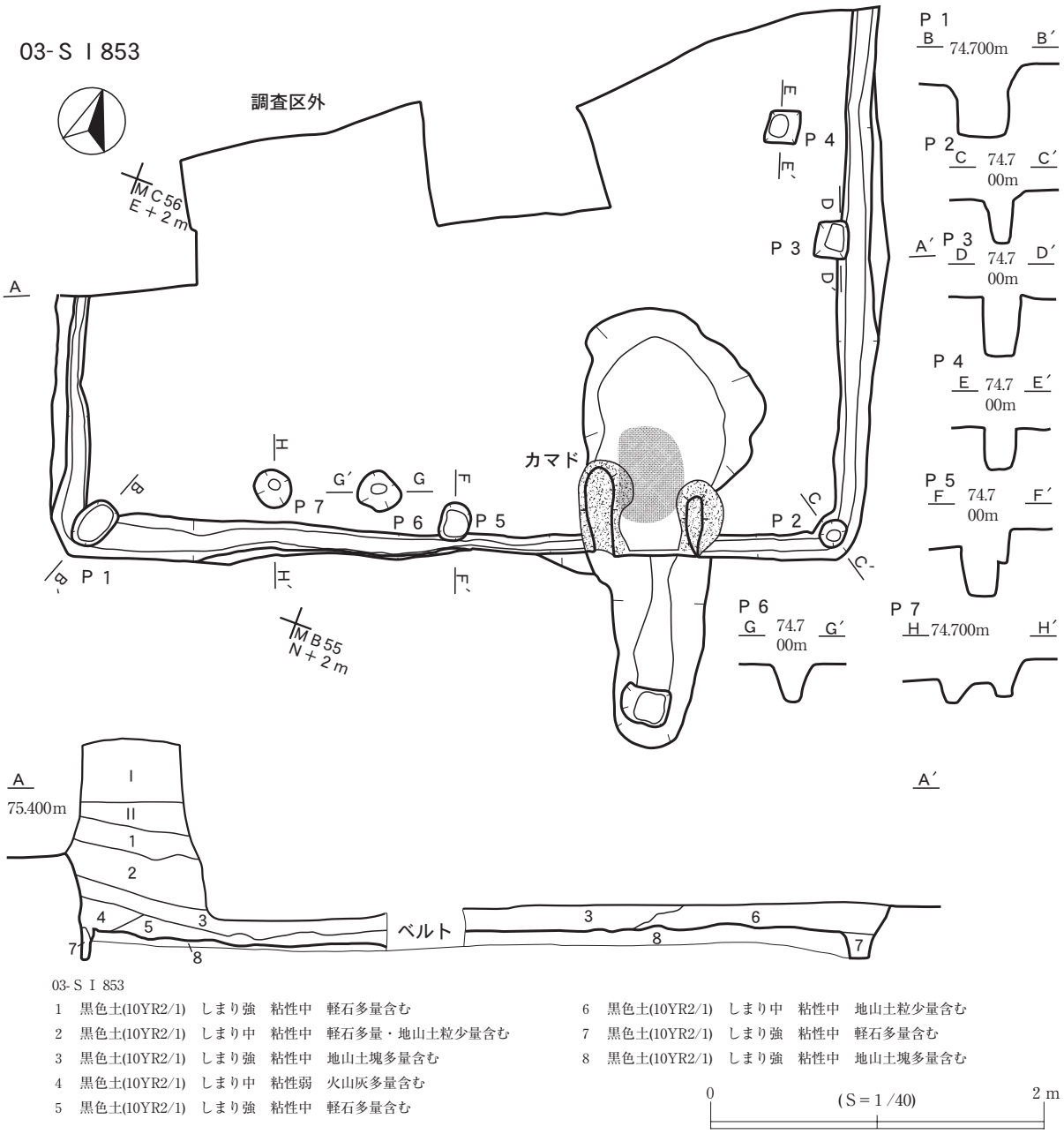
堆積土は８層に分けた。１～６層はレンズ状堆積であり、自然堆積による埋没と考えられる。壁際の４層は火山灰を多く含み、周堤下部にパックされた火山灰の流入が想定される。７層は壁溝内堆積土、８層は貼床の土である。

平面形は北西部が調査区外のため不明だが、正方形になる可能性が高い。カマドの付く壁に直交する主軸方位はＮ－19°－Ｗである。南東壁を正方形の一辺とみた場合の住居面積は約22㎡で、中形の住居である。各壁の確認長は、北東壁約3.3m、南東壁約4.7m、南西壁約1.5mである。本来の確認面とみられる１層上面から床面までの深さは約0.8mで、壁の立ち上がりはほぼ垂直である。

床面は全面に貼床を施す。壁溝はカマド以外の全周で確認した。上場幅0.1～0.27m、下場幅0.02～0.15m、床面からの深さ0.15m前後の断面台形状である。床面や壁溝内で７個のピットを確認した。Ｐ１・２は住居隅の主柱穴である。Ｐ５は壁中央部に位置することから壁板保持の補助柱穴とみられ、Ｐ３・４もその可能性が高い。Ｐ６・７は南東壁中央部を挟んでカマドと線対称の位置にあり、壁際で２個一対になることから、出入り口の下部構造の痕跡と考えられる。

カマドは南東壁の中央から北東寄りの位置で、にぶい黄橙色粘土の分布で確認した。確認できた施設は、煙道、袖の一部、火床面、前庭部である。堆積土は13層に分層した。１～７・12層は上部構造の崩落土と流入土の互層である。８層は壁溝の底面に貼った土で、10層は、８層底面より深い掘り込み内部に堆積しており、古段階のカマドの存在を窺わせる。13層が主に袖を構成する粘土である。煙道から前庭部末端まで約1.3m、袖の最大幅が約0.4mである。煙道はスロープ状で、住居壁から約0.6m外に延びる。煙出しに伴うとみられるピットも確認できた。他の住居に比べてやや長い印象を受けるが、多くの住居では本来の生活面が失われており、明確な対比はできない。袖は粘土を素材とし、住居内部へ平行に延びる。火床面は不整な楕円形状の被熱範囲で、長径約0.4m、短径約0.25mである。

本住居跡は、南東壁にカマドを設置する住居で、四隅に主柱をもつと想定される。廃絶後は自然堆積で埋没しており、この地点の土地利用はあまり活発でなくなったと考えられる。



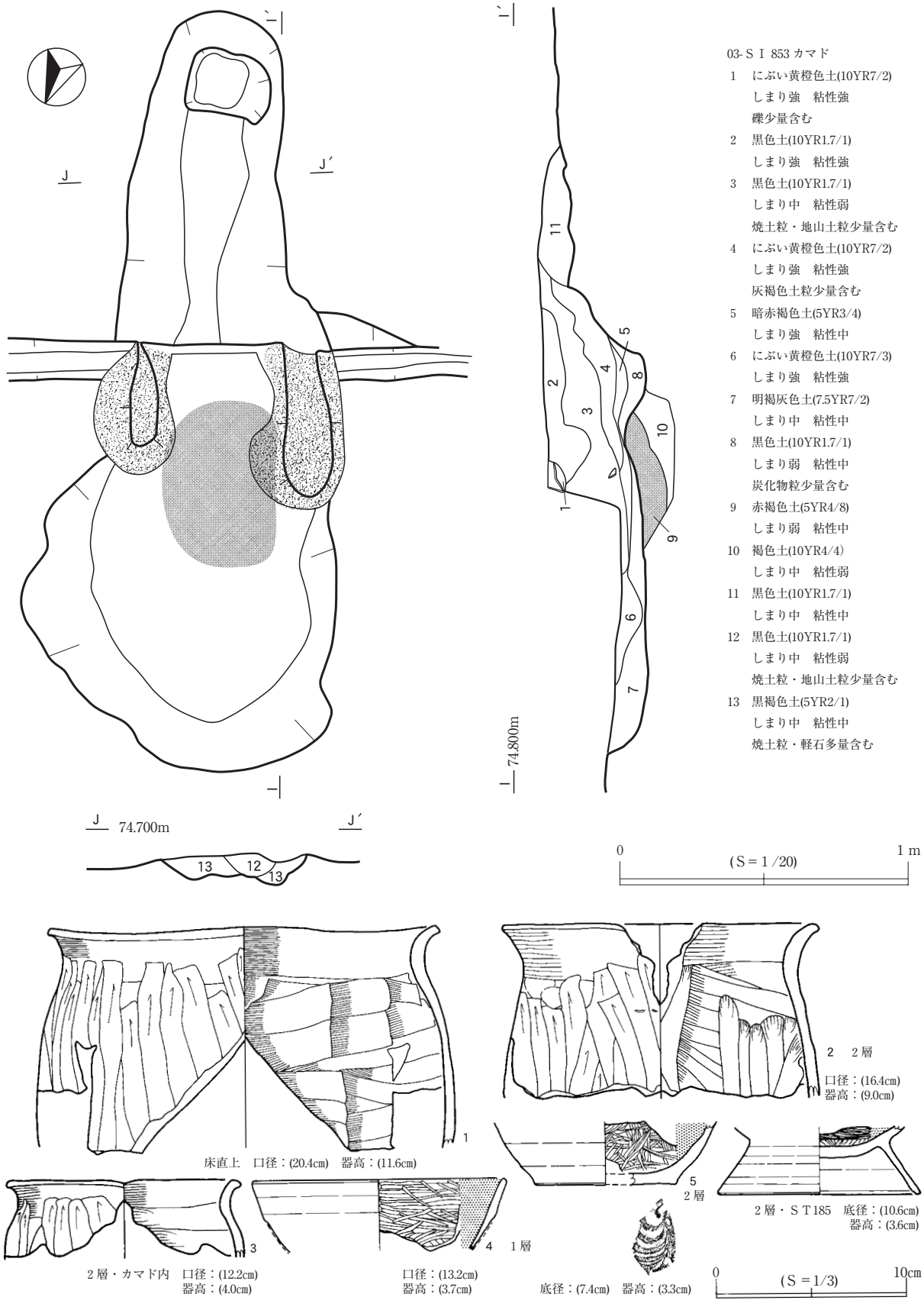
第245図　03-ＳＩ853

遺　物(第246図)　土師器甕・坏が出土した。遺物量は少なく主要遺物は全て図示した。

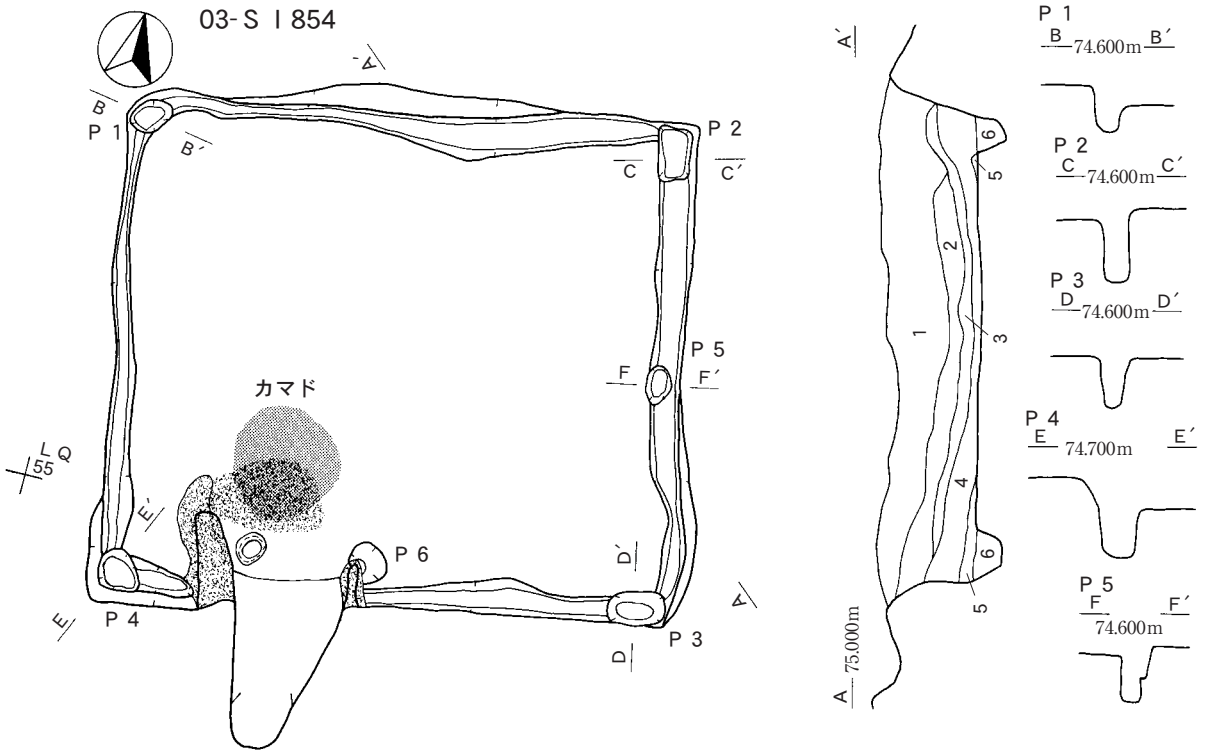
246図１は比較的大型の土師器甕である。胴部から内湾して頸部でくびれ、口縁部が外反する。口唇は角頭状になる。外面縦位ケズリ、内面横位ヘラナデ調整である。246図２・３は比較的中・小型の土師器甕である。２は胴部から内傾して口縁部が外反する。口縁部はやや肥厚する。外面縦位ケズリ、内面斜位ヘラナデ後に疎らに縦位のユビナデを施す。３は頸部で屈曲し、口縁部が外反する器形で、口端が肥厚する。外面縦位ケズリ、内面横位ユビナデ調整である。

246図４～６は土師器坏Ｂ類である。４・５は内面のミガキの比較から同一個体になる可能性が高い。４は直線的に外傾する口縁部資料で、口唇まで器厚が一定している。５は底部で、底面には回転糸切痕を残し、底部が突出する。６は高台付坏で器壁が薄く、脚の長い高台を付ける。内部底面には放射状ミガキを施す。

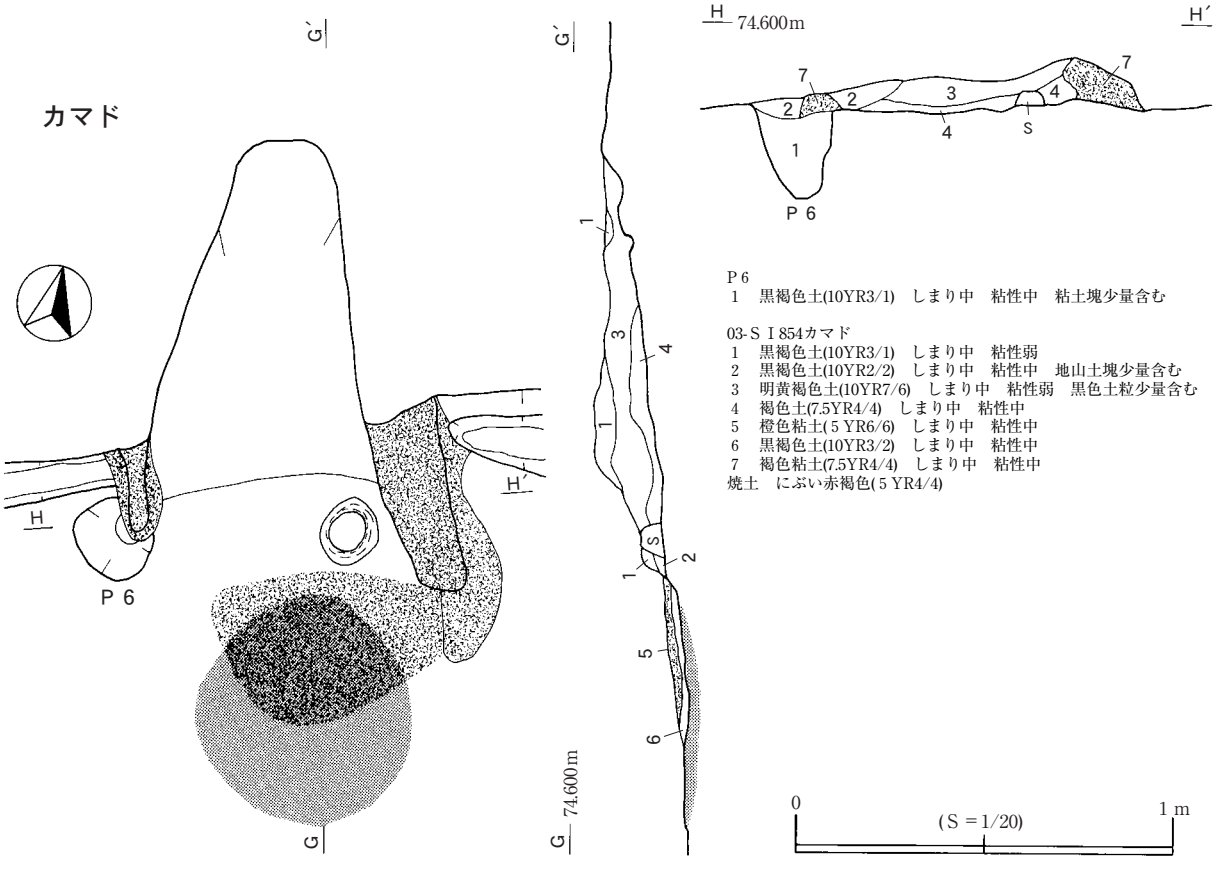
カマド



第246図　03-ＳＩ853カマド・出土遺物



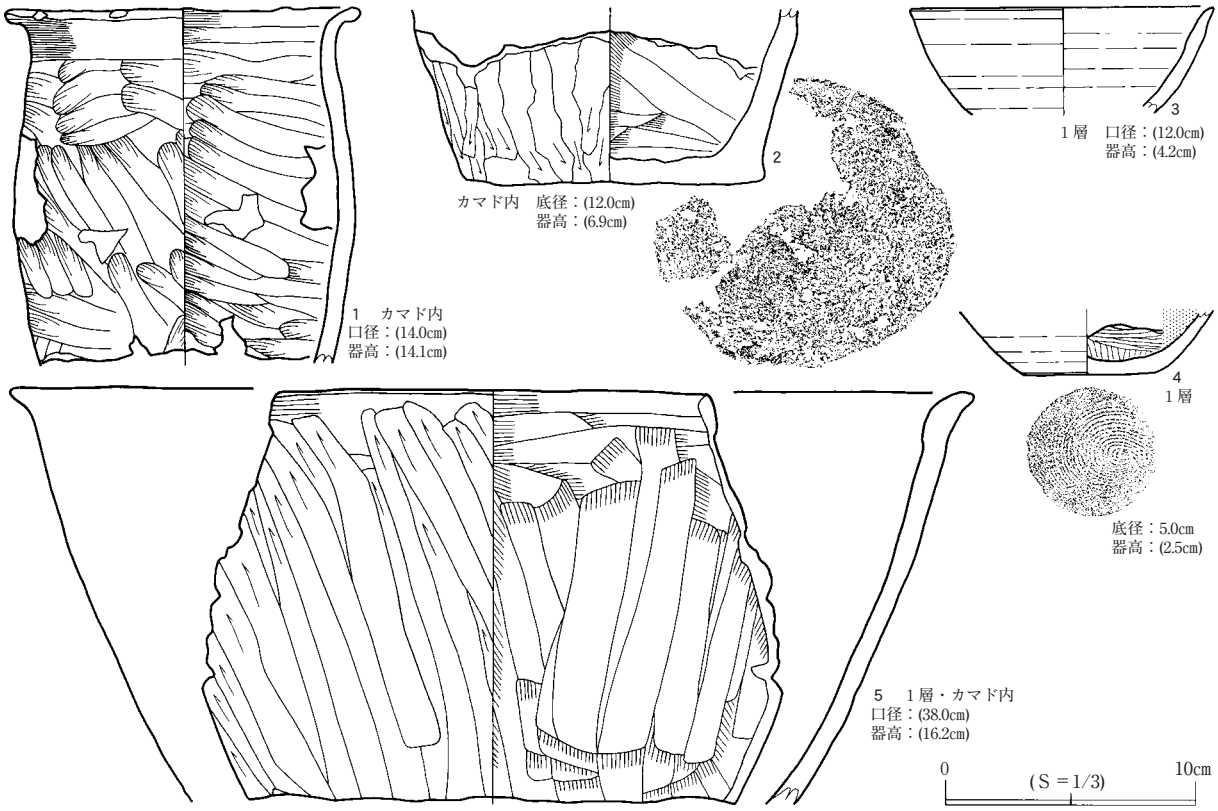
03-ＳＩ854
1　黒色土(10YR1.7/1)　しまり強　粘性弱　軽石多量・地山土塊少量含む
2　黒色土(10YR2/1)　しまり中　粘性弱　褐灰色土粒・軽石少量含む
3　灰黄褐色土(10YR5/2)　しまり強　粘性中
4　黒色土(10YR2/1)　しまり中　粘性中　地山土粒少量含む
5　黒色土(10YR1.7/1)　しまり中　粘性中　炭化物粒多量含む
6　黒色土(10YR2/1)　しまり中　粘性中　地山土粒少量含む



P 6
1　黒褐色土(10YR3/1)　しまり中　粘性中　粘土塊少量含む

03-ＳＩ854カマド
1　黒褐色土(10YR3/1)　しまり中　粘性弱
2　黒褐色土(10YR2/2)　しまり中　粘性中　地山土塊少量含む
3　明黄褐色土(10YR7/6)　しまり中　粘性弱　黒色土粒少量含む
4　褐色土(7.5YR4/4)　しまり中　粘性中
5　橙色粘土(５YR6/6)　しまり中　粘性中
6　黒褐色土(10YR3/2)　しまり中　粘性中
7　褐色粘土(7.5YR4/4)　しまり中　粘性中
焼土　にぶい赤褐色(５YR4/4)

第247図　03-ＳＩ854・カマド



第248図　03-ＳＩ854出土遺物

03-ＳＩ854(第247図・248図、図版78)

遺　構　ＬＰ54・55グリッドの第Ⅳ層中位で、地山土塊を含む黒色土の広がりで確認した。本住居跡の立地点は台地上部平坦面だが、丘陵部西麓から延びる緩斜面に当たり、緩やかに南西側に傾斜する。重複する遺構はなく、周辺には03-ＳＩ336・609、05-ＳＩ803、03-ＳＮ342がある。

堆積土は６層に分けた。２～５層は基本的にレンズ状堆積であり、自然堆積による埋没過程と想定される。６層は壁溝内堆積土である。１層は比較的厚みがあり、地山土粒を含むことから、人為的な投棄土の可能性が高い。

平面形は北東－南西方向に長い長方形で、カマドの付く壁に直交する主軸方位はＮ－７°－Ｗである。主軸とそれに直交するラインで測る住居面積は約８㎡で、小形の住居である。各壁の長さは北壁約3.0m、東壁約2.7m、南壁約3.0m、西壁約2.7mである。壁の検出面からの深さは0.45m前後で、立ち上がりはほぼ垂直である。

床面は掘形底面の地山面を利用している。壁溝はカマド以外の全周で確認した。上場幅0.06～0.22m、下場幅0.02～0.14m、床面からの深さ0.15m前後である。床面及び壁溝内で６個のピットを確認した。Ｐ１～４は住居四隅の主柱穴である。柱穴間の距離は各壁長に準じており、柱穴中心で測る柱穴間距離はＰ１－２間、Ｐ３－４間で約2.7m、Ｐ１－４間、Ｐ２－３間で約2.4mである。Ｐ５は壁中央部にあり、壁板保持の補助柱穴と考えられる。

カマドは南東壁の中央から南西寄りの位置で、焼土粒を含む黒褐色土の広がりで確認した。確認できたのは、煙道、袖、支脚、火床面である。７層に分けた堆積土のうち、１～５層は天井部の崩壊土と流入土の互層で、７層が袖、６層が火床面上に貼った粘土である。煙道から火床面末端まで約1.8m、

袖幅で約1.1ｍである。煙道は細長いスロープである。火床面は不規則な楕円形状の被熱範囲で、長径約0.6ｍ、短径約0.55ｍである。支脚は火床面から奥壁寄りに位置し、底径約10cmの甕の胴下半部を逆位に伏せて設置している。土器の配置からみて、脇にもう一つ支脚があった可能性が高い。

本住居跡は四隅に主柱をもち、南壁にカマドを設置する住居である。最終的に人為的に埋め立てており、周辺状況からみて03-ＳＩ609もしくは、05-ＳＩ803構築時に造成した可能性がある。

遺　物(第248図)　土師器甕・坏・鍋が出土した。基本的に遺物量は少なく小破片が多い。

248図１は比較的小型の土師器甕である。胴部中位が張り出し、頸部にかけて緩やかに内傾して、口縁部が外反する。内外面共に横・斜位のユビナデ調整である。248図２は土師器甕の底部で、砂底である。外面縦位ケズリ、内面斜位ヘラナデ調整で、底部外縁がわずかに張り出す。

248図３・４は土師器坏で、３がＡ類、４がＢ類である。３は口縁部破片で、内湾気味に立ち上がり、口縁部がわずかに外反して、口唇は先細りになる。４は底部で、底面には回転糸切痕をとどめ、内面底部には放射状、胴部には横位のミガキを施す。底部から直線的に外傾する。248図５は土師器鍋で、わずかに内湾するが基本的には直線的に外傾して、口端がわずかに外反する器形で、口縁部は肥厚する。外面縦位ケズリ、内面縦・横位のヘラナデ調整である。

05-ＳＩ02(第249図～251図、図版79・80・165)

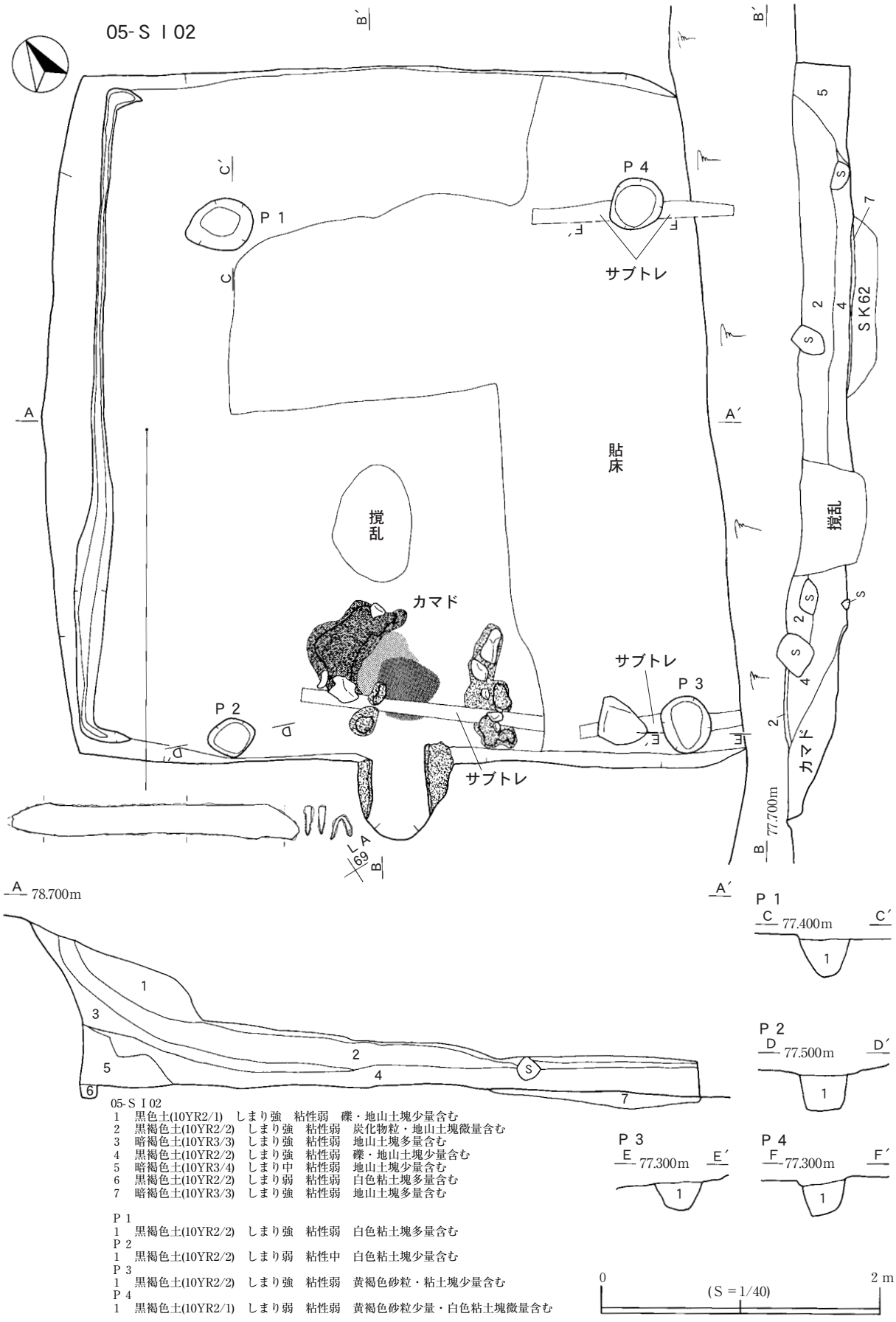
遺　構　ＫＳ69、ＫＴ68～70、ＬＡ69・70グリッドの第Ⅳ層中位～砂礫層で、地山土塊を含む黒色・黒褐色土の広がりで確認した。本住居跡の立地点は丘陵部中腹緩斜面で、南東側へ傾斜する。05-ＳＫ62と重複し、本住居跡の方が新しい。周辺に05-ＳＩ58、05-ＳＳ30、05-ＳＤ01、05-ＳＸ61がある。

堆積土は７層に分けた。１～５層は傾斜上部から順に斜位堆積する流入土であり、本住居跡が廃絶後に自然堆積により埋没したことを示す。６層は壁溝内堆積土で、裏込め土の残存と考えられる。７層は貼床で、地山土塊を多量に含む。

平面形は南東部斜面下位側が崩落しているが正方形とみられる。カマドの付く壁に直交する主軸方位はＮ－35°－Ｅである。北西壁を正方形の一辺とみた場合、住居面積は約23㎡で、中形の住居である。各壁の残存長は、北東壁約4.7ｍ、南西壁約4.8ｍ、完全に残る北西壁で約4.8ｍである。北西壁の検出面からの深さは約1.2ｍで、立ち上がりはほぼ垂直である。

床面は、斜面下位の住居南東側に貼床を施し、その他は掘形底面の地山面を利用している。Ｐ１とＰ４の間は北西側に向けて長く貼床を施すが、これは下部に位置する05-ＳＫ62を埋めるための造成である。壁溝は北西壁沿いにあり、斜面上位の崩落防止と考えられる。上場幅0.05～0.24ｍ、下場幅0.02～0.1ｍ、床面からの深さ0.1ｍ前後の断面台形状である。床面で４個のピットを確認した。Ｐ１～４は主柱穴で、Ｐ１・４が住居隅より内側に、これと相対して、Ｐ２・３が南西壁に取り付く位置にある。柱穴中心で測る柱穴間距離はＰ１－２間約3.7ｍ、Ｐ３－４間約3.7ｍ、Ｐ１－４間約3.0ｍ、Ｐ２－３間約3.2ｍである。

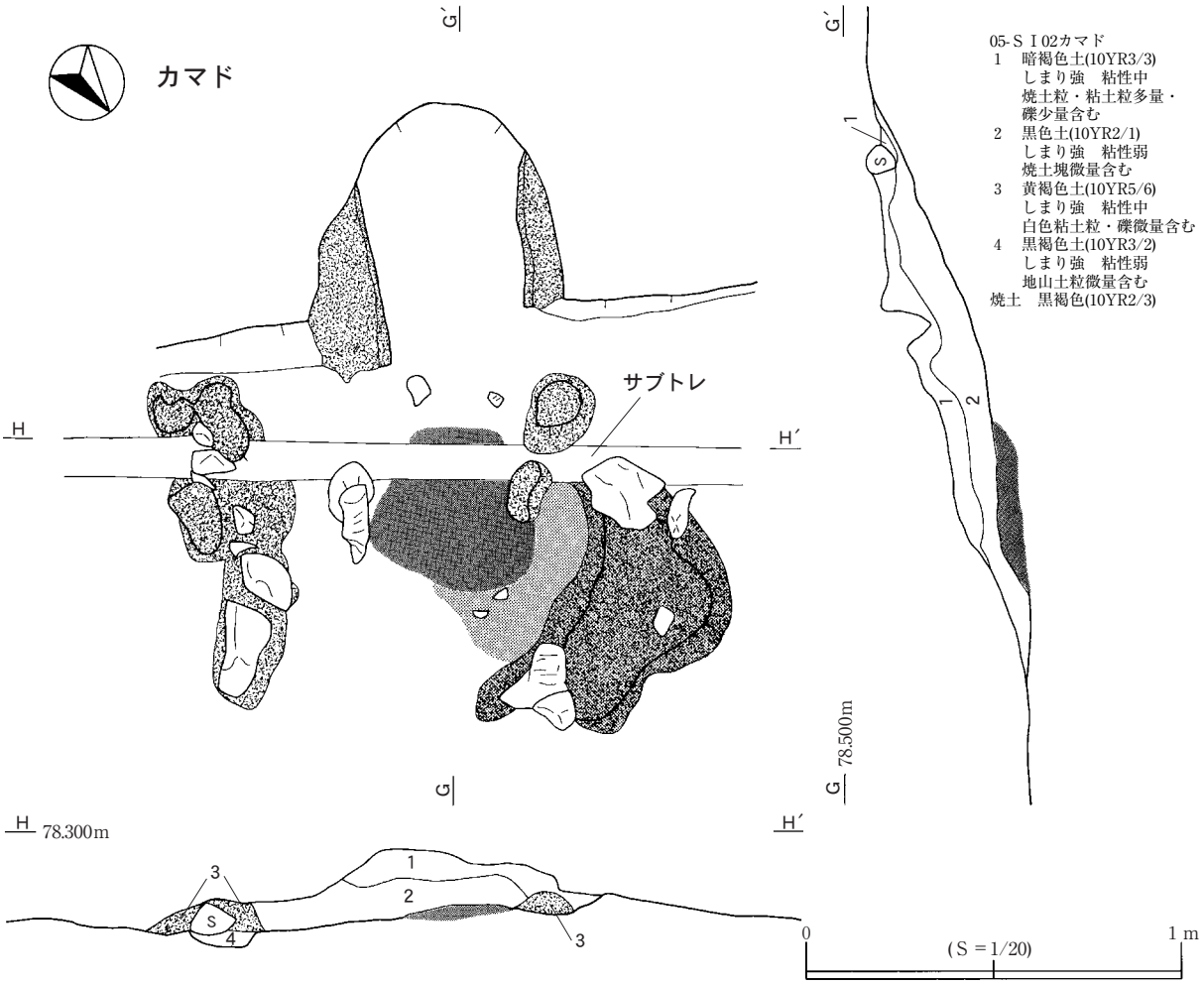
カマドは北東壁の中央から北東寄りの位置で、袖の残存である黄褐色粘土の分布で確認した。確認できた施設は袖と火床面である。４層に分けた堆積土のうち、１・２層は天井部の崩壊土と住居埋め立て時の造成土である。３層がカマド袖構築粘土で、４層はその基部の造成土である。煙道から袖末端まで約1.7ｍ、袖の最大幅が約1.4ｍである。煙道はスロープ状で、住居壁から約0.5ｍ外に延びる。



05-ＳＩ02
1　黒色土(10YR2/1)　しまり強　粘性弱　礫・地山土塊少量含む
2　黒褐色土(10YR2/2)　しまり強　粘性弱　炭化物粒・地山土塊微量含む
3　暗褐色土(10YR3/3)　しまり強　粘性弱　地山土塊多量含む
4　黒褐色土(10YR2/2)　しまり強　粘性弱　礫・地山土塊少量含む
5　暗褐色土(10YR3/4)　しまり中　粘性弱　地山土塊少量含む
6　黒褐色土(10YR2/2)　しまり弱　粘性弱　白色粘土塊多量含む
7　暗褐色土(10YR3/3)　しまり強　粘性弱　地山土塊多量含む

P 1
1　黒褐色土(10YR2/2)　しまり強　粘性弱　白色粘土塊多量含む
P 2
1　黒褐色土(10YR2/2)　しまり弱　粘性中　白色粘土塊少量含む
P 3
1　黒褐色土(10YR2/2)　しまり強　粘性弱　黄褐色砂粒・粘土塊少量含む
P 4
1　黒褐色土(10YR2/1)　しまり弱　粘性弱　黄褐色砂粒少量・白色粘土塊微量含む

第249図　05-ＳＩ02・遺物出土状況



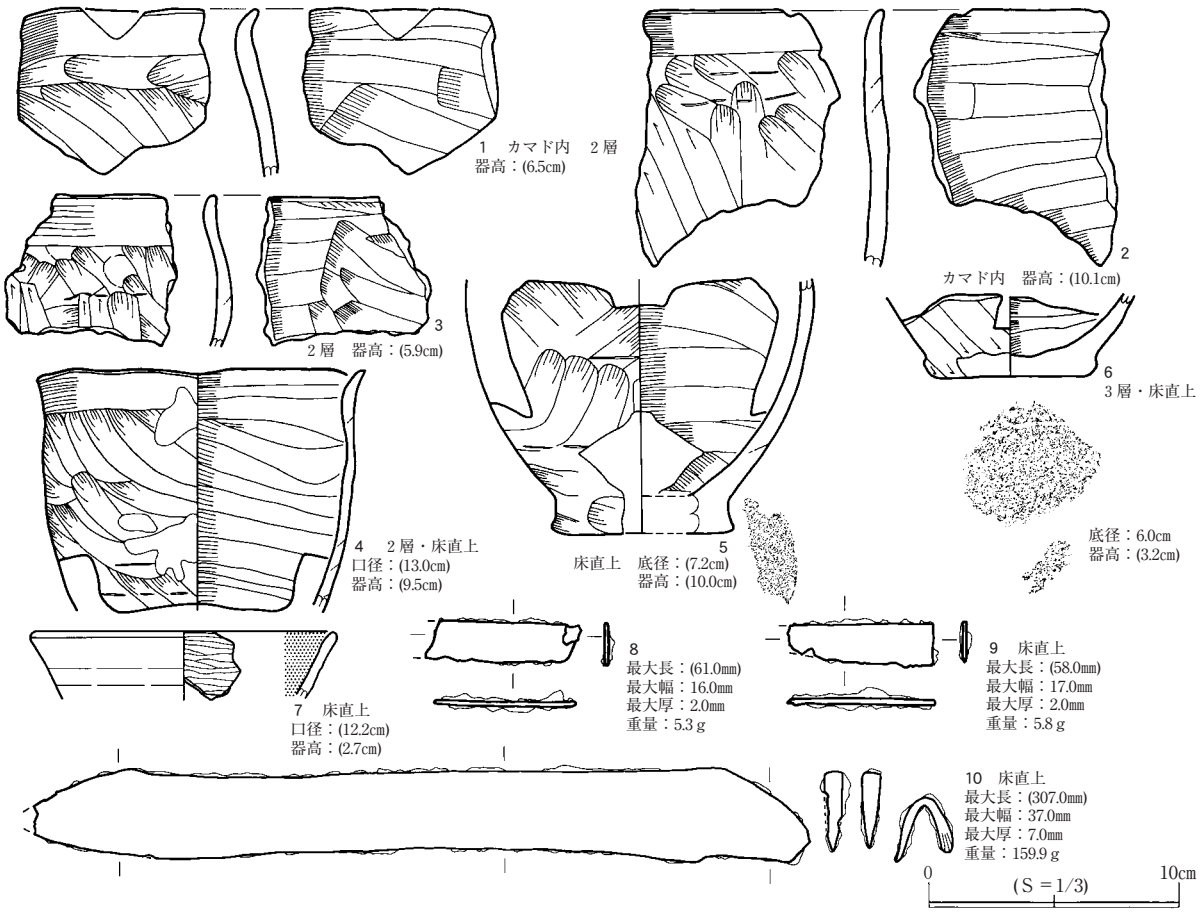
第250図　05-ＳＩ02カマド

袖は礫と粘土を素材としており、焚口側が狭くなるようにカーブする。火床面は不整な円形状の被熱範囲で、径0.4m前後である。

本住居跡は４本の主柱をもち、南西壁にカマドを設置する住居である。廃絶後は自然堆積により埋没している。

遺　物(第251図)　住居跡内から土師器甕・坏、鉄製品が出土した。土師器甕は口縁部が９点、底部が９点出土しており、そのうち比較的大型の口縁部資料４点、底部資料２点を図示した。図示しなかったものを含めた甕の口縁部分類別数量はＡ類(０点)、Ｂ類(０点)、Ｃ類(５点)、Ｄ類(１点)、分類不能(３点)で、底部分類別数量は砂底(９点)の内訳になる。口縁部がわずかに外反するＣ類が主体であり、底部は砂底のみである。遺物の出土は、カマド周辺に集中する。なお251図11の刀は、北西壁沿い中央部の床面に密着した状態で置いていた(第249図)。

251図４は比較的小型の土師器甕である。法量からみて、251図５は同一個体になる可能性がある。頸部まで内湾気味に立ち上がり、口縁部が外反する器形で、外面斜位ユビナデ、内面横位ヘラナデ調整である。251図１～３は土師器甕の口縁部破片である。１は頸部まで内傾し、口縁部が短く外反する。２・３は口縁部まで内湾して口端がわずかに外反する。２・３の外面調整には部分的に縦位ケズリも認められるが、上部はユビナデ、内面はいずれも横位ヘラナデ調整である。251図５・６は土師器甕の底部で、５は４と同一個体の可能性がある。どちらも砂底で、底部外縁が張り出す形状である。



第251図　05-ＳＩ02出土遺物

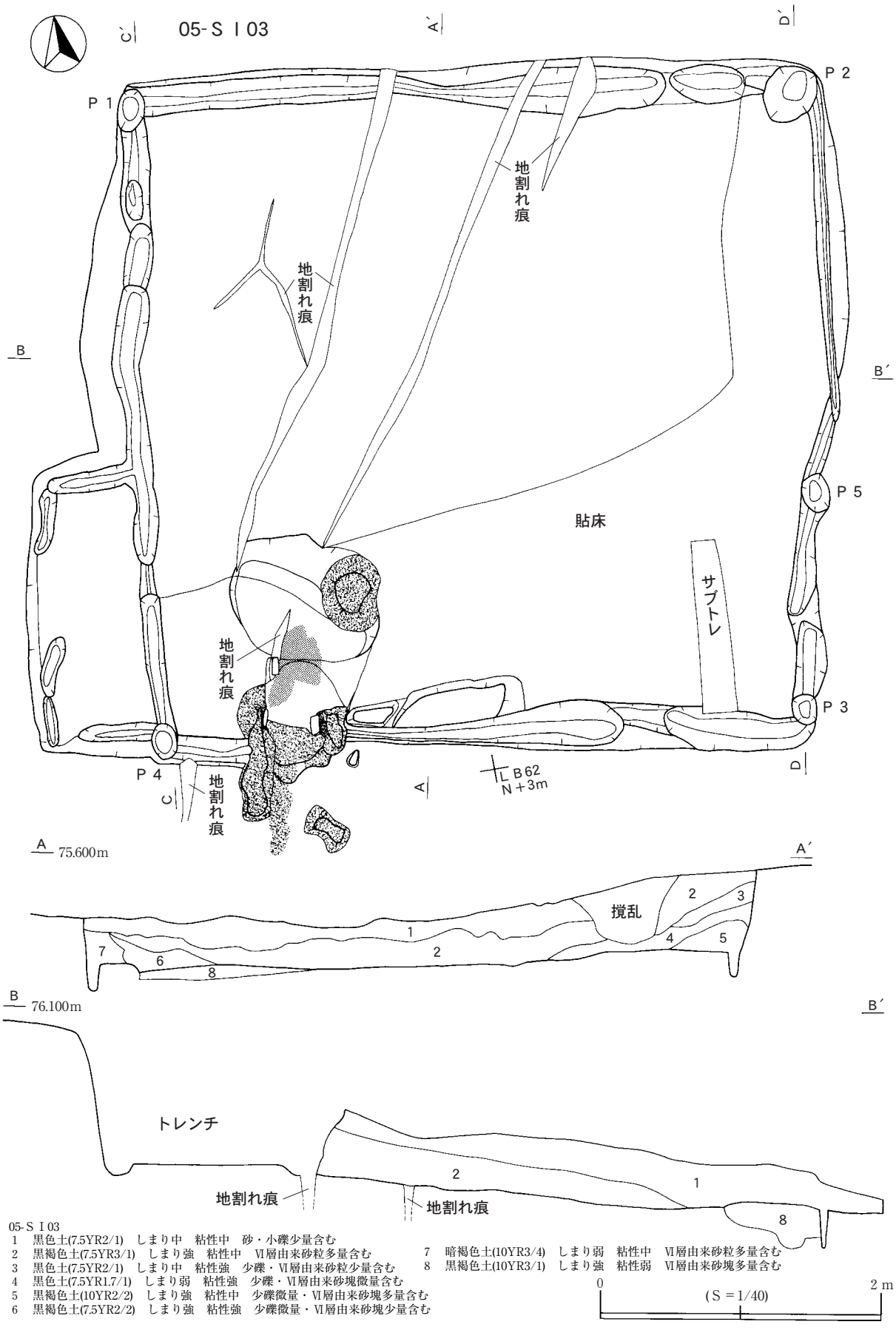
251図７は土師器坏Ｂ類の口縁部破片で、口縁部がわずかに外反する。内面のミガキは横位に施してある。251図８～10は鉄製品である。10は刀で、切先が欠損している。基部側を意図的に折り曲げているが、幅があまり変わらないことから、茎は切断して刀身部分のみを何らかの形で再利用したものと考えられる。８・９は穂摘具と考えられるが、残存状態が悪く詳細は不明である。

05-ＳＩ03(第252図～256図、図版81・153・154)

遺　構　ＬＡ・ＬＢ62・63グリッドの第Ⅳ層中位～第Ⅵ層上面で、砂や小礫を含む黒色土の広がりで確認した。本住居跡の立地点は丘陵部中腹緩斜面で、南東側へ傾斜する。05-ＳＩ36と重複し、本住居跡の方が新しい。周辺には、05-ＳＩ05、05-ＳＡ46・50・84がある。

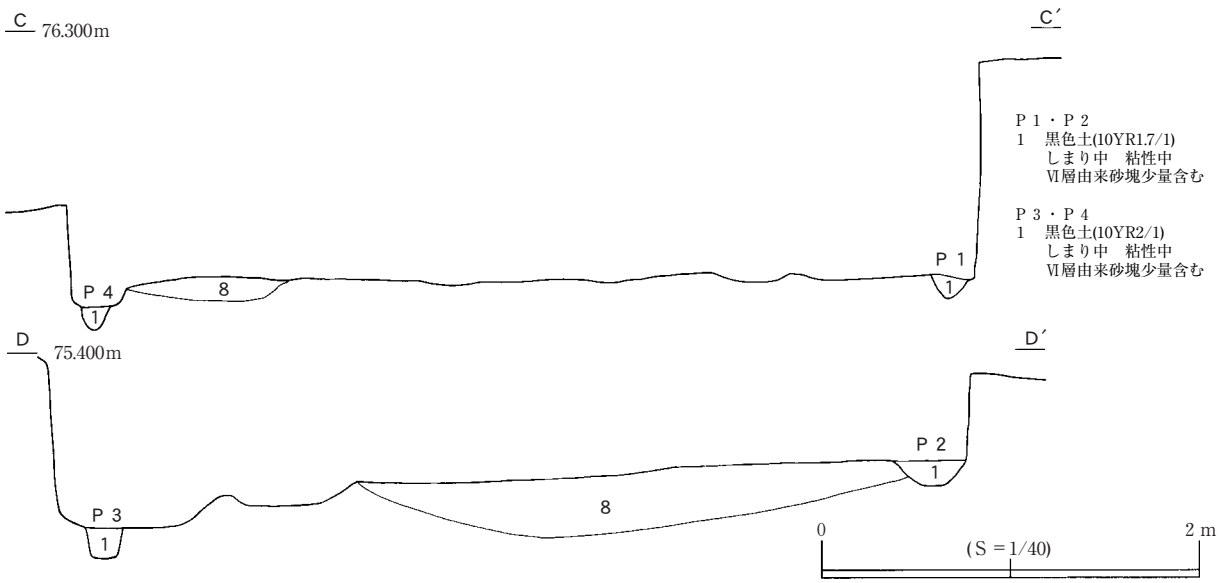
堆積土は８層に分けた。１～７層はレンズ状堆積であり、自然堆積による埋没を示している。５～７層は壁面からの崩落土を多く含むが、壁溝内堆積土と明確に分層できないことから、廃絶時には壁板を撤去していた可能性がある。８層は貼床で斜面下位ほど厚くなる。

平面形は東西方向に長い長方形で、カマドの付く壁に直交する主軸方位はＮ－11°－Ｅである。主軸とそれに直交するラインで測る住居面積は約25㎡で、大形の住居である。各壁の長さは、北壁約5.0ｍ、東壁約4.9ｍ、南壁約4.7ｍ、西壁約4.8ｍである。壁の検出面からの深さは斜面上位で約0.9ｍで、斜面下位は壁溝のみ残存している。立ち上がりはほぼ垂直である。西壁南隅には張り出しが付く。１個のピットと溝で構成され、住居壁直交方向で約0.9ｍ、住居壁平行方向で約1.9ｍで、底面は住居床



05-ＳＩ03
1　黒色土(7.5YR2/1)　しまり中　粘性中　砂・小礫少量含む
2　黒褐色土(7.5YR3/1)　しまり強　粘性中　Ⅵ層由来砂粒多量含む
3　黒色土(7.5YR2/1)　しまり中　粘性強　少礫・Ⅵ層由来砂粒少量含む
4　黒色土(7.5YR1.7/1)　しまり弱　粘性強　少礫・Ⅵ層由来砂塊微量含む
5　黒褐色土(10YR2/2)　しまり強　粘性中　少礫微量・Ⅵ層由来砂塊多量含む
6　黒褐色土(7.5YR2/2)　しまり強　粘性強　少礫微量・Ⅵ層由来砂塊少量含む
7　暗褐色土(10YR3/4)　しまり弱　粘性中　Ⅵ層由来砂粒多量含む
8　黒褐色土(10YR3/1)　しまり強　粘性弱　Ⅵ層由来砂塊多量含む

第252図　05-ＳＩ03



第253図　05-ＳＩ03柱穴

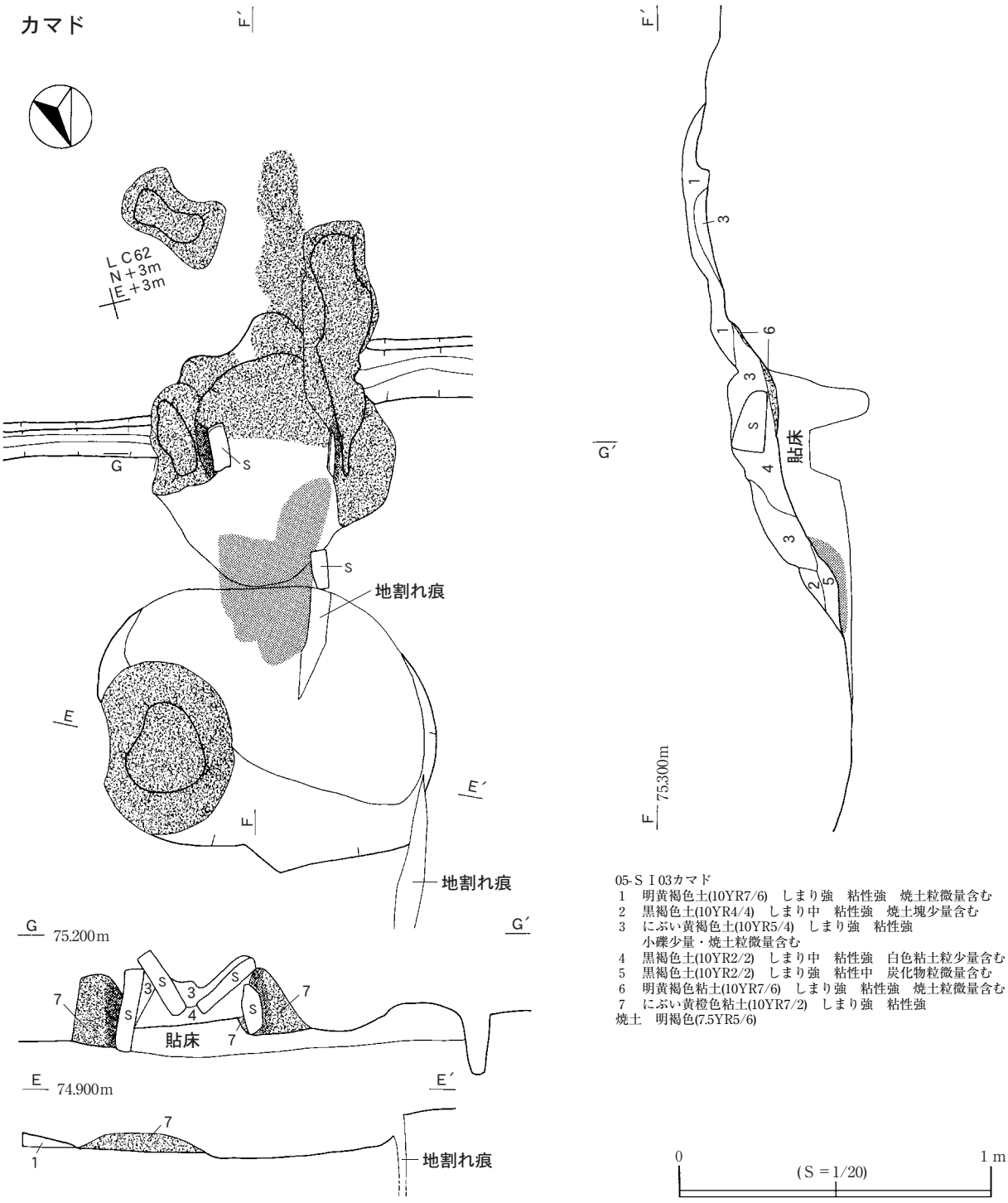
面と同レベルである。張り出しには壁溝が巡るが、西壁中央部で途切れる。出入り口とみられるが、斜面上位の北西壁に位置するため、壁上場との高低差が著しい。

床面は、斜面下位の東壁や南壁沿いに貼床を施し、それ以外は掘形底面の地山面を利用している。貼床は、斜面下位ほど厚くなり、東壁沿いでは約0.2mある。なお、住居中央から西側に３～４本の細い地割れが平行して南北に走る。住居東側は崖に隣接しており、崖面崩落の跡も見つかっていることから、局地的地滑りに伴う亀裂の可能性がある。壁溝は全周で確認した。上場幅0.08～0.34m、下場幅0.02～0.14m、床面からの深さ0.1～0.3mの断面台形状である。壁溝内で５個のピットを確認した。Ｐ１～４は、住居四隅の壁溝内に規則的に配置する主柱穴である。柱穴間の距離は各壁長に準じており、柱穴中心で測る柱穴間距離はＰ１－２間約4.8m、Ｐ３－４間約4.6m、Ｐ１－４間約4.5m、Ｐ２－３間約4.5mである。Ｐ５は壁溝内にあり、壁板保持の補助柱穴と考えられる。

カマドは南壁の中央から西寄りの位置で、袖を構成するにぶい黄橙色粘土の分布で確認した。確認できた施設は、煙道、袖、火床面である。堆積土は７層に分けた。袖を構成する７層は内面に礫を取り込んでおり、礫に接する部分は被熱が明瞭である。火床面は住居貼床の被熱範囲である。５層以上は、カマド上部構造材と周囲からの流入土の互層で、４層中には天井材の板状礫が含まれる。煙道から前庭部末端まで約2.3m、これに直交する最大幅が約1.0mである。煙道はスロープ状で、底面に粘土を貼り、住居壁から約0.6m外に延びる。袖は礫と粘土を素材としており、壁連結部のみに残存する。なお、Ｈ－Ｈ′断面では、天井部を支える扁平な礫が、折れた状態で残存していた。火床面は最大長約0.6mの不整な形状の被熱範囲である。

本住居跡は四隅に主柱をもち、南壁にカマドを設置する住居である。廃絶後は自然堆積により埋没している。

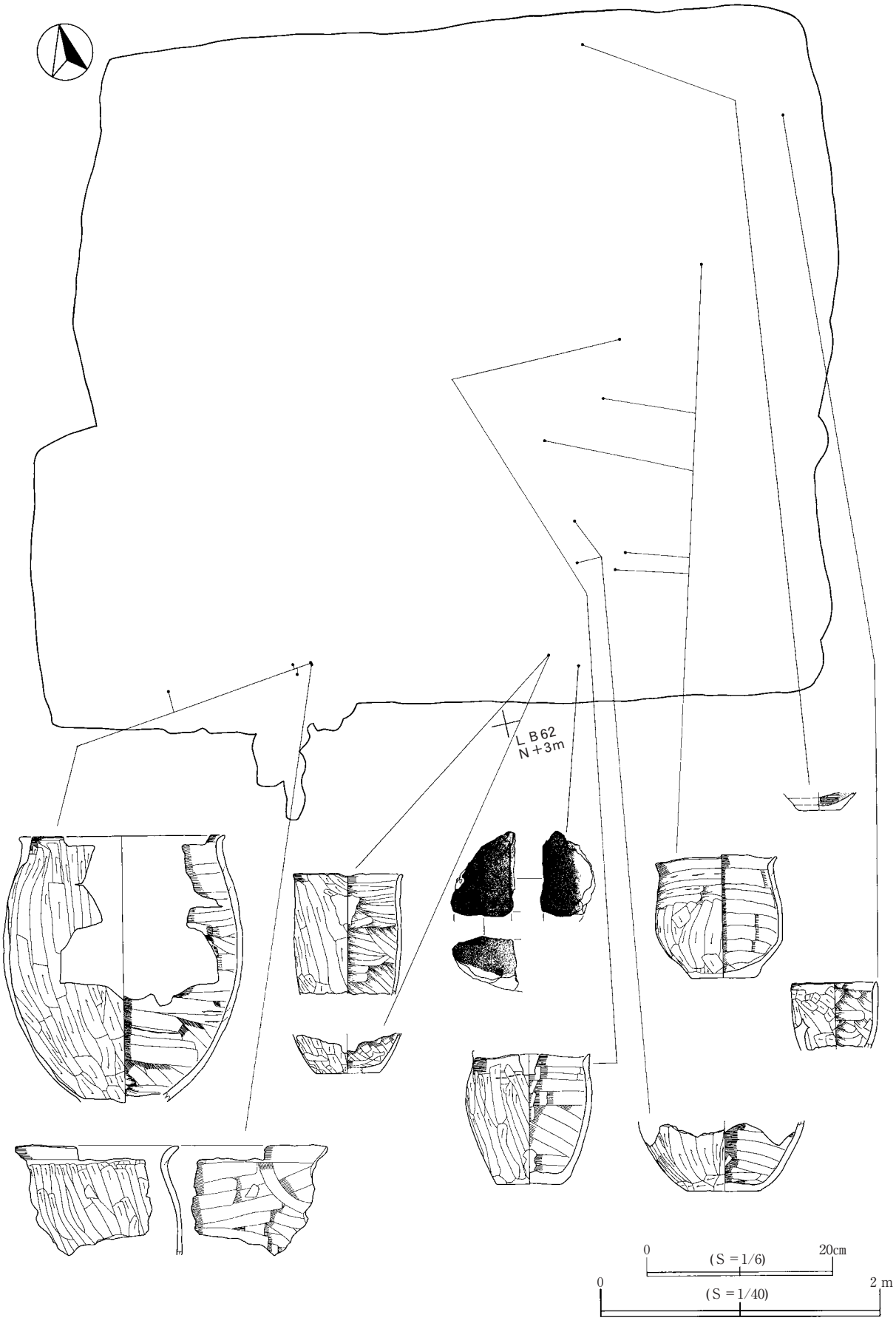
遺　物(第256図)　住居跡内から土師器甕・坏、土製品、鉄滓が出土した。土師器甕は口縁部が13点、底部が５点出土しており、そのうち比較的大型の口縁部資料７点、底部資料４点を図示した。図示しなかったものを含めた甕の口縁部分類別数量はＡ類(０点)、Ｂ類(１点)、Ｃ類(６点)、Ｄ類(３点)、その他(１点)、分類不能(２点)で、底部分類別数量は砂底(３点)、薦編圧痕(１点)、ケズリ(１点)の内訳にな



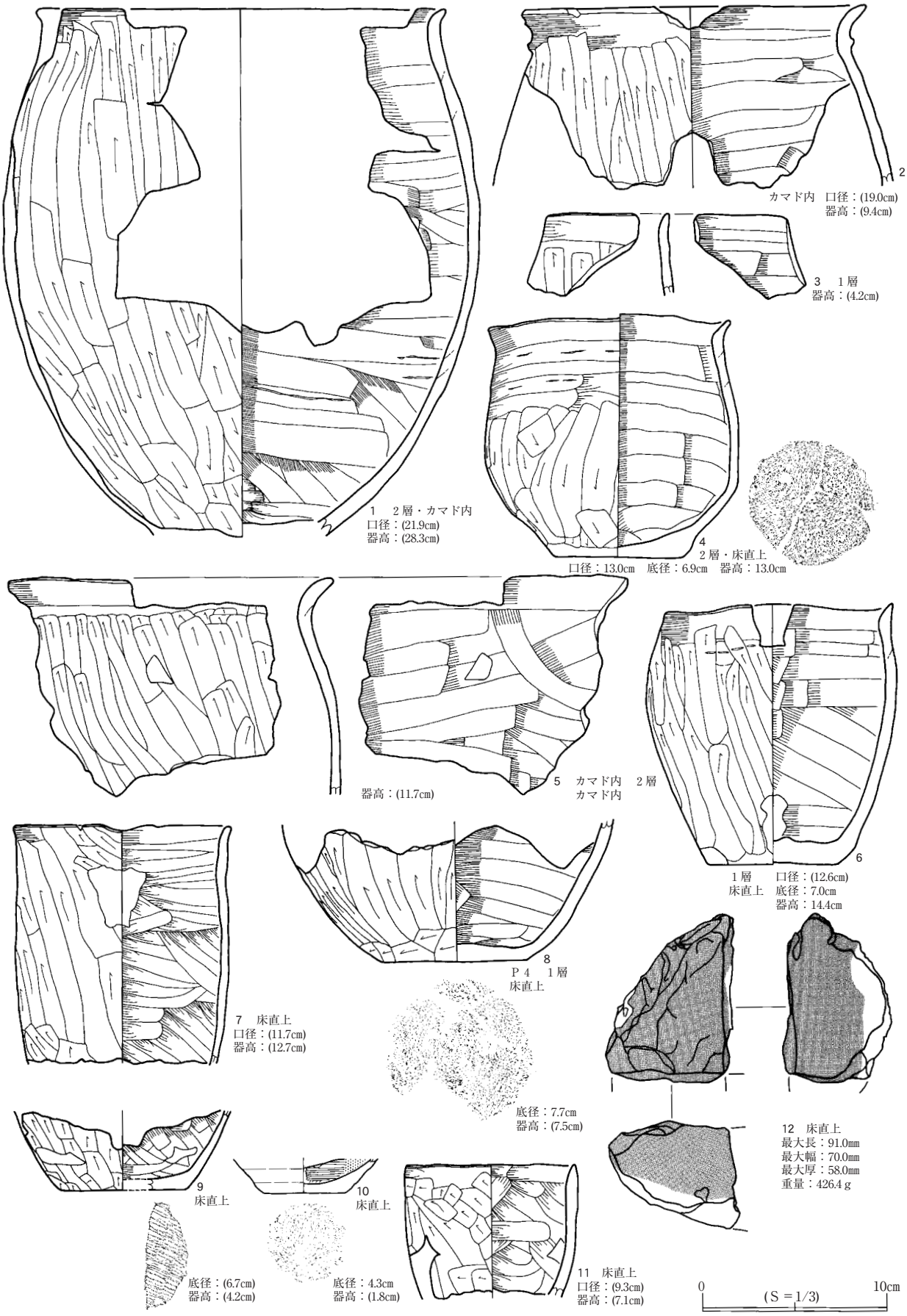
第254図　05-ＳＩ03カマド

る。遺物は、カマド周辺から住居東半分にかけての範囲から出土している(第255図)。前者はカマド破棄時に一括して遺棄したとみられる。

256図１・２は比較的中・大型の土師器甕である。１はほぼ全体形状を窺える資料で、底部から内湾して胴部が球胴状になり、頸部で弱くくびれて口端がわずかに外反する。外面は縦位ケズリ、内面は横位ヘラナデ調整である。２は胴部から内傾して頸部がすぼまり、口縁部が外反する。外面縦位ケズリ、内面横位ヘラナデ調整である。256図４・６・７は比較的小型の土師器甕である。４は胴下部が張り出して頸部まで緩く内傾し、口縁部が外反する。口縁部は内削ぎ状になる。６は胴上部が張り



第255図　05-ＳＩ03遺物出土状況



第256図　05-ＳＩ03出土遺物

出して、口縁部が直立気味に立ち上がる。７は口縁部までほぼ直立する器形である。外面調整は４が胴上部にユビナデを残すが、基本的には縦位ケズリ、内面調整は４・６が横位ヘラナデ、７が横位ユビナデ調整である。なお底面は、４が砂底、６がケズリ再調整である。

256図３・５は土師器甕の口縁部破片である。５は胴上部が内傾して頸部でくびれ、口縁部が外反する器形で、口縁部はやや肥厚する。３は口縁部まで直線的に内傾する。どちらも外面縦位ケズリ、内面横位ヘラナデ調整である。256図８・９は土師器甕の底部で、９が薦編圧痕をとどめ、８が砂底である。どちらも底部から直線的に外傾する形状である。

256図10は土師器坏Ｂ類の底部で、底面に回転糸切痕を残す。256図11は口縁部が直立する器形の小型土器で、外面縦・斜位ケズリ、内面斜位ユビナデ調整である。256図12は椀形滓の破片である。上面から破断面にかけて鉄錆が付着している。

05-ＳＩ05(第257図～260図、図版82)

遺　構　ＬＢ61、ＬＣ60～62、ＬＤ61グリッドの第Ⅳ層中位～第Ⅵ層上面で、砂や小礫を含む黒褐色土の広がりで確認した。本住居跡の立地点は丘陵部中腹緩斜面で、南東側へ傾斜する。05-ＳＫ39と重複し、本遺構の方が古い。周辺には05-ＳＩ03・36、05-ＳＡ46がある。

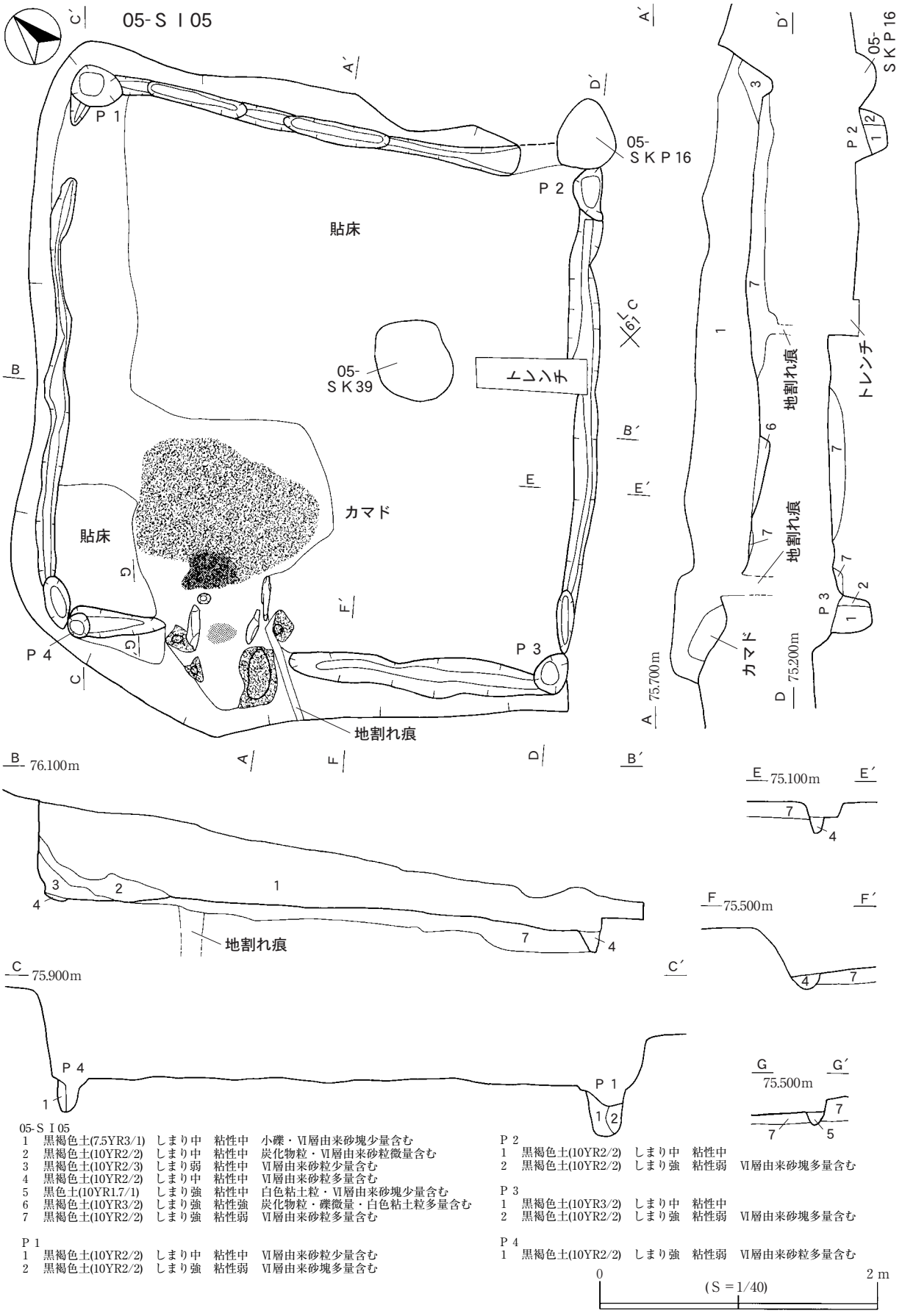
堆積土は７層に分けた。７層は貼床、６層はカマド前庭部に貼った粘土で、床面構築時の造成土である。４・５層は壁溝内堆積土で、壁板構築時の土である。１～３層は住居廃絶後の堆積土であるが、その大部分は１層が占める。２・３層は斜面上位の壁際にわずかに認められる。堆積状態から判断して、廃絶後は人為的に埋め戻したと考えられる。

平面形はやや北隅が張り出す台形である。カマドの付く壁に直交する主軸方位はＮ－46°－Ｅである。主軸とそれに直交するラインで測る住居面積は約16㎡で、中形の住居である。各壁の長さは、北東壁約4.0m、南東壁約3.9m、南西壁約4.0m、北西壁約4.1mである。北西壁の検出面からの深さは約0.7mで、立ち上がりはほぼ垂直である。

床面はほぼ全面に貼床を施し、斜面上位のみ地山上面を利用する。貼床は斜面下位の方が厚くなる傾向にある。壁溝はほぼ全周で確認した。上場幅0.07～0.3m、下場幅0.02～0.1m、床面からの深さは0.05～0.1mの断面台形状である。壁溝内で４個のピットを確認した。Ｐ１～４は住居隅に配置する主柱穴である。柱穴中心で測る柱穴間距離は、Ｐ１－２間約3.7m、Ｐ３－４間約3.4m、Ｐ１－４間約3.9m、Ｐ２－３間約3.5mである。

カマドは南西壁の中央部からやや北西寄りの位置で、にぶい黄橙色の粘土や礫の集中で確認した。確認できたのは、煙道、袖、火床面、前庭部である。堆積土は６層に分けた。基底部は貼床で住居内７層に相当する。６層は袖の芯材に用いる扁平な礫の周囲に分布しており、構築土の残存状態を示す。１～５層はカマド構築土と周囲からの流入土の互層である。煙道から火床面末端まで約1.2m、袖の最大幅が約0.95mである。煙道はスロープ状で、住居壁から約0.3m外に延びる。袖は礫と粘土を素材としている。火床面は不整な楕円形状の被熱範囲で、長径約0.4m、短径約0.25mで、主軸方位は住居主軸方位に直交する。なお、火床面より奥壁寄りにも被熱範囲がある。

本住居跡は四隅に主柱を配置し、南西壁にカマドを設置する住居である。廃絶後は人為的に埋め戻した可能性がある。



05-ＳＩ05
1　黒褐色土(7.5YR3/1)　しまり中　粘性中　小礫・Ⅵ層由来砂塊少量含む
2　黒褐色土(10YR2/2)　しまり中　粘性中　炭化物粒・Ⅵ層由来砂粒微量含む
3　黒褐色土(10YR2/3)　しまり弱　粘性中　Ⅵ層由来砂粒少量含む
4　黒褐色土(10YR2/2)　しまり中　粘性中　Ⅵ層由来砂粒多量含む
5　黒色土(10YR1.7/1)　しまり強　粘性中　白色粘土粒・Ⅵ層由来砂塊少量含む
6　黒褐色土(10YR3/2)　しまり強　粘性強　炭化物粒・礫微量・白色粘土粒多量含む
7　黒褐色土(10YR2/2)　しまり強　粘性弱　Ⅵ層由来砂粒多量含む

P 1
1　黒褐色土(10YR2/2)　しまり中　粘性中　Ⅵ層由来砂粒少量含む
2　黒褐色土(10YR2/2)　しまり強　粘性弱　Ⅵ層由来砂塊多量含む

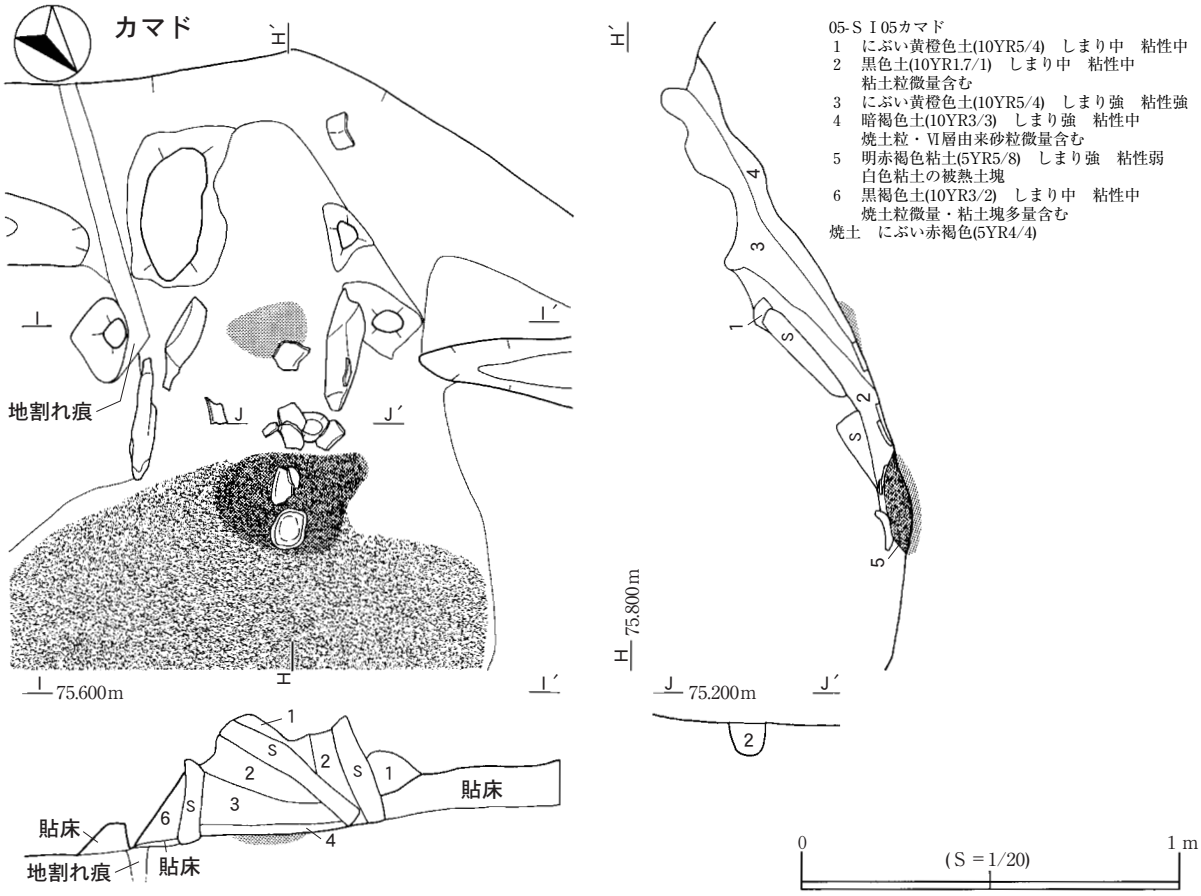
P 2
1　黒褐色土(10YR2/2)　しまり中　粘性中
2　黒褐色土(10YR2/2)　しまり強　粘性弱　Ⅵ層由来砂塊多量含む

P 3
1　黒褐色土(10YR3/2)　しまり中　粘性中
2　黒褐色土(10YR2/2)　しまり強　粘性弱　Ⅵ層由来砂塊多量含む

P 4
1　黒褐色土(10YR2/2)　しまり強　粘性弱　Ⅵ層由来砂粒多量含む

0　2 m
(Ｓ＝1/40)

第257図　05-ＳＩ05



第258図　05-ＳＩ05カマド

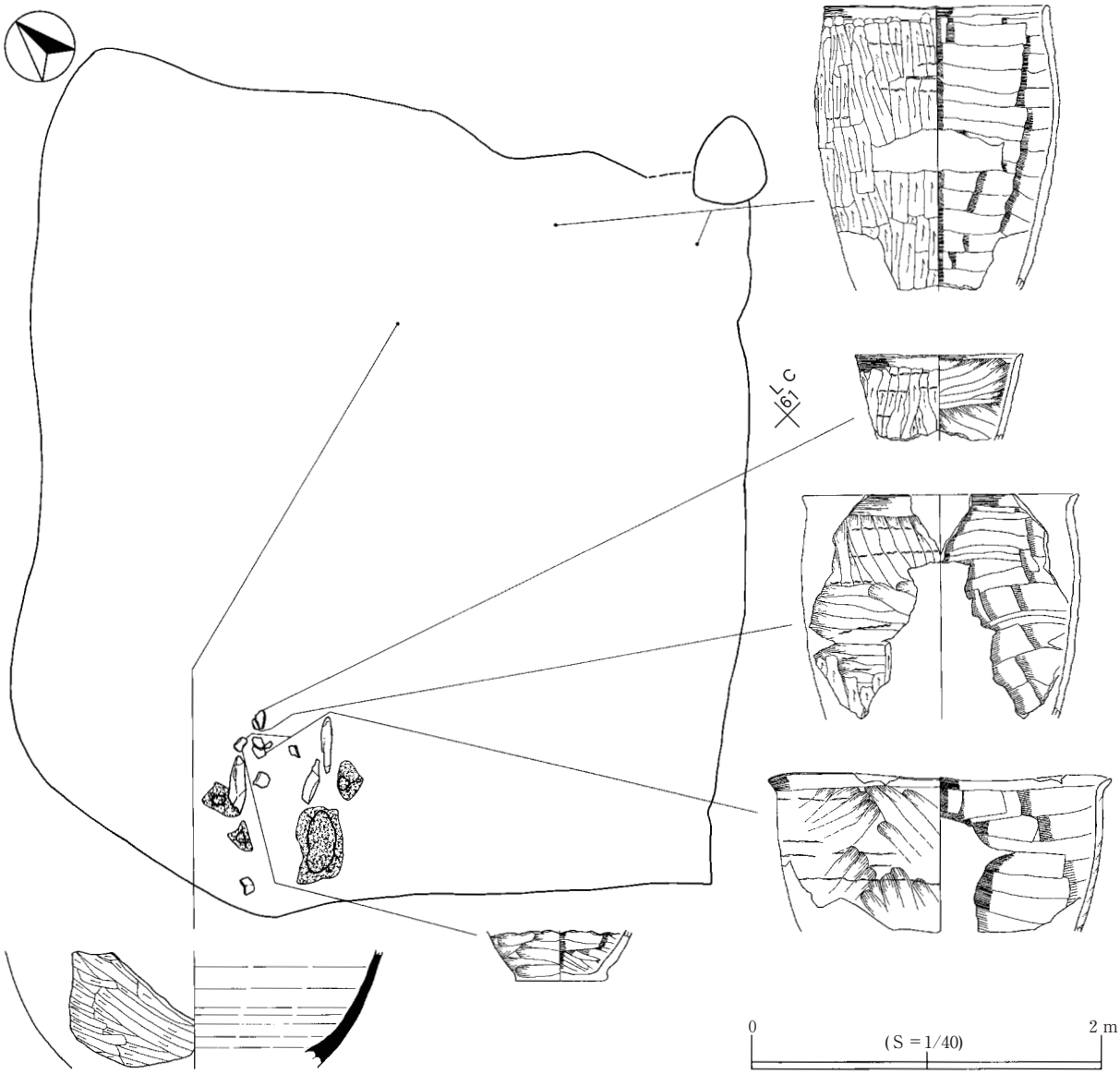
遺　物(第260図)　住居跡内から土師器甕・坏・鍋、須恵器壺、土製品が出土した。土師器甕は口縁部が９点、底部が４点出土しており、そのうち比較的大型の口縁部資料４点、底部資料２点を図示した。図示しなかったものを含めた甕の口縁部分類別数量はＡ類(０点)、Ｂ類(０点)、Ｃ類(５点)、Ｄ類(４点)で、底部分類別数量は砂底(３点)、ケズリ(１点)の内訳になる。

全体的に遺物の出土量は少ないが、出土位置には一定のまとまりがある(第259図)。カマド周辺からの出土が多いが、斜面下位である住居南東壁沿いからも出土しており、前者はカマド破棄時の一括遺物遺棄、後者は住居埋め立て時の意図的な土器遺棄行為とみられる。

260図１～３は比較的中・大型の土師器甕である。１は胴上部が張り出して、口縁部が内湾する器形で、外面縦位ケズリ、内面横位ヘラナデ調整である。２は頸部でわずかにくびれて、口縁部が外反する。外面は胴下部にわずかに縦位ケズリが認められる以外は縦・横位のユビナデ、内面は横・斜位ヘラナデ調整である。３は比較的口径が広い器形で、胴部から内湾して口端が短く外折する。外面は粗雑なユビナデ、内面は横位ヘラナデ調整である。

260図４は比較的小型の土師器甕である。胴部から直線的に外傾する器形で、口唇は内削ぎ状になる。外面縦位ケズリ、内面斜位ユビナデ調整である。260図５・６は土師器甕の底部で、５が砂底、６がケズリ再調整を施す。260図７は、土師器坏Ｂ類の口縁部破片である。

260図８は土師器鍋の口縁部破片で、直線的に外傾し、口唇は先細りになる。外面縦位ケズリ、内面横位ヘラナデ調整である。260図９は須恵器壺の胴下部破片で、外面には斜位のケズリ再調整を施す。260図10は小型土器で、外面縦位ケズリ、内面縦位ユビナデ調整である。



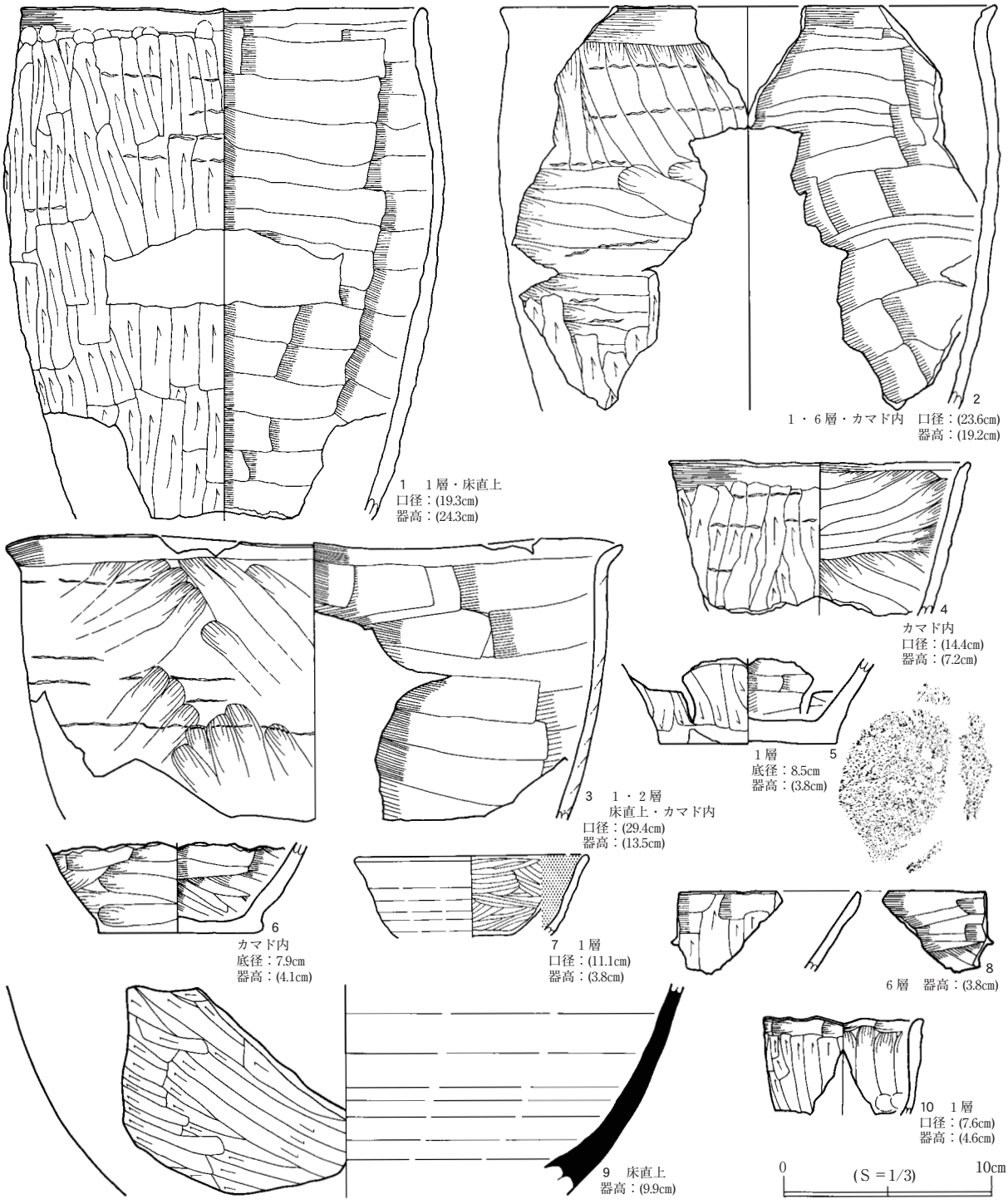
第259図　05-ＳＩ05遺物出土状況

05-ＳＩ06(第261図・262図、図版83)

遺　構　ＬＮ61・62、ＬＯ61グリッドの第Ⅳ層中位で、砂や炭化物を含む黒褐色土の広がりで確認した。本住居跡の立地点は台地上部平坦面でも丘陵部南西麓に当たり、わずかに南西側へ傾斜する。重複する遺構はなく、周辺には05-ＳＩ13、05-ＳＤ38がある。

堆積土は１層のみ確認した。地山由来の黄褐色土塊を多量に含む土で、基本的に人為的な造成土とみられる。平面形は、北西隅が調査区外に位置しており、北東・南東隅の大部分をトレンチにより失っているが、残存する壁の形状からおそらく正方形と考えられる。カマドの付く壁に直交する主軸方位はＮ－４°－Ｅである。南壁を正方形の一辺と見た場合の住居面積は約９㎡で、小形の住居である。壁の残存長は、かろうじて確認できる南壁で約3.0mである。南壁の検出面からの深さは0.3m前後で、ほぼ垂直に立ち上がる。床面は、基本的に掘形底面の地山面を利用しており、壁溝は確認できなかった。床面で１個のピットを確認した。Ｐ１は住居隅にあり、主柱穴の可能性がある。

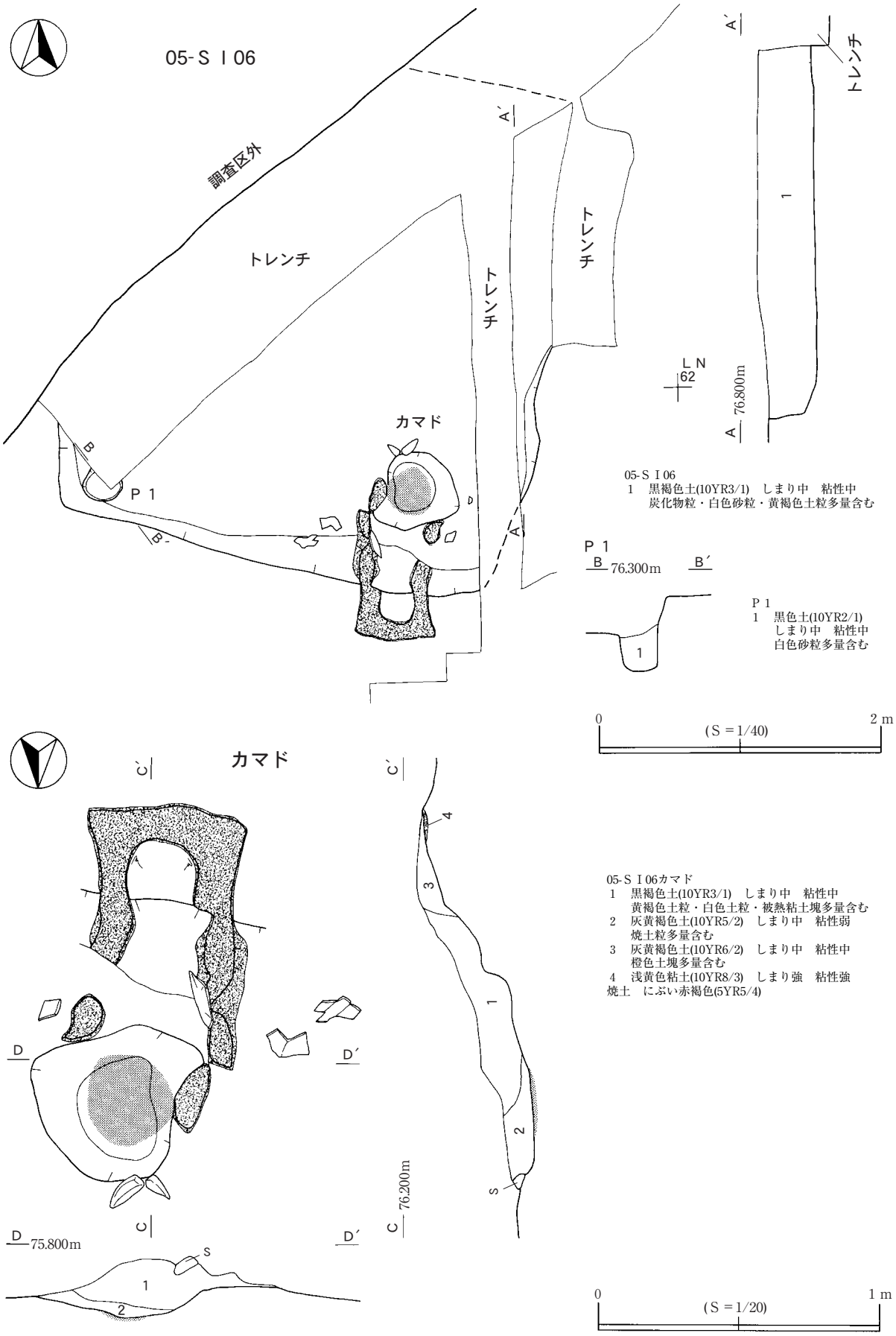
カマドは南壁の中央からやや東寄りの位置で、灰黄褐色粘土の分布で確認した。確認できた施設は、



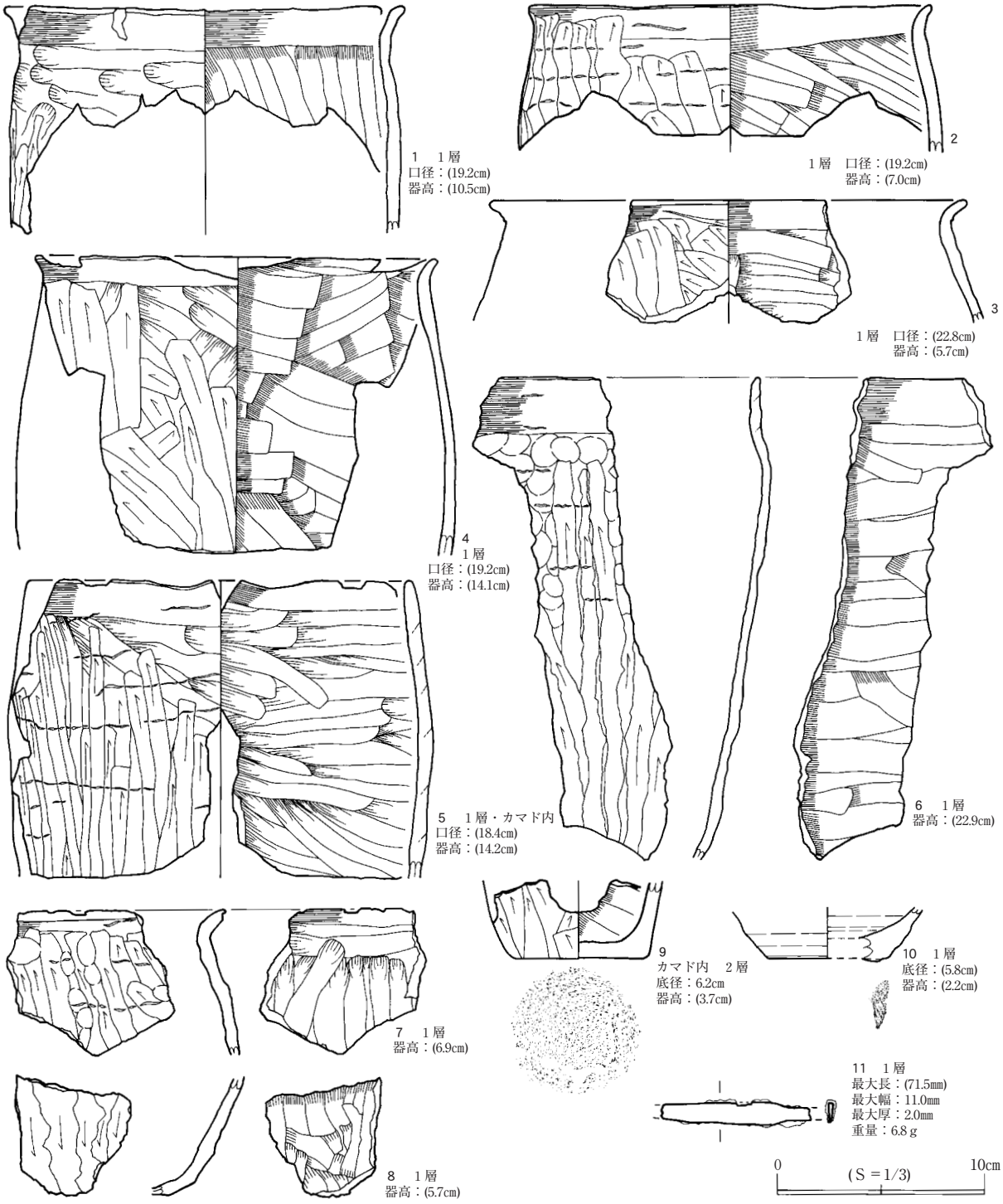
第260図　05-ＳＩ05出土遺物

煙道、袖の一部、火床面である。堆積土は４層に分けた。１層は住居内堆積土とほぼ同じ土で、２・３層が上部構造の倒壊土とみられる。４層は構築土の残存である。煙道から火床面の掘り込み末端まで約1.4m、袖の最大幅が約0.6mである。煙道はスロープ状で、住居壁から約0.3m外に延びる。袖は粘土を素材としており、周辺に分布する礫や土器片は芯材として利用したものと思われる。火床面は径0.35m前後の円形状の被熱範囲で、地山上面を利用している。

本住居跡は南壁にカマドを設置し、隅に主柱をもつとみられる住居である。廃絶後は人為的に埋め立てており、05-ＳＤ38との関係から隣接する05-ＳＩ13構築時に造成したとみられ、本住居跡が05-Ｓ



第261図　05-ＳＩ06・カマド



第262図　05-ＳＩ06出土遺物

Ｉ13よりも古い可能性が高い。

遺　物(第262図)　住居跡内から土師器甕・坏、鉄製品が出土した。土師器甕は口縁部が38点、底部が12点出土しており、そのうち比較的大型の口縁部資料７点、底部資料２点を図示した。図示しなかったものを含めた甕の口縁部分類別数量はＡ類(０点)、Ｂ類(２点)、Ｃ類(25点)、Ｄ類(10点)、分類不能(１点)で、底部分類別数量は砂底(５点)、ケズリ(１点)、回転糸切(１点)、分類不能(５点)の内訳になる。Ｃ類が突出するが、これは本遺構上部を覆う05-ＳＴ82に由来する可能性がある。

262図１～５は比較的中・大型の土師器甕である。１は胴部が直立して頸部でわずかにくびれ、口

縁部が外折して口唇が平坦になる。２～４は胴部から内傾して頸部でわずかにくびれ、口縁部が外反する。中でも３はやや長く外反する。５は胴部が直立して口縁部が緩く内湾する。外面調整は１・４・５の胴上半部にユビナデの残存があるが、基本的には縦・斜位ケズリ、内面は１が縦位ヘラナデ、２・３が横・斜位ヘラナデ、３・５が横位ユビナデ調整である。

262図６・７は口縁部を含む破片資料である。６は直線的に外傾して頸部でわずかにくびれ、口縁部が直立する器形である。７は頸部まで内傾して口縁部が外反し、口唇は角頭状になる。どちらも外面は縦位ケズリ、内面は６が横位ヘラナデ、７が縦位ユビナデ調整である。262図８・９は土師器甕の底部で、９は砂底、８もわずかだが砂の付着が認められる。どちらも底部から直線的に外傾して立ち上がる。なお、９は小型土器になる可能性がある。262図10は土師器坏Ａ類の底部である。

262図11は鉄製品で、刀子の刀身から茎の一部までが残存する資料である。

05-ＳＩ13(第263図・264図、図版84・149)

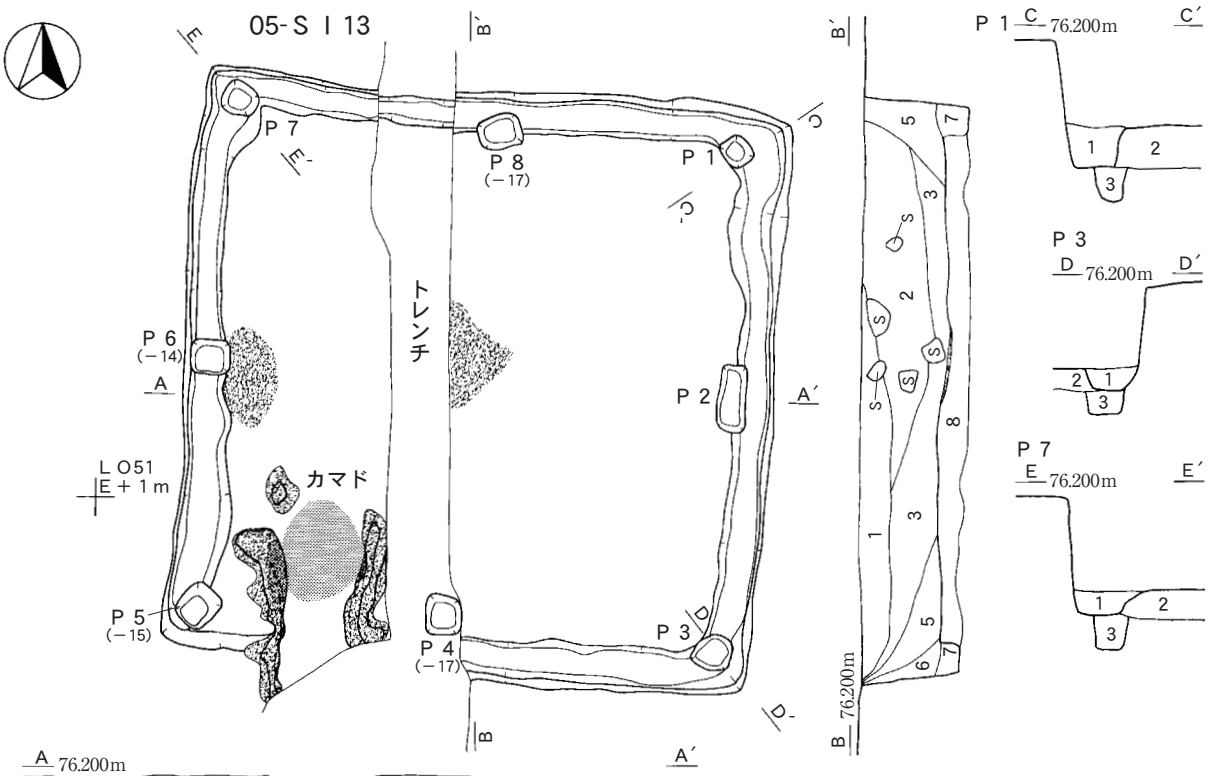
遺　構　ＬＭ・ＬＮ50・51グリッドの第Ⅳ層中位で、地山土塊を含む黒褐色土の広がりで確認した。本住居跡の立地点は台地上部平坦面でも丘陵部南西麓に当たり、わずかに南西側へ傾斜する。05-ＳＤ38と重複し、本住居跡が新しい。周辺には05-ＳＩ06がある。

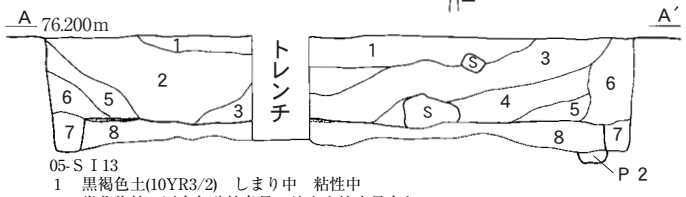
堆積土は８層に分けた。８層は貼床の土、７層は壁溝内堆積土である。３～６層は壁際からレンズ状に堆積する流入土である。これに対し、１・２層は遺物を多量に含み、本住居跡の上部に形成される05-ＳＴ82に連続する堆積土である。このことから、本遺構は廃絶後一定期間放置されて、ある程度自然に埋没した後、その上部を人為堆積層が覆ったと考えられる。

平面形はほぼ正方形で、カマドの付く壁に直交する主軸方位はＮ－３°－Ｅである。主軸とそれに直交するラインで測る住居面積は約９㎡で、小形の住居である。各壁の長さは、北壁約3.1m、東壁約3.0m、南壁約3.1m、西壁約3.1mである。検出面からの深さは各壁で0.4m前後で、ほぼ垂直に立ち上がる。

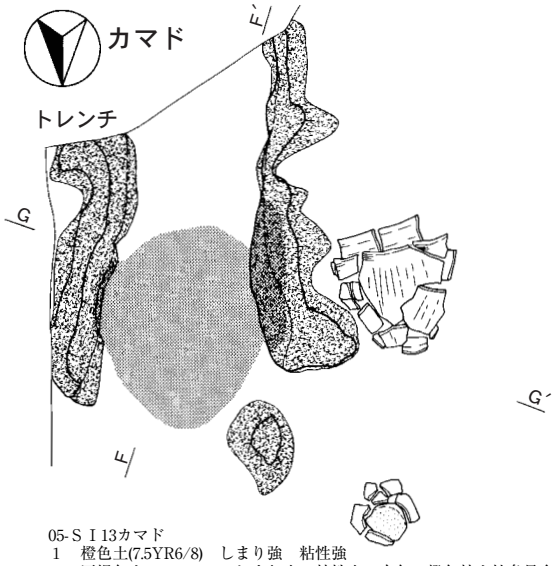
床面は全面に貼床を施す。掘形底面と壁溝底面は同レベルで、床は0.1～0.15mかさ上げする。壁溝はカマド以外の全周で確認した。上場幅0.15～0.27m、下場幅0.1～0.15m、床面からの深さ0.1m前後である。床面及び壁溝内で８個のピットを確認した。Ｐ１・３・５・７は住居四隅の主柱穴である。柱穴中心で測る柱穴間距離は、Ｐ１－３間約2.7m、Ｐ５－７間約2.7m、Ｐ１－７間約2.6m、Ｐ３－５間約2.8mである。Ｐ２・４・６・８は壁中央部にあり、壁板保持の補助柱穴と考えられる。いずれの柱穴も住居内側部分に貼床の土がのっており、壁溝底面で横に堆積土が切れることから、柱穴主体から壁溝主体の壁板保持構造に変化したことが窺える。

カマドは南壁の中央から西寄りの位置で、袖を構成する淡黄褐色粘土の分布で確認した。確認できた施設は、煙道の一部、袖、火床面である。堆積土は７層に分けた。７層は袖の残存部である。１～６層は、上部構造の倒壊土と周囲からの流入土の互層である。煙道から袖末端まで約1.2m、袖の最大幅が約0.8mである。煙道はスロープ状で、住居壁から0.25m以上外に延びる。袖は粘土を主体に造っており、煙道から直線的に平行に延びる。なお、袖の内面には粘土を盛り付けた際の指の跡が明瞭に残っていた。火床面は不整な楕円形状の被熱範囲で、長径約0.55m、短径約0.45mである。袖の西脇には１個体の甕がつぶれた状態で遺存していた。



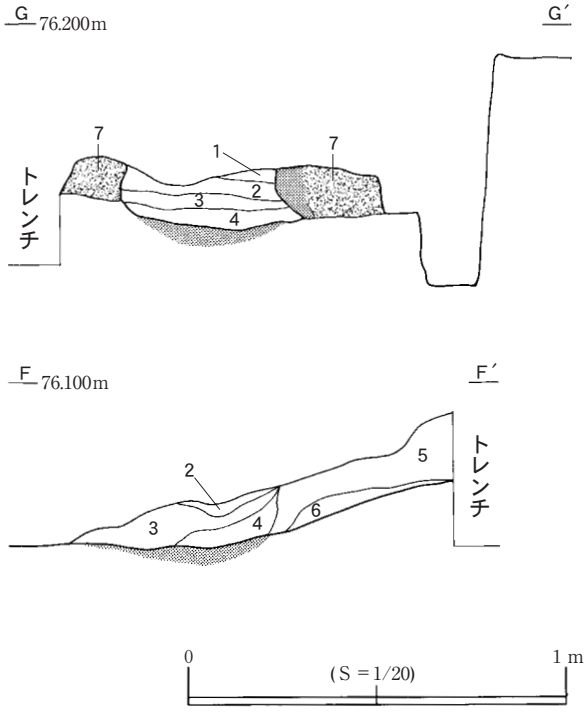


05-ＳＩ13
1　黒褐色土(10YR3/2)　しまり中　粘性中
　炭化物粒・灰白色砂粒多量・地山土塊少量含む
2　黒褐色土(10YR3/1)　しまり強　粘性中　地山土塊多量含む
3　黒褐色土(10YR3/1)　しまり弱　粘性弱　灰白色砂粒多量含む
4　黒褐色土(10YR3/1)　しまり弱　粘性弱　黒色土粒少量含む
5　黒褐色土(10YR3/2)　しまり中　粘性弱　灰白色砂粒多量含む
6　黒色土(10YR2/1)　しまり中　粘性強　灰白色砂粒多量含む
7　黒褐色土(10YR3/1)　しまり中　粘性中　地山土粒少量含む
8　黒褐色土(10YR3/1)　しまり強　粘性中　地山土塊多量含む

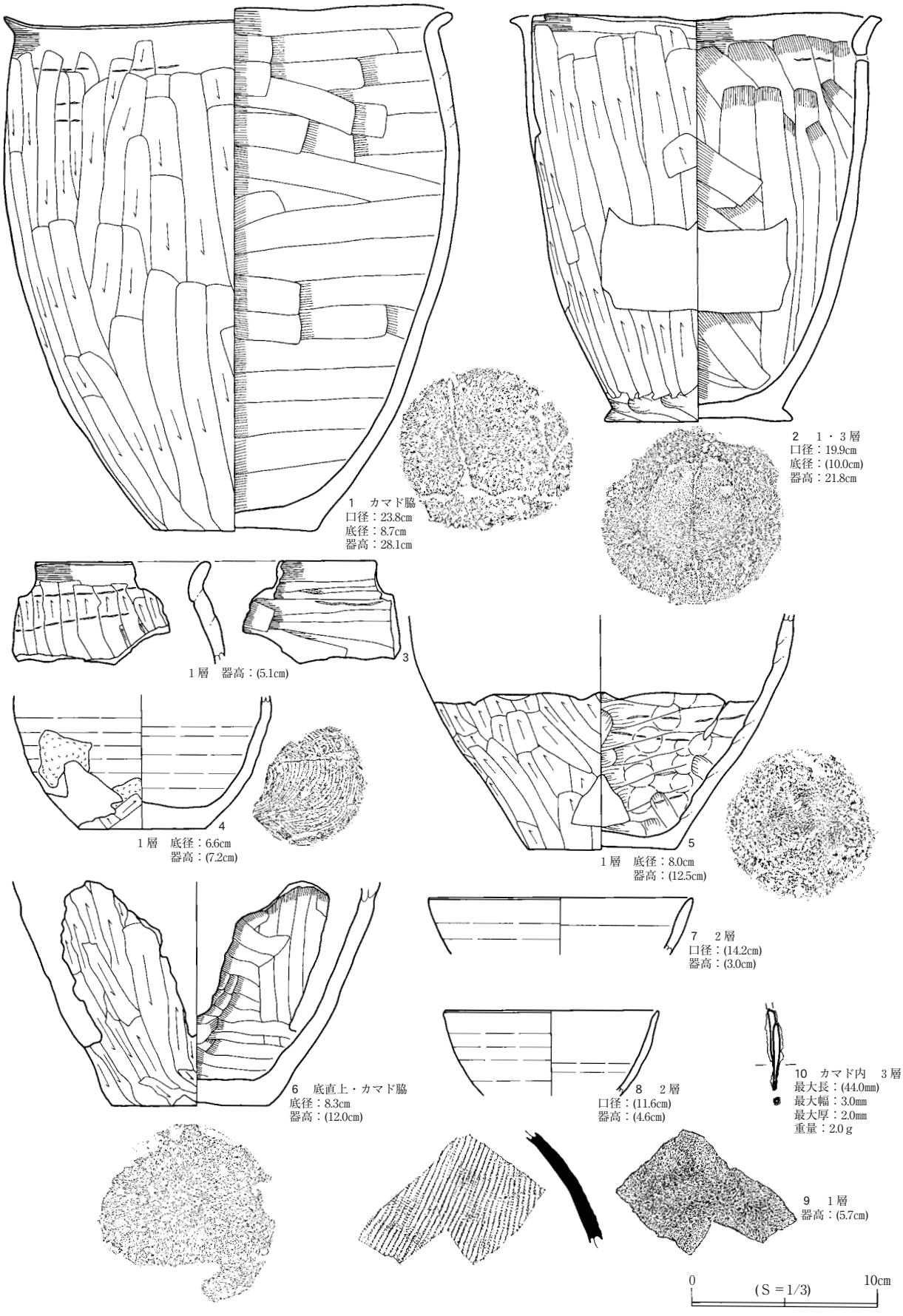


05-ＳＩ13カマド
1　橙色土(7.5YR6/8)　しまり強　粘性強
2　灰褐色土(7.5YR5/2)　しまり中　粘性中　白色・橙色粘土粒多量含む
3　暗褐色土(7.5YR3/3)　しまり中　粘性強　橙色粘土粒少量含む
4　明黄褐色土(7.5YR5/6)　しまり中　粘性中　焼土粒少量含む
5　橙色土(7.5YR6/6)　しまり強　粘性強　白色粘土・橙色粘土の混合層
6　黒褐色土(7.5YR2/2)　しまり強　粘性弱　橙色粘土粒少量含む
7　淡黄褐色粘土(5YR8/4)　しまり強　粘性強
焼土　明黄褐色(5YR5/8)

P１・Ｐ３・Ｐ７
1　黒色土(10YR2/1)　しまり弱　粘性中　黄褐色土粒微量含む
2　黄褐色土(10YR7/8)　しまり強　粘性強
3　黒色土(10YR2/1)　しまり中　粘性中　黄褐色土粒多量含む



第263図　05-ＳＩ13・カマド



第264図　05-ＳＩ13出土遺物

本住居跡は四隅に主柱をもち、南西壁にカマドを設置する住居である。貼床と柱穴の関係から、途中で壁溝による壁板保持構造になったと想定される。廃絶後は一時期自然堆積により埋没するが、あまり時間を空けずに人為的に埋め立てている。

遺　物(第264図)　住居跡内から土師器甕・坏、須恵器甕、鉄製品が出土した。土師器甕は口縁部が９点、底部が６点出土しており、そのうち比較的大型の口縁部資料３点、底部資料５点を図示した。図示しなかったものを含めた甕の口縁部分類別数量はＡ類(０点)、Ｂ類(１点)、Ｃ類(６点)、Ｄ類(１点)、分類不能(１点)で、底部分類別数量は砂底(５点)、回転糸切(１点)の内訳になる。なお、１・２層出土のものは、本住居跡上部を覆う05-ＳＴ82に由来するものとみられる。

264図１・２は比較的中・大型の土師器甕である。どちらも全体形を窺える資料で、底部は砂底である。１は底部から直線的に立ち上がって頸部にかけて内湾し、口縁部が短く外反する。２は底部外縁が張り出し、頸部まで直立気味に外傾して立ち上がり、口縁部が短く外折して、口唇は角頭状になる。どちらも外面は縦位ケズリで、内面は１が横位ヘラナデ、２が縦位ヘラナデ調整である。264図３は土師器甕の口縁部破片で、頸部まで内湾し、口縁部が直立気味に弱く外反する。外面縦位ケズリ、内面横位ヘラナデ調整である。264図４～６は土師器甕の底部である。４はロクロ整形で、底面には回転糸切痕を残す。５・６は砂底で、どちらも底部から直線的に外傾して立ち上がる。

264図７・８は土師器坏Ａ類である。７は比較的器壁が厚く内湾気味の器形で、８は比較的器壁が薄く口縁部が外反する。264図９は須恵器甕の肩部付近の破片で、タタキ目が確認できる。264図10は鉄製品で、上端を欠損する棒状のもので詳細は不明である。

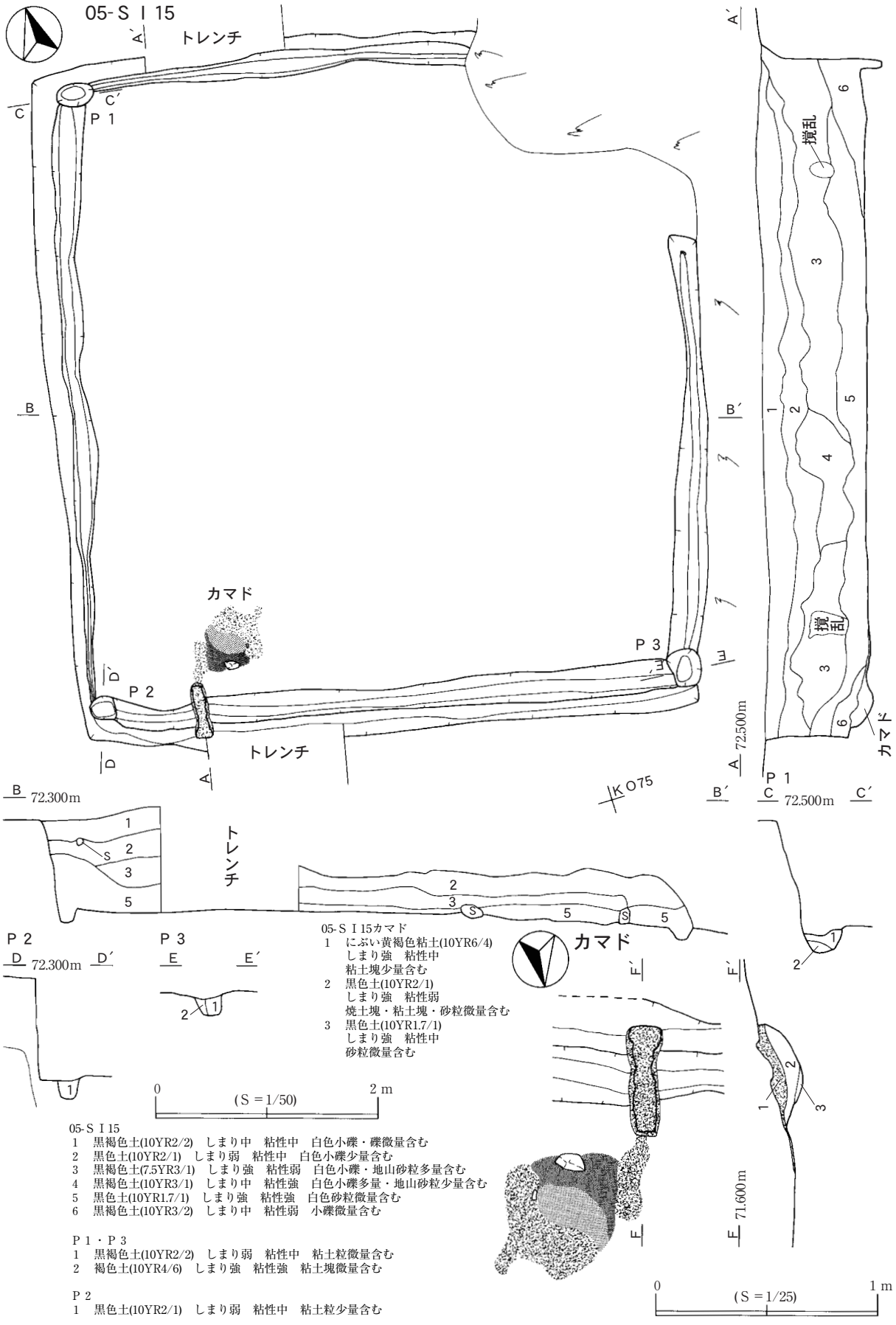
05-ＳＩ15(第265図・266図、図版85・159)

遺　構　ＫＮ～ＫＰ75～77グリッドの第Ⅳ層中位で、小礫を含む黒色・黒褐色土の広がりで確認した。本住居跡の立地点は丘陵部北部中腹緩斜面で、東側へ傾斜する。重複する遺構はなく、周辺には05-ＳＩ58、05-ＳＮ21、05-ＳＤ23がある。

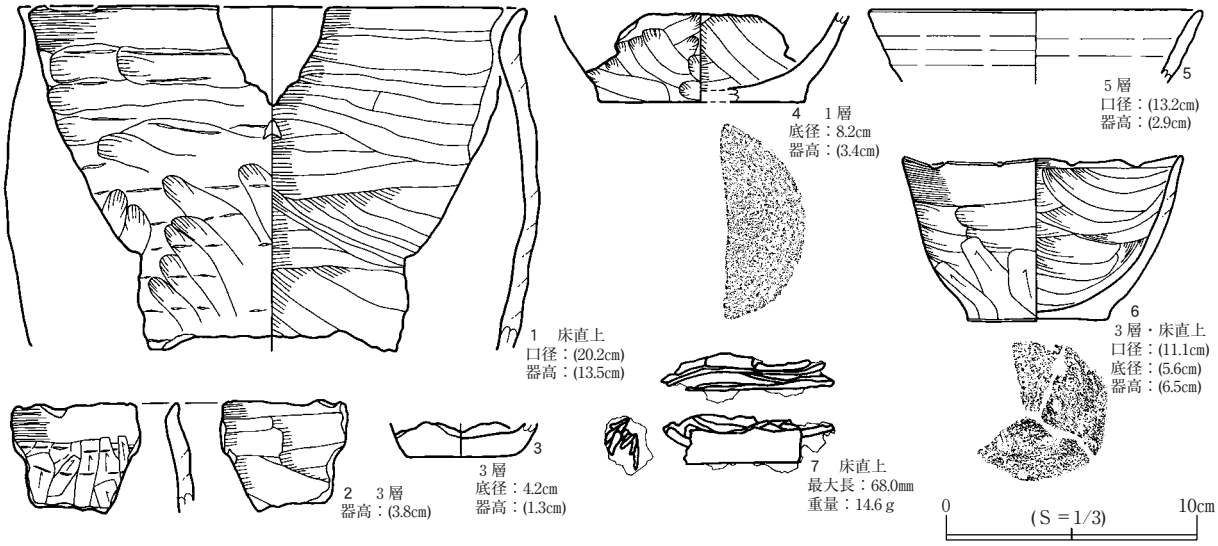
堆積土は６層に分けた。全て黒色基調の土で、レンズ状堆積を示すことから、自然堆積により埋没したと考えられる。平面形は北東部が一部崩落しているが、北東－南西方向にわずかに長い長方形とみられる。カマドの付く壁に直交する主軸方位はＮ－17°－Ｅである。主軸とそれに直交するラインで測る住居面積は約37㎡で、大形の住居である。各壁の残存長は、壁残存部のラインを延長した場合、北東壁約5.8m、南東壁約6.0m、南西壁約5.5m、北西壁約5.9mである。検出面からの深さは、斜面上位の北西壁で約0.8mだが、南東壁は斜面下位へ崩落している。立ち上がりはほぼ垂直である。

床面は全面で掘形底面の地山面を利用している。壁溝は北東隅崩落部以外の全周で確認した。上場幅0.05～0.3m、下場幅0.02～0.15m、床面からの深さは0.1～0.2mの断面台形状である。壁溝内で３個のピットを確認した。Ｐ１～３は住居隅に配置する主柱穴である。東隅は崩落により失われている。柱穴中心で測る柱穴間距離は、Ｐ１－２間約5.5m、Ｐ２－３間約5.2mである。

カマドは南西壁の中央部から南西寄りの位置で、火床面となる被熱範囲で確認した。上部構造は失われており、袖の一部と火床面のみの確認となった。そのため、確認できた堆積土も少ない。１～３層は構築粘土と流入土の互層である。住居上場から火床面末端まで約1.2m、袖の残存幅が約0.6mである。袖は粘土による構築部のみが残存している。火床面は不整な台形状の被熱範囲で、最長約0.4m、



第265図　05-ＳＩ15・カマド



第266図　05-ＳＩ15出土遺物

最大幅約0.35ｍである。焼土の周りには、上部構造の基部に当たる粘土範囲が認められる。

本住居跡は隅に主柱をもち、南西壁にカマドを設置する住居である。廃絶後は自然堆積により埋没している。

遺　物(第266図)　住居跡内から土師器甕・坏、鉄製品が出土した。遺物量は基本的に少なく、主体的なものは全て図示した。

266図１は比較的中・大型の土師器甕で、胴上部が張り出し、頸部がくびれて口縁部が外反する。口縁部はやや肥厚する。外面は縦・横位のユビナデ、内面は横位ヘラナデ調整である。266図２は土師器甕の口縁部破片で、口縁部まで内湾して、口端がわずかに直立する。外面縦位ケズリ、内面横位ヘラナデ調整である。266図３・４は土師器甕の底部で、４は砂底、３はケズリ再調整を施す。３は底径が小さいので、小型土器の可能性もある。４は底部からやや直立してから外反する。

266図５・６は土師器坏で、５がＡ類、６はＤ類である。５は口縁部破片で、直線的に外傾する。６は約2/3が残存する資料で、底部が突出し、胴下半部から直線的に外傾して口縁部で緩く外反する。外面が縦位ケズリ、内面が横位ヘラナデ調整で、土師器甕の調整と同じ作りである。胎土をみても差異はなく、小型甕製作途中で本土器への製作転向を図ったともみてとれる。

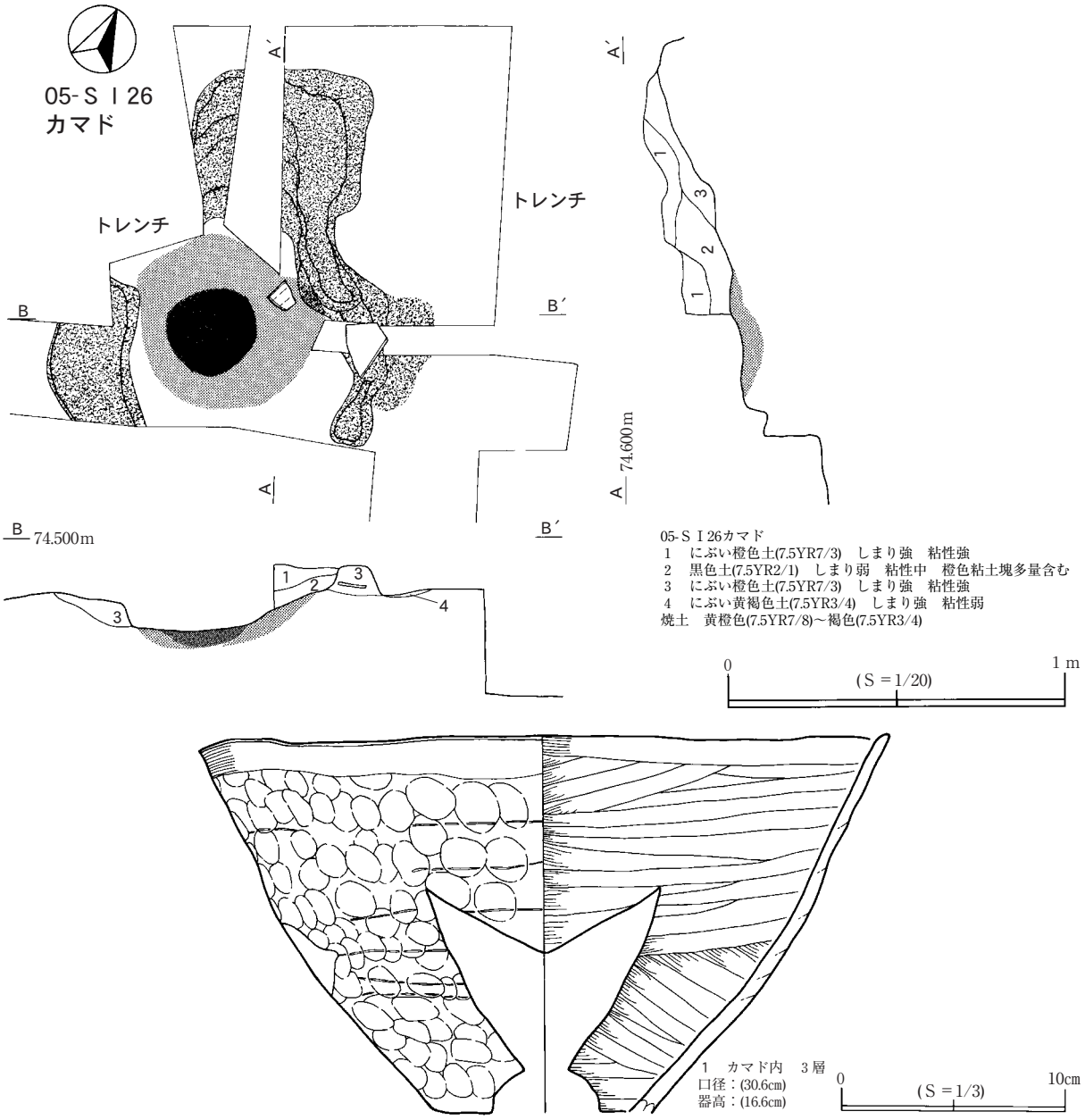
266図７は鉄製品で、小さい鉄板が数枚重なっている。

05-ＳＩ26(第267図)

遺　構　ＭＤ54グリッドの05-ＳＩ27上面で、カマド構築部材の広がりで確認した。床面及び周壁の立ち上がりなどを複数回精査して確認に努めたが、住居埋土上面ということもあり、明確に把握できずカマドのみの検出になった。本住居跡の立地点は台地上部平坦面である。05-ＳＩ27と重複し、本住居跡が新しい。周辺には02-ＳＩ24・25、03-ＳＩ173、05-ＳＩ28がある。

確認できた施設は煙道、袖、火床面である。堆積土は４層に分けた。３層はカマド基底部から袖を構築する粘土である。１・２層は構築材の崩落土と周囲からの流入土の互層である。火床面は、05-ＳＩ27内堆積土上部を利用した被熱範囲である。

煙道から袖末端まで約1.1ｍ、袖の最大幅が約1.0ｍである。煙道はスロープ状で、外周部まで粘土



第267図　05-ＳＩ26カマド・出土遺物

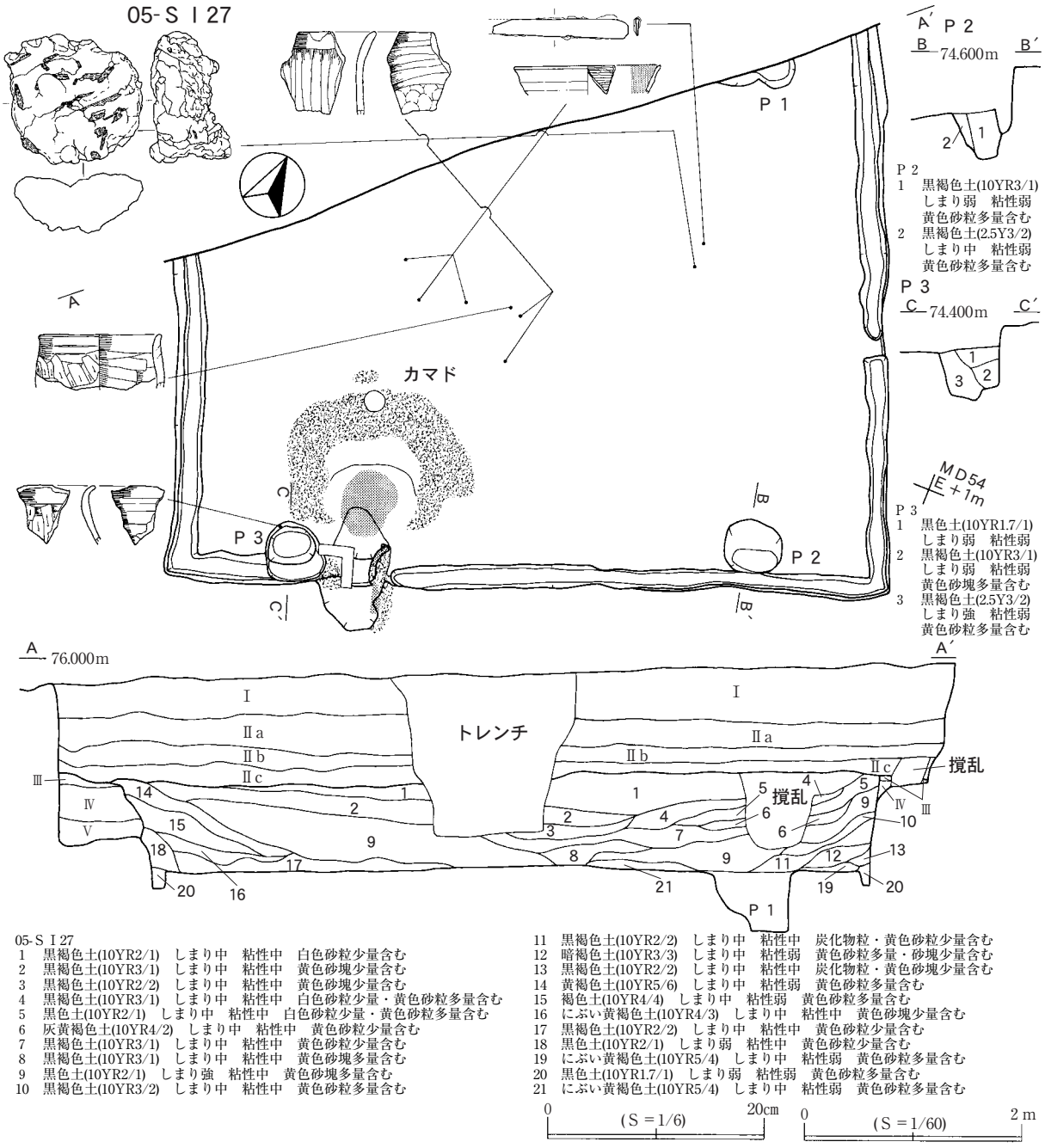
で構築している。袖は粘土を素材としており、部分的に芯材に土器片を用いている。火床面は不整な円形状の被熱範囲で、径0.5m前後である。中心部の被熱が著しい。

本住居跡は北西壁にカマドを設置する住居と想定される。

遺　物(第267図)　カマド内から土師器鍋が出土した。267図１は、胴部中位でやや膨らむが、基本的には口縁部まで直線的に外傾する。外面は指の押さえ以外に目立った調整はなく、内面は胴下部が斜位、胴上部が横位のユビナデ調整である。

05-ＳＩ27(第268図～270図、図版87・88)

遺　構　ＭＣ～ＭＥ53・54グリッドの第Ⅲ層上面～第Ⅳ層中位で、白色砂粒を含む黒色土の広がりで確認した。本住居跡の立地点は台地上部平坦面で、ほとんど傾斜がない。05-ＳＩ26・28と重複し、

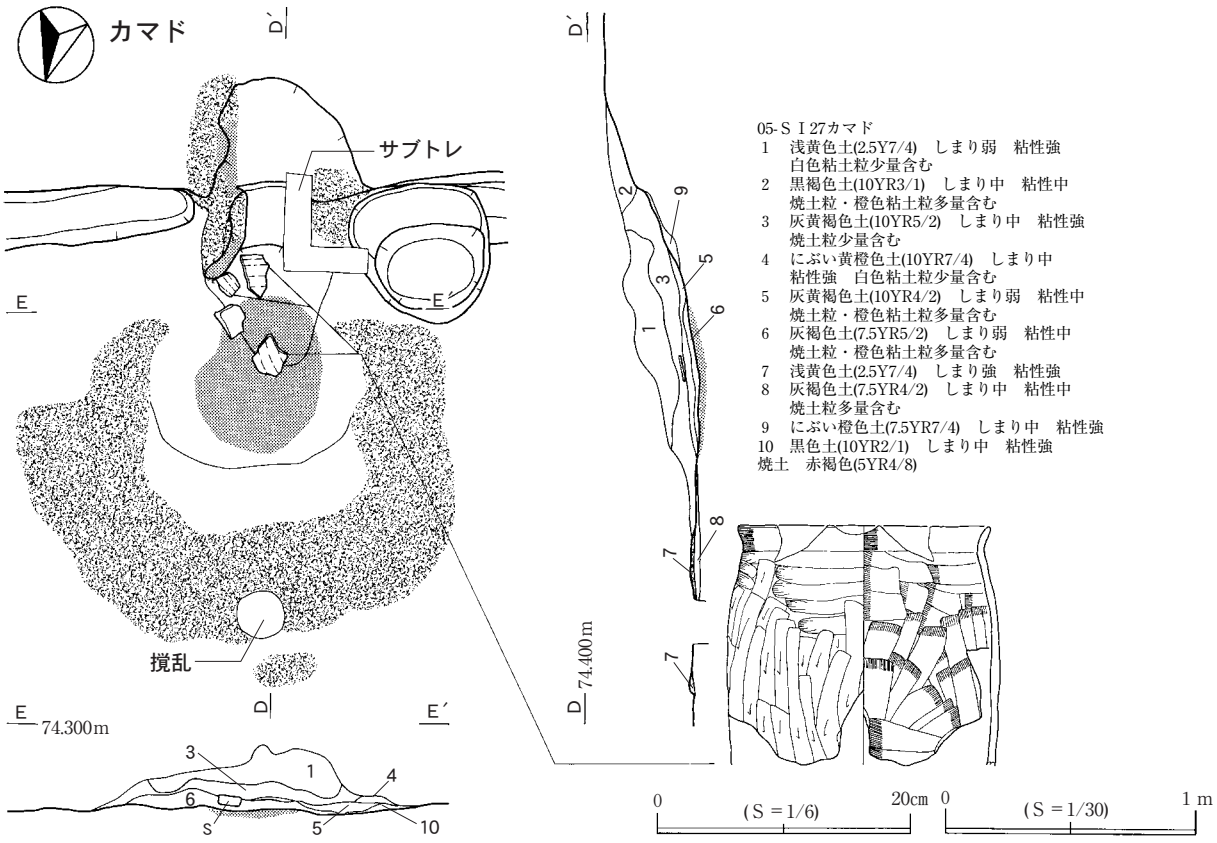


第268図　05-ＳＩ27・遺物出土状況

05-ＳＩ28より本住居跡が新しく、05-ＳＩ26より本住居跡が古い。周辺には02-ＳＩ24・25、03-ＳＩ173・178・853がある。

堆積土は21層に分けた。４層以下は壁際から細かい単位で斜堆積しており、全体としてレンズ状堆積になることから、自然堆積による埋没過程が想定される。20層は壁溝内堆積土である。本遺構断面では、本来の掘り込み面が、十和田ａ火山灰に相当するⅢ層上面であることを確認できる。

平面形は北西部が調査区外のため不明だが、おそらく正方形とみられる。カマドの付く壁に直交する主軸方位はＮ－20°－Ｗである。南東壁を正方形の一辺とみた場合の住居面積は約45㎡で、特大形の住居である。各壁の確認長は、北東壁約5.2m、南東壁約6.7m、南西壁約2.9mである。本来の確認面であるⅢ層からの深さは約0.8mで、立ち上がりはほぼ垂直である。



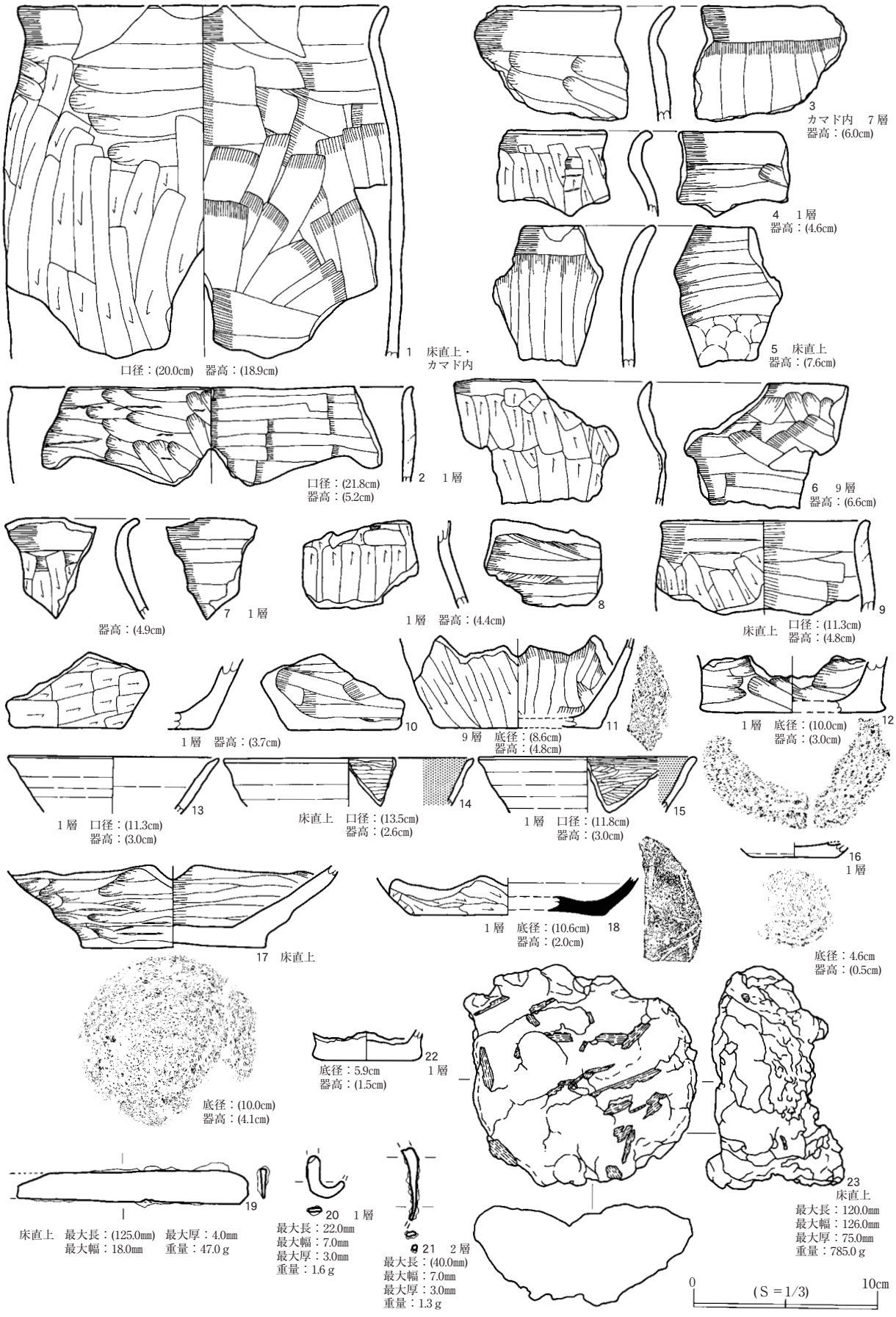
第269図　05-ＳＩ27カマド・遺物出土状況

床面は、掘形底面の地山面を利用している。壁溝はカマドと北東壁の一部以外の全周で確認した。上場幅0.12～0.22m、下場幅0.06～0.1m、床面からの深さ0.15m前後の断面台形状である。床面や壁溝内で３個のピットを確認した。Ｐ１～３は主柱穴で、Ｐ１が予測される住居隅より内側に、Ｐ２・３がこれと相対して、南西壁に取り付く位置にある。柱穴中心で測る柱穴間距離は、Ｐ１－２間約4.6m、Ｐ２－３間約4.4mである。

カマドは南東壁の中央からやや西寄りの位置で、浅黄色粘土の広がりで確認した。確認できた施設は、煙道、袖の一部、火床面、前庭部である。堆積土は10層に分層した。１～６層は上部構造の崩落土と流入土の互層である。７・８層は前庭部に、９層は煙道部にかけての底面に貼った粘土である。10層はカマド基底部の造成土である。煙道から前庭部末端まで約2.4m、火床面脇の粘土範囲の最大幅が約1.4mである。煙道はスロープ状で、住居壁から約0.45m外に延びる。袖は粘土を素材としている。火床面は不整な楕円形状の被熱範囲で、長径約0.6m、短径約0.5mである。地山上面をそのまま利用しており、深さ４cmまで被熱が及ぶ。

本住居跡は、南東壁にカマドを設置する住居で、４本の主柱をもつと想定される。廃絶後は自然堆積で埋没するが、05-ＳＩ26との時間差がどれほどかが問題である。

遺　物(第270図)　住居跡内から土師器甕・坏・鍋、須恵器壺、鉄製品、土製品が出土した。土師器甕は口縁部が32点、底部が５点出土しており、そのうち比較的大型の口縁部資料９点、底部資料３点を図示した。図示しなかったものを含めた甕の口縁部分類別数量はＡ類(３点)、Ｂ類(１点)、Ｃ類(16点)、Ｄ類(６点)、分類不能(６点)で、底部分類別数量は砂底(４点)、ケズリ(１点)の内訳で、Ｃ類が主体になる。なお、05-ＳＩ28Ａに由来する遺物を、一部巻き込んでいる可能性がある。



第270図　05-ＳＩ27出土遺物

270図１・２は比較的中・大型の土師器甕である。１は胴部が直立し、頸部でくびれて口縁部が外反する。外面は胴上部以下に縦位ケズリを施すが、頸部にかけて横位ユビナデを残す。内面は縦・横位のヘラナデ調整である。２は口縁部まで直立して口端がわずかに外反する。外面はユビナデのみで、内面は横位ヘラナデ調整である。270図９は比較的小型の土師器甕である。口縁部まで内湾して、口端がわずかに直立する。外面縦位ケズリ、内面横位ヘラナデ調整である。

270図３～８は土師器甕の口縁部破片である。３・４は頸部が強くくびれて口縁部が外反する。口唇は３が先細り、４が角頭状になる。５は口縁部まで緩やかに外反する。６・７は口縁部にかけて内傾するが、口端は７が外反し、６がやや直立する。外面調整は３が横位ユビナデ、５が縦位ユビナデのみが認められる以外は、縦位ケズリのものが多く、内面調整は３が縦位ヘラナデ、４・５が横位ユビナデ、６・７が横位ヘラナデである。８は頸部付近の破片で、外面縦位ケズリ、内面横位ユビナデ調整である。270図10～12は土師器甕の底部である。底面は10が確認できないが、11・12は砂底である。底部の立ち上がりは、10・11が直線的に外傾し、12が張り出す。

270図13～16は土師器坏で、13がＡ類、14～16がＢ類である。13は口縁部破片で、直線的に外傾し、口唇が先細りになる。14・15も口縁部破片でやや外反する。16は回転糸切痕を残す底部で、底部から直線的に外傾する。270図17は土師器鍋の底部である。砂底で、わずかに直立してから外傾する。外面横位ユビナデ、内面横位ヘラナデ調整である。270図18は須恵器で、外面底部付近にケズリを施すことから、壺または小型甕の底部と考えられる。270図19～21は鉄製品である。19は刀子で、刀身の部分が残っている。20は釣針とみられる。21は釘状だが、上下端を欠損している。270図22は小型土器の底部で、底面にはナデのみが認められる。270図３は椀形滓である。

05-ＳＩ28

本住居跡は、ＭＢ・ＭＣ53～55、ＭＤ53・54グリッドの、第Ⅳ層中位～第Ⅵ層上面において、地山土塊や炭化物を含む黒色土の分布範囲で確認した。本住居跡の立地点は台地上部平坦面で、ほとんど傾斜がない。05-ＳＩ27と重複し、本遺構の方が古い。周辺には02-ＳＩ24、03-ＳＩ173・178・853、05-ＳＩ26がある。

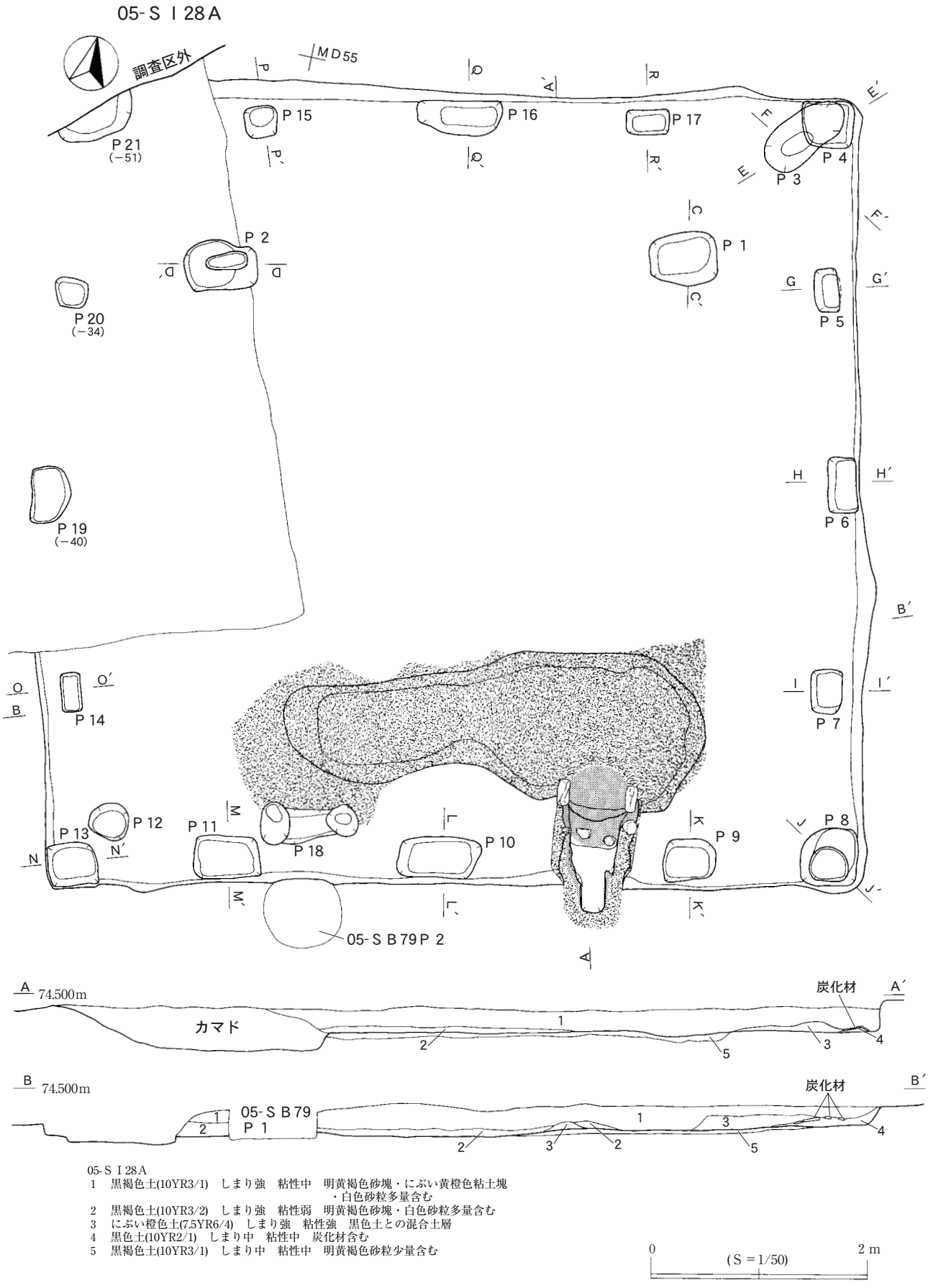
壁溝や壁柱穴の配置から２時期あると判断した。新しい順に、Ａ・Ｂのアルファベットを付けて表記している。

05-ＳＩ28Ａ(第271図～277図、図版89・90・152・156・157・159・166)

遺　構　05-ＳＩ28Ｂより拡大して、壁柱穴のみで壁板保持を行う構造へ変化した住居である。

堆積土は５層に分けた。５層は貼床で、05-ＳＩ28Ｂ床面上部を埋め立てている。２～４層は炭化材を含む層で、壁周辺を主体に分布する。これらを厚く覆う１層は、ほぼ水平に堆積することから、人為的な造成土とみられ、本住居跡は廃絶後に埋め立てたことが窺える。

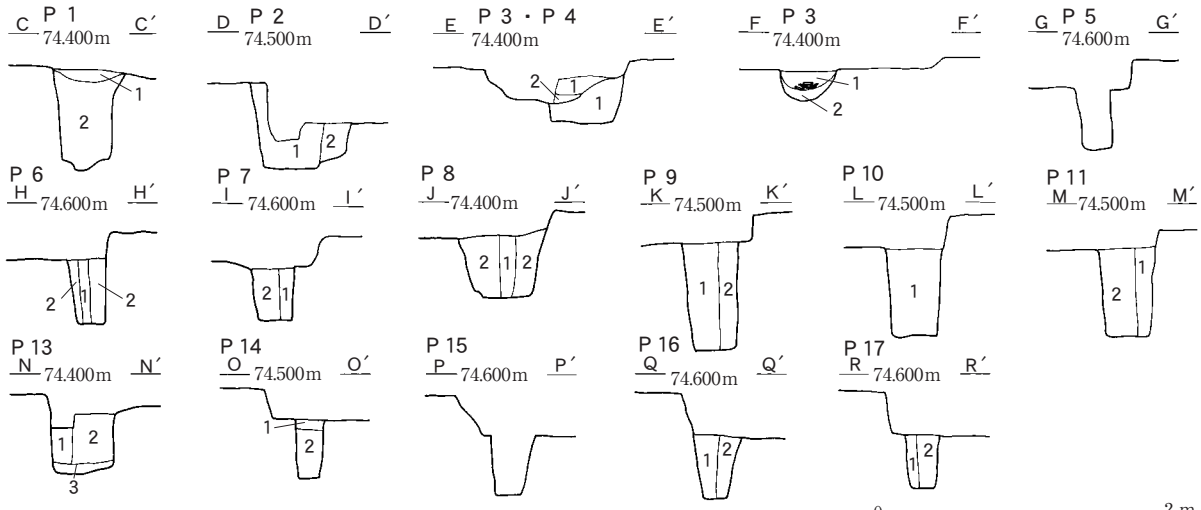
平面形は北西－南東方向にわずかに長い長方形で、カマドの付く壁に直交する主軸方位はＮ－10°－Ｗである。主軸とそれに直交するラインで測る住居面積は約54㎡で、特大形の住居である。各壁の長さは北壁約7.4ｍ以上、東壁約7.1ｍ、南壁約7.4ｍ、西壁約6.9ｍ以上である。北壁の検出面からの深さは約0.3ｍで、ほぼ垂直に立ち上がる。



05-ＳＩ28Ａ
1　黒褐色土(10YR3/1)　しまり強　粘性中　明黄褐色砂塊・にぶい黄橙色粘土塊・白色砂粒多量含む
2　黒褐色土(10YR3/2)　しまり強　粘性弱　明黄褐色砂塊・白色砂粒多量含む
3　にぶい橙色土(7.5YR6/4)　しまり強　粘性強　黒色土との混合土層
4　黒色土(10YR2/1)　しまり中　粘性中　炭化材含む
5　黒褐色土(10YR3/1)　しまり中　粘性中　明黄褐色砂粒少量含む

0　(Ｓ＝1/50)　2 m

第271図　05-ＳＩ28Ａ



P１・P14
　１　黒色土(10YR2/1)　しまり強　粘性中　明黄褐色砂塊・にぶい黄橙色粘土塊・白色砂粒多量含む
　２　灰褐色土(10YR4/1)　しまり強　粘性弱　明黄褐色砂塊多量含む
P３
　１　黒色土(10YR2/1)　しまり弱　粘性中　炭化物粒多量含む
　２　黒褐色土(10YR3/1)　しまり中　粘性中　明黄褐色砂塊少量含む
P６・P７・P８・P９・P11・P16・P17
　１　黒色土(10YR2/1)　しまり弱　粘性中
　２　褐灰色土(10YR4/1)　しまり強　粘性弱　明黄褐色砂塊多量含む

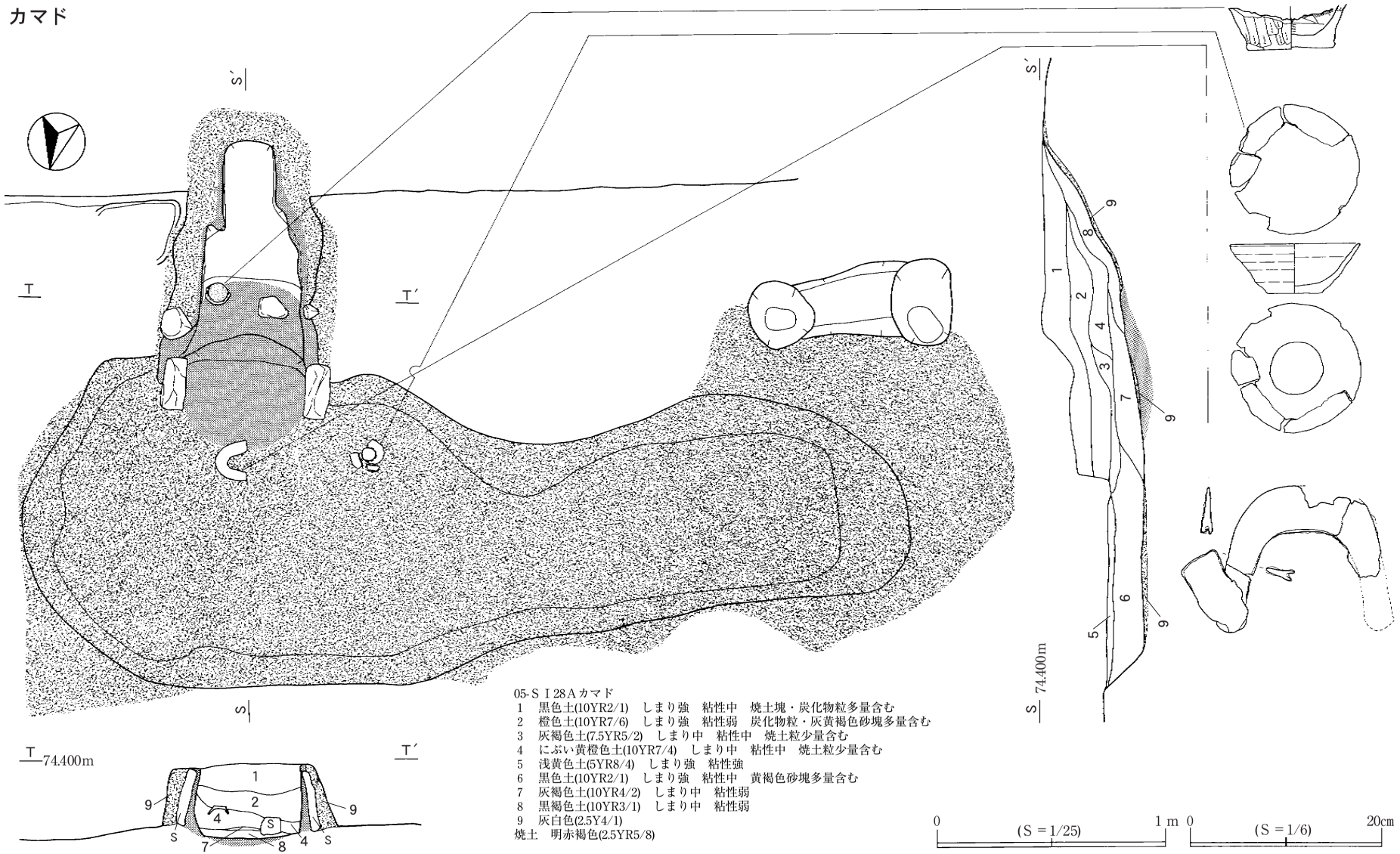
P２
　１　黒色土(10YR2/1)　しまり強　粘性中　明黄褐色砂塊・にぶい黄橙色粘土塊・白色砂粒多量含む
　２　灰褐色土(10YR4/1)　しまり強　粘性弱　明黄褐色砂塊多量含む
P４・10
　１　褐灰色土(10YR4/1)　しまり強　粘性弱　明黄褐色砂塊多量含む
P13
　１　黒色土(10YR2/1)　しまり弱　粘性中
　２　黒褐色土(10YR3/1)　しまり強　粘性中　明黄褐色砂塊多量含む
　３　褐灰色土(10YR4/1)　しまり強　粘性弱

第272図　05-ＳＩ28Ａ柱穴

床面はほぼ全面に貼床を施す。これは、わずかに床面レベルの低い05-ＳＩ28Ｂを埋め立てる処置である。壁溝は確認できなかった。床面及び05-ＳＩ27床面で21個のピットを確認した。Ｐ１・２・９・11は主柱穴で、Ｐ１・２が住居隅より内側に、これと相対してＰ９・11が南壁に取り付く位置にある。柱穴中心で測る柱穴間距離は、Ｐ１－２間約4.3m、Ｐ９－11間約4.3m、Ｐ１－９間約5.5m、Ｐ２－11間約5.4mである。

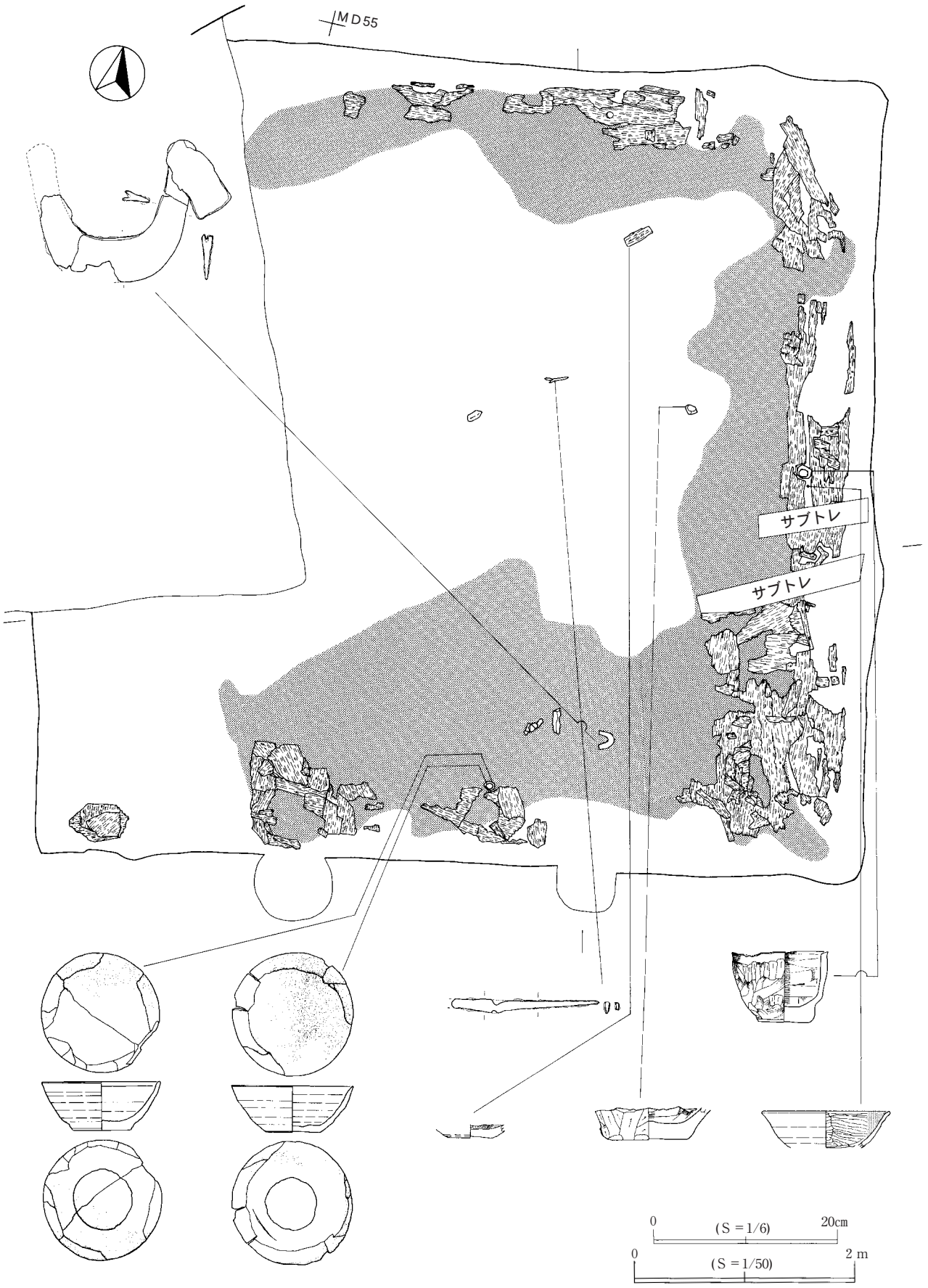
カマドは南東壁の中央からやや東よりの位置で、袖の残存部である灰白色粘土の分布で確認した。袖や煙道の残り具合が比較的良く、横長の前庭部も確認した。堆積土は９層に分けた。１～３層は上部構造材と流入土の互層である。４層は支脚に用いる土器底部を固定するための砂であり、最終段階にカマド底面に盛ったとみられる。５層はカマド前庭部上面に貼った土だが、６層を挟んで、前庭部掘形底面にも９層の白色粘土が貼ってあり、カマド前庭部には使用面が２時期存在する。７・８層もカマド火床面に貼った粘土で、極めて硬質であり長期間の被熱が想定される。煙道から前庭部末端まで約2.6m、袖の最大幅が約0.7mである。煙道はスロープ状で、住居壁から約0.2m外に延びる。袖は礫と粘土を素材としており、焚口付近の末端に平行して芯材の礫を据える。袖の間には、土器底部と石を並べて支脚を造りつける。火床面は円形状の被熱範囲で、径0.7m前後である。

本住居跡は焼失家屋で、床面上では多数の炭化材や焼土を検出した(第274図)。05-ＳＩ27が掘り込む南東部は撤去してある。炭化材を木目の方向で区分すると、壁際に平行して分布する板状の材と、これに直交する細い材に２分される。これらの一部サンプルを樹種分析した結果、クリ５点、スギ５点の結果がでた。壁に直交する細い材にクリが、壁に平行する板材にスギが多い傾向がみられることから、炭化材の本来の姿として最も有力なのが、板状の材が壁板、壁に直交する細い材が壁板保持の壁柱である。焼土分布も基本的には壁際に集中する。純粋な焼土というよりは、混入物を多く含み流入した状況を示す。炭化材の上下に堆積する状況からみて、壁板裏込めや周堤内面の被熱部崩落の可能



05-ＳＩ28Ａカマド
1　黒色土(10YR2/1)　しまり強　粘性中　焼土塊・炭化物粒多量含む
2　橙色土(10YR7/6)　しまり強　粘性弱　炭化物粒・灰黄褐色砂塊多量含む
3　灰褐色土(7.5YR5/2)　しまり中　粘性中　焼土粒少量含む
4　にぶい黄橙色土(10YR7/4)　しまり中　粘性中　焼土粒少量含む
5　浅黄色土(5YR8/4)　しまり強　粘性強
6　黒色土(10YR2/1)　しまり強　粘性中　黄褐色砂塊多量含む
7　灰褐色土(10YR4/2)　しまり中　粘性弱
8　黒褐色土(10YR3/1)　しまり中　粘性弱
9　灰白色(2.5Y4/1)
焼土　明赤褐色(2.5YR5/8)

第273図　05-ＳＩ28Ａカマド・遺物出土状況



第274図　05-ＳＩ28Ａ炭化材出土状況・遺物出土状況

性が高い。なお、カマド前面や焼土・炭化物の上部から、鉄製鋤先や完形の土師器坏が出土している。明らかに鎮火後に遺棄したものであり、何らかの意図が窺える。

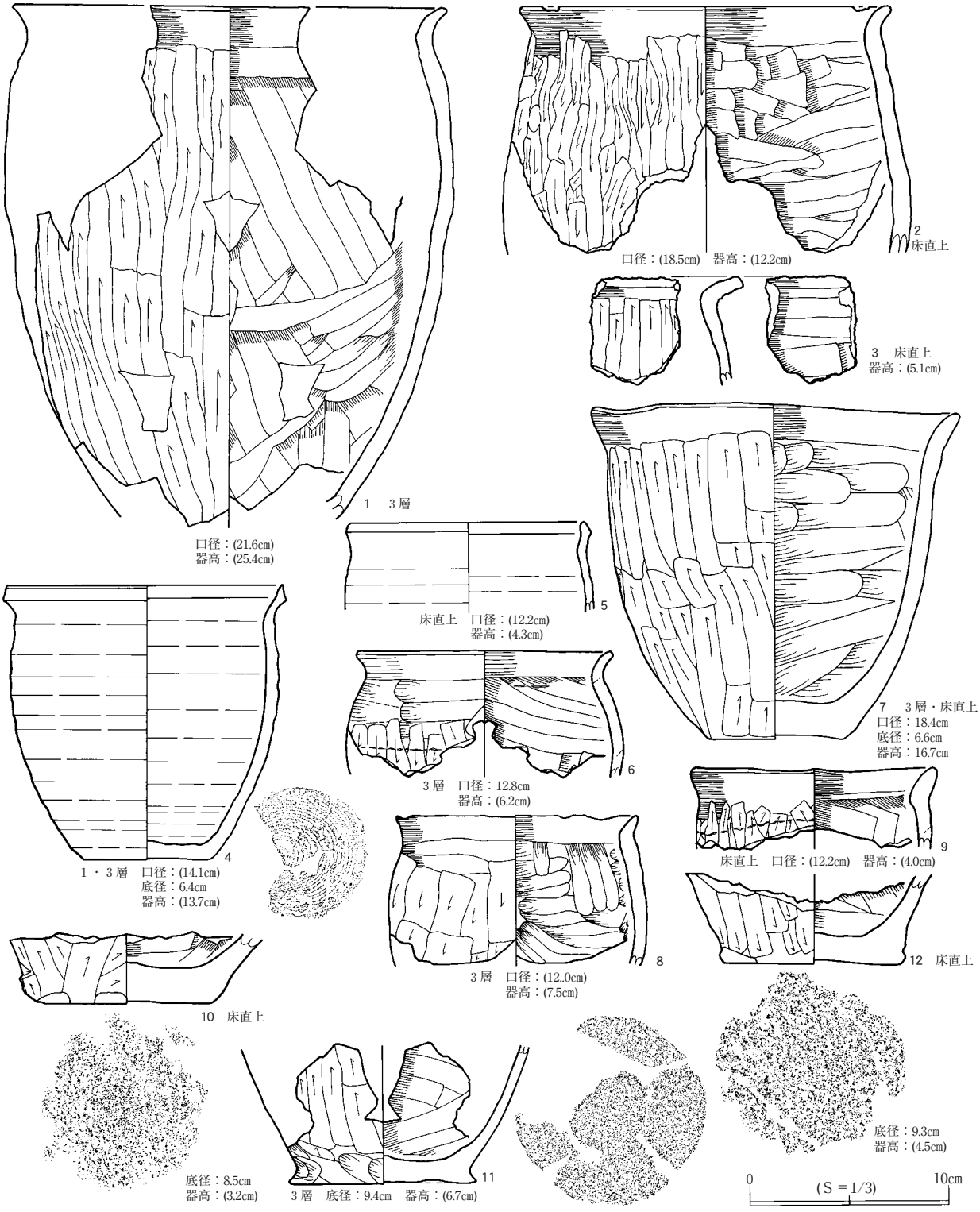
本住居跡は４本の主柱をもち、南壁にカマドを設置する住居である。焼失により廃絶しており、その状況から意図的な放火とみられる。その後人為的に埋め立てており、05-ＳＩ27が構築される。

遺　物(第275図～277図)　住居跡内から土師器甕・坏・鍋・墨書土器、須恵器広口壺・甕、鉄製品・土製品が出土した。土師器甕は口縁部が21点、底部が７点出土しており、そのうち比較的大型の口縁部資料９点、底部資料５点を図示した。図示しなかったものを含めた甕の口縁部分類別数量はＡ類(７点)、Ｂ類(１点)、Ｃ類(７点)、Ｄ類(３点)、分類不能(３点)で、底部分類別数量は砂底(３点)、ケズリ(２点)、回転糸切(２点)の内訳になる。Ａ類が小型、Ｃ類が中・大型の組み合わせになる。遺物の出土は、カマド周辺と東壁中央部付近に集中がみられる。

275図１・２は比較的大型の土師器甕である。１は口縁部から底部付近までの範囲が全周の約1/3残っているもので、復元実測した。器形は底部から緩やかに内湾して胴部中位が張り出し、頸部にかけて内傾して口縁部が外反する。２もほぼ同様の器形で、１に比べ口縁部の外反部が短い。どちらも外面は縦位ケズリで、内面は１が縦位ヘラナデ、２が横位ヘラナデ調整である。

275図４～９は比較的中・小型の土師器甕である。４・５はロクロ目を残すもので、どちらも口端がつまみ出し状に内湾する。４は全体形状が窺える資料で、胴上部にかけて張り出し、口縁部へ向けて外反する。底面は回転糸切痕をとどめる。６は胴上部が張り出して頸部でくびれ、口縁部が外反する。これに比べて８・９は、頸部のくびれと口縁部の外反が弱い。７は頸部のくびれが全くなく、底部から口縁部まで緩やかに外反する。底面はケズリ再調整を施す。７は器壁が厚く、大きさの割にはかなり重い土器で、やや異質な感じを受ける。外面調整は基本的に全て縦位ケズリである。内面調整は、６・９が横・斜位ヘラナデ、７が横位ユビナデ、８が縦・横位のユビナデである。275図３は土師器甕の口縁部破片で、口縁部が外折する。外面縦位ケズリ、内面横位ヘラナデ調整である。275図10～12は土師器甕の底部で、全て砂底である。10は底部から直線的に外傾し、11・12は底部外縁が張り出す形状である。

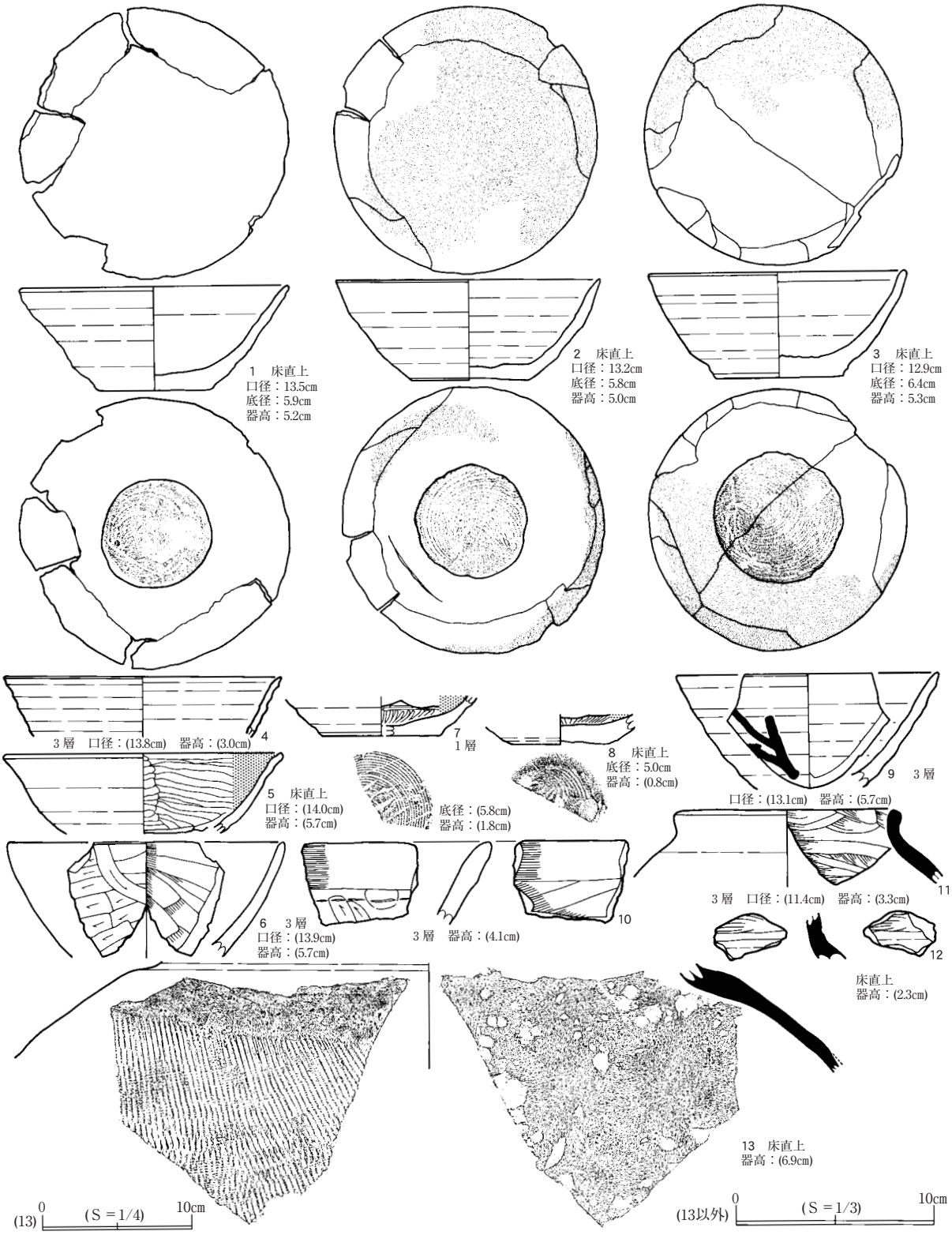
276図１～９は土師器坏で、１～４がＡ類、５・７・８がＢ類、６がＤ類、９はＡ類に墨書を施している。１～３はいずれもほぼ完形の資料である。１は底部がやや突出し、底部付近にはわずかにくびれがあるが、基本的には口縁部まで直線的に外傾する。底部には一部ケズリ再調整を施すが、大部分は回転糸切痕を残す。外面のロクロ目は比較的凹凸が少なく間隔も密で、内面には部分的にミガキも認められることから、調整は比較的丁寧に行っている。また、胴上半部の器壁が薄いことも特徴である。ただし、焼成時に生じたひび割れにより変形して、上面形状は五角形状を呈する。また、内面には鉄錆に似た斑点が多数あり、食器としての機能を有したかは疑わしい。２は底部から内湾気味に立ち上がり、口縁部付近で弱く屈曲する器形である。底部の回転糸切痕はやや筋幅が広いが均一で、内外面ともロクロ目の山を低く押さえている。胴下部から底部にかけては器壁が厚いが、口縁部付近は薄く、場所によっては内面に稜を残すように作り出しており、Ａ類の中では比較的丁寧な作りである。３は、やや広めの底部から胴下部の屈曲を経て、口縁部まで直線的に外傾する器形である。底部の回転糸切痕はやや筋幅が広いが均一で、内外面とも工具による最終調整でロクロ目を低く押さえている。ただし内面中央には、ナデ残しの径1.5cmほどの粘土の高まりがあり、仕上がりを損ねている。また、



第275図　05-ＳＩ28Ａ出土遺物１

全体的に器壁が厚く重量もあるため、比較的大雑把な作りの印象を受ける。なお、５・６共に内外面の約半分に煤が付着している。重なって出土したものであり、家屋焼失時に煤が付着したと考えられる。

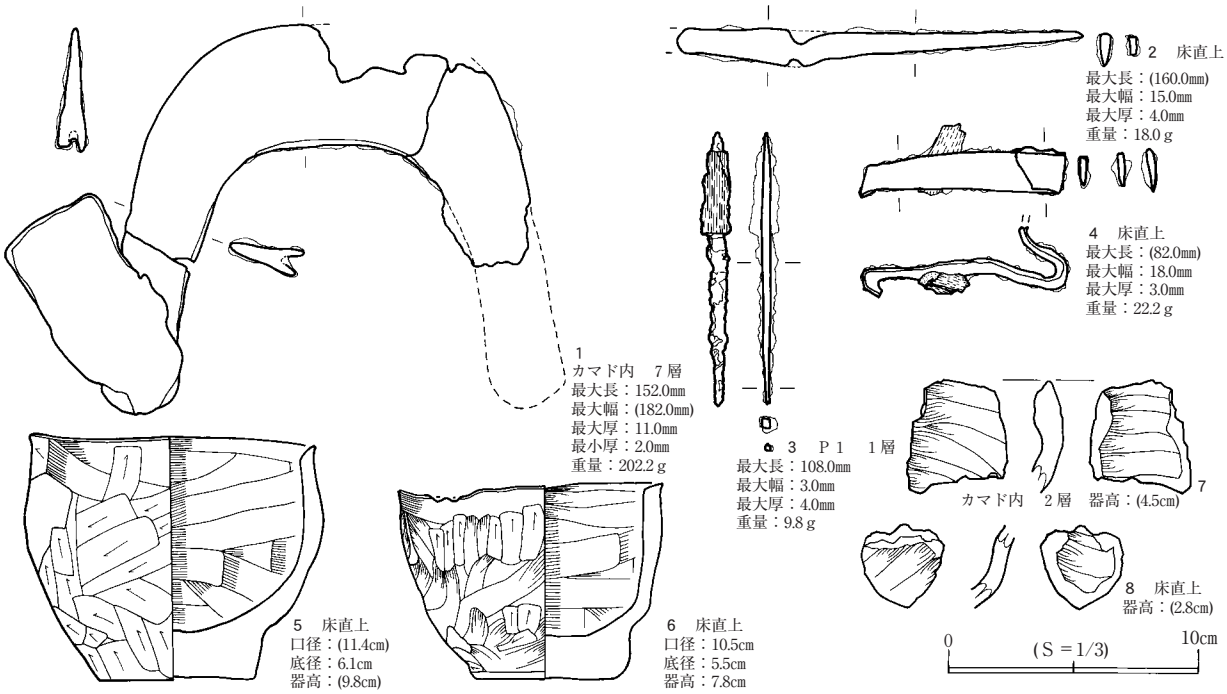
４は直線的に外傾し、器壁がかなり薄い。５は口縁部が外反するもので、やや浅めの形状と考えられる。６は口縁部が内湾し、外面横位ケズリ、内面斜位ヘラナデ調整である。７・８は底部で、どち



第276図　05-ＳＩ28Ａ出土遺物２

らも回転糸切痕を残す。立ち上がりは、７がやや突出し、８が直線的に外傾する。９は胴部外面に墨書を施している。横にみると「刀」の文字にも見えるが、破片であり確かではない。276図10は土師器鍋の口縁部破片とみられる。

276図11～13は須恵器である。11は広口壺で、口縁部が短く直立する。12は壺の頸部破片である。



第277図　05-ＳＩ28Ａ出土遺物３

13は甕の肩部破片で、タタキ目が残る。277図１～４は鉄製品である。１は鋤先で、刃先と右側縁部を欠損する。内側には、柄をはめ込む溝状の抉りが認められる。２は刀子で切先を欠損する。茎にかけて緩やかに幅を減じる形状である。３は錐と考えられる。下端は先鋭化し、柄と思われる断面円形の木質が残存している。４は本来は刀子だったとみられるが、Ｓ字形に変形している。再利用したものと考えられる。

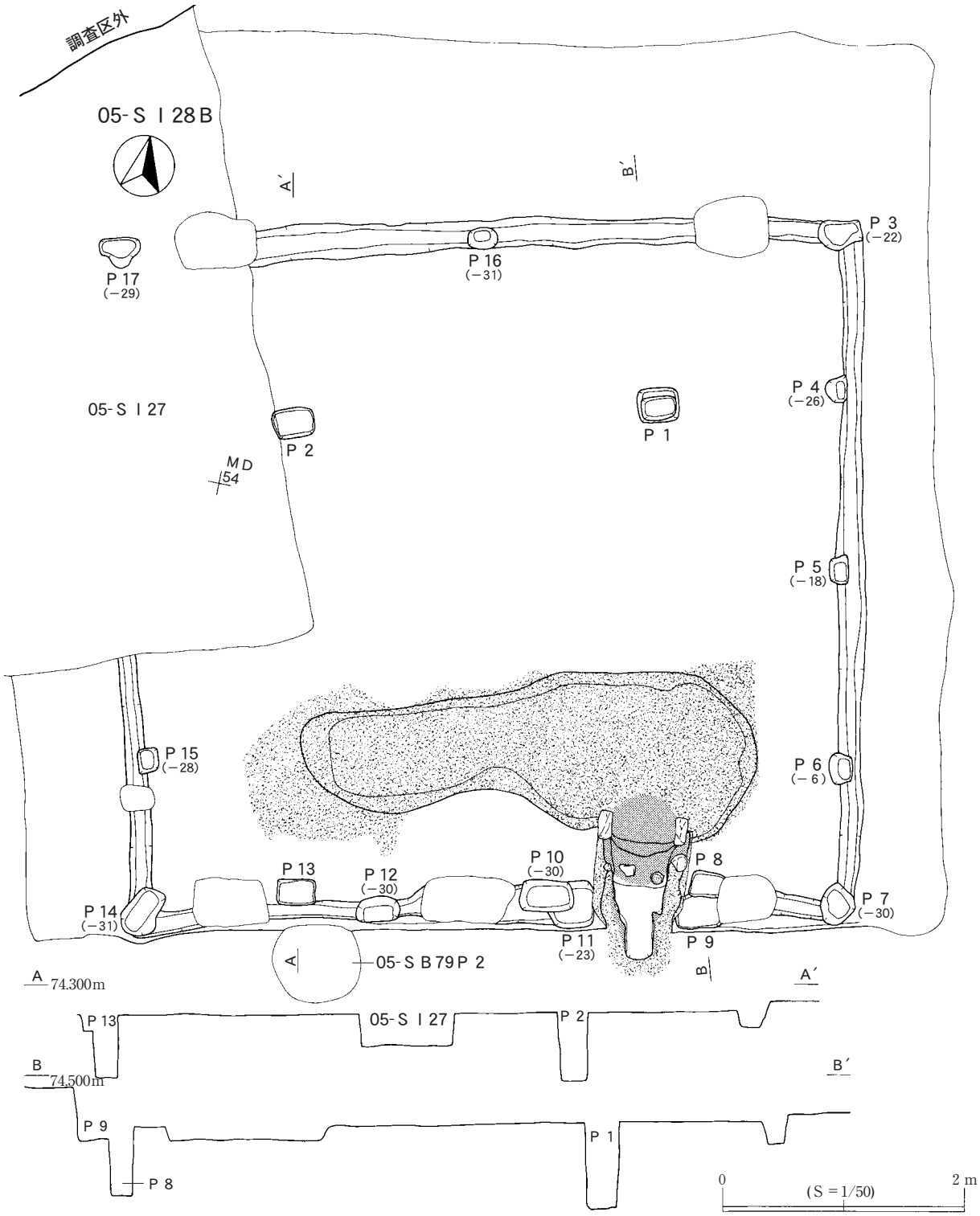
277図５～８は小型土器である。５・６は全体形が分かる資料で、どちらも底部が厚く、胴部中位から直立気味に立ち上がり、口端がわずかに外反する。外面は縦・横位のケズリ、内面は横位ヘラナデ調整である。７・８は内外面共にユビナデ調整である。

05-ＳＩ28Ｂ(第278図・279図、図版89・90)

遺　構　壁溝を基礎とする壁板保持構造をもつ、古段階の住居である。本住居跡に伴う堆積土はないが、05-ＳＩ28Ａ貼床内出土遺物は本遺構に伴うものとした。

平面形は北西－南東方向に長い長方形で、カマドの付く壁に直交する主軸方位はＮ－10°－Ｗである。主軸とそれに直交するラインで測る住居面積は約36㎡で、大形の住居である。各壁の長さは北壁約6.3m、東壁約5.8m、南壁約6.1m、西壁約5.8mである。05-ＳＩ28Ａの内部に収まるため、壁の検出面からの深さや立ち上がりは不明である。

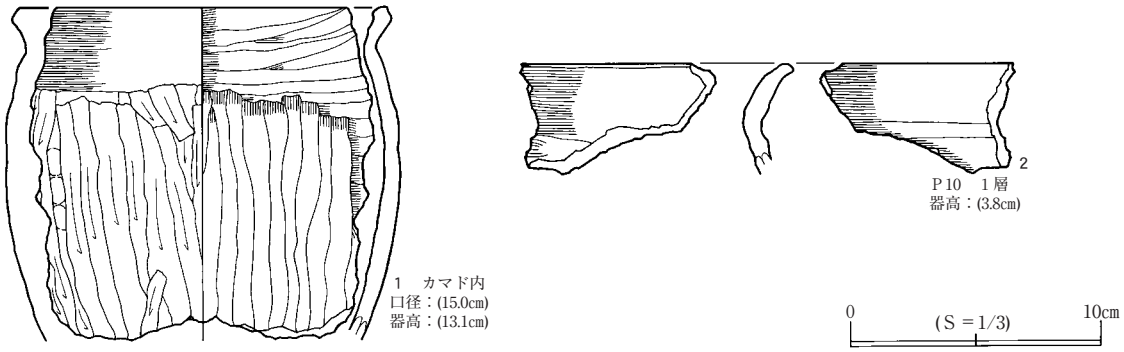
床面は基本的に地山上面を利用する。壁溝はカマド以外の残存部の全周で確認した。上場幅0.14～0.3m、下場幅0.06～0.16m、床面からの深さ0.2m前後の断面台形状である。床面及び05-ＳＩ27床面で17個のピットを確認した。Ｐ１・２・８・13は主柱穴で、Ｐ１・２が住居隅より内側にこれと相対して、Ｐ８・13が南壁に取り付く位置にある。柱穴中心で測る柱穴間距離はＰ１－２間約3.0m、Ｐ８－13間約3.4m、Ｐ１－８間約3.9m、Ｐ２－13間約3.9mである。カマドは05-ＳＩ28Ａと同地点に構築していたと考えられる。



第278図　05-S I 28B

本住居跡は４本の主柱をもつ住居で、南壁にカマドを設置すると想定される。05-S I 28A構築時に解体したと考えられる。

遺　物(第279図)　住居跡内から土師器甕が出土した。堆積土がないため、遺物の出土量は少ない。279図１は比較的小型の土師器甕である。胴部中位が膨らんで頸部まで内湾し、頸部で屈曲して口縁部が外反し、口端が内湾する。外面縦位ケズリ、内面縦位ヘラナデ調整である。279図２は土師器甕の口縁部破片で、頸部で段状にくびれて口縁部が外折する。口唇は角頭状になる。



第279図　05-ＳＩ28Ｂ出土遺物

05-ＳＩ29(第280図、図版91)

遺　構　ＫＲ62・63、ＫＳ63グリッドの第Ｘ層中位～ＸＩ層で、地山土塊を含む黒色土の広がりで確認した。本住居跡の立地点は丘陵部山麓緩斜面で、南東側へ傾斜する。重複する遺構はなく、周辺には05-ＳＩ53・70・73、05-ＳＳ34、05-ＳＫ09・42・60がある。

堆積土は４層に分けた。３・４層は斜面下位側に施した貼床である。２層は局所的な崩落土であり、１層が大部分を占めることから、人為的に埋め立てた可能性が高い。

平面形は住居南東部がトレンチで大きく失われているが、おそらく正方形とみられる。カマドの付く壁に直交する主軸方位はＮ－65°－Ｗである。主軸とそれに直交するラインで測る住居面積は約14㎡で、小形の住居である。各壁の長さは北東壁約3.4m、南東壁約3.3m、南西壁約3.3m、北西壁約3.5mである。南西壁の検出面からの深さは約0.65mで、立ち上がりは基本的に垂直である。

床面はほぼ全面に貼床を施しており、斜面下位では厚くなる傾向にある。壁溝は確認できなかった。床面で５個のピットを確認した。Ｐ１・３は隅に配置する主柱穴で、トレンチのかかる東・南隅は失われている。Ｐ２・４・５は、ほぼ壁際中央部に位置する壁柱穴である。カマドは南東壁中央部で、粘土の分布で確認した。南壁の中央部に粘土で構築する袖の一部のみ確認できた。

本住居跡は四隅に主柱をもち、南東壁にカマドを設置する住居と想定される。廃絶後は人為的に埋め立てており、周辺の状況から本住居立地点も05-ＳＳ34関連作業場として利用した可能性が高い。

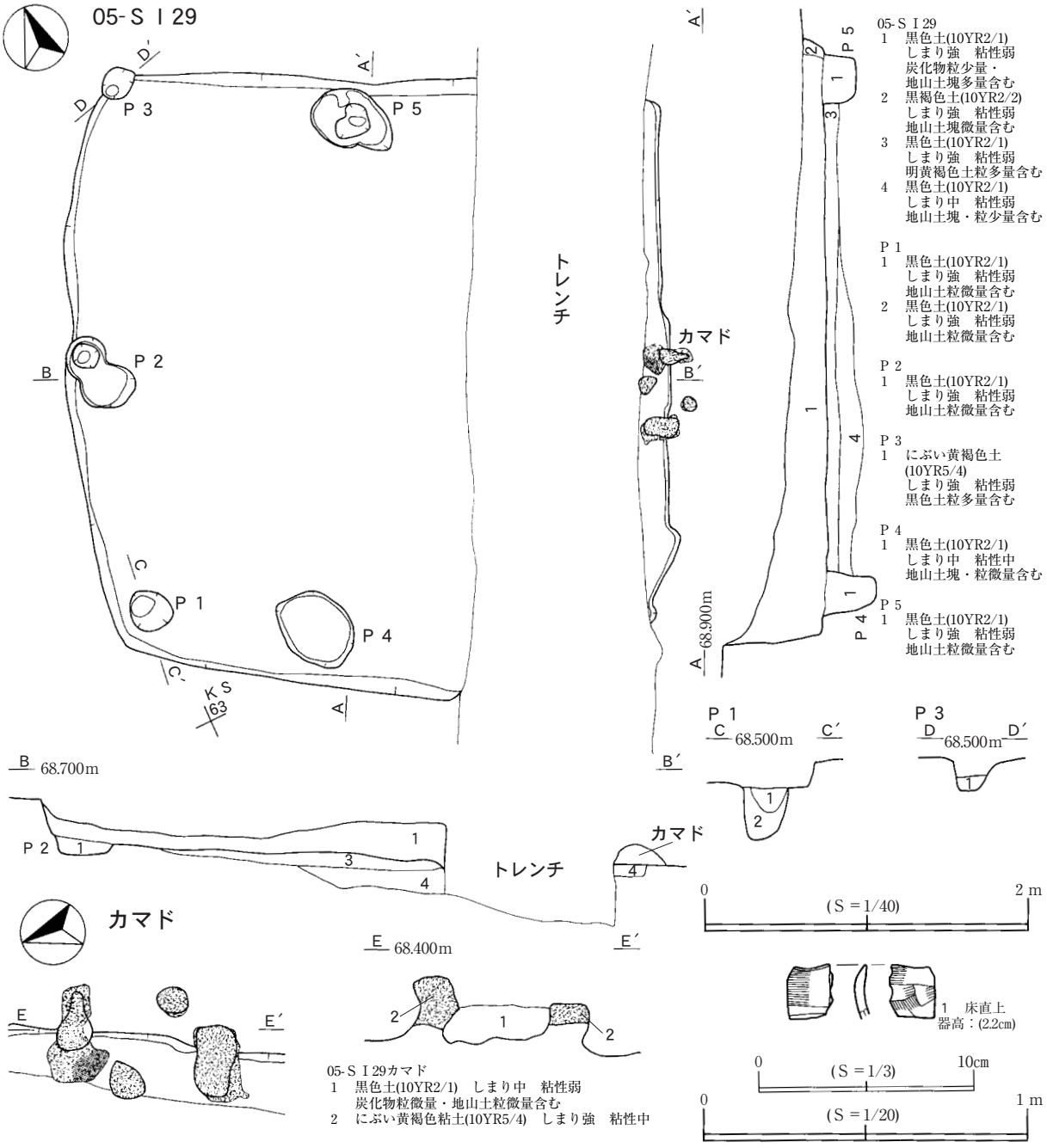
遺　物(第280図)　出土遺物は少なく、大半は鉄滓である。280図１は土師器甕の口縁部小破片である。

05-ＳＩ36(第281図、図版92)

遺　構　ＬＢ62グリッドの第Ⅵ層上面で、黒色土の広がりで確認した。本住居跡の立地点は丘陵部中腹緩斜面で、南東側へ傾斜する。05-ＳＩ03と重複するが、本住居跡の方が古いと考えられる。また05-ＳＡ46Ｐ１や05-ＳＤ44が本住居跡と重なる位置にある。周辺には05-ＳＩ05、05-ＳＮ37がある。

堆積土は、検出面が床面または床面以下のため、斜面上位で１層のみ確認した。土質からみて、人為的に埋め戻している可能性が高い。平面形は不明だが、わずかに残る北西壁とカマドの関係から、主軸方位はＮ－24°－Ｅとみられる。壁の長さは、北西壁の残存長が1.8mである以外は不明で、北西壁の検出面からの深さは約0.2mで、ほぼ垂直に立ち上がる。

床面は、残存部では地山上面を利用し、斜面下位では貼床を施す。なお壁溝やピットは確認できなかった。カマドは、想定される南西壁の西隅付近で、焼土の広がりで確認した。確認できたのは火床



第280図　05-ＳＩ29カマド・出土遺物

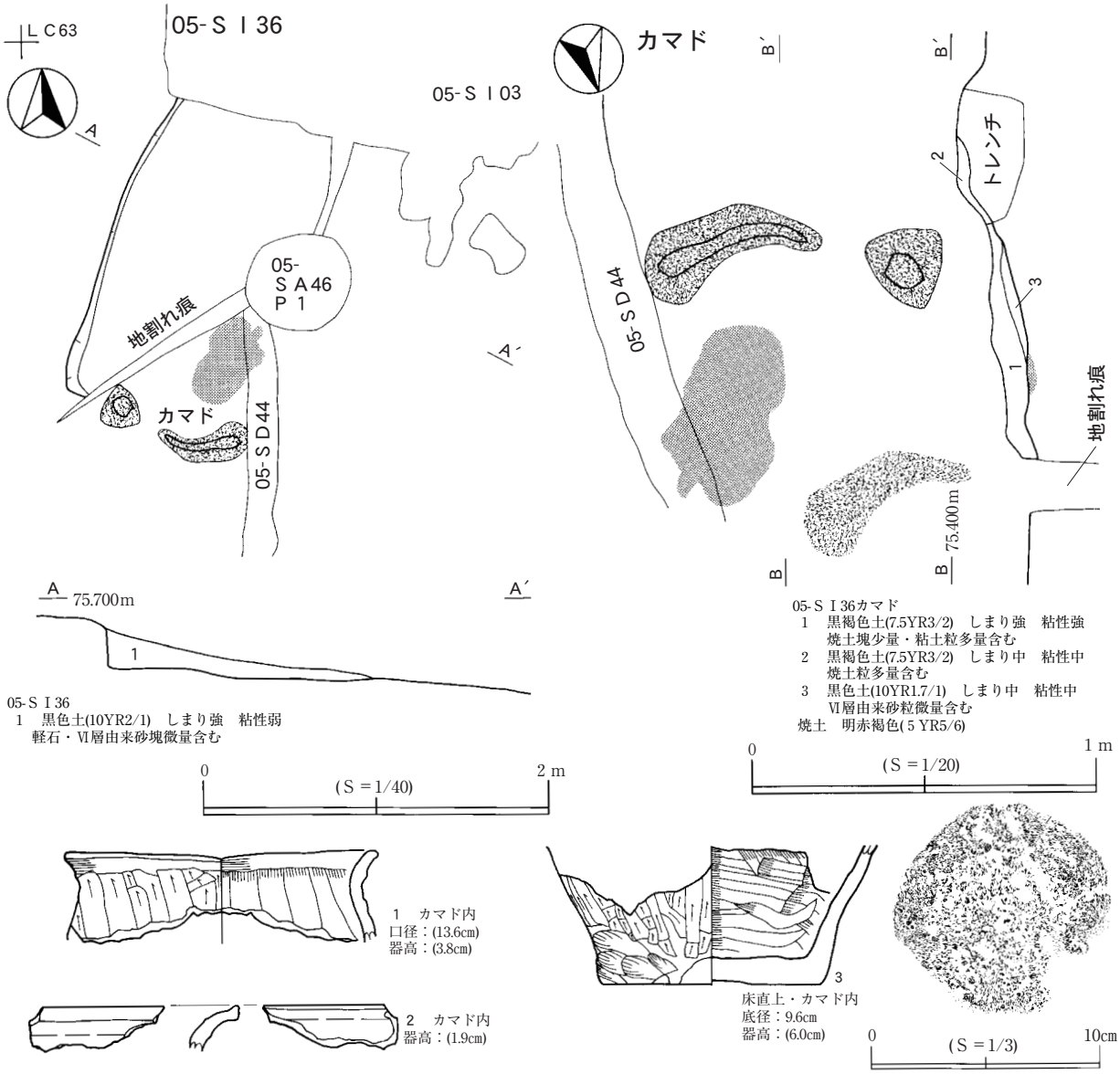
面と基底部の粘土である。火床面は不整な形状の被熱範囲で、最大長0.5m、最大幅0.3mである。

本住居跡は南西壁にカマドを設置する住居と想定される。周辺状況からみて、05-ＳＩ03機能時には廃絶していたと考えられる。

遺　物(第281図)　カマド付近から土師器甕が出土した。281図１は比較的小型の土師器甕である。頸部まで内傾して口縁部が外反する。外面縦位ケズリ、内面縦位ヘラナデ調整である。281図２はロクロ目を残す土師器甕の口縁部破片である。３は土師器甕の底部で、砂底である。

05-ＳＩ53(第282図、図版93)

遺　構　ＫＰ・ＫＱ63・64グリッドの砂質主体の地山上面で、黒色土の広がりで確認した。本住居跡



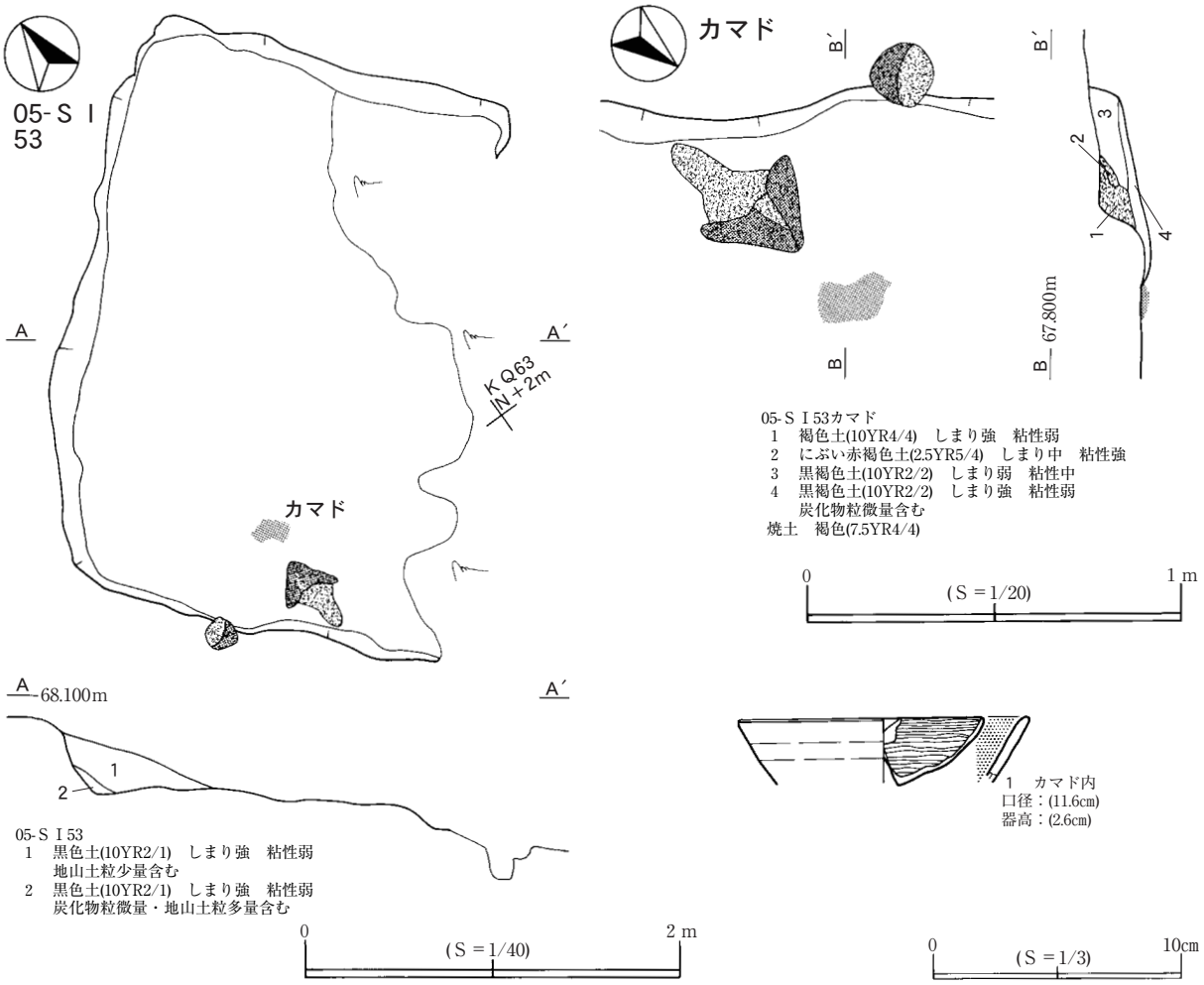
第281図　05-ＳＩ36・カマド・出土遺物

の立地点は丘陵部山麓緩斜面で、南東側へ傾斜する。重複する遺構はなく、周辺には05-ＳＩ29・70・73、05-ＳＳ34、05-ＳＫ09・42があり、上部を05-ＳＳ34排滓場が覆う。

堆積土は２層確認した。１・２層は斜面上位から斜堆積する流入土であるため、自然堆積により埋没したとみられる。

平面形は南東部斜面下位側が崩落しているため不明である。カマドの付く壁に直交する主軸方位はＮ－46°－Ｅである。北西壁を正方形の一辺とみた場合の住居面積は約９㎡で、小形の住居と想定される。壁の長さは、北東壁1.9m以上、南西壁2.0m以上、完全に残る北西壁で約3.0mである。北西壁の検出面からの深さは約0.3mで、ほぼ垂直に立ち上がる。

床面は、残存部では地山上面を利用しているが、斜面下位にはおそらく貼床を施したと考えられる。なお、壁溝やピットは確認できなかった。カマドは南西壁の中央から北西寄りとみられる位置で、粘土の分布で確認した。カマド上部構造はほぼ消滅しており、おそらく破棄時に構築粘土を撤去したと考えられる。火床面も残りが悪く詳細は不明である。



第282図　05-ＳＩ53・カマド・出土遺物

本住居跡は南西壁にカマドを設置する住居である。廃絶後は05-ＳＳ34排滓場として利用されることから、05-ＳＳ80や05-ＳＳ10・11・14の操業初期に伴う住居である可能性が高い。

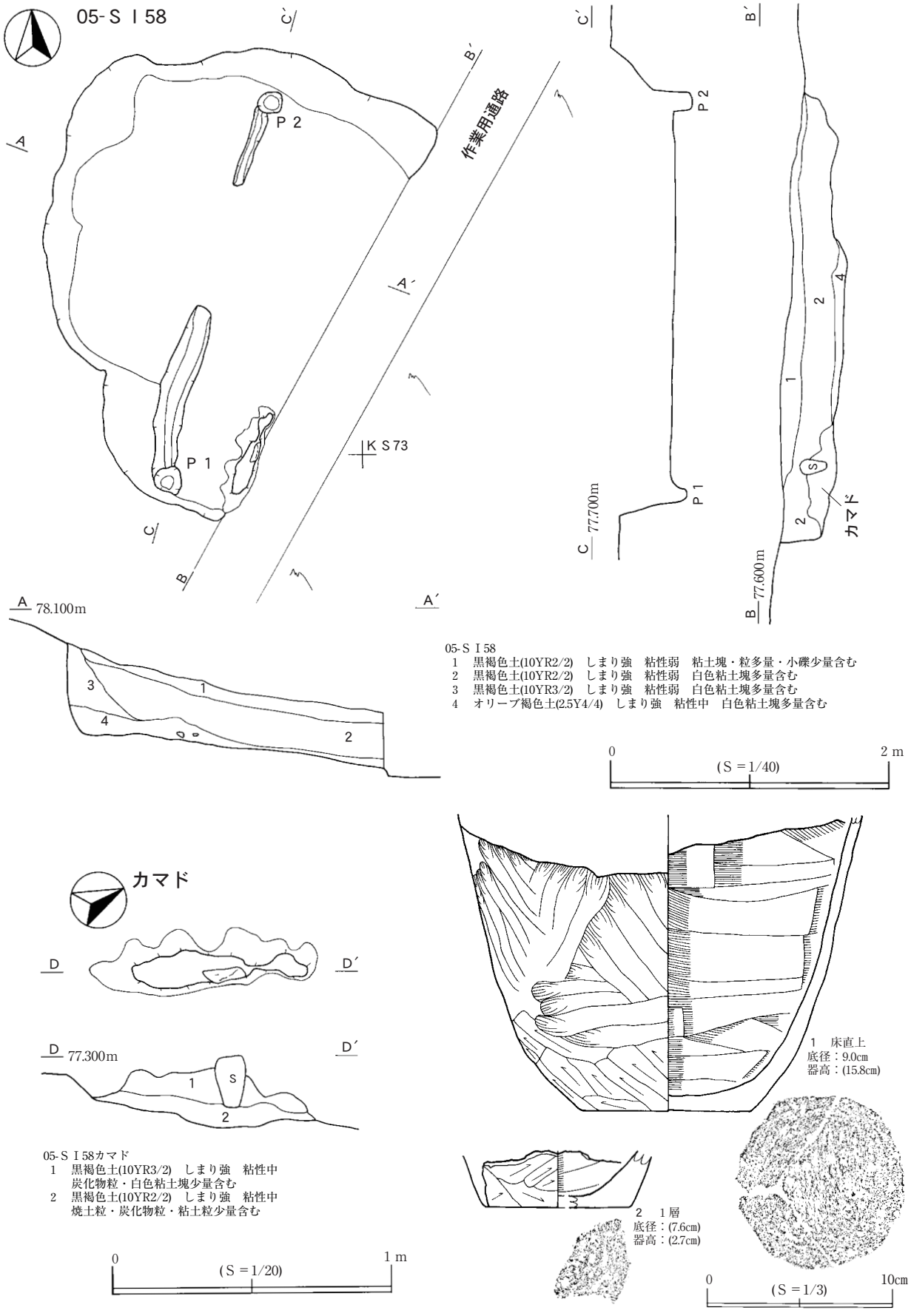
遺　物(第282図)　本住居からの遺物出土は極めて少なく、図示できたのは282図１の小破片のみである。１は土師器坏Ｂ類である。直線的に外傾する器形で、内面には横位ミガキが認められる。

05-ＳＩ58(第283図、図版94)

遺　構　ＫＲ73、ＫＳ72・73グリッドの砂礫層で、黒褐色土の広がりで確認した。本住居跡の立地点は丘陵北西部中腹斜面で、東側へ下る急傾斜地である。重複する遺構はなく、周辺には05-ＳＩ02・15、05-ＳＳ30、05-ＳＮ21、05-ＳＤ01がある。

堆積土は４層に分けた。３・４層は壁際の崩落土で、１・２層は斜面上位から斜堆積していることから、本住居跡は廃絶後に自然堆積により埋没したと考えられる。

平面形は、南東部斜面下位側が崩落しているため不明である。カマドの付く壁に直交する主軸方位はＮ－28°－Ｅである。北西壁を正方形の一辺とみた場合、住居面積は約10㎡で、小形の住居と想定される。各壁の残存長は、北東壁1.2ｍ以上、南西壁0.7ｍ以上、完全に残る北西壁で約3.3ｍである。南西壁の検出面からの深さは約0.4ｍで、70～80°の傾斜で立ち上がる。北西壁には張り出しが付く。住居壁直交方向で約1.3ｍ、住居壁平行方向で約2.3ｍの掘り込みで、床面より若干斜面上位になる。



第283図　05-ＳＩ58・カマド・出土遺物

張り出しは、壁溝で区画されている。

床面は、残存部では地山上面を利用しているが、斜面下位にはおそらく貼床を施したと考えられる。壁溝は北西壁沿いで確認した。上場幅0.08～0.22m、下場幅0.04～0.1m、床面からの深さ0.05m前後である。床面で２個のピットを確認した。Ｐ１・２は住居隅の主柱穴で、北東、南東隅は失われている。カマドは予測される南西壁中央部からやや西寄りの位置で、粘土を含む黒色土の範囲で確認した。大部分が崩落しており、片袖のみ確認できる。袖は最長約0.9mである。

本住居跡は四隅に主柱をもち、南西壁にカマドを設置する住居と想定される。廃絶後は自然堆積により埋没している。周辺状況からみて、05-ＳＳ30に関連する工人の住まいと考えられる。

遺　物(第283図)　住居跡内から土師器甕が出土した。遺物の出土量は少なく、カマド残存部付近から出土している283図１・２で全てである。１・２は土師器甕の底部で、どちらも砂底で、立ち上がり形状は直線的に外傾する。１は外面底部付近にのみ斜位ケズリを施すが、上部は広くユビナデをとどめる。内面は横位ヘラナデ調整である。２も外面は縦位ケズリ、内面横位ヘラナデ調整である。

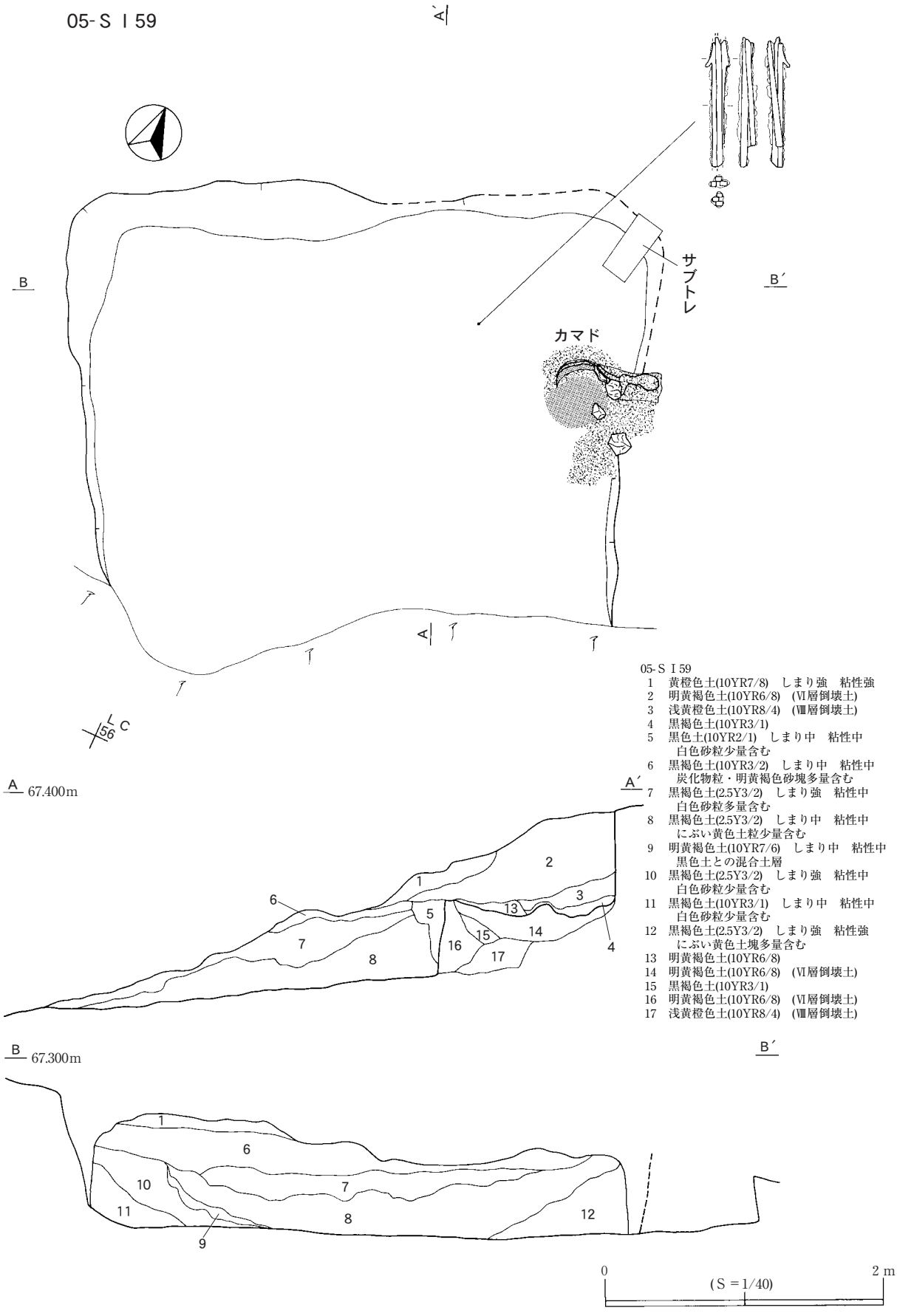
05-ＳＩ59(第284図・285図、図版95)

遺　構　ＬＢ・ＬＣ56・57グリッドの、斜面上位は粘土質地山上で、斜面下位は砂質地山中位で、黒褐色土の広がりにより確認した。本住居跡の立地点は丘陵部山麓緩斜面で、南東側へ傾斜する。05-ＳＤ45と重複し、本住居跡の方が古い。また、05-ＳＸ47が隣接するが、１・２層の堆積状況からみて本遺構の方が古いとみられる。周辺には05-ＳＩ74、05-ＳＳ17、05-ＳＸ48・56・72がある。

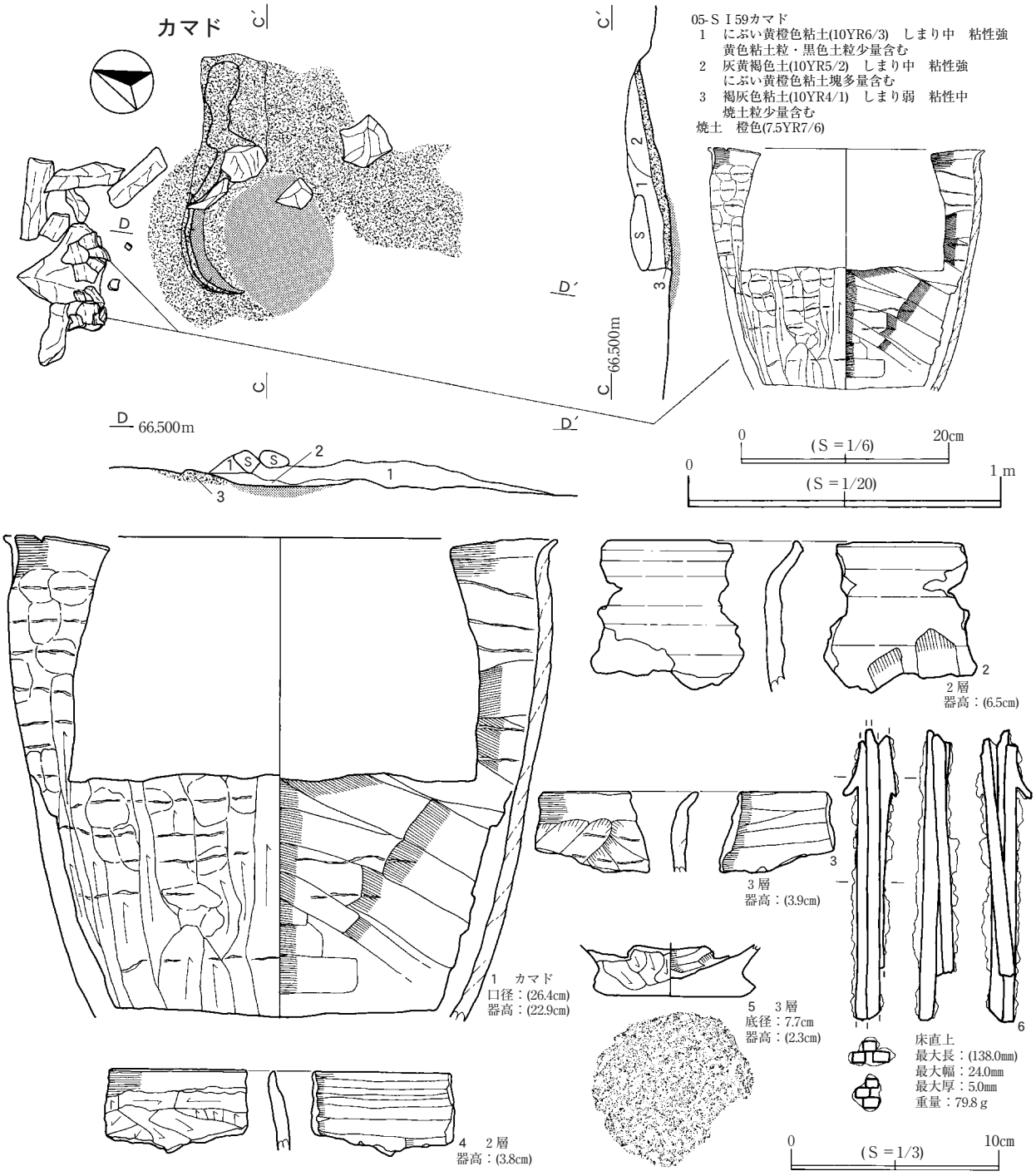
堆積土は住居掘り込み外部を含めて17層に分けた。住居掘り込み上部に堆積するのが１・２層、掘り込み内部に堆積するのが５～12層、住居外部に掘り込みに先行して堆積するのが３・４・13～17層である。３・４・13～17層は住居北西壁の壁面を形成する地山崩落土の集合体であるが、その由来は、住居北部斜面の倒壊による崖崩れの土である。１・２層も均質な土層であり、崖崩れによる倒壊土とみられる。すなわち本住居跡廃絶後に、住居上部の一部にかかる規模で崖崩れがあったと考えられる。これらの堆積土に対し、住居内堆積土は黒色土基調であり、堆積状況もレンズ状を示すことから、自然堆積による埋没過程が想定される。

平面形は、南東部斜面下位側が崩落しており、また北隅がトレンチで失われているため不明である。カマドの付く壁に直交する主軸方位はＮ－66°－Ｅである。北西壁を正方形の一辺とみた場合住居面積は約18㎡で、中形の住居と想定される。各壁の残存長は、北東壁2.9m以上、南西壁2.7m以上、ほぼ予測がつく北西壁で約4.2mである。南西壁の検出面からの深さは約1.0mで、70～80°の傾斜で立ち上がる。床面は、残存部では地山上面を利用しているが、斜面下位にはおそらく貼床を施したと考えられる。なお、壁溝やピットは確認できなかった。

カマドは、想定される北東壁の中央部から北寄りの位置で、にぶい黄橙色粘土の分布で確認した。上部構造はほとんど崩落しており、火床面と袖の一部が確認できた。堆積土は３層に分けた。１～３層は全てカマド構築材に由来する倒壊土と考えられる。煙道から火床面末端まで約0.9m、これに直交する最大幅が約1.0mである。煙道はスロープ状で、住居壁から約0.3m外に延びる。袖は礫と粘土を素材としている。なお、袖の北西側には礫がまとまって遺棄してあった。火床面は不整な楕円形状の被熱範囲で、長径約0.45m、短径約0.35mである。



第284図　05-ＳＩ59



第285図　05-ＳＩ59カマド・出土遺物

本住居跡は北東壁にカマドを設置する住居である。廃絶後は自然堆積により埋没しているが、堆積土上部に斜面上位からの倒壊土が厚く堆積している。周辺状況からみて、05-ＳＳ17に関連する工人の住まいだった可能性が高い。

遺　物(第285図)　住居跡内から土師器甕、鉄製品が出土した。出土遺物は少なく、図示したものでほとんどである。なお、出土地点はカマド周辺に集中する。

285図１は大型の土師器甕である。胴下部から直線的に外傾して、胴上部付近がわずかに内湾気味になり、口端が短く外反する。外面は縦位ケズリを施すが浅く、所々指の押さえを残す。内面は横位

ヘラナデ調整である。285図２～４は土師器甕の口縁部破片である。２はロクロ目を残し、胴上部が直立気味に立ち上がり、頸部から外傾して口縁部が内湾する。内面にはわずかに縦位ヘラナデ再調整が認められる。３は口縁部まで直立して、口端がわずかに外反する。外面ユビナデ、内面横位ヘラナデ調整である。４は口縁部まで内湾する。外面横・斜位ケズリ、内面横位ヘラナデ調整である。

285図５は土師器甕の砂底の底部で、底部外縁が張り出す形状である。285図６は鉄製品で、３本の棒状のものが、錆で融着している。返しとみられる部分があることから、銛になる可能性が高い。

05-ＳＩ66(第286図、図版96)

遺　構　ＬＨ・ＬＩ54グリッドの第Ⅳ層中位～砂礫層で、褐灰色土の広がりで確認した。本住居跡の立地点は丘陵部南部の中腹急斜面である。重複する遺構はないが、05-ＳＸ41と連結する。周辺には05-ＳＳ19・65、05-ＳＸ64がある。

堆積土は７層に分けた。７層は貼床で、６層は床面直上の炭化材を含む層である。１～５層は斜面上位から斜堆積する流入土であり、本住居跡は廃絶後自然堆積で埋没したと考えられる。

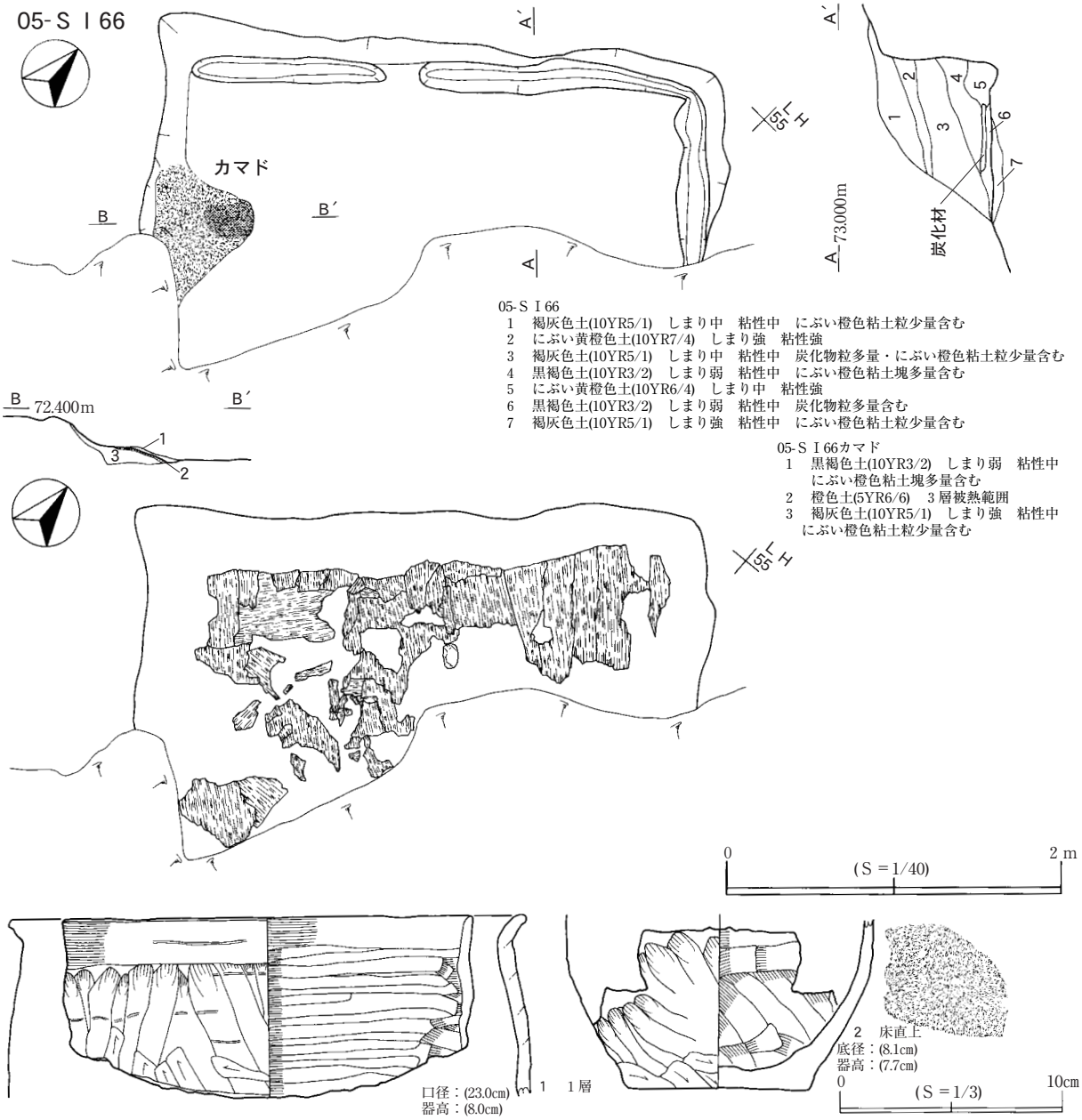
平面形は南東部斜面下位側が崩落しているため不明である。カマドの付く壁に直交する主軸方位はＮ－44°－Ｅである。北西壁を正方形の一辺とみた場合の住居面積は約10㎡で、小形の住居と想定される。各壁の残存長は、北東壁約1.1m、南西壁約2.0m、完全に残る北西壁で約3.3mである。北西壁の検出面からの深さは約0.6mで、ほぼ垂直に立ち上がる。床面は、残存部では地山上面を利用しているが、斜面下位には貼床を施したと考えられる。壁溝は北西壁沿いと北東壁残存部で確認した。上場幅0.08～0.2m、下場幅0.04～0.1m、床面からの深さ0.05m前後の断面台形状である。床面でピットは確認できなかった。

カマドは想定される南西壁中央部からやや北西寄りの位置で、焼土の広がりで確認した。検出段階で上部構造はほぼ失われており、火床面と構築材基部の粘土貼り付け範囲のみ確認できた。１層は火床面上部堆積土で、住居内４層に対応する。３層は貼床と同様の土で造成した、煙道にかけてのスロープとみられる。２層は３層の被熱範囲で火床面に相当する。火床面は不整な楕円形の被熱範囲で、長径約0.3m、短径約0.2mである。

本住居跡は焼失家屋で、床面上では多数の炭化材や焼土を検出した。南東部は崩落のため失われている。炭化材を木目の方向で区分すると、北西壁に直交する材と、平行する材に２分されるが、前者が圧倒的に多い。出土状況からみて、前者は壁板に用いた縦板、その下で検出できた後者は床板の可能性がある。なお、これらの一部サンプルを樹種分析した結果、スギ５点、広葉樹１点の結果がでた。板材には基本的にスギを用いたようである。広葉樹とでたのは細い棒状の材で、支柱などで使ったものと思われる。焼土分布はあまり明確でなかった。

本住居跡は南西壁にカマドを設置する住居である。廃絶時には火災にあっているが、これが意図的なものか失火によるかは不明である。廃絶後は自然堆積により埋没している。

遺　物(第286図)　出土遺物は少なく、主要なものは全て図示した。286図１は比較的大型の土師器甕で、頸部まで内傾し口縁部が短く外反する。外面は胴上部まで縦位ケズリを施すが、頸部にかけてはユビナデを残す。内面は横位ヘラナデ調整である。286図２は土師器甕の底部である。外面は底部付近にのみケズリを施し、胴部はユビナデにとどめる。内面は横・斜位のヘラナデ調整である。



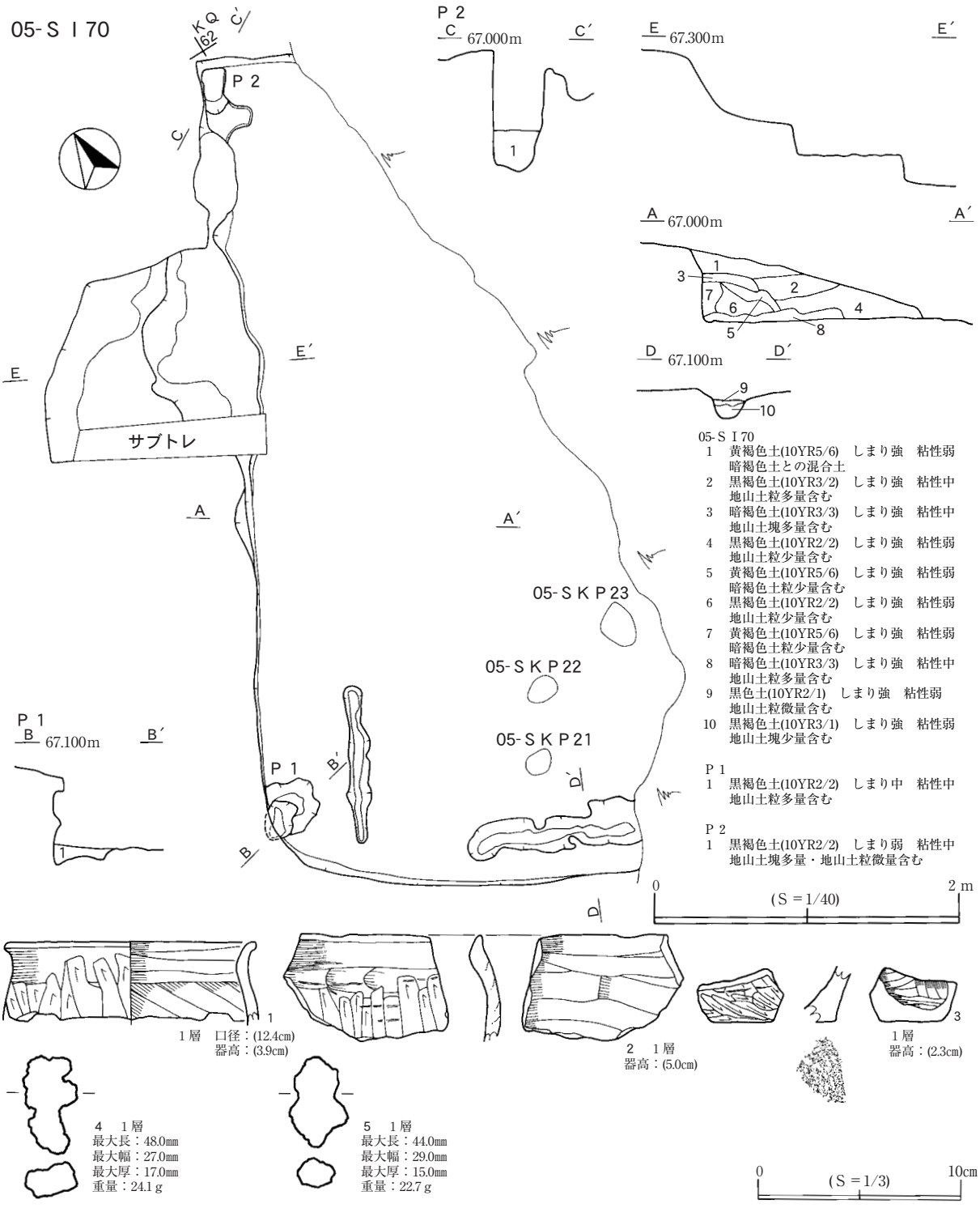
第286図　05-ＳＩ66・炭化材出土状況・出土遺物

05-ＳＩ70(第287図、図版97)

遺　構　ＫＰ・ＫＱ60・61グリッドの第Ⅳ層中位～砂質主体の地山層で、地山土粒を含む黒褐色土の広がりで確認した。本住居跡の立地点は丘陵部山麓緩斜面で、南東側へ傾斜する。重複する遺構はなく、周辺には05-ＳＩ29・53・73、05-ＳＳ10・11・12・14・77・80・34、05-ＳＤ45・69があり、本住居跡上部を05-ＳＳ34排滓場が覆う。

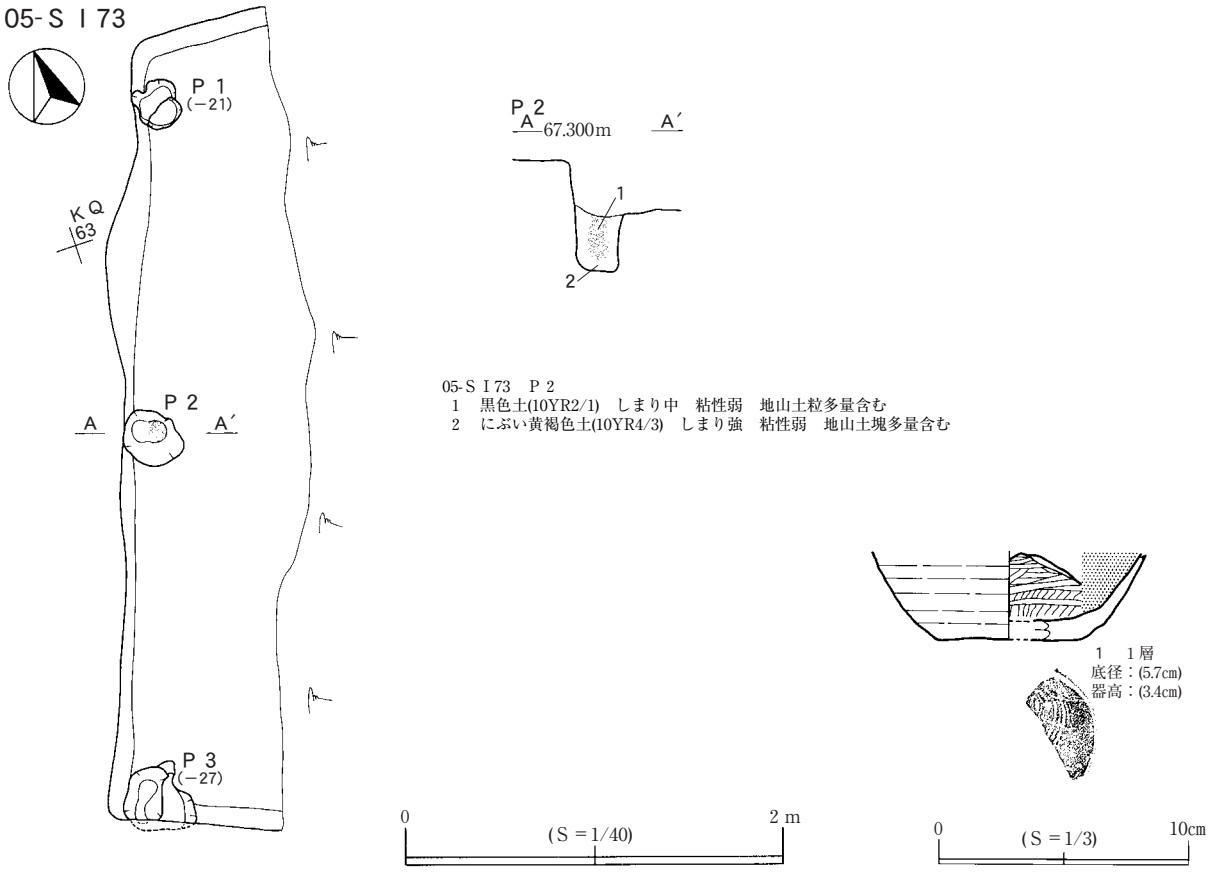
堆積土は10層に分けた。１～４層は床面から順に堆積する土で、人為的埋没によるものと考えられる。５～８層は北西壁際に局所的に認められる土で、上部の５・７層が黄褐色系の土であり、断面確認を行ったラインより北部には、住居壁外の段状掘り込みが存在することなどから、出入り口施設に関わる階段状施設の名残りと考えられる。

平面形は、南東部斜面下位側が崩落しており不明である。北西壁に直交する主軸方位はＮ－60°－



第287図　05-ＳＩ70・出土遺物

Wである。北西壁を正方形の一辺とみた場合住居面積は約27㎡で、大形の住居と想定される。各壁の残存長は、北東壁0.6m以上、南西壁2.4m以上、完全に残る北西壁で約5.2mである。南西壁の検出面からの深さは約0.5mで、ほぼ垂直に立ち上がる。北西壁中央北東寄りには張り出しが付く。住居壁直交方向で約1.4m、住居壁平行方向で約1.3mの掘り込みで、底面が階段状になることから出入り口施設と考えられる。床面は地山上面を利用しているが、斜面下位にはおそらく貼床を施したと考えられる。壁溝は南西壁沿いの一部で確認した。上場幅0.14～0.3m、下場幅0.04～0.1m、床面からの深さ



第288図　05-ＳＩ73・出土遺物

0.15m前後である。床面で２個のピットを確認した。Ｐ１・２は住居隅の主柱穴で、北東、南東隅は失われている。なお本住居跡に伴うカマドは確認できなかった。

本住居跡は、四隅に主柱をもつ住居と想定される。上部を05-ＳＳ34排滓場が覆うため、廃絶後本住居内は排棄場と化したとみられる。05-ＳＳ10・11・12・14・77・80でも古手の炉跡に、または05-ＳＳ34操業初期に関連する工人の住まいだったと考えられる。

遺　物(第287図)　住居跡内から土師器甕、鉄塊が出土した。基本的に出土量は少なく、ほとんどを図示した。287図１は比較的小型の土師器甕で、頸部まで内傾して口縁部が直立・外反する。外面縦位ケズリ、内面斜位ヘラナデ調整である。287図２は土師器甕の口縁部破片で、口縁部まで内湾する器形である。外面縦位ケズリ、内面横位ヘラナデ調整である。287図３は土師器甕の底部で、砂底である。287図４・５は鉄塊である。表面の錆化が著しいことから、素材鉄の可能性もある。

05-ＳＩ73(第288図、図版98)

遺　構　ＫＰ62・63、ＫＱ62グリッドの第Ⅳ層中位～砂質主体の地山層で、地山土粒を含む黒褐色土の広がりで確認した。本住居跡の立地点は丘陵部山麓緩斜面で、南東側へ傾斜する。重複する遺構はなく、周辺には05-ＳＩ29・53・70、05-ＳＳ34があり、本住居の上部を05-ＳＳ34排滓場が覆う。

堆積土は１層のみで、確認できた範囲も狭く堆積過程は不明だが、上部を05-ＳＳ34排滓場が覆うことから、最終的には人為的に埋め立てたと考えられる。

平面形は、南東部斜面下位側が崩落しているため不明で、北西壁に直交する主軸方位はＮ－66°－

Ｗである。北西壁を正方形の一辺とみた場合住居面積は約17㎡で、中形の住居と想定される。各壁の残存長は、北東壁約0.7ｍ、南西壁約0.9ｍ、完全に残る北西壁で約4.1ｍである。北西壁の検出面からの深さは約0.2ｍで、ほぼ垂直に立ち上がる。

床面は地山上面を利用しているが、斜面下位にはおそらく貼床を施したと考えられる。壁溝は確認できなかった。床面で３個のピットを確認した。Ｐ１・３は住居隅の主柱穴で、北東、南東隅では失われている。Ｐ２は壁中央部の壁柱穴である。なお、本住居跡に伴うカマドは確認できなかった。

本住居跡は、四隅に主柱をもつ住居と想定される。上部を05-ＳＳ34排滓場が覆うため、05-ＳＳ10・11・14・77・80に、または05-ＳＳ34操業初期に関連する工人の住まいだったと考えられる。

遺　物(第288図)　土師器坏が１点出土した。288図１は土師器坏Ｂ類の底部で、回転糸切痕をとどめる。底部直上がやや段状にくびれる。内面のミガキは、底部は放射状、胴上部は横位に施している。

05-ＳＩ74(第289図・290図、図版99)

遺　構　ＬＣ・ＬＤ53・54グリッドの第Ⅳ層中位～砂礫層上面で、黒色土の広がりで確認した。本住居跡の立地点は丘陵部山麓緩斜面で、南東側へ傾斜する。重複する遺構はなく、周辺には05-ＳＩ59、05-ＳＳ17、05-ＳＤ45、05-ＳＸ72がある。

堆積土は４層に分けた。４層は貼床で、３層は壁溝内堆積土である。１・２層は水平に堆積しており、混入物も多く人為的造成土とみられる。平面形は住居南東部が失われているが、おそらく正方形とみられる。カマドの付く壁に直交する主軸方位はＮ－42°－Ｗである。主軸とそれに直交するラインで測る住居面積は約９㎡で、小形の住居である。各壁の長さは北東壁約2.9ｍ、南東壁約3.0ｍ、南西壁約3.0ｍ、北西壁約3.0ｍである。南西壁の検出面からの深さは約0.4ｍで、立ち上がりは垂直である。北西壁には張り出しが付く。住居壁直交方向で約1.1ｍ、住居壁平行方向で約2.1ｍの規模で、内部には２個のピットを伴う。05-ＳＤ45との関係から、出入り口施設と考えられる。

床面は張り出し部以外はほぼ全面に貼床を施し、斜面下位側ほど厚さを増す。壁溝は北東壁沿いで確認した。壁溝は張り出しまで連続し、上場幅0.12～0.24ｍ、下場幅0.03～0.14ｍ、床面からの深さ0.1ｍ前後である。床面で４個のピットを確認した。Ｐ１～４は隅に配置する主柱穴である。

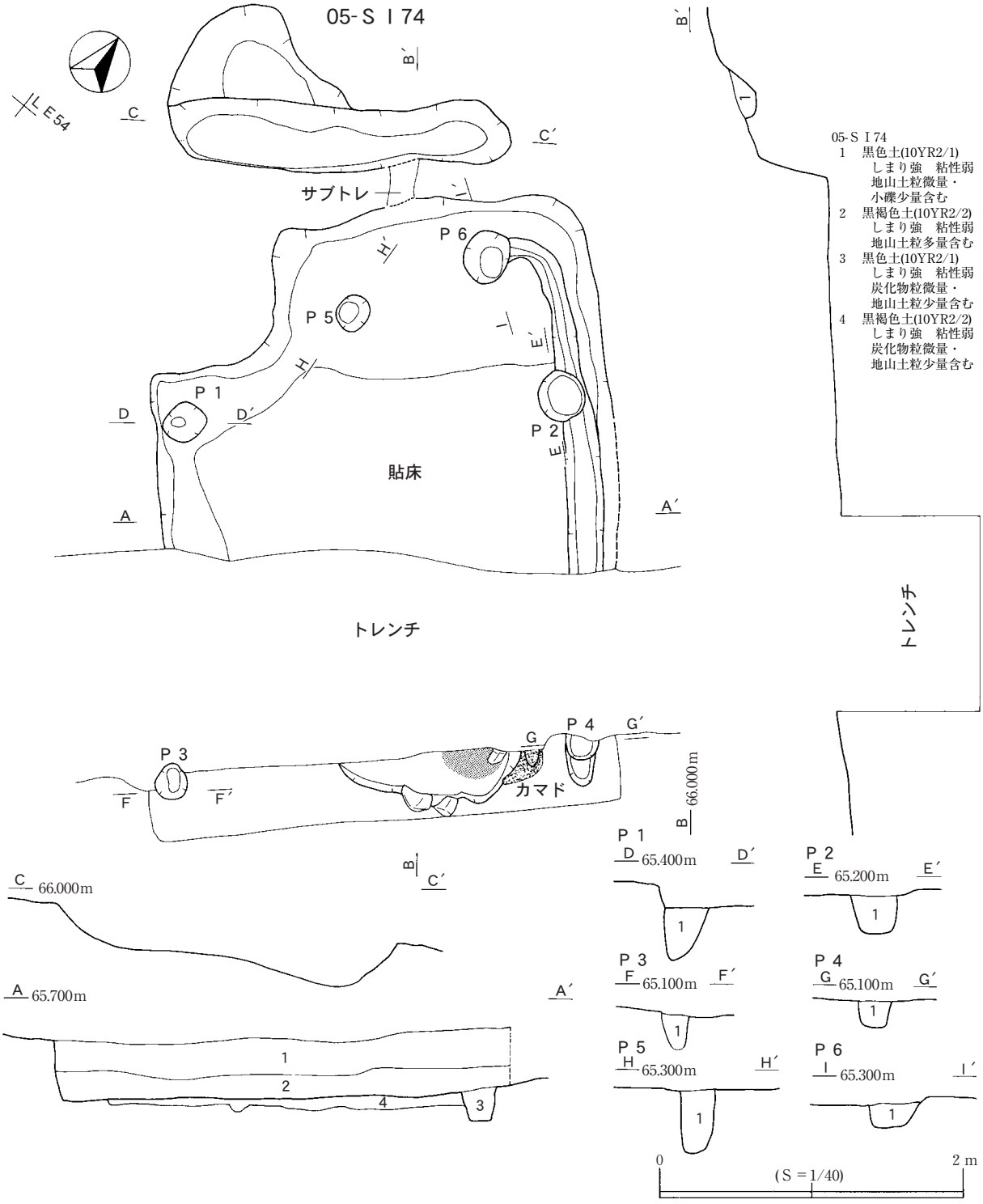
カマドは南東壁の中央部から北東寄りの位置で、焼土粒を含む土の広がりで確認した。北西部はトレンチにかかり残っていない。上部構造はほとんど破壊してあり、かろうじて火床面と袖の一部が確認できた。堆積土は３層に分けた。３層が基底面の造成土で、火床面はその被熱範囲である。焼土の赤変化は弱い。２層は袖の一部と考えられる。１層は住居内堆積土とほぼ同じである。煙道側掘り込み末端から火床面残存部まで約0.4ｍ、袖の最大幅が約0.7ｍである。袖は粘土を素材としている。火床面の被熱範囲は半円形状に残存しており、径0.4ｍ前後である。

本住居跡は四隅に主柱をもち、南東壁にカマドを設置する住居である。廃絶後は人為的に埋め戻している。周辺状況からみて、05-ＳＳ17に関連する工人の住まいだったと考えられる。

遺　物　本住居跡からは遺物が出土しなかった。

05-ＳＩ803(第291図～294図、図版100・101・165)

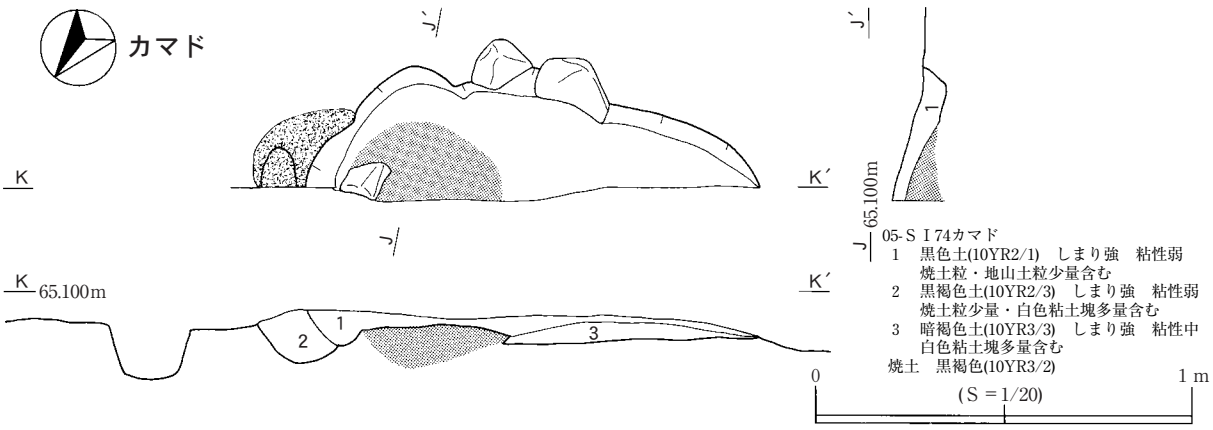
遺　構　ＬＯ56～58、ＬＰ・ＬＱ55～58グリッドの第Ⅳ層中位～第Ⅵ層上面で、地山土塊を含む黒褐



第289図　05-ＳＩ74

色土の広がりで確認した。本住居跡の立地点は台地上部平坦面だが、丘陵部に近いためわずかに南西側へ傾斜する。重複する遺構はなく、周辺には03-ＳＩ609・854がある。

堆積土は６層に分けた。１～５層は壁際からの斜位堆積を示すが、確認範囲が狭いため堆積過程は不明である。６層は貼床の土である。平面形はほぼ正方形で、カマドの付く壁に直交する主軸方位はＮ－25°－Ｗである。主軸とそれに直交するラインで測る住居面積は約82㎡で、超大形の住居である。各壁の長さは、北東壁約9.1ｍ、南東壁は貼床範囲で約8.9ｍ、南西壁も貼床範囲で約9.1ｍ、北西壁約



第290図　05-ＳＩ74カマド

8.9mである。南東壁の検出面からの深さは約0.4mで、立ち上がりは基本的に垂直である。

床面はほぼ全面に貼床を施す。傾斜下位に当たる住居南東側には厚く施している。壁溝は確認できなかった。床面で53個のピットを確認した。その多くは壁柱穴で、配置からみて造り替えがあったことが分かる。その変遷図を291図に示した。Ｐ１～４は住居隅より内側に配置する主柱穴で、柱穴中心で測る柱穴間距離はＰ１－２間約5.6m、Ｐ３－４間約4.8m、Ｐ１－４間約6.0m、Ｐ２－３間約6.0mである。Ｐ３がカマド前庭部に規制されて、やや住居内側に配置してある。

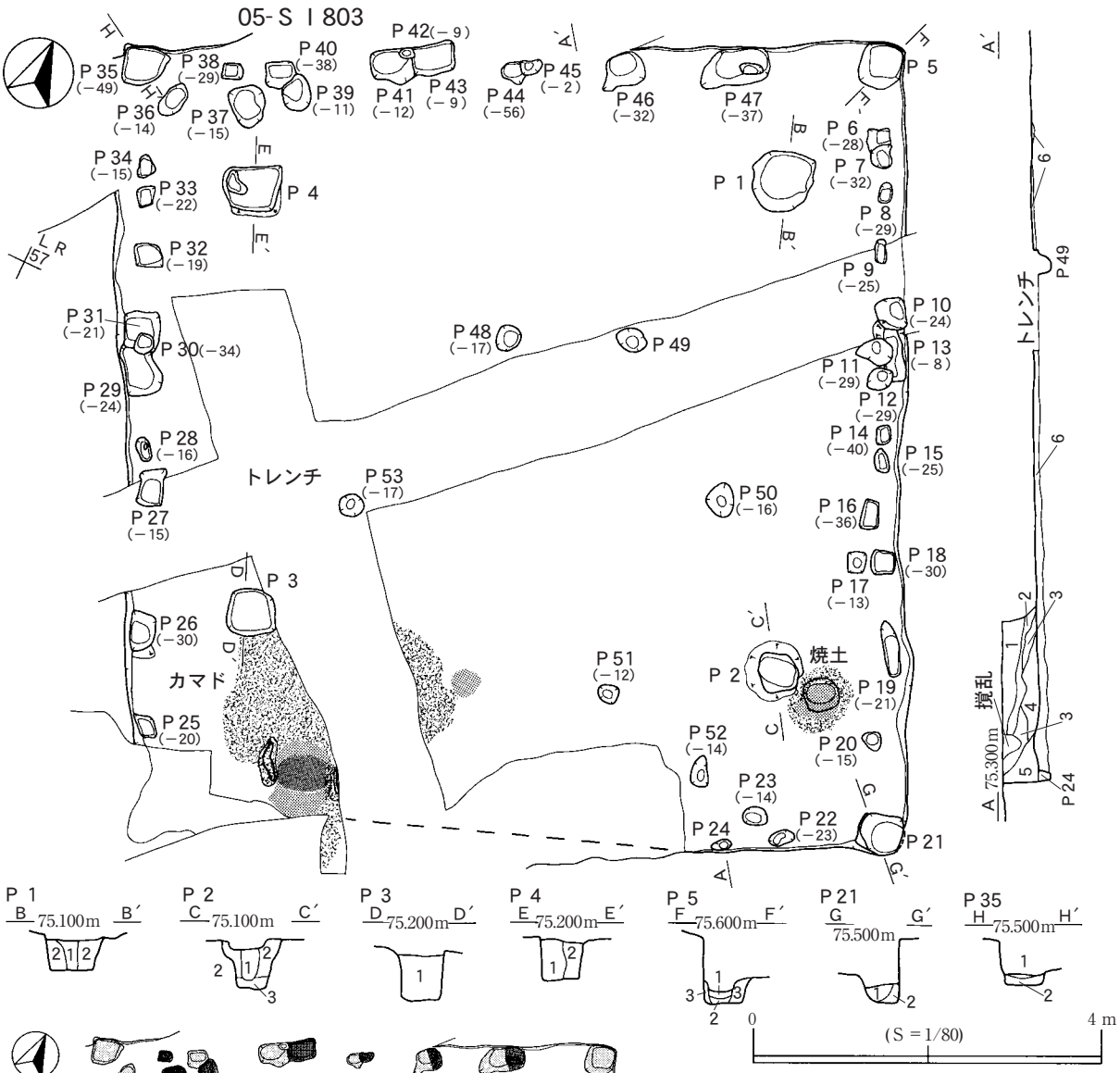
カマドは住居南東壁の中央部から西寄りの位置で、灰黄褐色土や暗灰黄色粘土の広がりで確認した。部分的にトレンチで破壊されているが、袖、火床面、前庭部を確認できた。堆積土と被熱範囲を７層に分けた。１～３層は上部構築材の崩落土層である。４～６層は火床面や袖内面に貼った粘土が、被熱により硬化した層である。７層は袖の基部とみられる。火床面は住居貼床の被熱範囲で、上部が被熱の強い部分である。煙道から前庭部末端まで約3.0m、袖の最大幅が約0.9mである。煙道はスロープ状で、住居壁から約0.6m外に延びる。袖は粘土を素材としており、内面は強い被熱により硬化している。火床面は不整な円形状の被熱範囲で、長径0.9m以上、短径約0.7mである。中心部は強い被熱で硬化しており、焼土化している深さも他の住居に比べて厚く、長期間の使用が想定される。

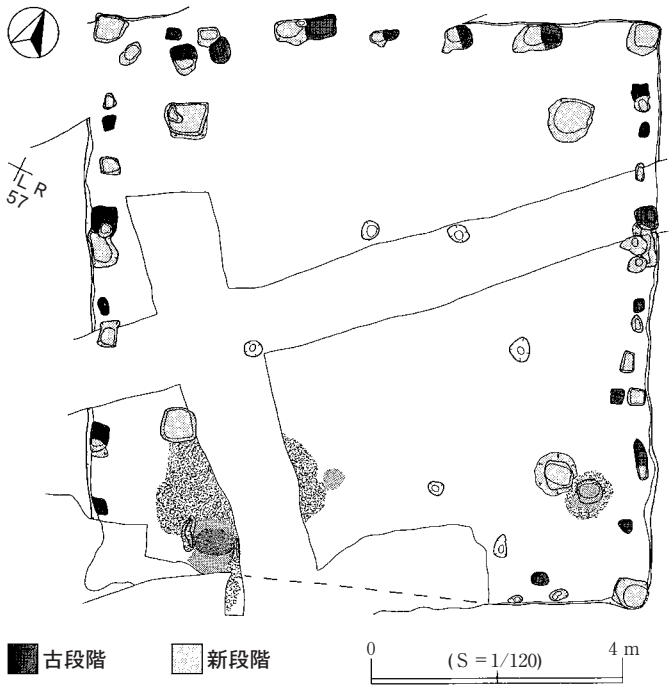
床面ではカマド以外に、２か所の焼土遺構を確認した。焼土１は住居東隅付近のＰ２東側に隣接する位置にある。床面を浅く掘り込み、６層の粘土を貼って、その上部を燃焼面として使用している。使用後は２～３層が堆積しており、明らかに人為的な１層の黄橙色粘土が最上部にのる。焼土２は、カマド前庭部の北東部にかかる位置にあり、床面上をそのまま利用した被熱範囲である。

本住居跡は４本の主柱をもち、南東壁にカマドを設置する住居である。床面には焼土が２か所あり何らかの作業場が存在した可能性がある。

遺　物(第294図)　住居跡内から土師器甕・坏・鍋、須恵器甕、鉄製品、土製品が出土した。土師器甕は口縁部が26点、底部が11点出土しており、そのうち比較的大型の口縁部資料６点、底部資料３点を図示した。図示しなかったものを含めた甕の口縁部分類別数量はＡ類(４点)、Ｂ類(１点)、Ｃ類(13点)、Ｄ類(３点)、その他(２点)、分類不能(３点)で、底部分類別数量は砂底(10点)、薦編圧痕(１点)の内訳になる。床面付近からの出土が多く、廃絶時に意図的に遺棄した可能性が高い(第293図)。

294図１～３は比較的小型の土師器甕である。１はロクロ目を残すもので、胴上部が張り出し、口縁部が直立気味に外反する。２は頸部が段状にくびれて、口縁部が直立する。３は口縁部まで内湾す





05-ＳＩ803
1　黒褐色土(10YR3/1)　しまり中　粘性中　白色砂粒・地山土粒微量含む
2　黒褐色土(10YR3/1)　しまり中　粘性中　焼土粒多量・白色砂粒・地山土粒少量含む
3　黒褐色土(10YR3/1)　しまり中　粘性中　地山土粒多量含む
4　黒褐色土(10YR2/2)　しまり弱　粘性弱　地山土粒少量含む
5　黒色土(10YR2/1)　しまり弱　粘性弱　地山土塊多量含む
6　黒色土(10YR2/1)　しまり強　粘性中　地山土塊多量含む

Ｐ１
1　黒色土(10YR2/1)　しまり極弱　粘性弱
2　明黄褐色土(10YR7/6)　しまり中　粘性弱

Ｐ２・Ｐ５
1　黒色土(10YR2/1)　しまり弱　粘性弱
2　明黄褐色土(10YR7/6)　しまり中　粘性中　黒色土粒多量含む
3　黒色土(10YR2/1)　しまり強　粘性中

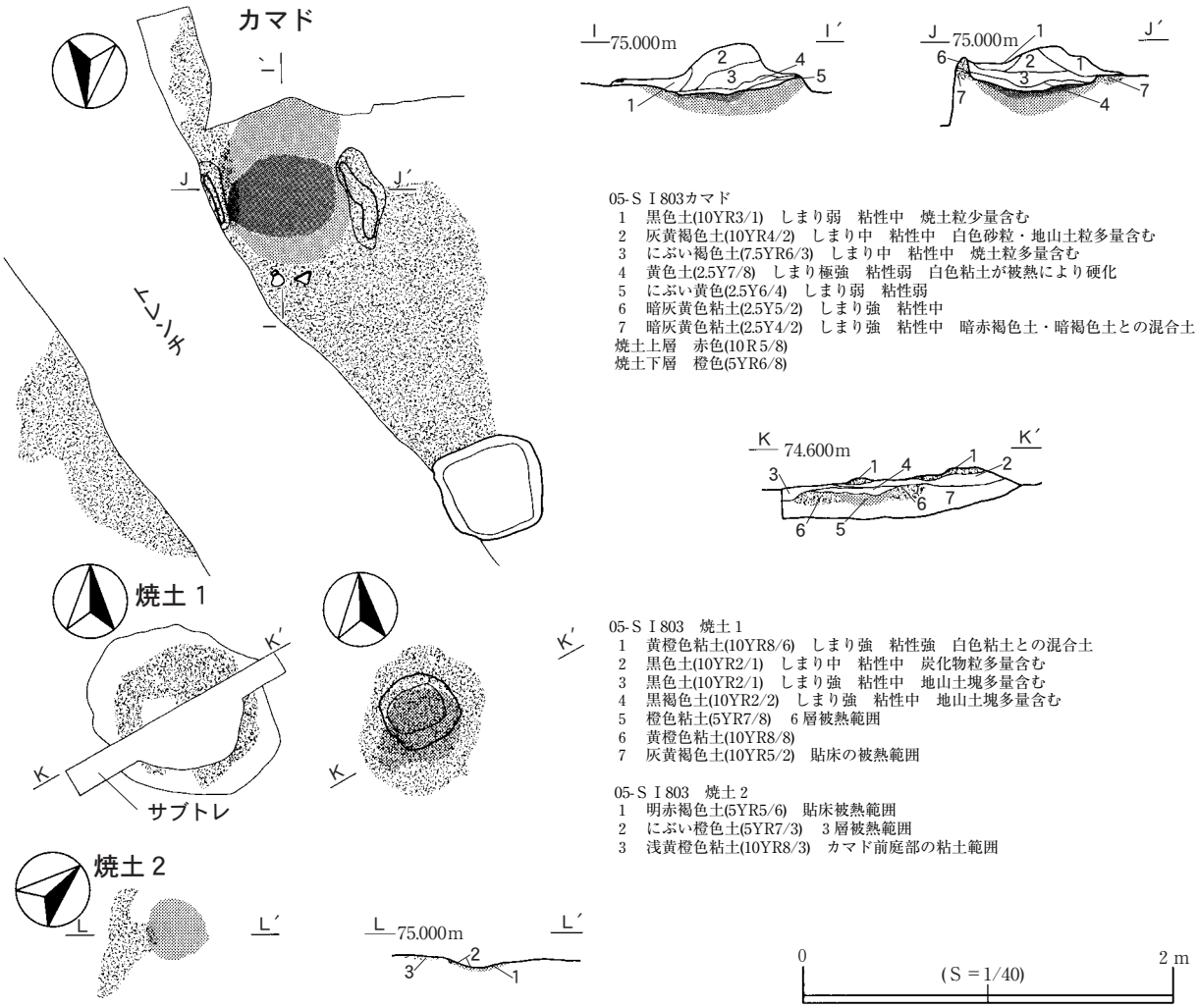
Ｐ３
1　黒褐色土(10YR3/2)　しまり中　粘性中　明黄褐色土粒少量含む

Ｐ４
1　黒色土(10YR2/1)　しまり弱　粘性中　地山土塊少量含む
2　明黄褐色土(10YR7/6)　しまり中　粘性弱　黒色土粒少量含む

Ｐ21
1　黒色土(10YR2/1)　しまり強　粘性弱　地山土粒少量含む
2　黒色土(10YR2/1)　しまり強　粘性中　地山土塊多量含む

Ｐ35
1　黒色土(10YR2/1)　しまり弱　粘性弱
2　黒色土(10YR2/1)　しまり強　粘性中　地山土粒多量含む

第291図　05-ＳＩ803



05-ＳＩ803カマド
1　黒色土(10YR3/1)　しまり弱　粘性中　焼土粒少量含む
2　灰黄褐色土(10YR4/2)　しまり中　粘性中　白色砂粒・地山土粒多量含む
3　にぶい褐色土(7.5YR6/3)　しまり中　粘性中　焼土粒多量含む
4　黄色土(2.5Y7/8)　しまり極強　粘性弱　白色粘土が被熱により硬化
5　にぶい黄色(2.5Y6/4)　しまり弱　粘性弱
6　暗灰黄色粘土(2.5Y5/2)　しまり強　粘性中
7　暗灰黄色粘土(2.5Y4/2)　しまり強　粘性中　暗赤褐色土・暗褐色土との混合土
焼土上層　赤色(10R5/8)
焼土下層　橙色(5YR6/8)

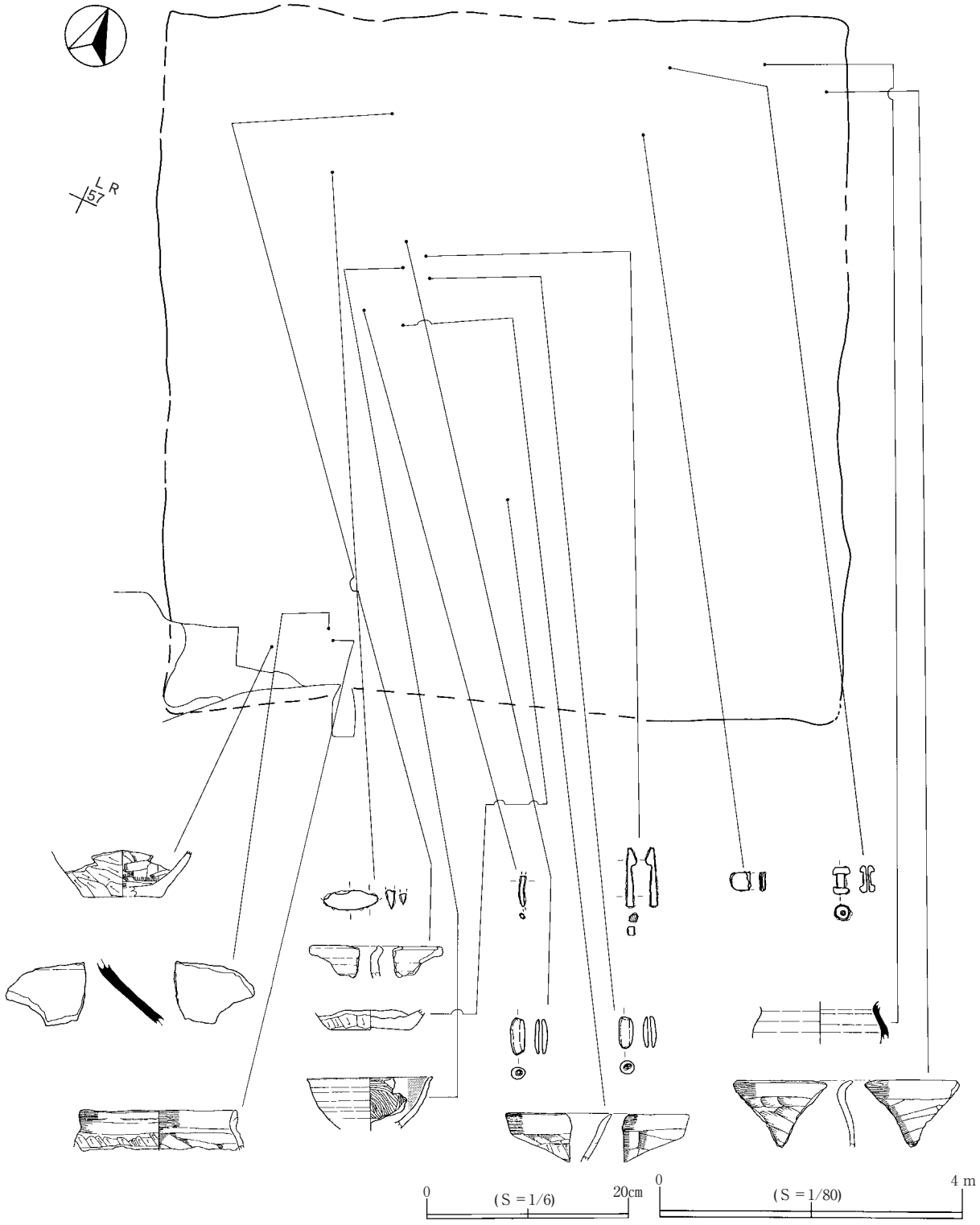
05-ＳＩ803　焼土１
1　黄橙色粘土(10YR8/6)　しまり強　粘性強　白色粘土との混合土
2　黒色土(10YR2/1)　しまり中　粘性中　炭化物粒多量含む
3　黒色土(10YR2/1)　しまり強　粘性中　地山土塊多量含む
4　黒褐色土(10YR2/2)　しまり強　粘性中　地山土塊多量含む
5　橙色粘土(5YR7/8)　6層被熱範囲
6　黄橙色粘土(10YR8/8)
7　灰黄褐色土(10YR5/2)　貼床の被熱範囲

05-ＳＩ803　焼土２
1　明赤褐色土(5YR5/6)　貼床被熱範囲
2　にぶい橙色土(5YR7/3)　3層被熱範囲
3　浅黄橙色粘土(10YR8/3)　カマド前庭部の粘土範囲

第292図　05-ＳＩ803カマド・焼土

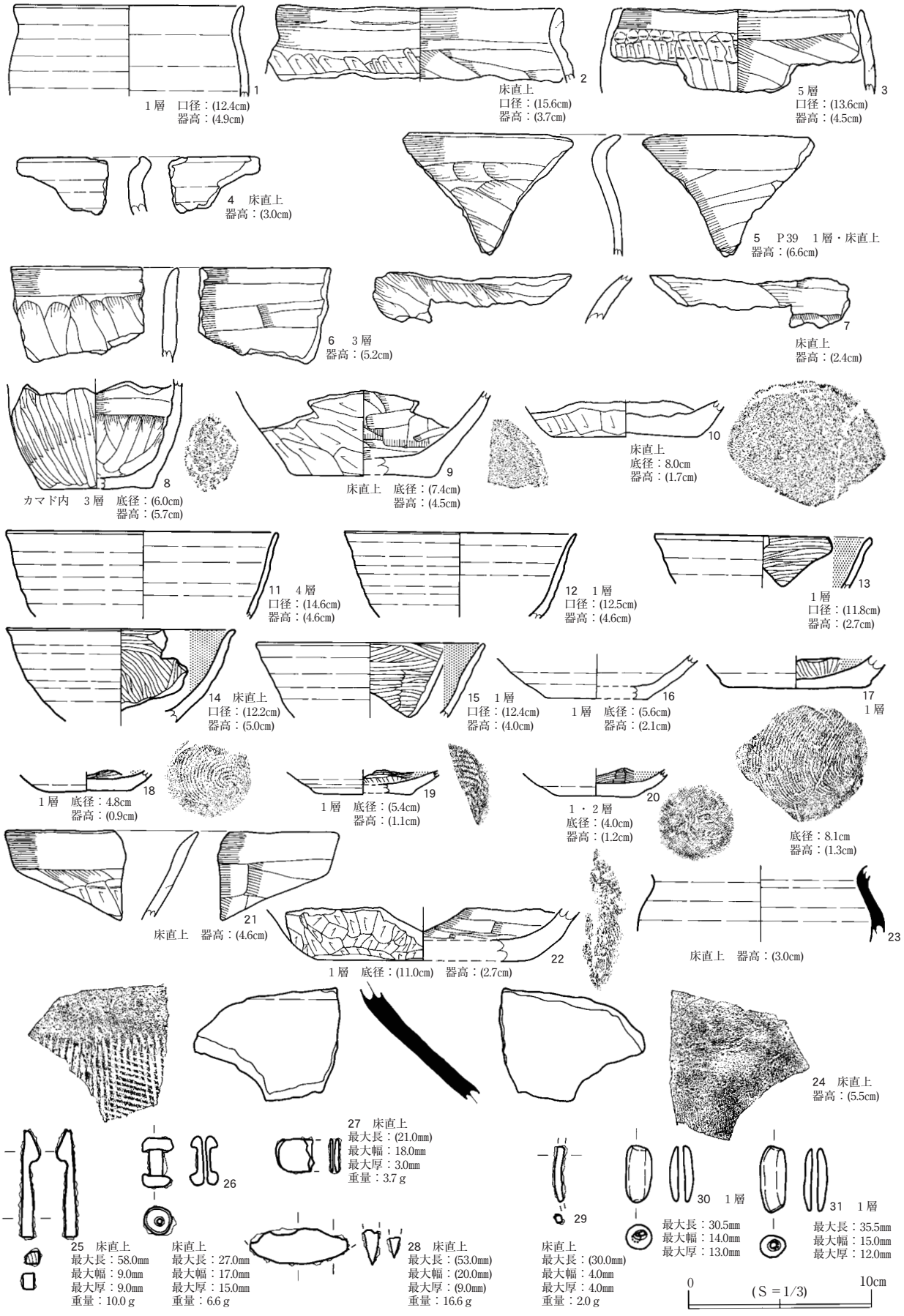
る器形である。２・３共に、外面は縦位ケズリ、内面は横・斜位ヘラナデ調整である。294図４～６は土師器甕の口縁部破片である。４はロクロ目を残し、口端が内湾する。５は頸部で強くくびれて口縁部が外反する。６は口縁部まで直立気味に立ち上がる。５・６は外面ユビナデ、内面横位ヘラナデ調整である。294図７は土師器甕の頸部付近の破片で、強く外反する器形とみられる。297図８～10は土師器甕の底部で、８は木葉痕をとどめ、９・10は砂底である。底部の立ち上がりは、８・９がやや直立してから外反もしくは内湾する。10は直線的に外傾する。

294図11～20は土師器坏で、11・12・16がＡ類、13～15・17～20がＢ類である。11・12はどちらも胴部が直線的に外傾して、口縁部がわずかに外反する器形で、11は全体に器壁が薄い。14は胴上部まで内湾気味に立ち上がって、口縁部が外反する。13も同様な器形とみられ、口唇は丸みを帯びる。15は口縁部まで直線的に外傾する器形で、口縁部がやや肥厚する。14は胴下部には縦位に、上部には横位にミガキを施している。13・15は、確認できる範囲では全体に横位のミガキを施す。16～17は底部資料で、17～19は回転糸切痕をとどめ、20は底部が摩滅している。17は比較的底径の大きい資料で、底部がやや突出する形状である。294図21・22は土師器鍋である。21は口縁部破片で、口唇が先細りになる。外面縦位ケズリ、内面横位ヘラナデ調整である。22は底部で、砂底である。底部から直線的に外傾する形状である。



第293図　05-ＳＩ803遺物出土状況

294図23・24は須恵器である。23は小型の甕で、胴上部が内傾して頸部で屈曲する。24は甕の頸部付近の破片である。外面にはタタキ目が確認される。294図25～29は鉄製品である。25は銛と考えられる。26はボルト状のもので、中心に貫通孔が通る。何らかの留め具と考えられる。27は穂摘具の破片である。28は比較的厚みのある刃先で、鋤先または斧の一部になる可能性がある。29は両端を欠損する棒状のものである。294図30・31は土錘で、どちらも貫通孔が認められる。



第294図　05-ＳＩ803出土遺物

(２)掘立柱建物跡

ここで扱う掘立柱建物跡は、調査段階で確認できたものに限って掲載している。実際にはこの他にも多数の柱穴様ピットを検出しており、本来はより多くの建物跡が存在していたことは想像に難くない。これらについては、本章第３節(12)柱穴様ピット集中地区で図上復元を行い、一定の検討を加えているので参照願いたい。

01-ＳＢ146(第295図、図版102)

遺　構　ＭＳ38・39、ＭＴ37～39グリッドの第Ⅳ層中位～第Ⅵ層上面で確認した。本遺構の立地点は台地南西端に近く、緩やかに南西側へ傾斜する。重複する遺構はないが、周辺に柱穴が分布する。また01-ＳＤ220が比較的近い位置にある。

本遺構は９個の柱穴で構成される総柱式の建物跡である。主軸方位は、Ｐ４・６の中心間を主軸線とした場合Ｎ－28°－Ｗになる。柱配置は均等で、柱穴中心間の距離で1.8～1.9ｍ間隔で配置する。

本遺構は総柱式の掘立柱建物で、01-ＳＤ220や01-ＳＤ250と軸方位が合うことから、同時に存在した可能性がある。

遺　物　本遺構から遺物は出土しなかった。

01-ＳＢ328(第296図、図版102)

遺　構　ＭＫ41、ＭＬ41・42グリッドの第Ⅳ層中位～第Ⅵ層上面で確認した。本遺構の立地点は台地上部平坦面である。重複する遺構はないが、近接する位置に01-ＳＩ87、01-ＳＤ47がある。

本遺構は、６個の柱穴で構成される１間×２間の建物跡である。主軸方位は、Ｐ１・３の中心間を主軸線とした場合Ｎ－33°－Ｗになる。桁行きの柱間は、Ｐ１－(約2.3ｍ)－Ｐ２－(約1.9ｍ)－Ｐ３、Ｐ４－(約2.0ｍ)－Ｐ５－(約1.8ｍ)－Ｐ６で、梁間はＰ１－(約2.0ｍ)－Ｐ４、Ｐ２－(約2.0ｍ)－Ｐ５、Ｐ３－(約2.0ｍ)－Ｐ６になる。

本遺構は１間×２間の側柱式の掘立柱建物で、01-ＳＤ47が本遺構を避けるように配置することから、同時に存在した可能性がある。

遺　物　本遺構から遺物は出土しなかった。

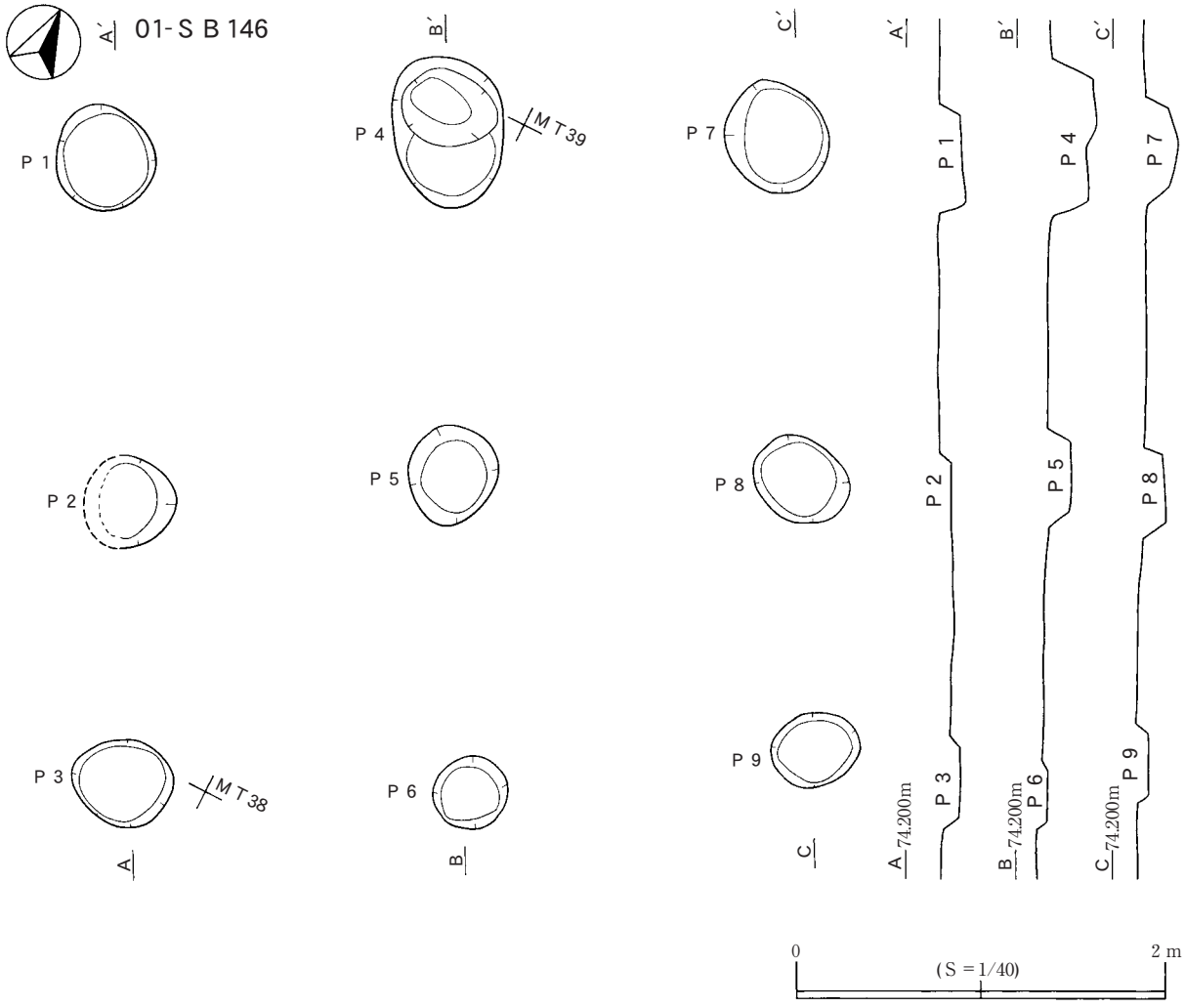
02-ＳＢ01(第296図、図版102)

遺　構　ＭＩ42、ＭＪ42・43、ＭＫ42グリッドの第Ⅳ層中位～第Ⅵ層上面で確認した。本遺構の立地点は台地上部平坦面である。重複する遺構はないが、周辺に柱穴が分布する。

本遺構は、本来は９個の柱穴で構成される総柱式の建物跡と想定されるが、南側部分が削平のため柱穴底面付近まで欠失しており、実際確認できた柱穴は７個である。主軸方位は、Ｐ４・６の中心間を主軸線とした場合Ｎ－35°－Ｗになる。柱配置はほぼ均等で、柱穴中心間の距離で1.6～1.7ｍ間隔で配置する。

本遺構は総柱式の掘立柱建物と想定される。02-ＳＩ01・18のほぼ中間にあり、軸方位が合うことから同時に存在した可能性がある。

遺　物　本遺構から遺物は出土しなかった。



第295図　01-ＳＢ146

05-ＳＢ79(第297図、図版102)

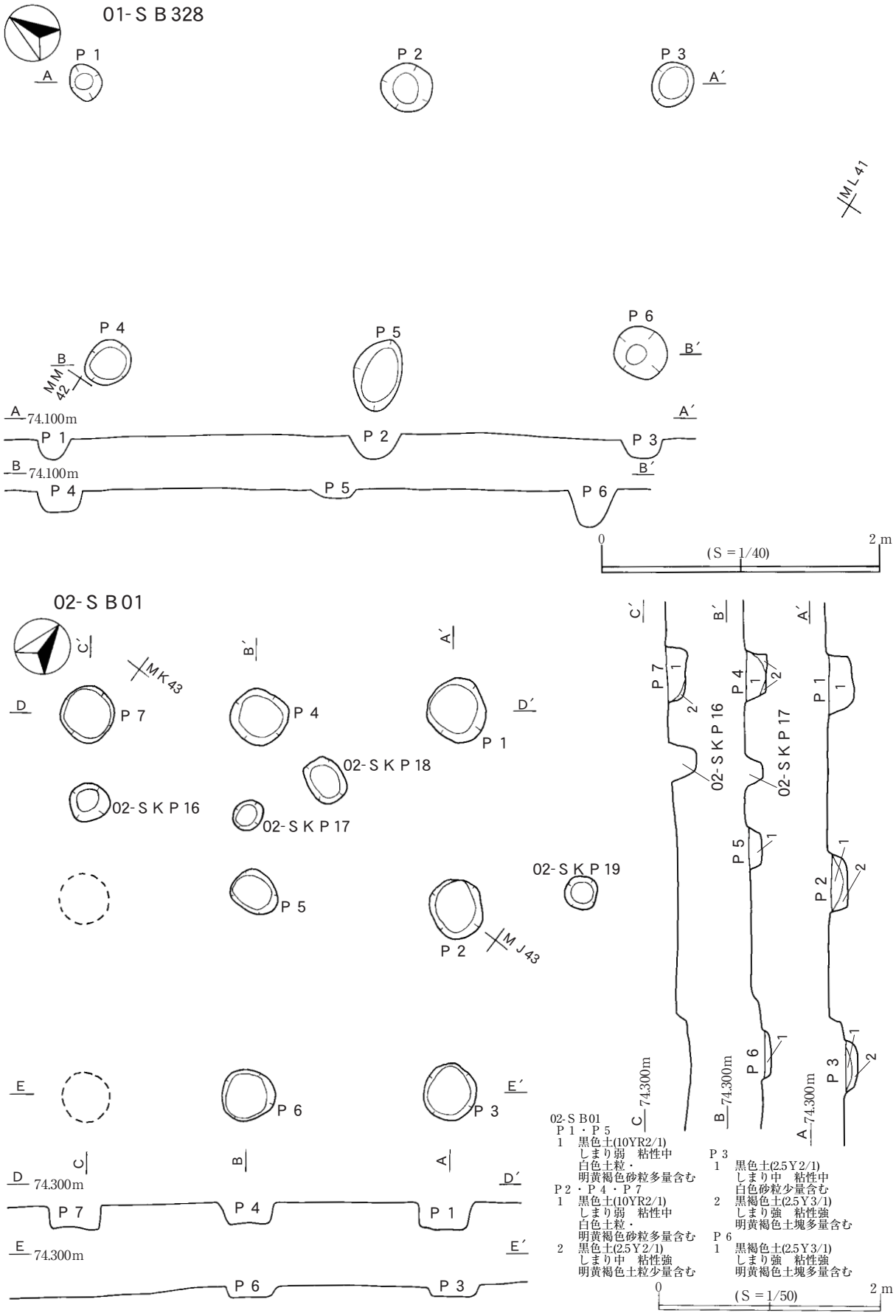
遺　構　ＭＢ52・53、ＭＣ51～53グリッドの第Ⅳ層中位～第Ⅵ層上面及び、03-ＳＩ173や05-ＳＩ28Ａ堆積土上面から床面で確認した。本遺構の立地点は台地上部平坦面で、ほとんど傾斜がない。03-ＳＩ173と05-ＳＩ28Ａと重複し、本遺構の方が新しい。近接する02-ＳＩ24や03-178とも新旧関係が想定される。

本遺構は、本来は８個の柱穴により構成される１間×３間の建物跡と考えられる。そのうち２個は、05-ＳＩ28Ａ堆積土中にかかるため確認できなかったが、Ｐ１～４は規模がほぼ同じ柱穴が等間隔に並び、Ｐ３・４に相対する位置にＰ５・６がほぼ同じ間隔で位置することから、掘立柱建物跡として捉えた。

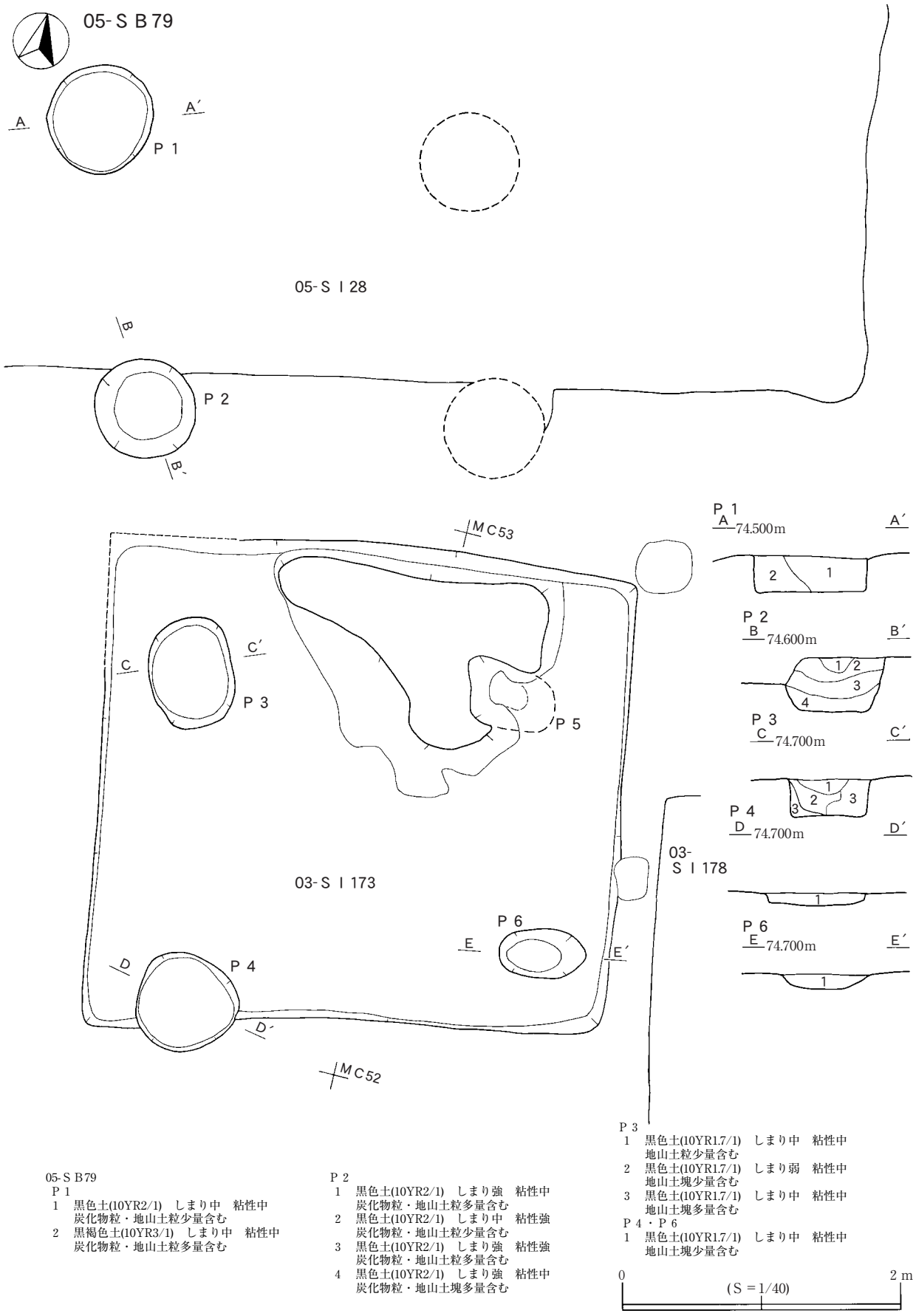
主軸方位は、Ｐ１・４の中心間を主軸線とした場合Ｎ－19°－Ｗになる。柱筋の残るＰ１～４の桁行き柱穴間は、Ｐ１－(約2.1m)－Ｐ２－(約2.0m)－Ｐ３－(約2.3m)－Ｐ４で、梁間はＰ４－(約2.7m)－Ｐ６である。

本遺構は１間×３間の側柱式の掘立柱建物と想定される。竪穴住居跡を掘り込んでいるため、比較的新しい段階の建物と考えられる。

遺　物　本遺構から遺物は出土しなかった。



第296図　01-S B 328・02-S B 01



05-ＳＢ79
Ｐ１
1　黒色土(10YR2/1)　しまり中　粘性中
　炭化物粒・地山土粒少量含む
2　黒褐色土(10YR3/1)　しまり中　粘性中
　炭化物粒・地山土粒多量含む

Ｐ２
1　黒色土(10YR2/1)　しまり強　粘性中
　炭化物粒・地山土粒多量含む
2　黒色土(10YR2/1)　しまり中　粘性強
　炭化物粒・地山土粒少量含む
3　黒色土(10YR2/1)　しまり強　粘性強
　炭化物粒・地山土粒多量含む
4　黒色土(10YR2/1)　しまり強　粘性中
　炭化物粒・地山土塊多量含む

Ｐ３
1　黒色土(10YR1.7/1)　しまり中　粘性中
　地山土粒少量含む
2　黒色土(10YR1.7/1)　しまり弱　粘性中
　地山土塊少量含む
3　黒色土(10YR1.7/1)　しまり中　粘性中
　地山土塊多量含む

Ｐ４・Ｐ６
1　黒色土(10YR1.7/1)　しまり中　粘性中
　地山土塊少量含む

第297図　05-ＳＢ79

（３） 製鉄遺構・製鉄炉

丘陵部中腹以下の斜面地で６か所の製鉄遺構と、14基の製鉄炉を検出した。製鉄炉は製鉄遺構を構成する一つの施設であり、製鉄遺構内部で複数存在することがある。この場合、明らかに時期差が認められるものもあれば、同時併存の可能性が高いものもあり一様ではない。

製鉄遺構は立地で大きく２分できる。一つは丘陵部下部斜面に相当する、比較的傾斜の急な斜面に構築するもので、05-ＳＳ17製鉄遺構、05-ＳＳ19・65製鉄遺構、05-ＳＳ30製鉄遺構、05-ＳＳ1001・1002・81製鉄遺構が相当する。一方丘陵部山麓緩斜面に立地する、05-ＳＳ10・11・12・14・77・80製鉄遺構、05-ＳＳ34製鉄遺構が別パターンとして存在する。両者各７基ずつの炉体であり、占地別の系統差を想起させる。施設の面で対比した場合、前者は下部作業場を明確に構築するのに対し、後者はこれを必ずしも伴わないことや、前者には炉が１基だけの作業場が多いのに対し、後者は同地点に連続的に炉を構成するという違いはみられるが、これらは地形の制約を受けるものであろう。なお、製鉄遺構が立地する丘陵部下部斜面以下では、作業場・炉体の構築に必要な粘土や砂の層が露頭する部分があり、その点で有利な立地なのは事実である。また、必要物資の一つである水も、山麓部では至る所で湧水がみられ、条件が整っている。この他燃料である木炭製造のための窯跡や、原料となる良質な砂鉄を含む地層は、この丘陵部では確認できなかった。

05-ＳＳ10・11・14・77製鉄遺構(第298図・299図、図版103・104)

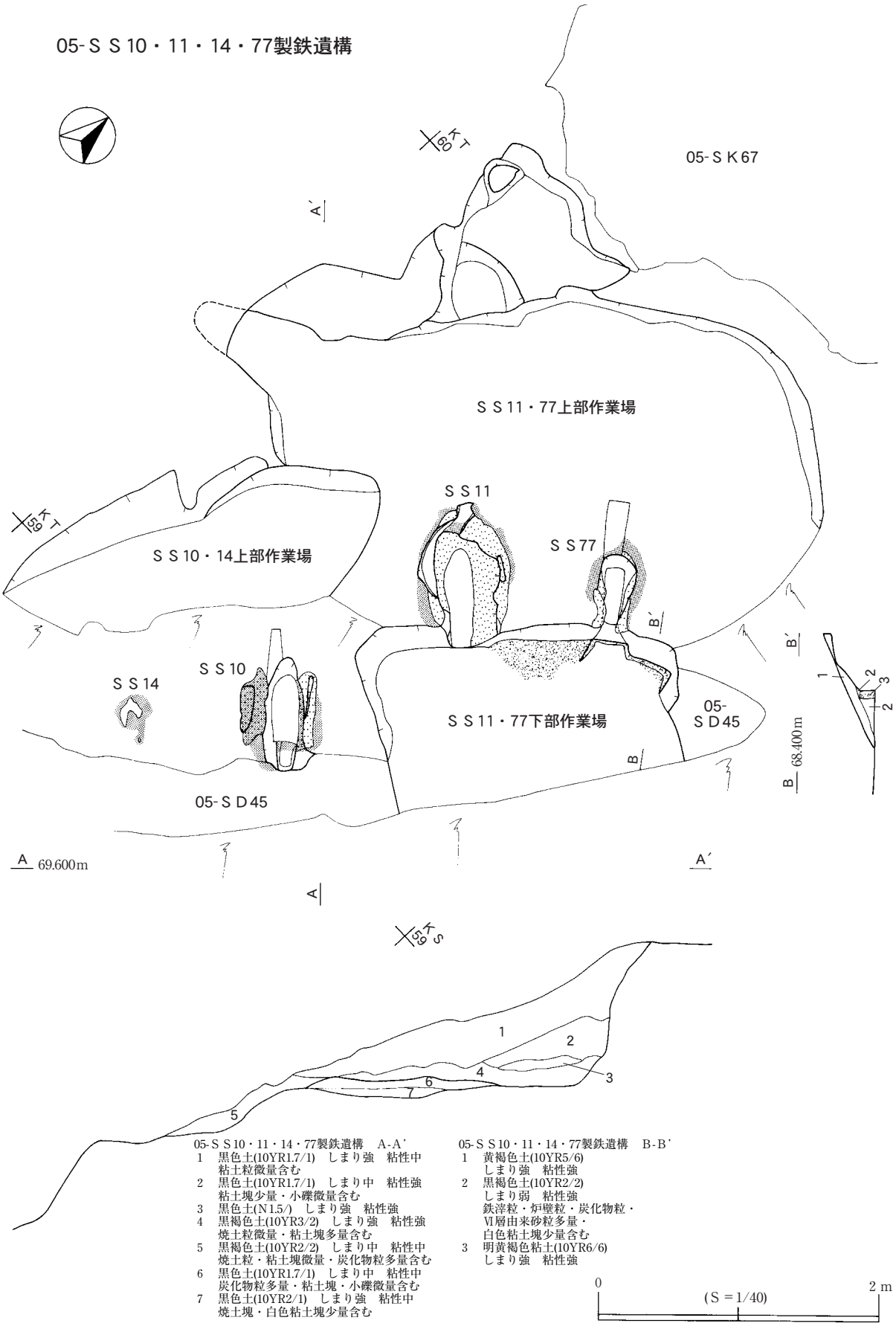
遺　構　ＫＲ59、ＫＳ58～60、ＫＴ59グリッドの砂質土主体の地山層で、黒褐色土の広がりで確認した。隣接する位置に05-ＳＫ67、05-ＳＤ45があり、これらが一体で施設を構成するとみられる。

本遺構は４基の製鉄炉と、05-ＳＳ11・77上部作業場、05-ＳＳ10・14上部作業場、05-ＳＳ11・77下部作業場で構成される。

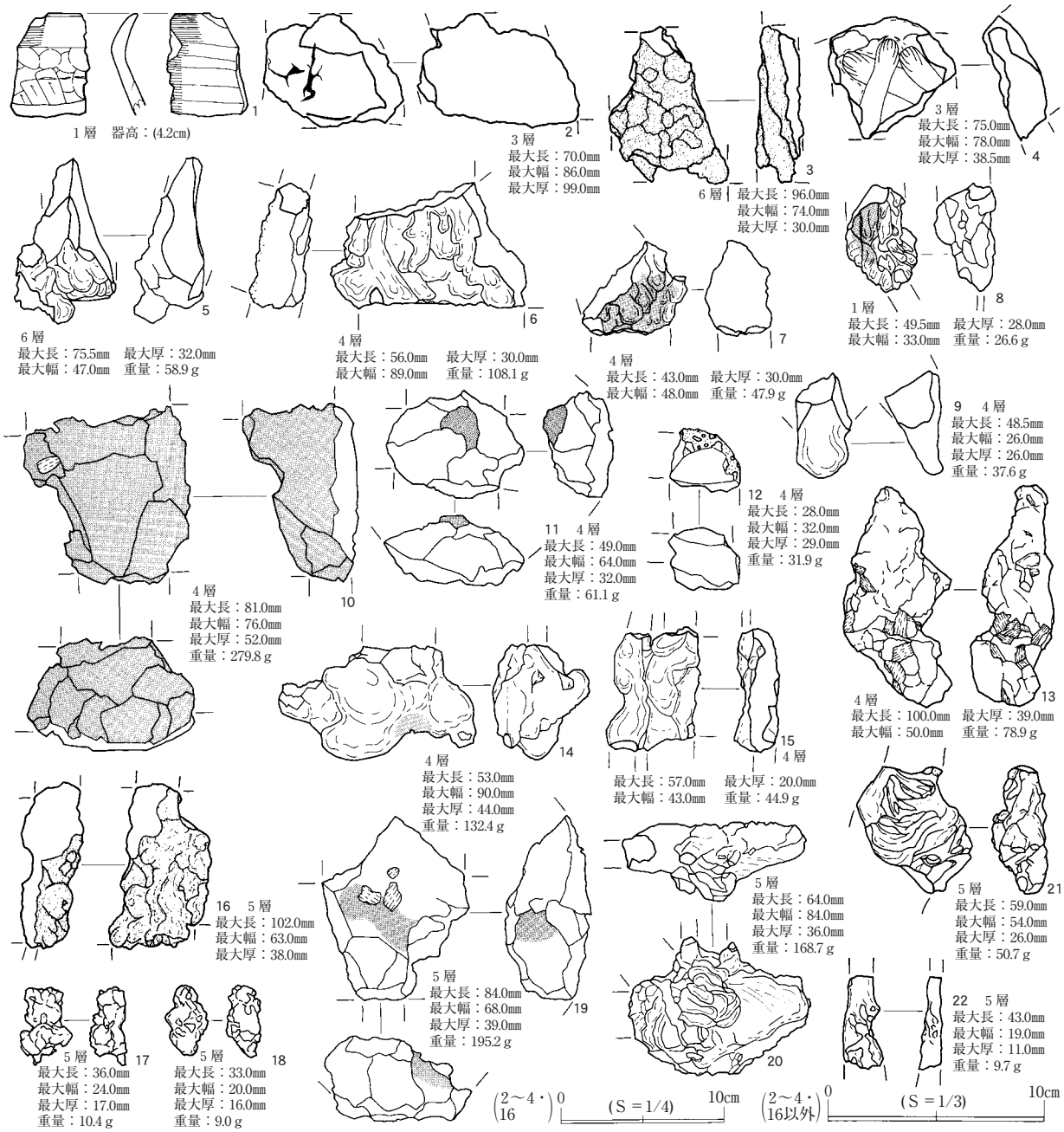
05-ＳＳ11・77上部作業場と、05-ＳＳ10・14上部作業場を跨ぐラインで観察した堆積土を、７層に分けた。１～５層は斜面上位からの堆積土で、本遺構の機能喪失後に堆積したとみられる。６・７層は上部作業場を平坦に整える整地層である。

05-ＳＳ11・77上部作業場は、北東－南西方向に長径をもつ楕円形の平場で、長径約3.8m、短径約2.3m、斜面上位側の壁上場と平場底面の比高約1.1mである。斜面上位側の壁面は不規則な形状で、当初は粘土・砂の採掘坑として掘削したところを利用した可能性が高い。05-ＳＳ10・14上部作業場は、北東－南西方向に延伸方向をもつ溝状の平場で、最大長約2.7m、幅約0.6～0.9m、斜面上位側の壁上場と平場底面の比高約0.6mである。一部05-ＳＳ11・77上部作業場にくい込み、05-ＳＳ10・14の炉体とはスロープでつながる。05-ＳＳ11・77下部作業場は長方形の平場で、長軸約2.2m、短軸約1.1～1.2m、上部作業場底面との比高約0.4mである。本来は05-ＳＳ80に伴う上部作業場の掘り込みで、05-ＳＳ80の炉体を埋め戻して平場にしている。なお、05-ＳＤ45が同一レベルで合流する。

本遺構は４基の製鉄炉と、鞴座となる２か所の上部作業場、排滓場となる１か所の下部作業場で構成される製鉄作業場である。本遺構への往来は、通路となる05-ＳＤ45がある。斜面上位には05-ＳＩ03・05・36が、ほぼ同レベルの北東側緩斜面には05-ＳＩ70・73があり、本遺構の関連工人の住まいとみられる。これらをセットでみた場合、05-ＳＳ34排滓場が05-ＳＩ70・73を覆う状況から、工人の住まいが斜面上位に移った可能性が高いが、製鉄作業場は大きな地点変更が無かったと考えられる。



第298図　05-ＳＳ10・11・14・77製鉄遺構



第299図　05-ＳＳ10・11・14・77製鉄遺構出土遺物

遺　物(第299図)　上部・下部作業場から土師器甕、炉壁、鉄滓が出土している。鉄関連遺物の総量は約10.4kgで、その内訳は炉壁3078ｇ、鉄滓7300ｇである。鉄滓では炉底塊(小割含む)、流動滓、単位流動滓が多く出土している。

299図１～９は05-ＳＳ10・14上部作業場出土遺物である。１は土師器甕の口縁部破片で、口縁部が外反し、外面縦位ケズリ、内面横位ヘラナデ調整である。２～４は炉壁で、２は内面に薄く鉄滓が付いており、被熱によるヒビ割れが認められ、３は内面全体に流動滓状の鉄滓が付着する。４は炉体上部の破片とみられ、被熱痕跡は比較的弱く、ユビナデが認められる。５・６は炉内滓とみられ、炉壁に付着した発砲部を多く含むため比較的比重が軽い。７～９は流動滓で、７・８は鉄錆が付着する範囲があり、意図的に割った可能性がある。

299図10～15は、05-ＳＳ11・77上部作業場出土遺物である。10～12は炉底塊の小割滓である。10は

設置面上部の割れ口全面に、11は上面にのみ鉄錆が認められる。12は鉄分を含まない範囲の破片である。13～15は流動滓である。13は木炭の付着痕が認められる。14は下流部末端に鉄分が溜まっている。

299図16～22は、05-ＳＳ11・77下部作業場出土遺物である。16は内面に流動滓状の鉄滓が付着する炉壁である。19は炉底塊の小割滓で、上面に鉄分の残存と木炭の付着が認められる。17・18は鉄塊系の遺物で、わずかに流れた痕跡がある。20・21は流動滓で、20は落差のある場所の下部に溜まった形状を示す。22は単位流動滓である。

05-ＳＳ10製鉄炉(第300図・301図、図版105)

遺　構　05-ＳＳ10・14上部作業場下部スロープ上の、やや北東寄りの位置にある。堆積土・炉壁・整地層を全部で11層に分けた。11層は炉底面に敷いた砂で、その上部に８・９層の炉壁となる粘土を貼っている。炉壁と掘形壁面の間には10層の砂を込めている。３・５層も10層と同様な砂を敷いており、操業を重ねる中で作業面が上部に移動した可能性がある。この場合、４・６層は作業面をかさ上げするための造成土と考えられる。１・２層は炉壁と流入土の混合層で、廃絶後の堆積土である。

炉体形状は斜面に直交する方向に長い長楕円形である。掘形底面の奥壁から開口部までの長さは約0.7ｍ、幅は約0.2ｍで、地山に被熱が及ぶことなどから、設置初期には炉体下部に特別な整地は施さず、地山の砂層を活かして作業を行ったとみられる。

本炉跡は地山上面に砂を敷いて炉底面とし、壁に炉壁となる粘土を貼り付けて構築した製鉄炉である。堆積土の状況から見て、何度か底面をかさ上げしていることが分かる。本炉跡で発生した排材や排滓は、炉跡前面の05-ＳＳ10・14排滓場に投棄したと考えられる。

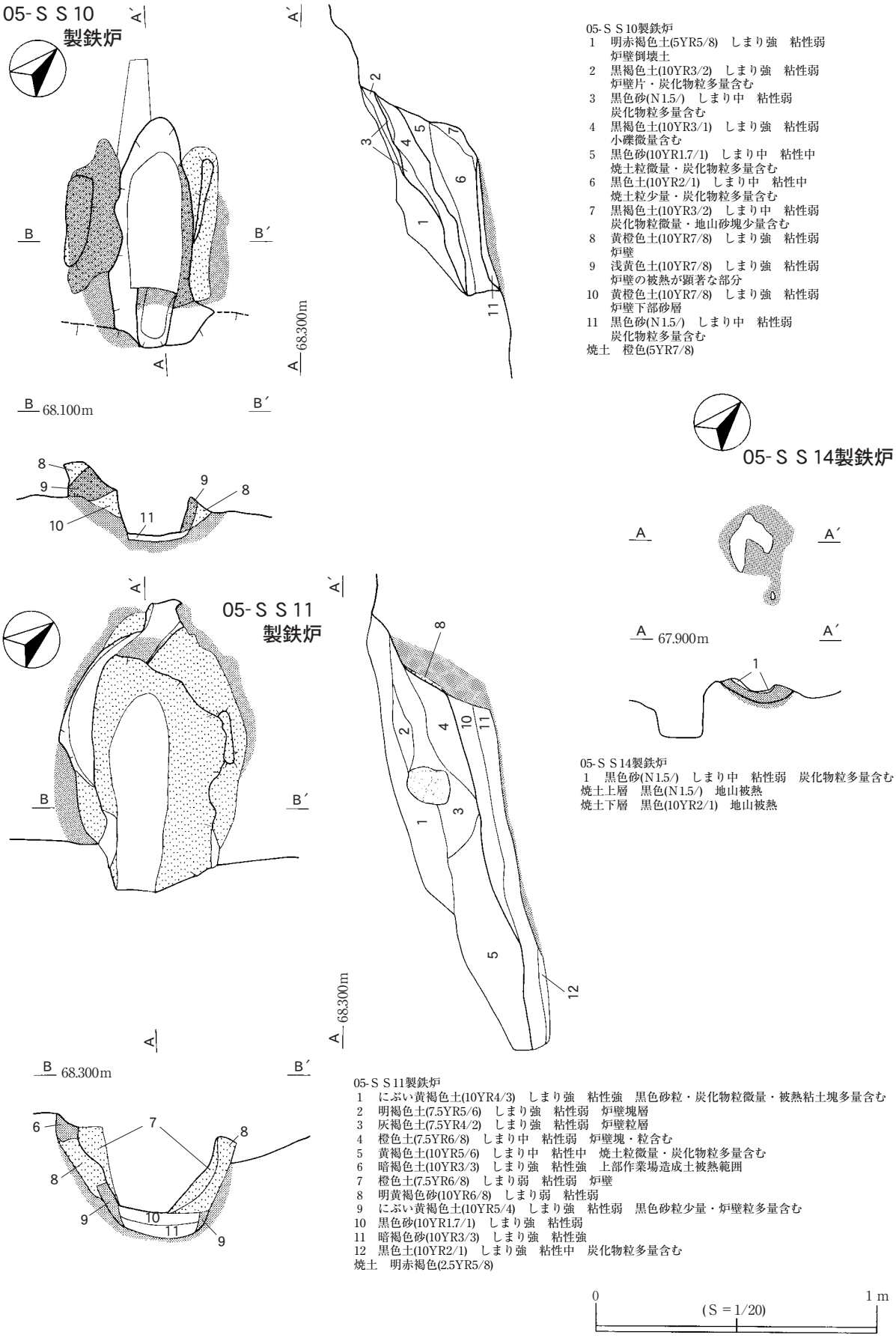
遺　物(第301図)　炉内部から炉壁・鉄滓が出土している。総量は約4.0kgで、その内訳は炉壁2485ｇ、鉄滓1490ｇである。炉壁を構成する粘土は、スサ等の混入物が比較的少ない。鉄滓は、炉底塊(小割滓含む)、流動滓が多く出土している。

301図１～７は炉壁である。１～４は比較的混入物の少ない胎土を用いており、これに対し５～７は比較的スサの混入率が高い。１・２は表面に薄く鉄滓が付着しており、炉壁本体には被熱によるヒビ割れが認められる。３は鉄滓が厚く付着しており、５～７も同様に内面に鉄滓が付着する。８・11は炉内滓で、８はプラスチック状の質感で、炉壁上面に付着したものとみられる。９・10は炉底塊の小割滓で、どちらも半円形状で鉄分の付着が認められず、試し割り後に廃棄したものとみられる。９は上面に木炭の痕跡がある。12・13は単位流動滓である。

05-ＳＳ11製鉄炉(第300図・302図、図版106)

遺　構　05-ＳＳ11・77上部作業場の、中央からやや南西寄りの位置にある。堆積土・炉壁・整地層を全部で12層に分けた。10～12層は炉底面や壁面下部に敷いた砂または土で、その上部に７層の炉壁となる粘土を貼っている。炉壁と掘形壁面の間には８層の砂を込めている。４・５層は炉壁粒や鉄滓を多く含む土で上部の２・３層がほぼ純粋な倒壊炉壁層であることから、これらは炉廃絶時に炉穴を埋め立てた堆積物である。１層はその上部に溜まった外部からの流入土とみられる。

炉体形状は斜面に直交する方向に長い長楕円形である。掘形底面の奥壁から開口部までの長さは約0.7ｍ、幅は約0.2ｍで、地山に被熱が及ぶことなどから、炉体底面に砂を敷くが、これ以外に特別な



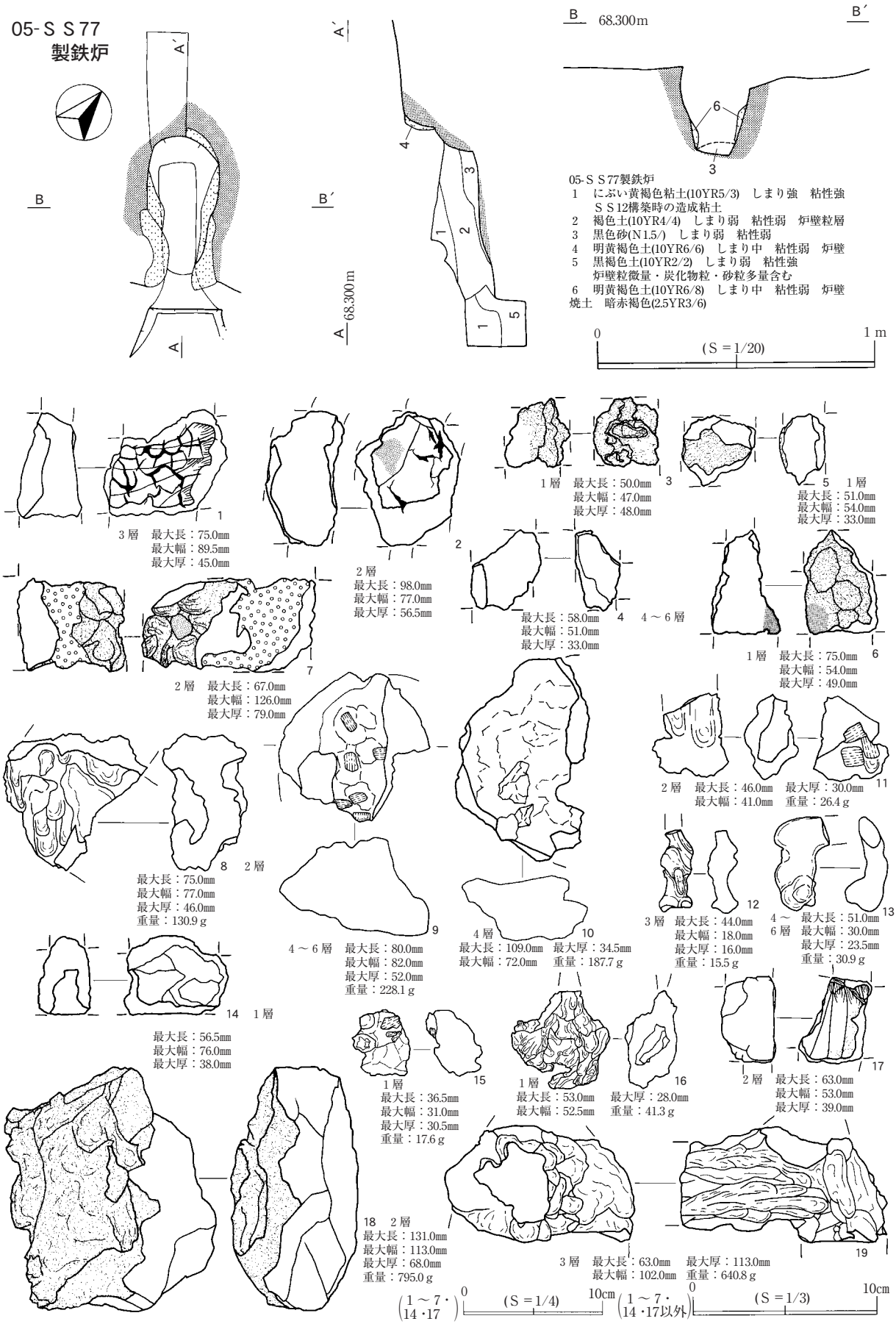
05-ＳＳ10製鉄炉
1　明赤褐色土(5YR5/8)　しまり強　粘性弱
　炉壁倒壊土
2　黒褐色土(10YR3/2)　しまり強　粘性弱
　炉壁片・炭化物粒多量含む
3　黒色砂(N1.5/)　しまり中　粘性弱
　炭化物粒多量含む
4　黒褐色土(10YR3/1)　しまり強　粘性弱
　小礫微量含む
5　黒色砂(10YR1.7/1)　しまり中　粘性中
　焼土粒微量・炭化物粒多量含む
6　黒色土(10YR2/1)　しまり中　粘性中
　焼土粒少量・炭化物粒多量含む
7　黒褐色土(10YR3/2)　しまり中　粘性弱
　炭化物粒微量・地山砂塊少量含む
8　黄橙色土(10YR7/8)　しまり強　粘性弱
　炉壁
9　浅黄色土(10YR7/8)　しまり強　粘性弱
　炉壁の被熱が顕著な部分
10　黄橙色土(10YR7/8)　しまり強　粘性弱
　炉壁下部砂層
11　黒色砂(N1.5/)　しまり中　粘性弱
　炭化物粒多量含む
焼土　橙色(5YR7/8)

05-ＳＳ14製鉄炉
1　黒色砂(N1.5/)　しまり中　粘性弱　炭化物粒多量含む
焼土上層　黒色(N1.5/)　地山被熱
焼土下層　黒色(10YR2/1)　地山被熱

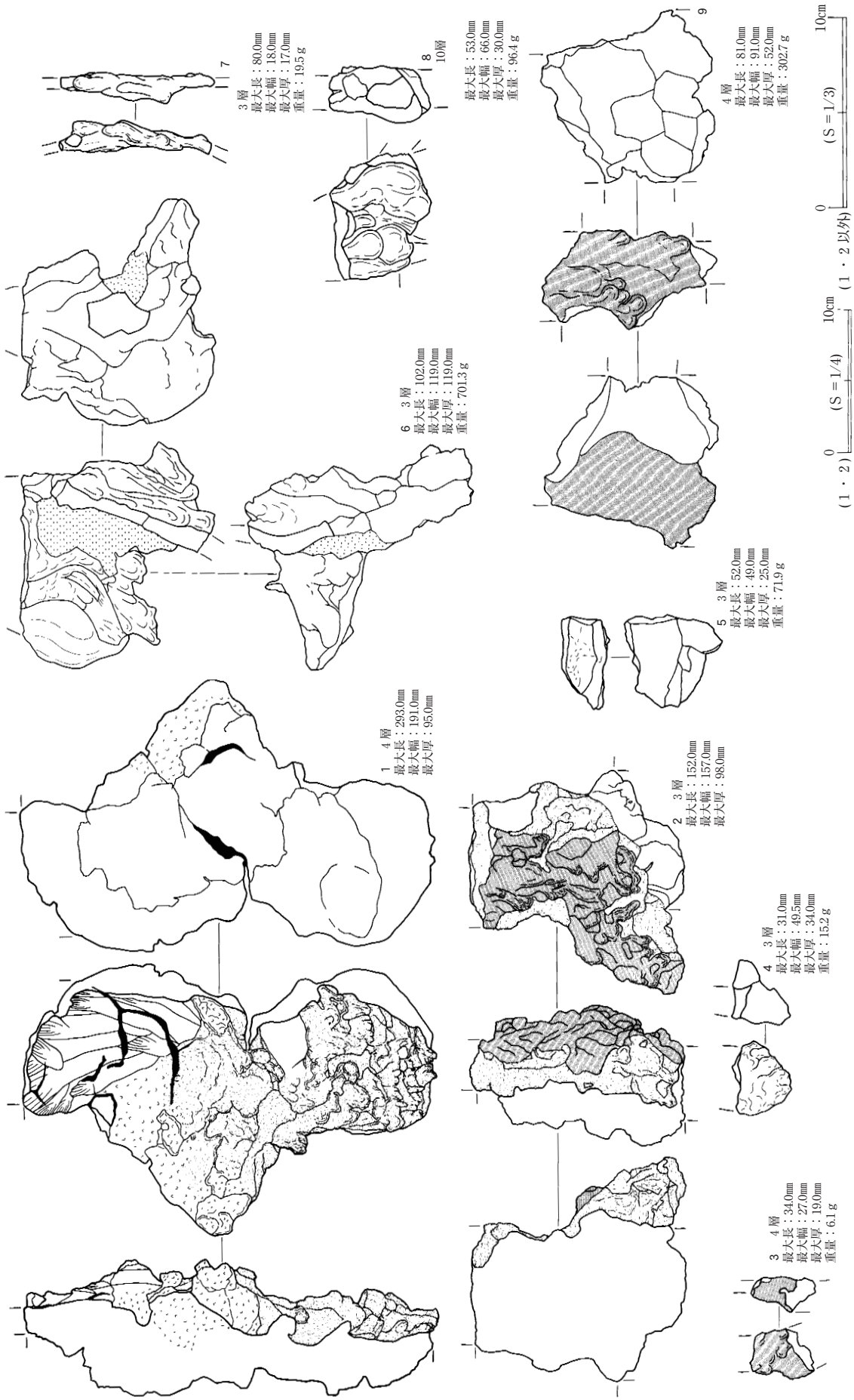
05-ＳＳ11製鉄炉
1　にぶい黄褐色土(10YR4/3)　しまり強　粘性強　黒色砂粒・炭化物粒微量・被熱粘土塊多量含む
2　明褐色土(7.5YR5/6)　しまり強　粘性弱　炉壁塊層
3　灰褐色土(7.5YR4/2)　しまり強　粘性弱　炉壁粒層
4　橙色土(7.5YR6/8)　しまり中　粘性弱　炉壁塊・粒含む
5　黄褐色土(10YR5/6)　しまり中　粘性中　焼土粒微量・炭化物粒多量含む
6　暗褐色土(10YR3/3)　しまり強　粘性強　上部作業場造成土被熱範囲
7　橙色土(7.5YR6/8)　しまり弱　粘性弱　炉壁
8　明黄褐色砂(10YR6/8)　しまり弱　粘性弱
9　にぶい黄褐色土(10YR5/4)　しまり強　粘性弱　黒色砂粒少量・炉壁粒多量含む
10　黒色砂(10YR1.7/1)　しまり強　粘性弱
11　暗褐色砂(10YR3/3)　しまり強　粘性強
12　黒色土(10YR2/1)　しまり強　粘性中　炭化物粒多量含む
焼土　明赤褐色(2.5YR5/8)

0　1m
(S＝1/20)

第300図　05-ＳＳ10・11・14製鉄炉



第301図　05-S S77製鉄炉　05-S S10・14・77炉内出土遺物



第302図　05-ＳＳ11炉内出土遺物

整地は施さずに、地山の砂層を活かして作業を行ったとみられる。なお、上部作業場側の上場には、幅0.15ｍの細い溝がある。他の製鉄炉の形状からみて、羽口装着孔の痕跡と考えられる。

本炉跡は地山上面に砂を敷いて炉底面とし、壁に炉壁となる粘土を貼り付けて構築した製鉄炉である。堆積土の状況では底面の砂を敷き直しており、複数回の操業を想起させる。本炉跡で発生した排材や排滓は、炉跡前面の05-ＳＳ11・12・77排滓場に投棄したと考えられる。

遺　物(第302図)　炉内部から炉壁・鉄滓が出土している。総量は約25.7kgで、その内訳は炉壁22022ｇ、鉄滓3721ｇである。炉壁を構成する粘土は、スサを多く含んでいるため崩落が著しい。鉄滓は鉄塊系遺物と流動滓が多く、炉底塊は少ない。

302図１・２は炉壁で、どちらも胎土に多くのスサを含む。１は内面がカーブしており排出孔に近い部分とみられる。下半部に鉄滓の付着が集中し、上部にはユビナデが確認できる。302図３・４は炉内滓で、どちらもプラスチック状の質感である。炉壁または羽口先端に付着したものの破片と考えられる。302図５は炉底塊の小割滓である。302図６～８は流動滓である。６は間に炉壁片を挟んで、上下に二筋の流れが重なる。７は単位流動滓である。302図９は鉄塊系遺物である。小割面と上面のわずかな流れ筋からみて、炉底塊の可能性がある。

05-ＳＳ14製鉄炉(第300図・301図、図版108)

遺　構　05-ＳＳ10・14上部作業場下部スロープ上の、やや南西寄りの位置にある。上部に木の根があり、炉体上部はほとんど崩壊していた。

堆積土は１層のみ確認できた。１層は炉底に敷いた黒砂である。この下部には地山の被熱層のみが確認できる。掘形底面形状もほぼ失われているが、地山に被熱が及ぶことなどから、炉体底面に砂を敷くが、これ以外に特別な整地は施さず、地山の砂層を活かして作業を行ったと想定される。

本炉跡は地山上面に砂を敷いて炉底面とし、壁に炉壁となる粘土を貼って構築した製鉄炉と想定される。本炉跡で発生した排材や排滓は、炉跡前面の05-ＳＳ10・14排滓場に投棄したと考えられる。

遺　物(第301図)　炉内部から炉壁・鉄滓が出土している。上部が木根等の撹乱により崩壊しているため、内部出土遺物も少ない。総量は約0.3kgで、その内訳は炉壁183ｇ、鉄滓118ｇである。炉壁を構成する粘土は、スサ等の混入物が比較的少ない。

301図14～16が本炉跡出土遺物で、14は炉壁、15は炉内滓、16は流動滓である。

05-ＳＳ77製鉄炉(第301図、図版115)

遺　構　05-ＳＳ11・77上部作業場の、中央から北東寄りの位置にある。堆積土・炉壁・整地層を全部で６層に分けた。３層は炉底面に敷いた砂で、その上部に４・６層の炉壁となる粘土を貼る。５層は炉の排出孔前面を整地する土で、１・２層は05-ＳＳ12構築時に本炉跡を埋め立てた造成土である。

炉体形状は斜面に直交する方向に長い長楕円形である。掘形底面の奥壁から開口部までの長さは約0.4ｍ、幅は約0.15ｍで、地山に被熱が及ぶことなどから、炉体下部に特別な整地は施さず、地山の砂層を活かして作業を行ったとみられる。

本炉跡は地山上面に砂を敷いて炉底面とし、壁に炉壁となる粘土を貼り付けて構築した製鉄炉である。本炉跡で発生した排材や排滓は、炉跡前面の05-ＳＳ11・12・77排滓場に投棄したと考えられる。

遺　物(第301図)　炉内部から炉壁・鉄滓が出土している。総量は約1.7kgで、その内訳は炉壁1212ｇ、鉄滓529ｇである。炉壁を構成する粘土は、スサ等の混入物が比較的少ない。鉄塊系遺物と流動滓のみが認められる。流動滓は明らかに炉外のものが認められることから、廃棄時の埋め戻しに伴う遺物と考えられる。

301図17は炉壁で、スサの混入が少なくヒビ割れが認められる。301図18・19は流動滓で、19は滝のように落差のある斜位の流れ筋をとどめる。18は石を取り込んでいる。いずれも炉外のものと考えられる。

05-ＳＳ12製鉄遺構(第303図、図版103・104・107)

遺　構　本遺構は05-ＳＳ77上部に炉体を構成する05-ＳＳ12製鉄炉を主体として、上部作業場と下部作業場で構成される遺構である。炉体の順番では05-ＳＳ77から05-ＳＳ12の変遷を追えるが、05-ＳＳ11との新旧関係は不明である。併存している可能性も高いが、上部・下部作業場に専用の粘土を貼って作業面を新規に構築するという特徴があるので、単独で図示した。上部・下部作業場の諸特徴は、05-ＳＳ11・77上部作業場、05-ＳＳ11・77下部作業場と基本的に同じである。

本遺構は、計６基の製鉄炉が存在する05-ＳＳ10・11・12・14・77・80の中で、明らかに最新段階に属する遺構である。先の関連工人の住まいとみられる住居跡とのセット関係は、斜面上位に位置する05-ＳＩ03・05・36が対象になると考えられる。

遺　物　本遺構に伴う遺物は、05-ＳＳ10・11・14・77製鉄遺構とほぼ共有すると考えられる。

05-ＳＳ12製鉄炉(第303図・304図、図版107)

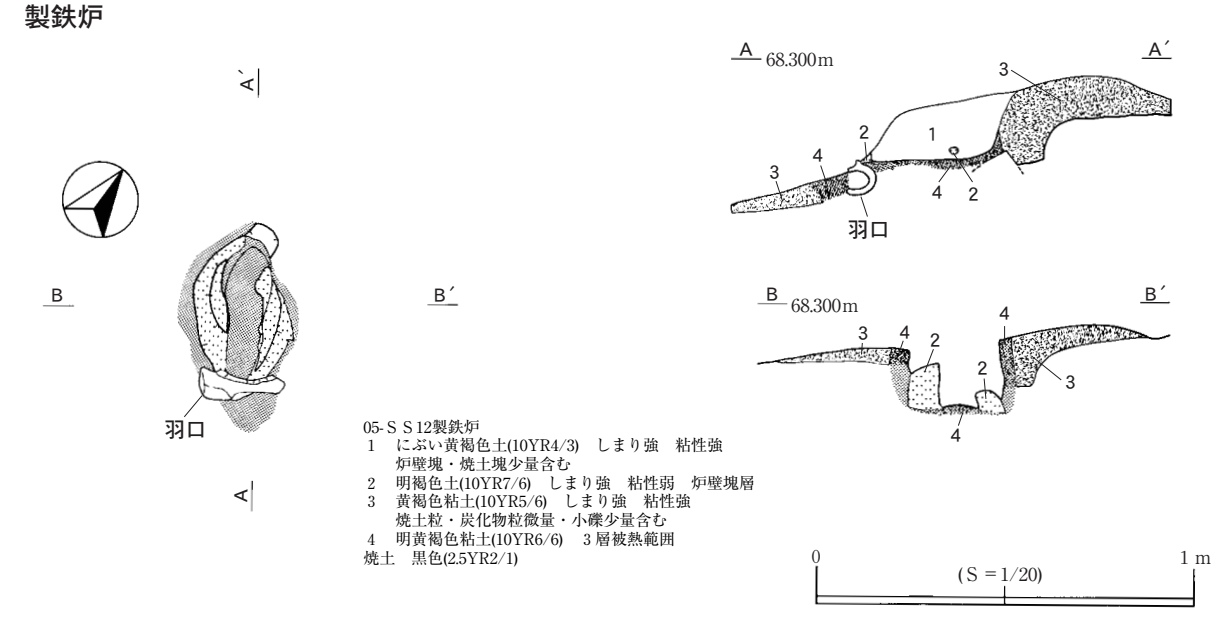
遺　構　上部作業場の、中央からやや北東寄りの位置で、05-ＳＳ77製鉄炉上部を整地して構築している。堆積土・炉壁・整地層を全部で４層に分けた。３層は炉底面や壁面下部に敷いた粘土質の土で、４層はその被熱範囲である。この内部に２層の炉壁となる粘土を盛っているが、炉壁は崩落箇所が多い。１層はその上部に溜まった外部からの流入土とみられる。

炉体形状は斜面に直交する方向に長い長楕円形である。炉底面の奥壁から開口部までの長さは約0.35ｍ、幅は約0.1ｍで、炉体周辺の上部作業場から炉体外部にかけての構築粘土と地山に被熱が認められる。炉体下部には砂を敷いており、排出孔下部は羽口を再利用して炉底を造っている。

本炉跡は05-ＳＳ77上部に砂や羽口を敷いて炉底面とし、壁に炉壁となる粘土を貼って構築した製鉄炉である。本炉跡で発生した排材や排滓は、炉跡前面の05-ＳＳ11・12・77排滓場に投棄したと考えられる。

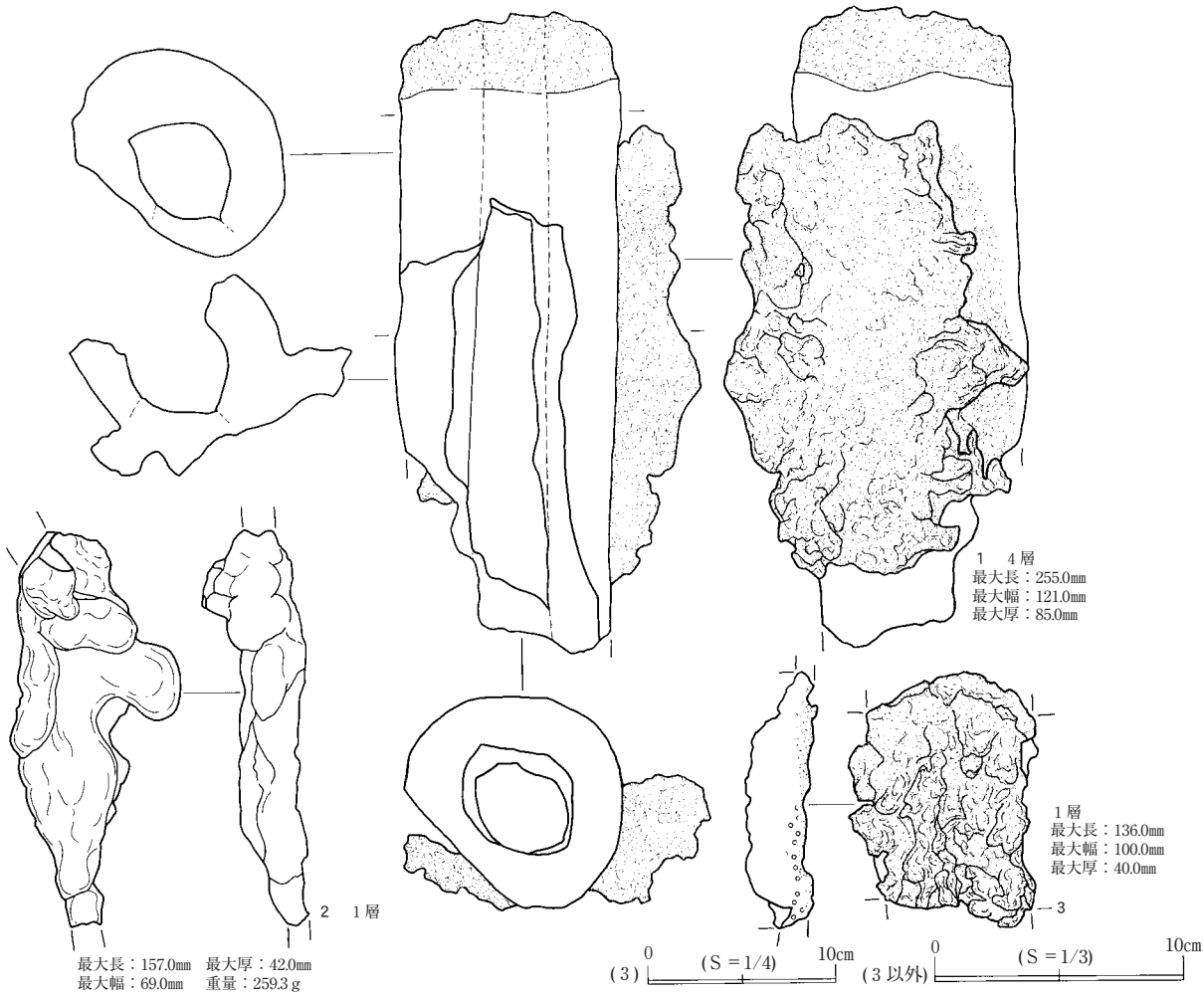
遺　物(第304図)　炉内部から炉壁・鉄滓・羽口が出土している。総量は約6.7kgで、その内訳は炉壁3568ｇ、鉄滓2044ｇ、羽口1087ｇである。炉壁を構成する粘土はスサを多く含んでおり崩落が著しい。鉄滓はほとんど流動滓のみである。

304図３は炉壁で、下部に流れる鉄滓が厚く付着しており、炉体内面との間は発泡している。304図２は流動滓で、下流部末端部にかけて細くなる。304図１は羽口で、05-ＳＳ77造成面上部に設置した、排出孔側基部の構造材として転用したもので、側面に流動滓状の鉄滓の付着が認められる。なお、被熱により変形している。



05-ＳＳ12製鉄炉
1　にぶい黄褐色土(10YR4/3)　しまり強　粘性強
　炉壁塊・焼土塊少量含む
2　明褐色土(10YR7/6)　しまり強　粘性弱　炉壁塊層
3　黄褐色粘土(10YR5/6)　しまり強　粘性強
　焼土粒・炭化物粒微量・小礫少量含む
4　明黄褐色粘土(10YR6/6)　３層被熱範囲
焼土　黒色(2.5YR2/1)

第303図　05-ＳＳ12製鉄遺構・製鉄炉



第304図　05-ＳＳ12炉内出土遺物

05-ＳＳ80製鉄遺構(第305図、図版103・104・116)

遺　構　05-ＳＳ11・12・77下部作業場で、埋め戻された状態で確認した。05-ＳＳ11・12・77・80の４基の炉体では明らかに最古段階の炉である。本遺構は１基の炉体と上部作業場で構成される。上部作業場の諸特徴は05-ＳＳ11・77下部作業場の内容に準じる。

本遺構は、計６基の製鉄炉が存在する05-ＳＳ10・11・12・14・77・80の中で、最古段階に属する可能性が高い。先の関連工人の住まいとみられる住居跡とのセット関係は、ほぼ同レベルの北東側緩斜面の05-ＳＩ70・73が対象になると考えられる。

遺　物　本遺構に伴う遺物は、05-ＳＳ10・11・12・14・77製鉄遺構以前のものであり、前面の排滓場に投棄したと考えられる。

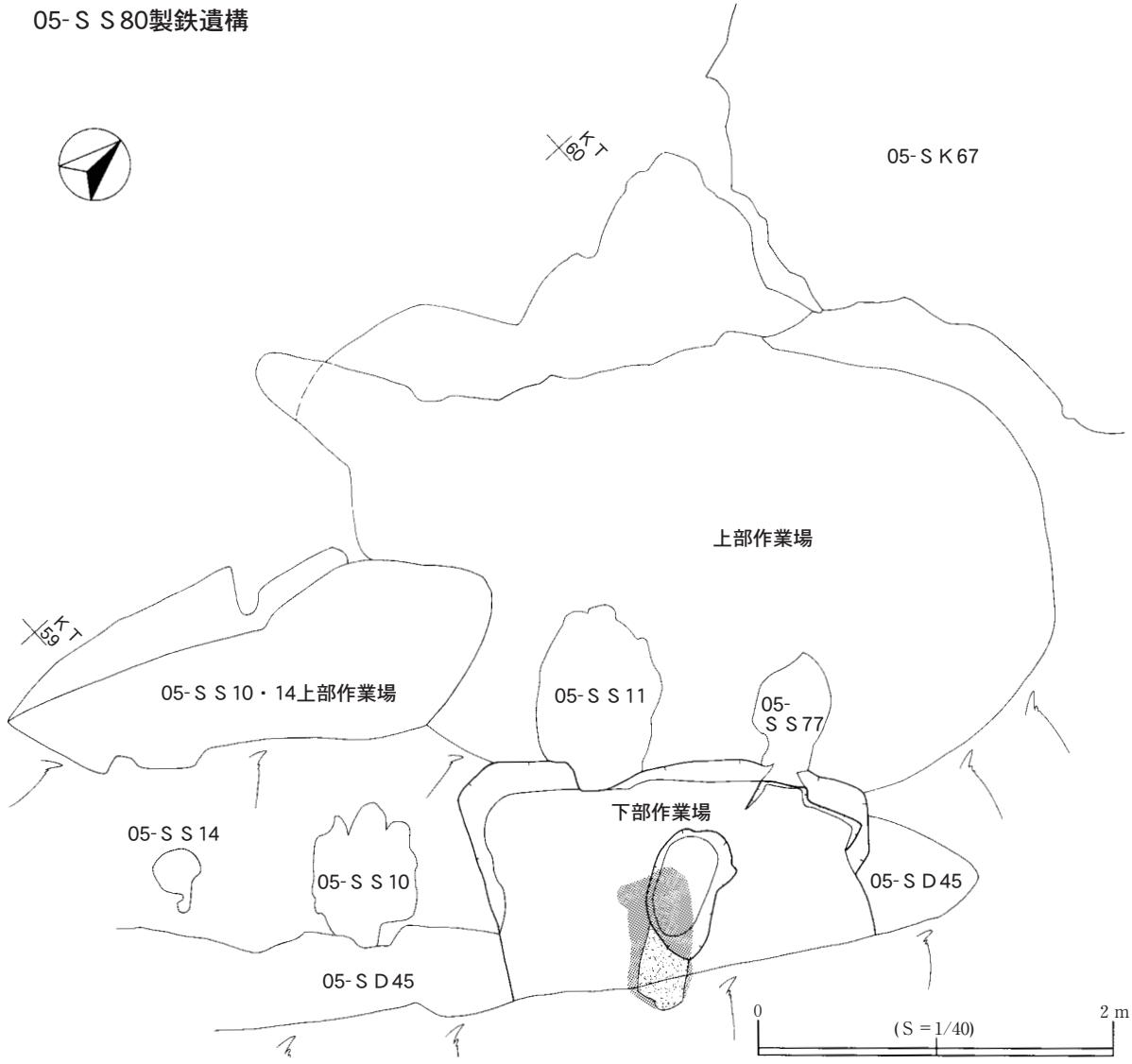
05-ＳＳ80製鉄炉(第305図、図版116)

遺　構　05-ＳＳ80上部作業場下部のほぼ中央に位置する。

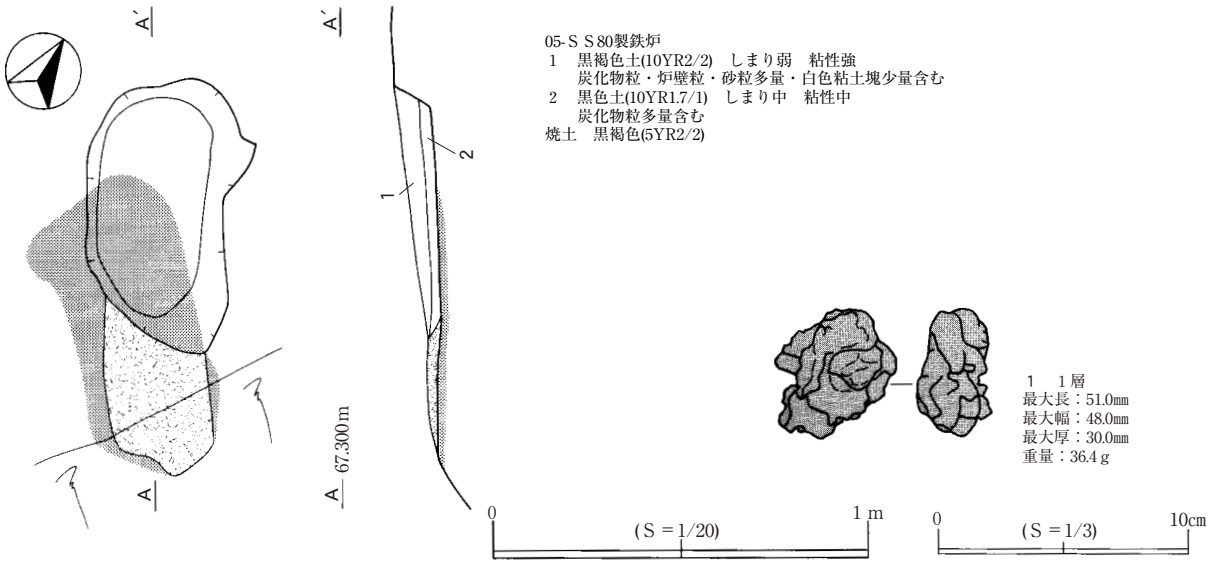
炉体形状は斜面に直交する方向に長い長楕円形である。炉底面の奥壁から開口部までの長さは約0.95ｍ、幅は0.25～0.3ｍで、排出孔側の炉底面から壁部にかけての地山に被熱が認められる。炉底面の排出孔側約0.3ｍの底面には鉄滓が付着している。

本炉跡は地山上面に砂を敷いて炉底面とし、壁に炉壁となる粘土を貼り付けて構築した製鉄炉であ

05-ＳＳ80製鉄遺構



製鉄炉



第305図　05-ＳＳ80製鉄遺構・製鉄炉・炉内出土遺物

る。本炉跡で発生した排材や排滓は、炉跡前面の05-ＳＳ11・12・77排滓場に投棄したと考えられる。05-ＳＳ11・12構築に合わせて廃絶し、05-ＳＳ11・12下部作業場構築のため、上部を削平して埋め立てたと考えられる。

遺　物(第305図)　炉内部から炉壁・鉄滓が出土している。総量は約0.6kgで、その内訳は炉壁78ｇ、鉄滓483ｇである。05-ＳＳ11・12・77構築段階で上部を削平しているため、炉内遺物や、炉体の炉壁も少ない。305図１は鉄塊系遺物である。

05-ＳＳ17製鉄遺構(第306図・307図、図版109・159)

遺　構　ＬＤ55、ＬＥ55・56グリッドの砂質土主体の地山層で、黒褐色土の広がりで確認した。本遺構は１基の製鉄炉と、上部作業場、下部作業場で構成される。下部作業場の下には階段状遺構の05-ＳＸ72がある。

炉体を通るラインで観察した堆積土と炉体構築土及び堆積土を併せて、17層に分けた。そのうち、１～８、16・17層が作業場に関わる堆積土である。16層は下部作業場の作業面上に貼った粘土で、下部の17層はおそらく基本土層の一部が残存すると考えられる。１～８層は上部作業場に堆積する概ね黒色基調の土で、炉体を覆うように堆積しており、本遺構の機能喪失後に堆積したとみられる。

上部作業場は、上位と下位に分かれる。上位は北東－南西方向に延伸方向をもつ溝状の平場で、最大長約2.5m、幅約0.5m、斜面上位側の壁上場と平場底面の比高約0.2mである。北東部の底面には炭化物の集中範囲がある。下位は北東－南西方向に長径をもつ不整な楕円形の平場で、長径約3.2m、短径約1.5m、斜面上位側の壁上場と平場底面の比高約0.6mである。

下部作業場は長方形の平場で、長軸約2.3m、短軸約0.8m、上部作業場底面との比高約0.7mである。おそらく旧地表面をわずかに整形して平に仕上げ、粘性の強い土で造成している。なお、上部作業場下位面と下部作業場の間で、炉体南西脇の位置にはステップが付く。

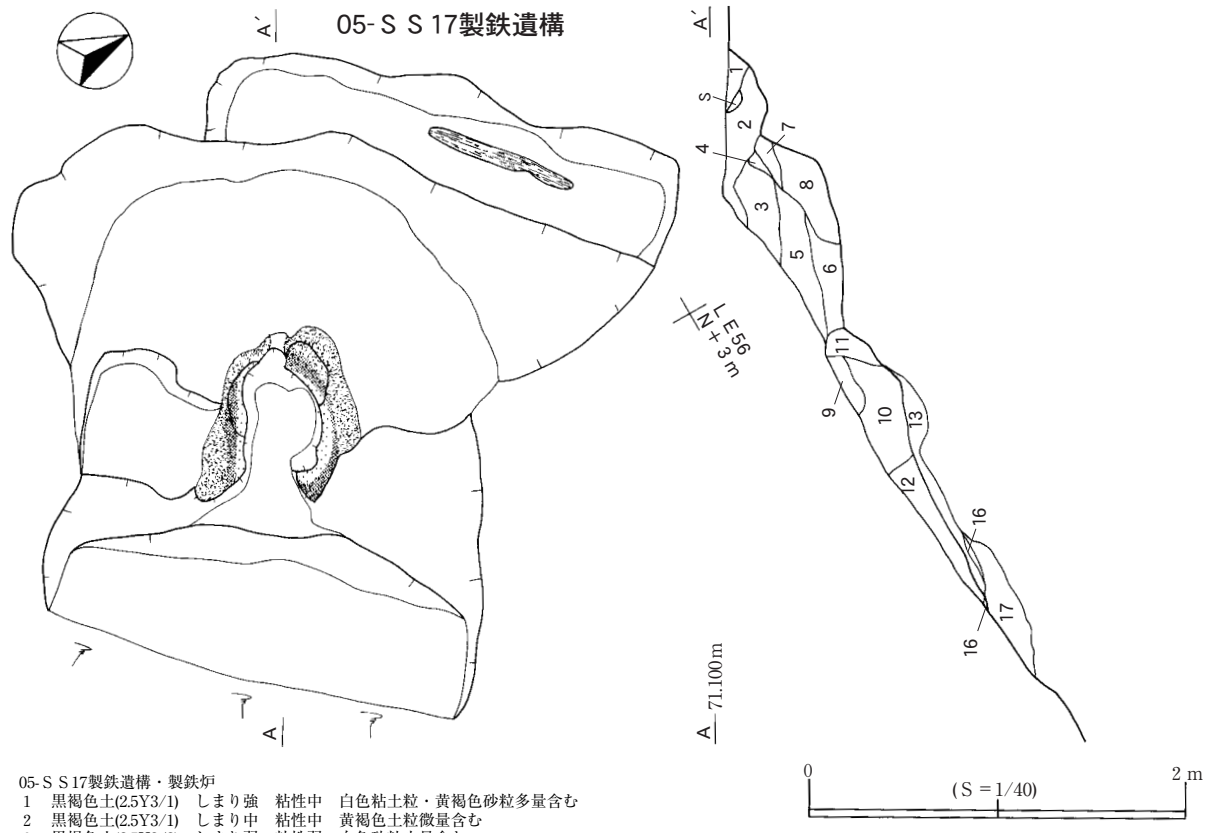
本遺構は１基の製鉄炉と、鞴座となる上部作業場、排滓場となる下部作業場で構成される一連の製鉄作業場である。本遺構への往来は、05-ＳＤ45から05-ＳＸ72を上るルートと、05-ＳＸ47から斜面伝いに入るルートがあるが、いずれも急斜面を上る必要がある。

本遺構下部の山麓部を挟むように、05-ＳＩ59・74が位置することから、これらは本遺構の関連工人の住まいである可能性が高い。

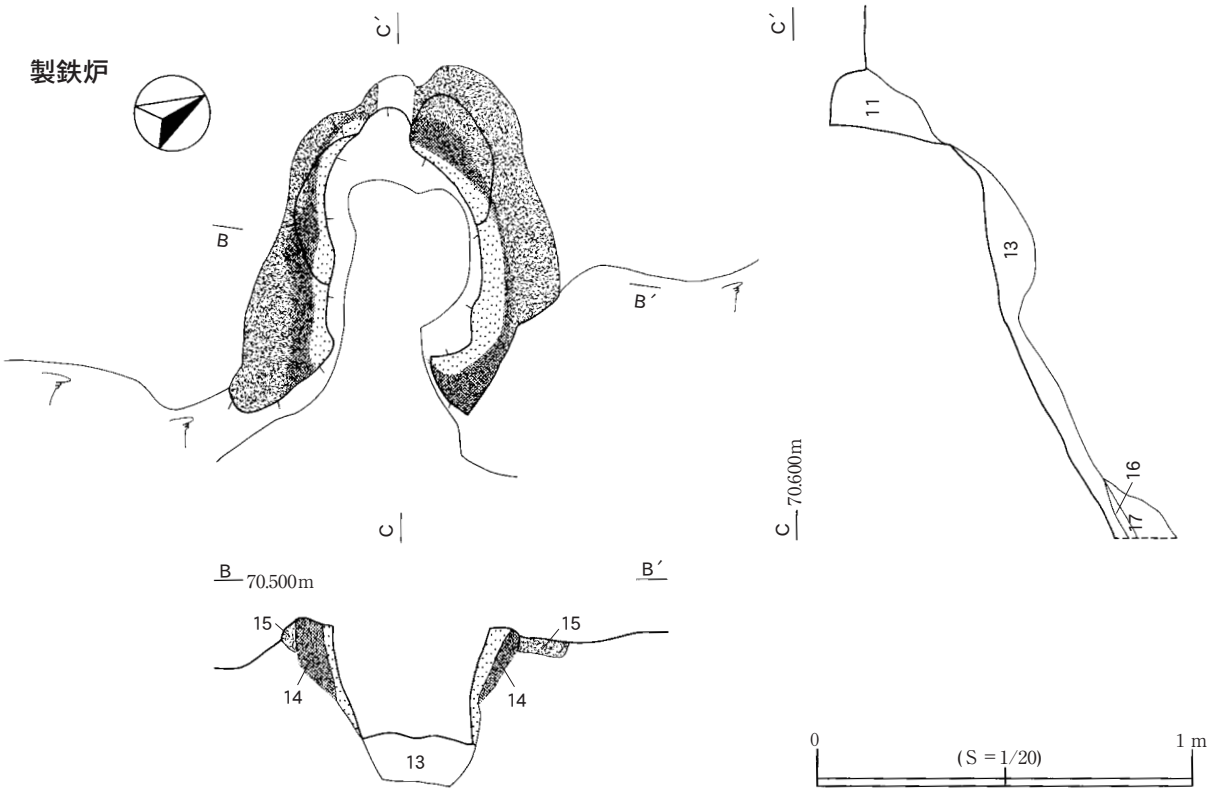
遺　物(第307図)　上部・下部作業場から土師器甕・坏、炉壁・鉄滓が出土している。鉄関連遺物の総量は約1.6kgで、その内訳は炉壁1158ｇ、鉄滓472ｇである。出土遺物は鉄塊系遺物や流動滓が多く、流動滓でも磁着が認められる。本遺構の作業場は狭く、小割作業で発生した残滓はほとんど斜面下に捨てたとみられる。

307図１は土師器甕の小破片で、直立気味の口縁部付近に、内外面ともユビナデ調整が認められる。307図２・３は土師器坏Ａ類である。２は約1/4が残存する資料で、底部が張り出すため段状になり、胴部は直線的に外傾し、口縁部付近でわずかに屈曲して角度を変え、口縁部も直線的に外傾する器形である。口唇は先細り状になる。内外面とも風化が著しいが、底部にはわずかに回転糸切痕が認められる。内外面共にロクロ目の凹凸は少ない。３は直線的に外傾する口縁部の小破片である。

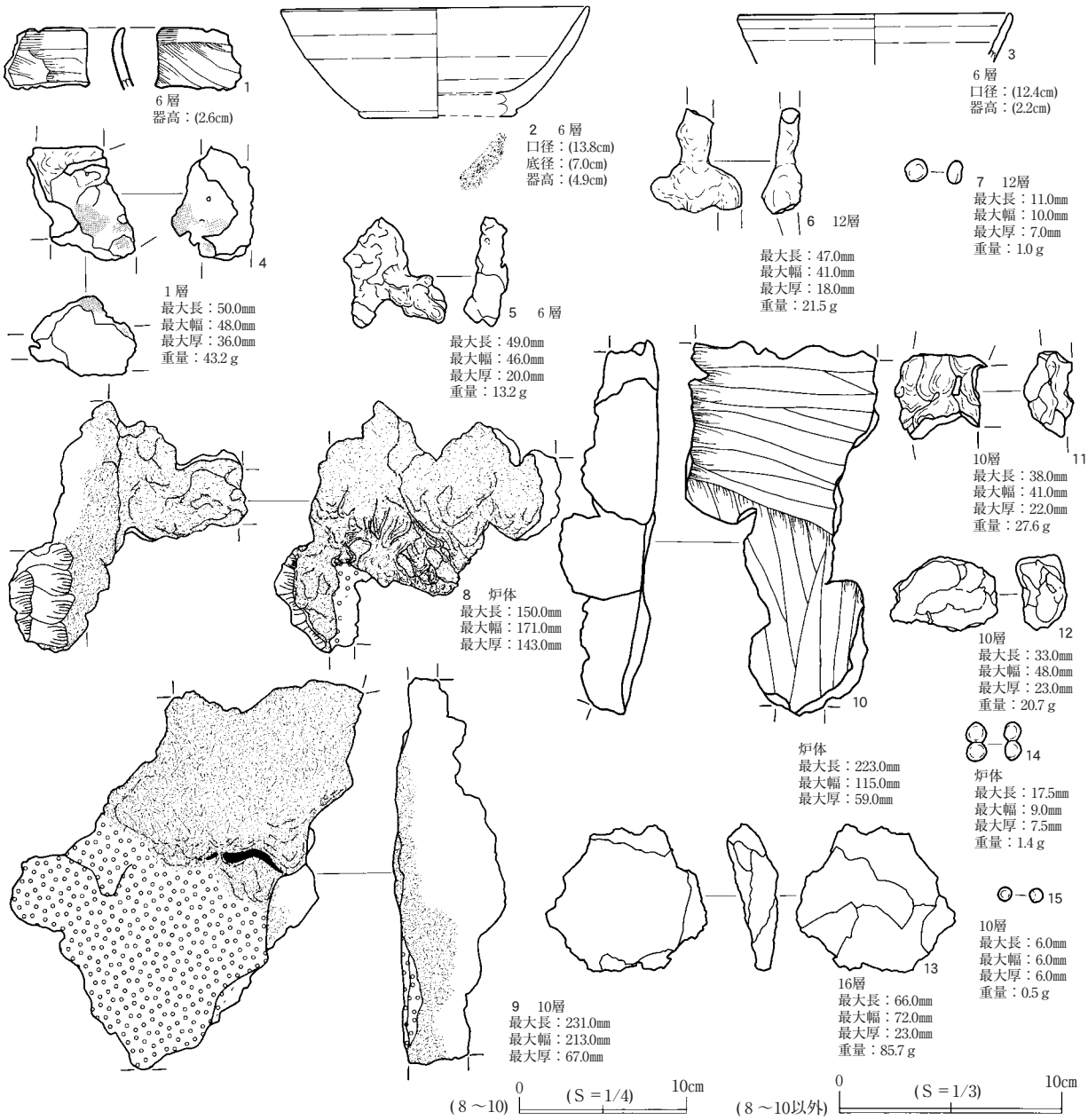
307図４～６は流動滓で、４には鉄錆が付着している。307図７は粒状滓である。



05-ＳＳ17製鉄遺構・製鉄炉
1　黒褐色土(2.5Y3/1)　しまり強　粘性中　白色粘土粒・黄褐色砂粒多量含む
2　黒褐色土(2.5Y3/1)　しまり中　粘性中　黄褐色土粒微量含む
3　黒褐色土(2.5Y3/2)　しまり弱　粘性弱　白色砂粒少量含む
4　暗灰黄色土(2.5Y4/2)　しまり中　粘性弱　白色砂粒少量含む
5　黒褐色土(10YR3/2)　しまり弱　粘性中　炭化物粒少量含む
6　黒褐色土(10YR3/1)　しまり中　粘性弱　炭化物粒・白色砂粒少量含む
7　浅黄色粘土(2.5Y7/4)　しまり強　粘性中
8　にぶい黄橙色土(10YR6/4)　しまり中　粘性弱　白色粘土塊多量含む
9　暗褐色土(10YR3/3)　しまり強　粘性弱　白色粘土粒少量含む
10　橙色粘土(7.5YR6/6)　しまり強　粘性弱　炉壁塊多量含む
11　暗褐色土(10YR3/3)　しまり強　粘性弱　白色粘土粒多量含む　羽口装着孔
12　にぶい黄橙色土(10YR7/4)　しまり中　粘性中　暗褐色土との混合土
13　黒褐色土(10YR3/1)　しまり弱　粘性中　焼土粒・炭化物粒少量含む
14　にぶい黄褐色土(2.5Y5/4)　炉壁被熱
15　にぶい黄色土(2.5Y6/4)　しまり強　粘性中　炉壁脇造成粘土
16　淡黄色粘土(2.5Y8/4)　しまり強　粘性弱　下部作業場作業面
17　黒褐色土(2.5Y3/2)　しまり中　粘性中　白色砂粒多量含む



第306図　05-ＳＳ17製鉄遺構・製鉄炉



第307図　05-ＳＳ17製鉄遺構・炉内出土遺物

05-ＳＳ17製鉄炉(第306図・307図、図版109)

遺　構　上部作業場のほぼ中央に位置する。炉体内の堆積土・炉壁・整地層を全部で７層に分けた。13層は炉底面に敷いた砂である。炉体は外縁部に15層の粘土を貼り、内部に炉壁となる粘土を貼り付けている。炉壁と接する14層粘土部分は被熱が顕著である。９・10層は炉壁塊を多量に含むことから、炉廃絶時に埋め立てたものと考えられる。11層は羽口の装着孔に堆積する。なお、12・13層は一部下部作業場まで被っている。

炉体形状は斜面に直交する方向に長い不整な長方形である。炉底面の奥壁から開口部までの長さは約0.7ｍ、幅は0.2～0.3ｍで、炉体周辺の上部作業場から炉体外部にかけての構築粘土に被熱が認められる。炉体下部には砂を敷いて作業を行っている。奥壁上場には、羽口装着孔の名残とみられる幅約0.1ｍの溝が確認できる。炉体に直交する断面では、上部作業場から炉体内部へ傾斜しており、炉底付

近に送風していたことが分かる。

本炉跡は地山上面に砂を敷いて炉底面とし、壁に炉壁となる粘土を貼り付けて構築した製鉄炉である。本炉跡で発生した排材や排滓は、炉跡前面の山麓緩斜面に投棄したと考えられるが、調査では全く出土しなかった。05-ＳＤ45が通ることなどから、２次的に整理撤去したと考えられる。

遺　物(第307図)　炉内部から炉壁・鉄滓が出土している。総量は約18.6kgで、その内訳は炉壁17088ｇ、鉄滓1498ｇである。炉壁を構成する粘土は、スサ等の混入物が比較的少ない。炉体内出土遺物は鉄塊系遺物が多い。

307図８～10は炉壁で、８・９は、鉄滓付着範囲の炉壁内面との間に発砲が認められる。307図10は鉄滓の付着が認められず、整形時のユビナデが明瞭に残る。307図13は炉底塊の小割滓で、鉄分の付着が認められない残核である。307図12は鉄塊系遺物、307図11は流動滓、307図14・15は粒状滓である。

05-ＳＳ19・65製鉄遺構(第308図・309図、図版110・114)

遺　構　ＬＩ51・52、ＬＪ50～53、ＬＫ51グリッドの砂質土主体の地山層で、黒褐色土の広がりで確認した。隣接する位置に05-ＳＸ48があり、その向こうに05-ＳＩ66がある。本遺構は２基の製鉄炉と、上部作業場と下部作業場、上部作業場上位の階段状遺構で構成される。05-ＳＳ65下部作業場が、05-ＳＳ19炉体のすぐ脇に有り、上部作業場との関連などからみて、05-ＳＳ19炉体が古く05-ＳＳ65炉体が新しい前後関係が想定される。

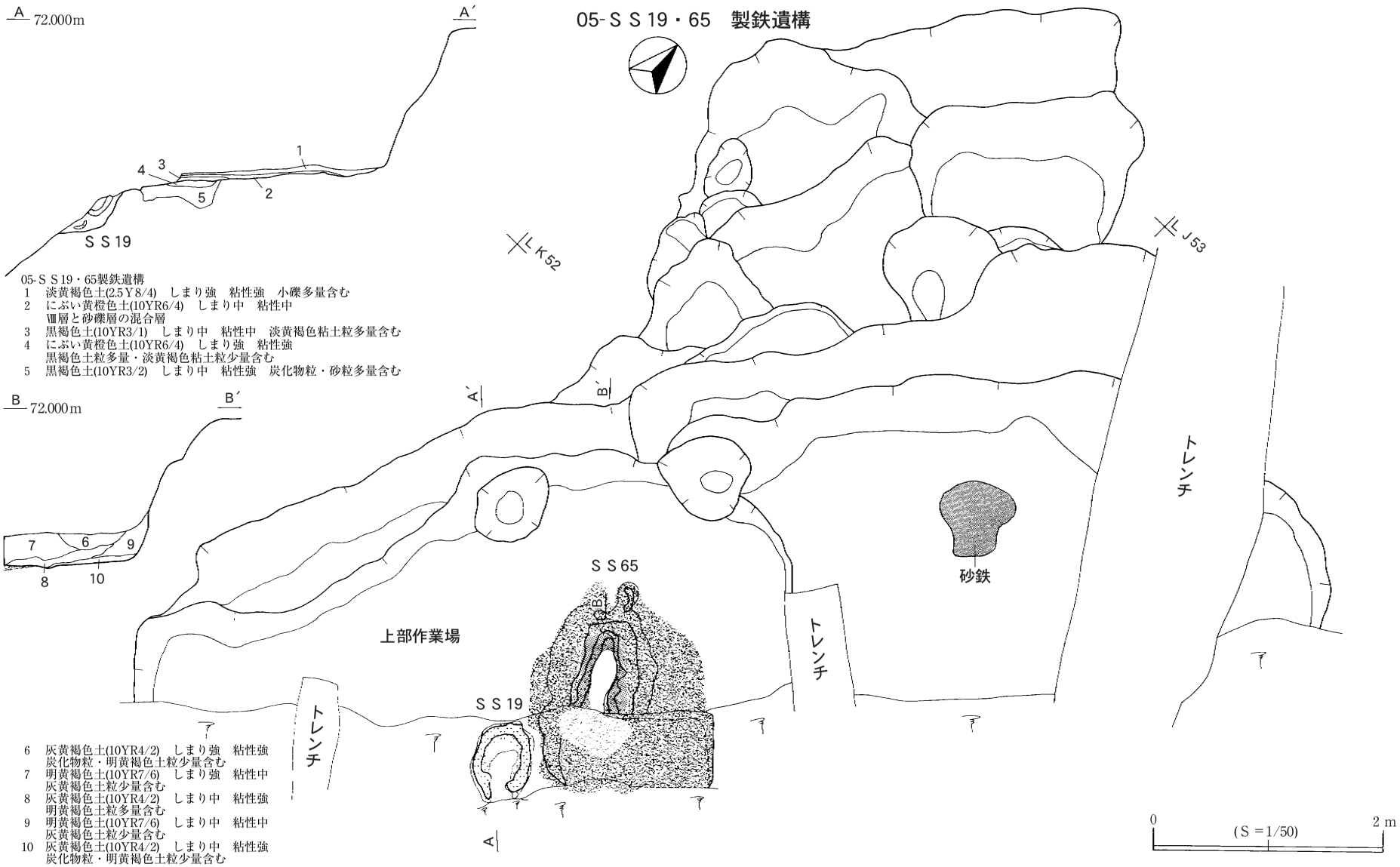
上部作業場の各炉体を通るラインで観察した堆積土を、10層に分けた。上部作業場は基本的に平坦であるが、これはＡ－Ａ´ラインでは４層上面までの状態であり、３・４層は05-ＳＳ65炉体構築時の造成土とみられることから、１・２・６～10は基本的に05-ＳＳ65操業後の堆積土、５層は05-ＳＳ19上部作業場を埋め立てた造成土と考えられる。

上部作業場は、05-ＳＳ65炉体の設置部分と、砂鉄の置いてある場所の間にわずかに段差があるが、北東－南西方向に延伸方向をもつ台形の平場で、最大長約9.9m、幅約2.6m、斜面上位との比高約1.2mである。05-ＳＳ65の北西部下場には、２個一対の浅い凹みがあった。輔に関わる下部構造の痕跡とも考えられるが、定かではない。05-ＳＳ65下部作業場は長方形の平場で、長軸約1.4m、短軸約0.6m、上部作業場底面との比高約0.5mである。上部作業場の上には、階段状に数段の小さな平場または凹みがある。斜面上位から本遺構への進入路とみられるが、上部作業場との間には1.2mの段差があり、梯子などが無ければ登り降りは困難である。

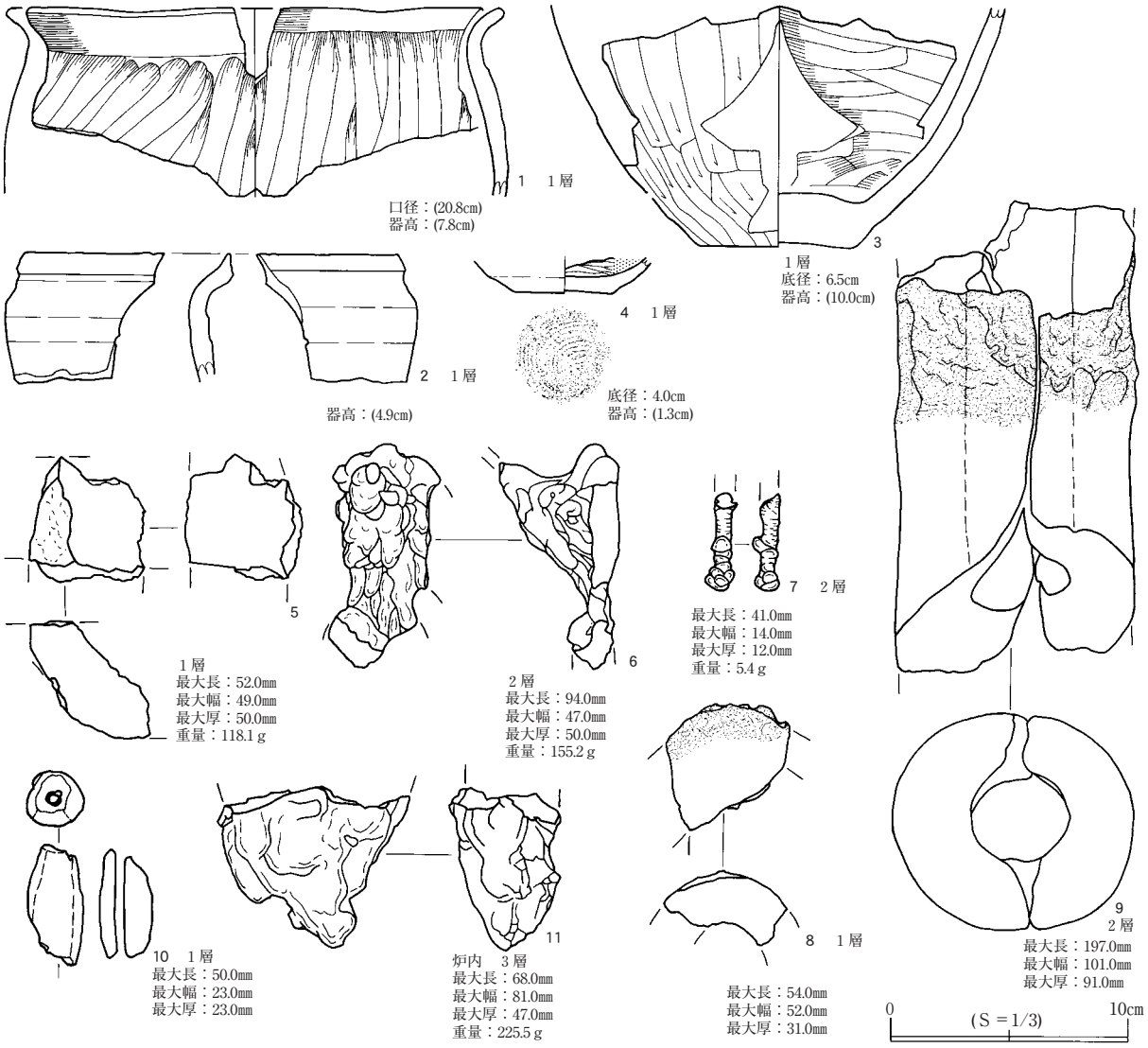
本遺構は２基の製鉄炉と、輔座となる上部作業場、排滓場となる下部作業場で構成される一連の製鉄作業場である。本遺構への往来は、05-ＳＩ66とは05-ＳＸ41でつながっており、このことからも05-ＳＩ66が本遺構の関連工人の住まいとみられる。また平坦部居住域からは、05-ＳＸ64の階段状遺構を通れば、比較的安全に進入できる。

遺　物(第309図)　上部・下部作業場から土師器甕・坏、土製品、炉壁・鉄滓・羽口が出土している。鉄関連遺物の総量は約3.8kgで、その内訳は炉壁289ｇ、鉄滓2253ｇ、羽口1254ｇである。鉄滓は炉底塊(小割滓含む)と流動滓が最も多く、次いで鉄塊系遺物が多い。

309図１～９は上部作業場出土遺物である。１は比較的中・大型の土師器甕で、頸部で屈曲して口



第308図　05-ＳＳ19・65製鉄遺構



第309図　05-ＳＳ19・65製鉄遺構出土遺物

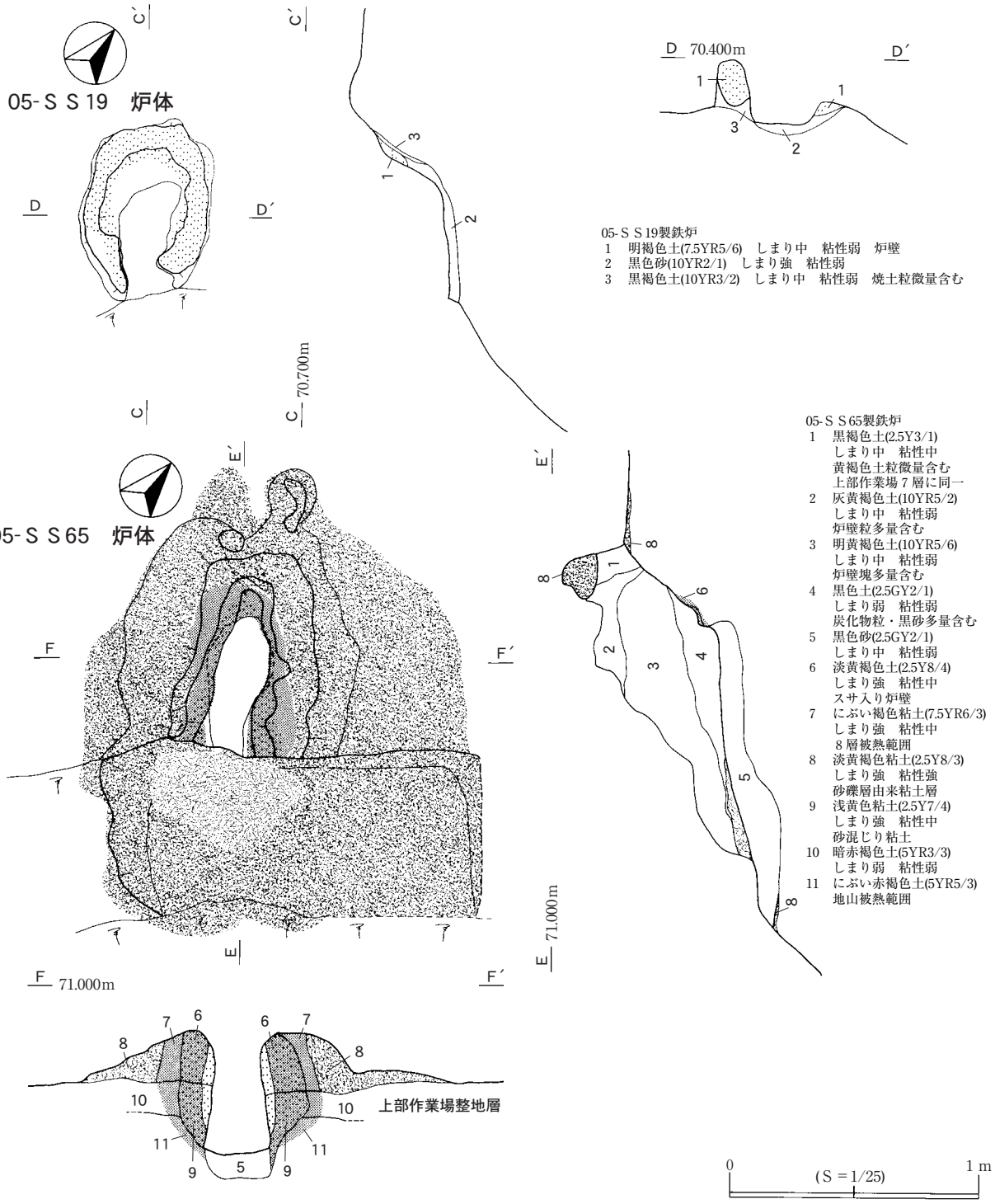
縁部が外反する。内外面共に縦位のユビナデ調整である。２は内外面共にロクロ目を残す口縁部破片で、口縁部側面に面を形成する。３は土師器甕の底部で、底面はケズリ再調整を施す。４は土師器坏Ｂ類の底部である。底面は回転糸切痕を残す。５は炉底塊の小割滓、６は流動滓、７は単位流動滓である。６は段差上部から階段状に流れた痕跡が認められる。８・９は羽口で、８は装着孔側の破片である。９も鉄滓付着範囲があり、装着孔に近い部位である。

309図10・11は下部作業場出土遺物である。10は両端を欠損する土錘である。11は流動滓で、先端部の破片である。

05-ＳＳ19製鉄炉(第310図・311図、図版110)

遺　構　上部作業場より一段低い、05-ＳＳ65下部作業場の南西脇に位置する。炉壁と造成土を３層に分けた。１層は炉壁で、２・３層が基底部に敷いた砂である。焼土の発達は顕著でなかった。

炉体形状は斜面に直交する方向にやや長い楕円形である。炉底面の奥壁から開口部までの長さは約0.4m、幅は約0.2mで、周辺部の被熱痕跡は顕著でない。炉体下部には砂を敷いている。

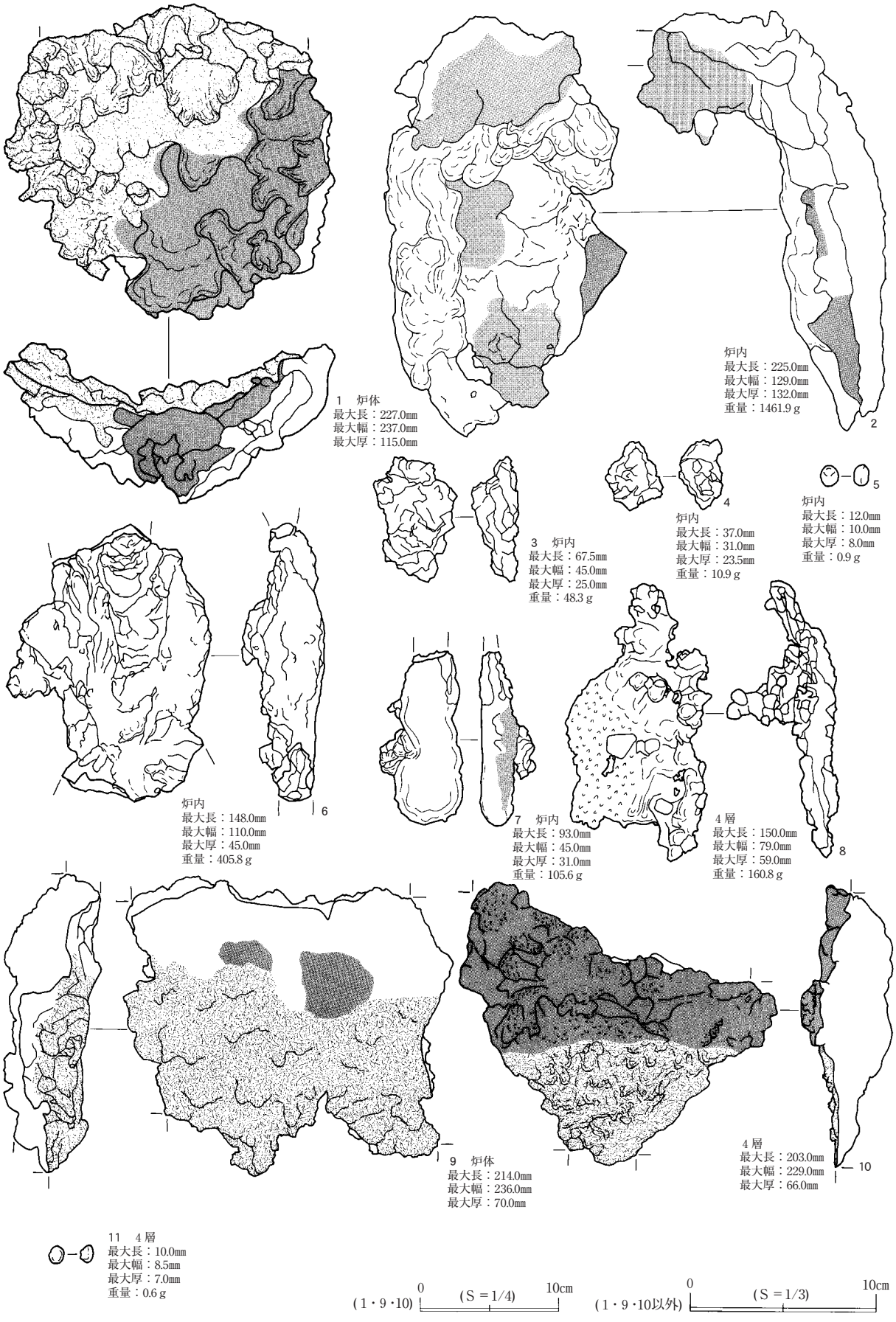


第310図　05-ＳＳ19・65製鉄炉

本炉跡は地山上面に砂を敷いて炉底面とし、壁に炉壁となる粘土を貼り付けて構築した製鉄炉と想定される。本炉跡で発生した排材や排滓は、炉跡前面の山麓緩斜面に投棄したとみられるが、調査では出土しなかった。03-ＳＤ179が通ることなどから、２次的に整理撤去したと考えられる。

遺　物(第311図)　炉内部から炉壁・鉄滓・羽口が出土している。総量は約6.3kgで、その内訳は炉壁2893ｇ、鉄滓3353ｇ、羽口30ｇである。炉壁を構成する粘土はスサを多く含んでいる。鉄滓は、排出孔に近い位置の流動滓が多い。

311図１～７が、本炉内から出土した遺物である。１は側面部に炉壁が付着する炉底塊である。３



第311図　05-ＳＳ19・65炉内出土遺物

は炉内滓、４は鉄塊系遺物である。２・６・７は流動滓で、２は形状から排出孔直下の排滓場に溜まった流動滓とみられる。至るところに鉄分の付着が認められる。５は粒状滓である。

05-ＳＳ65製鉄炉(第310図・311図、図版114)

遺　構　上部作業場の中央からやや南西寄りの位置にある。炉体内の堆積土・炉壁・整地層・被熱範囲を全部で11層に分けた。炉体構築に関わるのは、５～10層である。10層は上部作業場の整地層で、その内側に炉体を構成する９層を貼る。上部は８層の炉体上部を固定する粘土と被熱範囲の７層、スサ入り粘土の６層炉壁などで構成される。６・９層内面が焼成によりさらに硬化している。５層は炉底面に敷いた砂である。２・３層は炉壁塊を多量に含むことから、炉廃絶時に埋め立てたものと考えられる。１層は羽口の装着孔に堆積するが、炉体外部堆積土と同じであることから、廃絶時には開口していたことが分かる。なお、４層と５層の間には、下部作業場へと続く鉄滓の固化範囲が挟まる。

炉体形状は斜面に直交する方向に長い長楕円形である。炉底面の奥壁から開口部までの長さは約0.5ｍ、幅は約0.2ｍで、炉体周辺の上部作業場から炉体外部にかけての構築粘土に被熱がみられる。炉体下部に砂を敷いて作業を行っている。奥壁には径約0.1ｍの羽口装着孔が残存していた。

本炉跡は地山上面に砂を敷いて炉底面とし、壁に炉壁となる粘土を貼り付けて構築した製鉄炉である。本炉跡で発生した排材や排滓は、炉跡前面の山麓緩斜面に投棄したと想定されるが、調査では出土しなかった。03-ＳＤ179が通ることなどから、２次的に整理撤去したと考えられる。

遺　物(第311図)　炉体内部から、約2.2kgの鉄滓が出土している。炉体内部に崩落する炉壁は少なく、炉体を構成する粘土はスサを多く含み脆い。鉄滓は流動滓が多く、一定量鉄塊系遺物が出土している。

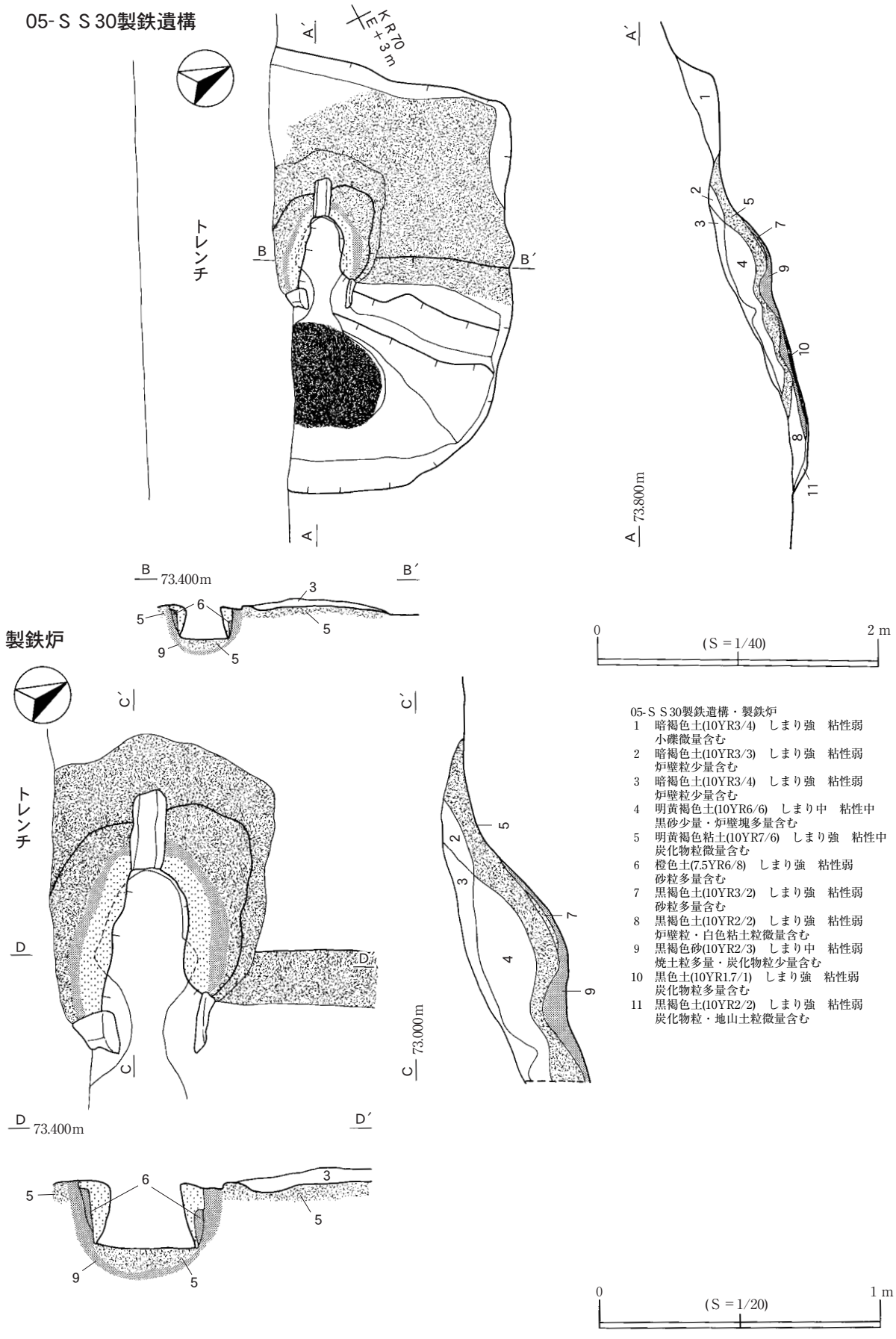
311図８～11が本炉内出土遺物である。９・10は炉壁で、どちらも胎土にスサを多く含み、脆い状態である。下半部には流動滓状の鉄滓が付着しており、その上部境界付近に鉄錆や砂鉄焼結が認められる。８は流動滓で、扁平に薄く流れた一部に、砂鉄を多く含む範囲があることから、炉壁に付着していたものである可能性が高い。11は粒状滓である。

05-ＳＳ30製鉄遺構(第312図・313図、図版111・112)

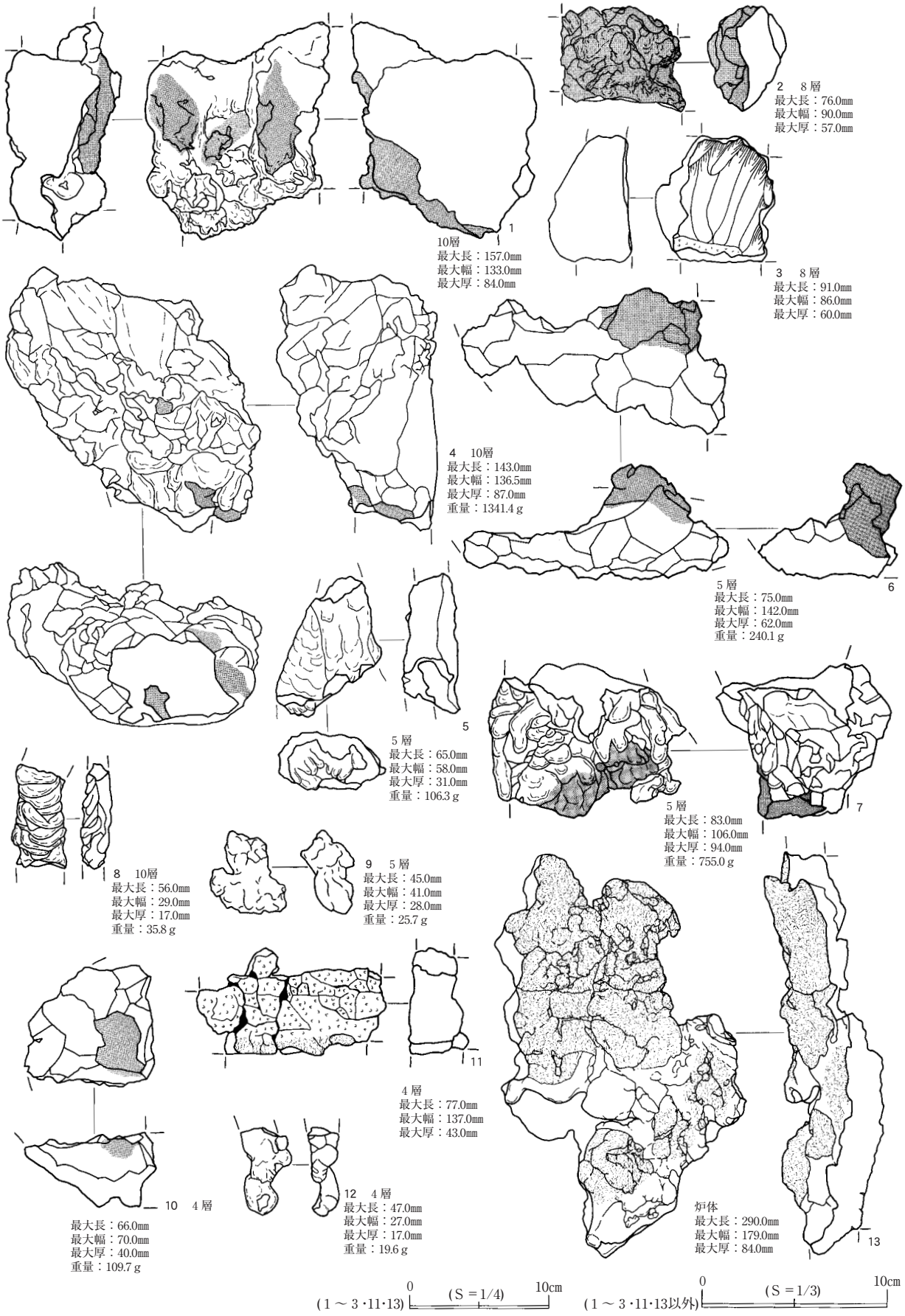
遺　構　ＫＰ・ＫＱ69・70グリッドの砂質土主体の地山層で、黒褐色土の広がりで確認した。本遺構は１基の製鉄炉と、上部作業場、下部作業場で構成される。南西部約1/3はトレンチにかかるため失われているが、トレンチの幅から見ても炉体の位置を中心として、線対称に近い形状だったと考えられる。重複する遺構はない。

炉体を通るラインで観察した堆積土と炉体内構築土及び堆積土を併せて、11層に分けた。そのうち、１～３・５・８・11層が作業場に関わる堆積土である。５層は広く上部作業場の底面に貼った明黄褐色の粘土で、炉体底面にも及ぶ。８・11層は、下部作業場において５層下部に位置することから、複数回下部作業場を埋め立てたものと考えられる。なお、８層と11層の間には10層炭化物層がある。１層は上部作業場のみに認められ、３層は上部作業場にも堆積するが、炉体上部にも被る。２層も炉体上部にのみ堆積する土で、これらは本遺構の機能喪失後に堆積したとみられる。

上部作業場は、北東－南西方向に延伸方向をもつ長方形の平場で、長軸約1.6ｍ以上、短軸約1.3ｍ、斜面上位側の壁上場と平場底面の比高約0.3ｍである。下部作業場は不整な長方形の平場で、長軸約



第312図　05-ＳＳ30製鉄遺構・製鉄炉



第313図　05-ＳＳ30製鉄遺構・炉内出土遺物

1.4m、短軸約1.2m、上部作業場底面との比高約0.6mである。掘形底面には炭化物の集中範囲があり、その約0.15m上部には白色粘土で造成した平坦面もあることから、下部作業場底面は何度か造り替えている。なお、上部作業場下位面と下部作業場の間で、炉体南西脇にはステップが付く。

本遺構は１基の製鉄炉と、鞴座となる上部作業場、排滓場となる下部作業場で構成される一連の製鉄作業場である。本遺構への往来は、05-ＳＤ16からは05-ＳＫ09の凹凸部を上れば比較的容易に到達できる。また05-ＳＩ15とはほぼ同レベルで、緩斜面を横切れば危険な地点はないが、斜面上位に位置し、関連性が強いとみられる05-ＳＩ02・58からは、間に遺構が存在していない。ただし配置からみて、３者の関連性を否定することの方が難しい。

遺　物(第313図)　上部・下部作業場から炉壁・鉄滓・羽口が出土している。鉄関連遺物の総量は約13.8kgで、その内訳は炉壁8356ｇ、鉄滓5446ｇ、羽口12ｇである。鉄滓のほとんどは下部作業場出土で、流動滓が最も多く、次いで炉底塊(小割滓含む)、鉄塊系遺物が多い。

313図１～９は下部作業場出土遺物である。１～３が炉壁で、いずれも混入物の少ない胎土である。１・２は流動滓状の鉄滓が付着しており、３は鉄滓の付着が無くユビナデが認められる。４は炉底から排出孔にかけての鉄滓で、上流部から漏斗状に狭まり、下流部が細い。６は炉底塊の小割滓で、接地面が広く、上面の残りは極わずかである。上面付近には鉄錆の付着範囲が認められる。４・５・７・８は流動滓である。５・７は滞留する形状で、流出孔滓に近いものである。８は単位流動滓である。９は鉄塊系で、わずかに流動形状を示す。

05-ＳＳ30製鉄炉(第312図・313図、図版111・112)

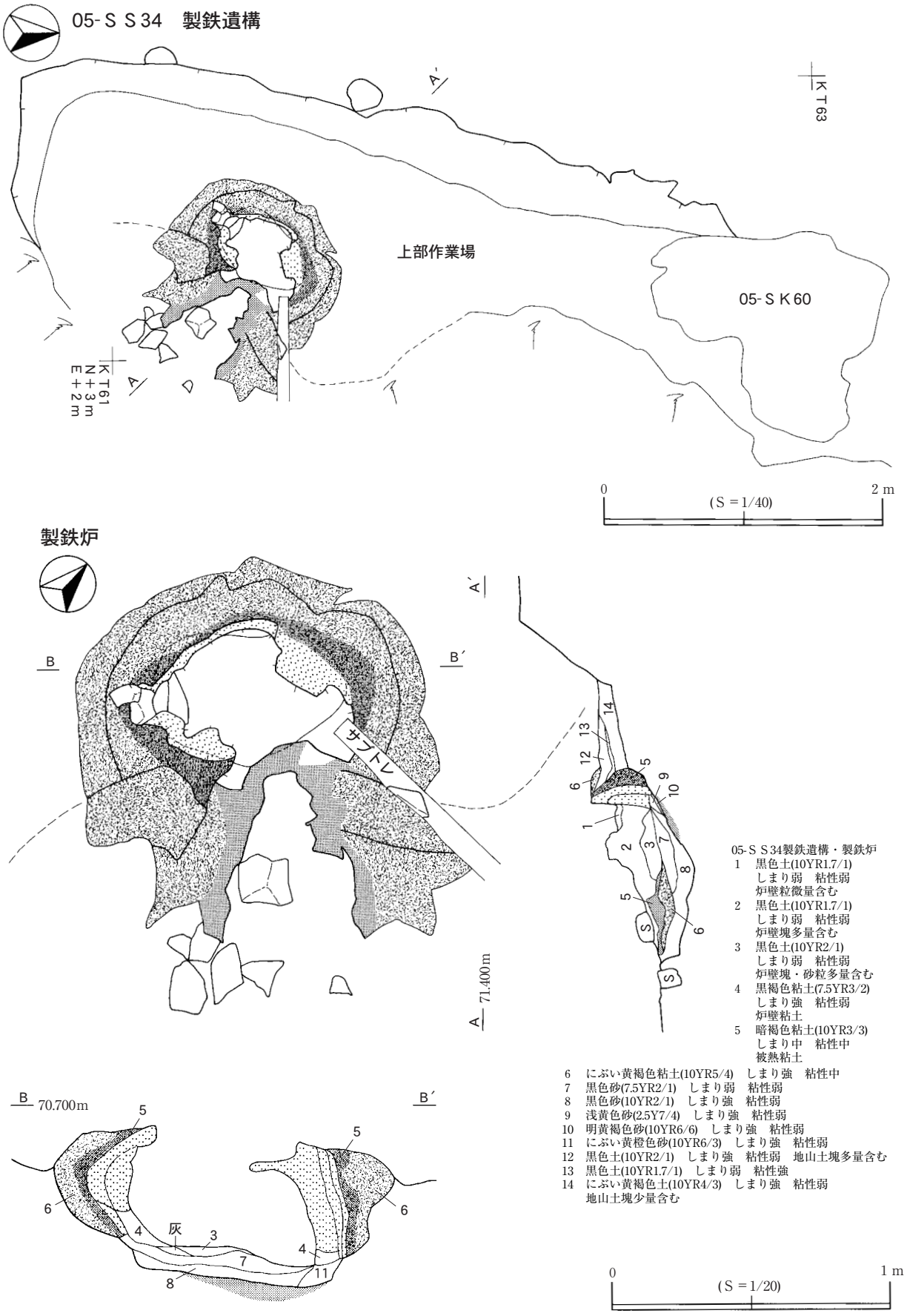
遺　構　上部作業場のほぼ中央に位置すると想定される。炉体内の堆積土・炉壁・整地層を全部で５層に分けた。５層は炉底面に敷いた粘土である。６層の炉壁となる粘土は５層を敷く前から壁面に付着しており、５層上面は新段階の作業面と考えられる。７層は古い段階の炉壁の残骸で、９層は古い段階の炉底面に敷いた砂質の土である。

炉体形状は斜面に直交する方向に長い長楕円形状である。炉底面の奥壁から開口部までの長さは約0.6m、幅は広いところで約0.35mで、炉体周辺の上部作業場から炉体外部にかけての構築粘土と地山に被熱が認められる。炉体下部には砂を敷いて作業を行っている。排出孔側には芯材となる石が残っている。奥壁部に羽口装着孔の痕跡とみられる、幅約0.15mの細い溝が認められる。

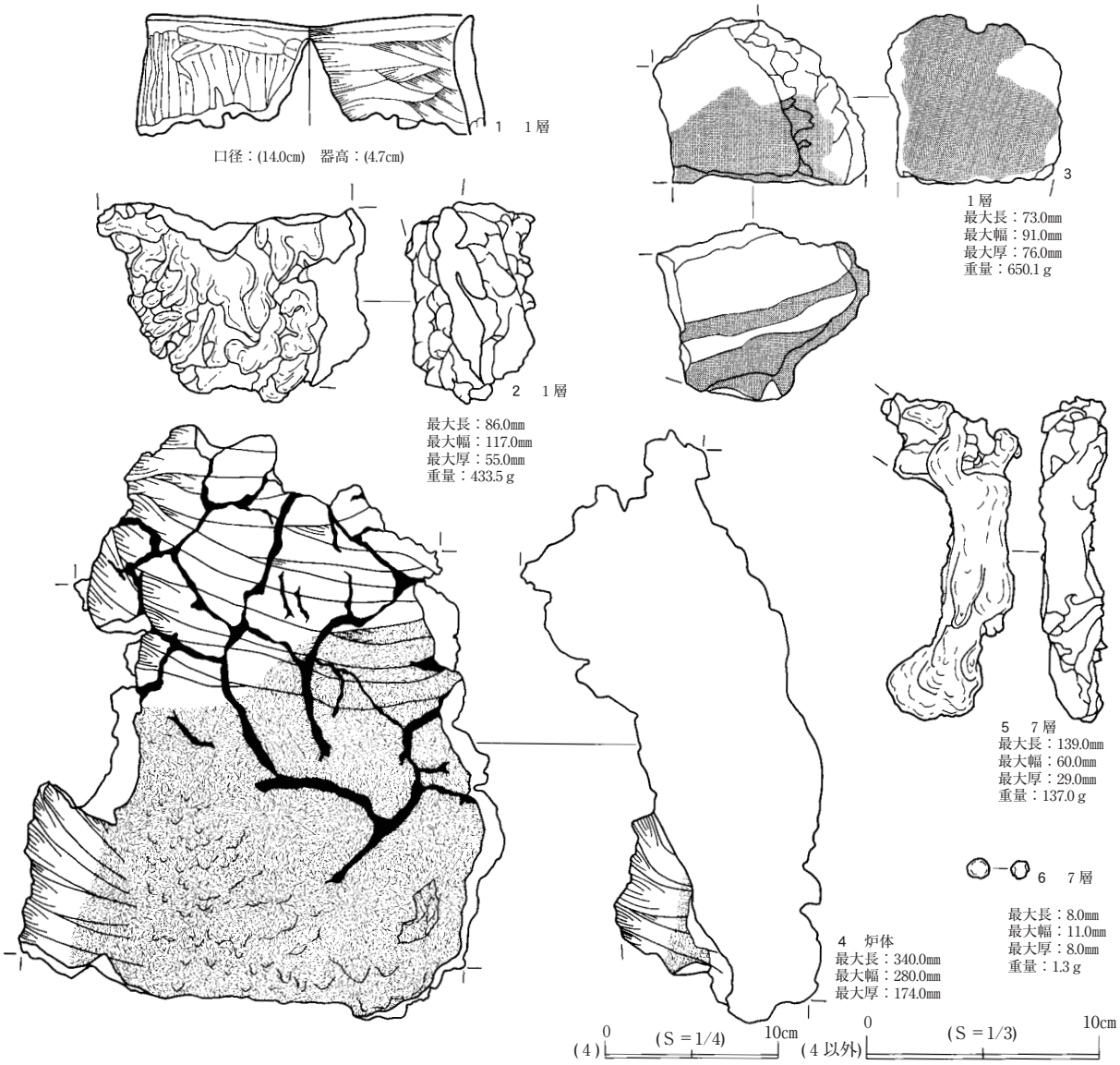
本炉跡は地山上面に砂を敷いて炉底面とし、壁に炉壁となる粘土を貼り付けて構築した製鉄炉である。本遺構で発生した排材や排滓は、炉跡前面の山麓緩斜面に投棄したと想定されるが、調査では出土しなかった。05-ＳＤ16・23～25が通るため、２次的に整理撤去したと考えられる。

遺　物(第313図)　炉内部から炉壁・鉄滓が出土している。総量は約17.0kgで、その内訳は炉壁16158ｇ、鉄滓845ｇである。炉壁を構成する粘土はスサを多く含み、全体にざらついた感触である。鉄滓は、鉄塊系と流動滓がほぼ同量、炉底塊小割滓がその半分の量出土している。

313図10～13が炉内出土遺物である。13は炉体を構成していた炉壁で、胎土にスサを多く含む。内面には流動滓状の鉄滓が全面付着する。11は炉体内堆積土中から出土した炉壁で、内面にはヒビ割れが認められる。10は炉底塊小割滓で、接地面がわずかに残るだけで、ほとんどが小割面である。上面にわずかに鉄錆が付着するのみの残核である。12は単位流動滓である。



第314図　05-ＳＳ34製鉄遺構・製鉄炉



第315図　05-ＳＳ34製鉄遺構・炉内出土遺物

05-ＳＳ34製鉄遺構(第314図・315図、図版113)

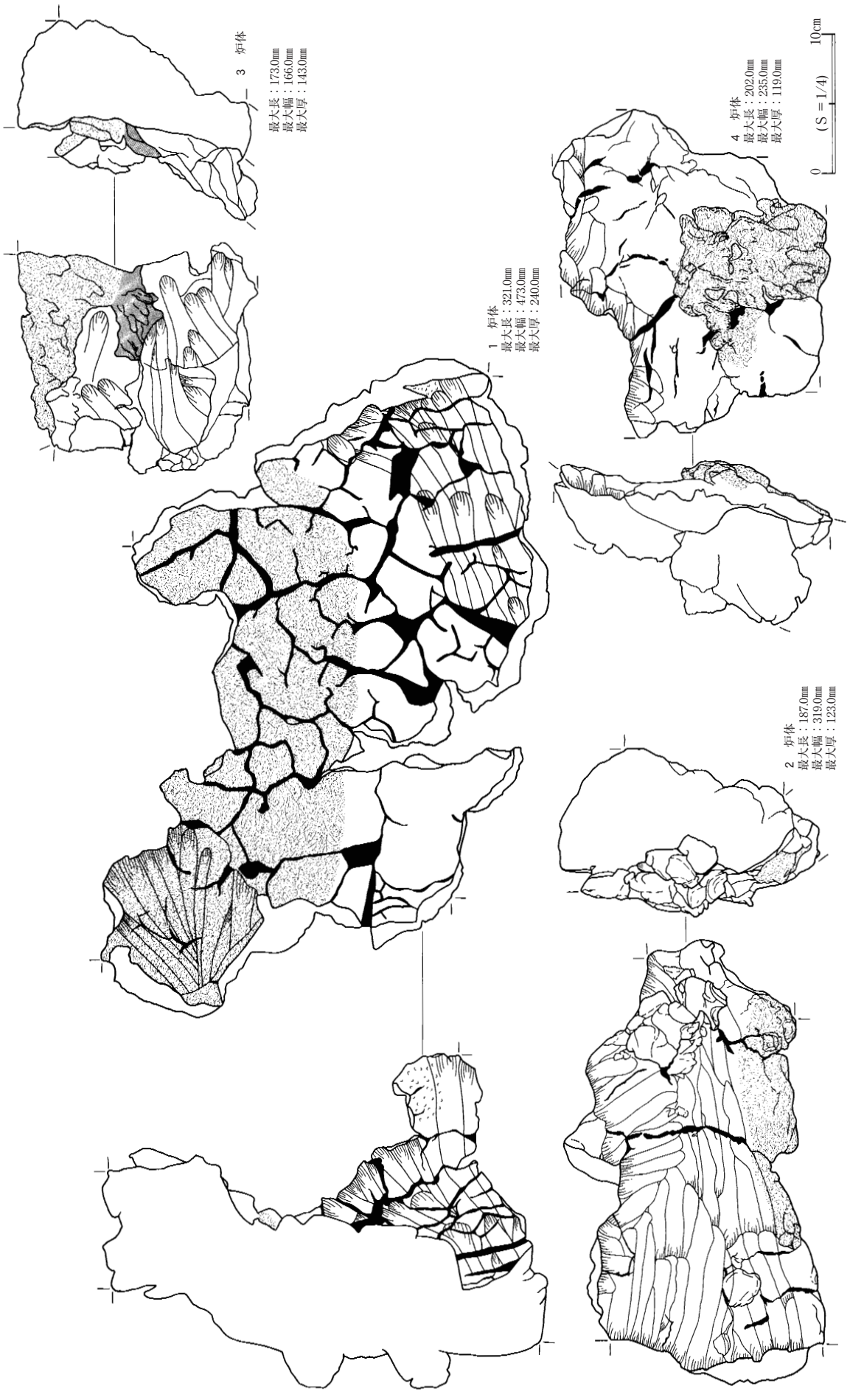
遺　構　ＫＳ61～63、ＫＴ61グリッドの砂質土主体の地山層で、黒褐色土と崩落地山層の混合土の広がりで確認した。01-ＳＫ60と重複するが、新旧関係は不明である。

本遺構は１基の製鉄炉と、上部作業場で構成される。下部作業場は明確に検出できなかったが、排出孔下部の自然地形を排滓場として利用したと考えられる。その痕跡は排滓の出土状況からも一端を窺える(第347・348図)。

炉体を通るラインで観察した堆積土と炉体内構築土及び堆積土を併せて、14層に分けた。確認段階で上部作業場の大部分の堆積土を撤去していたので、炉体外の堆積土は上部作業場の整地に関わる土のみ図示した。６・12～14層が上部作業場の整地層で、黒色土の13層を挟んで12・14の整地層が認められる。最新段階の６層は炉体にも及ぶ。

上部作業場は、北北東－南南西方向に延伸方向をもつ溝状の平場で、最大長約6.0ｍ以上、最大幅約2.0ｍ、斜面上位側の壁上場と平場底面の比高約0.7ｍである。

本遺構は１基の製鉄炉と、鞴座となる上部作業場で構成される一連の製鉄作業場で、排滓場は自然



第316図　05-ＳＳ34炉内出土遺物

地形を利用したとみられる。本遺構への往来は、05-ＳＤ16・45の各末端からは比較的緩い緩斜面を通って到達可能である。斜面上位には05-ＳＩ03・05・36が、斜面下位には05-ＳＩ29・70・73があるが、05-ＳＩ29・70・73の範囲は本遺構の排滓場が覆うので、比較的古い段階で、工人関連施設は斜面上位に移っていた可能性が高い。

遺　物(第315図)　上部・下部作業場から土師器甕、鉄滓が出土している。鉄滓は2729ｇ出土している。鉄滓は流動滓が最も多く、次いで炉底塊小割滓と単位流動滓がほぼ同量出土している。

315図１～３が上部・下部作業場出土遺物である。１は比較的小型の土師器甕で、胴上部が内傾して、口縁部が直立気味になる。外面縦位ケズリ、内面横位ユビナデ調整である。３は炉底塊小割滓で、接地面から上面にかけて、２層の鉄分含有層を挟む。２は流動滓である。

05-ＳＳ34製鉄炉(第314図～316図、図版113)

遺　構　上部作業場南部のやや広がりのあるスペースに位置する。炉体内の堆積土・炉壁・整地層・被熱範囲を全部で11層に分けた。炉体構築に関わるのは、４～11層である。まず炉底面に７～11層の砂質土を敷いている。上部作業場の最上面にも貼っている６層が炉体外周を構成しており、その内面に炉壁となる粘土を貼る。この炉壁は内外に２層に区分できることから、複数回操業したと考えられる。５層は６層の被熱範囲である。１～３層は炉体内に堆積しており、２・３層は炉壁塊を多量に含んでいることから、炉廃絶時に埋め立てた造成土で、１層はその上部に流入した土とみられる。

炉体形状は斜面に平行する方向に長い楕円形である。炉底面の奥壁から開口部までの長さは約0.6m、幅は約0.7ｍで、炉体周辺の上部作業場から炉体外部にかけての構築粘土と地山に被熱が認められる。炉体下部には砂を敷いて作業を行っている。炉体前面には芯材に使ったとみられる礫が散在する。

本炉跡は地山上面に砂を敷いて炉底面とし、壁に炉壁となる粘土を貼り付けて構築した製鉄炉である。本遺構で発生した排材や排滓は、炉跡前面の05-ＳＳ34排滓場に投棄したと考えられる。

遺　物(第315図・316図)　炉体内部から炉壁・鉄滓が出土している。総量は約75.4kgで、その内訳は炉壁74437ｇ、鉄滓1001ｇである。炉壁を構成する粘土は混入物が比較的少なく、焼成により強固に焼き締まっている。鉄滓は鉄塊系と流動滓が多く、炉底塊は全く認められない。

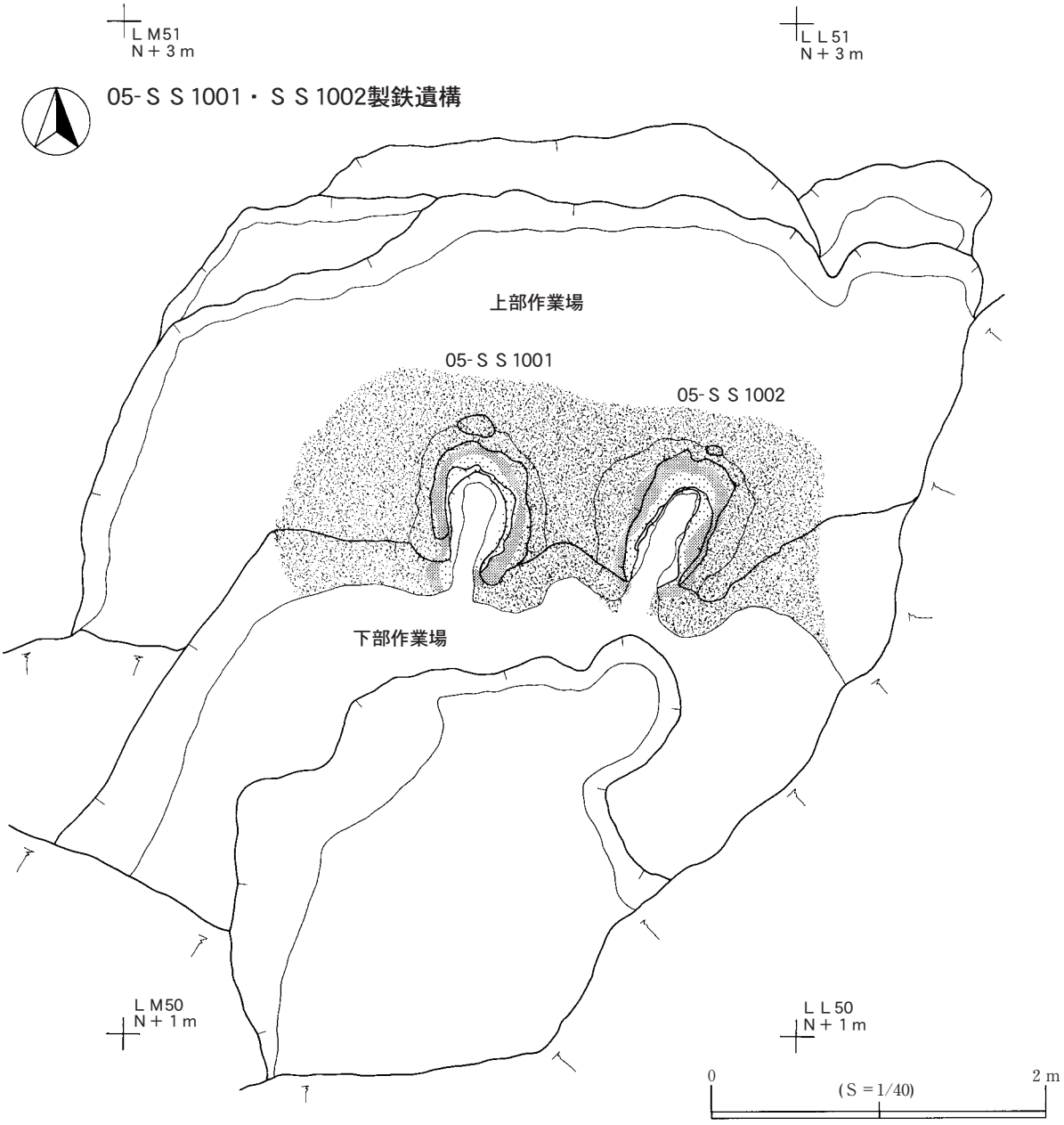
315図４と316図１～４は、炉体を構成する炉壁である。全て緻密な粘土を胎土にしており、土器のように硬化している。そのため、316図１のようにヒビが入るものが多い。315図５は流動滓、315図６は粒状滓である。

05-ＳＳ1001・1002製鉄遺構(第317図～319図、図版117・118)

遺　構　ＬＫ～ＬＭ50・51グリッドの砂質土主体の地山層で、黒褐色土とⅥ層砂塊の混合土の広がりで確認した。隣接する位置に05-ＳＫ52があるが、これらは一体となって施設を構成していたとみられる。

本遺構は２基の製鉄炉と、上部作業場、下部作業場で構成される。上部作業場の斜面上位には、05-ＳＫ52粘土採掘坑に関連する掘り込みが連なる。台地上部平坦面からのアクセスを考えた場合、この粘土採掘坑の窪みが階段の役割を果たすと考えられる。

堆積土の多くは確認段階で掘り上げており、断面図を図示できなかったが、05-ＳＳ1001製鉄炉脇に



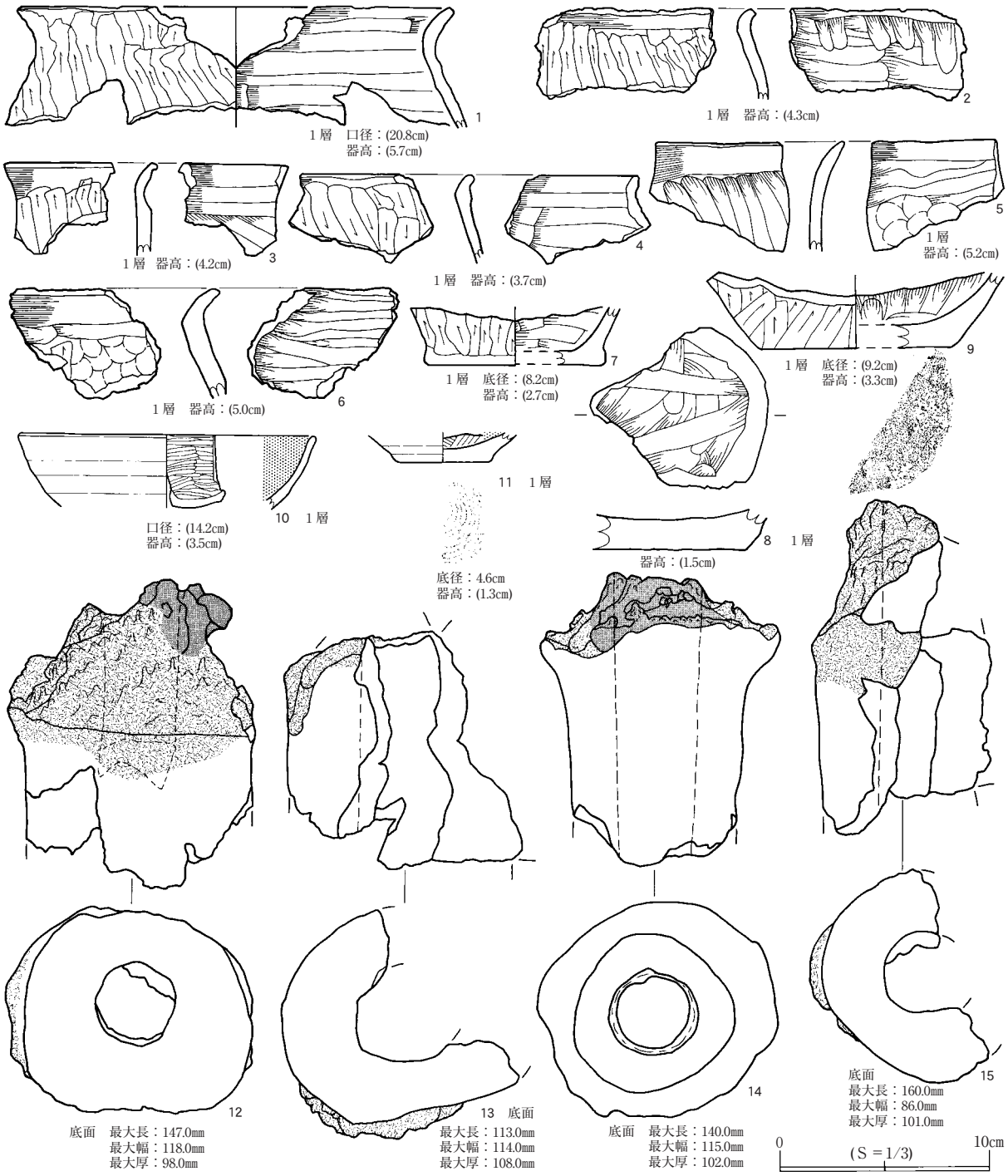
第317図　05-ＳＳ1001・1002製鉄遺構

一部堆積土を示している。基本的にはⅥ層に由来する砂塊が広く覆っており、２基の炉体最上部がわずかに顔を出した状態だった。

上部作業場は、ほぼ東西方向に延伸方向をもつ平行四辺形の平場で、長軸約4.7m、短軸約2.0m、斜面上位側の壁上場と平場底面の比高約0.4mである。下部作業場は２段の不整な形状の平場で、最大長約4.4m、幅約3.1m、上部作業場底面との比高は、上位面で約0.5m、下位面で約0.7mである。

本遺構は２基の製鉄炉と、鞴座となる上部作業場、排滓場となる下部作業場で構成される一連の製鉄作業場である。本遺構への往来は、05-ＳＫ52の階段状の凹凸を通れば比較的容易に到達可能で、さらに上位には、03-ＳＤ1002・1003・1004が目隠し塀状に配置してあるのも特徴的である。製鉄遺構の中でも居住域に最も近い本遺構に対する処置とみられる。

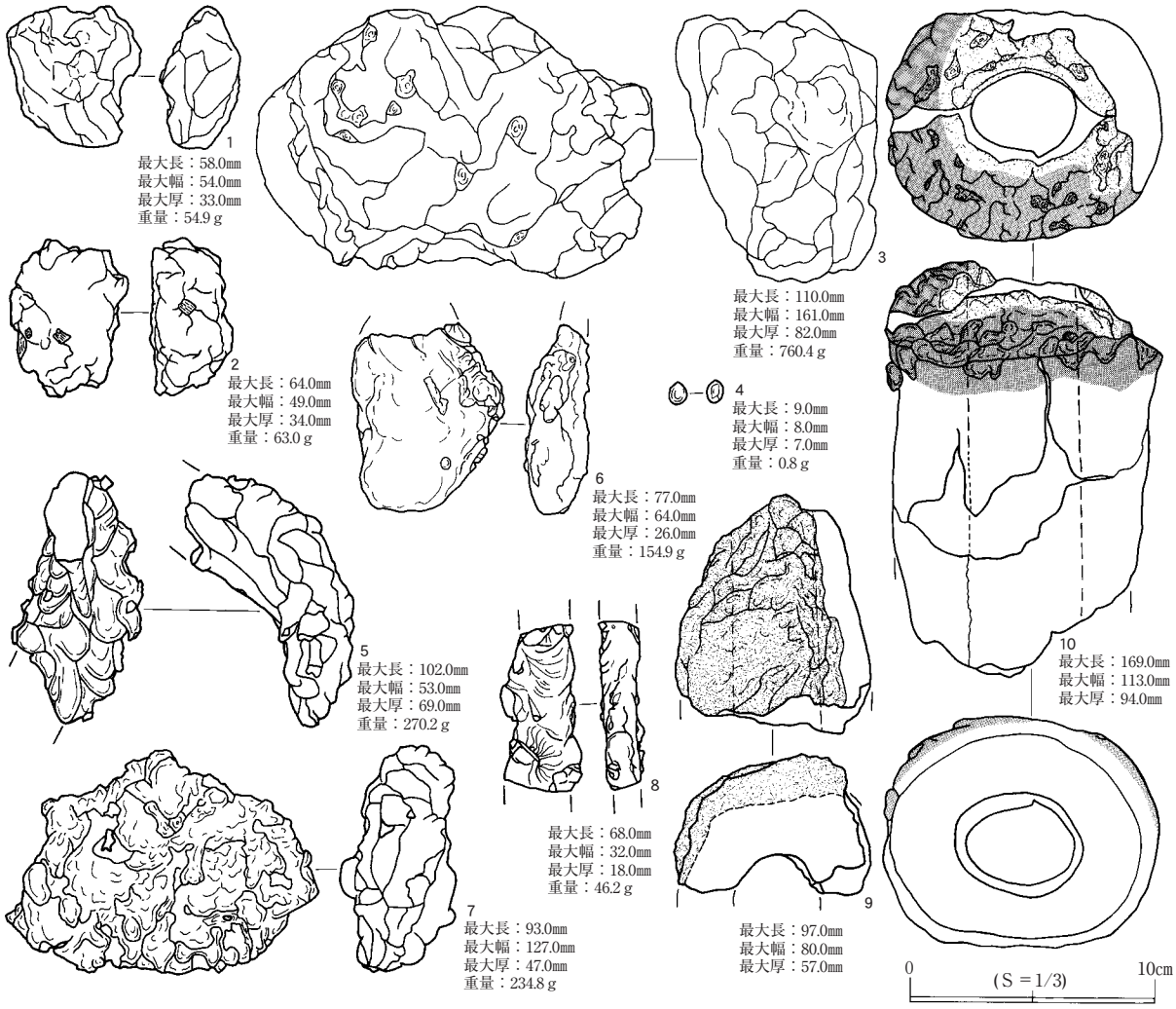
なお、他の製鉄遺構には、関連工人の居住施設とみられる住居が伴っているが、本遺構に関連する



第318図　05-ＳＳ1001・1002製鉄遺構出土遺物１

住居跡は明確でない。斜面上位の平坦面に展開する住居を見た場合、最も近く、規模的にも類似するのが03-ＳＩ336・576である。この２軒は、住居軸方位がほぼ真北方向に合わせてあり、他の平坦部に展開する住居とは異質であることからも、本遺構関連施設となる可能性が高い。

遺　物(第318図・319図)　上部・下部作業場から土師器甕・坏、炉壁・鉄滓・羽口が出土している。鉄関連遺物の総量は約10.6kgで、その内訳は炉壁1862ｇ、鉄滓2714ｇ、羽口5994ｇである。鉄滓は上部作業場からはほとんど出土していない。下部作業場では流動滓の出土が最も多く、次いで鉄滓系遺物が多い。



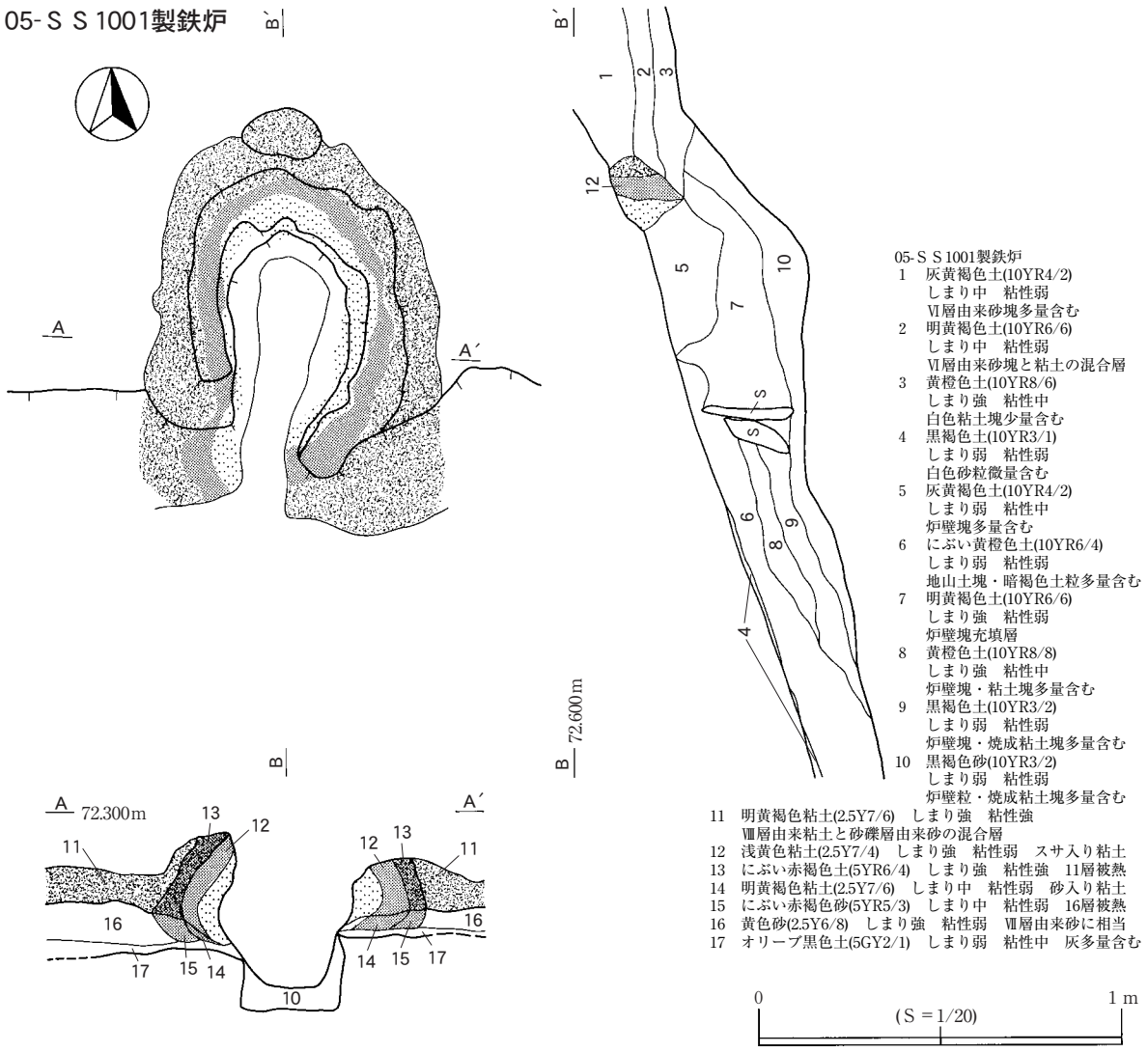
第319図　05-ＳＳ1001・1002製鉄遺構出土遺物２

318図が上部作業場の出土遺物である。１～９は土師器甕の破片資料である。１は口縁径を復元できたもので、比較的中・大型の甕である。胴上部が内傾して頸部で屈曲し、口縁部が外反する。２～６は口縁部破片で、３は頸部が段状になり口縁部が外反し、５は胴上部から緩やかに外反する。２・４・６は胴上部が内傾して頸部で折れて、口縁部が外反する形状で、６・２・４の順に口縁部の外反が短くなる。１～９の外面調整は、５が縦位ユビナデ、６が指の押さえを残す以外は縦位ケズリである。内面調整は基本的に横位のナデである。７～９は土師器甕の底部で、底面は７がケズリ再調整、９が砂底で、８は砂底の周辺部にケズリ再調整を施す。７は底部外縁が張り出し、８・９は直線的に外傾する形状である。

10・11は土師器坏Ｂ類である。10は口縁部破片で、内湾気味に立ち上がり、口縁部がわずかに外反する。11は回転糸切痕を残す底部資料である。

12～15は羽口で、12・14・15が装着部が残存する。14は炉体装着孔との隙間を埋めるために、装着後先端部に一回り大きく粘土を貼り付けている。

319図が下部作業場出土遺物である。１・３は鉄塊系遺物で、２も磁着の認められる炉内滓である。５～８は流動滓で、５は落差のある流れ方を、６～８は平坦な流れ方をとどめる。４は粒状滓である。９・10は羽口で、どちらも装着部を残しており、先端には鉄滓が付着する。



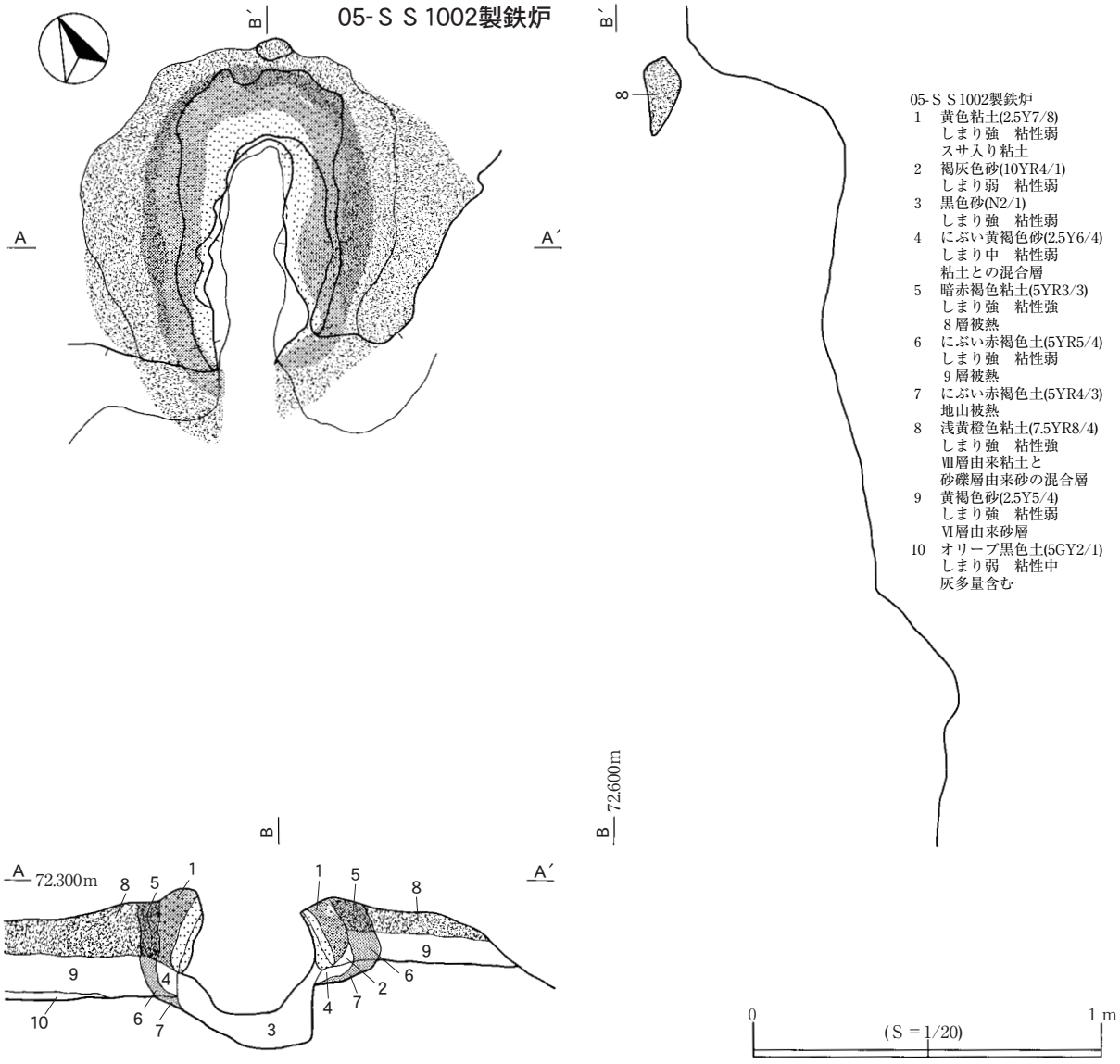
第320図　05-ＳＳ1001製鉄炉

05-ＳＳ1001製鉄炉(第320図・322図、図版119)

遺　構　上部作業場の中央からやや西寄りの位置にある。炉体内の堆積土・炉壁・整地層・被熱範囲及び、上部作業場堆積土の一部を全部で17層に分けた。11・16・17層は上部作業場の造成及び、炉体外形に関わる土である。17層の灰混じりの土を敷き、16層、11層の順に造成して上部作業場を構築する。11層はややオーバーハングさせてあり、炉体外形を形作ったところで、空焚きしている。この際の被熱面が13・15層である。この内面に、炉壁用の粘土となる12・14層のスサ混じり粘土を貼って作業を行っており、作業面接触部が硬化して炉壁になっている。11～13層と14～16層が上下に分かれることから、大掛かりな造り替えの可能性も想定できる。10層は炉底面に敷いた砂で、下部作業場まで及ぶ。

４～９層は炉体内及び下部作業場の炉前面に堆積する土で、炉体を埋め尽くす５・７層は炉壁を多量に含むことから、炉廃絶時に埋め立てたものと考えられる。６・８・９層や上部作業場の１～３層も、同時期の堆積土と考えられる。

炉体形状は斜面に直交する方向に長い長楕円形である。炉底面の奥壁から開口部までの長さは約0.7



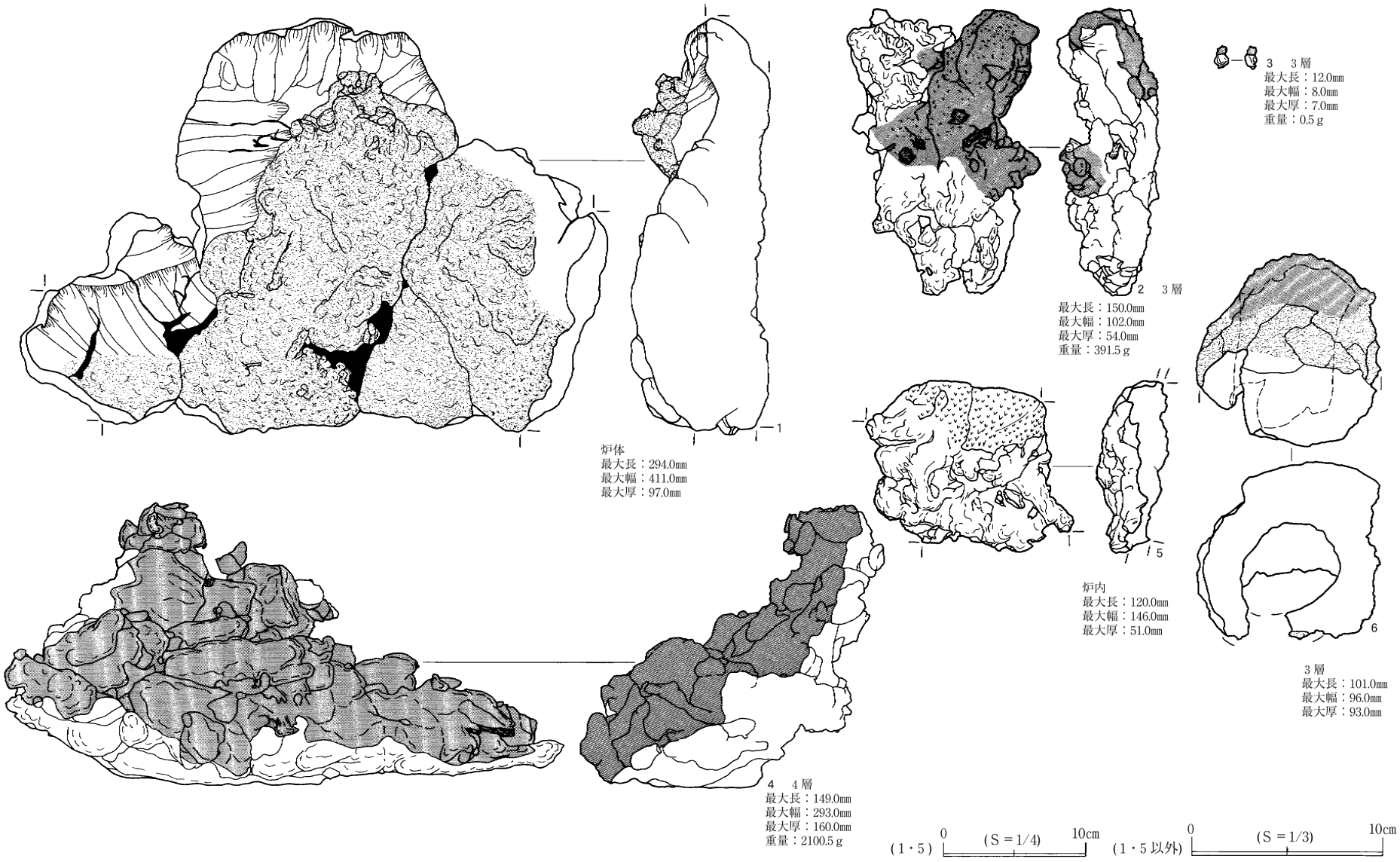
第321図　05-ＳＳ1002製鉄炉

m、幅は約0.15mで、炉体周辺の上部作業場から炉体外部にかけての構築粘土と地山に被熱が認められる。炉体下部には砂を敷いて作業を行っている。奥壁部には羽口装着孔が残存する。径0.15～0.2mの貫通孔で、ほぼ炉体中軸線上に位置しており、炉体外部が広く、炉体内部が狭い形状である。

本炉跡は地山上面に砂を敷いて炉底面とし、壁に炉壁となる粘土を貼り付けて構築した製鉄炉である。本遺構で発生した排材や排滓は、炉跡前面の03-ＳＴ185排滓場に投棄したと考えられる。

遺　物(第322図)　炉内部から炉壁・鉄滓・羽口が出土している。総量は約21.2kgで、その内訳は炉壁17499ｇ、鉄滓1490ｇ、羽口０ｇである。炉壁を構成する粘土はスサを大量に含んでおり、非常に脆く圧力を加えるとばらばらに小片化する。鉄滓は流動滓が最も多く、鉄塊系遺物がその半数の量出土している。

322図１～３が炉内出土遺物である。１は炉体を構成する炉壁で、下半部には鉄滓が広く付着している。鉄滓の表面には鉄錆が浮いている。上半部には構築段階のユビナデが認められる。２は流動滓で、木炭の痕跡や砂鉄焼結が認められることから、炉内で生成したものである可能性が高い。３は粒状滓である。



第322図　05-ＳＳ1001・1002炉内出土遺物

05-ＳＳ1002製鉄炉(第321図・322図、図版120)

遺　構　上部作業場の中央からやや東寄りの位置にある。炉体内の堆積土・炉壁・整地層・被熱範囲を全部で10層に分けた。８～10層は上部作業場の造成及び、炉体外形に関わる土である。10層の灰混じりの土を敷き、９層から８層の順に造成して上部作業場を構築する。８・９層はややオーバーハングさせてあり、炉体外形を形造ったところで、空焚きしている。この際の被熱面が５・６層である。この内面に炉壁用の粘土となる１層のスサ混じり粘土を貼って作業を行っており、作業面接触部が硬化して炉壁となる。１・５・８層と４・６・９層の上下に分かれることから、大掛かりな造り替えの可能性も想定できる。３層は炉底面に敷いた砂で、下部作業場まで及ぶ。以上の構造は、ほぼ05-ＳＳ1001製鉄炉と同じ構造であり、両者は一体で構築や造り替えを行った可能性がある。なお、本炉跡の９・10層は、05-ＳＳ1001の16・17層に相当する。

炉体形状は斜面に直交する方向に長い長楕円形である。炉底面の奥壁から開口部までの長さは約0.75m、幅は約0.15mで、炉体周辺の上部作業場から炉体外部にかけての構築粘土と、地山に被熱が認められる。炉体下部には砂を敷いて作業を行っている。奥壁部には羽口装着孔が残存する。径約0.1mの貫通孔で、炉体中軸線よりやや東寄りに位置する。炉体外部と炉体内部の径にほとんど差がないが、中軸線に対してやや斜めになる。

本炉跡は地山上面に砂を敷いて炉底面とし、壁に炉壁となる粘土を貼り付けて構築した製鉄炉である。本遺構で発生した排材や排滓は、炉跡前面の03-ＳＴ185排滓場に投棄したと考えられる。

遺　物(第322図)　炉内部から炉壁・鉄滓・羽口が出土している。総量は約15.9kgで、その内訳は炉壁4886ｇ、鉄滓約10518ｇ、羽口約503ｇである。炉壁を構成する粘土は、05-ＳＳ1001と同様にスサを大量に含み、圧力を加えるとばらばらに小片化する。鉄滓では鉄塊系遺物が極めて多く出土しており、それと同量の流動滓が伴う。

322図４～６が炉内出土遺物である。５は炉壁で、下部に流動滓状の鉄滓が付着し、上部には砂鉄焼結が認められる。４は炉壁内面下端部に付着した炉底塊である。上面には鉄錆が浮いており、細かい木炭が表面に多量に付着する。６は羽口で、先端部のみの破片である。

05-ＳＳ81製鉄遺構(第323図、図版117・118)

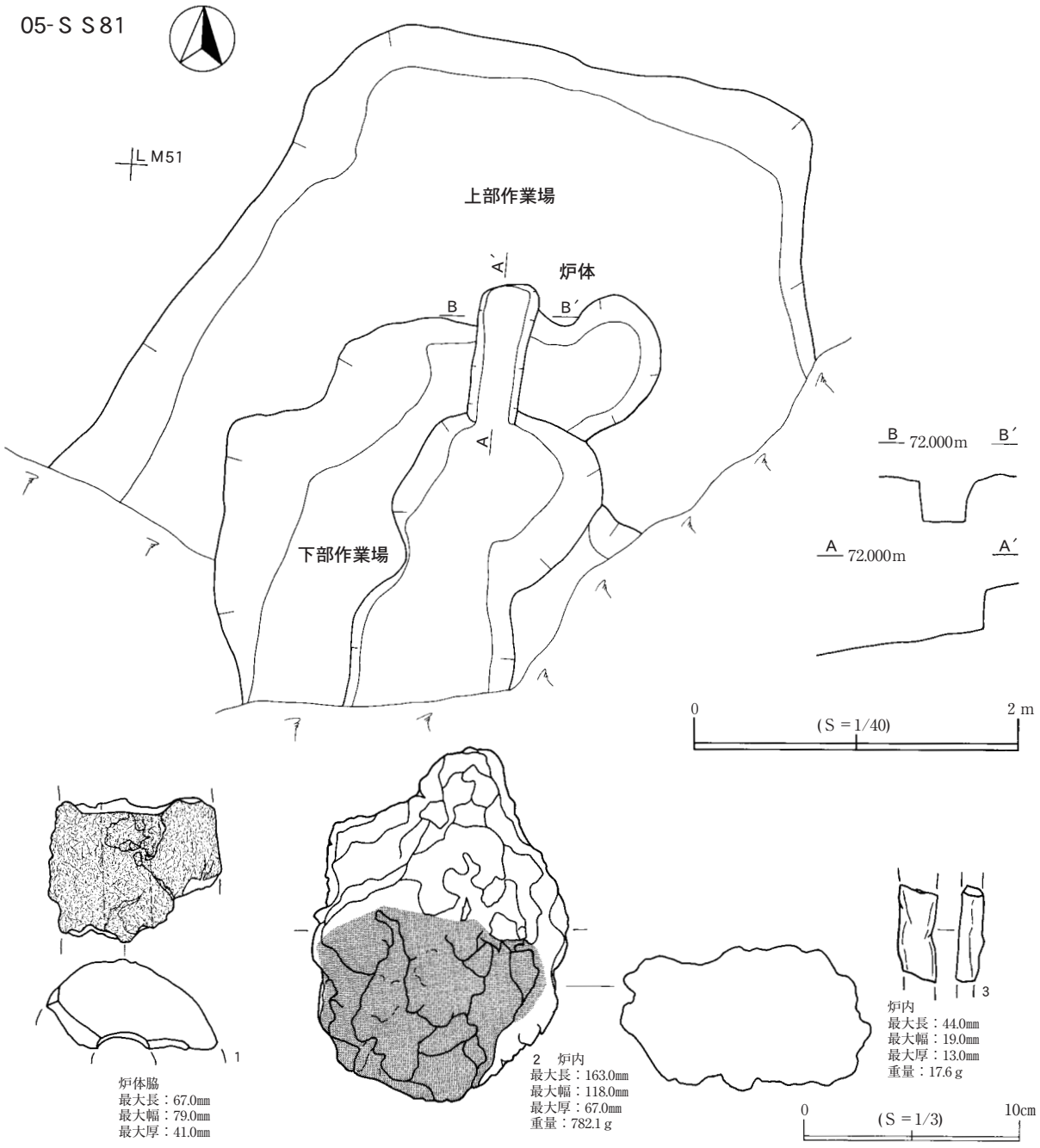
遺　構　ＬＫ・ＬＬ50・51、ＬＭ50グリッドの、05-ＳＳ1001・1002製鉄炉下部で確認した。周囲は05-ＳＳ1001・1002製鉄遺構同様に、砂質土主体の地山層である。

本遺構は１基の製鉄炉と、上部作業場、下部作業場で構成される。上部作業場と炉体の掘形は05-ＳＳ1001・1002の炉体下部で、下部作業場は05-ＳＳ1001・1002の下部作業場下層で確認した。

上部作業場は、基本的に05-ＳＳ1001・1002製鉄遺構の下部作業場に相当する。下部作業場はヒョウタン形の平場で、最長約1.7m、最大幅約1.1m、上部作業場底面との比高約0.4mである。

本遺構は１基の製鉄炉と、鞴座となる上部作業場、排滓場となる下部作業場で構成される一連の製鉄作業場である。05-ＳＳ1001・1002製鉄遺構同様に05-ＳＫ52の階段状の凹凸を通れば、平坦部の居住域からも比較的容易に到達可能である。

遺　物(第323図)　05-ＳＳ1001・1002製鉄遺構により削平と埋め立てを受けているが、わずかに残る堆積土から羽口が出土している。323図１が上部作業場出土遺物で、羽口の破片である。



第323図　05-ＳＳ81製鉄遺構・出土遺物

05-ＳＳ81(第323図、図版117・118)

遺　構　05-ＳＳ81上部作業場のほぼ中央に位置する。05-ＳＳ1001・1002の炉体の断ち割り段階で確認したため、堆積土は大部分を掘り上げている。最下層では黒色砂を確認した。炉体は掘形のみ確認できる。斜面に直交する方向に長い長方形で、炉底面の奥壁から開口部までの長さは約0.8m、幅は約0.2mで、炉体周辺の被熱痕跡は顕著でなく、炉体下部に砂を敷いて作業を行ったとみられる。

本炉跡は地山上面に砂を敷いて炉底面とし、壁に炉壁となる粘土を貼り付けて構築した製鉄炉と想定される。本遺構で発生した排材や排滓は、炉跡前面の03-ＳＴ185排滓場に投棄したと考えられる。

遺　物(第323図)　炉内部から鉄滓・羽口が出土した。総量約3.0kgの内訳は鉄滓2827ｇ、羽口132ｇで、鉄滓はほぼ９割が磁着のある流動滓である。323図２は炉底塊、３は単位流動滓である。

（４） 排滓場

製鉄関連での各種作業で生じた排滓の捨て場として認識できた範囲は、大きく３か所である。

03-ＳＴ185(排滓場)(第324図・325図)

遺　構　03-ＳＴ185土器廃棄層の下部には、鉄関連遺物を多く含む排滓場が存在する。主にＬＫ47・ＬＬ45～48に分布の主体があり、配置からみて05-ＳＳ1001・1002・81に関連する排滓場とみられる。この範囲では明確な人工的地形改変は認められない。

本排滓場は、05-ＳＳ1001・1002・81に付随するものと考えられる。製鉄作業場とは４～５ｍの高低差があり、連続する作業場の存在は想定されず、完全な廃棄スペースと位置付けられる。なお出土鉄滓の傾向から、鉄選別作業の一端を垣間見ることができる。

遺　物　この排滓場から出土した鉄関連遺物については、４ｍグリッドで取り上げた97.23kgを対象に分析する。これらの内磁石に付くものは2830gで約３％である。なお、椀形滓と炉内滓(炉底塊)は割れており、小型の二者５cm以上のものと５cm未満のものでは、椀形滓を明確に分類できなかった。そのため、判断に迷う場合は炉内滓(炉底塊)とした。

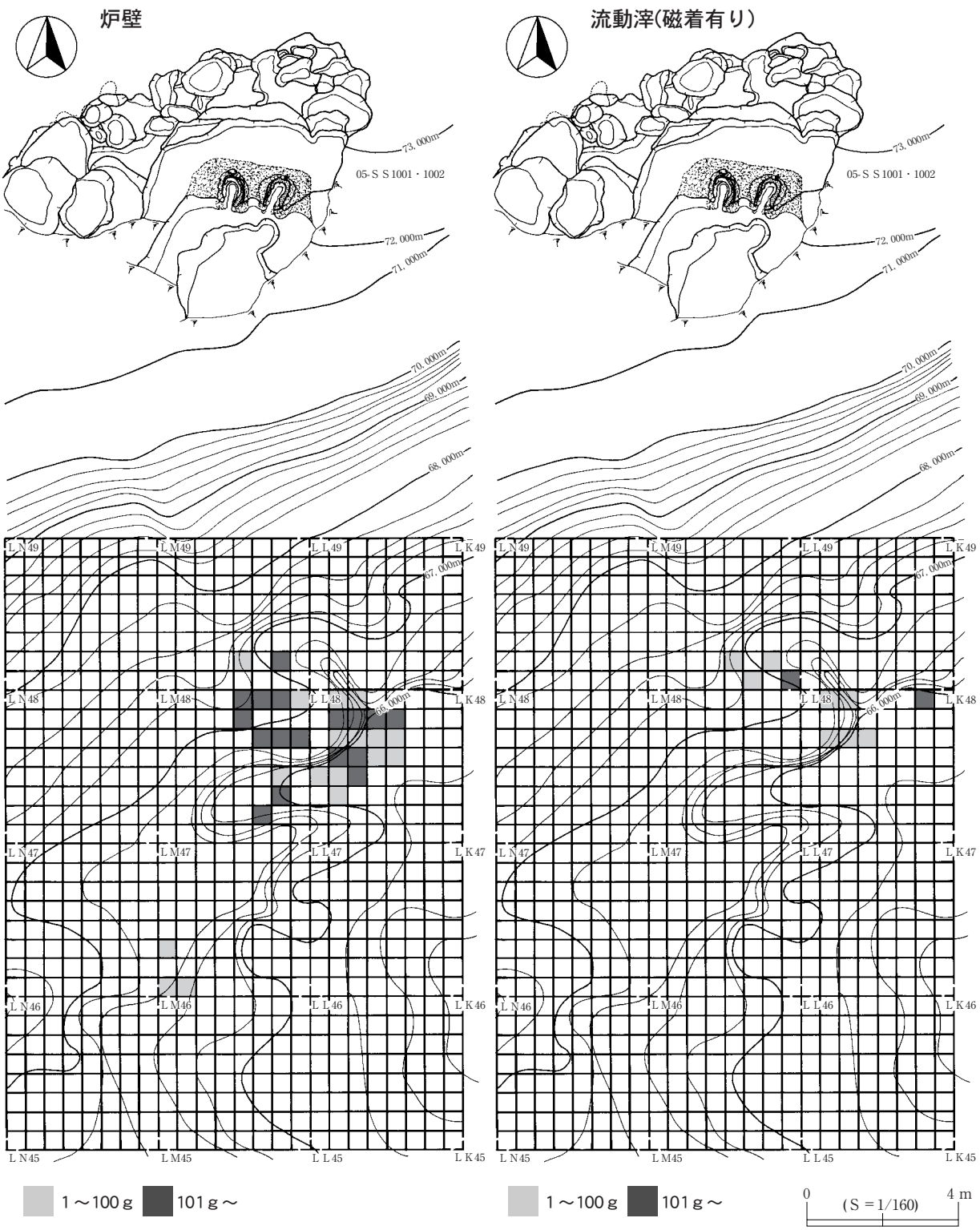
内訳は椀形滓12630ｇ(全体の約13.0%)(以下内●%)で磁着するものはなく、炉内滓(炉底塊)は24330ｇ(内約25.0%)で(そのうち磁着のあるもの約46.6%)(以下磁●%)、流動滓は46330ｇ(内約47.6%)(磁約42.2%)、炉壁は11660ｇ(内12.0%)(磁約3.5%)、羽口は2280ｇ(内約2.3%)である。

磁石に着く鉄滓は、炉内滓(炉底塊)と流動滓で2520ｇ(88.8%)と大半を占める。そのサイズは、20cmを超えるものが1190ｇでほぼ全量であり、大型の１点に鉄分が残されていたことが分かる。流動滓では、20cm未満、５cm以上、５cm未満のものが出土している。炉壁では５cm以上、５cm未満と小さい破片に鉄分が付着しており、羽口破片では20cm未満の比較的大型の破片に鉄分が付着している。

椀形滓は大型の20cm以上と20cm未満の２種類しか弁別できなかったが、鉄分を含むものがなく、炉床に残った鉄分は工人が小割りした上で、徹底的に回収したことを示すと考えられる。同時に、鉄滓分類・分析における分類者側の問題点として、小型椀形滓や椀形滓破片が、炉内滓(炉底塊)破片として分類していることも示している（前記の通り、分からないものは炉内滓破片とした）。

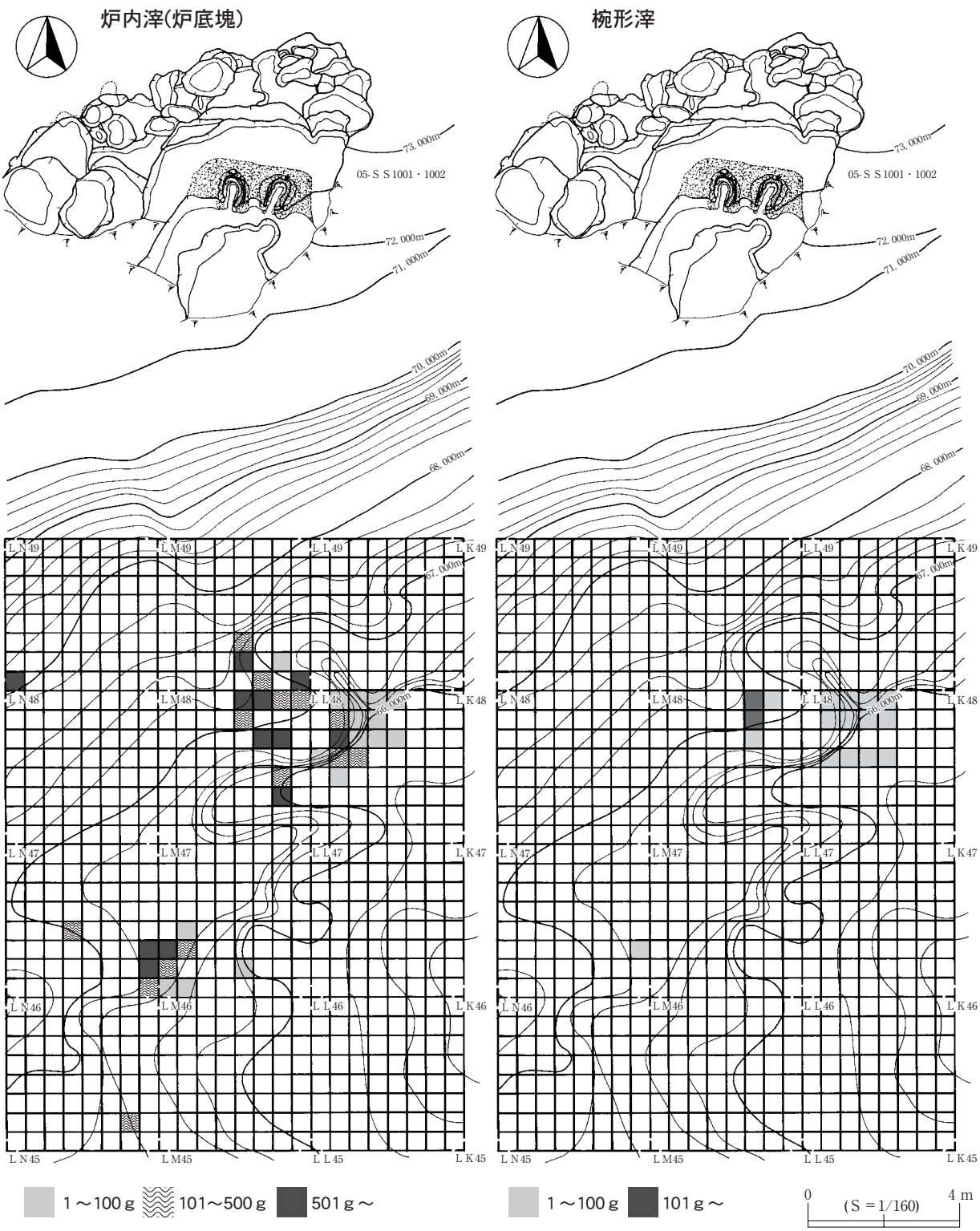
炉内滓(炉底塊)全体のサイズと、鉄分が残存した炉内滓(炉底塊)のサイズ分布の違いには特徴がある。最も多い20cm未満の炉内滓(炉底塊)では、鉄分が残っていない。次に多い５cm以上の炉内滓6580ｇでは、60ｇで１％未満となる。ところが、20cm以上の炉内滓では、出土重量2950ｇ中1190ｇとおよそ３分の１である。また、５cm未満の炉内滓でも1410ｇ中70ｇで約５％に鉄分が残る。これは、工人達が炉内滓の塊を５cm以上20cm未満まで小割りして鉄分を探したが、それよりも小型の破片からは、効果的に鉄分を回収できなかったことを示している。逆に、20cmを超える炉内滓の３分の１に鉄分が残る点は、回収技能の上下ではない別な理由があると考えられる。

この点は、第１集中区から出土した鉄滓全体と、磁石に付く鉄滓の大きさ・重量を比較してもよく分かる。磁石に着く鉄滓は流動滓が87.6%を占め、かつ20cm未満の比較的大型のものが520ｇと流動滓の50%以上を占めている。残りが５cm以上のもので430ｇであり、合計すると90%を超えている。炉内滓(炉底塊)では、20cm未満の大型滓からは完全に鉄を回収している。流動滓で大型のものに鉄が残るのは、炉内滓(炉底塊)ほど鉄を探していないことを示す可能性がある。



第324図　03-ＳＴ185排滓場１

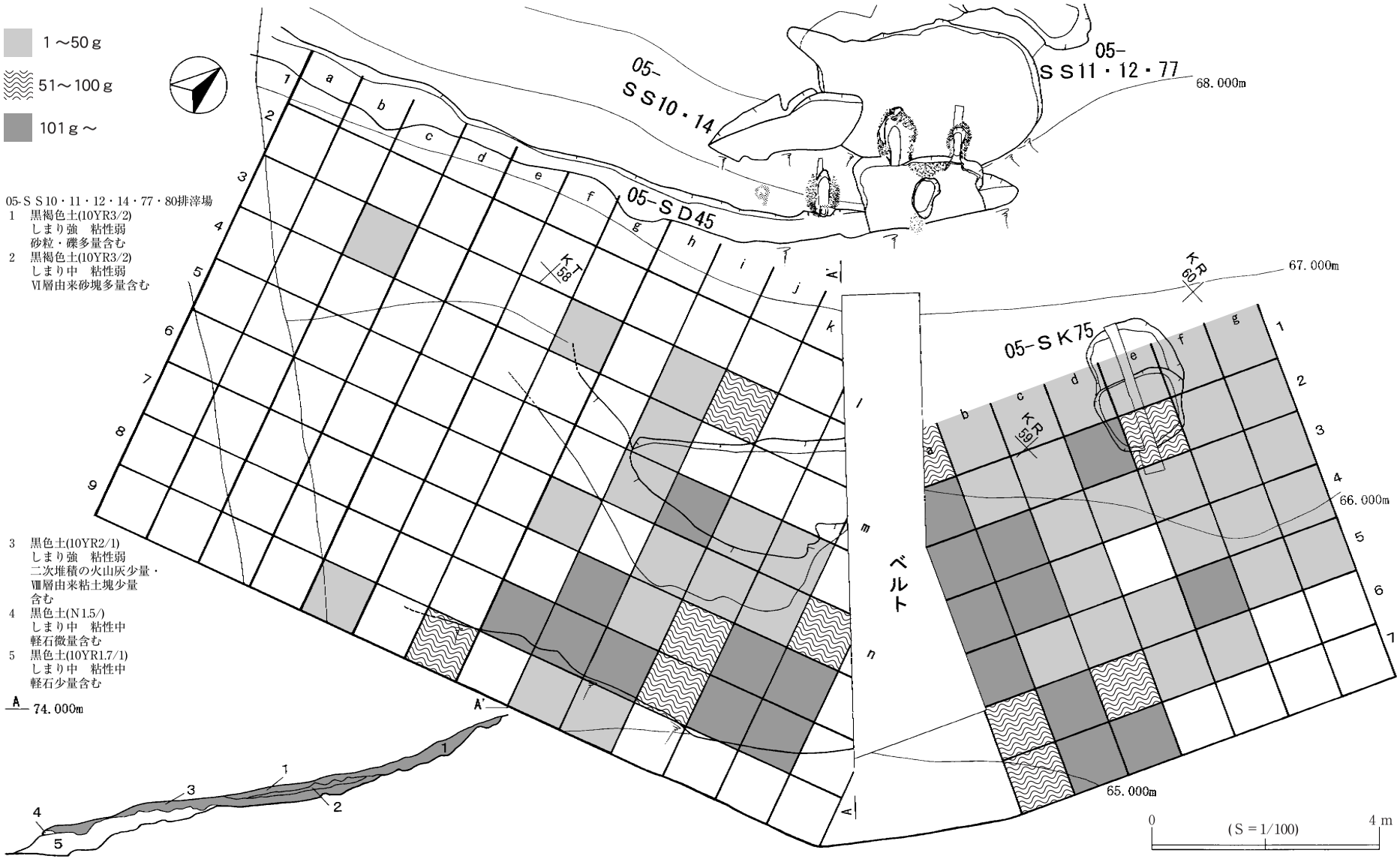
流動滓の出土量は全体の57.2%だが、単純な重量比でも57.2%に対して、鉄を含む流動滓は87.6%と鉄が含まれる率が高い。反面、炉内滓(炉底塊)では全体で17.4%の出土率で、鉄残存比では4.1%のみである。おそらく、工人による鉄回収の優先度を反映しているのだろう。つまり、流動滓からはそれほど真剣に鉄を回収する必要がない＝元々流動滓に含まれる鉄分は極低い事を示すと考えられる。



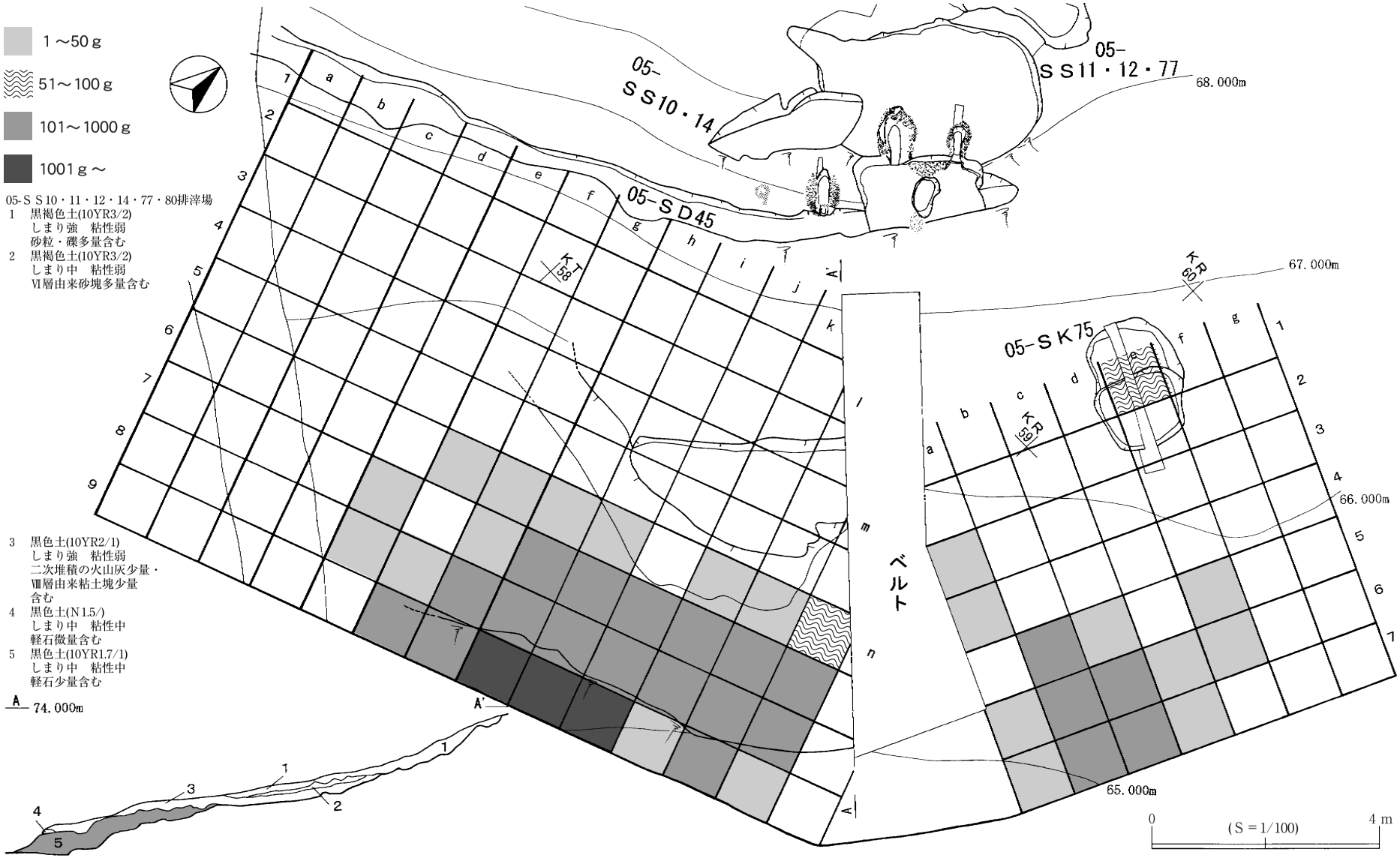
第325図　03-ＳＴ185排滓場２

05-ＳＳ10・11・12・14・77・80排滓場(第326図～343図、図版121)

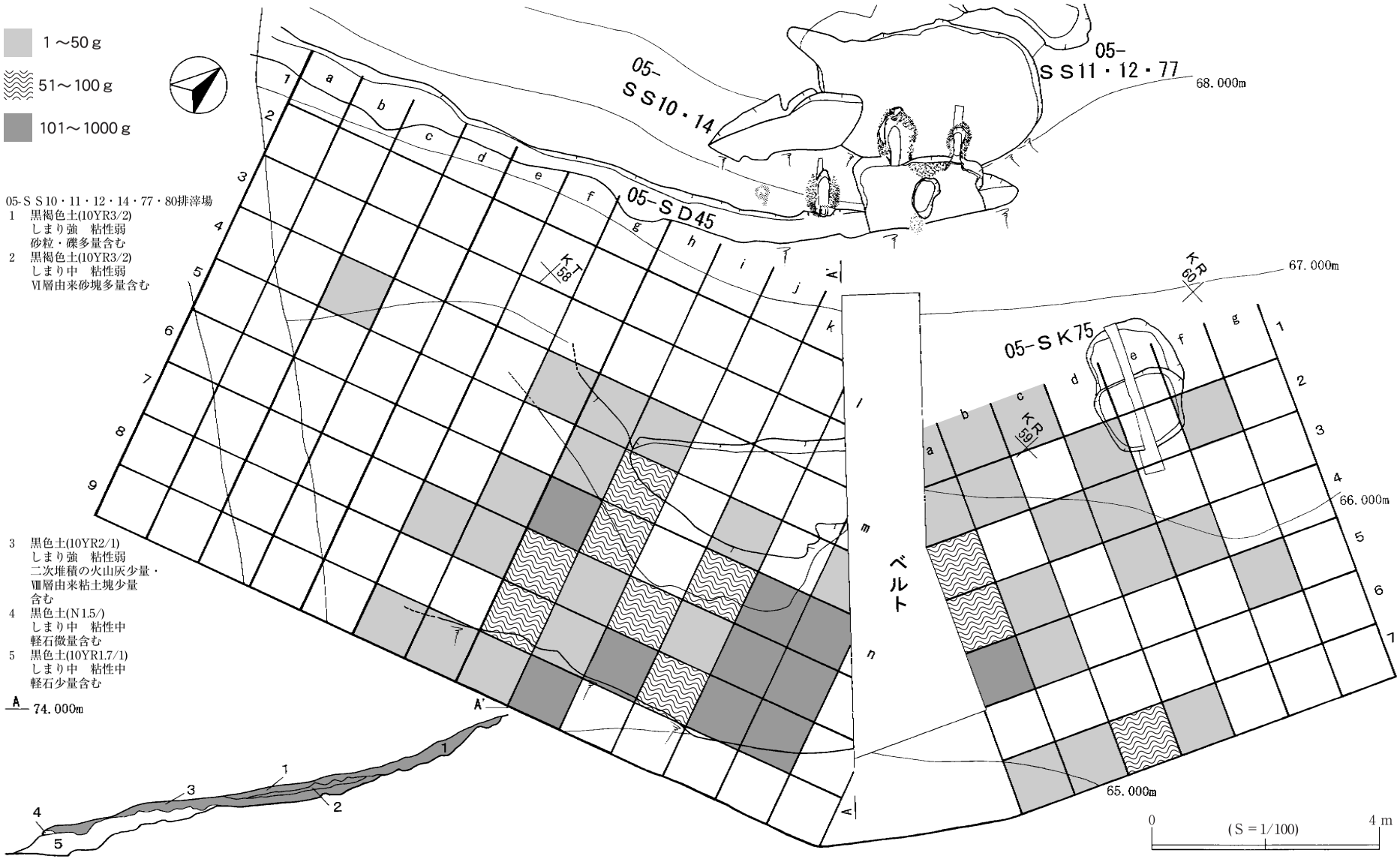
遺　構　ＫＰ60グリッドが北東端、ＫＴ57グリッドが南西端となる範囲に形成される、基本的には自然地形を利用した排滓場である。地形は丘陵部の山麓緩斜面で、全体としては緩やかに東側へ傾斜する。斜面下位の調査区外は、耕地造成時に掘削を受けて水路になっており、本来の地形を失っている。



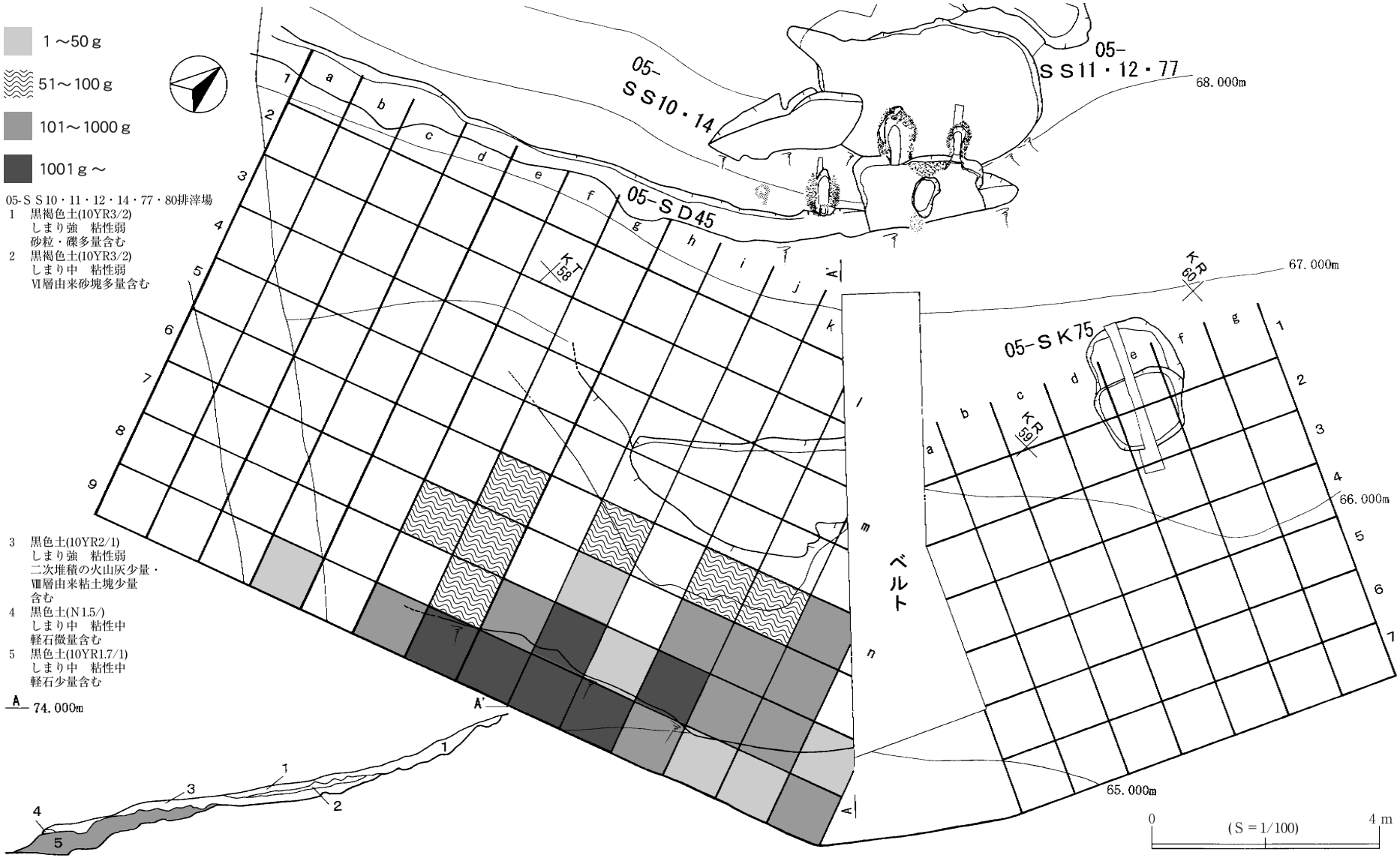
第326図　05-ＳＳ10・11・12・14・77・80排滓場(炉壁Ａ出土状況１)



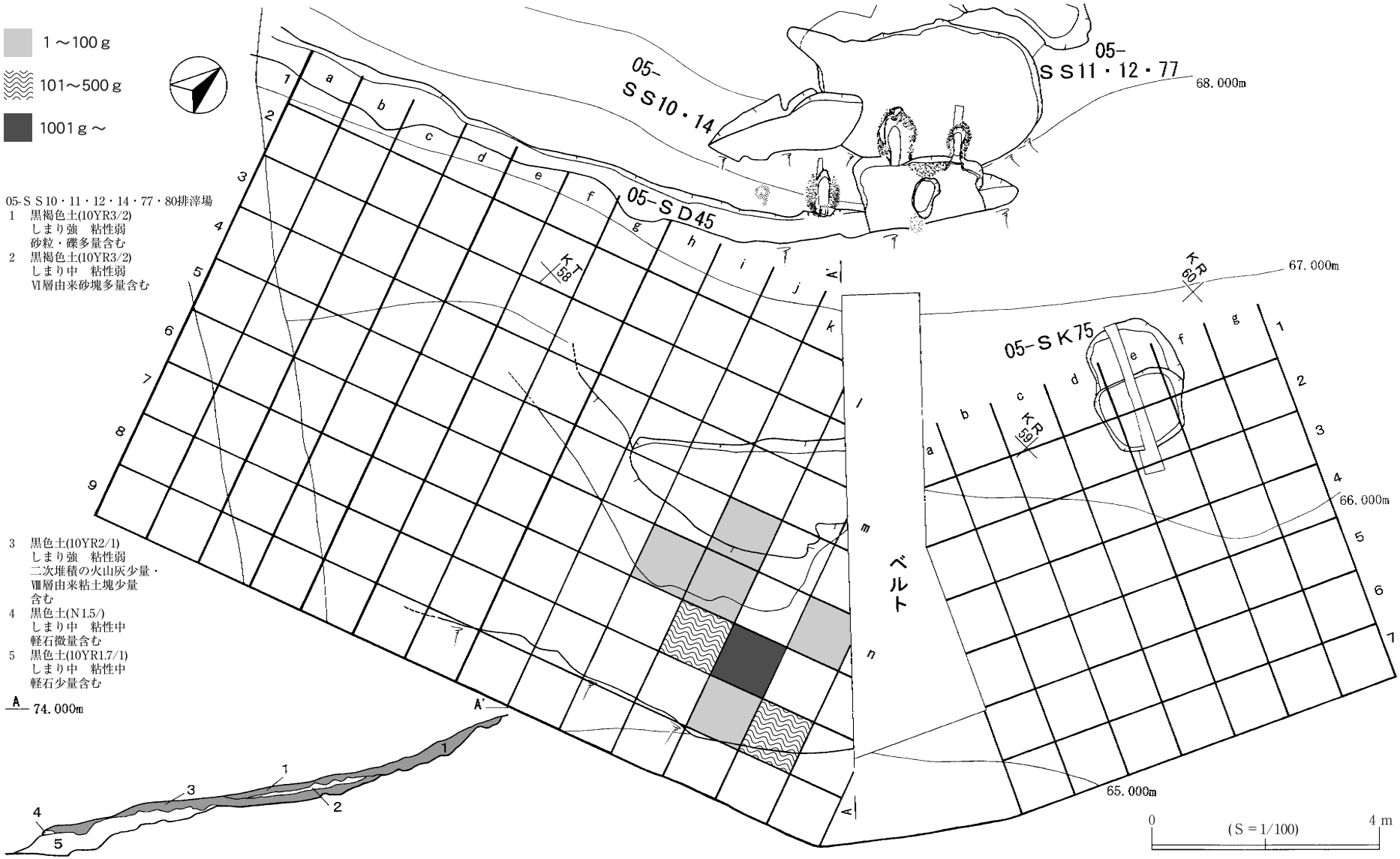
第327図　05-ＳＳ10・11・12・14・77・80排滓場(炉壁Ａ出土状況２)



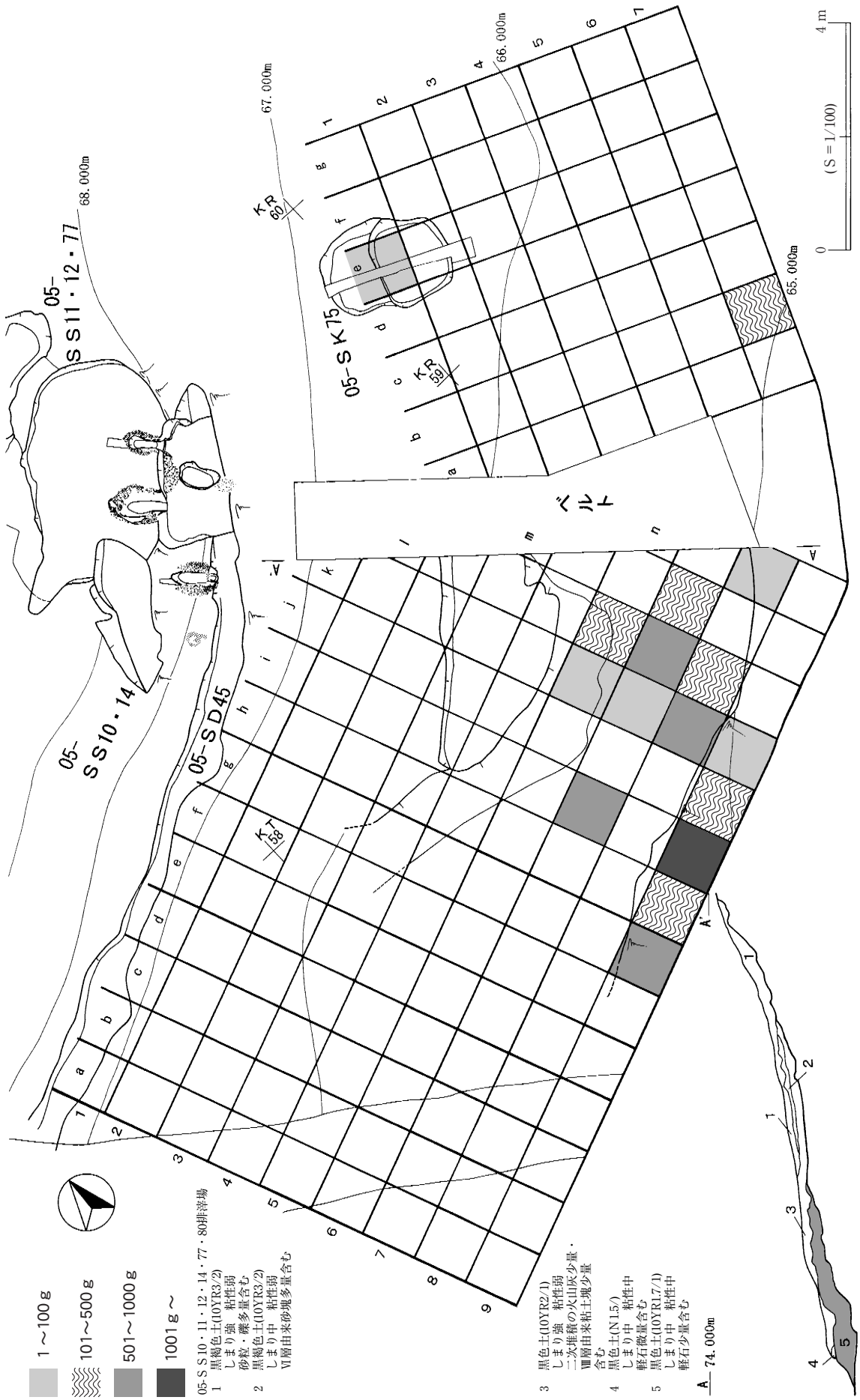
第328図　05-ＳＳ10・11・12・14・77・80排滓場(炉壁Ｂ出土状況１)



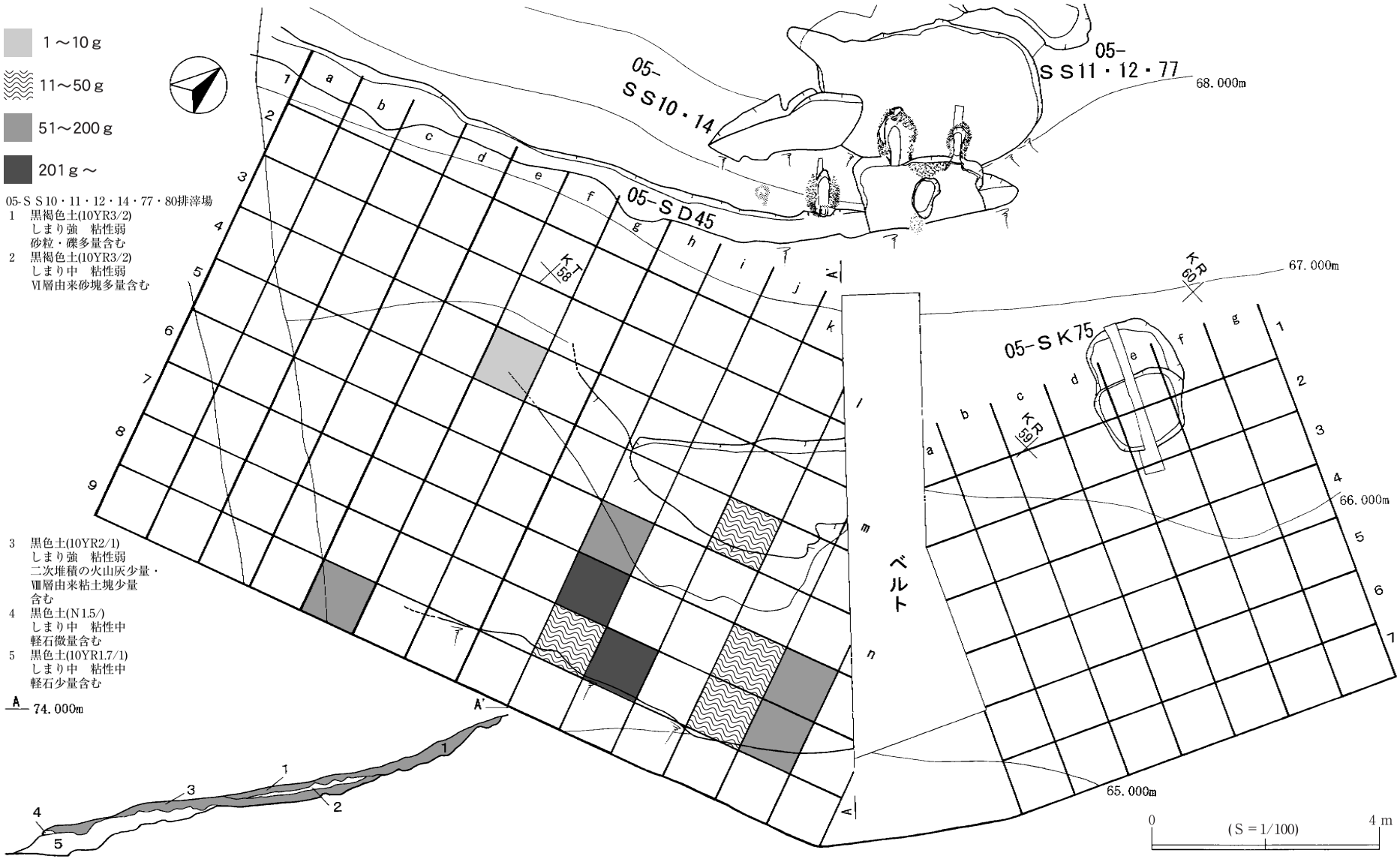
第329図　05-ＳＳ10・11・12・14・77・80排滓場(炉壁Ｂ出土状況２)



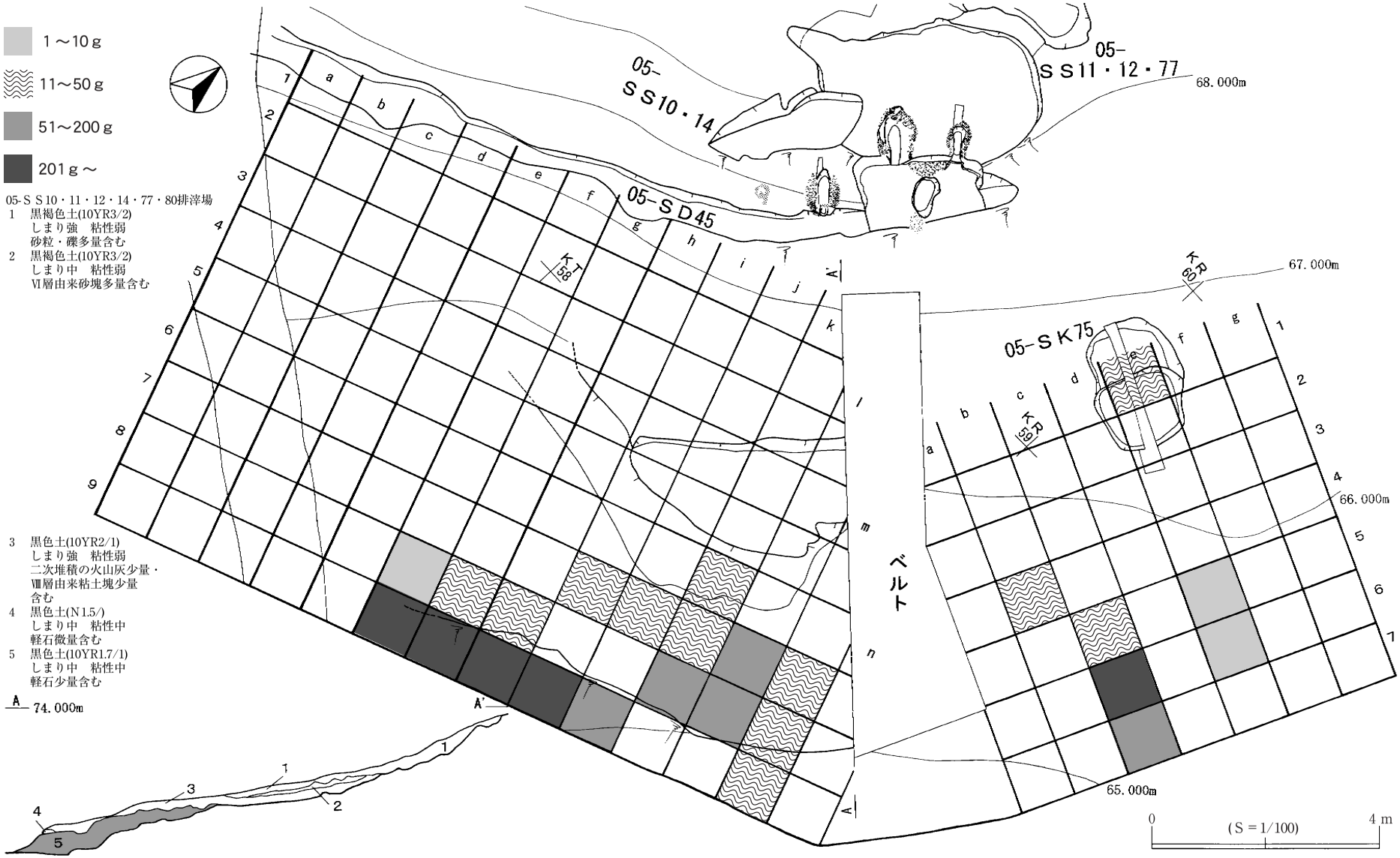
第330図　05-ＳＳ10・11・12・14・77・80排滓場(炉底塊出土状況１)



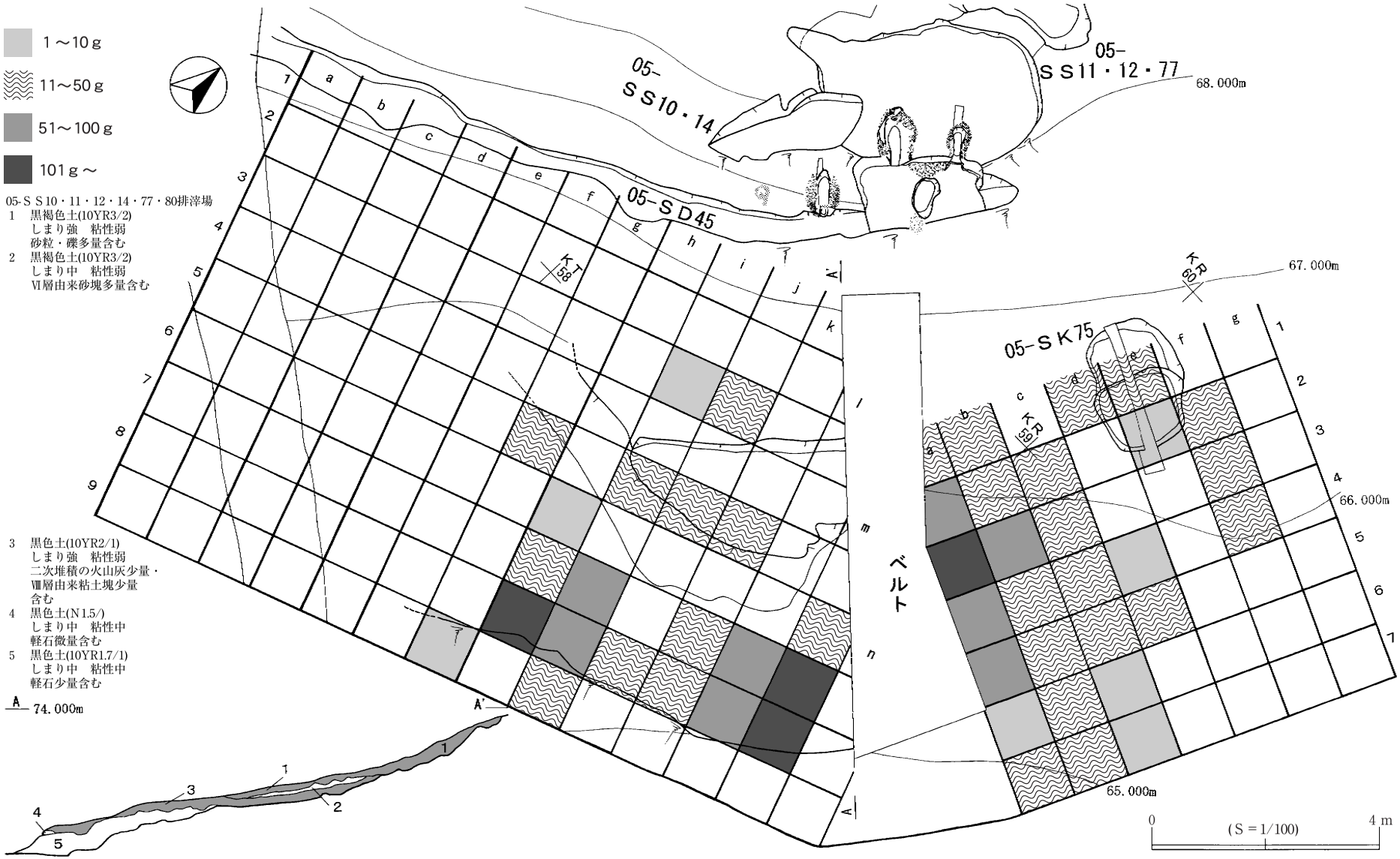
第331図　05-ＳＳ10・11・12・14・77・80排滓場(炉底塊出土状況２)



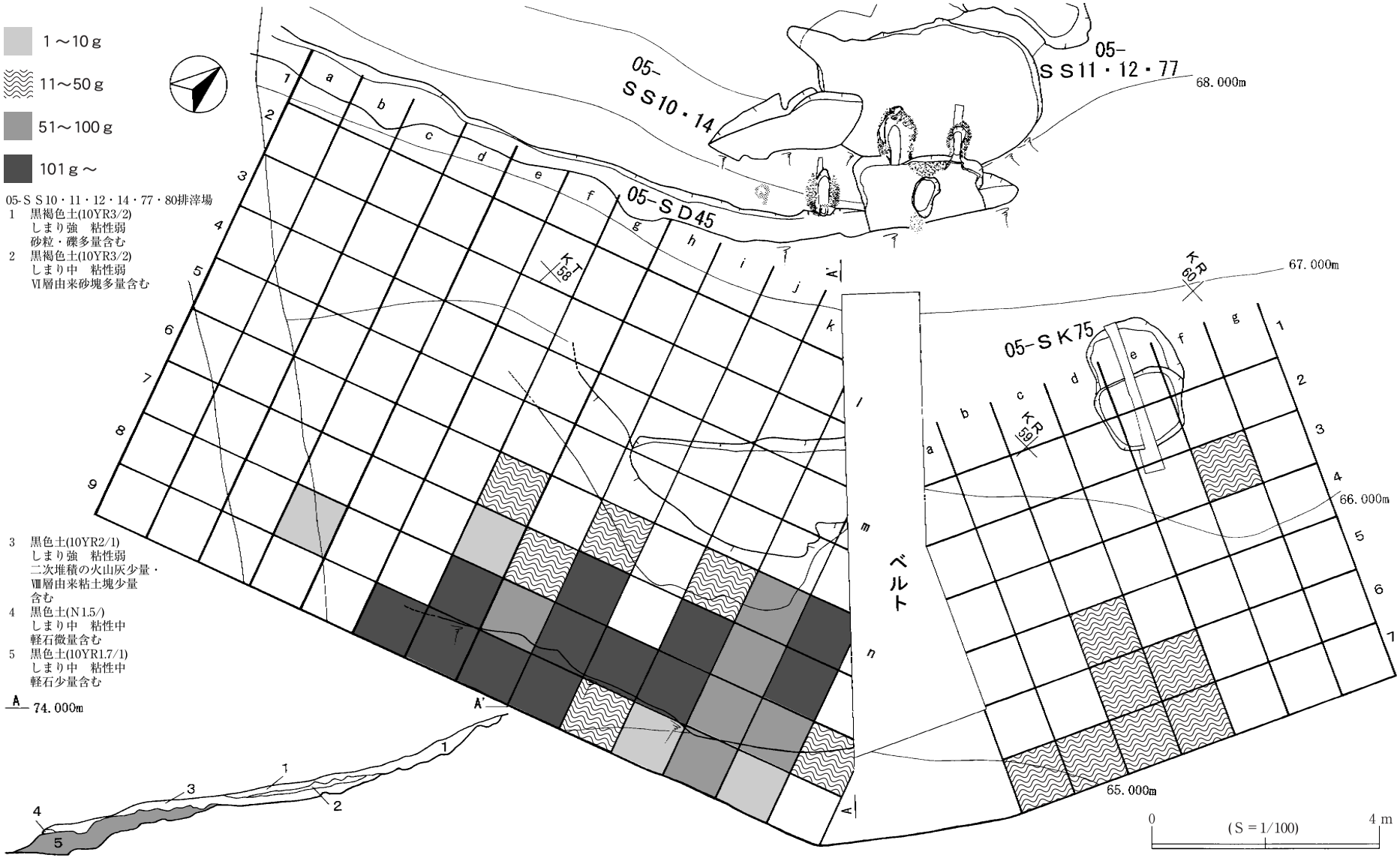
第332図　05-ＳＳ10・11・12・14・77・80排滓場(炉内滓出土状況１)



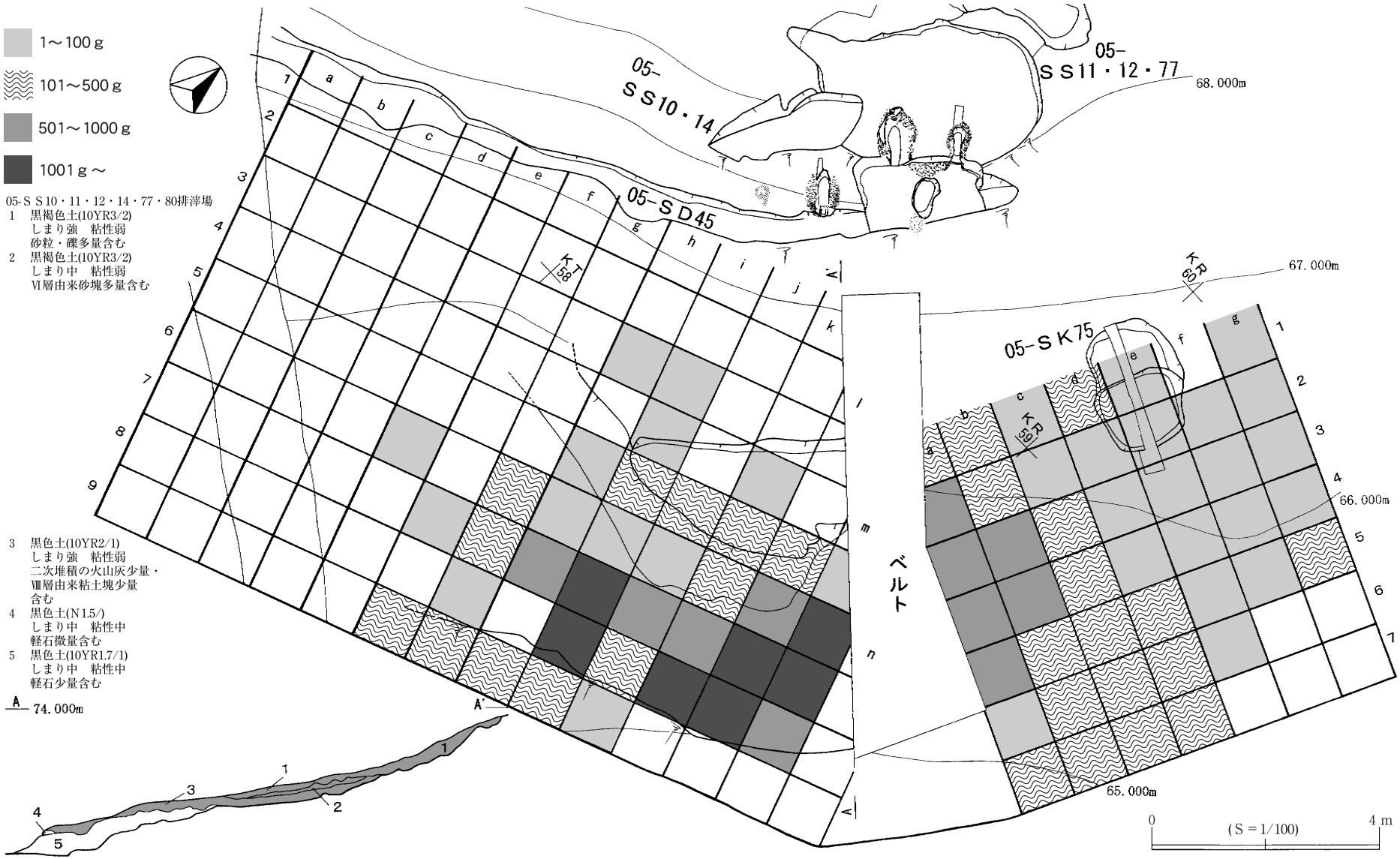
第333図　05-ＳＳ10・11・12・14・77・80排滓場(炉内滓出土状況２)



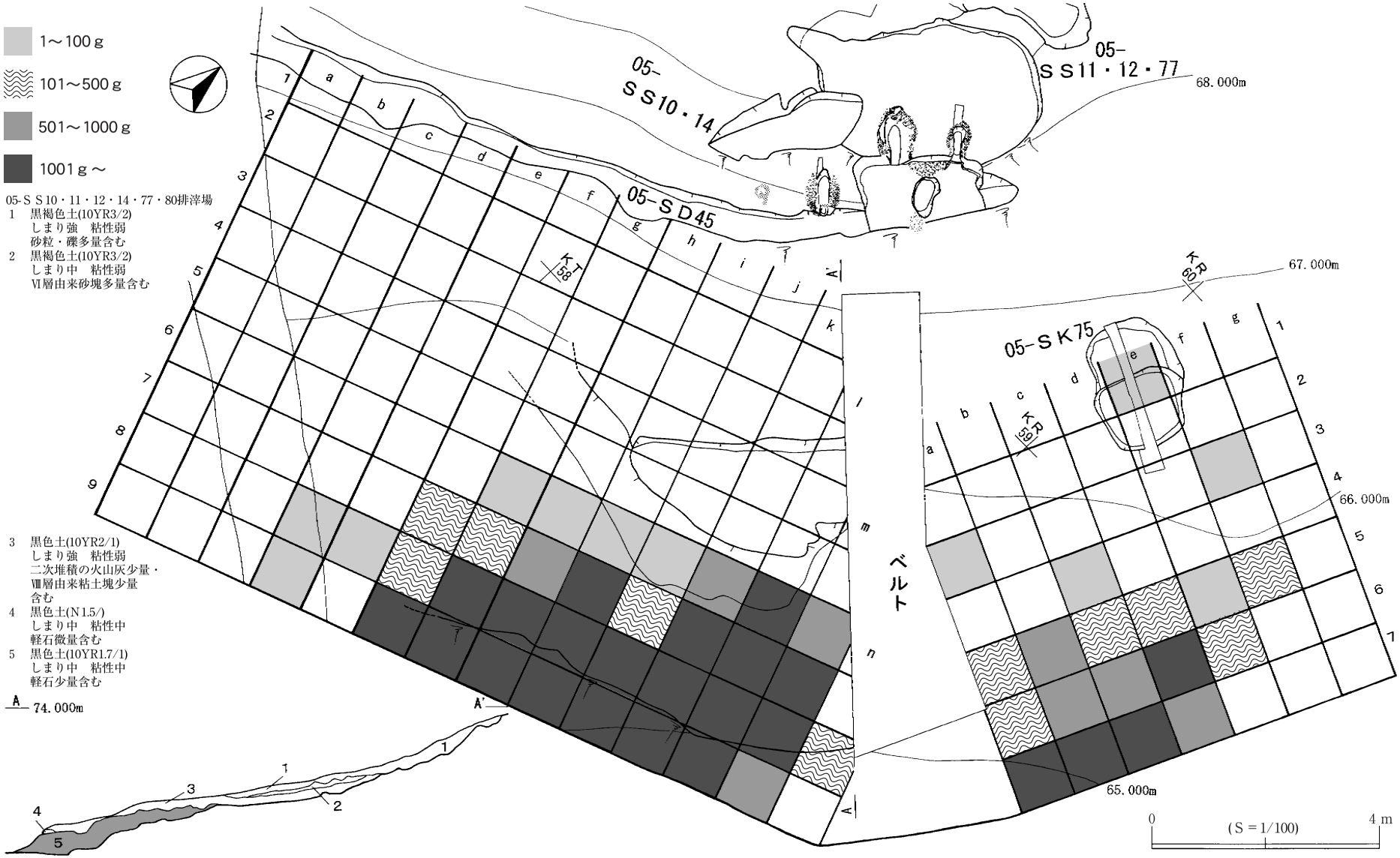
第334図　05-ＳＳ10・11・12・14・77・80排滓場(鉄塊系遺物出土状況１)



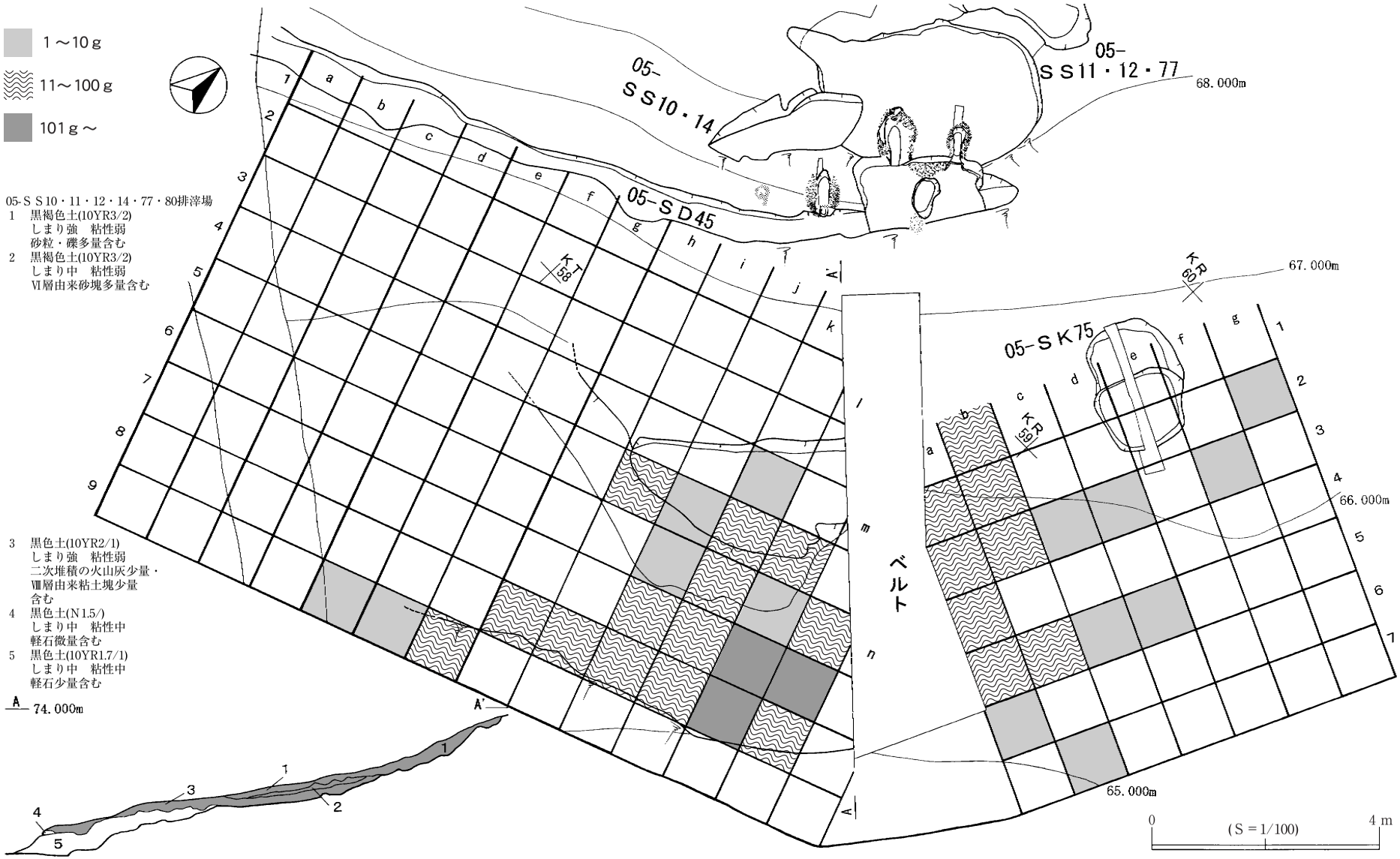
第335図　05-ＳＳ10・11・12・14・77・80排滓場(鉄塊系遺物出土状況２)



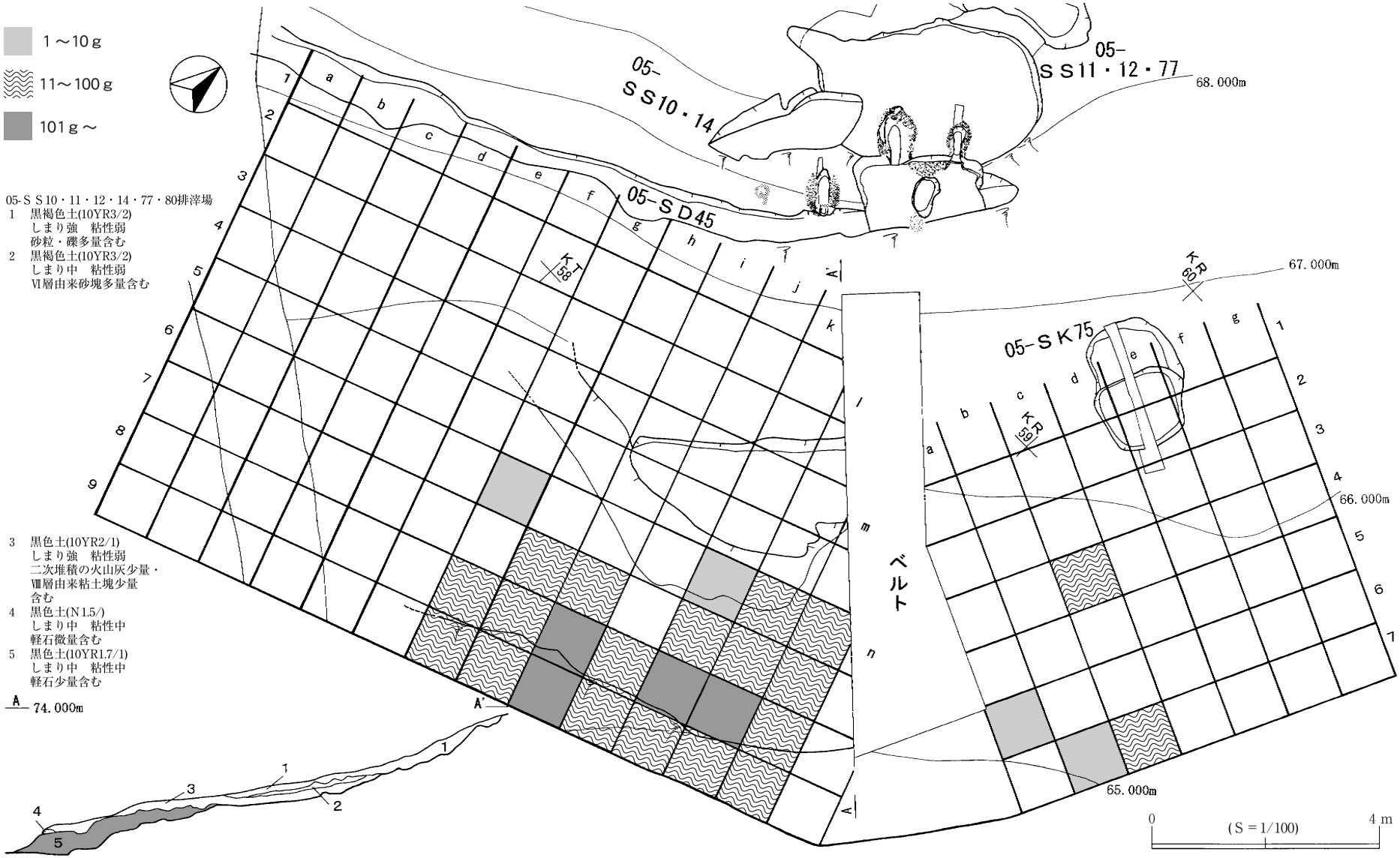
第336図　05-ＳＳ10・11・12・14・77・80排滓場(流動滓出土状況１)



第337図　05-ＳＳ10・11・12・14・77・80排滓場(流動滓出土状況２)



第338図　05-ＳＳ10・11・12・14・77・80排滓場(単位流動滓出土状況１)



第339図　05-ＳＳ10・11・12・14・77・80排滓場(単位流動滓出土状況２)

堆積土確認のため残したベルト部分を境に、北東側と南西側へ緩やかに傾斜しており、この２分される範囲は、それぞれ北東側が05-ＳＳ11・12・77・80前面に、南西側が05-ＳＳ10・14前面に当たるため、遺物取り上げもそれぞれ独自のグリッド名を付けた。

Ａ－Ａ´ラインで堆積土を確認したところ５層に分けられた。２・４層は薄い間層で、主体となるのは１・３・５層である。いずれも遺物を大量に含むが、下部の５層が比較的量が多いため、遺物のグリッド別分布図は、１・３層出土と５層出土に分けて掲載している。05-ＳＳ10・14前面にはテラス状の平坦面がある。斜面を段状に切り落としており、人為的な造成地である可能性が高く、おそらく作業場とみられる。05-ＳＳ11・12・77・80前面の05-ＳＫ75も、同様に作業場の可能性がある。

本排滓場は、05-ＳＳ10・11・12・14・77・80製鉄遺構に隣接する廃棄場であり、その内部には小割作業場の痕跡とみられる、テラス状遺構も存在する。

遺　物(第340図～343図)　326図～339図に鉄関連遺物別に、グリッド別・層位別の出土量図を示した。

炉壁は、胎土にスサ等の混入物が少ないものを炉壁Ａ、多いものを炉壁Ｂと分けた。両排滓場を併せた炉壁出土量は約59.4kgである。内訳は炉壁Ａ約25.1kg、炉壁Ｂ34.8kgで、05-ＳＳ10・14前面の１～３層で炉壁Ａの比率がやや高く、５層では炉壁Ｂの比率が炉壁Ａの約1.7倍になり、05-ＳＳ11・12・77・80前面では１～５層で炉壁Ａの比率が約２倍になる。なお排滓場別出土量では、05-ＳＳ10・14前面が約53.5kg、05-ＳＳ11・12・77・80前面が約5.9kgで、前者が後者の約９倍になる。

鉄滓出土量は両排滓場の合計で約138.5kgで、それぞれ05-ＳＳ10・14前面が約112.5kg、05-ＳＳ11・12・77・80前面が約26.0kgで、約５倍の開きがあり、炉壁の出土量と併せてみても05-ＳＳ10・14前面が主体であることが分かる。排滓場ごとの内訳を以下にみる。

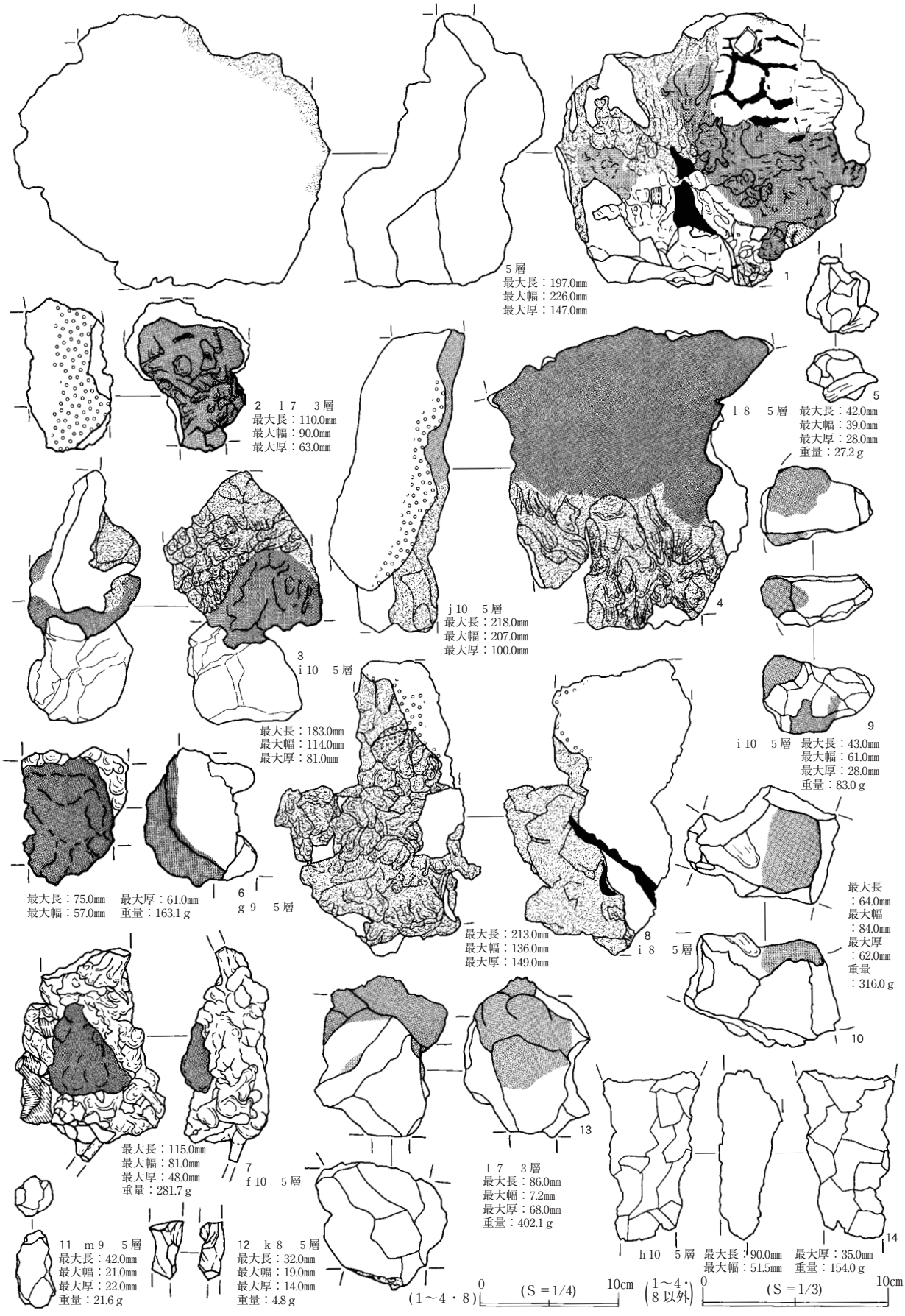
05-ＳＳ10・14前面では、１～３層出土が約30.4kgで、そのうち炉底塊2623ｇ(磁31％)、炉内滓1045ｇ(磁約56％)、鉄塊系遺物951ｇ、流動滓23389ｇ(磁約７％)、単位流動滓693ｇ、その他1723ｇである。５層出土が約82kgで、炉底塊6732ｇ(磁約51％)、炉内滓1730ｇ(磁約35％)、鉄塊系遺物3000ｇ、流動滓60272ｇ(磁約７％)、単位流動滓1454ｇ、その他8842ｇである。下層ほど鉄分を多く含む炉底塊の比率が高いが、鉄塊系遺物の割合は上下層とも全体の約３％ほどである。

05-ＳＳ11・12・77・80前面では、１～３層出土が約13.2kgで、そのうち炉底塊578ｇ(磁100％)、鉄塊系遺物781ｇ、流動滓11546ｇ(磁約94％)、単位流動滓284ｇである。５層出土が約12.9kgで、炉底塊583ｇ(磁約15％)、炉内滓349ｇ(磁約56％)、鉄塊系遺物222.5ｇ、流動滓11391ｇ(磁約３％)、単位流動滓64ｇ、その他300ｇである。上層に明らかに磁着率の高い遺物が集まっており、同地点が小割や選別作業を行った地点へと変化したことを窺わせる。

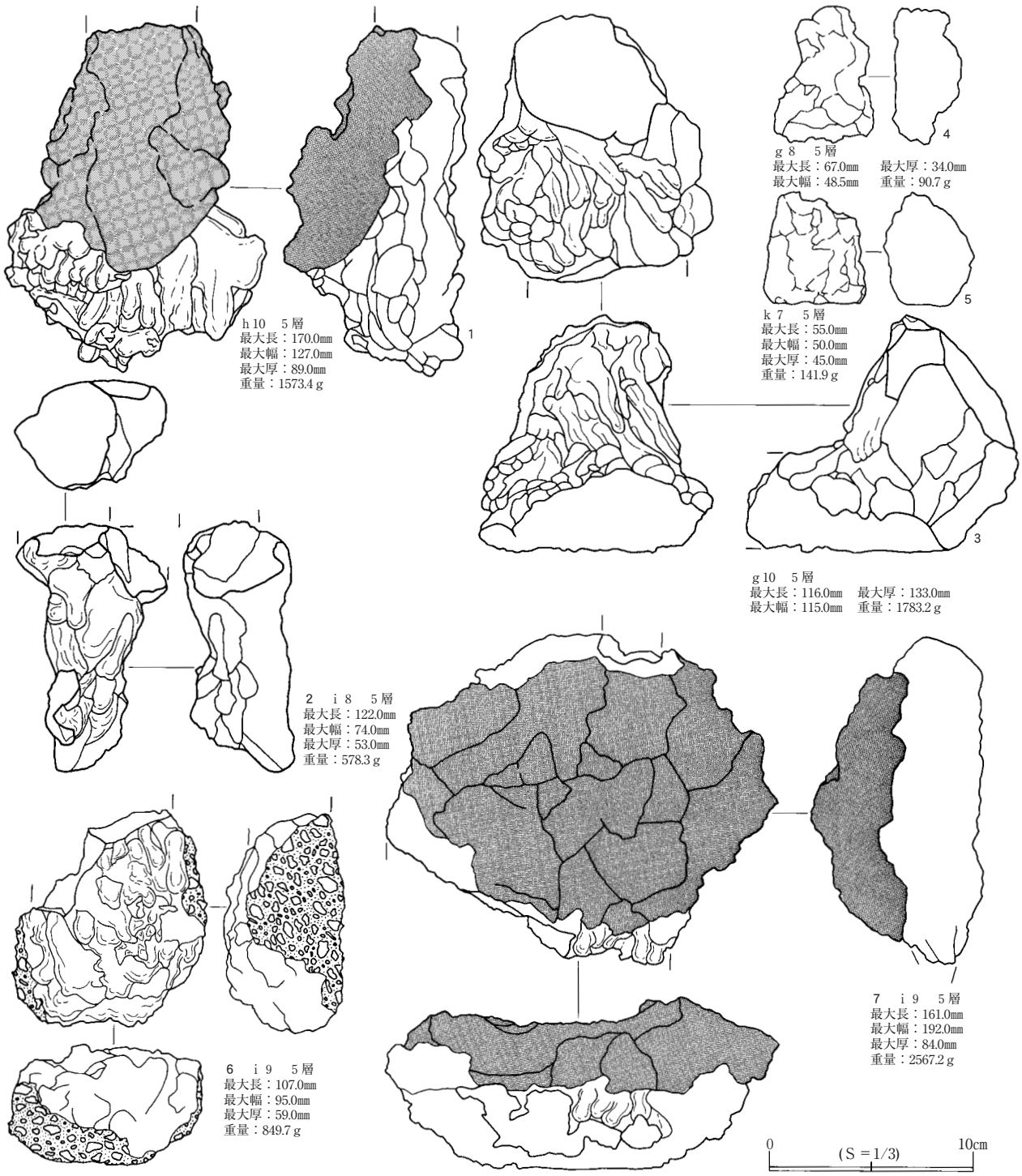
05-ＳＳ11・12・77・80前面の１～３層は明らかに異質な傾向を示しており、排滓場が埋没していく過程で、作業スペースを変更していった過程を示すと考えられる。

平面分布で確認すると、炉壁は、05-ＳＳ10・14前面ではｇ５～ｍ９グリッドの範囲で、05-ＳＳ11・12・77・80前面では、ａ２～ｅ７より南側に比較的集中が認められる。この分布とほぼ同様なのが、鉄塊系遺物・流動滓・単位流動滓である。これらに比べやや偏りがみられるのが、炉底塊と１～３層出土の炉内滓である。特に炉底塊は05-ＳＳ10・14前面のテラス状平坦面の斜面下位に集中する。

340図～342図は、05-ＳＳ10・14前面からの出土遺物である。340図１～４・８は炉壁で、１・２は炉壁Ａ、３・４・８は炉壁Ｂである。炉壁Ａでは１のように炉体内面にヒビ割れが目立つ。２・４は



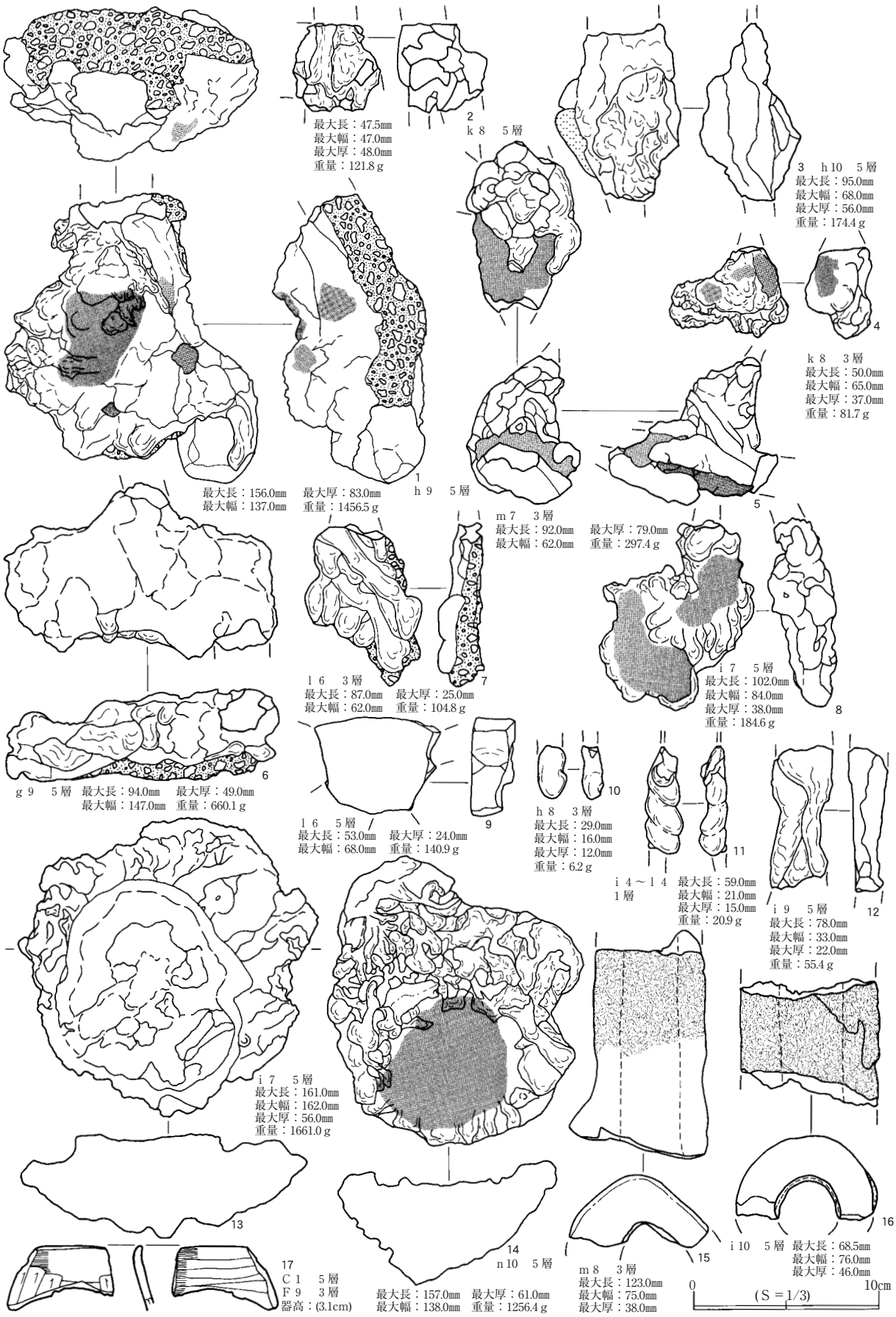
第340図　05-ＳＳ10・14排滓場出土遺物１



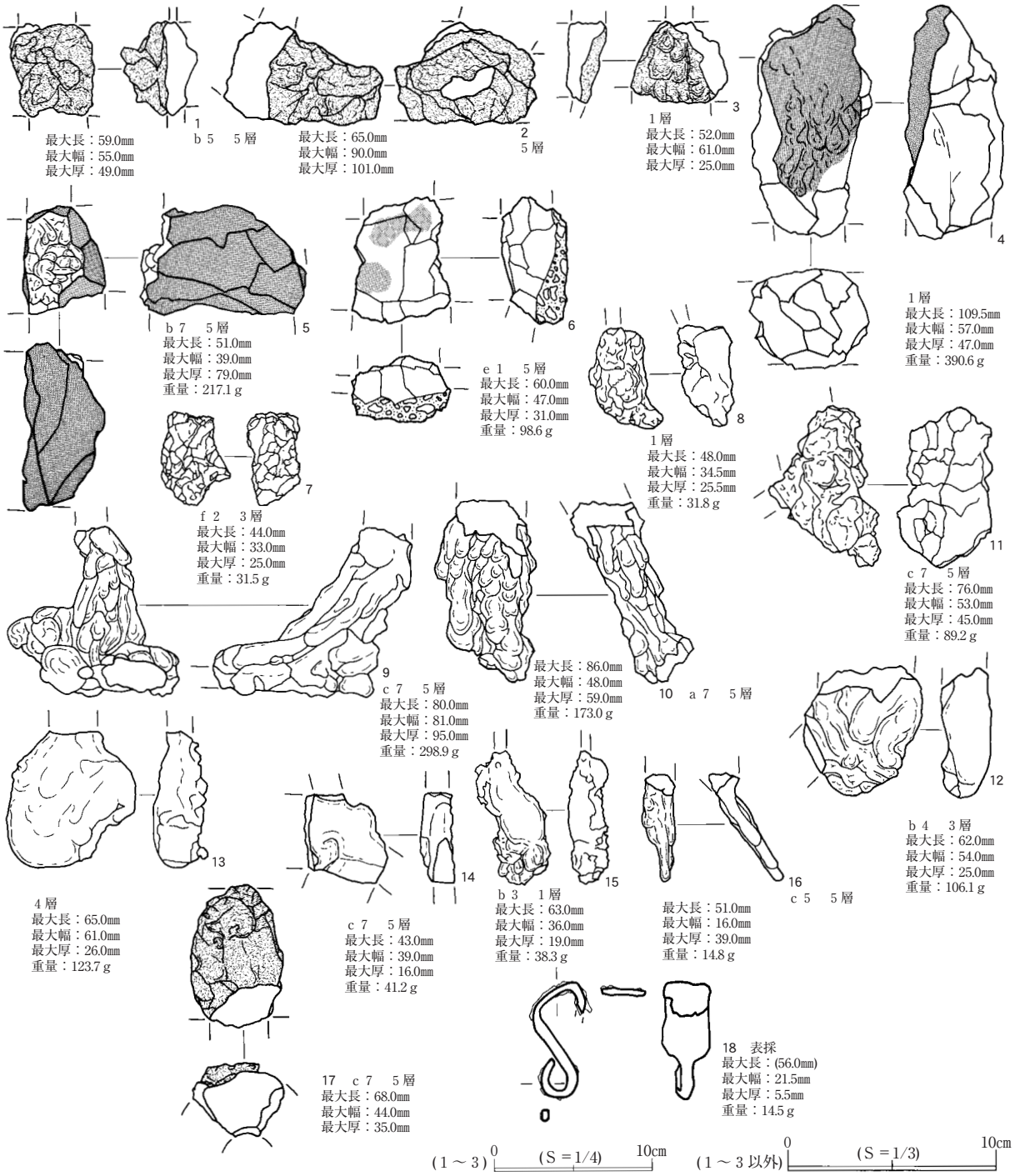
第341図　05-ＳＳ10・14排滓場出土遺物２

内面に鉄滓が多く付着し、スポンジのように発砲している。３・４・８は流動滓状の鉄滓が付着しており、炉体下部の破片とみられる。340図５～７は炉内滓で、５・７は木炭の痕跡をとどめている。340図９・10・13は炉底塊の小割滓で、上面に鉄錆が付着する。340図14も全面小割の痕跡が認められるが、鉄分が認められないため残核と考えられる。340図11・12は小割時に発生した砕片とみられる。

341図１・２は流出孔滓で、上流部末端に流出孔の形状をとどめる。１は上面に鉄分を多く含む層がのっている。341図３も比較的流出孔に近い位置の流動滓で、斜位に流れ落ちて接地した部分が残る。341図６は流出溝滓とみられ、側面に地表面の砂や小石が多く付着している。341図７は比較的流



第342図　05-ＳＳ10・14排滓場出土遺物３



第343図　05-ＳＳ11・12・77・80排滓場出土遺物４

出孔に近い位置で、凹みに溜まった鉄滓とみられる。上部に厚く鉄の層が付着しており、上面には小割の痕跡が認められる。炉底塊とも考えられるが、上流部に細い流れ筋からの破断面がある。

342図１～12は流動滓である。５は斜位に落下した形状をとどめるもので、これ以外は平坦に流れたものである。１・６は上流部の流れ幅が狭く、下流部幅が広いことから流出孔に近いとみられる。９は上面が水平である。10～12は単位流動滓である。342図13・14は椀形滓で、上面中央部から放射状に流れ筋が広がる。14は上面に鉄錆付着範囲が認められる。342図15・16は羽口で、どちらも装着部を欠損する。342図17は土師器甕の口縁部破片である。

343図は05-ＳＳ11・12・77・80前面範囲出土の遺物である。１～３は炉壁で、内面に鉄滓が付着する。４～６は炉底塊の小割滓である。４・６は上面に、５は全面に鉄錆の付着が認められる。７・８は鉄塊系遺物で、小型の流動滓状の形態である。９～16は流動滓である。９・10・16は斜位に落下する流れをとどめ、これ以外は平坦に流れた痕跡をとどめる。15・16は単位流動滓である。17は羽口の装着部破片である。18はフック状の鉄製品で、用途は不明である。以上の05-ＳＳ11・12・77・80前面範囲の出土遺物は、05-ＳＳ10・14前面範囲の出土遺物に比べ、全体的に小型のものが多い。

05-ＳＳ34排滓場(第344図～353図、図版121)

遺　構　ＫＰ64グリッドが北東端、ＫＳ60グリッドが南西端の範囲に形成される、基本的には自然地形を利用した排滓場である。一部05-ＳＩ53・73廃絶後の竪穴掘り込みの凹みを利用するとみられる。地形は丘陵部の山麓緩斜面で、全体的に東側へ緩く傾斜する。斜面下位になる調査区外は、耕地造成時に掘削を受けて水路になっており、本来の地形を失っている。

Ａ－Ａ´ラインで堆積土を確認したところ３層に分けられた。１～３層まで、いずれも大量に遺物を含んでおり、出土量による上下区分を認めがたいため、ほとんどの遺物は１～３層まで一括して遺物のグリッド別分布図を掲載している。想定される範囲内には、住居跡以外に人工的に地形を改変した場所は認められず、作業場なども自然の地形をそのまま利用したと考えられる。

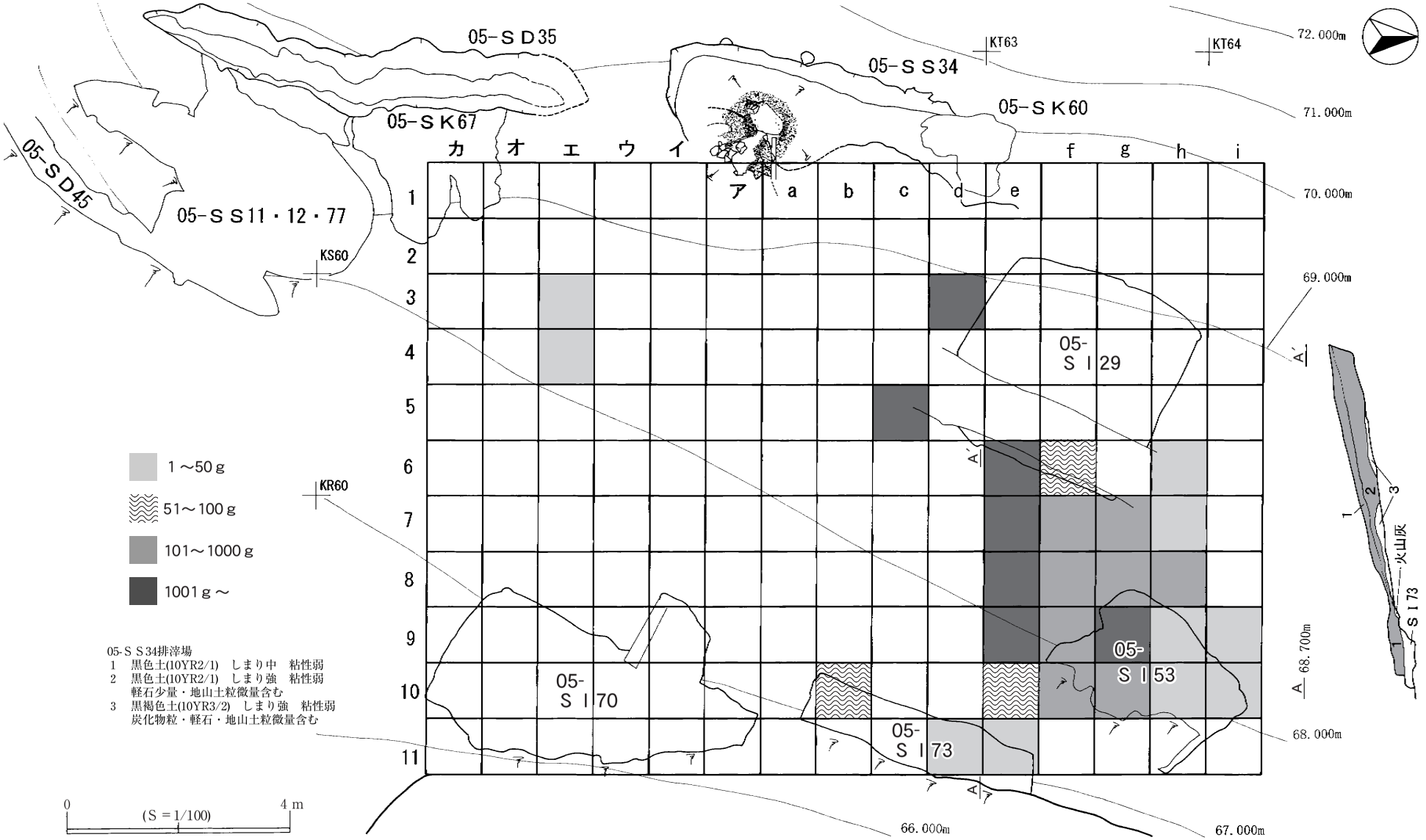
本排滓場は、05-ＳＳ34製鉄遺構に隣接する廃棄場である。範囲内に存在する05-ＳＩ53・73廃絶後の窪地を集中的に利用する傾向があり、両者の前後関係を窺える。鉄塊系遺物や流動滓の出土状況に特徴があり、鉄選別作業時に場を使い分けた可能性がある。

遺　物(第351図～353図)　344図～350図に鉄関連遺物別に、グリッド別・層位別の出土量図を示した。

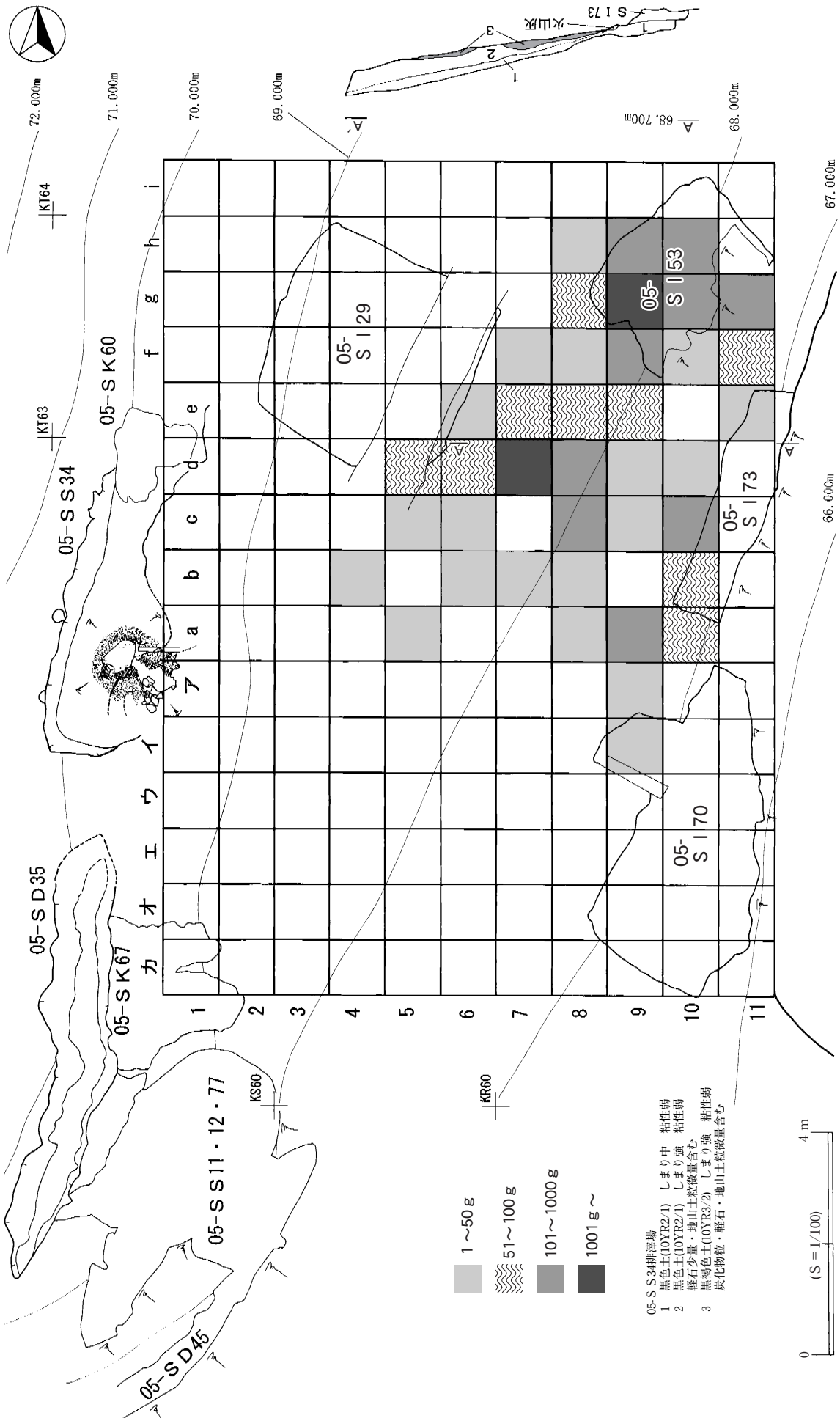
炉壁は、05-ＳＳ10・11・12・14・77・80排滓場で炉壁Ａと炉壁Ｂに分けたが、本遺構ではほぼ炉壁Ａのみ確認できる。炉壁出土量は約30.0kgである。層位別出土量では、１・２層が約26.0kgで圧倒的に多く、３層は約4.0kgである。平面分布でみると、上層になるにつれｅ６～ｉ10グリッドにかけての、概ね05-ＳＩ53上部から05-ＳＩ73上部に相当する範囲に集中する傾向にあることから、この段階では両住居が廃絶し、その窪地を排滓場として利用したことが窺える。

１～３層までを併せた鉄滓の出土量は、合計で約73.4kgで、そのうち炉底塊12238ｇ(磁約60％)、炉内滓256ｇ(磁約67％)、鉄塊系遺物4304ｇ、流動滓49723ｇ(磁約２％)、単位流動滓2858ｇ、その他4165ｇである。全体に占める鉄塊系遺物は約６％であり、その比率は05-ＳＳ10・11・12・14・77・80排滓場と大差ない。平面分布でみると、炉底塊・炉内滓・単位流動滓などは、炉壁と同様に05-ＳＩ53・73上部に集中する。これに対し、鉄塊系遺物や流動滓も集中地点は上記遺物と同じだが、カ４～Ａ10の範囲にも薄く広く分布する点に差がある。この範囲の斜面上位側は、05-ＳＳ34の下部作業場とみられ、排滓投棄の起点と想定される。鉄塊系遺物や流動滓の分布範囲に差異が認められるのは、鉄分を含む可能性のある排出物を、場所を分けて溜めて置いたことを示すと考えられる。

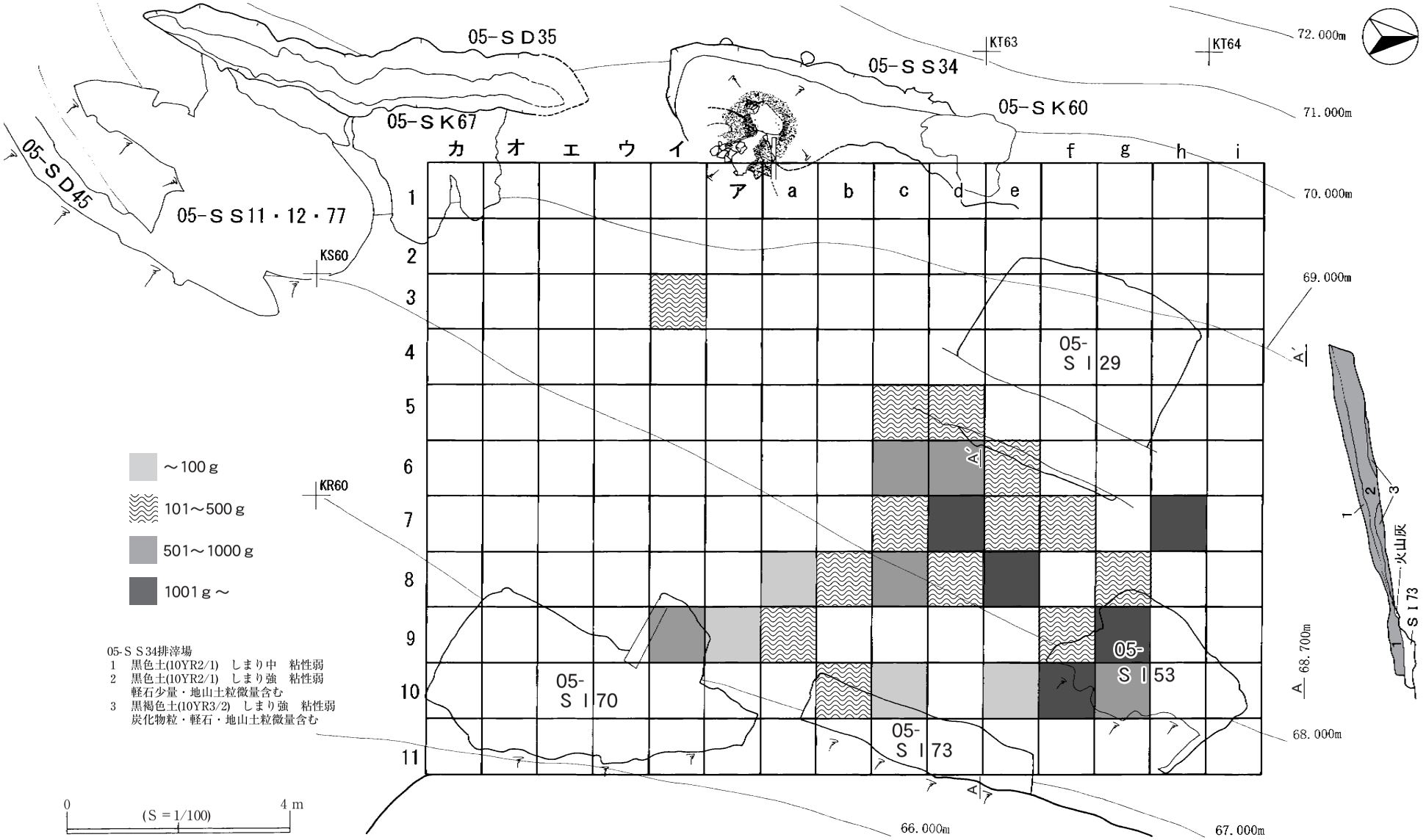
351図１～４は炉壁で、２～４は鉄滓や鉄錆が付着する。１は炉体下部だが、鉄滓の付着や被熱の痕跡は顕著でない。351図５～９、352図１～６は炉底塊(小割滓)である。351図５～９と352図１・２は比較的大型の残核である。352図３～６は砕片とみられる。352図７・８は鉄塊系遺物である。
352図９～20は流動滓で、352図９は斜位に落下する流れの痕跡をとどめ、これ以外は平坦に流れてい



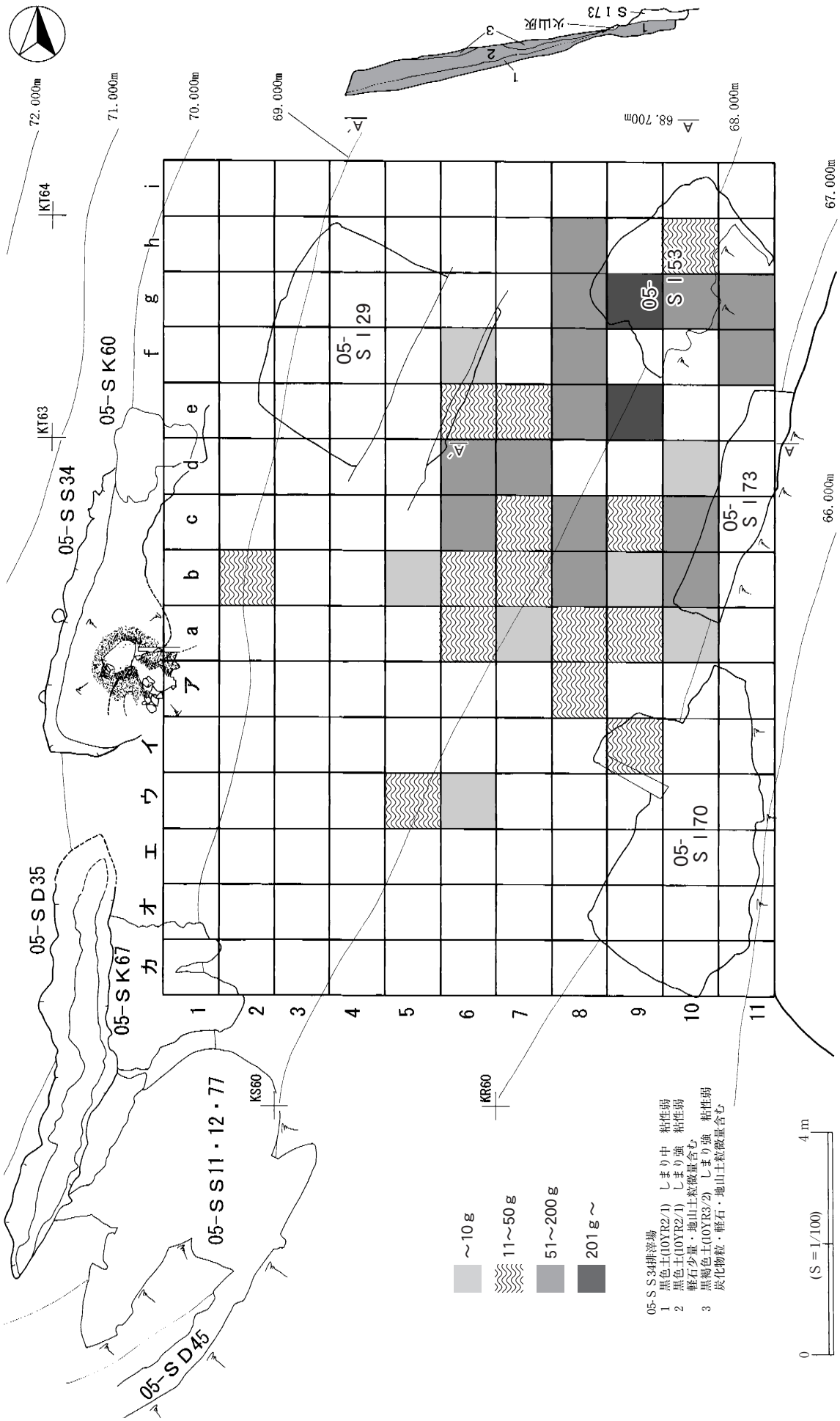
第344図　05-ＳＳ34排滓場(炉壁出土状況１)



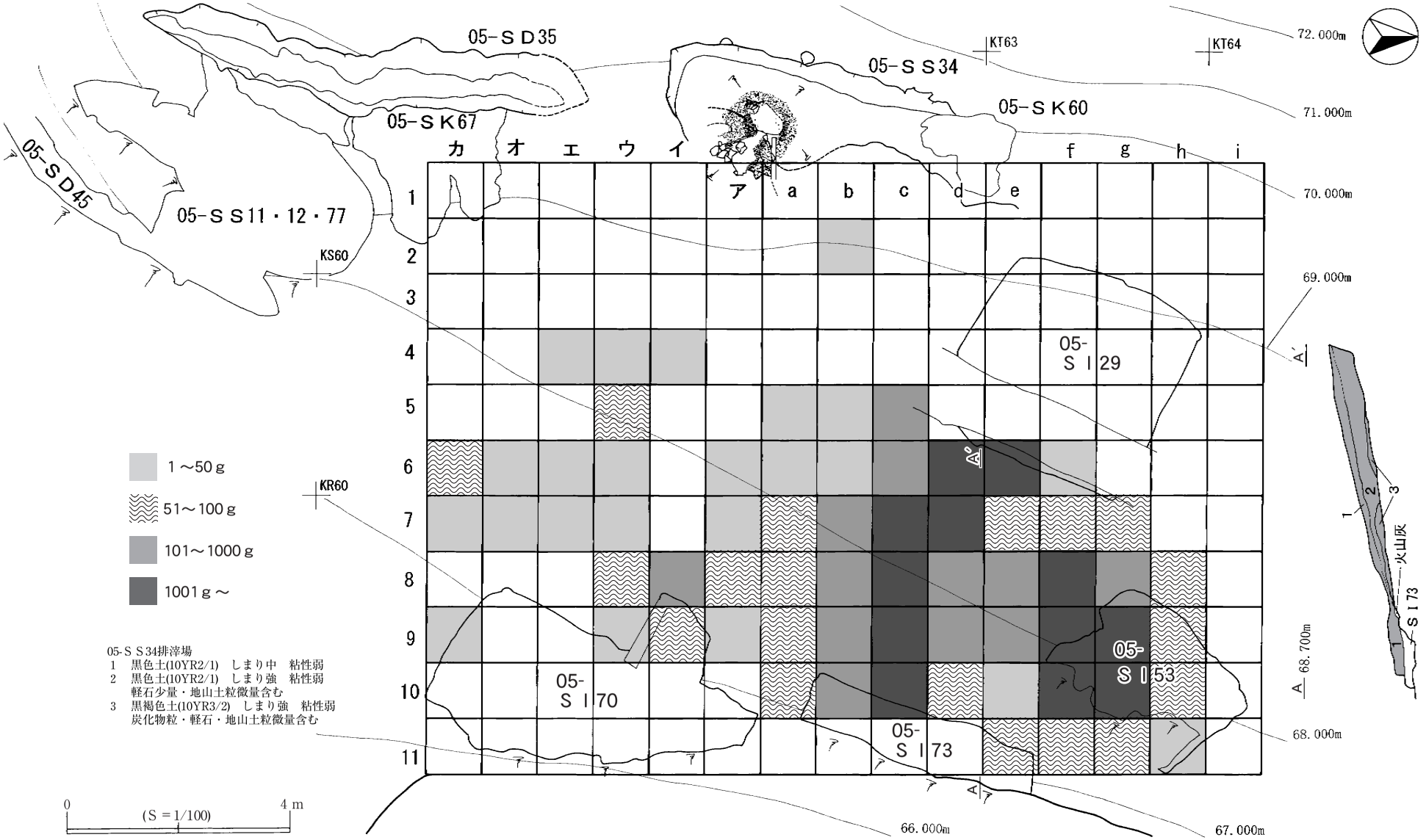
第345図　05-ＳＳ34排滓場(炉壁出土状況２)



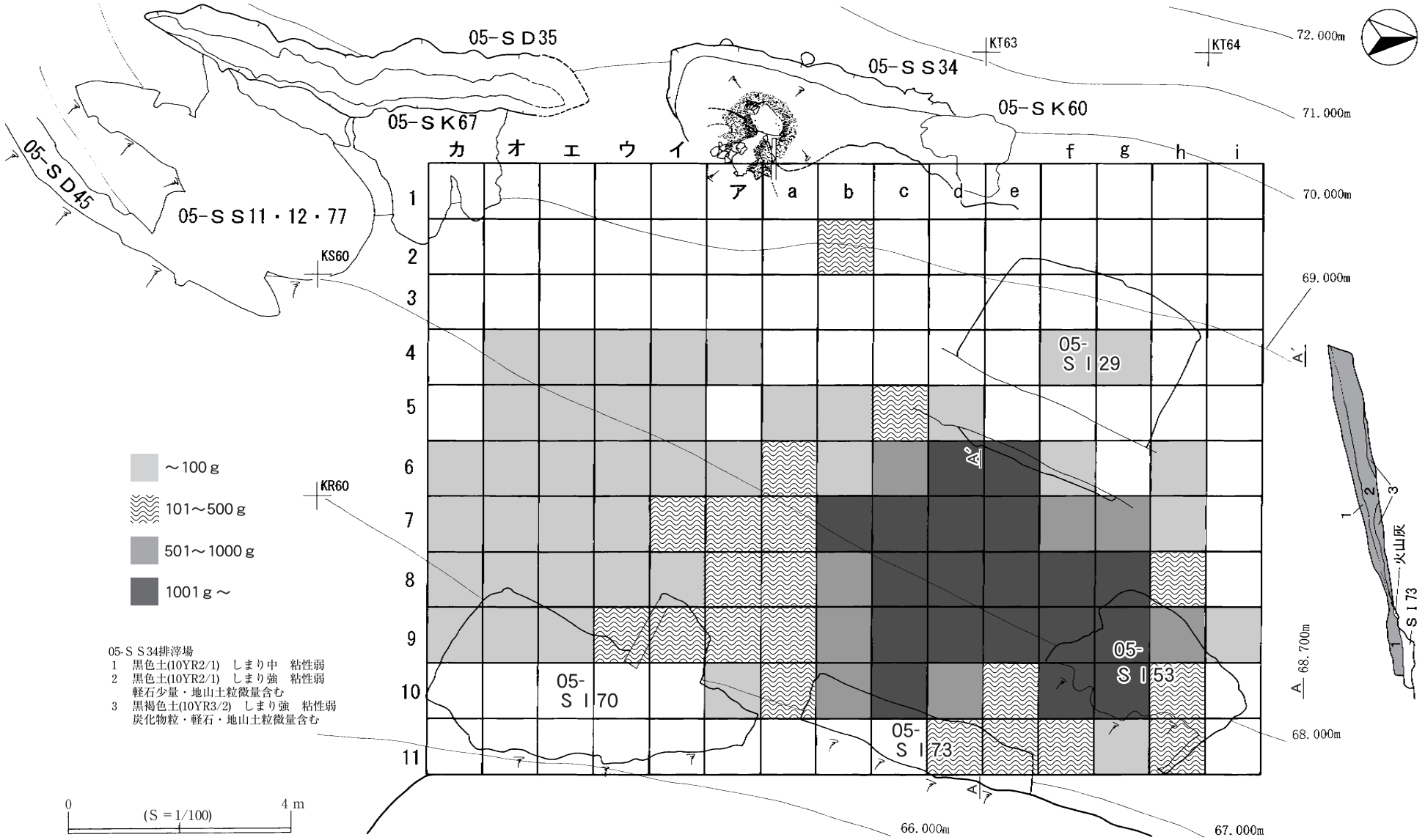
第346図　05-ＳＳ34排滓場(炉底塊出土状況)



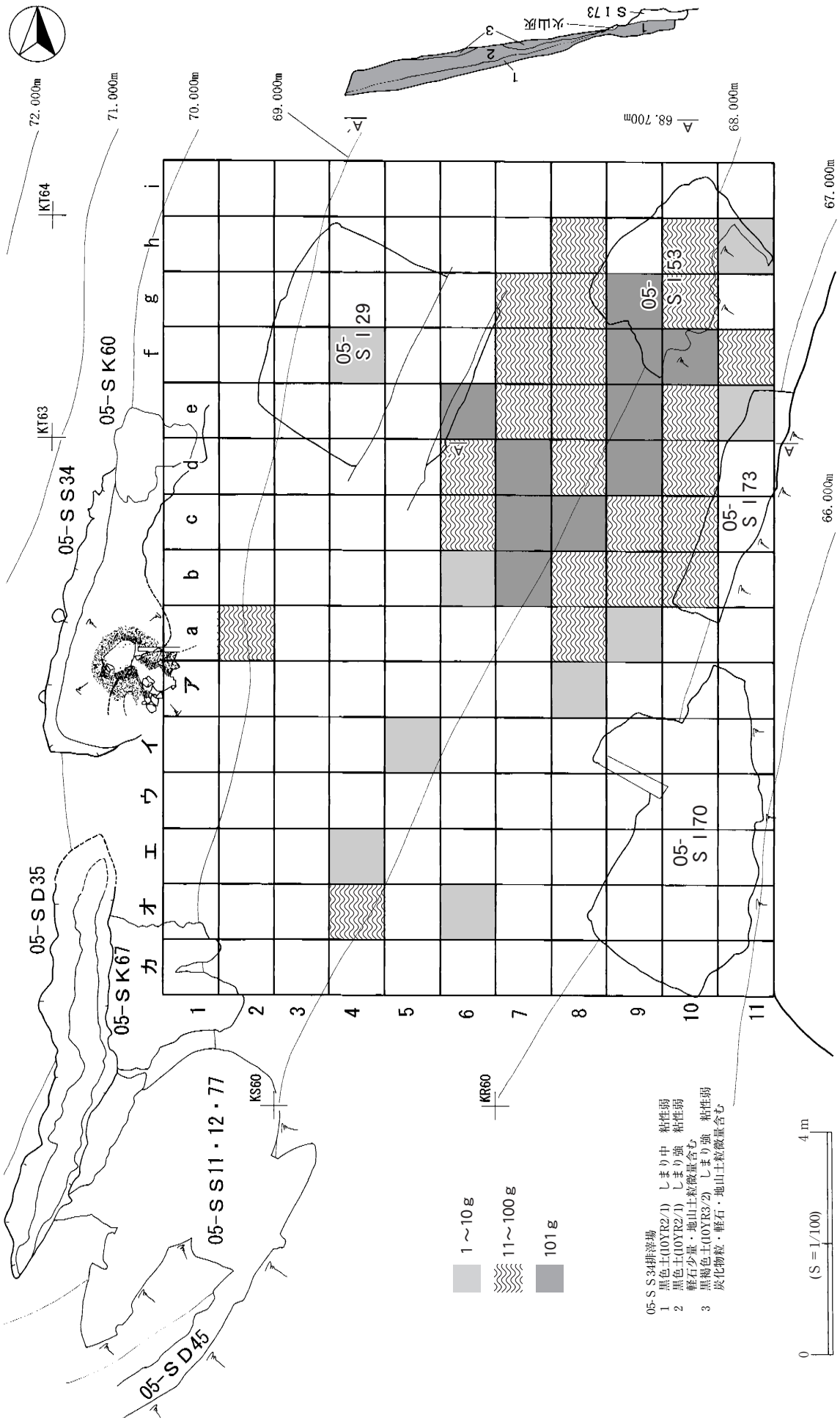
第347図　05-ＳＳ34排滓場(炉内滓出土状況)



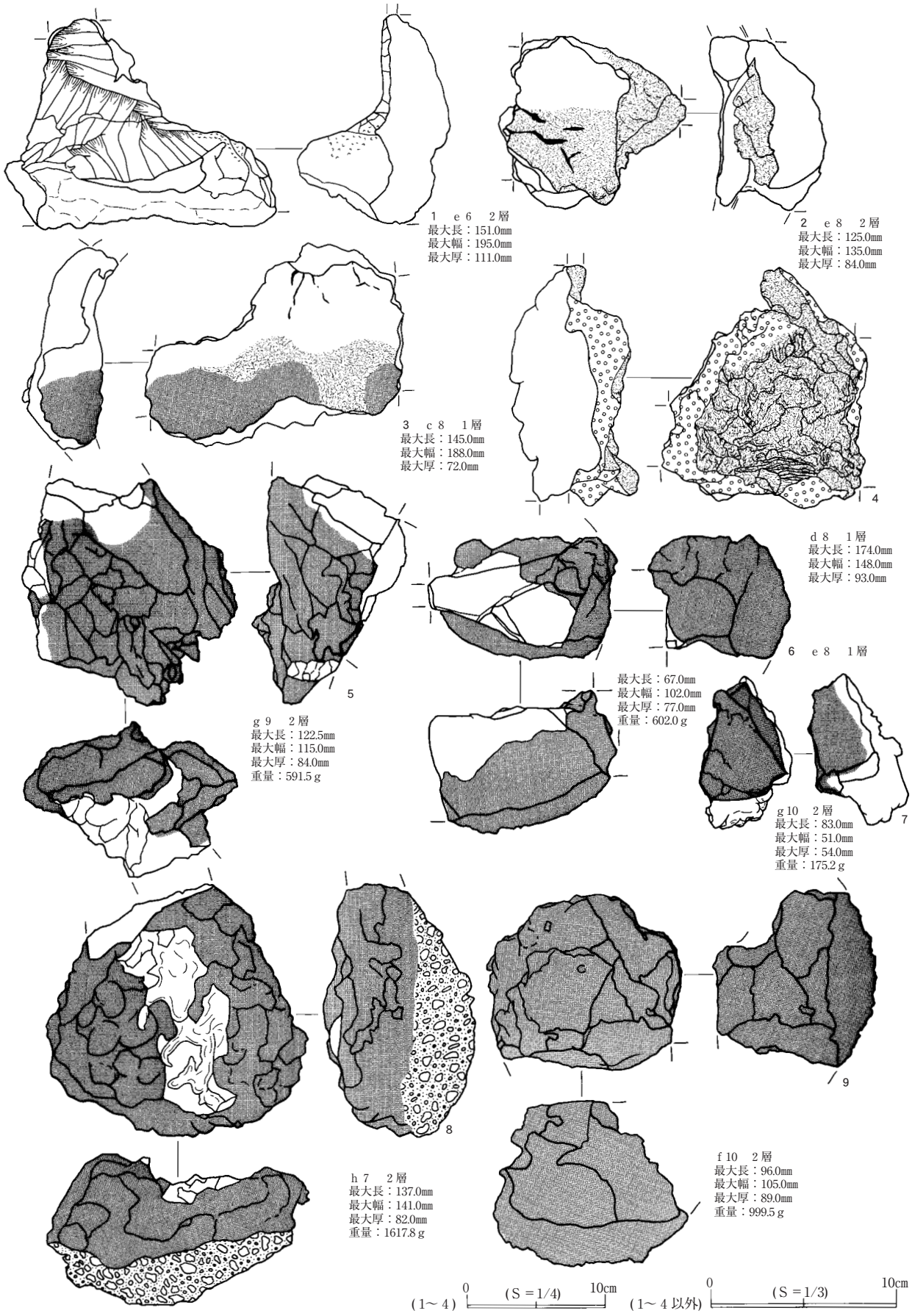
第348図　05-ＳＳ34排滓場(鉄塊系遺物出土状況)



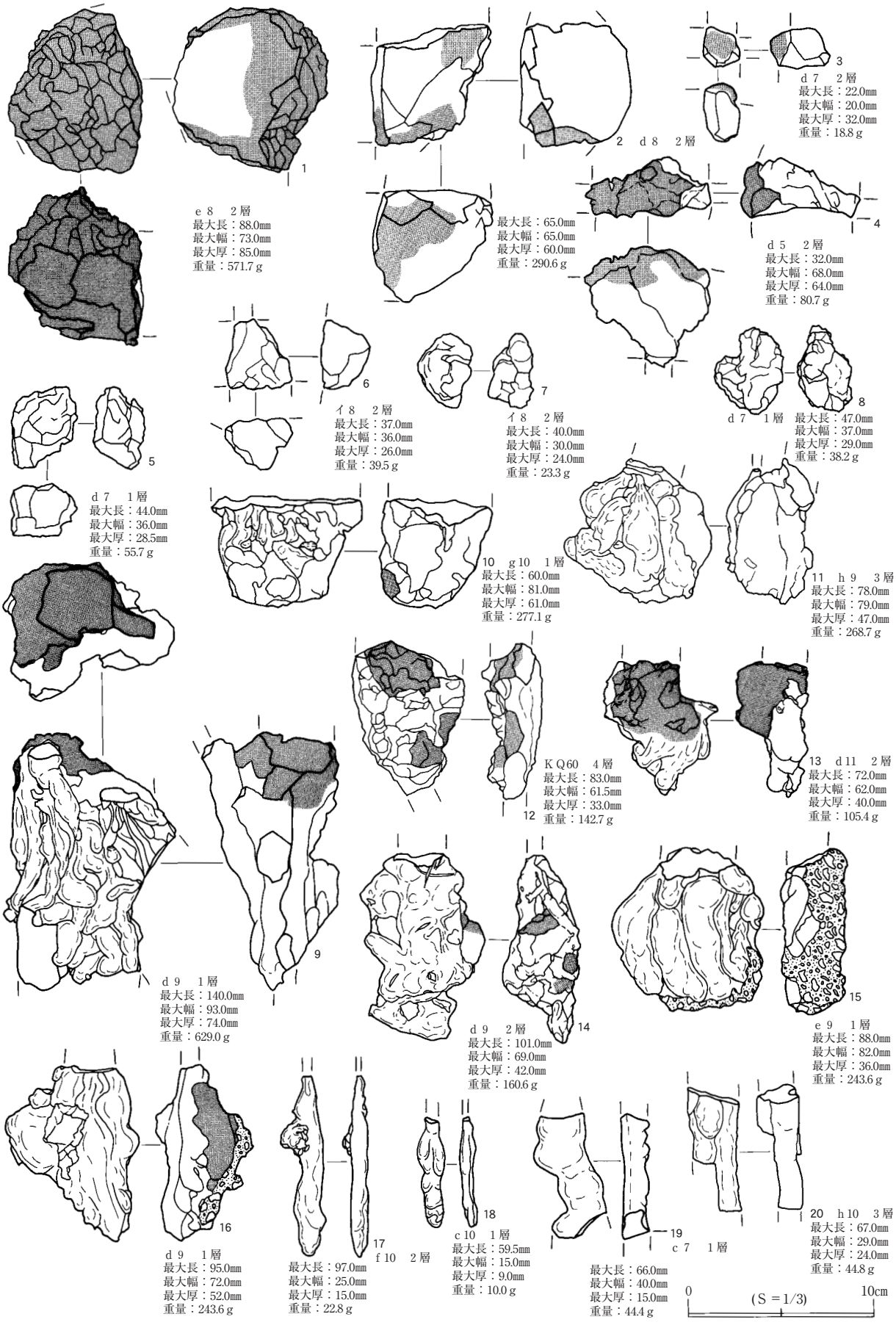
第349図　05-ＳＳ34排滓場(流動滓出土状況)



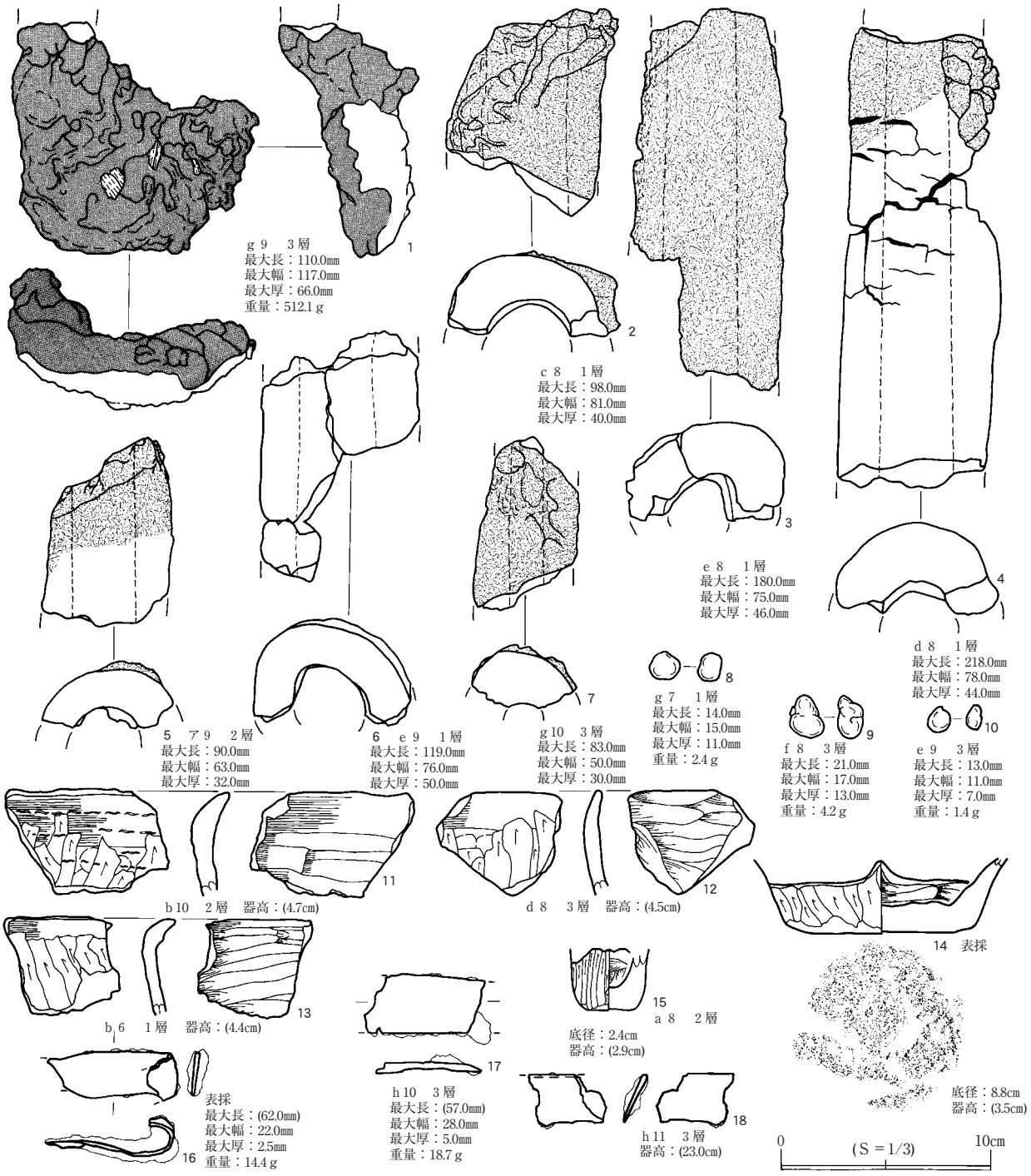
第350図　05-ＳＳ34排滓場(単位流動滓出土状況)



第351図　05-ＳＳ34排滓場出土遺物１



第352図　05-ＳＳ34排滓場出土遺物２



第353図　05-ＳＳ34排滓場出土遺物３

る。９・10・11・15・16は、上部に新たな流れ筋が重なり厚みがある。352図17～20は単位流動滓である。353図１はやや歪な椀形滓で、破断面が狭く元々は半円形状とみられる。表面全面に鉄錆が付着する。353図２～７は羽口で、２・５以外は装着部を欠損する。353図８～10は粒状滓である。

353図11～13は土師器甕の口縁部破片で、11・13が外反する口縁部形状、12が直立気味の口縁部形状である。いずれも外面は縦位ケズリで、内面は横位のナデ調整である。14は土師器甕の底部で、砂底である。353図15は土製の小型容器である。353図16～18は鉄製品で、16・17は穂摘具、18は鉄鍋の可能性があるが小片のため詳細は不明である。

(5)土坑

01-ＳＫ01(第354図・364図、図版122)

遺　構　ＮＢ31グリッドの第Ⅳ層中位で確認した。本遺構の立地点は台地南東縁に近く、緩やかに東側へ傾斜している。重複する遺構はない。

堆積土は２層で、レンズ状堆積であることから自然埋没と考えられる。平面形は楕円形で、規模は長径約0.6m、短径約0.35m、検出面からの深さ約0.2mである。周壁はほぼ垂直に立ち上がり、底面は中央部がわずかに浅くなり凹凸がある。

本遺構は楕円形の土坑で、規模からみて柱穴の可能性が高いが、堆積土にその痕跡は認められない。内部から遺物が出土しており、抜取った可能性がある。

遺　物(第364図)　土師器坏が出土した。364図１は坏Ｂ類の口縁部破片で、胴下部で屈曲し口縁部が外反する器形で、内面には横位のミガキを施している。

01-ＳＫ05(第354図、図版122)

遺　構　ＮＡ32グリッドの第Ⅳ層中位～第Ⅴ層で確認した。本遺構の立地点は台地南西端に近く、緩やかに南側へ傾斜している。重複する遺構はない。

堆積土は２層で、上下２層がほぼ平行していることから、人為的に埋め戻した可能性が高い。平面形は楕円形で、規模は長径約0.8m、短径約0.55m、検出面からの深さ約0.4mである。周壁はほぼ垂直に立ち上がり、底面は中央部がわずかに浅くなり凹凸がある。

本遺構は楕円形の土坑で、規模からみて柱穴の可能性が高いが、堆積土にその痕跡は認められない。抜取り後埋め立てた可能性がある。

遺　物　本遺構からは遺物が出土しなかった。

01-ＳＫ22(第354図、図版122)

遺　構　ＮＢ28・29グリッドの第Ⅳ層中位～第Ⅴ層で確認した。本遺構の立地点は台地南西端に近く、緩やかに南側へ傾斜している。重複する遺構はない。

堆積土は１層で、人為的に埋め戻した可能性が高い。平面形は隅丸長方形で、規模は長軸約1.3m、短軸約0.8m、検出面からの深さ約0.3mである。周壁は70～80°傾斜し、底面はほぼ平坦である。

本遺構は隅丸長方形の土坑で、規模や埋土からみて墓坑の可能性がある。

遺　物　本遺構からは遺物が出土しなかった。

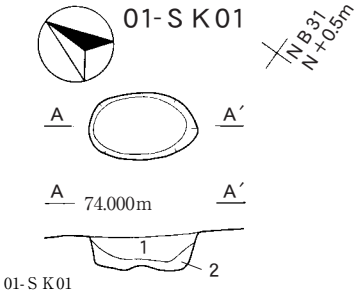
01-ＳＫ38(第354図、図版122)

遺　構　ＮＣ35グリッドの第Ⅳ層中位～第Ⅴ層で確認した。本遺構の立地点は台地南西端に近く、緩やかに南西側へ傾斜している。重複する遺構はない。

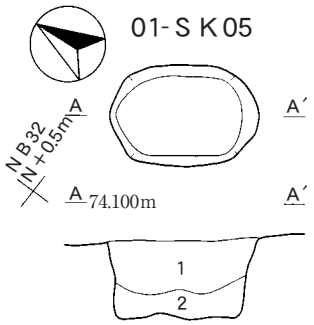
堆積土は１層で、人為的に埋め戻した可能性が高い。平面形は不整な円形で、規模は直径約0.55m、検出面からの深さ約0.3mである。周壁はほぼ垂直に立ち上がり、底面は平坦である。

本遺構は円形の土坑で、規模からみて柱穴の可能性が高いが、堆積土にその痕跡は認められない。

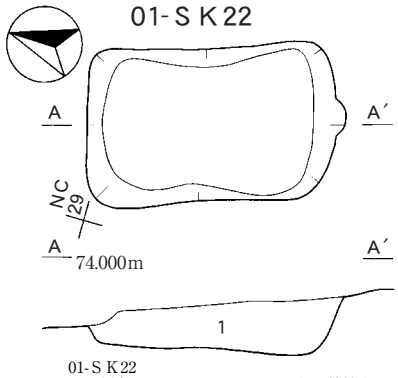
遺　物　本遺構からは遺物が出土しなかった。



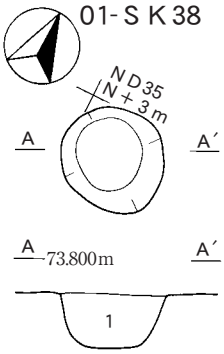
01-ＳＫ01
1　黒色土(10YR1.7/1)　しまり中　粘性中
　　小礫・地山土塊微量含む
2　黄褐色土(10YR5/6)　しまり中　粘性弱
　　小礫微量含む



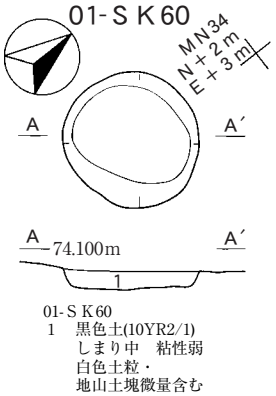
01-ＳＫ05
1　黒色土(10YR1.7/1)　しまり中　粘性中
　　炭化物粒・白色土粒・地山土塊微量含む
2　褐灰色土(10YR4/1)　しまり弱　粘性弱
　　炭化物粒・砂質土粒・地山粒微量含む



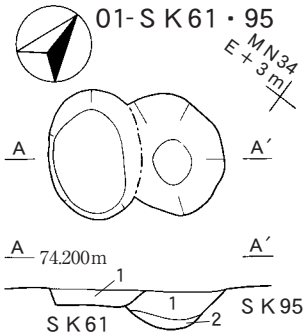
01-ＳＫ22
1　黒色土(10YR1.7/1)　しまり中　粘性中
　　炭化物粒微量・地山土塊少量含む



01-ＳＫ38
1　黒色土(10YR1.7/1)
　　しまり中　粘性弱
　　炭化物粒微量・
　　地山土塊少量含む

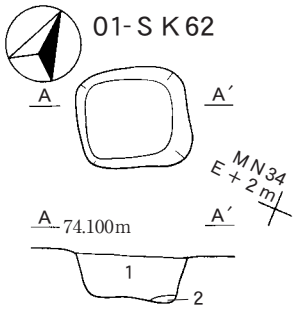


01-ＳＫ60
1　黒色土(10YR2/1)
　　しまり中　粘性弱
　　白色土粒・
　　地山土塊微量含む

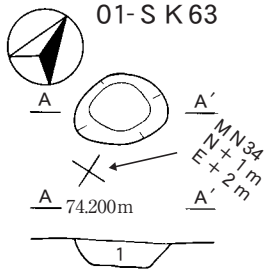


01-ＳＫ61
1　黒色土(10YR2/1)
　　しまり中　粘性弱
　　地山土塊微量含む

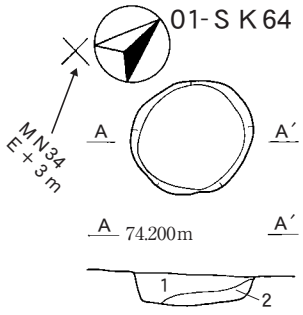
01-ＳＫ95
1　黒色土(10YR1.7/1)
　　しまり中　粘性弱
　　地山土塊・白色土粒微量含む
2　黒色土(10YR1.7/1)
　　しまり強　粘性弱
　　地山土塊少量含む



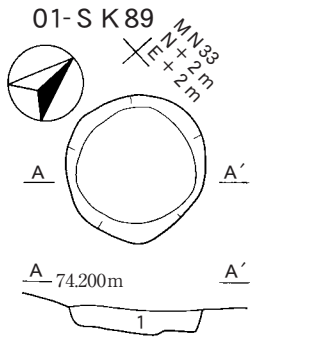
01-ＳＫ62
1　黒色土(10YR1.7/1)
　　しまり中　粘性弱
　　地山土塊少量含む
2　灰白色土(10YR8/2)
　　しまり弱　粘性弱



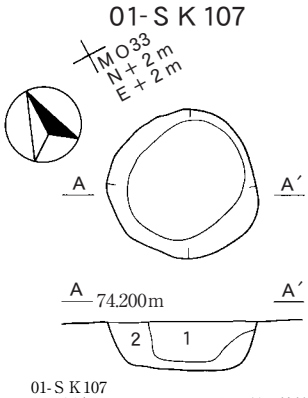
01-ＳＫ63
1　黒色土(10YR2/1)　しまり中　粘性弱
　　白色土粒微量・地山土塊少量含む



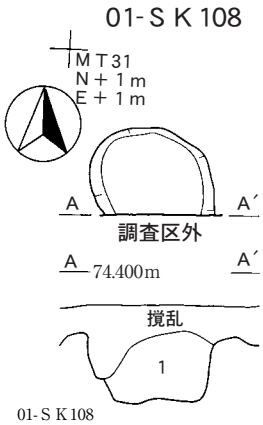
01-ＳＫ64
1　黒色土(10YR1.7/1)　しまり弱　粘性中
　　炭化物粒・地山土粒微量含む
2　黒色土(10YR2/1)　しまり中　粘性中
　　地山土塊微量含む



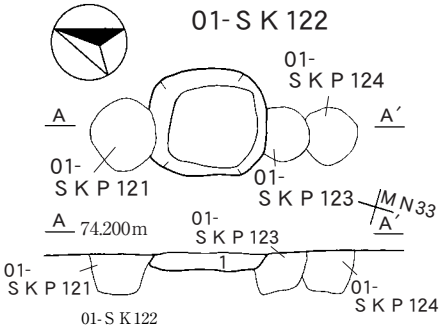
01-ＳＫ89
1　黒色土(10YR2/1)　しまり中　粘性弱
　　白色土粒微量・地山土塊少量含む



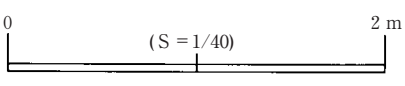
01-ＳＫ107
1　黒色土(10YR2/1)　しまり弱　粘性弱
　　地山土粒少量含む
2　黒色土(10YR2/1)　しまり中　粘性弱
　　地山土粒微量含む



01-ＳＫ108
1　黒色土(10YR2/1)　しまり中　粘性中
　　砂利・地山土粒微量含む



01-ＳＫ122
1　黒色土(10YR2/1)　しまり中　粘性中
　　地山土塊少量含む



第354図　01-ＳＫ01・05・22・38・60・61～64・89・95・107・108・ 122

01-ＳＫ60(第354図、図版128)

遺　構　MM34グリッドの第Ⅵ層上面で確認した。本遺構の立地点は台地南東縁に近く、緩やかに東側へ傾斜している。重複する遺構はない。

堆積土は１層のみだが、上部が削平されており本来の埋没過程は不明である。平面形は楕円形で、規模は長径約0.75m、短径約0.65m、検出面からの深さ約0.1mである。周壁はほぼ垂直に立ち上がり、底面は平坦である。

本遺構は楕円形の土坑で、規模からみて柱穴の可能性が高いが、堆積過程は不明である。

遺　物　本遺構からは遺物が出土しなかった。

01-ＳＫ61(第354図、図版123)

遺　構　MM33グリッドの第Ⅵ層上面で確認した。本遺構の立地点は台地南東縁に近く、緩やかに東側へ傾斜している。01-ＳＫ95と重複し、本遺構の方が新しい。

堆積土は１層のみだが、上部が削平されており本来の埋没過程は不明である。平面形は楕円形で、規模は長径約0.7m、短径約0.5m、検出面からの深さ約0.1mである。周壁は緩やかに立ち上がり、底面は平坦である。

本遺構は楕円形の土坑で、規模からみて柱穴の可能性が高いが、堆積過程は不明である。

遺　物　本遺構からは遺物が出土しなかった。

01-ＳＫ95(第354図、図版123)

遺　構　MM32グリッドの第Ⅳ層中位～第Ⅴ層で確認した。本遺構の立地点は台地南西端に近く、緩やかに南側へ傾斜している。01-ＳＫ61と重複し、本遺構の方が古い。

堆積土は２層で、上下２層がほぼ平行していることから、人為的に埋め戻した可能性が高い。平面形は一部01-ＳＫ61に切られるが、ほぼ楕円形で、規模は長径約0.65m、短径約0.55m、検出面からの深さ約0.2mである。周壁は緩やかに立ち上がって鍋底状の断面形になる。

本遺構は楕円形の土坑で、規模からみて柱穴の可能性が高いが、堆積土にその痕跡は認められない。抜取り後埋め立てた可能性がある。

遺　物　本遺構からは遺物が出土しなかった。

01-ＳＫ62(第354図、図版123)

遺　構　MM33・34グリッドの第Ⅳ層中位～第Ⅴ層で確認した。本遺構の立地点は台地南東縁に近く、緩やかに東側へ傾斜している。重複する遺構はない。

堆積土は２層で、ほぼ全体に１層が堆積することから、人為的に埋め戻した可能性が高い。平面形は隅丸方形で、規模は一辺約0.6m、検出面からの深さ約0.25mである。周壁はほぼ垂直に立ち上がり、底面は平坦である。

本遺構は隅丸方形の土坑で、規模からみて柱穴の可能性が高いが、堆積土にその痕跡は認められない。抜取り後埋め立てた可能性がある。

遺　物　本遺構からは遺物が出土しなかった。

01-ＳＫ63(第354図、図版123)

遺　構　ＭＭ34グリッドの第Ⅵ層上面で確認した。本遺構の立地点は台地南東縁に近く、緩やかに東側へ傾斜している。重複する遺構はない。

堆積土は１層のみだが、上部が削平されており本来の埋没過程は不明である。平面形は楕円形で、規模は長径約0.5m、短径約0.4m、検出面からの深さ約0.15mである。周壁は緩やかに立ち上がり、底面は平坦である。

本遺構は楕円形の土坑で、規模からみて柱穴の可能性が高いが、堆積土にその痕跡は認められない。

遺　物　本遺構からは遺物が出土しなかった。

01-ＳＫ64(第354図、図版123)

遺　構　ＭＭ33・34グリッドの第Ⅳ層中位～第Ⅴ層で確認した。本遺構の立地点は台地南西端に近く、緩やかに南側へ傾斜している。重複する遺構はない。

堆積土は２層で、上下２層がほぼ平行していることから、人為的に埋め戻した可能性が高い。平面形はほぼ円形で、規模は直径約0.6m、検出面からの深さ約0.2mである。周壁はほぼ垂直に立ち上がり、底面はほぼ平坦である。

本遺構は円形の土坑で、規模からみて柱穴の可能性が高いが、堆積土にその痕跡は認められない。抜取り後埋め立てた可能性がある。

遺　物　本遺構からは遺物が出土しなかった。

01-ＳＫ89(第354図、図版124)

遺　構　ＭＭ33グリッドの第Ⅵ層上面で確認した。本遺構の立地点は台地南東縁に近く、緩やかに東側へ傾斜している。重複する遺構はない。

堆積土は１層のみだが、上部が削平されており本来の埋没過程は不明である。平面形はほぼ円形で、規模は直径約0.75m、検出面からの深さ約0.1mである。周壁はほぼ垂直に立ち上がり、底面はわずかに段差があるが平坦である。

本遺構はほぼ円形の土坑で、規模からみて柱穴の可能性が高いが、堆積過程が不明のため断言できない。

遺　物　本遺構からは遺物が出土しなかった。

01-ＳＫ107(第354図、図版124)

遺　構　ＭＮ33グリッドの第Ⅳ層中位～第Ⅴ層で確認した。本遺構の立地点は台地南西端に近く、緩やかに南側へ傾斜している。重複する遺構はない。

堆積土は２層で、１層が柱の形状をとどめることから、人為的に埋め戻した可能性が高い。平面形はほぼ円形で、規模は直径約0.7m、検出面からの深さ約0.2mである。周壁はほぼ垂直に立ち上がり、底面はほぼ平坦である。

本遺構は円形の土坑で、規模からみて柱穴の可能性が高いが、堆積土にその痕跡は認められない。

遺　物　本遺構からは遺物が出土しなかった。

01-ＳＫ108(第354図、図版124)

遺　構　ＭＳ30グリッドの第Ⅴ層～第Ⅵ層上面で確認した。本遺構の立地点は台地南東縁に近く、緩やかに東側へ傾斜している。重複する遺構はない。

堆積土は１層で、上部が一部削平されて本来の検出面は失われているが、人為的に埋め戻したと考えられる。平面形は一部調査区外にかかるが、おそらく円形と考えられる。規模は直径約0.6m、検出面からの深さ約0.4mである。周壁はほぼ垂直に立ち上がり、底面は基本的に平坦であるが、周壁沿いがわずかに低くなっている。

本遺構は円形の土坑で、規模からみて柱穴の可能性が高いが、堆積土にその痕跡は認められない。抜取り後埋め立てた可能性がある。

遺　物　本遺構からは遺物が出土しなかった。

01-ＳＫ122(第354図、図版125)

遺　構　ＭＮ32・33グリッドの第Ⅴ層～第Ⅵ層上面で確認した。本遺構の立地点は台地南東縁に近く、緩やかに東側へ傾斜する。01-ＳＫＰ121・123と重複し、01-ＳＫＰ121より古く、01-ＳＫＰ123より新しい。

堆積土は１層のみだが、上部削平のため本来の埋没過程は不明である。平面形は隅丸方形で、規模は一辺約0.6m、検出面からの深さ約0.1mである。周壁は緩やかに立ち上がり、底面はわずかに凹凸はあるが、ほぼ平坦である。

本遺構は隅丸方形の土坑で、両脇にＳＫＰが連結することから、抜取り穴や、柱穴の掘り直しに関わる穴と考えられる。01-ＳＫＰ121が本遺構を掘り込んでいることから、01-ＳＫＰ123に伴う抜き取り穴になる可能性が最も高い。

遺　物　本遺構からは遺物が出土しなかった。

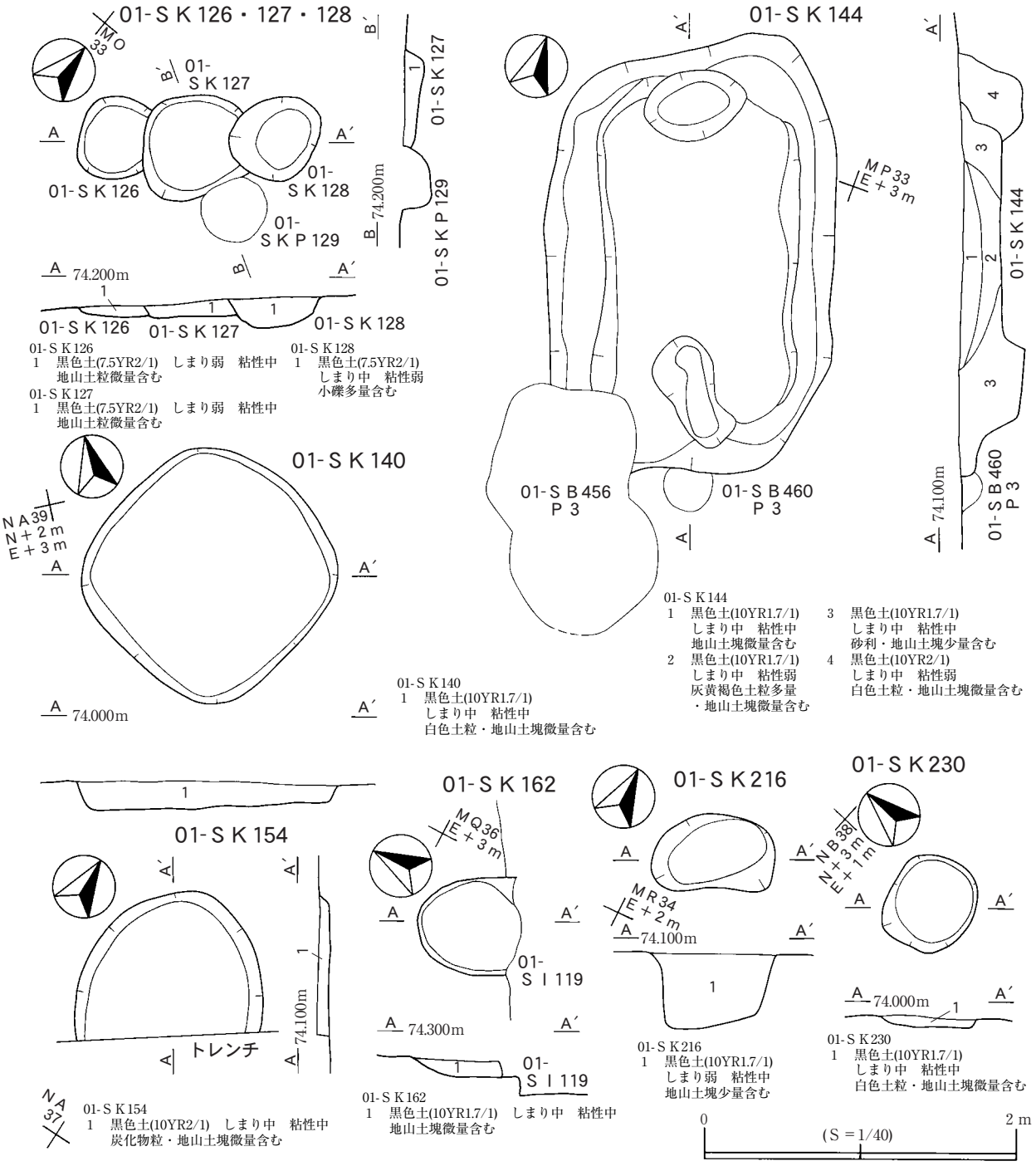
01-ＳＫ126・127・128(第355図、図版128)

遺　構　ＭＮ32・33グリッドの第Ⅴ層～第Ⅵ層上面で確認した。本遺構の立地点は台地南東縁に近く、緩やかに東側へ傾斜する。３基と01-ＳＫＰ129は重複関係にあり、01-ＳＫ128と01-ＳＫＰ129が新しく、01-ＳＫ127、01-ＳＫ126の順に古くなる。

３基とも堆積土は１層のみだが、上部が削平されており本来の埋没過程は不明である。平面形は01-ＳＫ128が不整な円形、01-ＳＫ127が不整な楕円形、01-ＳＫ126が隅丸の台形で、規模は01-ＳＫ128が直径約0.5m、検出面からの深さ約0.2m、01-ＳＫ127が長径約0.8m、短径約0.65m、検出面からの深さ約0.1m、01-ＳＫ126が一辺約0.5m、検出面からの深さ約0.1mである。いずれも周壁は緩やかに立ち上がり、底面は平坦である。

本遺構は円形または隅丸を基調とした土坑で、いずれも浅く機能は不明だが、柱穴と抜き取り穴が連続した状態を示している可能性が高い。比較的深さのある01-ＳＫ128が柱穴で、01-ＳＫ127がこれに伴う抜き取り穴とも考えられる。

遺　物　本遺構からは遺物が出土しなかった。



第355図　01-S K 125～128・140・144・154・162・216・230

01-S K 140(第355図、図版125)

遺　構　ＭＴ38・39グリッドの第Ⅴ層中位～第Ⅵ層上面で確認した。本遺構の立地点は台地南西端に近く、緩やかに南西側へ傾斜している。重複する遺構はない。

堆積土は１層で、比較的広い範囲を均質な土で埋め尽くすことから、人為的に埋め戻した可能性が高い。平面形は隅丸方形で、規模は一辺約1.4m、検出面からの深さ約0.2mである。周壁は70～80°の傾斜で立ち上がり、底面はほぼ平坦である。

本遺構は隅丸方形の土坑で、規模や埋土からみて墓坑の可能性もあるが詳細は不明である。

遺　物　本遺構からは遺物が出土しなかった。

01-ＳＫ144(第355図)

遺　構　ＭＯ32・33グリッドの第Ⅴ層中位～第Ⅵ層上面で確認した。本遺構の立地点は台地南東縁に近く、緩やかに東側へ傾斜している。01-ＳＢ456に関わる柱穴と重複し、本遺構がこれよりも古い。

堆積土は４層で、基本的に壁際からのレンズ状堆積であり、自然堆積による埋没と考えられる。平面形は隅丸長方形で、規模は長軸約2.7m、短軸約1.8m、検出面からの深さは中央部底面で約0.25mである。周壁は70～80°の傾斜で立ち上がり、底面はほぼ平坦である。短辺の壁際中央部には、各１個ずつのピットが付属する。

本遺構は隅丸長方形の土坑で、埋没過程は自然堆積であり、利用後は開口したまま放置されたと考えられる。機能については不明である。

遺　物　本遺構からは遺物が出土しなかった。

01-ＳＫ154(第355図、図版125)

遺　構　ＭＴ・ＮＡ37グリッドの第Ⅴ層中位～第Ⅵ層上面で確認した。本遺構の立地点は台地南西端に近く、緩やかに南西側へ傾斜している。重複する遺構はない。

堆積土は１層のみだが、上部が削平されており本来の埋没過程は不明である。平面形は南西側が失われており明確でないが、おそらく楕円形と考えられる。規模は残存部の径で約1.2m、検出面からの深さ約0.1mである。周壁は緩やかに立ち上がり、底面はほぼ平坦である。

本遺構は楕円形の土坑で、極めて浅く機能等については不明である。

遺　物　本遺構からは遺物が出土しなかった。

01-ＳＫ162(第355図)

遺　構　ＭＰ35グリッドの第Ⅴ層中位～第Ⅵ層上面で確認した。本遺構の立地点は、ほぼ台地中央部で平坦な地形である。01-ＳＩ119と重複するが、本遺構との新旧関係は不明である。

堆積土は１層のみだが、上部が削平されており本来の埋没過程は不明である。平面形は01-ＳＩ119にかかる部分が失われており明確でないが、おそらく楕円形と考えられる。規模は残存部の径で約0.6m、検出面からの深さ約0.1mである。周壁は緩やかに立ち上がり、底面はほぼ平坦である。

本遺構は楕円形の土坑で、極めて浅く機能等については不明である。

遺　物　本遺構からは遺物が出土しなかった。

01-ＳＫ216(第355図、図版125)

遺　構　ＭＱ34グリッドの第Ⅳ層中位～第Ⅴ層で確認した。本遺構の立地点は台地南西端に近く、緩やかに南西側へ傾斜している。重複する遺構はない。

堆積土は１層で、人為的に埋め戻した可能性が高い。平面形は不整な楕円形で、規模は長径約0.8m、短径約0.6m、検出面からの深さは最深部で約0.5mである。周壁はほぼ垂直に立ち上がり、底面は南西側へ傾斜する。

本遺構は楕円形の土坑で、規模からみて柱穴の可能性が高いが、堆積土にその痕跡は認められない。

遺　物　本遺構からは遺物が出土しなかった。

01-ＳＫ230(第355図、図版126)

遺　構　ＭＢ38グリッドの第Ⅴ層中位～第Ⅵ層上面で確認した。本遺構の立地点は台地南西端に近く、緩やかに西へ傾斜する。重複する遺構はない。

堆積土は１層だが、上部削平のため埋没過程は不明である。平面形はほぼ円形で、規模は直径約0.55m、検出面からの深さ約0.1mである。周壁は緩やかに立ち上がり、底面はほぼ平坦である。

本遺構は円形の土坑で、極めて浅く機能等については不明である。

遺　物　本遺構からは遺物が出土しなかった。

01-ＳＫ287(第356図、図版126)

遺　構　ＭＮ43・44グリッドの第Ⅴ層中位～第Ⅵ層上面で確認した。本遺構の立地点は台地南西端に近く、緩やかに南西側へ傾斜している。重複する遺構はない。

堆積土は１層で、人為的に埋め戻した可能性が高い。平面形は隅丸方形で、規模は一辺約1.9m、検出面からの深さ約0.3mである。周壁は70～80°の傾斜で立ち上がり、底面は中央部に段差があり、南側が浅く北側が深い。

本遺構は隅丸方形の土坑で、規模や埋土からみて墓坑の可能性もあるが詳細は不明である。

遺　物　本遺構からは遺物が出土しなかった。

01-ＳＫ294(第356図、図版126)

遺　構　ＭＴ35グリッドの第Ⅴ層中位～第Ⅵ層上面で確認した。本遺構の立地点は台地南西端に近く、緩やかに南西側へ傾斜している。01-ＳＤ220と重複するが、新旧関係は把握できなかった。また01-ＳＩ149との新旧関係も、上部削平のため確認できる堆積土は残っておらず不明である。

堆積土は１層で、人為的に埋め戻した可能性が高い。平面形は01-ＳＤ220にかかる部分が失われており明確でないが、おそらく円形と考えられる。規模は残存部の径で約0.7m、検出面からの深さ約0.2mである。周壁は緩やかに立ち上がり、底面はほぼ平坦である。

本遺構は円形の土坑で、規模からみて柱穴の可能性が高いが、堆積土にその痕跡は認められない。抜取り後埋め立てた可能性がある。

遺　物　本遺構からは遺物が出土しなかった。

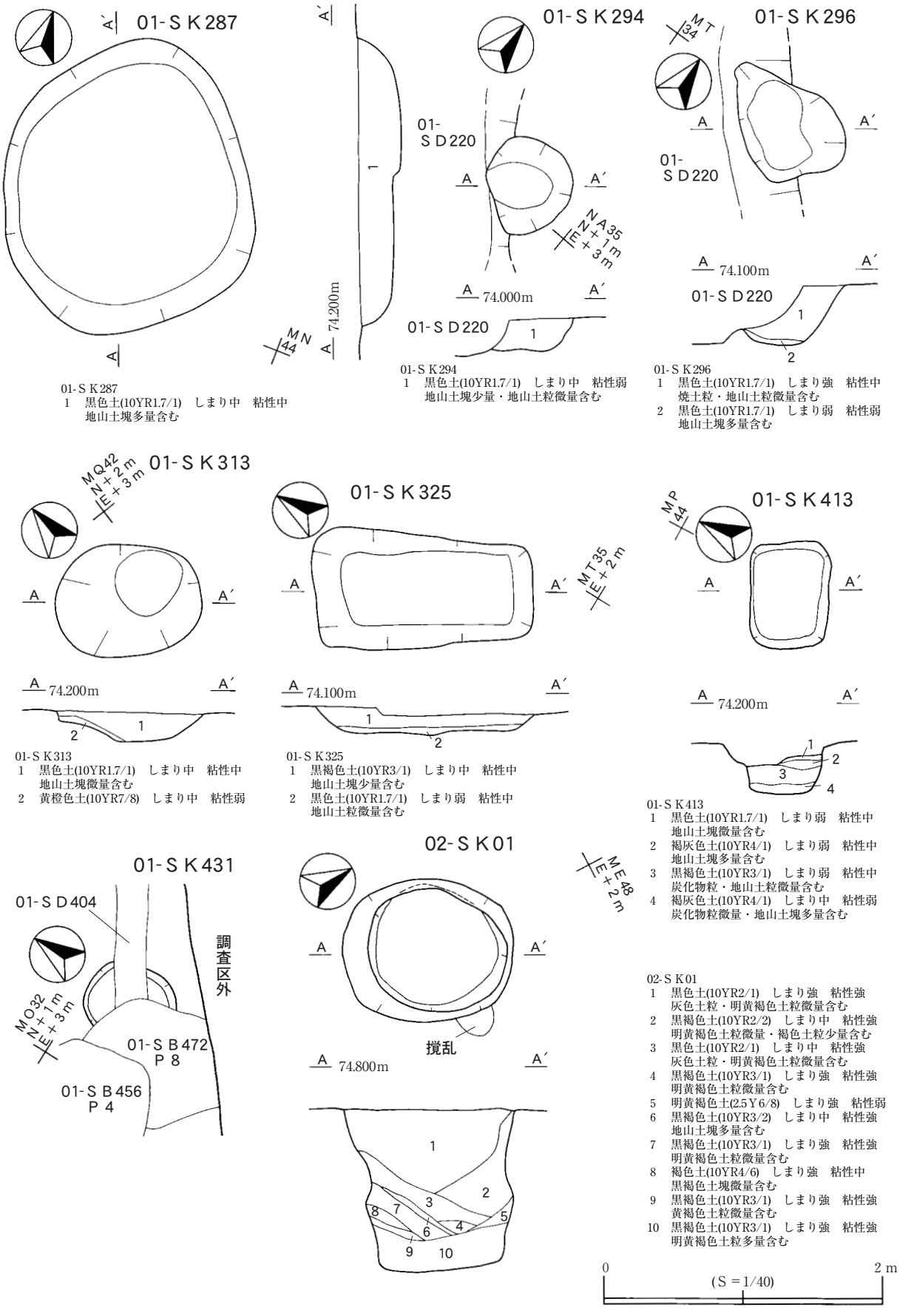
01-ＳＫ296(第356図、図版126)

遺　構　ＭＳ33・34グリッドの第Ⅴ層中位～第Ⅵ層上面で確認した。本遺構の立地点は台地南西端に近く、緩やかに南西側へ傾斜している。01-ＳＤ220と重複するが、新旧関係は把握できなかった。

堆積土は２層で、ほとんどが１層で埋め尽くされることから、人為的に埋め戻した可能性が高い。平面形は、01-ＳＤ220にかかる部分が本来形状を失っているが、おそらく楕円形と考えられる。規模は残存部の長径約1.0m、短径約0.7m、検出面からの深さ約0.4mである。周壁は緩やかに立ち上がり、底面はほぼ平坦である。

本遺構は楕円形の土坑で、規模からみて柱穴の可能性が高い。

遺　物　本遺構からは遺物が出土しなかった。



01-ＳＫ287
1　黒色土(10YR1.7/1)　しまり中　粘性中
　地山土塊多量含む

01-ＳＫ294
1　黒色土(10YR1.7/1)　しまり中　粘性弱
　地山土塊少量・地山土粒微量含む

01-ＳＫ296
1　黒色土(10YR1.7/1)　しまり強　粘性中
　焼土粒・地山土粒微量含む
2　黒色土(10YR1.7/1)　しまり弱　粘性弱
　地山土塊多量含む

01-ＳＫ313
1　黒色土(10YR1.7/1)　しまり中　粘性中
　地山土塊微量含む
2　黄橙色土(10YR7/8)　しまり中　粘性弱

01-ＳＫ325
1　黒褐色土(10YR3/1)　しまり中　粘性中
　地山土塊少量含む
2　黒色土(10YR1.7/1)　しまり弱　粘性中
　地山土粒微量含む

01-ＳＫ413
1　黒色土(10YR1.7/1)　しまり弱　粘性中
　地山土塊微量含む
2　褐灰色土(10YR4/1)　しまり弱　粘性中
　地山土塊多量含む
3　黒褐色土(10YR3/1)　しまり弱　粘性中
　炭化物粒・地山土粒微量含む
4　褐灰色土(10YR4/1)　しまり中　粘性弱
　炭化物粒微量・地山土塊多量含む

02-ＳＫ01
1　黒色土(10YR2/1)　しまり強　粘性強
　灰色土粒・明黄褐色土粒微量含む
2　黒褐色土(10YR2/2)　しまり中　粘性強
　明黄褐色土粒微量・褐色土粒少量含む
3　黒色土(10YR2/1)　しまり中　粘性強
　灰色土粒・明黄褐色土粒微量含む
4　黒褐色土(10YR3/1)　しまり強　粘性強
　明黄褐色土粒微量含む
5　明黄褐色土(2.5Y6/8)　しまり強　粘性弱
6　黒褐色土(10YR3/2)　しまり中　粘性強
　地山土塊多量含む
7　黒褐色土(10YR3/1)　しまり強　粘性強
　明黄褐色土粒微量含む
8　褐色土(10YR4/6)　しまり強　粘性中
　黒褐色土塊微量含む
9　黒褐色土(10YR3/1)　しまり強　粘性強
　黄褐色土粒微量含む
10　黒褐色土(10YR3/1)　しまり強　粘性強
　明黄褐色土粒多量含む

第356図　01-ＳＫ287・294・296・313・325・413・431・02-ＳＫ01

01-ＳＫ313(第356図、図版127)

遺　構　ＭＰ42グリッドの第Ⅴ層中位～第Ⅵ層上面で確認した。本遺構の立地点は、ほぼ台地中央部で平坦な地形である。重複する遺構はない。

堆積土は２層で、ほとんどが１層で埋め尽くされることから、人為的に埋め戻した可能性が高い。平面形は楕円形で、規模は残存部の長径約1.0m、短径0.8m、検出面からの深さ約0.2mである。周壁は緩やかに立ち上がり、鍋底状の断面形になる。

本遺構は楕円形の土坑で、機能等については不明である。

遺　物　本遺構からは遺物が出土しなかった。

01-ＳＫ325(第356図・364図、図版127)

遺　構　ＭＳ35グリッドの第Ⅳ層中位～第Ⅴ層で確認した。本遺構の立地点は台地南西端に近く、緩やかに南側へ傾斜している。01-ＳＩ149との新旧関係も、上部削平のため確認できる堆積土が残っていないため不明である。

堆積土は２層で、ほとんどが１層で埋め尽くされることから、人為的に埋め戻した可能性が高い。平面形は長方形で、規模は長軸約1.6m、短軸約0.8m、検出面からの深さ約0.2mである。周壁は70～80°の傾斜で立ち上がり、掘形底面には段差があるが、２層上面はほぼ平坦である。

本遺構は長方形の土坑で、規模や埋土からみて墓坑の可能性が高い。

遺　物(第364図)　土師器坏が１点出土した。364図２はＡ類の底部で、底面に回転糸切痕を残す。

01-ＳＫ413(第356図・364図、図版127)

遺　構　ＭＯ・ＭＰ43グリッドの第Ⅴ層中位～第Ⅵ層上面で確認した。本遺構の立地点は、北西側へ傾斜する。01-ＳＩ34と重複するが、新旧関係は不明である。

堆積土は４層で、水平堆積であることから人為堆積と考えられる。平面形は隅丸長方形で、規模は長軸で約0.8m、短軸で約0.55m、検出面からの深さ約0.4mである。周壁は垂直に立ち上がり、底面は平坦である。

本遺構は隅丸長方形の土坑で、規模や堆積土からみて柱穴の可能性が高い。

遺　物(第364図)　土師器鍋の破片が１点出土した。364図３は口縁部付近の破片で、頸部に段を有し、口縁部が外反する器形である。外面は縦位ケズリを施すが、上部は指の押さえにとどめる。内面は横位ヘラナデ調整である。

01-ＳＫ431(第356図)

遺　構　ＭＮ32グリッドの第Ⅴ層中位～第Ⅵ層上面で確認した。本遺構の立地点は台地南東縁に近く、緩やかに東側へ傾斜している。01-ＳＢ472・01-ＳＤ404と重複するが、新旧関係は不明である。

堆積土もほとんど残っておらず堆積過程は不明である。平面形は大部分が失われているが、おそらく円形と考えられる。規模は残存部の径で約0.65m、検出面からの深さ約0.2mである。周壁は緩やかに立ち上がり、底面はほぼ平坦である。

本遺構は円形の土坑で、規模からみて柱穴の可能性が高いが、堆積土にその痕跡は認められない。

抜取り後埋め立てた可能性がある。

遺　物　本遺構からは遺物が出土しなかった。

02-ＳＫ01(第356図、図版128)

遺　構　ＭＤ47グリッドの第Ⅴ層中位～第Ⅵ層上面で確認した。本遺構の立地点は、台地のほぼ中央部で平坦な地形である。重複する遺構はない。

堆積土は10層で、１・10層を除いてレンズ状堆積で自然堆積による埋没と考えられる。平面形はほぼ円形で、規模は直径約1.1m、検出面からの深さ約1.2mである。周壁はほぼ垂直に立ち上がり、底面は平坦である。

本遺構は円形の土坑で、他の土坑に比べて規模が大きく、縄文時代の陥し穴またはフラスコ状土坑になる可能性もあるが、詳細は不明である。

遺　物　本遺構からは遺物が出土しなかった。

02-ＳＫ02(第357図・364図)

遺　構　ＭＤ・ＭＥ52グリッドの第Ⅴ層中位～第Ⅵ層上面で確認した。本遺構の立地点は、台地のほぼ中央部で平坦な地形である。02-ＳＩ24と重複し、本遺構の方が新しい。

堆積土は２層で、上部削平のため本来の埋没過程は不明である。平面形はほぼ円形で、規模は直径約0.9m、検出面からの深さ約0.15mである。周壁は緩やかに立ち上がり、底面はやや凹凸がある。

本遺構は円形の土坑で、極めて浅く機能等については不明である。

遺　物(第364図)　土師器甕の底部が１点出土した。364図４は砂底で、底部外縁がわずかに張り出す。

03-ＳＫ186(第357図・364図、図版129)

遺　構　ＬＯ・ＬＰ52・53グリッドの第Ⅳ層中位で確認した。本遺構の立地点は台地南東縁に近く、緩やかに東側へ傾斜している。03-ＳＩ336と重複し、本遺構の方が新しい。

堆積土は４層で、レンズ状堆積を示すことから自然堆積で埋没したと考えられる。平面形は南東半分が失われており不明である。規模は残存部の最大幅で約3.7m、検出面からの深さ約0.3mである。周壁は緩やかに立ち上がり、鍋底状の断面形態である。

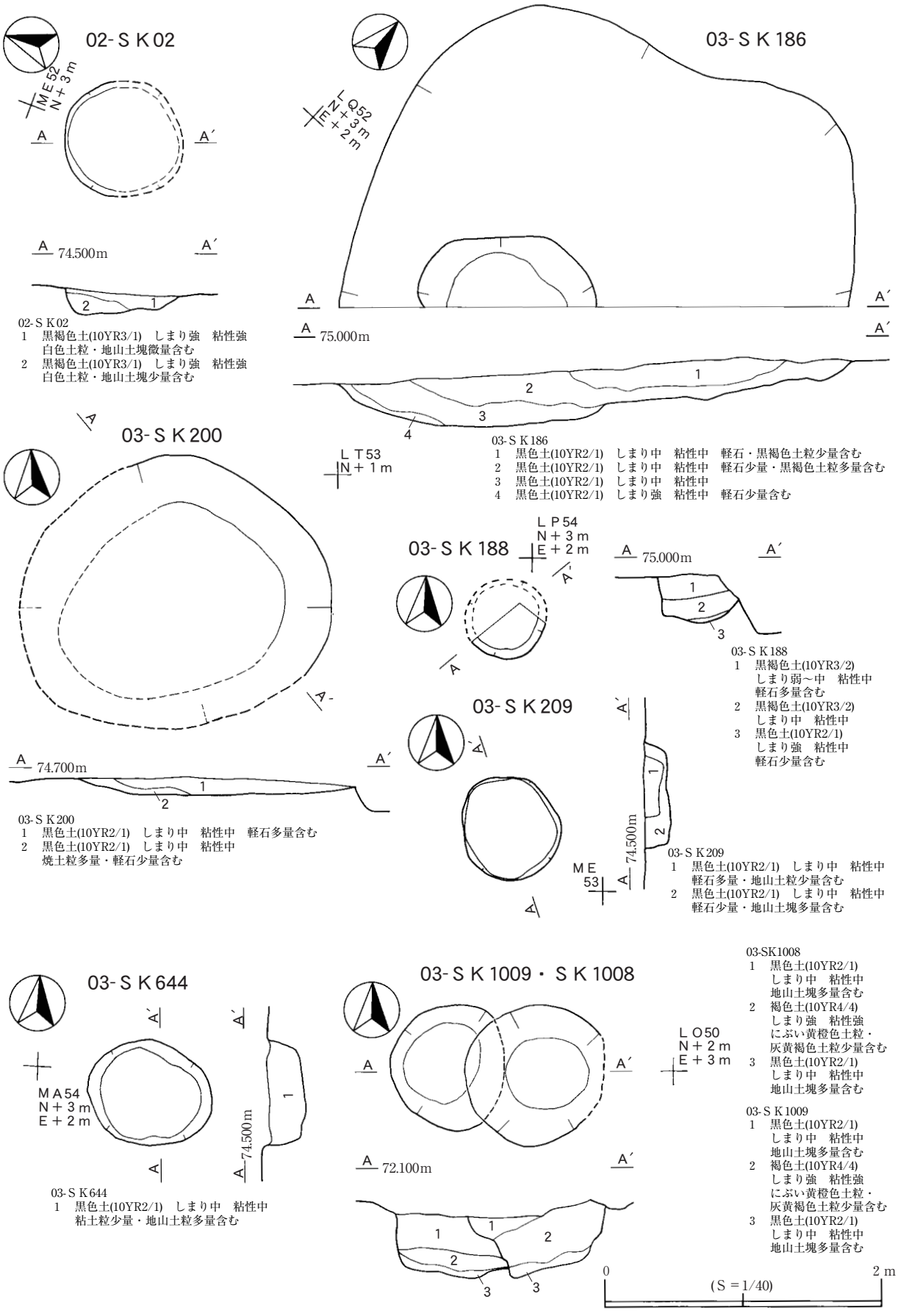
本遺構は比較的規模の大きい土坑で、平面形や断面形が不規則であることを併せると、何らかの施設の構築途中で、掘削を断念した残穴の可能性が高い。

遺　物(第364図)　土師器甕が１点出土した。364図５は口縁部破片で、胴上部が内傾して口縁部がわずかに直立する器形である。外面縦位ケズリ、内面横・斜位ユビナデ調整である。

03-ＳＫ188(第357図)

遺　構　ＬＯ54グリッドの第Ⅳ層中位で確認した。本遺構の立地点は台地南東縁に近く、緩やかに東側へ傾斜している。重複する遺構はない。

堆積土は３層で、各層が水平に堆積することから、人為的に埋め戻した可能性が高い。北側が失れているが、おそらく円形と考えられる。規模は残存部の径約0.6m、検出面からの深さ約0.3mである。



第357図　02-ＳＫ02・03-ＳＫ186・188・ 200・209・644・1008・1009

周壁は直立気味に立ち上がり、底面は鍋底状になる。

本遺構は円形の土坑で、規模からみて柱穴の可能性が高い。

遺　物　本遺構からは遺物が出土しなかった。

03-ＳＫ200(第357図、図版128)

遺　構　ＬＴ52・53グリッドの第Ⅳ層中位で確認した。本遺構の立地点は台地南東縁に近く、緩やかに東側へ傾斜している。重複する遺構はない。

堆積土は２層で、レンズ状堆積を示すことから自然堆積で埋没したと考えられる。平面形は南西側が失われており不明である。規模は残存部の最大幅で約2.0m、検出面からの深さ約0.15mである。周壁は緩やかに立ち上がり、鍋底状の断面形態である。

本遺構は比較的規模の大きい土坑で、平面形や断面形が不規則であることを併せると、何らかの施設の構築途中で、掘削を断念した残穴の可能性が高い。

遺　物　本遺構からは遺物が出土しなかった。

03-ＳＫ209(第357図、図版129)

遺　構　ＭＥ53グリッドの第Ⅴ層中位～第Ⅵ層上面で確認した。本遺構の立地点は、台地のほぼ中央部で平坦な地形である。重複する遺構はない。

堆積土は２層で、上部削平のため本来の埋没過程は不明である。平面形はほぼ円形で、規模は直径約0.75m、検出面からの深さ約0.15mである。周壁は垂直に立ち上がり、底面はほぼ平坦である。

本遺構は円形の土坑で、極めて浅く機能等については不明である。

遺　物　本遺構からは遺物が出土しなかった。

03-ＳＫ644(第357図、図版129)

遺　構　ＬＴ54グリッドの03-ＳＩ610床面で確認した。本遺構の立地点は、台地のほぼ中央部で平坦な地形である。03-ＳＩ610との新旧関係は不明である。

堆積土は１層のみであるため、人為的埋め戻しとみられる。平面形はほぼ円形で、規模は直径約0.9m、検出面からの深さ約0.25mである。周壁は垂直に立ち上がり、底面はほぼ平坦である。

本遺構は円形の土坑で、規模からみて柱穴の可能性が高い。

遺　物　土師器甕の胴部破片が出土しているが、小片のため図示しなかった。

03-ＳＫ1008・1009(第357図)

遺　構　ＬＮ50グリッドの第Ⅳ層中位～第Ⅵ層上面で確認した。本遺構の立地点は、南東斜面部の傾斜地である。２基と03-ＳＮ1007は重複関係にあり、03-ＳＮ1007が一番新しく、03-ＳＫ1008、03-ＳＫ1009の順に古くなる。

２基とも堆積土は３層で、各層が水平に堆積することから、人為的に埋め戻した可能性が高い。平面形はどちらも円形で、規模は03-ＳＫ1008が直径約1.0m、検出面からの深さ約0.4m、03-ＳＫ1009が直径約0.9m、検出面からの深さ約0.4mである。周壁は03-ＳＫ1008が緩やかに、03-ＳＫ1009が直立気

味に立ち上がり、底面は03-ＳＫ1008が傾斜し、03-ＳＫ1009が平坦である。

本遺構は円形または隅丸方形を基調とした土坑で、周辺の状況からして粘土採掘坑になる可能性がある。なお、03-ＳＮ1007構築時に埋め立てたと考えられる。

遺　物　本遺構からは遺物が出土しなかった。

03-ＳＫ855(第358図)

遺　構　ＭＭ・ＭＮ47グリッドの03-ＳＩ17上面で確認した。本遺構の立地点は北西側調査区外の沢に近く、やや西側に傾斜する。03-ＳＩ17より本遺構が新しい。

堆積土は１層のみだが、上部が削平されており本来の埋没過程は不明である。平面形は楕円形で、規模は長径約1.0m、短径約0.75m、検出面からの深さ約0.15mである。周壁は緩やかに立ち上がり、底面はほぼ平坦である。

本遺構は楕円形の土坑で、極めて浅く機能等については不明である。

遺　物　本遺構からは遺物が出土しなかった。

05-ＳＫ04(第358図、図版129)

遺　構　ＬＣ・ＬＤ69グリッドの砂礫層上面で確認した。本遺構の立地点は、丘陵部の頂上平坦面上である。重複する遺構はない。

堆積土は１層のみで埋没過程は不明である。平面形は不規則な方形で、規模は長軸約0.8m、短軸約0.6m、検出面からの深さ約0.4mである。周壁は緩やかに立ち上がり、鍋底状の断面形になる。

本遺構は不規則な方形の土坑で、機能等については不明である。

遺　物　本遺構からは遺物が出土しなかった。

05-ＳＫ09(第359図、図版130)

遺　構　ＫＰ～ＫＳ67～69グリッドで確認した。本遺構の立地点は、丘陵部中腹緩斜面下の急斜面から山麓緩斜面にかけての範囲で、全体的に傾斜の急な地形である。周辺は、基本層位のⅥ層～Ⅷ層が露頭する範囲である。重複する遺構はない。

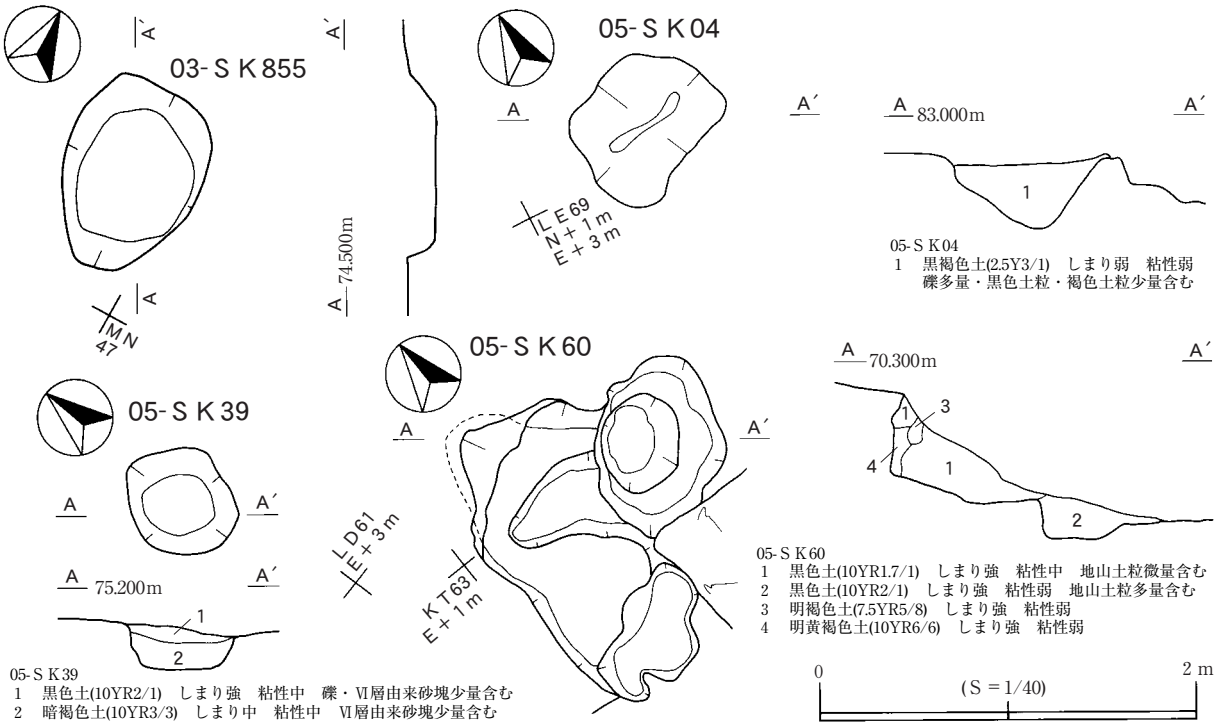
堆積土は30層で、斜面上位からの崩落や流入土が互層となる自然堆積の埋没過程を示す。作業用通路設置のため、ＫＱ69とＫＲ68を結ぶラインで途切れて上部と下部に分かれるが、本来は一体となって北西から南東へと延びて、円形や方形の穴が連結する不規則な平面形状だったと考えられる。上部と下部を併せた規模は斜面直交方向で約10.4m、斜面平行方向で約11.4m、斜面上位の肩から最底部までの落差約5.1mである。周壁は一部オーバーハングする部分があり、底面は階段状になる。

本遺構は不規則な形状の土坑で、丘陵斜面部のⅥ層～Ⅷ層が露頭する範囲に位置し、Ⅷ層粘土層でも、緻密な粘土の部分を集中的に掘り込んでいることから、粘土採掘坑と考えられる。

遺　物　本遺構からは遺物が出土しなかった。

05-ＳＫ39(第358図、図版130)

遺　構　ＬＣ61グリッドの05-ＳＩ05床面で確認した。本遺構の立地点は、丘陵部中腹の平坦面上であ



第358図　03-ＳＫ855・05-ＳＫ04・39・60

る。05-ＳＩ05との新旧関係は不明である。

堆積土は２層で、水平堆積のため人為堆積と考えられる。平面形は不規則な方形で、規模は一辺約0.5m、検出面からの深さ約0.25mである。周壁は一部わずかに段違いになる部分もあるが、基本的には直立気味に立ち上がり、底面はほぼ平坦である。

本遺構は不規則な方形の土坑で、機能等については不明である。

遺　物　本遺構からは遺物が出土しなかった。

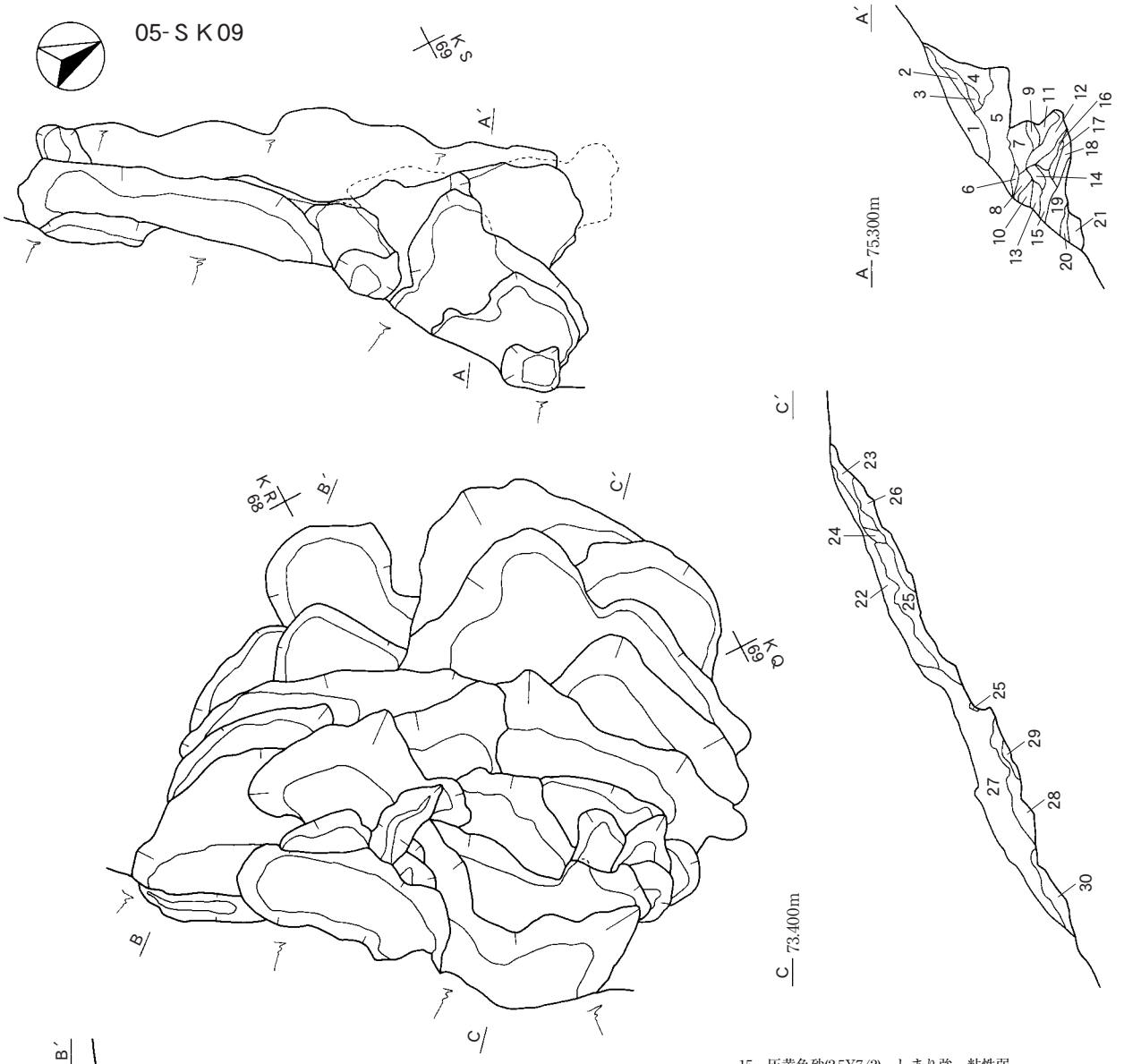
05-ＳＫ42(第360図、図版130)

遺　構　ＫＱ～ＫＳ65～67、ＫＴ65・66グリッドで確認した。本遺構の立地点は、丘陵部中腹緩斜面下の急斜面から山麓緩斜面にかけての範囲で、全体的に傾斜の急な地形である。周辺は、基本層位のⅥ層～Ⅷ層が露頭する範囲である。重複する遺構はない。

堆積土は15層で、斜面上位からの崩落や流入土が互層となる自然堆積の埋没過程を示す。作業用通路設置のため、一部途切れて上部と下部に分かれるが、本来は一体となって北西から南東へ延びて、円形や方形の穴が連結する不規則な平面形状だったと考えられる。上部と下部を併せた規模は斜面直交方向で約9.0m、斜面平行方向で約11.0m、斜面上位の肩から最底部までの落差約4.1mである。周壁は緩やかに立ち上がり、底面は階段状になる。

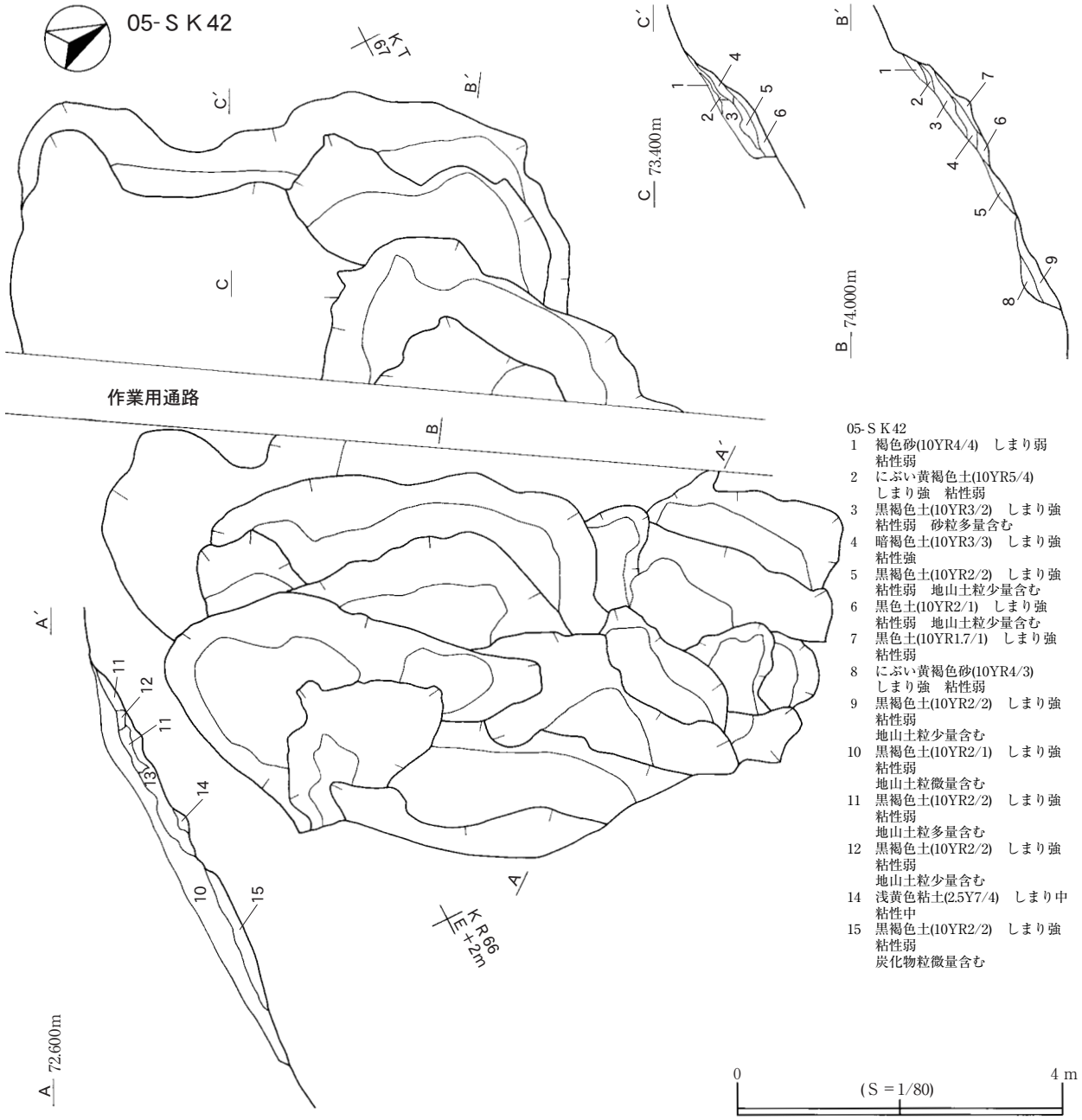
本遺構は不規則な形状の土坑で、丘陵斜面部のⅥ層～Ⅷ層が露頭する範囲に位置するが、Ⅷ層粘土層は上部で確認できる程度であることから、本来的には粘土採掘のためのテストピットのような性格をもつと考えられる。

遺　物　土師器甕の口縁部が出土した。364図７は口縁部が直立気味に立ち上がる口縁部破片で、外面ユビナデ、内面にヘラナデ調整が認められる。



05-ＳＫ09
1　黒褐色土(7.5YR3/1)　しまり中　粘性弱
　砂粒微量含む
2　黒褐色土(7.5YR3/2)　しまり強　粘性強
　Ⅷ層由来粘土塊微量含む
3　暗褐色土(7.5YR3/3)　しまり強　粘性強
　粘土粒・砂粒少量含む
4　明褐色土(10YR7/6)　しまり強　粘性強
　粘土粒・砂粒少量含む
5　明褐色土(10YR5/6)　しまり弱　粘性強
　黒色土粒・粘土粒少量含む
6　黒褐色土(7.5YR3/2)　しまり強　粘性強
　明褐色土粒・砂粒少量含む
7　明褐色土(7.5YR5/6)　しまり中　粘性強
　黒色土粒・粘土粒少量含む
8　黒褐色土(7.5YR3/2)　しまり強　粘性強
　明褐色土粒多量含む
9　灰黄色粘土(2.5Y7/2)　しまり強　粘性強
　褐色土粒・黒褐色土粒少量含む
10　黒褐色土(7.5YR3/1)　しまり強　粘性強
11　黒褐色土(7.5YR3/2)　しまり強　粘性強
　砂粒微量含む
12　暗褐色土(7.5YR3/3)　しまり強　粘性強
　砂粒少量含む
13　黒褐色土(7.5YR3/2)　しまり強　粘性強
　明褐色土粒・砂粒多量含む
14　黒褐色土(7.5YR3/2)　しまり強　粘性強
　砂粒微量含む
15　灰黄色砂(2.5Y7/2)　しまり強　粘性弱
　黒色土粒多量含む
16　黒褐色土(7.5YR3/2)　しまり強　粘性強
17　黒褐色土(7.5YR3/1)　しまり強　粘性強
　褐色土粒少量含む
18　黄褐色砂(2.5Y5/3)　しまり強　粘性弱
　黒色土粒多量含む
19　浅黄橙色粘土(10YR8/4)　しまり強　粘性強
　黒褐色土との混合層
20　明黄褐色砂(10YR6/8)　しまり強　粘性弱
21　浅黄橙色粘土(10YR8/4)　しまり強　粘性強
　黒褐色土粒少量含む
22　黒色土(10YR1.7/1)　しまり強　粘性弱
　地山土粒微量含む
23　黒褐色土(10YR3/2)　しまり強　粘性弱
　地山土粒多量含む
24　明黄褐色土(10YR6/6)　しまり強　粘性弱
25　黒色土(10YR1.7/1)　しまり強　粘性弱
　地山土粒少量含む
26　褐色砂(10YR4/4)　しまり強　粘性弱
27　黒色土(10YR1.7/1)　しまり中　粘性弱
　地山土粒微量含む
28　黒色土(10YR1.7/1)　しまり中　粘性中
　地山土粒微量含む
29　暗褐色土(10YR3/3)　しまり強　粘性中
30　暗褐色土(10YR3/3)　しまり強　粘性弱
　地山土粒少量含む

第359図　05-ＳＫ09

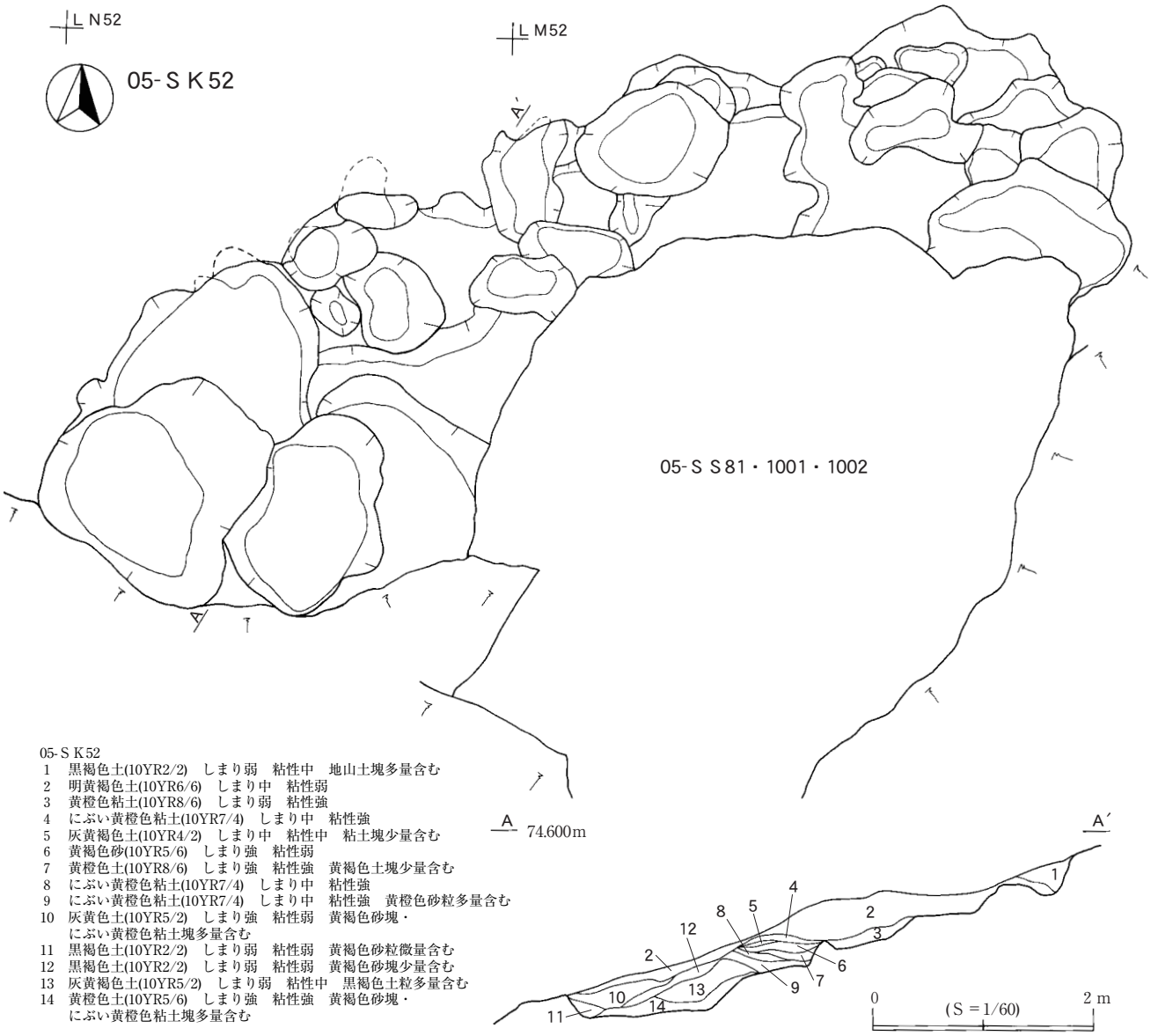


第360図　05-ＳＫ42

05-ＳＫ52(第361図、図版130)

遺　構　ＬＫ・ＬＬ51・52、ＬＭ50～52、ＬＮ50・51グリッドで確認した。本遺構の立地点は、平坦部南東縁直下の緩斜面で、緩やかに南東へ傾斜する。周辺は、基本層位のⅥ層～Ⅷ層が露頭する範囲である。05-ＳＳ1001・1002・81製鉄遺構の周囲に位置しており、部分的に上部作業場または平坦部居住域からの通路として利用した可能性がある。

堆積土は14層で、基本的には斜面上位からの崩落や流入土が互層となる自然堆積の埋没過程とみられるが、４～９層は各層薄く平行に堆積することから、人為的な造成部分を含む可能性がある。平面形は円形や方形の穴が連結する不規則な形状で、規模は斜面直交方向で約3.8m、斜面平行方向で約10.4m、斜面上位の肩から最底部までの落差約1.6mである。周壁は一部オーバーハングする部分があり、底面は階段状になる。



05-S K52
1　黒褐色土(10YR2/2)　しまり弱　粘性中　地山土塊多量含む
2　明黄褐色土(10YR6/6)　しまり中　粘性弱
3　黄橙色粘土(10YR8/6)　しまり弱　粘性強
4　にぶい黄橙色粘土(10YR7/4)　しまり中　粘性強
5　灰黄褐色土(10YR4/2)　しまり中　粘性中　粘土塊少量含む
6　黄褐色砂(10YR5/6)　しまり強　粘性弱
7　黄橙色土(10YR8/6)　しまり強　粘性強　黄褐色土塊少量含む
8　にぶい黄橙色粘土(10YR7/4)　しまり中　粘性強
9　にぶい黄橙色粘土(10YR7/4)　しまり中　粘性強　黄橙色砂粒多量含む
10　灰黄色土(10YR5/2)　しまり強　粘性弱　黄褐色砂塊・
　にぶい黄橙色粘土塊多量含む
11　黒褐色土(10YR2/2)　しまり弱　粘性弱　黄褐色砂粒微量含む
12　黒褐色土(10YR2/2)　しまり弱　粘性弱　黄褐色砂塊少量含む
13　灰黄褐色土(10YR5/2)　しまり弱　粘性中　黒褐色土粒多量含む
14　黄橙色土(10YR5/6)　しまり強　粘性強　黄褐色砂塊・
　にぶい黄橙色粘土塊多量含む

第361図　05-S K52

本遺構は不規則な形状の土坑で、丘陵斜面部のⅥ層～Ⅷ層が露頭する範囲に位置し、Ⅷ層粘土層でも、緻密な粘土の部分を集中的に掘り込んでいることから、粘土採掘坑と考えられる。

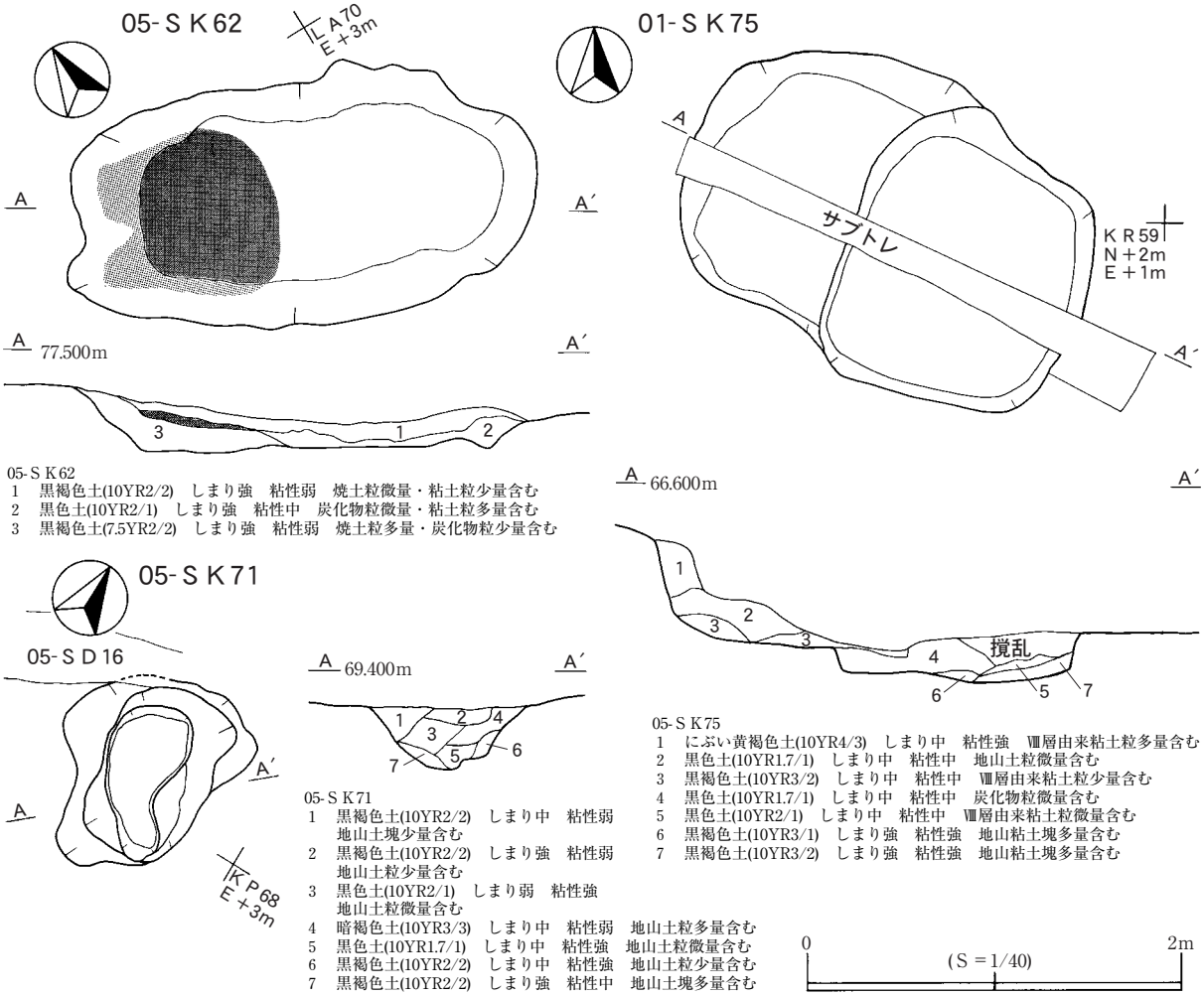
遺　物　本遺構からは遺物が出土しなかった。

05-S K60(第358図、図版131)

遺　構　K S62・63グリッドで確認した。本遺構の立地点は、丘陵部山麓の崖際で、東側に緩く傾斜する。05-S S34の上部作業場を掘り込んでいる。

堆積土は４層で、ほとんどを埋め尽くす１・２層と４層の関係から、崖からの崩落土で一気に埋没したと考えられる。平面形は不規則な形状で、円形や方形の穴が連結している。規模は斜面直交方向で約1.7m、斜面平行方向で約1.5m、斜面上位の肩から最底部までの落差約0.7mである。周壁は一部オーバーハングする部分があり、底面は階段状になる。

本遺構は不規則な形状の土坑で、丘陵斜面部に近いことから、粘土や砂の採掘坑と考えられる。



第362図　05-ＳＫ62・71・75

遺　物　本遺構からは遺物が出土しなかった。

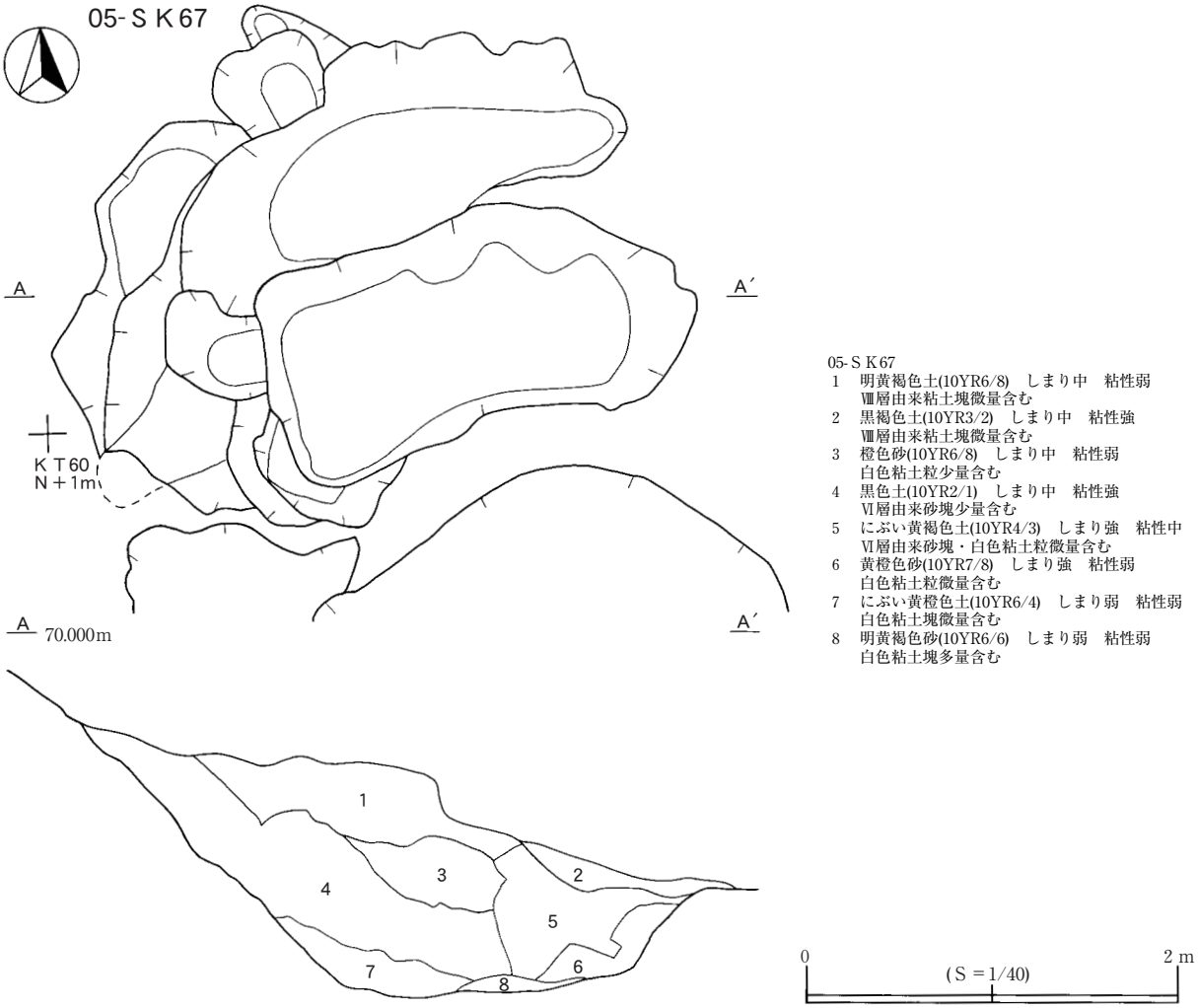
05-ＳＫ62(第362図・364図、図版131・165)

遺　構　ＫＴ69・70グリッドの05-ＳＩ02床面で確認した。本遺構の立地点は、丘陵部中腹の緩斜面上である。05-ＳＩ02の貼床下部で本遺構を確認したので、本遺構の方が古い。

堆積土は３層で、２・３層上面に焼土があることから、２・３層は整地層、１層は05-ＳＩ02構築時の埋め立てと考えられる。平面形は楕円形で、規模は長径約2.5m、短径約1.3m、検出面からの深さ約0.3mである。周壁はほぼ垂直に立ち上がり、２・３層上面はやや斜面下位に向けて傾斜する。

本遺構は楕円形の土坑で、整地面上で燃焼作業を行っている。鍛冶炉とも想定されたが、鍛造剥片等の出土はない。

遺　物(第364図)　土師器甕・坏、鉄製品が出土した。364図８～10は比較的中・小型の土師器甕である。８は胴上部まで外傾し、口端が短く外反する。９・10は口縁部まで緩やかに内湾して、口端が直立する。外面調整は８・９が縦位ケズリ、10がユビナデ、内面はいずれも横位ヘラナデ調整である。11・12は土師器甕の口縁部破片で、口縁部まで内湾する器形である。外面はどちらも縦位ケズリ、内面は11が横位ユビナデ、12が横位ヘラナデ調整である。364図13は内黒の坏で、底面に回転糸切痕をとどめる。364図14・15は鉄製品で、14が刀子、15が紡錘車の滑車部分である。



第363図　05-ＳＫ67

05-ＳＫ67(第363図、図版131)

遺　構　ＫＳ60グリッドで確認した。本遺構の立地点は、丘陵部山麓緩斜面で、全体的に南東側へ傾斜する。周辺は、基本層位ⅩⅢ層に相当するとみられる砂層が露頭する範囲である。南側には05-ＳＳ11・12・17・80上部作業場が連結する。

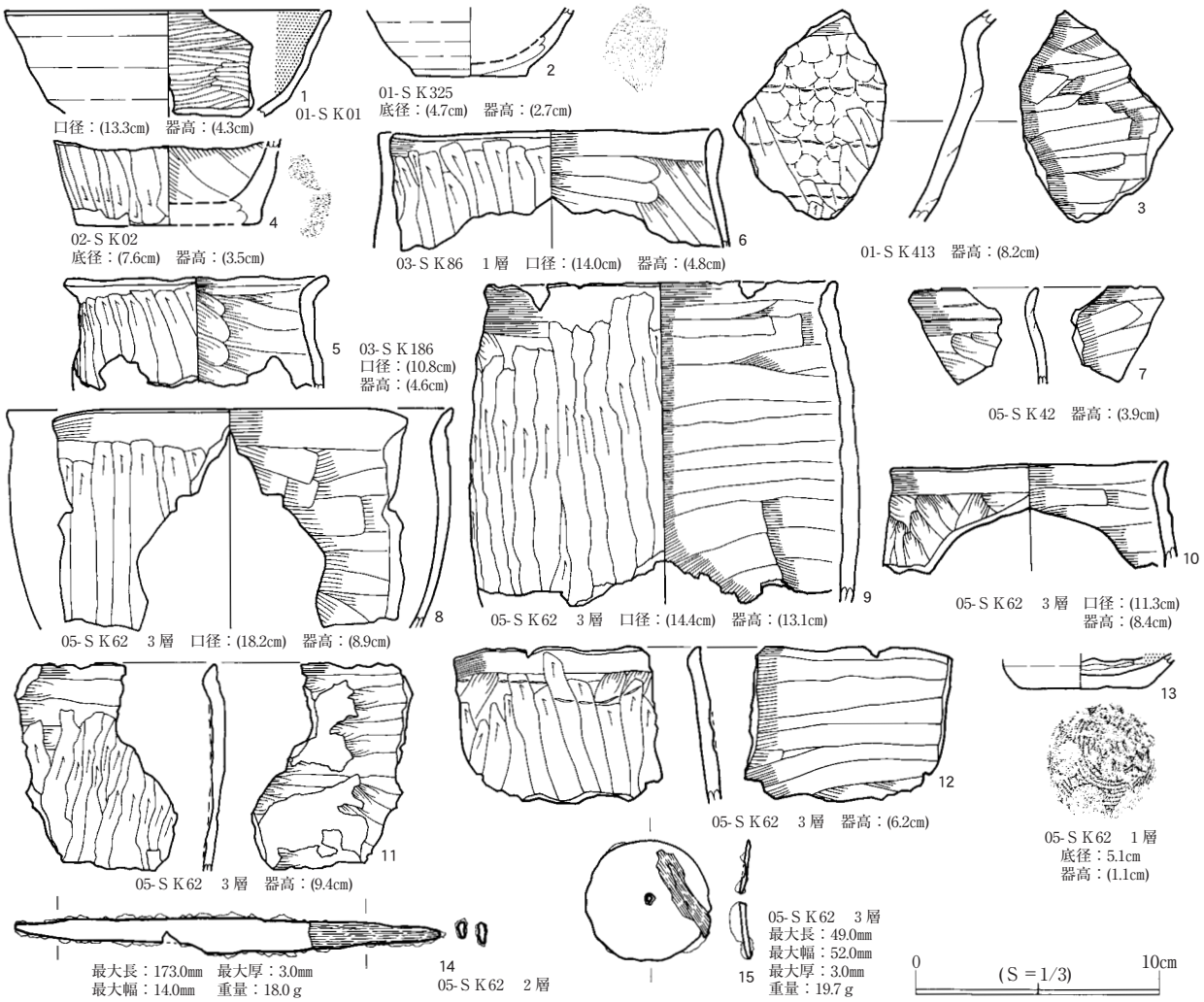
堆積土は８層で、斜面からの崩落や流入土が互層となる自然堆積の埋没過程を示す。平面形は円形や方形の穴が連結する不規則な形状で、規模は斜面直交方向で約2.8m、斜面平行方向で約3.4m、斜面上位の肩から最底部までの落差約1.5mである。周壁は緩やかに立ち上がり、底面は斜面側が階段状になるが、斜面下位側は台形状になる。

本遺構は不規則な形状の土坑で、山麓斜面部のⅩⅢ層が露頭する範囲に位置することから、砂を採掘するための穴だった可能性がある。

遺　物　本遺構からは遺物が出土しなかった。

05-ＳＫ71(第362図、図版132)

遺　構　ＫＯ67・68グリッドで確認した。本遺構の立地点は、丘陵部山麓緩斜面で、全体的に南東側へ傾斜する。05-ＳＤ16と重複するが明確な新旧関係は不明である。



第364図　ＳＫ出土遺物

堆積土は７層で、斜面上位からの崩落や流入土が互層となる自然堆積の埋没過程を示す。平面形は不規則な形状で、規模は斜面直交方向で約1.1ｍ、斜面平行方向で約1.0ｍ、検出面からの深さ約0.3ｍである。周壁は緩やかに立ち上がり、底面には凹凸がある。

本遺構は不規則な形状の土坑で、機能は不明である。

遺　物　本遺構からは遺物が出土しなかった。

05-ＳＫ75(第362図、図版132)

遺　構　ＫＲ・ＫＳ59グリッドで確認した。本遺構の立地点は、丘陵部山麓の緩斜面で、東側に緩く傾斜する。重複する遺構はないが、05-ＳＳ11・12・77排滓場が上部を覆う。

堆積土は７層で、斜面下位から順に堆積することから自然堆積とみられる。上部を排滓場が覆っており、開口したまま放棄されて排滓場に取り込まれたと考えられる。平面形は隅丸方形が２基連結した形状で、規模は最大長約2.3ｍ、最大幅1.6ｍ、斜面上位の肩から最底部までの落差約0.8ｍである。周壁は直立気味に立ち上がり、底面は階段状になり、それぞれは平坦である。

本遺構は不規則な形状の土坑で、周囲の状況から鉄選別作業場だったと考えられる。

遺　物　本遺構からは遺物が出土しなかった。

(６)焼土遺構

01-ＳＮ39(第365図、図版132)

遺　構　ＮＢ34グリッドで確認した。本遺構の立地点は台地南西端に近く、緩やかに南西側へ傾斜している。重複する遺構はない。被熱範囲の平面形は円形で、直径約0.45m、被熱の深さは約0.08mまで及ぶ。周囲に柱穴等は確認できなかった。

本遺構の立地点は斜面下への崩落が著しく、本来の被熱面は残存していないと考えられる。

遺　物　周辺から遺物は出土しなかった。

01-ＳＮ79(第365図、図版132)

遺　構　ＮＣ28グリッドで確認した。本遺構の立地点は台地南西端に近く、緩やかに南西側へ傾斜している。01-ＳＤ42と重複し、01-ＳＤ42の上面に本遺構が位置する。被熱範囲の平面形は楕円形で、長径約0.75m、短径約0.45mで、被熱の深さは0.08mまで及ぶ。周囲に柱穴等は確認できなかった。

本遺構の立地点は斜面下への崩落が著しく、本来の被熱面は残存していないと考えられる。

遺　物　周辺から遺物は出土しなかった。

02-ＳＮ01(第365図)

遺　構　ＭＭ32・33グリッドで確認した。本遺構の立地点は台地南東縁に近く、緩やかに東側へ傾斜している。重複する遺構はない。被熱範囲の平面形は不整な円形で、径約0.7mで、被熱の深さは0.06mまで及ぶ。焼土面の北部には粘土貼り付け範囲があり、カマドの底面のみが残存する状態と考えられたが、周囲に柱穴等は確認できなかった。

本遺構の立地点は削平が著しく、本来の被熱面は残存していないと考えられる。

遺　物　周辺から遺物は出土しなかった。

03-ＳＮ331(第365図)

遺　構　ＬＳ49グリッドで確認した。本遺構の立地点は、台地南東縁に近く緩やかに東側へ傾斜している。03-ＳＤ184と重複し、その上面に本遺構が位置する。被熱範囲は不整な円形の被熱範囲が２か所ある。どちらも径約0.2m前後で、被熱の深さは0.04mまで及ぶ。ただし、焼土面下に炭化物が入ることから、複数枚の燃焼面が存在する可能性がある。周囲に柱穴等は確認できなかった。

本遺構の立地点は削平が著しく、本来の被熱面は残存していないと考えられる。

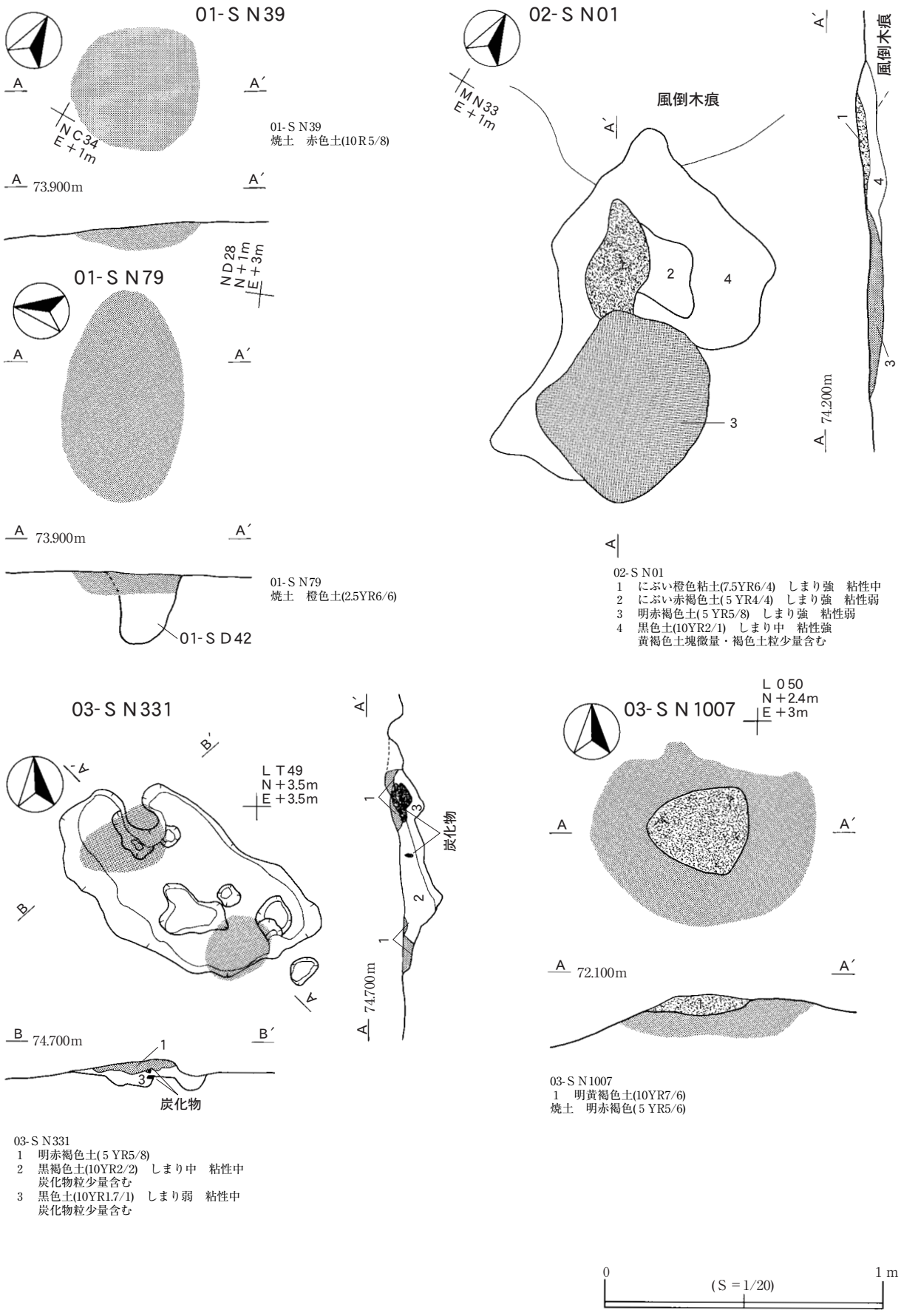
遺　物　周辺から遺物は出土しなかった。

03-ＳＮ1007(第365図)

遺　構　ＬＮ50グリッドで確認した。本遺構の立地点は、台地南東縁直下の急傾斜地である。下部に03-ＳＫ1008・1009があり、その上面を本遺構が燃焼面としている。被熱範囲は不整な平面形で、長軸約0.8m、短軸約0.6mで、被熱の深さは最大で0.13mまで及ぶ。周囲に柱穴等は確認できなかった。

本遺構の立地は、製鉄遺構の立地に似ているが詳細は不明である。

遺　物　周辺から遺物は出土しなかった。



第365図　01-S N39・79・02-S N01・03-S N331・1007

03-ＳＮ342(第366図、図版132)

遺　構　ＬＯ53グリッドで確認した。本遺構の立地点は台地南東縁に近く、緩やかに東側へ傾斜している。重複する遺構はない。被熱範囲の平面形は不整な形状で、最大長約0.45ｍで、被熱の深さは0.02ｍまで及ぶ。周囲に柱穴等は確認できなかった。

本遺構の立地点は削平が著しく、本来の被熱面は残存していないと考えられる。03-ＳＩ336・576・854と、05-ＳＳ1001・1002等の製鉄遺構に挟まれた平坦地に位置することから、鍛冶等の鉄関連作業場の痕跡である可能性が高い。

遺　物　周辺から遺物は出土しなかった。

05-ＳＮ20(第366図、図版132)

遺　構　ＬＪ52・53グリッドで確認した。本遺構の立地点は台地南東縁直下の緩斜面で、緩やかに東側へ傾斜している。重複する遺構はない。当初製鉄炉の残骸と捉えていたが、その積極的根拠に乏しいため、焼土遺構として取り扱った。焼土は、長さ約4.0ｍ、幅約2.3ｍの平場の南端部にある。被熱範囲の平面形は一部トレンチで失われているが、円形と考えられる。なお、焼土脇に白色粘土が設置してある。白色粘土と被熱範囲を併せた規模は、径約0.5ｍで、被熱の深さは約0.08ｍまで及ぶ。

本来の被熱面は残存していないと考えられるため、詳細は不明である。

遺　物　周辺から遺物は出土しなかった。

05-ＳＮ21(第366図、図版133)

遺　構　ＫＰ・ＫＱ71グリッドで確認した。本遺構の立地点は丘陵部北東部の中腹緩斜面で、緩やかに東側へ傾斜している。重複する遺構はない。当初製鉄炉の残骸と捉えていたが、その積極的根拠に乏しいため、焼土遺構として取り扱った。被熱範囲の平面形は不規則な形状で、最大長約0.8ｍ、最大幅約0.5ｍで、被熱の深さは最大で0.08ｍまで及ぶ。なお、斜面に直交する方向に長軸方向が合っている。周囲に柱穴等のプランは確認できなかった。

周囲に炭化物が散在しており、本来の被熱面が残存する可能性は高いが、詳細は不明である。周辺状況からみて、鉄関連作業場だった可能性が最も高い。

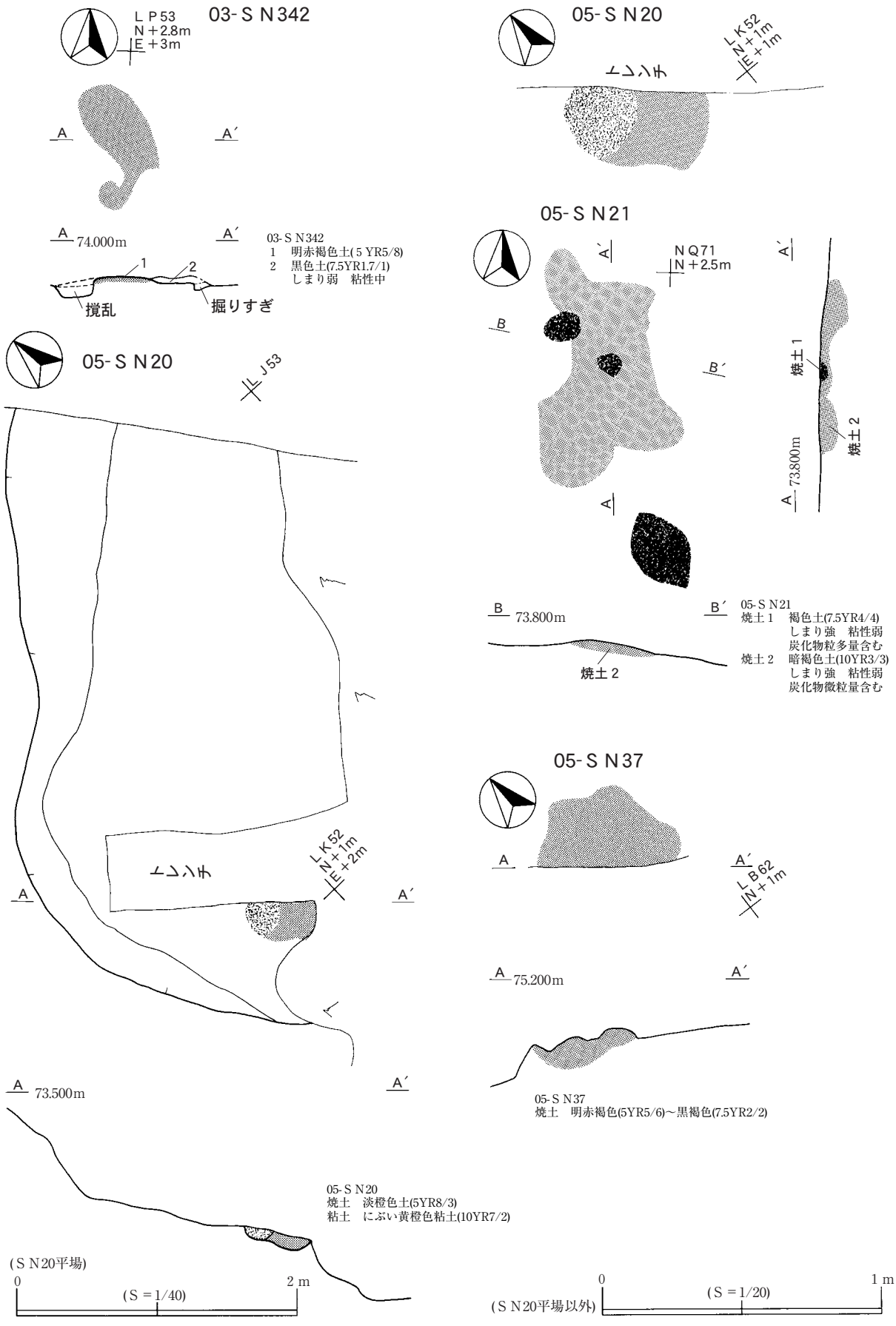
遺　物　周辺から遺物は出土しなかった。

05-ＳＮ37(第366図、図版133)

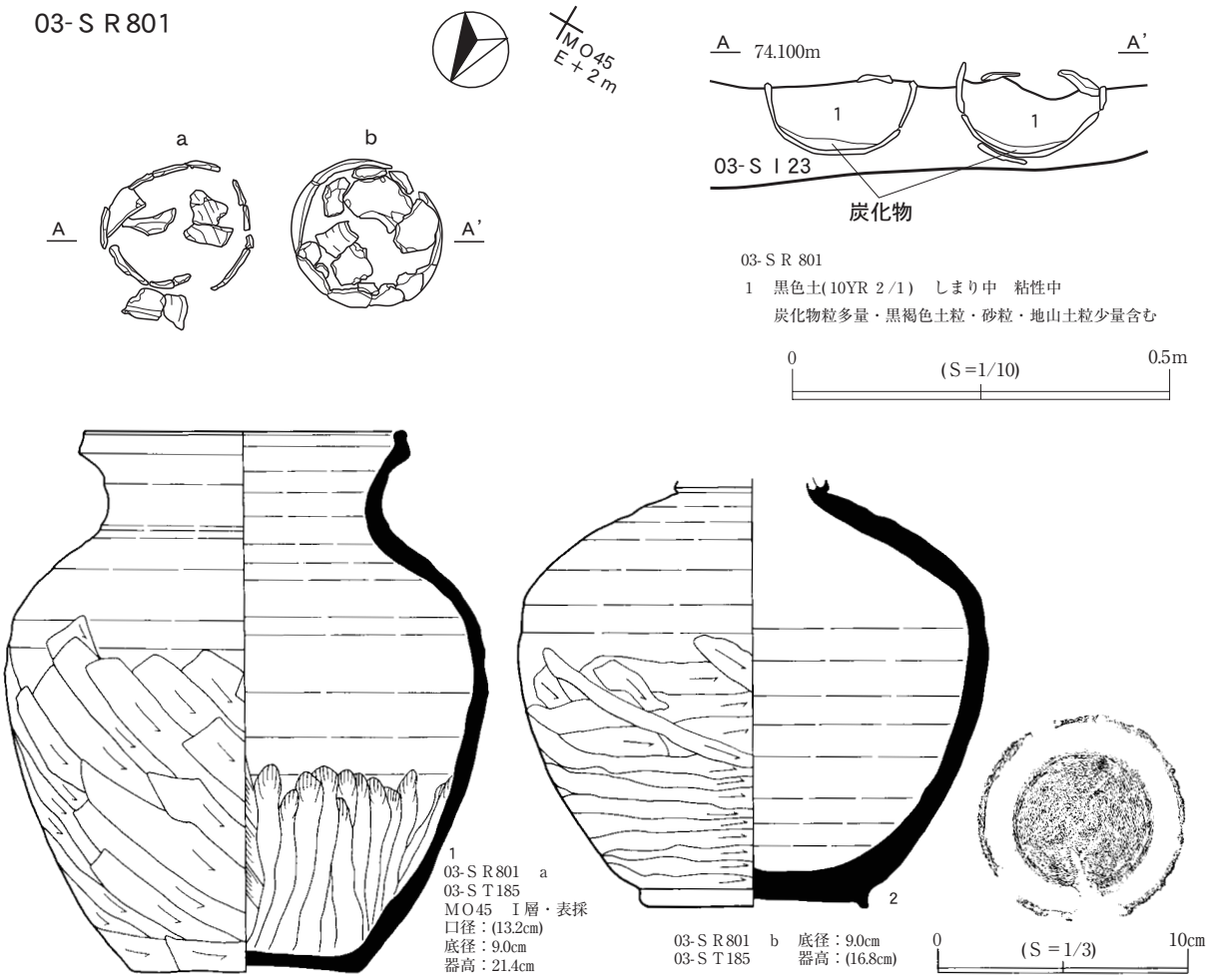
遺　構　ＬＢ62グリッドで確認した。本遺構の立地点は丘陵部中腹緩斜面で、緩やかに東側へ傾斜している。重複する遺構はないが、05-ＳＩ03と05-ＳＩ05に挟まれた位置にある。当初鍛冶炉の残骸と捉えていたが、その積極的根拠に乏しいため、焼土遺構として取り扱った。被熱範囲の平面形は南西側が失われており不明である、残存部の最大長で約0.5ｍで、被熱の深さは最大で0.1ｍまで及ぶ。周囲に柱穴等のプランは確認できなかった。

本来の被熱面が残存する可能性は高いが、詳細は不明である。周辺状況からみて、鍛冶等の鉄関連作業場だった可能性が最も高い。

遺　物　周辺から遺物は出土しなかった。



第366図　03-S N342・05-S N20・21・37



第367図　03-ＳＲ801・出土遺物

(７)土器埋設遺構

03-ＳＲ801(第367図、図版133・164)

遺　構　ＭＮ45グリッドの03-ＳＩ23上面で確認した。本遺構が03-ＳＩ23の堆積土の上部に位置する。本遺構の立地点は、北西側調査区外の沢に向かって緩やかに傾斜している。

埋設土器は２個並べて設置してあった。それぞれ堆積土は１層で、底に炭化物がまとまっている。埋設土器は、須恵器の壺を利用しており、いずれも正位に設置してある。掘形はほぼ土器の形に合わせてあり、裏込めの土も明確には確認できなかった。そのため、03-ＳＩ23埋め立て時に正位に設置した可能性も否定できない。

本遺構は、埋没した竪穴住居跡の上部を利用した土器埋設遺構である。墓跡の可能性もあるが、明らかではない。なお、03-ＳＩ23との時間差も明確でないが、03-ＳＩ23が焼失家屋であることに関連性を求めることが出来ると考えられる。

遺　物(第367図)　埋設土器の須恵器壺が２個体出土した。１は埋設土器ａで、わずかに内湾する口縁部から底部までの形状が分かる。２は埋設土器ｂで、頸部から底部までの形状が分かる。両者を比較すると、１が頸部の径が広く、２が狭い。１は肩の屈曲が緩やかで曲線的なのに対し、２は肩が張り直線的に折れる印象がある。外面の再調整では１が斜位ケズリなのに対し、２は横位ケズリである。また底部では、１が平底、２が高台付である。１は内面底部付近に縦位ユビナデ再調整が認められる。

（８）柱穴列・溝跡・道跡

01-ＳＡ40(第368図、図版133)

遺　構　ＮＡ34、ＮＢ35グリッドの第Ⅵ層上面で確認した。本遺構の立地点は台地南西端に当たり、緩やかに南西側に傾斜する。重複する遺構はなく、近接する01-ＳＩ149や01-ＳＤ220と平行する。

本遺構は５個の柱穴で構成される。柱穴中心間の距離は、Ｐ１－(約1.6m)－Ｐ２－(約1.6m)－Ｐ３－(約1.7m)－Ｐ４－(約1.6m)－Ｐ５である。Ｐ３・５には抜取り穴とみられる浅い穴が付属する。

本遺構は５本の柱で構成する板塀と考えられる。01-ＳＤ220自体が区画施設であることから、01-ＳＩ149に伴う区画施設の可能性が高い。

遺　物　本遺構からは遺物が出土しなかった。

05-ＳＡ46(第369図、図版133)

遺　構　ＬＡ62、ＬＢ61・62グリッドの第Ⅳ層中位～第Ⅵ層上面で確認した。本遺構の立地点は丘陵部中腹緩斜面に当たり、南東側に傾斜する。05-ＳＩ36と重複するが、新旧関係は不明である。近接する位置に05-ＳＩ03・05、05-ＳＮ37がある。

本遺構は５個の柱穴で構成される。柱穴は東西１間×南北３間のＬ字形に配置してある。柱穴中心間の距離は、４個が一列に並ぶ方向ではＰ１－(約2.0m)－Ｐ２－(約2.0m)－Ｐ３－(約2.0m)－Ｐ４の間隔で、２個並ぶ方向ではＰ１－(約2.5m)－Ｐ５である。堆積土に柱痕が認められないため、抜取っている可能性がある。

本遺構は５本の柱で構成する板塀と考えられる。05-ＳＮ37を囲うように配置してあり、同時併存の可能性が高い。同様な遺構である05-ＳＡ50・84との関連からみると、05-ＳＩ05に伴う可能性が高く、05-ＳＮ37を主体とする作業場を囲う施設だったと考えられる。

遺　物　本遺構からは遺物が出土しなかった。

05-ＳＡ50(第369図、図版133)

遺　構　ＫＴ・ＬＡ64・65グリッドの第Ⅳ層中位～第Ⅵ層上面で確認した。本遺構の立地点は丘陵部中腹緩斜面の末端に当たり、南東側は急な崖になっている。直接の重複はないが、05-ＳＡ84とは配置が重なる。近接する位置に05-ＳＩ03がある。

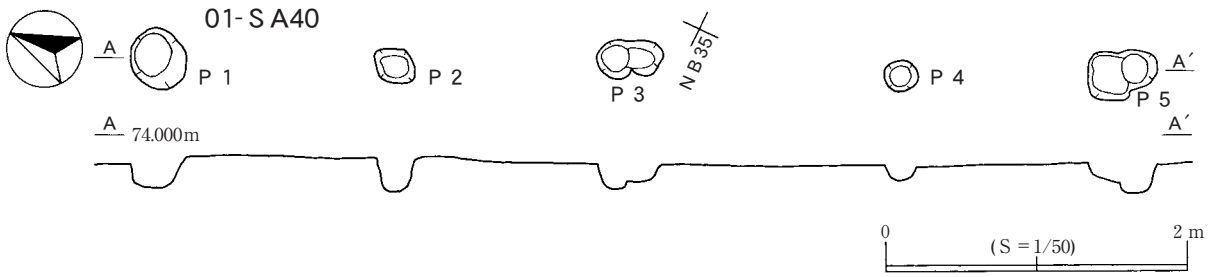
本遺構は３個の柱穴で構成される。柱穴中心間の距離は、Ｐ１－(約1.6m)－Ｐ２－(約1.6m)－Ｐ３である。堆積土が乱れていることから、抜取っている可能性がある。

本遺構は３本の柱で構成する板塀と考えられるが、立地点東側の崖は一部崩落しており、より東側に対応する柱穴を設置する緩斜面が広がっていたことも想定される。この点からすれば掘立柱建物になる可能性もある。なお、05-ＳＩ05と05-ＳＡ46の関係からみて、05-ＳＩ03・36のどちらかに伴う作業場を区画した施設の可能性が高い。

遺　物　本遺構からは遺物が出土しなかった。

05-ＳＡ84(第369図)

遺　構　ＫＴ64、ＬＡ64・65グリッドの第Ⅳ層中位～第Ⅵ層上面で確認した。本遺構の立地点は丘陵



第368図　01-ＳＡ40

部中腹緩斜面の末端に当たり、南東側は急な崖になっている。直接の重複はないが、05-ＳＡ50とは配置が重なる。近接する位置に05-ＳＩ03がある。

本遺構は４個の柱穴で構成される。柱穴は東西１間×南北２間のＬ字形に配置してある。柱穴中心間の距離は、３個並ぶ方向でＰ２－(約1.5m)－Ｐ３－(約1.5m)－Ｐ４の間隔で、２個並ぶ方向でもＰ１－(約1.5m)－Ｐ２である。Ｐ２では堆積土や平面形が乱れていることから、柱を抜取っている可能性がある。

本遺構は４本の柱で構成される板塀と考えられるが、立地点東側の崖は一部崩落しており、より東側に対応する柱穴を設置する緩斜面が広がっていたことも想定される。この点からすれば掘立柱建物になる可能性もある。なお、05-ＳＩ05と05-ＳＡ46の関係からみて、05-ＳＩ03・36のどちらかに伴う作業場を区画した施設の可能性が高い。

遺　物　本遺構からは遺物が出土しなかった。

01-ＳＤ36(第370図、図版36)

遺　構　ＮＣ35・36グリッドの第Ⅵ層上面で確認した。本遺構の立地点は台地南西端部で、緩やかに南西へ傾斜している。重複する遺構はない。

堆積土は１層のみで自然流入土と考えられる。北西－南東方向に延伸方向をもつが、南端でＬ字形に曲がる。規模は、全長約4.4m、検出面からの最深部で約0.2mである。北西端部付近の底面に、ピットが１個ある。

本遺構は、全長約4.4mのＬ字形の溝跡である。末端部に柱穴が付属することや、北西側が崩落することから、住居壁溝の残存部になる可能性が高い。

遺　物　本遺構からは遺物が出土しなかった。

01-ＳＤ42(第370図、図版36)

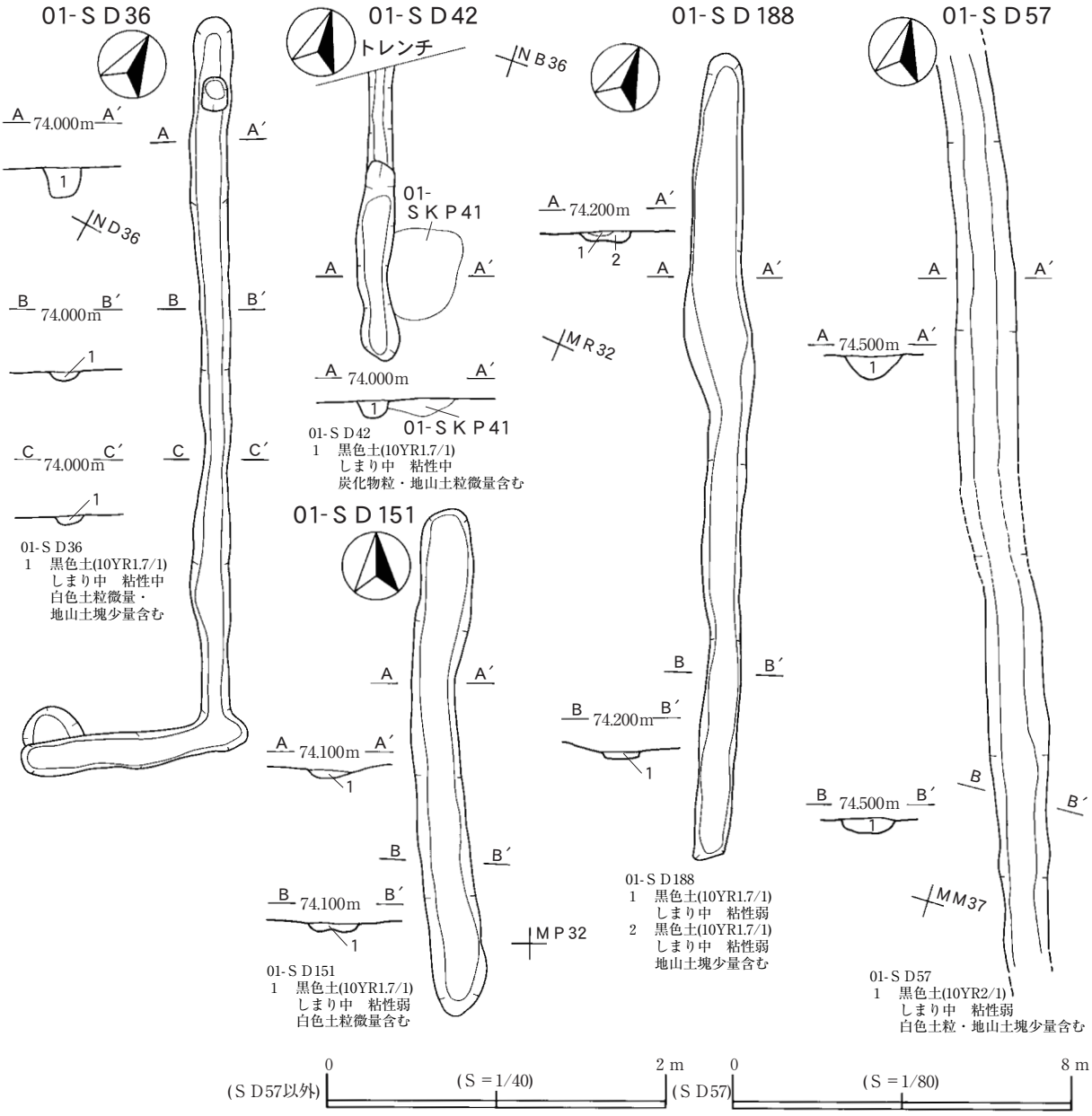
遺　構　ＮＢ35グリッドの第Ⅵ層上面で確認した。本遺構の立地点は台地南西端部で、緩やかに南西へ傾斜している。ＳＫＰ１基と重複するが、新旧関係は不明である。

堆積土は１層のみで自然流入土と考えられる。北西－南東方向に延伸方向をもつが、北端は失われている。規模は、全長約1.7m、検出面からの最深部で約0.1mである。

本遺構は、全長約1.7mの短い溝跡である。01-ＳＤ220とはやや軸方位が異なり、01-ＳＩ255と軸方位が近いことから、住居壁溝の残存である可能性が高い。

遺　物　本遺構からは遺物が出土しなかった。

第369図　05-ＳＡ46・50・84



第370図　01-ＳＤ36・42・57・151・188

01-ＳＤ57(第370図・382図、図版134)

遺　構　ＭＬ36・37、ＭＭ37・38グリッドの、01-ＳＩ86・190・193上面で確認した。本遺構の立地点は台地中央部で、ほぼ平坦な地形である。01-ＳＩ86・190・193と重複し、いずれよりも本遺構の方が新しい。

堆積土は１層のみで自然流入土と考えられる。北西－南東方向に延伸方向をもつが、両端が失われている。規模は、全長約10.7m、検出面からの最深部で約0.25mである。

本遺構は、全長約10.7m以上の溝跡である。本集落内でも最新段階とみられる01-ＳＩ86よりも新しく、性格は不明である。

遺　物(第382図)　土師器甕と坏が出土した。下部の01-ＳＩ86・190・193に由来するものである可能性が高い。382図１は甕の底部で砂底である。底部外縁がやや張り出す。382図２は土師器坏Ｂ類の底部で、外面に墨書が認められる。

01-ＳＤ151(第370図・382図、図版134)

遺　構　ＭＰ31・32グリッドの第Ⅵ層上面で確認した。本遺構の立地点は台地南東縁で、緩やかに南東へ傾斜している。重複する遺構はない。

堆積土は１層のみで自然流入土と考えられる。北－南方向に延伸方向をもつ。規模は、全長約3.0m、検出面からの最深部で約0.05mである。上部の削平が著しく、本来の形状を失っている。

本遺構は、全長約3.0mの短い溝跡である。周囲の遺構で軸方位の一致するものは見当たらず、性格は不明である。

遺　物(第382図)　鉄製品が出土した。382図３は紡錘車の滑車部分である。

01-ＳＤ188(第370図、図版135)

遺　構　ＭＱ31・32グリッドの第Ⅵ層上面で確認した。本遺構の立地点は台地南東縁に近く、緩やかに南東へ傾斜している。重複する遺構はない。

堆積土は２層で、自然流入土と考えられる。北西－南東方向に延伸方向をもつ。規模は、全長約4.8m、検出面からの最深部で約0.05mである。上部の削平が著しく、本来の形状を失っている。

本遺構は、全長約4.8mの溝跡である。北東側に分布する掘立柱建物跡と軸方位が近いことから、これらに付属する区画溝と考えられる。

遺　物　本遺構からは遺物が出土しなかった。

01-ＳＤ48・404　02-ＳＤ03(第371図)

遺　構　西端がＮＤ28、東端がＭＪ33グリッドに及ぶ。途中互い違いになるが、基本的には一連の遺構と考えられる。所々で柱穴様ピットと重複し、また撹乱による破壊を受けている。01-ＳＤ220と重複するが、重複箇所での台地南東縁への崩落が著しく、明確な新旧関係は把握できなかった。

延伸方向は、台地南東縁に沿って、西側では東西に、東側では北東－南西方向になる。確認できる範囲での規模は、全長約60m、検出面からの深さは、残りの良い所で概ね約0.4m前後で、深いところで0.6mになる。ＭＳ30～ＮＢ28の範囲では、溝底面に柱穴とみられるピットを伴う。

本遺構は全長約60m以上の溝跡で、台地南東縁に沿って展開する。また溝跡底面では部分的にピットが伴っている。これらのことから、集落の南東縁を区画する柵列だったと考えられる。

遺　物　本遺構からは遺物が出土しなかった。

01-ＳＤ47・195・213・250・426(第372図)

遺　構　ＮＡ39の西端から東北東へ延び、ＭＮ42で折れて南東方向へ向かい、ＭＪ37が南東端となる。上部の削平のため途切れる部分もあるが、基本的には一連の遺構と考えられる。途中01-ＳＩ155・87・190と重複する。01-ＳＩ190より本遺構が新しいことは確認できたが、01-ＳＩ155・87との新旧関係は明確に把握できなかった。

延伸方向は、ＭＮ42の屈曲点を境に、東北東－西南西方向と北西－南東方向に分かれる。規模は、全長約56m、検出面からの深さは、残りの良い所で概ね0.4m前後で、深いところでは約0.8mになる。ＭＮ42の屈曲点より南東方向の範囲では、溝底面に柱穴とみられるピットを伴う。

本遺構は全長約56m以上の溝跡で、01-ＳＤ220開口部に直交する延長線上に位置し、途中屈曲する。01-ＳＤ220と一体となって、集落を区画する施設だったと考えられる。

遺　物　本遺構からは遺物が出土しなかった。

01-ＳＤ220(第373図・382図、図版135・166)

遺　構　ＭＣ38が北西端、ＭＱ30グリッドが南東端になる溝跡である。多くの範囲は第Ⅵ層上面で確認したが、本来は第Ⅳ層以上の遺構である。本遺構の立地点は台地南西端に近く、緩やかに南西へ傾斜する。01-ＳＩ149と重複するが明確な新旧関係は捉えられなかった。しかし住居構造上、わざと軟質土上部を床面とする確率は低くく、その点で01-ＳＩ149より本遺構が新しいと判断される。

堆積土は多いところで５層に区分できる。基本的にレンズ状堆積で、自然流入による埋没過程を示している。北西－南東方向に延伸方向をもち、規模は全長38m以上、平均幅約4.0m、検出面からの深さは最深部で約0.8mである。上部の削平が著しく本来の形状を失っている。

本遺構は、全長38m以上、平均幅約4.0mの大溝である。集落の主体部が立地する台地上部平坦面の南西端に位置し、台地の延伸方向と直交するような配置からみて、集落と外部を区画するための溝と考えられる。

遺　物(第382図)　土師器坏が出土した。382図４～10が本遺構出土遺物で、４・７がＡ類、５・６・８～10がＢ類である。４～６の口縁部資料は胴部中位にわずかな屈曲をもち、口縁部が外反する器形である。７～10の底部資料はいずれも底面に回転糸切痕をとどめるもので、７・８は底部がやや突出し、９・10は底部から直線的に外傾して立ち上がる。

02-ＳＤ01(第374図、図版135)

遺　構　ＭＢ44、ＭＣ43・44、ＭＤ43グリッドの、03-ＳＩ06上面で確認した。本遺構の立地点は台地中央部で、ほぼ平坦な地形である。03-ＳＩ06と重複し、本遺構の方が新しい。

堆積土は１層のみで自然流入土と考えられる。東北東－西南西方向に延伸方向をもつが、両端が失われている。規模は、全長約9.3m、検出面からの最深部で約0.25mである。

本遺構は、全長約9.3m以上の溝である。本集落内でも最新段階とみられる02-ＳＩ05に近接する位置にあり、これに伴う排水溝の可能性もあるが、詳細は不明である。

遺　物　本遺構からは遺物が出土しなかった。

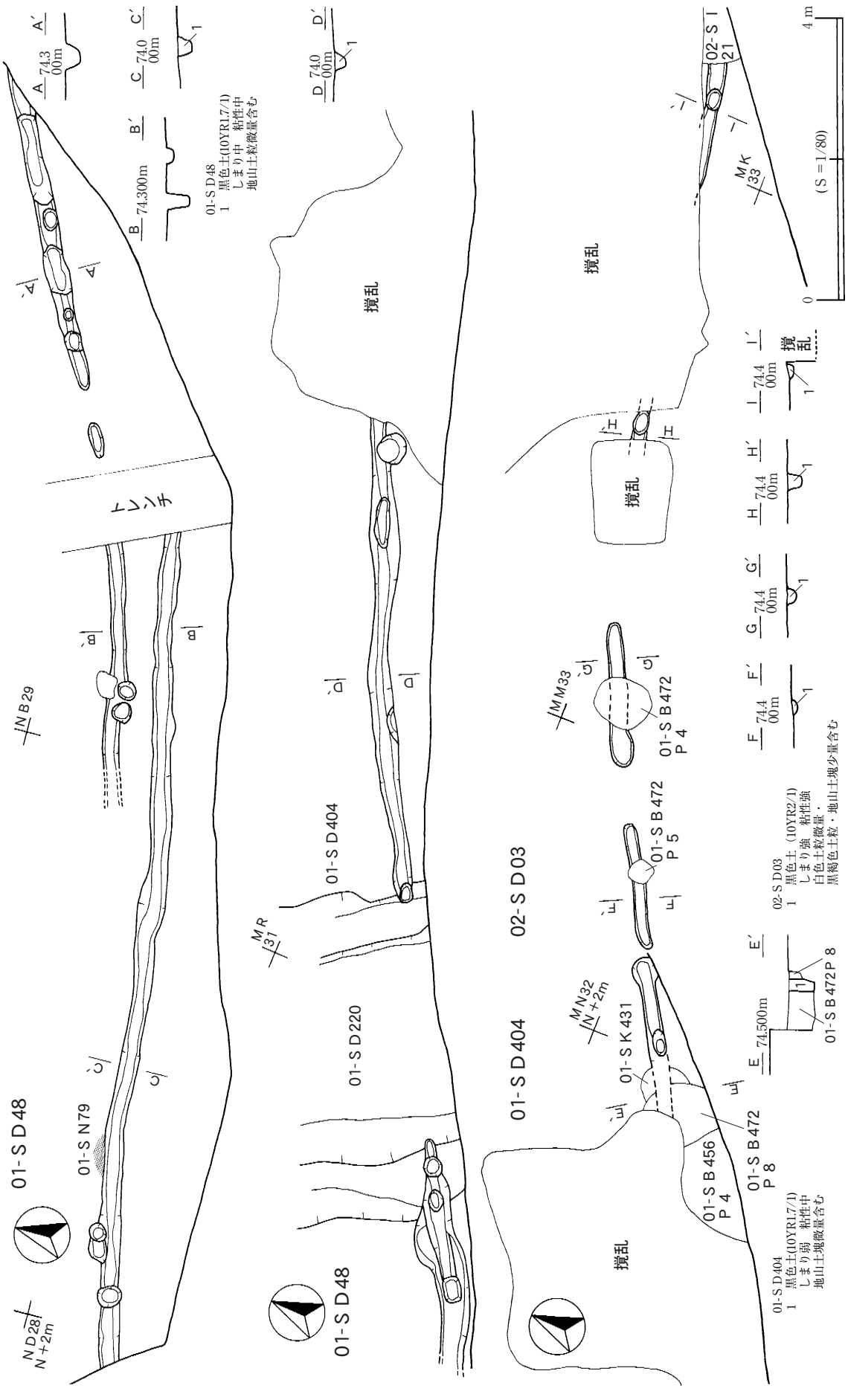
03-ＳＤ172(第375図)

遺　構　ＭＡ48～50、ＭＢ50グリッドの第Ⅵ層上面で確認した。本遺構の立地点は台地中央部で、平坦な地形である。03-ＳＤ187と重複し、本遺構の方が古い。

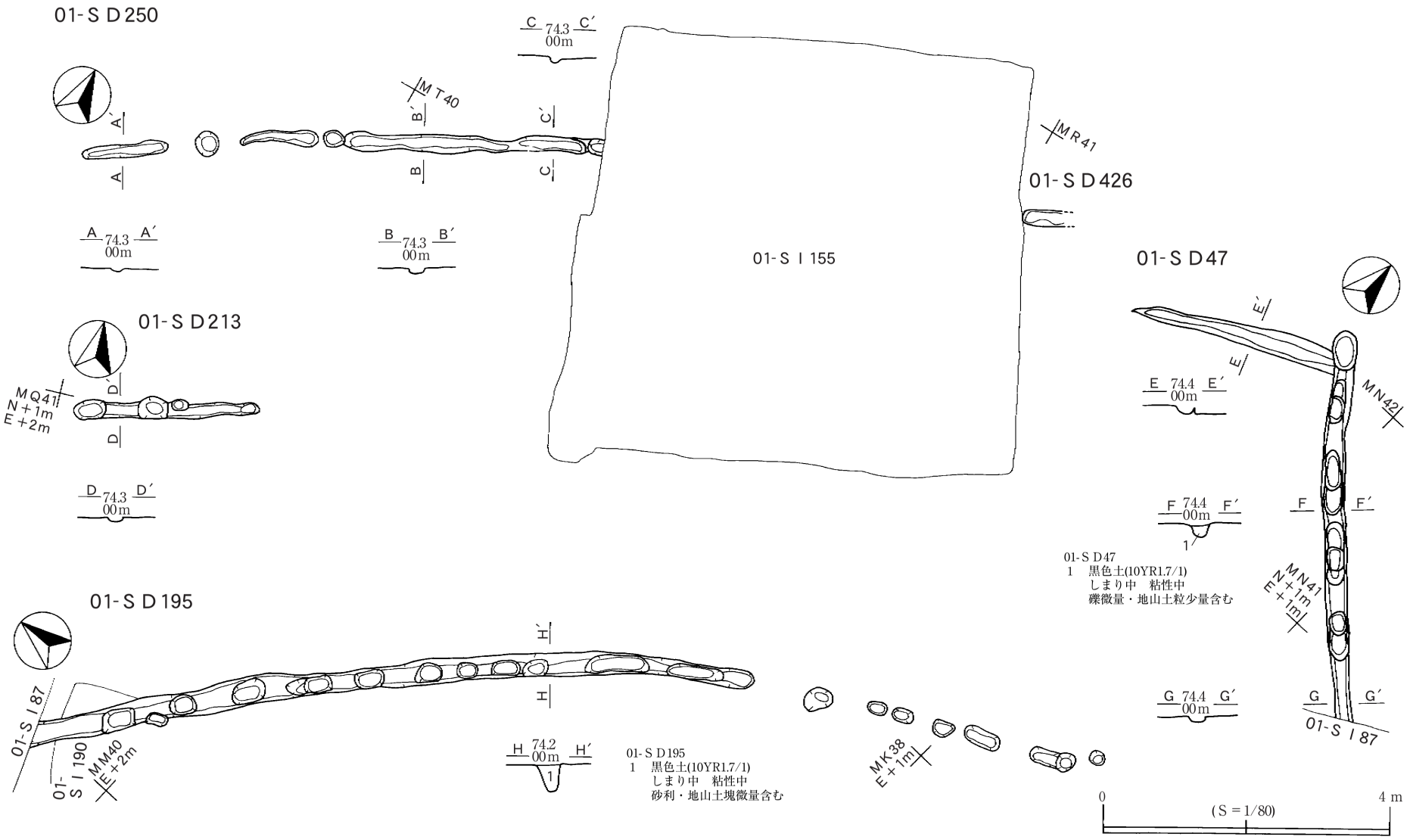
堆積土は１層のみで自然流入土と考えられる。北北西－南南東方向に延伸方向をもつ。規模は、全長約11.5m、検出面からの最深部で約0.25mである。上部が削平され本来の形状を失っている。

本遺構は、全長約11.5mの溝である。近接する02-ＳＩ24と03-ＳＩ106や、これらをつなぐ03-ＳＡ3003と軸方位が一致し、周囲にはＳＫＰが分布する状況から、居住域を区画する施設と考えられる。

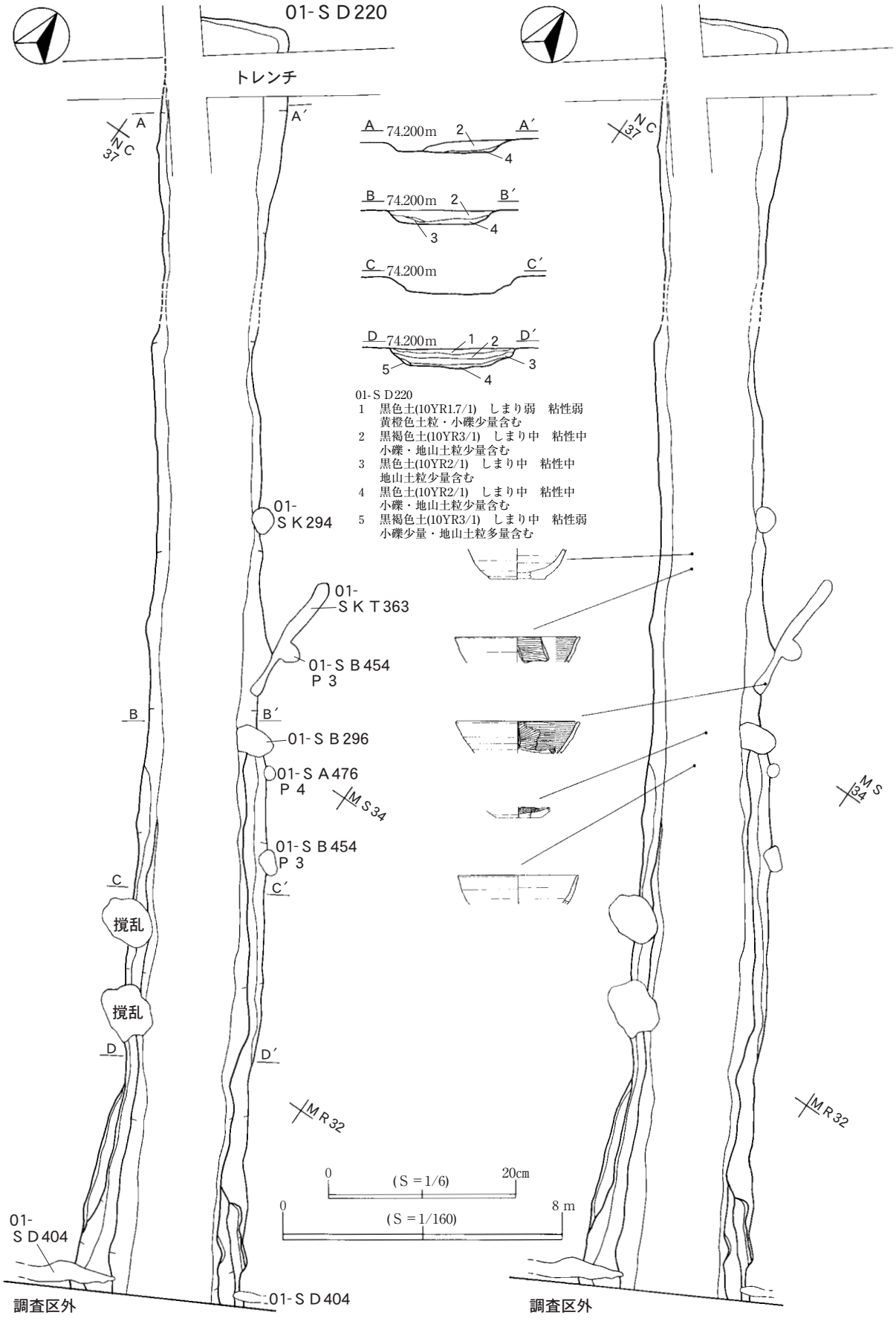
遺　物　本遺構からは遺物が出土しなかった。



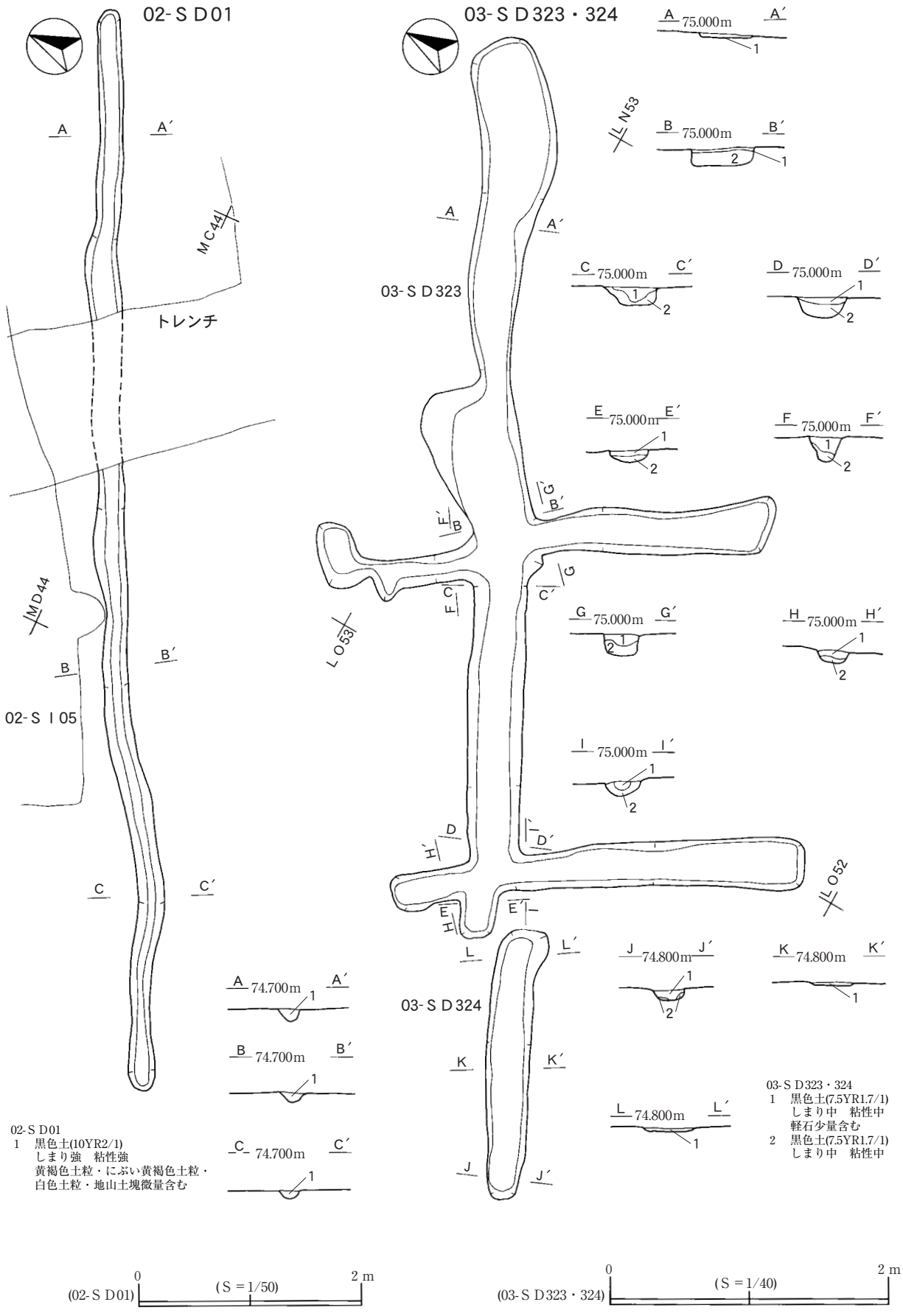
第371図　01-S D48・404・02-S D03



第372図　01-S D47・195・213・250・426



第373図　01-ＳＤ220・遺物出土状況



第374図　02-ＳＤ01・03-ＳＤ323・324

03-ＳＤ179Ａ・Ｂ・05-ＳＤ45(第376図)

遺　構　ＬＪ48を南西端、ＫＱ60を北東端とする範囲の丘陵裾部に展開する一連の溝跡である。本遺構の立地点は丘陵部山麓の緩斜面で、緩やかに東へ傾斜する。05-ＳＩ59や05-ＳＳ10・11・12・14・80製鉄遺構と重複し、05-ＳＩ59より本遺構が新しく、05-ＳＳ10・11・12・14・80製鉄遺構とは一体となって施設を構成していたとみられる。

堆積土は各箇所１層のみで、自然流入土と考えられる。ほぼ北－南方向に延伸方向をもつが、山麓部の地形に沿って部分的にカーブする。途中途切れるが、規模は全長約54.8m、斜面上位からの最深部で約0.8mである。底面下場幅が比較的広いのが特徴で、05-ＳＤ45の範囲では切り落とし状の部分が多い。ＬＣ56では、80cmほどの礫が見つかったが、この礫は遺構底面よりも深くささっており、撤去できなかった。おそらく、溝掘削時にも礫を除去するために、周囲を深く掘り込んだと考えられる。最終的には除去を断念して、礫上面を目立たないように整地している。

本遺構は、全長約54.8mの溝状の掘り込みである。下場幅が広いという点で、通路として機能したと想定される。末端部にはそれぞれ03-ＳＴ185の排滓場と05-ＳＳ10・11・12・14・80製鉄遺構があり、両者をつなぐ作業通路と考えられる。

遺　物　本遺構からは遺物が出土しなかった。

03-ＳＤ184(第375図)

遺　構　ＬＳ49・50、ＬＴ50・51グリッドの第Ⅳ層中位～第Ⅵ層上面で確認した。本遺構の立地点は台地中央部から台地南東縁にかけてで、緩やかに東へ傾斜する。03-ＳＮ331が本遺構上部に位置する。

堆積土は１層のみで自然流入土と考えられる。北西－南東方向に延伸方向をもつ。規模は、全長9.4m、検出面からの最深部で約0.1mである。上部が削平され、本来の形状を失っている。

本遺構は、全長約9.4mの溝である。残存状態にもよるが基本的に浅い造りであり、柱を立てるなどの構造物の基礎としては考え難く、溝として機能したと考えられる。ただし、周囲には軸方位の一致する遺構が見当たらない。強いて言えば02-ＳＩ05であり、本遺構より北東側には軸方位の一致する遺構はない。

遺　物　本遺構からは遺物が出土しなかった。

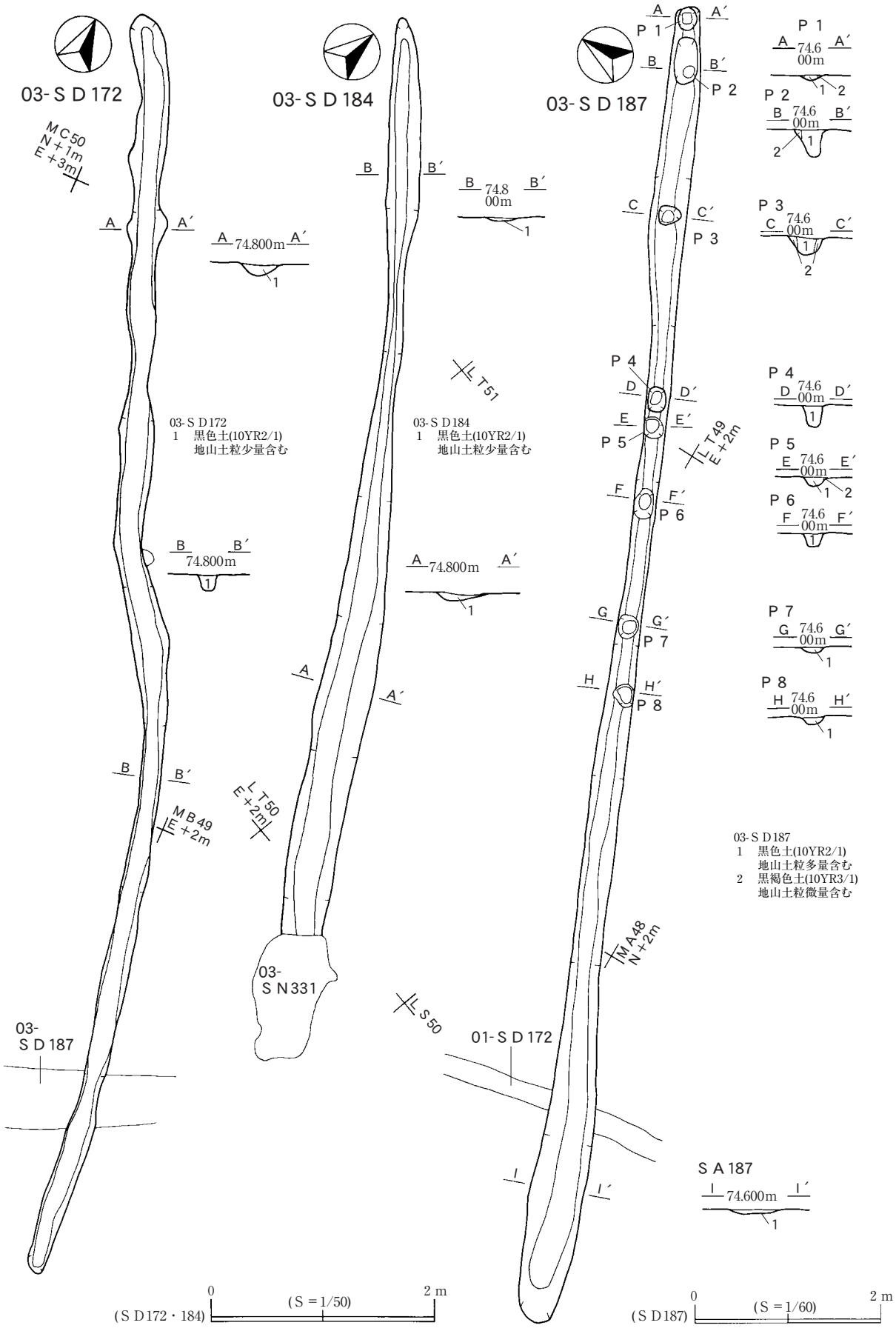
03-ＳＤ187(第375図)

遺　構　ＭＡ48を西端、ＬＲ49を東端とする範囲の第Ⅳ層中位～第Ⅵ層上面で確認した。本遺構の立地点は台地南東縁で、緩やかに東へ傾斜する。03-ＳＤ172と重複し、本遺構の方が新しい。

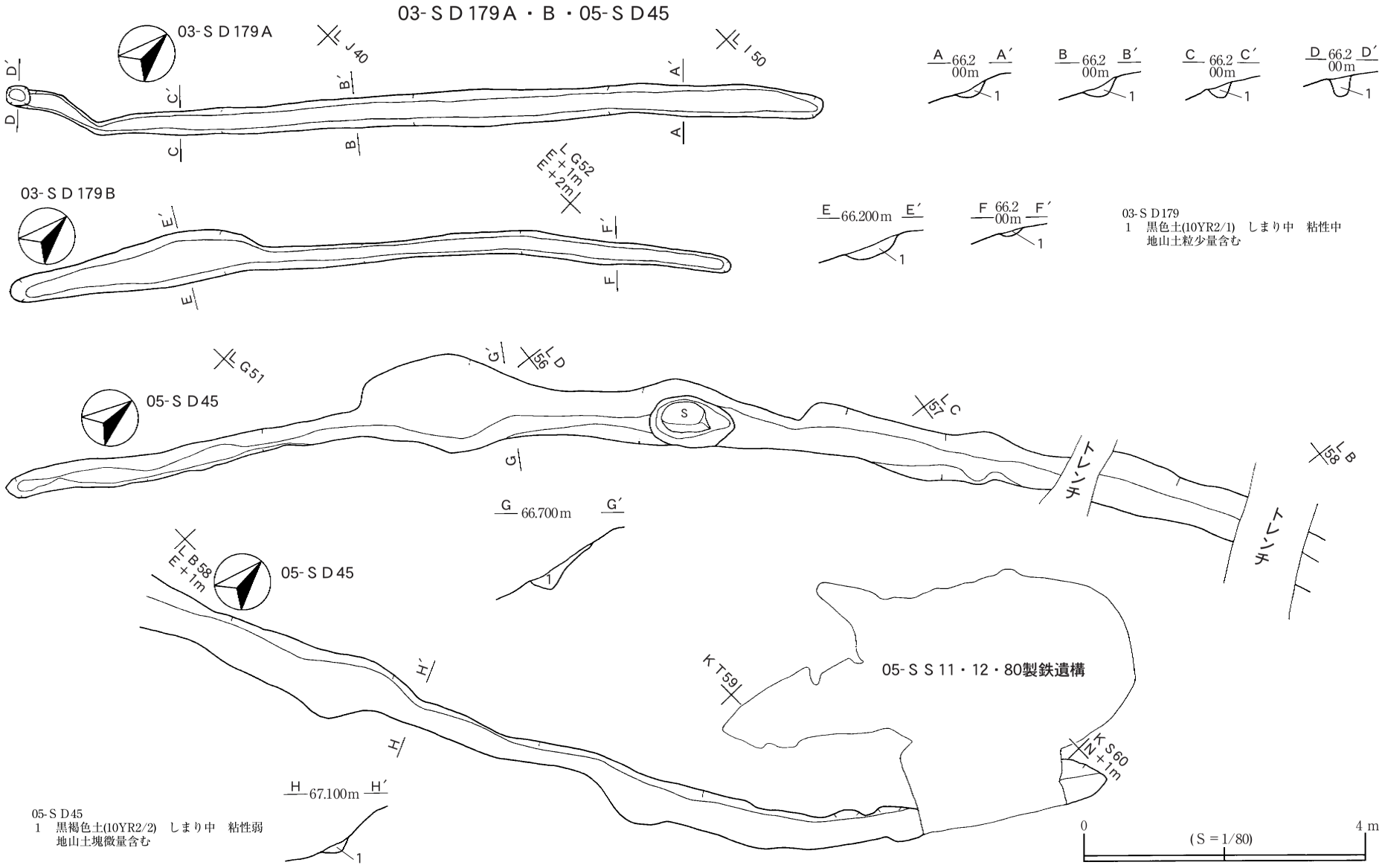
堆積土は場所により２層に分けられ、柱痕とみられる堆積状況を残している。東北東－西南西方向に延伸方向をもち、規模は、全長約14.2m、検出面からの最深部で約0.3mである。南西部では上部が削平され、本来の形状を失っている。

本遺構は全長約14.2mの規模で、柱を据えた布掘りとみられる。東北東約半分は台地南東縁に一致する配置で、西南西半分の延長線を追うと、03-ＳＩ13・104の北西壁ラインに一致する。

遺　物　本遺構からは遺物が出土しなかった。



第375図　03-S D 172・184・187



第376図　03-ＳＤ179Ａ・Ｂ・05-ＳＤ45

03-ＳＤ323・324(第374図、図版136)

遺　構　ＬＭ53、ＬＮ52・53、ＬＯ52グリッドの第Ⅳ層中位～第Ⅵ層上面で確認した。本遺構の立地点は丘陵部近くの台地南東縁で、緩やかに南東へ傾斜している。重複する遺構はない。

堆積土は２層に分けられ、水平に区分できる部分があることから人為的に埋め戻している可能性が高い。本遺構は東北東－西南西方向に延伸方向をもつ溝状掘り込みに、北北西－南南東方向に延伸方向をもつ２本の短い溝が重なる。東北東－西南西方向では一部途切れるが全長約8.0m、直交する北北西－南南東方向の２本は平均全長約3.0mで、検出面からの最深部は約0.2mである。上面は削平されており本来の形状を失っている。

本遺構は、全長約8.0mの溝に直交する、全長約3.0mの２本の短い溝が組み合わさって構成される。台地南東縁に地形に合わせて配置してあることや、堆積土に人為堆積的な要素がみられることから、集落の南東縁を区画する施設だった可能性が高い。

遺　物　本遺構からは遺物が出土しなかった。

03-ＳＤ1002・1003・1004(第377図、図版136)

遺　構　ＬＫ・ＬＬ52・53、ＬＭ52グリッドの範囲で、平行する３本の溝跡として確認した。本遺構の立地点は台地南東縁で、東へ傾斜する。重複する遺構はない。

各溝跡の堆積土は各１層ずつであるが、03-ＳＤ1004は明らかに底面に柱穴の掘形形状を残しており、配置・軸方位・断面形状に類似性が強い03-ＳＤ1002・1003にも、同様な性格を与えることが可能とみられる。各溝の規模は、03-ＳＤ1002が全長約5.8m、斜面上位からの最深部で約0.3m、03-ＳＤ1003が全長約10.1m、斜面上位からの最深部で約0.7m、03-ＳＤ1004が全長11.4m、斜面上位からの最深部で約1.5mである。上部は削平または斜面下位への崩落で、本来の形状を失っている。

本遺構は、平行する３本の溝である。おそらく３本には新旧関係があると思われるが、それを判断する材料がない。本遺構の斜面下位には05-ＳＳ1001・1002・81製鉄遺構があり、平坦部居住域との区画を目的とした板塀だったと考えられる。

遺　物　本遺構からは遺物が出土しなかった。

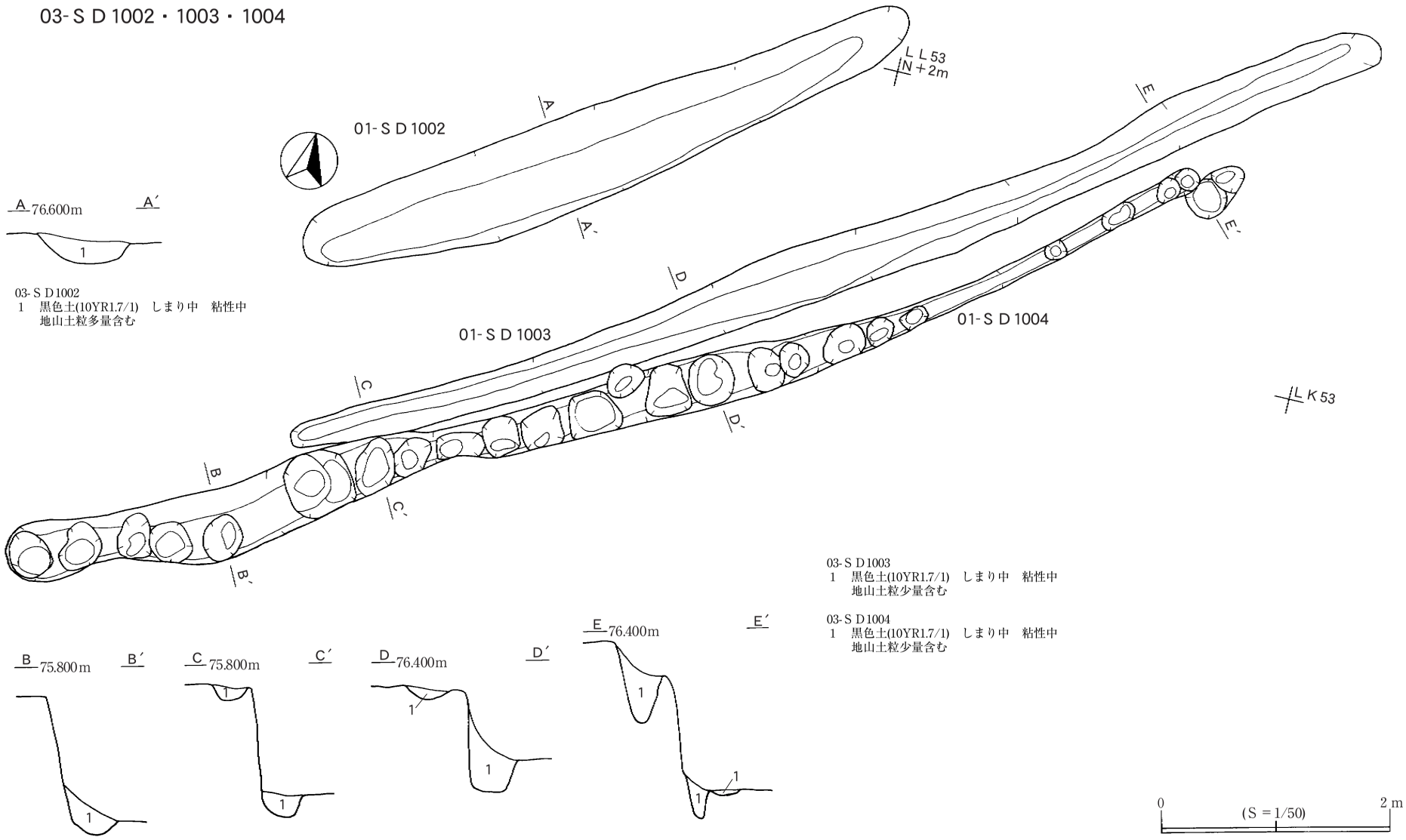
05-ＳＤ01(第378図、図版136)

遺　構　ＫＳ73を北端とし、南西部はＬＤ64まで確認できる。ほとんどの範囲は砂礫層を掘り込んで造っている。本遺構の立地点は丘陵部上部緩斜面で、東へ傾斜する。重複する遺構はないが、05-ＳＸ61は近接する位置にある。

堆積土は１層のみで自然流入土と考えられる。北北東－南南西方向に延伸方向をもち、規模は確認できただけで全長約40m、斜面上位からの最深部で約0.4mである。底面下場幅が比較的広いのが特徴である。

本遺構は、全長約40mの溝である。丘陵部の住居のすぐ脇を通り、形状では下場幅が広く、一部切り落としに近い形状も見受けられることから、台地平坦部と丘陵部住居、05-ＳＩ02・03・05・58の連絡路として機能したと考えられる。

遺　物　本遺構からは遺物が出土しなかった。



第377図　03-ＳＤ1002・1003・1004

05-ＳＤ16・23・24(第379図、図版137)

遺　構　ＫＱ66を南西端、ＫＮ74を北端とする範囲の丘陵裾部から下部斜面に展開する一連の溝跡である。本遺構の立地点は丘陵部山麓の緩斜面で緩やかに東へ傾斜しており、場所により急傾斜になる。05-ＳＫ71と重複するが、明確な新旧関係は不明である。

堆積土は各箇所１層のみで、自然流入土と考えられる。05-ＳＤ16は北東－南西方向に、05-ＳＤ23・24はほぼ北－南方向に延伸方向をもつが、山麓部の地形に沿って部分的にカーブする。部分的に途切れるが、規模は全長約34.2m、斜面上位からの最深部で約0.4mである。底面下場幅が比較的広いのが特徴で、ほとんどの場所で切り落とし状になる。なお、05-ＳＤ23と05-ＳＤ24は一部平行するが、明確な新旧関係は分からなかったので、同時併存の可能性も否定できない。

本遺構は、全長約34.2mの溝状の掘り込みである。下場幅が広いという点で、通路として機能したことが想定される。末端部にはそれぞれ、05-ＳＳ34製鉄遺構前面の住居群と05-ＳＩ15があり、両者をつなぐ通路と考えられる。

遺　物　本遺構からは遺物が出土しなかった。

05-ＳＤ18(第378図、図版137)

遺　構　ＫＱ74・75グリッドで確認した。本遺構の立地点は丘陵部中位の急斜面で、東へ傾斜する。重複する遺構はない。

堆積土は１層のみで自然流入土と考えられる。北北東－南南西方向に延伸方向をもち、規模は確認できただけで全長約7.2m、斜面上位からの最深部で約0.2mである。底面下場幅が比較的広いのが特徴である。

本遺構は、全長約7.2mの溝状の遺構である。下場幅が広いという点で、通路として機能したことが想定される。その場合05-ＳＩ58に付属していたと考えられる。

遺　物　本遺構からは遺物が出土しなかった。

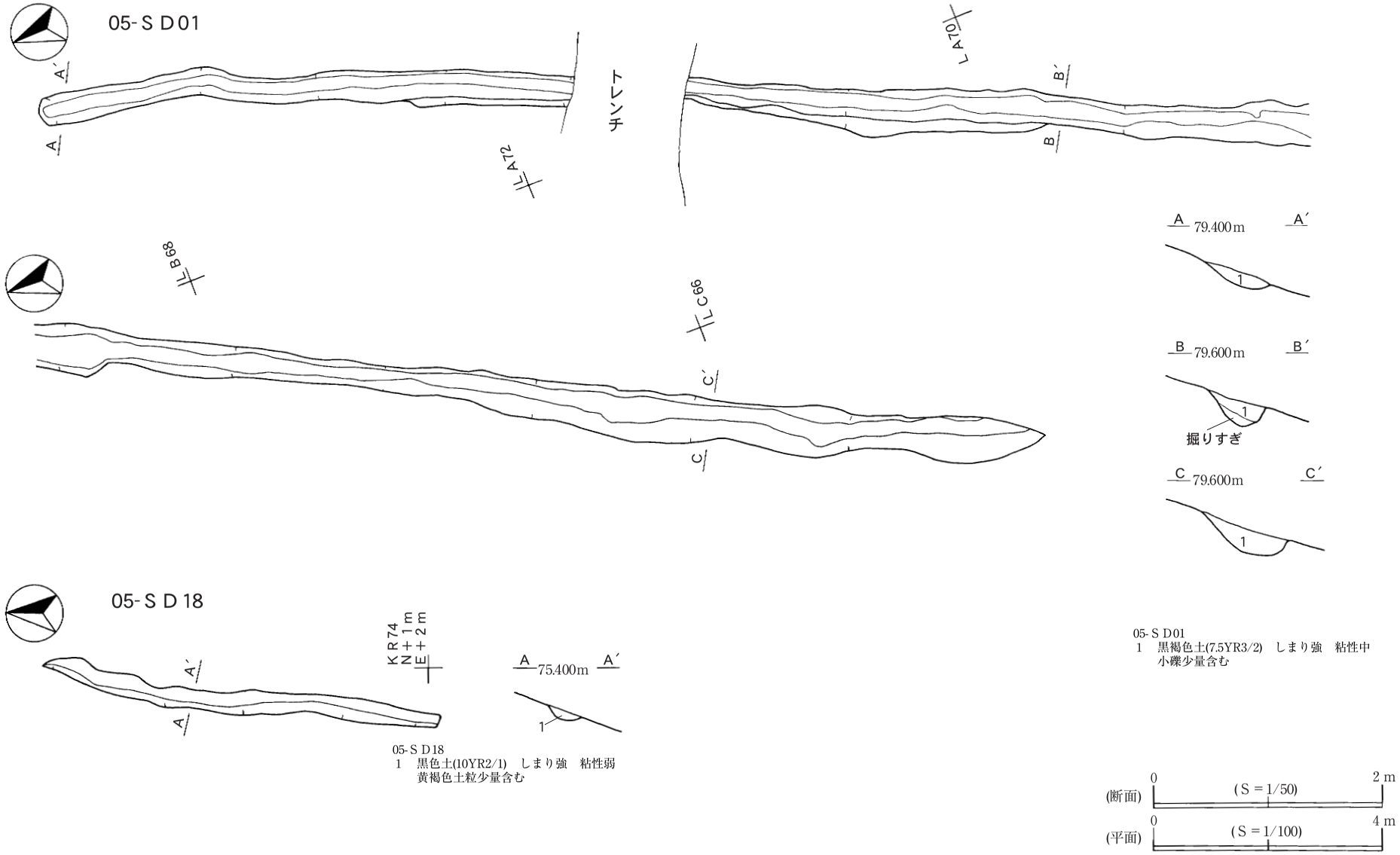
05-ＳＤ25(第379図、図版138)

遺　構　ＫＮ68を南端、ＫＭ75を北端とする範囲の丘陵裾部から下部斜面に展開する溝跡である。本遺構の立地点は丘陵部山麓の緩斜面で、緩やかに東へ傾斜し、場所により急傾斜になる。重複する遺構はないが、所々崩落により失われており、ＫＭ74付近では湧水点も認められる。

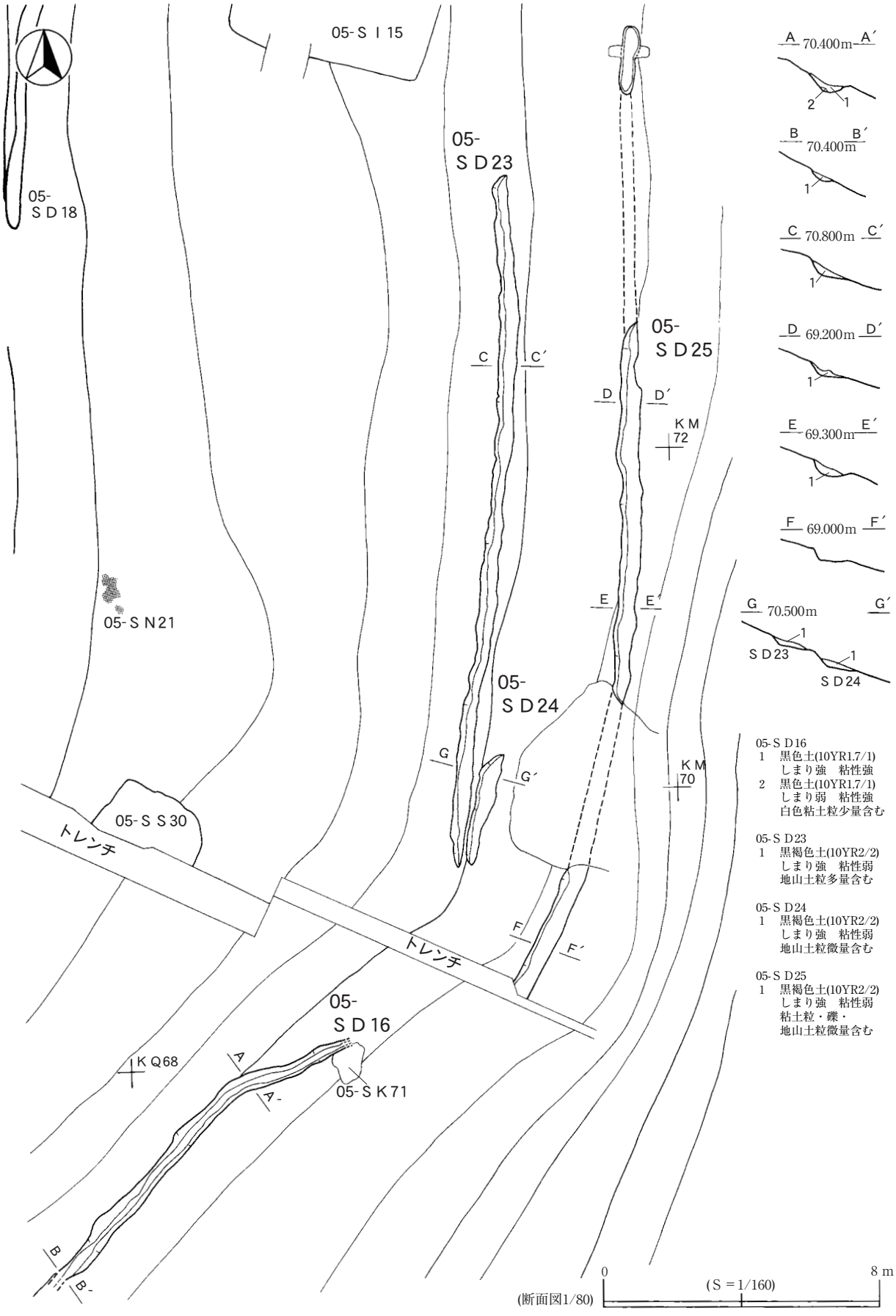
堆積土は各箇所１層のみで、自然流入土と考えられる。ほぼ北－南方向に延伸方向をもつが、山麓部の地形に沿って曲線的に延びる。部分的に途切れるが、規模は全長約28.4m、斜面上位からの最深部で約0.6mである。底面下場幅が比較的広いのが特徴で、ほとんどの場所で切り落とし状になっており、底面は平らな場所が多い。

本遺構は、全長約28.4mの溝状の掘り込みである。下場幅が広いという点で、通路として機能したことが想定される。05-ＳＤ16・23・24の斜面下位にほぼ平行して延びており、南端部は同様に05-ＳＳ34製鉄遺構前面の住居群へと向かう。北端部は05-ＳＩ15の下を通り、05-ＳＤ63へと続くことから、両者をつなぐ通路と考えられる。

遺　物　本遺構からは遺物が出土しなかった。



第378図　05-ＳＤ01・18



第379図　05-S D 16・23・24・25

05-ＳＤ35(第380図、図版138)

遺　構　ＫＳ59～61、ＫＴ59・60グリッドで確認した。本遺構の立地点は丘陵部下位の急斜面で、東へ傾斜する。重複する遺構はないが、両端が欠失している。

堆積土は１層のみで自然流入土と考えられる。北－南方向に延伸方向をもち、規模は全長約16.2m以上、斜面上位からの最深部で約0.5mである。底面下場幅が比較的広いのが特徴である。

本遺構は、全長約16.2mの溝状の掘り込みである。下場幅が広いことから、通路として機能したことが想定される。その場合、周辺に分布する製鉄遺構に付属していたと考えられる。

遺　物　本遺構からは遺物が出土しなかった。

05-ＳＤ38(第380図、図版138)

遺　構　ＬM61～63、ＬＮ61グリッドの第Ⅳ層中位で確認した。本遺構の立地点は丘陵部西麓の緩斜面で、緩やかに西へ傾斜する。05-ＳＩ13と重複し、本遺構の方が古い。

堆積土は１層のみだが、本遺構の上部には05-ＳＴ82が形成されており、その形成過程で人為的に埋め戻した可能性がある。北北東－南南西方向に延伸方向をもつ。規模は、全長約6.8m、検出面からの最深部で約0.2mである。

本遺構は、全長約6.8mの溝である。近接する05-ＳＩ06と軸方位が一致することから、05-ＳＩ06に付属する溝と考えられる。機能としては丘陵部からの雨水等の排水が考えられる。

遺　物(第382図)　土師器甕が出土した。382図11は口縁部から胴下部まで窺える資料で、胴上部が膨らみ、頸部で弱く屈曲して口縁部が外反する。外面横位ユビナデ、内面斜位ヘラナデ調整である。382図12は土師器甕の口縁部破片で、口縁部が短く外反して先細りの口唇形態になる。11と同様に外面ユビナデ、内面ヘラナデ調整である。

05-ＳＤ44(第380図、図版139)

遺　構　ＬＢ61・62グリッドの第Ⅳ層中位～第Ⅵ層上面で確認した。本遺構の立地点は丘陵部の中腹緩斜面で、緩やかに東へ傾斜する。05-ＳＡ46と重複し、本遺構の方が古い。

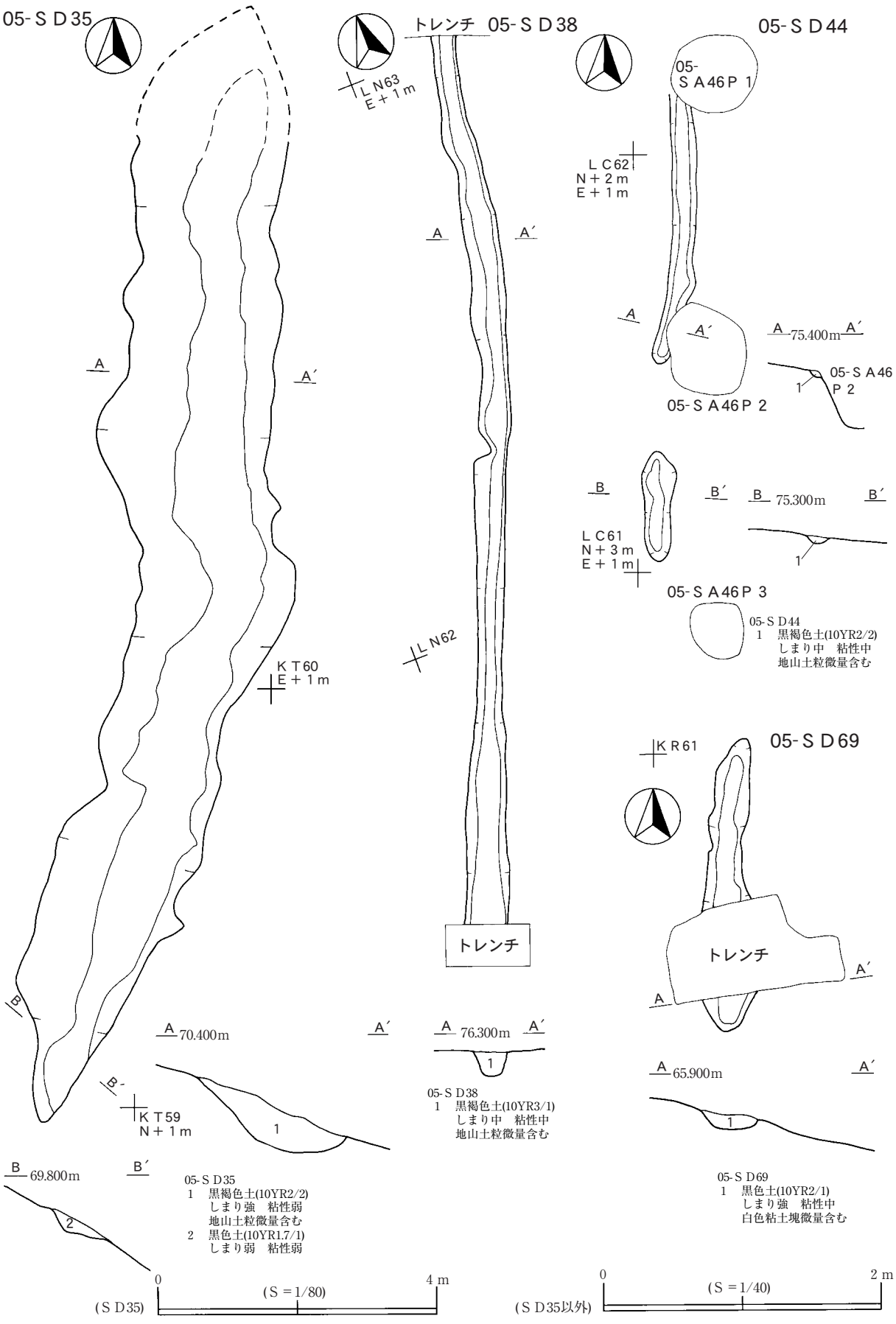
堆積土は１層のみだが、本遺構のすぐ脇に05-ＳＡ46を設置することから、人為的に埋め戻していると考えられる。北－南方向に延伸方向をもち、一部途切れる。規模は、全長約3.4m、検出面からの最深部で約0.1mである。

本遺構は、全長約3.4mの溝跡である。重複する05-ＳＡ46と軸方位が一致することから、同様に区画施設として機能したと考えられる。

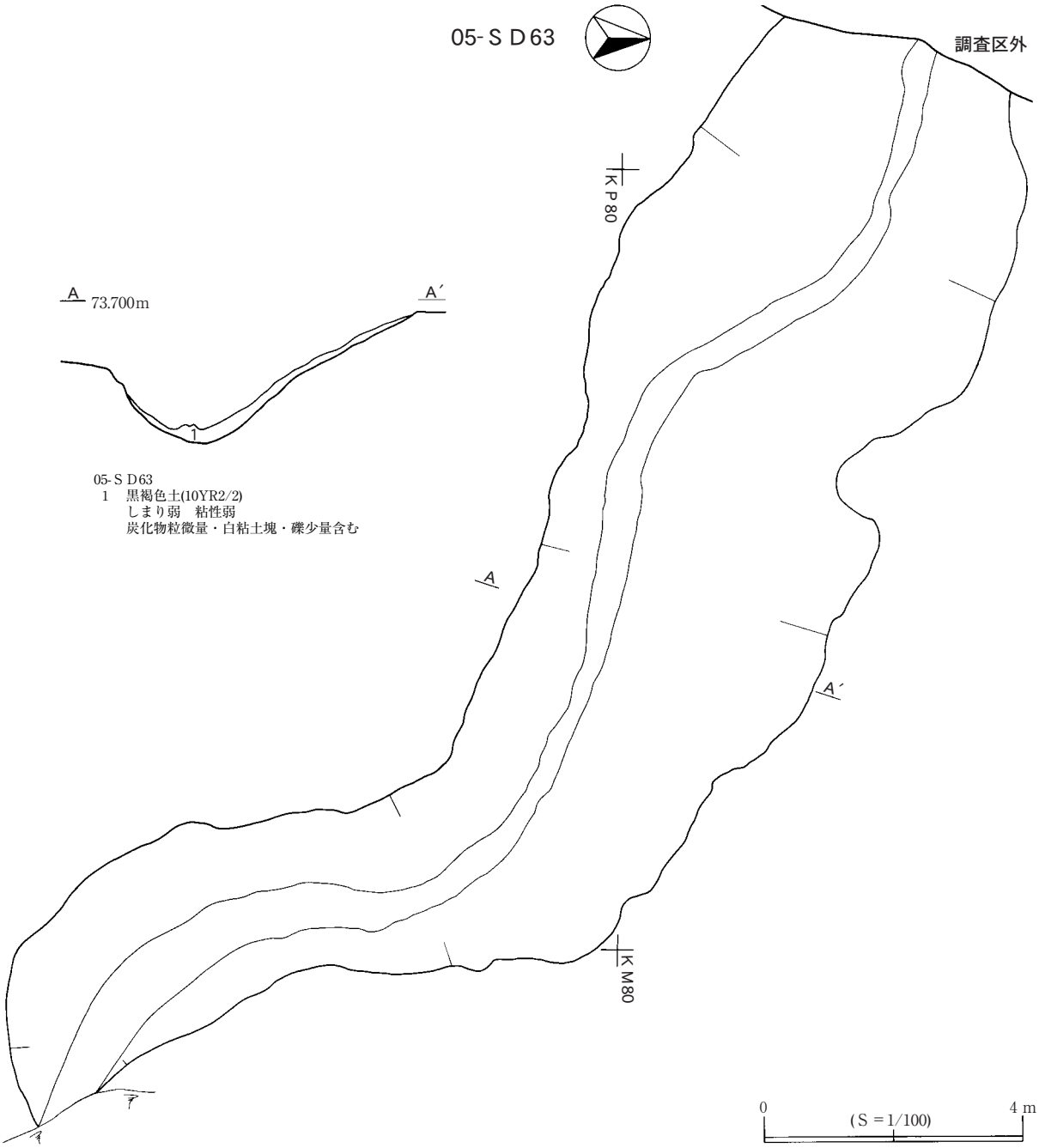
遺　物　本遺構からは遺物が出土しなかった。

05-ＳＤ63(第381図、図版139)

遺　構　ＫＰ80・81を北西端、ＫＬ77を北端とする範囲の丘陵裾部から稜線を横切って展開する溝跡である。本遺構の立地点は丘陵部北端の緩斜面で、東や北東方向へ傾斜する。重複する遺構はなく、周辺には遺構も少ない。なお、調査区外西側は丘陵部北西側の平坦面に当たるが、本遺構から連続する溝状の凹みは現況では観察できなかった。



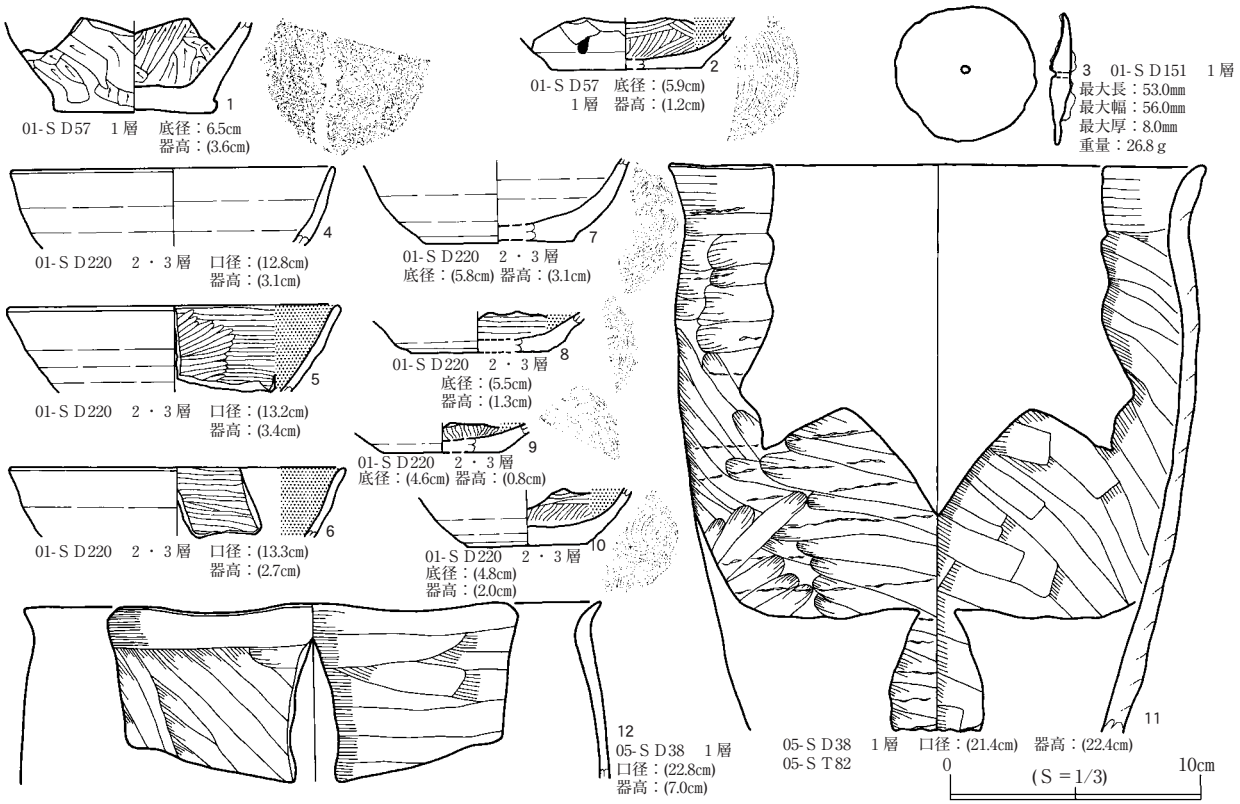
第380図　05-ＳＤ35・38・44・69



第381図　05-ＳＤ63

堆積土は１層のみで、自然流入土と考えられる。堆積土が極めて薄いが、これは本遺構の底面が北西端から南東端にかけて傾斜しているため水路のようになり、雨水等で堆積物が排出されたためと考えられる。また、底面の岩盤は濡れると極めて滑りやすくなる性質をもっており、この堆積土の排出を促進したものと考えられる。

北西－南東方向に延伸方向をもつが、直線的でなく曲線的に延びる。規模は全長約22.5m、斜面上位からの最深部で約2.0mである。本遺構は丘陵部の稜線上に路頭する基盤岩を掘り込んでおり、両側の斜面状の立ち上がりには、細かな工具痕が認められるため、人為的な産物であることを明らかにしている。南東部は傾斜の下位にあたるため両壁が低いが、北西部へ進むほどに両壁は高さを増し、調査区境界部でまた高さを減じる。



第382図　ＳＤ出土遺物

本遺構は、全長約22.5ｍの溝状の遺構である。基盤岩を掘り込んでおり、南東端は05-ＳＤ25に連続するとみられることから、通路として機能したと想定される。北西端は調査区外へと延びるが、この通路を通った調査区外はすぐに丘陵部背後の平坦部になる。おそらく05-ＳＤ25を介して丘陵部南東山麓部の製鉄遺構群と、丘陵部北西平坦部に展開すると考えられる居住地を結ぶ連絡路だったと想定される。なお、あまり堆積土が残らない状況であったため、後世も通路として利用されたとみられる。堆積土上部では現代のゴミが一部混ざる部分もあり、当初は最近の構造物という捉え方もあったが、05-ＳＤ25との配置関係からみて、古代の遺構と判断した。

遺　物　本遺構からは遺物が出土しなかった。

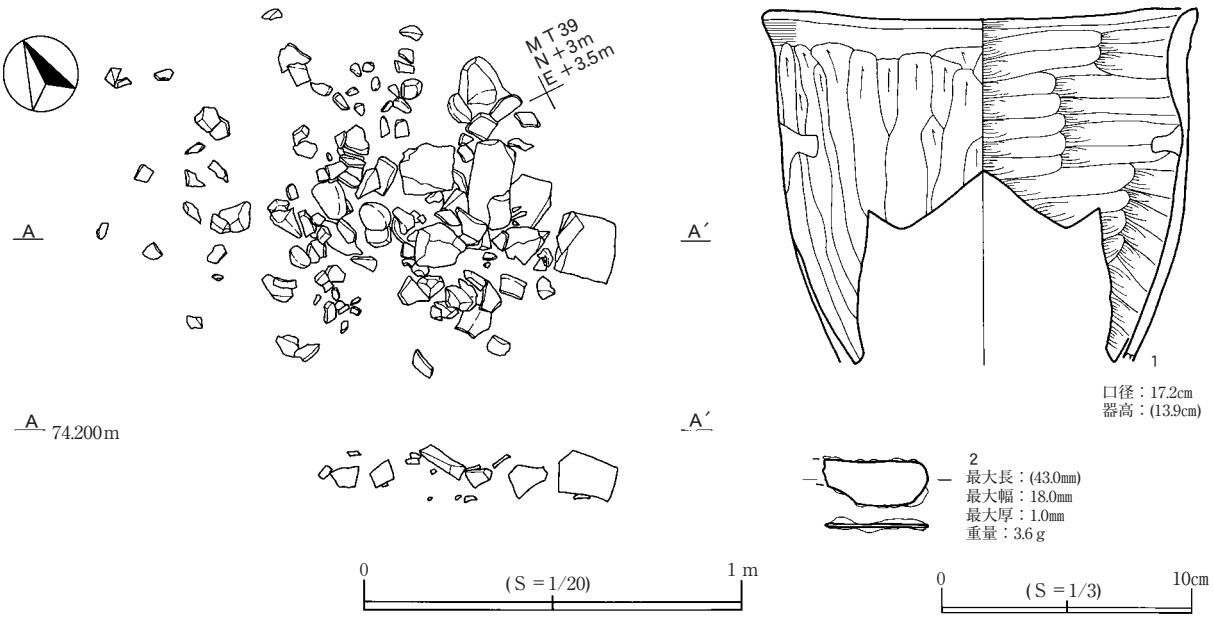
05-ＳＤ69(第380図、図版139)

遺　構　ＫＱ60・61グリッドで確認した。本遺構の立地点は丘陵部山麓の緩斜面で、東へ傾斜する。重複する遺構はない。

堆積土は１層で周囲からの流入土とみられる。ほぼ北－南方向に延伸方向をもち、規模は確認されただけで全長約2.1ｍ、斜面上位からの最深部で約0.15ｍである。底面下場幅が比較的広いのが特徴である。

本遺構は、全長約2.1ｍの短い溝状の遺構である。下場幅が広いという点で、通路として機能したことが想定される。その場合05-ＳＤ45の延長部分になる可能性がある。

遺　物　本遺構からは遺物が出土しなかった。



第383図　01-ＳＱ138・出土遺物

(９)集石遺構

01-ＳＱ138(第383図、図版140)

遺　構　ＭＳ39グリッドの第Ⅳ層中位～第Ⅵ層上面で確認した。本遺構の立地点は台地上部平坦面で、傾斜はほとんどない。明確に重複する遺構はないが、近接する位置に01-ＳＩ155や01-ＳＢ146、また複数のＳＫＰがあるが、いずれとも新旧関係は不明である。しかし、本遺構を構成する礫群が撤去されずに残っている状況からみて、周囲の遺構の中でも比較的新しい段階のものと考えられる。

本遺構を構成するのは南東側を主体に分布する、拳大の礫と、その周辺に分布する数cm大の小礫で、ほとんどが亜角礫である。また、その隙間や周辺部には土器や鉄製品が散在する。礫及び遺物の分布範囲は、北西－南東方向の長径約1.5m、北東－南西方向の短径約1.0mの楕円形状である。周囲はⅣ層の残存状況が比較的良く、礫群もⅣ層上面に設置した状態である。Ⅲ層が確認できなったので、十和田ａ火山灰降下の前後を確認できる証拠は無いが、集落全体の構成と時期からみて、十和田ａ火山灰降下後の構築物である可能性が高い。

本遺構は長径約1.5m、短径約1.0mの楕円形状の範囲に礫を集中的に配置した遺構で、土器・鉄製品なども一緒に遺棄してあり、意図的な配置の可能性が高い。01-ＳＤ220から延びる区画溝と、01-ＳＢ146に挟まれる位置に、撤去されることなく継続的に配置される状態であり、集落南西部入り口付近で、区画整備が完了した際に何らかの儀式を行ったことも想定される。なお、当時の生活面に近い水平位置で確認できる礫群は本遺構のみであるが、02-ＳＩ05・14のように、竪穴住居跡内部に礫をまとめる事例が存在する。カマド周辺については、住居廃絶時のカマド破壊に伴う礫の散在も考えられるが、02-ＳＩ05・14の場合はカマドから離れた堆積土の上層～中層部にあたることから、礫をまとめることに何らかの意味付けがあった可能性はより高いと考えられる。

遺　物(第383図)　土師器甕、鉄製品が出土した。383図１は比較的小型の土師器甕で、口縁部まで緩やかに外反する器形である。外面縦位ケズリ、内面横位ユビナデ調整である。383図２は鉄製品で、穂摘具の破片である。刃の中央部が凹刃状になっている。

（10） 捨て場

03-ＳＴ185(第384図～417図、図版140・143～146・148～150・152～156・158・160・161・163・164・166)

遺　構　ＬＩ47・ＬM50・ＬＮ43グリッドをつなぐ範囲に形成された廃棄場である。台地肩部下から斜面裾部にかけて、長さ32mの裾広がりの範囲に遺物が大量に堆積している。

形成開始は集落の形成開始期に符合するとみられ、住居内からの出土が少ない古手の土器を比較的多く含んでいる。なお、堆積土は大きく上下２層に分かれ、上層には十和田ａ火山灰の２次堆積層が遺物と共に堆積しているが、出土遺物の層位的差異は認められず、斜面堆積における混在となっている。

遺物の平面分布には明らかに複数の粗密があり、それぞれが等高線に沿った特徴的な扇形分布を示す(第384図)。遺物が特に密集する地点を、それぞれ第１・第２・第３集中地点とした。

第１集中地点は、05-ＳＳ1001・1002・81に伴うとみられる排滓場を覆っている。この排滓場と遺物の平面分布はほぼ重なるが、土器分布の範囲の方がより斜面外縁へと広がりをみせる。遺物分布範囲はＬＫ46～48、ＬＬ46～48、ＬＬ・ＬM51グリッドである。遺物分布は、大きくａ・ｂ２地点に細分される。ａ地点は斜面上部にあり、遺物分布が描く扇形の扇頂部に当たるのはＬＬ・ＬM51で、05-ＳＳ1001・1002・81の横にある。この部分の出土遺物は比較的少ないが、台地縁辺にあって本遺構範囲の北端になる。ｂ地点は斜面裾部のＬＫ46～48、ＬＬ46～48にまとまる。ＬＫ47に遺物の集中地点があり、周辺部になるにつれて減少する。

50cmメッシュで深さ10cmを基本単位として層位ごとに遺物の取り上げを行った結果、遺物は上面から10cmに集中していることが分かった。比較的出土量の多い小グリッドで出土深度の比較をすると、土器片は上層から、05-ＳＳ1001・1002・81に伴う排滓の層はこれよりも下層に当たる傾向にある。このことから排滓場とは形成時期が異なり、新しいと考えられる。

50cmメッシュによる遺物出土量の平面分布を細かくみても、ＬＫ47中央部やＬＬ48に集中がみられる。この２か所は斜面の上位・下位の関係にあり、地形からみて斜面下位のＬＬ48周辺部が斜面裾野を埋め立て、この上部に斜面上位へと斜堆積する層が形成されたとみられる。

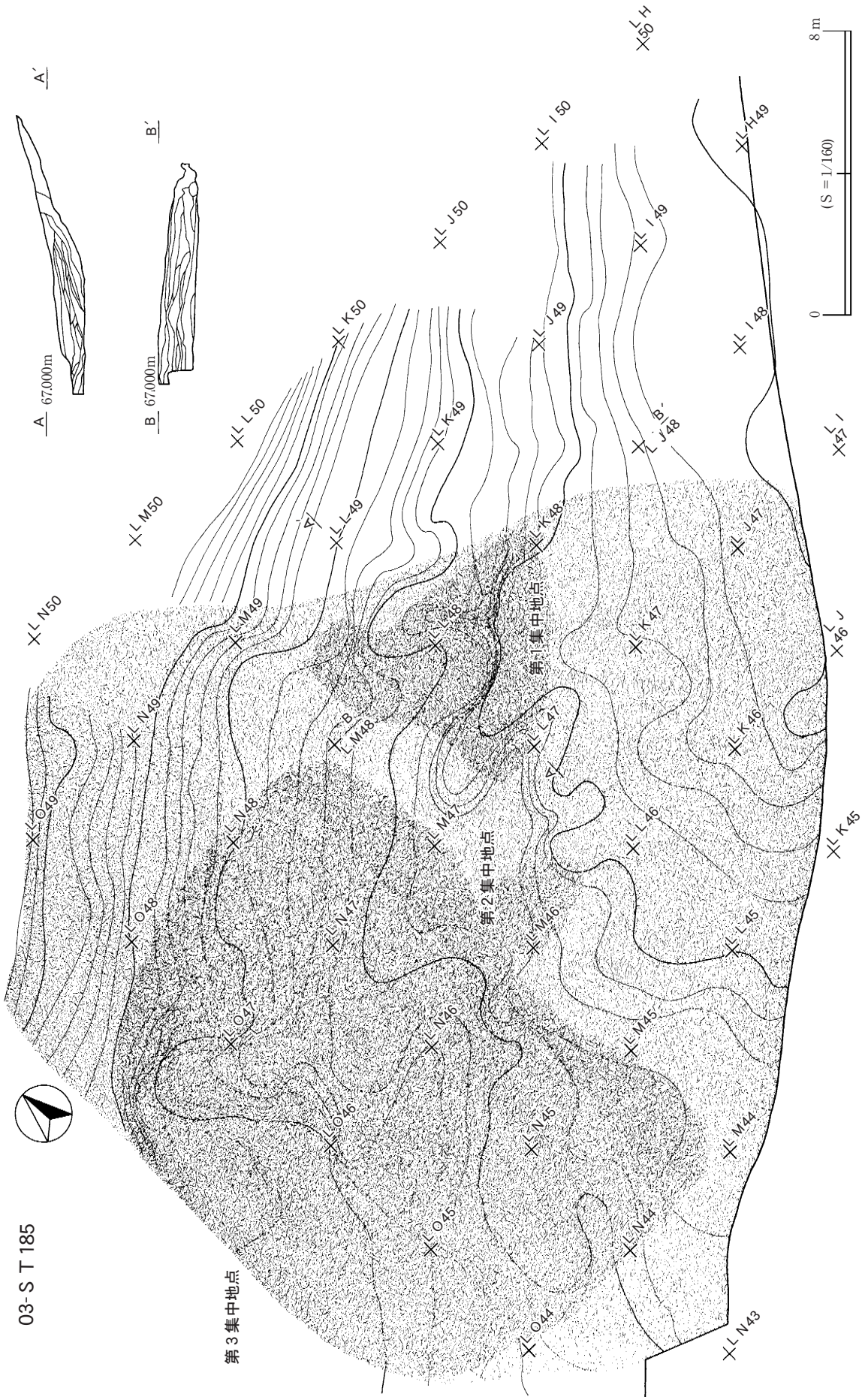
第２集中地点は、ＬＬ45・46、ＬM46に形成される。ＬＬ46に遺物の集中がみられる。

第３集中地点は、第２集中地点の南側ＬM44～48、ＬＮ44～48、ＬＯ44～48、ＬＰ45～47に形成される。等高線と遺物出土分布のズレからａ・ｂ２か所の分布域に細分できる。

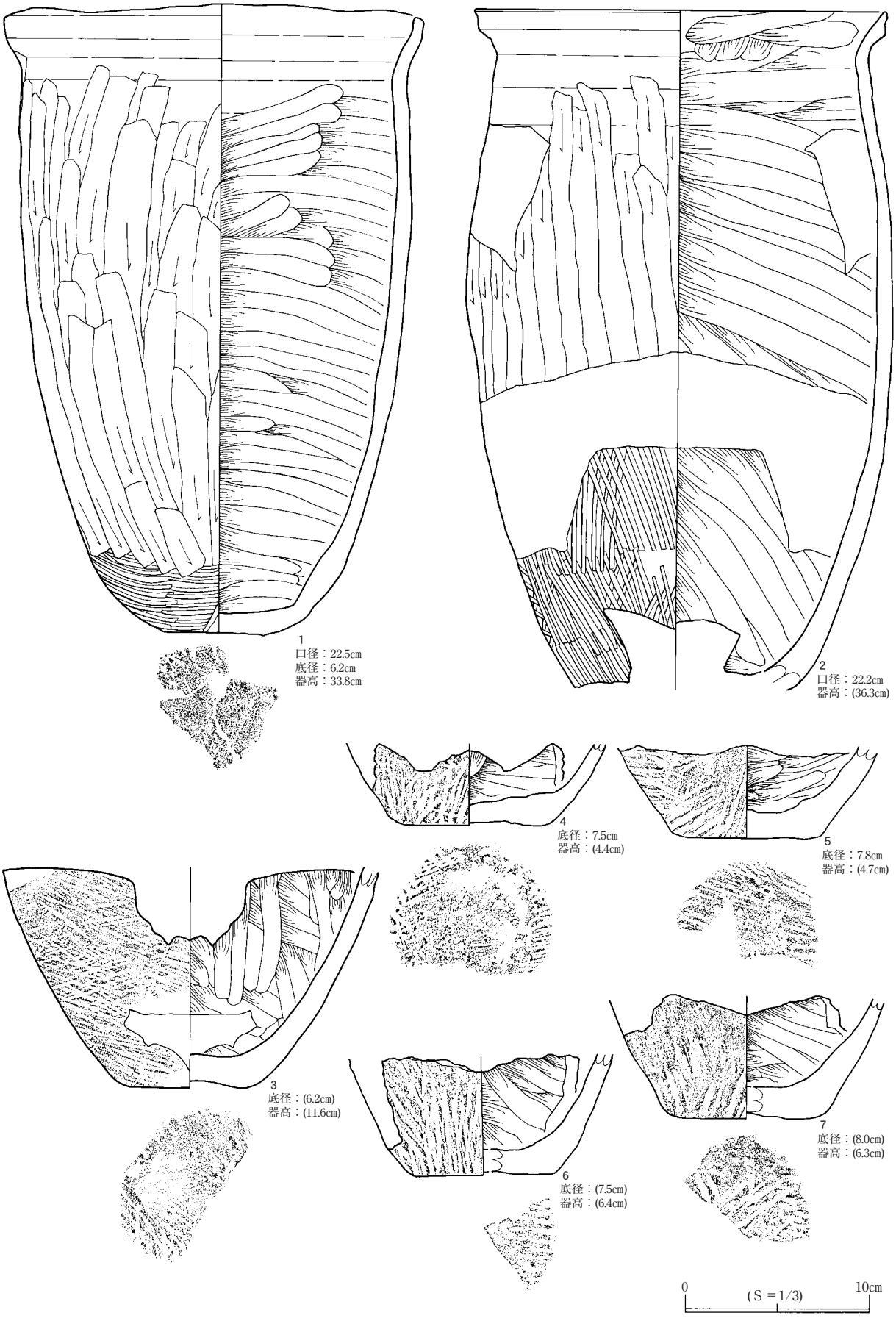
ａ地点は、ＬＯ47を扇形の扇頂部として遺物分布がみられる範囲である。このグリッドの遺物出土量は極めて多く、ＬＯ47の中心部は、50cm取り上げの基本単位で03-ＳＴ185全体でも最も出土量が多い。なお、03-ＳＩ16とＬＯ46・47、ＬＰ47の出土須恵器が接合した。

ｂ地点は03-ＳＮ1007の南側斜面下、ＬM48、ＬＮ48、ＬＯ48にある。第１地点と同じく、製鉄作業終了後の遺物投棄と考えられる。

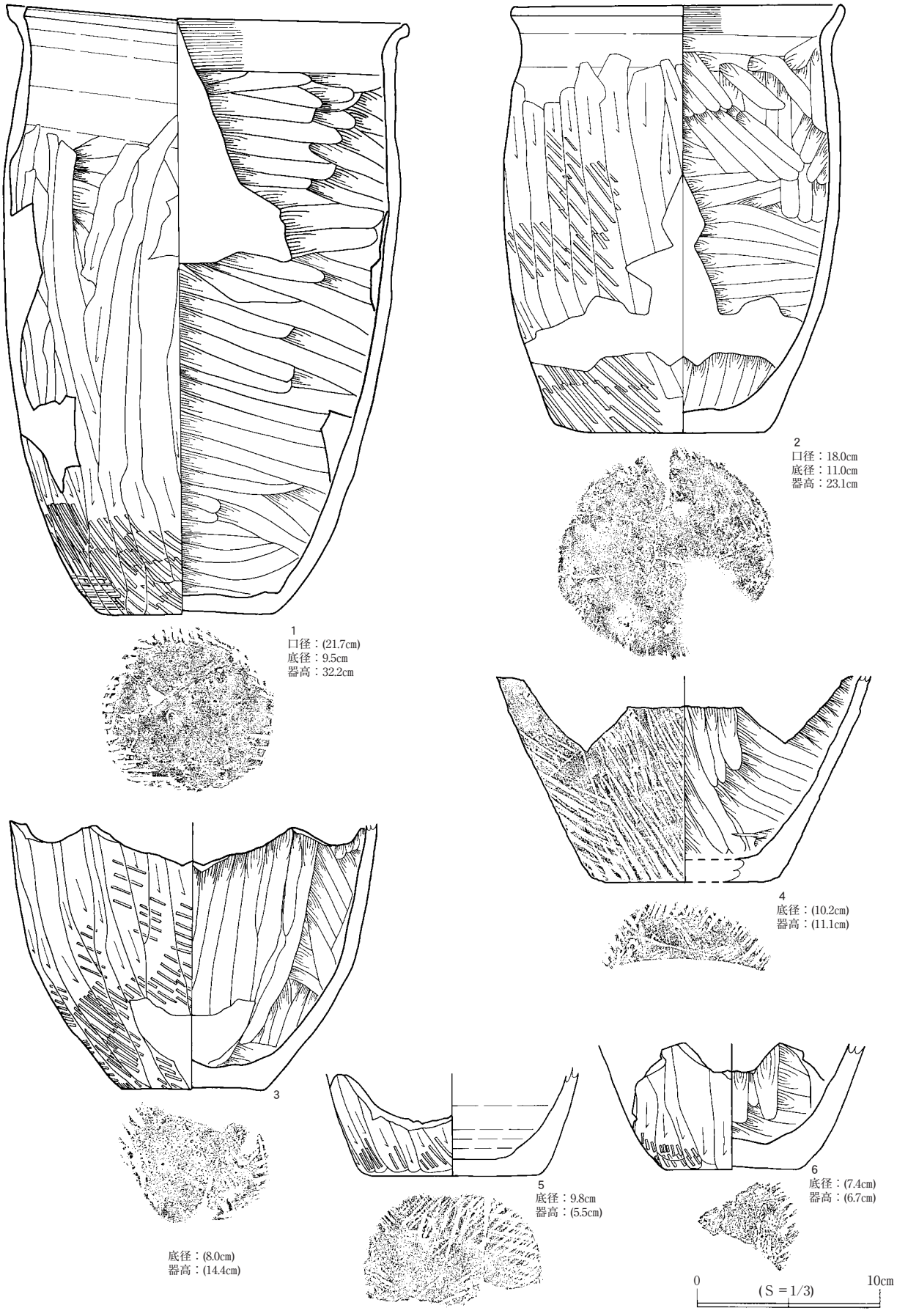
本遺構は、集落本体の立地する台地上部平坦面の南東部に位置する、谷地形を利用した廃棄場である。遺物の集中地点が大きく３つに分かれており、層位的にも上下に重なる部分もあることから、長期間の廃棄物投棄が想定される。なお、本遺構からの鉄製品の出土は極めて微量であり、実測可能なものは出土していない。鉄製品は住居内から比較的多く出土することから、本遺構の性格、または住居に伴う鉄製品の廃棄状況を考える上で、重要な視点である。



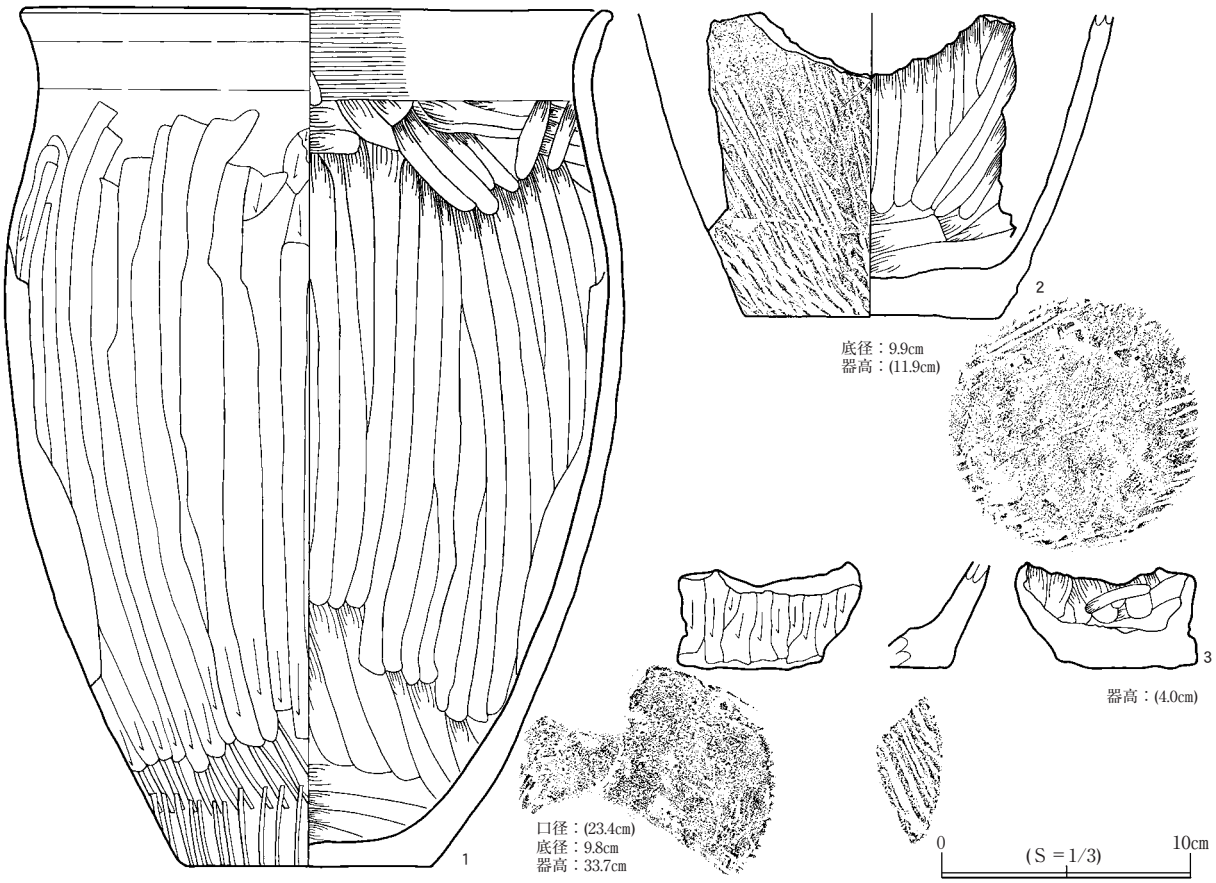
第384図　03-S T 185範囲



第385図　03-ＳＴ185出土遺物１



第386図　03-ＳＴ185出土遺物２

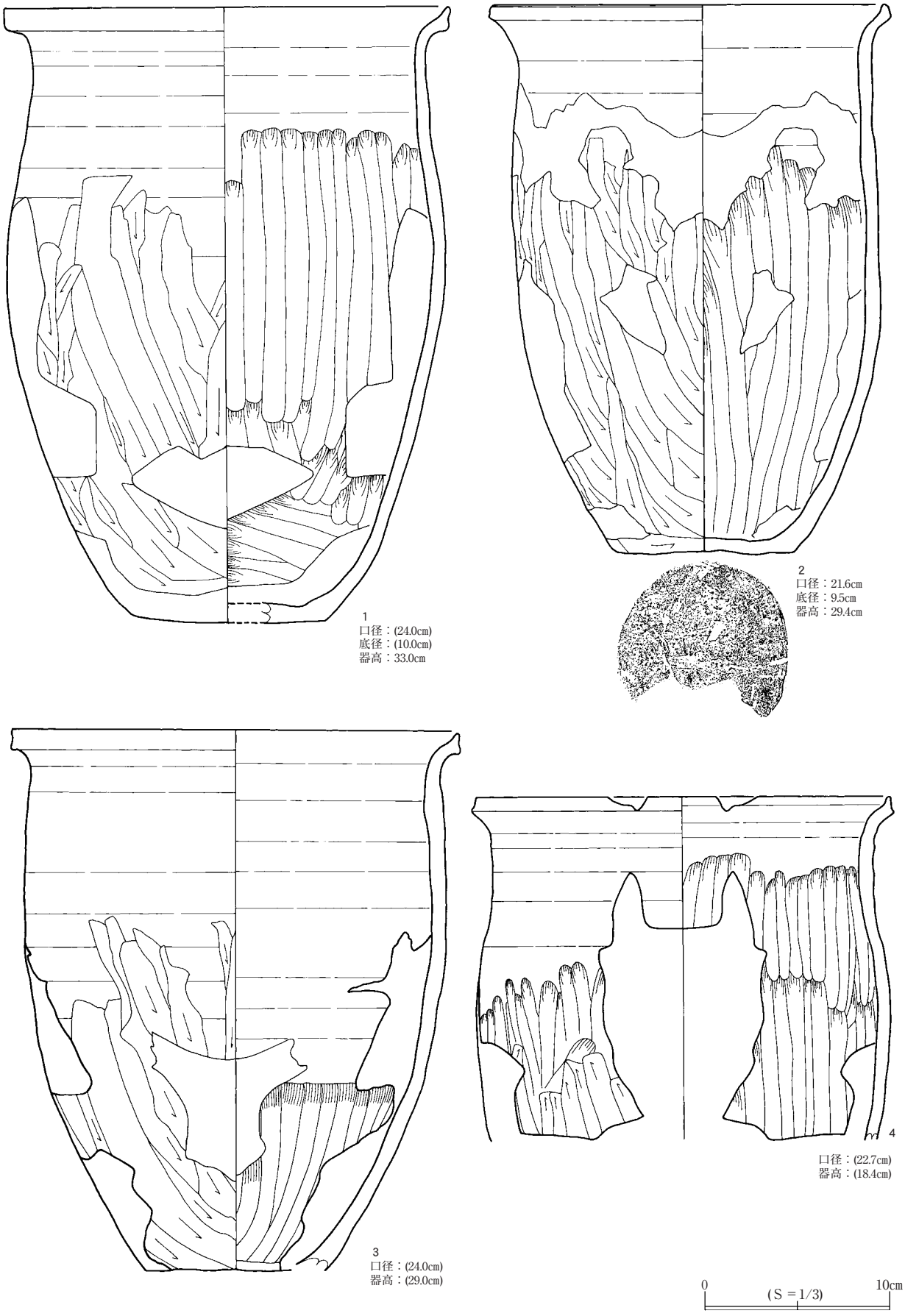


第387図　03-ＳＴ185出土遺物３

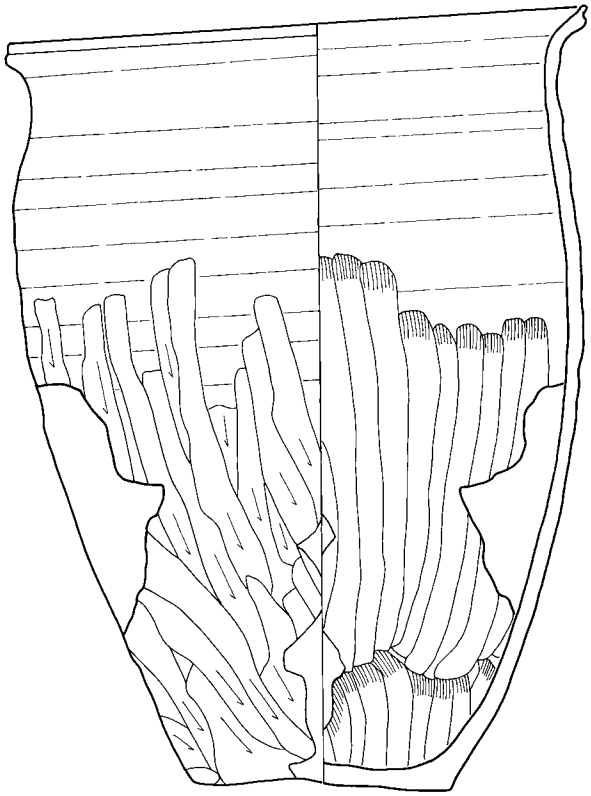
遺　物(第385図～417図)　土師器甕は口縁部が500点、底部が274点出土しており、そのうち比較的大型の破片を口縁部資料144点、底部資料94点図示した。なお図示しなかったものを含めた甕の口縁部分類別数量はＡ類(112点)、Ｂ類(34点)、Ｃ類(251点)、Ｄ類(33点)、その他(６点)、分類不能(64点)で、底部分類別数量は砂底(114点)、木葉痕(14点)、薦編圧痕(６点)、ナデ(７点)、ケズリ(62点)、タタキ(19点)、回転糸切痕(31点)、分類不能(21点)の内訳になる。台地上部平坦面に立地する竪穴住居跡出土遺物群と大きく違うのは、Ａ類とタタキ・回転糸切痕の割合が高いことである。

385図～396図まではＡ類である。385図～387図はその中でもタタキ目を残す資料である。基本的にタタキ目は底部付近にのみ残存するが、386図２のように胴上部まで及ぶものもあり、本来は広い範囲に施したとみられる。

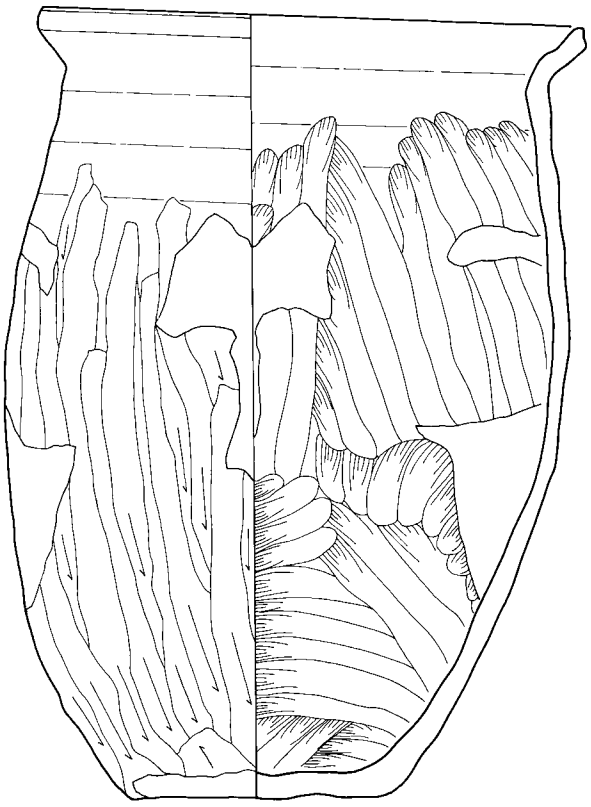
385図１は丸底に近い底部から直立気味に立ち上がり、頸部で外反して、口縁部が直立または弱く内湾する器形である。口縁部はやや波打つ。外面は頸部直下から縦位ケズリによる再調整を施し、内面は横位のユビナデが認められる。385図２は底部角が丸みを帯び、胴部中位が張り出して頸部に向かってわずかに内傾して立ち上がり、口縁部が外反して口端が直立する器形である。口縁部は面取りして、垂直の面を作り出している。外面は胴上部から縦位ケズリ、内面は斜位から横位のユビナデで再調整している。386図１は底部から胴部中位まで緩やかに膨らみ、胴上部にかけては直立して立ち上がり、口縁部で短く外折する器形である。口唇はつまみ出し状になる。外面は胴上部から縦位ケズリで再調整を施し、内面には口縁部と平行のユビナデが認められる。386図２は比較的小型の甕で、胴部中位までタタキ目があり、底径と口径の差が少ないのが特徴である。胴下部でやや膨らんでから



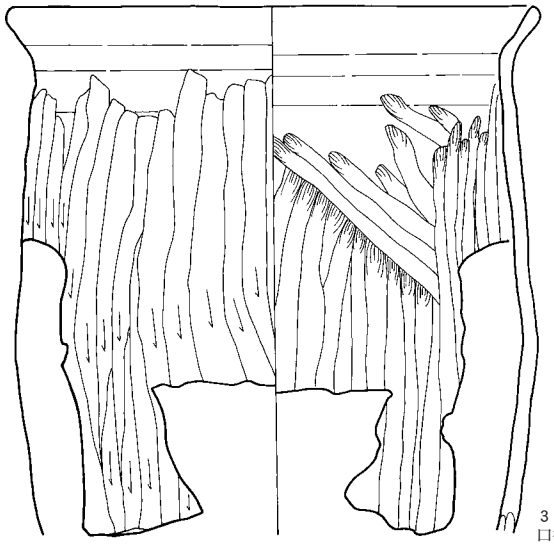
第388図　03-ＳＴ185出土遺物４



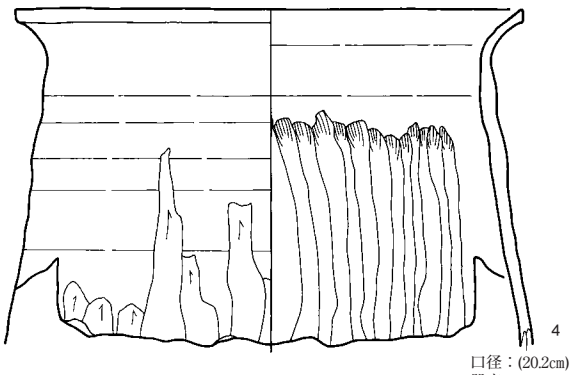
1
口径：(23.0cm)
底径：(10.0cm)
器高：30.8cm



2
口径：21.7cm
底径：10.2cm
器高：31.2cm



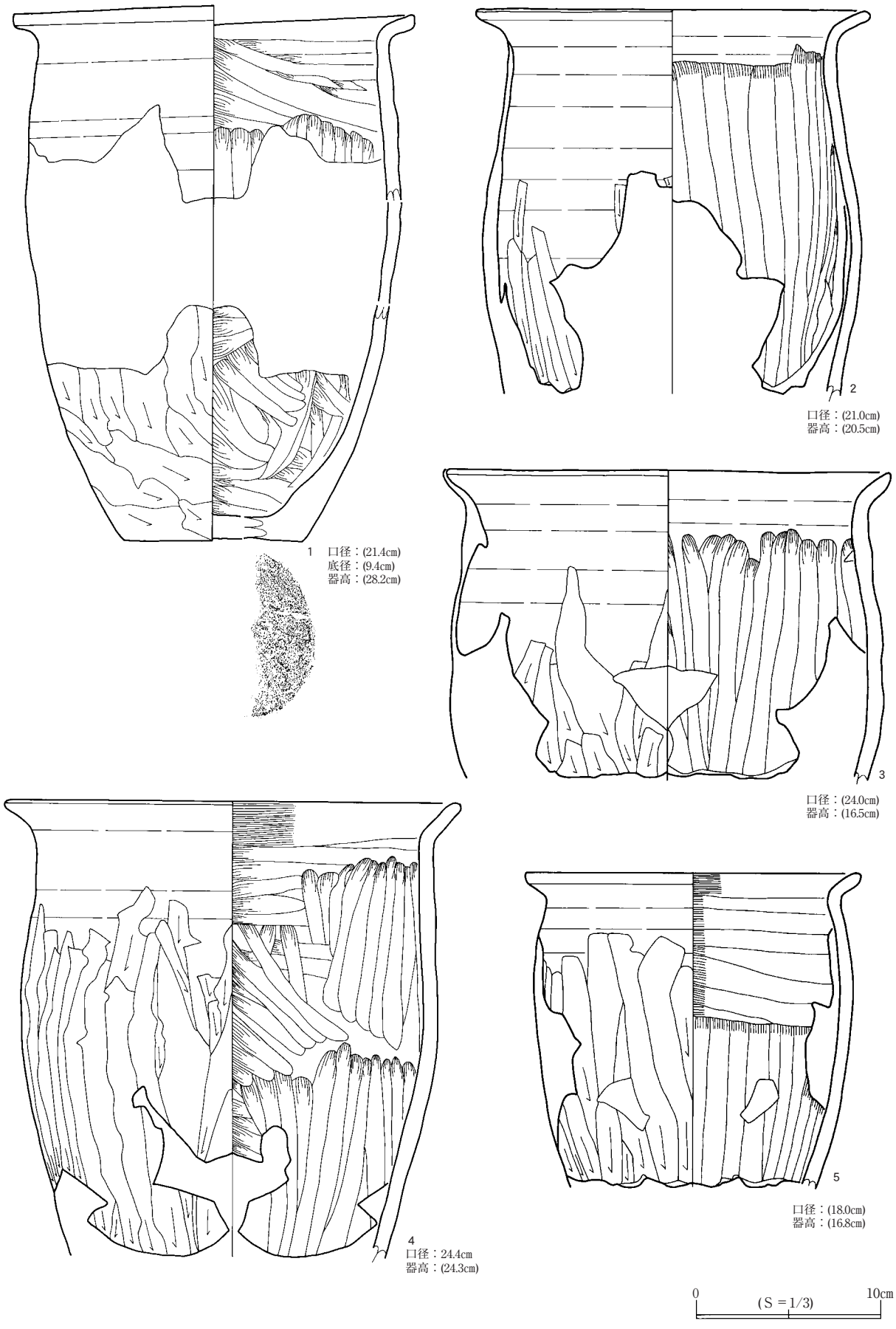
3
口径：(21.2cm)
器高：(20.8cm)



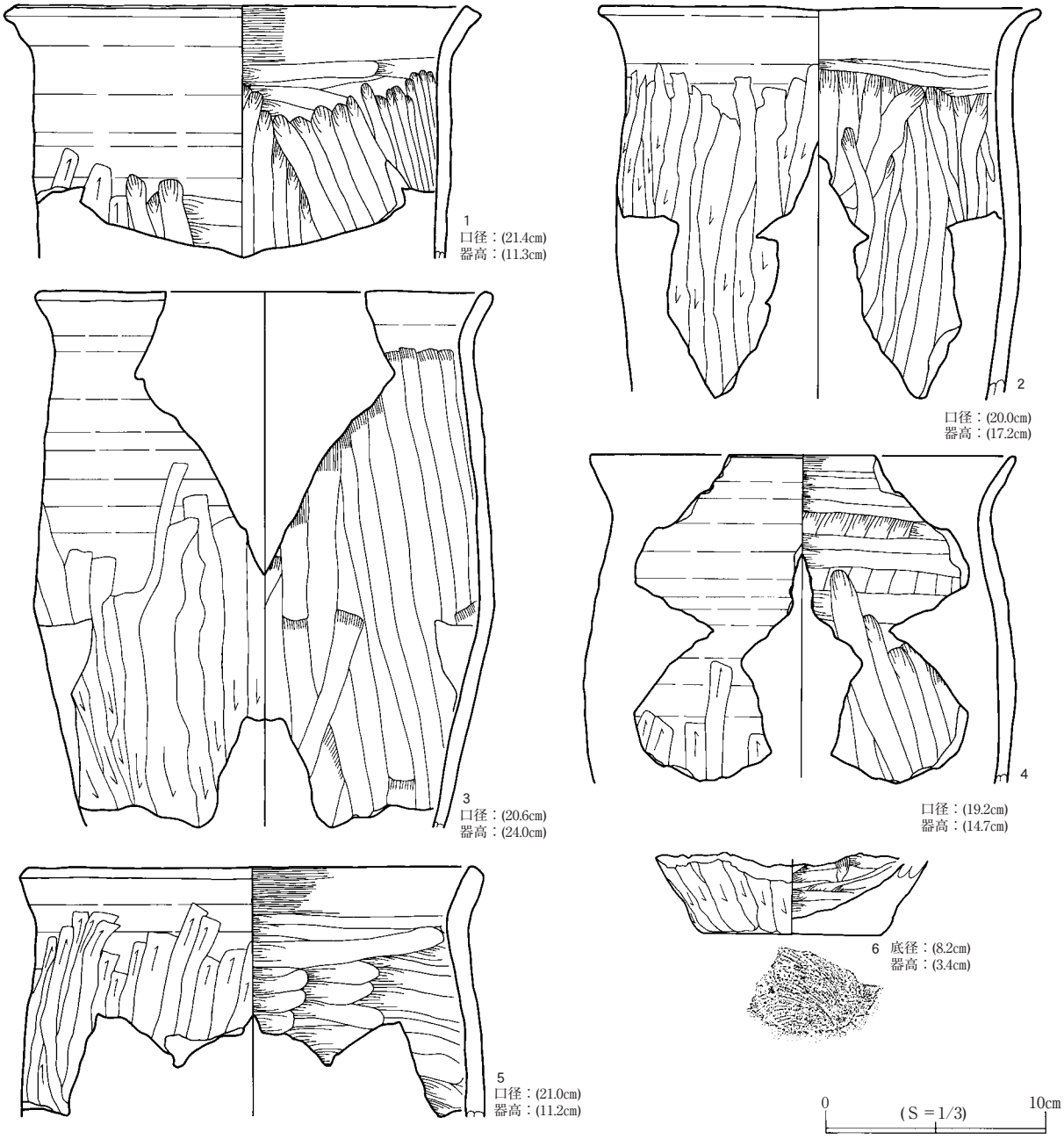
4
口径：(20.2cm)
器高：(13.3cm)

0　(S＝1/3)　10cm

第389図　03-ＳＴ185出土遺物５



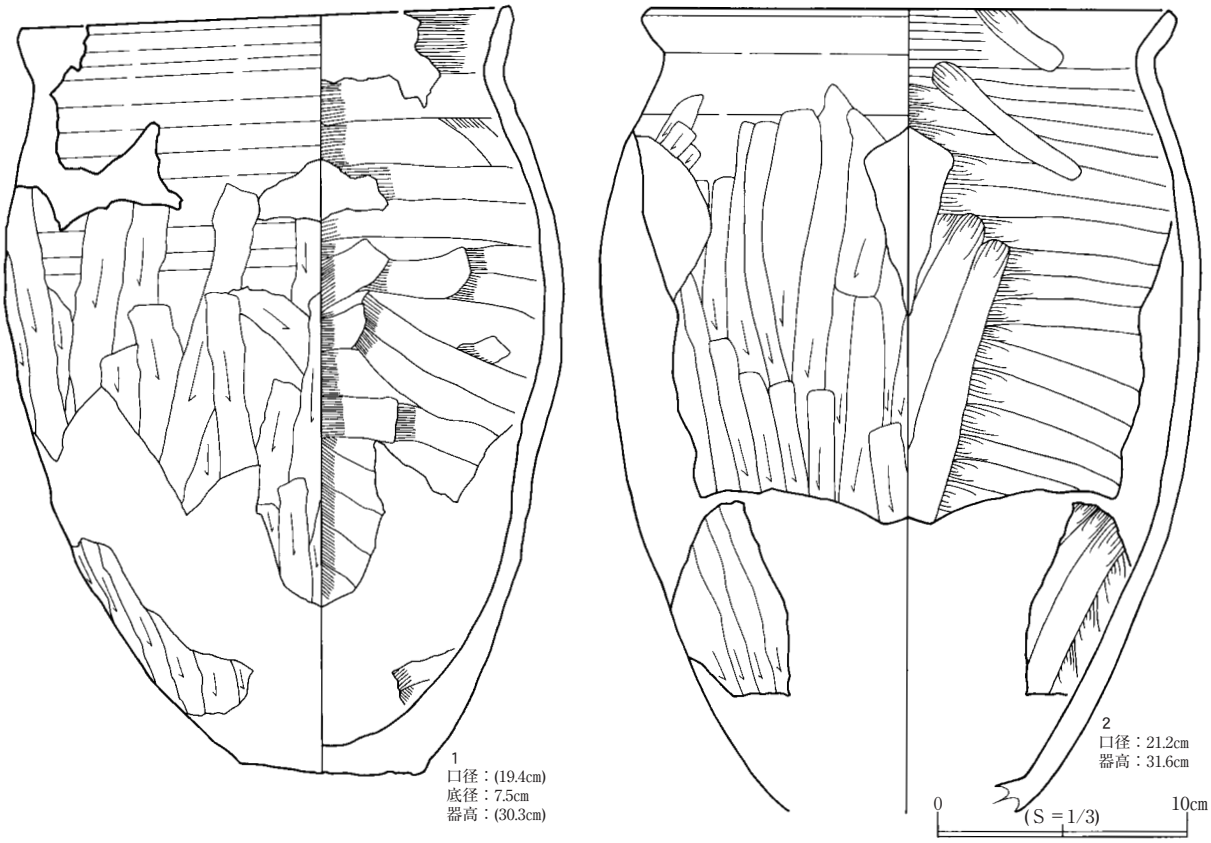
第390図　03-ＳＴ185出土遺物６



第391図　03-ＳＴ185出土遺物７

直立して立ち上がり、頸部でわずかにくびれて口縁部が外反し、口端が短く内湾する。外面は胴上部までタタキ目があり、その上面を底部まで及ぶ縦位ケズリで再調整している。内面は縦・横・斜位のユビナデで再調整している。387図１は底部から内湾気味に立ち上がり、頸部でくびれて口縁部が外反する器形で、口唇が比較的丸みを帯びる。外面は頸部から縦位ケズリの再調整を施し、底部付近のみタタキ目を残す。内面は大部分が縦位ユビナデ再調整である。

385図３～７、386図３～６、387図２・３はタタキ目を残す底部資料である。386図５がやや直立気味に立ち上がり、387図３がわずかに底部外縁が張り出す以外は、全て底部から直線的に外傾して胴下部が膨らむ器形である。この他の共通点として、内面にユビナデ再調整を施すものが多い。385図３・７、386図３・４・６、387図２がこれに当たる。横位ユビナデのみ確認できる385図４・５も、387図１の調整具合からみて、上部では縦位ユビナデを施す可能性が高い。ここでも、ロクロ目とみ



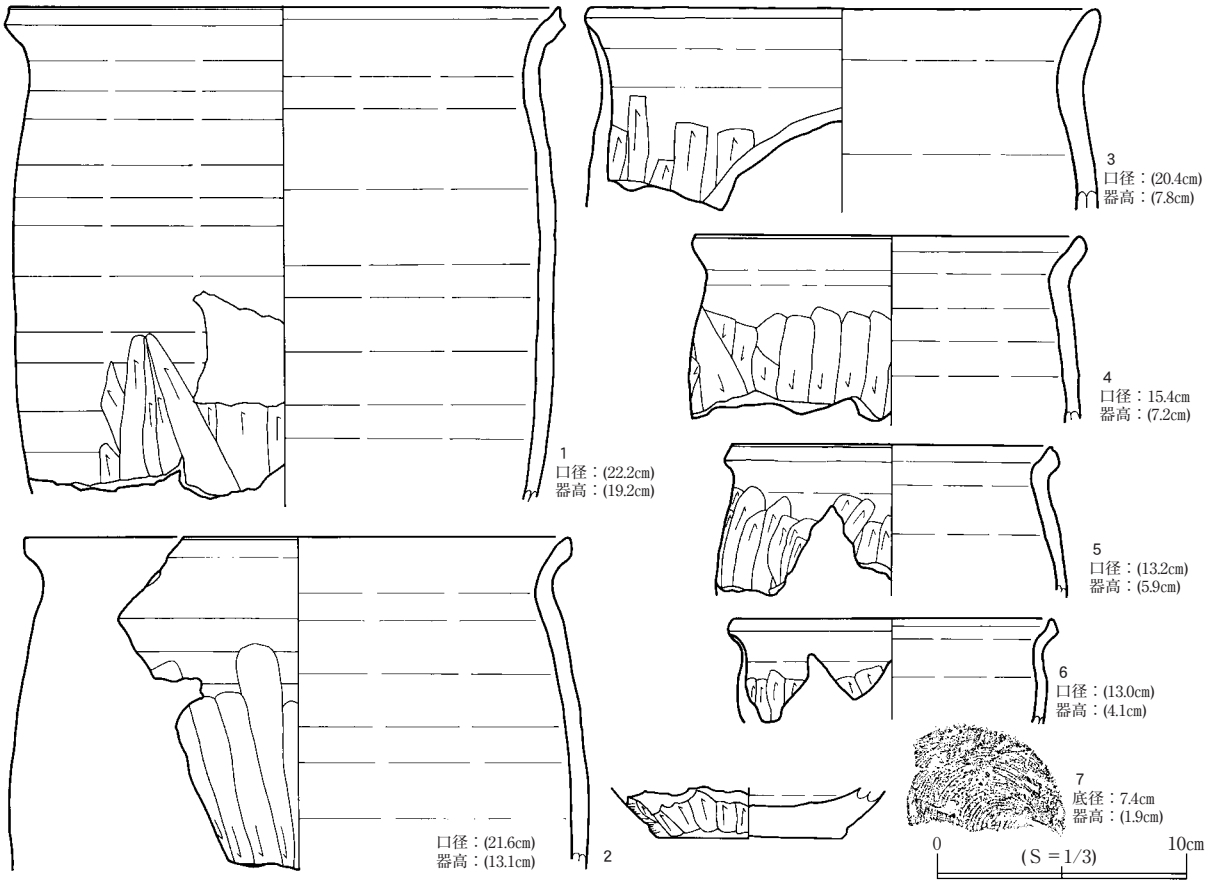
第392図　03-ＳＴ185出土遺物８

られる均一な横位ナデを施す386図５は、やや特異な印象を受ける。

以上のタタキ目を残す土器群は、底部付近にのみタタキ目を残し、内面に縦位ユビナデ再調整を施すものが多く、比較的強い共通要素をもつ土器群である。この特徴を端的に示す底部の出土は、ほとんどが本捨て場からであり、住居跡内やその他遺構等からの出土はおよそ５個体未満である。本捨て場出土のものを併せても、調査区全体で20個体前後とみれる。本遺跡の土器群で最も古い様相を示すと考えられる土器群で、最古段階の住居で使用したものと考えられるが、徹底的に捨て場に廃棄されている状況から、これらは再生産または再流通することなく途絶えた土器群であり、集落形成期に外部から移入したものと考えられる。

388図～396図もロクロ整形の土器群で、タタキ目が無いものである。残存部位にもよるが、388図～392図が内外面共に再調整を施し、393図が外面にのみ、394図が内面にのみ再調整が認められるもの、395図が内外面共に再調整が認められないもので、396図には底部を図示した。なお、396図の底部は比較的小型の甕になるとみられる。

388図１～３、389図１・２、390図１・４、391図３は、概ね全体形の分かる資料である。388図１は底部から緩やかに外傾して立ち上がり、胴部中位が張り出してそこから上部に内傾する器形で、これに対し388図２・３は胴部中位から直立気味に立ち上がる。全体形状で比較した場合388図４、389図２～４、390図１～３、391図３～５は前者に、389図１、390図４、391図１・２は後者に近い器形である。全体形状の面では、392図１がこれらとは違った器形になる。392図１は底部から胴上部まで内湾して立ち上がり、頸部で屈曲して口縁部が外反する器形で、口唇の厚みを除けば392図２もほとんど同じ器形である。これらは胴上部が張り出す点で、388図１や388図２・３とは異なっている。ま



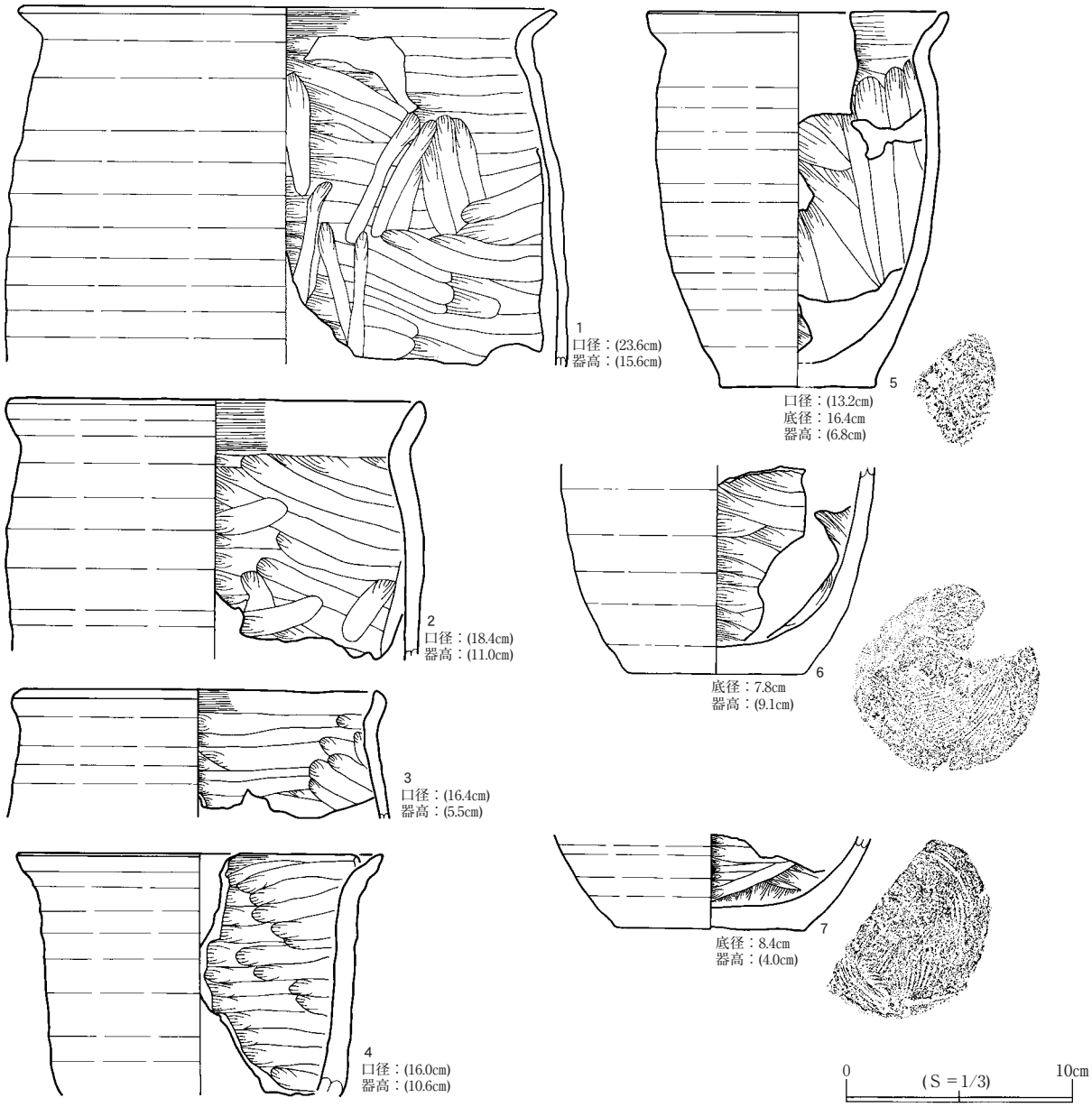
第393図　03-ＳＴ185出土遺物９

た、口縁部の外反が比較的短い点も特徴的である。この形状に近いものとして、390図５がある。以上のように胴部形状で、胴部中位が張り出すもの、胴部中位から直立するもの、胴上部が張り出すものに大別できる。

頸部から口縁部にかけては、388図～392図に図示したもの全てが、頸部で屈曲して口縁部にかけて外反する形状で共通するが、口縁部形状では、バリエーションが豊富である。388図１～４、389図１・２・４、390図１は、口縁部側面に面及び段を形成するものである。

388図１は口端を直立気味につまみ出して、口縁部側面に面を形成する。この側面中央部にはわずかに凹みが認められる。388図２～４の口縁部形態もこれに類似する。389図１・４も、口縁部側面に面及び段を形成する点では共通するが、口唇のつまみ出しの点では、389図１が内面から直線的に外傾して斜めにつまみ出し、389図４はつまみ出しがほとんどない。389図２・３も口唇がつまみ出し状にわずかに直立するが、口縁部側面は曲面的に仕上げてある。390図１・３はほとんどつまみ出し状にはならないが、口縁部内角がやや鋭角になる形状である。これらに対して、391図１・５、392図２は口縁部が肥厚して、口唇が角頭状になる。390図２・４・５、391図２・３、392図１は口唇がやや丸みを帯びるか、ゆずかに年担になる形状である。391図４は口縁部にむけて徐々に器壁が減じて、口唇は先細りの形状になる。

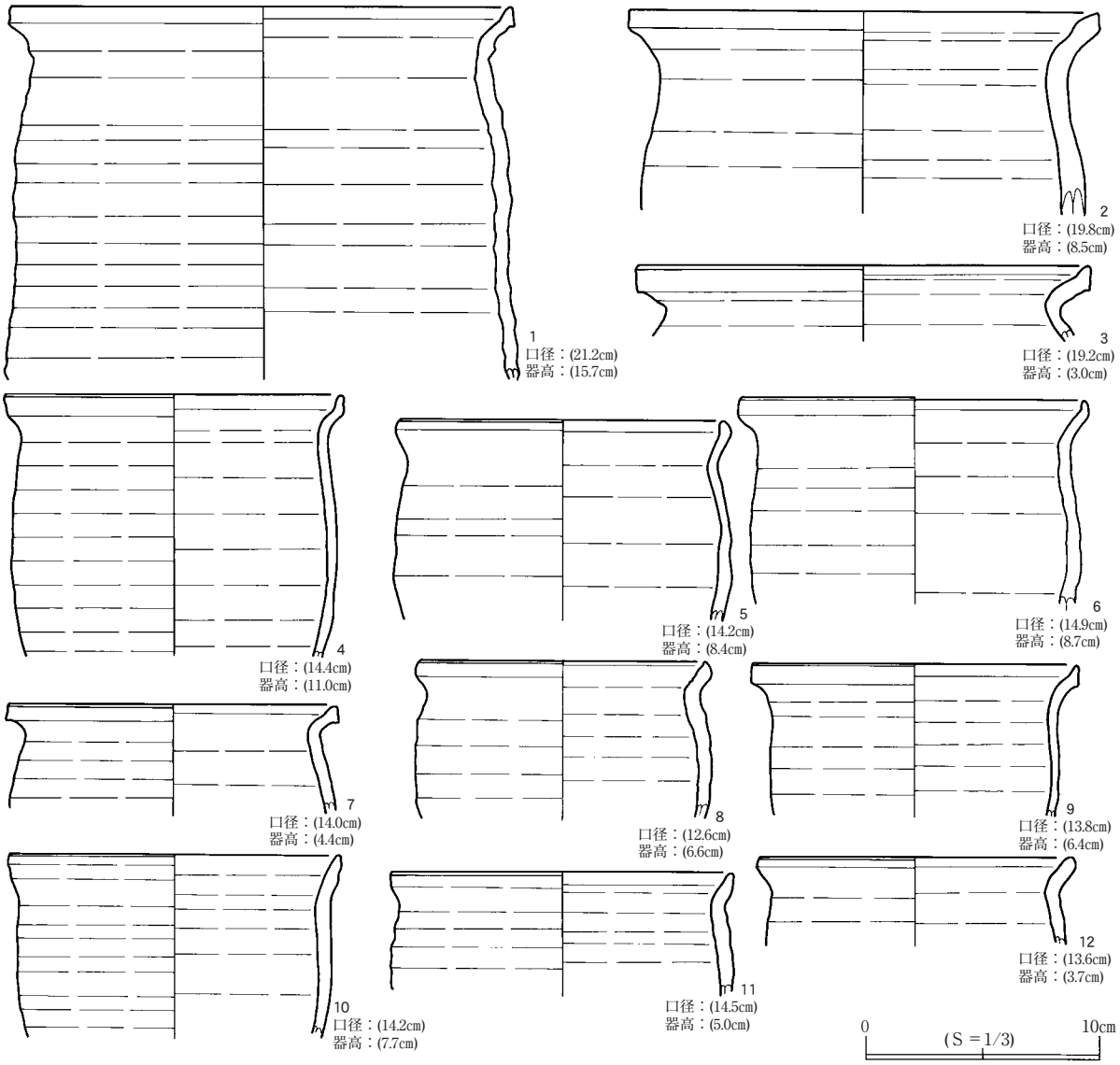
これらの他に特徴的な口縁部形状として、390図１のように頸部から外折する形状のものがあり、390図２・５も、ややこの傾向にある。388図１・３と388図２・４を比較すると、前者がやや外折気味であり、口唇形状に差異のあるものにも共通点を見い出せる。



第394図　03-ＳＴ185出土遺物10

再調整で比較すると、外面調整では全て共通して縦位ケズリを施している。内面調整についてもほとんどが縦位のユビナデ・ヘラナデ調整である。ただし、392図１・２の場合はいずれも横位方向のナデが主体であり、やや異質である。

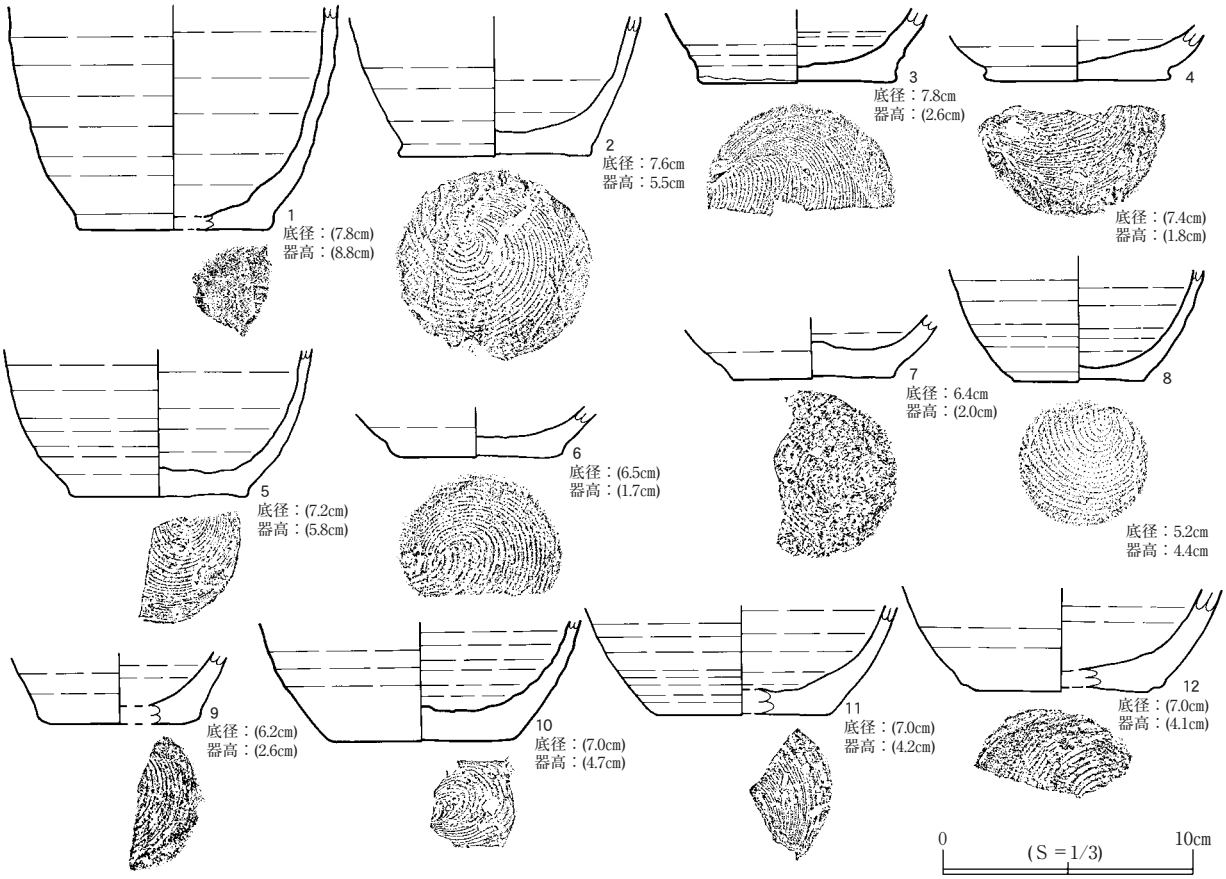
外面にのみ再調整が認められるものでは、393図１・２が比較的大型の資料である。１は胴部が直立気味に立ち上がり、頸部でくびれて口縁部が外反し、口唇がつまみ出しにより直立して、口縁部側面には斜位の面を形成する。胴部中位以下に縦位ケズリが認められる。２は胴部中位から内湾して立ち上がり、頸部でくびれて口縁部が外反し、口唇をわずかにつまみ出す。口縁部側面はやや曲面的に仕上げてある。胴上部から縦位ケズリが認められる。393図３は頸部で緩くくびれて、口縁部が直立気味に外反する器形で、口縁部がやや肥厚する。393図４～６はやや小型の甕で、４・５は胴部中位から内傾して頸部でくびれる器形で、６は胴上部が張り出す。いずれも口縁部が外反して口唇をつまみ出しており、口縁部側面は斜位の面を形成する。全てに外面縦位ケズリが認められる。393図７は



第395図　03-ＳＴ185出土遺物11

底部資料で、底面には回転糸切痕を残し、外面底部付近にはケズリを施す。

内面にのみ再調整が認められるものでは、394図１が比較的大型の資料である。１は胴部中位から内傾して立ち上がり、頸部で屈曲して口縁部が外折する器形である。全体に器壁が薄く、口唇はわずかに面取りしてある。内面には横位のユビナデの後、疎らに縦位ユビナデを施す。394図２は胴上部以上が残る資料で、胴上部でわずかに内傾して頸部でくびれ、口縁部が弱く外反し口端がわずかに内湾する。１に比べると全体に器壁が厚い。内面には斜位のユビナデが認められる。394図３～５は比較的小型の甕で、５は全体形状が窺える。底面にはケズリによる再調整を施し、わずかに外縁が張り出す底部から内湾気味に立ち上がり、頸部でくびれて口縁部が内湾気味に立ち上がる。口唇は丸みを帯びており、側面は曲面的に仕上げてある。内面には縦位のユビナデを施す。394図３は胴部から内傾して立ち上がり、頸部から口縁部まで内湾する器形で、口唇をわずかにつまみ出す。内面には横・斜位に交差するユビナデを施す。394図４は胴下部から直線的に外傾し、頸部でくびれて口縁部が外反する。口唇は先細り状で、末端部はわずかに内湾する。内面には横・斜位のユビナデを施す。394図６・７は底部資料で、いずれも回転糸切痕をとどめる資料である。底部から胴下部にかけて直線的

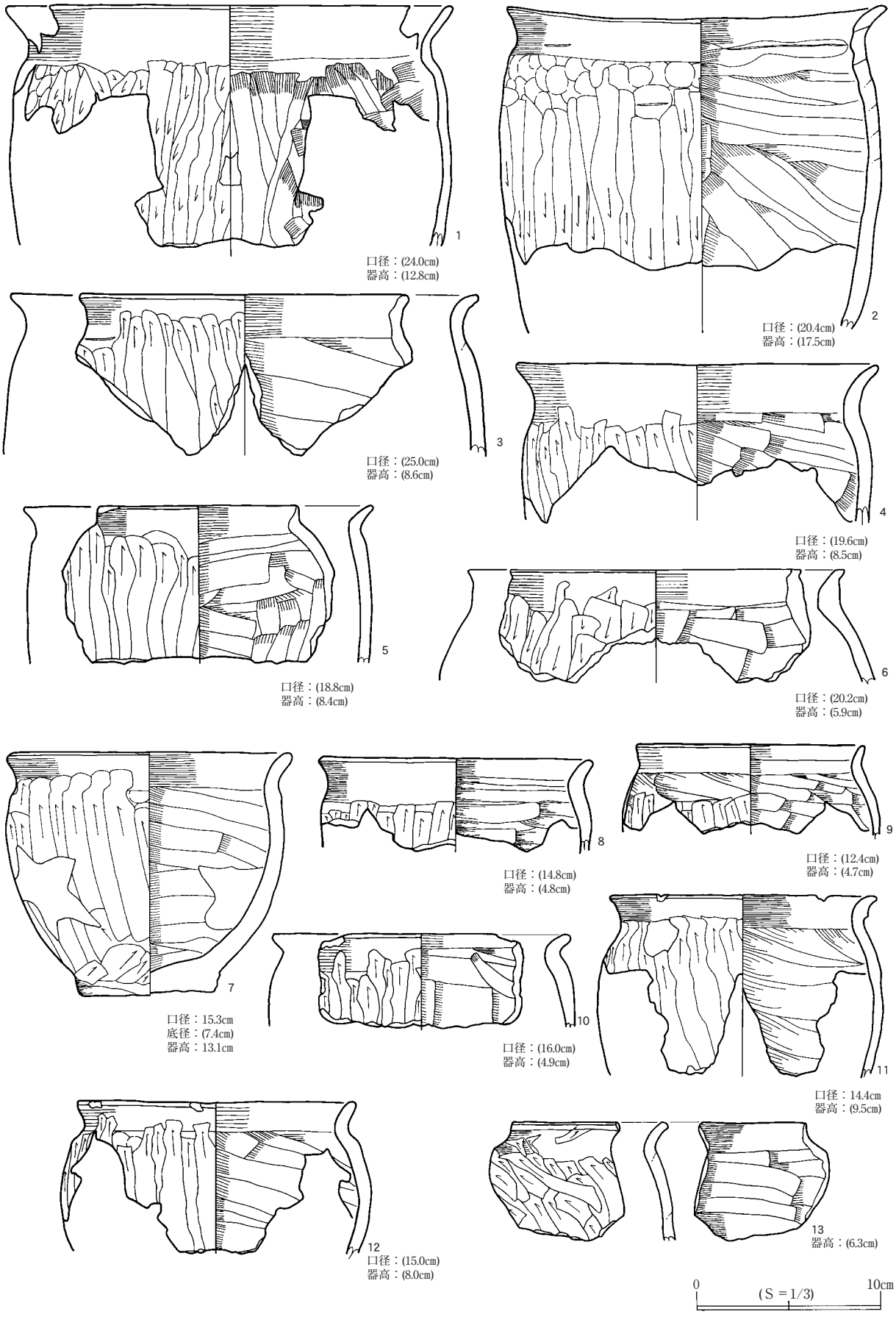


第396図　03-ＳＴ185出土遺物12

に外傾して立ち上がる点や、内面の横・斜位のユビナデの状態も共通する部分が多い。

395図・396図は明確な再調整が認められない資料で、395図に口縁部、396図に底部を掲載した。口縁部資料では、１～３が比較的大型の甕である。１は胴部から直立気味に立ち上がり、頸部でくびれて口縁部が外反し、口端が直立する。２は胴部が張り出し、頸部にかけて内傾して立ち上がり、頸部から口縁部にかけて外反する器形で、口唇はやや鋭角に仕上げてある。３は頸部で強く屈曲して口縁部が外反し、口唇が外面寄りの部分でつまみ出し状に直立する。１～３はいずれも口縁部側面に垂直の面を形成する。395図４～12は比較的小型の甕で、口唇形状では、４～９がつまみ出し状になり、10～12は先細りまたは丸みを帯びる形状になっている。口縁部形状では４・６・９のように頸部から外反して直立気味に立ち上がり、口縁部側面に垂直の面を形成するもの、７のように頸部から外折して口縁部がわずかに直立気味に隆起して、口縁部側面に面を形成するもの、５・８のように頸部から外反した後に内湾して、口縁部側面を曲面的に仕上げるもの、10・11のように頸部から弱く外反して内面立ち上がりは直線的に外傾し、外面立ち上がりは直立気味になるもの、12のように頸部から外反して口唇が角頭状になるものがある。

396図の底部資料は、１が底面にケズリ再調整を施す以外は、全て回転糸切痕をとどめる。底部の立ち上がりでは、１～４が底部外縁がやや張り出し、５～７がわずかに直立してから外傾し、８～12が底部外縁から直線的に外傾する。底面が完全に残存していないため明確には対比できないが、底部器厚では１～４・６・８・12が外縁から徐々に厚さを減じるか、ほぼ同じ厚さを維持するのに対し、５・７・10・11は底部中央部が山形に厚くなる。前者は底部外縁が張り出す形状のものに、後者は底



第397図　03-ＳＴ185出土遺物13

部外縁から直線的に外傾する形状のものに多い。

397図にはＢ類を掲載した。１～６までは中・大型の甕で、いずれも外面調整は縦位ケズリで共通する。内面調整は１が縦位ヘラナデである以外は、概ね横位ヘラナデ調整である。１は胴下部からやや外傾して胴部中位からは直立気味に立ち上がり、頸部で内折・直立と２段階に屈曲し口縁部が外折する。全体に器壁が薄い。２～４は、頸部でくびれて口縁部が外反する資料で、頸部以下の形状では、２が胴下部から外傾して頸部にかけて内湾して立ち上がり、３が胴上部が張り出して頸部にかけて内傾し、４は胴上部が直立気味に立ち上がる。５は胴上部が直立気味に立ち上がり、頸部でくびれて、口縁部が短く外折する。口縁部内面は直線的に外折しており、口縁部を内面から外側に押し出した作りである。６は胴上部から内湾して立ち上がり、頸部でくびれて直立し、口端がわずかに外反する。口端の短い外反は上部からの押圧によるもので、これに伴い口縁部が肥厚する。

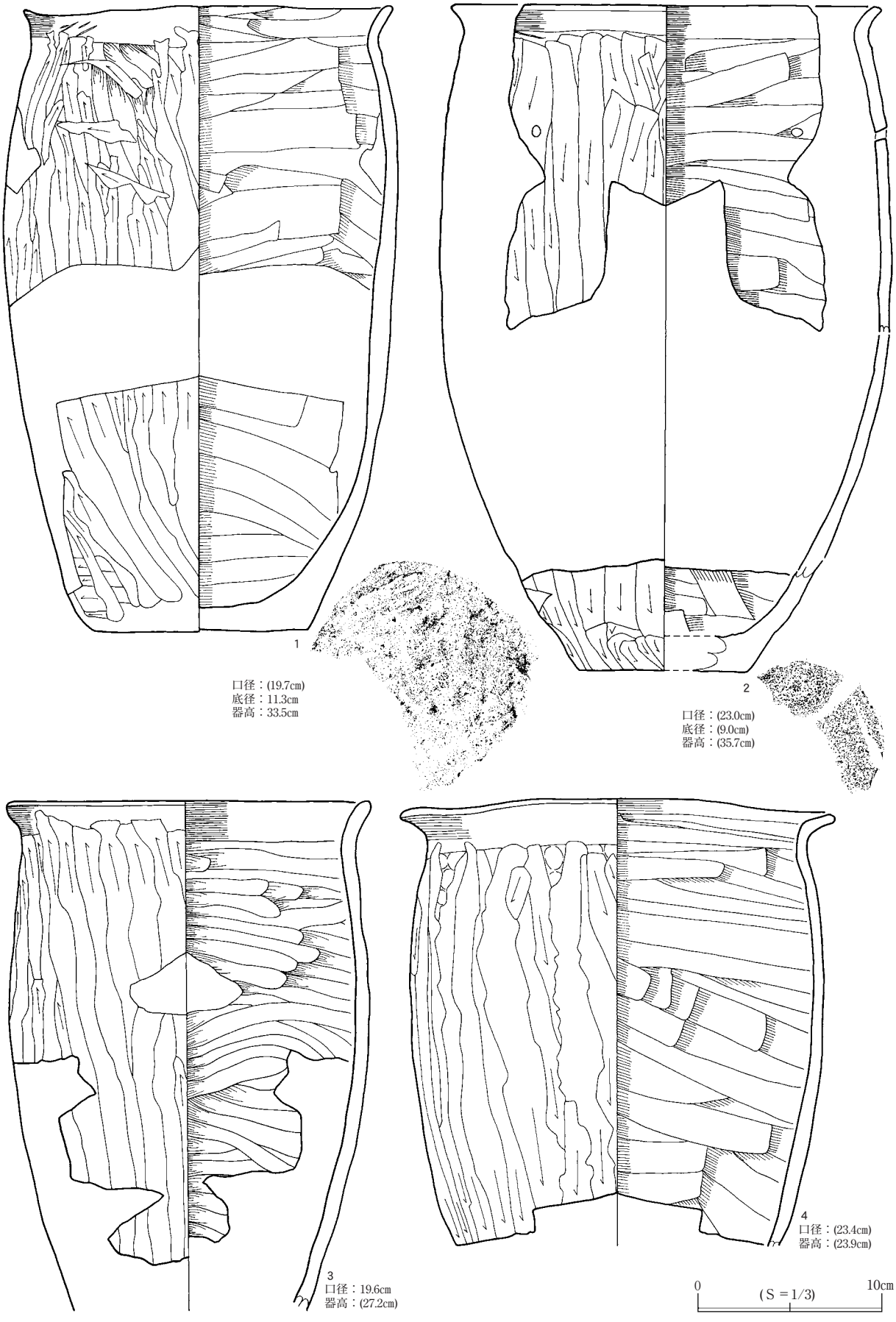
397図７～12は比較的小型の甕で、外面調整は全てが縦位ケズリで、内面も全て横位のナデ調整である。７・８・10・12は口縁部の外反具合が似ており、短く外反する口縁部の先端が丸く仕上げてある。11は胴上部が丸みを帯びて頸部にかけて内湾し、口縁部が外反する器形で、頸部には外面のケズリにより段違いになる部分がある。９は頸部にかけて内湾し口縁部が直立気味に立ちがる。397図13は口縁部破片で、頸部から口縁部が外折して、口唇は角頭状に仕上げてある。外面斜位ケズリ、内面横位ヘラナデ調整である。

398図～405図には甕Ｃ・Ｄ類を掲載した。398図～403図には比較的中・大型の甕を、404図・405図には比較的小型の甕を掲載している。

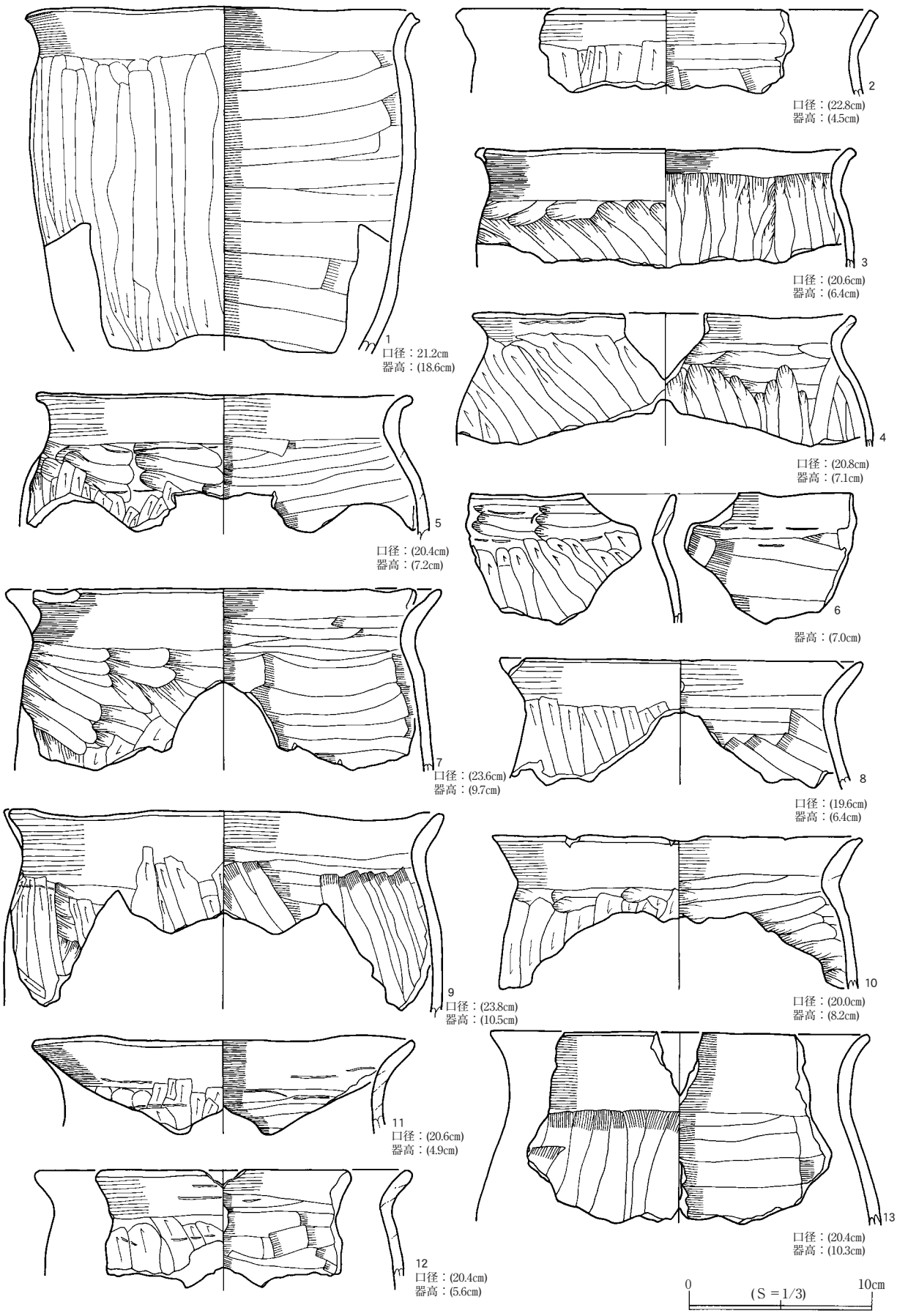
398図はほぼ全体形状が分かる資料で、いずれも胴部中位に最大径を有する器形であり、Ａ類388図１のように、底部から緩やかに外傾して立ち上がり、胴部中位が張り出してそこから上部にかけては、内傾または直立気味に立ち上がる器形である。なお、外面調整はいずれも縦位ケズリである。１は、底径と口径の差が少ない円筒状の器形である。頸部で弱くくびれて口縁部が外反する。口唇は丸く収める部位と先細りになるところがあり一定しない。内面は横位ヘラナデ調整で、底部付近では横位の後に縦位に再度調整を行うが、それでも器壁が厚く、他の土器に比べてかなりの重量がある。２は胴下半部が欠損しているので復元実測したものである。両破片とも黄褐色系の色調で器表面の調整が丁寧である点で共通する。外反する口縁部は、口唇が角頭状に仕上げてある。内面は横位ヘラナデ調整である。３は口縁部が直線的に外傾してやや肥厚する器形で、口唇は内外角を平滑に仕上げている。内面は横位ユビナデ調整だが、形状の比較ではＡ類391図３に極めて似ている。４は、頸部のくびれから口縁部が外折する形状で、口唇は丸みを帯びる。内面は胴下部が斜位の、胴上部は横位のヘラナデ調整である。口縁部の直角に近い外折形態は、Ａ類390図１から認められる。

399図・400図にはＣ類の中でも比較的Ｂ類に近い資料を掲載した。399図は口縁部の外反が比較的長めの資料を、400図は口縁部外反が比較的短めの資料をまとめたが、その境界線は極めてあいまいになっている。これは、399図に掲載した資料とＢ類についても言えることで、各形態分類の境目は極めて漸位的である。

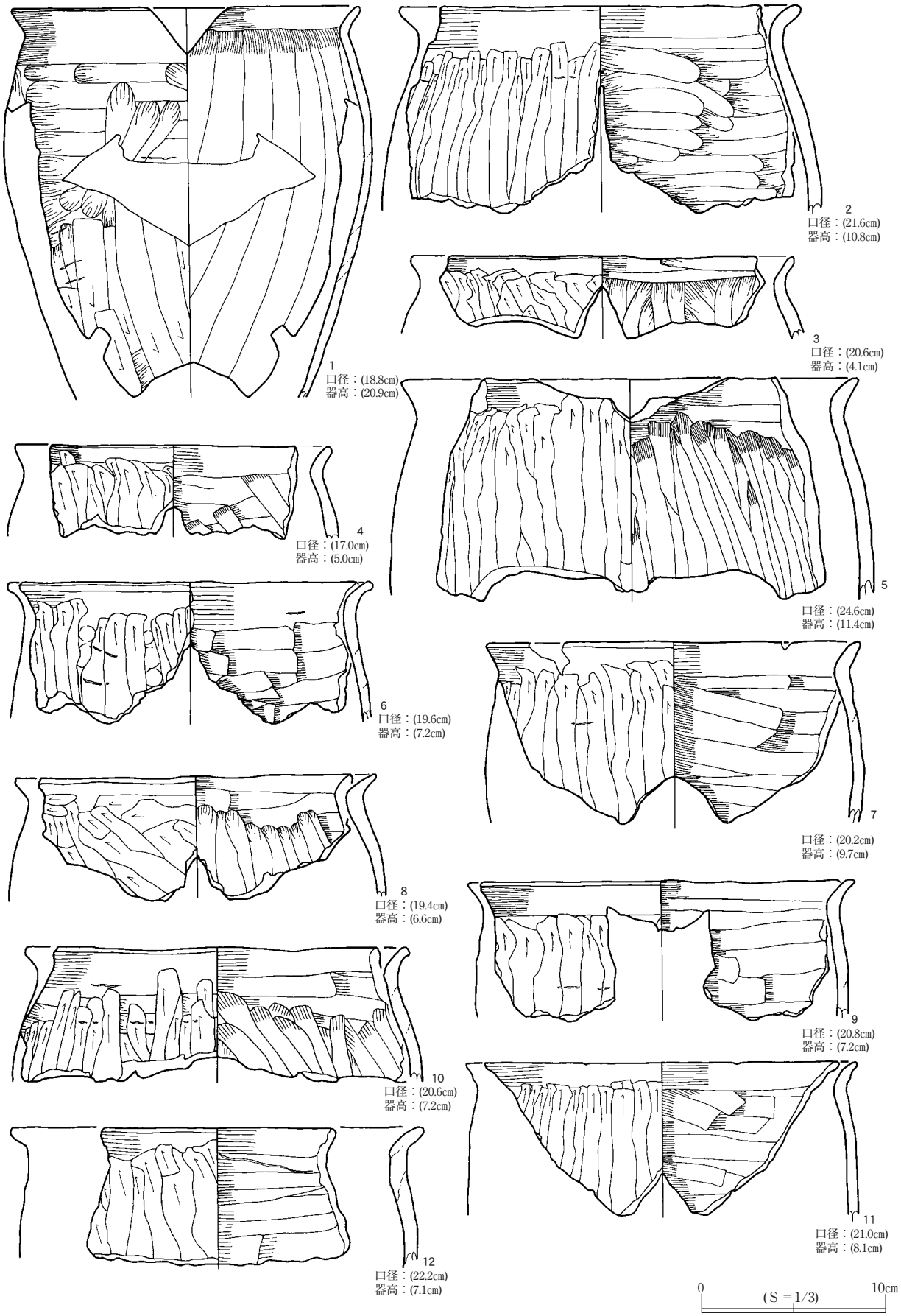
399図１～３は口唇を面取りして角頭状に仕上げている。399図４も角頭状に近い仕上げだが、口唇をわずかにつまみ出してやや直立気味になる。399図６～12も４のように頸部から直線的に外反・外折する口縁部で、６～９・11・12は口端がわずかに内湾し、10は外反する。399図５は頸部が２段階



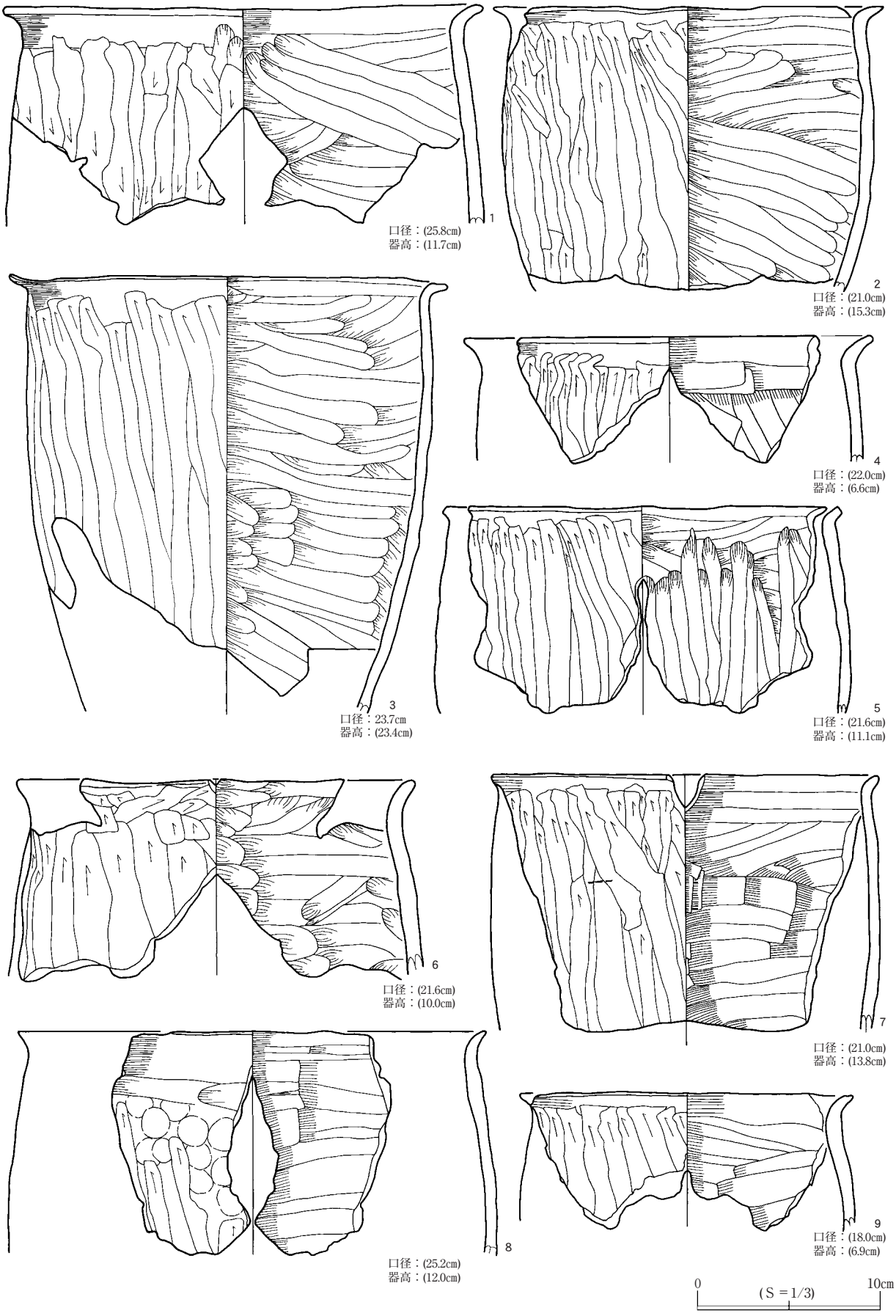
第398図　03-ＳＴ185出土遺物14



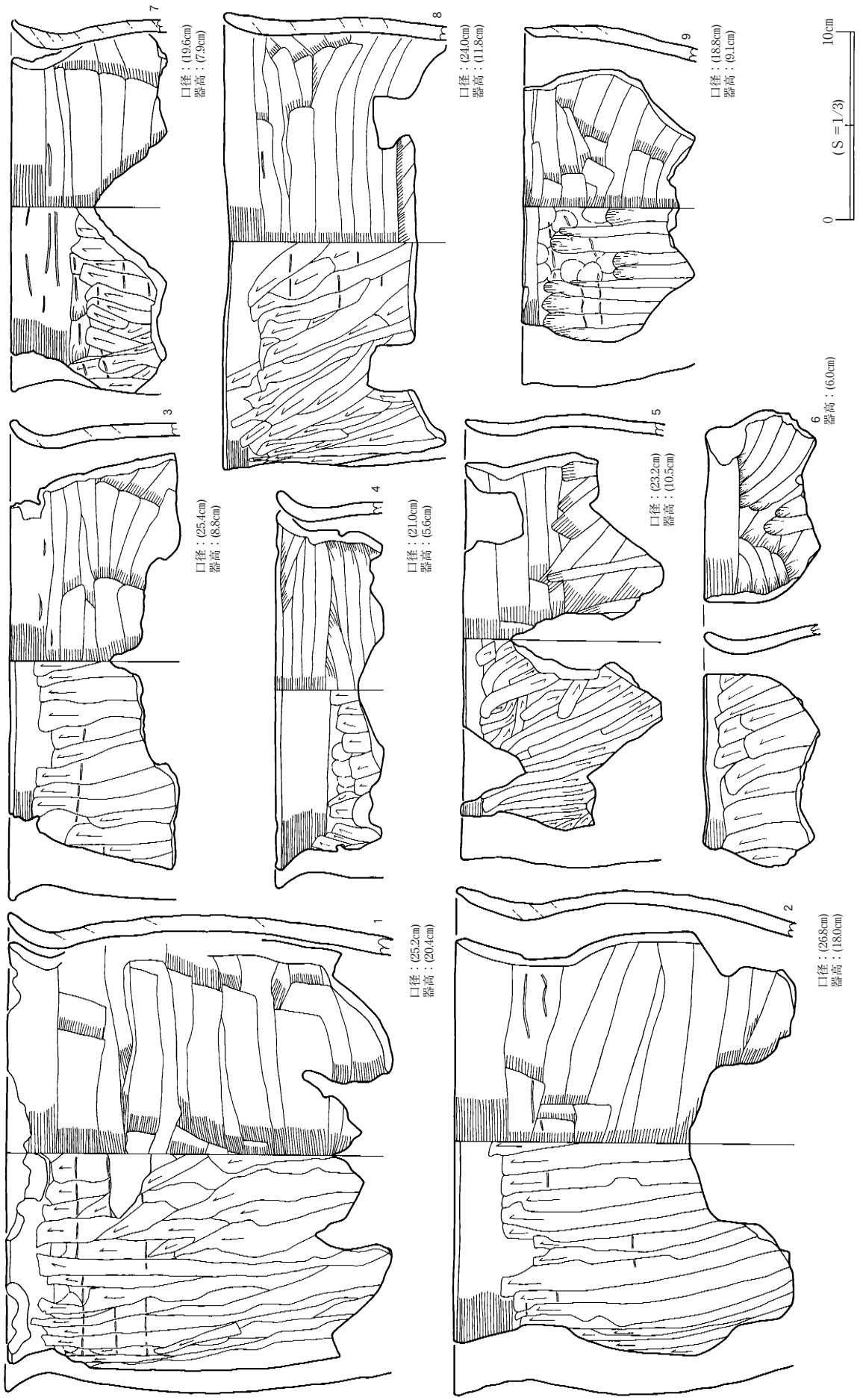
第399図　03-ＳＴ185出土遺物15



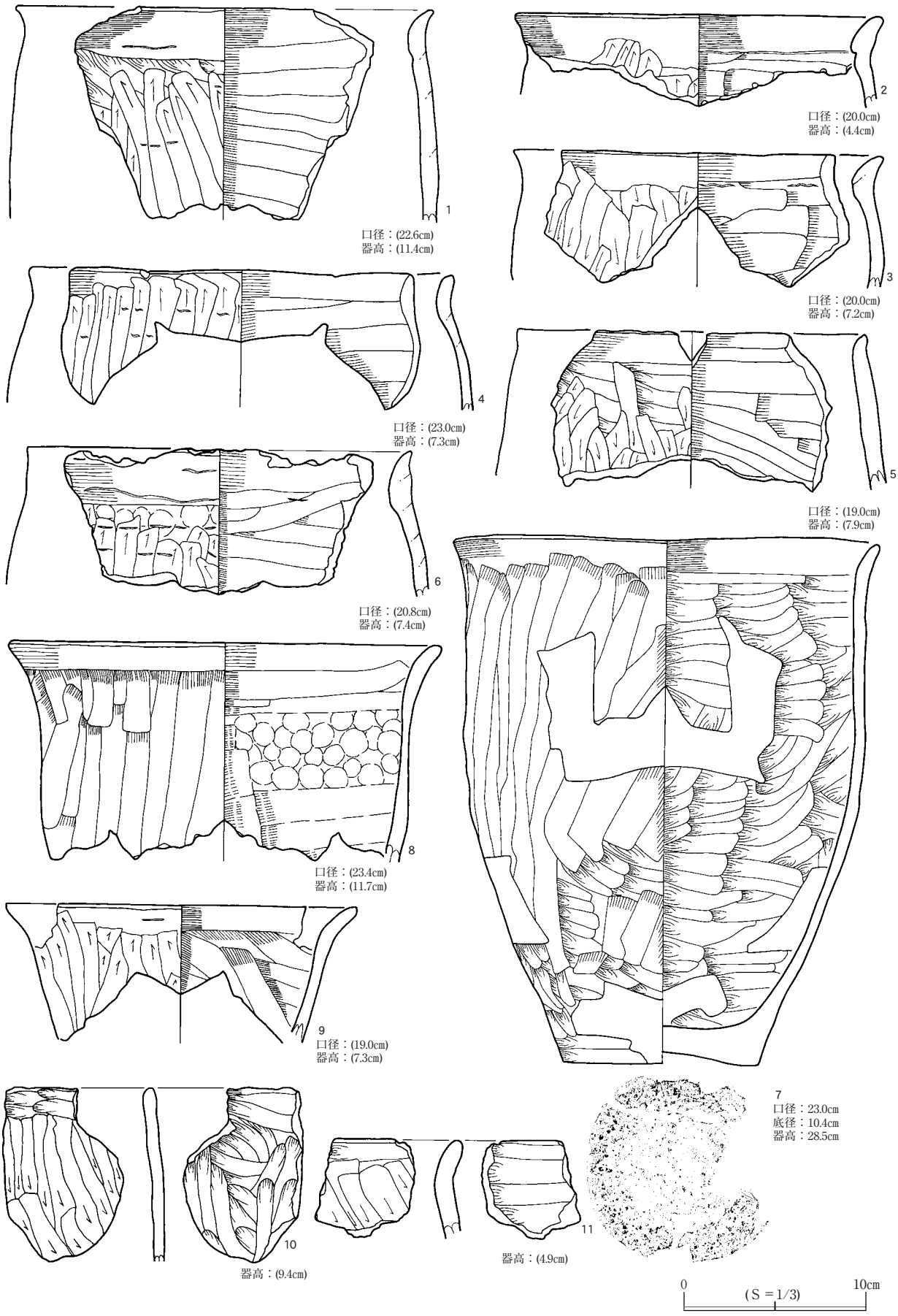
第400図　03-ＳＴ185出土遺物16



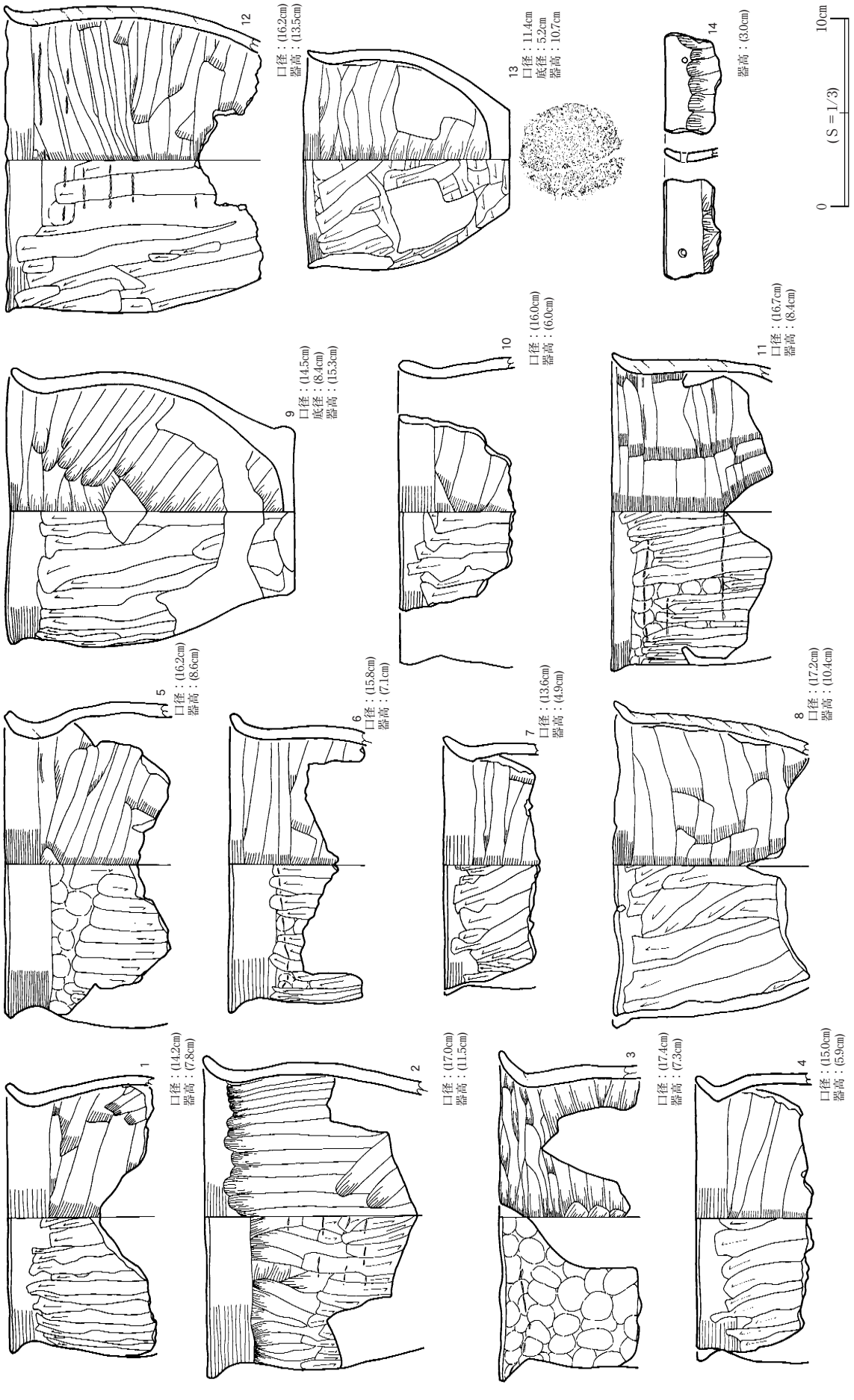
第401図　03-ＳＴ185出土遺物17



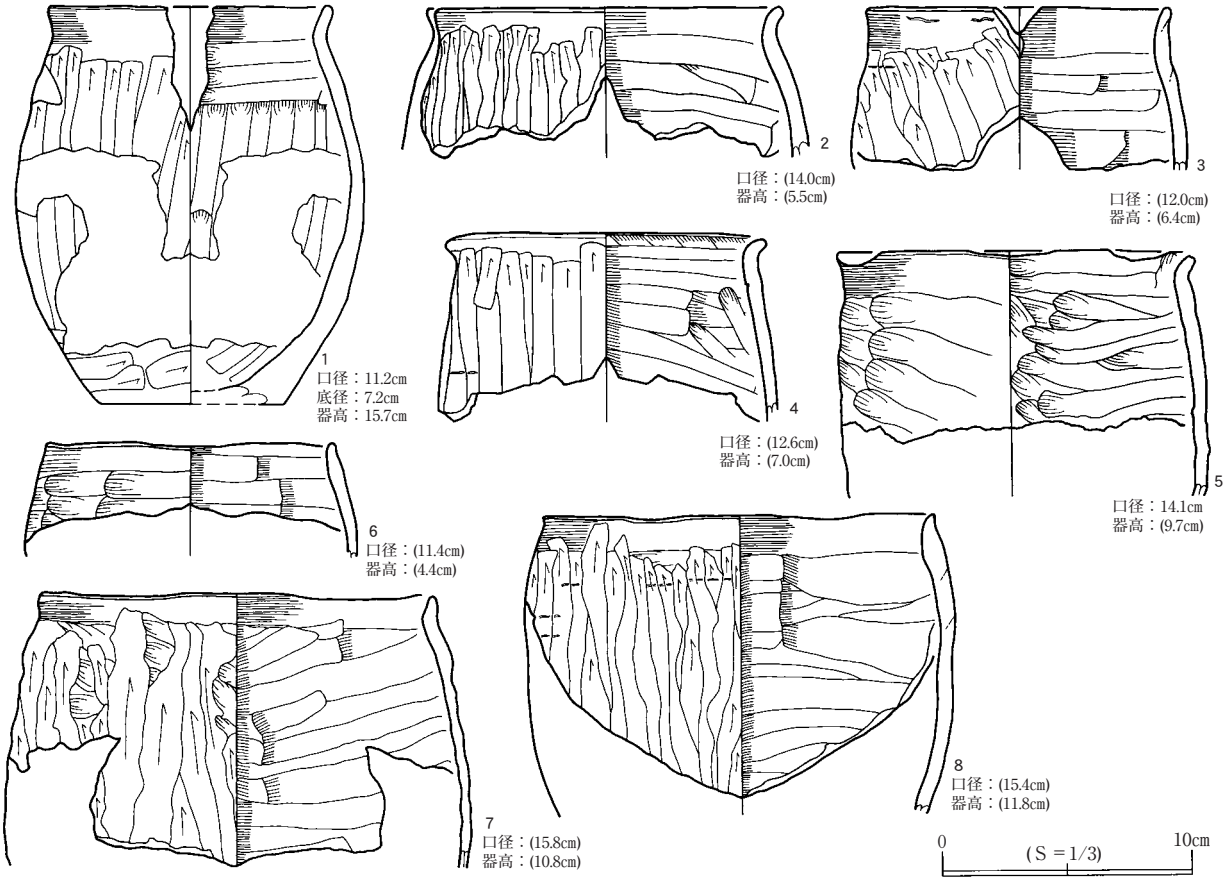
第402図　03-ＳＴ185出土遺物18



第403図　03-ＳＴ185出土遺物19



第404図　03-ＳＴ185出土遺物20

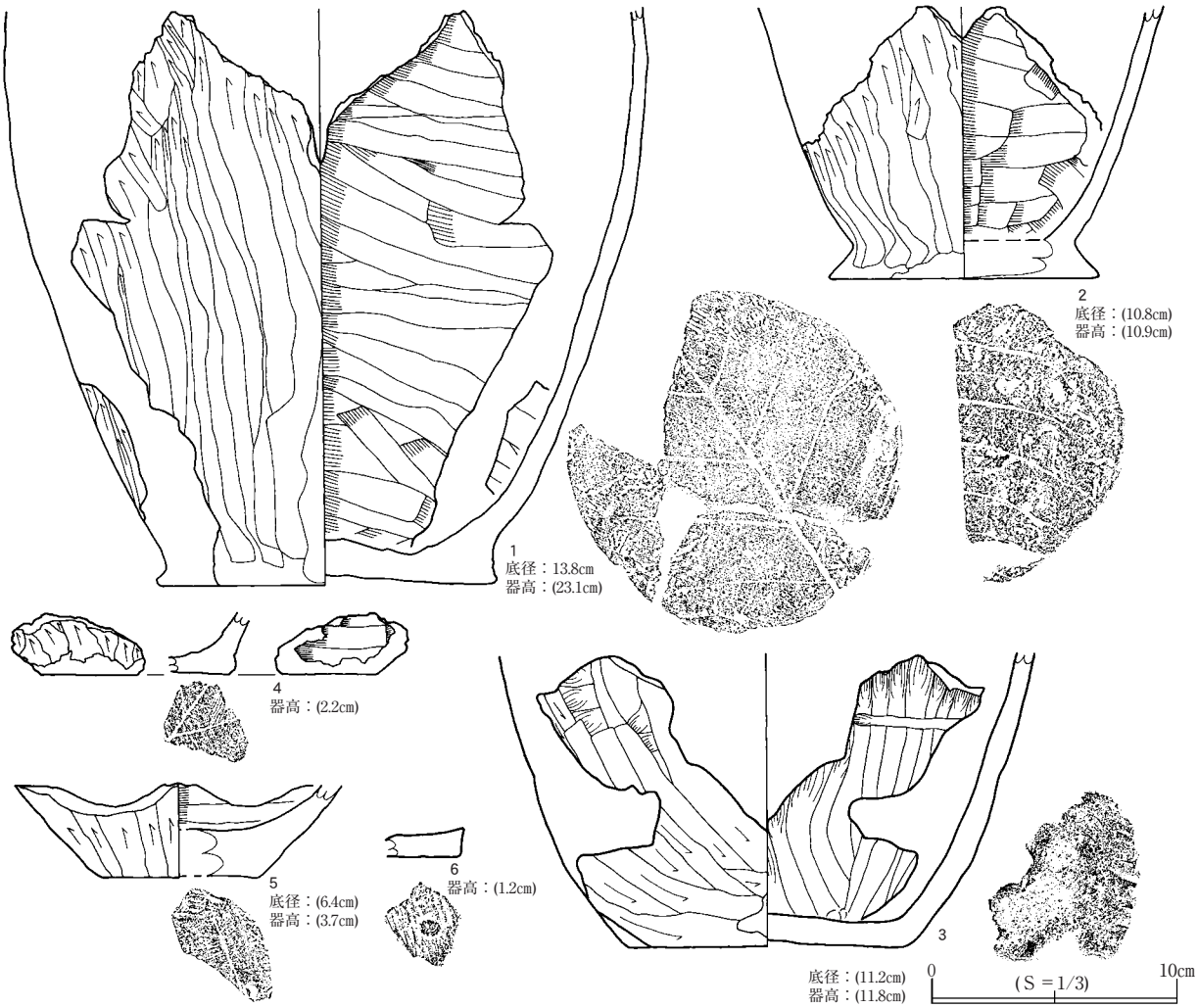


第405図　03-ＳＴ185出土遺物21

に屈曲し、口縁部が短く外反する器形で、397図１に近い形状である。399図13は頸部から長く外反する器形である。外面調整では、１・２・５・８～12が縦位ケズリ、４・６が斜位ケズリで、13は縦位ヘラナデである。３では斜位のユビナデのみ認められるが、５・７のように胴上部以下にケズリを施すと考えられる。内面調整では、縦位ナデと横位ナデの２種類に大きく分かれる。

400図１は胴下部まで残る資料で、胴上部が張り出して頸部にかけて内湾して立ち上がり、頸部の屈曲から口縁部が短く外反する器形である。比較的薄手の作りである。400図２～６・８・10は胴上部が直線的に内傾する器形で、Ａ類388図１に近い形状である。いずれも口縁部内面からの押圧により、外折に近い口縁部形状になる。口唇は６・10が角頭状、２が丸みを帯び、３～５・８が先細り気味に仕上げている。７・９・11・12は胴上半部が直立気味に立ち上がり、頸部で弱く内傾して口縁部が外反する器形である。７・９・12にも口縁部内面への押圧による外折が認められる。外面調整はほとんどが縦位ケズリで、８がやや横・斜位に施している。また、１のように胴下部のみに施すものもある。内面調整は縦位と横位のナデに大別できるが、胴上部が内傾する１・３・５・８・10で縦位ナデが認められる。

401図１～５は口縁部が外折する器形である。胴上部は１・５がわずかに内傾し、２～４が直立気味に立ち上がる。口唇形状は５が角頭状、１・４が丸く収め、２・３が先細りになる。外面調整はいずれも縦位ケズリで、内面調整は１・２が斜位のユビナデ、３が横・斜位のユビナデ、４が縦位ヘラナデ、５が縦位ユビナデである。中でも１・２は、398図４の形状に極めて似ており、器壁の薄い１・２は、398図４よりやや後出の印象を受ける。

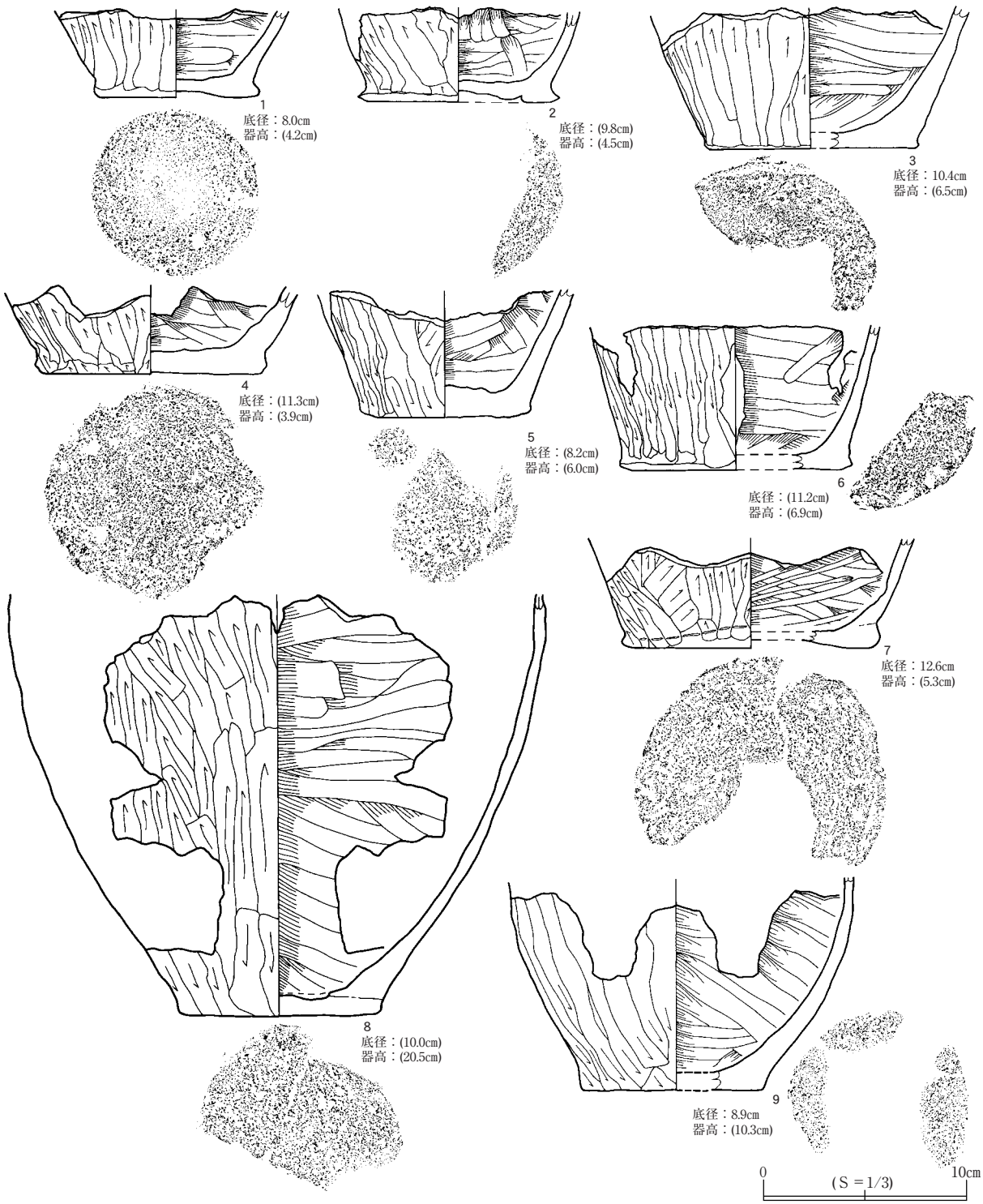


第406図　03-ＳＴ185出土遺物22

401図６～９は胴上部が内傾して立ち上がり、口縁部がわずかに外反する器形である。口唇は、６・７のように丸く収めるもの、８のように先細りのもの、９のように上面平坦なものがある。外面調整は縦位ケズリ、内面調整は横位ナデでほぼ共通する。６の外面調整は口端まで施している。

402図１～４・６・７は胴上部が内傾するが、頸部のくびれが弱く、口縁部がわずかに外反する器形で、399図の資料に比べて頸部の屈曲が比較的弱い器形である。口唇形状はほとんどが先細り状か、丸く収める形状になり、４・７のようにわずかに肥厚するものがある。いずれも外面調整は縦位ケズリ、内面調整は横位ナデである。これらよりも口縁部の形態変化が少ないのが、402図５・８・９である。いずれも、わずかに屈曲する頸部から口縁部が直立気味に立ち上がり、口唇はすべて先細りになる。外面調整は縦位ケズリ、内面調整は横・斜位ヘラナデで共通する。

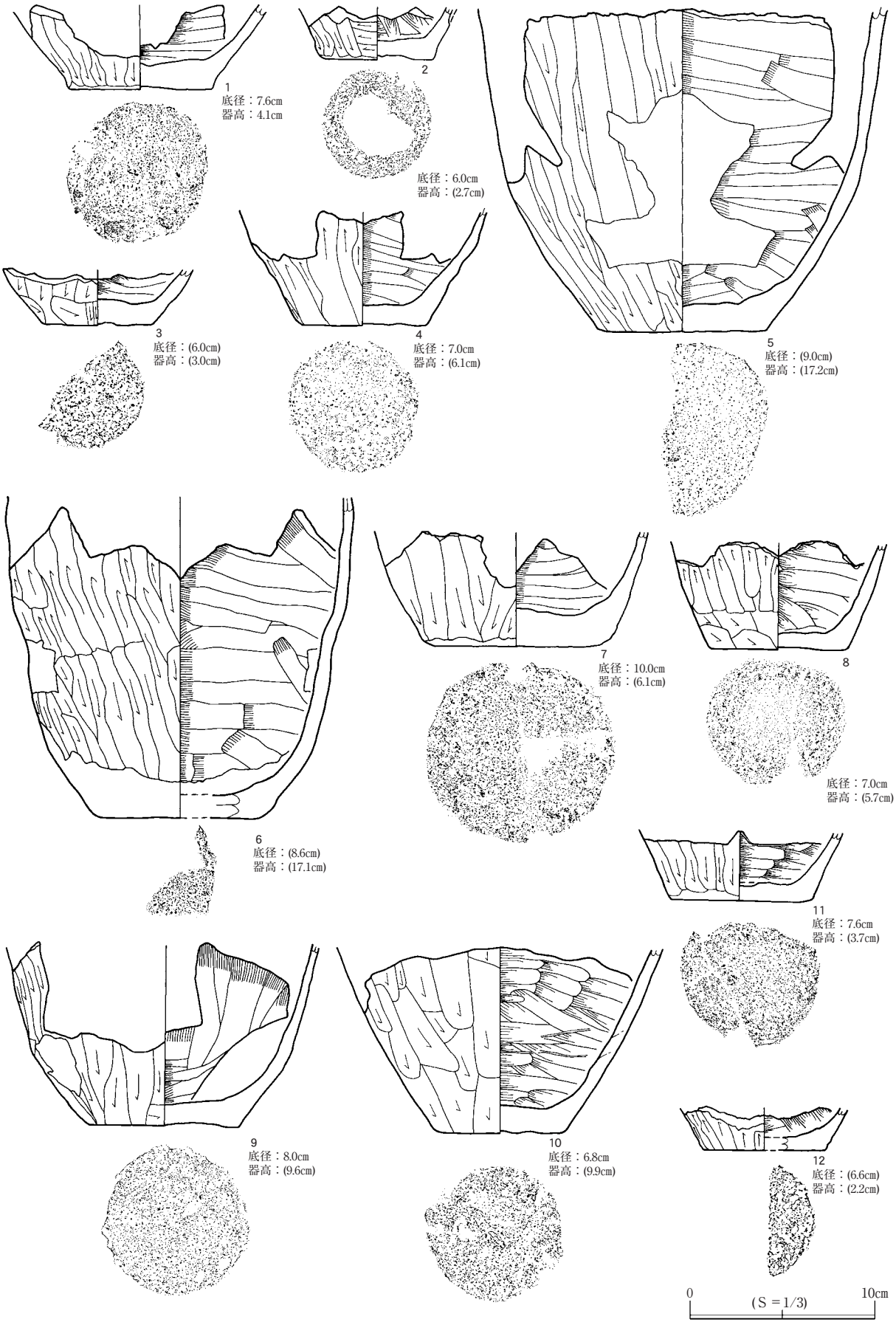
403図１～６は胴上部から口縁部まで内傾して、口端がわずかに外反または直立気味に立ち上がる。口縁部は１～３・６のように肥厚するものが多く、口唇は先細り状になるものがほとんどである。外面調整は基本的に縦位ケズリ、内面調整は横位ヘラナデのものだけ認められる。403図７～９は胴上部が直立気味または外傾して、口縁部でさらに外反する。７は全体形状が分かる資料で、底面はケズリによる再調整を施し、底部から胴部中位まで直線的に外傾し、胴上部にかけて直立して立ち上がり、頸部でわずかに屈曲して口縁部が外反する。８もこれに極めてよく似た形状である。両者とも外面が



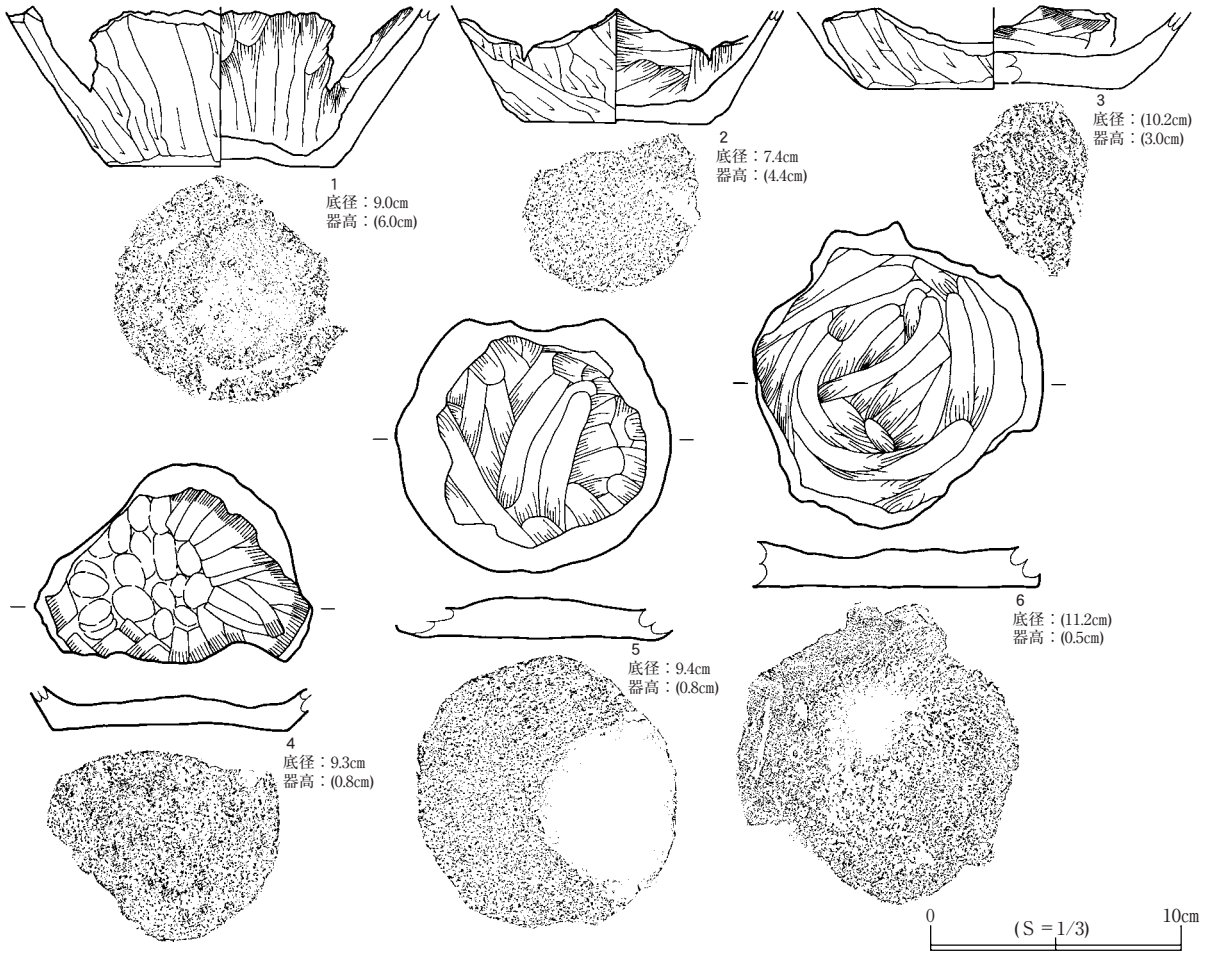
第407図　03-ＳＴ185出土遺物23

縦位ヘラナデ調整で、７が内面に間隔の短い横位ユビナデ、８は横位ヘラナデを施す。９は外面縦位ケズリ、内面斜位ヘラナデ調整である。403図11は口縁部がわずかに外反する。403図10は口縁部まで内湾する破片資料で、明確なＤ類である。なお、Ｄ類に相当する資料は明らかに少ない。

404図・405図は比較的小型の土師器甕である。404図は口縁部が外反する資料である。１は胴上部が張り出し、頸部で内傾・直立・外反する器形で、口唇が平滑に面取りしてあり、口縁部がやや肥厚する。６も同様な器形だが、くびれが弱く器形変化に乏しい上、口唇の面取りも明らかでない。それ



第408図　03-ＳＴ185出土遺物24

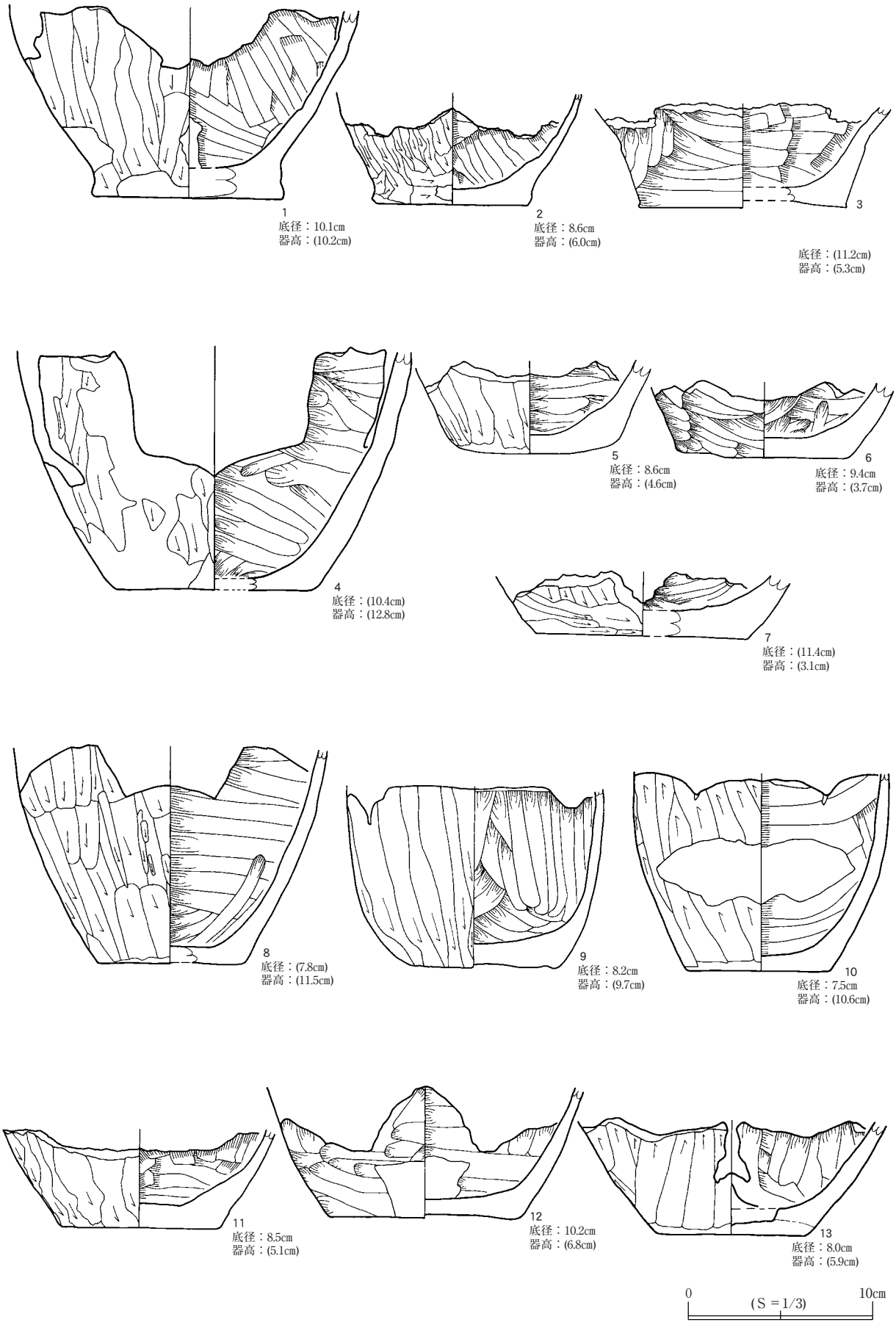


第409図　03-ＳＴ185出土遺物25

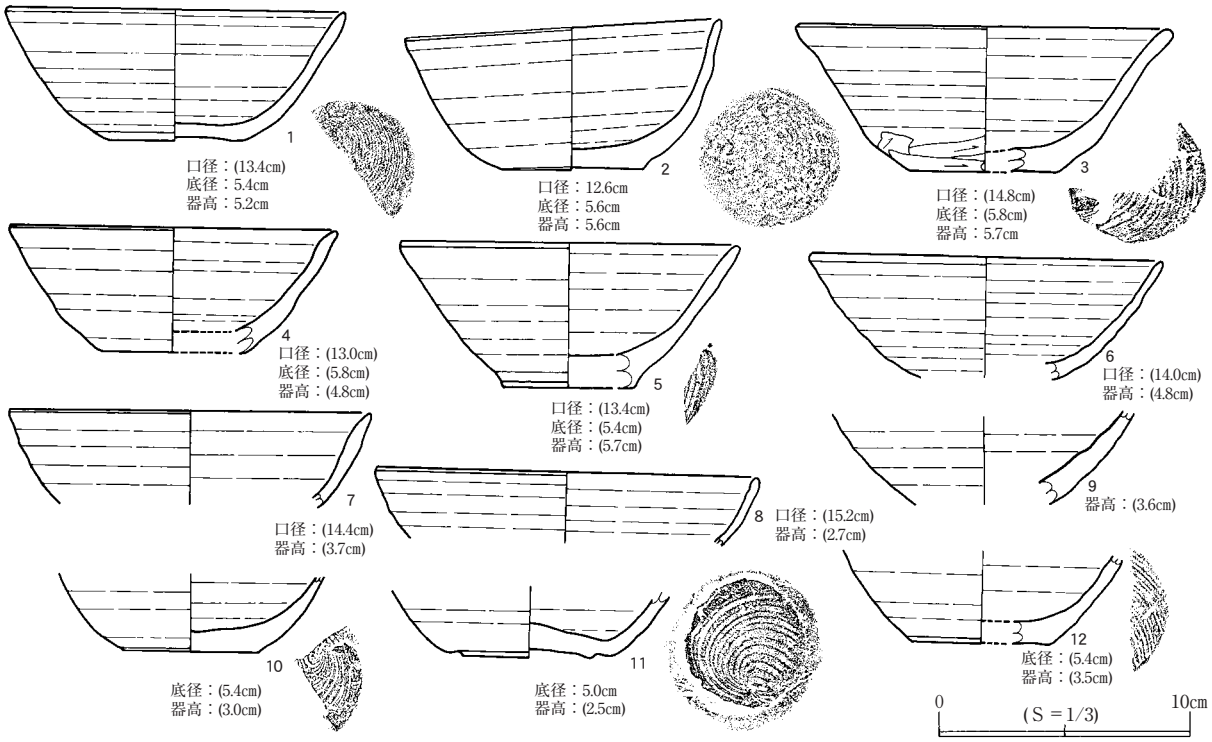
に対し、２～５は頸部のくびれが明確である。しかし、１に対して頸部は内傾から直接外反する傾向にある。３・４は口縁部上面からの押圧により外折する。７～13はさらに頸部への内傾が不明瞭で、胴部から頸部まで直立気味に立ち上がり、口縁部が外反する。７・８は外折気味で、９・10は外反、11～13はつまみ出し状にわずかに外反する。14も11～13に近い形状の口縁部破片である。外面調整は３が指の押さえ、14がユビナデのみである以外は、基本的に縦位ケズリである。内面調整は２・14が縦位ユビナデ、１・５・10が斜位ヘラナデ、９が斜位ユビナデで、他は横位のユビ・ヘラナデになる。内面調整では、頸部のくびれが明確な資料ほど縦・斜位方向の調整が多く認められる。

405図は口縁部が短く外反するか、または直立気味になる資料である。１は胴部中位が張り出して、頸部にかけて内湾し、頸部でくびれて口縁部が直立気味に外折する。２・４・５はより口縁部の外反・外折が短めの資料で、口縁部直下の屈曲点まで内傾する。３は頸部の緩いくびれから直立する。６～８は胴上部から口縁部まで内湾する器形で、口端がつまみ出し状にわずかに直立する。外面調整では、５・６が胴上部を横位ユビナデにとどめる以外は、縦位ケズリを施している。内面調整は１が縦・横位のユビナデ、５が横位ユビナデである以外は、基本的に横位のヘラナデで仕上げている。

406図～410図は土師器甕の底部である。406図は木葉痕や薦編圧痕を残す資料である。１～５が木葉痕を残すもので、１・２が底部外縁が張り出し、３～５が底部が直線的に外傾する形状である。外面調整は基本的に縦位ケズリだが、３では底部にかけて斜位から横位に調整方向を変えて、底部付近



第410図　03-ＳＴ185出土遺物26

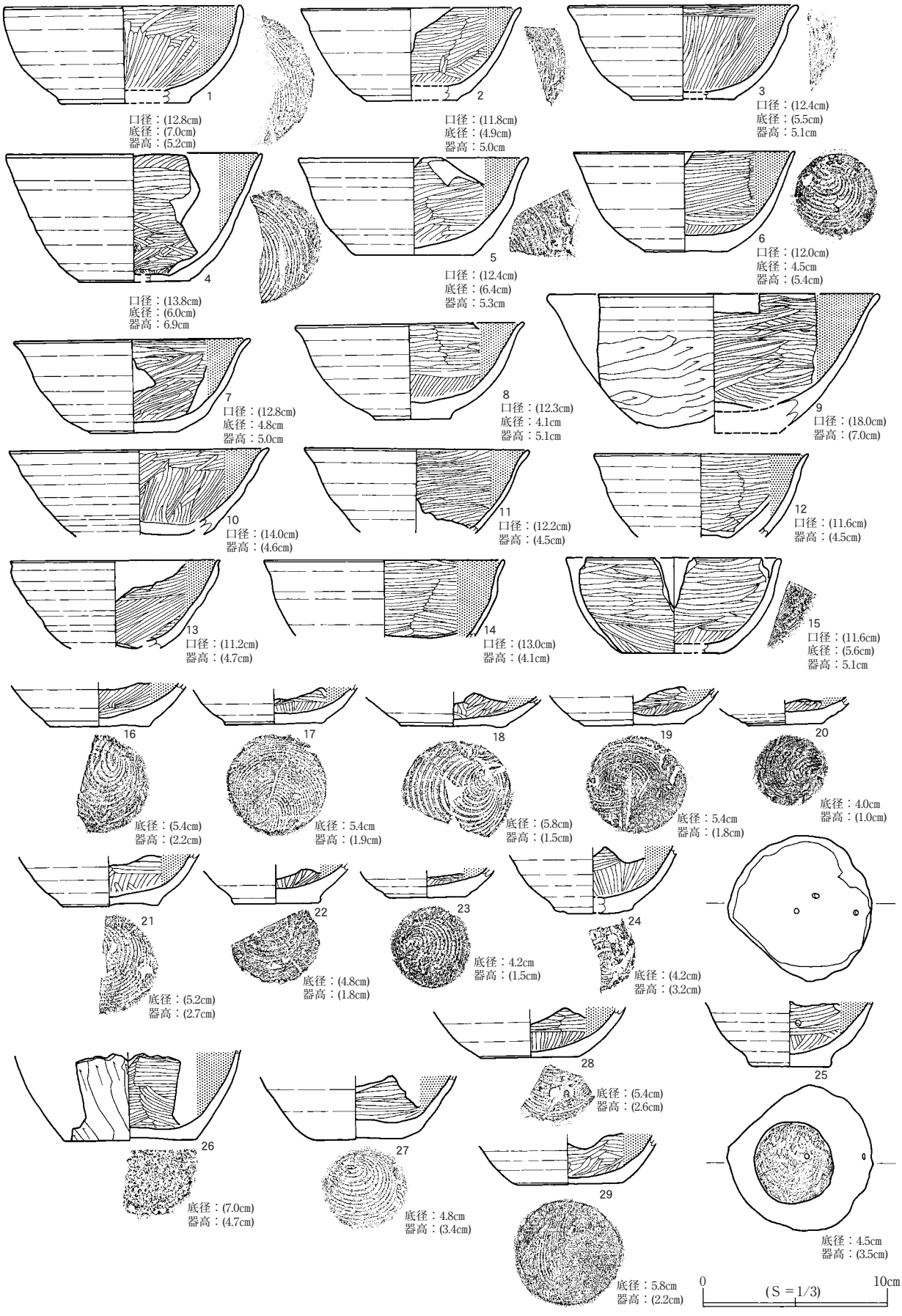


第411図　03-ＳＴ185出土遺物27

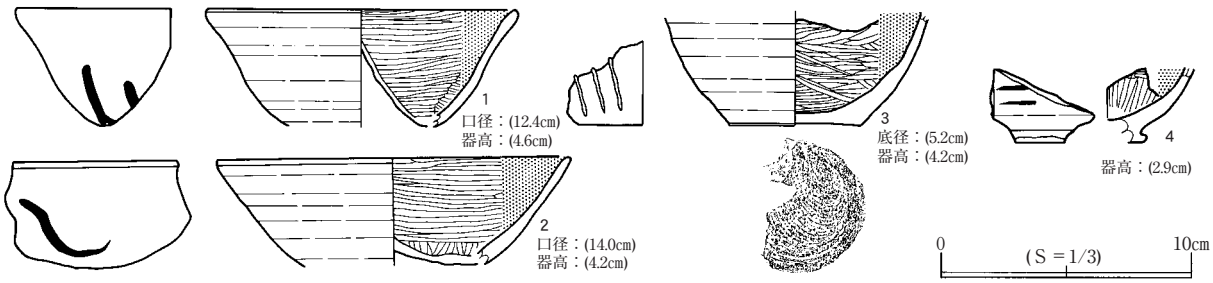
の整形を行っている。内面が縦位ユビナデ調整であり、内外面共に再調整を施す。この他の内面調整は、横位ヘラナデである。６は薦編圧痕を残すもので、この小破片１点のみ確認できた。

407図～409図は砂底である。407図は底部外縁が張り出すか、短く直立してくびれる形状のものである。１・２のように明確に張り出すものは、ケズリの開始位置が底部よりやや上である。これに比べて３は底部直上からのケズリ始めにより外面の張り出しが分かり難くなっている。また、４のように２段階に分けて、張り出しを部分的に削るものもある。５・６のように外縁の張り出しが不明瞭になるものは、上から下にむけてのケズリの場合が多く、その点では８・９なども底部形状の再調整を行ったものとみられる。408図は底部がわずかに直立するか、直線的に外傾する器形である。外面調整では縦位ケズリ、内面調整では横位ヘラナデのものが多い。また、底部付近のケズリでは、上から下に向けたものが多く、底部形状との密接な関係を窺わせる。409図も基本的には底部から直線的に外傾する形状で、１～３の外面には上から下に向けたケズリが認められる。４～６では内部底面の調整を観察した。４がヘラナデ、５・６がユビナデである。４は中央部に指の押さえを残し、周辺部から放射状にヘラナデを施す。５は破片上部から下へ向けて一方向に向けた調整が認められる。６は破片上部を起点に３方向にユビナデを施し、挟み撃ちのように曲線的に調整を施す。

410図は底面にケズリやナデによる調整を施すものである。１～３は底部外縁が張り出す形状で、４～13までは底部から直線的に外傾する形状である。砂底に比べ、外縁が張り出す形状の割合が少ない印象を受ける。それに比例してか、外面調整では上から下に向けた縦位ケズリが多い。また、内面調整では１・２・９・11・13が縦位のナデ調整で、これは砂底資料の内面調整に比べると割合が高い。以上の傾向をまとめると、底面ケズリ・ナデでは、底部形状が直線的に外傾するものが多く、内面に縦位ナデによる再調整を施す割合が高い。これに対し、砂底では底部形状で外縁が張り出すものが目立ち、内面は横位ヘラナデにより一気に調整を施すものが多い。木葉痕については、外縁形状では砂



第412図　03-ＳＴ185出土遺物28



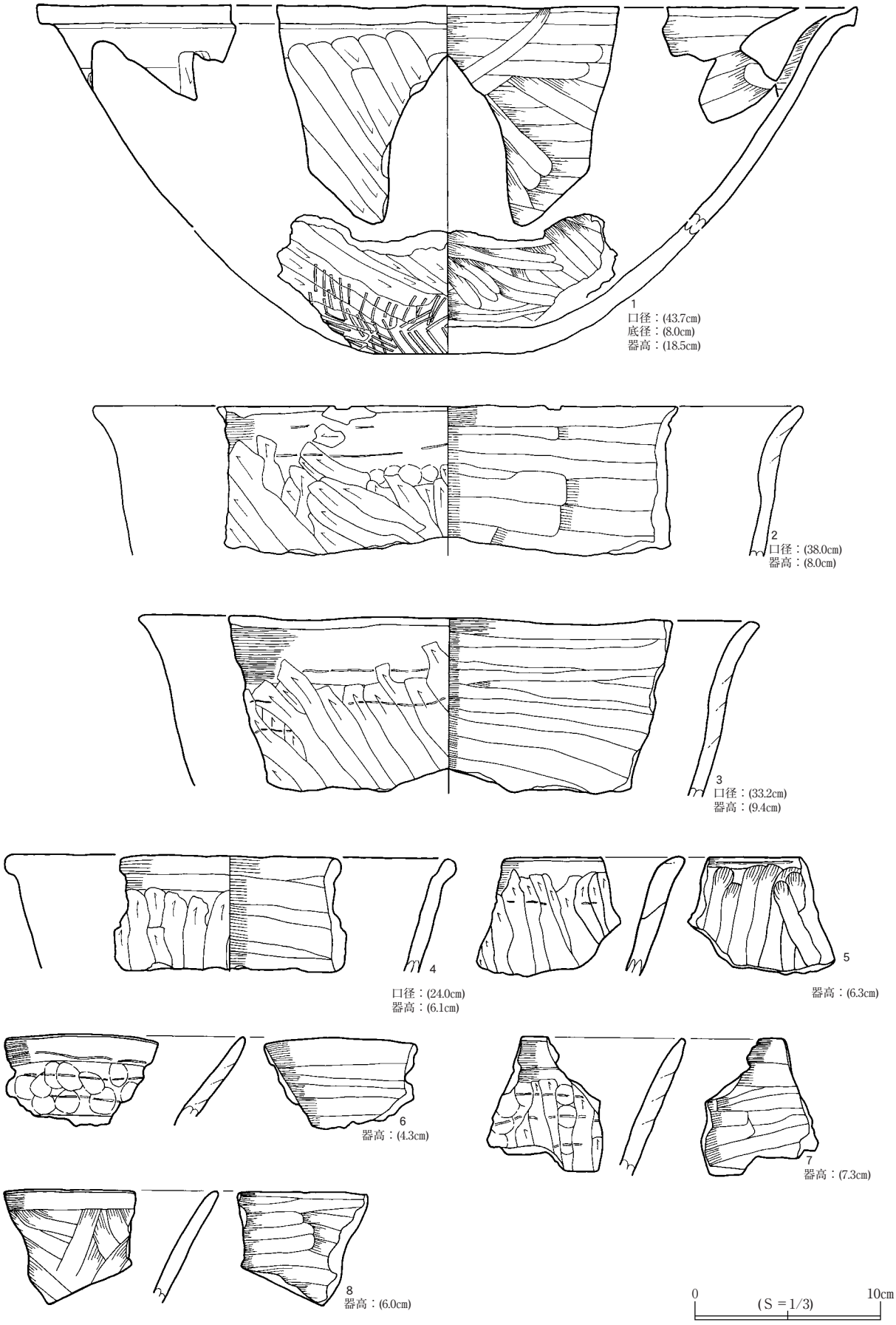
第413図　03-ＳＴ185出土遺物29

底に、内面調整ではケズリ・ナデのものに近い傾向にある。

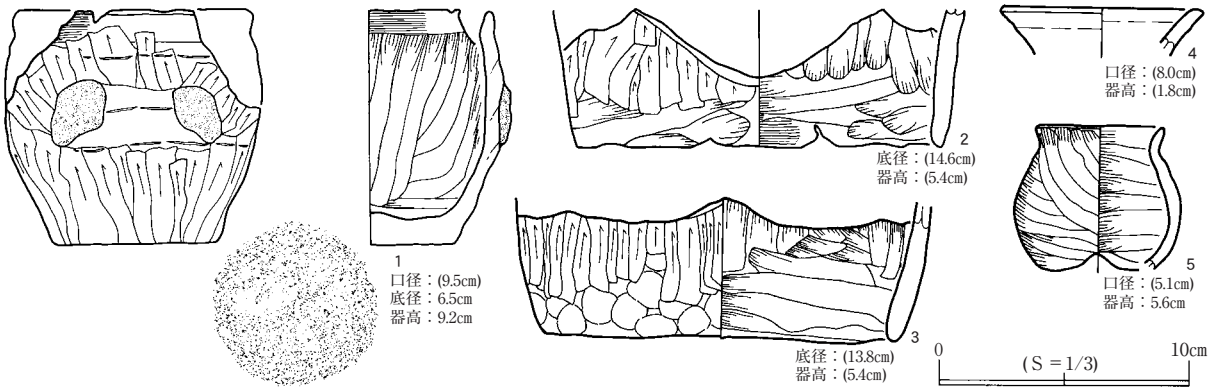
411図・412図は土師器坏で、411図がＡ類、412図がＢ類である。

411図１は約1/2が残存する資料で、底部から口縁部まで内湾気味に立ち上がる。口唇は丸みを帯びる。底部の回転糸切痕は緻密で、外面のロクロ目は胴下半部は凹凸が目立つが、上半部は比較的平滑に仕上げている。内面も平滑な仕上げであり、概して調整は丁寧である。ただ胎土に砂が目立ち、見た目を損ねている。411図２も同様な胎土や焼き上がりをもつ資料で、約1/3が残存する。突出する底部から胴下部が張り出し、直線的に外傾して立ち上がり、口縁部が弱く外反する器形である。底部の回転糸切痕は筋幅の広い粗い仕上げだが、内外面のロクロ目は平滑に仕上げている。しかし、口縁部の一端が内側に折れ曲がっており、胎土や焼成と併せればやや粗悪な作りである。411図３は約1/4が残存する資料で、底部付近でわずかにくびれ、口縁部にむけて外反して立ち上がる器形である。全体に器壁が厚く、口縁部がやや肥厚する特徴をもつ。底部の回転糸切痕は粗雑だが、外面は底部付近にケズリを、胴部には工具による平滑なナデを施している。内面も基本的には平滑な仕上げである。411図５は約1/4が残存する資料で、底部が突出し、胴下部でくびれて口縁部まで直線的に外傾する器形である。内外面共にロクロ目の凹凸を残さないが、工具ではなく指による調整である。これらを比較すると411図１・２が比較的粗雑な、411図３・５が比較的良好な作りといえる。411図７は前者に、411図４は後者に近い内容をもつが、それに比べて６・８は器壁が薄く、８は内湾気味に立ち上がる点で前２者との違いが際立つ。411図10～12は底部資料で、10は底部がわずかに突出し、11は２段状になり、12は底部から直線的に外傾する。411図９も、直線的に外傾して立ち上がるとみられる胴下部資料である。

412図１・３はやや広めの底径を有し、胴下部が膨らむ器形で、１が口縁部まで内湾気味になり、３が口縁部が外反する器形である。いずれも外面のロクロ調整は平滑に仕上げており、内面の胴上半部まで放射状ミガキが延びる点で共通する。412図２・６～８は、底径が比較的狭くやや突出し、胴下半部が丸みを帯びて内湾気味に立ち上がり、口縁部が外反する器形である。器壁は薄く、口唇が丸みを帯びる形状になる。いずれも外面のロクロ目は平滑に整えており、内面のミガキも底部は放射状に、胴部から口縁部には横位に施している。これらに比べ、412図４・５は比較的底径が広い形状である。５は回転糸切痕が緻密で、外面のロクロ目も間隔が狭く、内面のミガキも横位平行で比較的丁寧に仕上げている。４は器高が比較的高く、やや大型の印象を受ける。外面のロクロナデ、内面のミガキ共に緻密であるが、内面はロクロナデの起伏を残している。９は明らかに大型の資料で、埦とも捉えられる。外面胴下部には横位のケズリ調整を施しており、異質な印象を受ける。412図10・12～14は破片から復元実測したものであるが、10・12・14は２に、13は３にそれぞれ器形が類似する。内



第414図　03-ＳＴ185出土遺物30



第415図　03-ＳＴ185出土遺物31

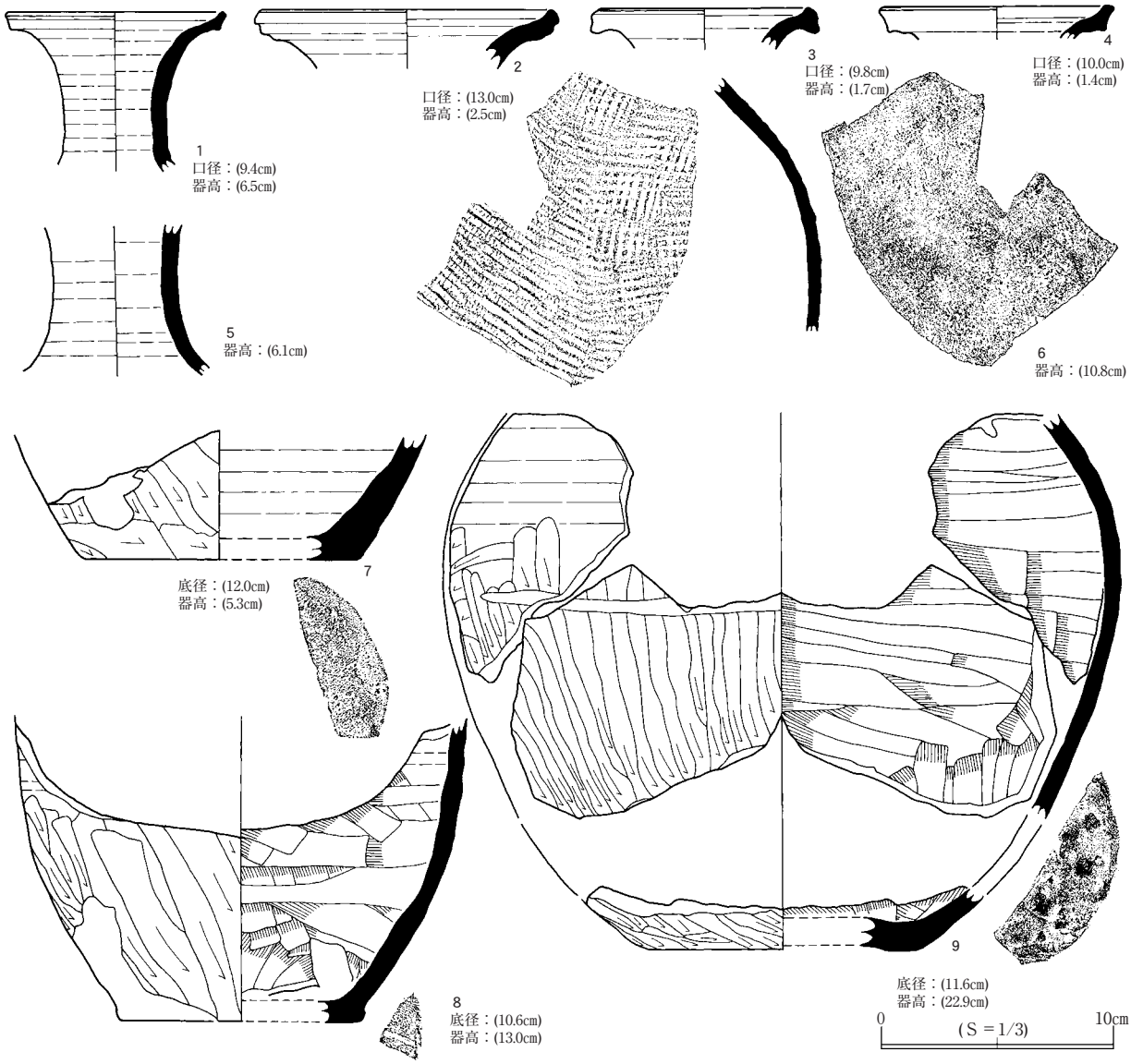
面のミガキでは、10が口縁部付近まで縦方向のミガキをとどめ、13でも同じ高さまで斜位のミガキが認められる。412図15は、内面黒色処理の痕跡が明確でない資料である。器形は３に近く、内外面共に、底部付近に縦方向、胴部中位から上部にかけては横方向にミガキを施している。

412図16～29は底部である。基本的に回転糸切痕をどとめるが、26は砂底である。26は外面に縦位ケズリを施し、胴下部からの立ち上がり角度も急であり、坏でなく埦や鉢になる可能性もある。底部形状では、16～25までは底部が突出し、27～29は底部から直線的に外傾する形状である。なお、25は器面の内外を貫く孔を穿っている。

413図は墨書または刻書で、いずれも坏Ｂ類の外面に施している。１・２・４は墨書で、１は縦方向に２条と、左の１条から右下がりの線がわずかに確認される。２は右払いの部分が認められる。４は横に短く２条の墨書きがある。３は縦方向に３条の刻みを施している。全て破片資料のため、書いてある内容は不明である。

414図は土師器鍋である。１は全体形状を窺える資料で、底面から緩やかな曲線で立ち上がり、頸部でくびれて口縁部が外反し、口端をつまみ出して直立させ、口縁部側面には垂直の面を形成する。底部付近にはタタキ目を残し、外面口縁部付近にはロクロ目様の平行なナデをとどめるが、外面は斜位のケズリ、内面は横・斜位のユビナデにより再調整を施している。２・３は胴部から直線的に外傾して口縁部が外反する器形である。２が口唇を丸く収め、３が口唇を面取りしている。どちらも外面は斜位ケズリ、内面は横位ヘラナデ調整である。４は胴部から直線的に外傾して、口縁部が短く外折する器形で、比較的小型の鍋とみられる。外面は縦位ケズリ、内面は横位ヘラナデ調整である。５～８は口縁部破片で、口唇が５は肥厚し、６～８は先細りの形状になる。外面調整は５・７が縦位ケズリ、６が指の押さえ、８が縦・斜位ユビナデが認められ、内面調整は５が縦位、８が横位のユビナデ、６・７が横位ヘラナデ調整である。

415図は、土師器甕・坏・鍋以外の器種を掲載した。１は把手付土器だが、口縁部まで内湾する小型の甕に、後付で横位Ｕ字状の把手を付けている。把手部分は欠損しているが、２か所の割れ口が明瞭に残っている。２・３は甑とみられる。いずれも外面縦位ケズリ、内面縦位ユビナデ調整である。開口する底部末端は、いずれも丸く収めてある。４は壺の口縁部破片とみられる。土師器の壺は全体形状の分かる資料が出土していないため、本来遺跡内に存在したかに疑問もあるが、推定径が極めて狭いため、壺と判断した。口縁部のみの破片であり、内外面にロクロ目様の横ナデのみ確認できる。表面は極めて滑らかに仕上げてあり、精巧な作りであることが窺える。５は小型土器で、他の遺構で

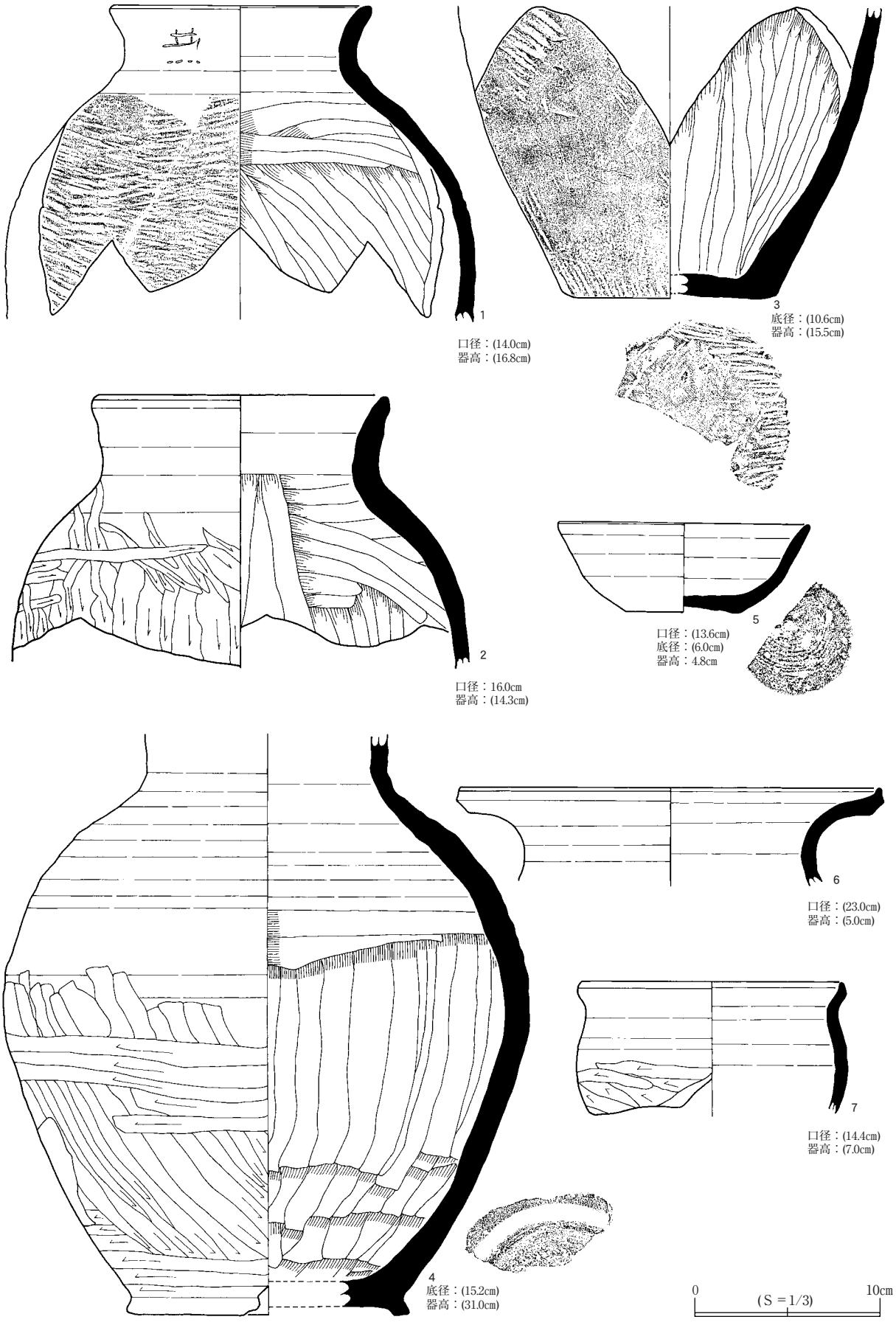


第416図　03-ＳＴ185出土遺物32

は土製品扱いで掲載しているが、スペースの都合上ここに掲載した。頸部がすぼまり、口縁部が短く外反する形状は広口壺に見える。内外面共にユビナデ調整のみ確認できる。

416図・417図は須恵器である。416図には壺と甕を掲載した。全体形を窺える資料はなく、ほとんどが破片である。１～４は口縁部破片で、頸部からの立ち上がりが分かる１は、直立する頸部から口縁部が強く外反して開き、口端が内湾気味に直立する。２～３も口端形成は基本的には同じで、１・４が口縁部側面に垂直に近い面を、２は２段の面を、３は口縁部側面と口唇に斜位の面をそれぞれ形成する。５は頸部、６は甕の肩部から胴部にかけての資料である。７～９は底部を含む胴部資料である。９は肩部までが窺え、底部から内湾気味に立ちあがり、肩部が最も張り出して、曲線的に頸部へと内湾する。外面は胴部中位から縦位のケズリ、内面は底部付近に縦位、胴部中位以上に横位ヘラナデによる再調整を施す。７・８も背面に縦位ケズリ再調整が認められる。７は内面がロクロ目様の均整のとれた横ナデで仕上げるが、８は縦・横・斜位に複雑にヘラナデを施して再調整している。なお底面は、７～９全てケズリ調整を施すが、７は底面中央部にナデの範囲を残す。

417図には広口壺・坏・甕を掲載した。１・２は広口壺で、いずれも器壁が厚く粗製の雰囲気をも



第417図　03-ＳＴ185出土遺物33

つ資料である。１と３は外面にタタキ目を残すもので、同一個体の可能性が高い。１は口縁部から胴上部までが残存しており、肩部は丸く、頸部にかけて曲線的に内湾し、口縁部が弱く外反する器形である。外面にタタキ目を残し、内面には縦・横位のユビ・ヘラナデによる再調整を施す。なお、頸部にはヘラ書きにより、「共」に似た線刻を施している。３も内外面調整は同じで、底部から直線的に外傾して立ち上がり、胴部中位にかけて内湾気味に曲線化する。２は口縁部から肩部にかけて残存し、肩部でやや直線的にくびれて、頸部で直立し、口縁部がわずかに外反する器形である。外面は肩部以下に縦・横・斜位のケズリを、内面には縦・横・斜位のユビナデ再調整を施す。４は頸部から底部までが残存する壺とみられる。底部は台を付けている。台上部から曲線的に立ち上がって球胴状になり、頸部が直立して立ち上がる。外面は斜位にケズリを施した後、底部付近と胴部中位に横位にケズリを施す。内面は肩部付近まで縦位に、その上部に横位２段にヘラナデによる再調整を施す。肩部以上は内外面共にロクロ目様の平行なナデを残す。底面には回転糸切痕が認められる。

５は坏で、胴下部まで曲線的に立ち上がり、口縁部にかけて直線的に外傾する器形である。内外面ともにロクロ目を残す。６は甕の口縁部で、頸部から強く外反して口縁部が受け口状になる。口端を直立気味につまみ出すことで、口縁部側面には２段の面を形成する。７は小型の甕で、胴部中位が張り出し、頸部で弱くくびれて口縁部へ向けて外反し、口端が内湾する器形である。胴部外面には横位ケズリ再調整を施す。

本捨て場出土の須恵器は色調で大きく異なる。416図や417図６・７は褐灰色系色調、417図１～３・５は灰白色系色調、417図４は外面が赤紫色に発色している。416図や417図６・７は断面で見た場合内部に還元焔状の赤い色調を挟んでおり、416図１～３・５の焼成具合とは一線を画する。

05-ＳＴ82(付図・第418図～420図)

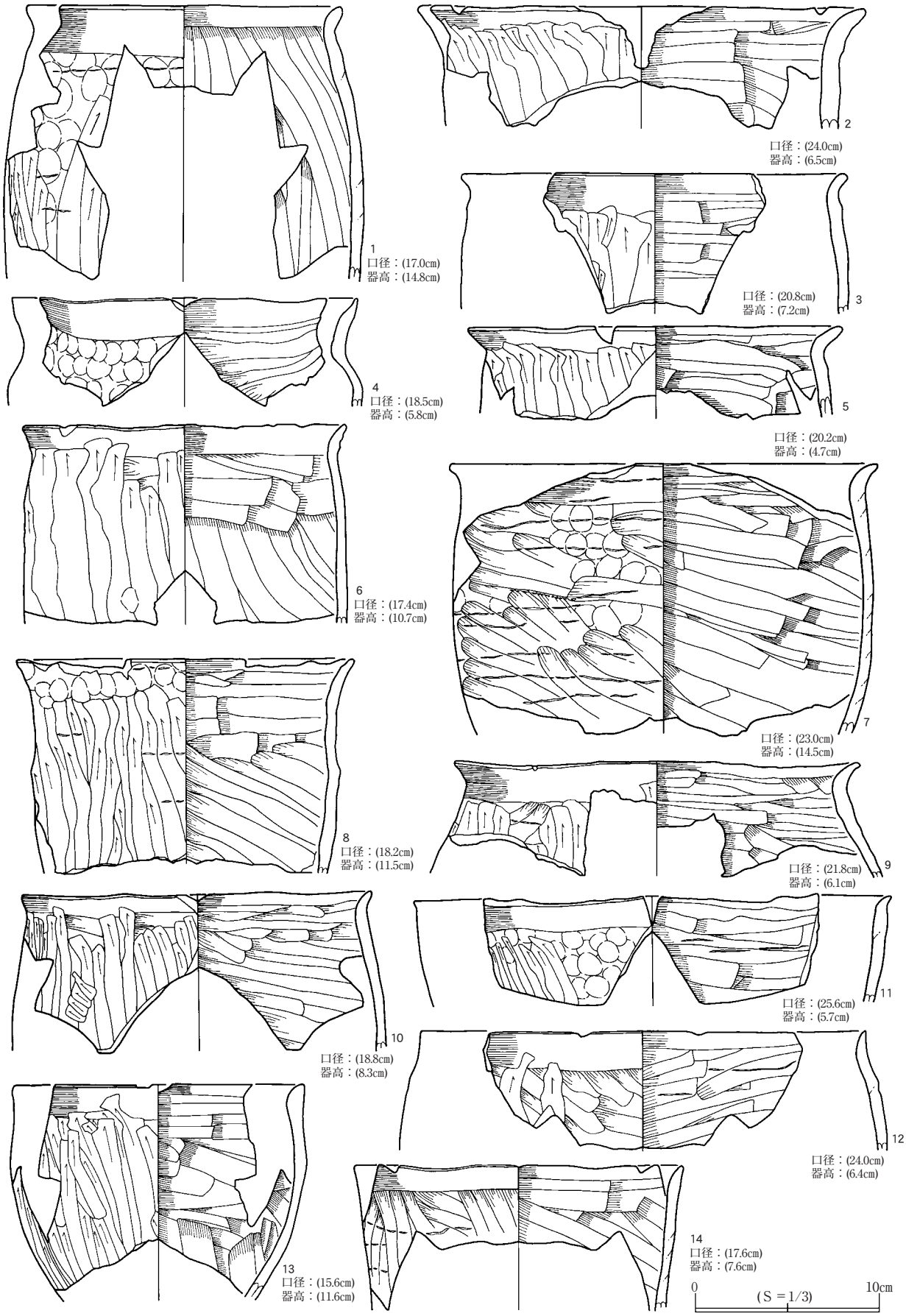
遺　構　05-ＳＩ06・13上部の、概ねＬＬ60～64とＬＯ60・61の間に位置する。立地点の地形は丘陵西側の山麓部で、緩やかに西側に傾斜する。遺物包含層は基本的に１層だが、上部は後世の撹乱を受けており、近世から現代の遺物が混ざる状態である。下層は平安時代以前の遺物のみを含み、その一連の土が05-ＳＩ13上部にも堆積する。

本遺構は丘陵西側の山麓部を利用した廃棄場である。対象範囲には05-ＳＩ06・13、05-ＳＤ38があるが、本遺構の遺物包含層がこれらの上部にのることから、居住域から廃棄域へと変更したことが分かる。

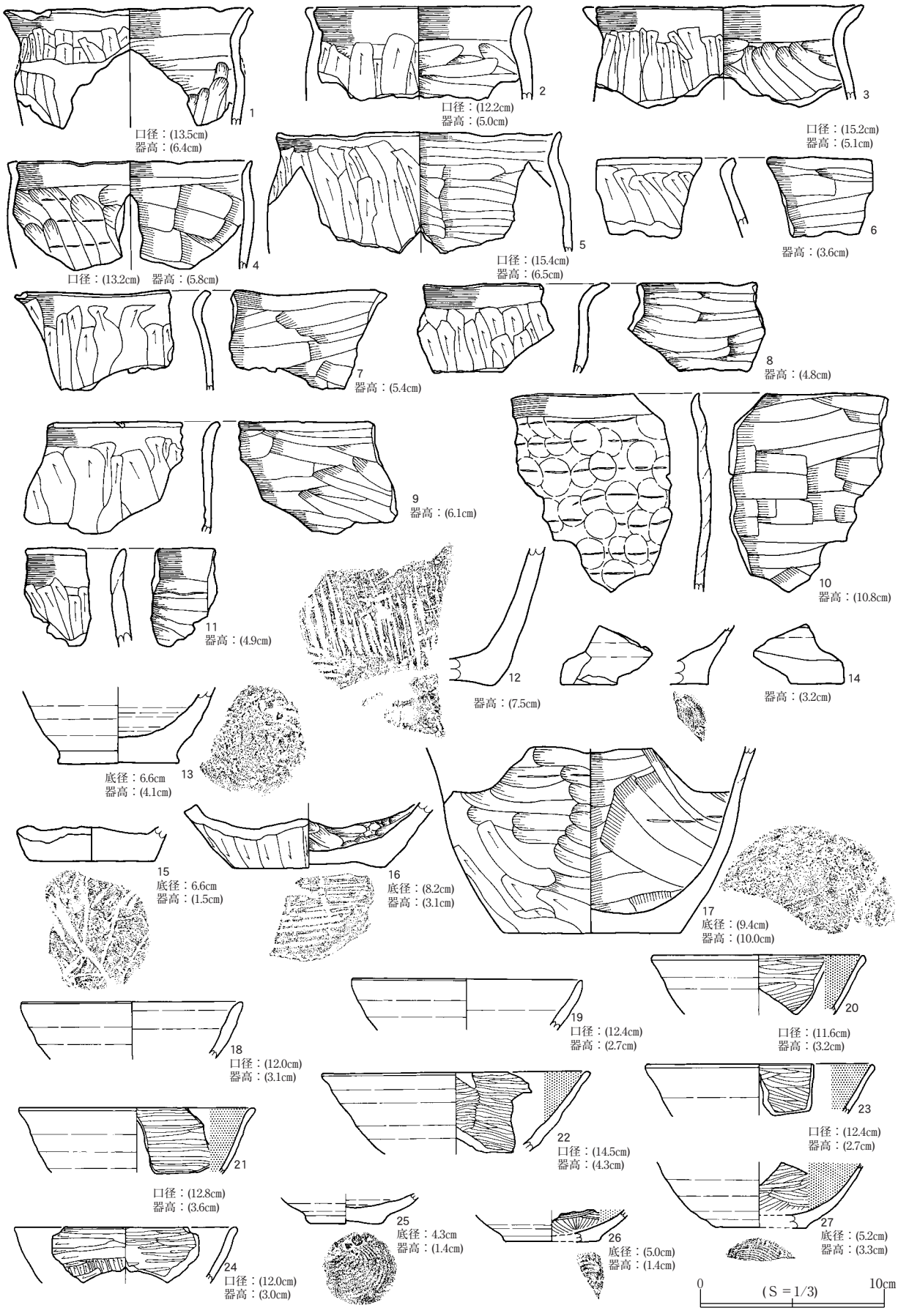
遺　物(第418～420図)　土師器甕・坏・鍋・壺、須恵器壺・甕が出土した。土師器甕は口縁部が250点、底部が97点出土しており、そのうち比較的大型の破片を口縁部資料25点、底部資料６点図示した。なお図示しなかったものを含めた甕の口縁部分類別数量はＡ類(５点)、Ｂ類(６点)、Ｃ類(139点)、Ｄ類(41点)、分類不能(59点)で、底部分類別数量は砂底(73点)、木葉痕(１点)、薦編圧痕(１点)、ナデ(１点)、ケズリ(10点)、タタキ(１点)、回転糸切(５点)、分類不能(５点)の内訳になる。

03-ＳＴ185と比較すると、本遺構の場合口縁部Ａ・Ｂ類と木葉痕・薦編圧痕・タタキの出土量が極端に少ない。廃棄場としての利用に時期差があるとみられる。

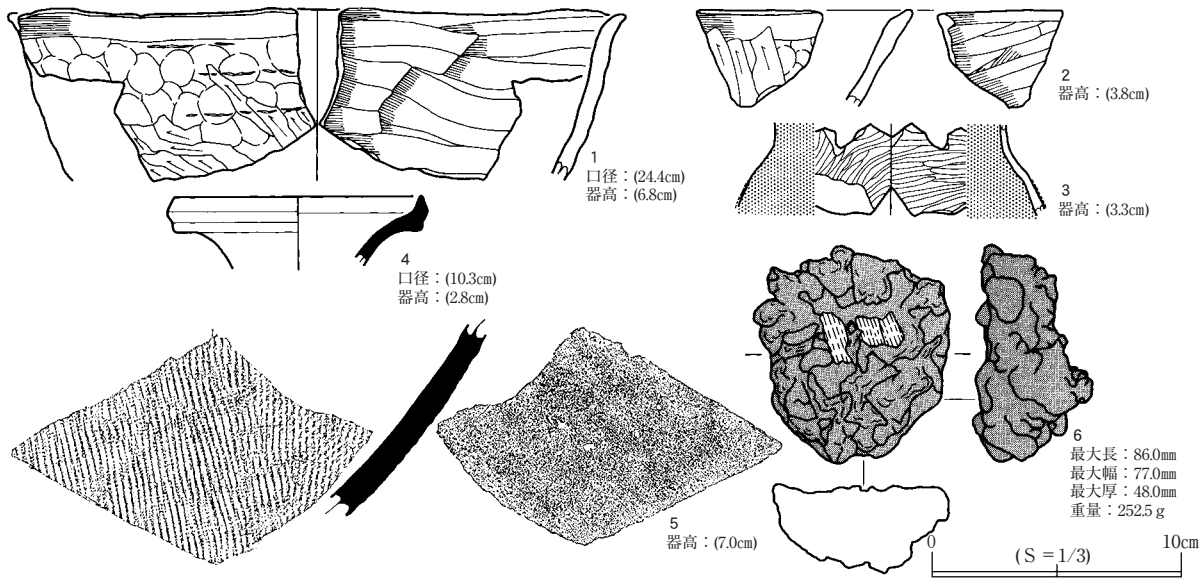
418図は中・大型の土師器甕で復元実測したものである。１・３・７は、胴上部から緩やかに内傾もしくは直立気味に立ち上がり、頸部でくびれて口縁部が短く外反する器形である。口唇を丸く収め



第418図　05-ＳＴ82出土遺物１



第419図　05-ＳＴ82出土遺物２



第420図　05-ＳＴ82出土遺物３

る特徴がある。２は直立気味に立ち上がり、口縁部が外反する器形で比較的器壁が厚い。４は胴上部が張り出して頸部で屈曲し、口縁部が直立気味に立ち上がる。口唇はつまみ出し状に先細りになる。５は胴上部が直立気味に立ち上がり、頸部で屈曲し、口縁部が外折する。６・８は胴部から直立気味に立ち上がり、頸部の屈曲が少なく、口縁部が外反する。９は胴部から強く内傾して頸部で屈曲し、口縁部が外反する。10と12は胴上部から緩く内傾して頸部でわずかにくびれ、口縁部が直立気味に短く外反する。11は胴部から直線的に外傾して、口縁部でわずかにくびれて外反する。６・８～12は口縁部が先細りになる。外面調整は、１・４・７・11が胴上部に指の押さえを残し、７は全面横位ユビナデであるのを除いて、ほとんど縦位ケズリである。内面調整は、１が縦位ヘラナデ、６が胴下部縦位ヘラナデ、８が胴下部斜位ユビナデである以外は、全て横位のナデのみ確認できる。13・14は口縁部が直立または外反する器形で、13は胴部から直線的に外傾し、14は胴上部まで内湾して口縁部が直立する。14は口縁部が肥厚する。

419図１～５は比較的小型の土師器甕である。１は頸部でくびれて口縁部が外折し、口唇は面取りする。２は胴上部が内湾して頸部でくびれ、口縁部が短く外反する。器壁が比較的厚い。３は胴上部から内傾して頸部でくびれ、口縁部が長めに外反する。４・５は口縁部が直立気味に立ち上がる。４は胴上部で張り出し、頸部へ内傾する。５は頸部のくびれが弱い。外面調整は１～3・5が縦位ケズリ、４が縦位ユビナデである。内面調整は２・３が横位ユビナデ、４・５は横・斜位ヘラナデで、１の胴下部には縦位ユビナデが認められる。

419図６～11は土師器甕の口縁部破片で、６～８が外反、９～11が直立気味の器形である。外面調整は、10が指の押さえである以外は、縦位ケズリである。内面調整は６・７・９・10が横位ヘラナデ、８・11は横位ユビナデである。

419図12～17は土師器甕の底部である。12はタタキ目を残すもので、底部から直線的に外傾する器形である。13・14はロクロ目を残すもので、底面には回転糸切痕を残している。共に底部外縁がやや張り出す形状である。15は木葉痕を、16は薦編圧痕をとどめるもので、17は砂底である。いずれも底部から直線的に外傾する形状である。

419図18～27は土師器坏で、18・19・25がＡ類、20～23・26・27がＢ類、24はＤ類である。18・19はいずれも口縁部破片で、18は直線的に外傾し、19はやや内湾気味に立ち上がる。25は底部が突出して、胴下部にくびれを有する。20～23も口縁部破片で、いずれも胴下部から直線的に外傾する器形で、20・21・23が口縁部で弱く外反し、22は口縁部まで直線的に外傾する形状である。内面のミガキは横方向に施すものが多い。26・27はやや底部が突出する形状で、胴下部に短いくびれがある。内面のミガキは底部付近で放射状に、胴部は横位に施している。24は外面に縦・横位のケズリによる調整を残し、内面は横位のミガキで仕上げる。口縁部が弱く外反する器形である。

420図１・２は土師器鍋の口縁部破片で、１は胴部が曲線的に立ち上がり、口縁部でわずかに外反する器形、２は口縁部まで直線的に外傾する器形である。どちらも外面は縦位ケズリ、内面は横位ヘラナデ調整である。420図３は土師器壺とみられる破片で、おそらく頸部付近に相当すると考えられる。内外面にミガキと黒色処理が認められる。

420図４・５は須恵器である。４は壺の口縁部で、頸部から口縁部にかけて外反し、口端が直立する器形で、口縁部側面に２段の面を形成する。直立部が比較的長めである。５は甕の胴部破片で、外面にタタキの痕跡が認められる。

420図６は小型の椀形滓で、上面には木炭の痕跡が認められる。

05-ＳＴ83(付図・第421図、図版162)

遺　構　05-ＳＳ19・65上部の、概ねＬＨ51～54とＬＪ50～54の間に位置する。立地点の地形は、丘陵南側の山麓部からさらに南東側へ下る斜面である。遺物包含層は基本的に１層で、05-ＳＳ19・65上部作業場の凹みを埋め立てるように遺物包含層が位置する。

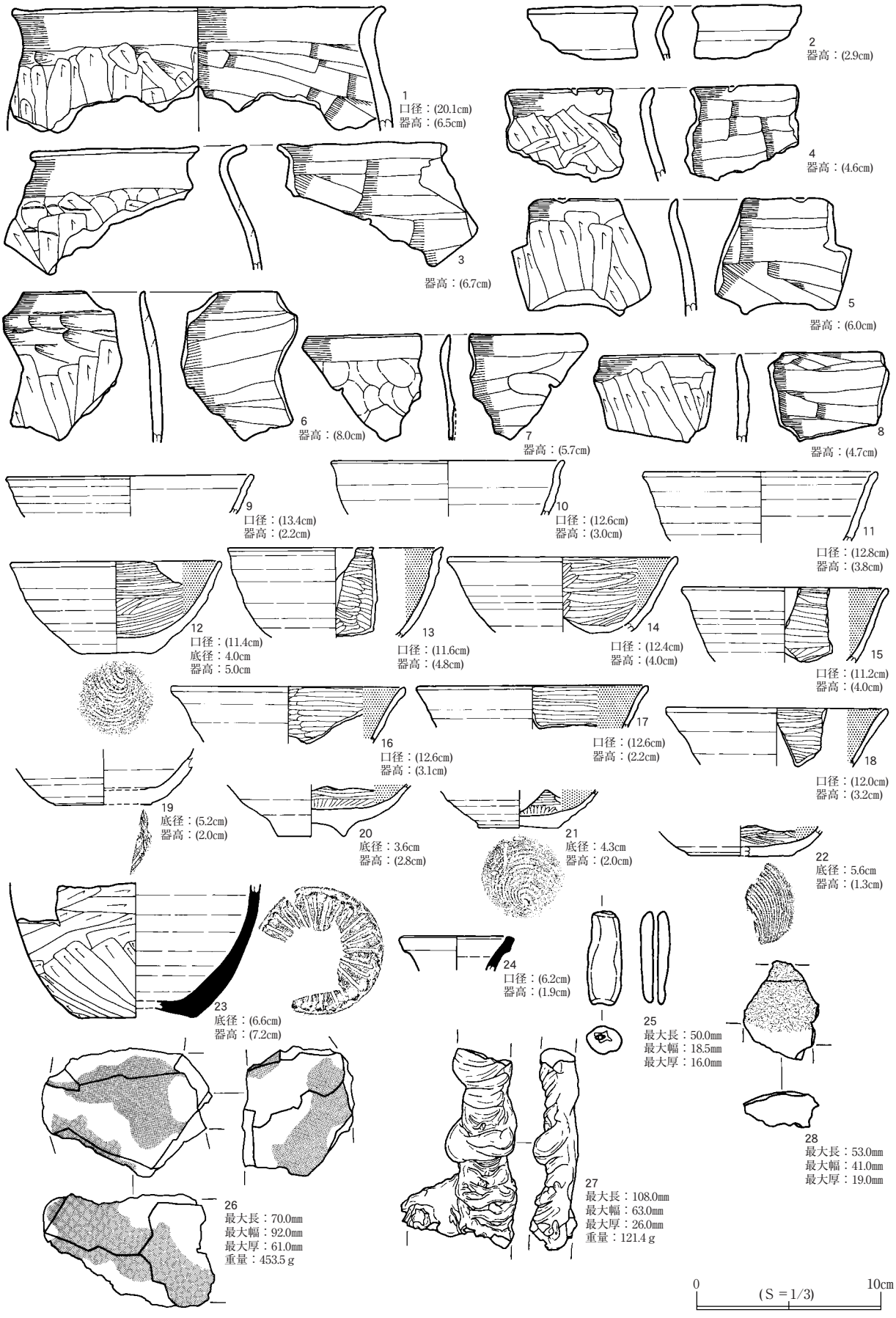
本遺構は05-ＳＳ19・65上部作業場を利用した廃棄場である。この地点が製鉄作業場から廃棄場へと変更したことが分かる。

遺　物(第421図)　土師器甕・坏、須恵器壺、土製品が出土した。土師器甕は口縁部が56点、底部が23点出土しており、そのうち比較的大型の口縁部資料８点を図示した。底部資料はいずれも小片のため図示しなかった。なお図示しなかったものを含めた甕の口縁部分類別数量はＡ類(３点)、Ｂ類(２点)、Ｃ類(13点)、Ｄ類(３点)、その他(２点)、分類不能(３点)で、底部分類別数量は砂底(11点)、木葉痕(１点)、薦編圧痕(１点)、ケズリ(10点)の内訳になる。

05-ＳＴ82の割合に一致する傾向があり、03-ＳＴ185とは、廃棄場としての利用に時期差が存在すると考えられる。

421図１～８は土師器甕でも、比較的中・大型のものと考えられる。１は復元実測した資料で、胴部から内傾して頸部でくびれ、口縁部に向けて外反し、口縁部がやや肥厚する。２はロクロ目を残すもので、頸部で段状にくびれて、口縁部に向けて内傾してから外反する器形で、口端がつまみ出し状に直立する。３は胴上部から内傾して頸部で強くくびれ、口縁部が比較的長く外反する。これに対し、４・５・７は口縁部がわずかに外反または直立する器形で、口唇は先細りになる。６・８は口縁部まで内湾する器形で、口端がわずかに直立気味に反る。２を除いた調整は、外面は６が指の押さえのみ確認できる以外は縦位ケズリで、内面はほぼ全て横位ヘラナデである。

421図９～22は土師器坏で、９～19・21がＡ類、12～18・20・22がＢ類である。９～11は口縁部破



第421図　05-ＳＴ83出土遺物

片で、いずれも口縁部がわずかに外反する器形である。19は極わずかに底部が突出するが、基本的には底部からやや曲線的に外傾する器形である。

12は約1/3が残存する資料である。底部から内湾気味に立ち上がり、口縁部がわずかに外反する器形である。底部の回転糸切痕は筋幅がやや広く、器壁外面は底部付近には、部分的にケズリによる再調整を施し、胴部から口縁部にはやや凹凸の深い曲面的なロクロ目を残す。内面は底部に放射状、胴部から口縁部に横位のミガキを施す。器壁は薄く、全体としては丁寧な仕上がりになっている。13～18は口縁部破片で、13～17は口縁部が弱く外反し、18は直線的に外傾する。13は胴下部がやや内湾気味の形状になる。内面のミガキはいずれも横位に施している。20～22は底部で、20は高台が付く。高台内部はナデによる再調整を施す。21・22は底部がわずかに突出する形状である。内面のミガキは、20・21では底部付近に放射状に、22は底部付近に井桁状に施してある。

421図23・24は須恵器壺である。24は口縁部の破片で、外傾する口縁部の端部が折り返し口縁状に肥厚して、口縁部側面に２段の面を形成する。口縁部の外反が比較的弱い資料である。23は底部を含む資料で、底面には蓮華文状のヘラ描きがある。胴部外面には縦・横位のケズリ再調整を施す。421図25は土錘で、欠損はなく、内部に貫通孔が通る。やや歪な形状である。

421図26は炉底塊の小割滓で、上面と底面は残存している。上面から小割面にかけて、疎らに鉄分の多い層が認められる。421図27は炉外流動滓で、上流部が細く下流側が広がる形状と、流れじわが密な状態を残している。421図28は羽口装着孔側の破片で、外面には鉄滓がこびりついている。

（11）　性格不明遺構

03-ＳＸ345(第422図)

遺　構　ＬＰ54、ＬＱ53・54グリッドの第Ⅵ層上面で確認した。本遺構の立地点は台地南東縁に近く、緩やかに東側へ傾斜している。重複する遺構はない。

堆積土は１層のみで、上部が削平されているため堆積過程は不明である。平面形は不整な長方形で、規模は長軸約4.0m、最大幅約1.6m、最小幅約0.9mで、検出面からの深さ約0.05m未満である。周壁は緩やかに立ち上がり、底面はほぼ平坦である。

本遺構は、長軸約4.0m、幅約0.9～1.6mの浅い掘り込みである。

遺　物　本遺構からは、遺物が出土しなかった。

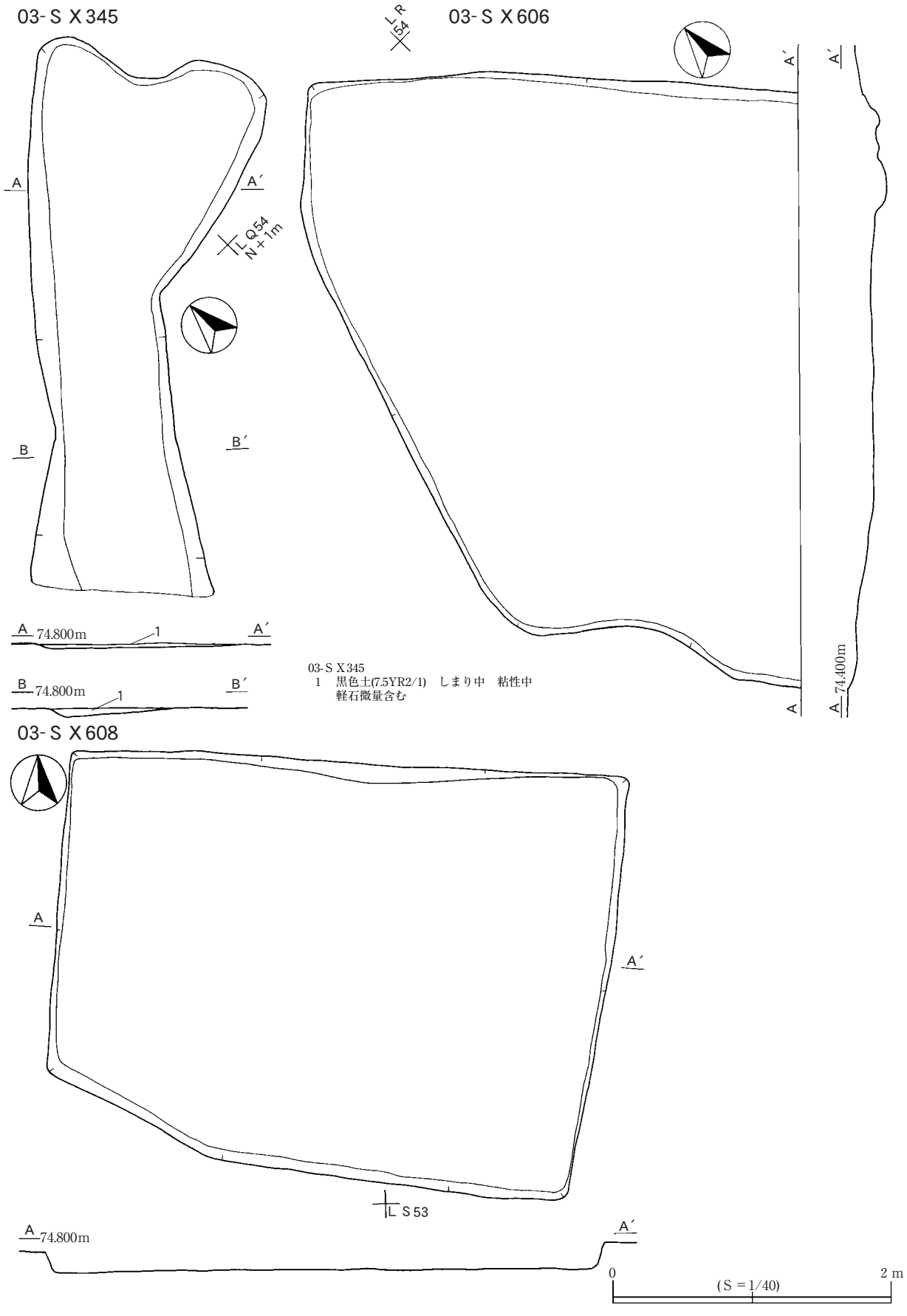
03-ＳＸ606(第422図)

遺　構　ＬＱ52・53、ＬＲ52～54グリッドの第Ⅵ層上面で確認した。本遺構の立地点は台地南東縁に近く、緩やかに東側へ傾斜している。重複する遺構はない。

堆積土は１層のみで、上部が削平されているため堆積過程は不明である。平面形は不整な台形で、規模は最大長約4.2m、最大幅約3.5m、最小幅約2.1mで、検出面からの深さ約0.1cmである。周壁は直角に近い立ち上がりで、底面はほぼ平坦だが、北東壁沿いに凹凸がみられる。

本遺構は、長軸約4.2m、幅約2.1～3.5mの浅い掘り込みである。規模からみて、竪穴住居の建設途中で放棄した残穴の可能性がある。

遺　物　本遺構からは遺物が出土しなかった。



第422図　03-S X345・606・608

03-ＳＸ608(第422図)

遺　構　ＬＲ・ＬＳ53グリッドの第Ⅳ層中位～第Ⅵ層上面で確認した。本遺構の立地点は台地南東縁に近く、緩やかに東側へ傾斜している。重複する遺構はない。

堆積土は１層のみで、上部が削平されているため堆積過程は不明である。平面形は台形で、規模は最大長約4.0m、最大幅約3.1m、最小幅約2.3mで、検出面からの深さ約0.15mである。周壁は直角に近い立ち上がりで、底面はほぼ平坦である。

本遺構は、長軸約4.0m、幅約2.3m～3.1mの浅い掘り込みである。規模からみて、竪穴住居の建設途中で放棄した残穴の可能性がある。

遺　物　本遺構からは遺物が出土しなかった。

05-ＳＸ41(第423図)

遺　構　ＬＨ・ＬＩ53・54、ＬＪ53グリッドの砂質土主体の地山面上で確認した。本遺構の立地点は丘陵部中腹斜面で、南東側へ向けた急傾斜地である。北東端部が05-ＳＩ66に連結する。

堆積土は４層に分けられ、１～３層は堆積状態から自然堆積による埋没と考えられ、４層は人為的な整地層である。平面形は４～５段の不整な形状の切り落としが連結しており、中央部底面は階段状になる。規模は斜面直交方向で約2.0m、斜面平行方向で約8.0m、斜面上位の肩から最底部までの落差約0.8mである。周壁は緩やかに立ち上がり、底面は基本的に平坦だが、中央部のみ鍋底状になる。

本遺構は、斜面部に築かれた階段状の掘り込みである。北東端は05-ＳＩ66に連結し、南西端部には、05-ＳＳ19・65製鉄遺構があることから、両者をつなぐ連絡路だった可能性が高い。

遺　物　本遺構からは遺物が出土しなかった。

05-ＳＸ47(第423図)

遺　構　ＬＢ56～58、ＬＣ55～58、ＬＤ56・57グリッドの砂質土主体の地山面上で確認した。本遺構の立地点は丘陵山麓部の緩斜面で、南東側へ緩やかに傾斜する。05-ＳＤ45が本遺構の南東端部に連結し、05-ＳＩ59と05-ＳＸ48は本遺構に隣接する。

堆積土は11層に分けられ、堆積状態から自然堆積による埋没と考えられる。平面形は２・３段の不整な形状の平場が連結する。規模は斜面直交方向で約6.0m、斜面平行方向で約10.5m、斜面上位の肩から最底部までの落差約2.0mである。周壁は緩やかに立ち上がり、底面は基本的に平坦である。

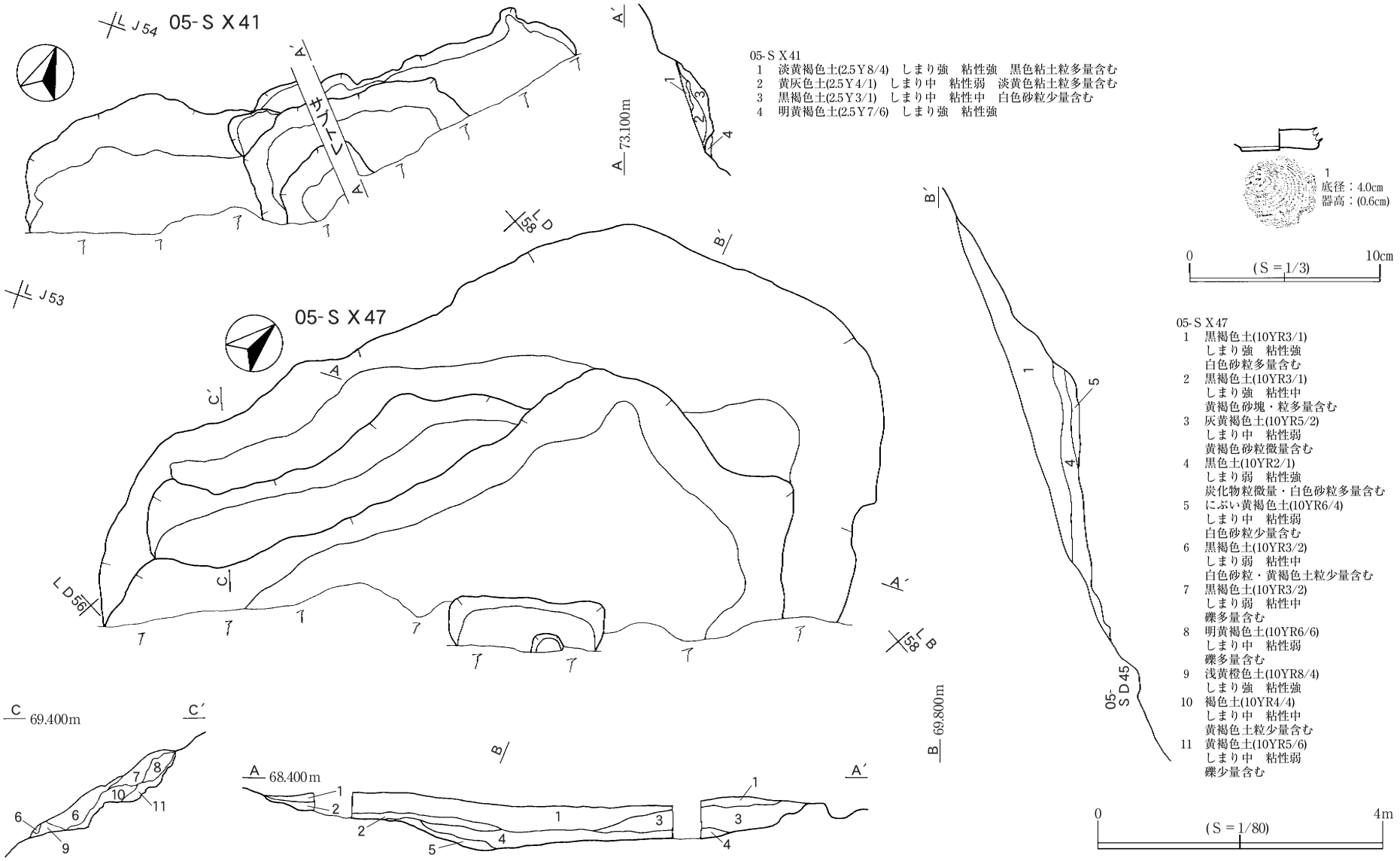
本遺構は、山麓緩斜面に築かれた階段状の平場である。中央部に比較的広い平場を有することから、何らかの作業場として利用した可能性がある。また、南西端部は階段状になり、05-ＳＳ17への連絡路だったことも想定されることから、幾つかの機能を備えた複合的施設だったと考えられる。

遺　物　土師器坏が出土したが、小破片のため掲載しなかった。

05-ＳＸ48(第424図)

遺　構　ＬＢ・ＬＣ58・59グリッドの砂質土主体の地山面上で確認した。本遺構の立地点は丘陵部下部斜面で、南東側へ向けた急傾斜地である。重複する遺構はない。

堆積土は２層に分けられ、堆積状態から自然堆積による埋没と考えられる。平面形は２段の不整な



第423図　05-S X41・47

形状の土坑が連結しており、底面は階段状になる。規模は斜面直交方向で約2.0m、斜面平行方向で約2.5m、斜面上位の肩から最底部までの落差約1.1mである。周壁は緩やかに立ち上がり、階段状になる２段の底面はほぼ平坦である。

本遺構は、斜面部に築かれた階段状の掘り込みである。下部に05-ＳＸ47があり、一連の施設になると想定される。

遺　物　本遺構からは遺物が出土しなかった。

05-ＳＸ56(第424図)

遺　構　ＫＴ・ＬＡ58グリッドの砂質土主体の地山面上で確認した。本遺構の立地点は丘陵部下部斜面で、南東側へ向けた急傾斜地である。重複する遺構はない。

堆積土は４層に分けられ、堆積状態から自然堆積による埋没と考えられる。平面形は円形や方形の切り落としが連結する不規則な形状で、規模は斜面直交方向で約2.4m、斜面平行方向で約2.3m、斜面上位の肩から最底部までの落差約1.2mである。周壁は緩やかに立ち上がり、底面は階段状になる。

本遺構は、斜面部に築かれた階段状の掘り込みである。

遺　物　本遺構からは遺物が出土しなかった。

05-ＳＸ61(第424図)

遺　構　ＬＡ68・69グリッドの砂礫層上面で確認した。本遺構の立地点は丘陵部上部斜面で、南東側へ向けた急傾斜地である。重複する遺構はないが、05-ＳＩ02と05-ＳＤ01に密接した配置である。

堆積土は３層に分けられ、１・２層は堆積状態から自然堆積による埋没と考えられ、３層は人為的な整地の可能性がある。不整な楕円形状で、規模は斜面直交方向で約1.5m、斜面平行方向で約3.7m、斜面上位の肩から最底部までの落差約0.7mである。周壁は垂直気味に立ち上がり、底面はほぼ平坦で、部分的に階段状になる。

本遺構は、斜面部に築かれた階段状の掘り込みである。05-ＳＩ02と05-ＳＤ01に密接した配置になることから、両者をつなぐステップだった可能性が高い。

遺　物　本遺構からは遺物が出土しなかった。

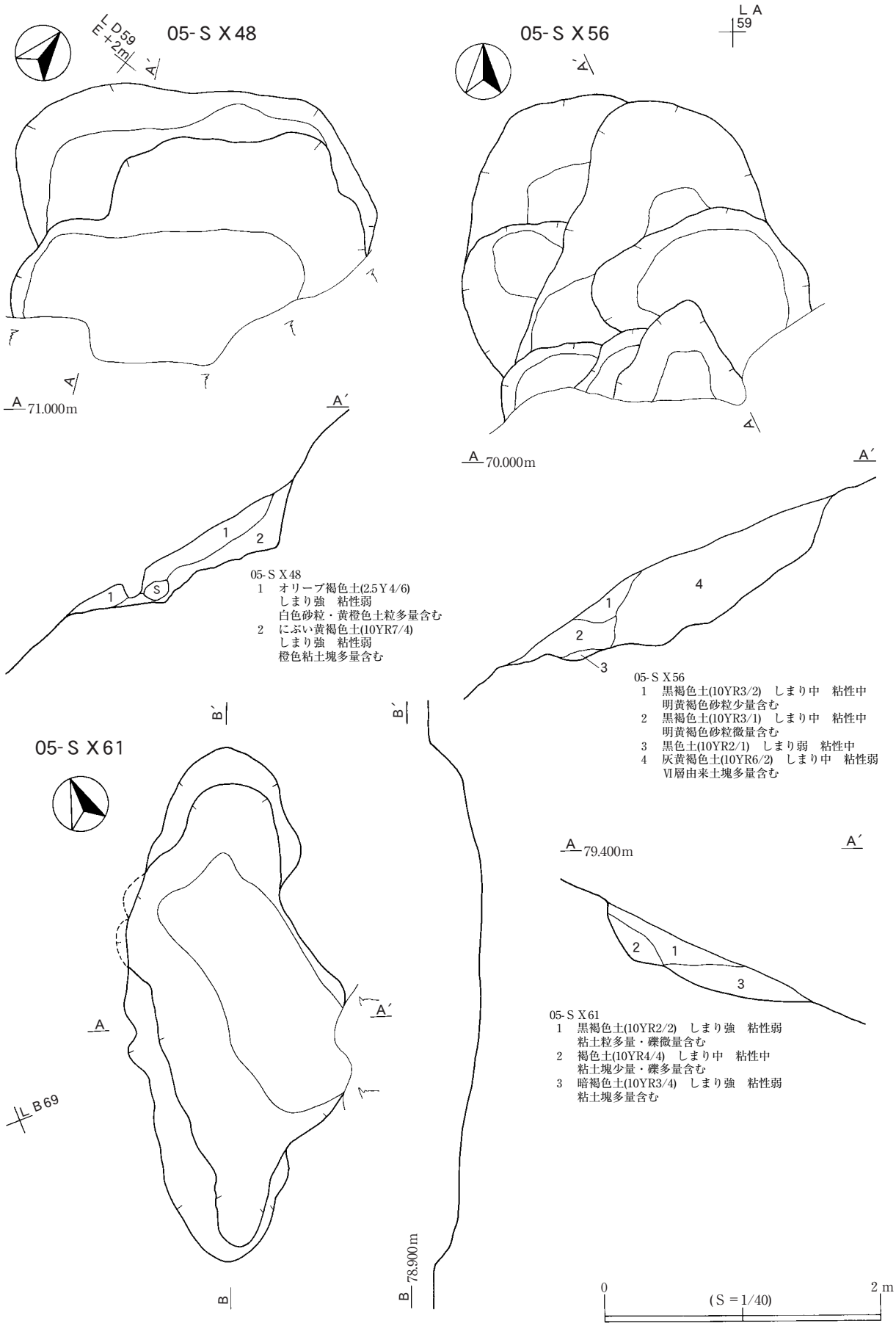
05-ＳＸ64(第425図)

遺　構　ＬＨ・ＬＩ54・55グリッドのⅥ層中位で確認した。本遺構の立地点は丘陵部中腹斜面で、南東側へ向けた急傾斜地である。重複する遺構はないが、下位に05-ＳＸ41が隣接する。

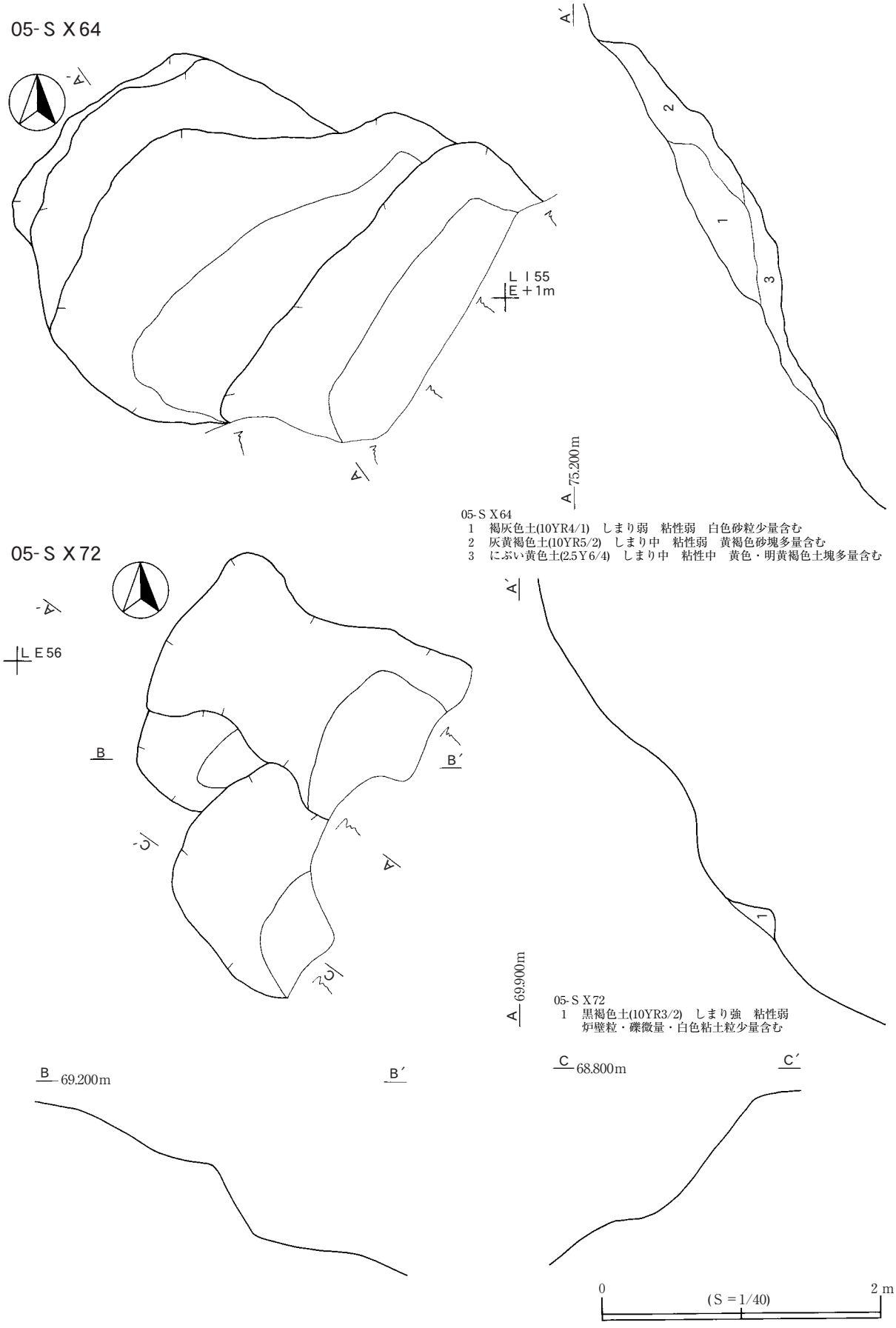
堆積土は３層に分けられ、堆積状態から自然堆積による埋没と考えられる。平面形は２段の不整な長方形状の切り落としが連結しており、底面は階段状になる。規模は斜面直交方向で約3.2m、斜面平行方向で約2.8m、斜面上位の肩から最底部までの落差約1.8mである。周壁は緩やかに立ち上がり、階段状になる２段の底面はほぼ平坦である。

本遺構は、斜面部に築かれた階段状の掘り込みである。下部に05-ＳＸ41があり、平坦部居住域と斜面部をつなぐステップだった可能性が高い。

遺　物　本遺構からは遺物が出土しなかった。



第424図　05-S X48・56・61



第425図　05-ＳＸ64・72

05-ＳＸ72(第425図)

遺　構　ＬＤ55・56グリッドの砂礫層で確認した。本遺構の立地点は丘陵部下部斜面で、南東側へ向けた急傾斜地である。重複する遺構はないが、上部に05-ＳＳ17が、下部に05-ＳＤ45が隣接する。

堆積土は１層のみ確認できた。周辺は表面をわずかに覆う砂礫層を除去すると、すぐ基盤岩に到達する場所で、本遺構の底面もほとんどが基盤岩上面である。平面形は３段の不整な方形状の切り落としが連結しており、底面は階段状になる。規模は斜面直交方向で約2.0ｍ、斜面平行方向で約2.7ｍ、斜面上位の肩から最底部までの落差約1.6ｍである。周壁は緩やかに立ち上がり、階段状になる３段の底面はほぼ平坦である。

本遺構は、斜面部に築かれた階段状の掘り込みである。上部に05-ＳＳ17が、下部に05-ＳＤ45が隣接することから、両者をつなぐステップだった可能性が高い。

遺　物　本遺構からは遺物が出土しなかった。

(12)　柱穴様ピット集中地区

今回の調査で柱穴様ピットは583基検出したが、調査段階で掘立柱建物跡や柱穴列として抜き出せた柱穴は極一部であった。これは今回の調査区が撹乱により、平安時代の柱穴を明確に確認しづらい状況であったことに起因している。ここでは主に、整理作業の過程で想定できた掘立柱建物跡や、柱穴列の存在する地区の柱穴様ピットを、柱穴様ピット集中区として図示し、その中で想定復元した遺構について若干のコメントを加えることにする。この対象地域外の柱穴様ピットについては、検討を割愛するので、遺構配置図(付図)を参照願いたい。

柱穴様ピット集中地区１(第426図)

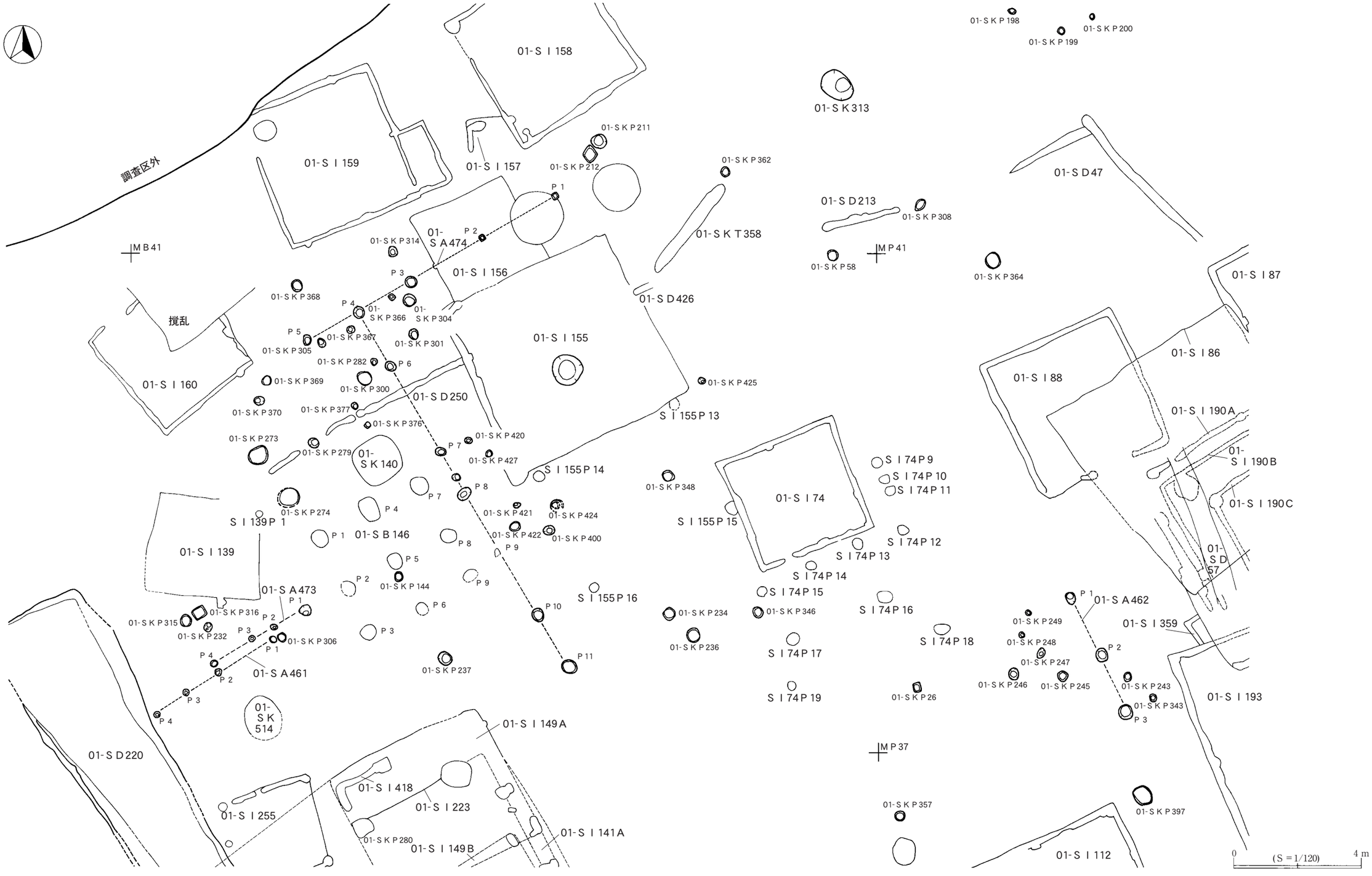
ＭＬ36を北東端、ＮＡ30を南西端とする範囲を対象とする。西部を01-ＳＤ220が、南東部の台地縁沿いを01-ＳＤ48・404・02-ＳＤ03が区画しており、北西部の01-ＳＩ149、北東の01-ＳＩ190、東部の02-ＳＩ21・52により囲まれた範囲で、今回の調査区で最も柱穴様ピットが集中する地区である。

想定復元したのは、01-ＳＢ452・454～456・460・468・472・475・478・479と、01-ＳＡ458・470・471・476・477である。01-ＳＡ470・471が北東－南西方向に延伸方向をもつ以外は、ほぼ01-ＳＤ220や01-ＳＤ48・404・02-ＳＤ03等の区画施設に軸方位が合い、これらと併存する可能性が高い。

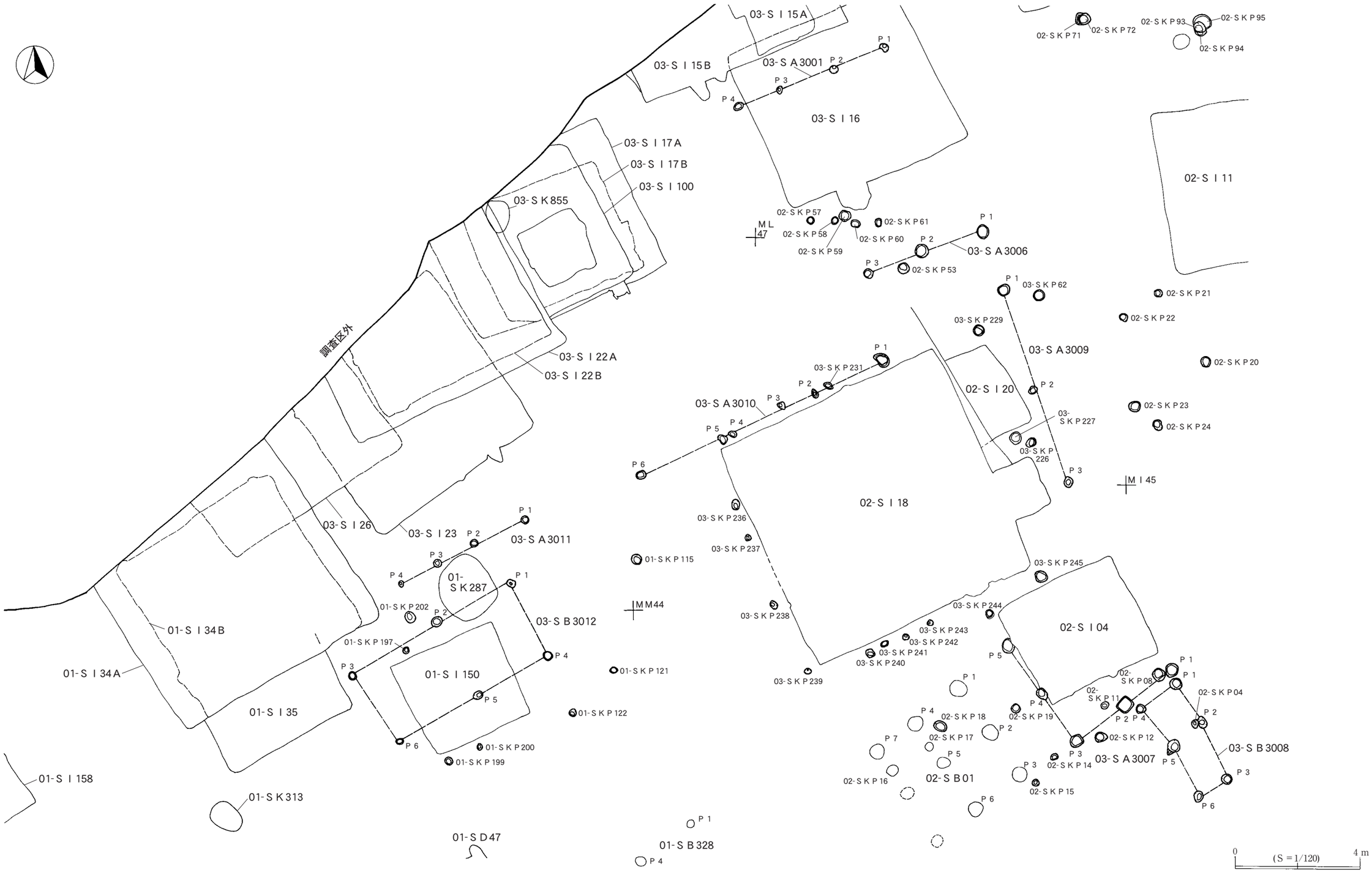
掘立柱建物跡は、１間×１間の01-ＳＢ454・468、１間×２間の01-ＳＢ452・456・460・479、１間×３間の01-ＳＢ472・478、１間×５間の01-ＳＢ455に分けられる。01-ＳＢ452・456・468・472・478・479、01-ＳＡ477は長軸を01-ＳＤ48・404・02-ＳＤ03に合わせ、01-ＳＢ455・460、01-ＳＡ458は長軸を01-ＳＤ220に合わせる。配置からみて、01-ＳＢ455・460・468・478と、01-ＳＢ452・456・472がそれぞれ伴いそうである。仮にこれらをＡ群とＢ群として、その他遺構の組み合わせをみると、01-ＳＢ454、01-ＳＡ471はＡ群に、01-ＳＡ458・477はＢ群に伴うと考えられる。

この遺構群の中でも特徴的なのが01-ＳＢ456である。集落南東縁の区画施設である01-ＳＤ48・404・02-ＳＤ03に南東辺を一致させる配置で、柱間の間隔が狭く、柱穴の掘形が広くて深い。これらから想像されるのは櫓状施設である。柱穴掘形の面ではやや深さが足りない感じはあるが、01-ＳＢ479もその可能性がある。これに伴う各種掘立柱建物は、単純な日常生活関連施設とは考え難く、01-ＳＩ112・119・120の埋め立て後に、この地区は居住区域ではなくなったことが窺える。

第426図　柱穴様ピット集中地区１



第427図　柱穴様ピット集中地区２



第428図　柱穴様ピット集中地区３

柱穴様ピット集中地区２(第427図)

ＭＭ42を北東端、ＮＢ36を南西端とする範囲を対象とする。南西部を01-ＳＤ220が、中央部を01-ＳＤ47・195・213・250・426が区画しており、これらと概ね軸方位を合わせる01-ＳＩ74・86～88・141・155・156・158～160、01-ＳＢ146と、軸方位のそろわない01-ＳＩ139・255が存在する。

想定復元したのは、01-ＳＡ461・462・473・474である。いずれも01-ＳＤ220や01-ＳＤ47・195・213・250・426の主軸方位とほぼ同じであり、同様に区画施設として存在したとみられる。なお、01-ＳＡ474が01-ＳＤ47・195・213・250・426を跨ぐ配置であることから、両者には新旧関係が想定される。01-ＳＡ474は01-ＳＩ155を囲うように直角に折れる配置であり、両者は併存する可能性が高く、01-ＳＡ474の延伸方向と住居壁延長線の関係でみれば、01-ＳＩ160が南東壁をほぼ01-ＳＡ474の延伸方向に合わせ、01-ＳＩ158の南西壁延長線上に01-ＳＡ474の北東端が一致することから、これら３軒の住居跡の区画施設として01-ＳＡ474が存在したと想定される。これに対し、01-ＳＤ220や01-ＳＤ47・195・213・250・426による区画は、集落全体に関わる大規模な区画であり、より後出的な要素と考えられることから、01-ＳＩ155・158・160と01-ＳＡ474の遺構群から、01-ＳＤ220や01-ＳＤ47・195・213・250・426の遺構群へ変化したと考えられる。また、01-ＳＩ139・255などの軸方位の違う住居群は、より古段階の遺構群であるとみられる。

以上のことを踏まえて、当地区の遺構群変遷を古段階から順にＡ・Ｂ・Ｃ群に分けて整理すると、Ａ群が01-ＳＩ139・157・255の東西南北に住居壁をそろえる小形住居群、Ｂ群が01-ＳＩ149・155・158・160の北西－南東方向に主軸をもつ住居群と01-ＳＡ40・461・462・473・474の柱穴列による区画施設、Ｃ群が01-ＳＩ159・01-ＳＢ146と集落全体を区画する01-ＳＤ220・01-ＳＤ47・195・213・250・426の遺構群となる。01-ＳＩ156はＡ群からＢ群への過渡期の住居とみられる。

柱穴様ピット集中地区３(第428図)

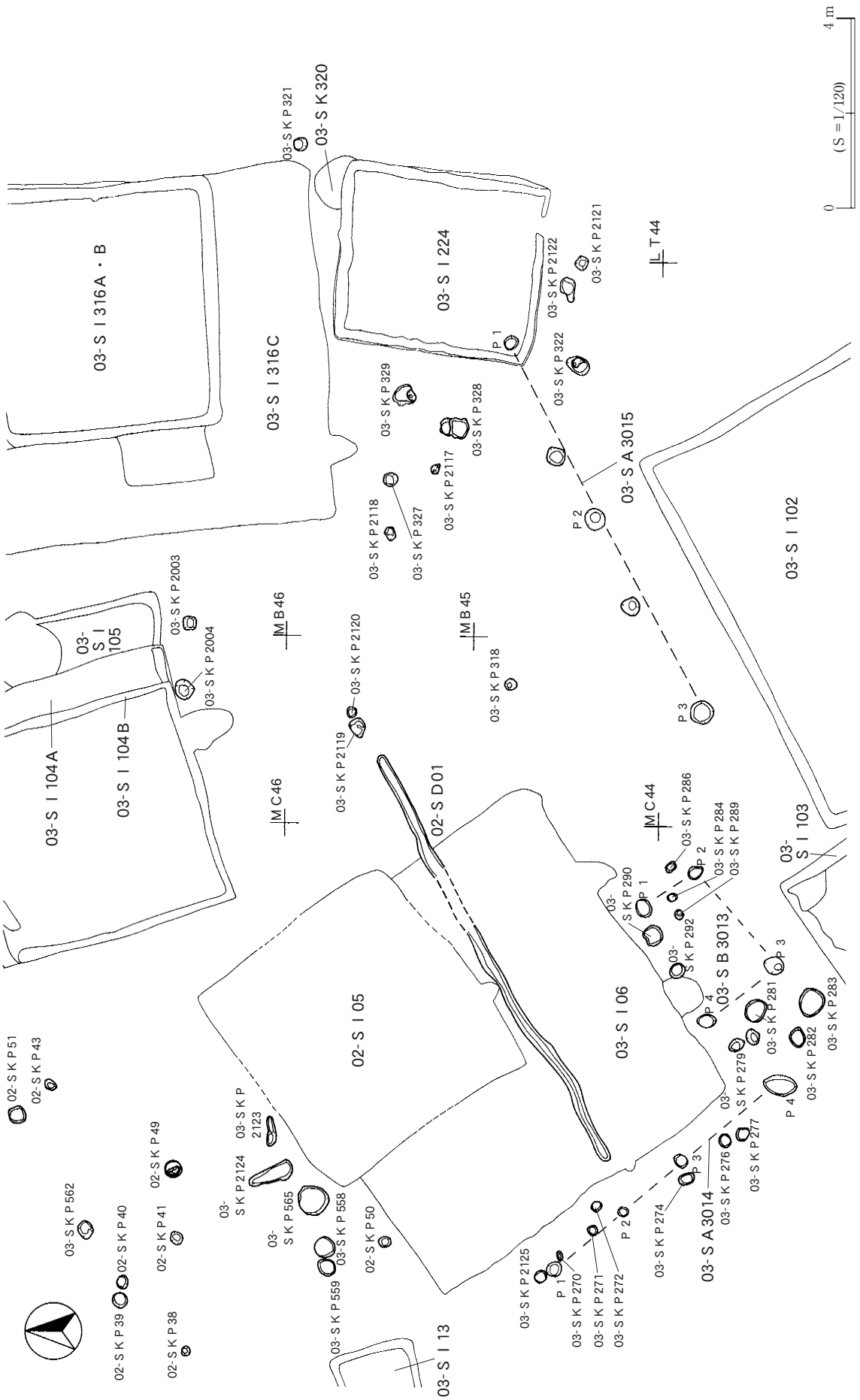
ＭＨ48を北東端、ＭＱ42を南西端とする範囲を対象とする。基本的には住居分布域であり、これに付随する施設が多いとみられる。

想定復元したのは、03-ＳＢ3008・3012と03-ＳＡ3001・3006・3007・3009～3011である。03-ＳＡ3001は03-ＳＩ15の、03-ＳＡ3006は03-ＳＩ16の、それぞれ南東壁に平行した配置であり、おそらく住居南東側を区画する塀の跡とみられる。03-ＳＡ3007は02-ＳＢ01の北東側と、１間×２間の03-ＳＢ3008に平行して配置してあり、この３施設は同時に存在したと考えられる。03-ＳＡ3011は、１間×２間の03-ＳＢ3012と03-ＳＩ22・23・26の宅地を区画する塀の跡とみられるが、01-ＳＩ34の南東壁と03-ＳＡ3011の軸方位が合うことから、03-ＳＩ22が同時期に存在したとみられる。03-ＳＡ3009・3010は、02-ＳＩ18の北東・北西壁にほぼ平行しており、これに伴うと想定される。

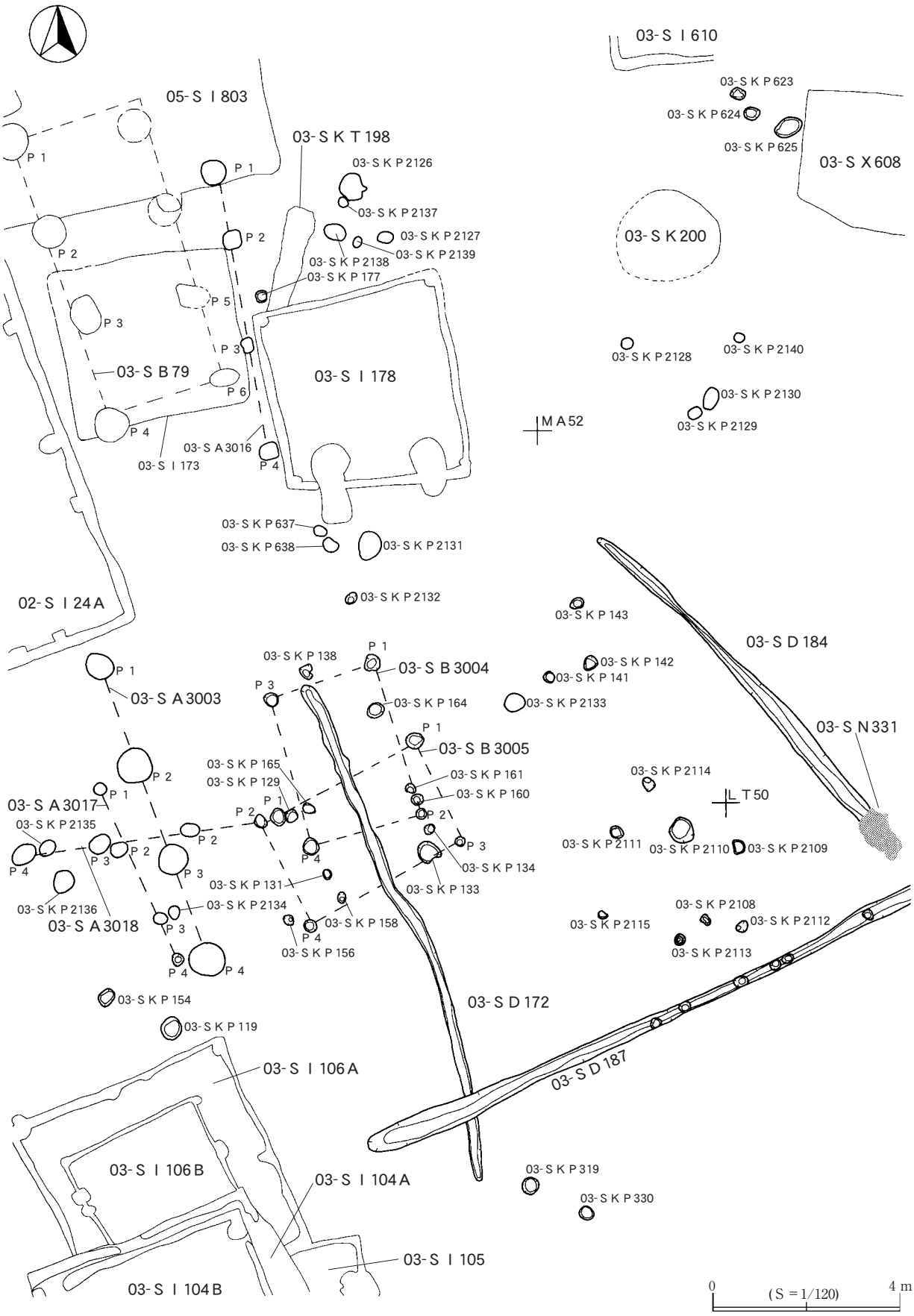
柱穴様ピット集中地区４(第429図)

ＬＳ47を北東端、ＭＥ42を南西端とする範囲を対象とする。基本的には住居分布域であり、これに付随する施設が多いとみられる。

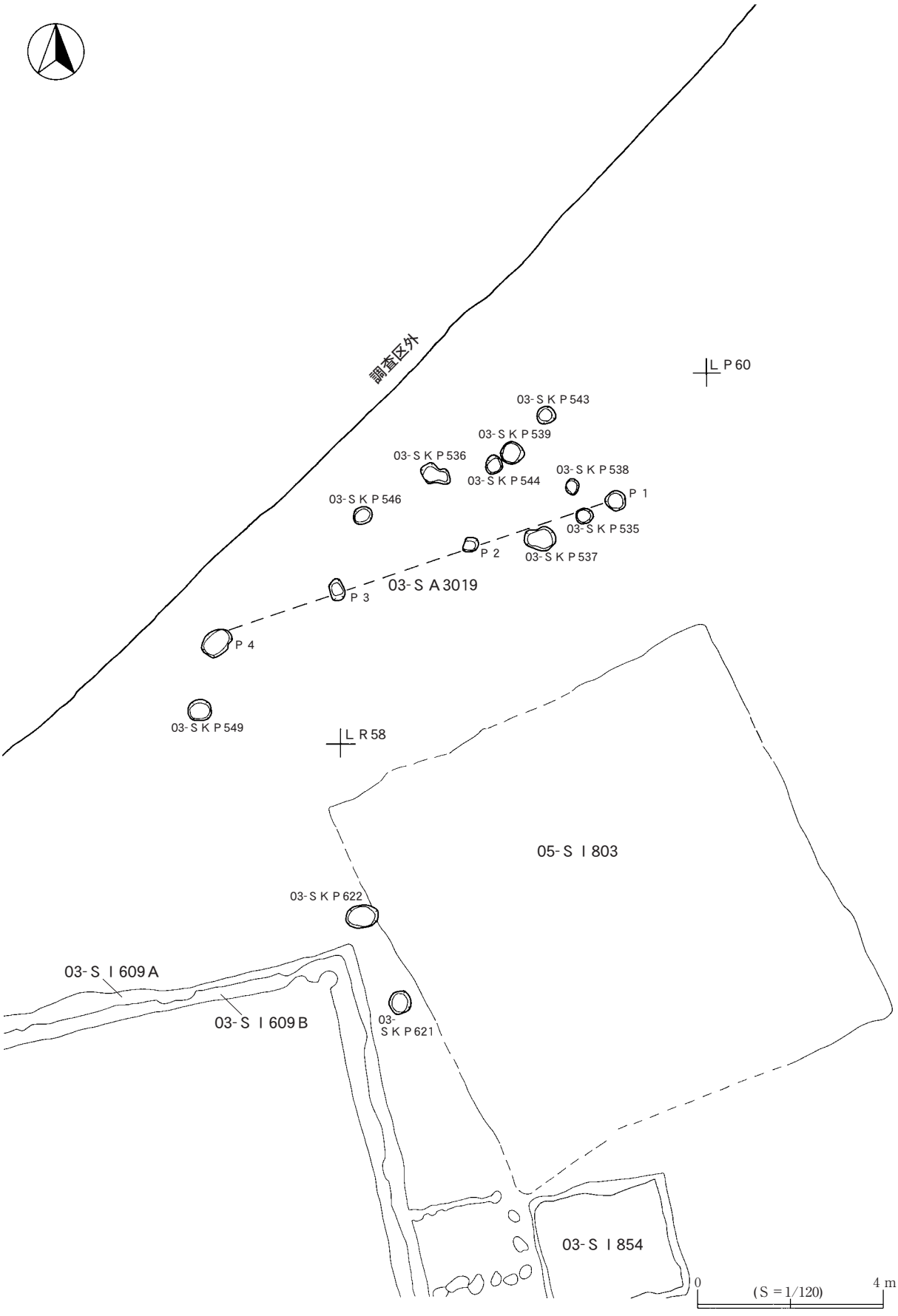
想定復元したのは、03-ＳＢ3013と03-ＳＡ3014・3015である。03-ＳＢ3013は配置からみて、03-ＳＩ06に伴うとみられ、03-ＳＡ3014は南西壁沿いの塀で、03-ＳＢ3013は南東壁に付く張り出しと考えら



第429図　柱穴様ピット集中地区４



第430図　柱穴様ピット集中地区５



第431図　柱穴様ピット集中地区６

れる。この他にも多くの柱穴様ピットが存在することから、建て替えに合わせてこれら住居外部の施設も配置や規模を変更したと考えられる。

03-ＳＡ3015は、03-ＳＩ102の北西壁に平行しており、これに伴う区画塀の跡とみられる。

柱穴様ピット集中地区５(第430図)

ＬＳ53を北東端、ＭＣ47グリッドを南西端とする範囲を対象とする。基本的には住居分布域だが、区画施設とみられる03-ＳＤ172・178・184や、製鉄工房域に比較的近い位置である。

想定復元したのは、03-ＳＢ3004・3005と03-ＳＡ3003・3016～3018である。03-ＳＡ3003は02-ＳＩ24と03-ＳＩ106をつなぐ配置で、軸方位もほぼ一緒であることから、併存するとみられる。03-ＳＡ3018と軸方位が一致する遺構は、05-ＳＩ28と03-ＳＩ105・173で、03-ＳＩ105と03-ＳＩ173のほぼ中間に位置する。両者からの距離は約８ｍとやや離れるが、区画の塀と考えられる。

03-ＳＢ3004・3005はどちらも１間×１間の小型の掘立柱建物跡である。それぞれ03-ＳＢ3004は03-ＳＡ3003と、03-ＳＢ3005は03-ＳＡ3017と軸方位が一致する。２棟の建物跡を区画する２列の柱穴列は、主体的な居住域である台地上部平坦面中央部との境界線に当たる。また、２棟の建物跡のほぼ中央部に03-ＳＤ172が延びており、建物に伴う排水溝とも想定される。これらのことから、２棟は何らかの作業場とみられ、周辺の状況から考えて鍛冶場の可能性が高いと考えられる。なお、05-ＳＳ1001・1002・81と居住域を区画する03-ＳＤ1002～1004のほぼ西南西の延長線上に、同様に木柱列である03-ＳＤ178がある。03-ＳＤ178と03-ＳＡ3003や3017はほぼ直角の配置であり、同時期の区画施設であることも想定される。

以上を総合すると、この地点は鍛冶関連の作業場とみられ、03-ＳＢ3004・3005や03-ＳＤ172が関連施設と考えられる。この作業場は、03-ＳＤ178や03-ＳＡ3003・3017により、居住域とは区画される。

柱穴様ピット集中地区６(第431図)

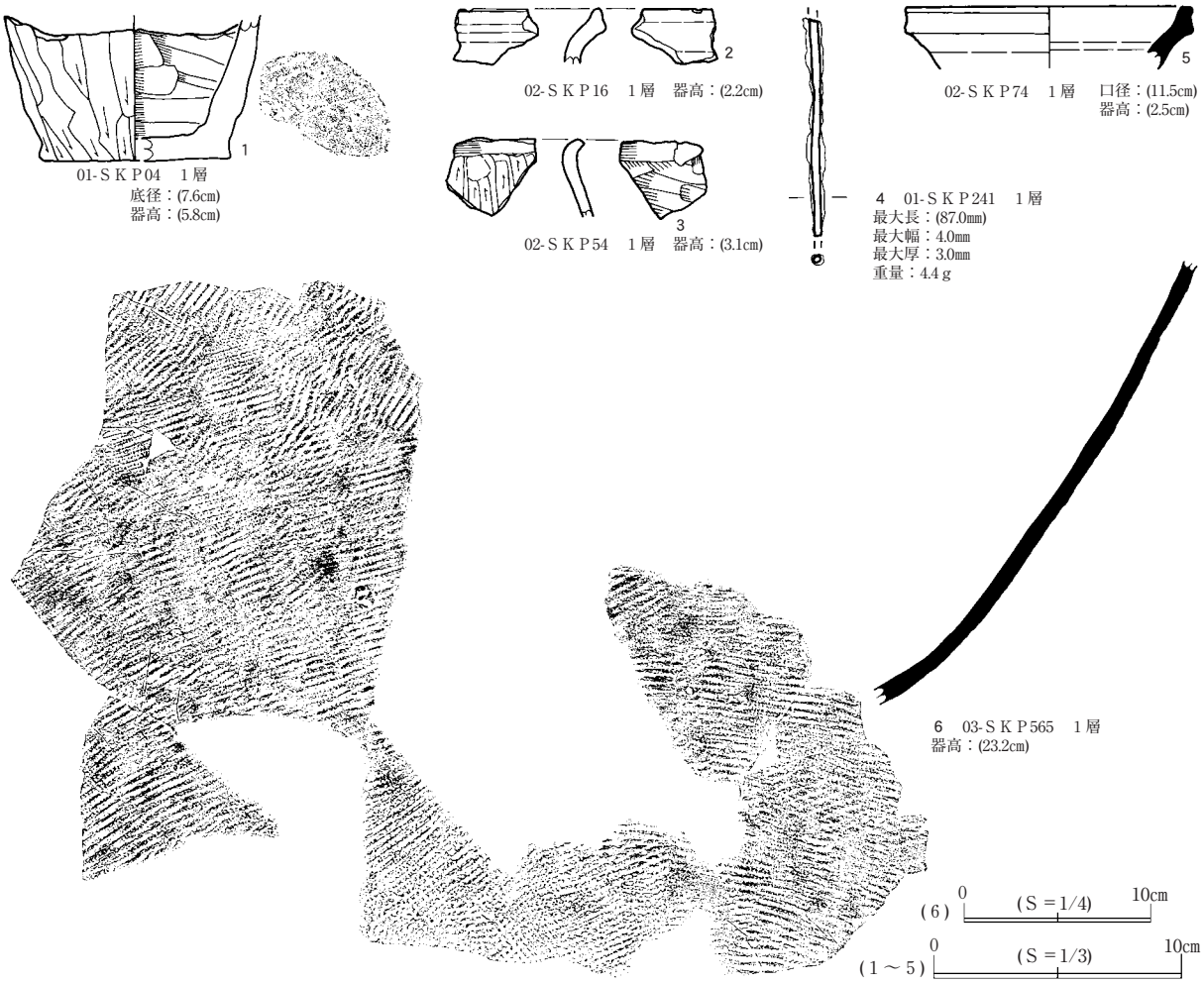
ＬＯ61を北東端、ＬＳ55を南西端とする範囲を対象とする。基本的には住居分布域であり、これに付随する施設が多いと想定されるが、北部は調査区外のため不明な部分が多い。

柱穴が最も集中するのはＬＰ59～ＬＲ58の範囲で、15基の柱穴が分布する。この中で復元できたのは03-ＳＡ3019である。05-ＳＩ803に概ね軸方位を合わせることから、付属施設とみられる。

この他、05-ＳＩ803の南西壁沿いに03-ＳＫＰ621・622の２基の柱穴様ピットが並んでおり、05-ＳＩ803に伴う張り出しの可能性がある。

柱穴内出土遺物(第432図)

柱穴様ピット内からは混入物として散発的に遺物が出土するが、小破片が多く実測可能なものは少ない。432図２・３は土師器甕の口縁部破片で、２は内外面にロクロ目を残すもの、３は外面縦位ケズリ、内面横位ヘラナデ調整である。432図１は土師器甕の底部で、底面に木葉痕を残す。432図５・６は須恵器で、５が壺の口縁部破片、６が土師器甕の胴下半部の破片である。432図４は両端を欠損する棒状の鉄製品である。



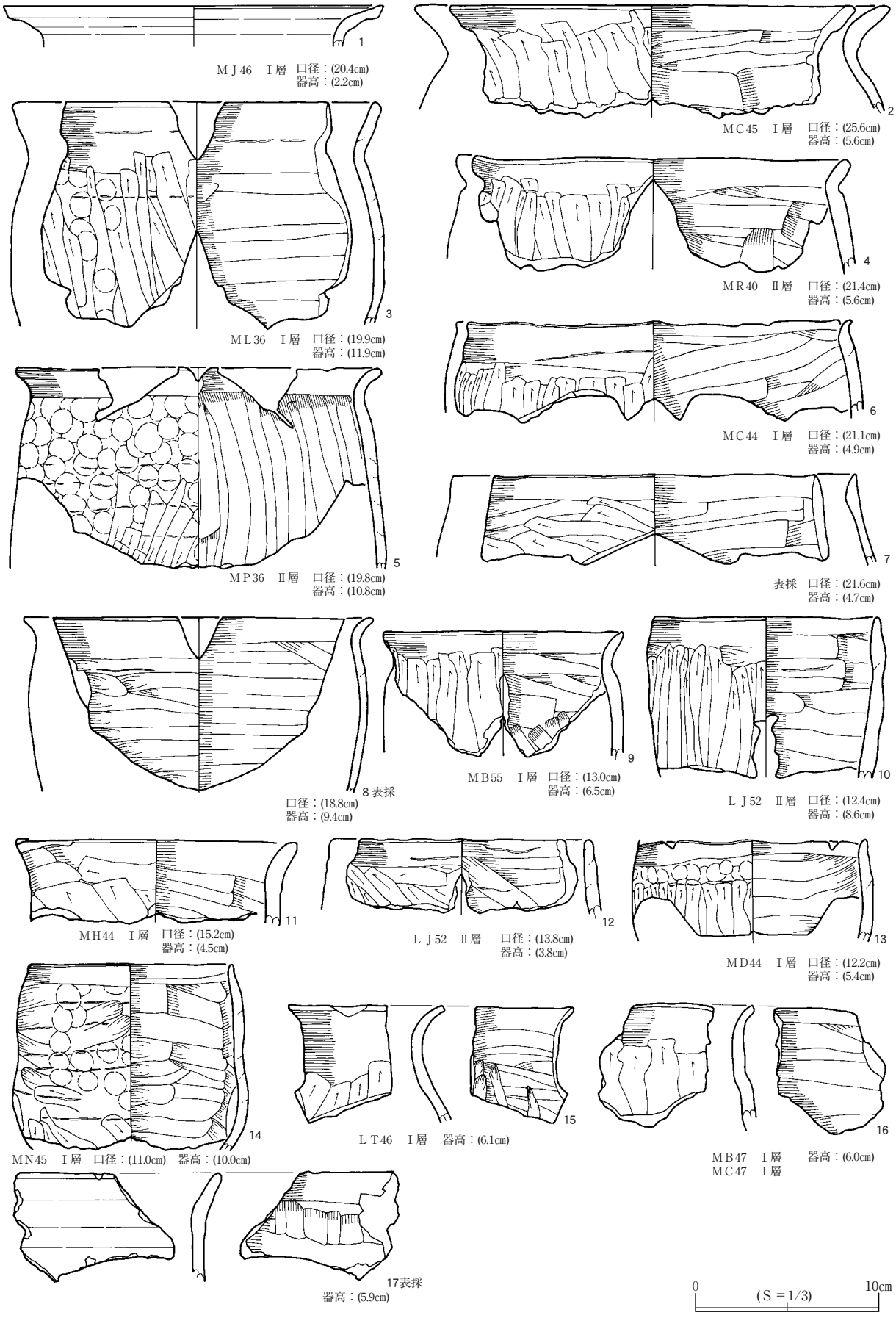
第432図　柱穴様ピット出土遺物

２　遺構外出土遺物

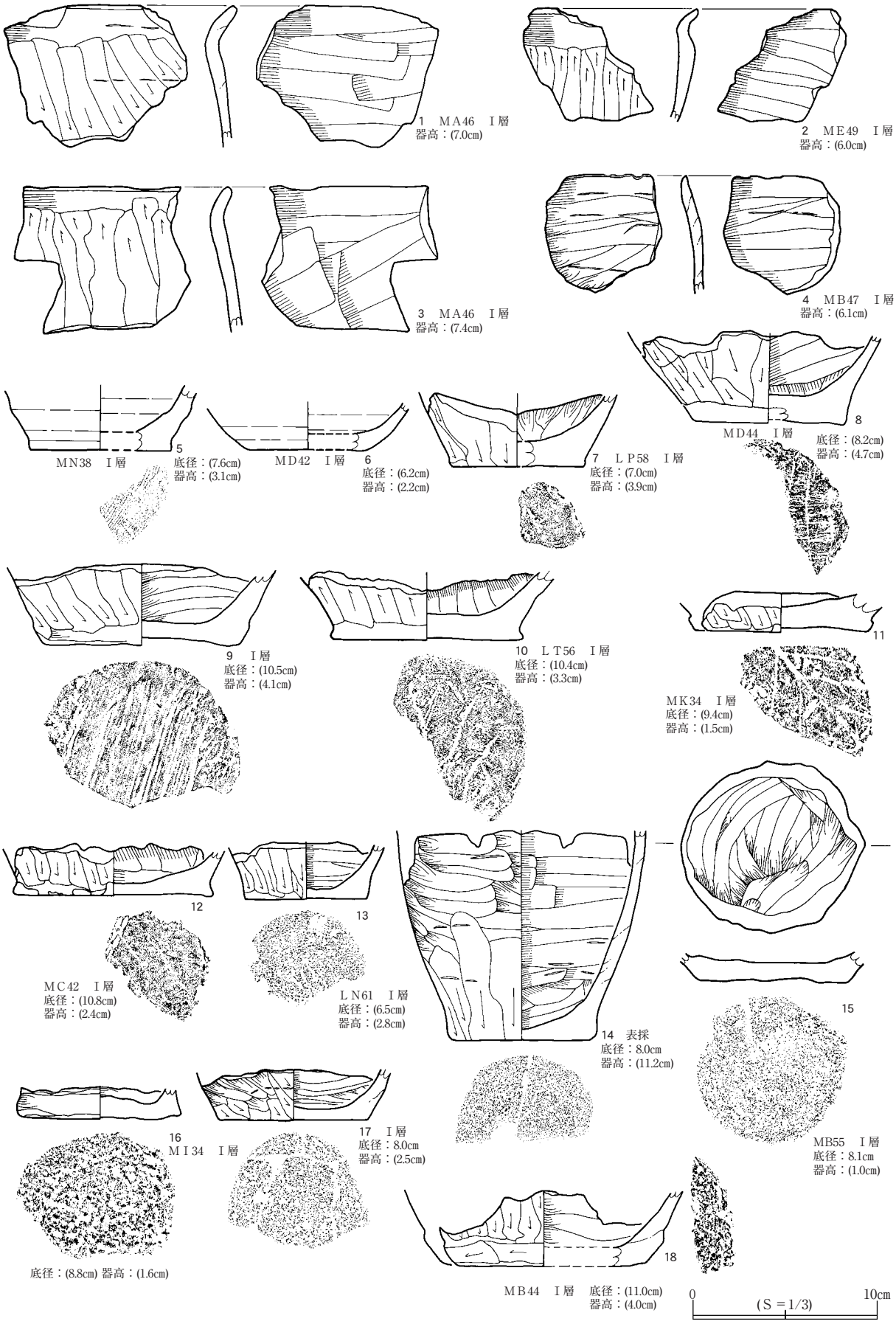
遺構外からも土師器甕・坏・鍋・壺、墨書土器、須恵器壺・甕、鉄製品が出土しているが、調査区内の撹乱が多いことや、台地縁辺の斜面や残丘裾野に捨て場を形成することから考えて、これらの本来の帰属先は住居内堆積土だったと考えられる。(第433図～441図、図版159・161～163・165・166)

433図１～８は比較的中・大型の土師器甕である。１はロクロ目を残すもので、口縁部が強く外反して、口縁部側面に垂直の面を形成する。２も頸部で強くくびれて口縁部が外反する器形で、ケズリ調整により相対的に口縁部が肥厚する。３は胴部中位に最大径があり、頸部にかけて内傾して口縁部が弱く外折する器形である。口唇は内角が尖るように面取りしてある。４は頸部で段状にくびれて、口縁部が短く外折する器形である。５は胴部中位から直線的に内傾して口縁部で曲線的にくびれ、口縁部が外反する。８も口縁部が外反するが、胴上部が張り出す点で５とは形状が異なる。６・７は口縁部まで内湾して、口端がつまみ出し状に直立する器形である。２～８の調整は、外面では５が胴上部に広めに指の押さえのみの範囲を残し、８は横位にユビナデを施し、７は斜位のケズリを施すが、これら以外は縦位ケズリ調整である。内面では、５が縦位ヘラナデである以外は、全て横位ヘラナデ調整である。

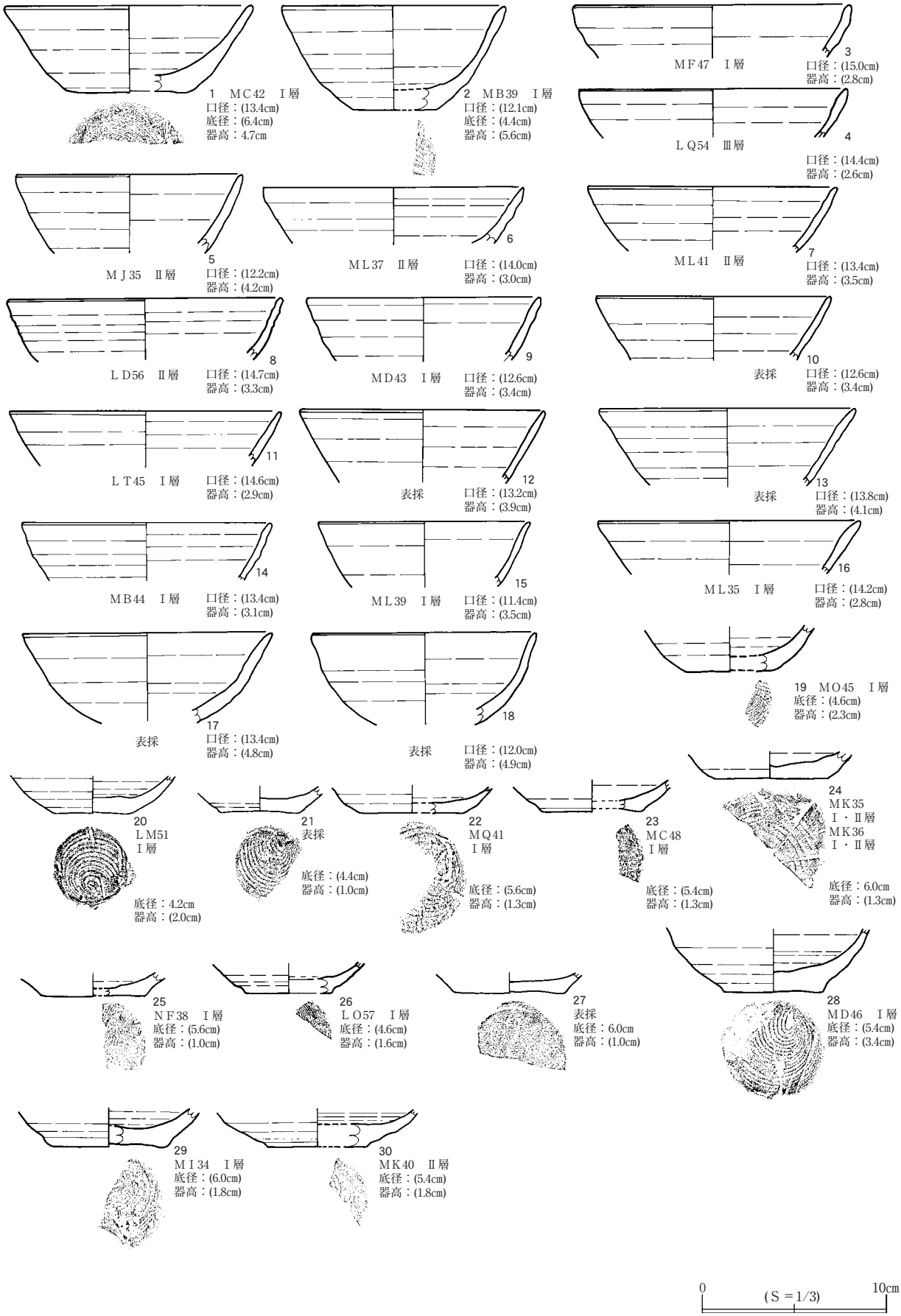
433図９～14は比較的小型の土師器甕である。９・11は口縁部が外反する器形で、９は胴部中位か



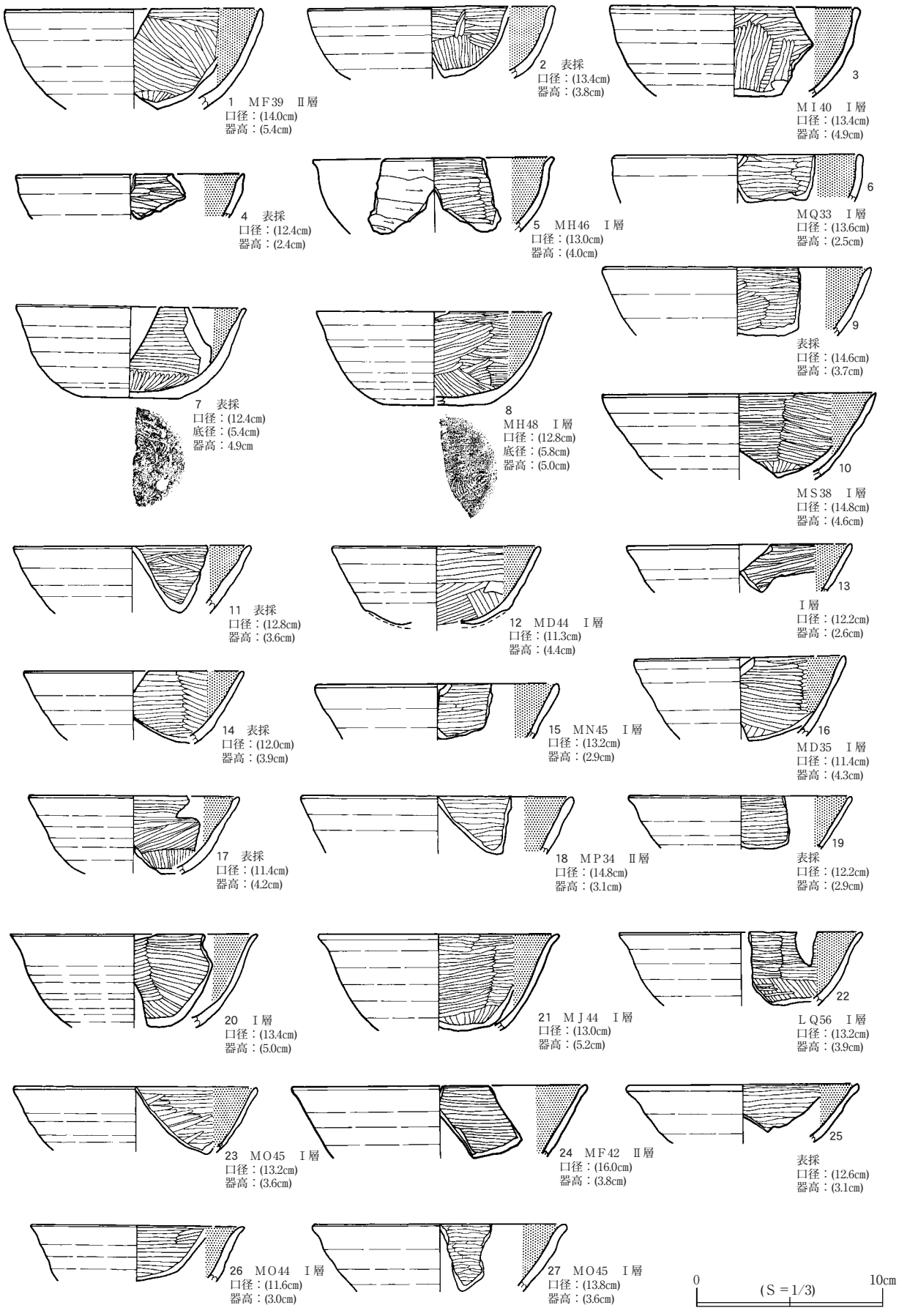
第433図　遺構外出土土師器甕 1



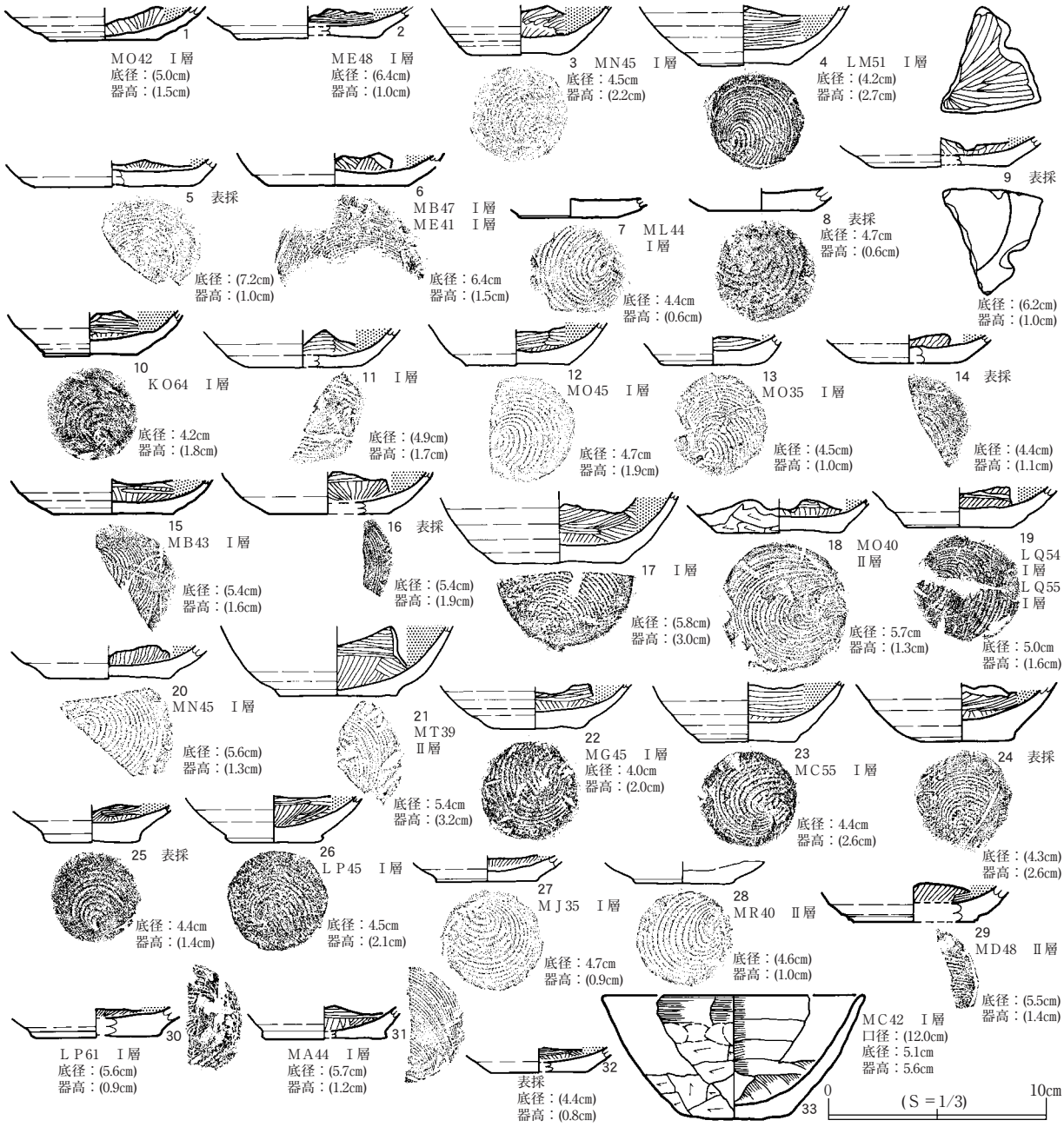
第434図　遺構外出土土師器甕２



第435図　遺構外出土土師器坏１



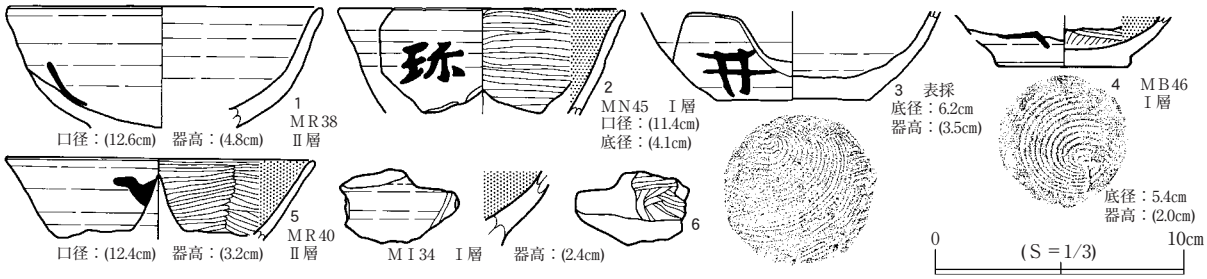
第436図　遺構外出土土師器坏２



第437図　遺構外出土土師器坏３

ら緩やかに内傾し、11は頸部のくびれが弱く、口径は小さいが、その割りに器壁が厚い。10・12～14は口縁部まで内湾する器形で、全て口唇は先細りになる。14は胴下部が張り出し、胴上部でもわずかに張り出すため、ダルマ形に近い形状になっている。９～14の調整は、外面では14が胴下部にのみケズリを施して上部はユビナデや指の押さえにとどめ、11・12がやや斜位にケズリを施す以外は、皆縦位ケズリである。内面では、基本的に横位のナデにより調整を施すが、９では胴下部に縦方向のナデが認められる。

433図15～17、434図１～４は土師器甕の口縁部破片である。433図17は外面にロクロ目を残すもので、内面は縦・横位のヘラナデ再調整が認められる。433図15は胴上部から内傾して頸部が直立し、口縁部にかけて長く外反する器形で、口唇は面取りしてある。広口壺に近い形状になると思われる。433図16も頸部の立ち上がりまでは433図15に類似するが、口縁部の外反は短い。どちらも外面は縦位



第438図　遺構外出土墨書

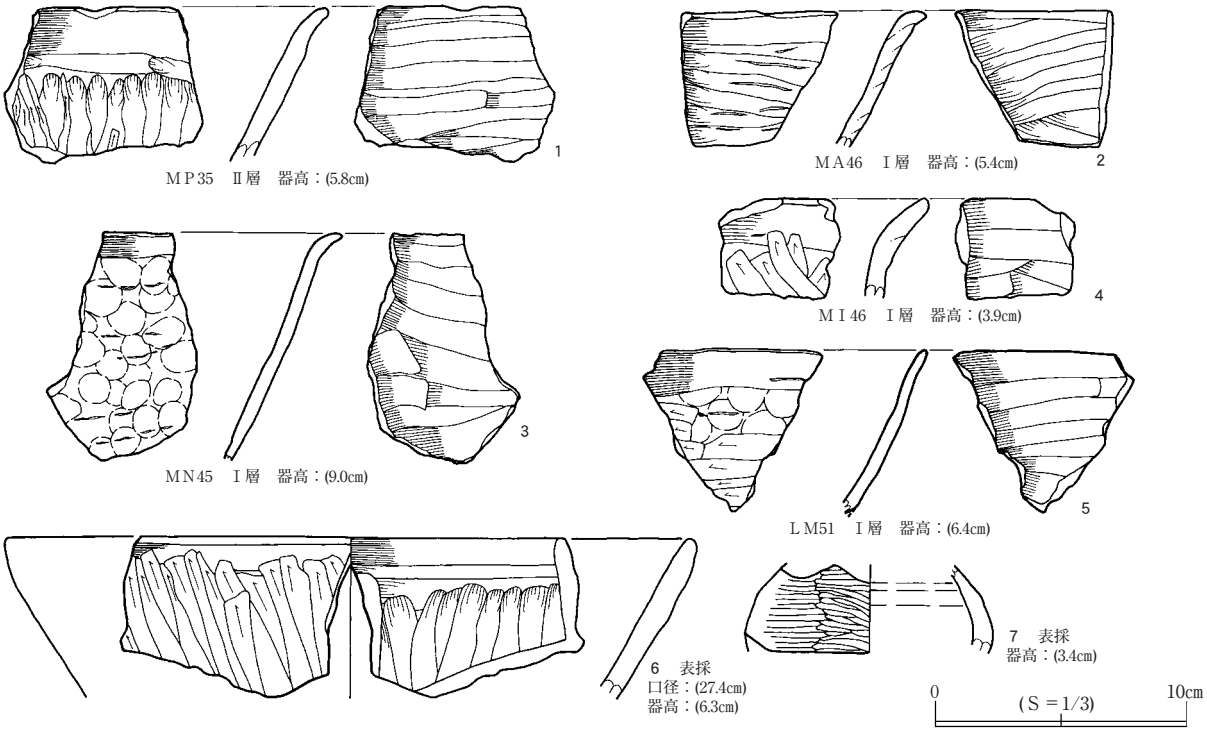
ケズリ、内面は横位ヘラナデ調整である。434図１は胴上部が内傾して頸部で屈曲し、口縁部が外折する。434図２は胴部から外傾して立ち上がり、頸部で屈曲して口縁部が短く外反する。434図３は胴部から内傾して頸部でくびれ、口縁部が弱く外反する。434図１～３はいずれも外面が縦位ケズリ、内面が横位ヘラナデ調整である。434図４は口縁部まで内湾する器形で、外面は横位ユビナデ、内面は横位ヘラナデ調整である。

434図５～18は土師器甕の底部である。５・６は胴部にロクロ目を残すもので、底面は５が静止糸切痕をとどめ、６はケズリによる再調整が認められる。この他の底面は、７がケズリ、８・９が薦編圧痕、10～12が木葉痕、13～18が砂底である。底部外縁形状では、10～12・16で明確な張り出しがあり、９・18では張り出し部をケズリにより再調整し、７・８・13・14は胴最下部を直立気味に仕上げ、15・17が底部から直線的に外傾する。

435図～437図には土師器坏を掲載した。435図がＡ類である。２は、厚さ１cmの底部から直線的に口縁部まで外傾して立ち上がる器形で、胴下部にはわずかに屈曲が認められる。底部は回転糸切無調整で、外面は胴下部が曲線的で凹凸のあるロクロ目であるのに対し、胴下部屈曲部以上は工具により平滑に調整している。内面も基本的には凹凸が認められない。焼成はやや軟質な感じを受けるが、調整からみて比較的丁寧に作っている。１も厚みのある底部から口縁部まで直線的に外傾する器形で、２に比べて器高が低い。３～18は口縁部破片であるが、17・18は比較的胴下部までの形状が分かる資料である。いずれも胴部中位に屈曲をもち、口縁部が外反する器形であり、２に類似する形状である。これに対し３～８は口縁部が内湾気味に立ち上がる器形である。６は口唇が外削ぎ状に整形してある。９～12は直線的に外傾する器形で、いずれも器壁が薄く口唇が先細りになる。13～16までは口縁部がわずかに外反する器形で、13・16は口縁部がやや肥厚する。19～30は底部資料で、19～24は底部から直線的に外傾し、25～30は口縁部が突出する。底面の明らかなものは全て回転糸切痕をとどめている。24・28～30は底部厚が比較的厚い。

436図・437図はＢ類で、437図にはＤ類を１点掲載した。

436図には口縁部資料を掲載した。７はやや広めの底部から胴下部が丸みを帯びながら立ち上がり、口縁部で弱く外反する。底部外面は回転糸切後ケズリで再調整しており、外面はやや風化しているがロクロ目が目立たず、内面は底面付近に放射状の、胴下部から口縁部までは横位平行のミガキを施している。器壁が薄く、全体として丁寧な作りである。８は底部から内湾気味に立ち上がり、口縁部が外反する器形である。底部の回転糸切痕の筋幅は狭く緻密で、外面のロクロナデによる凹凸幅も狭く、外面調整は丁寧な仕上げを行っている。内面調整も全面ミガキを施しており丁寧な仕上げだが、底部放射状のミガキは認められない。１～６は、口縁部が内湾気味もしくは口縁部がわずかに外反する器



第439図　遺構外出土土師器鍋・壺

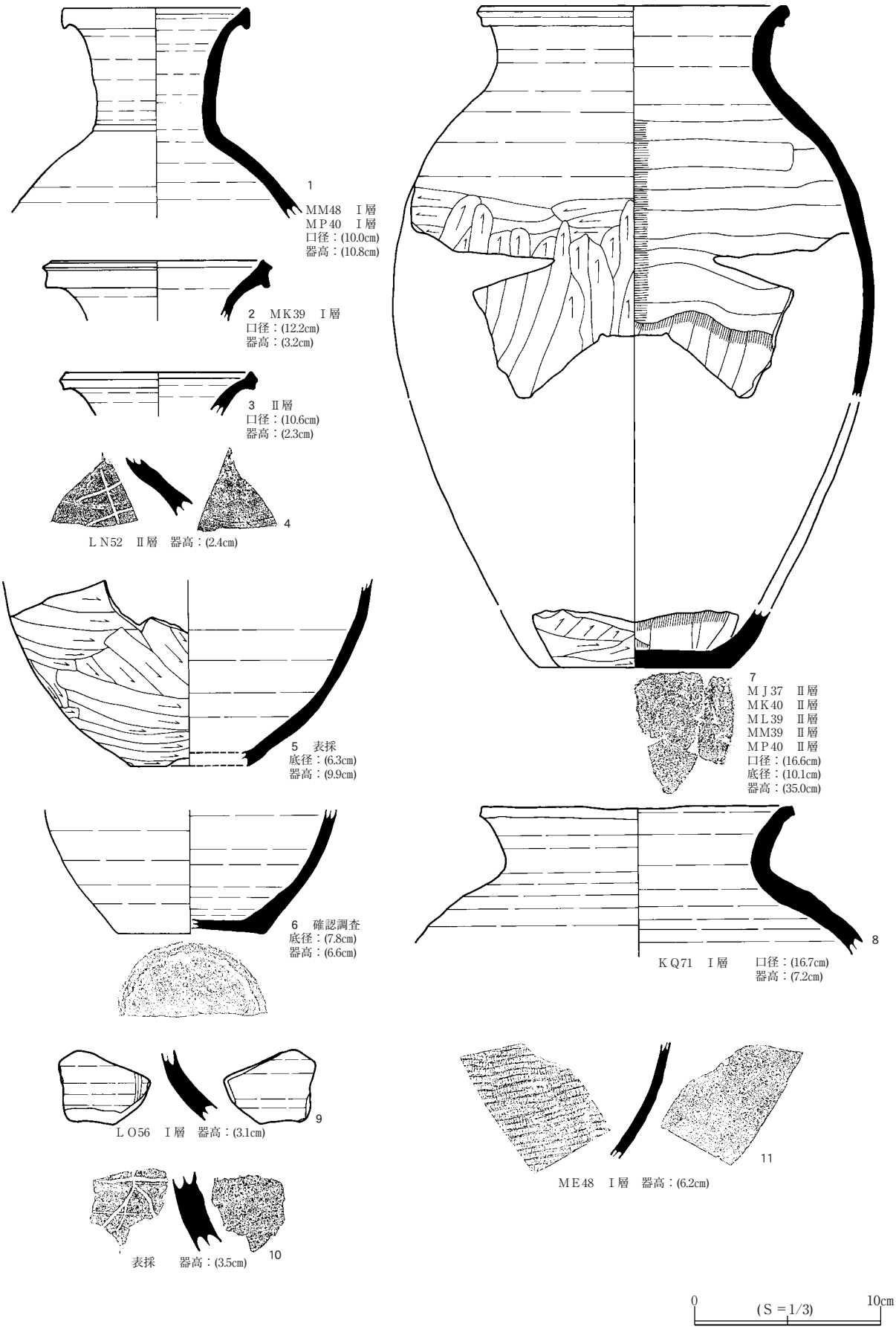
形で、胴部の立ち上がりからみて、７・８同様に胴下部が曲線的に外に張り出すと考えられる。１～３は胴下部を確認できる資料で、内面胴下部のミガキは縦・斜位に施してある。９～19は口縁部が比較的直線的に外傾し、20～27は口縁部が外反する資料である。これらには胴下部が分かる資料が少ないが、胴上部まで縦位にミガキを施すものは無いようである。

437図１～32は底部資料である。底面調整では、１・２がケズリにより再調整を施し、それ以外は確認できる限り回転糸切痕をとどめている。底径で見た場合、２・５・６・９・15～18・20が比較的径が大きい。底部断面形状では１・３～14までが底部から胴部にかけてくびれずに外反し、15～31が底部が突出する形状になる。底部の器厚では、２～19・25・26・30が底部中央部まで平行して均一な厚みを有するのに対し、１・21・27・31は底部中央が極端に薄くなる作りである。

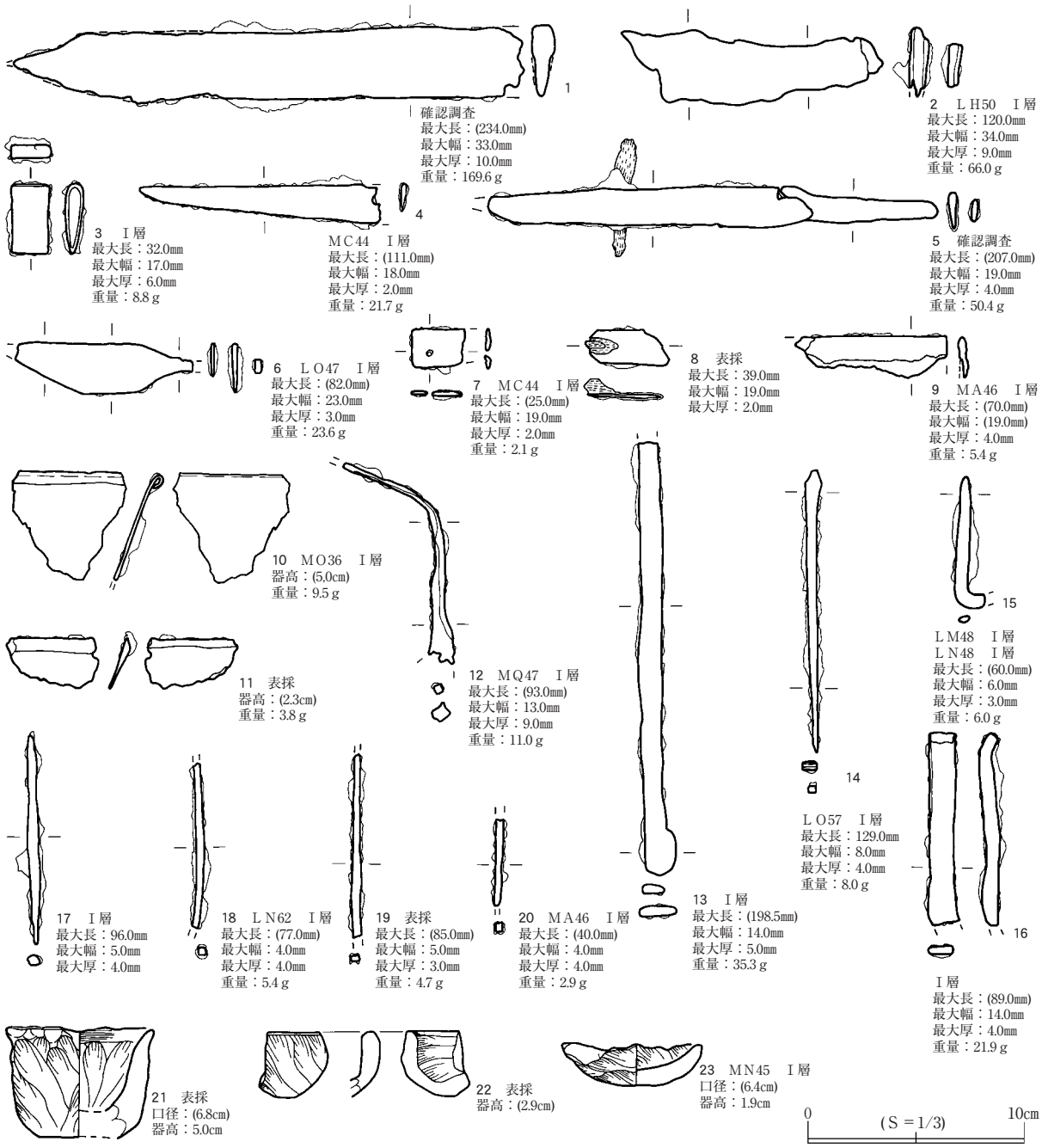
437図33は、基本的に底部から口縁部まで直線的に外傾する器形で、胴部中位にわずかに傾斜角の変わる変換点がある。外面は底部・器壁共にケズリによる整形で、内面も極めて雑なナデで仕上げている。胎土が土師器甕に近似しており、粗雑な作りである。

438図は墨書や刻書を施した土器である。１・３がＡ類、２・４～６がＢ類の外面に施している。１は胴下部に１本の右下がりの払いを確認できる。２は「珎」と思われる字が全体に残っている。３は底部付近に「＃」と思われる字が認められる。４は底部付近に、横１本と縦に短い１本の線が確認できる。５は胴上部に比較的太目の墨書の一部が確認できる。６は刻書で、底部付近の破片に１本の縦方向の線刻が認められる。

439図１～６は土師器鍋である。１・４・６は比較的器壁が厚めで、２・３・５は比較的薄めである。１は直線的に外傾して、口縁部でわずかにくびれて外反する器形で、外面は縦位ユビナデ後ケズリ、内面は横位ヘラナデ調整である。２は口端部がわずかに外反する器形で、内外面共に横位ユビナデ調整である。３は口縁部が外反する器形で、外面は指の押さえにとどめ、内面は横位ヘラナデ調整



第440図　遺構外出土須恵器



第441図　遺構外出土鉄製品・土製品

である。４は口縁部が外折気味になり、口唇を面取りする。外面は縦位ケズリ、内面は横位ヘラナデ調整である。５は口縁部までわずかに内湾して、口端がやや外反する器形である。外面横位ケズリ、内面横位ヘラナデ調整である。６は小型の鍋で直線的に外傾する。外面縦位ケズリ、内面縦位ユビナデ調整である。７は小型の壺とみられる土器で、肩部の破片である。外面にミガキを施し、内面にはロクロ目様の平行の横ナデが確認できる。

440図は須恵器である。１～６は壺で、１～３が口縁部、４が肩部付近、５・６が底部資料である。１は肩部から内傾して頸部で直立し、口縁部が外反する器形で、口縁部側面には垂直の面を形成する。比較的口縁部の外反の弱い器形である。頸部の付け根には突帯が認められる。２・３は口縁部の破片で、どちらも口端をつまみ出して直立させており、内面にえぐりを生じさせて受け口状の形状になる。

どちらも口縁部側面に２段の面を形成する。５は底部から内湾気味に立ち上がり、球胴状になると考えられる。外面は横・斜位のケズリで再調整する。６は底部外縁がわずかに張り出し、胴部が内湾気味に立ち上がる。７は広口壺で、復元実測したものである。底部から直線的に外傾して、肩部で丸まり、頸部が直立して口縁部が弱く外反する。器壁が比較的厚く、灰白色系の色調である。外面は肩部付近までケズリ、内面は胴部中位まで縦位ヘラナデ、胴上部から頸部付近まで横位ヘラナデ調整である。８～10は甕である。８は口縁部資料で、肩部から内傾して頸部から口縁部にかけて外反する器形で、口縁部側面に面を形成する。内外面共にロクロ目様の平行なナデをとどめる。９は頸部付近の破片で、ロクロ目様のナデが確認できる。なお、縦に１本の線刻が認められる。10は肩部付近の小破片でタタキ目が残る。11は甕の胴部破片だが器壁が比較的薄く、壺の可能性も否定できない。

441図１～20は鉄製品である。１・２は刀で、１は切先側の、２は茎に近い部分の破片である。３は柄頭の金具で、断面三角形状に鉄板を折り曲げて作っている。４～６は刀子である。４は切先側の、５は切先だけを欠損する資料である。５は刀身中央部に刃と直交する木質が付着する。６は茎が細い作りで刃も短く、他の刀子に比べると明らかに短い。７～９は穂摘具とみられる。７・８は一端が残存しており、刃先と、７では目釘穴を確認できる。８は左端に木質が残っており、目釘穴に重なると考えられる。９は峰の部分が残っている。10・11は鍋である。いずれも口縁部破片で、10は口縁部を外側に折り返して丸めて成形する。11は口縁部が肥厚する作りである。12はＬ字型に屈曲するもので、一端が開いている。形状から鍋の把手部分と判断される。13は一端が幅広になる扁平な棒状の製品である。一端は欠損しており、全体像は不明である。14は下端が先細り、上端が幅広になることから、鏃になる可能性がある。15は下部がＬ字状にカーブしており、断面形が円形なので釣針と考えられる。16は両端を折り曲げた板状の製品である。17～20は一端または両端を欠損する棒状のもので、詳細は不明である。

441図21～23は小型土器で、いずれも手づくねである。21は小鉢の形状、22・23は碗や皿の形状を模倣したものと考えられる。

第４節　中世以降の遺構と遺物

１　検出遺構

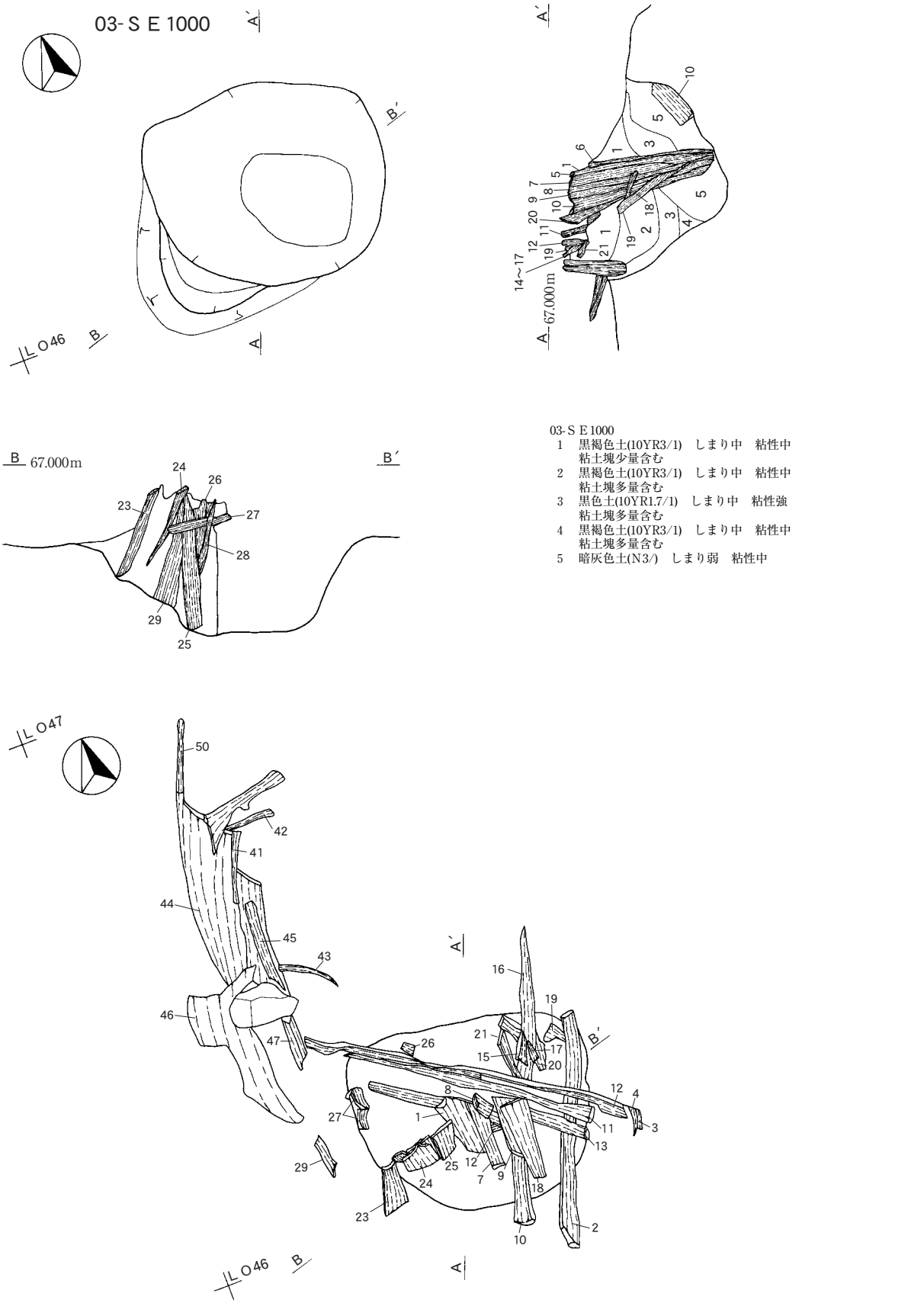
(１)水場遺構

03-ＳＥ1000(第442図)

遺　構　ＬＮ45・46グリッドに位置する、斜面下の湧水点を活かした水場遺構である。内部の堆積土は砂とシルトの互層で、水成堆積による自然埋没である。さらにその上面を斜面からの崩落土が覆う。

掘形は長径約2.0m、短径約1.4m、深さ約0.9mで、その内側に板材・角材を打ち込んで枠を造る。縦に並ぶ材を連結する桁や貫は使用していない。また、角材には転用を示す明瞭な加工痕（貫穴・ほぞ穴等）を見つけることはできなかった。

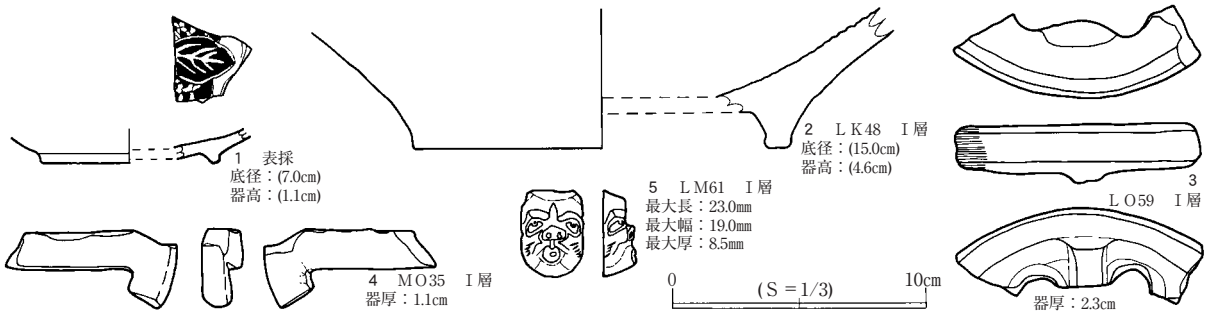
枠構築材は、北壁の部材が斜面上方からの土圧で南側へ寄っているが、枠の組み方を復原すると、以下のようになる。板材・角材を１本づつ縦に打ち込み四隅（材２・18・25・南西隅不明）を決めた後、長さ1.0～2.0m、幅0.1～0.2mの板材で枠を造る。各壁の使用材数は不明だが、６本前後を立てて



03-S E 1000
1　黒褐色土(10YR3/1)　しまり中　粘性中
　粘土塊少量含む
2　黒褐色土(10YR3/1)　しまり中　粘性中
　粘土塊多量含む
3　黒色土(10YR1.7/1)　しまり中　粘性強
　粘土塊多量含む
4　黒褐色土(10YR3/1)　しまり中　粘性中
　粘土塊多量含む
5　暗灰色土(N3/)　しまり弱　粘性中

0　(S＝1/40)　2 m

第442図　03-S E 1000



第443図　遺構外出土陶磁器・土製品

いると考えられる。枠材が動いているので厳密な枠幅は不明だが、四隅に打ち込んだ材の幅から、0.8ｍ前後と考えられる。

斜面上からの土圧で、四隅の柱材の内上方２本（材２・18）が斜面下へ向かって倒れこみ、枠北壁材は南壁へ密着している。それに伴い東西両壁の構築材（材１・５～12、23～29）は蛇腹状に南壁に押しつけられている。

地下水位が高く、斜面裾から常に水がしみ出している。掘り込み面は、晴天時の湧水面よりもやや上にあるが、降雨後の湧水点は斜面中腹へと上昇する。

03-ＳＴ185に関連する堆積土が本遺構を覆うことから、平安時代の集落に伴う遺構である可能性もあるが、内部堆積土は独自の水成堆積層で、その上部に崩落土として03-ＳＴ185関連の堆積土が覆う状況にあり、上部崩落層の堆積時期の解釈により下限時期に開きがでる。このことから時期特定は困難であるため、中世以降の遺構としたが、基本的には時期不明の遺構である。平安時代の遺構だとすれば、製鉄工房域に近いこの場所で、必要な水を主に採取したかもしれないが、水場の近くに斜面上位からゴミを投棄することにも疑問があり、結論を導き出せない。

遺　物　時期を特定できる遺物の出土はないが、堆積土から廃絶後の埋没時の環境を示すように、緑色のままの木の葉や、ゴミムシの様な甲虫類の前羽が出土した。なお、枠使用材のうち５点の樹種同定を行った結果、スギ２点とクリ・ケヤキ・オニグルミを使用していることが分かった。

２　遺構外出土遺物

基本的に中世の遺物として抜き出せたものはなく、全て近世の遺物である。443図１は磁器で内面に植物文を施す皿である。443図２は擂鉢の底部破片で、高台部が直立してから外傾する器形で、内面には密におろし目を施している。443図３・４は貝風呂とみられる土製品である。443図５は泥面子で、火男である。

第５章　自然科学分析

第１節　放射性炭素年代測定

(１)平成13(2001)年度放射性炭素年代測定

山形　秀樹（パレオ・ラボ）

１　はじめに

釈迦内中台Ⅰ遺跡より検出された炭化材および炭化種子の加速器質量分析法（AMS法）による放射性炭素年代測定を実施した。

２　試料と方法

試料は、ＳＫ22から出土した炭化材(ブナ属)１点、ＳＩ28から出土した炭化種子(クルミ類の核)１点、ＳＩ52から出土した炭化材(スギ)１点、ＳＩ74から出土した炭化材(ケヤキ)１点、ＳＩ119から出土した炭化材(スギ)１点、ＳＱ138から出土した炭化材(スギ)１点、ＳＩ155から出土した炭化材(スギ)１点、ＳＩ190から出土した炭化材(クリ)１点、ＳＫＴ358裁ち割り試掘坑から出土した炭化材(モミ属)１点、ＳＫ413から出土した炭化材(アサダ)１点の併せて10点である。

これら試料は、酸・アルカリ・酸洗浄を施して不純物を除去し、石墨(グラファイト)に調整した後、加速器質量分析計(AMS)にて測定した。測定された^{14}C濃度について同位体分別効果の補正を行なった後、補正した^{14}C濃度を用いて^{14}C年代を算出した。

３　結果

表２に、各試料の同位体分別効果の補正値（基準値-25.0‰）、同位体分別効果による測定誤差を補正した^{14}C年代、^{14}C年代を暦年代に較正した年代を示す。

^{14}C年代値(yrBP)の算出は、^{14}Cの半減期としてLibbyの半減期5,568年を使用した。また、付記した^{14}C年代誤差(±１σ)は、計数値の標準偏差σに基づいて算出し、標準偏差(One sigma)に相当する年代である。これは、試料の^{14}C年代が、その^{14}C年代誤差範囲内に入る確率が68%であることを意味する。

なお、暦年代較正の詳細は、以下の通りである。

暦年代較正

暦年代較正とは、大気中の^{14}C濃度が一定で半減期が5,568年として算出された^{14}C年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の^{14}C濃度の変動、および半減期の違い(^{14}Cの半減期5,730±40年)を較正し、より正確な年代を求めるために、^{14}C年代を暦年代に変換することである。具体的には、年代既知の樹木年輪の詳細な測定値を用い、さらに珊瑚のU-Th年代と^{14}C年代の比較、および海成堆積物中の縞状の堆積構造を用いて^{14}C年代と暦年代の関係を調べたデータにより、較正曲線を作成し、これを用いて^{14}C年代を暦年代に較正した年代を算出する。

^{14}C年代を暦年代に較正した年代の算出にCALIB 4.3(CALIB 3.0のバージョンアップ版)を使用した。

なお、暦年代較正値は^{14}C年代値に対応する較正曲線上の暦年代値であり、1σ暦年代範囲はプログラム中の確率法を使用して算出された^{14}C年代誤差に相当する暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値はその1σ暦年代範囲の確からしさを示す確率であり、10%未満についてはその表示を省略した。1σ暦年代範囲のうち、その確からしさの確率が最も高い年代範囲については、表中に下線で示した。

4　考察

各試料は、同位体分別効果の補正および暦年代較正を行なった。暦年代較正した1σ暦年代範囲のうち、その確からしさの確率が最も高い年代範囲に注目すると、それぞれより確かな年代値の範囲として示された。

《引用文献》

中村俊夫（2000）放射性炭素年代測定法の基礎.日本先史時代の^{14}C年代、p.3-20.

Stuiver, M. and Reimer, P. J. (1993) Extended ^{14}C Database and Revised CALIB3.0 ^{14}C Age Calibration Program, Radiocarbon, 35, p.215-230.

Stuiver,M., Reimer,P.J., Bard,E., Beck,J.W., Burr,G.S., Hughen,K.A., Kromer,B., McCormac,F.G., v.d. Plicht,J., and Spurk,M. (1998) INTCAL98 Radiocarbon Age Calibration, 24,000-0 cal BP, Radiocarbon, 40, p.1041-1083.

(２)平成14(2002)年度放射性炭素年代測定

山形 秀樹（パレオ・ラボ）

1　はじめに

釈迦内中台Ⅰ遺跡より検出された炭化材の加速器質量分析法（AMS法）による放射性炭素年代測定を実施した。

2　試料と方法

試料は、ＳＩ04から出土した炭化材１点、ＳＩ05から出土した炭化材１点、ＳＩ18から出土した炭化材１点、ＳＩ24から出土した炭化材１点、ＳＢ01から出土した炭化材１点の併せて５点である。

これら試料は、酸・アルカリ・酸洗浄を施して不純物を除去し、石墨(グラファイト)に調整した後、加速器質量分析計(AMS)にて測定した。測定された^{14}C濃度について同位体分別効果の補正を行なった後、補正した^{14}C濃度を用いて^{14}C年代を算出した。

3　結果

表３に、各試料の同位体分別効果の補正値（基準値-25.0‰）、同位体分別効果による測定誤差を補正した^{14}C年代、^{14}C年代を暦年代に較正した年代を示す。

^{14}C年代値(yrBP)の算出は、^{14}Cの半減期としてLibbyの半減期5,568年を使用した。また、付記した^{14}C年代誤差(±1σ)は、計数値の標準偏差σに基づいて算出し、標準偏差(One sigma)に相当する年代である。これは、試料の^{14}C年代が、その^{14}C年代誤差範囲内に入る確率が68%であることを意味する。なお、暦年代較正の詳細は、以下の通りである。

暦年代較正

暦年代較正とは、大気中の^{14}C濃度が一定で半減期が5,568年として算出された^{14}C年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の^{14}C濃度の変動、および半減期の違い(^{14}Cの半減期5,730±40年)を較正し、より正確な年代を求めるために、^{14}C年代を暦年代に変換することである。具体的には、年代既知の樹木年輪の詳細な測定値を用い、さらに珊瑚のU-Th年代と^{14}C年代の比較、および海成堆積物中の縞状の堆積構造を用いて^{14}C年代と暦年代の関係を調べたデータにより、較正曲線を作成し、これを用いて^{14}C年代を暦年代に較正した年代を算出する。

^{14}C年代を暦年代に較正した年代の算出にCALIB 4.3(CALIB 3.0のバージョンアップ版)を使用した。なお、暦年代較正値は^{14}C年代値に対応する較正曲線上の暦年代値であり、1σ暦年代範囲はプログラム中の確率法を使用して算出された^{14}C年代誤差に相当する暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値はその1σ暦年代範囲の確からしさを示す確率であり、10%未満についてはその表示を省略した。1σ暦年代範囲のうち、その確からしさの確率が最も高い年代範囲については、表中に下線で示した。

４　考察

各試料は、同位体分別効果の補正および暦年代較正を行なった。暦年代較正した1σ暦年代範囲のうち、その確からしさの確率が最も高い年代範囲に注目すると、それぞれより確かな年代値の範囲として示された。

《引用文献》

中村俊夫（2000）放射性炭素年代測定法の基礎.日本先史時代の14C年代、p.3-20.

Stuiver, M. and Reimer, P. J. (1993) Extended ^{14}C Database and Revised CALIB3.0 ^{14}C Age Calibration Program, Radiocarbon, 35, p.215-230.

Stuiver,M., Reimer,P.J., Bard,E., Beck,J.W., Burr,G.S., Hughen,K.A., Kromer,B., McCormac,F.G., v.d. Plicht,J., and Spurk,M. (1998) INTCAL98 Radiocarbon Age Calibration, 24,000-0 cal BP, Radiocarbon, 40, p.1041-1083.

（３）平成15(2003)年度放射性炭素年代測定及び炭化材樹種同定

株式会社　パリノ・サーヴェイ

１　試料

試料は、各遺構から出土した炭化物11点（試料番号1-11）である。炭化物は、試料番号３が種実遺体で、他は全て炭化材である。

２　分析方法

測定は株式会社加速器研究所の協力を得て、AMS法により行った。なお、放射性炭素の半減期はLIBBYの半減期5,568年を使用する。また、測定年代は1950年を基点とした年代（BP）であり、誤差は標準偏差（One Sigma）に相当する年代である。なお、暦年較正は、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV4.4（Copyright 1986-2002 M Stuiver and PJ Reimer）を用い、いずれの試料も北半球の大気圏における暦年校正曲線を用いる条件を与えて計算させている。なお、炭化材については、実体鏡による木材組織の観察で樹種の同定を実施する。

3　結果

結果を表1・10に示す。試料の測定年代（補正年代）は、ＳＩ16・ＳＩ23・ＳＩ26・ＳＩ103・ＳＩ203・ＳＩ576・ＳＩ609・ＳＩ610・ＳＩ854から出土した炭化材が約1100～1500年前、ＳＫ320から出土した炭化材が約2300～2400年前の値を示す。また、炭化材は、ヒノキ科、アサダ、コナラ節、ケヤキ、カエデ属、クリ等に同定された。

なお、炭化材の年代測定値は、古材の利用や樹齢を重ねた樹木の利用部位の違いによる年代差等の理由により、遺構構築年代と異なる場合がある。

(４)平成17(2005)年度放射性炭素年代測定

株式会社　加速器分析研究所

1　遺跡の位置

釈迦内中台Ⅰ遺跡は、秋田県大館市釈迦内中台103番2号外（北緯40°18′30″、東経140°34′16″）に所在する。

2　遺跡の立地

釈迦内中台Ⅰ遺跡は西側を流れる下内川と東側を流れる乱川によって形成された河岸段丘上に立地する。遺跡の標高は約75mである。

3　測定の意義

釈迦内中台Ⅰ遺跡から検出した遺構、出土した遺物の年代を明らかにするとともに、遺跡が営まれた時期および性格を特定するための客観的な資料を得る。

4　測定対象試料

釈迦内中台Ⅰ遺跡は、平安時代の集落跡と考えられている。測定対象となった試料は、住居跡（ＳＩ28Ａ、ＳＩ66）や製鉄炉（ＳＳ17、ＳＳ65、ＳＳ1001）から採取された炭化物5点である（IAAA-60479～60483）。試料は乾燥あるいは若干湿った状態で保管されていた。主要な遺構は、西暦915年に降下したと考えられる十和田ａ火山灰を掘り込んでおり、それより新しい時期の集落跡と推定される。出土した土器から平安時代前半（10世紀前半から中頃）に営まれた集落と考えられる。

5　化学処理工程

1）メス・ピンセットを使い、根・土等の表面的な不純物を取り除く。

2）AAA（Acid Alkali Acid）処理。酸処理、アルカリ処理、酸処理により内面的な不純物を取り除く。最初の酸処理では1Nの塩酸（80℃）を用いて数時間処理する。その後、超純水で中性になるまで希釈する。アルカリ処理では0.001～1Nの水酸化ナトリウム水溶液（80℃）を用いて数時間処理する。その後、超純水で中性になるまで希釈する。最後の酸処理では1Nの塩酸（80℃）を用いて数時間処理する。その後、超純水で中性になるまで希釈する。その後、90℃で乾燥する。

3）試料を酸化銅1ｇと共に石英管に詰め、真空下で封じ切り500℃で30分、850℃で2時間加熱する。

４）液体窒素とエタノール・ドライアイスの温度差を利用し、真空ラインで二酸化炭素（CO_2）を精製する。
５）精製した二酸化炭素から鉄を触媒として炭素のみを抽出（還元）し、グラファイトを作製する。
６）グラファイトを内径１mmのカソードにハンドプレス機で詰め、それをホイールにはめ込み、加速器に装着し測定する。

６　測定方法

測定機器は、3MeVタンデム加速器をベースとした14C-AMS専用装置（NEC Pelletron 9SDH-2）を使用する。134個の試料が装填できる。測定では、米国国立標準局（NIST）から提供されたシュウ酸（HOxⅡ）を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。また、加速器により$^{13}C/^{12}C$の測定も同時に行う。

７　算出方法

１）年代値の算出には、Libbyの半減期5,568年を使用した。
２）BP年代値は、過去において大気中の炭素14濃度が一定であったと仮定して測定された、1950年を基準年として遡る放射性炭素年代である。
３）付記した誤差は、次のように算出した。

複数回の測定値について、χ^2検定を行い測定値が１つの母集団とみなせる場合には測定値の統計誤差から求めた値を用い、みなせない場合には標準誤差を用いる。
４）$\delta^{13}C$の値は、通常は質量分析計を用いて測定するが、AMS測定の場合に同時に測定される$\delta^{13}C$の値を用いることもある。

$\delta^{13}C$補正をしない場合の同位体比および年代値も参考に掲載する。

同位体比は、いずれも基準値からのずれを千分偏差（‰；パーミル）で表した。

$$\delta^{14}C = [(^{14}A_S - {}^{14}A_R) / {}^{14}A_R] \times 1000 \qquad (1)$$

$$\delta^{13}C = [(^{13}A_S - {}^{13}A_{PDB}) / {}^{13}A_{PDB}] \times 1000 \qquad (2)$$

ここで、　$^{14}A_S$：試料炭素の^{14}C濃度：$(^{14}C/^{12}C)_S$または$(^{14}C/^{13}C)_S$

$^{14}A_R$：標準現代炭素の^{14}C濃度：$(^{14}C/^{12}C)_R$または$(^{14}C/^{13}C)_R$

$\delta^{13}C$ は、質量分析計を用いて試料炭素の^{13}C 濃度（$^{13}A_S = {}^{13}C/^{12}C$）を測定し、PDB（白亜紀のベレムナイト（矢石）類の化石）の値を基準として、それからのずれを計算した。但し、加速器により測定中に同時に$^{13}C/^{12}C$を測定し、標準試料の測定値との比較から算出した$\delta^{13}C$を用いることもある。この場合には表中に〔加速器〕と注記する。

また、$\Delta^{14}C$は、試料炭素が$\delta^{13}C = -25.0$（‰）であるとしたときの^{14}C濃度（$^{14}A_N$）に換算した上で計算した値である。（１）式の^{14}C濃度を、$\delta^{13}C$の測定値をもとに次式のように換算する。

$^{14}A_N = {}^{14}A_S \times (0.975 / (1 + \delta^{13}C / 1000))^2$ ($^{14}A_S$として$^{14}C/^{12}C$を使用するとき)

または

$= {}^{14}A_S \times (0.975 / (1 + \delta^{13}C / 1000))$ ($^{14}A_S$として$^{14}C/^{13}C$を使用するとき)

$\Delta^{14}C = [(^{14}A_N - {}^{14}A_R) / {}^{14}A_R] \times 1000$ (‰)

貝殻などの海洋が炭素起源となっている試料については、海洋中の放射性炭素濃度が大気の炭酸ガス中の濃度と異なるため、同位体補正のみを行った年代値は実際の年代との差が大きくなる。多くの場合、同位体補正をしない$\delta^{14}C$に相当するBP年代値が比較的よくその貝と同一時代のものと考えられる木片や木炭などの年代値と一致する。

^{14}C濃度の現代炭素に対する割合のもう一つの表記として、pMC (percent Modern　Carbon)がよく使われており、$\Delta^{14}C$との関係は次のようになる。

$\Delta^{14}C = (pMC / 100 - 1) \times 1000$ (‰)

$pMC = \Delta^{14}C / 10 + 100$ (%)

国際的な取り決めにより、この$\Delta^{14}C$あるいはpMCにより、放射性炭素年代(Conventional Radiocarbon Age；yrBP)が次のように計算される。

$T = -8033 \times \ln[(\Delta^{14}C / 1000) + 1]$

$= -8033 \times \ln(pMC / 100)$

5）^{14}C年代値と誤差は，1桁目を四捨五入して10年単位で表示する。

8　測定結果

ＳＩ28Ａ出土試料（IAAA-60479）が1150±30、ＳＩ66出土試料（IAAA-60480）が1140±40、ＳＳ17出土試料（IAAA-60481）が1130±40、ＳＳ65出土試料（IAAA-60482）が1320±40、ＳＳ1001出土試料（IAAA-60483）が1250±40yrBPと測定された。釈迦内中台Ⅰ遺跡は、平安時代の集落跡と考えられている。主要な遺構は、西暦915年に降下した十和田Ａ火山灰を掘り込んでおり、より新しいと推定される。ＳＩ28ＡとＳＩ66、ＳＳ17は暦年較正値でも780～980yrcalBP（1σ）に収まり、平安時代前期頃の暦年代である。炭化物が由来する樹木の伐採年代は測定年代よりも若干新しいと考えられ、遺構内で炭化物が生じた年代は、さらにそれよりも若干新しい可能性が高い。したがって、これらの遺構は十和田ａ火山灰の降下後まもなく形成されたと推定される。ＳＳ65とＳＳ1001出土の炭化物は、他の遺構の試料を100～200年程遡る測定年代であり、奈良時代頃の暦年代である。測定年代と木材の伐採年代の差、さらに木材が燃焼され炭化物が生じた年代との差を考慮しても、測定年代に他の遺構と大きな差が生じることを想定し難いことから、遺構間の時期差を考慮すべきである。

第２表　2001年度放射性炭素年代測定及び暦年代較正の結果

測定番号(測定法)	試料データ	$\delta^{13}C_{PDB}$(‰)	^{14}C年代(yrBP±1σ)	^{14}C年代を暦年代に較正した年代	
				暦年代較正値	1σ暦年代範囲
PLD-1221 (AMS)	炭化材 No.1 (ブナ属) SK22	-26.7	580±50	cal AD 1330 cal AD 1340 cal AD 1395	cal AD 1305 - 1355 (67.5%) cal AD 1385 - 1410 (30.4%)
PLD-1222 (AMS)	炭化種子 No.12 (クルミ類の核) SI28	-24.3	1260±50	cal AD 725 cal AD 740 cal AD 770	cal AD 685 - 780 (83.9%) cal AD 790 - 810 (11.2%)
PLD-1223 (AMS)	炭化材 No.3 (スギ) SI52	-22.3	1870±50	cal AD 130	cal AD 80 - 180 (79.8%) cal AD 190 - 215 (20.2%)
PLD-1224 (AMS)	炭化材 No.4 (ケヤキ) SI74	-25.7	1265±50	cal AD 720 cal AD 745 cal AD 770	cal AD 680 - 780 (91.3%)
PLD-1225 (AMS)	炭化材 No.5 (スギ) SI119	-22.7	940±45	cal AD 1040 cal AD 1100 cal AD 1115 cal AD 1140 cal AD 1150	cal AD 1030 - 1070 (37.1%) cal AD 1080 - 1125 (43.2%) cal AD 1135 - 1160 (19.8%)
PLD-1226 (AMS)	炭化材 No.6 (スギ) SQ138	-24.6	970±45	cal AD 1030	cal AD 1020 - 1065 (43.4%) cal AD 1085 - 1125 (37.1%) cal AD 1140 - 1155 (19.6%)
PLD-1227 (AMS)	炭化材 No.7 (スギ) SI155	-24.5	1245±45	cal AD 775	cal AD 710 - 755 (38.0%) cal AD 760 - 780 (20.1%) cal AD 790 - 820 (20.9%) cal AD 840 - 860 (11.8%)
PLD-1228 (AMS)	炭化材 No.8 (クリ) SI190	-25.0	1150±50	cal AD 890	cal AD 825 - 840 (10.3%) cal AD 860 - 905 (32.4%) cal AD 910 - 975 (52.5%)
PLD-1229 (AMS)	炭化材 No.9 (モミ属) SKT358 裁ち割り試掘坑	-24.9	12970±100	cal BC 13640	cal BC 14005 - 13265 (100%)
PLD-1230 (AMS)	炭化材 No.10 (アサダ) SK413	-25.1	1280±50	cal AD 695 cal AD 700 cal AD 715 cal AD 750 cal AD 765	cal AD 680 - 775 (100%)

第３表　2002年度放射性炭素年代測定及び暦年代較正の結果

測定番号(測定法)	試料データ	$\delta^{13}C_{PDB}$(‰)	^{14}C年代(yrBP±1σ)	^{14}C年代を暦年代に較正した年代	
				暦年代較正値	1σ暦年代範囲
PLD-1882 (AMS)	炭化材 No.6 SI04 床面	-23.9	1230±60	cal AD 780	cal AD 715 - 750 (19.7%) cal AD 765 - 885 (77.9%)
PLD-1883 (AMS)	炭化材 No.7 SI05 RC113	-25.1	950±60	cal AD 1035 cal AD 1145 cal AD 1150	cal AD 1025 - 1130 (81.5%) cal AD 1135 - 1160 (18.4%)
PLD-1884 (AMS)	炭化材 No.8 SI18 C 区・1層	-25.2	970±70	cal AD 1030	cal AD 1015 - 1070 (41.4%) cal AD 1080 - 1130 (38.6%) cal AD 1135 - 1160 (17.6%)
PLD-1885 (AMS)	炭化材 No.9 SI24	-9.0	980±60	cal AD 1025	cal AD 1000 - 1065 (51.1%) cal AD 1080 - 1125 (32.1%) cal BC 1135 - 1155 (16.7%)
PLD-1887 (AMS)	炭化材 No.10 SB01P4・1層	-24.5	1030±70	cal AD 1005 cal AD 1010 cal AD 1015	cal AD 900 - 920 (13.8%) cal AD 945 - 1040 (72.6%)

第４表　2003年度暦年代較正結果

試料		δ13C(‰)	補正年代(BP)	測定年代	暦年較正年代(cal)			相対比	Code No.
SI16	D区出土炭化材11	-20.90±0.88	1250±40	1190±30	cal AD 689 - cal AD 781	cal BP 1,261 - 1,169		0.915	IAAA-31425
					cal AD 792 - cal AD 804	cal BP 1,158 - 1,146		0.085	
SI23	RC01 焼失家屋 炭化材(板)	-22.56±1.23	1250±40	1210±30	cal AD 691 - cal AD 703	cal BP 1,259 - 1,247		0.101	IAAA-31426
					cal AD 708 - cal AD 753	cal BP 1,242 - 1,197		0.438	
					cal AD 758 - cal AD 782	cal BP 1,192 - 1,168		0.218	
					cal AD 791 - cal AD 812	cal BP 1,159 - 1,138		0.159	
SI26	エリアMARON5 出土	-25.93±1.15	1110±40	1120±30	cal AD 895 - cal AD 924	cal BP 1,055 - 1,026		0.402	IAAA-31427
					cal AD 937 - cal AD 983	cal BP 1,013 - 967		0.598	
SI103	底部RS35付近の炭	-23.76±0.98	1220±40	1200±30	cal AD 775 - cal AD 881	cal BP 1,175 - 1,069		1.000	IAAA-31428
SI203	カマド炭1	-25.39±0.83	1100±40	1100±30	cal AD 897 - cal AD 922	cal BP 1,053 - 1,028		0.377	IAAA-31429
					cal AD 942 - cal AD 987	cal BP 1,008 - 963		0.623	
SK320	イコウ内 RC	-25.39±0.83	2320±40	2310±40	cal BC 405 - cal BC 364	cal BP 2,355 - 2,314		0.926	IAAA-31430
					cal BC 268 - cal BC 263	cal BP 2,218 - 2,213		0.074	
SK320	土器内部 RC	-23.14±0.81	2430±40	2400±40	cal BC 756 - cal BC 717	cal BP 2,706 - 2,667		0.201	IAAA-31431
					cal BC 708 - cal BC 704	cal BP 2,658 - 2,654		0.019	
					cal BC 539 - cal BC 527	cal BP 2,489 - 2,477		0.065	
					cal BC 524 - cal BC 407	cal BP 2,474 - 2,357		0.715	
SI576	RC-1	-22.78±0.87	1170±40	1140±30	cal AD 781 - cal AD 792	cal BP 1,169 - 1,158		0.101	IAAA-31432
					cal AD 807 - cal AD 894	cal BP 1,143 - 1,056		0.836	
					cal AD 928 - cal AD 935	cal BP 1,022 - 1,015		0.063	
SI609	入口 炭1	-23.24±0.78	1460±30	1430±30	cal AD 564 - cal AD 571	cal BP 1,386 - 1,379		0.085	IAAA-31433
					cal AD 578 - cal AD 588	cal BP 1,372 - 1,362		0.136	
					cal AD 597 - cal AD 642	cal BP 1,353 - 1,308		0.779	
SI610	炭1	-23.95±0.72	1290±30	1270±30	cal AD 686 - cal AD 724	cal BP 1,264 - 1,226		0.539	IAAA-31434
					cal AD 739 - cal AD 772	cal BP 1,211 - 1,178		0.461	
SI854	カマドRC1	-22.94±0.93	1120±40	1090±30	cal AD 894 - cal AD 904	cal BP 1,056 - 1,046		0.150	IAAA-31435
					cal AD 911 - cal AD 976	cal BP 1,039 - 974		0.850	

1)年代値の算出には、Libbyの半減期5568年を使用。
2)ＢＰ年代値は、1950年を基点として何年前であるかを示す。
3)付記した誤差は、測定誤差δ(測定値の68%が入る範囲)を年代値に換算した値。
計算には、ROCIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV4.4(Coppyright 1986-2002 M Stuiver and PJ Reimer)を使用
計算には表に示した丸める前の値を使用している

第5表　2005年度放射性炭素年代測定及び暦年代較正の結果

IAA Code No.	試　　料	BP年代および炭素の同位体比
IAAA-60479	試料採取場所 ： 秋田県大館市釈迦内中台 103番2号外　SI28A 試料形態 ：　炭化物 試料名(番号) ：1	Libby Age (yrBP) ： 1,150 ± 30 δ^{13}C (‰) 、(加速器) = -26.85 ± 0.58 Δ^{14}C (‰) = -133.1 ± 3.7 pMC (%) = 86.69 ± 0.37
#1325-1	(参考)　δ^{13}C の補正無し	δ^{14}C (‰) = -136.4 ± 3.5 pMC (%) = 86.36 ± 0.35 Age (yrBP) ： 1,180 ± 30
IAAA-60480	試料採取場所 ： 秋田県大館市釈迦内中台 103番2号外　SI66 試料形態 ：　炭化物 試料名(番号) ：2	Libby Age (yrBP) ： 1,140 ± 40 δ^{13}C (‰) 、(加速器) = -24.67 ± 0.6 Δ^{14}C (‰) = -132.6 ± 3.8 pMC (%) = 86.74 ± 0.38
#1325-2	(参考)　δ^{13}C の補正無し	δ^{14}C (‰) = -132 ± 3.7 pMC (%) = 86.8 ± 0.37 Age (yrBP) ： 1,140 ± 30
IAAA-60481	試料採取場所 ： 秋田県大館市釈迦内中台 103番2号外　SS17 試料形態 ：　炭化物 試料名(番号) ：3	Libby Age (yrBP) ： 1,130 ± 40 δ^{13}C (‰) 、(加速器) = -26.65 ± 0.59 Δ^{14}C (‰) = -131 ± 3.8 pMC (%) = 86.9 ± 0.38
#1325-3	(参考)　δ^{13}C の補正無し	δ^{14}C (‰) = -133.9 ± 3.7 pMC (%) = 86.61 ± 0.37 Age (yrBP) ： 1,160 ± 30
IAAA-60482	試料採取場所 ： 秋田県大館市釈迦内中台 103番2号外　SS65 試料形態 ：　炭化物 試料名(番号) ：4	Libby Age (yrBP) ： 1,320 ± 40 δ^{13}C (‰) 、(加速器) = -27.78 ± 0.63 Δ^{14}C (‰) = -151.6 ± 3.7 pMC (%) = 84.84 ± 0.37
#1325-4	(参考)　δ^{13}C の補正無し	δ^{14}C (‰) = -156.4 ± 3.6 pMC (%) = 84.36 ± 0.36 Age (yrBP) ： 1,370 ± 30
IAAA-60483	試料採取場所 ： 秋田県大館市釈迦内中台 103番2号外　SS1001 試料形態 ：　炭化物 試料名(番号) ：5	Libby Age (yrBP) ： 1,250 ± 40 δ^{13}C (‰) 、(加速器) = -25.87 ± 0.63 Δ^{14}C (‰) = -144 ± 3.8 pMC (%) = 85.6 ± 0.38
#1325-5	(参考)　δ^{13}C の補正無し	δ^{14}C (‰) = -145.5 ± 3.7 pMC (%) = 85.45 ± 0.37 Age (yrBP) ： 1,260 ± 40

第２節　出土材の樹種同定

（１）平成13(2001)年度炭化材の樹種同定

植田弥生（パレオ・ラボ）

１　はじめに

ここでは、大館市釈迦内に所在する当遺跡から出土した、炭化材の樹種同定結果を報告する。炭化材樹種を明らかにする事により、当遺跡での樹種利用の資料を知る目的で調査は実施された。なお、同一遺構から出土した炭化材を用いて放射性炭素年代測定が実施されている。より多くの樹種利用の情報を得るために、放射性炭素年代測定値用の試料の樹種も合わせ報告する。

２　炭化材樹種同定の方法

炭化材の３方向の断面を走査電子顕微鏡で観察し、材組織の特徴を基に同定を行った。横断面(木口)は炭化材を手で割り新鮮な平滑面を出し、接線断面(板目)と放射断面(柾目)は片刃の剃刀を各方向に沿って軽くあて弾くように割り面を出した。この３断面の試料を直径１cmの真鍮製試料台に両面テープで固定し、試料を充分乾燥させた後、金蒸着を施し、走査電子顕微鏡(日本電子㈱製　JSM-T100型)で観察と写真撮影を行った。

３　結果

結果の一覧を第７表に示した。検出された分類群は、モミ属･スギ･マツ属の針葉樹３分類群、アサダ･ブナ属･クリ･ケヤキ･カツラ･カエデ属･ハリギリの落葉広葉樹７分類群であった。

検出樹種の材組織記載

モミ属　Abies　マツ科　図版167　1a-1c(ＳＫＴ358 №9)

仮道管・放射柔細胞からなる針葉樹材。樹脂細胞はない。早材から晩材への移行はゆるやかである。放射柔細胞の壁は厚く、放射断面において細胞壁に数珠状肥厚がある。分野壁孔はスギ型やヒノキ型で、１分野に１～４個ある。炭化材では細胞の内腔断面が見える部分で、放射柔細胞の壁の特徴を確認しないと、スギと誤同定する恐れがある。

モミ属は常緑高木で、暖帯から温帯下部の山地に普通に見られるモミ、温帯上部の高山に生育するウラジロモミ・シラベ・アオモリトドマツ、北海道の山地に生育するトドマツの５種がある。いずれの材も組織は類似しており区別はできない。

スギ　Cryptomeria japonica D.Don　スギ科　図版167　2a-2c(ＳＩ52 №13)

仮道管・放射柔細胞・樹脂細胞からなる針葉樹材。早材から晩材への移行は急で、晩材部ははっきりしている。しかし当遺跡のスギ材は、典型的なスギ材とは異なり、晩材の仮道管壁の肥厚は少なかった。分野壁孔は壁孔縁が狭いスギ型、１分野に２～３個ある。

スギは本州以南の暖帯から温帯下部の湿気のある谷間に生育する常緑高木である。材はやや軽軟で加工は容易である。

マツ属　Pinus　マツ科　図版167　3a-3c(ＳⅠ55 №17)

垂直と水平の樹脂道がある針葉樹材。当試料は細胞壁が溶融しているうえにアテ材で、細胞壁に亀裂が入っている。垂直樹脂道はおもに晩材部にある。分野壁孔は窓状である。放射仮道管の特徴は明瞭に捕えられなかったため、マツ属の同定レベルに止まった。

マツ属には、二葉松類の複維管束亜属(アカマツとクロマツ)と五葉松類の単維管束亜属(ヒメコマツやハイマツなど)がある。材は硬く耐水性がある。

アサダ　Ostrya japonica Sarg.　カバノキ科　図版168　4a-4c(ＳＫ413 №10)

小型の管孔が単独または2～数個が放射方向に複合して分布し、分布数は多い散孔材。道管の壁孔は交互状、穿孔は単一、内腔に細いらせん肥厚がある。放射組織は同性、1～2細胞幅、道管との壁孔の孔口は大きい。

アサダは温帯の山地に生育する落葉高木で、材質は堅く丈夫である。

ブナ属　Fagus　ブナ科　図版168　5a-5c(ＳＫ22 №1)

丸みをおびた小型の管孔が密在し、年輪界では極めて小型となる散孔材。道管の壁孔は交互状～階段状、穿孔は横棒数が10～20本の階段穿孔と単穿孔がある。放射組織は異性、細胞幅の少ないものと細胞高も高い広放射組織があり、道管との壁孔は大きなレンズ状である。

ブナ属は温帯域の極相林の主要構成樹種で、大木となる落葉樹でブナとイヌブナがある。

クリ　Castanea crenata Sieb. et Zucc.　ブナ科　図版168　6a-6c(ＳⅠ119 №15)

年輪の始めに大型の管孔が密に配列し、晩材部では非常に小型の管孔が火炎状に配列する環孔材。道管の孔は単一、内腔にはチロースがある。放射組織は単列同性、道管との壁孔は孔口が大きく交互状である。

クリは海道西南部以南の暖帯から温帯下部の山野に普通の落葉高木である。材は粘りがあり耐朽性にすぐれている。

ケヤキ　Zelkova serrata (Thunb.) Makino　ニレ科　図版169　7a-7c(ＳⅠ128 №2)

年輪の始めに大型の管孔が1層配列し、その後は小型の管孔が多数集合して接線状・斜状･塊状に配列する環孔材。道管の壁孔は交互状、穿孔は単一、小道管にはらせん肥厚がある。放射組織は異性、1～8細胞幅、細胞高は変化が多く、上下端や縁に大型の結晶細胞があり、道管との壁孔は交互状である。

ケヤキは暖帯下部から温帯の山中や川岸に生育する落葉高木である。材質は堅い。

カツラ　Cercidiphyllum japonicum Sieb.et Zucc.　カツラ科　図版169　8a-8c(ＳⅠ155 №7)

小型で多角形の管孔が年輪内に密在し、管孔の占有面積が多い散孔材。道管の壁孔はまばらな交互状や階段状、穿孔は横棒数が非常に多い階段穿孔である。放射組織は異性、1～2細胞幅、上下端に方形細胞と直立細胞が単列である。

カツラは北海道から九州の暖帯から温帯の渓谷に生育する落葉高木である。材は均質でやや軽軟、割裂性・切削性は良い。

カエデ属　Acer　カエデ科　図版169　9a-9c(ＳＫ22 №11)

小型の管孔が単独または2～3個が放射方向に複合して散在し、年輪界は不明瞭な散孔材。道管の壁孔は交互状、穿孔は単一、内腔に細いらせん肥厚がある。放射組織は同性、1～4細胞幅、道管と

の壁孔は交互状で孔口はやや大きい。

カエデ属は日本全土の暖帯から温帯の山地や谷間に生育する落葉広葉樹で、約26種と多くの変種が知られている。材は堅く緻密で割れにくく、保存性は中程度である。

ハリギリ　Kalopanax pictus (Thunb.)Nakai　ウコギ科　図版170　10a-10c(ＳＩ74 №14)

年輪の始めに大型の管孔が所々で間隔を開けながら１層配列しその間には小型の管孔が混在し、孔圏外では急に径を減じて非常に小型の管孔が多数複合して接線状・斜状・波状に配列する環孔材。道管の壁孔は交互状、穿孔は単一である。放射組織は異性、おもに５細胞幅の紡錘形、上下端に方形細胞があり、道管との壁孔は大きく交状である。ニレ属やケヤキに似るが、ハリギリには小道管にらせん肥厚がなく、放射組織と道管との壁孔は大きく、放射組織は20細胞高ぐらいの均一である。

４　まとめ

住居跡(ＳＩ28･52･74･119･155･190)からは、スギ･マツ属･クリ･ケヤキ･カツラ･ハリギリが検出された。スギ･ケヤキ･クリは、２軒以上から検出された樹種であることから、当遺跡で利用度の高かった樹種と思われ、特にスギの利用の多さが目立った。いずれの樹種も、建築材や道具類に使われる有用材である。ＳＩ190カマド出土の炭化材はクリであった。クリは燃料材としてもよく使われる樹種である。

土坑(ＳＫ)からは、ブナ属･カエデ属･アサダ･ケヤキの落葉広葉樹が検出された。集石遺構(ＳＱ138)からはスギが検出された。裁ち割り試掘坑(ＳＫＴ358)から出土した炭化材は、針葉樹のモミ属であった。当遺跡から出土した針葉樹材にはスギが多いが、この炭化材はモミ属であった上に、放射性炭素年代値はかなり古い値であった。

(２)平成14(2002)年度炭化材の樹種同定

植田弥生(パレオ・ラボ)

１　はじめに

ここでは、ＳＩ04のカマド２層、ＳＩ05、ＳＩ24、ＳＢ01のＰ４の１層から出土した炭化材の樹種同定結果を報告する。いずれも平安時代中頃(11世紀)の住居跡である。

２　試料と方法

まず横断面(木口)を手で割り、次に実体顕微鏡下で片歯の剃刀を使用して放射方向と接線方向で弾くように割り、放射断面と接線断面を作成する。この材の３方向(横断面・接線断面・放射断面)の断面を、走査電子顕微鏡で拡大して観察を行ない同定を決定した。走査電子顕微鏡用の試料は、３断面を５mm角以下の大きさに整え、直径１cmの真鍮製試料台に両面テープで固定し、試料を充分乾燥させた後、金蒸着を施し、走査電子顕微鏡(日本電子㈱製　JSM-T100型)で観察と写真撮影を行った。

なお、針葉樹材は放射断面の早材部の分野壁孔が重要な形質なので、放射断面を異なる部位で複数作成し観察した。

残りの炭化材試料は、秋田県埋蔵文化財センターに保管されている。

3　結果

同定結果の一覧を表8に示し、表9に住居別の検出樹種を比較した。

ＳＩ04とＳＢ01からはスギが、ＳＩ05はケヤキ、ＳＩ24からはヤマウルシと当年生の広葉樹材とススキ属が検出された。試料95から検出されたススキ属は住居の屋根材や壁材であったと推測される。ススキ属に混じり検出された当年生の枝は、単なる混入ではなくススキ属の束と共に使用された構築材の一部である可能性があるのではないだろうか。住居跡出土のススキ属の集積と共に当年生の広葉樹材が検出される事をしばしば経験する。

以下に同定根拠を記す。

材組織記載

スギ　Cryptomeria japonica D.Don　スギ科　図版172　5(試料番号93) 6(試料番号97)

仮道管・放射柔細胞・樹脂細胞からなる針葉樹材。試料93と97は年輪界で薄く剥がれた破片で横断面と接線断面は作成できなかったが、晩材に近い早材部の放射断面が観察でき、分野壁孔は大きなスギ型で1分野に2個あり、孔口は晩材部に近いため円形であるが壁孔縁は狭いことが確認された。このような放射断面の特徴からスギと同定された。

ケヤキ　Zelkova serrata (Thunb.) Makino　ニレ科　図版171　1a-1c(試料番号94)

年輪の始めに中型の管孔が1～2層配列し、その後小型の管孔が集合して接線状・斜状に配列する環孔材。道管の壁孔は交互状、穿孔は単一、小道管にはらせん肥厚がある。放射組織は異性、1～5細胞幅の紡錘形、上下端や縁に結晶細胞があり、道管との壁孔は交互状である。

ヤマウルシ　Rhus trichokarpa Miq.　図版171　2a-2c(試料番号96)

年輪始めに中型の管孔が分布し徐々に径を減じて行き、年輪界では小型の管孔が斜状や放射状に2～数個複合し分布している環孔材。道管の壁孔は大きく、単穿孔、小道管にらせん肥厚がある。放射組織は異性、1～3細胞幅、輪郭はやや不整である。

広葉樹　broad-leaved tree　図版171　3(試料番号95)

中心に髄があり、当年生であるため環孔材か散孔材かは判らない。

ススキ属　Miscanthus イネ科　図版171　4(試料番号95)

直径5～8mmの草本性の稈で節がある。稈は中空ではなくスポンジ状の基本組織で埋まりその中に維管束が散在している。稈の外周には厚い厚壁細胞層にかこまれた維管束が1または2層並んでおり特に稈の中心部側でその層は厚くなる。それより内側に散在する維管束の周囲の厚壁細胞層は薄い。

(3)平成15(2003)年度水場遺構出土木材の樹種同定

株式会社　パリノ・サーヴェイ

1　試料

試料は、ＳＥ1000の木枠5点（No.3,13,22,44,48）である。

2　分析方法

剃刀の刃を用いて木口（横断面）・柾目（放射断面）・板目（接線断面）の3断面の徒手切片を作

製し、ガム・クロラール（抱水クロラール，アラビアゴム粉末，グリセリン，蒸留水の混合液）で封入し、プレパラートを作製する。作製したプレパラートは、生物顕微鏡で観察・同定する。

3　結果

樹種同定結果を表3に示す。木材は、針葉樹1種類（スギ）と広葉樹3種類（オニグルミ・クリ・ケヤキ）に同定された。各種類の解剖学的特徴等を記す(図版173・174)。

・**スギ**（Cryptomeria japonica (L. f.) D. Don）　スギ科スギ属

軸方向組織は仮道管と樹脂細胞で構成され、仮道管の早材部から晩材部への移行はやや急で、晩材部の幅は広い。樹脂細胞が晩材部に認められる。放射組織は柔細胞のみで構成され、柔細胞の壁は滑らか。分野壁孔はスギ型で、1分野に2～4個。放射組織は単列、1～15細胞高。

・**オニグルミ**<根株>（Juglans mandshurica Maxim. subsp. sieboldiana (Maxim.) Kitamura）　クルミ科クルミ属

散孔材で、道管は単独または2～3個が放射方向に複合して散在し、年輪界に向かって径を漸減させる。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、1～3細胞幅、1～30細胞高。軸方向柔細胞は短接線状に配列する。

オニグルミの幹材と比較して道管径が小さい、道管の分布密度が高い等の点で違いがある。これらのことから、根株材に同定される。

・**クリ**（Castanea crenata Sieb. et Zucc.）　ブナ科クリ属

環孔材で、孔圏部は1～4列、孔圏外で急激～やや緩やかに管径を減じた後、漸減しながら火炎状に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1～15細胞高。

・**ケヤキ**（Zelkova serrata (Thunb.) Makino）　ニレ科ケヤキ属

環孔材で、孔圏部は1～2列、孔圏外で急激に管径を減じた後漸減、塊状に複合し接線・斜方向の紋様をなす。道管は単穿孔を有し壁孔は交互状に配列、小道管内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は異性、1～8細胞幅、1～50細胞高。放射組織の上下縁辺部を中心に結晶細胞が認められる。

4　考察

木枠には、スギ、クリ、ケヤキ、オニグルミ<根株>の4種類が認められ、少なくとも4種類の木材が利用されていたことが推定される。このうち、スギやクリは、これまで県内で行われた調査でも建築部材等に確認されている。スギでは木理が通直で割裂性が高く、楔等を使用することで容易に板や角材を製作できることができ、耐水性も比較的高い。また、クリは強度や耐朽性に優れた材質を有している。これらの点がスギやクリが利用されている背景に考えられる。ケヤキについても、強度や耐水性が比較的高いことから、材質面が考慮される可能性がある。一方、オニグルミは強度に優れているが、今回確認された組織は根株の組織であり、幹材ではない。点数に対して種類数が多いことも考慮すると、周辺で入手可能な様々な木材が利用された可能性がある。今回樹種同定を行った他にも部材があるのであれば、今後残りの部材についても樹種同定を行い、種類構成を明らかにしたい。

（４）平成17(2005)年度炭化材の樹種同定

株式会社　加速器分析研究所

はじめに

釈迦内中台Ⅰ遺跡は、下内川左岸の河岸段丘上に位置する。今回の発掘調査により、平安時代の集落跡に伴う住居跡、掘立柱建物跡、土坑や製鉄関連遺構等が検出されている。

本報告では、木材利用に関する資料を得るため、竪穴住居跡や排滓場等から出土した炭化材の樹種同定を実施する。

1　試料

試料は、住居跡や排滓場等から出土した炭化材30点（試料番号1-30）である。

2　分析方法

分析は、パリノ・サーヴェイ株式会社の協力を得た。試料を自然乾燥させた後、木口(横断面)・柾目(放射断面)・板目(接線断面)の３断面の割断面を作製し、実体顕微鏡および走査型電子顕微鏡を用いて木材組織を観察し、その特徴から種類を同定する。なお、同定の根拠となる顕微鏡下での木材組織の特徴等については、島地・伊東(1982)およびWheeler他(1998)を参考にする。また、各樹種の木材組織の配列の特徴については、林(1991)、伊東(1995,1996,1997,1998,1999)や独立行政法人森林総合研究所の日本産木材識別データベースを参考にする。

3　結果

樹種同定結果を表11に示す。試料番号2は土塊であり、炭化物が認められなかった。また、試料番号7、8は微細な炭粉が塊状に固まったものであり、木材組織が観察できなかった。その他の試料はいずれも炭化材である。このうち、試料番号19、28はいずれも広葉樹材であるが、試料番号19は保存が悪く、試料番号28は節部分であった。この２点については、種類の同定には至らなかった。その他の炭化材は、針葉樹２種類（スギ・イチイ）と広葉樹３種類（サワグルミ・クリ・ニレ属）に同定された。各種類の解剖学的特徴等を記す(図版175・176)。

・**スギ**（Cryptomeria japonica (L. f.) D. Don）　スギ科スギ属

軸方向組織は仮道管と樹脂細胞で構成される。仮道管の早材部から晩材部への移行はやや急で、晩材部の幅は比較的広い。樹脂細胞はほぼ晩材部に認められる。放射組織は柔細胞のみで構成される。分野壁孔はスギ型で、１分野に２～４個。放射組織は単列、１～15細胞高。

・**イチイ**（Taxus cuspidata Sieb. et Zucc.）　イチイ科イチイ属

軸方向組織は仮道管のみで構成され、樹脂道および樹脂細胞は認められない。仮道管の早材部から晩材部への移行はやや急で、晩材部の幅は狭い。仮道管内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は柔細胞のみで構成される。分野壁孔はヒノキ型で、１分野に１～２個。放射組織は単列、１～５細胞高。

・**サワグルミ**（Pterocarya rhoifolia）　クルミ科サワグルミ属

散孔材で、道管は比較的大径、単独または２～３個が複合して散在し、年輪界付近でやや急激に管径

第７表　2001年度出土炭化材樹種

遺構	試料No.	検出樹種	備考
SK22	No.１	ブナ属	PLD-1221
	No.11	カエデ属	
SI28	No.２	ケヤキ	
	No.12	クルミ類の核	PLD-1222
SI52	No.３	スギ	PLD-1223
	No.13	スギ	
SI74	No.４	ケヤキ	PLD-1224
	No.14	ハリギリ	
SI119	No.５	スギ	PLD-1225
	No.15	クリ	
SQ138	No.６	スギ	PLD-1226
	No.16	スギ	
SI155	No.７	スギ	PLD-1227
		クリ	
		カツラ	
	No.17	スギ	
		マツ属	
SI190	No.８	クリ	PLD-1228
	No.18	クリ	カマド出土
SKT358 裁ち割り試掘坑	No.９	モミ属	
	No.19	モミ属	PLD-1229
SK413	No.10	アサダ	PLD-1230
	No.20	ケヤキ	

第８表　2002年度住居跡別の検出樹種

遺跡	試料番号	遺構		樹種	時期
釈迦中台Ⅰ遺跡	93	SI04	カマド2層	スギ	平安時代中頃(11世紀)
釈迦中台Ⅰ遺跡	94	SI05	RC113	ケヤキ	平安時代中頃(11世紀)
釈迦中台Ⅰ遺跡	95	SI24		広葉樹	平安時代中頃(11世紀)
				ススキ属	
釈迦中台Ⅰ遺跡	96	SI24		ヤマウルシ	平安時代中頃(11世紀)
釈迦中台Ⅰ遺跡	97	SB01	P4 1層	スギ	平安時代中頃(11世紀)

第９表　住居跡別の検出樹種(平安時代中頃)

検出樹種	SI04	SI05	SI24	SB01	合計
スギ	1			1	2
ケヤキ		1			1
ヤマウルシ			1		1
広葉樹			1		1
ススキ属			1		1
合計	1	1	3	1	6

第10表　2003年度樹種同定結果２

試料番号	遺構名	試料名	試料の質	樹種
1	SI16	D区出土炭化材11	炭化材	ヒノキ科
2	SI23	RC01 焼失家屋炭化材(板)	炭化材	ヒノキ科
3	SI26	エリアMARON5	炭化種実	トチノキ
4	SI103	底部RS35付近	炭化材	アサダ、コナラ節 ケヤキ、カエデ属
5	SI203	カマド炭1	炭化材	広葉樹（環孔材）
6	SK320	イコウ内 RC	炭化材	樹皮
7	SK320	土器内部 RC	炭化材	クリ、樹皮
8	SI576	RC-1	炭化材	クリ
9	SI609	入口 炭1	炭化材	ヒノキ科
10	SI610	炭1	炭化材	クリ
11	SI854	カマドRC1	炭化材	針葉樹

第７表　2005年度樹種同定結果

番号	地点	遺物番号	樹種	備考
1	SI28A	RW1	クリ	
2	SI28A	RW3	不明	土塊
3	SI28A	RW2	クリ	
4	SI28A	RW7	スギ	
5	SI28A	RW34	スギ	
6	SI28A	RW70	クリ	
7	SI28A	RW56	不明	炭粉の塊
8	SI28A	RW47	不明	炭粉の塊
9	SI28A	RW54	スギ	
10	SI28A	RW65	クリ	
11	SI28A	RW66	クリ	
12	SI28A	RW69	スギ	
13	SI28A	RW68	スギ	
14	SI66	RW18	スギ	
15	SI66	RW2	スギ	
16	SI66	RW7	スギ	
17	SI66	RW8	スギ	
18	SI66	RW26	スギ	
19	SI66	RW30	広葉樹(散孔材)	
20	SS10･14	排滓場5層	クリ	
21	SS34	排滓場　d10　1層	サワグルミ	
22	SS34	排滓場　e10　1層	ニレ属	
23	SS34	排滓場　e9　2層	クリ	
24	SS34	排滓場　f10　2層	クリ	
25	SS34	排滓場　イ8　2層	イチイ	
26	SS34	排滓場　c6　3層	ニレ属	
27	SS34	排滓場　c8　3層	クリ	
28	SS34	排滓場　g9　3層	広葉樹(節)	
29	SS34	排滓場kq60　4層	ニレ属	
30	SS1002	排滓場　下部作業場3層	クリ	

を減少させる。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織はほぼ同性、１～２細胞幅、１～20細胞高。

・クリ（Castanea crenata Sieb. et Zucc.）　ブナ科クリ属

環孔材で、孔圏部は３～４列、孔圏外で急激～やや緩やかに管径を減じた後、漸減しながら火炎状に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、１～15細胞高。

・ニレ属（Ulmus）　ニレ科

環孔材で、孔圏部は１～２列、孔圏外で急激に管径を減じた後漸減、塊状に複合し接線・斜方向に紋様状あるいは帯状に配列し、年輪界に向かって径を漸減させる。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列、小道管内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は同性、１～５細胞幅、１～40細胞高。

４　考察

炭化材は竪穴住居跡から出土したものと排滓場から出土したものとがある。竪穴住居跡から出土した炭化材は、ＳＩ28Ａから出土した13点とＳＩ66から出土した６点がある。いずれも住居構築材などに由来する可能性があるが、出土状況などの詳細は不明である。ＳＩ28Ａから出土した炭化材は、土塊や炭粉が塊状に固まった３点を除く10点がスギ５点、クリ５点に同定された。一方、ＳＩ66の炭化材は、種類不明の広葉樹１点を除く５点がスギに同定された。この結果から、スギやクリが利用されていたことが推定される。スギは木理が通直で割裂性が高く、加工は容易である。クリは、重硬で強度・耐朽性が高いが、加工は困難な部類に入る。

排滓場の炭化材は、製鉄燃料材などの一部の可能性があるが、詳細は不明である。クリが多いが、他にも針葉樹のイチイ、広葉樹のサワグルミ、ニレ属が認められ、クリを中心に少なくとも４種類の木材が利用されていたことが推定される。イチイは針葉樹としては比較的重硬な部類に入る。また、広葉樹のサワグルミやニレ属も重硬な材質を有している。排滓場の炭化材には重硬で強度の高い木材が利用される傾向があり、そうした材質の木材を選択した可能性がある。

《引用文献》

林　昭三,1991,日本産木材　顕微鏡写真集.京都大学木質科学研究所.
伊東　隆夫,1995,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅰ.木材研究・資料31,京都大学木質科学研究所,81-181.
伊東　隆夫,1996,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅱ.木材研究・資料32,京都大学木質科学研究所.66-176.
伊東　隆夫,1997,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅲ.木材研究・資料33,京都大学木質科学研究所,83-201.
伊東　隆夫,1998,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅳ.木材研究・資料34,京都大学木質科学研究所,30-166.
伊東　隆夫,1999,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅴ.木材研究・資料35,京都大学木質科学研究所,47-216.
島地　謙・伊東　隆夫,1982,図説木材組織.地球社,176p.
Wheeler E.A.,Bass P. and Gasson P.E.（編）,1998,広葉樹材の識別　ＩＡＷＡによる光学顕微鏡的特徴リスト.伊東　隆夫・藤井智之・佐伯　浩（日本語版監修）,海青社,122p.［Wheeler E.A.,Bass P. and Gasson P.E.(1989)IAWA List of Microscopic Features for Hardwood Identification］

第３節　出土製鉄関連遺物分析

竹原弘展（パレオ･ラボ）

１　はじめに

釈迦内中台Ⅰ遺跡では平安時代（10世紀代）の集落跡で製鉄工房域も付属しており、製鉄活動が営まれていたことが明らかになっている。当遺跡より出土した鉄滓と鉄製品について、観察･分析した。

２　試料と方法

分析対象試料は、釈迦内中台Ⅰ遺跡で検出した鉄滓５点と鉄製品５点の計10点である（第12・13表）。

調査項目としては、試料断面の走査型電子顕微鏡による反射電子像の観察および付属するエネルギー分散型X線分析装置による鉱物組織の定性・簡易定量分析を行った。また、波長分散型蛍光X線分析装置による試料全体の半定量分析、鉄滓試料はX線回折分析による鉱物の同定も併せて行った。

断面観察用試料の作成には、包埋樹脂に注型用高透明エポキシ樹脂を使用し、一部を岩石カッターで切り取った後包埋した。包埋試料はディスコプランで研磨した後、カーボランダムの#3000、ダイヤモンド粒子の1μmの順で研磨し、観察･分析面とした。観察・分析には、走査電子顕微鏡JSM-5900LV（日本電子テクニクス株式会社製、以後SEM）および付属するエネルギー分散型X線分析装置JED-2200（検出器はスーパーミニカップEDS検出器EX-54130MSKで検出可能元素はB～U、以後EDS）を使用した。試料は予めカーボン蒸着を施し、導電性を持たせた。組織観察には反射電子の組成像を用い、相ごとに定性・簡易定量分析を実施した。

X線回折分析用試料は、各鉄滓の内部を一部切り出し、メノウ製乳鉢でよく粉砕した粉末試料を用いた。分析装置は、株式会社リガク製のＸ線回折装置MiniFlex（Cu管球、15mA、30kV）を使用した。

蛍光X線分析用試料は、X線回折分析と同様に作成した粉末試料を、塩化ビニル管にセルロース粉末を詰めて１トンプレスしたものの上に薄く広げ、20トンで１分間プレスし分析用試料とした。分析にはフィリップス社製波長分散型蛍光X線分析装置MagiX（PW2424型、ターゲットはロジウムRh）を使用し、ファンダメンタルパラメータ法による半定量分析を行った。

３　結果および考察

SEMによる断面観察像とEDSのスペクトル図を第14表及び図版177～180に、蛍光X線分析結果を表15、16に示す。鉄滓、鉄製品とも金属鉄はほとんど残っておらず、残っていても極微小であった。また、鉄滓について行ったX線回折分析では、ピークがほとんど検出できなかった。これは、分析装置中のX線発生装置のターゲットがCuであったため、今回のようなFeの多い試料の場合は蛍光X線が発生してバックグラウンドが高くなってしまうためと考えられる（大野他、1987）。

・鉄滓№1(図版177)

炉体内より出土した炉内滓である。写真（図版177-1①,②）のように流動したような形状である。

断面観察すると、針状の相と微細樹枝状の相が多く見られた（図版177-1③）。針状の相からはFeに加えてTiが比較的多く検出されることから、イルメナイト（$FeO･TiO_2$）と思われる。微細な樹枝状の相からは、主にFeとTiが検出され、形状と併せてウルボスピネル（$2FeO･TiO_2$）、さらにMgとAlが同時に検出されることからスピネル（MgAl2O4）およびヘーシナイト（$FeO･Al_2O_3$）を固溶しているものと思われる。微細な球状の輝度の高い相が極少量ながら存在しており、分析したところほぼFeのみでOもほとんど見られないことから、これは金属鉄である。また、ファイヤライト（$2FeO･SiO_2$）がこの試料では見られなかった。

X線回折では、明確なピークは得られなかった。

・鉄滓№2(図版177)

排滓場から出土した炉底塊で、椀型を呈する（図版177－1⑧,⑨）。

断面は、中心から上部にかけては結晶が大きく発達している（図版177－2①）。明色多角形の相はFe、Tiを主とするウルボスピネルにヘーシナイトの固溶体、中間色相はFeとSiが多く検出されていることからファイヤライトと思われる。ファイヤライトの部分からはMgやMnも検出されており、フォルステライト（Mg_2SiO_4）、テフロアイト（Mn_2SiO_4）を固溶していると思われる。

下部では、ウルボスピネルにヘーシナイトの固溶体、ファイヤライトにフォルステライト、テフロアイトの固溶体に加えて、針状のイルメナイトが見られる。中～上部に比べてウルボスピネルの量が少なく、上部ほどは発達していない（図版177－2②）。

X線回折分析ではわずかながら、ウルボスピネルが検出された。

・鉄滓№3(図版177・178)

排滓場より出土した炉底塊で、椀型である（図版177－2⑩,⑪）。鉄滓№2よりはやや小ぶりである。

上部では結晶が大きく発達しており、明色多角形のウルボスピネルにヘーシナイトの固溶体が見られる（図版178－3②）。また、中間色レース状の相からはFeとSiに加えてMgとMnも検出され、ファイヤライトにファルステライトとテフロアイトを固溶していると考えられる。ごく微小ながら針状のイルメナイトも見られる。

下部（図版178－3①）も、観察された相の種類は同じだが、こちらはウルボスピネルが少なくファイヤライトが大きく成長している。

X線回折分析ではわずかながら、ウルボスピネルが検出された。

・鉄滓№4(図版178)

上部作業場より出土した炉内滓で、不定形である（図版178－3⑪,⑫）。

断面を見ると、全体的に空隙が多く入り、他の鉄滓で見られるガラス質の部分に当たる箇所がほとんど残っていない（図版178－4①）。FeとOのみ検出された錆化鉄の相と、ウルボスピネルにヘーシナイト、スピネルの固溶体の相、ファイヤライトにフォルステライトの固溶体の相が観察された。

X線回折分析ではわずかながら、ウルボスピネルが検出された。

・鉄滓№5(図版178・179)

下部作業場より出土した炉内滓で、不定形である（図版178－4⑤,⑥）。

断面を見ると、主に針状と板状の相が見られた（図版178－4⑦）。明色不定形の相からは、FeとOが検出され、錆化鉄と考えられる。針状の相からは、FeとTiが主に検出され、イルメナイトと考えられる。一方、板状の相を分析すると、Feに対するTiの割合が針状の相よりさらに高く検出されており、これはおそらくフェロシュードブルッカイト（FeO·2TiO2）と思われる。

X線回折では、明確なピークは得られなかった。

・鉄製品№1(図版179)

刀子である。錆膨れが激しく、中心部は空洞化している。

断面中にあった鉄中非金属介在物を分析したところ、Fe、Tiが主に検出され、加えてMg、Alなども見られることから、ウルボスピネルにヘーシナイト、スピネルの固溶体であると思われる。

・鉄製品№2(図版179)

棒状鉄製品である。中心部は空洞化している。

金属鉄がほとんど見られず、非金属介在物も見当たらなかった。

・鉄製品№3(図版179)

穂摘具で、やはり錆が進行し、中心部は空洞化している。

これも鉄製品№2と同じく、金属鉄がほとんど見られず、非金属介在物も見当たらなかった。

・鉄製品№4(図版179)

釘で錆の進行により中心は空洞化している。

断面の鉄中非金属介在物はFe、Ti、Alが検出され、ウルボスピネルとヘーシナイトの固溶体と思われる。

・鉄製品№5(図版180)

板状鉄製品である。錆が進行しており、中心は空洞化している。

断面の鉄中非金属介在物よりFe、Ti、Al、Mgが検出された。ウルボスピネルのヘーシナイトとスピネルの固溶体と思われる。

４　終わりに

釈迦内中台Ⅰ遺跡より出土した鉄滓および鉄製品について、観察･分析を行った。

鉄滓中からはウルボスピネルなどのTiを含む鉱物が多く見られ、いずれも原料に砂鉄を用いている。これら鉄滓は、断面の観察結果と蛍光X線分析結果より製錬段階で発生したものと考えられる。

鉄製品は金属鉄がほとんど残っていなかったため、金属組織については不明であったが、鉄中非金属介在物の存在より、Ti系の鉱物が検出されたことからやはり砂鉄を原料するものとわかる。化学組成も鉄滓中のそれに近い。

また、鉄滓中にイルミナイトやフェロシュードブルッカイトと見られるチタン鉱物が晶出していたことから、製錬作業の高温での操業が想定できよう。

《参考・引用文献》

窪田蔵郎（1983）考古学ライブラリー15 製鉄遺跡，ニューサイエンス社
牧野和孝（1998）鉱物資源百科辞典，日刊工業新聞社
大野勝美･川瀬晃･中村利廣（1987）X線回折分析．X線分析法，第2章，39-91，共立出版株式会社
大澤正己･鈴木瑞穂（2005）中道西山東山遺跡出土鍛冶関連遺物の金属学的調査．中道西山東山遺跡，第5章第1節，149-173，財団法人 鳥取県教育文化財団 埋蔵文化財センター
大沢正己･鈴木瑞穂（2005）館開野開遺跡出土鍛冶･鋳造関連遺物の金属学的調査．志賀町 館開野開遺跡，第6章第1節，76-102，財団法人石川県埋蔵文化財センター
吉岡康暢他（1994）国立歴史民俗博物館研究報告第58集 日本･韓国の鉄生産技術《調査編1》，国立歴史民俗博物館
吉岡康暢他（1994）国立歴史民俗博物館研究報告第59集 日本･韓国の鉄生産技術《調査編2》，国立歴史民俗博物館

第12表　分析対象鉄滓一覧

試料No.		出土地点	法量（寸法(㎜)、重量(g)）	備考
鉄滓	No.1	SS19	42×27×12、5.61	炉体内1層　炉内滓
	No.2	SS34	73×71×45、241.10	排滓場a9　2層　炉底塊
	No.3	SS10・14	76×39×38、101.40	排滓場5層　炉底塊
	No.4	SS65	35×22×12、8.39	上部作業場1層　炉内滓
	No.5	SS1001	74×58×39、69.88	下部作業場　炉内滓

第13表　分析対象鉄製品一覧

試料No.		出土地点	法量（寸法(㎜)、重量(g)）	備考
鉄製品	No.1	SI18	45×16×7、3.53	刀子 02-4
	No.2	遺構外	79×5×6、6.22	棒状 03-4②
	No.3	遺構外	25×19×3、1.43	穂摘具　03-6
	No.4	SI86	30×6×4、1.10	釘　01-31
	No.5	SI 22新	46×28×12、10.15	板状　03-14

第14表　EDS分析簡易定量値

試料No.		分析箇所	Na_2O	MgO	Al_2O_3	SiO_2	K_2O	CaO	TiO_2	V_2O_5	MnO	FeO
鉄滓	No.1	④	—	1.5	—	1.3	—	—	34.3	—	4.7	58.2
		⑤	—	0.9	4.9	4.6	—	—	18.2	—	—	71.4
		⑥	—	—	—	1.1	—	—	—	—	—	98.9
		⑦	—	2.3	10.5	38.6	0.4	1.8	2.1	—	—	44.3
	No.2	③	—	—	2.7	—	—	—	18.3	—	—	79.0
		④	—	3.6	—	20.2	—	—	—	—	6.0	70.2
		⑤	—	—	11.0	43.2	1.5	8.0	—	—	—	36.3
		⑥	—	—	1.8	—	—	—	20.8	—	—	77.4
		⑦	—	5.4	—	21.1	—	—	—	—	6.0	67.6
		⑧	—	—	—	2.1	—	0.8	32.5	—	5.9	58.7
		⑨	2.6	—	25.4	61.6	—	10.4	—	—	—	—
	No.3	③	—	—	2.0	—	—	—	20.7	—	—	77.3
		④	—	4.5	—	20.5	—	—	—	—	6.2	68.8
		⑤	—	—	—	—	—	—	33.9	—	5.7	60.4
		⑥	—	—	13.2	49.1	1.0	4.1	—	—	—	32.7
		⑦	—	—	2.2	—	—	—	22.0	—	—	75.8
		⑧	—	4.7	—	20.1	—	—	—	—	6.5	68.6
		⑨	—	—	12.8	50.0	0.9	4.4	2.5	—	—	29.5
		⑩	—	—	—	2.6	—	—	32.1	—	5.5	59.7
	No.4	②	—	—	—	—	—	—	—	—	—	100.0
		③	—	3.4	1.5	—	—	—	23.4	—	—	71.8
		④	—	14.9	—	29.9	—	—	—	—	—	55.2
	No.5	⑧	—	—	—	1.5	—	—	—	—	—	98.5
		①	—	3.8	1.7	0.6	—	—	73.4	—	—	20.4
		②	—	3.8	3.8	14.5	—	1.5	46.8	—	3.0	26.7
		③	—	5.6	7.9	40.6	—	2.7	5.4	—	4.9	32.9
鉄製品 (中の非金属介在物)	No.1	⑦	—	1.7	2.8	0.3	—	—	20.3	5.7	4.3	65.0
	No.4	⑥	—	—	1.5	1.2	—	—	18.5	—	—	78.8
	No.5	④	—	1.0	2.5	—	—	—	17.5	—	—	79.0

第15表　鉄滓の蛍光X線分析結果

試料No.		Na_2O	MgO	Al_2O_3	SiO_2	P_2O_5	S	Cl	K_2O	CaO	TiO_2	Cr_2O_3	MnO	Fe_2O_3
鉄滓	No.1	0.77	2.36	9.50	26.99	0.64	0.28	1.25	0.94	1.97	12.32	0.03	0.65	42.30
	No.2	1.15	2.05	7.49	18.40	0.78	0.11	0.37	0.44	2.51	15.28	0.02	0.59	50.81
	No.3	1.40	2.21	9.93	30.35	0.69	0.07	0.06	0.81	2.45	13.09	0.02	0.63	38.29
	No.4	0.16	3.55	2.75	14.69	0.77	0.06	0.01	0.04	1.12	8.88	0.02	0.52	67.44
	No.5	0.53	3.10	11.28	35.80	0.98	0.06	0.02	0.71	2.03	12.31	0.02	0.59	32.56

第16表　鉄製品蛍光X線分析結果

試料No.		Na	Mg	Al	Si	P	S	Cl	K	Ca	Ti	Mn	Fe	Co	Cu
鉄製品	No.1	0.08	0.04	0.51	2.01	0.19	0.06	0.04	0.03	0.07	0.04	—	58.83	0.07	—
	No.2	0.17	0.13	1.32	4.38	0.63	0.10	0.03	0.08	0.29	0.08	0.01	76.56	0.11	—
	No.3	0.08	0.03	0.50	2.24	0.60	0.11	0.02	0.04	0.06	0.07	0.01	79.45	0.10	—
	No.4	0.07	0.02	0.43	1.60	0.18	0.15	0.03	0.02	0.03	0.02	0.01	81.99	0.10	0.03
	No.5	0.11	0.06	0.83	2.83	0.19	0.08	0.05	0.04	0.13	0.11	—	80.56	0.10	0.04

第6章　まとめ

Ⅰ　はじめに

今回発掘調査した範囲では、古くは縄文時代からの遺物が認められ、早期の押型文土器や前期の円筒下層ｄ式の破片が少量出土している。縄文時代に属する遺構では陥し穴があり、形態が比較的新しいことから、おそらく後者の時期以降に属するとみられ、縄文時代のある時期には狩猟場として利用していたことが窺える。弥生時代には墓地として利用したことが分かっているが、これ以降は平安時代に至るまで遺構・遺物共に確認できない。

本遺跡立地点の利用が最も活発になるのは、平安時代でも十和田ａ火山灰降下後の10世紀代を中心とする時期で、この時期には計画的な村落が出現する。この集落も一定期間後には途絶え、また人の活動痕跡は認められなくなる。

中世に属する遺物はほぼ皆無であり、近世の遺物も少量出土するが、後世の撹乱からの出土が主で、近世羽州街道沿いの居住地背後に当たる本地区への廃棄物とみられる。この後現代までに、畑地または荒地として変化してきたことが窺える。

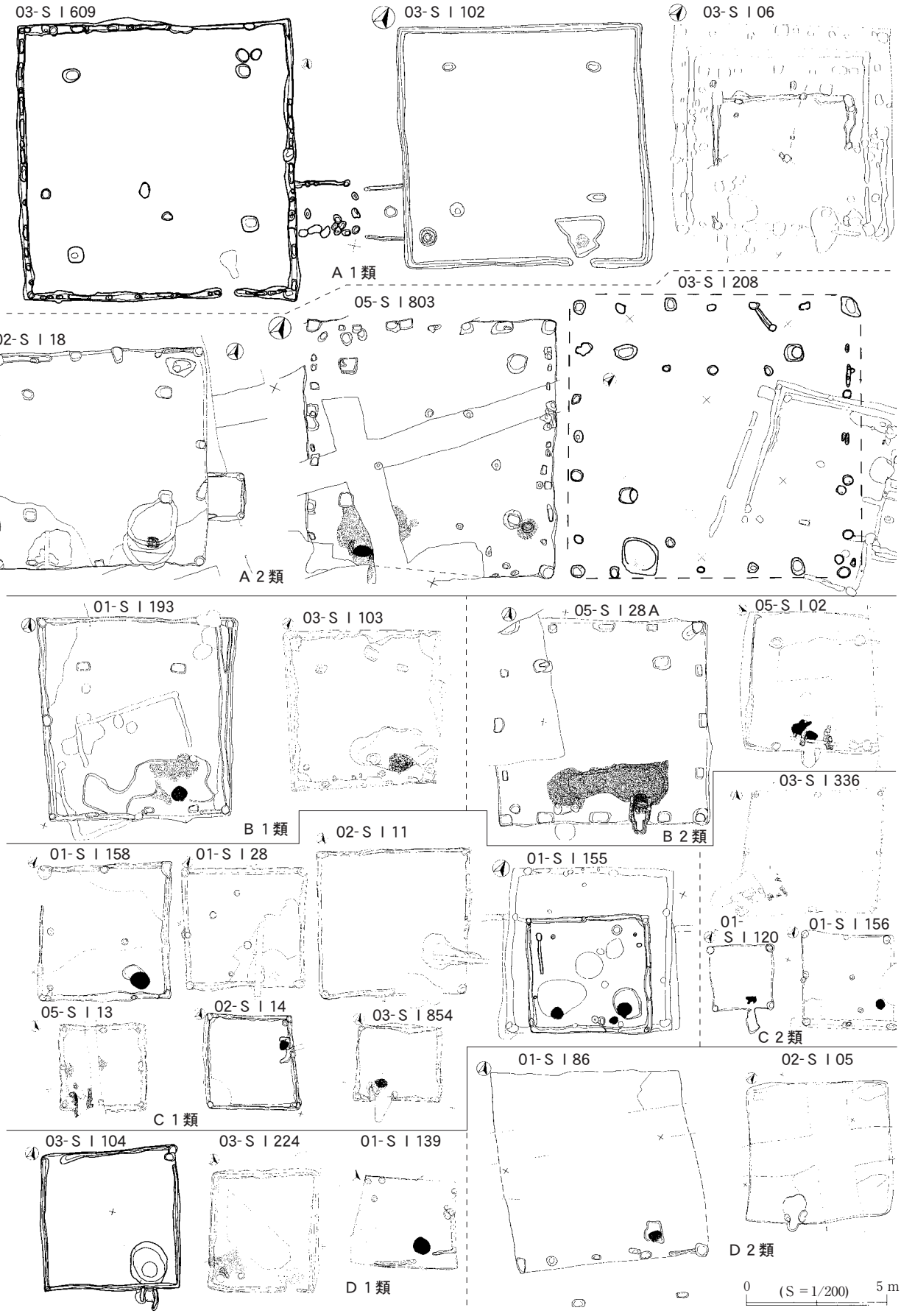
ここでは、釈迦内中台Ⅰ遺跡の最大の特徴である平安時代の遺構・遺物の様相や、集落構成とその変化について若干検討してみたい。

Ⅱ　平安時代の遺構について

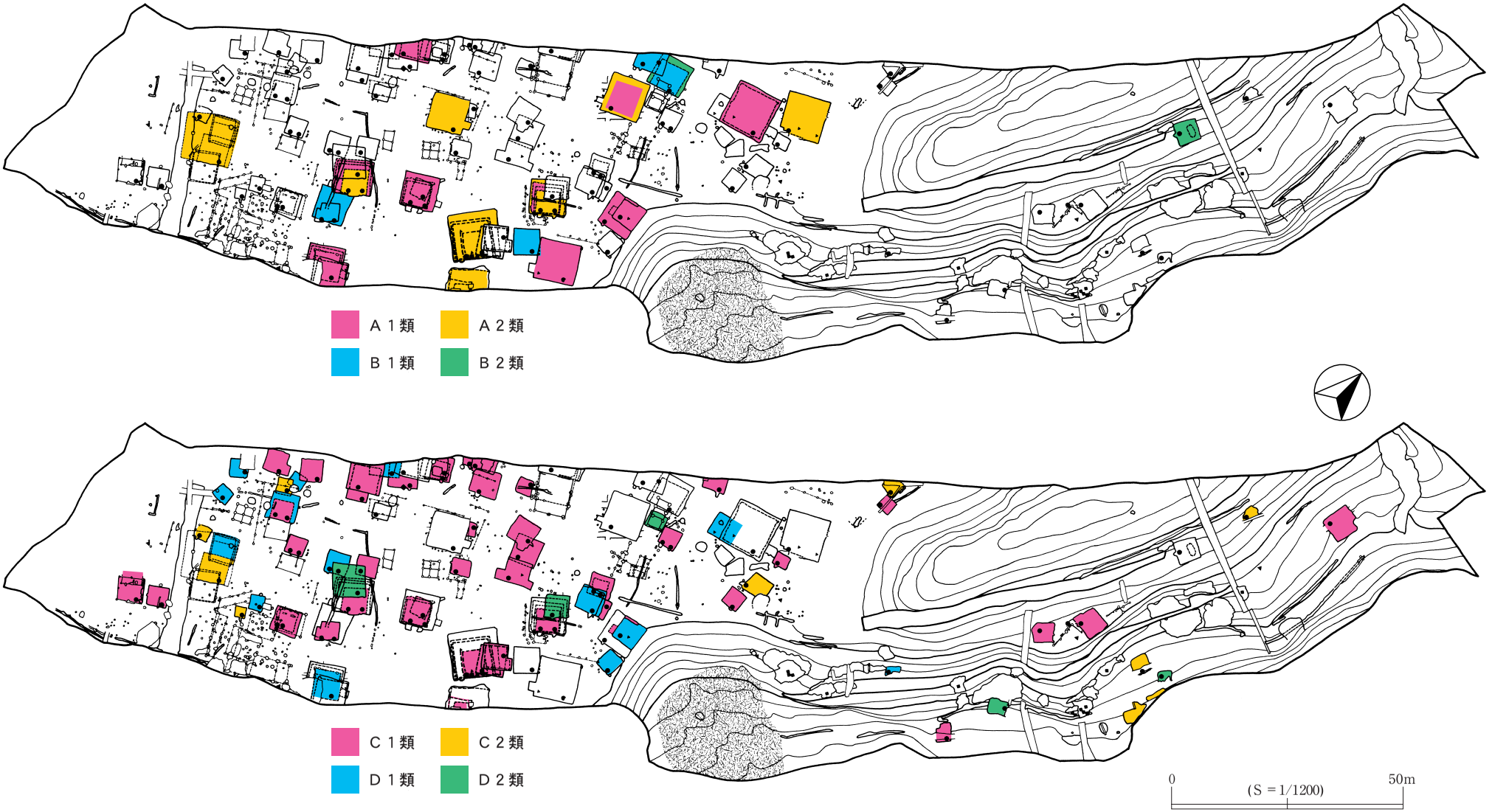
1　竪穴住居跡

本遺跡の130軒の竪穴住居跡は、平面形が正方形または長方形や台形でも正方形に近い形状であり、カマドの配置は西・東壁に設置するものがごく少数で、南東壁または南壁を基本とすることが大きな傾向である。これら以外の要素である住居規模(竪穴掘り込みの平面規模)、主柱穴配置、壁溝の有無と壁柱穴、住居主軸方位、張り出しの有無や付属掘立柱建物跡の存在、床面焼土の有無などについては、住居ごとに違いが大きい。

以下では、主に主柱穴配置と壁溝の有無による竪穴住居の分類を行い、これを基にして規模や主軸方位、または張り出しの有無などを関連付けて検討を行う。なお、貼床の有無にも違いが認められるが、これは住居立地点のⅥ層地山上面の自然地形に大きく左右される要素であり、住居構築者の初期設計には含まれないものと考えられることから、今回は検討対象外とした。またカマドについては、確認面が火床面以下だったものもあり、廃棄時に上部構造を完全に撤去するものが比較的多く認められることから、各カマドを同列で検討するのが困難である。カマド構造は、基底部に貼床と同等の地山土粒を多く含む黒色土を貼り、その上部に白色粘土で袖から天井を造るものがほとんどである。煙道は概して短く、壁外を平面形がU字形になるようにやや幅広に掘り込むタイプが多く、その周縁部に袖から連なる粘土を貼って、半地下式の造りにするのが基本である。袖は、礫や土器片を芯材とするものが多く、03-ＳⅠ15Ａのように、ごく稀に完形の土器を逆位に据えるものもある。支脚は残存率が低く、確認できたものでは土師器甕の胴下半部を逆位に設置するものや、角礫を設置するものがある。中には、05-ＳⅠ28Ａのように両者を並列するものも存在する。


03-S I 609
03-S I 102
03-S I 06
A 1類
03-S I 208
05-S I 803
02-S I 18
A 2類
01-S I 193
03-S I 103
05-S I 28A
05-S I 02
B 1類
B 2類
03-S I 336
02-S I 11
01-S I 158
01-S I 28
01-S I 155
01-S I 120
01-S I 156
05-S I 13
02-S I 14
03-S I 854
C 1類
C 2類
01-S I 86
02-S I 05
03-S I 104
03-S I 224
01-S I 139
D 1類
D 2類
0
(S=1/200)
5 m

第444図　住居跡分類



第445図　住居跡分類別分布

ⅰ)住居分類

主柱の配置や有無をＡ～Ｄで、壁溝の有無を１・２で分け、その組み合わせで計８通りに分ける。

Ａ類：主柱穴を住居四隅より内側に配置する

Ｂ類：主柱穴の片側を住居四隅より内側にもう一方を壁際に配置する

Ｃ類：主柱穴を住居四隅に配置する

Ｄ類：主柱穴を配置しない

１類：壁溝を配置する

２類：壁溝を配置しない

分類図を第444図に、分布図を445図に示した。Ａ類は基本的に特大形以上の住居で採用する構造で、Ｂ類も概ねその傾向にある。これに対してＣ類は大形以下の住居に採用する。Ｂ類とＤ類は採用軒数が少なく、Ｂ類は比較的古段階に、Ｄ類でもＤ２類は比較的新段階の住居に多く認められる。概して主柱配置による区分は規模に左右される要素であり、その境界線は住居面積で50㎡前後である。規模を決定する要因は、居住人員もしくは集落内での居住者の地位などによると想定される。

壁溝による区分も規模に左右される要素である。本遺跡で検出した住居壁溝については、05-ＳＩ28Ａや05-ＳＩ66などの焼失家屋の状況から、基本的には壁板をはめ込む掘形であることが分かる。また上記焼失家屋の炭化材出土状況から、05-ＳＩ66のような壁溝にはめ込むタイプでは複数の縦板を並列させ、05-ＳＩ28Ａのような壁柱穴を穿つだけの場合には、長い横板を数段渡している。特にＡ類では建て替えの段階で、１類から２類へ変更するものが認められ、壁板保持の簡略化を図った可能性が高い。Ｃ２類は極めて少なく、製鉄遺構群に近い範囲で比較的まとまることからみて、製鉄工房に関連する住居構造の可能性がある。

ⅱ)主軸方位分類

第４章では、主軸方位をカマドの付く壁に直交するラインを基本として測ったが、南東壁または南壁に直交するラインでみれば、軸が真北方位に極めて近いグループと、真北から西へ約20°以上ずれるグループに２大別できる。前者を軸１類、後者を軸２類とする。

遺構の重複で確認すると、軸１類に属する01-ＳＩ157・255や02-ＳＩ10は、地点内の住居では最古段階に属しており、遺構配置と絡めると集落最古段階に多く認められる。01-ＳＩ157や02-ＳＩ10に後続する01-ＳＩ156や02-ＳＩ03が軸２類になることから、軸１類は極めて短期間で断絶するとみられる。集落構成では、最古段階の次段階以降軸２類が主流になるようで、本遺跡の立地する台地形状に方位を合わせ、効率的に土地利用を行ったと考えられる。

ⅲ)張り出しの有無と付属掘立柱建物跡

張り出しは基本的には出入り口に関わる施設とみられ、明確な例では15軒で確認できる。建て替えを含めて住居分類で数えると、Ａ１類６軒、Ａ２類２軒、Ｃ１類５軒、Ｃ２類１軒、Ｄ１類１軒で、Ｂ類やＤ２類では認められず、方位では軸２類に属するものが多い。

Ａ類では、03-ＳＩ22－02ＳＩ52ラインと02ＳＩ01－18ラインで北東壁に、02-ＳＩ24－03-ＳＩ102ラインでは南西壁に配置しており、02-ＳＩ25－07ラインを境に相対する状況が認められることから、こ

れらは同時併存する可能性が極めて高い。

C類では01-SⅠ159・03-SⅠ204が北東壁に、01-SⅠ192・03-SⅠ316Bは南西または西壁に配置するが、傾向は顕著でない。また、05-SⅠ03・58・74など丘陵部に位置する住居は、斜面上位側の壁に張り出しを配置する。

付属掘立柱建物跡の性格は定かでないが、遺構数は想定し得るだけでも3軒のみで、01-SⅠ86の2個の柱穴が並ぶ場合や、05-SⅠ28Aに03-SⅠ178が付属したとしても5軒であり、本遺跡では稀な施設である。しかし、01-SⅠ74・155、02-SⅠ25に共通するのは、付属施設の位置が住居南東側で、そこが集落内においても空閑地であることから、継続的な住居存続の可能性がある。なお、先述のとおり02-SⅠ25は、線対称に張り出しを向ける住居群の中心ライン上に位置しており、これらと同時併存するとみられる。

iv)床面焼土の有無

床面焼土は、カマド燃焼部の残存か鍛冶炉となる確率が高い。前者については、第4章の事実記載において可能性を含めて抜き出したので、ここでは基本的に後者を対象とする。

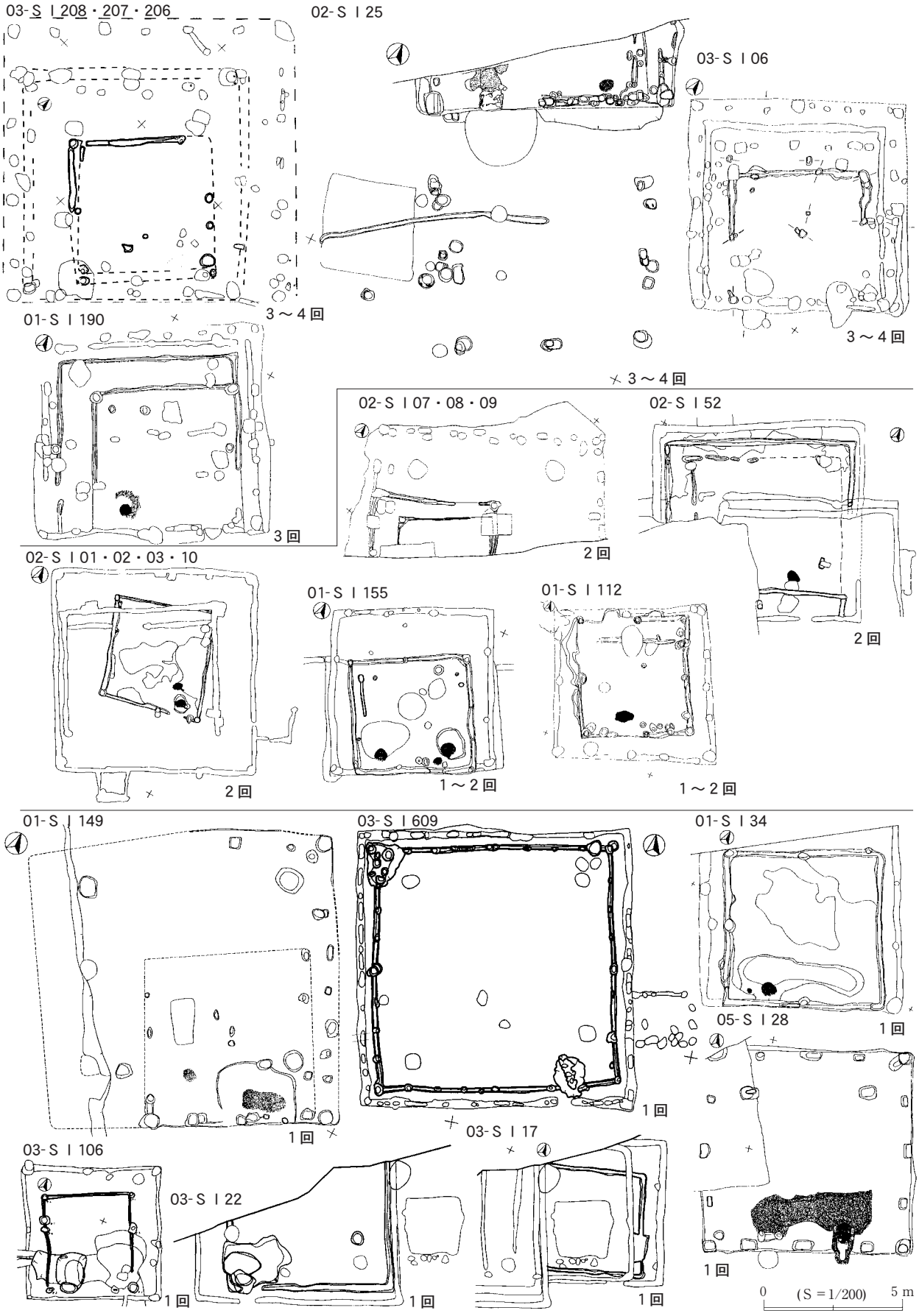
床面上で焼土が認められる住居は7軒あり、規模で分けると大形が4軒、超大形が3軒である。03-SⅠ13を最西端として、03-ST185のある沢部周辺に比較的まとまる傾向にある。配置が製鉄作業域に近いことから、これらの施設に想定されるのは鍛冶炉としての機能である。03-SⅠ12・102・208は居住域の中心部付近に当たるが、03-SⅠ610と05-SⅠ803の付近は住居の配置が疎らであり、より製鉄作業域に近く、この範囲は鉄関連の工房域と考えられる。その中で超大形サイズの住居として存在する03-SⅠ609や05-SⅠ803は、製鉄関連作業管理者の住居になる可能性が高い。

ⅴ)住居拡張

竪穴住居跡の中には、同地点でほぼ相似形に拡張する住居跡が存在する(446図)。建て替えまでの年数にもよるが、拡張する住居のほとんどは、集落内において継続的に居住地として利用した地点であると共に、同じ家族が数世代に渡って居住した施設である可能性が高い。拡張は最大で4回のものがあり、次いで2回・1回のものが存在する。4・3回拡張するものでは、当初の小形から、中・大形を経て特大形または超大形へと拡大する傾向がみられる。2回または1回の建て替えを行うものは、01-SⅠ112や155のように大形でとどまるものと、01-SⅠ149や03-SⅠ609のように特大形から始まり超大形になるものの2通り存在する。4・3回建て替えを行う住居をモデルとすれば、2回・1回の建て替えは居住地点を変更している可能性がある。

vi)焼失家屋

焼失家屋として確認できた住居跡は、今回の調査で確認した125軒中6軒である(第447図)。焼失家屋の住居規模は、01-SⅠ255・05-SⅠ66が小形、03-SⅠ16・23が大形、02-SⅠ52・05-SⅠ28Aが特大形であり、規模による傾向は認められない。遺構検出面の差も多少影響するが、焼失家屋に共通するのは、柱や屋根等の上屋に関する材が明確で無いことである。確認できた炭化材は、いずれも壁板や床板の一部とみられ、壁際に集中する傾向にある。



第446図　拡張住居跡集成

vii)住居廃絶儀礼

竪穴住居からは多くの遺物が出土する。カマド近辺に集中するのが基本的な出土傾向だが、住居内から満遍なく出土する場合も多く見受けられる。後者の傾向が顕著なのが焼失家屋で、大形以上の焼失家屋では多数の土師器に混じり、須恵器・鉄製品が伴う。最も特徴的なのは、02-ＳＩ52と05-ＳＩ28Ａで出土したほぼ完形の鋤先である。調査区全体でこの２点しか出土していないことからみて、明らかに意図的な遺棄と考えられる。特に鉄製品は、破損等による機能喪失後も原料鉄としてリサイクル可能な素材であり、まとまって出土すること自体が不自然な状況と言える。

447図には鉄製品・須恵器・墨書土器が出土した住居跡を示した。分布でみると、多くの住居跡から鉄製品が出土していることが分かる。また、448図に示した代表的な住居跡の遺物出土状況図からは、カマド周辺にとどまらず、住居内から満遍なく遺物が出土することも分かる。このような遺物の出土状況を示す住居は、03-ＳＩ609や05-ＳＩ803のように超大形のもの以外に、01-ＳＩ74のように中大形のものもあり、規模による差異は明確でない。また本調査区は部分的に地山面まで削平されており、床面検出住居跡では内包遺物の様相が不明である点を考慮すれば、このような遺物遺棄状況は一般的であった可能性が極めて高い。

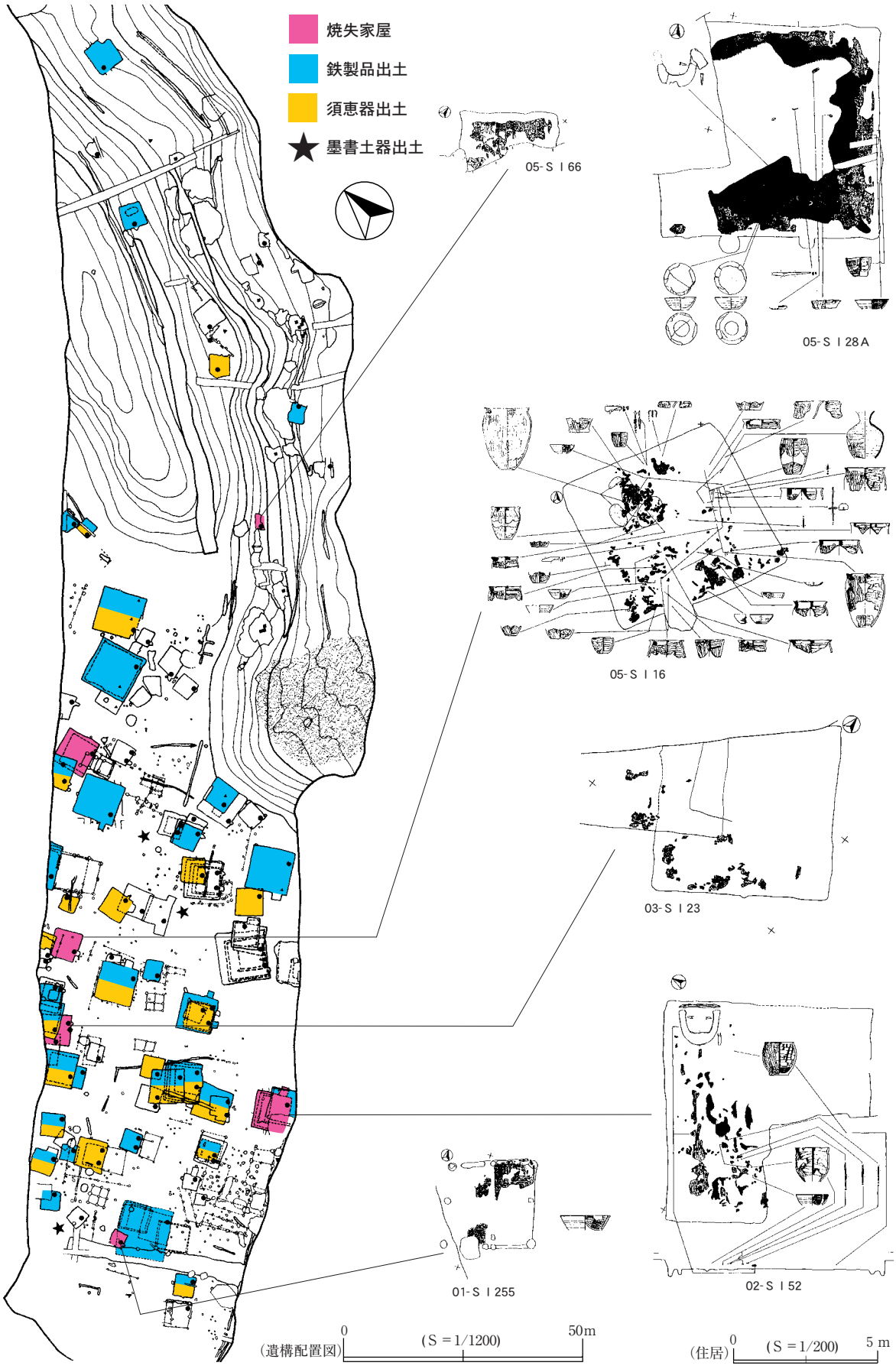
各住居跡の出土遺物をみると、完形の遺物は稀で、土器であれば破片、鉄製品であれば欠損品がほとんどである。基本的には機能を終了したもので、廃絶した住居の竪穴掘り込みの埋め立て造成という施設の廃棄行為に併せて、道具の廃棄行為も行ったとみられる。それが単なる廃棄でないことが、焼失家屋の出土状況や、03-ＳＩ103や05-ＳＩ28Ａで認められる土器片埋納土坑の存在から窺える。施設の廃棄と道具の廃棄は、使用の段階で両者が同時併存していたものかまでは不明だが、セットで行う行為だった可能性が高いと考えられる。

この廃絶儀礼が、単に住居の廃棄を発端とした行為と限定されるかには疑問がある。先に述べたように、リサイクルできる鉄製品を機能喪失イコール廃棄と結びつけるには、合理性の欠如がある。まだ使えるにも関わらず遺棄する行為の背後には、住居の廃棄が単に上屋構造の寿命のみに規定されるのでなく、居住者の生死にも関連するのではないかと想定する。その一つの根拠が、調査した土坑の中で墓坑と確定できるものがほとんど無いことである。今回の調査区内が偶然墓域を含まない可能性もあるが、遺物の出土状況から想定される範囲内に、葬送儀礼を加えることも可能と考えられる。

2　製鉄遺構の構成

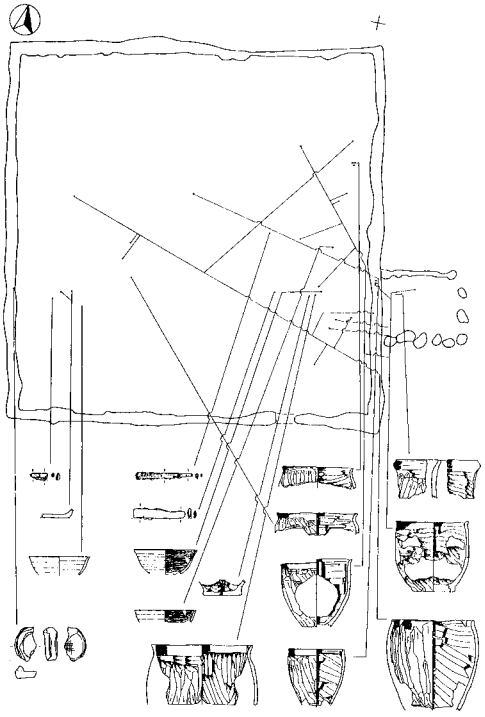
今回の調査で確認できた製鉄遺構は、全て丘陵部の斜面に立地する。製鉄遺構を構成する基本的な施設は、砂鉄または銑鉄を溶解する炉、鞴座となる上部作業場、滓の流出と鉄選別作業を行う下部作業場である。これに炉壁や鉄滓等の排滓を捨てる排滓場が伴う。これら関連作業施設の周辺には、従事した工人の住まいとみられる竪穴住居跡が散在しており、竪穴住居跡の中には簡易な柵で区画する作業場を伴うものもある。これらの施設が一体となり、丘陵部南東斜面全体が製鉄工房域として機能したと考えられる。また、製鉄工房域には03-ＳＤ179Ａ・Ｂと05-ＳＤ45や、05-ＳＤ01・16・23～25のように各施設を連絡する通路がある。丘陵部北端には、岩盤を刳り貫いた背後の平坦地への連絡路が存在しており、工房域と居住域が有機的につながる状況が明らかである。

ここでは、第４章で言及できなかった各遺構群の変遷過程について検討してみたい。ただし、明確

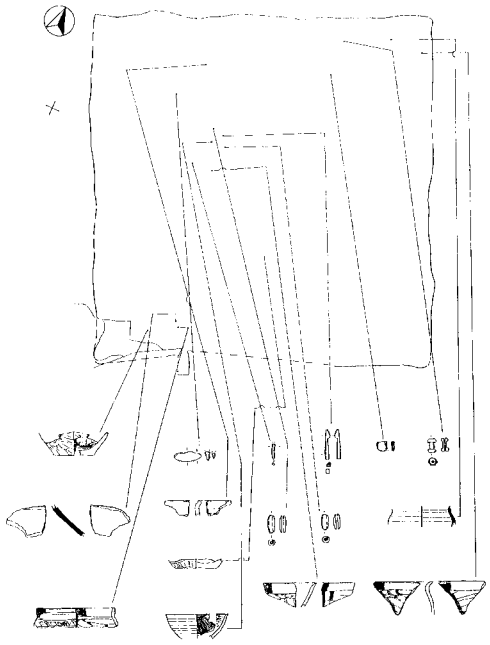


第447図　焼失家屋及び住居内出土遺物分布

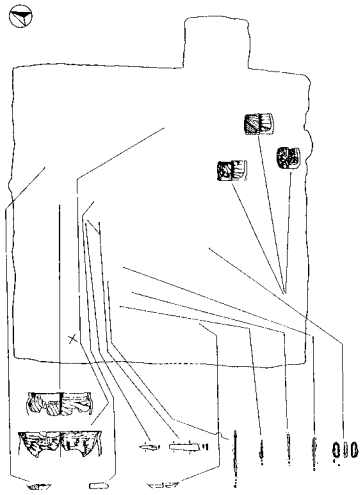
03-S I 609



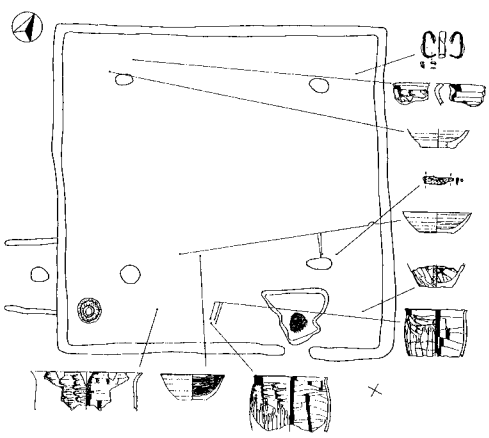
05-S I 803



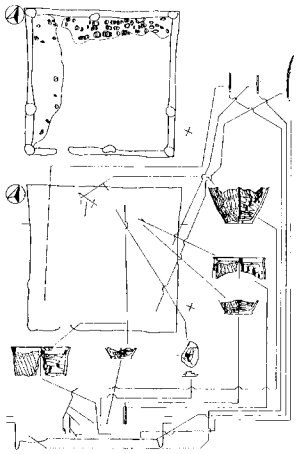
02-S I 18



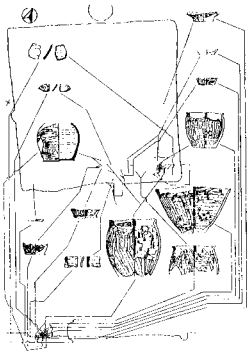
03-S I 102



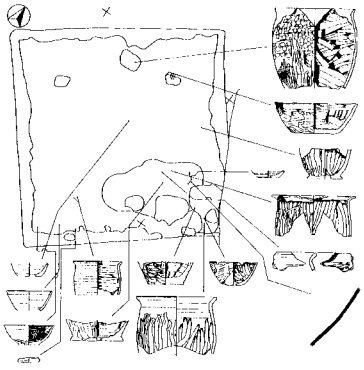
01-S I 74



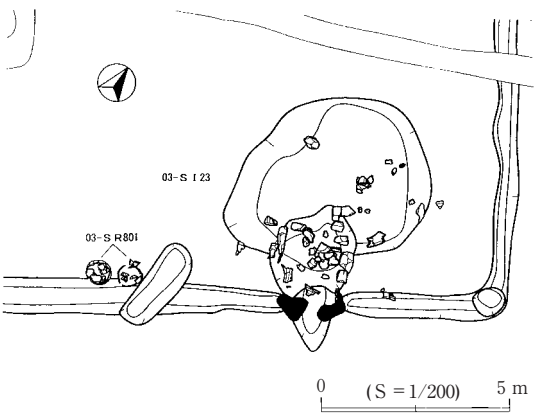
01-S I 28



03-S I 103



03-S I 23・03-S R 801



第448図　代表的住居内遺物出土状況

に重複関係のある遺構は少なく、堆積土や配置が主な検討材料になる。

製鉄遺構の中で人為的に埋めている可能性が高いのが、05-ＳＳ1001・1002である。この遺構では上部作業場及び炉体上部まで、Ⅵ層に由来する砂塊が詰められていた。これに対し、近接する05-ＳＳ19・65は最終的に捨て場として埋没するが、堆積土の主体は斜面上位からの自然堆積物であることから、05-ＳＳ19・65が比較的新しいとみられる。このことは、05-ＳＳ1001・1002に伴う03-ＳＴ185排滓場の鉄関連遺物出土層位が、土器出土層位よりやや下部に当たることとも矛盾しない。なお、関連工人の住まいとして、03-ＳＩ336・576・854が想定される。配置や出土遺物からみて、03-ＳＩ576・854が05-ＳＳ1001・1002と、03-ＳＩ336が05-ＳＳ19・65とセットになるとみられる。後者には同じカマド配置の05-ＳＩ66も伴うとみられ、急斜面に無理やり配置する状況から、関連工人の居住域と一般居住域との分離が、明確になったことも想定される。

05-ＳＳ10～12・14・77・80は、同地点で継続的に製鉄炉を構築する製鉄遺構で、本遺跡製鉄遺構の主体であり、存続期間も最も長いとみられる。一方近接する05-ＳＳ34は、これに伴う排滓場が05-ＳＩ53・70・73を埋めることから、比較的新しい施設とみられる。排滓の出土範囲が05-ＳＩ29を避けるような配置であることから、これが同時期の工人の住まいである可能性もある。この点から、05-ＳＩ53・70・73は05-ＳＳ34操業開始前段階までの、05-ＳＳ10～12・14・77・80関連工人の住まいだったと考えられ、05-ＳＳ34操業後は05-ＳＩ03・05へ拠点を移したとみられる。ただしこの中腹緩斜面は、05-ＳＩ34の存在からみて早い段階からの利用が想定される。なお、この中腹緩斜面の住居には、板塀と焼土を伴う作業場が付随する。

05-ＳＳ17と05-ＳＳ30は、それぞれ単独の製鉄遺構で、前者には05-ＳＩ59・74が、後者には05-ＳＩ02・58が伴うとみられる。05-ＳＤ16・23～25・45の山麓部連絡路を一連のものと考えれば、05-ＳＤ45が05-ＳＩ59上部を通っており、連絡路上部を排滓場として利用するとは考え難いことから、基本的には05-ＳＳ17と05-ＳＳ30より、05-ＳＤ16・23～25・45が新しいと考えられる。ただし05-ＳＩ74に伴うステップは、05-ＳＤ45を意識したものであり、重なる時期もあったと考えられる。

以上から、最低2段階の遺構群変遷を想定できる。

第1段階：丘陵南西斜面部；05-ＳＳ1001・1002・81＝03-ＳＩ576・854
；05-ＳＳ17＝05-ＳＩ59・74
丘陵中央山麓部；05-ＳＳ10・11・14・80と05-ＳＩ34・53・70・73
丘陵北東斜面部；05-ＳＳ30＝05-ＳＩ02・58
主用連絡路；05-ＳＤ01

第2段階：丘陵南西斜面部；05-ＳＳ19・65＝03-ＳＩ336・05-ＳＩ66
丘陵中央山麓部；05-ＳＳ10・11・12・14と05-ＳＩ03・05
；05-ＳＳ34＝05-ＳＩ29
主用連絡路；05-ＳＤ16・23～25・45・63

以上は推定の範囲を出るものではなく、また、もっと細かな遺構群変遷も存在するだろうが、おおまかな変遷の順番はほぼ上記の通りと考えられる。

Ⅲ　遺物について

1　土師器甕

土師器甕は、本遺跡の出土遺物の中で最も出土量が多く、実測し得た資料で約1100点ある。その多くは破片資料で、復元実測を含めて口縁部から底部までの全体が分かる資料は、大型の甕で約35点、小型の甕で約25点である。第３章においてＡ～Ｄ類に分類したが、さらに全体形状を踏まえた細分が可能である(第449図)。

１；胴上部が張り出して口縁部が外反・外折する

２；胴上部が張り出して口縁部が直立気味に立ち上がる

３；胴中位が張り出して口縁部が外反・外折する

４；胴部から緩やかに外反して口縁部に最大径を有する

Ａ・Ｃ類については１～４類までが認められるが、Ｂ類では３・４類が存在しない。Ｄ類は基本的に２類を分類基準とするが、胴部の屈曲が少なく口縁部の反りが極めて短いものもＤ類に含めたため、１～４類に分類できる。また小型の甕は、口径に比べ器厚が低くなる傾向にある。

2　土師器坏

土師器坏は、本遺跡の出土遺物の中で土師器甕に次いで２番目に出土量が多く、実測し得た資料で約400点ある。その多くは破片資料で、中には同一個体のものを含む可能性もある。このうち、口縁部から底部まで残存する資料は56点である。第３章においてＡ～Ｄ類に分類したが、Ａ・Ｂ類は出土量が多く、口縁部形態や底径によってさらに細分可能である(第450図)。

Ａ類：１；比較的底径が大きく胴下半部と口縁部が内湾気味に立ち上がる

２；比較的底径が大きく胴下半部が内湾して口縁部が直線的に外傾する

３；比較的底径が大きく胴下半部から直線的に外傾する

４；比較的底径が大きく胴下半部から直線的に外傾して口縁部が外反する

５；比較的底径が小さく胴下半部が内湾気味に立ち上がり口縁部が直立外反する

６；比較的底径が小さく胴下半部が内湾気味に立ち上がり口縁部が外反する

Ｂ類：１；比較的底径が大きく胴下半部が内湾し口縁部が内湾または直線的に外傾する

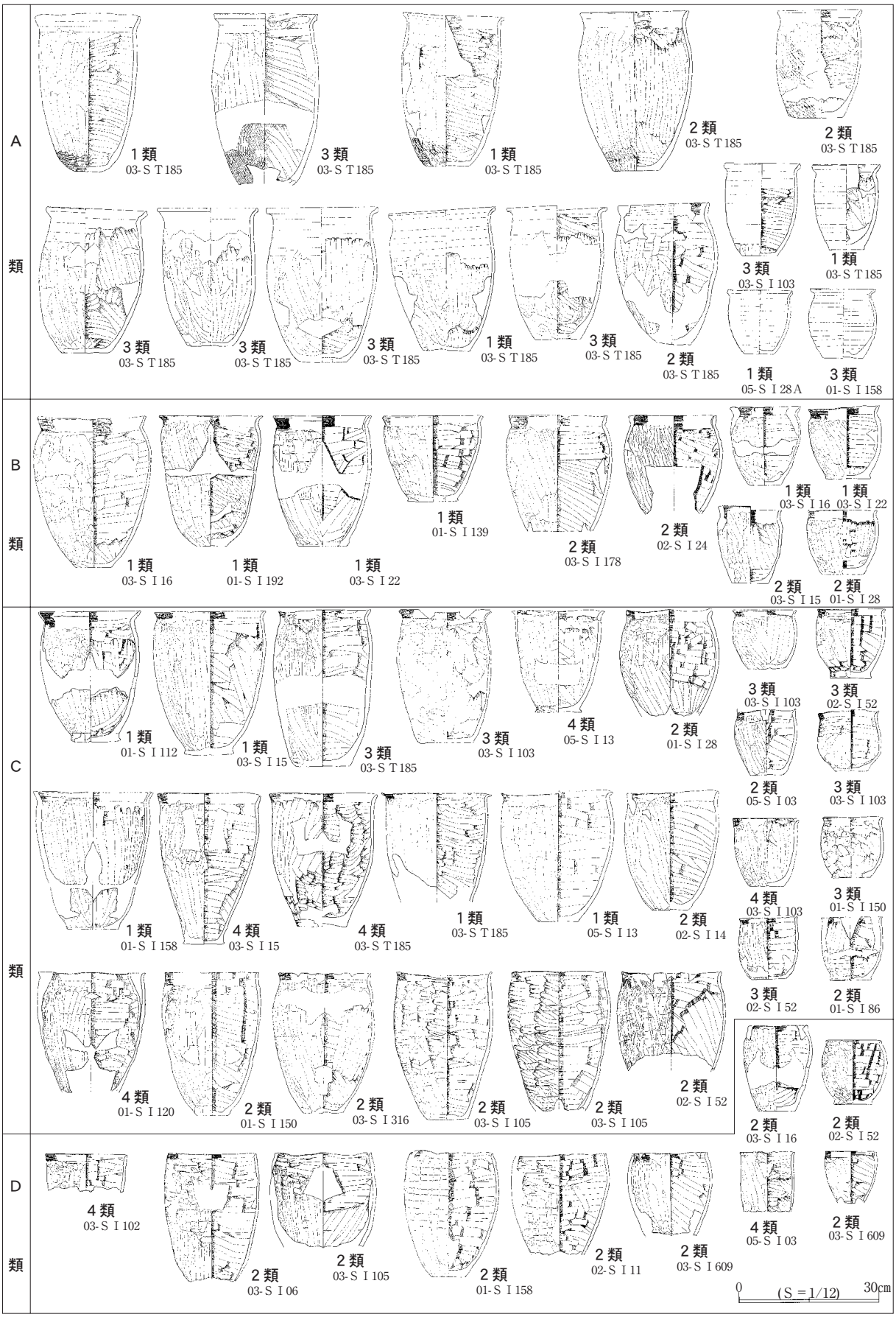
２；比較的底径が大きく胴下半部が内湾し口縁部が弱く外反する

３；比較的底径が小さく胴下半部が内湾し口縁部が外反する

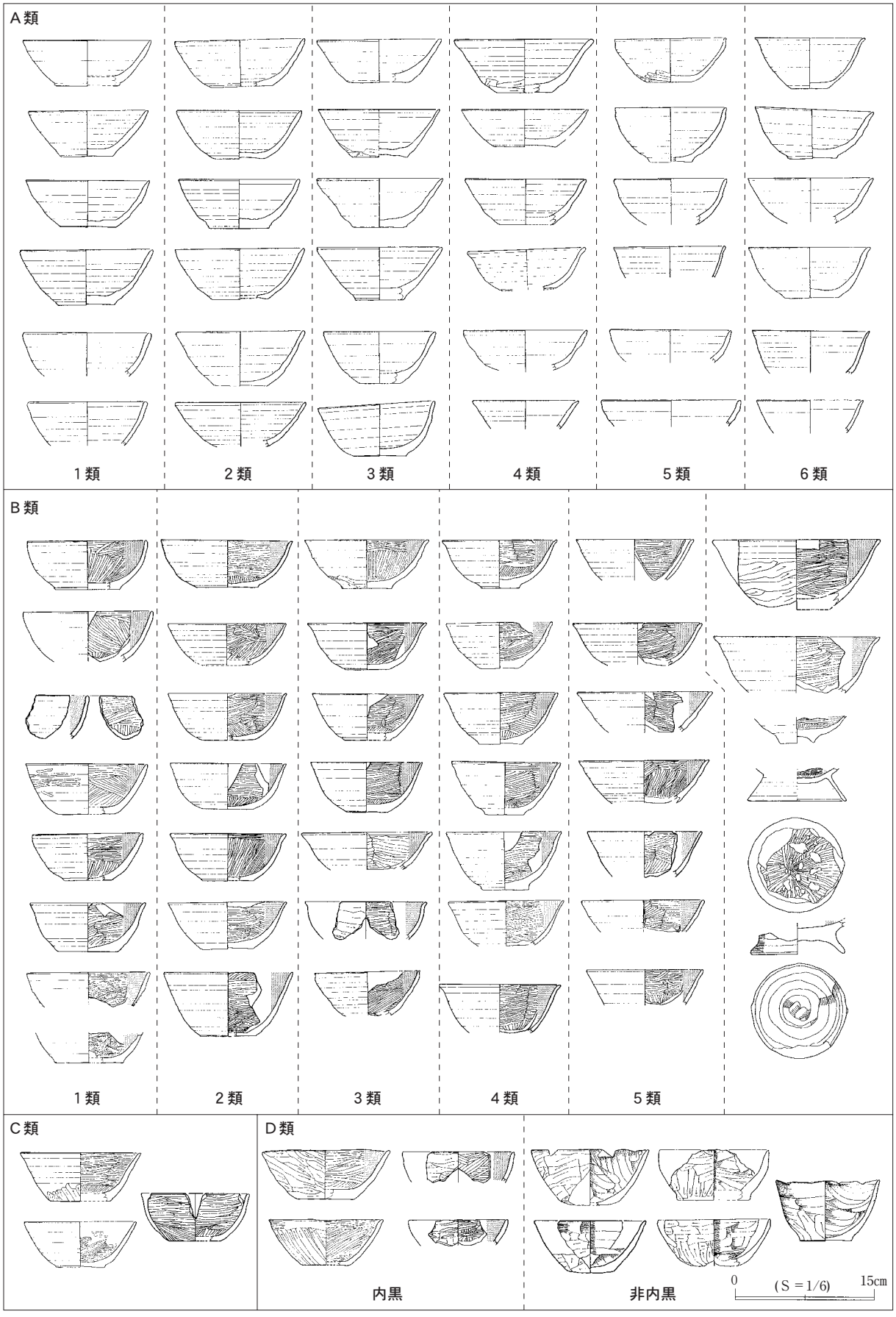
４；底径が小さく胴下半部が内湾し口縁部が外反する

５；口縁部が直線的に外傾または弱く外反するもので底部の分かるものはない。

Ｂ類にはさらに法量値の明らかに大きな埦型のものや、高台の付くものが少数存在する。なお、450図に示した資料で口縁部から底部までが判明する坏は全てである。他は口縁部・底部・胴部の各破片であり、詳細な分類帰属は不明だが口縁部の形状からみて、Ａ類は２・３類が、Ｂ類は３・４類が多い傾向にある。また、Ｃ類は基本的にＢ類の製作技法に準じるが、03-ＳⅠ224資料は、Ａ類03-ＳＴ185資料に近似する形態であり関連が深いとみられる。Ｄ類は大きく内黒と非内黒に分かれ、内黒のものが比較的精緻に作るのに対して、非内黒のものは粗雑なナデ調整で整形を終えており、胎土からみても甕作りの延長線上に存在するものとみられる。



第449図　土師器甕分類



第450図　土師器坏分類

3　須恵器

今回の調査で出土した須恵器はほとんどが破片資料で、実測し得たものは78点である。そのうち復元実測を含めて口縁部から底部までの全体形状が分かる資料は4点のみである。

451図に今回の調査で出土した須恵器の主なものを集成した。須恵器は焼成による色調と胎土により、五所川原窯跡群産とみられる一群と、それ以外に2大別できる。451図上段は五所川原窯跡群産とみられるもので、器表面は褐灰色で、内部に還元してない赤色部を挟む。確認できる器種は坏・壺・広口壺・甕・小型甕である。このうち出土量の比較的多いのは壺で、口縁部形態で口縁部側面に面を形成して下方へつまみだすもの、口縁部側面に面を形成するが下方へのつまみだしが弱いもの、口縁部内側面の直立部が低く口縁部側面に数段の稜を形成するものに分けられる。この3者は概ね時代順に位置づけられ、3番目は、五所川原窯跡群のＭＤ16・18号窯跡のものに近似することから、10世紀中葉の年代が想定できる。

451図下段左側の一群は灰白色基調で、胎土に気泡を多く含みやや粗雑な感じの作りである。胴の長い広口壺が特徴的な器種で、3/4が03-ＳＴ185から出土しており、上段の一群とは廃棄過程でも差がある。下段中央の03-ＳＲ801埋設土器の壺は、内外面とも褐灰色だが内部に赤色部を挟まず、器外面には一部灰白色の部分もある。肩の張る器形や高台の存在から、やや古手に位置づけられるとみられ、伝世品の可能性がある。下段右上の03-ＳＴ185出土壺は、器外面色調が暗赤褐色で、胎土に白色砂粒を多量に含む。厚手の高台をもち、法量は下段左側の広口壺に近い。下段右下の甕の胴部破片はやや紫がかった灰色の色調で、内外面に同様な条線をとどめるタタキ目を残す。

下段に提示した資料は、現時点で把握されている五所川原窯跡群出土資料では、主体的でない資料である。これが未だ確認されていない五所川原の窯跡に由来するものか、それとも別な産地に由来するかは想像の域をでないが、胎土や焼成具合からみて後者の可能性もある。

4　鉄製品

今回の調査で出土した鉄製品のうち、実測し得たものは156点であるが、その多くは棒状の欠損品であり、全体形状の分かるものは少ない。器種別の出土量でみれば、最も出土量が多いのは刀子で、次いで穂摘具の順になる。代表的なものを452図に図示した。

武具では、刀・鞘金具・柄頭・柄尻・鏃が出土している。刀は全形が分かるものはないが、切先部分が2本出土しており、いずれも同じ形状である。鞘金具は紐通しをもつものが1点と環状部が4・5点、柄頭と柄尻が各1点ずつ出土している。これらは、各住居からばらばらに出土する状況からみて、威信財として分割保有した可能性がある。鏃は明確な例が少ないが、刃先が三角形状と菱形のものに分かれる。本遺跡出土のものは小さめであり、狩猟用のものとみられる。

刀子は、刃渡りが10cm前後のものが多く、長いものでは15cmのものがある。木質の柄を残すもの以外に、鞘とみられる木質が残存する場合がある。刀身と茎の変わり目は、452図11・12のように段状になるものや、452図27のように緩やかに細くなるものがある。段状のものでは、452図39・40のように極端に茎が細いものが認められる。

農具・掘削具では、鋤先・穂摘具・鎌が出土している。鋤先は木製の柄にはめ込むＵ字形で、竪穴住居跡の掘り込み作業などの掘削作業に主に利用する道具とみられる。穂摘具は両端に目釘穴を持つ

ものが多く、刃中央部が使用による磨耗で凹刃状になるものがある。半月状で両端を折り返すものがわずかに存在する。

この他、漁撈具の銛・釣針、工具の錐、紡績具の紡錘車、煮沸具の鍋、馬具の一部である轡が出土している。この他452図78～99は用途不明の鉄製品である。板状のものは鋤先・鍋の、棒状のものは、刀子の茎・鏃の軸・紡錘車の軸・錐・鍋の把手などの破片とみられる。

5　墨書土器

今回の調査で出土した墨書または刻書を施した土器は、全部で16点ある。ほとんどは破片資料で、文字や記号の全体像を窺える資料は極めて少ない(第452図)。確実に文字として分かるのは452図101の「珎」と452図113の「＃」である。この他は部分的に確認できるのみで、文字か記号かの区別も難しいが、452図100・114は縦に３本の線を並列する点で類似する。

6　各時期の土器群

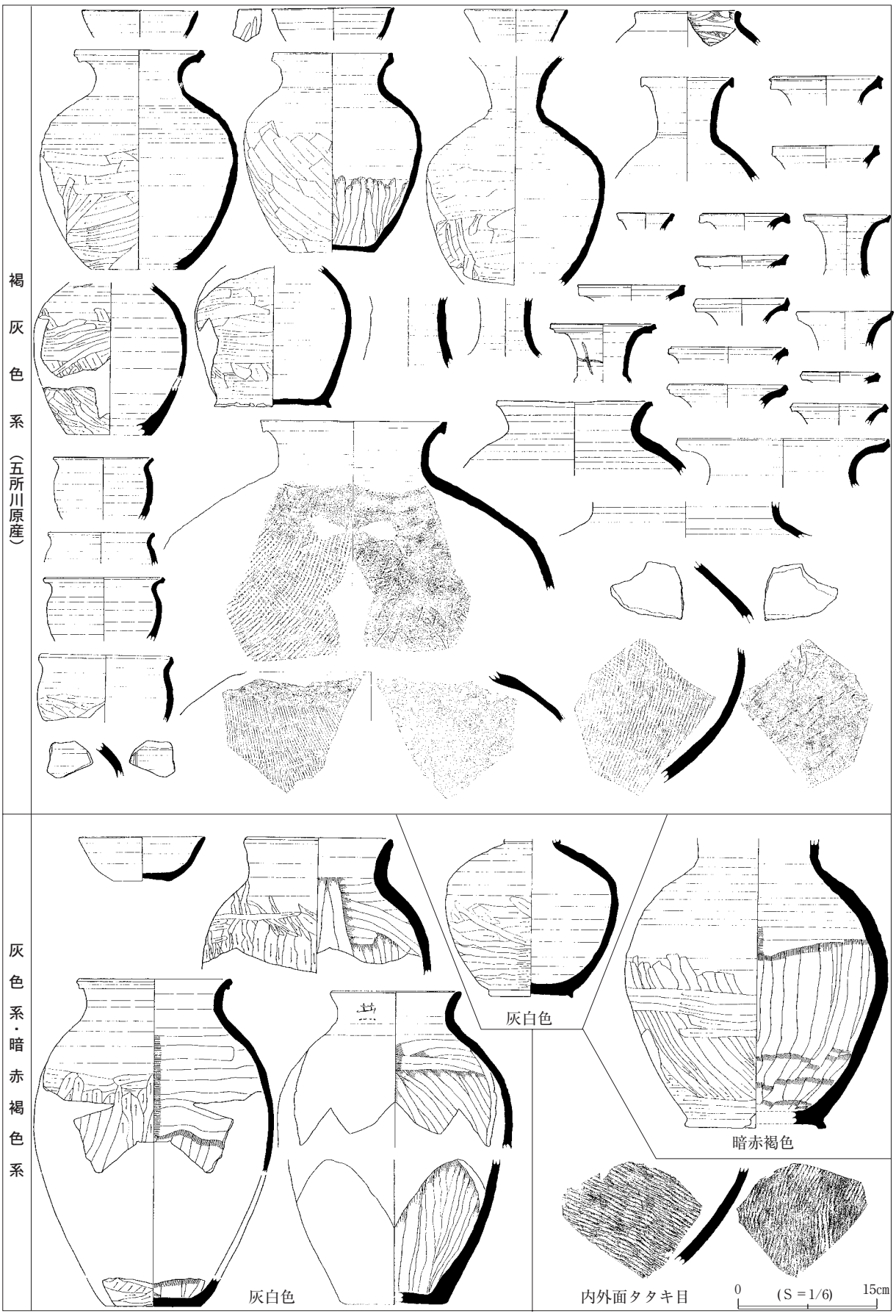
ここでは、遺構の重複関係から導き出した土器群の変遷について、主に土師器甕・坏を中心にまとめる。住居の重複関係からは５段階の変遷が想定でき、これに住居内からの出土が少なく03-ＳＴ185に多く認められる土器群を含めると、計６段階になる。各段階の順序を住居の重複関係を踏まえて整理すると、(第１段階03-ＳＴ185古相)、(第２段階01-ＳＩ193→第３段階01-ＳＩ192)、(第３段階03-ＳＩ610→第４段階03-SI609)、(第４段階02-ＳＩ52Ａ→第５段階02-ＳＩ21Ａ)、(第５段階03-ＳＩ06→第６段階02-ＳＩ05)の順になる。これらの重複関係を軸に、遺物相が類似する住居を併せたものを、453図～455図に示した。以下に各段階の特徴を示す。

第１段階 (第453図)

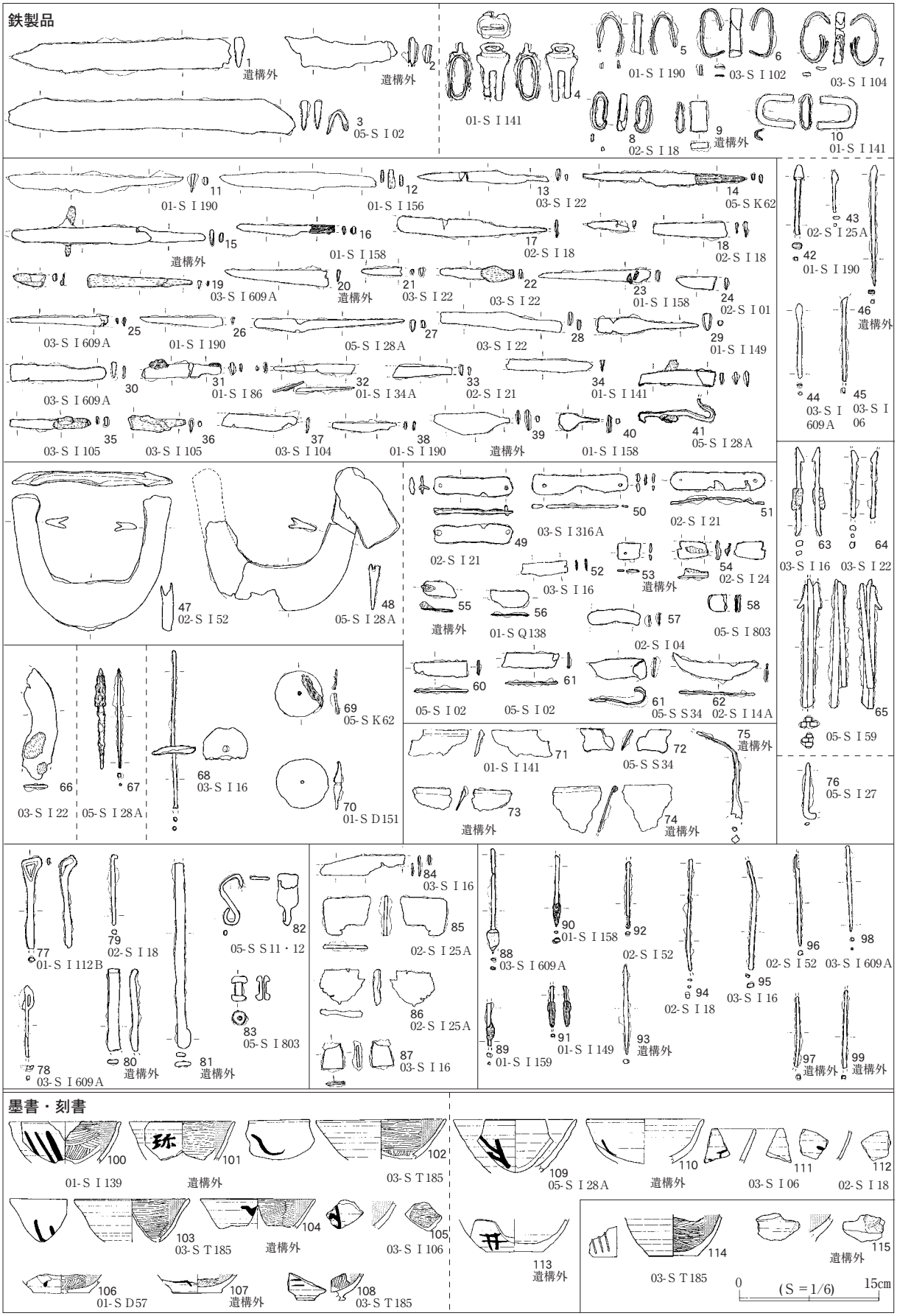
03-ＳＴ185から多く出土し、台地上部平坦面の住居ではほとんど認められない遺物を本段階とした。集落形成初期に、移入者が持ち込んだ土器群とみられ、集落初期に使用を終えて廃棄したため、住居内には残らず03-ＳＴ185に集中すると考えられる。なお03-ＳＴ185は、集落の全時期に利用した捨て場であり、２段階以降の遺物も多く出土しているが、接合復元率では土師器甕Ａ類の復元率が高い状況にある。土師器甕Ｂ～Ｄ類は破片のものが比較的多く、捨てられる時点での状態差(略完形か破片か)を反映する可能性がある。また、Ｄ類の出土が極めて少ないのも特徴である。

土師器甕は、Ａ類でもタタキ目を残すものが目立つ。鍋でも同様な資料が出土しており、これが本段階の核になると想定される。タタキ目を残すＡ類は、胴部中位に最大径を有する比較的長胴の甕が多く、器形の上でこの傾向が認められるＣ類も本段階に含めた。またタタキ目が明確でないＡ類でも、次段階のものに比べると、口縁部側面に垂直の面を形成するものが多い。なお底部では、丸底に近いものや底部から直線的に立ち上がる形状で、回転糸切痕をとどめるものやケズリ再調整を施すものが多いが、砂底も出現している。

土師器坏は、本段階の土師器甕に明確に伴うような出土状況には無いため、ここでは住居内からの出土が少ないものを掲載した。掲載したうちＡ類は、次段階以降と比べ比較的器壁が厚く、Ｂ類は底径が大きい傾向にある。土師器鍋は、底部付近にタタキ目を残し、土師器甕と同様に口縁部側面に面



第451図　須恵器集成



第452図　鉄製品・墨書土器集成

を形成する作りである。

須恵器の共伴関係も明確ではない。住居内からの出土が認められず、捨て場に多いものを集めたところ、灰白色系や暗赤褐色系のものが目立つ状況にある。住居廃絶儀礼との関わりを考慮すると、時期差でなく廃棄場の選択差を示す可能性もある。

第2段階 (第453図)

01-ＳＩ193出土遺物を基準とし、これに類似する02-ＳＩ04、03-ＳＩ103・224、05-ＳＩ28Ａ出土土器群を含めた。本遺跡の住居跡出土土器群では最古段階の構成で、3段階目以降の土器が混入することなくパックされた状態と想定される。

土師器甕ではＡ類を伴うのが特徴である。第1段階でも触れたように、土師器甕Ａ類の出土量が最も多いのは03-ＳＴ185で、底部にタタキ目をもつものが住居内からはほとんど出土しないことから、第1段階の次に本段階の土器群が位置付けられると考えられる。本段階住居群の機能時に使用を終えて廃棄したのが03-ＳＴ185出土最古相土器群とみられ、本段階住居群廃絶前までにはその廃棄が完了すると考えられる。

土師器甕Ａ類は比較的器壁が厚い作りになるのが特徴で、1段階に比べると大型のものでは口縁部の下方へのつまみ出しをもつものが少ない傾向にある。Ａ類以外にＣ類を伴うが、Ｃ類でも口縁部の外反が強く、口縁部が長く反るものが特徴的で、Ａ類に比べて器壁が薄い。Ｃ類で口縁部の外反が弱いものが、03-ＳＩ103・05-ＳＩ28Ａで認められるが、小型の甕に多いようである。底部は05-ＳＩ28Ａでは砂底が主体だが、木葉痕を残すものの比率が高い。

土師器坏ではＡ類が多い傾向にあり、Ａ類では1～4・6類が、Ｂ類では1・3類が、この他Ｃ・Ｄ類も存在する。中でも03-ＳＩ224出土の、底部付近にケズリ再調整を施すものが特徴的である。

この他の器種では03-ＳＩ103で大型の埦が伴う。底部がやや大きめで、この段階の坏にも認められる要素である。01-ＳＩ193では口唇を面取りして角頭状になる土師器鍋が出土している。この形状の鍋は、1段階の傾向を受け継いでおり、漸位的な形態変遷が想定される。05-ＳＩ28Ａでは小型土器が出土しており、底部が厚く口縁部がわずかに外反する形状である。

第3段階 (第454図)

01-ＳＩ192出土遺物を基準とし、これに類似する03-ＳＩ16・23・100・610出土土器群を含めた。この様相をもつ住居跡は比較的少ない。これは、連続的に住居が拡張するため、この段階で廃絶する住居跡が少ないことに起因するとみられる。このことから様相をとどめる住居では、逆に良好な状態で遺物がパックされている可能性が高い。

大きな特徴は、土師器甕Ａ類をほとんど含まず、土師器甕Ｂ類が多くなることである。第2段階に後続するため、第2段階の住居を掘り込むことが少なく、前段階土器群との混在が少ない状況を示すと思われる。01-ＳＩ192、03-ＳＩ16・100は、土師器甕Ｂ類が主体である。03-ＳＩ100が土師器甕Ａ類の破片を含むのは、遺物取り上げ段階で、より古段階の03-ＳＩ17Ａ・Ｂの遺物を取り込んだためで、これを除外した遺物が本来伴うものと考えられる。03-ＳＩ23は土師器甕のみの出土であるが、住居北半を03-ＳＩ22が破壊しており、この際に本遺構所属遺物の一部を巻き上げたとみられる。明確にＢ類

とは分類し難いが、土師器甕Ｃ類でも口縁部が外折し、口唇を面取りするものが特徴的である。これ以外には、03-ＳＩ16で土師器甕Ｄ類が伴う。直線的に外反するものや、口縁部まで内傾してやや肥厚する特徴を有する。底部は、木葉痕を残すものが少なく、ケズリ再調整を施すものと砂底が概ね半々の割合になる。

土師器坏では、第２段階に比べ土師器坏Ｂ類の占める比率が増える。土師器坏Ａ類では５・６類が、土師器坏Ｂ類では１・２・４類が、また土師器坏Ｄ類も認められる。この他03-ＳＩ16出土の土師器鍋は、第２段階の01-ＳＩ193出土鍋に比べ、口縁部の屈曲外反は類似するが、口唇がやや丸みを帯びる点に相違がある。03-ＳＩ16では、胴部に横位のケズリ再調整を施し、頸部から口縁部にかけて緩やかに外反する須恵器壺が出土している。

第４段階 (第454図)

03-ＳＩ609出土遺物を基準とし、これに類似する02-ＳＩ52、03-ＳＩ12・105、05-ＳＩ27出土土器群を含めた。この様相をもつ住居跡も比較的少なく、第３段階と同様にこの段階で廃絶する住居跡が少ないことに起因するとみられる。

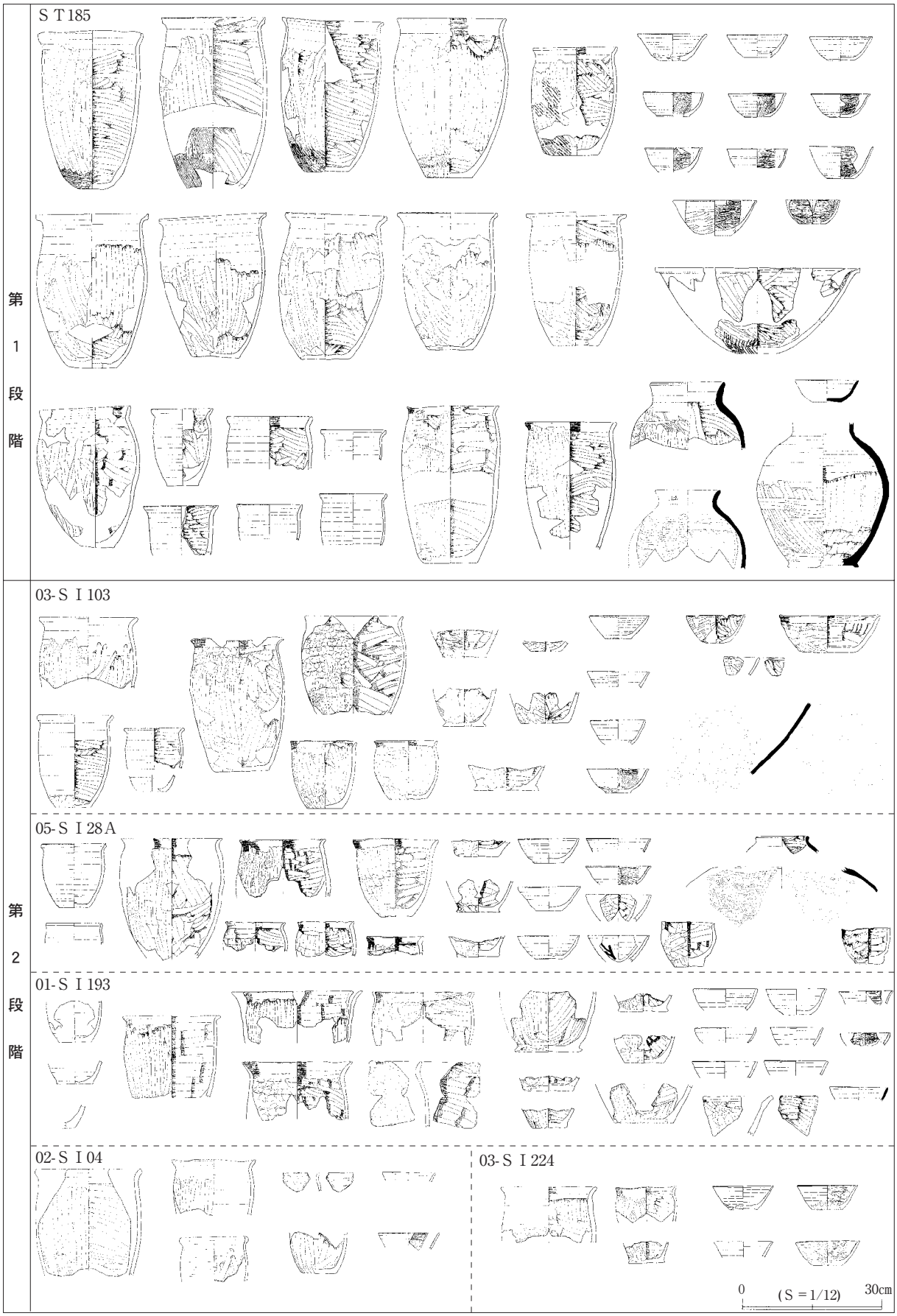
土師器甕ではＣ類が主体になり、Ａ・Ｂ類は基本的に伴わない。各住居跡でＡ・Ｂ類の破片が出土するのは、前段階の住居を掘り込んだためか、埋め戻しの土にまぎれたものと考えられる。Ｃ類は第３段階と比べて頸部の屈曲が弱く、口縁部の外反も弱いため、口縁部が比較的短く見える傾向にある。中には03-ＳＩ609のようにＤ２類に近いもの、03-ＳＩ105のようにほぼＤ２類に相当するものを含む。小型甕の作りもほぼ同様で、口縁部の外反が弱いＣ類を主体に、Ｄ類に近いものを含む。底部は、比較的混入の少ないとみられる05-ＳＩ27では、底部外縁が張り出す砂底が主流になる。

土師器坏ではＢ類が主体になり、前段階までに比べＡ類との比率が逆転する。底部まで確認できる資料が少ないが、Ｂ４類が多いとみられる。Ａ類は基本的に破片のみの出土であり、あるいは土師器甕Ａ・Ｂ類同様にまぎれ込んだものである可能性もある。土師器鍋は全体形の分かる資料に乏しいが、05-ＳＩ27では口縁部まで直線的に外傾して、口唇を内削ぎ状に作るものが出土している。前段階までに比べ、口縁部での屈曲が無くなる点に差異がある。02-ＳＩ52では口縁部が横に折れて、受け口上になる須恵器壺が出土している。五所川原ＭＤ16・18号窯跡出土遺物に形状が類似することから、10世紀中葉以降の年代が想定され、本段階土器群の上限年代を探る上で重要な資料である。

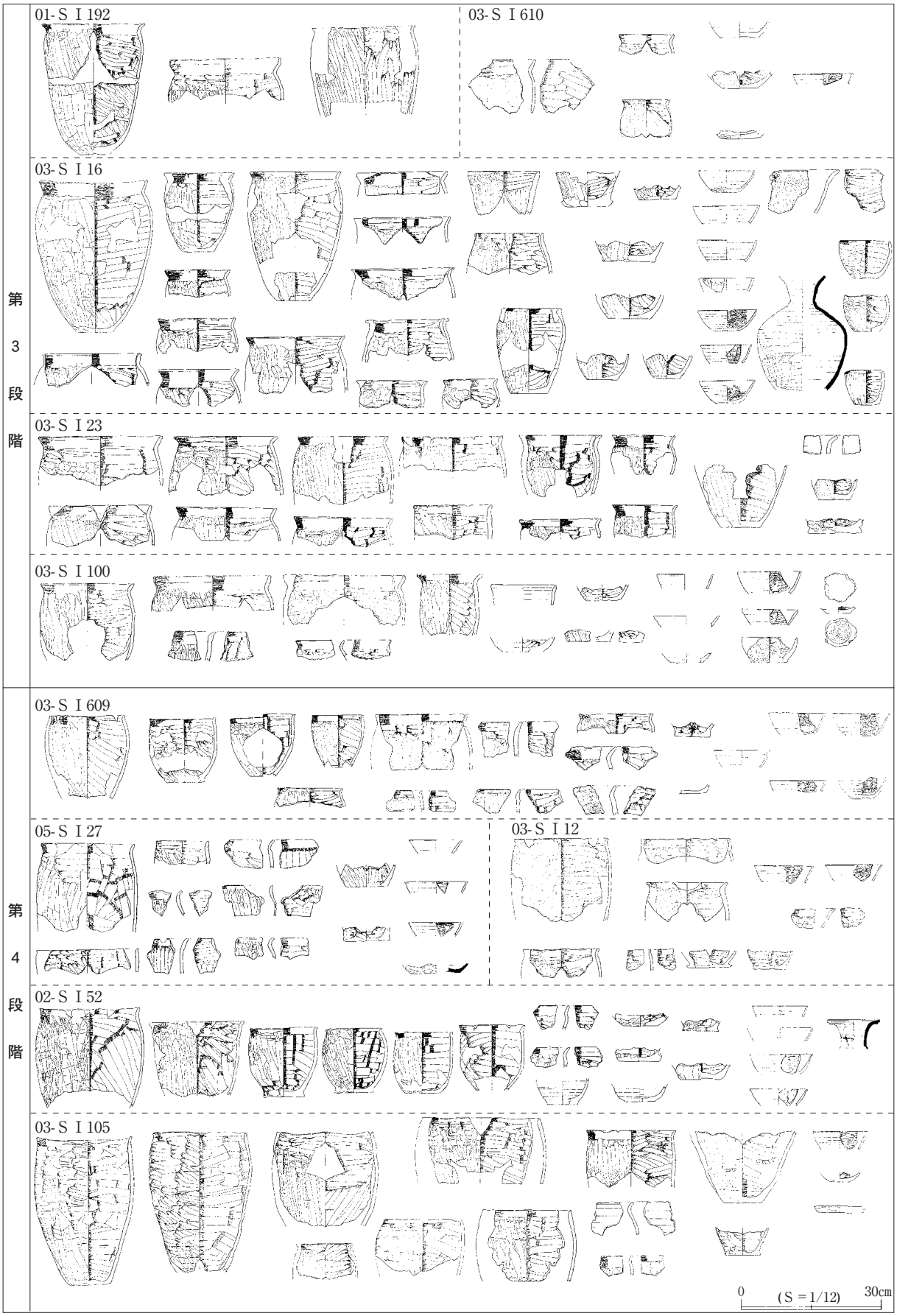
第５段階 (第455図)

02-ＳＩ11・21出土遺物を基準とし、これに類似する01-ＳＩ190、02-ＳＩ18、03-ＳＩ06出土土器群を含めた。この様相をもつ住居跡は拡張住居の最大時に当たり、土器片のカマド構築材転用や、埋め立てに際しても周辺部にそれまでの遺物群が散在していたことが想定され、基本的に第２～４段階の遺物相を混在する。

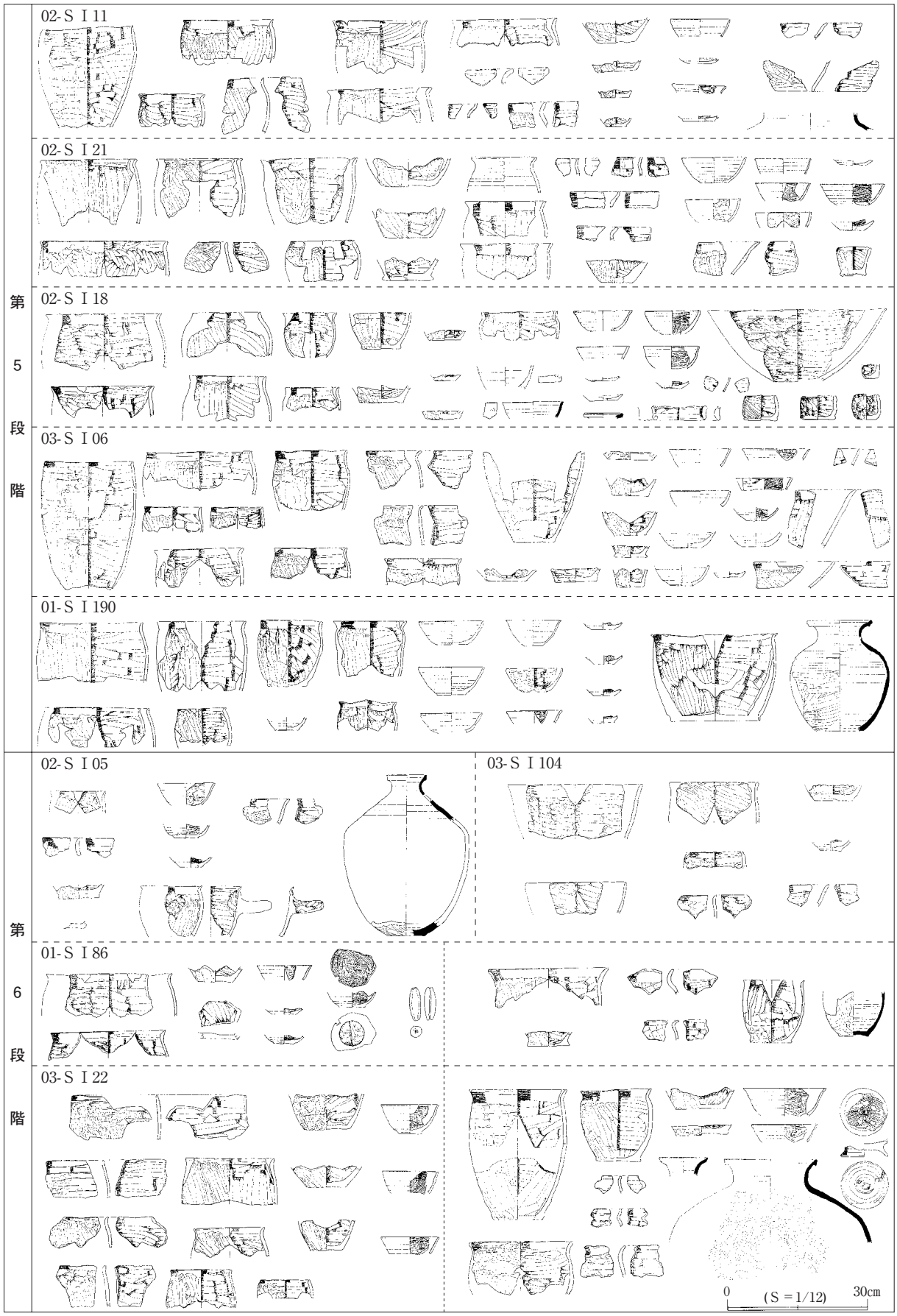
上記の視点を踏まえて前段階までの遺物群との相違を見た場合、土師器甕ではＤ２類の出現率が高まり、これを主体として、Ｃ類でも口縁部の外反が弱いものが伴うとみられ、第４段階よりもＤ２類の比率が高まると考えられる。小型の土師器甕ではＣ類がやや多いが、混在を考えると本来の比率を表すものかは判断し難い。



第453図　各期の遺物組成１(第１・２段階)



第454図　各期の遺物組成２(第３・４段階)



第455図　各期の遺物組成３（第５・６段階）

土師器坏ではＡ類が目立つが、多量に出土する01-ＳＩ190は、第１段階の01-ＳＩ193の一部を掘り込んでおり、03-ＳＩ06は５段階の変遷を経た後の姿であることから、これが本段階の一般的な姿でないことは明らかであろう。この分を差し引けば、02-ＳＩ18ではＢ１・３類が出土している。しかし全体の傾向からすれば、本来伴う土師器坏の量は減少傾向にあると想定される。土師器鍋は、02-ＳＩ18でほぼ全体形を窺える資料が出土しており、底部から屈曲無く口縁部まで外反する器形で、口唇が先細りになる。前段階までに比べ、より胴部の変化に乏しく口縁部が薄い作りになる。02-ＳＩ18では小型土器が出土している。第２段階の05-ＳＩ28Ａに比べ、口縁部が内湾する形状に特徴があり、この段階の土師器甕の作りに影響を受けるとみられる。

01-ＳＩ190では、全体形を窺える須恵器壺が出土しているが、これも伝世や01-ＳＩ193からの巻き上げの可能性がある。なお01-ＳＩ190、02-ＳＩ11・21では甑が出土している。甑の共伴は第４段階までは顕著でなく、この段階から器種構成に本格的に加わる可能性がある。

第６段階 (第455図)

第５段階の住居を掘り込む01-ＳＩ86や02-ＳＩ05を主体に、各地点の重複順位で最新段階に当たる03-ＳＩ22・104を本段階とした。４軒とも古段階の住居を大きく掘り込むことから、混在する遺物相を示す。

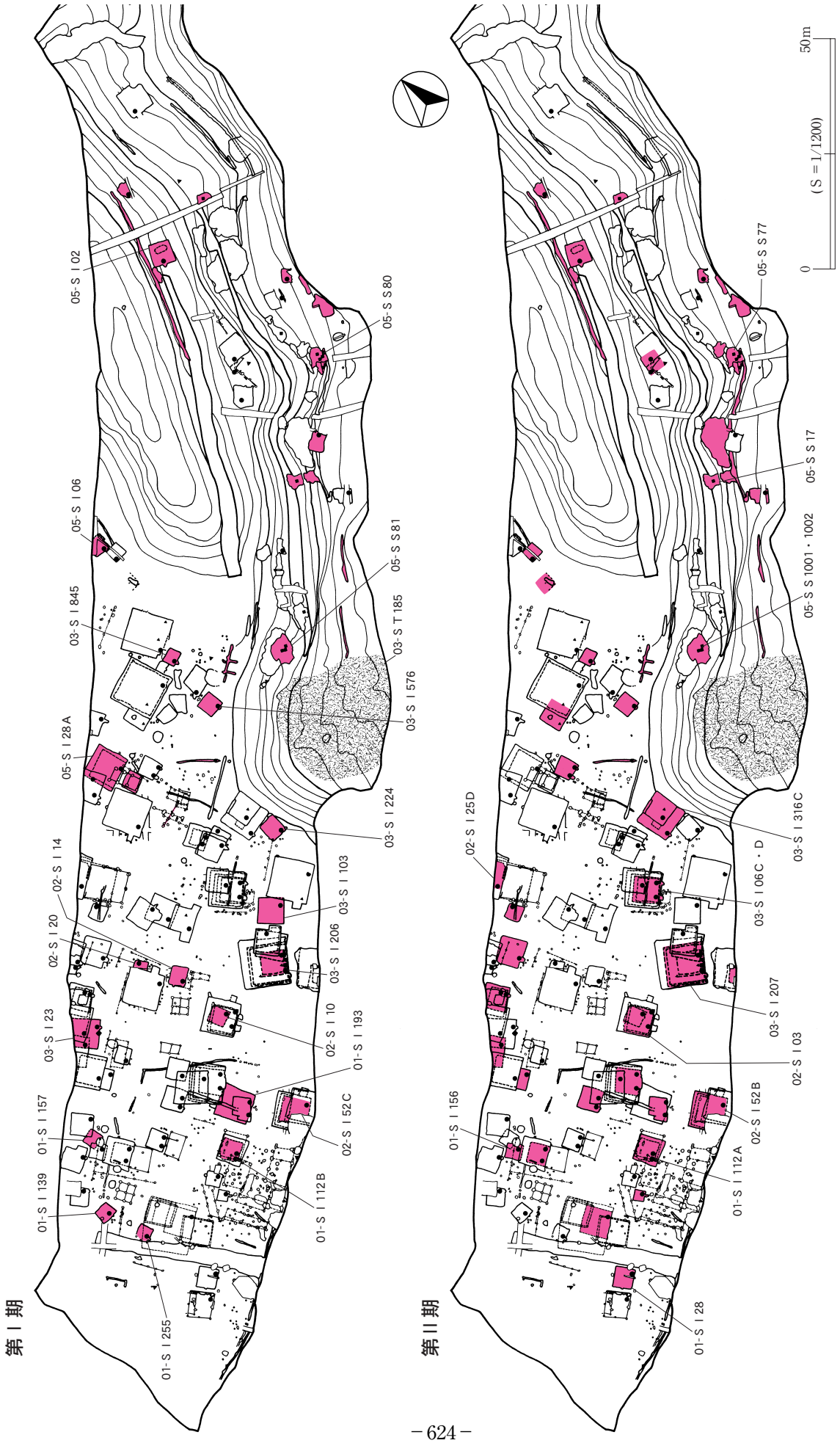
土師器甕で特徴的なのは、03-ＳＩ104のようにＤ１類か鍋かの区別をつけ難い器形のものや、外面調整で口端付近までケズリを施すものである。土師器坏は03-ＳＩ104ではほとんど伴わないが、02-ＳＩ05ではＢ４類が出土しており、わずかに存続する可能性がある。この他特徴的なのが、02-ＳＩ05で把手付土器を伴うことである。遺跡全体で２点のみ出土したうちの１点で、本遺跡ではこの段階に把手付土器が伴うと考えられる。

01-ＳＩ86、02-ＳＩ05、03-ＳＩ22では須恵器の壺・甕が出土しているが、古段階の住居から巻き上げたものである可能性が高い。特に03-ＳＩ22は土師器甕Ｂ類を多く含むが、03-ＳＩ23に由来するものとみられる。本住居跡に本来伴う土師器甕は、薄手の作りのＤ２類と考えられる。

Ⅳ　集落構成と変遷

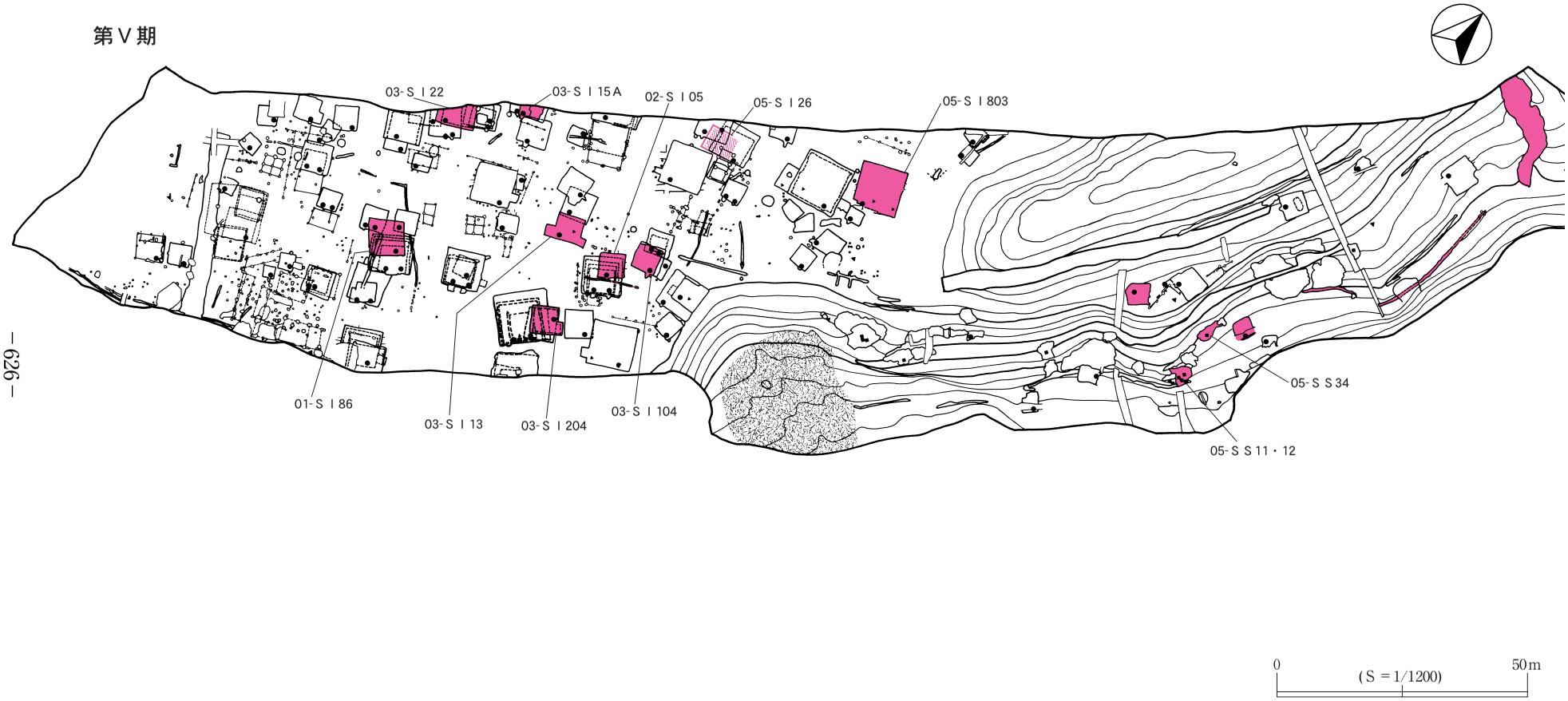
釈迦内中台Ⅰ遺跡は、長期間にわたる集落形成により複数の遺構が重複するため、時期ごとにどのような施設構成でもって集落が営まれていたかの把握が困難であるが、住居の新旧関係を整理すると大まかな移り変わりを捉えることが可能である。しかし、集落がある時期一斉に施設の全面改変を行うことは想定し難く、各施設ごとの要因、例えば住居であれば住居ごとの耐用年数または構成員の変化などに応じて、拡張または建て替えを行うであろうことから、本来の集落構成時の時期的画期をどこに設けるかが問題になる。

ここで注目されるのは、集落全体を区画する施設である。集落の区割りは、集落構築計画を反映する要素であり、個人や構成世帯はこの計画に従い、区割りに規制されるとみなされる。この場合、一定の区画内での建て替えや拡張は可能だが、この区画を越えることはできなかったと考えられる。この区割りの２大要素は宅地と道であろう。前者は個人の、後者は公共施設の代表である。道跡は平安時代当時の生活面が大部分で失われていることから、直接的な路面の確認は不可能だった。しかし断



第456図　集落構成・変遷1(Ⅰ・Ⅱ期)

第457図　集落構成・変遷２(Ⅲ・Ⅳ期)



第458図　集落構成・変遷３（Ⅴ期）

片的ではあるが、溝跡や柵列の中にはその痕跡を示すと思われるものが存在するため、第4章までの検討を含めて集落画期を検討する材料とする。この区画に一定の規制を受ける住居群を、先述の住居拡張や主軸方位、または共伴遺物の様相などを踏まえて、各期の集落構成と変遷を復元してみたい。

第Ⅰ期：南北に主軸を合わせる住居と地形に主軸を合わせる住居の分布する集落 (第456図)

第Ⅰ期の主な施設は、竪穴住居と製鉄工房群である。本集落の開発は製鉄工房主導で始まると考えられる。その一つの根拠は、集落開始当初から形成が始まる03-ＳＴ185の下層に、05-ＳＳ1001・1002・81製鉄遺構に関連する排滓場が存在することである。なお、この時期に住居Ｂ類が集中して存在することから、05-ＳＩ02も存在していた可能性が高い。

住居分布としては01-ＳＩ193、03-ＳＩ23、05-ＳＩ28Ａの特大形の住居を核として、軸1類の小形住居が散在する。01-ＳＩ139・157・255や02-ＳＩ04・10・20は概ね南北に3軒縦列し、03-ＳＩ224・576・854や05-ＳＩ06も、間隔は空くが南北に縦列配置をとる。これらとは別に01-ＳＩ112や02-ＳＩ52Ｃ、03-ＳＩ103・206は軸2類である。南北列で配置する小形住居とその間に位置する03-ＳＩ23、05-ＳＩ28Ａが集落北半とすれば、集落南半が軸2類でも傾斜変換線に住居主軸を合わせる住居が分布しており、第Ⅱ期以降とは違った住居配置の規則が窺える。

製鉄工房域では、重複のある最古段階の05-ＳＳ80・81が機能していたと考えられ、その周辺部にも住居を築く。05-ＳＩ02が出現していたとすれば、05-ＳＳ30の操業も始まっていたと考えられる。また平坦面への通路として05-ＳＤ01も出現すると考えられる。

第Ⅱ期：集落の拡大と区割りの出現 (第456図)

第Ⅱ期の主な施設も前段階同様に、竪穴住居と製鉄工房群である。3回拡張する住居の多くはこの段階から出現するとみられ、区割りの基礎が出来上がったと考えられる。前段階から引き続き存続するとみられるのは、01-ＳＩ112Ｂから拡張する01-ＳＩ112Ａ、02-ＳＩ52Ｃから拡張する03-ＳＩ52Ｂ、03-ＳＩ206から拡張する03-ＳＩ207である。02-ＳＩ03も、01-ＳＩ10と地点がほぼ変わらないことから、あるいは連続する可能性がある。これらが本段階の区割りの基準になるとみられ、前時期では南北軸主体の住居が分布した集落北半でも、軸2類に統一され始める。住居の集中する位置をみると、01-ＳＩ28を南西端とし03-ＳＩ06Ｃ・Ｄを北東端とする南側の列と、01-ＳＩ156を南西端とし02-ＳＩ25Ｄを北東端とする北側列の大きく2列に分かれており、北東－南西方向に並列する住居群配置へ変化したと想定される。

これらに対し、03-ＳＩ316Ｃ以東では引き続き軸1類が主体であり、この区域では集落主体部とは違った区割りが存在したことが窺える。製鉄関連の工房域が存在した可能性のある区域であり、前時期の様相が長く残るのかもしれない。

製鉄工房群は、重複関係の2段階目に当たる05-ＳＳ1001・1002や05-ＳＳ11・77が機能していたとみられる。05-ＳＳ17もこの段階には操業していた可能性がある。

第Ⅲ期：南東縁に柵列を巡らす集落 (第457図)

第Ⅲ期の主な施設は、竪穴住居・掘立柱建物・柵列・製鉄工房群である。特にこの時期の施設に大

きな関わりをもつのは、台地の南東縁に巡る柵列とみられる01-ＳＤ48・404、02-ＳＤ03である。この柵列には櫓の可能性が高い01-ＳＢ456が連結する。

竪穴住居の分布からみて、前段階同様に01-ＳＩ21を南西端とし03-ＳＩ06Ｃを北東端とする南列と、01-ＳＩ160を南西端とし03-ＳＩ853を北東端とする北列に、分布の集中がみられることから、宅地の区割りの基本は、前段階同様に北東－南西方向の並列配置である。これに01-ＳＤ48・404、02-ＳＤ03の柵列が集落南東縁の区画として伴う。

宅地区画で前段階と違うのは、南列が若干北よりに移って、02-ＳＩ08・52Ａがさらに南側のラインとして分離すること、北列の北東端が延長することである。前者は、01-ＳＩ149Ａ・190Ｂ・Ｃの南側に、新たに櫓を主体とする掘立柱建物区画が出現することに関係するとみられる。後者は前段階までの製鉄工房域へ、宅地域が延長したことを窺わせる。なお、この時期の重要な要素として、集落南西側に01-ＳＡ40・455・474等の比較的長めの柵列で、集落南西側を区画することが挙げられる。第Ⅳ期の大溝区画の前身と考えられる。

製鉄工房では一つの画期を迎える可能性がある。これまで平坦面北東部丘陵裾野は、製鉄工房関連域として独自の変遷過程を辿ったが、ここに超大形住居の03-ＳＩ609が出現する。03-ＳＩ336や作業小屋とみられる03-ＳＢ3005の配置状況からみて、単純な宅地化ではなく、引き続き製鉄関連工房域としての利用が想定されることから、03-ＳＩ609は製鉄関連作業管理者の住まいである可能性が高い。この出現により、工人の住まいとみられた軸１類の小形住居では、かろうじて03-ＳＩ336も存在するが、05-ＳＩ66のように急斜面部に配置するものが出現するとみられる。これに伴い、居住域隣接地での製鉄遺構配置も変化したと考えられる。おそらく05-ＳＳ1001・1002はこの段階で埋められ、より北東側に05-ＳＳ19・65を開発したと考えられる。これらに伴う区画施設の03-ＳＤ1002・1003もこの段階以降に存在したであろう。この他、05-ＳＳ34の出現期もこの時期とみられる。これに伴い丘陵部中腹に05-ＳＩ03・05が建てられ、隣接地で鍛冶作業を行ったと考えられる。

第Ⅳ期：南西縁に大溝区画を有する集落 (第457図)

第Ⅳ期の主な施設は、竪穴住居・掘立柱建物・柵列・製鉄工房である。この時期の施設を規制するのは、台地の南西端を区画する大溝の01-ＳＤ220で、この区画を基準として各施設の配置が決まるとみられる。

前時期に比べて竪穴住居の配置は一変する。第Ⅱ・第Ⅲ期と東西方向の住居列が宅地割の基本であったが、大溝の出現により北東－南西列配置に区画整理される。その中心となるのが出入り口施設とみられる張り出しをもつ超大形住居跡で、北東壁にもつ02-ＳＩ01・18と南西壁にもつ02-ＳＩ24や03-ＳＩ102が相対する位置関係になる。この間には、02-ＳＩ07Ａ・11・25Ａ、03-ＳＩ203が並ぶ。この中心域の南西側にも、01-ＳＩ34・190Ａ、02-ＳＩ21の列、さらに01-ＳＩ74・158の列と並ぶ。

01-ＳＤ220の北西端から東北東へ延びる01-ＳＤ47・195・213・250・426は、大溝の途切れる位置が集落入り口で、ここから延びる道路に伴う側溝だった可能性が高い。この側溝は途中南南東へと折れて、略方形の区画をつくる。一部01-ＳＩ190と重複することから、01-ＳＩ190は比較的早い段階で廃絶していたものと思われる。この略方形区画内部は、掘立柱建物を主体とする区域で、基本的には宅地域ではなくなったと考えられる。なお、この時期宅地域内でも多くの掘立柱建物や柵列を伴ってお

り、細やかな区画が存在したと考えられる。

製鉄工房群では、概ね前段階からの遺構配置を踏襲するとみられるが、岩盤を刳り貫く大掛かりな土木工事を必要とする05-ＳＤ63の掘削は、この段階の可能性が高い。基本的には丘陵部背後との連絡路として機能したとみられ、平坦面上の居住域との導線が北回り主体になったことを窺わせる。また平坦面上工房域では、03-ＳＩ609に変わり05-ＳＩ803を建て、工房域の北辺を区画するような03-ＳＡ3019も出現すると考えられる。この03-ＳＡ3019は、これまでよりも工房域が南側に狭められたことを意味し、集落南西部に掘立柱建物区画が出現することを併せると、居住域がより調査区外北東部へ拡大した可能性がある。

第Ⅴ期：集落縮小から廃絶 (第458図)

第Ⅴ期の主な施設は、竪穴住居・製鉄工房群である。前時期に比べ住居数は激減し、計画的区割りに基ずく集落構成は、少なくとも調査区内では消滅して、住居が散在する状況になる。比較的密集するとみられるのは02-ＳＩ05、03-ＳＩ13・104・204の範囲で、強いて言えばこれを囲むように01-ＳＩ86、03-ＳＩ22・15Ａ、05-ＳＩ26がＬ字状に配置するとみられる。また05-ＳＩ803は建て替えが認められるため、この時期まで存続した可能性がある。製鉄工房では、最新段階の05-ＳＳ11・12や、05-ＳＳ34が存続した可能性がある。

以上から、この段階には一般居住域としての集落のあり方から、製鉄関連作業に従事する人々がわずかに存在するだけの居住域へ変化したと考えられる。

Ⅵ　おわりに

釈迦内中台Ⅰ集落は、十和田ａ火山灰降下後から形成が始まり、ほぼ10世紀代で集落としての機能を失うとみられるが、比較的規模の大きな集落形成を達成するにも関わらず、後代へと連続しない点に疑問が残る。以下に、釈迦内中台Ⅰ集落の出現と消滅の原因について考えをまとめる。

出現期の重要な要素として、西暦915年の十和田火山噴火に伴うシラス洪水がある。シラス洪水は、道目木埋没家屋にみられるような家屋倒壊・埋没などの建造物被害に加え、農地にも壊滅的な被害をもたらしたと想定される。大館市域の米代川沿い沖積地には、シラスが数ｍの厚さで堆積しているが、軽石を主体とするシラスは栄養分や保水力に乏しく、水田稲作には適さない土壌であり、おそらく当時、米代川沿い沖積地を農地として利用していた人々は、代替地を模索したと想像する。ここで洪水被害が少なく、まだ開発の進んでいない乱川沿いの沖積地が候補の一つに上がったと考えられる。

釈迦内中台Ⅰ集落の出現期は、以上のような人的・経済的被害からの地域社会復興期である。経済面では確実に不可耕地が発生したとみられ、死亡者数も相当数にのぼったと考えられる。そのような甚大な被害の中で、残された人々は地域社会の再生を図る。このため、９世紀までの社会構成からそのまま連続せず、10世紀前葉で再スタートをきったと考えられる。釈迦内中台Ⅰ集落のⅠ期に、開村に併せて製鉄を目的とした集団の定着がみられるのは、集落復興に向けた鉄需要の増加に起因すると考えられる。

開村以降、釈迦内中台Ⅰ集落は順調に拡大し、最終的には大溝区画を基準とした計画的区割りの集落を形成するが、10世紀末頃に集落は突如小規模化して、その後消滅する。Ⅴ期の様相からすると、

その変化は居住域と生産域の分離とみられ、集落内的鉄生産管理から専門鉄生産域を外部から管理する体制に切り替わったことが想像される。

釈迦内中台Ⅰ集落終末期の10世紀代末～11世紀初頭は、北日本では防御性集落の出現展開期に当たる。北日本における防御性集落は、10世紀後半に出現して11世紀前葉に画期をもつことが指摘されており、秋田県でも柵列や空堀などの区画施設を伴う集落の出現は、10世紀中頃を出現期とみる見解がある(高橋2006)。大溝を伴う釈迦内中台Ⅰ集落Ⅳ期は、概ね10世紀後半とみられるため時期的に符合する。こういった施設の出現する要因としては、安部氏・清原氏・藤原氏などの、広域支配者の台頭による地域社会の再編が想定される。もし、幾つかの集落を統括するような統治者が出現していたならば、居住域と生産域の個別管理も可能と考えられる。釈迦内中台Ⅰ集落の分離・解体の背景には、このような地域社会の整理・再編が存在したとみられるが、大館市域では後続する11世紀代の集落跡調査例が少ないため、憶測の域をでるものではない。

釈迦内中台Ⅰ集落は、開村期の住居が散在する集落から、継続的に住居が増加して計画的集落へと発展するが、各画期において集落立地を変更しない点に、防御的思想が比較的薄い本遺跡の特徴が認められる。12世紀の郡制施行に関して入間田宣夫氏は、「たとえば、鹿角・比内など、旧来の地名が尊重され、郡名として採用された地域においては、在地の首長らが郡司に登用されて、漸進的な社会変革が行われたものと考えられる。それにたいして、津軽平賀郡・鼻和郡などにおいては、清原の進駐軍によって持ち込まれた南方の地名が、新たに郡名として採用されることになった。」(入間田2006)と、米代川中・上流域の特徴を示している。漸進的な社会展開から想像されるのは、後に広範囲に統治する勢力に対する闘争の少ない地域社会である。そう考えるにはまだ不明な点が多いが、本遺跡においては、住居主軸を南北軸に合わせる点、製鉄炉を構築し運営する技術の出現、墨書土器や石帯の保持などが認められ、その背後には、災害復興段階で外部からの移民流入も想定される。シラス洪水という大災害を一つのきっかけとして、南北の人的・文化的交流が進んだ可能性があり、外部文化や新技術を受容する必要性があったのが、釈迦内中台Ⅰ集落が展開した時期の大館市域の社会様相だったと、今回の調査から予測される。

以上釈迦内中台Ⅰ遺跡の検討を行ったが、本遺跡の有する情報量は多く、今回検討しきれなかった部分も多い。特に製鉄関連遺構や出土遺物などはまだ検討不足であり、今後さらに検討を加えることで、より明確な釈迦内中台Ⅰ遺跡の姿が浮かび上がると考えられる。

《引用・参考文献》

秋田県教育員会　『国道103号道路改良事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅵ－上野遺跡－』
秋田県文化財調査報告書222集　1992(平成４)年
秋田県教育員会　『国道103号道路改良事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅷ－池内遺跡－遺構編』
秋田県文化財調査報告書268集　1997(平成９)年
秋田市教育委員会　「湯ノ沢Ｆ遺跡」『秋田新都市開発整備事業関係埋蔵文化財発掘調査報告書』　1986(昭和61)年
板橋範芳　「道目木遺跡埋没家屋調査概報」『火内』創刊号　2000(平成12)年
入間田宣夫　「防御性集落の終末と諸郡の建置」『北の防御性集落と激動の時代』　2006(平成18)年
大館市教育委員会　『山王台遺跡』　1990(平成２)年
大館市史編さん委員会　『大館市史』第１巻　1979(昭和54)年
五所川原市教育委員会　『五所川原須恵器窯跡群』五所川原市埋蔵文化財調査報告書第25集　2003(平成15)年
高橋　学　「秋田県における古代防御性集落」『北の防御性集落と激動の時代』　2006(平成18)年

遺跡全景 1（南東→）

遺跡全景 2（北西→）

図版2

遺跡全景3（南西→）

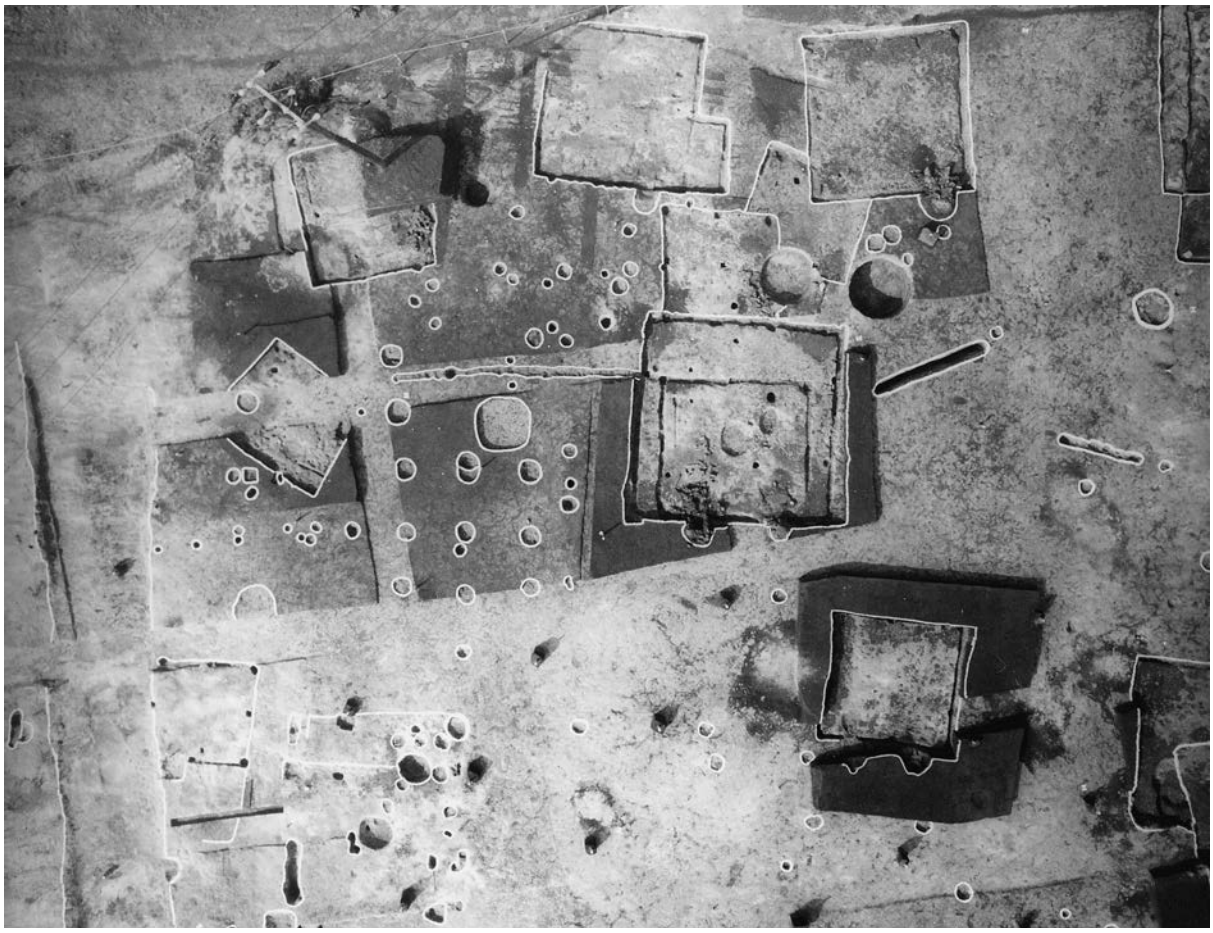
遺跡全景4（真上→）

丘陵部全景 1（東→）

丘陵部全景 2（北東→）

図版4

平成13(2001)年度　調査区垂直全景



平成13(2001)年度　調査区住居重複(真上→)

平成14(2002)年度　調査区垂直近景 1

平成14(2002)年度　調査区垂直近景 2

図版6

平成17(2005)年度　調査区台地上部平坦面垂直全景

平成17(2005)年度　調査区丘陵部垂直全景

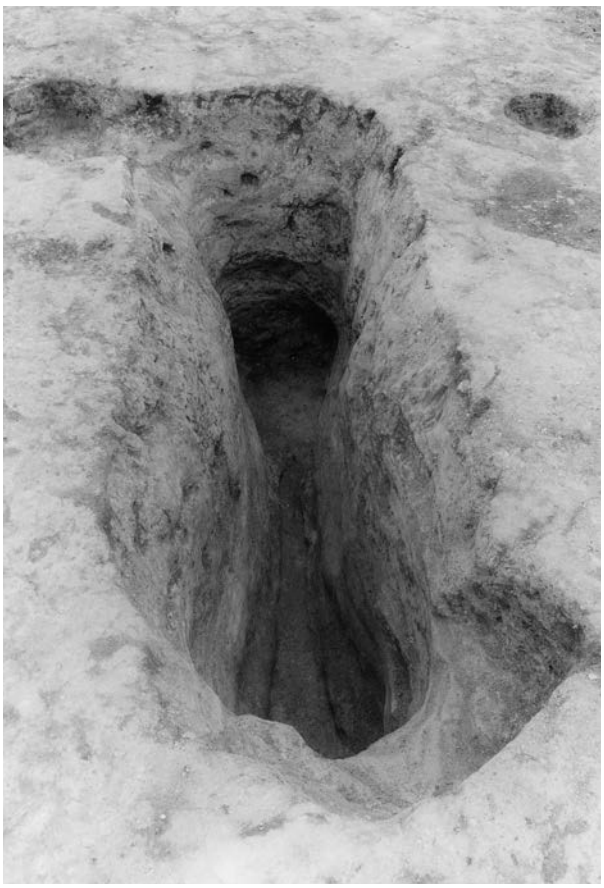
丘陵部中央部近景(東→)

丘陵部南西部近景(東→)

図版8

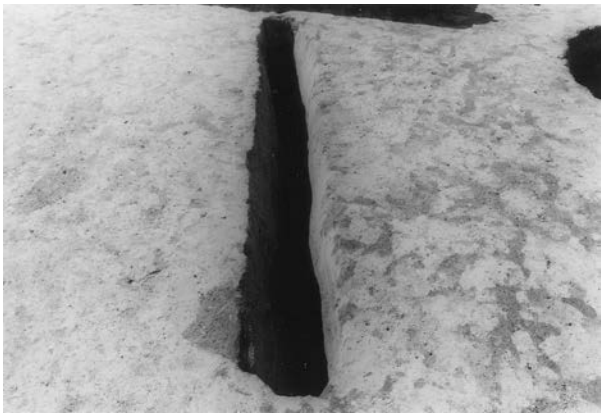
丘陵部北東部近景(東→)

丘陵部北端部近景(東→)

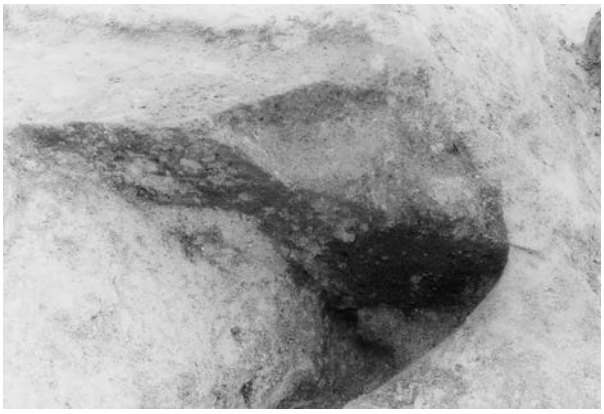


01-ＳＫＴ148全景(南西→)

01-ＳＫＴ358断面(東→)



01-ＳＫＴ358全景(東→)



01-ＳＫＴ363断面(北→)

01-ＳＫＴ406断面(東→)

01-ＳＫＴ363全景(南→)

01-ＳＫＴ406全景(東→)

図版10

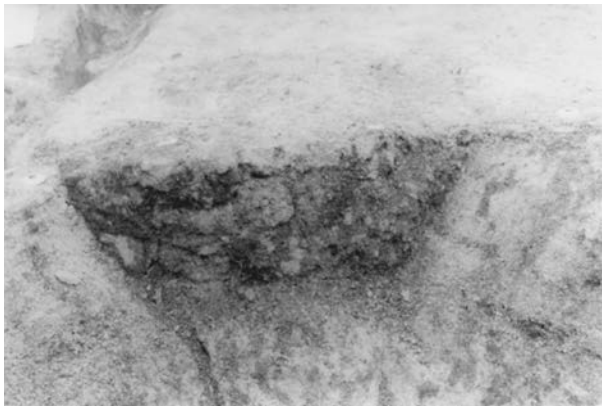
02-ＳＫＴ01断面(南→)

03-ＳＫＴ198断面(南西→)

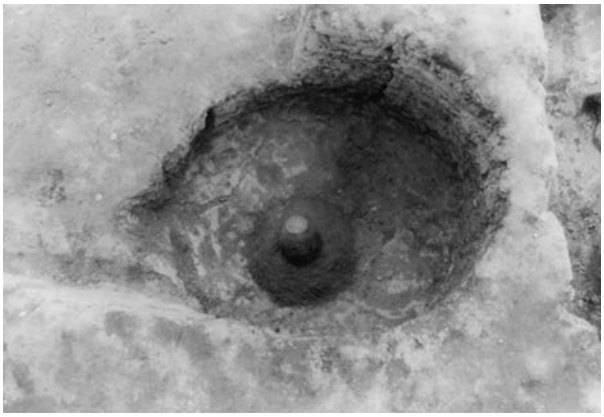
02-ＳＫＴ01全景(南→)

03-ＳＫＴ198全景(南西→)

03-ＳＫ320全景(南→)

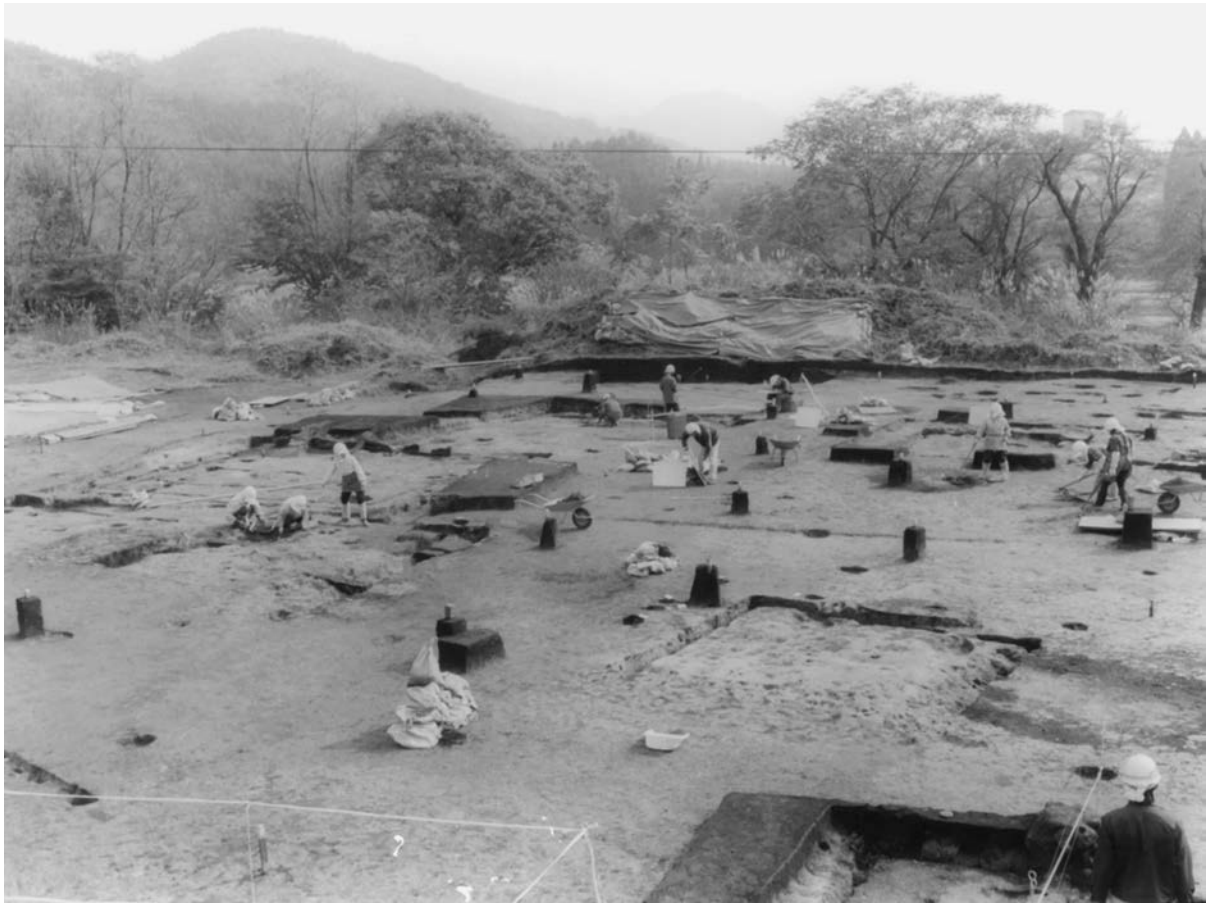


03-ＳＫ320断面(南→)

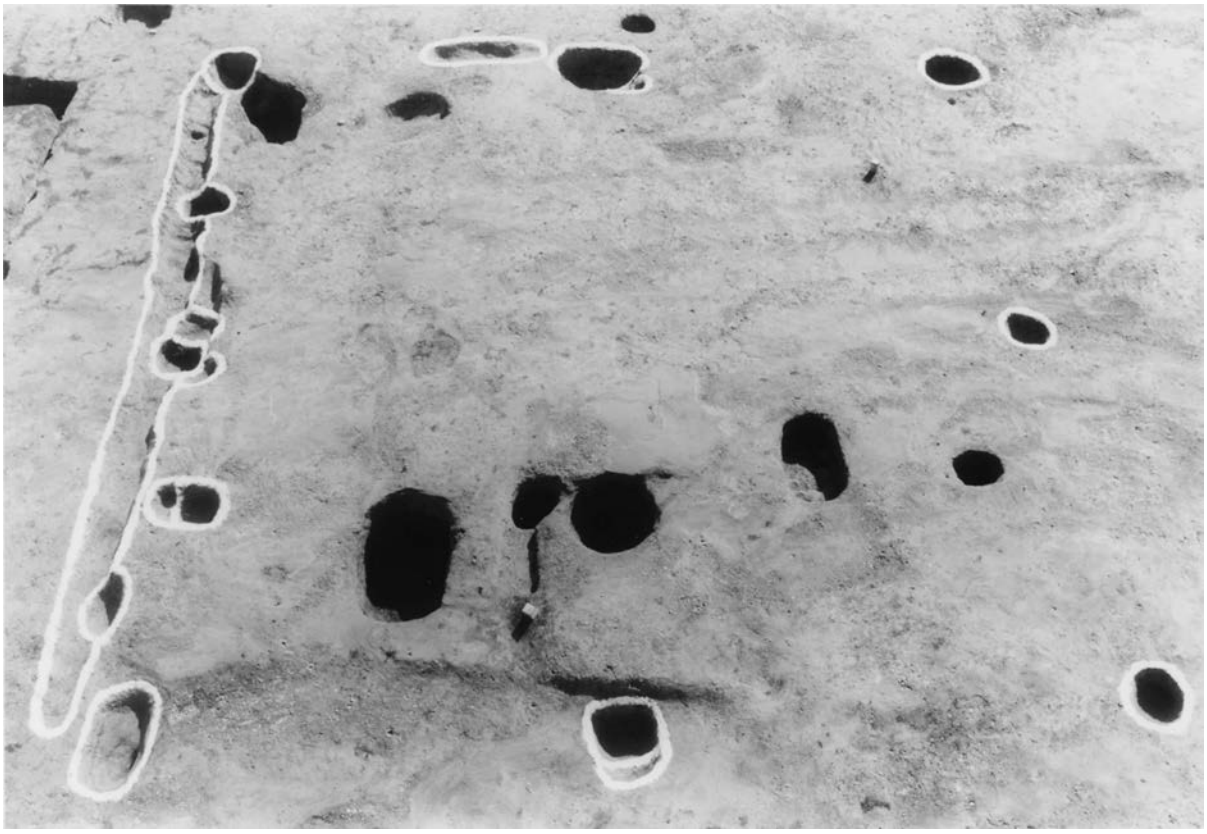


03-ＳＫ320遺物出土状況１(真上→)

03-ＳＫ320遺物出土状況２(西→)



調査風景(北→)



01-ＳＩ21全景(北西→)

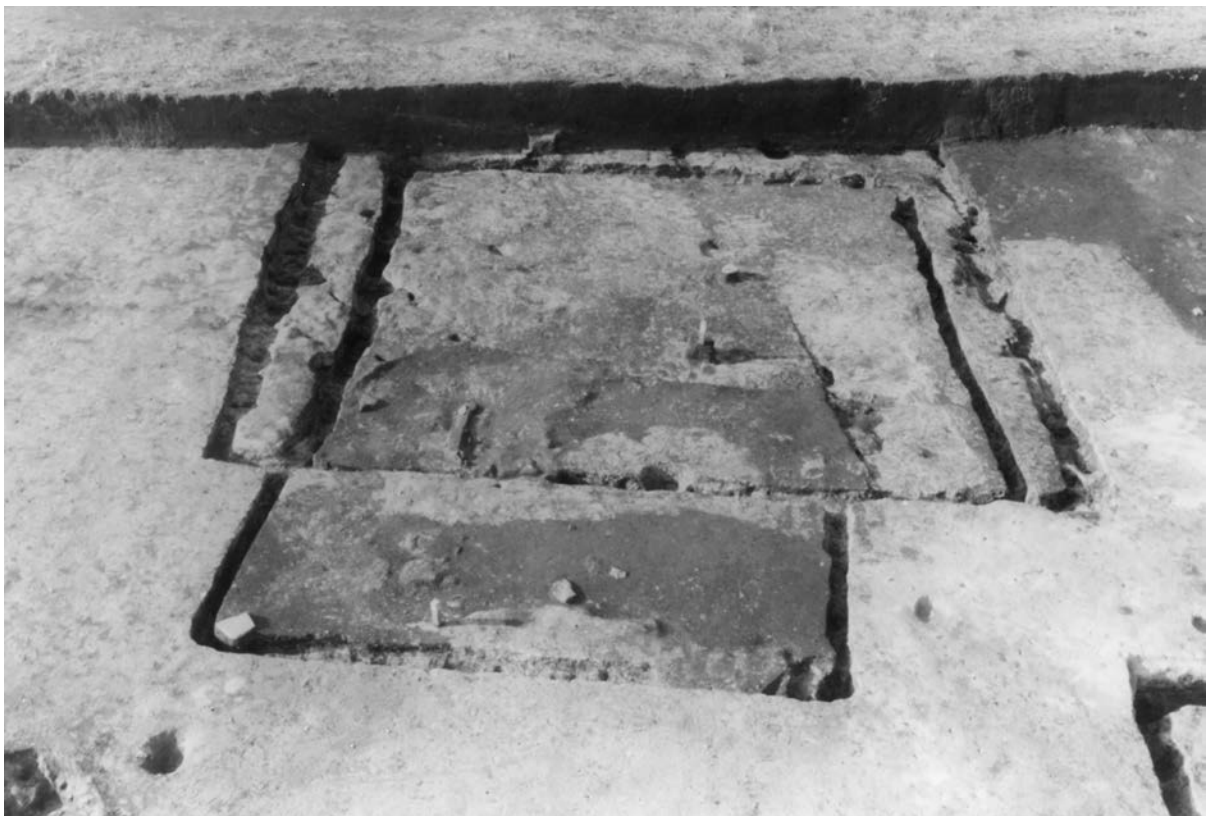
図版12

01-ＳＩ28全景(南西→)

01-ＳＩ28断面(南東→)

01-ＳＩ28カマド全景(北西→)

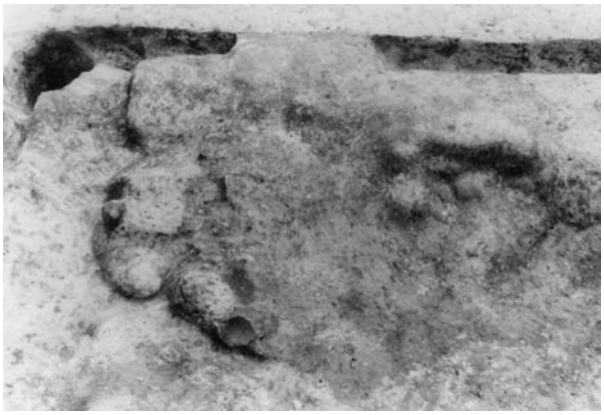
01-ＳＩ28カマド遺物出土状況(北西→)



01-ＳＩ34・35全景(南東→)

01-ＳＩ34断面(南東→)

01-ＳＩ34カマド確認(北西→)



01-ＳＩ35カマド全景(北西→)

図版14

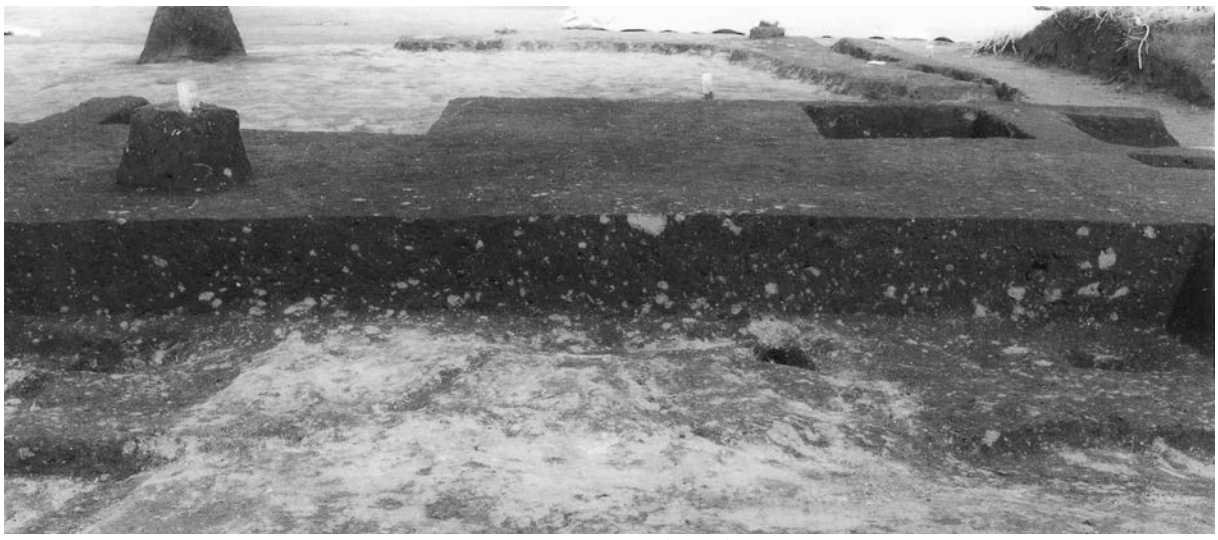
01-ＳＩ74全景(北西→)

01-ＳＩ74断面(南東→)

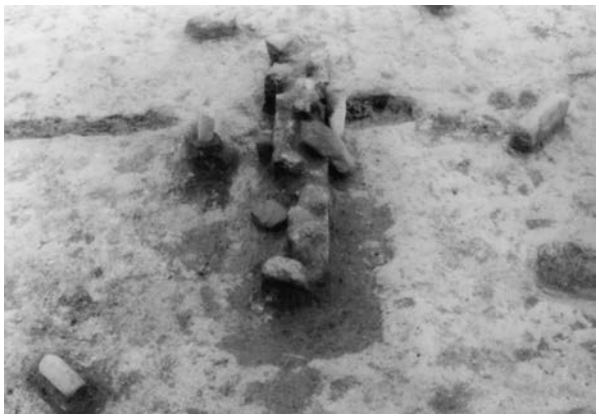
01-ＳＩ74貼床断面(南東→)

01-ＳＩ74カマド全景(北西→)

01-ＳＩ86全景(北西→)

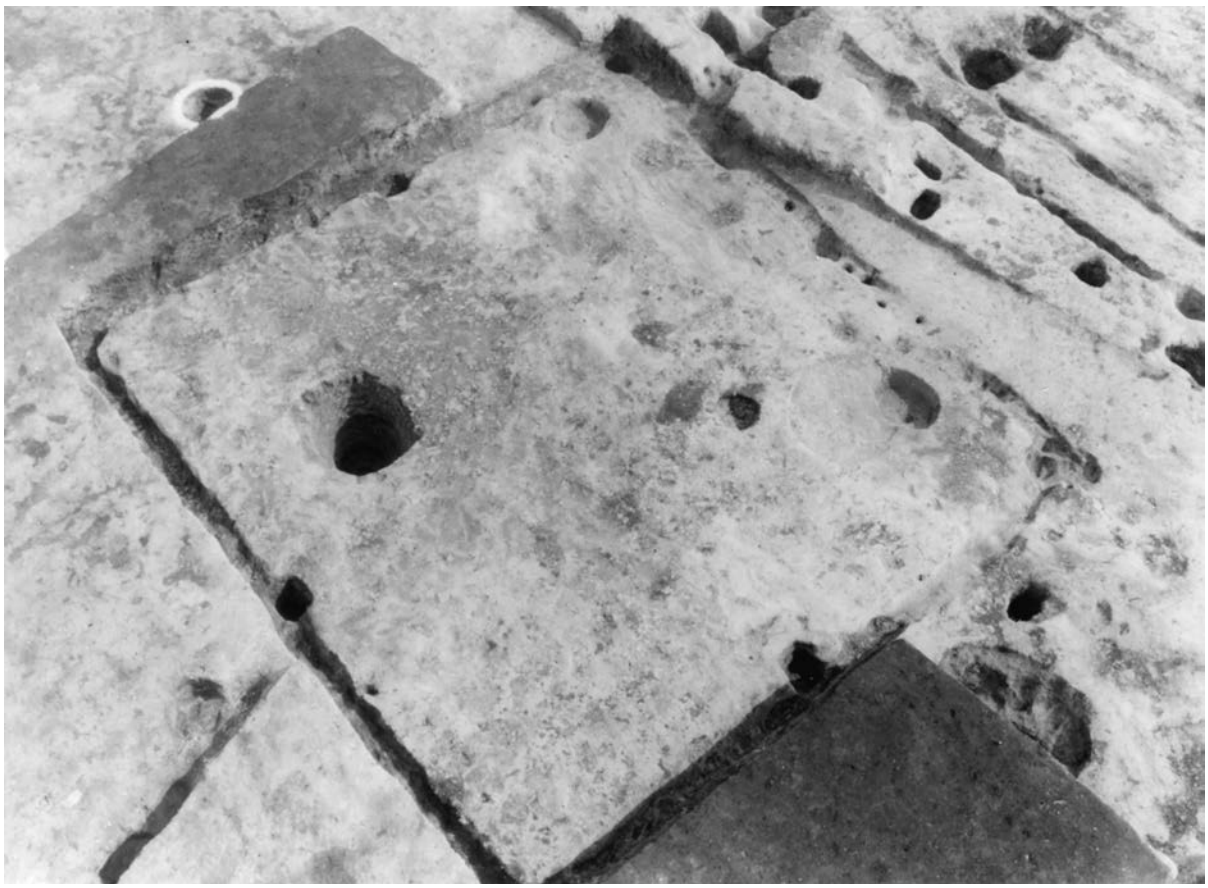


01-ＳＩ86断面(南→)

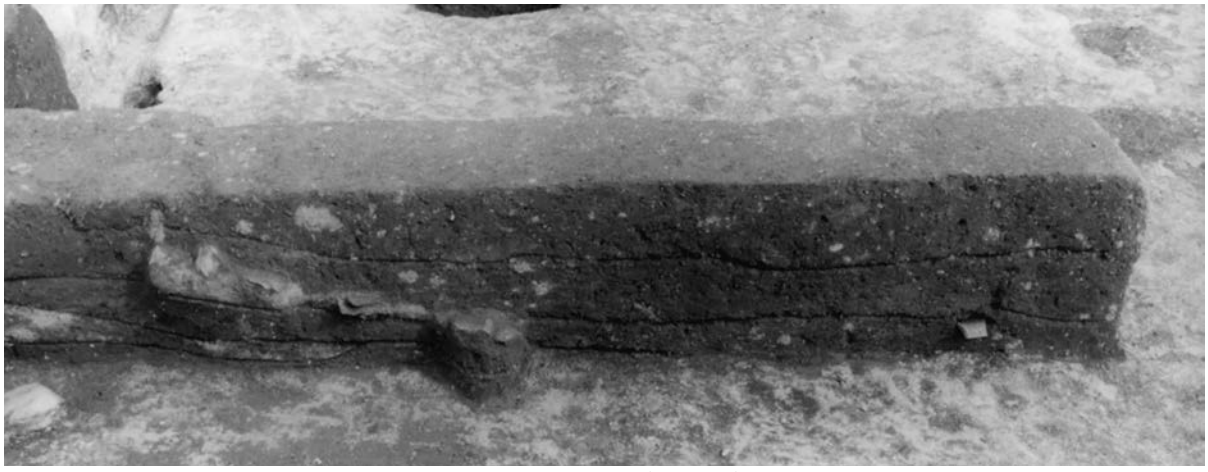


01-ＳＩ86カマド確認(北西→)

01-ＳＩ86カマド断ち割り(北西→)

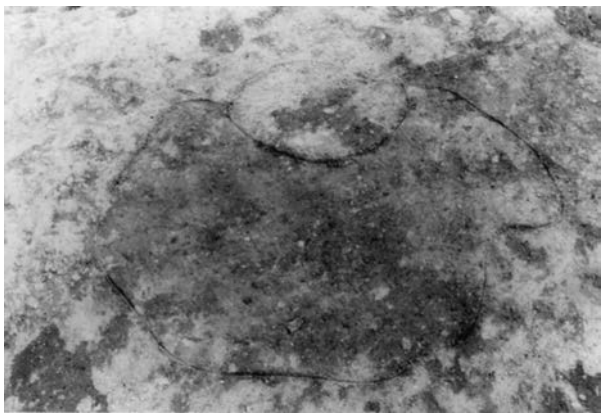


01-ＳＩ87全景(西→)



01-ＳＩ87断面(南西→)

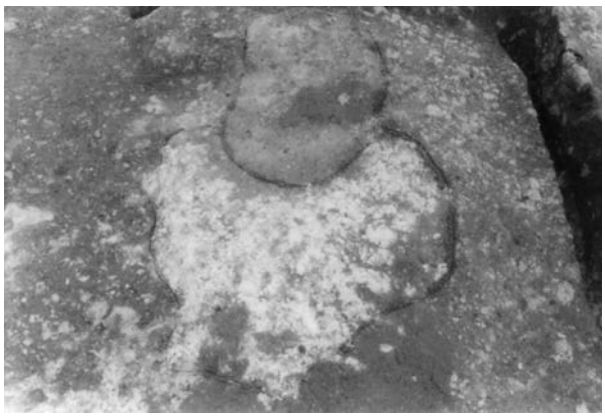
01-ＳＩ87スロープ状粘土全景(北→)



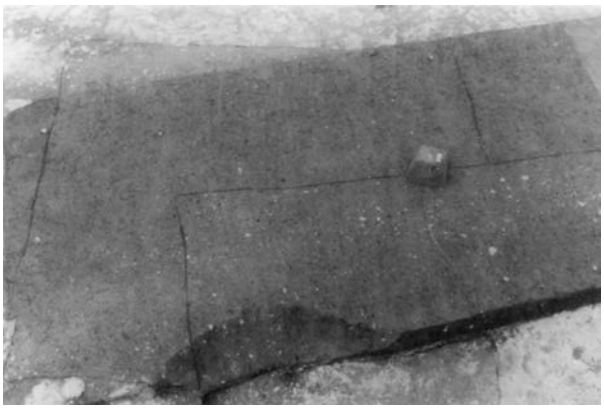
01-ＳＩ87カマド全景(北→)

01-ＳＩ88全景(北西→)

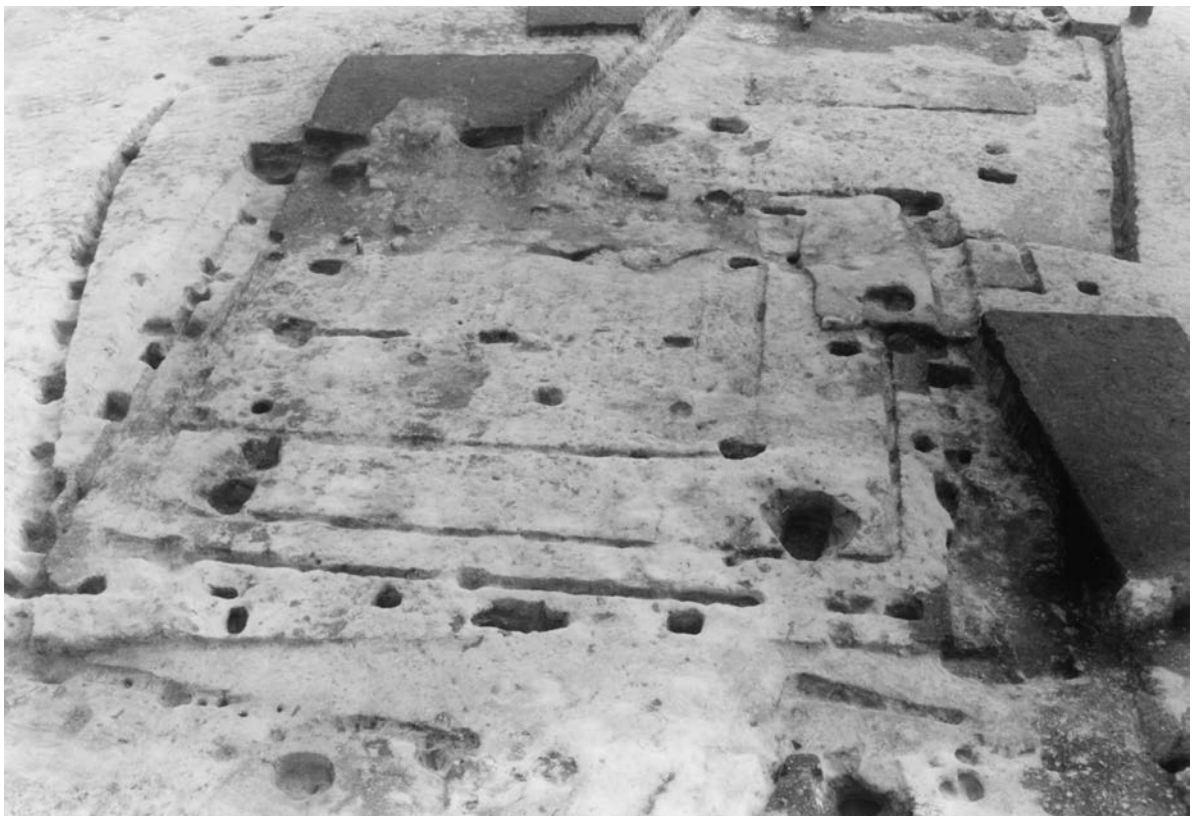
01-ＳＩ88断面(南西→)



01-ＳＩ88カマド全景(北西→)



01-ＳＩ88住居確認(南→)



01-ＳＩ190全景(北西→)

01-ＳＩ190断面(北西→)

01-ＳＩ190カマド確認(北西→)

01-ＳＩ190カマド全景(北西→)

01-ＳⅠ192・193全景(北→)

01-ＳⅠ193断面１(南→)

01-ＳⅠ193断面２(南→)

01-ＳＩ193カマド全景(北→)

01-ＳＩ193カマド遺物出土状況１(北→)

01-ＳＩ193カマド遺物出土状況２(北→)

01-ＳＩ193カマド全景(西→)

01-ＳＩ193カマド遺物出土状況１(北西→)

01-ＳＩ193カマド遺物出土状況２(北東→)

01-ＳＩ112全景(北西→)

01-ＳＩ112断面(南東→)

01-ＳＩ112Ａカマド確認(北西→)

01-ＳＩ112Ｂカマド確認(北西→)

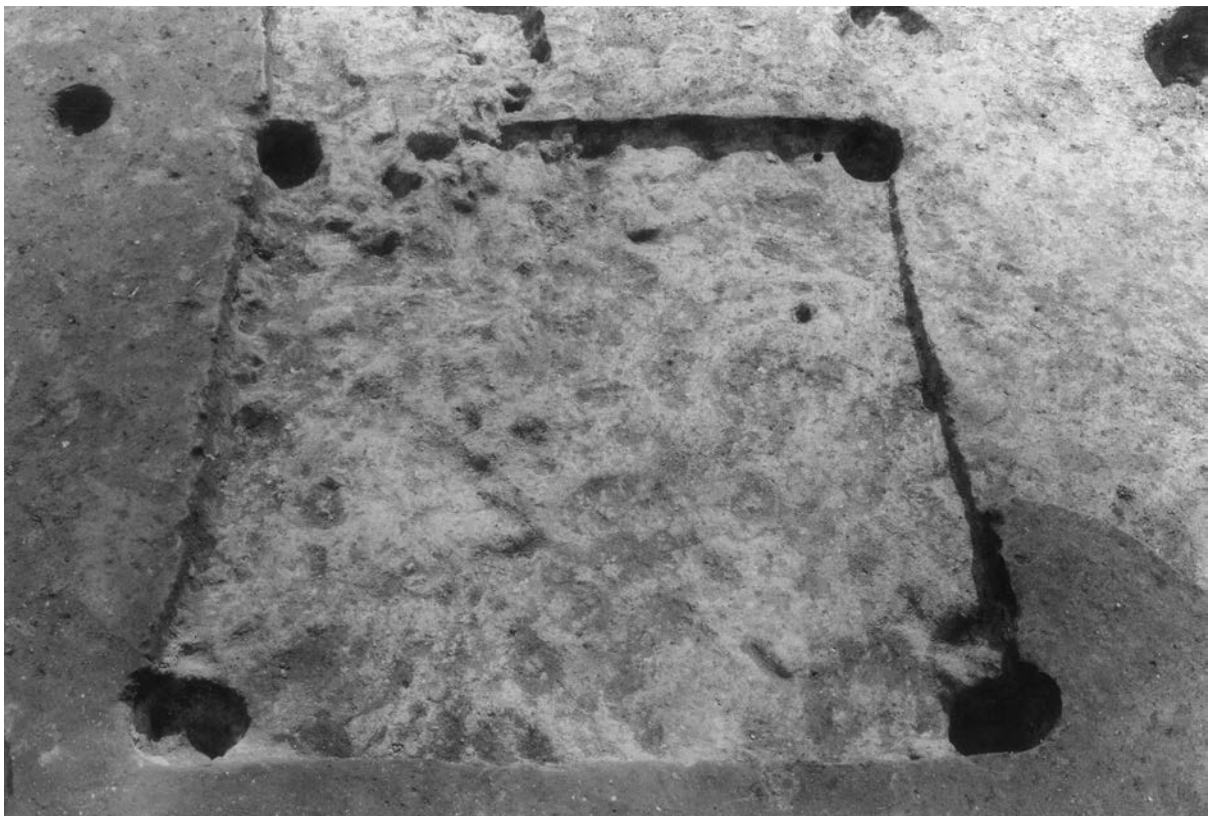
図版22

01-ＳＩ119全景(南西→)

01-ＳＩ119断面(南西→)

01-ＳＩ119カマド全景(南西→)

01-ＳＩ119カマド遺物出土状況(南→)



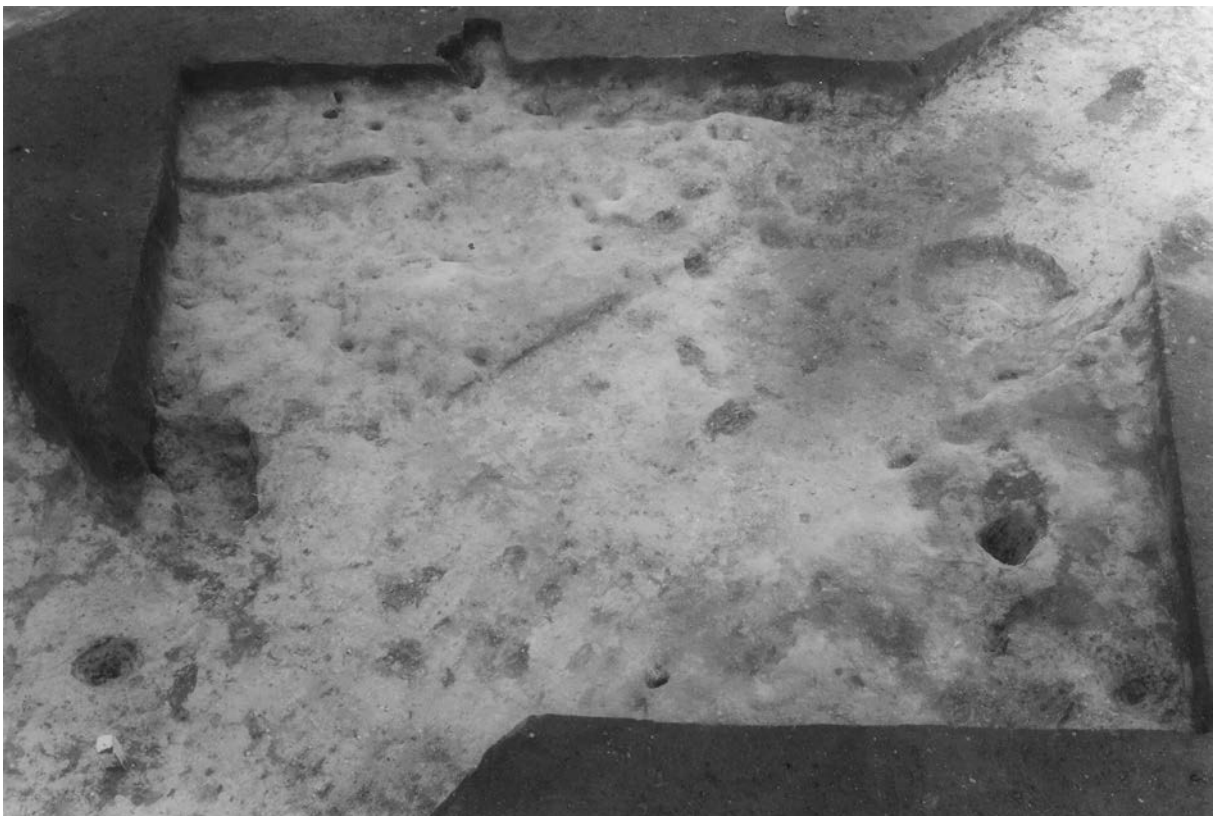
01-ＳＩ120全景(北西→)

01-ＳＩ120断面(南西→)

01-ＳＩ120カマド全景(北西→)

01-ＳＩ120住居確認(南東→)

図版24



01-ＳＩ139全景(北→)

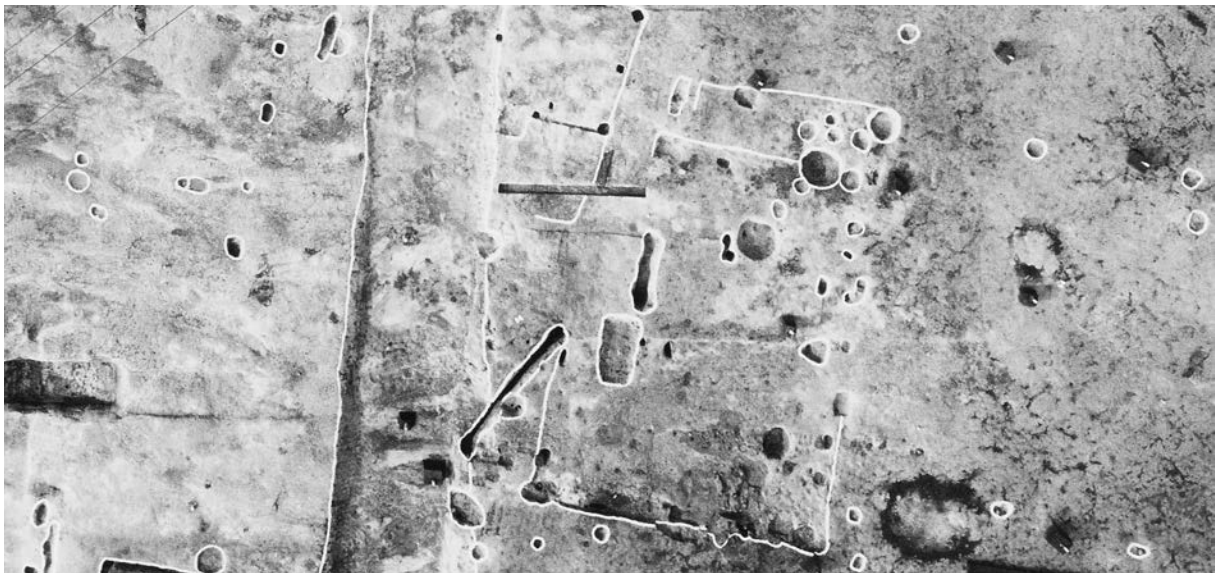
01-ＳＩ139断面(南東→)

01-ＳＩ139カマド全景(北→)

01-ＳＩ139カマド遺物出土状況(北→)

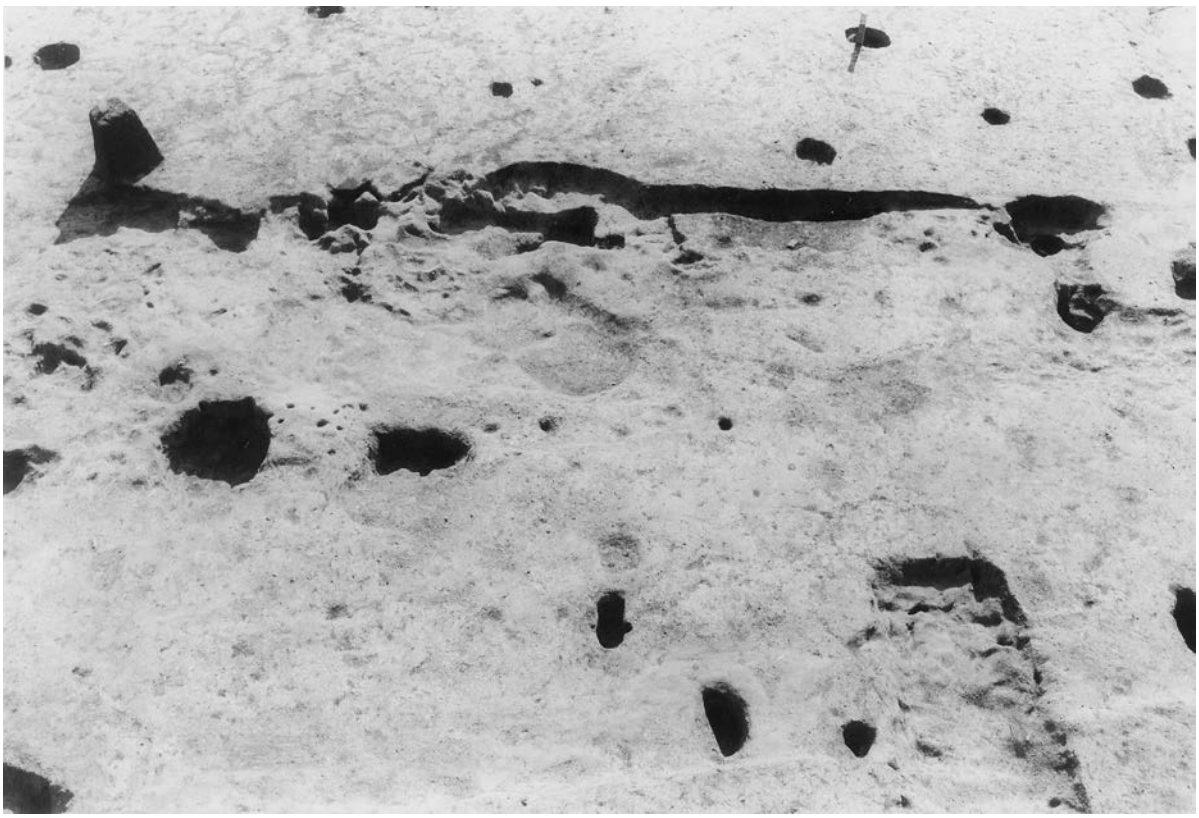
01-ＳⅠ141確認(北東→)

01-ＳⅠ141断面(南→)

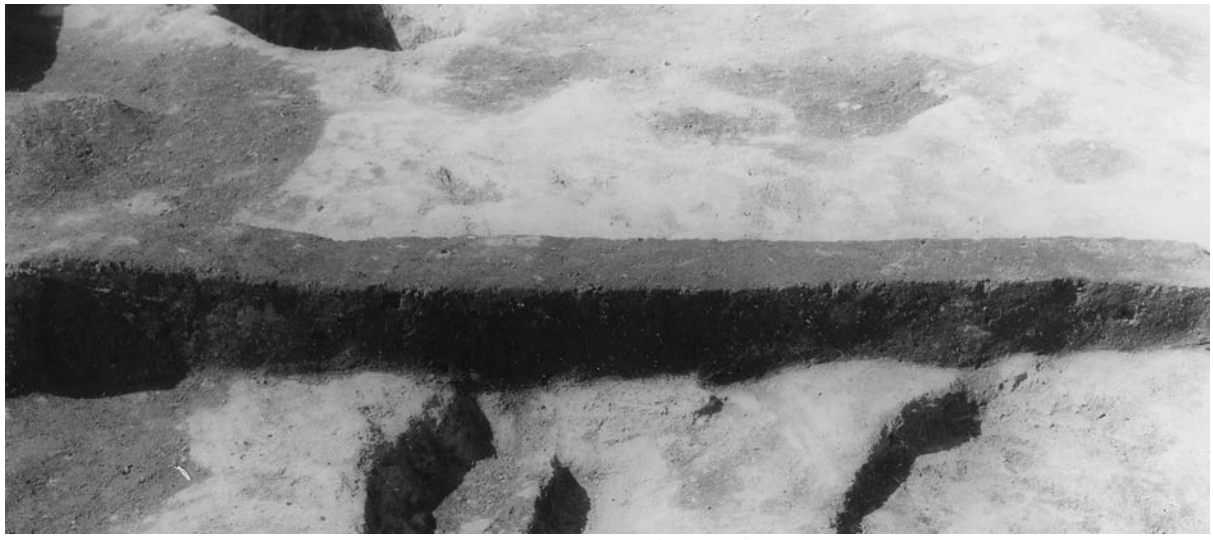


01-ＳⅠ141・149・223・255全景(真上→)

図版26



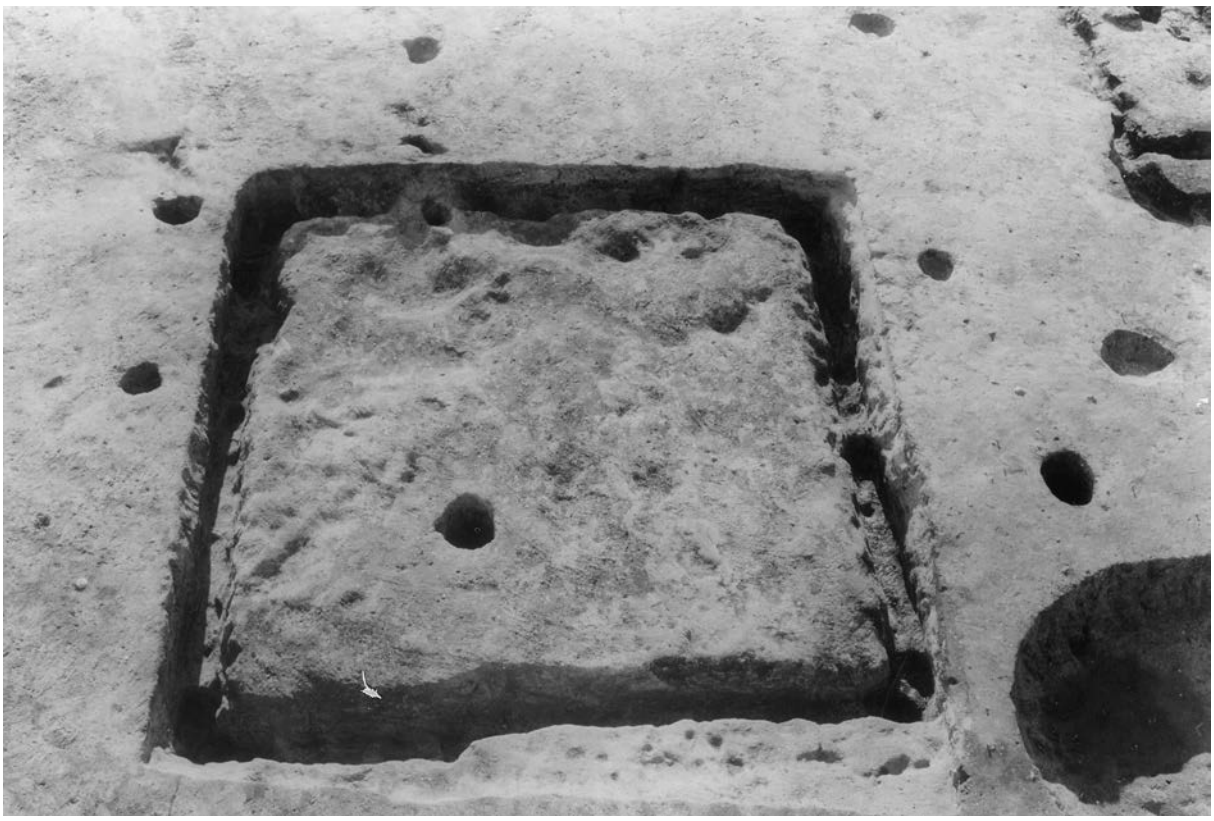
01-ＳＩ149カマド周辺近景(北西→)



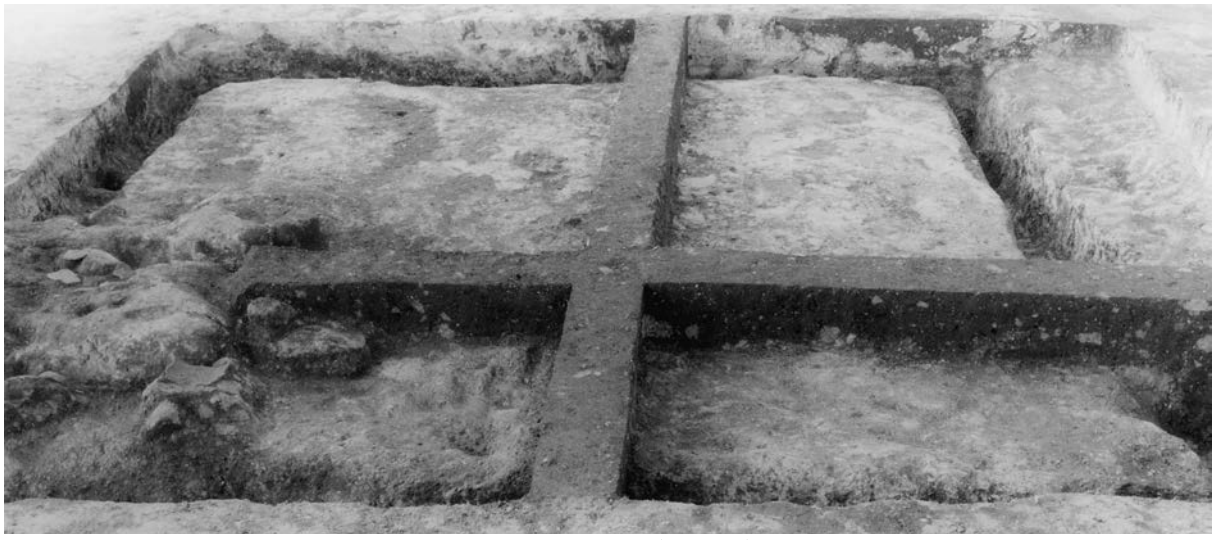
01-ＳＩ149断面(南東→)

01-ＳＩ149カマド全景(北西→)

01-ＳＩ149住居確認(南→)

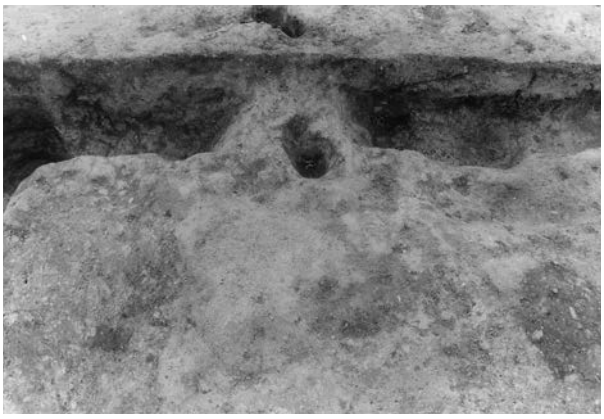


01-ＳＩ150全景(北東→)

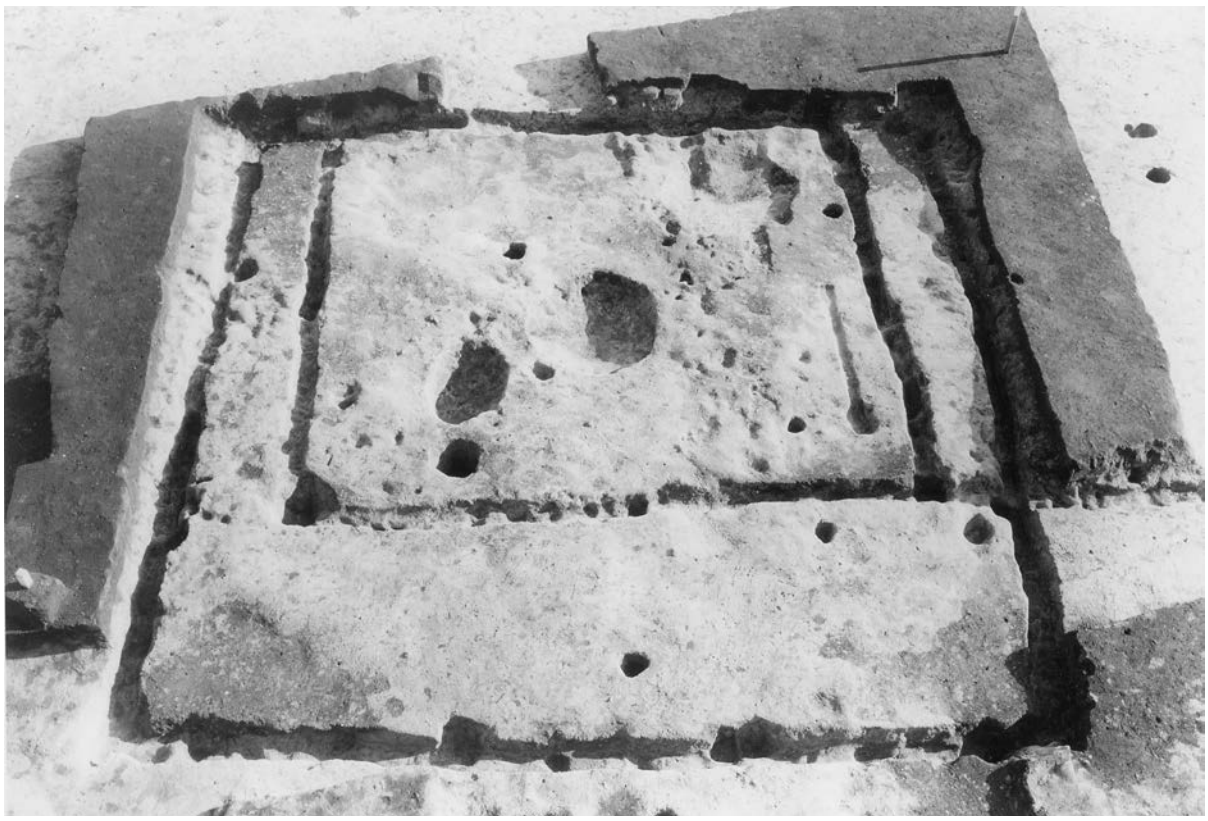


01-ＳＩ150断面(南東→)

01-ＳＩ150カマド確認(北東→)



01-ＳＩ150カマド全景(北東→)



01-ＳＩ155全景(北西→)

01-ＳＩ155断面(西→)

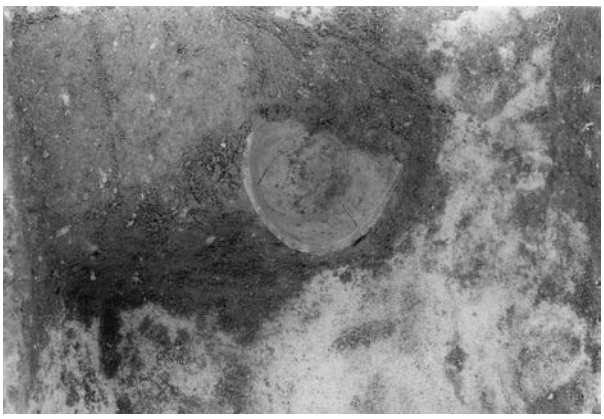
01-ＳＩ155Ｂカマド(北西→)

01-ＳＩ155Ａカマド(北西→)

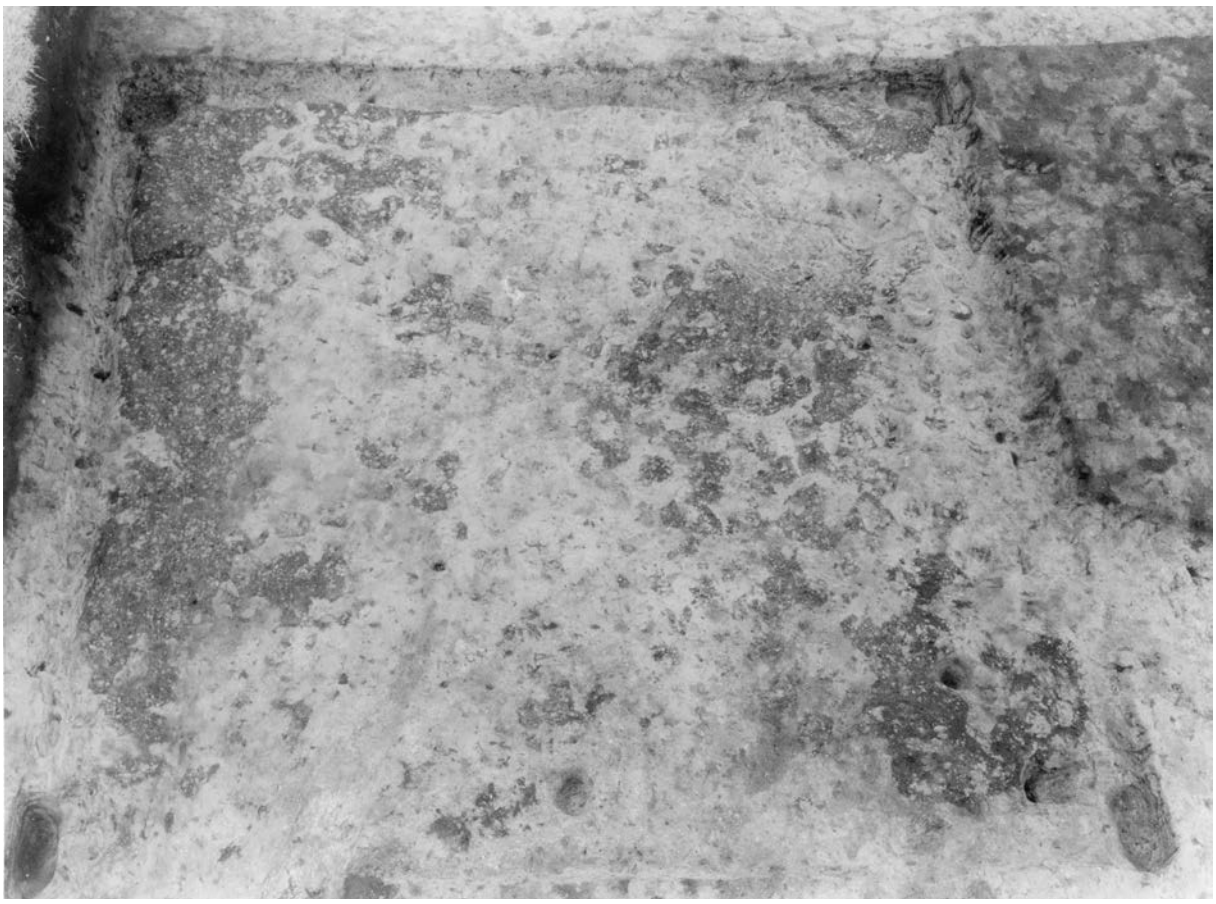
01-ＳＩ156・157全景(南西→)

01-ＳＩ156断面(南西→)

01-ＳＩ156カマド確認(北西→)



01-ＳＩ156遺物出土状況(西→)



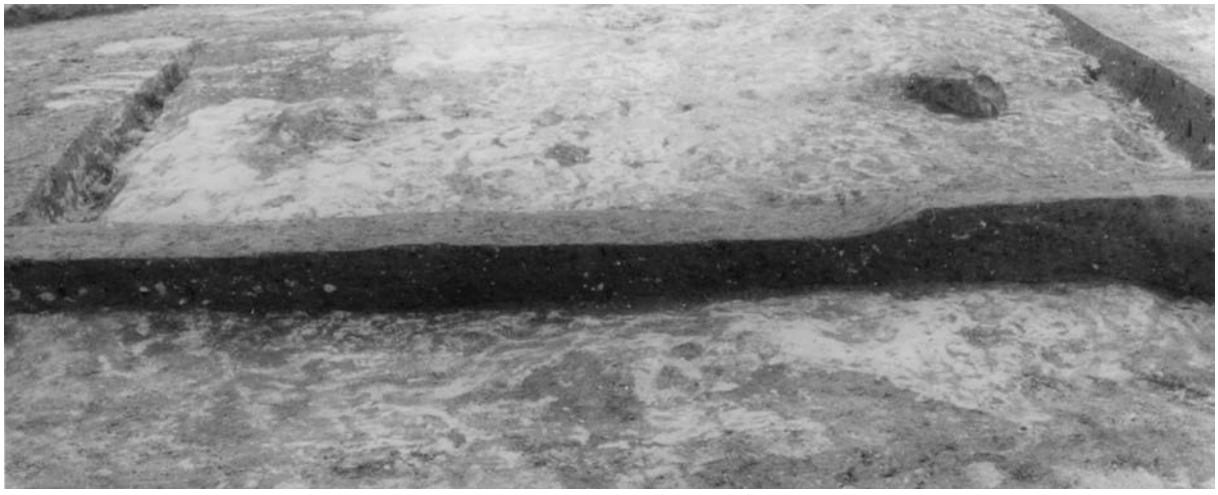
01-ＳＩ158全景(南西→)

01-ＳＩ158断面(南西→)

01-ＳＩ158カマド全景(北西→)

01-ＳＩ158遺物出土状況(北西→)

01-ＳＩ159全景(東→)



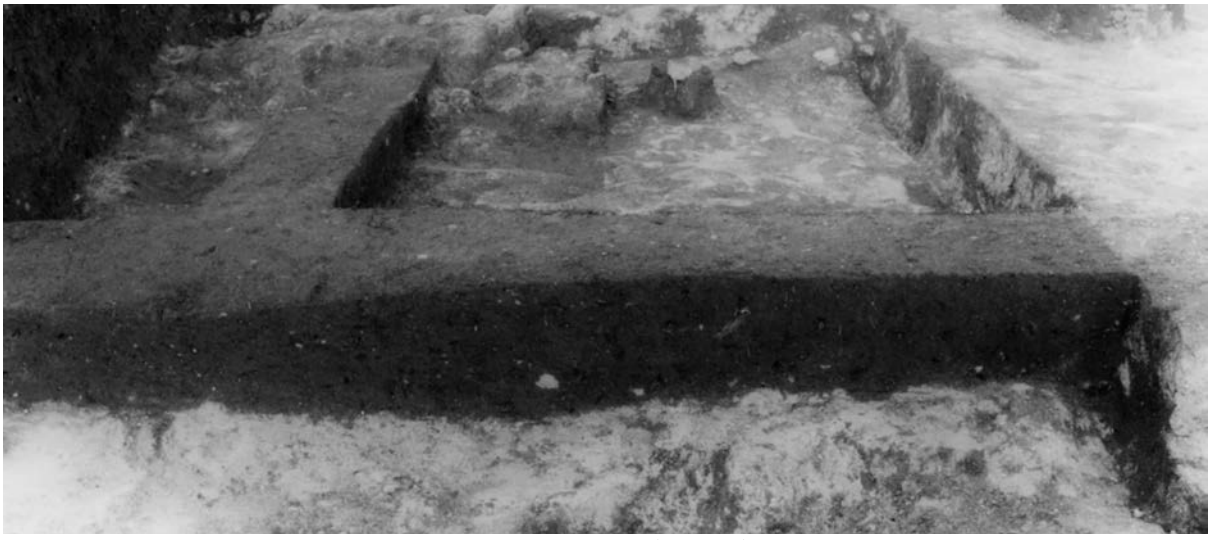
01-ＳＩ159断面(南東→)

01-ＳＩ159カマド全景(北→)

01-ＳＩ159カマド断ち割り(北→)

図版32

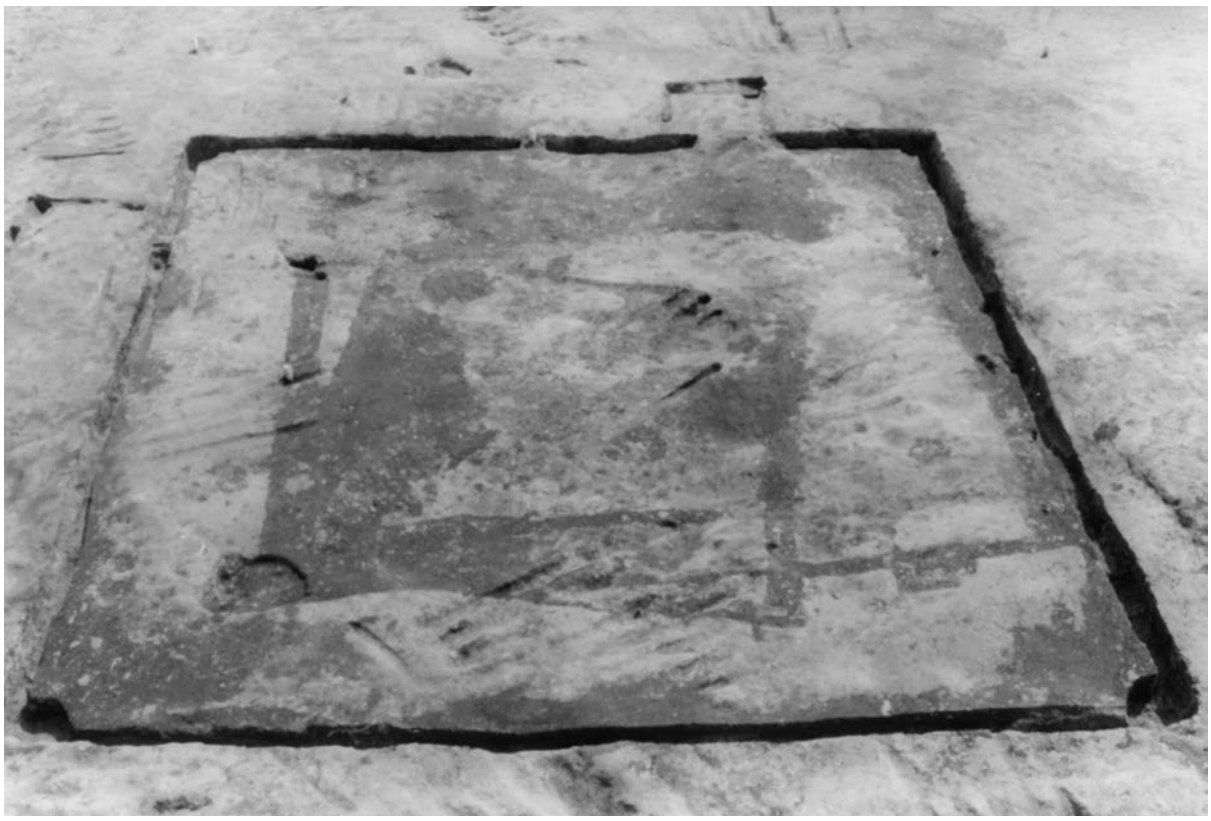
01-ＳＩ160全景(南東→)



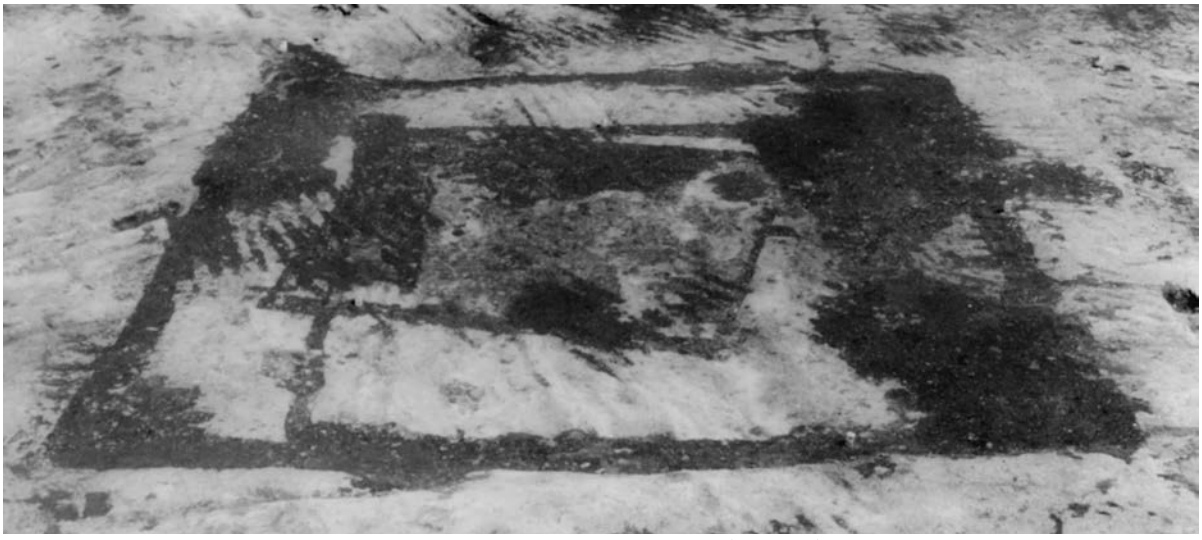
01-ＳＩ160断面(南西→)

01-ＳＩ160カマド確認(南西→)

01-ＳＩ160住居確認(南東→)



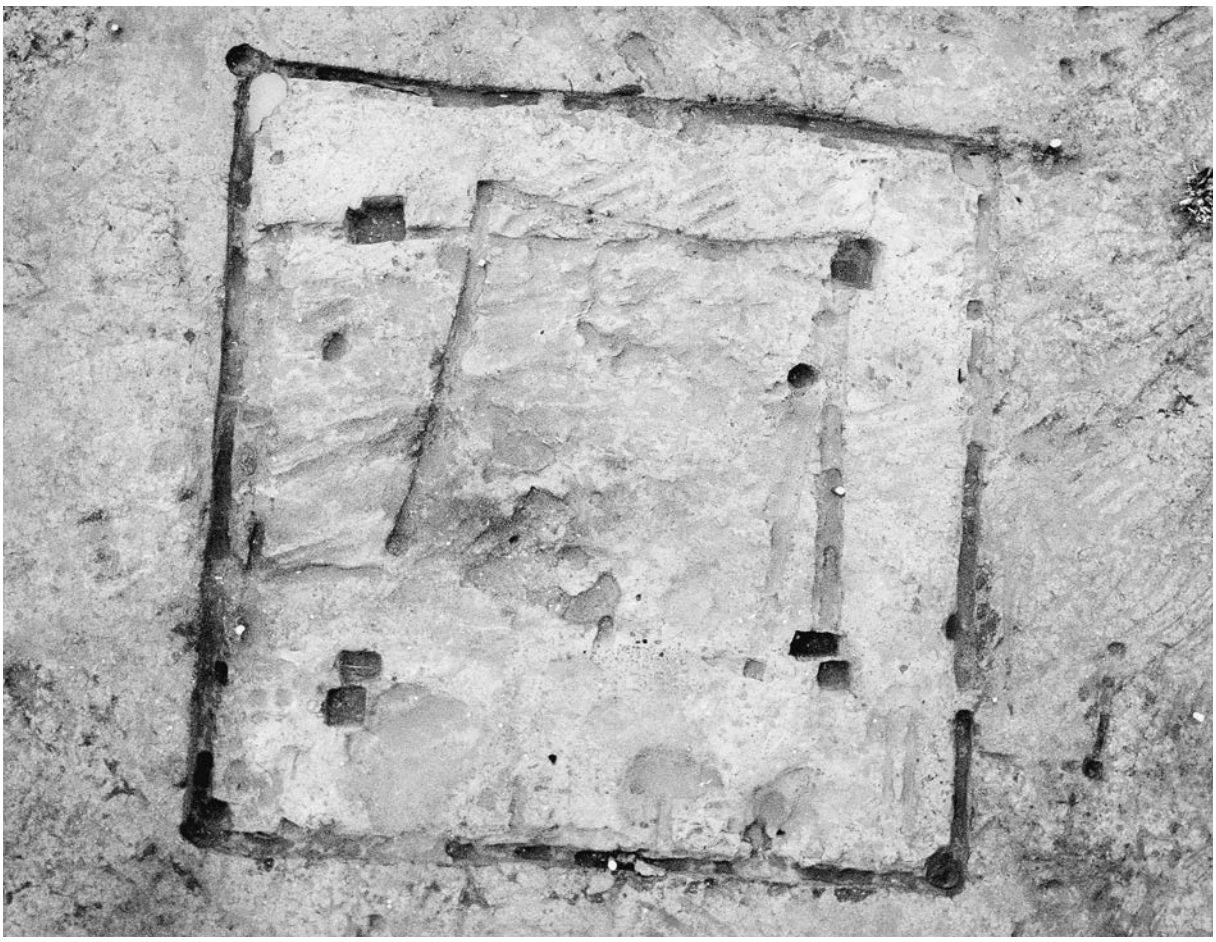
02-ＳＩ01全景(北西→)



02-ＳＩ01・02・03・10確認(南西→)

02-ＳＩ02カマド確認(北西→)

02-ＳＩ02カマド全景(北西→)



02-ＳＩ01・02・03・10全景(真上→)

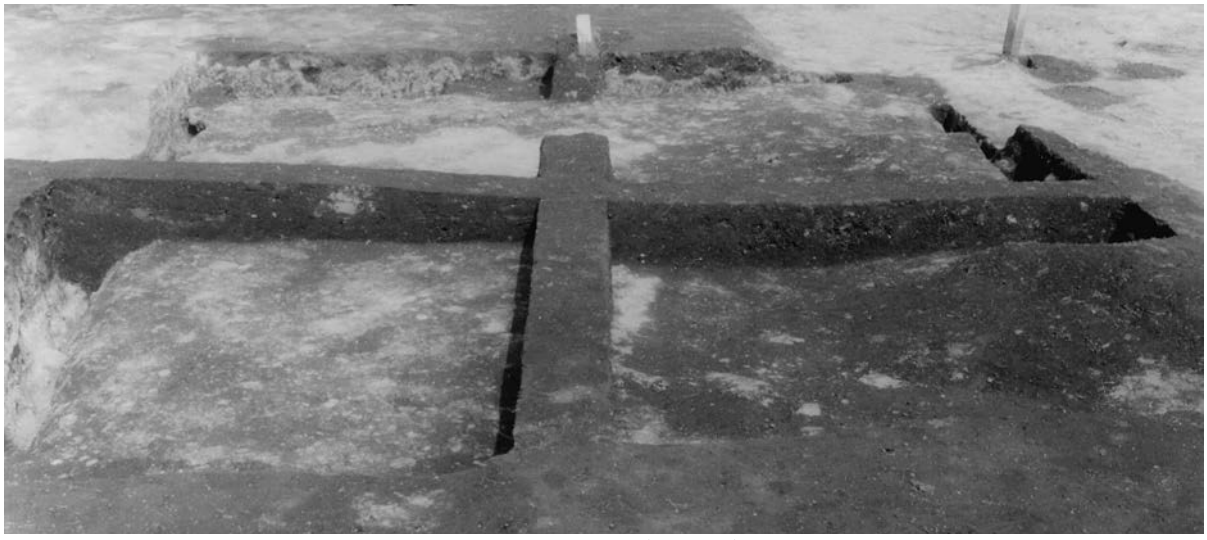
02-ＳＩ02カマド確認(北西→)

02-ＳＩ03カマド全景(北西→)

02-ＳＩ03遺物確認状況(北西→)

02-ＳＩ01・02壁溝重複(南→)

02-ＳＩ04全景(北西→)



02-ＳＩ04断面(南西→)

02-ＳＩ04カマド全景(北→)

02-ＳＩ04カマド支脚(北→)

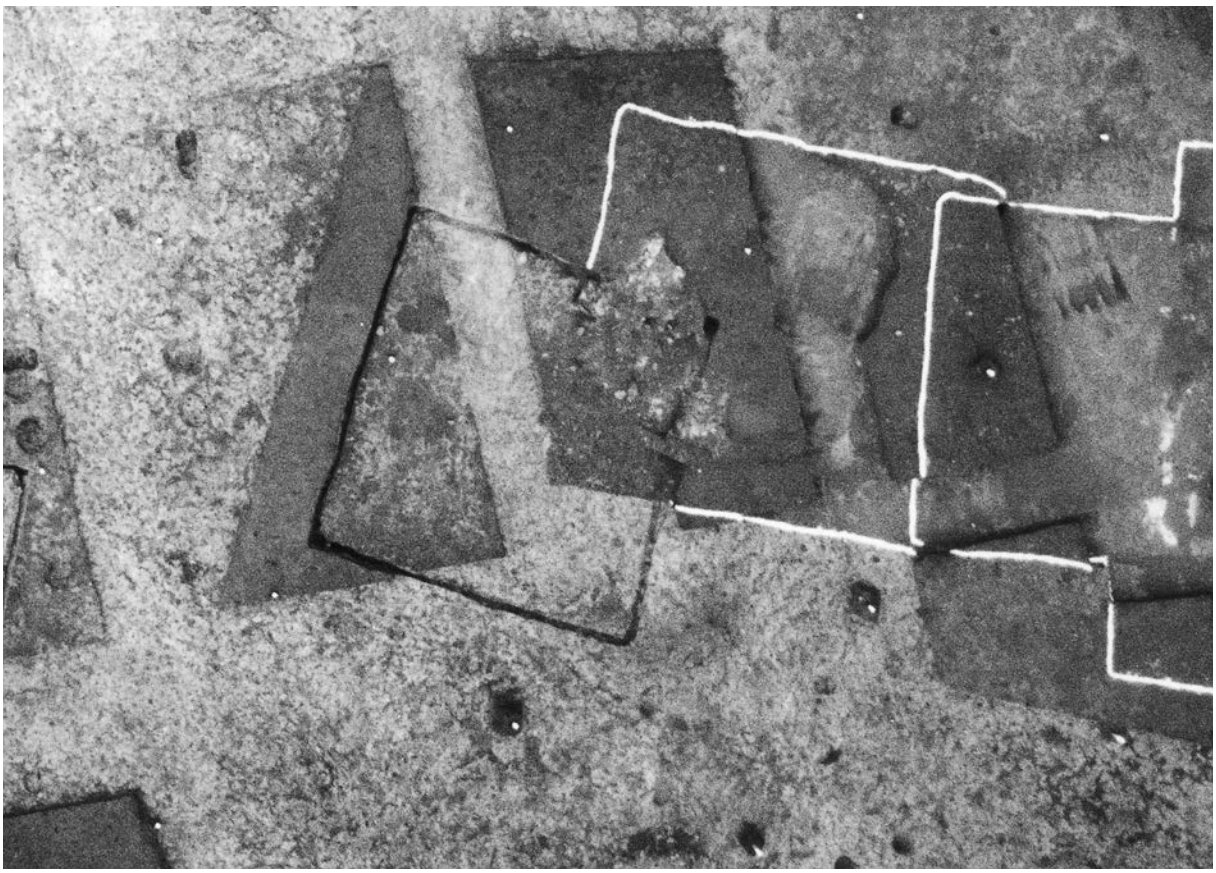
02-ＳＩ05全景(北西→)

02-ＳＩ05断面(北西→)

02-ＳＩ05カマド全景(北西→)

02-ＳＩ05把手付土器出土状況(西→)

02-SI07・08・09全景(真上→)



02-ＳＩ11全景(真上→)

02-ＳＩ11断面(西→)

02-ＳＩ11住居確認(東→)

02-ＳＩ11カマド全景(西→)

02-ＳＩ14全景(南西→)

02-ＳＩ14断面(南西→)

02-ＳＩ14カマド確認(南西→)

02-ＳＩ14遺物出土状況(南西→)

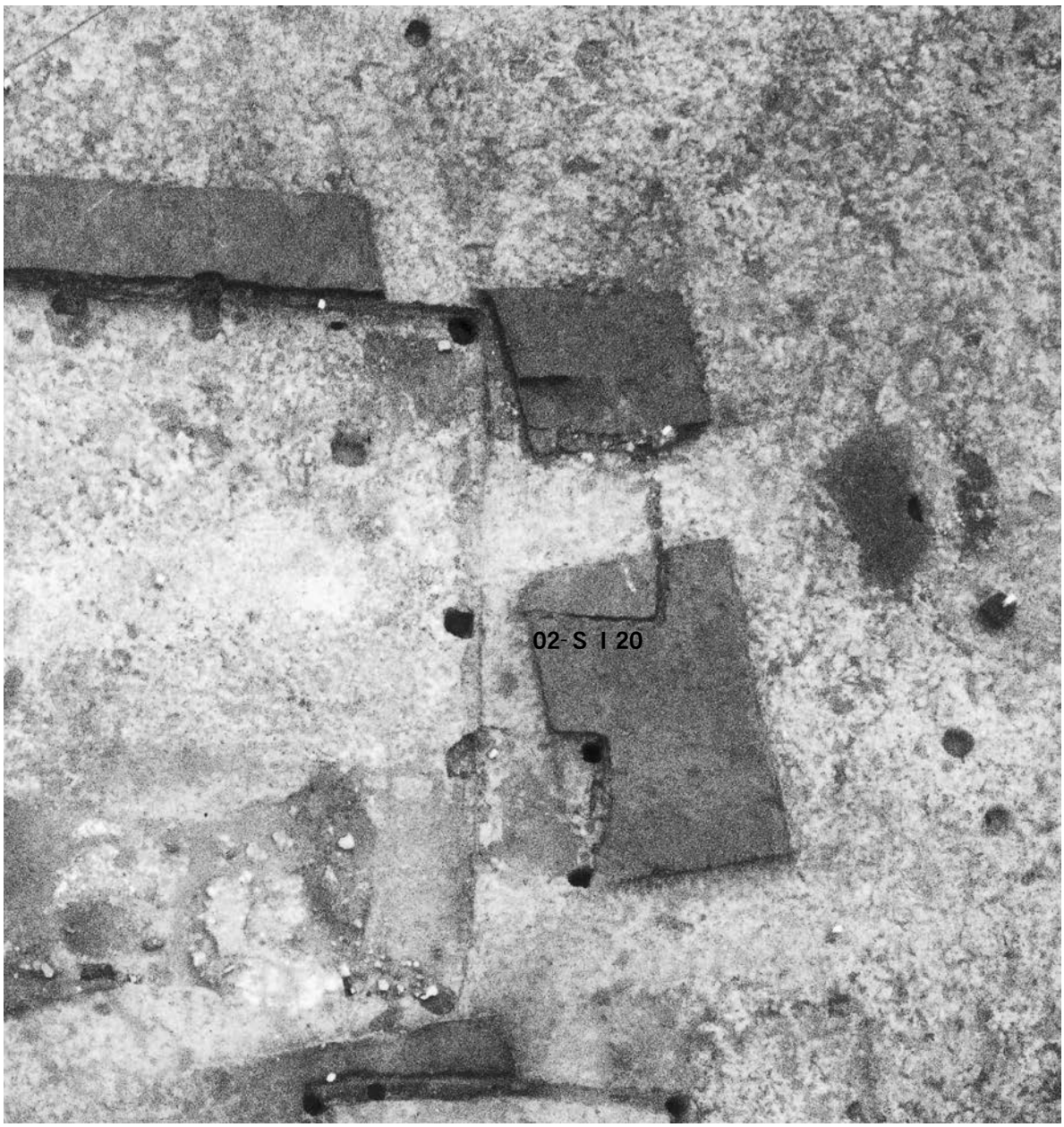
図版40

02-ＳＩ18全景(真上→)

02-ＳＩ18断面(南東→)

02-ＳＩ18住居確認(北→)

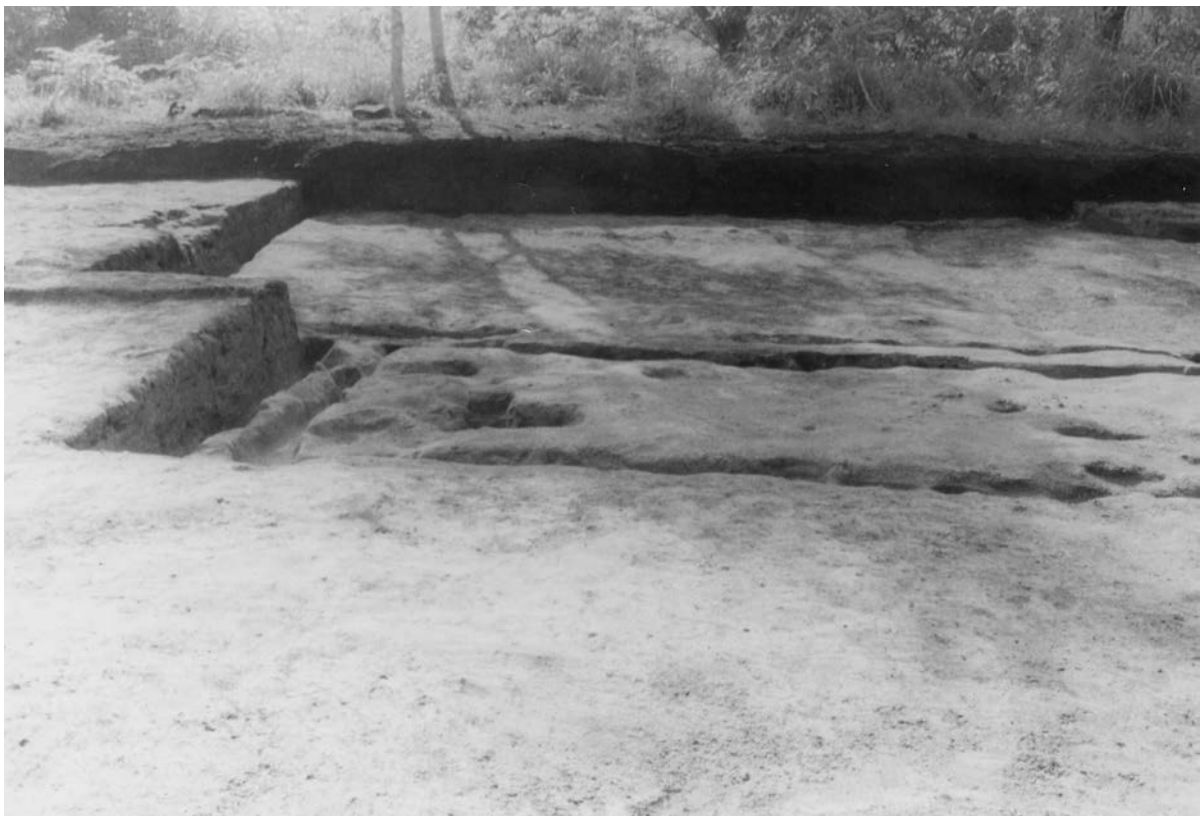
02-ＳＩ18カマド全景(北西→)



02-ＳＩ20全景(真上→)

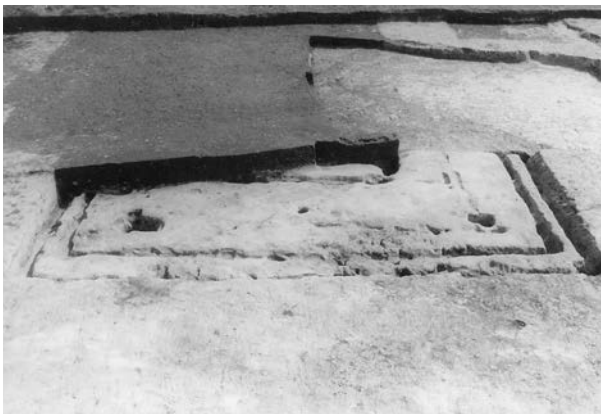
02-ＳＩ20断面(南→)

図版42



02-ＳＩ21全景(北西→)

02-ＳＩ21断面(北西→)



02-ＳＩ21住居確認(北西→)

02-ＳＩ21Ｐ１断面(西→)

02-ＳＩ52全景(北西→)

02-ＳＩ52断面１(北西→)

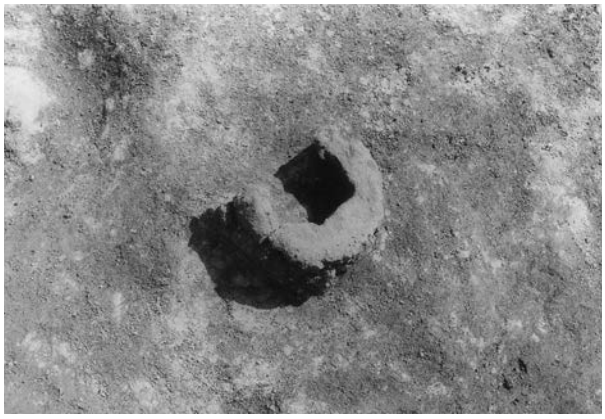
02-ＳＩ52断面２(南西→)

02-ＳＩ52炭化材出土状況(北西→)

02-ＳＩ52出土炭化材１(北→)

02-ＳＩ52出土炭化材２(北→)

02-ＳＩ52出土鉄製品１(北→)



02-ＳＩ52出土鉄製品２(西→)

02-ＳＩ24全景(真上→)

02-ＳＩ24カマド遺物出土状況(東→)

02-ＳＩ24出土炭化材(東→)

02-ＳＩ24Ｐ６断面(西→)

02-ＳＩ24Ｐ５断面(西→)

03-ＳＩ06全景(南西→)

03-ＳＩ06断面(南西→)

03-ＳＩ06Ａカマド全景(北西→)

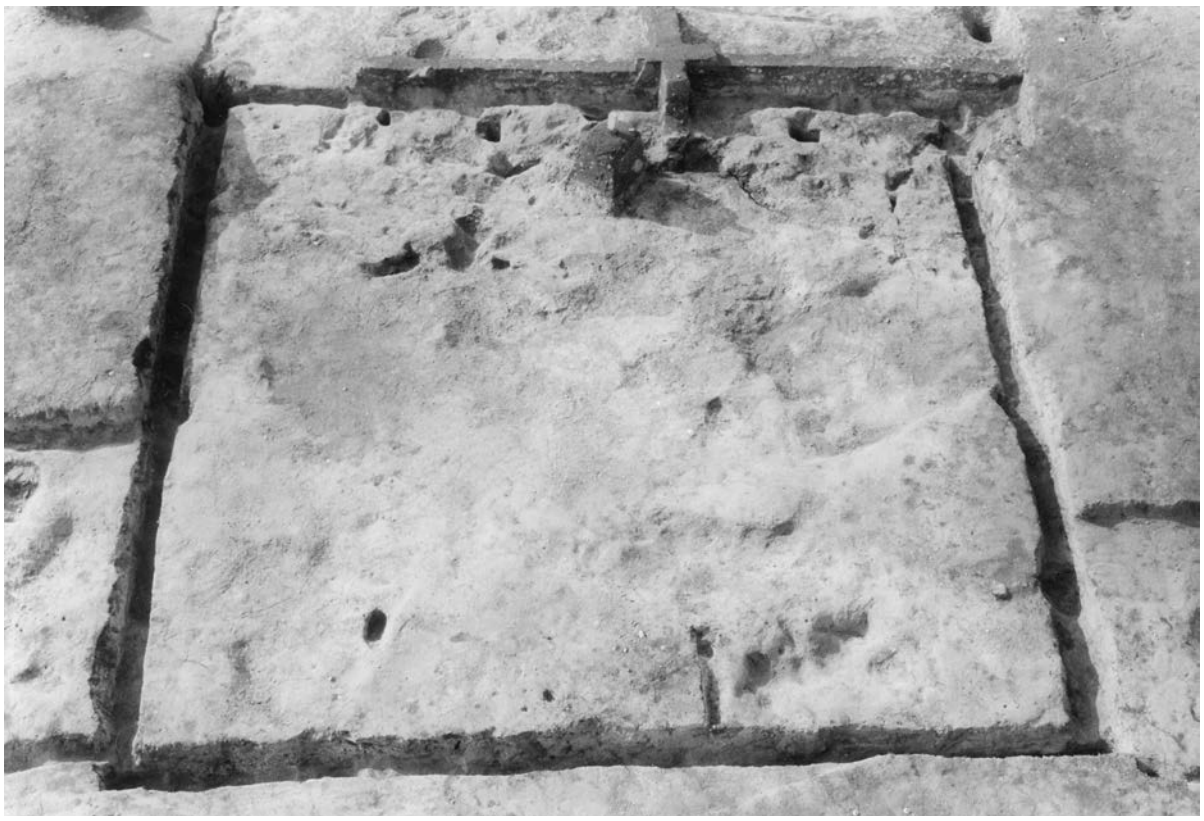
03-ＳＩ06出土鉄製品(南→)

03-ＳＩ12全景(南→)

03-ＳＩ12断面(北→)

03-ＳＩ12カマド断面(北西→)

03-ＳＩ12焼土全景(南→)

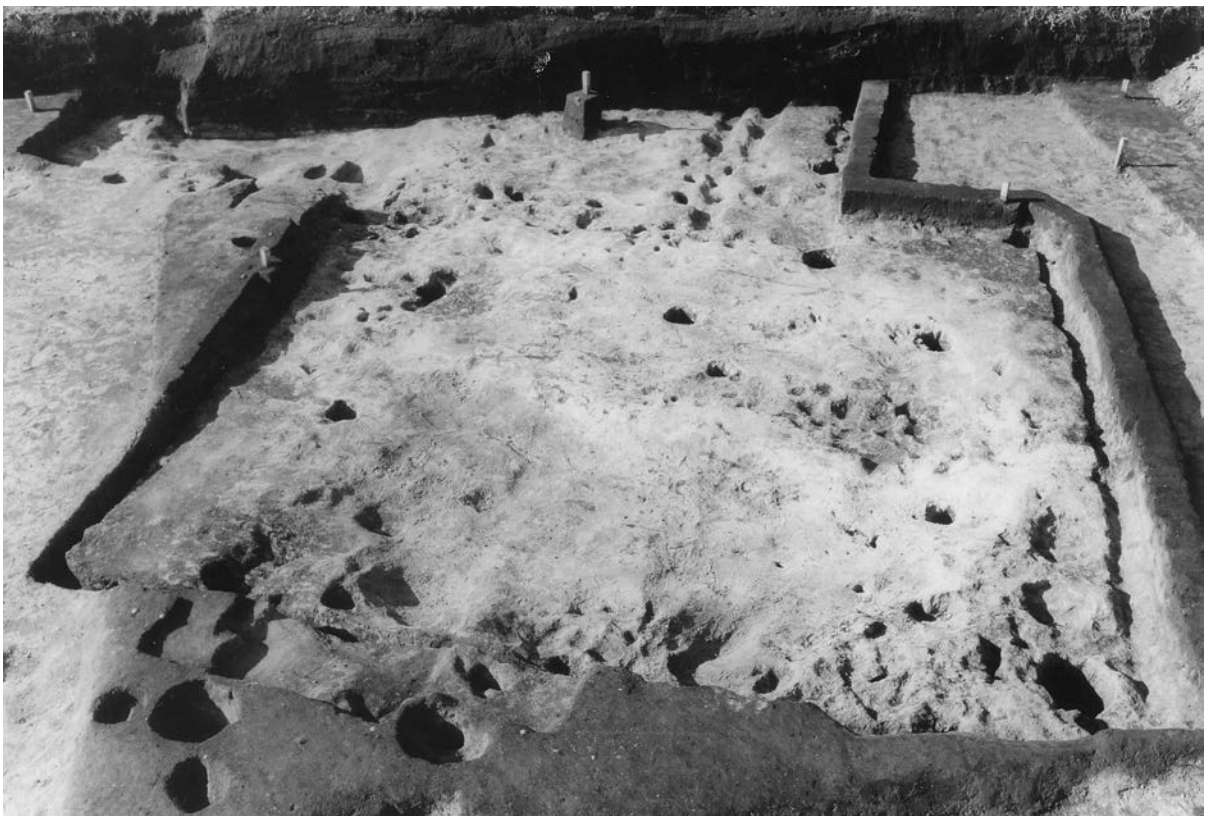


03-ＳＩ13全景(南東→)

03-ＳＩ13断面(南東→)

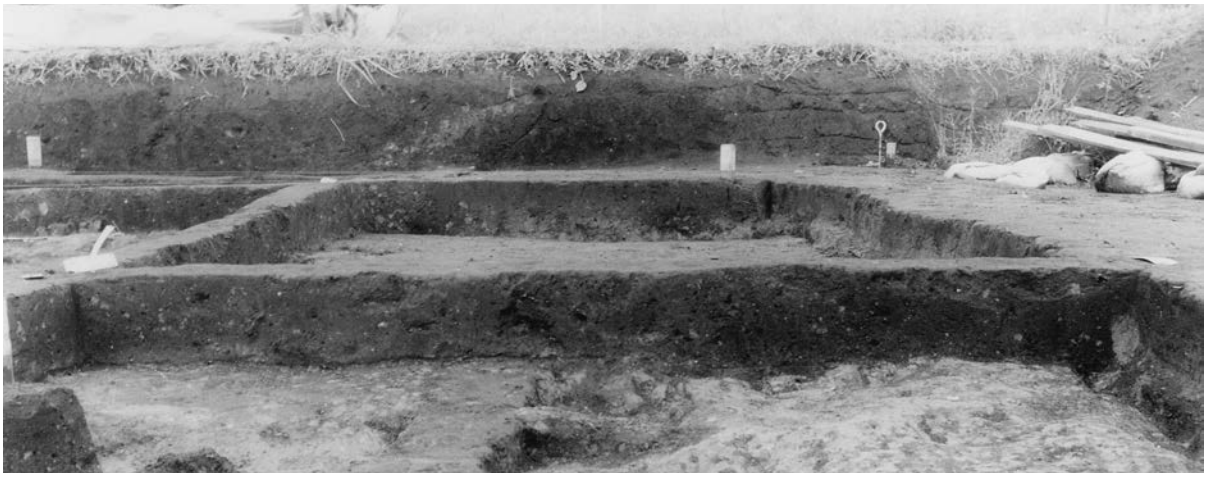
03-ＳＩ13住居確認(南→)

03-ＳＩ13カマド全景(北→)



03-ＳＩ15・16全景(南東→)

03-ＳＩ15断面(南→)



03-ＳＩ16断面(南東→)

03-ＳＩ15ピット断面(南→)

03-ＳＩ15石帯出土状況(北東→)

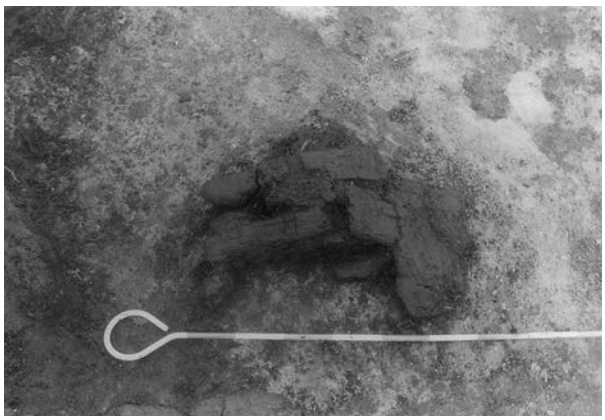
03-ＳＩ15カマド全景１(北西→)

03-ＳＩ15カマド全景２(北西→)

03-ＳＩ16遺物出土状況１(北→)

03-ＳＩ16遺物出土状況２(西→)

03-ＳＩ16出土炭化材１(南→)



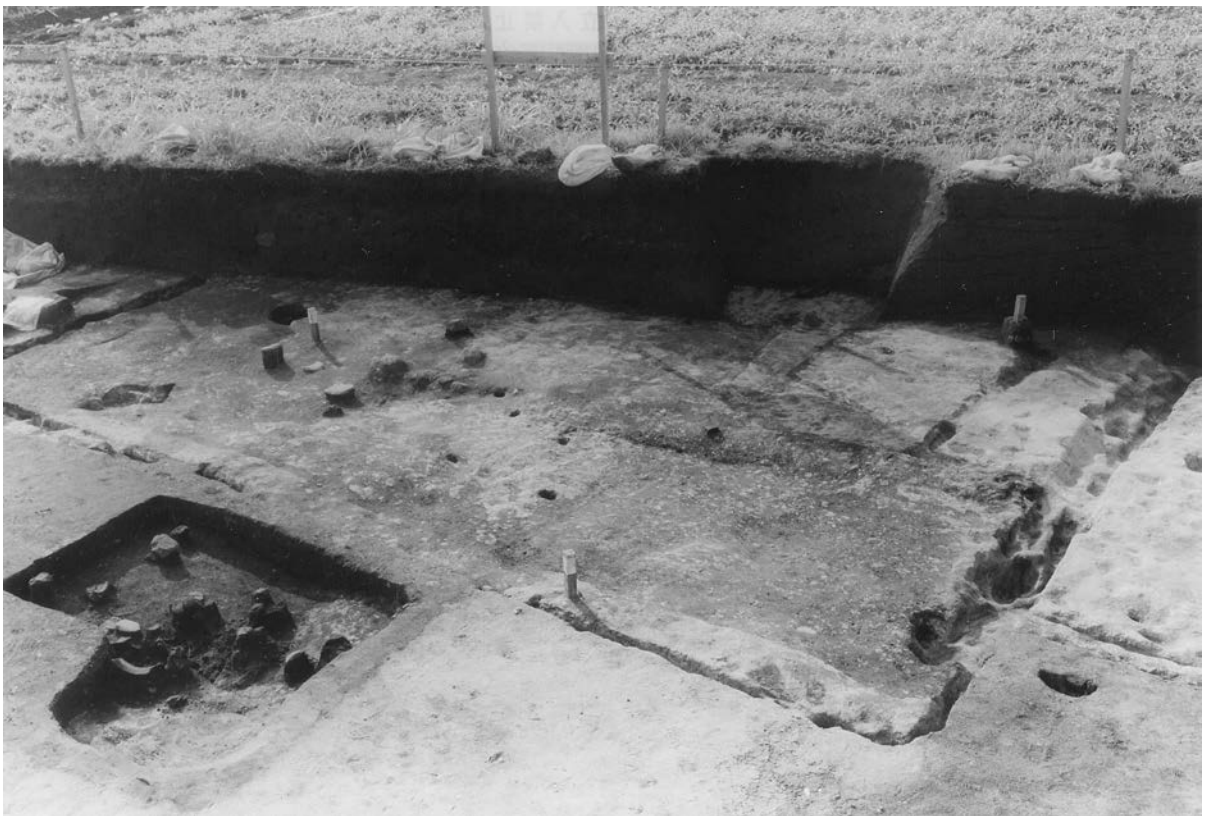
03-ＳＩ16出土炭化材２(東→)

03-ＳＩ17・100全景(南→)

03-ＳＩ100断面(南西→)

03-ＳＩ100カマド全景(北西→)

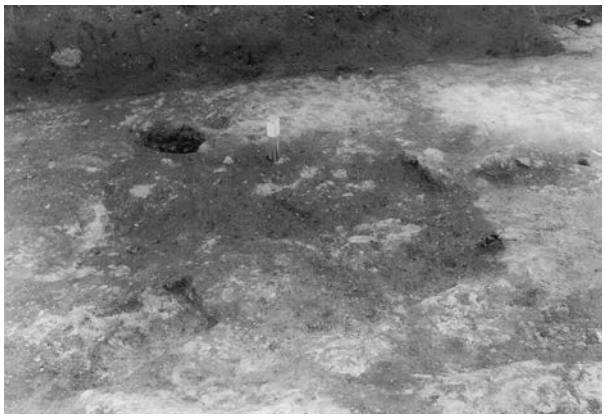
03-ＳＩ100貼床(北西→)



03-ＳＩ22全景(南東→)

03-ＳＩ22断面(東→)

03-ＳＩ22遺物出土状況(南東→)



03-ＳＩ22カマド前庭部(南→)

03-ＳＩ23全景(南東→)

03-ＳＩ23断面(北東→)

03-ＳＩ23住居確認(南→)

03-ＳＩ23カマド全景(北西→)

図版54

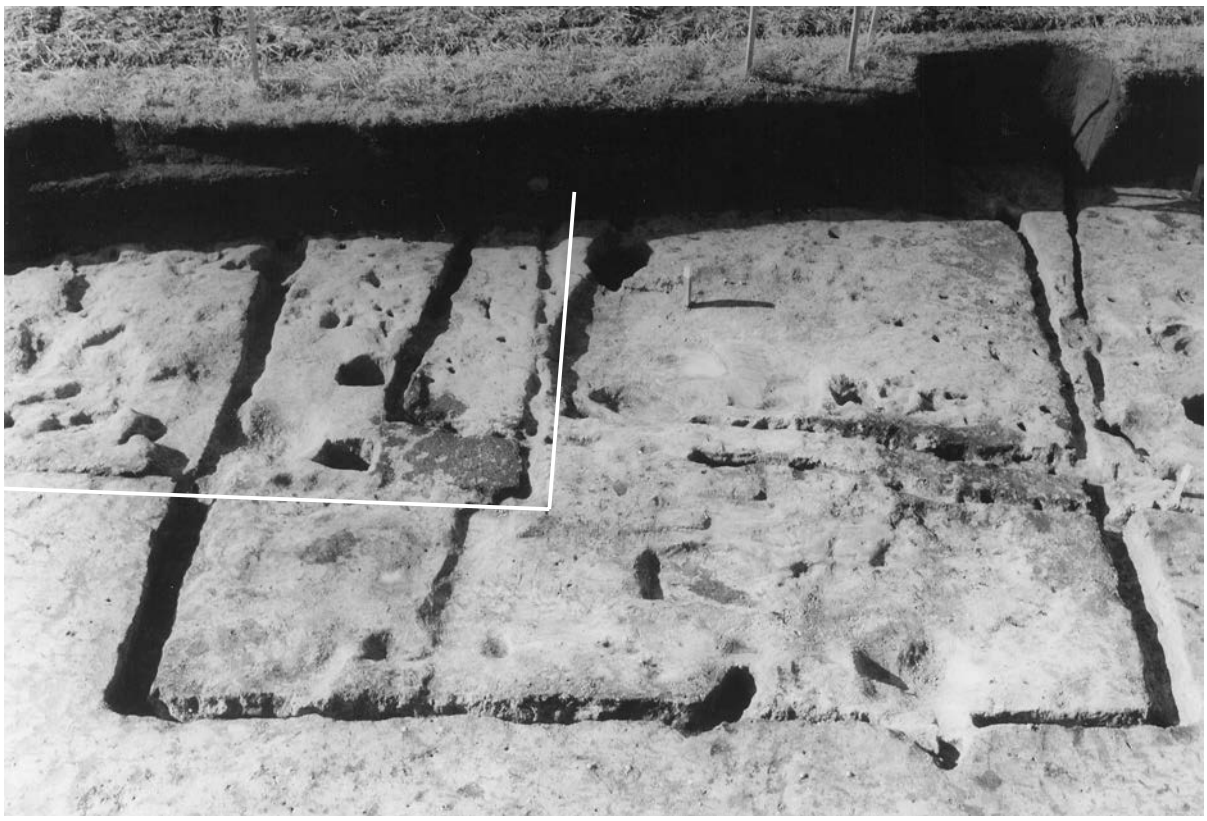
03-ＳＩ23炭化材出土状況(南東→)

03-ＳＩ23出土炭化材１(南東→)

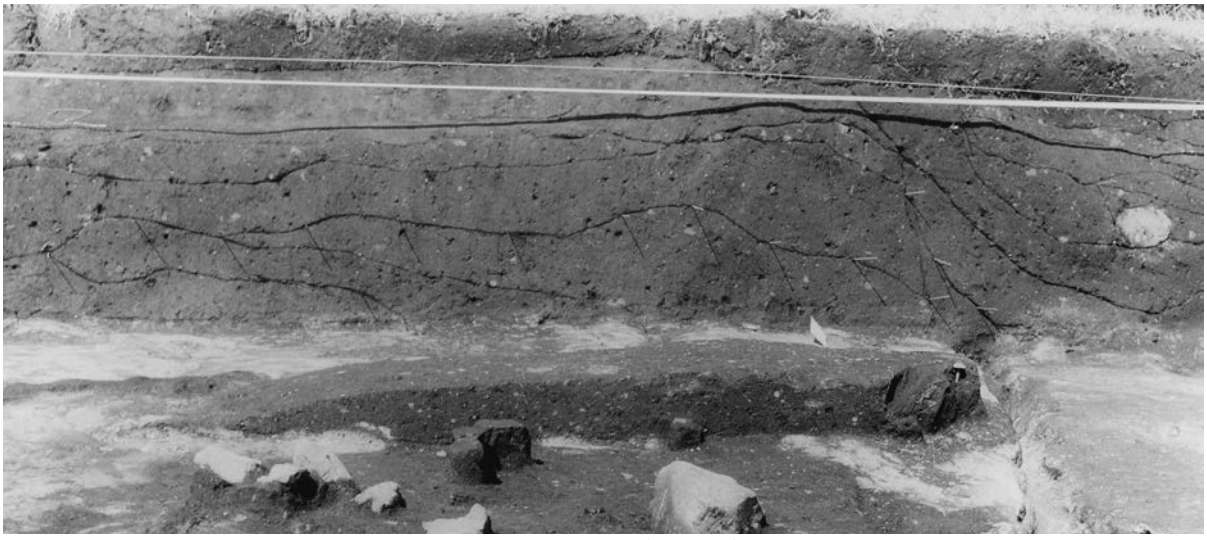
03-ＳＩ23出土炭化材２(南西→)

03-ＳＩ23出土炭化材３(北西→)

03-ＳＩ23出土炭化材４(南→)



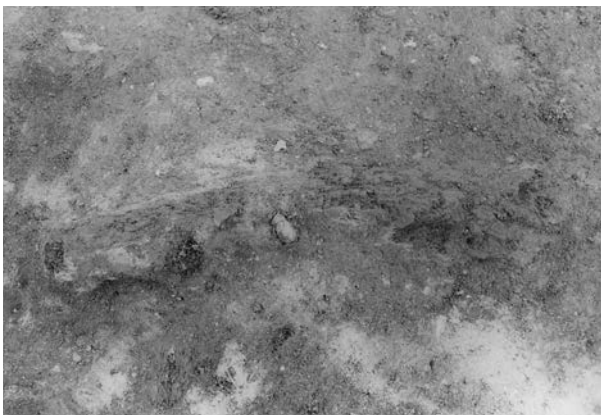
03-ＳＩ26全景(南東→)



03-ＳＩ26断面(南東→)

03-ＳＩ26出土炭化材１(東→)

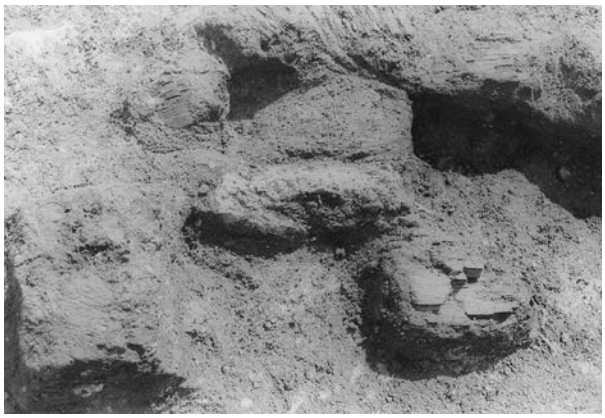
03-ＳＩ26出土炭化材２(東→)



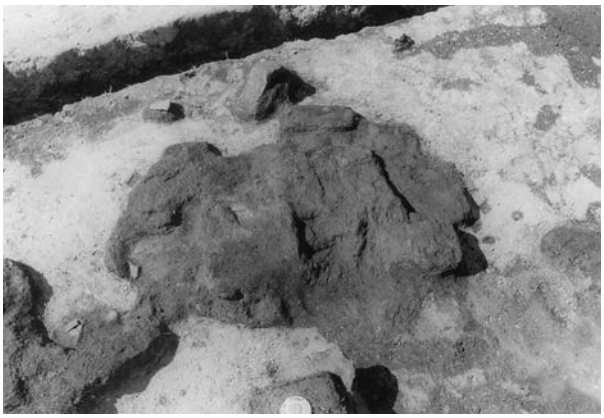
03-ＳＩ26出土炭化材３（東→）

03-ＳＩ26出土炭化材４（南→）

03-ＳＩ26出土炭化材５（東→）



03-ＳＩ26出土炭化材６（東→）



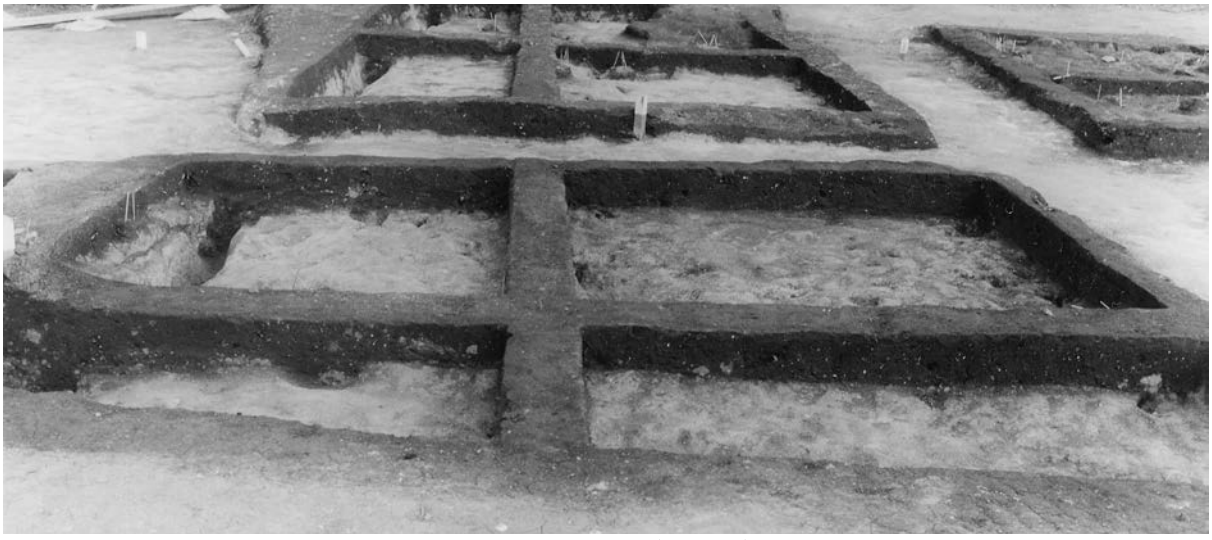
03-ＳＩ26出土炭化材７（東→）

03-ＳＩ26出土炭化材８（東→）

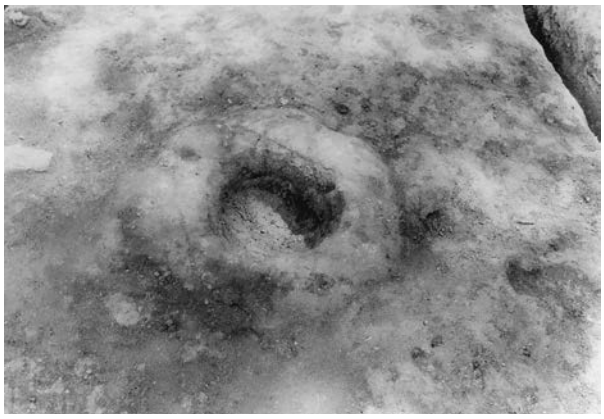
03-ＳＩ26出土炭化材９（東→）

03-ＳＩ26カマド全景（北西→）

03-ＳＩ102全景(北西→)



03-ＳＩ102断面(北西→)



03-ＳＩ102焼土(西→)

03-ＳＩ102鉄製品出土状況(南西→)

03-ＳＩ102壁溝断面１(東→)

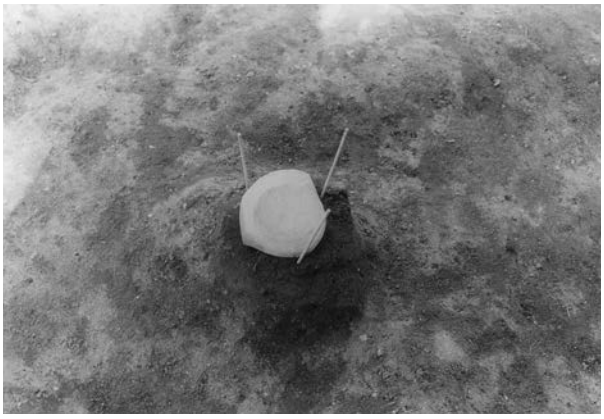
03-ＳＩ102壁溝断面２(西→)

03-ＳＩ102カマド確認(北西→)

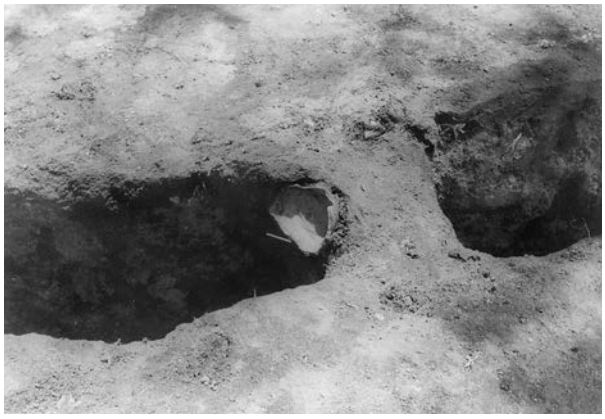
03-ＳＩ102カマド断面(北西→)

03-ＳＩ102カマド構築材(北東→)

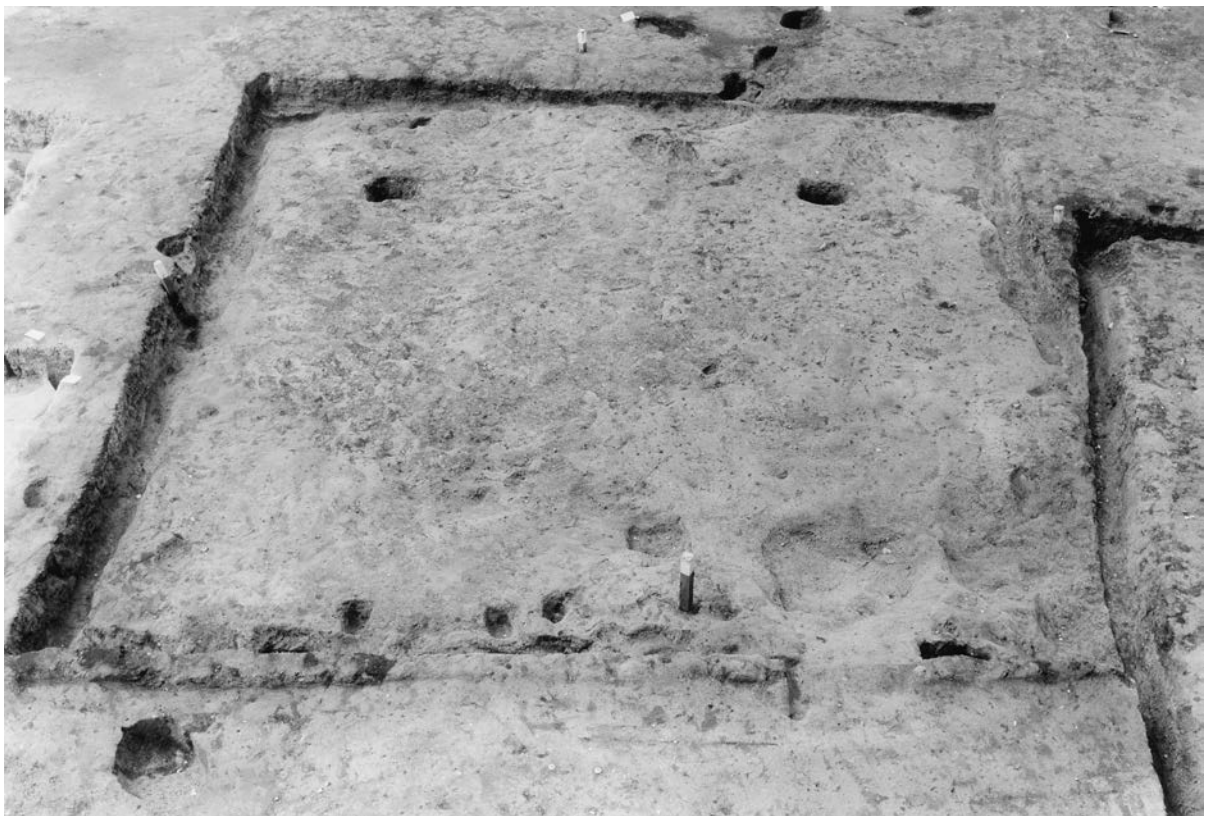
03-ＳＩ102遺物出土状況１(南西→)



03-ＳＩ102遺物出土状況２(南西→)

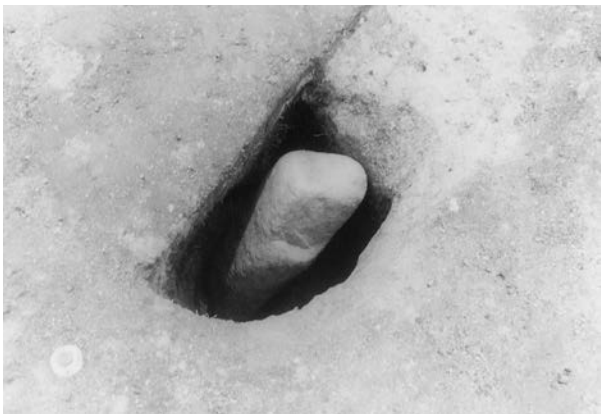


03-ＳＩ102遺物出土状況３(南西→)



03-ＳＩ103全景(南東→)

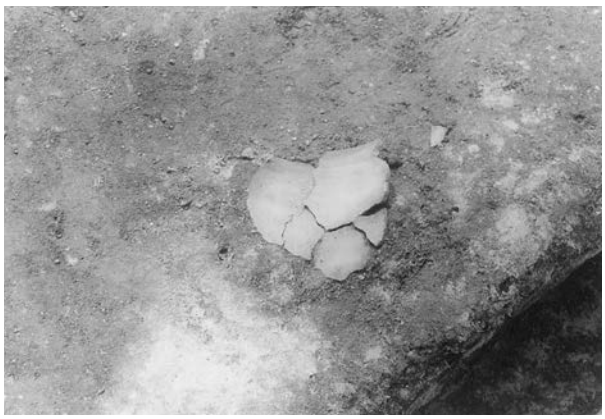
03-ＳＩ103断面(南→)



03-ＳＩ103Ｐ１断面(西→)

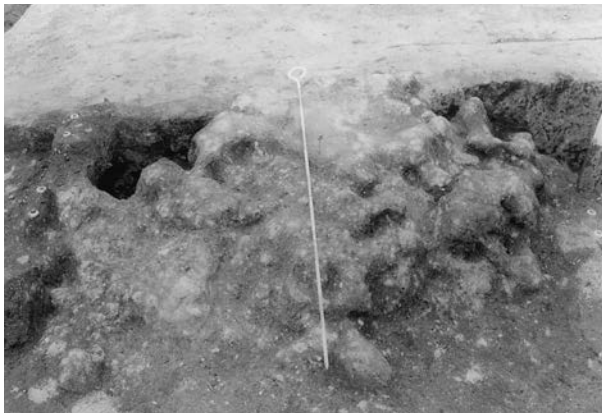
03-ＳＩ103Ｐ３断面(北→)

03-ＳＩ103遺物出土状況１(北→)



03-ＳＩ103遺物出土状況２(南東→)

03-ＳＩ103遺物出土状況３(北→)



03-ＳＩ103カマド確認(北西→)

03-ＳＩ103カマド遺物出土状況(北西→)

03-ＳＩ103出土遺物１

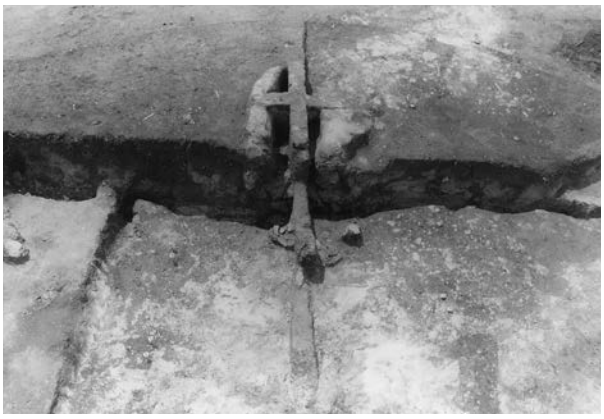
03-ＳＩ103出土遺物２(北→)

03-ＳＩ103出土遺物３

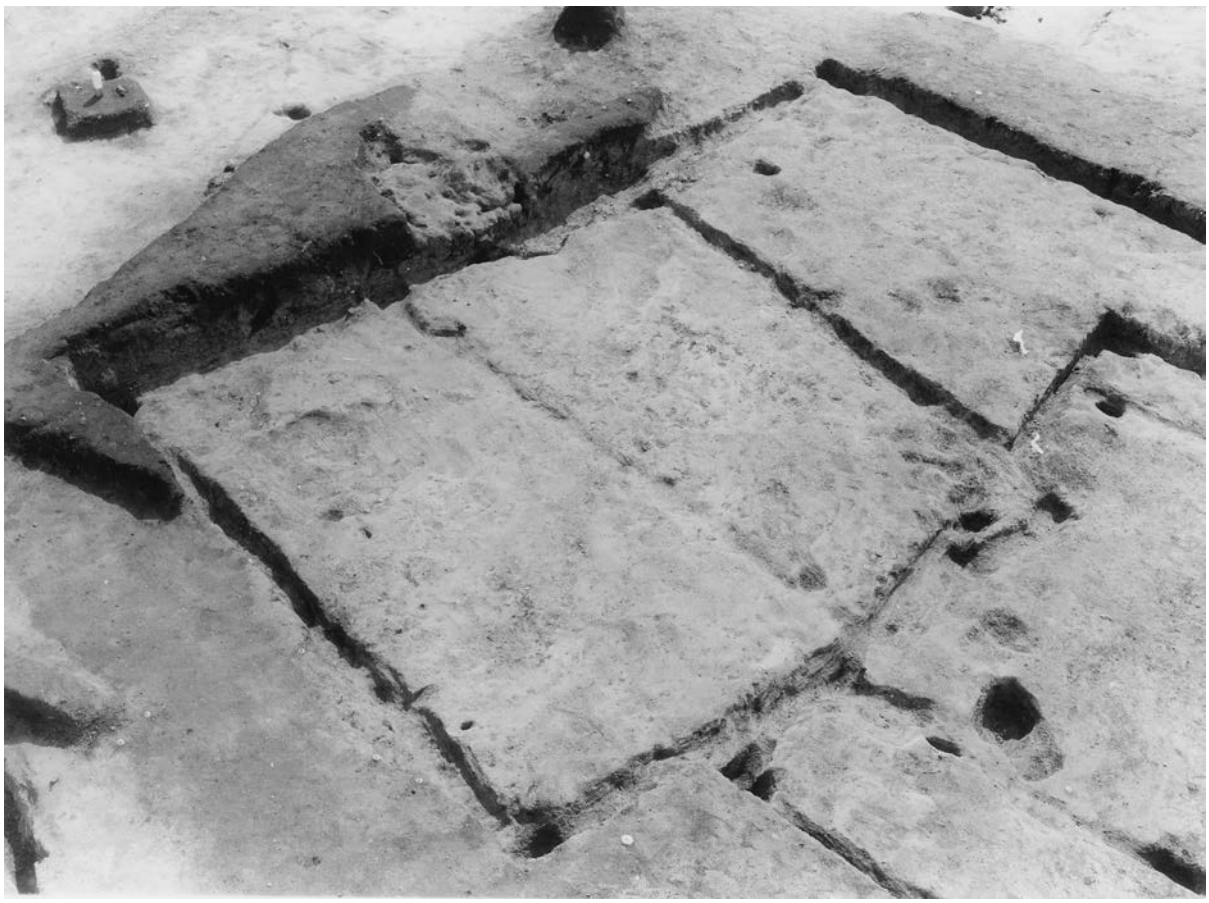
03-ＳＩ104全景(北西→)

03-ＳＩ104断面(南東→)

03-ＳＩ104カマド煙道全景(北西→)



03-ＳＩ104カマド全景(北西→)



03-ＳＩ105全景(北→)

03-ＳＩ105カマド全景１(北→)

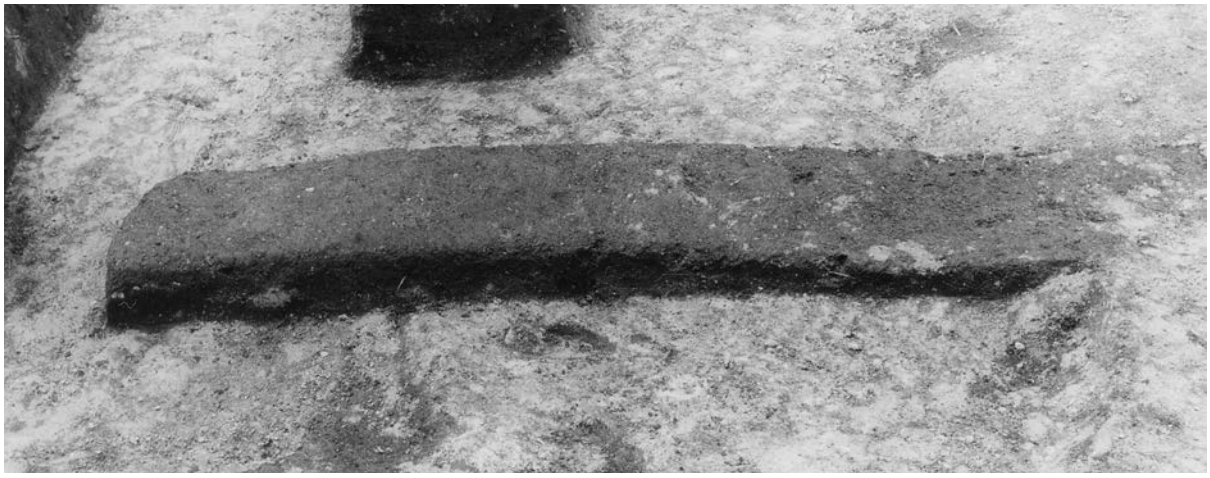
03-ＳＩ105カマド全景２(西→)

03-ＳＩ105ピット(南東→)

03-ＳＩ105遺物出土状況(南→)

03-ＳＩ106全景(北西→)

03-ＳＩ106断面(南東→)



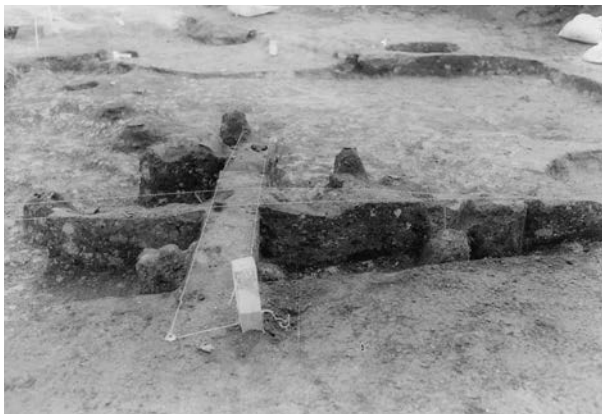
03-ＳＩ106カマド前庭部断面(東→)

図版64

03-ＳＩ173全景(北東→)

03-ＳＩ173断面(南西→)

03-ＳＩ173粘土分布(南→)



03-ＳＩ173粘土断面(北→)

03-ＳＩ178全景(北→)

03-ＳＩ178断面(南東→)

03-ＳＩ178カマドＡ全景(北→)

03-ＳＩ178カマドＢ全景(北→)

03-ＳＩ203・204・206・207・208全景(西→)

03-ＳＩ208断面１(東→)

03-ＳＩ203断面(北西→)

03-ＳＩ203張り出し断面(南東→)

03-ＳＩ203遺物出土状況(北西→)

03-ＳＩ203カマド全景(南西→)

03-ＳＩ203カマド断面１(南西→)

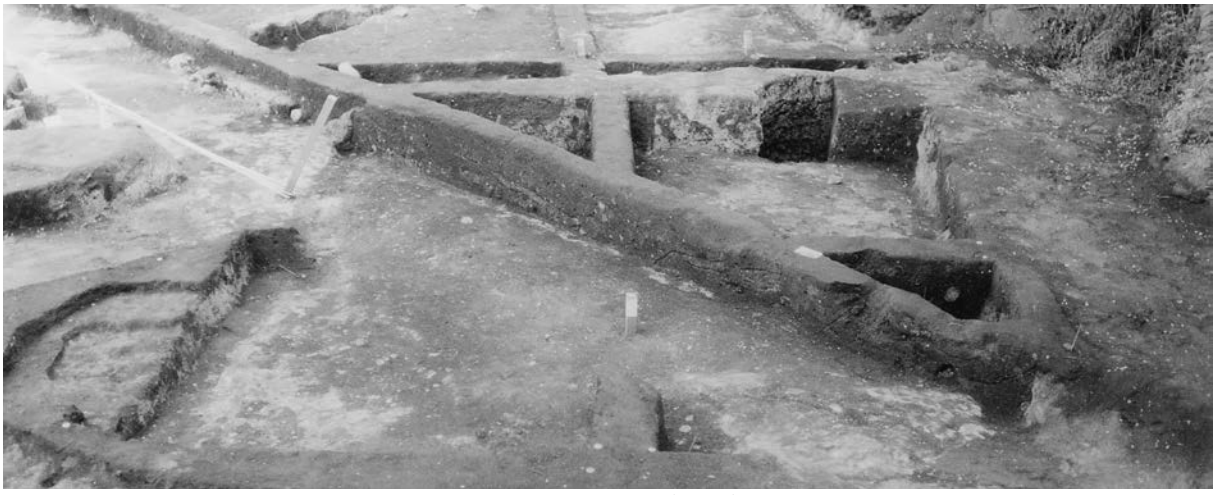
03-ＳＩ203カマド断面２(北西→)

03-ＳＩ208断面２(北東→)

03-ＳＩ208断面３(北→)

03-ＳＩ208断面４(北東→)

03-ＳＩ224全景(南→)



03-ＳＩ224断面(南→)

03-ＳＩ224カマド遺物出土状況(北東→)

03-ＳＩ224カマド全景(北→)

03-ＳＩ316全景(北→)

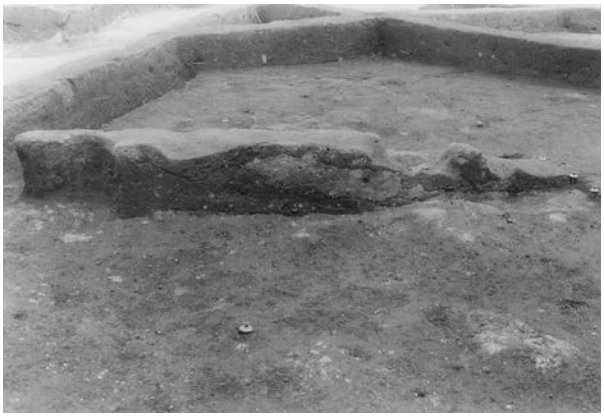
03-ＳＩ316断面(南→)

03-ＳＩ316Ａ焼土全景(北→)

03-ＳＩ316遺物出土状況(北西→)

03-ＳＩ316粘土分布１(南→)

03-ＳＩ316粘土分布２(北→)



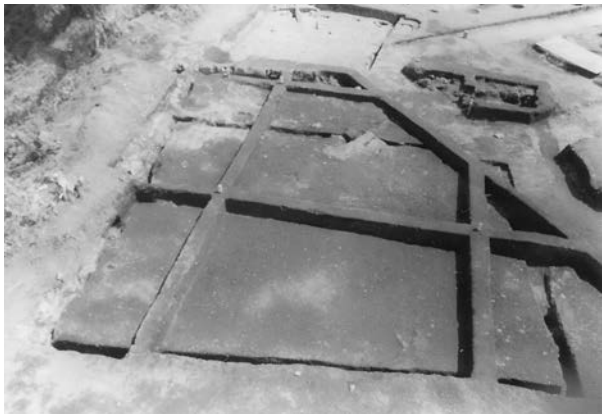
03-ＳＩ316粘土断面(東→)

03-ＳＩ316Ａカマド全景(北→)

03-ＳＩ316Ａカマド断面(北東→)

03-ＳＩ316Ａカマド前庭部断面(北→)

03-ＳＩ316壁溝断面(西→)



03-ＳＩ316住居確認(北→)

03-ＳＩ336全景(西→)

03-ＳＩ336断面(北東→)

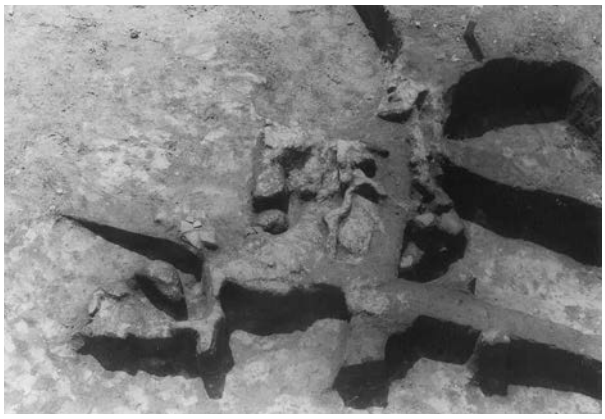
03-ＳＩ336Ｐ２断面(北→)

03-ＳＩ336カマド全景(南→)

03-ＳＩ343カマド全景１(南→)

03-ＳＩ343カマド断ち割り(東→)

03-ＳＩ343遺物出土状況(東→)



03-ＳＩ343カマド全景２(北→)

03-ＳＩ576全景(北→)

03-ＳＩ576断面(北西→)

03-ＳＩ576カマド確認(北→)

03-ＳＩ576カマド断面(北東→)

03-ＳＩ609全景(南→)

03-ＳＩ609断面(西→)

03-ＳＩ609ピット(南東→)

03-ＳＩ609張り出し全景(南→)

03-ＳＩ609Ｂカマド全景(南→)

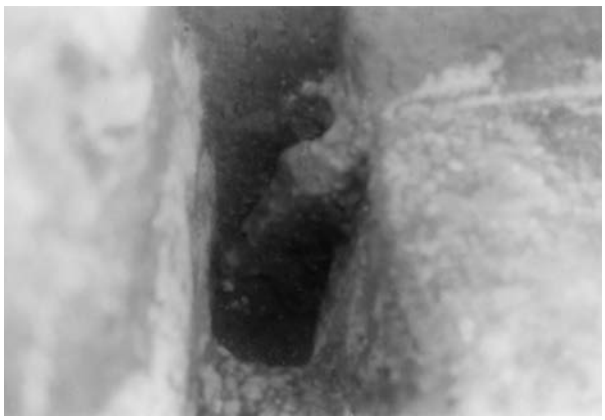
03-ＳＩ609Ａカマド断面１(南西→)

03-ＳＩ609Ａカマド断面２(南西→)

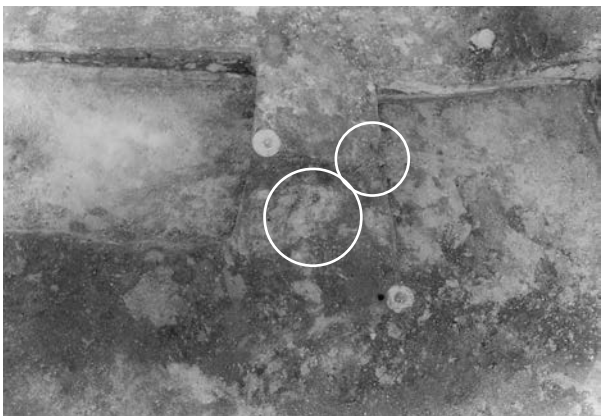
03-ＳＩ609Ａ・Ｂ壁溝(北西→)

03-ＳＩ609貼床(南西→)

03-ＳＩ609鉄製品出土状況１(南西→)



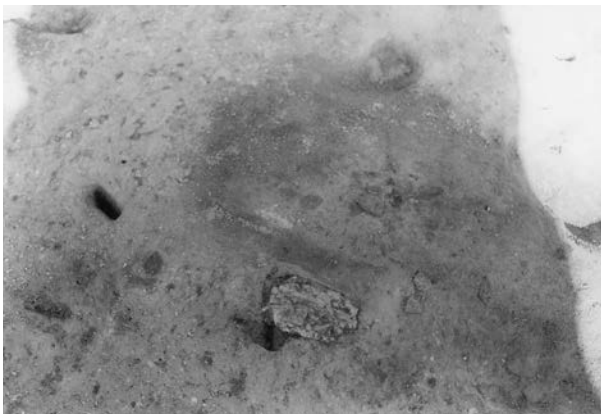
03-ＳＩ609鉄製品出土状況２(北西→)



03-ＳＩ609鉄製品出土状況３(南西→)

03-ＳＩ610全景(南→)

03-ＳＩ610断面(南東→)



03-ＳＩ610焼土全景(西→)

03-ＳＩ610遺物出土状況(南西→)

03-ＳＩ853全景(南東→)

03-ＳＩ853断面(南→)

03-ＳＩ853カマド全景(北西→)

03-ＳＩ853カマド断面(北西→)

03-ＳＩ854全景(北西→)

03-ＳＩ854カマド全景(北→)

03-ＳＩ854カマド支脚(南西→)

03-ＳＩ854カマド支脚・火床面(北→)

03-ＳＩ854カマド煙道断面(南→)

05-ＳＩ02全景(南西→)

05-ＳＩ02断面(北西→)

05-ＳＩ02住居確認(南西→)

05-ＳＩ02Ｐ４断面(北東→)

05-ＳＩ02遺物出土状況１(北→)

05-ＳＩ02遺物出土状況２(北西→)

05-ＳＩ02遺物出土状況３(北西→)

05-ＳＩ02遺物出土状況４(南→)

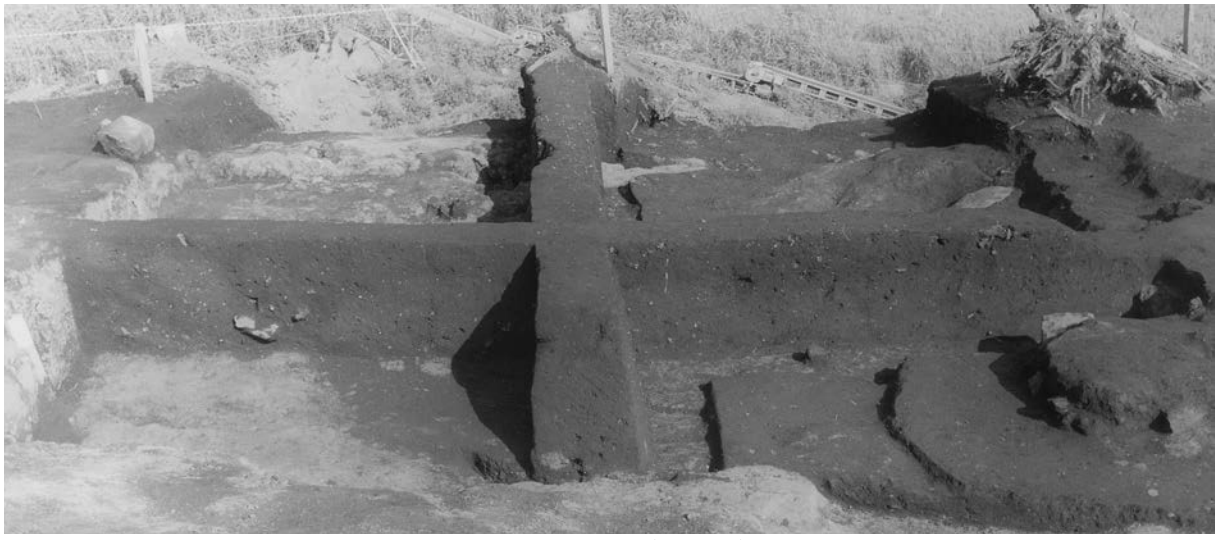
05-ＳＩ02カマド確認１(北東→)

05-ＳＩ02カマド確認２(北東→)

05-ＳＩ02カマド断面(北東→)

05-ＳＩ02カマド全景(北東→)

05-ＳＩ03全景(北西→)



05-ＳＩ03断面(北西→)

05-ＳＩ03カマド断面(北→)

05-ＳＩ03カマド全景(北→)

05-ＳＩ05全景(北→)

05-ＳＩ05断面(南西→)

05-ＳＩ05カマド遺物出土状況(北東→)

05-ＳＩ05Ｐ３断面(東→)

05-ＳＩ06全景(南→)

05-ＳＩ06断面(西→)

05-ＳＩ06カマド全景(北→)

05-ＳＩ06Ｐ１断面(東→)

05-ＳＩ13全景(西→)

05-ＳＩ13断面(南→)

05-ＳＩ13カマド全景(北→)

05-ＳＩ13カマド右袖内面指痕(東→)

05-ＳＩ15全景(南→)

05-ＳＩ15断面(北→)

05-ＳＩ15カマド全景(北→)

05-ＳＩ15Ｐ１断面(南→)

05-ＳＩ26カマド全景(南→)

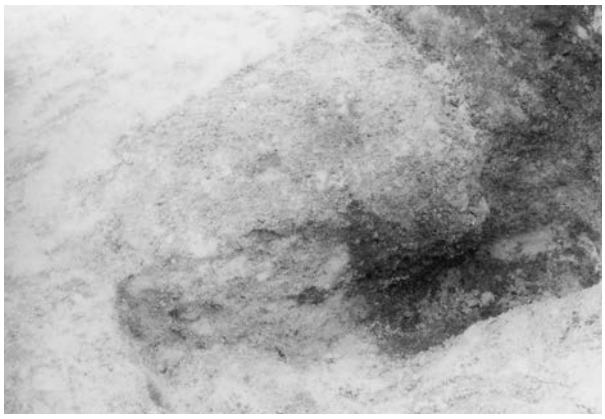
05-ＳＩ26カマド断面(南→)

05-ＳＩ26カマド掘形全景(南→)

05-ＳＩ26カマド確認(南→)

05-ＳＩ27全景(南→)

05-ＳＩ27断面(南東→)

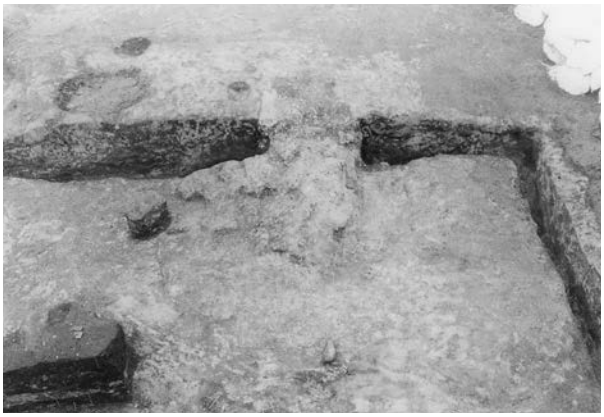


05-ＳＩ27Ｐ１断面(南東→)

05-ＳＩ27Ｐ２断面(北東→)

05-ＳＩ27遺物出土状況(南西→)

05-ＳＩ27出土鉄製品(南→)



05-ＳＩ27カマド確認(北→)

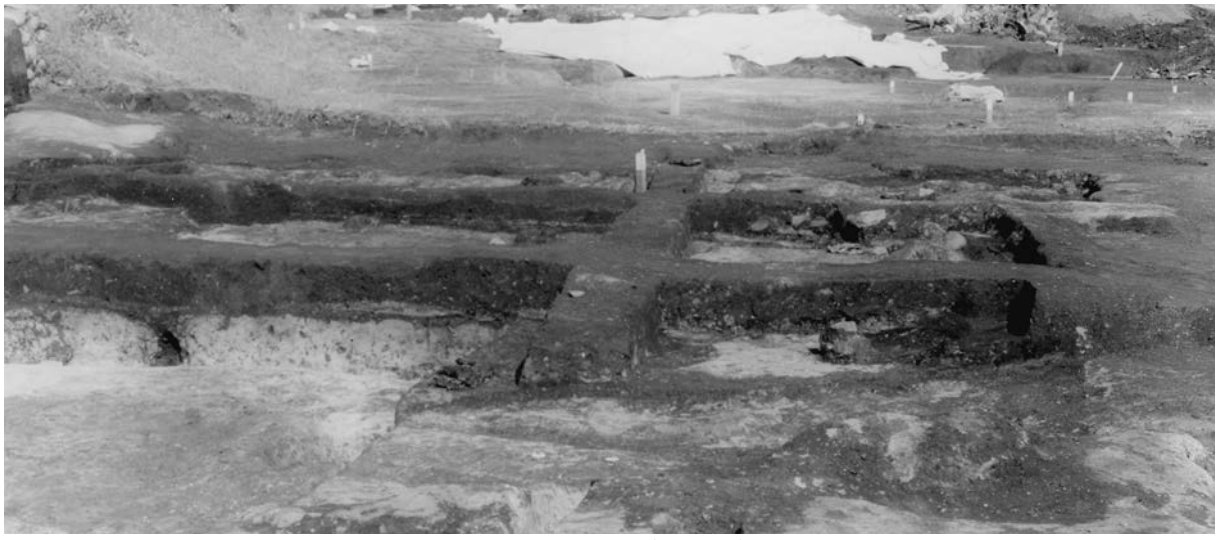
05-ＳＩ27カマド断面１(西→)

05-ＳＩ27カマド断面２(北→)

05-ＳＩ27カマド全景１(西→)

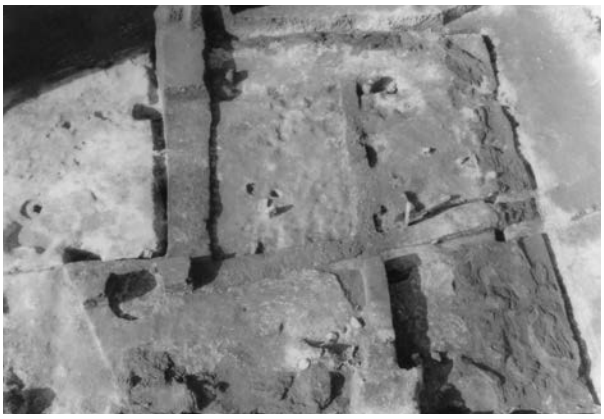
05-ＳＩ27カマド全景２(北→)

05-ＳＩ28全景(南→)



05-ＳＩ28断面(南西→)

05-ＳＩ28炭化材・焼土検出状況１(東→)



05-ＳＩ28炭化材・焼土検出状況２(南→)

05-ＳＩ28Ｐ３断面(西→)

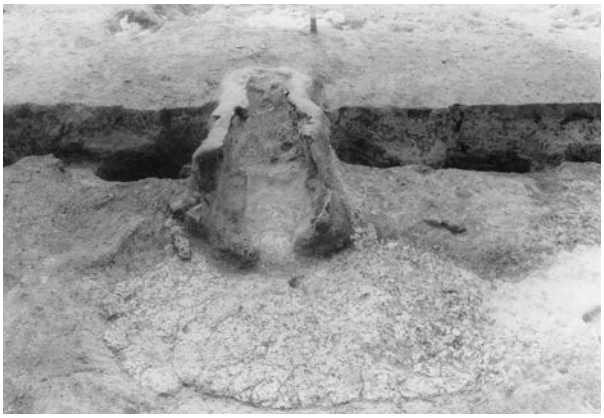
05-ＳＩ28Ｐ２断面(南→)

05-ＳＩ28Ｐ13断面(南→)

05-ＳＩ28カマド確認(北→)

05-ＳＩ28カマド断面１(西→)

05-ＳＩ28カマド断面２(北→)



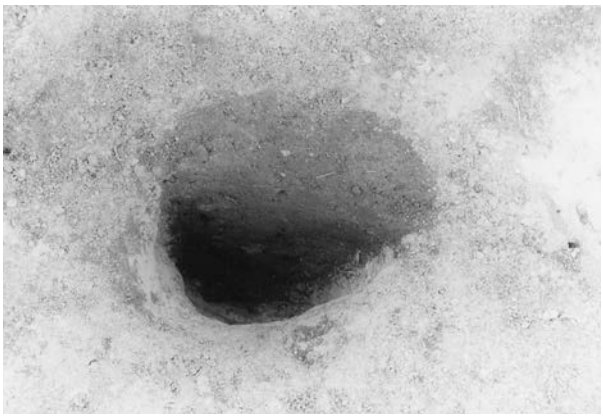
05-ＳＩ28カマド全景１(北→)

05-ＳＩ28カマド全景２(東→)

05-ＳＩ29全景(南東→)

05-ＳＩ29断面(南西→)

05-ＳＩ29カマド全景(北西→)



05-ＳＩ29Ｐ１断面(東→)

05-ＳＩ36全景(北西→)

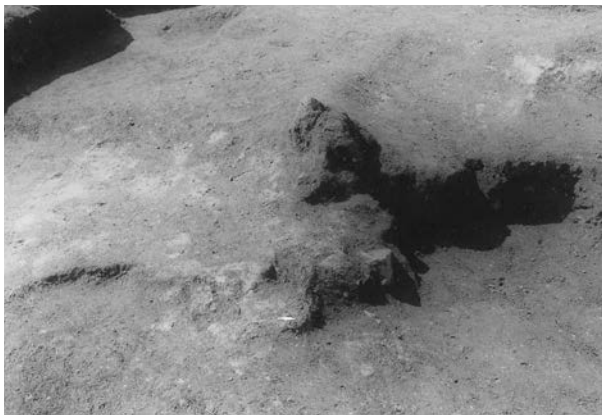
05-ＳＩ36カマド全景(北→)

05-ＳＩ36カマド断面(東→)

05-ＳＩ36カマド確認(北→)

05-ＳＩ36カマド火床面(北→)

05-ＳＩ53全景(北→)



05-ＳＩ53カマド確認(北東→)

05-ＳＩ53カマド断面(南東→)

05-ＳＩ53カマド全景１(北東→)

05-ＳＩ53カマド全景２(北東→)

05-ＳＩ58全景(南→)

05-ＳＩ58断面(南→)

05-ＳＩ58カマド確認(北→)

05-ＳＩ58カマド断面(南東→)

05-ＳＩ59全景(南西→)

05-ＳＩ59断面(南東→)

05-ＳＩ59カマド確認(南西→)

05-ＳＩ59カマド断面(南東→)

05-ＳＩ66全景(南西→)

05-ＳＩ66断面(南西→)

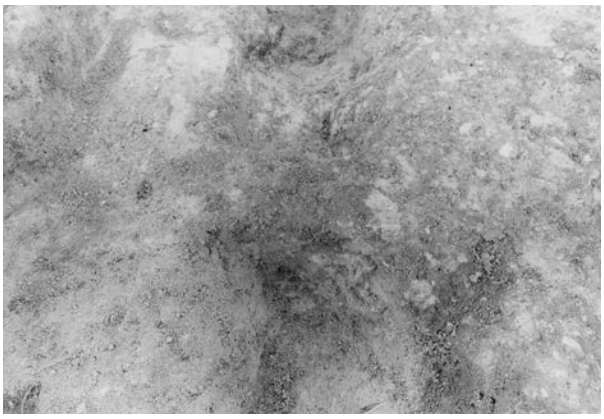
05-ＳＩ66
炭化材検出状況
(南西→)

05-ＳＩ66
カマド全景
(北東→)

05-ＳＩ70全景(北東→)

05-ＳＩ70断面(南→)

05-ＳＩ70Ｐ２断面(南→)



05-ＳＩ70壁溝断面(南東→)

05-ＳＩ73全景(北東→)

05-ＳＩ73断面(南西→)

05-ＳＩ74全景(北西→)

05-ＳＩ74断面(南東→)

05-ＳＩ74カマド全景(北西→)

05-ＳＩ74Ｐ３断面(北西→)

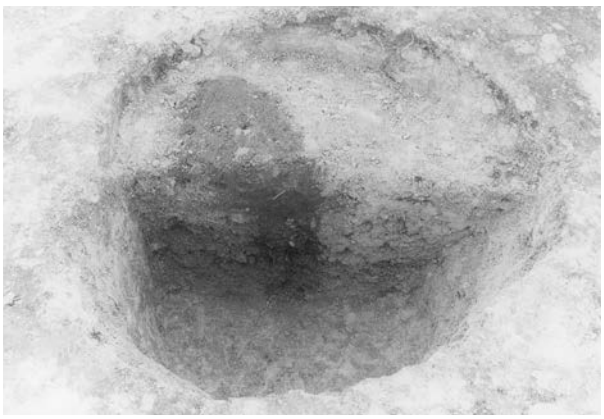
図版100

05-ＳＩ803全景(南西→)

05-ＳＩ803断面(北東→)

05-ＳＩ803土錘出土状況１(東→)

05-ＳＩ803土錘出土状況２(東→)

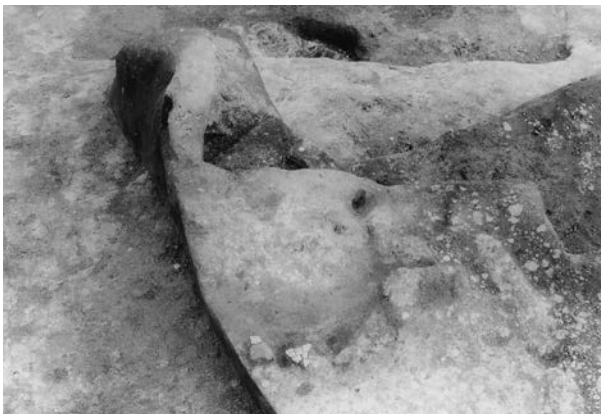


05-ＳＩ803Ｐ１断面(西→)

05-ＳＩ803Ｐ２断面(南西→)

05-ＳＩ803カマド確認(北西→)

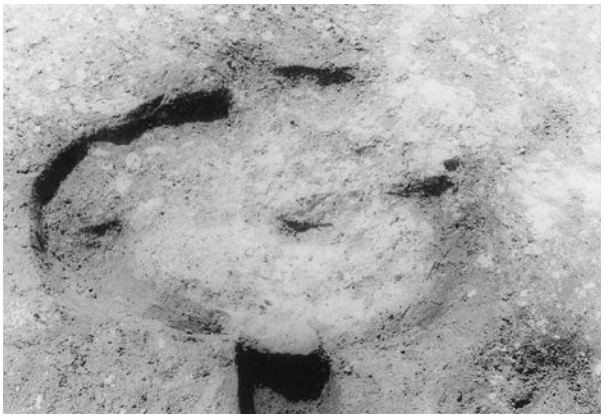
05-ＳＩ803カマド断面(南西→)



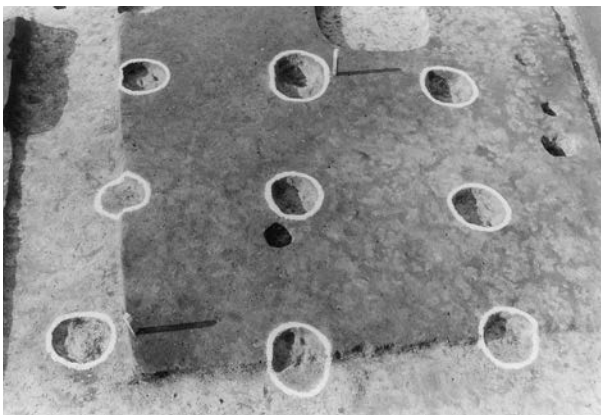
05-ＳＩ803カマド全景１(北→)

05-ＳＩ803カマド全景２(北→)

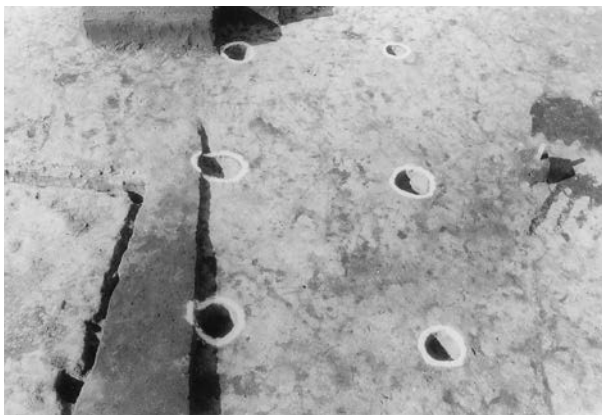
05-ＳＩ803焼土１(北→)



05-ＳＩ803焼土２(北→)



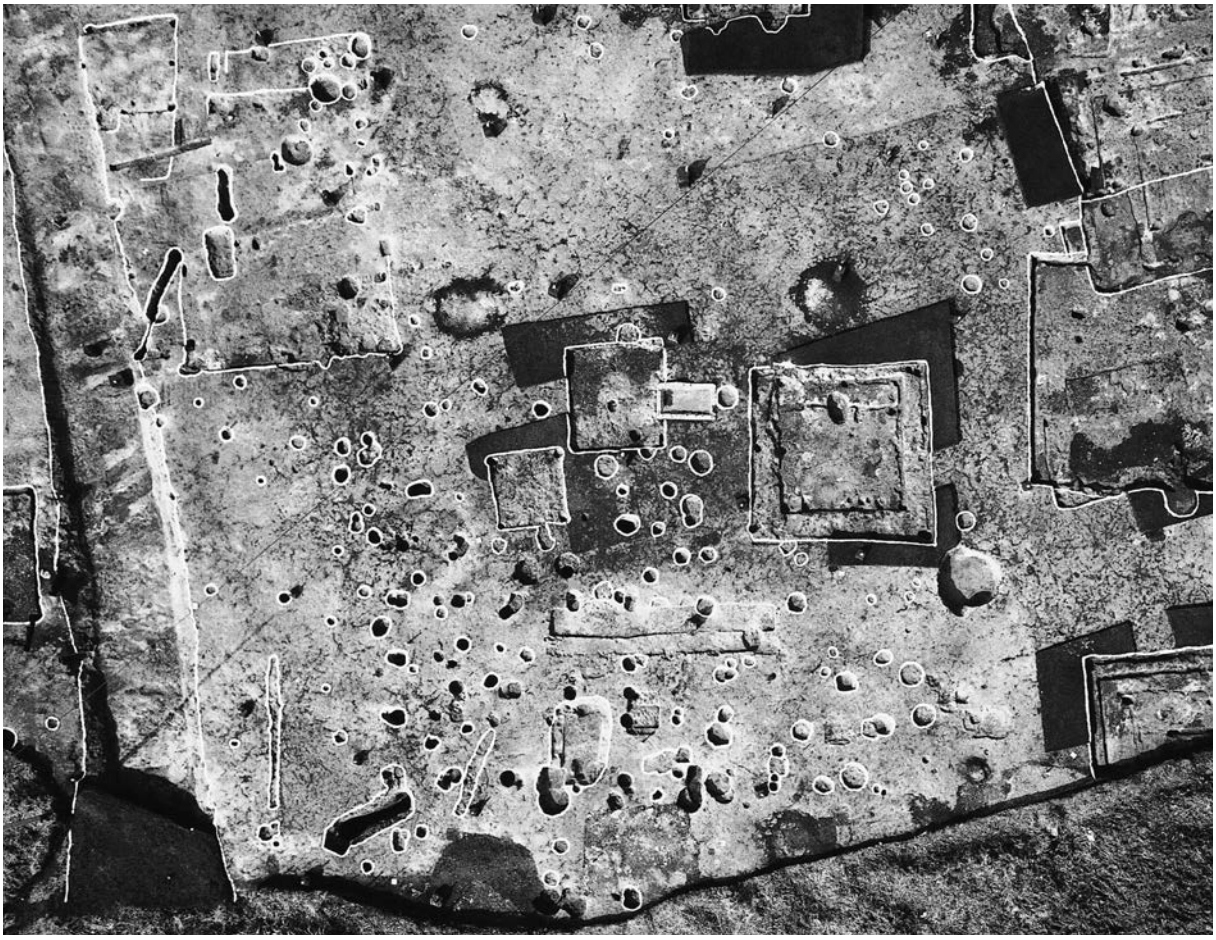
01-ＳＢ146全景(南東→)



01-ＳＢ326全景(南東→)

02-ＳＢ01全景(南西→)

05-ＳＢ79全景(南東→)



柱穴様ピット集中地区１・２(真上→)

ＳＳ10・11・12・14・77・80上部作業場全景１(南東→)

ＳＳ10・11・12・14・77・80上部作業場断面(南西→)

図版104

ＳＳ10・11・12・14・77・80上部作業場全景２(西→)

ＳＳ11・77下部作業場全景(南西→)

05-ＳＳ10全景(南東→)

05-ＳＳ10断面１(南西→)

05-ＳＳ10断面２(南西→)

05-ＳＳ10断ち割り(南東→)

05-ＳＳ11全景(南東→)

05-ＳＳ11断面１(西→)

05-ＳＳ11断面２(西→)

05-ＳＳ11断ち割り(南東→)

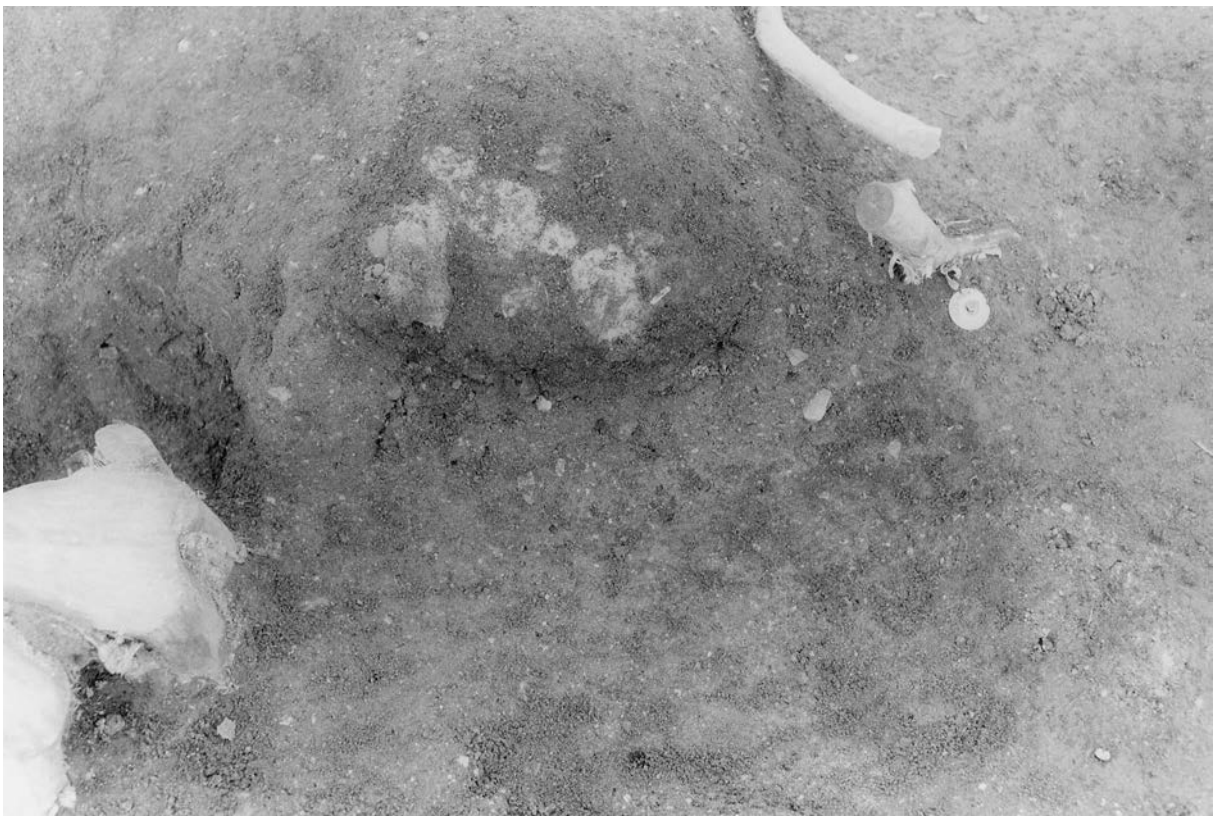
05-ＳＳ12断ち割り全景(南東→)

05-ＳＳ12断面(南西→)

05-ＳＳ12全景(南東→)

05-ＳＳ12断ち割り(南東→)

図版108



05-ＳＳ14全景(南東→)

05-ＳＳ14上部作業場断面(南西→)

05-ＳＳ14確認(南東→)

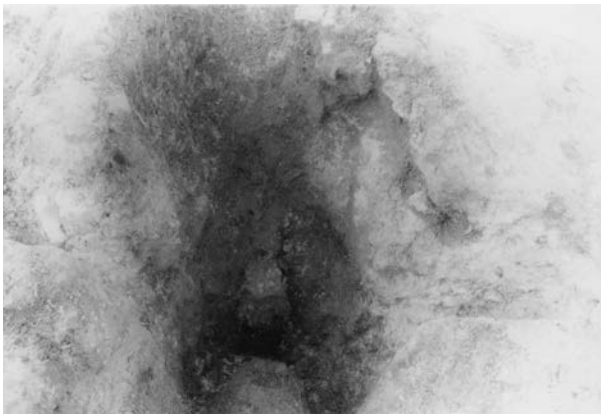
05-ＳＳ14周辺部近景(南東→)

05-ＳＳ17全景(東→)

05-ＳＳ17確認(南→)

05-ＳＳ17羽口装着孔(北西→)

05-ＳＳ17羽口装着孔断面(南→)



05-ＳＳ17断ち割り(南東→)

05-ＳＳ19全景(南東→)

05-ＳＳ19断面１(南→)

05-ＳＳ19断面２(南→)

05-ＳＳ19確認(東→)

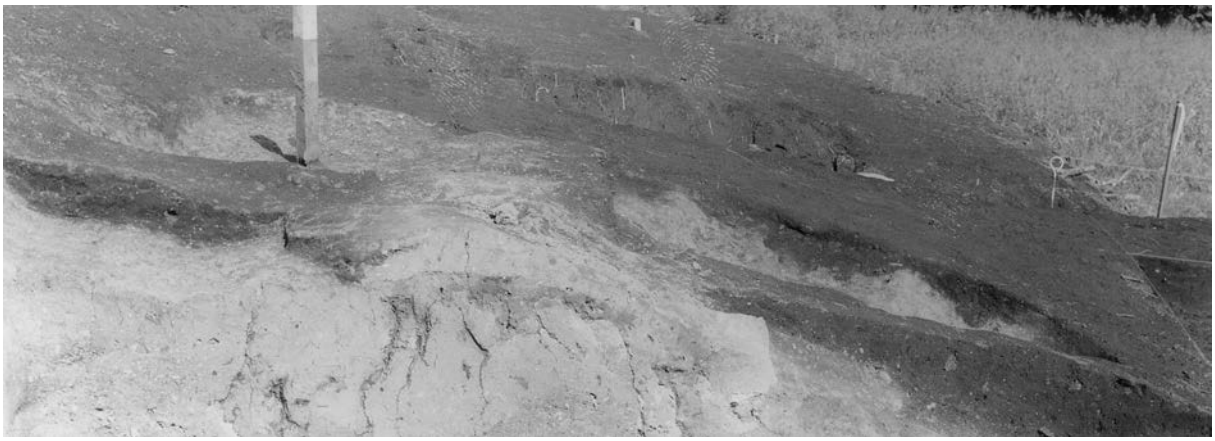
05-ＳＳ19鉄滓出土状況(南→)

05-ＳＳ30製鉄遺構全景(南東→)

05-ＳＳ30全景(南東→)

図版112

05-S S30断ち割り(南東→)



05-S S30製鉄遺構断面(南→)

05-S S30断面(南→)

05-ＳＳ34全景(南東→)

05-ＳＳ34断面１(南西→)

05-ＳＳ34確認(南東→)

05-ＳＳ34断面２(南→)

05-ＳＳ65全景(南東→)

05-ＳＳ65断面(南→)

05-ＳＳ65上部作業場断面(南西→)

05-ＳＳ65断ち割り(南東→)

05-ＳＳ77全景(南東→)

05-ＳＳ77断面(南西→)

05-ＳＳ80全景(南東→)

05-ＳＳ80確認(南→)

05-S S 1001・1002・81全景(南→)

05-S S 1001・1002製鉄遺構全景(南→)

05-S S1001・1002上部作業場断面(南西→)

05-S S81全景(南→)

05-ＳＳ1001全景(南→)

05-ＳＳ1001断面(南西→)

05-ＳＳ1001断ち割り(南→)

05-ＳＳ1001羽口装着孔(北→)

05-S S 1002下部作業場全景(南→)

05-S S 1002断面(南西→)

05-S S 1002断ち割り(南→)

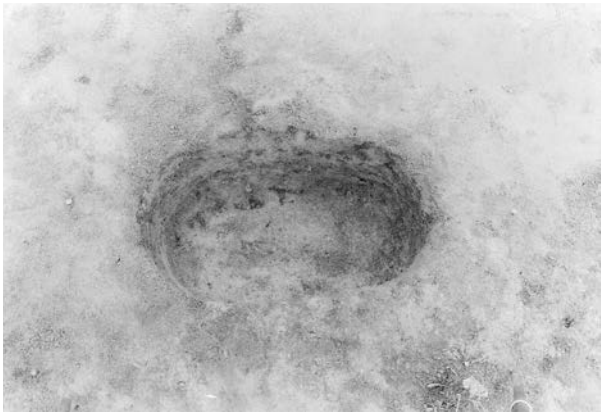
05-S S 1002羽口装着孔(北→)

05-ＳＳ10・14排滓場断面(南→)

05-ＳＳ34排滓場断面(南西→)

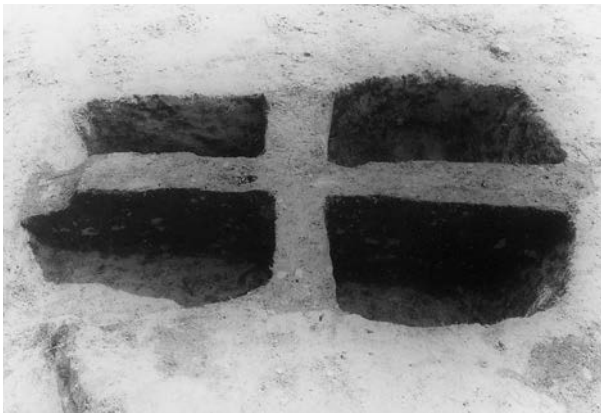
01-ＳＫ01断面(南西→)

01-ＳＫ05断面(南西→)



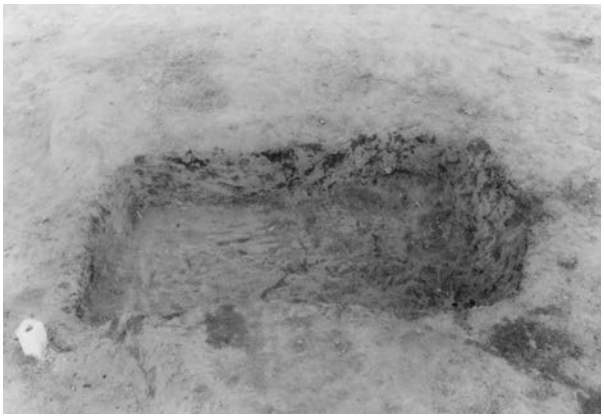
01-ＳＫ01全景(南西→)

01-ＳＫ05全景(南西→)

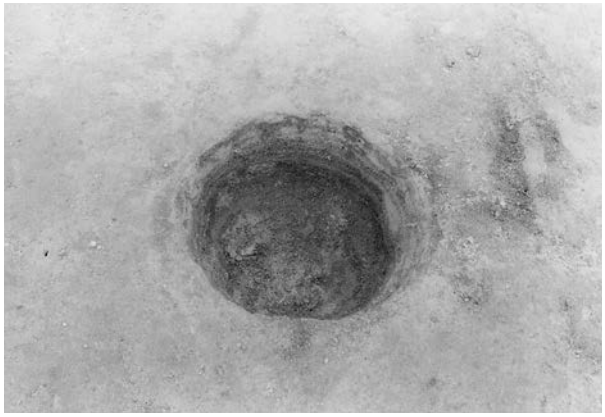


01-ＳＫ22断面(西→)

01-ＳＫ38断面(南東→)



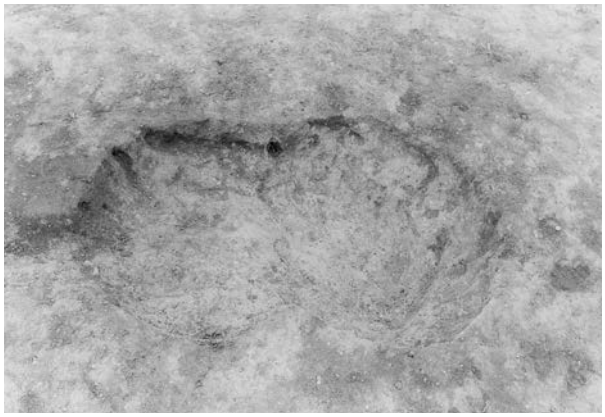
01-ＳＫ22全景(西→)



01-ＳＫ38全景(南→)

01-ＳＫ61・95断面(南→)

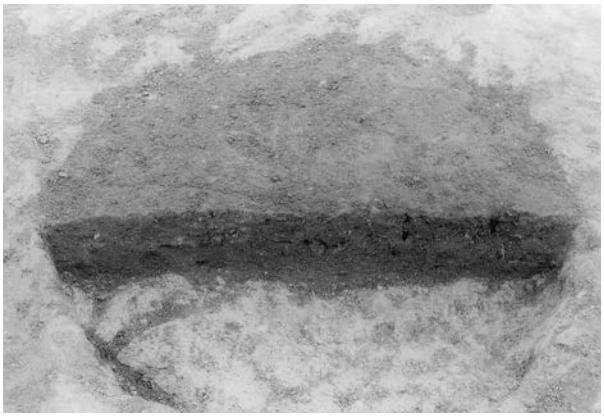
01-ＳＫ62断面(南→)



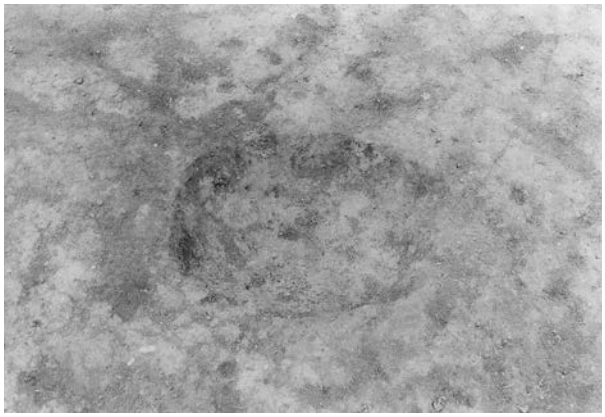
01-ＳＫ61・95全景(南→)

01-ＳＫ62全景(南→)

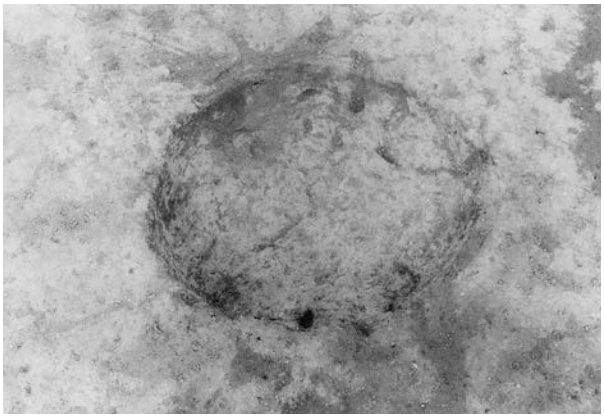
01-ＳＫ63断面(南東→)



01-ＳＫ64断面(南東→)

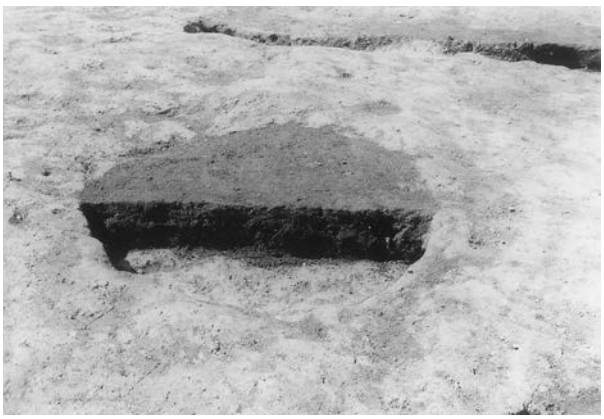


01-ＳＫ63全景(南東→)



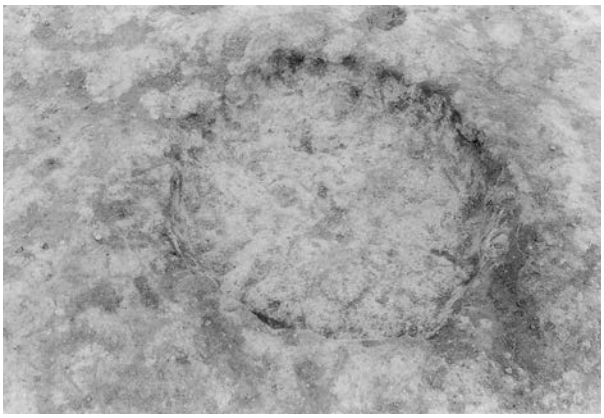
01-ＳＫ64全景(南東→)

図版124



01-ＳＫ89断面(南東→)

01-ＳＫ107断面(南西→)



01-ＳＫ89全景(南東→)

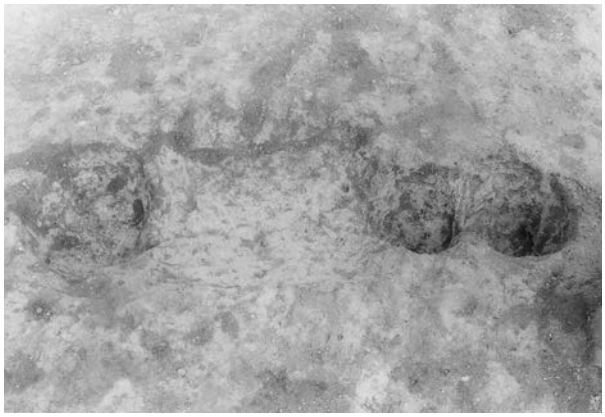
01-ＳＫ107全景(西→)

01-ＳＫ108断面(北→)

01-ＳＫ108全景(北→)

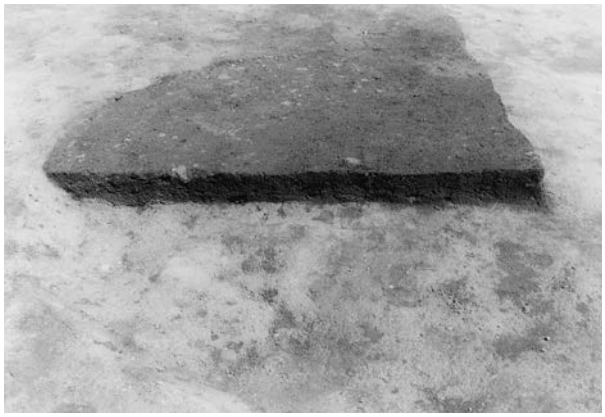
01-S K 122断面(西→)

01-S K 140断面(南→)



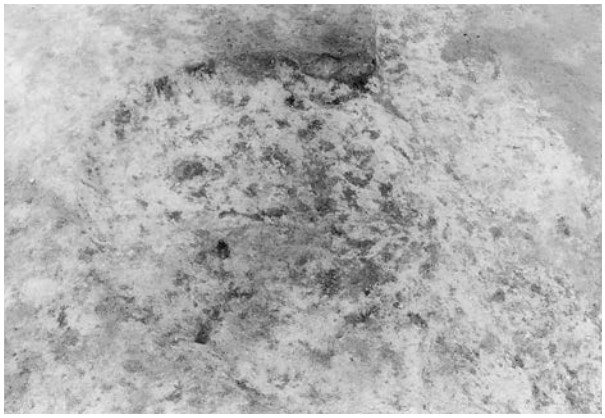
01-S K 122全景(西→)

01-S K 140全景(南→)

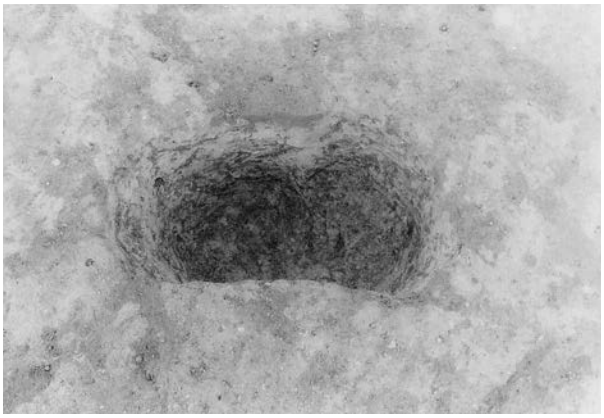


01-S K 154断面(西→)

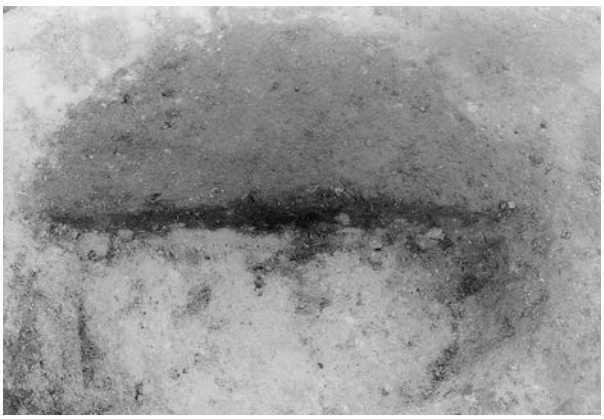
01-S K 216断面(南東→)



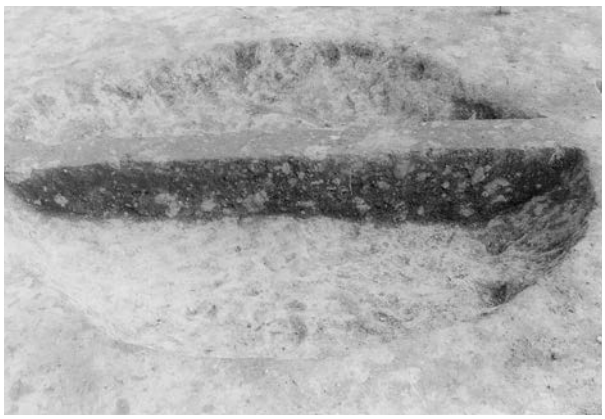
01-S K 154全景(西→)



01-S K 216全景(南東→)

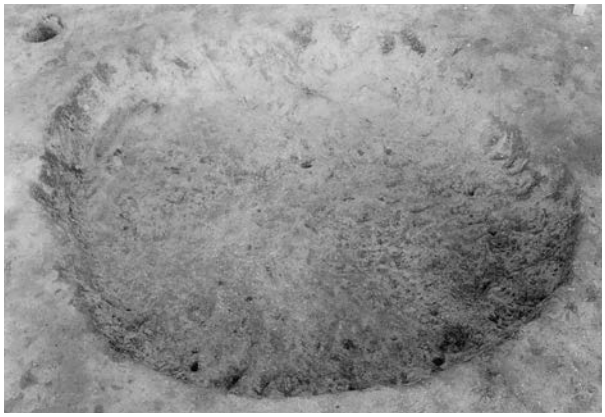


01-ＳＫ230断面(南西→)



01-ＳＫ287断面(西→)

01-ＳＫ230全景(南西→)



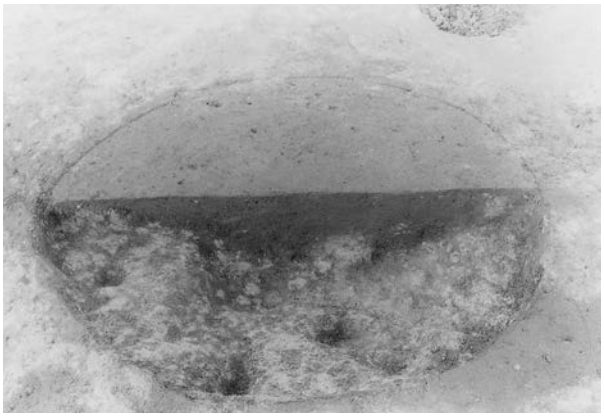
01-ＳＫ287全景(西→)

01-ＳＫ294断面(南→)

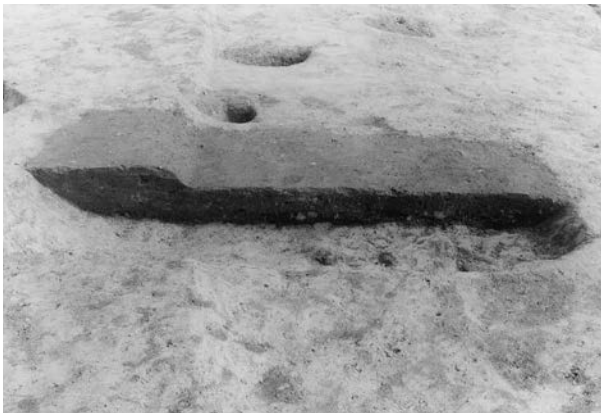
01-ＳＫ296断面(南→)

01-ＳＫ294全景(南→)

01-ＳＫ296全景(南→)



01-ＳＫ313断面(南→)

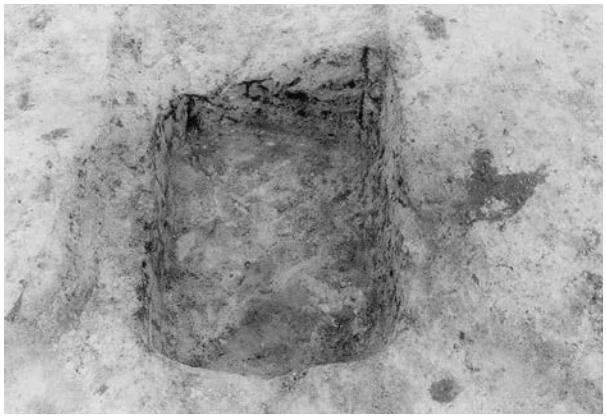


01-ＳＫ325断面(南西→)

01-ＳＫ313全景(南→)

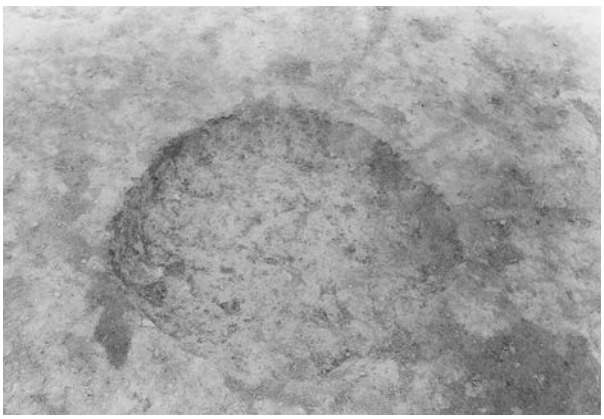
01-ＳＫ325全景(南西→)

01-ＳＫ413断面(南西→)



01-ＳＫ413全景(南西→)

図版128



01-ＳＫ60全景(南→)

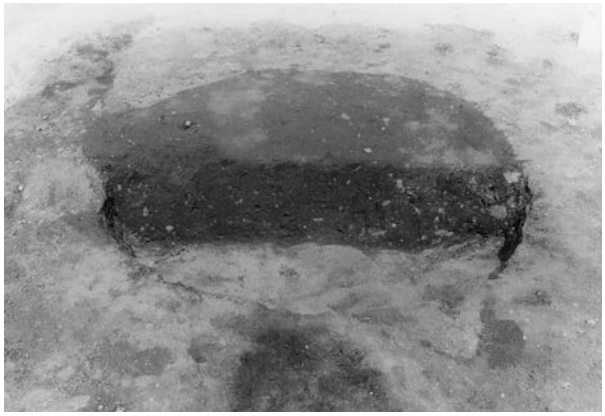
02-ＳＫ01断面(南東→)

01-ＳＫ126・127・128全景(南→)

02-ＳＫ01全景(南東→)

03-ＳＫ200断面(南西→)

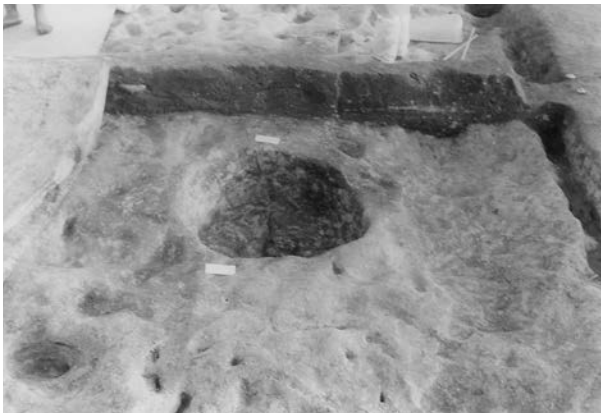
03-ＳＫ200全景(南西→)



03-ＳＫ209断面(南西→)

03-ＳＫ186全景(南西→)

03-ＳＫ209全景(南西→)



03-ＳＫ644全景(北西→)

05-ＳＫ04断面(南西→)

05-ＳＫ04断面(南西→)

05-ＳＫ09上部断面(南西→)

05-ＳＫ39断面(北東→)

05-ＳＫ09上部全景(南東→)

05-ＳＫ39全景(北東→)

05-ＳＫ42上部断面(北東→)

05-ＳＫ52断面(南西→)

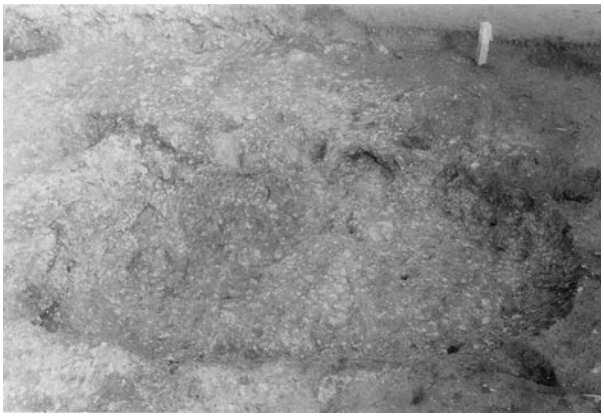
05-ＳＫ42上部全景(南→)

05-ＳＫ52全景(南→)

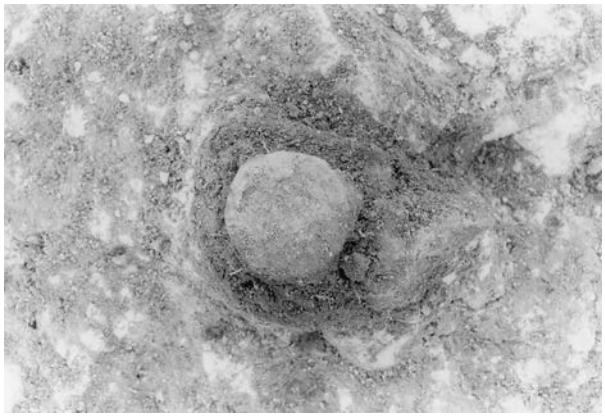
05-ＳＫ60断面(南→)

05-ＳＫ62断面(南→)

05-ＳＫ60全景(南→)



05-ＳＫ62全景(南西→)

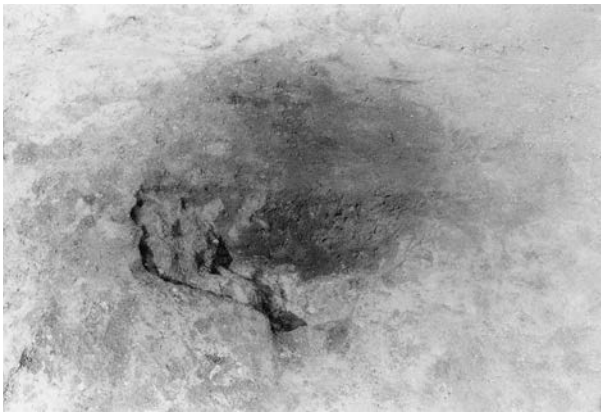


05-ＳＫ62遺物出土状況１(北→)

05-ＳＫ67断面(南→)

05-ＳＫ62遺物出土状況２(北西→)

05-ＳＫ67全景(西→)



05-ＳＫ71断面(南東→)

05-ＳＫ75断面(南西→)

05-ＳＫ71全景(南東→)

05-ＳＫ75全景(南→)

01-ＳＮ39全景(南東→)

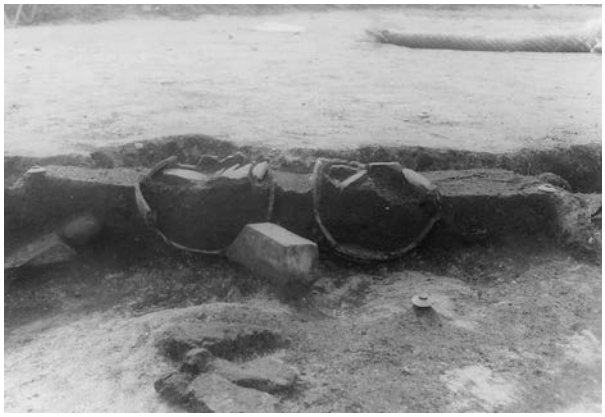
01-ＳＮ79全景(東→)

03-ＳＮ342全景(北→)

05-ＳＮ20全景(南西→)

05-ＳＮ21全景(西→)

05-ＳＮ37全景(南西→)



03-ＳＲ801断面(北→)

03-ＳＲ801全景(北→)

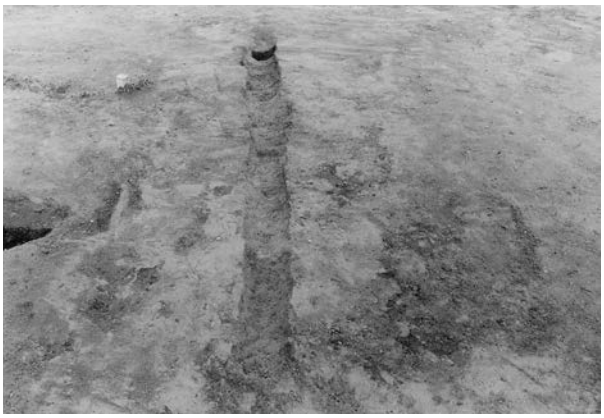
01-ＳＡ40全景(南東→)

05-ＳＡ50Ｐ１断面(西→)

01-ＳＡ46全景(南→)

01-ＳＤ36断面(南東→)

01-ＳＤ42断面(南→)



01-ＳＤ36全景(南東→)

01-ＳＤ42全景(南→)

01-ＳＤ57断面(南→)

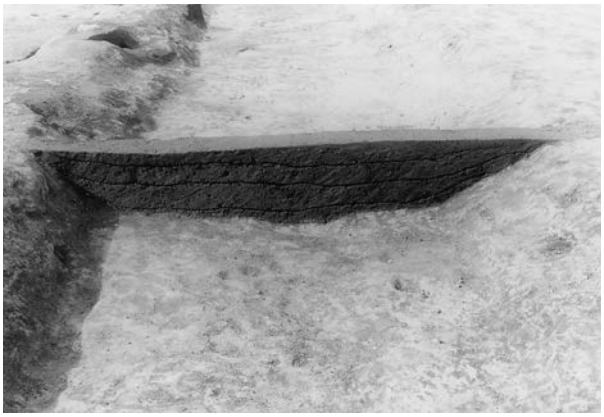
01-ＳＤ57全景(南→)

01-ＳＤ151全景(南→)

01-ＳＤ188全景(南→)

01-ＳＤ220全景(北西→)

02-ＳＤ01全景(南西→)

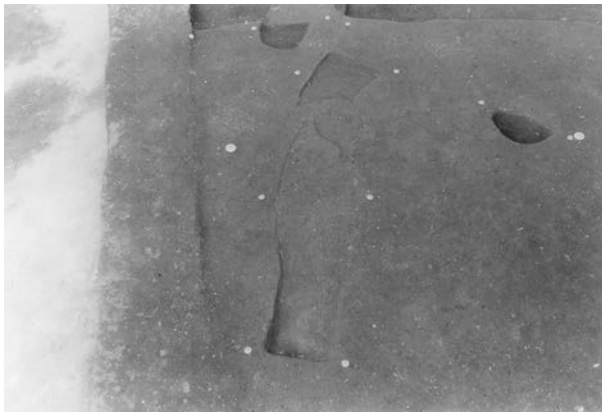


01-ＳＤ220断面(南東→)

02-ＳＤ02全景(南西→)

図版136

03-ＳＤ323断面(北東→)



03-ＳＤ324全景(南→)

03-ＳＤ323全景(南西→)

03-ＳＤ1002・1003全景(東→)

05-ＳＤ01断面(北西→)

05-ＳＤ01全景(南→)

05-ＳＤ16断面(南西→)

05-ＳＤ18断面(南西→)

05-ＳＤ16全景(南西→)

05-ＳＤ18全景(南→)

05-ＳＤ23断面(南→)

05-ＳＤ24断面(南→)

05-ＳＤ23全景(北→)

05-ＳＤ23・24全景(南→)

図版138

05-ＳＤ25断面(南→)

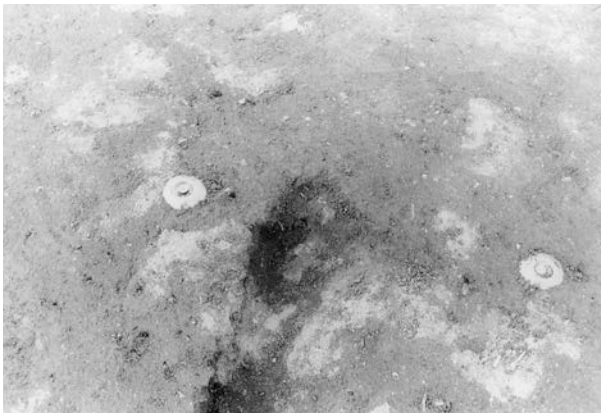
05-ＳＤ35断面(南→)

05-ＳＤ25全景(南→)

05-ＳＤ35全景(南→)

05-ＳＤ38全景(南→)

05-ＳＤ38断面(南→)



05-ＳＤ44断面(南→)

05-ＳＤ45断面(南西→)

05-ＳＤ44全景(南→)

05-ＳＤ45全景(南西→)

05-ＳＤ63断面(東→)

05-ＳＤ69断面(南→)

05-ＳＤ63全景(東→)

05-ＳＤ69全景(南→)

03-ＳＥ1000全景(西→)

03-ＳＥ1000断ち割り(西→)

03-ＳＥ1000出土木材

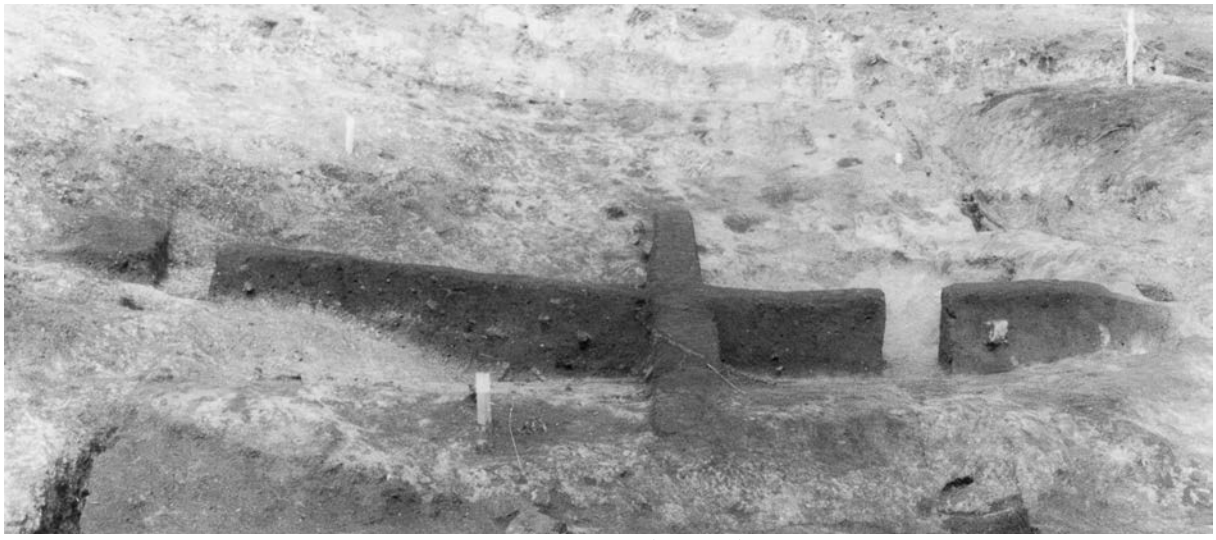
01-ＳＱ138全景(西→)

01-ＳＱ138遺物出土状況(西→)

03-ＳＴ185断面(西→)

03-ＳＴ185鉄滓出土状況(西→)

05-ＳＸ47全景(北→)



05-ＳＸ47断面(南東→)

05-ＳＸ47南部断面(北→)

05-ＳＸ47南部全景(北東→)

05-ＳＸ48断面(南西→)

05-ＳＸ56断面(西→)

05-ＳＸ48全景(南西→)

05-ＳＸ56全景(西→)

05-ＳＸ61断面(南→)

05-ＳＸ72断面(南→)

05-ＳＸ61全景(南東→)

05-ＳＸ72全景(南→)

385図- 1

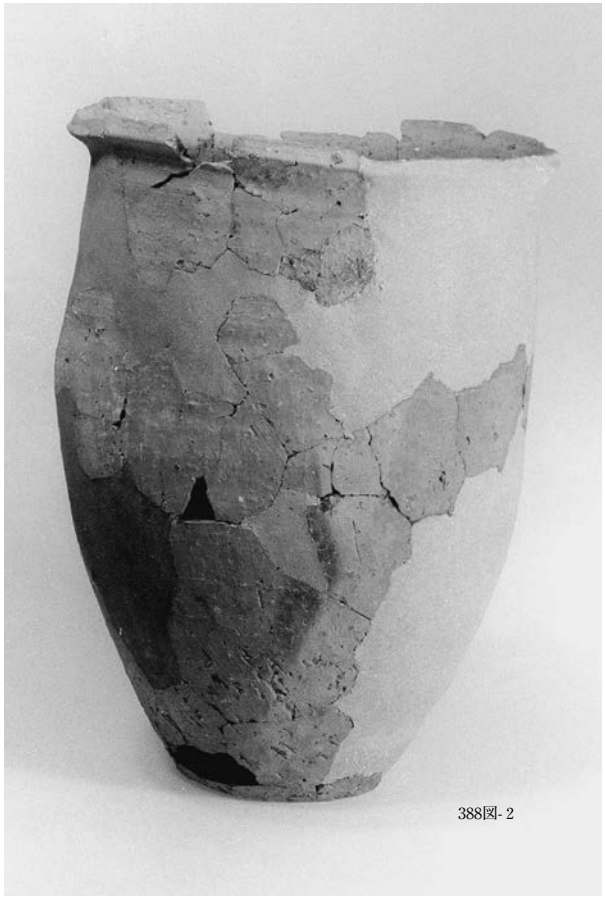
385図- 2

387図- 1

386図- 2

土師器甕(大型)A類－ 1

386図- 1



388図- 2

388図- 1

389図- 2

土師器甕(大型)A類－2

389図- 3

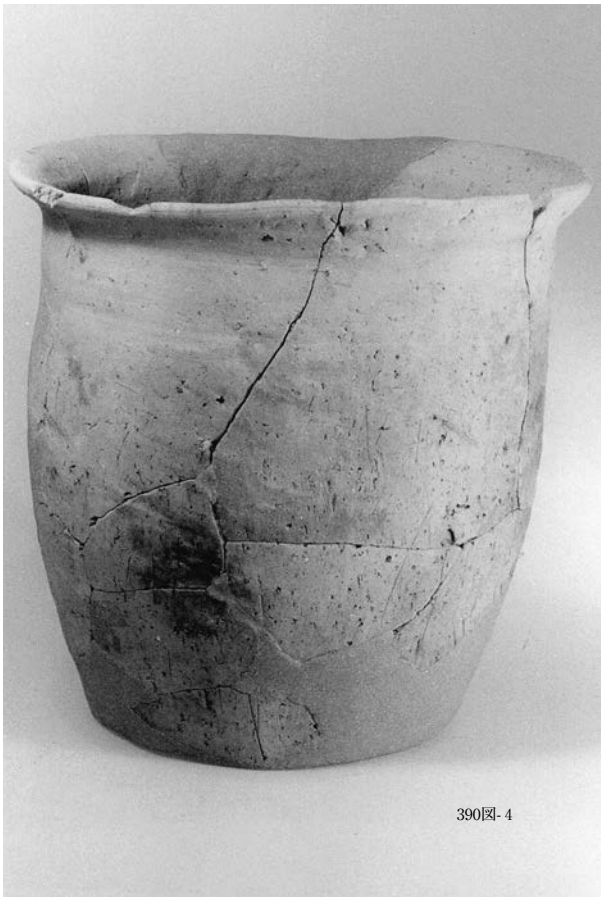
393図- 1

389図- 1

390図- 1

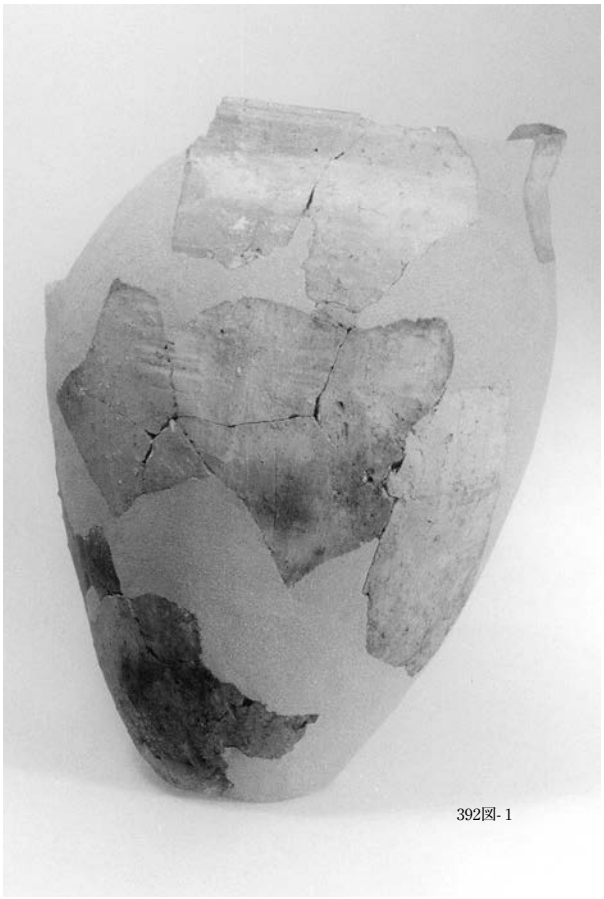
土師器甕(大型)A類－ 3

図版146



390図- 4

392図- 2



392図- 1

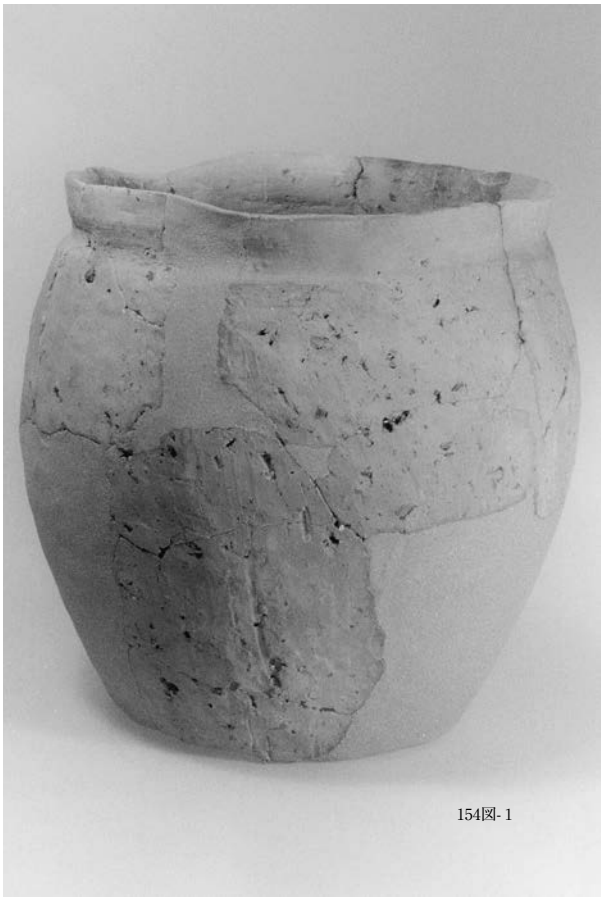
142図- 1

土師器甕(大型)A類－4

169図- 1

215図- 1

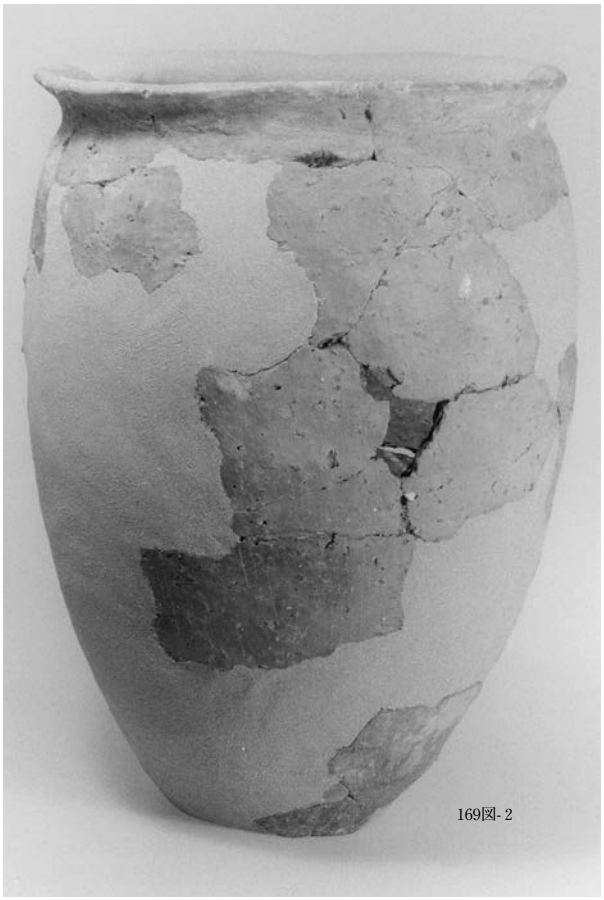
179図- 1



154図- 1

土師器甕(大型)B類－ 1

図版148


169図- 2

398図- 1

196図- 1

39図- 1

土師器甕(大型)C類－ 1

228図- 1

135図- 1

264図- 2

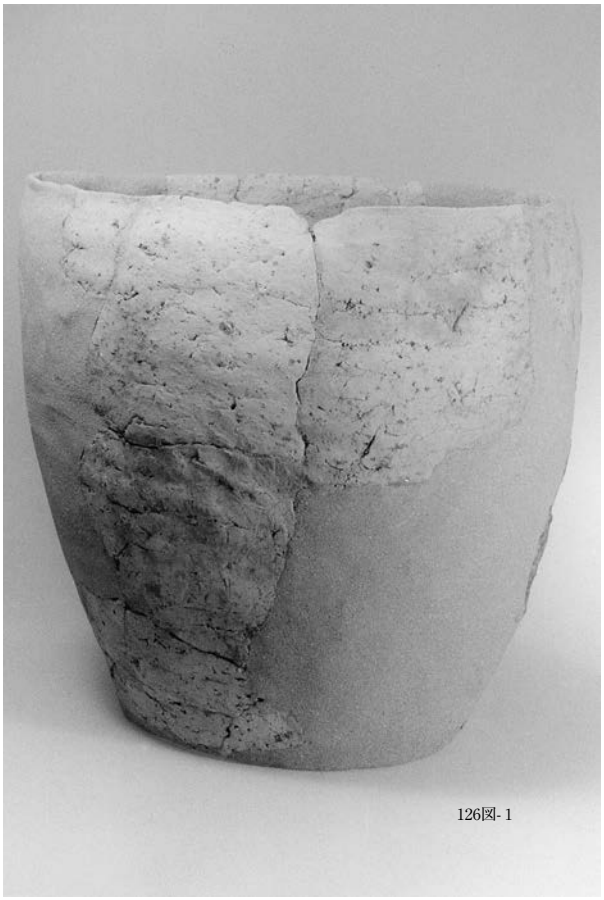
401図- 3

土師器甕(大型)C類－ 2

図版150

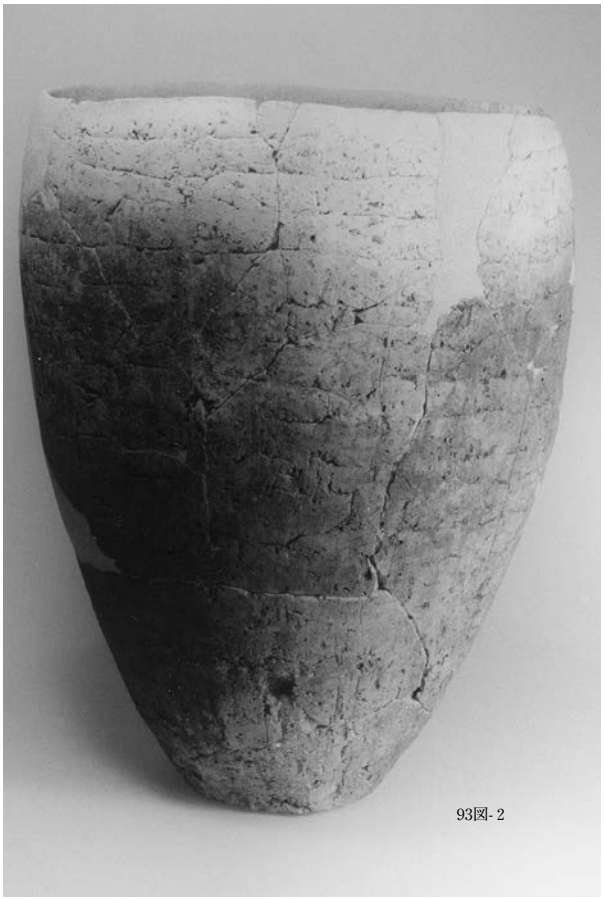
土師器甕(大型)C類－３・D類－１

206図- 2



126図- 1

82図- 1

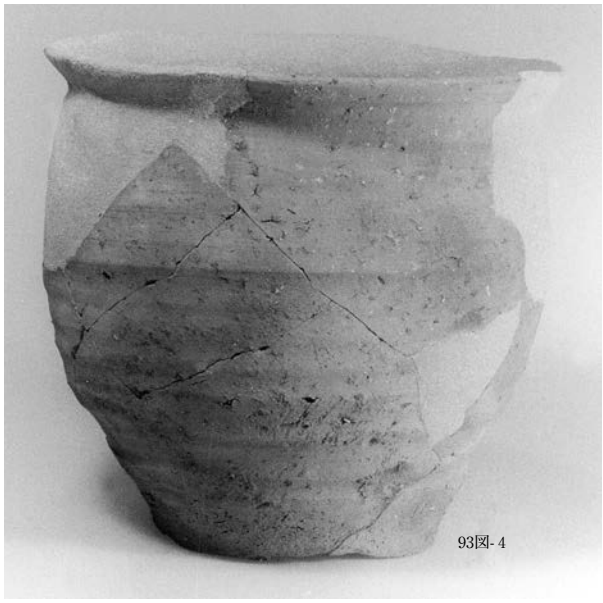


93図- 2

土師器甕(大型)D類－２

図版152

275図- 4



93図- 4

196図- 2

394図- 5

395図- 6

395図- 5

土師器甕(小型)A類

256図- 6

170図- 1

179図- 8

85図- 6

397図-11

397図- 7

土師器甕(小型)B 類－ 1

図版154

97図- 5

16図- 3

197図- 2

256図- 4

404図- 9

44図- 5

土師器甕(小型)B類 －2・C類－1

191図- 3

148図- 4

148図- 3

240図-11

240図- 9

404図-13

土師器甕(小型)C類－２

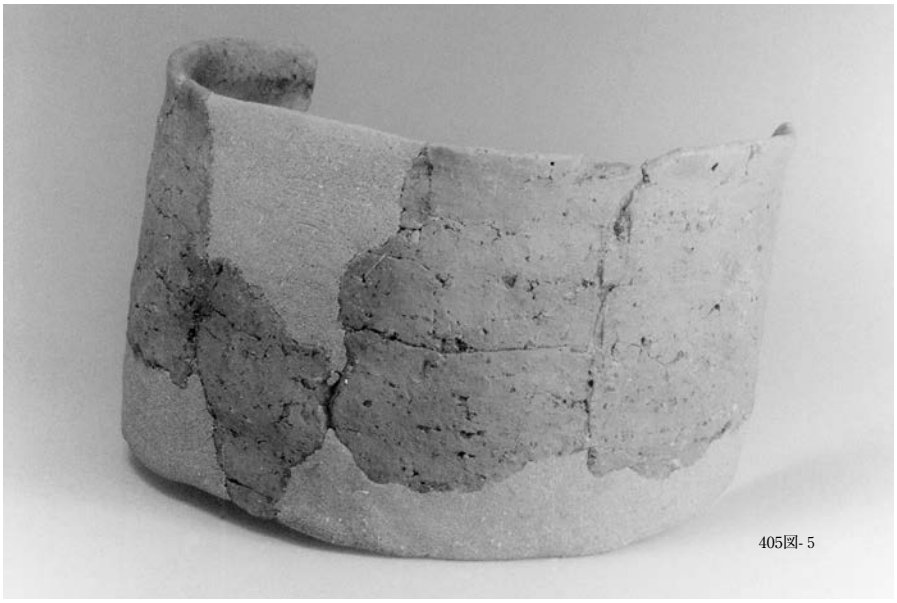
図版156

197図- 3

82図- 4

405図- 1

275図- 8


405図- 5

土師器甕(小型)C類－3

170図- 2

148図- 5

33図- 4

171図-26

277図- 5

171図-25

土師器甕(小型)・小型土器Ｄ類

図版158

54図- 3

191図-11

171図- 1

225図- 4

411図- 2

411図- 1

197図-11

411図- 5

411図- 3

145図- 1

土師器坏Ａ類－１

39図- 4

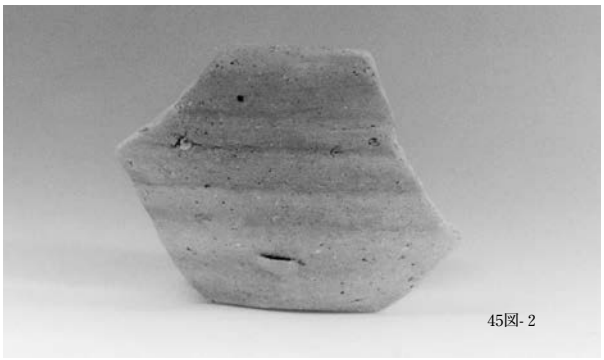
307図- 2

66図- 8

266図- 6

276図- 2

276図- 3


45図- 2

276図- 1

435図- 2

45図- 1

土師器坏Ａ類－２

図版160

45図- 3

39図- 5

73図- 7

158図-12

191図-12

180図-12

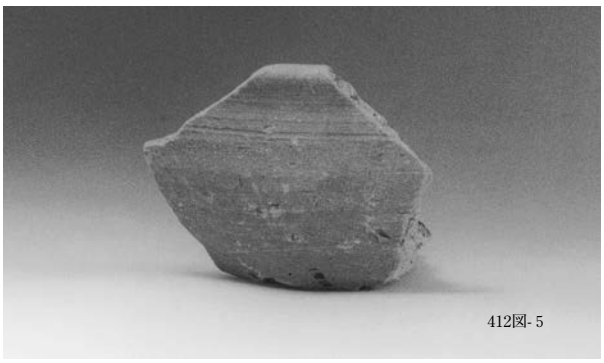
180図- 8

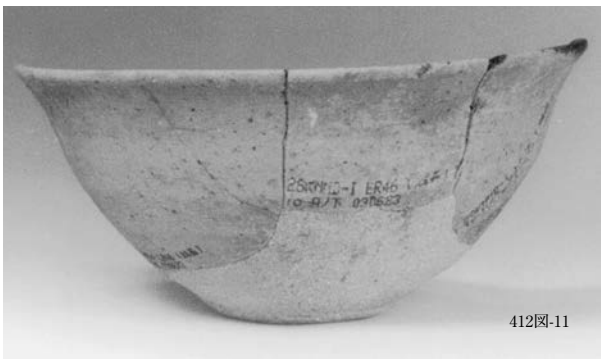
171図- 5

197図-14

412図- 2

土師器坏Ａ類－３・土師器坏Ｂ類－１


412図- 5


412図-11

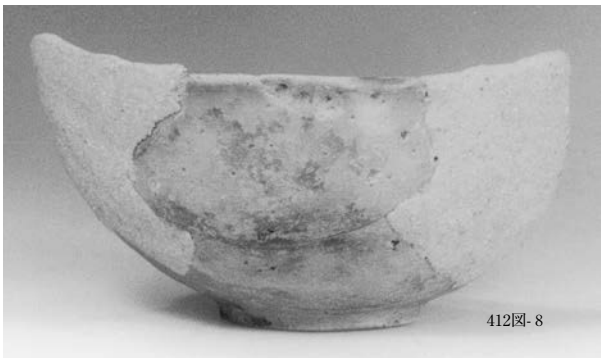
412図- 7

85図-10

436図- 7

412図- 6

412図- 4


412図- 8

412図- 3

412図- 1

土師器坏Ｂ類－２

107図- 7

436図- 8

140図-18

421図-12

85図-11

171図- 7

197図-15

225図- 6

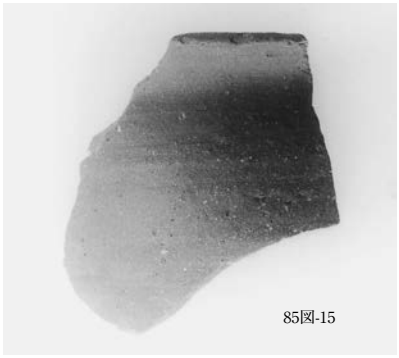
103図- 4

437図-33

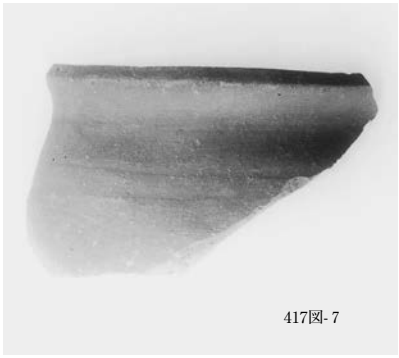
土師器坏Ｂ類－３・ 土師器坏Ｃ・Ｄ類

149図- 5

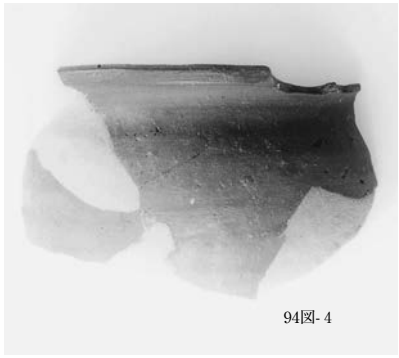
416図- 1



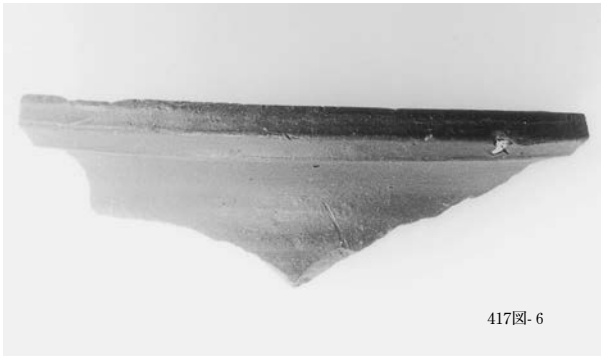
85図-15



417図- 7



94図- 4



417図- 6

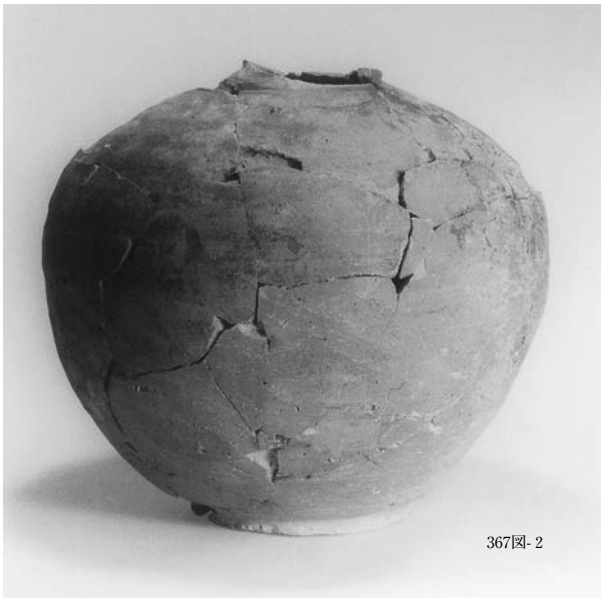
440図- 8

440図- 7

須恵器－ 1

図版164

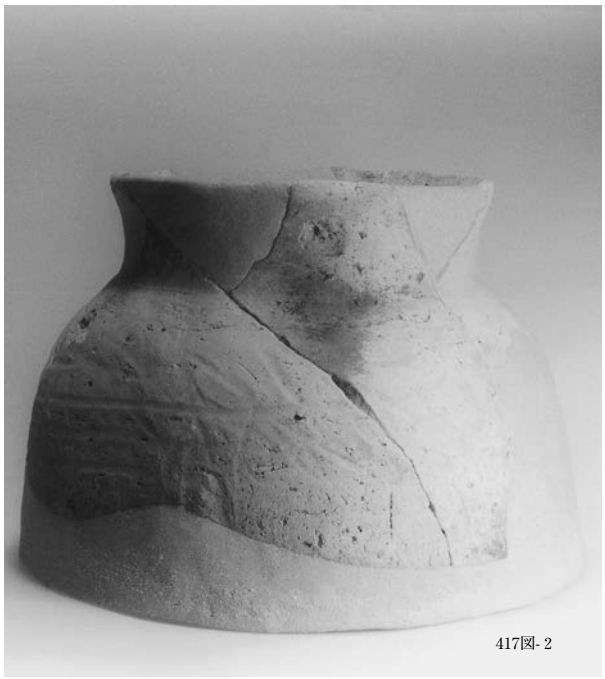
45図-11



367図- 2

367図- 1

171図-12



417図- 2

須恵器－ 2

251図-10

180図-17

94図- 5

364図-13

89図- 7

75図- 2

75図- 3

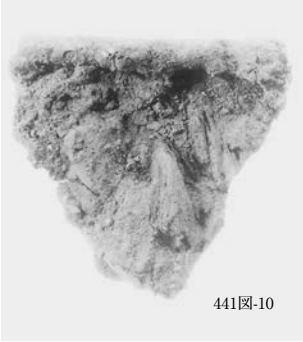
21図-16

145図-12

149図- 6

171図-19

294図-26

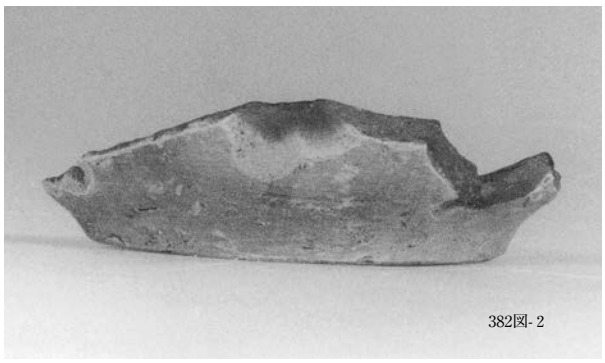


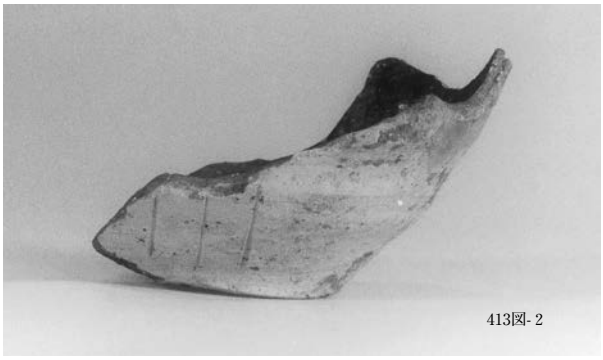
441図-10

鉄製品

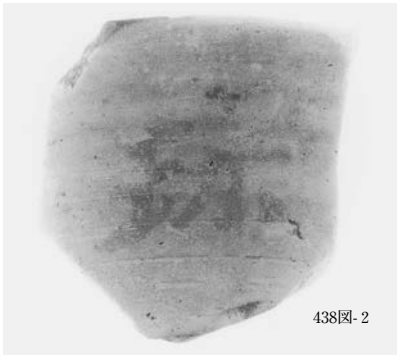
図版166

438図- 4


382図- 2

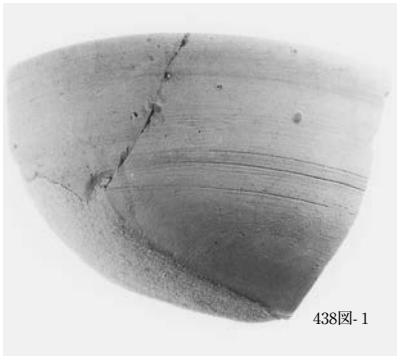

413図- 2

438図- 3

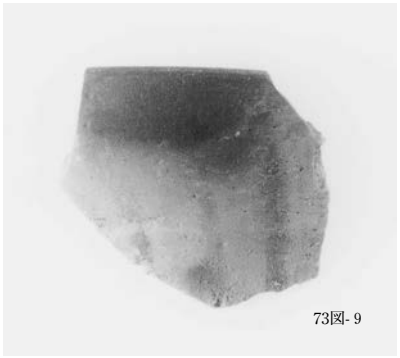

438図- 2

276図- 9

413図- 1


438図- 1

413図- 3


73図- 9

438図- 5

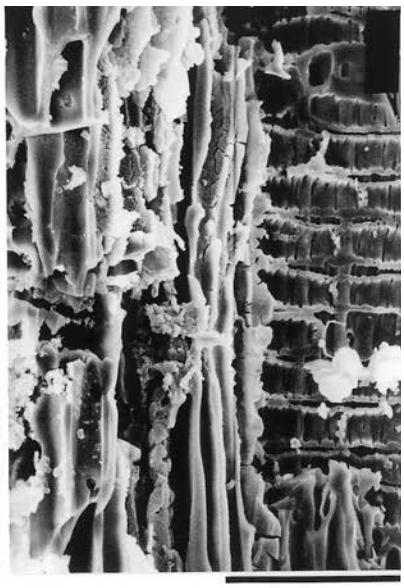
115図-19

210図- 7

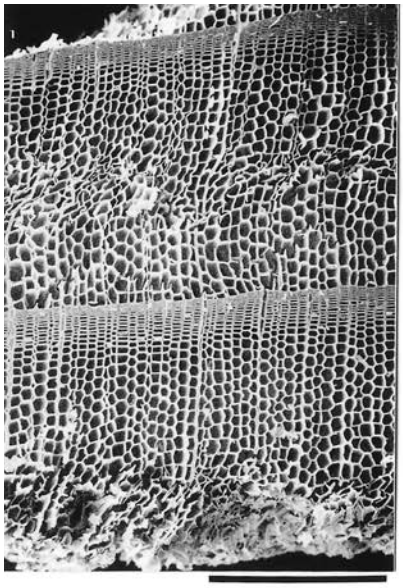
墨書土器

１ａモミ属(横断面)
ＳＫＴ358　bar：0.5㎜

１ｂモミ属(接線断面)
ＳＫＴ358　bar：0.1㎜

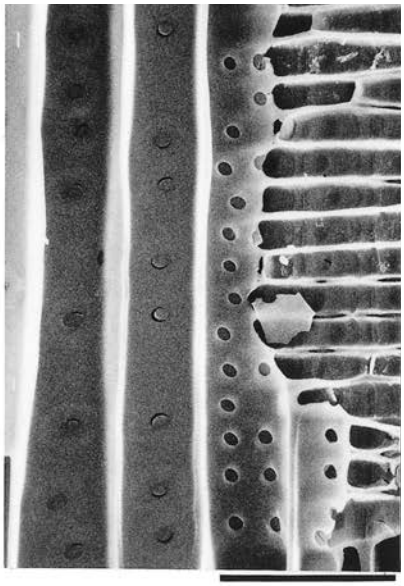


１ｃモミ属(放射断面)
ＳＫＴ358　bar：0.05㎜

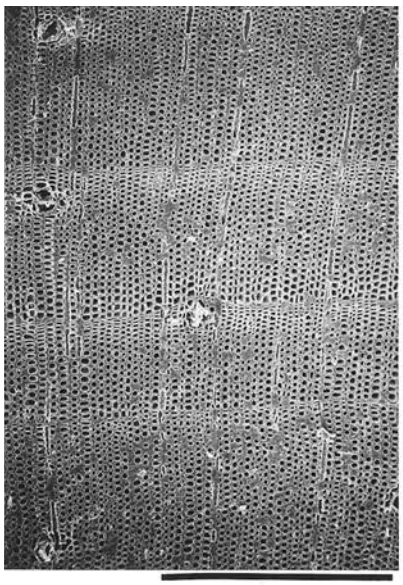


２ａスギ(横断面)
ＳＩ52　bar：0.5㎜

２ｂスギ(接線断面)
ＳＩ52　bar：0.05㎜



２ｃスギ(放射断面)
ＳＩ52　bar：0.05㎜



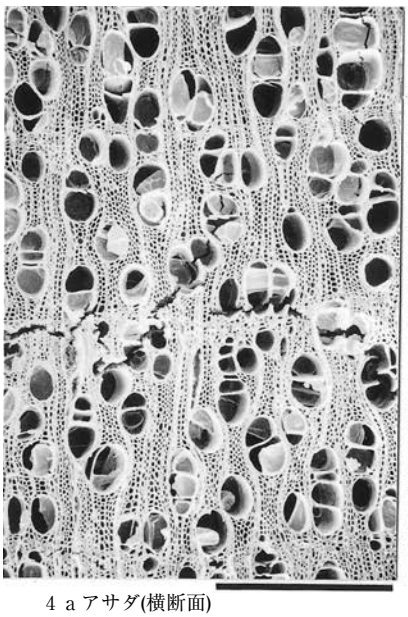
３ａマツ属(横断面)
ＳＩ155　bar：0.5㎜

３ｂマツ属(接線断面)
ＳＩ155　bar：0.1㎜

３ｃマツ属(放射断面)
ＳＩ155　bar：0.05㎜

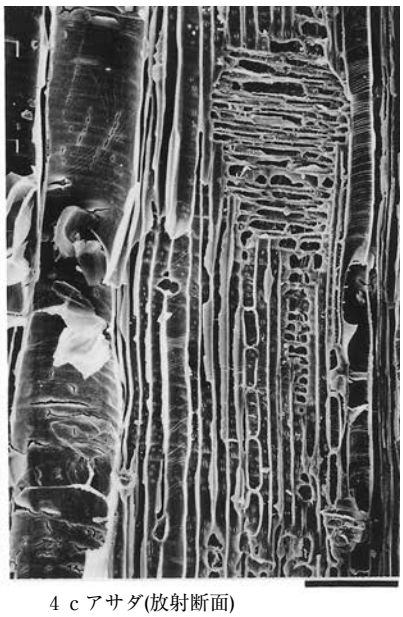
出土材樹種 2

図版168

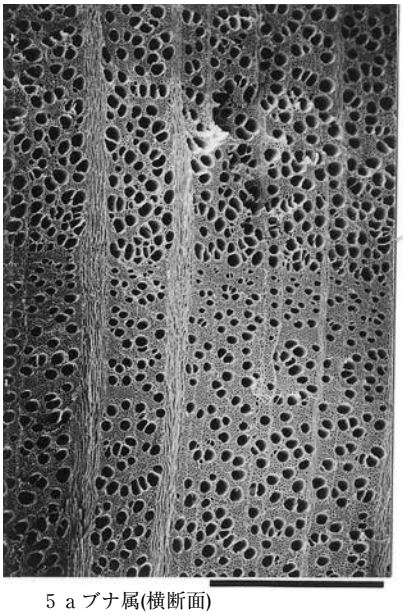


4 a アサダ(横断面)
S K413　bar：0.5㎜

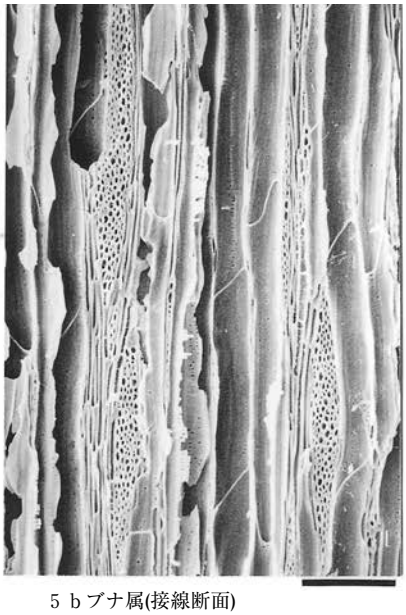
4 b アサダ(接線断面)
S K413　bar：0.5㎜



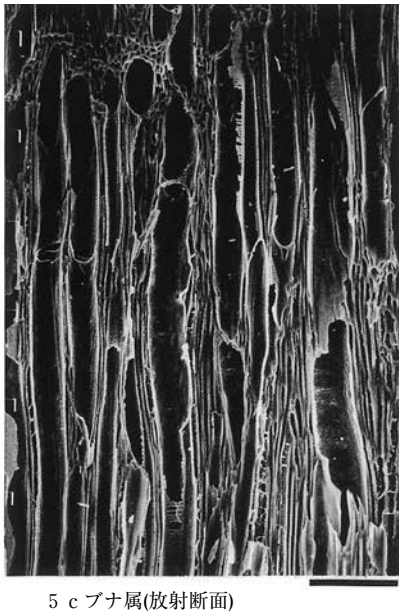
4 c アサダ(放射断面)
S K413　bar：0.1㎜



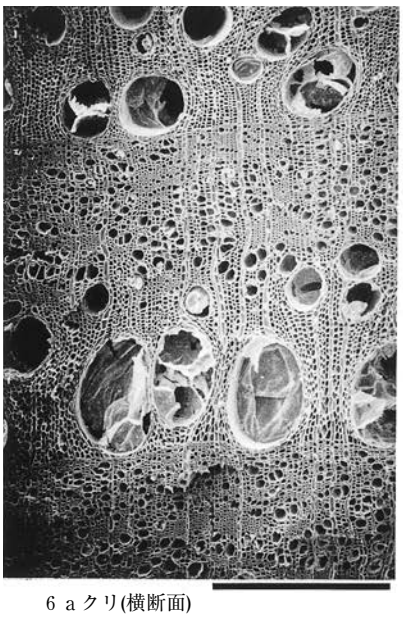
5 a ブナ属(横断面)
S K22　bar：0.5㎜



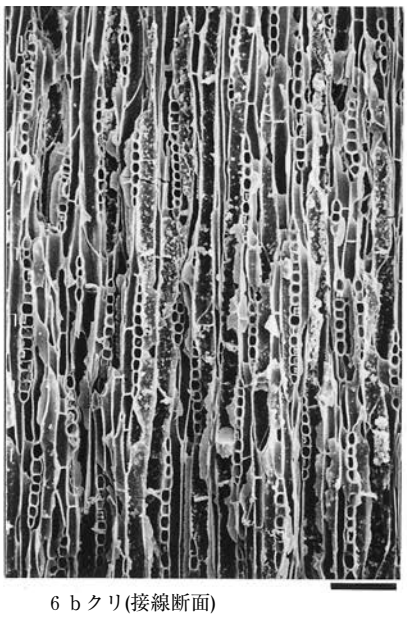
5 b ブナ属(接線断面)
S K22　bar：0.1㎜



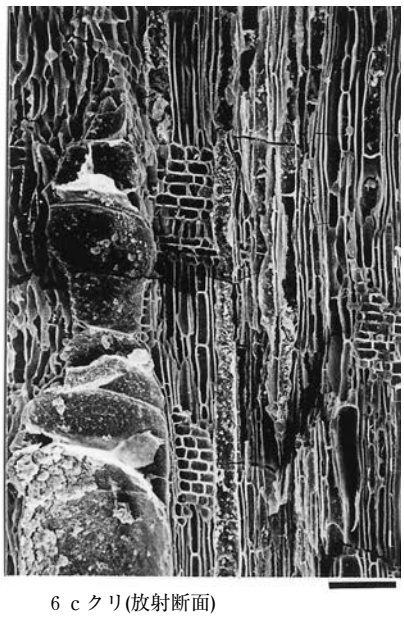
5 c ブナ属(放射断面)
S K22　bar：0.1㎜



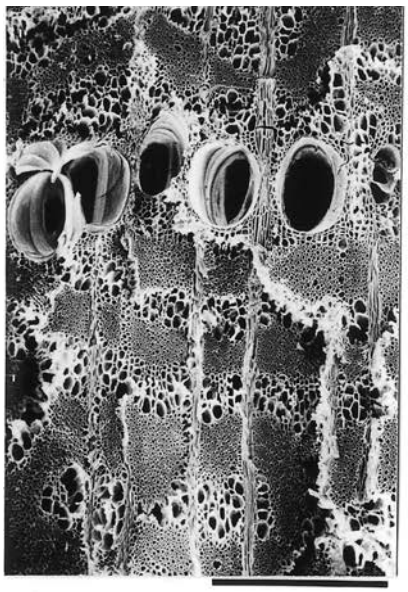
6 a クリ(横断面)
S I 119　bar：0.5㎜



6 b クリ(接線断面)
S I 119　bar：0.5㎜



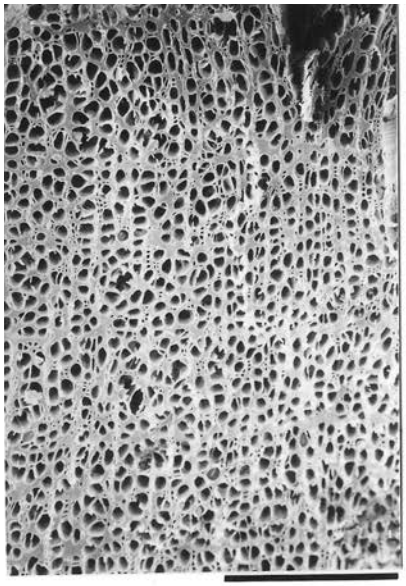
6 c クリ(放射断面)
S I 119　bar：0.5㎜



7 a ケヤキ(横断面)
S Ⅰ128　bar：0.5㎜

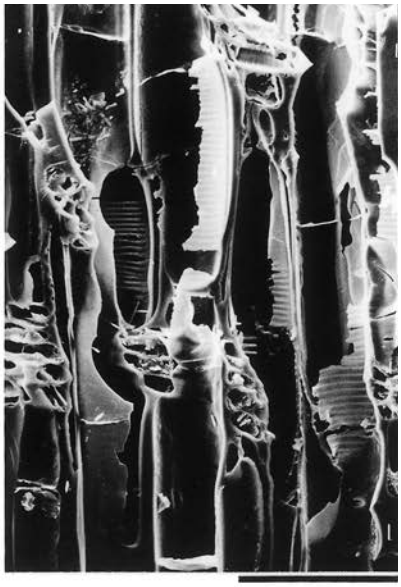
7 b ケヤキ(接線断面)
S Ⅰ128　bar：0.5㎜

7 c ケヤキ(放射断面)
S Ⅰ128　bar：0.1㎜

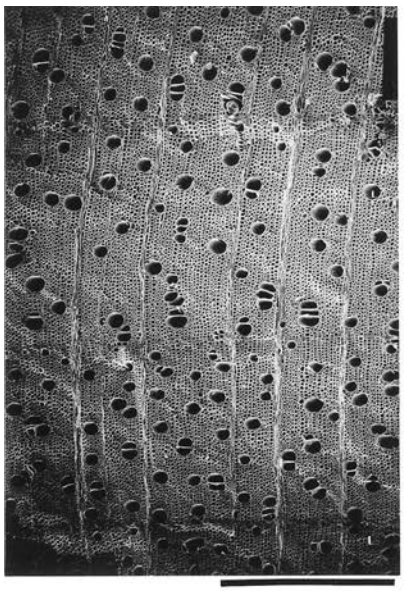


8 a カツラ(横断面)
S Ⅰ155　bar：0.5㎜

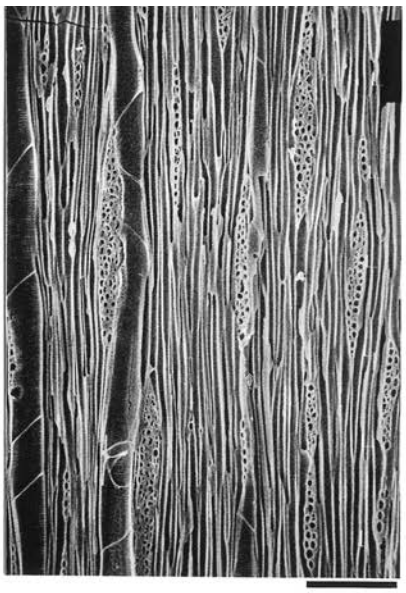
8 b カツラ(接線断面)
S Ⅰ155　bar：0.1㎜



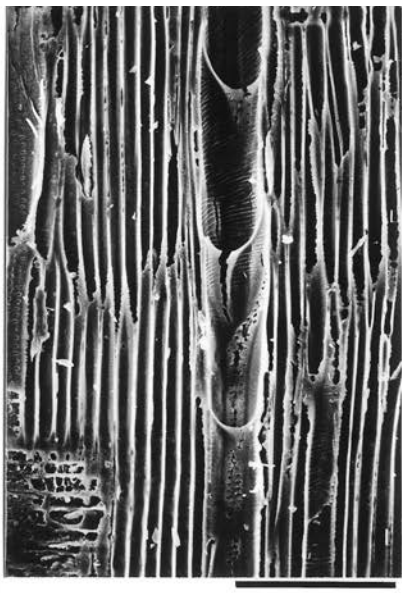
8 c カツラ(放射断面)
S Ⅰ155　bar：0.1㎜



9 a カエデ属(横断面)
S K22　bar：0.5㎜



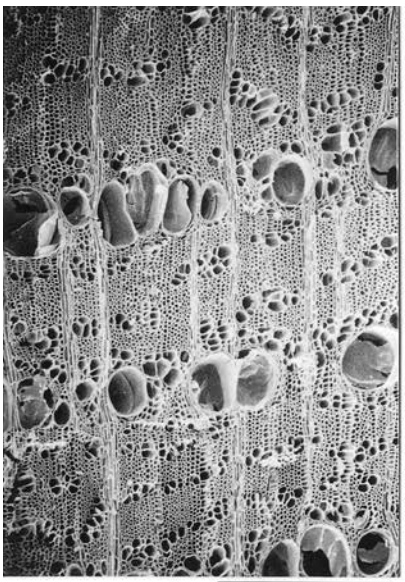
9 b カエデ属(接線断面)
S K22　bar：0.1㎜



9 c カエデ属(放射断面)
S K22　bar：0.1㎜

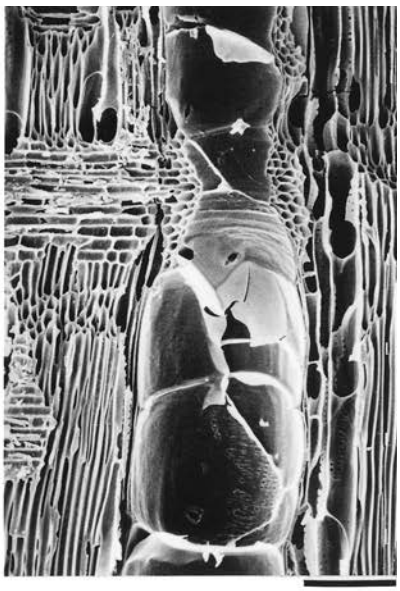
出土材樹種 4

図版170

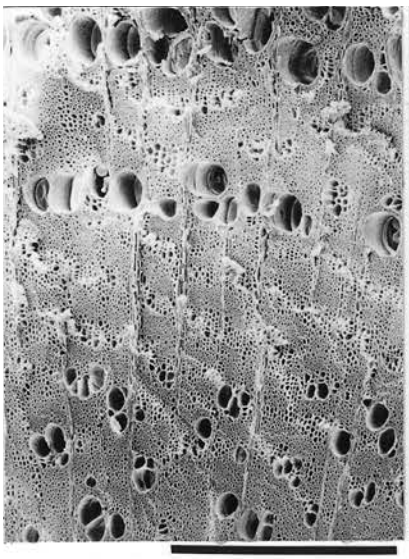


10 a ハリギリ(横断面)
ＳＩ74　bar：0.5㎜

10 b ハリギリ(接線断面)
ＳＩ74　bar：0.5㎜

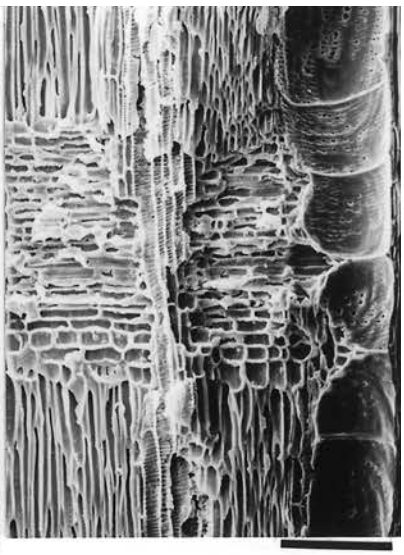


10 c ハリギリ(放射断面)
ＳＩ74　bar：0.1㎜



1 a ケヤキ(横断面)
試験番号94　bar：0.5㎜

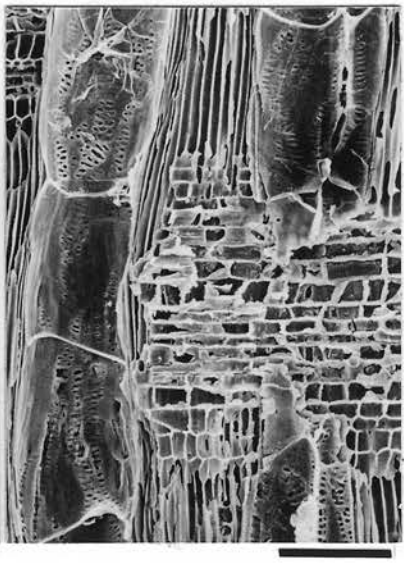
1 b ケヤキ(接線断面)
試験番号94　bar：0.1㎜



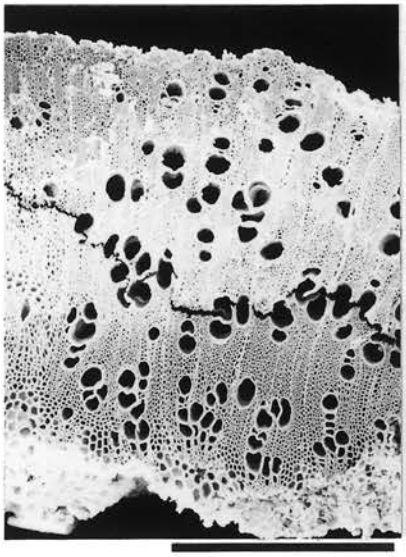
1 c ケヤキ(放射断面)
試験番号94　bar：0.1㎜

2 a ヤマウルシ(横断面)
試験番号96　bar：0.5㎜

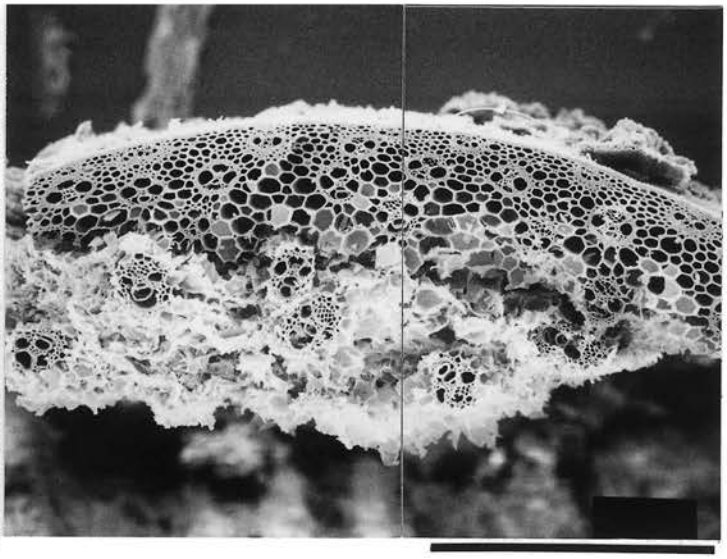
2 b ヤマウルシ(接線断面)
試験番号96　bar：0.1㎜



2 c ヤマウルシ(放射断面)
試験番号96　bar：0.1㎜



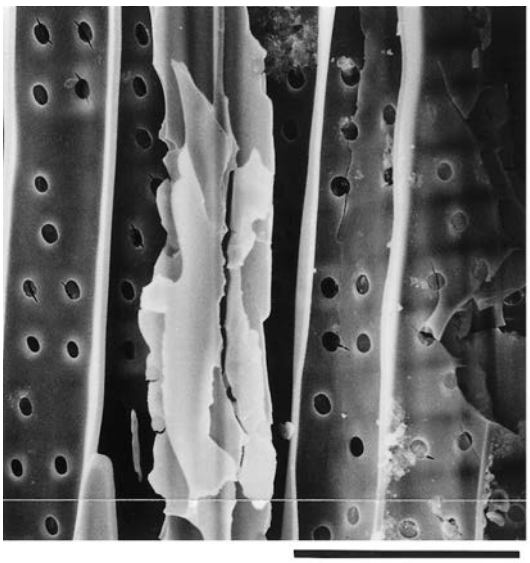
3　広葉樹(横断面)
試験番号95　bar：0.5㎜



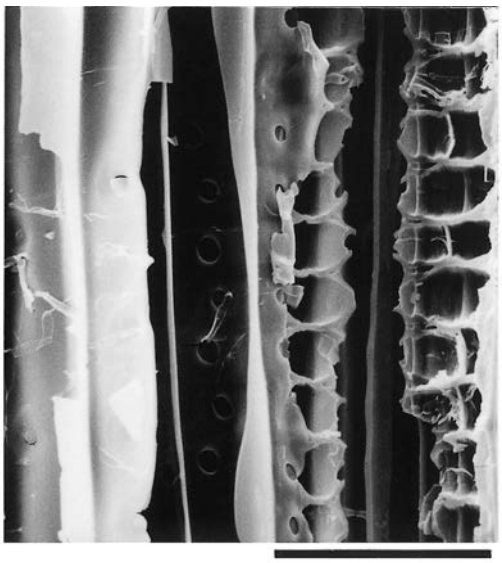
4　ススキ属(接線断面)
試験番号95　bar：0.5㎜

出土材樹種 6

図版172

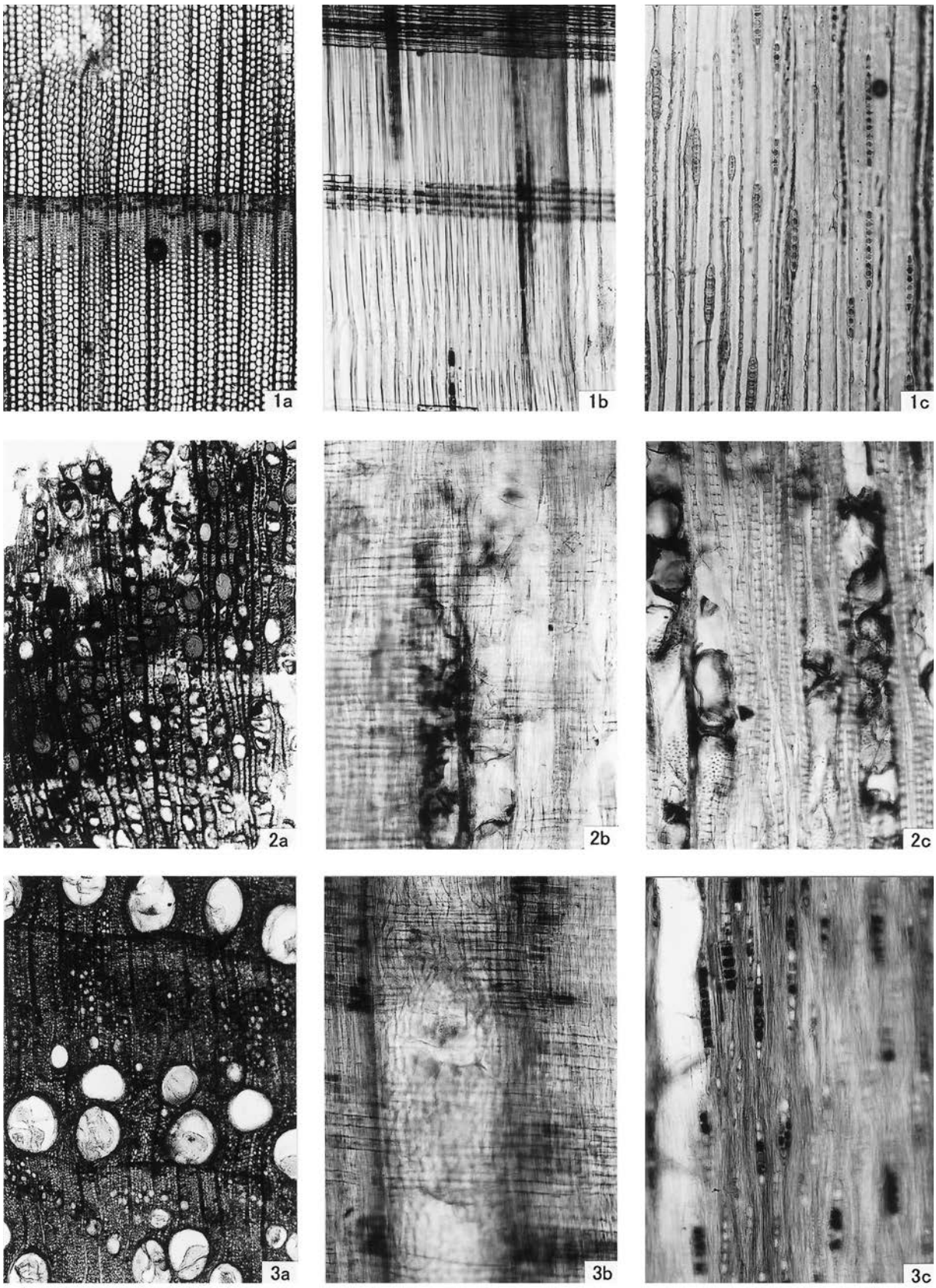


5　スギ(放射断面)
試験番号93　bar：0.05㎜



6　スギ(放射断面)
試験番号93　bar：0.05㎜

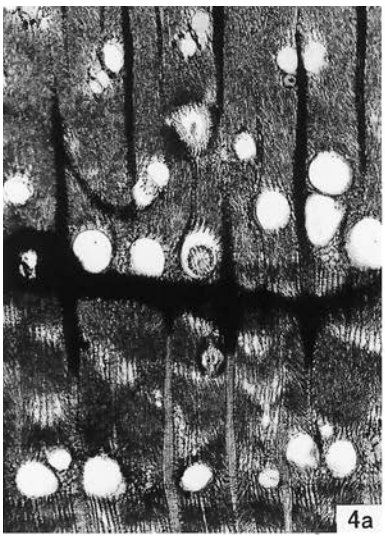
図版 173



1. スギ(SE1000 No.22)
2. オニグルミ<根株>(SE1000 No.44)
3. クリ(SE1000 No.3)
   a:木口, b:柾目, c:板目

200 μ m:a
200 μ m:b,c

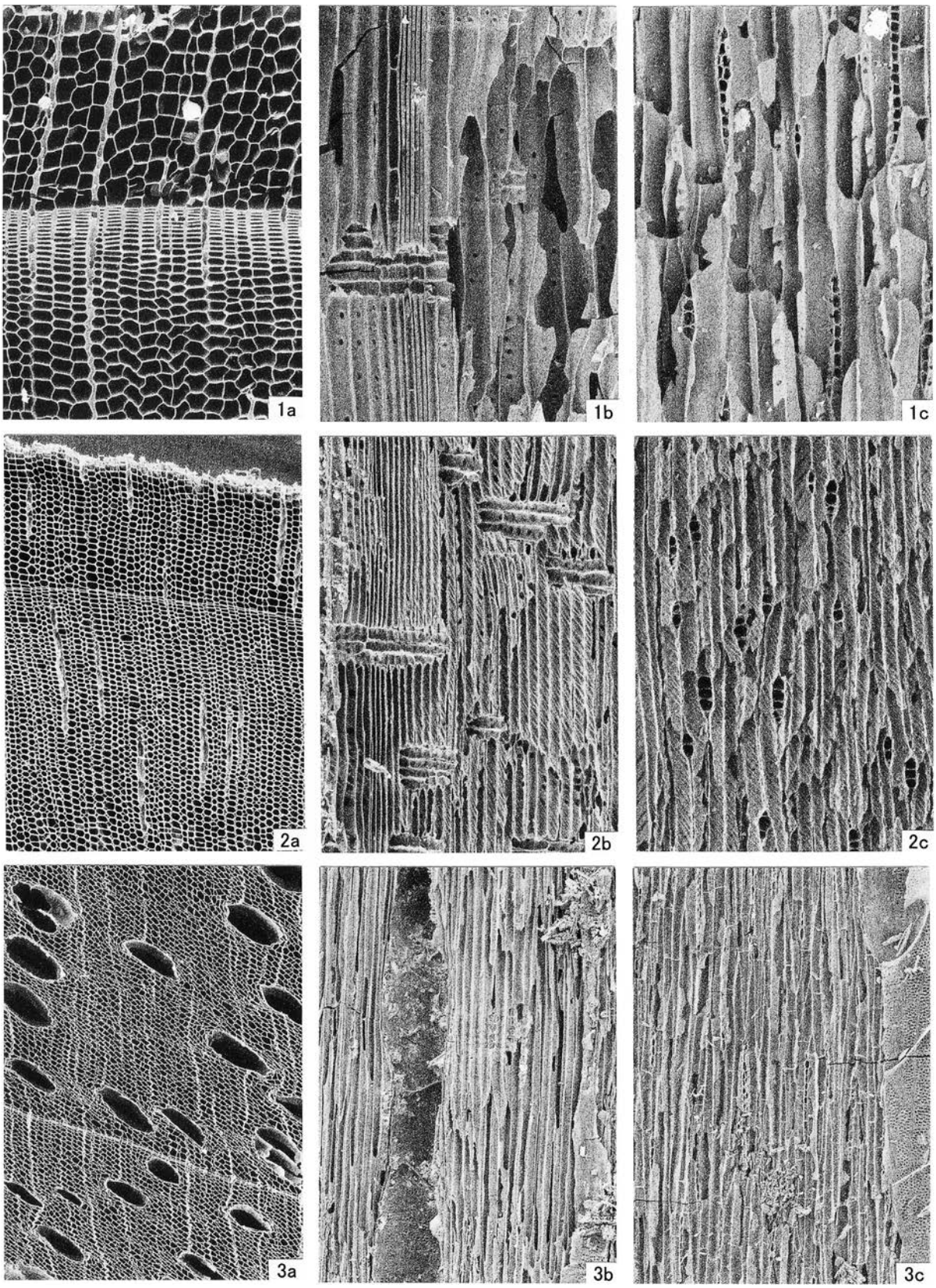
図版174



4. ケヤキ(SE1000 No.13)
a:木口, b:柾目, c:板目

200 μ m:a
200 μ m:b,c

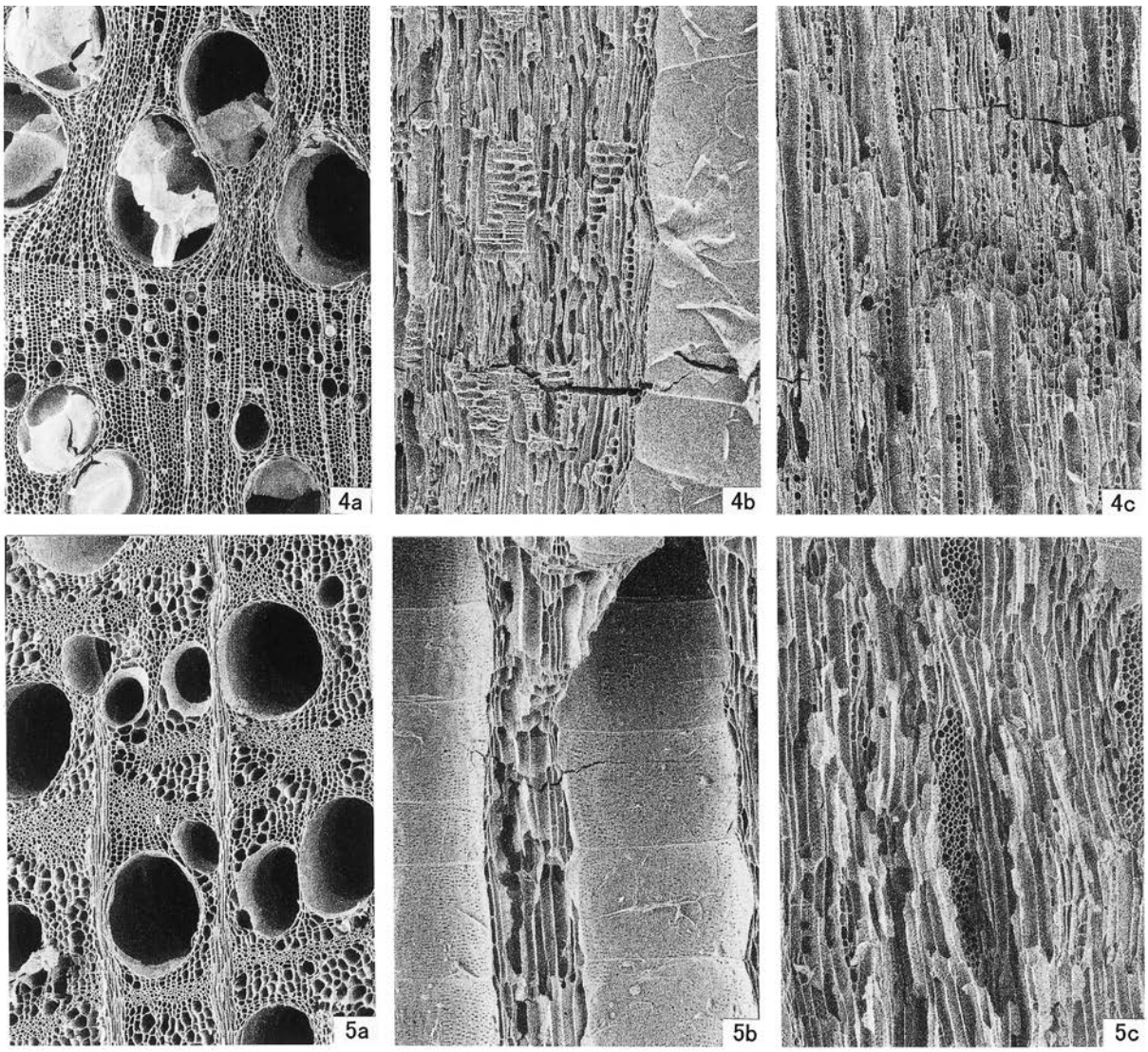
図版175



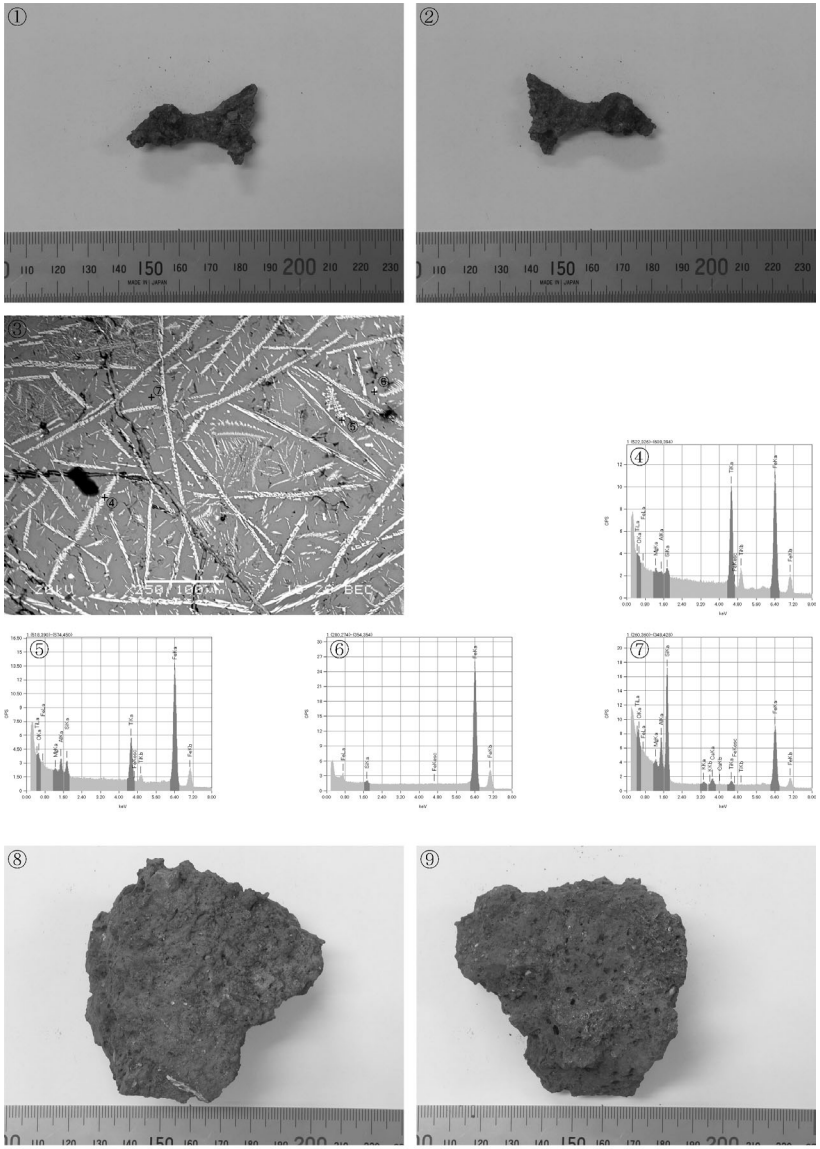
1. スギ(試料番号4)
2. イチイ(試料番号25)
3. サワグルミ(試料番号21)
   a:木口, b:柾目, c:板目

200 μm:3a
200 μm:1-2a·3b,c
100 μm:1-2b,c

図版176

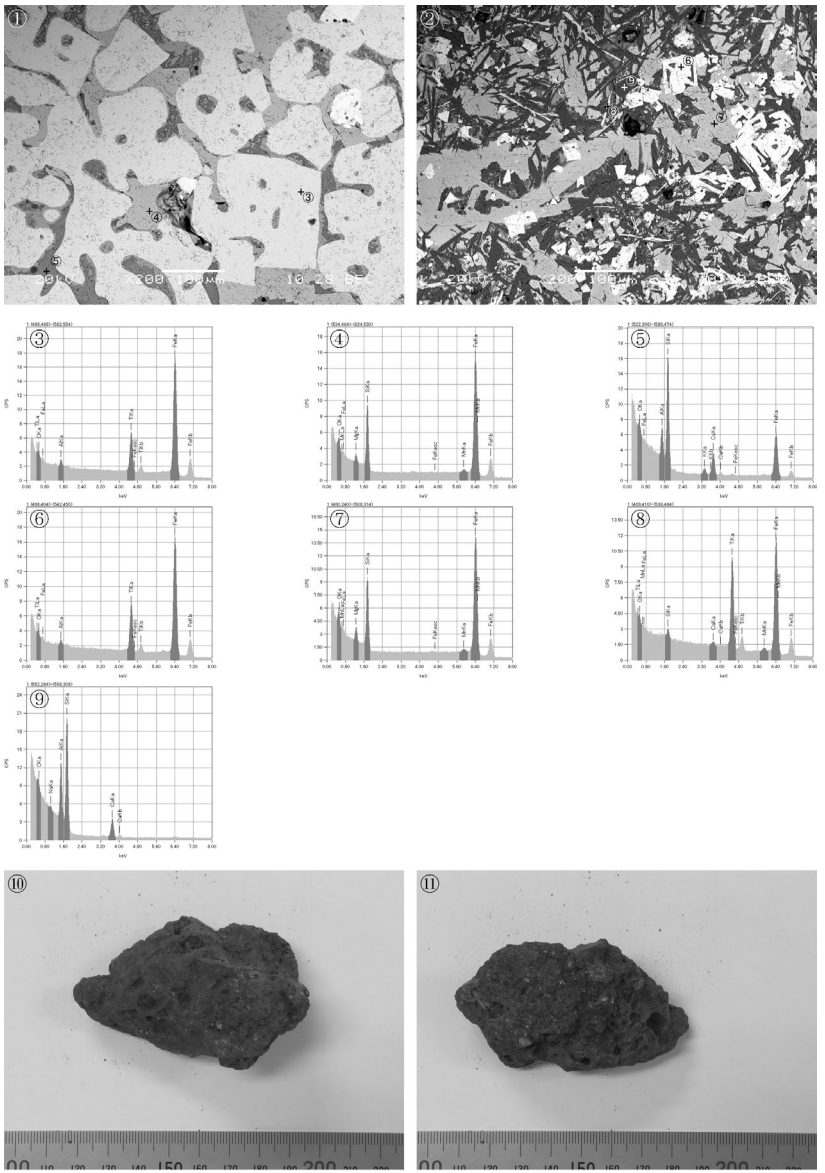


4. クリ(試料番号6)
5. ニレ属(試料番号22)
a:木口, b:柾目, c:板目



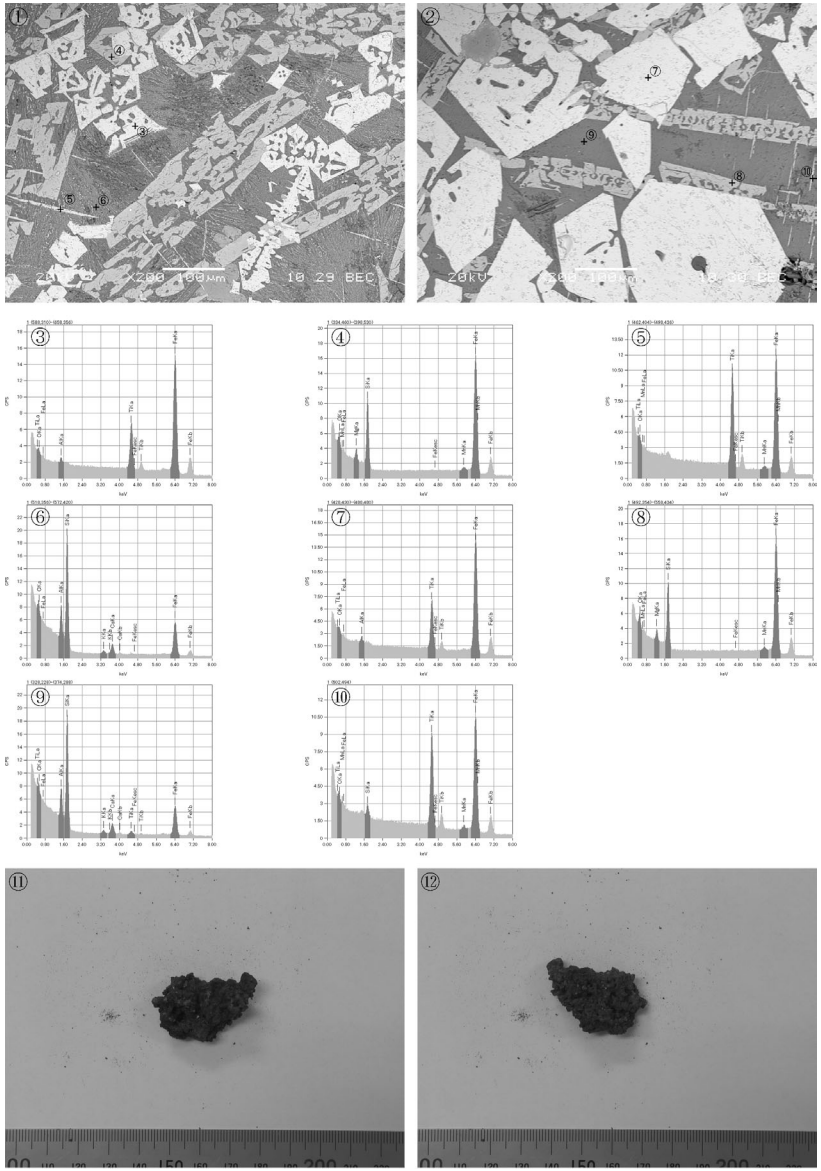
1　鉄滓No.1・No.2分析結果

①② 鉄滓№1写真、③ 鉄滓№1SEM反射電子像（×250）、④～⑦ ③内+のEDS分析スペクトル図、
⑧⑨ 鉄滓№2写真



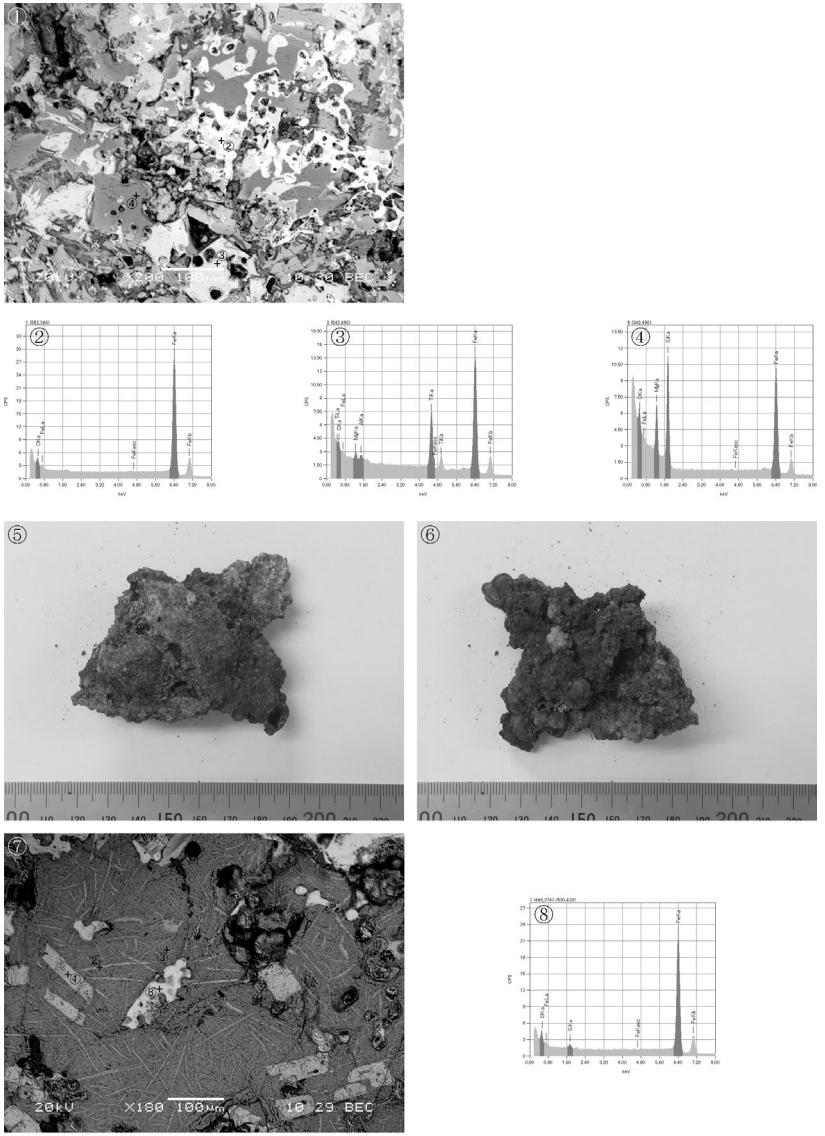
2　鉄滓No.2・No.3分析結果

①② 鉄滓№2SEM反射電子像（×200）、③～⑤ ①内+のEDS分析スペクトル図、
⑥～⑨ ②内+のEDS分析スペクトル図、⑩⑪ 鉄滓№3写真



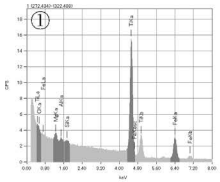
3　鉄滓No.3・No.4分析結果

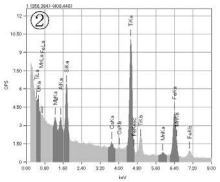
①② 鉄滓No.3SEM反射電子像（×200）、③～⑥ ①内+のEDS分析スペクトル図、
⑦～⑩ ②内+のEDS分析スペクトル図、⑪⑫ 鉄滓No.4写真

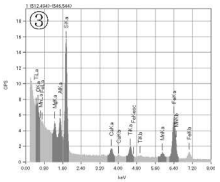


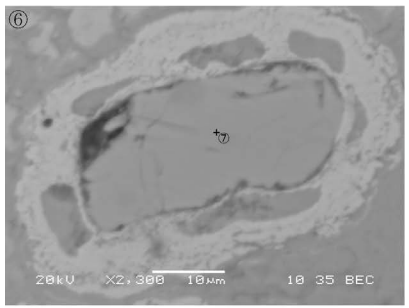
4　鉄滓No.4・No.5分析結果

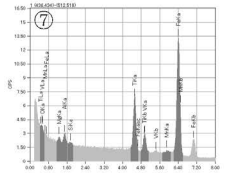
① 鉄滓No.4SEM反射電子像（×200）、②～④ ①内+のEDS分析スペクトル図、⑤⑥ 鉄滓No.5写真、
⑦ 鉄滓No.5SEM反射電子像（×180）、⑧ ⑦内+のEDS分析スペクトル図





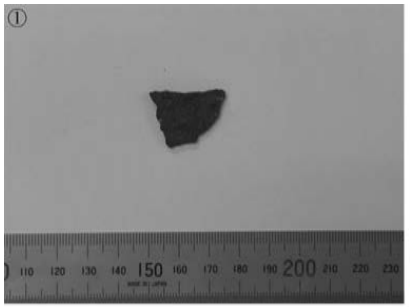


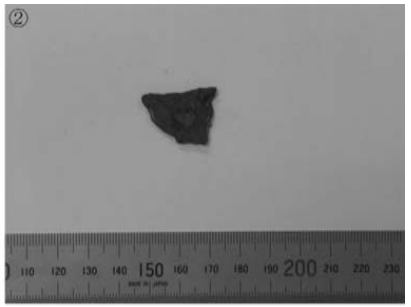


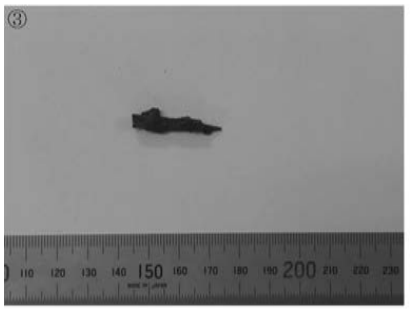


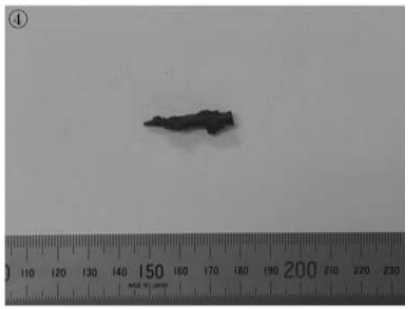
5　鉄滓No.5・鉄製品No.1・No.2分析結果

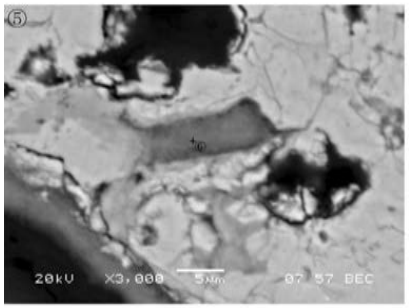
①～③ 図版4－⑦内+のEDS分析スペクトル図、④⑤ 鉄製品No.1写真、⑥ 鉄製品No.1SEM反射電子像（×2300）、⑦ ⑥内+のEDS分析スペクトル図、⑧⑨ 鉄製品No.2写真

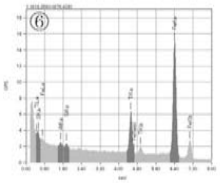






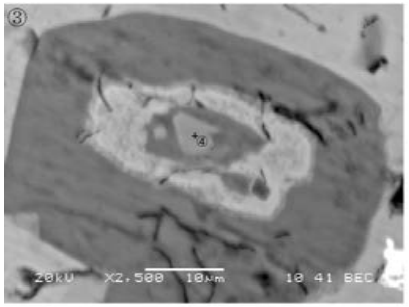


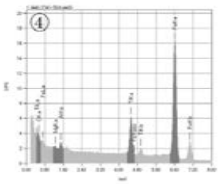




6　鉄製品No.3・No.4分析結果

①② 鉄製品No.3写真、③④ 鉄製品No.4写真、⑤ 鉄製品No.4SEM反射電子像（×3000）、⑥ ⑤内+のEDS分析スペクトル図





7　鉄製品No.5分析結果

①② 鉄製品No.5写真、③ 鉄製品No.5SEM反射電子像（×2500）、④ ③内+のEDS分析スペクトル図

報 告 書 抄 録

ふりがな	しゃかないなかだいいちいせき
書名	釈迦内中台Ⅰ遺跡
副書名	一般国道７号大館西道路建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	Ⅴ
シリーズ名	秋田県文化財調査報告書
シリーズ番号	第426集
編著者名	新海和広・宇田川浩一・吉川耕太郎・伊藤和美・深沢恵里子
編集機関	秋田県埋蔵文化財センター
所在地	〒014－0802　秋田県大仙市払田字牛嶋20　　TEL　0187-69-3331
発行年月日	西暦2008年３月

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
釈迦内中台（しゃかないなかだい）Ⅰ遺跡（いちいせき）	秋田県大館市（あきたけんおおだてし）釈迦内字中台（しゃかないあざなかだい）103－２外	05204	204-４-23	40° 18′ 14″	140° 34′ 27″	平成13年７月３日～平成13年10月31日 平成14年８月１日～平成14年10月10日 平成15年５月15日～平成15年10月９日 平成17年７月４日～平成17年11月18日	16,286㎡	一般国道７号大館西道路建設事業

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
釈迦内中台（しゃかないなかだい）Ⅰ遺跡（いちいせき）	狩猟場	縄文時代	陥し穴　6基 計　6遺構	縄文土器・石器	平安時代10世紀代を中心とする集落と、それに付属する製鉄工房域をセットで確認した。豊富な土器や鉄製品資料が得られており、大館地方の10世紀代を探る上で重要な資料である。
		弥生時代	土坑　1基 計　1遺構	弥生土器	
	集落跡	平安時代	竪穴住居跡　130軒 掘立柱建物跡　19棟 製鉄炉　14基 排滓場　3か所 土坑　49基 焼土遺構　9基 土器埋設遺構　1基 柱列・溝跡・道跡　63条 集石遺構　1基 捨て場　3か所 性格不明遺構　11基 柱穴様ピット　583基 計 886遺構	土師器・須恵器 鉄製品・土製品 石製品・炉壁 羽口・鉄滓	
		中世以降	水場遺構　1基 計　1遺構	近世陶磁器 土製品	
			総計　894遺構		

秋田県文化財調査報告書第426集

釈　迦　内　中　台　Ⅰ　遺　跡

－一般国道７号大館西道路建設事業に係る
埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅴ－

印刷・発行　平成20年３月
編　　集　秋田県埋蔵文化財センター
〒014-0802　大仙市払田字牛嶋20番地
電話 (0187)69-3331　FAX (0187)69-3330
発　　行　秋田県教育委員会
〒010-8580　秋田市山王三丁目１番１号
電話 (018)860-5193
印　　刷　有限会社 佐藤印刷所

付図　釈迦内中台Ⅰ遺跡遺構配置図